

一般国道313号（倉吉関金道路）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県倉吉市

# 山ノ下遺跡Ⅱ

# 平ノ前遺跡Ⅱ

2021

公益財団法人 鳥取県教育文化財団

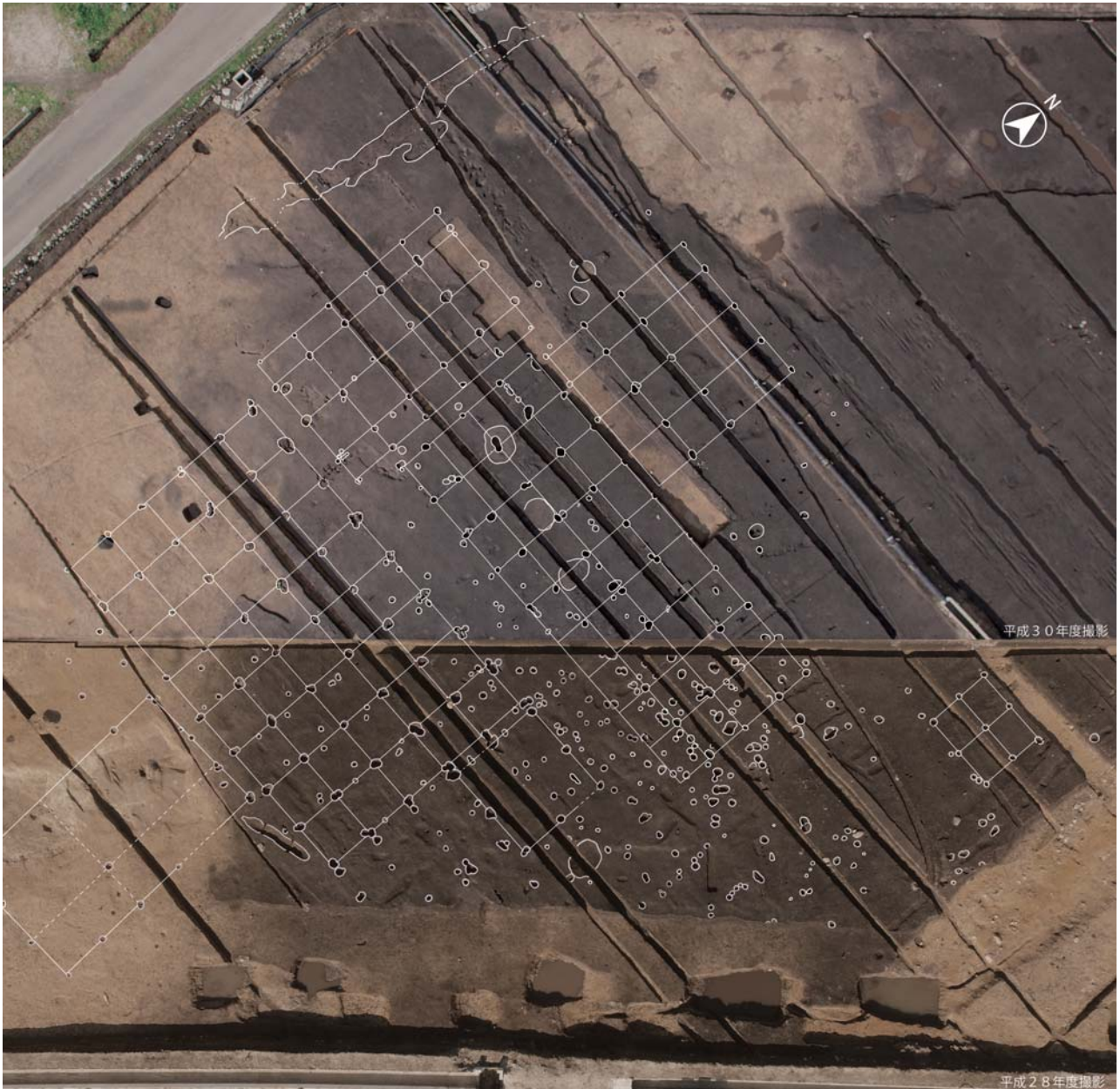




1 山ノ下遺跡遠景(北東から)



2 平ノ前遺跡全景(俯瞰 左: P3区、右: A1区盛土部)



山ノ下遺跡南西部遺構群(俯瞰:平成28・30年度調査区合成)

# 序

地域高規格道路「北条湯原道路」は、一般国道313号のバイパス道路として鳥取県北栄町と岡山県真庭市を結び、山陰自動車道及び米子自動車道と一体となって、広域交通ネットワークを構成する延長約50キロメートルの自動車専用道路です。このうち、倉吉市内を事業区間とする「倉吉関金道路」は、倉吉市小鴨から同市関金町大鳥居を結ぶ延長約7キロメートルの区間です。

公益財団法人鳥取県教育文化財団は、この道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査、出土遺物等の整理作業及び報告書作成を鳥取県から委託を受け、平成28年度から実施しています。

平成30年度の調査では、山ノ下遺跡において縄文時代から室町時代までの遺構や遺物が見つかりました。特に平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけての県内最大級の大型建物群が発見され、在地の有力者の屋敷であった可能性が考えられます。また、令和元年度には平ノ前遺跡において、天神野台地沿いに縄文時代から鎌倉時代まで幅約30メートルの川が流れていたことが確認できました。本書はその発掘調査成果をまとめたものです。地域の歴史を解き明かしていく一助として活用され、埋蔵文化財が郷土の誇りになることを期待します。

本書をまとめるにあたり、鳥取県中部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なる御協力と御助言をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

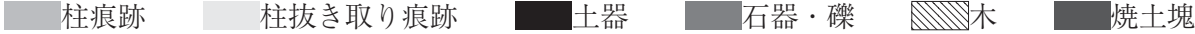
公益財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 福本 慎一

## 例 言

- 1 本書は、一般国道313号(倉吉関金道路)道路改良工事に伴い、平成30年度に発掘調査を実施した山ノ下遺跡及び令和元年度に発掘調査を実施した平ノ前遺跡A 1区盛土部、P 3区の発掘調査報告書である。
- 2 山ノ下遺跡は、倉吉市小鴨字山ノ下、上古川字北田に跨がって所在する。  
調査面積は5,000㎡で、現地調査は平成30年5月10日から同年12月27日まで行った。調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は平成30年6月11日から令和2年3月まで実施した。
- 3 平ノ前遺跡は、倉吉市上古川字平ノ前に所在する。  
調査面積は1,000㎡(A 1区盛土部840㎡、P 3区160㎡)で、現地調査は令和元年5月14日から同年8月27日まで行った。調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は令和元年6月11日から令和2年3月まで実施した。
- 4 山ノ下遺跡の出土品などの注記には「山ノ下遺跡18」の略号を用いた。「18」は2018年度に調査を実施したことを示す。
- 5 平ノ前遺跡の出土品などの注記には「平ノ前遺跡A 1区19」「平ノ前遺跡P 3区19」の略号を用いた。「A 1区」「P 3区」は地区名、「19」は2019年度に調査を実施したことを示す。
- 6 山ノ下遺跡、平ノ前遺跡の調査及び記録作業は財団調査室職員が行った。
- 7 山ノ下遺跡、平ノ前遺跡の出土遺物の整理作業や記録作業は、財団調査室職員が行った。
- 8 本書の作成は財団調査室職員が協議して行い、小口、森本、陶澤が執筆した。編集は小口が行った。
- 9 山ノ下遺跡の調査を行うにあたり、眞田廣幸氏(倉吉文化財協会会長)に調査指導を賜った。
- 10 山ノ下遺跡の出土遺物を整理・評価するにあたり、貿易陶磁器を山本信夫氏(早稲田大学理工学術院客員主任研究員)、瓦質土器を橋本久和氏(大阪府文化財愛護推進委員)、土師器を八峠興氏(鳥取県埋蔵文化財センター)に調査指導を仰ぎ、山本氏と八峠氏には玉稿(第6章1・2節)を賜った。また、在地の有力武士である小鴨氏について、遺跡の性格を検討する上で欠かせない存在であることから文献史料から見た小鴨氏について山本隆一朗氏(鳥取県立博物館)にも執筆をお願いしている(第6章5節)。記して深謝いたします。さらに令和元年6月22日、23日に中世土器研究会による「山ノ下遺跡出土土器検討会」が開催され、土器全般にわたる検討がなされた。本書では、その成果をできる限り反映させている。
- 11 自然科学分析として、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定、金属学的分析、放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。第5章の執筆は委託先によるものである。
- 12 本調査に係る図面・写真等の記録及び出土遺物は、全て台帳に登録し収納しており、今後活用できるように随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターに移管する。
- 13 現地調査、報告書作成にあたり、以下の各機関から御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます(順不同)。  
大鴨地区土地改良区、天神野地区土地改良区、倉吉市小鴨公民館、倉吉市上小鴨公民館、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県地域振興部文化財課、鳥取県地域づくり推進部文化財局ととり弥生の王国推進課、倉吉市教育委員会事務局文化財課、中世土器研究会

# 凡 例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標V系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を、標高は海拔標高で示した。
- 2 本報告書で使用した地図は、国土地理院発行地形図(1/50,000)、倉吉市作成都市計画図(1/2,500)を縮小、加筆して使用したものである。
- 3 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられるWentworthの区分を使用した。
- 4 遺構平面図・断面図の縮尺は統一しておらず、挿図ごとにスケールバーと縮尺を掲載している。
- 5 遺構図に用いたスクリーンパターンはそれぞれ以下のものを表す。  

- 6 遺物実測図の縮尺については、土器・土製品を1/2、1/4、石器1/3、2/3、錫製品1/1、鉄関連遺物を1/2で示した。
- 7 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。古墳時代から中世土器の実測図では、◎は回転糸切りによる切り離し痕跡、○は回転ヘラ切りによる切り離し痕跡、●は手づくね成形された土器を示す。
- 8 掲載番号の頭に付した記号はPo=土器、CP=土製品、S=石器、Sn=錫製品、F=鉄関連遺物を示す。
- 9 遺構計測表の数値記載及び遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は残存値を示す。
- 10 遺構の評価については以下の文献を参考としている。  
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』  
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所2004『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
- 11 本書における遺構・遺物の時期決定は主に以下の文献を参考としている。  
愛知県史編纂委員会2007『愛知県史 別冊 窯業2』  
上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会  
岡田裕之・八峠興2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要5』鳥取県埋蔵文化財センター  
重根弘和2005「中世備前焼に関する考察－製作技法から－」『古文化談叢第54集』九州古代文化研究会  
清水真一1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社  
馬場昌一・福田正継・白石純「岡山県助三畑遺跡井戸4出土遺物の様相」『古文化談叢第71集』九州古代文化研究会  
牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団  
森田 勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会  
山本信夫ほか2000「大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編」『大宰府の文化財第29集』太宰府市教育委員会

# 目 次

## 巻頭図版 序、例言、凡例

### 第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(小口) 1
第2節 調査の経過	(小口) 2
第1項 山ノ下遺跡	2
第2項 平ノ前遺跡	3
第3節 調査体制	(小口) 4
第4節 調査の方法	(小口) 6
第1項 調査地の地区割	6
第2項 発掘調査と記録の対象	10
第3項 出土遺物の整理	12

### 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境	(小口) 13
第2節 歴史的環境	(小口) 14

### 第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第1節 概要	(小口) 19
第2節 基本層序	(小口) 20
第3節 検出した遺構と遺物	(小口・森本) 24
第1項 第1遺構面の調査	(小口・森本) 24
第2項 第2遺構面の調査	(小口・森本) 92
第3項 第3遺構面の調査	(小口) 186
第4項 遺構外出土遺物	(小口) 204
第5項 その他出土遺物	(小口) 220
第4節 掘立柱建物計測表・遺物観察表	(小口) 225

### 第4章 平ノ前遺跡の調査成果

第1節 概要	(小口) 259
第2節 A1区盛土部の調査	(小口) 259



第1項 概要と基本層序	(小口)	259
第2項 検出した遺構と遺物	(小口)	261
第3節 P3区の調査	(小口)	273
第1項 概要と基本層序	(小口)	273
第2項 検出した遺構と遺物	(小口)	273
第4節 遺物観察表	(小口)	280

## 第5章 自然科学分析

第1節 山ノ下遺跡出土材の年代測定および樹種同定	(パリノ・サーヴェイ(株))	283
第2節 山ノ下遺跡出土の金属製品の分析	(パリノ・サーヴェイ(株))	291
第3節 平ノ前遺跡の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ(株))	295

## 第6章 総括

第1節 山ノ下遺跡の中世土器について	(八峠興)	311
第1項 中世土師器の分類と変遷		311
第2項 煮炊具の分類と分布		316
第3項 柱穴から出土した土器と陶磁器		318
第4項 周辺遺跡との関わり		321
第5項 まとめ		321
第2節 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の分析	(山本信夫)	323
第1項 陶磁分類の前提		323
第2項 山ノ下遺跡貿易陶磁(平成30年度出土)の分類		324
第3項 山ノ下遺跡出土陶磁の類例		333
第4項 分析結果		339
第5項 分析評価と総括		355
第3節 山ノ下遺跡の大型総柱建物群	(陶澤)	361
第1項 山ノ下遺跡の大型総柱建物群の特徴		361
第2項 大型総柱建物の類例		363
第3項 四面廂建物から総柱建物へ		368
第4節 総括	(小口)	371
第1項 山ノ下遺跡の調査成果		371
第2項 建物群の構造と性格		375
第3項 平ノ前遺跡の調査成果		377
第5節 文献資料に見る小鴨氏	(山本隆一郎)	396 (縦組1)
1 平安時代の小鴨氏		396 (縦組1)
2 鎌倉・南北朝時代の小鴨氏		393 (縦組4)

3	室町期の小鴨氏	391	(縦組6)
4	戦国期小鴨氏と南条家臣化	386	(縦組11)
5	中世の小鴨地域の実相	385	(縦組12)

## 卷末図版

### 報告書抄録・奥付

# 挿図目次

第1図	一般国道313号予定地と調査地の位置	1	第39図	掘立柱建物12 876・878・880柱穴	60
第2図	鳥取県と国土座標系	6	第40図	掘立柱建物12 1014・3098・3099柱穴	62
第3図	山ノ下・平ノ前遺跡の地区割図	7	第41図	掘立柱建物12 3095～3097・3101・3102柱穴	63
第4図	山ノ下遺跡の地区割図	8	第42図	掘立柱建物12出土遺物	64
第5図	平ノ前遺跡A 1区盛土部の地区割図	9	第43図	掘立柱建物20(1)	66
第6図	平ノ前遺跡P 3区の地区割図	9	第44図	掘立柱建物20(2)	67
第7図	鳥取県と遺跡の所在地	13	第45図	掘立柱建物20 3040・3041柱穴	69
第8図	遺跡周辺の地質環境	14	第46図	掘立柱建物20 3036・3043柱穴	70
第9図	周辺の遺跡	15	第47図	掘立柱建物20 3044・3046柱穴	71
	〈山ノ下遺跡〉		第48図	掘立柱建物20 3047・3048柱穴	72
第10図	調査区周辺の地形図	19	第49図	掘立柱建物20 3049～3051柱穴	74
第11図	東西トレンチ土層断面図(1)	21	第50図	掘立柱建物20 3052～3055柱穴	75
第12図	東西トレンチ土層断面図(2)	22	第51図	掘立柱建物20 3039・3042・3045柱穴	76
第13図	平成28・30年度調査遺構検出面对応図	23	第52図	掘立柱建物20出土遺物	77
第14図	第1遺構面新段階全体図	25	第53図	掘立柱建物21(1)	79
第15図	3022溝	26	第54図	掘立柱建物21(2)	80
第16図	3035耕作溝群(1)	27	第55図	666溝全体図	82
第17図	3035耕作溝群(2)	28	第56図	666溝	83
第18図	747溝群	29	第57図	666溝出土遺物(1)	84
第19図	3022溝、3035耕作溝群、747溝群出土遺物	30	第58図	666溝出土遺物(2)	85
第20図	3038・3221土坑	31	第59図	3015土坑	86
第21図	第1遺構面古段階全体図	32	第60図	3015土坑出土遺物	86
第22図	掘立柱建物12・20、666溝	33	第61図	3005・3007・3008柱穴	88
第23図	掘立柱建物12(1)	34	第62図	3005・3025柱穴出土遺物	88
第24図	掘立柱建物12(2)	35	第63図	3025～3028柱穴	89
第25図	掘立柱建物12 655・656・660・683柱穴	39	第64図	3030・3032・3033・3063柱穴	90
第26図	掘立柱建物12 664・665・671・1026・3006 柱穴	41	第65図	第2遺構面全体図	93
第27図	掘立柱建物12 746・3009・3092柱穴	42	第66図	掘立柱建物13・19、3010溝	94
第28図	掘立柱建物12 663・3024柱穴	44	第67図	掘立柱建物13(1)	95
第29図	掘立柱建物12 3017・3018・3023柱穴	45	第68図	掘立柱建物13(2)	96
第30図	掘立柱建物12 867・3020・3021・3034柱穴	47	第69図	掘立柱建物13(3)	97
第31図	掘立柱建物12 3031・3067・3094柱穴	48	第70図	掘立柱建物13 3103～3107柱穴	101
第32図	掘立柱建物12 3068～3070・3343柱穴	50	第71図	掘立柱建物13 3108～3110・3149柱穴	103
第33図	掘立柱建物12 3071～3074・3344柱穴	51	第72図	掘立柱建物13 3111・3112柱穴	104
第34図	掘立柱建物12 3075～3077柱穴	53	第73図	掘立柱建物13 3113～3115柱穴	106
第35図	掘立柱建物12 3078・3080・3081柱穴	55	第74図	掘立柱建物13 3116～3118・3240・3342柱穴	107
第36図	掘立柱建物12 3082～3084・3091・3100柱穴	56	第75図	掘立柱建物13 3119～3121柱穴	109
第37図	掘立柱建物12 3085～3087柱穴	58	第76図	掘立柱建物13 3122・3123柱穴	110
第38図	掘立柱建物12 3088柱穴	59	第77図	掘立柱建物13 3124・3125柱穴	111
			第78図	掘立柱建物13 3126～3129柱穴	113

第79図 掘立柱建物13 3130～3134・3169・3189柱穴	115	第120図 3010d溝	164
第80図 掘立柱建物13 3135～3137・3338柱穴	117	第121図 3010d溝出土遺物	165
第81図 掘立柱建物13 3138～3142・3188柱穴	119	第122図 3056土坑	166
第82図 掘立柱建物13 3143～3145・3323柱穴	120	第123図 3056土坑出土遺物	167
第83図 掘立柱建物13出土遺物(1)	121	第124図 3057土坑	167
第84図 掘立柱建物13出土遺物(2)	122	第125図 3057土坑出土遺物	168
第85図 掘立柱建物19(1)	124	第126図 3259土坑・出土遺物	168
第86図 掘立柱建物19(2)	125	第127図 3268・3270土坑	169
第87図 掘立柱建物19 3150～3155柱穴	127	第128図 3168ピット	170
第88図 掘立柱建物19 3156～3158柱穴	129	第129図 3200・3201・3203・3206～3208柱穴	171
第89図 掘立柱建物19 3159～3161・3196柱穴	130	第130図 3214・3228・3230・3254柱穴、3225ピット	173
第90図 掘立柱建物19 3162～3164・3255・3340柱穴	132	第131図 3256～3258・3260・3261柱穴	175
第91図 掘立柱建物19 3165～3167柱穴	134	第132図 3264・3265・3271～3273・3275柱穴	177
第92図 掘立柱建物19 3170～3172・3199・3341柱穴	136	第133図 3278・3282・3292・3294・3297～3299柱穴	179
第93図 掘立柱建物19 3173～3175柱穴	137	第134図 3304・3306・3310・3314・3315・3317柱穴	181
第94図 掘立柱建物19 3176～3181柱穴	139	第135図 3326・3327・3329・3335・3336柱穴	183
第95図 掘立柱建物19出土遺物	140	第136図 第2遺構面柱穴・ピット出土遺物	184
第96図 3010溝	141	第137図 第3遺構面全体図	187
第97図 3010溝変遷図	142	第138図 250溝全体図	189
第98図 3010a溝	143	第139図 250溝(1)、3286ピット	190
第99図 3010a溝遺物出土状況(1)	144	第140図 250溝(2)	191
第100図 3010a溝遺物出土状況(2)	145	第141図 250溝(3)	192
第101図 3010a溝遺物出土状況(3)	146	第142図 250溝a出土遺物	193
第102図 3010a溝遺物出土状況(4)	147	第143図 250溝b出土遺物(1)	194
第103図 3010a溝出土遺物(1)	148	第144図 250溝b出土遺物(2)	195
第104図 3010a溝出土遺物(2)	149	第145図 8・3186土坑	196
第105図 3010a溝出土遺物(3)	149	第146図 3186土坑出土遺物	197
第106図 3010b溝	151	第147図 3146・3183～3185土坑	198
第107図 3010b溝遺物出土状況(1)	152	第148図 3187・3190・3216・3222土坑	200
第108図 3010b溝遺物出土状況(2)	153	第149図 3223・3234・3330・3337土坑	202
第109図 3010b溝遺物出土状況(3)	154	第150図 包含層遺物出土地点	205
第110図 3010b溝遺物出土状況(4)	155	第151図 Ⅲ-1層出土遺物	206
第111図 3010b溝遺物出土状況(5)	156	第152図 Ⅲ-2層出土遺物(1)	207
第112図 3010b溝遺物出土状況(6)	157	第153図 Ⅲ-2層出土遺物(2)	207
第113図 3010b溝出土遺物(1)	158	第154図 IV層出土遺物	208
第114図 3010b溝出土遺物(2)	159	第155図 表土・攪乱土等出土遺物(1)	209
第115図 3010b溝出土遺物(3)	160	第156図 表土・攪乱土等出土遺物(2)	209
第116図 3010b溝出土遺物(4)	161	第157図 表土・攪乱土等出土遺物(3)	210
第117図 3010c溝	162	第158図 表土・攪乱土等出土遺物(4)	210
第118図 3010c溝遺物出土状況	163	第159図 表土・攪乱土等出土遺物(5)	211
第119図 3010c溝出土遺物	164	第160図 表土・攪乱土等出土遺物(6)	211

第161図	表土・攪乱土等出土遺物(7)	212	第201図	主要珪藻化石群集の層位分布	302
第162図	表土・攪乱土等出土遺物(8)	213	第202図	花粉化石群集の層位分布	304
第163図	表土・攪乱土等出土遺物(9)	214	第203図	植物珪酸体含量	305
第164図	表土・攪乱土等出土遺物(10)	215		<b>〈総括〉</b>	
第165図	表土・攪乱土等出土遺物(11)	216	第204図	中世土師器の分類	312
第166図	表土・攪乱土等出土遺物(12)	216	第205図	中世土師器の変遷	313
第167図	表土・攪乱土等出土遺物(13)	217	第206図	中世土師器の出土割合グラフ	314
第168図	表土・攪乱土等出土遺物(14)	218	第207図	中世土師器の法量	314
第169図	表土・攪乱土等出土遺物(15)	219	第208図	中世土師器の分布	315
第170図	その他出土遺物(1)	221	第209図	煮炊具の分類	317
第171図	その他出土遺物(2)	222	第210図	煮炊具の分布	317
第172図	その他出土遺物(3)	223	第211図	掘立柱建物12・13・19・20出土遺物分布	
第173図	その他出土遺物(4)	224		(土器・陶磁器)	319
第174図	その他出土遺物(5)	224	第212図	史跡伯耆国府ほか出土の高台付皿	320
	<b>〈平ノ前遺跡〉</b>		第213図	高台付皿・柱状高台・手づくね皿出土	
第175図	調査区周辺の地形図	259		遺跡位置	320
第176図	A1区・A1区盛土部全体図	261	第214図	山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(1)	334
第177図	A1区盛土部トレンチ土層断面図(1)	262	第215図	山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(2)	335
第178図	A1区盛土部トレンチ土層断面図(2)	263	第216図	山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(3)	336
第179図	A1区盛土部トレンチ土層断面図(3)	264	第217図	山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(4)	337
第180図	流路1層出土遺物(1)	265	第218図	山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(5)	338
第181図	流路1層出土遺物(2)	266	第219図	山ノ下遺跡掘立柱建物12・13・19・20の柱間	
第182図	流路1層出土遺物(3)	267		平均値	362
第183図	流路2・4層出土遺物	268	第220図	県内における大型総柱建物の類例	364
第184図	流路5～8・10～13層出土遺物	269	第221図	県外における大型総柱建物の類例(1)	365
第185図	遺構外出土遺物	270	第222図	県外における大型総柱建物の類例(2)	367
第186図	流路1層出土遺物(4)	270	第223図	12世紀以降の大型総柱建物の類例	369
第187図	流路2層出土遺物	271	第224図	時期別遺構変遷図	372
第188図	流路4・10～13層出土遺物	272	第225図	掘立柱建物配置図	373
第189図	P3区北東壁土層断面図	274	第226図	掘立柱建物13・19配置図	376
第190図	P3区北西壁土層断面図	275	第227図	掘立柱建物12・20配置図	376
第191図	P3区南西壁土層断面、P3・4区位置図	276	第228図	山ノ下遺跡出土主要遺物	377
第192図	溝1・2、ピット1、溝2a出土遺物	277	第229図	小鴨・上古川地区 条里復元案	378
第193図	溝2	278	第230図	山ノ下遺跡と条里地割	379
第194図	溝1・2変遷図	279			
	<b>〈自然科学分析〉</b>				
第195図	暦年較正結果	288			
第196図	金属製品(Sn1)の蛍光X線定性スペクトル	292			
第197図	金属製品(Sn1)のSEM-EDS分析結果	293			
第198図	A1区盛土部土壌試料採取位置	296			
第199図	P3区土壌試料採取位置	296			
第200図	暦年較正結果	300			

# 挿表目次

<b>〈山ノ下遺跡〉</b>		第42表	土器及び陶磁器観察表(28)	253	
第1表	第1遺構面新段階遺構計測表	30	第43表	土器参考資料観察表	253
第2表	掘立柱建物12遺構計測表(1)	36	第44表	土製品観察表	254
第3表	掘立柱建物12遺構計測表(2)	37	第45表	石器観察表	254
第4表	掘立柱建物20遺構計測表	68	第46表	錫製品観察表	255
第5表	掘立柱建物21遺構計測表	80	第47表	鉄関連遺物観察表	255
第6表	第1遺構面古段階遺構計測表	91	第48表	掘立柱建物12柱穴出土礫観察表	255
第7表	掘立柱建物13遺構計測表(1)	98	第49表	掘立柱建物20柱穴出土礫観察表(1)	255
第8表	掘立柱建物13遺構計測表(2)	99	第50表	掘立柱建物20柱穴出土礫観察表(2)	256
第9表	掘立柱建物13遺構計測表(3)	100	第51表	掘立柱建物13柱穴出土礫観察表(1)	256
第10表	掘立柱建物19遺構計測表	126	第52表	掘立柱建物13柱穴出土礫観察表(2)	257
第11表	第2遺構面遺構計測表(1)	185	第53表	掘立柱建物13柱穴出土礫観察表(3)	258
第12表	第2遺構面遺構計測表(2)	186	第54表	掘立柱建物19柱穴出土礫観察表	258
第13表	第3遺構面遺構計測表	203	<b>〈平ノ前遺跡〉</b>		
第14表	掘立柱建物計測表	225	第55表	A1区盛土部遺構計測表	272
第15表	土器及び陶磁器観察表(1)	226	第56表	P3区遺構計測表	280
第16表	土器及び陶磁器観察表(2)	227	第57表	土器観察表(1)	280
第17表	土器及び陶磁器観察表(3)	228	第58表	土器観察表(2)	281
第18表	土器及び陶磁器観察表(4)	229	第59表	土製品観察表(1)	281
第19表	土器及び陶磁器観察表(5)	230	第60表	土製品観察表(2)	282
第20表	土器及び陶磁器観察表(6)	231	第61表	石器観察表	282
第21表	土器及び陶磁器観察表(7)	232	第62表	鉄関連遺物観察表	282
第22表	土器及び陶磁器観察表(8)	233	<b>〈自然科学分析〉</b>		
第23表	土器及び陶磁器観察表(9)	234	第63表	樹種同定結果	285
第24表	土器及び陶磁器観察表(10)	235	第64表	放射性炭素年代測定結果(1)	286
第25表	土器及び陶磁器観察表(11)	236	第65表	放射性炭素年代測定結果(2)	287
第26表	土器及び陶磁器観察表(12)	237	第66表	分析試料及び分析項目一覧	295
第27表	土器及び陶磁器観察表(13)	238	第67表	放射性炭素年代測定結果	299
第28表	土器及び陶磁器観察表(14)	239	第68表	珪藻分析結果	301
第29表	土器及び陶磁器観察表(15)	240	第69表	花粉分析結果	303
第30表	土器及び陶磁器観察表(16)	241	第70表	植物珪酸体含量	305
第31表	土器及び陶磁器観察表(17)	242	<b>〈総括〉</b>		
第32表	土器及び陶磁器観察表(18)	243	第71表	高台付皿・柱状高台・手づくね皿出土 遺跡一覧	320
第33表	土器及び陶磁器観察表(19)	244	第72表	山ノ下遺跡出土貿易陶磁一覧：表A(1)	330
第34表	土器及び陶磁器観察表(20)	245	第73表	山ノ下遺跡出土貿易陶磁一覧：表A(2)	331
第35表	土器及び陶磁器観察表(21)	246	第74表	山ノ下遺跡(平成30年度調査)出土貿易陶磁量 の比較：表B	345
第36表	土器及び陶磁器観察表(22)	247	第75表	山ノ下遺跡(平成28年度調査)出土貿易陶磁量 の比較：表C	351
第37表	土器及び陶磁器観察表(23)	248	第76表	山ノ下遺跡(平成28・30年度調査)出土貿易陶 磁量の比較：表D	352
第38表	土器及び陶磁器観察表(24)	249			
第39表	土器及び陶磁器観察表(25)	250			
第40表	土器及び陶磁器観察表(26)	251			
第41表	土器及び陶磁器観察表(27)	252			

## 巻頭図版目次

巻頭図版 1	1	山ノ下遺跡遠景(北東から)
	2	平ノ前遺跡全景(俯瞰 左：P 3区、 右：A 1区盛土部)

巻頭図版 2	山ノ下遺跡南西部遺構群(俯瞰：平成 28・30年度調査区合成)
--------	------------------------------------

## 文中写真目次

写真 1	山ノ下遺跡 表土剥ぎ風景	2	写真 7	整理作業(遺構図編集)	12
写真 2	山ノ下遺跡 現地説明会風景	2	写真 8	整理作業(遺物トレース)	12
写真 3	平ノ前遺跡 P 3区 表土剥ぎ風景	3	写真 9	666溝遺物(平成28年度調査Po26他) 出土状況(南から)	81
写真 4	平ノ前遺跡 A 1区盛土部 調査風景	3	写真10	713柱穴遺物(平成28年度調査Po129他) 出土状況(東から)	149
写真 5	整理作業(土器注記)	12			
写真 6	整理作業(土器実測)	12			

## 巻末図版目次

<b>〈山ノ下遺跡〉</b>			
図版 1	山ノ下遺跡 航空写真		4 3072柱穴磔出土状況(西から)
	1 調査地遠景(北東から)		5 3074・3344柱穴遺物出土状況(南から)
	2 調査地遠景(北西から)		6 3075柱穴磔出土状況(東から)
図版 2	山ノ下遺跡 航空写真		7 3098柱穴磔出土状況(東から)
	山ノ下遺跡全景(俯瞰)		8 3076柱穴磔出土状況(北から)
図版 3	山ノ下遺跡 基本層序		図版 6 掘立柱建物12
	1 調査区の堆積状況(南東から)		1 3077柱穴土層断面(南から)
	2 調査区の堆積状況(北西から)		2 3080柱穴遺物出土状況(東から)
図版 4	掘立柱建物12・20		3 3097・3101柱穴土層断面(東から)
	1 掘立柱建物12・20 完掘状況(北東から)		4 3096柱穴土層断面(南から)
	2 掘立柱建物12 3006柱穴土層断面 (南東から)		5 3085柱穴土層断面(北東から)
	3 掘立柱建物12 3024柱穴 遺物(Po45他)出土状況(東から)		6 3086柱穴遺物(Po19)出土状況(東から)
	4 掘立柱建物12 3018柱穴土層断面 (東から)		7 3088柱穴磔出土状況(東から)
	5 掘立柱建物12 3094柱穴土層断面 (東から)		8 3095柱穴遺物出土状況(東から)
図版 5	掘立柱建物12		図版 7 掘立柱建物20
	1 3068柱穴遺物(Po27他)出土状況(東から)		1 3049柱穴土層断面(東から)
	2 3069柱穴遺物(Po40他)出土状況(東から)		2 3050柱穴遺物出土状況(東から)
	3 3070柱穴磔出土状況(東から)		3 3051柱穴磔出土状況(南西から)
			4 3039柱穴土層断面(東から)
			5 3040柱穴遺物出土状況(東から)
			6 3040柱穴磔出土状況(北から)
			7 3041柱穴遺物(Po68)出土状況(南東から)
			8 3042柱穴磔出土状況(東から)

- 図版8 掘立柱建物20
- 1 3043柱穴遺物(Po65他)出土状況(東から)
  - 2 3043柱穴遺物出土状況(東から)
  - 3 3036柱穴遺物(Po53)出土状況(東から)
  - 4 3044柱穴礫出土状況(北から)
  - 5 3045柱穴遺物出土状況(東から)
  - 6 3046柱穴礫出土状況(東から)
  - 7 3046柱穴礫出土状況(東から)
  - 8 3046柱穴礫出土状況(南東から)
- 図版9 掘立柱建物20
- 1 3047柱穴遺物(Po63他)出土状況(北から)
  - 2 3047柱穴遺物(Po64他)出土状況(東から)
  - 3 3047柱穴礫出土状況(北西から)
  - 4 3048柱穴礫出土状況(北から)
  - 5 3052柱穴土層断面(東から)
  - 6 3053柱穴土層断面(東から)
  - 7 3054柱穴遺物出土状況(東から)
  - 8 3055柱穴遺物(Po52)出土状況(北西から)
- 図版10 溝
- 1 666溝完掘状況(北西から)
  - 2 666溝遺物出土状況(北西から)
- 図版11 溝
- 1 666溝遺物出土状況(北から)
  - 2 666溝遺物出土状況(北西から)
  - 3 666溝遺物出土状況(北から)
  - 4 666溝遺物(Po87他)出土状況(北から)
  - 5 666溝遺物(Po86)出土状況(北から)
- 図版12 土坑・柱穴
- 1 3015土坑遺物(Po140他)出土状況  
(南東から)
  - 2 3015土坑遺物(Po139他)出土状況  
(南東から)
  - 3 3015土坑土層断面(南東から)
  - 4 3005柱穴土層断面(南東から)
  - 5 3007柱穴遺物出土状況(南から)
  - 6 3007柱穴礫出土状況(北から)
  - 7 3028柱穴礫出土状況(北東から)
  - 8 3028柱穴礫出土状況(東から)
- 図版13 柱穴・溝群
- 1 3025・3026柱穴土層断面(東から)
  - 2 3025柱穴礫出土状況(東から)
  - 3 3025柱穴礫出土状況(東から)
  - 4 3025柱穴遺物(Po143他)出土状況  
(東から)

- 5 747溝群検出状況(北西から)
- 図版14 溝
- 1 3035耕作溝群完掘状況(北西から)
  - 2 3035耕作溝群検出状況(北西から)
- 図版15 溝・土坑
- 1 3035耕作溝群掘削痕跡(南東から)
  - 2 3035耕作溝群掘削痕跡(南東から)
  - 3 3035耕作溝群A-A'ライン土層断面  
(南東から)
  - 4 3035耕作溝群B-B'ライン、3038土坑  
土層断面(南東から)
  - 5 3035耕作溝群E-E'ライン土層断面  
(東から)
  - 6 3035耕作溝群F-F'ライン土層断面  
(東から)
  - 7 3035耕作溝群C-C'ライン土層断面  
(東から)
  - 8 3035耕作溝群D-D'ライン土層断面  
(東から)
- 図版16 溝
- 1 3022溝遺物出土状況(西から)
  - 2 3022溝完掘状況(西から)
  - 3 3022溝(西端付近)遺物出土状況(東から)
  - 4 3022溝土層断面(東から)
- 図版17 掘立柱建物13・19
- 1 掘立柱建物13・19 航空写真(俯瞰)
  - 2 掘立柱建物13 検出状況(北から)
- 図版18 掘立柱建物13
- 1 3103~3105柱穴礫出土状況(北東から)
  - 2 3106柱穴遺物出土状況(北東から)
  - 3 3108柱穴礫出土状況(東から)
  - 4 3149柱穴遺物(Po196)出土状況  
(北東から)
  - 5 3109柱穴遺物出土状況(北東から)
  - 6 3112柱穴遺物出土状況(南から)
  - 7 3111柱穴礫出土状況(南から)
  - 8 3111柱穴礫出土状況(南から)
- 図版19 掘立柱建物13
- 1 3115柱穴遺物(Po161)出土状況(南から)
  - 2 3115柱穴遺物(Po204)出土状況(西から)
  - 3 3118柱穴礫出土状況(南から)
  - 4 3121柱穴土層断面(南西から)
  - 5 3119・3120柱穴礫出土状況(南から)
  - 6 3120柱穴礫出土状況(南から)



- 7 3122柱穴土層断面(南東から)  
 8 3123柱穴礫出土状況(南から)
- 図版20 掘立柱建物13
- 1 3124柱穴遺物(Po198他)出土状況  
 (西から)
- 2 3124柱穴礫出土状況(南から)  
 3 3125柱穴礫出土状況(南から)  
 4 3126柱穴礫出土状況(北西から)  
 5 3127柱穴遺物(Po146他)出土状況  
 (北から)
- 6 3129柱穴焼土塊検出状況(南から)  
 7 3132・3189柱穴遺物(Po183他)出土状況  
 (北東から)
- 8 3132柱穴遺物(Po187他)出土状況  
 (北東から)
- 図版21 掘立柱建物13
- 1 3130・3131柱穴土層断面(西から)  
 2 3134柱穴遺物(Po149他)出土状況  
 (北東から)
- 3 3135柱穴遺物(Po186)出土状況(南から)  
 4 3135・3136柱穴土層断面(南から)  
 5 3137柱穴遺物(Po190他)3338柱穴遺物  
 出土状況(北から)
- 6 3137柱穴礫出土状況(南から)  
 7 3142柱穴土層断面、遺物(Po197他)  
 出土状況(東から)
- 8 3144柱穴土層断面(北から)
- 図版22 掘立柱建物13
- 1 3138柱穴遺物(Po160他)出土状況  
 (北東から)
- 2 3138柱穴礫出土状況(北東から)  
 3 3139柱穴遺物出土状況(北東から)  
 4 3139柱穴遺物出土状況(北東から)  
 5 3140・3141・3188柱穴完掘状況(南から)  
 6 3188柱穴遺物出土状況(北西から)  
 7 3188柱穴土層断面(北西から)  
 8 3140・3141・3188柱穴検出状況(南から)
- 図版23 掘立柱建物19
- 1 掘立柱建物19 検出状況(北から)  
 2 3150柱穴土層断面(南東から)  
 3 3151柱穴遺物(Po212他)出土状況  
 (南西から)
- 4 3152柱穴完掘状況(南西から)  
 5 3153柱穴土層断面(北から)

- 図版24 掘立柱建物19
- 1 3154柱穴土層断面(北東から)  
 2 3155柱穴礫出土状況(北東から)  
 3 3156柱穴礫出土状況(南から)  
 4 3158柱穴土層断面(南東から)  
 5 3157柱穴土層断面(東から)  
 6 3157柱穴礫出土状況(西から)  
 7 3159柱穴土層断面(南東から)  
 8 3160柱穴礫出土状況(北東から)
- 図版25 掘立柱建物19
- 1 3161柱穴遺物(Po210他)出土状況  
 (東から)
- 2 3161柱穴礫出土状況(北から)  
 3 3162柱穴礫出土状況(南東から)  
 4 3255柱穴土層断面、遺物(Po207)  
 出土状況(東から)
- 5 3163・3340柱穴土層断面(北から)  
 6 3163柱穴礫出土状況(東から)  
 7 3164柱穴土層断面(南から)  
 8 3164柱穴礫出土状況(南から)
- 図版26 掘立柱建物19
- 1 3165柱穴礫出土状況(西から)  
 2 3178柱穴土層断面(南東から)  
 3 3166柱穴遺物(Po208他)出土状況  
 (南東から)
- 4 3166柱穴礫出土状況(南東から)  
 5 3167柱穴土層断面(南西から)  
 6 3172・3199柱穴土層断面(南東から)  
 7 3171・3341柱穴礫出土状況(南から)  
 8 3171・3341柱穴土層断面(南から)
- 図版27 掘立柱建物19
- 1 3173柱穴礫出土状況(北から)  
 2 3173柱穴礫出土状況(北から)  
 3 3174柱穴礫出土状況(北西から)  
 4 3174柱穴礫出土状況(北から)  
 5 3176柱穴土層断面(東から)  
 6 3177柱穴礫出土状況(西から)  
 7 3179柱穴土層断面(西から)  
 8 3180柱穴遺物出土状況(北西から)
- 図版28 区画溝
- 1 3010溝完掘状況(北から)  
 2 3010a溝完掘状況(南から)  
 3 3010a溝検出状況(南から)  
 4 3010a溝1層遺物出土状況(南東から)

- 5 3010a溝 1層遺物出土状況(南から)  
6 3010a溝 1層遺物出土状況(北東から)

図版29 区画溝

- 1 3010a溝 2・3層遺物出土状況(南から)  
2 3010a溝 2・3層遺物出土状況(北から)  
3 3010a溝 2・3層遺物出土状況(北東から)  
4 3010a溝 2・3層遺物出土状況(南東から)

図版30 区画溝

- 1 3010a溝 3層遺物出土状況(南から)  
2 3010a溝 3層遺物出土状況(南東から)  
3 3010a溝 3層遺物出土状況(南東から)  
4 3010a溝 3層遺物出土状況(南東から)  
5 3010a溝 3層遺物出土状況(北から)  
6 3010a溝底面直上遺物出土状況(北から)  
7 3010a溝底面直上遺物出土状況(南から)  
8 3010a溝底面直上遺物出土状況(南東から)

図版31 区画溝

- 3010b溝 1・2層遺物出土状況(南から)

図版32 区画溝

- 1 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北から)  
2 3010b溝 1・2層遺物(Po391他)出土状況  
(北東から)  
3 3010b溝 1・2層遺物(Po377他)出土状況  
(北東から)  
4 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)  
5 3010b溝 1・2層遺物(Po310他)出土状況  
(北西から)  
6 3010b溝 1・2層遺物(Po390他)出土状況  
(南から)  
7 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)  
8 3010b溝 1・2層遺物(Po343他)出土状況  
(東から)

図版33 区画溝

- 1 3010b溝 1・2層遺物(Po341他)出土状況  
(南から)  
2 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)  
3 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)  
4 3010c溝 1層遺物出土状況(南から)  
5 3010c溝 2層遺物出土状況(南東から)  
6 3010c・d溝A-A'土層断面(南から)  
7 3010b溝A-A'土層断面(南から)  
8 3010b溝B-B'土層断面(南から)

図版34 掘立柱建物21

- 1 掘立柱建物21 完掘状況(西から)

- 2 3242柱穴土層断面(東から)  
3 3243柱穴礫出土状況(北東から)  
4 3244柱穴土層断面(東から)  
5 3247柱穴土層断面(東から)

図版35 掘立柱建物21

- 1 3248柱穴土層断面(南東から)  
2 3249柱穴土層断面(東から)  
3 3251柱穴礫出土状況(南東から)  
4 3252柱穴土層断面(北東から)  
5 3253柱穴礫出土状況(東から)  
6 3241柱穴土層断面(東から)  
7 3246柱穴土層断面(東から)  
8 3250柱穴土層断面(西から)

図版36 土坑

- 1 3056土坑完掘状況(北から)  
2 3056土坑土層断面(北から)  
3 3056土坑 1層遺物(Po424他)出土状況  
(北から)  
4 3056土坑 2層遺物(Po419他)出土状況  
(北東から)  
5 3057土坑完掘状況(北から)  
6 3057土坑土層断面(南西から)  
7 3057土坑遺物(Po437他)出土状況  
(東から)

図版37 土坑

- 1 3259土坑完掘状況(南東から)  
2 3259土坑土層断面(北東から)  
3 3259土坑遺物出土状況(北西から)  
4 3259土坑遺物(Po439他)出土状況  
(北西から)  
5 3268土坑完掘状況(北西から)  
6 3268土坑土層断面(北西から)  
7 3270土坑完掘状況(北東から)  
8 3270土坑土層断面(北東から)

図版38 柱穴

- 1 3201柱穴遺物(Po444)出土状況(南から)  
2 3201柱穴礫出土状況(東から)  
3 3206柱穴礫出土状況(北から)  
4 3208柱穴礫出土状況(南から)  
5 3214柱穴遺物(Po455他)出土状況  
(北から)  
6 3254柱穴礫出土状況(南から)  
7 3228柱穴土層断面(東から)  
8 3228柱穴柱根(分析試料19)出土状況

- (東から)
- 図版39 柱穴
- 1 3256・3258柱穴土層断面(南東から)
  - 2 3257柱穴礫出土状況(東から)
  - 3 3260柱穴礫出土状況(西から)
  - 4 3261柱穴遺物(Po451他)出土状況  
(南東から)
  - 5 3297柱穴土層断面(東から)
  - 6 3297柱穴柱根出土状況(東から)
  - 7 3298・3299柱穴土層断面(北東から)
  - 8 3317柱穴遺物(Po441)出土状況(西から)
- 図版40 柱穴
- 1 3314柱穴土層断面(南から)
  - 2 3314柱穴遺物(Po452他)出土状況  
(南から)
  - 3 3314柱穴完掘状況(南から)
  - 4 3329柱穴礫出土状況(北西から)
  - 5 3327柱穴礫出土状況(南東から)
  - 6 3327柱穴土層断面(南東から)
  - 7 3335柱穴礫出土状況(南から)
  - 8 3336柱穴礫出土状況(北西から)
- 図版41 溝
- 1 250溝(平成28年度調査)完掘状況  
(南西から)
  - 2 250溝a・b(北端)完掘状況(西から)
  - 3 250溝a土層断面(西から)
  - 4 250溝a(北側)完掘状況(南西から)
  - 5 250溝a・b土層断面(西から)
  - 6 250溝a・b土層断面(北東から)
- 図版42 溝
- 1 250溝a・b(北側)完掘状況(南西から)
  - 2 250溝a・b(南側)完掘状況(北東から)
  - 3 250溝b遺物(Po482他)出土状況  
(北東から)
  - 4 250溝b遺物(Po483他)出土状況  
(北東から)
  - 5 250溝b遺物(S 3)出土状況(東から)
  - 6 250溝b遺物(S 5他)出土状況  
(南東から)
- 図版43 土坑
- 1 3186土坑遺物(Po496他)出土状況  
(北西から)
  - 2 3186土坑土層断面(北西から)
  - 3 3184土坑土層断面(北西から)

- 4 3184土坑完掘状況(北西から)
  - 5 3184・3186土坑検出状況(北西から)
- 図版44 土坑
- 1 8土坑完掘状況(北西から)
  - 2 8土坑土層断面(南東から)
  - 3 8土坑底面ピット礫出土状況(南西から)
  - 4 3146土坑土層断面(北西から)
  - 5 3183土坑完掘状況(北から)
  - 6 3183土坑土層断面(北から)
  - 7 3183土坑底面ピット検出状況(北から)
  - 8 3183土坑底面ピット土層断面(北から)
- 図版45 土坑
- 1 3185土坑完掘状況(南東から)
  - 2 3185土坑土層断面(北東から)
  - 3 3185土坑底面検出状況(北東から)
  - 4 3185土坑底面ピット(3層)土層断面  
(北東から)
  - 5 3185土坑底面ピット(詰め土)土層断面  
(南東から)
  - 6 3187土坑完掘状況(北東から)
  - 7 3187土坑土層断面(北東から)
  - 8 3187土坑検出状況(南西から)
- 図版46 土坑
- 1 3190土坑底面検出状況(北から)
  - 2 3190土坑底面ピット礫出土状況(北から)
  - 3 3216土坑完掘状況(東から)
  - 4 3216土坑土層断面(南西から)
  - 5 3216土坑底面ピット礫出土状況(東から)
  - 6 3222土坑完掘状況(南東から)
  - 7 3222土坑土層断面(南東から)
  - 8 3222土坑底面ピット検出状況(南東から)
- 図版47 土坑
- 1 3330土坑完掘状況(北から)
  - 2 3330土坑土層断面(西から)
  - 3 3330土坑底面ピット土層断面(西から)
  - 4 3337土坑完掘状況(西から)
  - 5 3234土坑完掘状況(南東から)
  - 6 3337土坑底面ピット礫出土状況(東から)
  - 7 3223土坑完掘状況(北東から)
  - 8 3223土坑土層断面(北東から)
- 図版48
- 1 掘立柱建物12出土土師器(1)
  - 2 掘立柱建物12出土土師器(2)
- 図版49
- 1 掘立柱建物12出土土師器(3)
  - 2 掘立柱建物12出土椀形鍛冶滓

- 3 III-1層(平成30年度調査)  
・678・679ピット(平成28年度調査)  
出土須恵器甕
- 図版50 1 掘立柱建物12、3314柱穴出土須恵器壺  
2 掘立柱建物20出土青磁蓋  
3 掘立柱建物20出土土師器  
4 掘立柱建物20出土土師器・須恵器
- 図版51 1 666溝出土土師器(1)  
2 666溝出土土師器(2)
- 図版52 1 666溝出土土師器坏  
2 666溝出土土師器高台付坏
- 図版53 1 666溝出土須恵器  
2 666溝出土白磁碗  
3 666溝出土須恵器壺  
4 掘立柱建物17、666溝出土須恵器壺
- 図版54 1 3015土坑出土土師器坏  
2 3035耕作溝群・747溝群  
出土土師器・須恵器  
3 3022溝出土須恵器・瓦質土器  
4 3005・3025柱穴出土土師器  
5 掘立柱建物13出土土師器(1)
- 図版55 1 掘立柱建物13出土土師器(2)  
2 掘立柱建物13出土土師器(3)
- 図版56 掘立柱建物13、3261柱穴他出土須恵器甕  
(外面)
- 図版57 掘立柱建物13、3261柱穴他出土須恵器甕  
(内面)
- 図版58 1 掘立柱建物13、3010b・666溝他出土  
須恵器甕  
2 掘立柱建物13出土須恵器壺  
3 掘立柱建物13、3010a溝出土須恵器壺
- 図版59 1 掘立柱建物13出土須恵器壺  
2 掘立柱建物13、3010a・b溝、3259土坑  
出土土製品  
3 掘立柱建物13・19、3056土坑、3264・  
3306柱穴、III-1層出土被熱粘土塊  
(非実測遺物)  
4 掘立柱建物13出土白磁  
5 掘立柱建物19出土土師器
- 図版60 1 3010a溝出土土師器(1)  
2 3010a溝出土土師器(2)
- 図版61 1 3010a溝出土土師器甕  
2 3010a溝出土白磁  
3 3010a溝出土須恵器
- 4 3010a溝出土土師器坏  
5 3010b溝出土土師器高台付坏
- 図版62 1 3010b溝出土土師器皿  
2 3010b溝出土土師器柱状高台
- 図版63 1 3010b溝出土土師器  
2 3010b溝出土土師器坏
- 図版64 1 3010b溝出土土師器耳皿  
2 3010b溝出土貿易陶磁  
3 3010b溝出土白磁碗(外面)  
4 3010b溝出土白磁碗(内面)  
5 3010b溝他出土須恵器甕
- 図版65 1 3010b溝出土初期備前・須恵器  
2 3010b溝出土須恵器甕  
3 3010b溝他出土須恵器甕(1)  
4 3010b溝他出土須恵器甕(2)
- 図版66 1 3010b溝・III-1層出土須恵器甕(外面)  
2 3010b溝・III-1層出土須恵器甕(内面)  
3 3010b溝出土錫製品(外面)  
4 3010b溝出土錫製品(内面)
- 図版67 1 3010b溝出土土師器甕(分析試料14)  
2 3010b溝、表土出土ミニチュア土器  
3 3010c溝出土土師器(1)  
4 3010c溝出土土師器(2)  
5 3010c溝出土白磁碗  
6 3010c溝出土須恵器甕(外面)  
7 3010c溝出土須恵器甕(内面)
- 図版68 1 3010d溝出土土師器・須恵器  
2 3010d溝出土土師器坏  
3 3010d溝出土白磁碗  
4 3010a溝出土敲石  
5 3056土坑出土白磁皿  
6 3056・3057・3259土坑出土土師器(1)  
7 3056・3057・3259土坑出土土師器(2)
- 図版69 1 掘立柱建物13、3261・3292・3298・3329  
柱穴、3225ピット、攪乱土出土土師器  
2 3201・3260・3261・3317柱穴出土土師器  
3 3214柱穴出土須恵器壺
- 図版70 250溝a・b出土弥生土器
- 図版71 1 250溝b出土弥生土器壺  
2 250溝a・b出土弥生土器底部  
3 250溝b出土石器  
4 250溝a・b出土石器
- 図版72 1 3186土坑出土土器・土製品  
2 3186土坑他出土石鏃

- 3 Ⅲ-1層出土土師器
- 図版73 1 Ⅲ-1層出土土器  
2 Ⅲ-2層出土土師器  
3 Ⅲ-2層出土土器  
4 Ⅲ-2層出土須恵器甕
- 図版74 1 Ⅲ-2層出土須恵器坏  
2 Ⅲ-2層他出土ミニチュア土器・土製品  
3 Ⅲ-2層他出土剥片石器  
4 表土・攪乱土等出土移動式竈  
5 表土・攪乱土等出土土師器(底部)
- 図版75 1 表土・攪乱土等出土土師器(1)  
2 表土・攪乱土等出土土師器(2)
- 図版76 表土・攪乱土等出土手づくね土師器(1)
- 図版77 1 表土・攪乱土等出土手づくね土師器(2)  
2 表土・攪乱土等出土須恵器坏
- 図版78 1 表土・攪乱土等出土須恵器壺  
2 表土・攪乱土等出土須恵器(外面)  
3 表土・攪乱土等出土須恵器(内面)  
4 表土・攪乱土等出土須恵器転用硯(外面)  
5 表土・攪乱土等出土須恵器転用硯(内面)
- 図版79 表土・攪乱土等出土須恵器
- 図版80 1 表土・攪乱土等出土土師器甕・鍋  
2 表土・攪乱土等出土羽釜  
3 表土・攪乱土等出土羽釜(小型品)
- 図版81 1 表土・攪乱土等出土鉢・播鉢  
2 その他出土鉢・片口・甕・竈
- 図版82 その他出土鍋(1:外面)
- 図版83 その他出土鍋(1:内面)
- 図版84 その他出土鍋(2:外面)
- 図版85 その他出土鍋(2:内面)
- 図版86 その他出土羽釜
- 図版87 1 調査区内出土青磁・朝鮮陶器(外面)  
2 調査区内出土青磁・朝鮮陶器(内面)
- 図版88 調査区内出土白磁・青白磁(外面)
- 図版89 調査区内出土白磁・青白磁(内面)
- 図版90 1 調査区内出土黒釉・雑釉陶器(外面)  
2 調査区内出土黒釉・雑釉陶器(内面)  
3 調査区内出土中国陶器(外面)  
4 調査区内出土中国陶器(内面)  
5 調査区内出土青磁(非実測遺物:外面)  
6 調査区内出土青磁(非実測遺物:内面)
- 図版91 1 調査区内出土白磁・青白磁  
(非実測遺物:外面)  
2 調査区内出土白磁・青白磁

(非実測遺物:内面)

- 図版92 1 調査区内出土国産陶器  
2 表土・攪乱土等出土石器(1)  
3 表土・攪乱土等出土石器(2)

〈平ノ前遺跡〉

- 図版93 A1区盛土部  
1 A1区盛土部 完掘状況(俯瞰)  
2 流路西側完掘状況(南から)
- 図版94 A1区盛土部  
1 流路西側土層断面(南東から)  
2 流路東側完掘状況(南から)
- 図版95 A1区盛土部  
1 流路東側土層断面(南東から)  
2 流路遺物(CP6他)出土状況(北から)  
3 流路遺物(Po33)出土状況(北東から)  
4 流路遺物(Po42他)出土状況(西から)  
5 流路遺物(S6)出土状況(北東から)
- 図版96 P3区  
1 P3区 完掘状況(俯瞰)  
2 溝1・2a・2b、ピット1検出状況  
(北から)
- 図版97 P3区  
1 溝1・2a・2b土層断面(北から)  
2 溝2a遺物(Po52)出土状況(北から)  
3 溝1・2a・2b完掘状況(北から)  
4 溝1・2a・2b、ピット1完掘状況  
(北から)
- 図版98 P3区  
1 北西壁土層断面(北東から)  
2 北東壁土層断面(南西から)
- 図版99 A1区盛土部  
1 流路1層出土土器・土製品・鉄関連遺物  
2 流路1層出土須恵器
- 図版100 A1区盛土部流路1層出土瓦(凸面)
- 図版101 A1区盛土部流路1層出土瓦(凹面)
- 図版102 A1区盛土部  
1 流路1層出土赤彩土師器(外面)  
2 流路1層出土赤彩土師器(内面)  
3 流路1層出土転用硯  
4 流路1層出土土師器・弥生土器  
5 流路1層出土丸瓦(凸面)  
6 流路1層出土丸瓦(凹面)
- 図版103 A1区盛土部  
1 流路1層出土石器

- 2 流路2層出土円面硯
- 3 流路2層出土分銅形土製品
- 4 流路2層出土土器

図版104 A 1区盛土部

- 1 流路2層出土石器
- 2 流路4層出土土器・土製品
- 3 流路4層出土土師器甕
- 4 流路4層出土瓦

図版105 A 1区盛土部

- 1 流路4層出土石鍬
- 2 流路5～8層出土土師器壺

図版106 A 1区盛土部・P 3区

- 1 A 1区盛土部流路5～8層出土  
赤彩土師器
- 2 A 1区盛土部流路5～8層出土土師器・  
須恵器・土製品
- 3 A 1区盛土部流路10・12・13層出土  
縄文土器
- 4 A 1区盛土部流路10・12・13層出土石器
- 5 A 1区盛土部遺構外出土土師器
- 6 P 3区溝2a出土土師器甕

〈自然科学分析〉

- 図版107 山ノ下遺跡 出土木材顕微鏡写真
- 図版108 山ノ下遺跡 出土炭化材顕微鏡写真(1)
- 図版109 山ノ下遺跡 出土炭化材顕微鏡写真(2)
- 図版110 平ノ前遺跡 珪藻化石顕微鏡写真
- 図版111 平ノ前遺跡 花粉化石顕微鏡写真
- 図版112 平ノ前遺跡 植物珪酸体顕微鏡写真

〈貿易陶磁の類例〉

- 図版113 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(1)
- 図版114 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(2)
- 図版115 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(3)
- 図版116 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(4)
- 図版117 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(5)
- 図版118 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(6)
- 図版119 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(7)

# 第1章 調査の経緯と経過

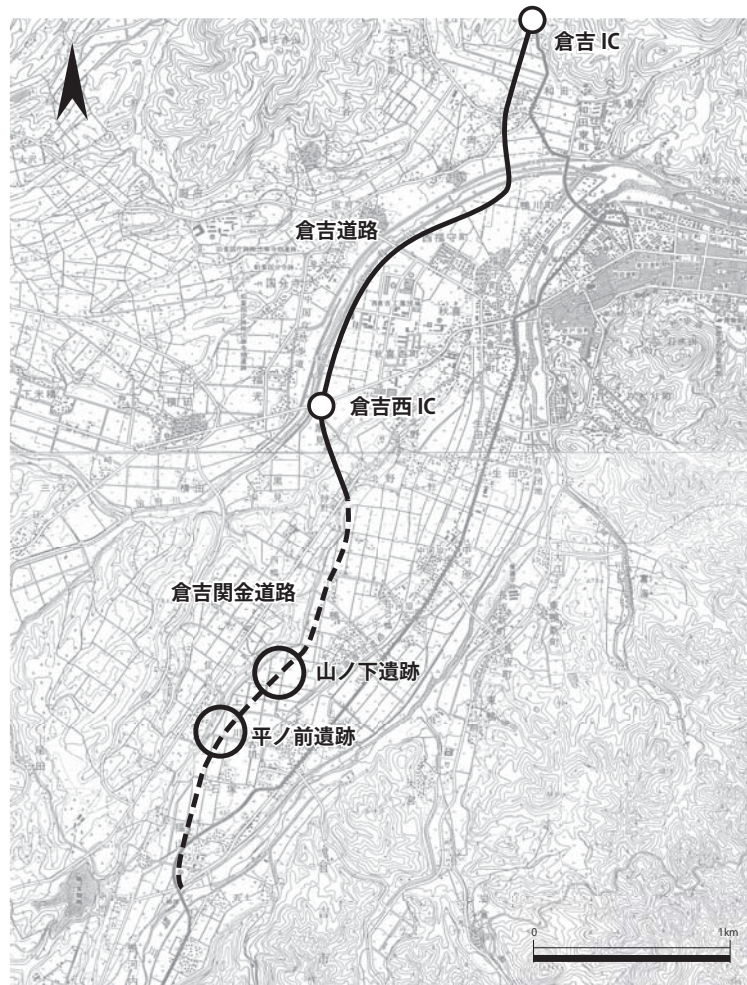
## 第1節 調査に至る経緯

中国地方では、都市と農村地域との連携強化による地域集積圏の拡大、物資の流通、人の交流の活性化を促し地域集積圏間の交流などを図ることを目的として、国土交通省により地域高規格道路の整備が計画されている。このうち鳥取県中部地方を縦貫する「北条湯原道路」は、一般国道313号のバイパス道路として、鳥取県中部地方生活圏と岡山県真庭地方生活圏を相互に連絡し、広域的な道路ネットワークの形成を図る延長約50kmの路線であり、鳥取県によって整備が進められている。その一部となる「倉吉関金道路」は、倉吉市小鴨と倉吉市関金町を結ぶ全長7kmの区間で、現在整備中である「倉吉道路」、供用中の「北条倉吉道路」と繋がり北条インターチェンジで国道9号と接続する。

「倉吉関金道路」の事業計画地内及び周辺には、石塚廃寺跡や市場城跡など周知の埋蔵文化財包蔵地が存在している。そのため道路建設工事に先立って鳥取県県土整備局(以下、鳥取県)、鳥取県教育委員会(以下、県教委)、倉吉市教育委員会(以下、市教委)により埋蔵文化財の取扱いについて協議が持たれ、まず計画地内に存在する埋蔵文化財包蔵地の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成27年度から市教委が文化庁の国庫補助と県費補助を受けて計画地内の試掘・確認調査が逐次進められた<sup>(註1)</sup>。その結果、山ノ下遺跡をはじめ複数の遺跡の存在が明らかとなり、鳥取県は再度県教委と協議・調整を行い、平成28年度から路線内に存在する遺跡の発掘調査並びに報告書作成を公益財団法人鳥取県教育文化財団(以下、財団)に委託することとなった。

倉吉市小鴨及び上古川に所在する山ノ下遺跡は、道路盛土部分となる計12,000㎡を対象に記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第94条の手続きを経た後、調査対象のうち平成28年度に7,000㎡<sup>(註2)</sup>、平成30年度に5,000㎡の発掘調査を実施した。平成30年度は5月10日から同年12月27日まで発掘調査を行った。

倉吉市上古川に所在する平ノ前遺跡は、平成29年度に橋脚部分(P4区152.20㎡)と橋台部分(A1区154.18㎡)の計306.38㎡<sup>(註3)</sup>を対象に記録保存のための発掘調査を文化財保護法第94条の手続



第1図 一般国道313号予定地と調査地の位置

## 第1章 調査の経緯と経過

きを経た後に実施した。令和元年度には盛土部分(A 1区盛土部840㎡)に加え、橋脚部分(P 3区160㎡)も追加調査の対象となり、文化財保護法第94条の手続きを経た後に計1,000㎡の発掘調査を実施した。令和元年度は5月14日から同年8月27日まで発掘調査を行った。

### 【註】

- (1) 倉吉市教育委員会2017『倉吉市内遺跡分布調査報告書19』倉吉市文化財報告書第152集
- (2) 公益財団法人鳥取県教育文化財団2018『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書120
- (3) (2)と同じ

## 第2節 調査の経過

### 第1項 山ノ下遺跡

調査区は平成28年度調査区の北西に隣接し、北東－南西方向を主軸として長軸約150m、短軸約34mの平行四辺形を呈している。調査区南寄りの西角から東に向かって仮設の用水路が敷設されており、水路によって分けられた北側を北区、南側を南区と便宜上命名した。

5月10日から重機による表土掘削を着手、南西辺から北東辺に向かって順次進め21日に終了した。南区では南西端部が、北区では西辺付近から北端部にかけて圃場整備による著しい削平を受けており、遺物包含層(以下、包含層と呼称)の遺存が不良であった。5月17日から基準点及び方眼測量を業者に委託し着手している。

発掘作業員による人力掘削を5月28日より、包含層及び遺構の遺存が良好な南区から着手した。平成28年度の調査結果に基づき、1層(表土)直下で検出したⅢ-1層上面を第1遺構面とし近世から中世に至る遺構を検出した。Ⅲ-1層は土器の細片が多く混じる特色ある土層であり、南北を分断する用水路周辺から南区の一部にかけて堆積している。南区では平成28年度調査で確認された掘立柱建物12がさらに拡大することが判明し、また新たに掘立柱建物20及び多量の土器が廃棄された3010溝などを検出し掘削に着手した。北区ではⅢ-1層の遺存範囲は狭く、そのため一部先行して第2遺構面の調査を平行して進めた。Ⅲ-2層上面では中世以降の3035耕作溝群や近世の3022溝などを検出し掘削



写真1 山ノ下遺跡 表土剥ぎ風景



写真2 山ノ下遺跡 現地説明会風景



を行った。9月25日に第1遺構面及び第2遺構面の一部の調査を終了した。

翌26日から包含層掘削と第2遺構面の残りの遺構検出を開始した。古代末から中世に至る遺構や遺物を数多く検出しているが、総じて南区の遺構の密度が高いことが確認された。南区では平成28年度発見の掘立柱建物13の続きが確認され、平面積240㎡を超える県内でも最大級の大型建物であることが判明した。その他、掘立柱建物19や3056・3057土坑、小穴群なども合わせ掘削を着手した。11月15日に業者委託によるラジコンヘリコプターを用いて第2遺構面の全景完掘写真を撮影した。

11月16日からIV層の掘削を開始、第3遺構面であるV層上面において弥生時代の遺構及び縄文時代の落とし穴を確認している。弥生時代の250溝は前回調査で検出したものの続きであり、新旧2時期があることも判明した。VII層漸移層上面及び一部の範囲でVIII層ローム層上面を最終遺構確認面として12月18日に調査を終了した。その後基本層序の記録及び機材等の撤収作業を行い20日に発掘作業員の稼働が終了した。測量を中心とした補足調査を27日まで実施し、県土整備局への管理引き渡しを行った。

なお、11月8日記者公開、一般市民を対象とした現地説明会を11月10日に開催し、55名の見学者があった。平成31年2月18日から3月17日まで発掘調査成果展「ロマンチック街道(国道313号)の遺跡を掘る！発掘調査速報展」を鳥取県立博物館で開催した。

建物柱穴や溝より出土した金属製品、木製品や炭化物などについては、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し蛍光X線分析による非破壊調査、放射性炭素年代測定、樹種同定を行った。その成果については、第5章に掲載している。

整理作業員の稼働は平成30年6月11日から令和2年3月27日まで行い、遺物の洗浄、注記、接合、実測図作成等の報告書作成作業を実施した。

## 第2項 平ノ前遺跡

A1区盛土部は平成29年度A1区の南・西隣に隣接し、一辺20m前後の台形状区画が東西にクランク状に連結する形状である。P3区は一辺約12mのほぼ正方形を呈している。調査はA1区盛土部から開始し、5月13日から重機による表土掘削を着手、20日に終了した。東側ほど造成土が厚く堆積している状況が確認された。4月22日から基準点測量及び方眼測量を業者に委託し着手している。発掘



写真3 平ノ前遺跡P3区 表土剥ぎ風景



写真4 平ノ前遺跡A1区盛土部 調査風景

## 第1章 調査の経緯と経過

作業員による人力掘削を6月3日より、平成29年度に検出された流路の堆積状況及び深度を確認するため、東西方向に幅2m、長さ約30mのトレンチを設定し掘削に着手した。流路は幅約30mで堆積土からは縄文時代晩期、弥生時代中期から古墳時代、古代から中世の遺物が数多く出土している。また流路西際では、古墳時代前期の溝も確認された。土壌サンプルの採取、測量等の記録作業を随時実施し、23日ドローンによる航空写真撮影を実施、8月27日に調査を終了した。

P3区は7月25日から26日にかけて重機による表土掘削を着手、26日から30日に基準点・方眼測量を実施した。表土掘削により調査区東側が大きく削平されている状況が確認された。8月1日より遺構検出作業を開始し、古墳時代前期の溝2条、古墳時代前期以前の溝1条を検出した。遺構掘削を8月22日に終了、23日ドローンによる航空写真撮影を実施した後、補足測量及び撤収作業を進め、8月27日に全ての調査を終了した。

流路や溝より出土した土壌サンプル・炭化物等については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を行った。その結果については、第5章に掲載している。

整理作業員の稼働は令和元年6月11日から翌年3月27日まで行い、遺物の洗浄、注記、接合、実測図作成等の報告書作成作業を実施した。

## 第3節 調査体制

発掘調査および報告書作成は、以下の体制で実施した。

### 平成30年度 山ノ下遺跡

○公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 野村 勇二（平成30年6月26日まで）  
福本 慎一（平成30年6月27日から）

事務局

事務局長 畑中 弘子  
副主幹 岡田 美津子  
事務職員 水根 幸子

調査室

室長 牧本 哲雄 ※1

総務係

係長 河村 淳 ※1  
事務職員 片岡 絵里子  
非常勤職員 石川 恵

企画設計係

係長 小口 英一郎（本務：調査班係長） ※1

調査班

係長 小口 英一郎 ※1  
副主幹 森本 倫弘 ※1

文化財主事 陶澤 真梨子 ※1

※1 鳥取県教育委員会から派遣

### 平成31年度・令和元年度 山ノ下遺跡・平ノ前遺跡

#### ○公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 福本 慎一

#### 事務局

事務局長 畑中 弘子

副主幹 岡田 美津子

事務職員 水根 幸子

#### 調査室

室長 原田 雅弘 ※1

#### 総務係

係長 河村 淳 ※1

事務職員 片岡 絵里子

非常勤職員 石川 恵

#### 企画設計係

係長 小口 英一郎（本務：調査班係長） ※1

#### 調査班

係長 小口 英一郎 ※1

副主幹 森本 倫弘 ※1

文化財主事 陶澤 真梨子 ※1

※1 鳥取県地域振興部（平成31年4月1日から令和元年7月4日まで）、  
鳥取県地域づくり推進部（令和元年7月5日から）から派遣

#### ○調査協力

鳥取県中部総合事務所県土整備局、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県地域振興部文化財課、鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課、倉吉市教育委員会、倉吉博物館

## 第4節 調査の方法

### 第1項 調査地の地区割

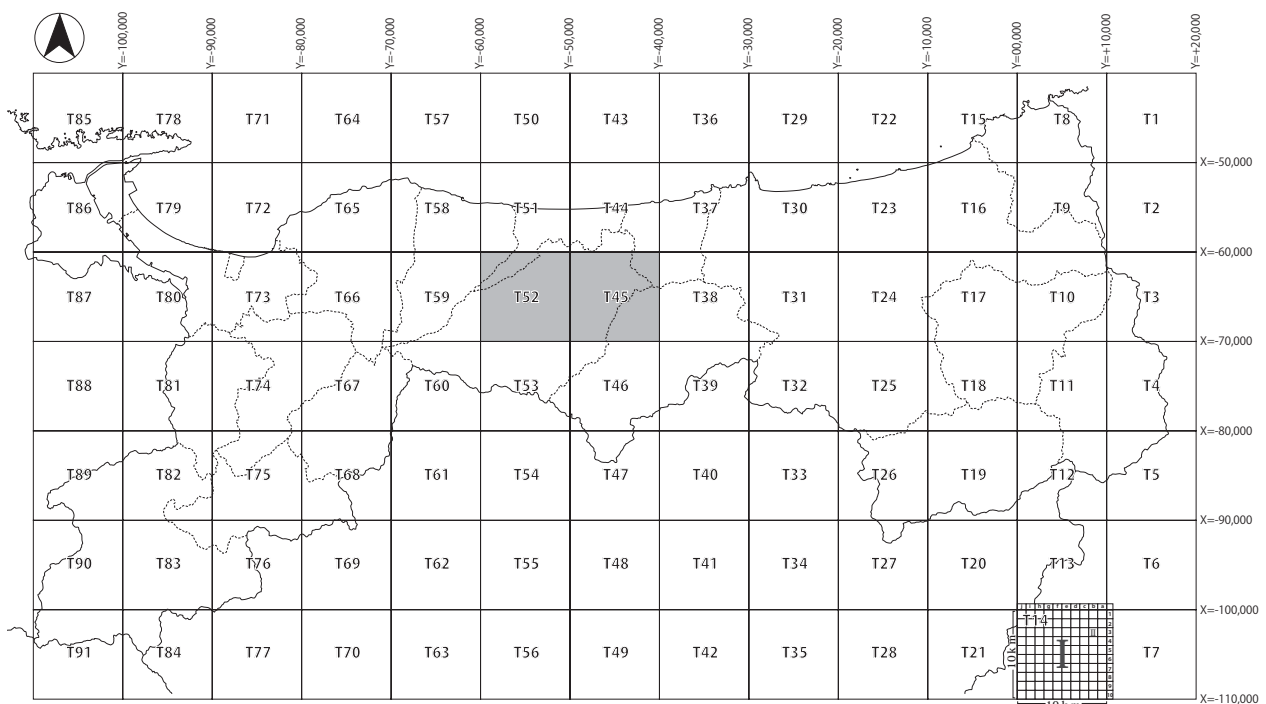
#### 1 地区割の方法と名称

公益財団法人鳥取県教育文化財団(以下、財団)が受託した一般国道313号(倉吉関金道路)の発掘調査では、調査成果の標準化を目的として、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取上げ等に利用する地区割に、平面直角座標系の第V系(世界測地系)を使用している。地区割については、10m×10m(100㎡)の区画を基本的な最小単位とし、その名称(記号)については、以下のように設定した(第2図)。

**第Ⅰ区画** 鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000m×10,000mで、1～91の区画を設け、北東隅からT1～T91の記号を付した。

**第Ⅱ区画** 第Ⅰ区画の1区画内を、1,000m×1,000mに100分割した区画である。第Ⅱ区画については、1区画の南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、1a～10jの記号を付した。

**第Ⅲ区画** 第Ⅱ区画の1区画内を、100m×100mに100分割した区画である。第Ⅲ区画については、1区画の南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、1A～10Jの記号を付した。

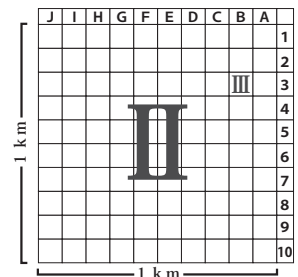
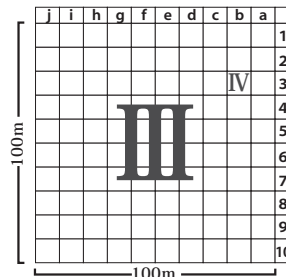


平面直角座標系：V系

N 36° 00' 00" を座標原点 (X=0, Y=0) とする  
E 134° 20' 00"

今回調査地

区画名称例				
区画の大きさ	10000m	1000m	100m	10m
単位区画	I	II	III	IV
区画名称	※区画北東の座標値に基づいて名称を付与する			
例1.	X=-57,430.00 Y=-12,810.00	T23	— 8 c —	5 I — 4 b
例2.	X=-74,120.00 Y=+14,350.00	T4	— 5 g —	2 H — 3 f

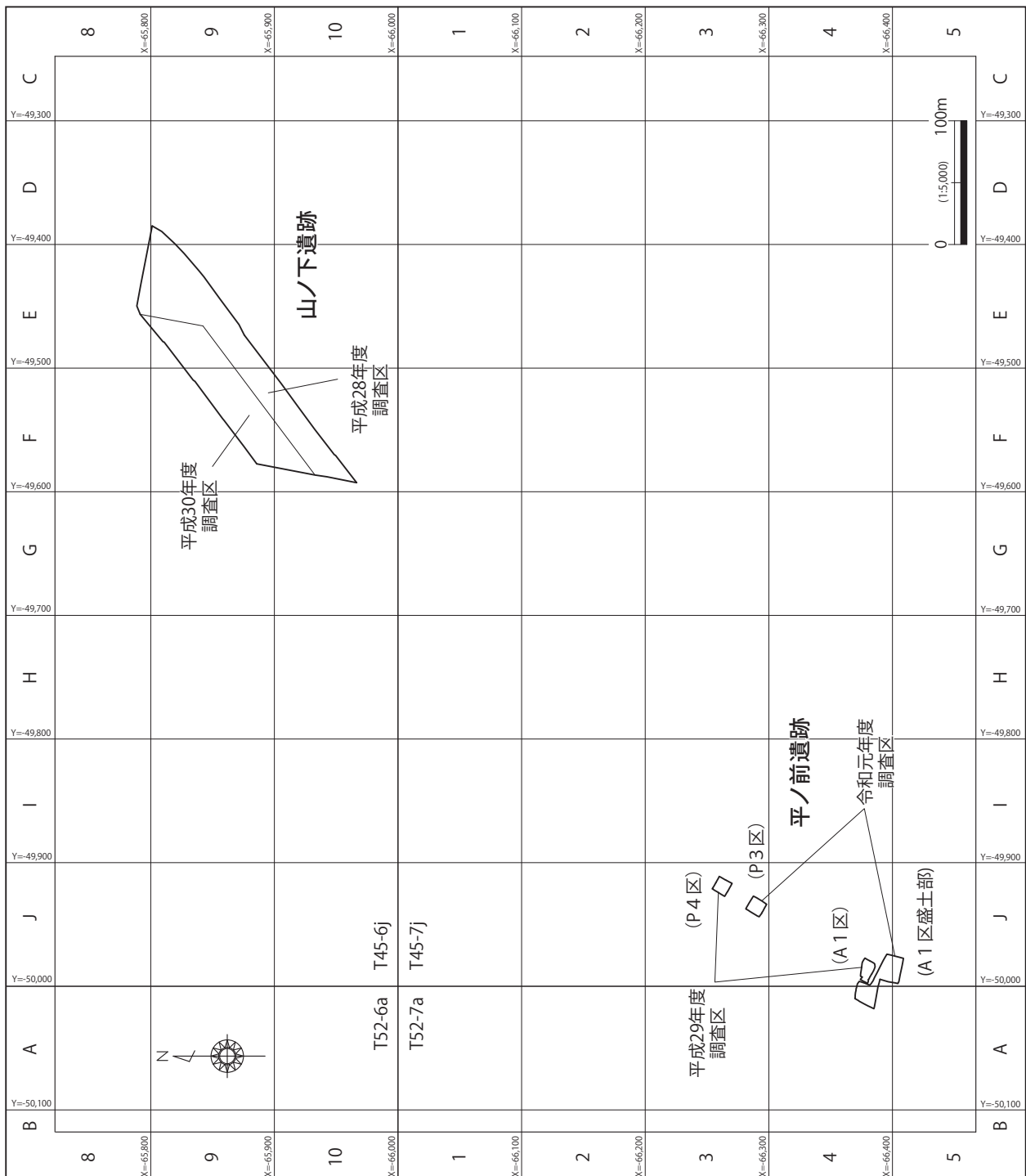


第2図 鳥取県と国土座標系

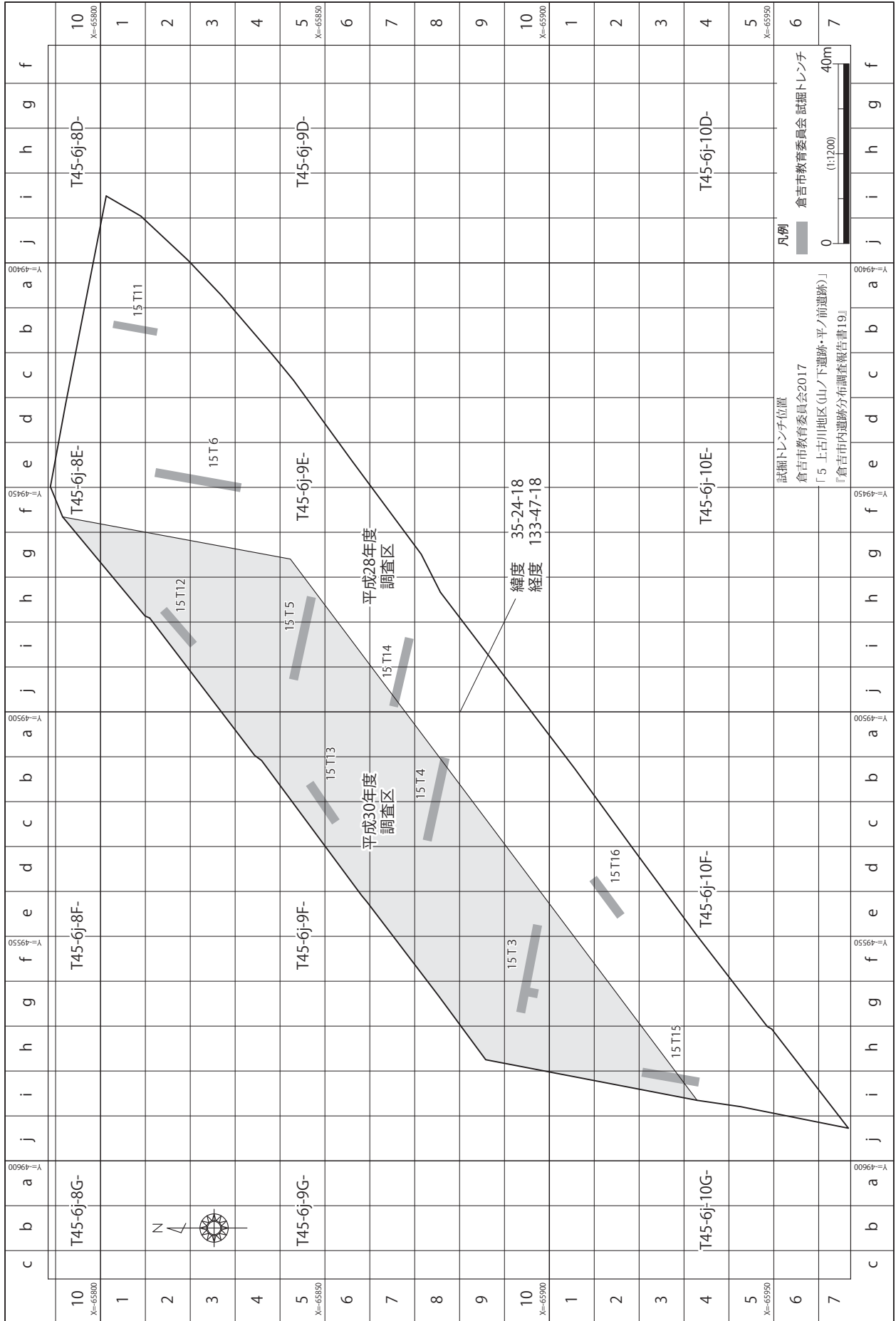
**第IV区画** 第三区画の1区画内を、10m×10mに100分割した区画である。第IV区画については、1区画の南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、1 a～10 jの記号を付した。

**2 山ノ下遺跡・平ノ前遺跡における地区割**

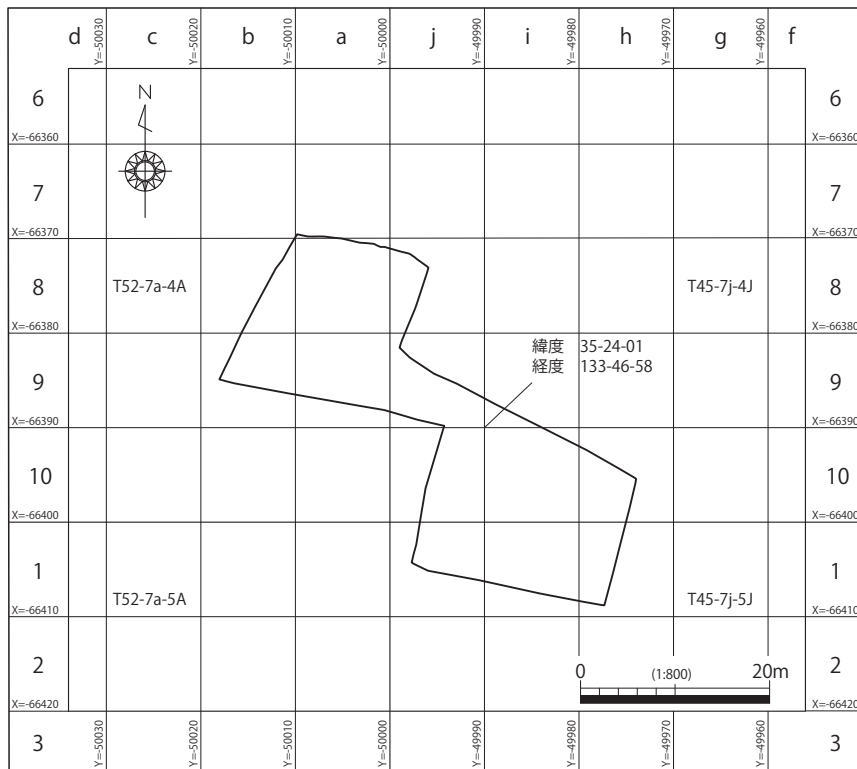
調査区に前項で述べた地区割を設定したものが第3～6図である。本書で報告する平成30年度、令和元年度調査範囲は、T45・52(第I区画)内に位置しており、文中で遺構・遺物位置について地区割を用いながら記載する際には、第II、第III、第IV区画の記号を用いて6j-9F-1eのように記す。



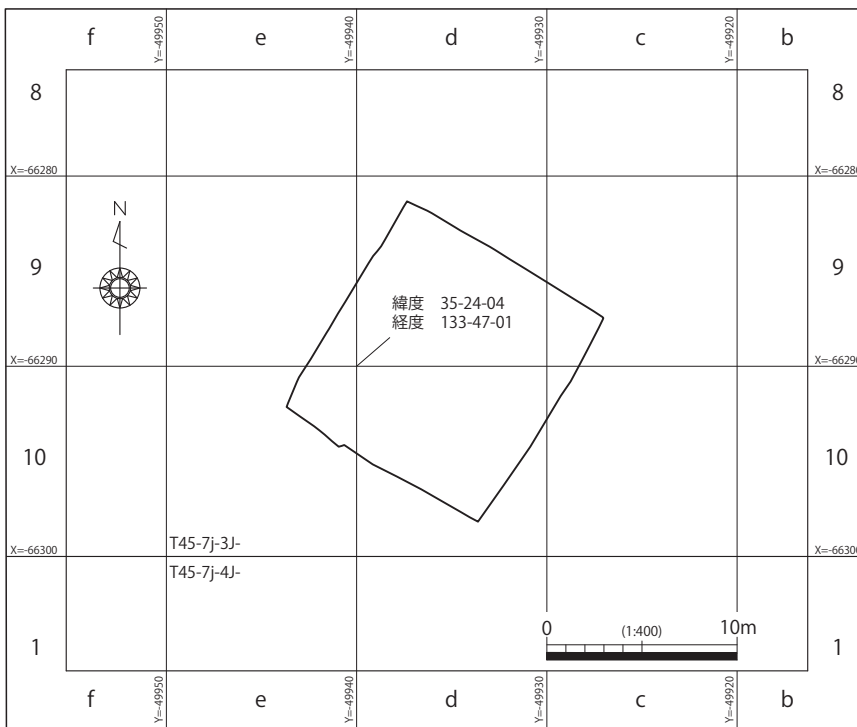
第3図 山ノ下・平ノ前遺跡の地区割図



第4図 山ノ下遺跡の地区割図



第5図 平ノ前遺跡A1区盛土部の地区割図



第6図 平ノ前遺跡P3区の地区割図

## 第2項 発掘調査と記録の対象

### 1 発掘調査と記録の対象

調査では、表土掘削を重機、遺物包含層及び遺構の検出と掘削は人力で行い、調査の記録作業は表土除去後からを対象として行った。

### 2 遺構名称の設定

#### 1) 山ノ下遺跡

平成28年度調査では、検出順に遺構番号を付与することを基本方針とし、遺構名称は遺構番号の後ろに検出された遺構の種別を組み合わせることで「1土坑」「2溝」のようになるが、種別については、調査が進む中で変更されることもあった。平成30年度調査では、遺構番号は検出した順に付与することを基本方針とし、遺構種類の呼称は、4桁数字の後に組み合わせて「S3010溝」「S3057土坑」のように記載している。平成28年度調査で2000番台まで遺構番号を付与していることから、冒頭に「S」を付けて3001番(S3001～)から付している。

ただし、平成28年度調査で確認された遺構の続きについては、例えば掘立柱建物であれば、個別の柱穴は「S3139柱穴」のように記載するが、集合名称は前回調査に合わせ「掘立柱建物13」とし、単体遺構は例えば「666溝」「747溝群」などと名称を踏襲している。

一度付与された遺構番号については不変であり、本書においても調査時に付与した遺構番号を用いて報告を行っている。ただし、現地調査時に遺構番号を付したものについても、調査の結果、攪乱や自然地形であることが明らかとなった場合は欠番とした。なお、本報告では冒頭の「S」を省略して記載している。

#### 2) 平ノ前遺跡

平ノ前遺跡は調査区が2地区(A1区盛土部、P3区)に分かれ、かつ両地区が直線距離で約100m離れていることも鑑み、遺構名称は地区ごとに付与することとした。例えば、A1区盛土部「1流路」、P3区「溝1」のように呼称している。

### 3 図面記録および写真撮影

図面記録に関しては、平断面図はトータルステーションを用いた測量と、一部写真計測を対象遺構や壁面の状況によって使い分けた。作成した図面は、現地での一次記録である〈原図〉として管理し、最終的には情報をデジタルトレースして〈編集図〉を作成した。

写真の撮影は、発掘調査員が行った。山ノ下遺跡では撮影用機材としては、中型(6×7判)一眼レフカメラ、小型(35mm判)一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C以上、有効画素数1220万画素以上)を併用し、対象によって機材を適宜選択しながら行った。また、中判、小型一眼レフカメラに使用したフィルムは、富士フィルム社プロビア100F(カラーリバーサルフィルム)、富士フィルム社ネオパン100ACROS(黒白フィルム)である。平ノ前遺跡ではデジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C以上、有効画素数1220万画素以上)のみ使用した。

デジタル一眼レフカメラによる撮影はRAW及びJPEG形式の同時保存により行った。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影は、写真撮影を行う全ての対象に対して行うとともに、撮影対象や日付



などの撮影内容を記載した写真ラベルも合わせて撮影している。これにより、撮影した画像データを他のフィルムカメラの整理、検索用資料として使用できるようになり、写真記録管理用の〈写真台帳〉の作成時に有用だけでなく、効率的な写真の管理と活用が可能となっている。

#### 4 出土遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、取上番号を通し番号とし、遺物取上カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物カードの記載項目と内容は以下のとおりである。

<b>遺跡名</b>	「山ノ下遺跡18」と記載。「18」は2018年度に調査を実施したことを示す。平ノ前遺跡は「平ノ前遺跡A 1区19」「平ノ前遺跡P 3区19」と記載。「A 1区」「P 3区」は地区名、「19」は2019年度に調査を実施したことを示す。
<b>地区名</b>	遺物の取り上げは、10m×10mのグリッドを基本とし、第Ⅰ～Ⅳ区画で構成される区割を記載した(第1章第3節参照)。
<b>層位名</b>	遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。
<b>遺構名</b>	遺物が帰属する遺構の名称を記載した。
<b>取上No.</b>	取り上げ順に通し番号を記載した。
<b>出土年月日</b>	検出日ではなく、取り上げ日を記載した。
<b>図面</b>	遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。
<b>備考</b>	特記事項を記載した。
<b>時代・時期</b>	取り上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。
<b>種別</b>	土器や石器など素材によって大別される遺物の種別を記載した。
<b>その他</b>	上記の記載項目とは別に、取上時に座標値が記録されたものについては、遺物取上カードのメモ欄に座標値を記載した。

### 第3項 出土遺物の整理

出土遺物については、現地で取り上げ後、財団調査室に持ち帰って以下のような整理作業を行った。

**土器・土製品** 調査終了後に洗浄、接合、注記、復元及び実測を行った。器種及び形状が判明ないし復元できる個体を主な実測の対象とした。なお、貿易陶磁については、山本信夫氏の調査指導を賜り、平成28年度調査分を合わせ分類と集計作業を実施している(第6章第2節)。須恵器や瓦質土器は、橋本久和氏に調査指導をいただいている。また、中世土器全般を対象として中世土器研究会による「山ノ下遺跡出土土器検討会」が令和元年6月22日、23日に開催され、検討会での指摘事項や教示内容を観察表や実測図に反映させている。

**石器** 調査終了後に洗浄、接合、注記、実測を行った。本調査の出土品は、器種や用途が判明できるもののほか、使用痕が明瞭な個体を実測の対象とした。

**木製品** 調査終了後に洗浄を行った。出土した木製品は柱根や杭等であり、一部について自然科学分析(放射性炭素年代測定、樹種同定)を業者に委託した。

**金属器** 錆等の付着物を除去した。錫製品については蛍光X線分析による非破壊調査を業者に委託した。

**写真撮影** デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズフルサイズ)で撮影を行った。

**保管** 図面及び写真の記録類、出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行った。



写真5 整理作業 (土器注記)

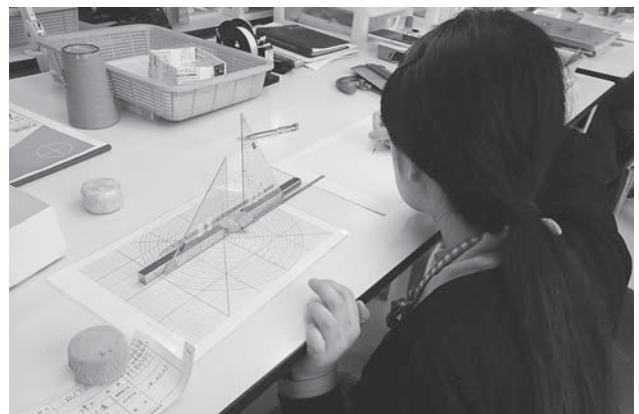


写真6 整理作業 (土器実測)



写真7 整理作業 (遺構図編集)



写真8 整理作業 (遺物トレース)

## 第2章 遺跡の位置と環境

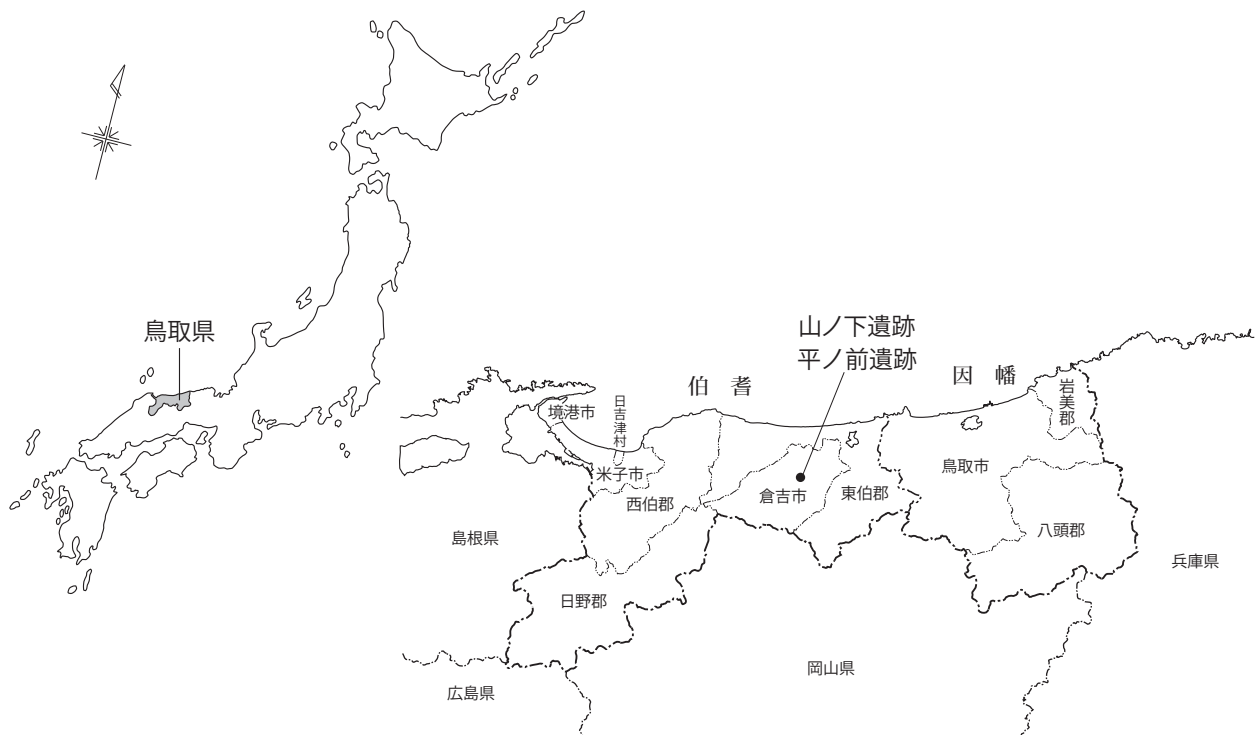
### 第1節 遺跡の立地と地理的環境

鳥取県は中国地方の北東部に位置し、東は兵庫県、西は島根県と広島県、南は岡山県に接している。県域は東西約125km、南北約62kmと東西に長い形状をなし、面積は約3,507km<sup>2</sup>を測る。県域は鳥取市、倉吉市、米子市を中心とする東部、中部、西部の3つの地域に分けられる。このうち、倉吉市は周囲は東伯郡と日野郡に接するとともに、南側は岡山県と直接県境を接している。平成17年に旧関金町と合併し面積約272km<sup>2</sup>、人口約4万8千人を有す県中部の中心市である。

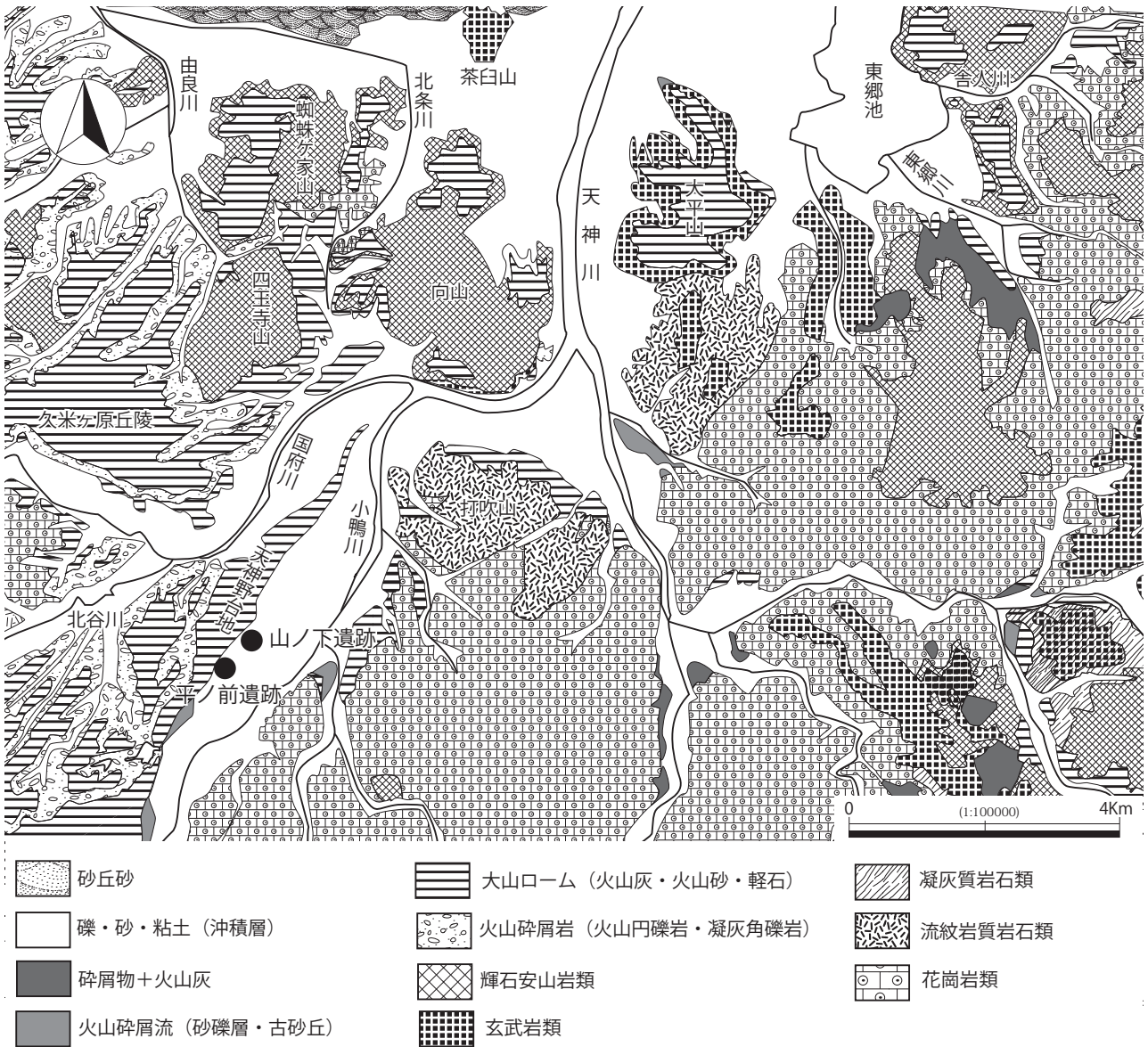
倉吉市東部には、東伯郡三朝町の津黒山(標高1,118m)に源を発する一級河川である天神川が流れており、三徳川や倉吉市西部の小鴨川などの支流と合流しながら北流し、日本海に注いでいる。小鴨川は烏ヶ山(標高1,448m)に源を発し、北東側に流れながら国府川と合流しその後東流して天神川と合流する。これら河川の流域には平野が形成され、市街地や耕作地が広がっている。

山ノ下遺跡は倉吉市小鴨字戸塚・山ノ下及び上古川字北田に、平ノ前遺跡は同市上古川字平ノ前に所在する。鳥取県の旧国名は東部を因幡国、中西部が伯耆国に当り、山ノ下遺跡は伯耆国旧久米郡の郡域となる。いずれも、天神川の支流である小鴨川中流域左岸の河岸段丘上にあり、天神野台地と通称される丘陵下に立地している。

遺跡西側に広がる天神野台地は、大山噴出物によって大山の東側に形成されたなだらかな丘陵台地で、表層はクロボクが発達している。明治から昭和にかけての開墾により、水田や果樹園の広がる農地へと変貌を遂げた丘陵である。小鴨川中流域の河岸段丘上では、古くから水田耕作が行われ、昭和39～45年にかけて圃場整備が行われ、周辺は水田などの耕地に利用されている。



第7図 鳥取県と遺跡の所在地



第8図 遺跡周辺の地質環境

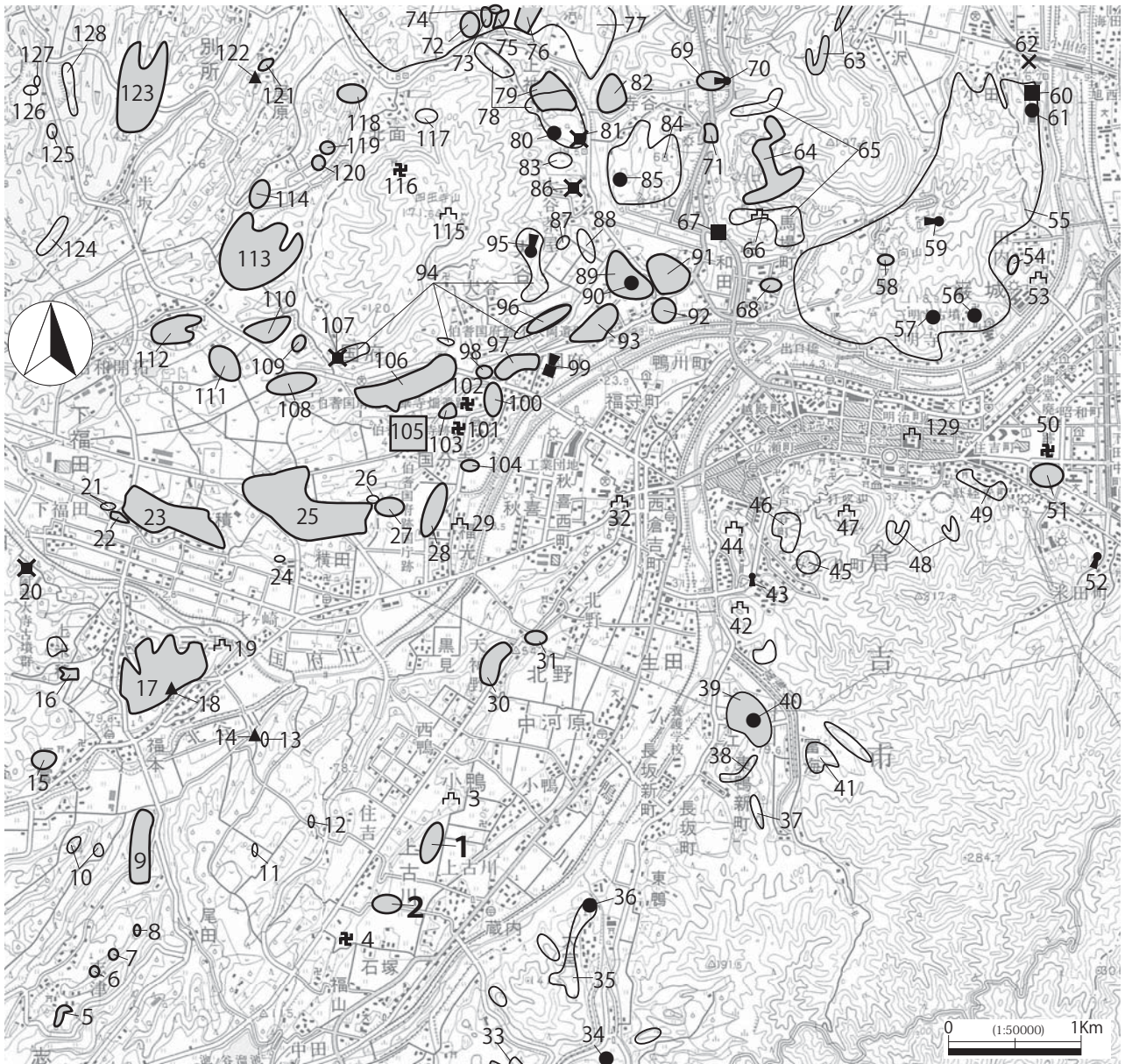
## 第2節 歴史的環境

### 【旧石器時代】

倉吉市域では旧石器時代の様相がわかる遺跡はほとんど無いが、中尾遺跡(96)で黒曜石製と安山岩製のナイフ形石器が各1点、長谷遺跡(58)で安山岩製ナイフ形石器が1点、野津三第1遺跡からは黒曜石製のナイフ形石器と錐が各1点、安山岩製のナイフ形石器2点と彫器と搔器各1点を含む石器群、上神51号墳の下層から黒曜石製の細石刃石核がいずれも原位置から遊離した状態で出土している。なお、今回調査を行った山ノ下遺跡(1)からも旧石器の可能性のある玉髓製の剥片が2点が遊離した状態で出土している。

### 【縄文時代】

倉吉市に限らず鳥取県内において縄文時代草創期の土器は見つかっていないが、尖頭器あるいは有



- |   |        |   |          |   |       |   |        |   |      |
|---|--------|---|----------|---|-------|---|--------|---|------|
| ○ | 集落遺跡   | ● | 主要な前方後円墳 | ■ | 主要な方墳 | ✕ | 主要な墳丘墓 | ∩ | 横穴墓群 |
| ○ | 古墳群    | ■ | 主要な前方後方墳 | □ | 城館跡   | ✕ | 出土地    | ⊕ | 寺院跡  |
| ▲ | その他の遺跡 |   |          |   |       |   |        |   |      |

- 1 山ノ下遺跡 2 平ノ前遺跡 3 市場城跡 4 石塚廃寺跡 5 宮ノ前遺跡 6 大平遺跡A地区 7 大平遺跡B地区 8 尾田小鑄物師遺跡  
 9 津田峰遺跡 10 福富古墳群 11 三江向野古墳群 12 後口野古墳群 13 三江小坂ノ上古墳群 14 菅ヶ谷口たたら 15 沢谷兜山遺跡  
 16 後中尾遺跡 17 三江遺跡 18 上野遺跡 19 三江城跡 20 阿弥大寺遺跡・墳丘墓群 21 下福田古墳群 22 下米積船沖遺跡  
 23 下米積乳母ヶ谷遺跡 24 下米積1・2号墳 25 国府跡西側遺跡群(福田寺遺跡・横田矢戸遺跡) 26 国分寺古墳群 27 嶋ノ掛遺跡 28 今倉遺跡  
 29 今倉城跡 30 小鴨道祖神遺跡 31 ドウドウ平遺跡 32 北の城跡 33 鴨河内古墳群 34 家ノ後口1号墳 35 大宮古墳群 36 大宮古墳  
 37 東鴨古墳群 38 下大江古墳群 39 下西野遺跡 40 山際1号墳 41 富海古墳群 42 赤磐城跡 43 芸才寺1号墳 44 四十二丸城跡  
 45 高野古墳群 46 倉古古墳群 47 打吹城跡 48 湊町古墳群 49 駄経寺古墳群 50 大御堂廃寺跡 51 松ヶ坪遺跡 52 海又1号墳 53 田内城跡  
 54 養水古墳群 55 向山古墳群 56 三明寺古墳 57 向山142号墳 58 長谷遺跡 59 向山6号墳 60 宮ノ峰19号墳 61 宮ノ峰21号墳  
 62 小田銅鐸出土地 63 下張坪遺跡・古墳群 64 夏谷遺跡 65 定光寺古墳群 66 和田城跡 67 中峰1号墳 68 平ル林遺跡 69 若林遺跡  
 70 若林3号墳 71 大平遺跡 72 クズマ遺跡 73 西山遺跡・古墳群 74 谷畑遺跡 75 桜木遺跡 76 上神宮ノ前遺跡 77 上神古墳群  
 78 原谷古墳群 79 猫山遺跡 80 上神大將塚古墳 81 柴栗墳丘墓 82 西前遺跡・古墳群 83 大谷茶屋古墳群 84 寺谷古墳群 85 屋喜山9号墳  
 86 三度舞大將塚墳丘墓 87 小林古墳群 88 イザ原古墳群 89 沢べり遺跡・古墳群 90 沢べり5・7号墳 91 茅林遺跡 92 東前遺跡  
 93 不入岡遺跡 94 大谷古墳群 95 大谷大將塚古墳 96 中尾遺跡 97 擲塚遺跡 98 打塚遺跡 99 国分寺古墳 100 宮ノ下遺跡 101 伯耆国分寺跡  
 102 法華寺畑遺跡 103 国分寺北遺跡 104 河原毛田遺跡 105 伯耆国庁跡 106 向野遺跡 107 大谷後口古墳丘墓 108 中峯遺跡 109 白石遺跡  
 110 遠藤谷峯遺跡 111 国府大沢前遺跡 112 国府大沢遺跡 113 両長谷遺跡 114 コザンコウ遺跡 115 大谷城跡 116 四王寺跡 117 北面古墳群  
 118 イキス遺跡 119 取木遺跡 120 一反半田遺跡 121 尾原宮ノ峰遺跡 122 伯尾山窯跡 123 鋤大山遺跡 124 勝負谷古墳群 125 郊家平古墳群  
 126 二太子塚古墳群 127 駄道東古墳群 128 頭根後谷遺跡・古墳群 129 山名氏関連遺跡

第9図 周辺の遺跡

茎尖頭器が大山北麓を中心に約50点見つかり、倉吉市内でも長谷遺跡と笹ヶ平遺跡で安山岩製の尖頭器、ドウ々平遺跡で黒曜石製の有茎尖頭器が各1点発見されている。

早期では取木遺跡(119)で竪穴建物と平地建物などと共に押型文土器が、野口遺跡からも礫群と押型文土器が見つかり、

後期には津田峰遺跡(9)から石囲炉を持つ竪穴建物が、横峯遺跡から地床炉を持つ竪穴建物が見つかり、坂根平遺跡でも後期後半土器が散見される。

晩期には松ヶ坪遺跡(51)から大量の土器とともに配石遺構と甕棺墓、坂根平遺跡では包含層から多数の突帯文土器が見つかり、

また、時期の特定は困難ではあるが、落とし穴が中尾遺跡で127基、長谷遺跡で61基、横谷遺跡群で47基、夏谷遺跡(64)で28基、下西野遺跡(39)で27基、鋤大山遺跡(123)、頭根後谷遺跡(128)、イキス遺跡(118)、向野遺跡(106)、小鴨道祖神遺跡(30)などからも各10基以下であるが検出されている。なお、山ノ下遺跡からは19基確認されている。

## 【弥生時代】

前期では、中尾遺跡で屋内貯蔵穴を4基伴った平地式建物や竪穴建物が、イキス遺跡や尾原宮ノ峰遺跡(121)で土壙墓群が見つかった。

中期になると遺跡数も増加し後中尾遺跡(16)、東前遺跡(92)、国府跡西側遺跡群(福田寺遺跡25)、遠藤谷峯遺跡(110)などの集落が確認されている。後中尾遺跡では、環濠が検出されている。東前遺跡では、中期中葉の玉作工房である竪穴建物3棟内から碧玉製管玉の未成品や石針・砥石などの工具類が多数出土、市内小田で中期から後期にかけての袈裟襷文銅鐸2口が発見されている。

後期になると、集落遺跡が丘陵上に増加し、服部遺跡、夏谷遺跡、観音堂遺跡、大沢前遺跡(111)、中峯遺跡(108)、白市遺跡(109)、中尾遺跡、沢ベリ遺跡(89)、コザンコウ遺跡(114)、鋤大山遺跡などが知られている。中でも、中峯遺跡からは全国的にも珍しい鳥形スタンプ文が施された土器や阿弥大寺遺跡(20)とともに分銅形土製品が出土しており、山陽地方との交流が窺われる。

また、後期以降阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群、柴栗墳丘墓(81)、三度舞大将塚墳丘墓(86)、大谷後口谷墳丘墓(107)などの墳丘墓が造られており、古墳時代への胎動が窺われる。

## 【古墳時代】

倉吉市内の前期～中期前半代の古墳には、夔鳳鏡や三角縁神獸鏡を含む3面の舶載鏡や鉄製農耕具などが出土した全長約60mの前方後方(円)墳で東伯耆最古級の首長墳である国分寺古墳(99)、仿製三角縁神獸鏡を含む2面の鏡や鋤形石、琴柱型石製品などが出土した径約30mの円墳である上神大将塚古墳(80)、全長50mと推定されている前方後円墳の大谷大将塚古墳(95)や、1辺27mの方墳である宮ノ峰19号墳(60)、径約30mの円墳である宮ノ峰21号墳(61)、竪穴式石槨を内包する中峰1号墳(67)などがある。

この時期の集落には、夏谷遺跡、西山遺跡(73)、桜木遺跡(75)、猫山遺跡(79)、西前遺跡(82)、擲塚遺跡(97)などがある。

中期後半代には中小規模の古墳が古墳群を形成するようになり、下張坪古墳群(63)、夏谷古墳群、沢ベリ古墳群、イザ原古墳群(88)、西山古墳群(73)、頭根後谷古墳群(128)などが知られている。ま

た、中期から後期初頭にかけて、形象埴輪や器財形埴輪が出土しており、不入岡3号墳から家形埴輪、沢ベリ5・7・8・9号墳(90)から男女各1体の人物埴輪や家形埴輪など、向山142号墳(57)から鶏や鹿形埴輪、西山2・8号墳から人物・馬形埴輪が出土している。

この時期の集落には、夏谷遺跡、不入岡遺跡(93)、頭根後谷遺跡などがあり、このうち、不入岡遺跡では作り付け竈を持つ中期の竪穴建物や渡来系軟質土器が出土し、夏谷遺跡では大壁建物が見つかるなど、国府川下流左岸域で渡来系文物が注目される。

後期には横穴式石室が盛んに造られるようになる。小鴨川中流域右岸に位置する径約30mの円墳の大宮古墳(36)は、倉吉市域で最も早く横穴式石室を導入したもので、中北部九州の影響が窺われる。その後この流域では、家ノ後口1号墳(34)、山際1号墳(40)、堀2号墳など形骸化した同様の石室を持つ古墳が造られる。首長墳にも横穴式石室が採用され、床面に仕切石によってコ字形の屍床が設けられている全長約40mの前方後円墳である向山6号墳(59)、切石を用いた大型の横穴式石室に石屋形を設けている三明寺古墳(56)、奥壁・両側壁・天井とも精美的な切石を組み合わせた横穴式石室を持つ福庭古墳がある。横穴式石室を内包する古墳群には、郊家平古墳群(125)、向山古墳群(55)、養水古墳群(54)、上神古墳群(77)などがある。

また、野口1号墳からは、装飾子持壺付装飾器台や七連坏付装飾器台を含む多量の須恵器、上野遺跡(18)では25個体の子持壺形須恵器、脚付子持壺形須恵器、谷畑遺跡(74)からは人形・動物形・鏡形土製品などの多様な祭祀遺物が大量に出土しており、いずれの出土遺物も国指定文化財となっている。

この時期の集落には、西山遺跡、桜木遺跡などがあるが、調査例は少ない。

## 【飛鳥・奈良時代】

古代の倉吉地域は、『延喜式』によれば6郡からなる伯耆国に属し、そのうち河村郡・久米郡の一部がその領域となる。奈良時代になると久米郡に伯耆国庁(105)や伯耆国分寺(101)、伯耆国分尼寺(法華寺畑遺跡)(102)が相次いで造られ、伯耆国の中心地であったことがわかる。伯耆国庁はこれまでの発掘調査によって四時期の変遷が認められている。伯耆国分尼寺(法華寺畑遺跡)は、国庁に付属する官衙の可能性も指摘されており議論となっている。また、近接して位置する不入岡遺跡からは大規模な掘立柱建物群が発見されており、官衙から倉庫群へ転換されたものとみられ、伯耆国直轄の税の集積施設と考えられている。

倉吉市域には、伯耆国分寺や国分尼寺以外にも古代寺院が建立されている。白鳳時代に創建された大御堂廃寺跡(50)は、観世音寺式の伽藍配置をもつ山陰最大級の寺院跡で、瓦類や土器類をはじめ金属製品、木製祭祀具など豊富な遺物が出土している。出土した墨書土器から「久米寺」と呼称されたものと推定される。大原廃寺跡は変則的な法起寺式の伽藍配置で、白鳳期の寺院跡では山陰最大級の塔心礎が出土している。奈良時代の寺院跡では、塔心礎と金堂跡と思われる基壇が残る四天王寺式の伽藍配置と推定される石塚廃寺跡(4)、礎石建物等が見つかった藤井谷廃寺跡が存在する。

この時期の集落には国分寺北遺跡(103)、嶋ノ掛遺跡(27)、向野遺跡、国府跡西側遺跡群(横田矢戸遺跡)、擲塚遺跡、平ル林遺跡(68)、西前遺跡、小鴨道祖神遺跡、観音堂遺跡などがあり、竪穴建物と掘立柱建物から構成されている。このうち、国分寺北遺跡・嶋ノ掛遺跡では、規則的な建物配置が認められることから、国庁に関連する施設の可能性が指摘されている。また、河原毛田遺跡(104)で

は約15mの間隔で平行する溝が見つかっており、古代山陰道の可能性が指摘されている他、向野遺跡でも道路遺構が検出されている。

この他、長谷遺跡では横穴式石室を模した石槨内に土師器製蔵骨器2基に男女の火葬骨を納めた火葬墓が見つかっており、律令官人との関連が想定されている。

### 【平安時代】

四王寺山山頂には貞観9(867)年新羅海賊調伏のために建立されたと伝わる四王寺跡(116)が存在する。平安時代には、浄土教信仰が普及し浄土の様子を現世に再現しようとした寺院の造営が行われる。倉吉市内では小鴨川支流の広瀬川上流域に広瀬廃寺が建立される。池の周囲に礎石建物を配置した「臨池伽藍」で、極楽浄土を表現したものと考えられている。浄土教信仰の一因に末法思想が知られるが、それに伴い経塚が全国各地で造成される。大日寺経塚では、延久3(1071)年と刻まれた瓦経が出土している。また、大日寺遺跡群では礎石建物や階段跡及び道路跡及び整地層などが検出され、多くの寺坊を有した大規模な寺院であったことが指摘されている。

集落遺跡には、向野遺跡、宮ノ下遺跡(100)、擲塚遺跡、ドウ々平遺跡(31)などがあり、9世紀代の竪穴建物、土坑やピットとともに11～13世紀の遺物が出土している。打塚遺跡(98)からは12世紀代の墳丘を持つ墳墓が出土している。

### 【鎌倉・室町時代】

鎌倉時代には、伯耆国庁の在庁官人と考えられる小鴨氏が、岩倉城を居城として一帯に勢力を拡げ、後に尼子氏や毛利氏の侵攻をうけて城の争奪戦を繰り広げた。発掘調査は未実施であるが、郭、土塁、堀切等が確認されている。岩倉城の出城で小鴨氏の家臣である岡田某氏が拠ったとされるのが市場城(3)で、空堀や土塁がよく残っている。

市場城に近接する山ノ下遺跡では13世紀の集落が見つかるほか、山ノ下遺跡の南西約430mに位置する平ノ前遺跡(2)においても同時期の掘立柱建物2棟が検出されている。

室町時代初期には、伯耆守護職にあった石橋氏から代わった山名氏が、田内城(53)と打吹城(47)を居城としながら守護大名へ発展していった。その後尼子氏と南条氏が台頭するまで山名氏が隆盛を誇り、倉吉市内では、山名寺や大岳院など山名氏に関わる旧跡が現在も残っている。山名氏関連遺跡(129)として、大岳院開山当時に比定される上層遺構群、伯耆守護所に関連する下層遺構群が、良好な遺物を伴って検出されている。また、小鴨道祖神遺跡では火葬骨を埋納した中世墓や溝で区画した墓も見つかる。

### 【安土桃山時代】

安土桃山時代においても、戦乱に関わる遺跡が知られている。今倉城(29)は、天正7年(1579)吉川元春によって築城された小鴨城に対する向城といわれ、土塁・堀跡がよく残っている。近接して今倉遺跡(28)があり、15・16世紀ごろと考えられる掘立柱建物が27棟確認された。

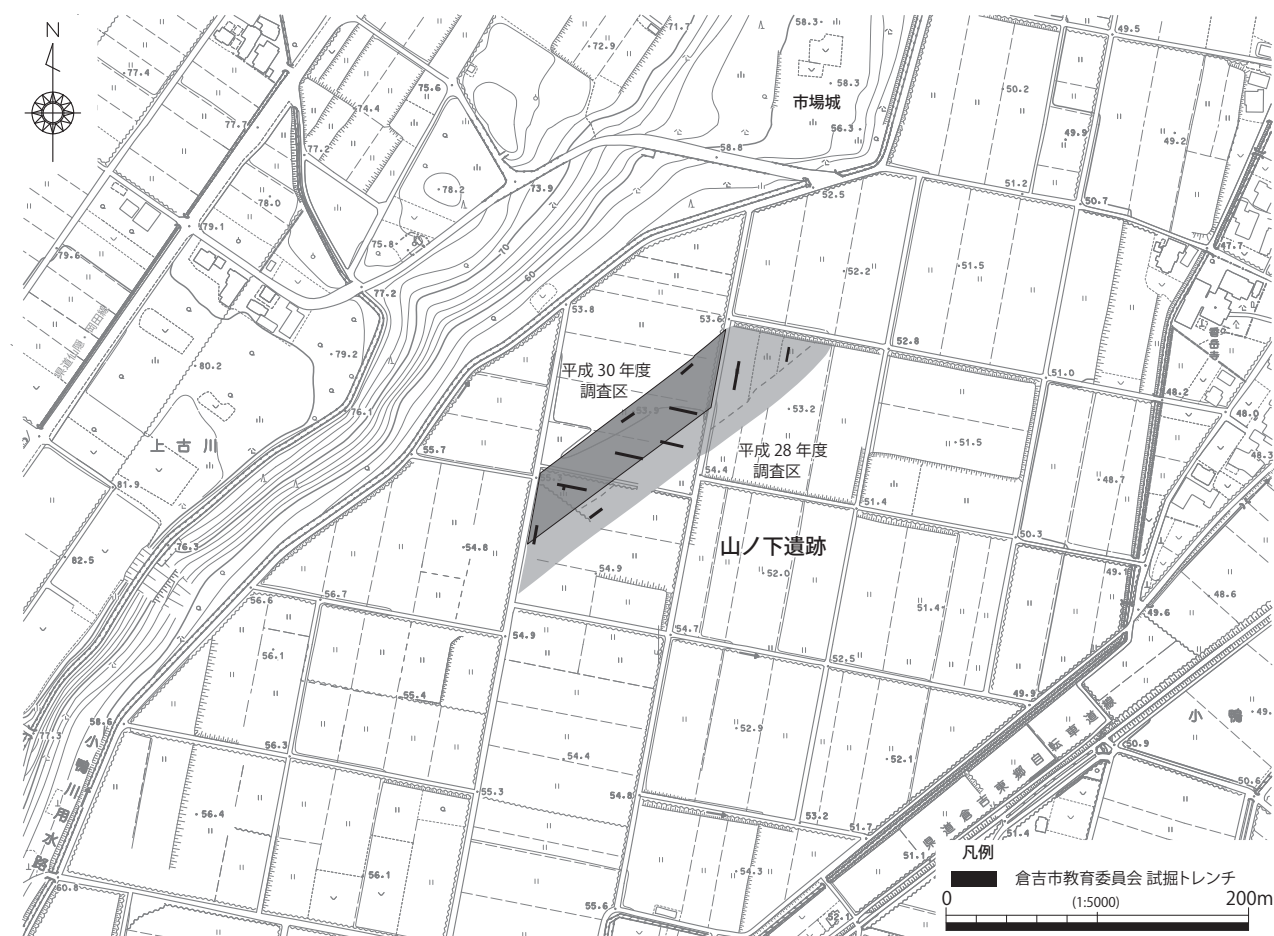


## 第3章 山ノ下遺跡の調査成果

### 第1節 概要

山ノ下遺跡は小鴨川左岸の河岸段丘上に立地し、遺跡の西側には天神野台地が近接する(第10図)。現況は水田または畑が営まれ、調査地内は圃場整備等による削平を著しく受けている。

平成30年度に実施した調査では、遺構検出面を3面(第1～3面)確認した。平成28年度での検出面との対応模式図を第13図に示す。遺構は中世後期以降の溝及び耕作関連遺構(747溝群、3035耕作溝群)、平安時代後期から鎌倉時代に帰属する掘立柱建物5棟、溝5条(666溝、3010a～d溝)、土坑8基(3015・3056・3057・3065・3066・3259・3268・3270土坑)、弥生時代中期前葉の溝2条(250溝a・b)、土坑1基(3186土坑)、縄文時代の落とし穴11基、時期不明の土坑2基(3223・3234土坑)、ピット1基(3286ピット)等を検出している。今回の調査で検出した遺構は平成28年度調査検出遺構の続きも含む<sup>(註1)</sup>。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、国産陶器、貿易陶磁器、土製品、石器、鉄関連遺物等が出土している。



第10図 調査区周辺の地形図

## 第2節 基本層序

基本層序は、平成28年度調査で設定した東西トレンチ2土層断面(B-B')の延長線上に土層観察ベルト設定し、写真記録並びに断面図作成を行った(第11・12図)。なお南北方向の堆積状況については、平成28年度調査報告のなかで掲載しているので参照願いたい<sup>(註2)</sup>。本調査区は天神野台地の崖下線から約100m東に位置し、北と北西に向けて緩やかに下がる地形となる。圃場整備等により本調査区の北西から北及び南西端は大きな削平を受けていた。削平は最も深い部分で地山であるローム層(Ⅷ層)まで及び、現在の耕作土を除去するとローム層が露出する場所も存在していたため、調査区を通した堆積状況の把握には苦慮している。

### 【註】

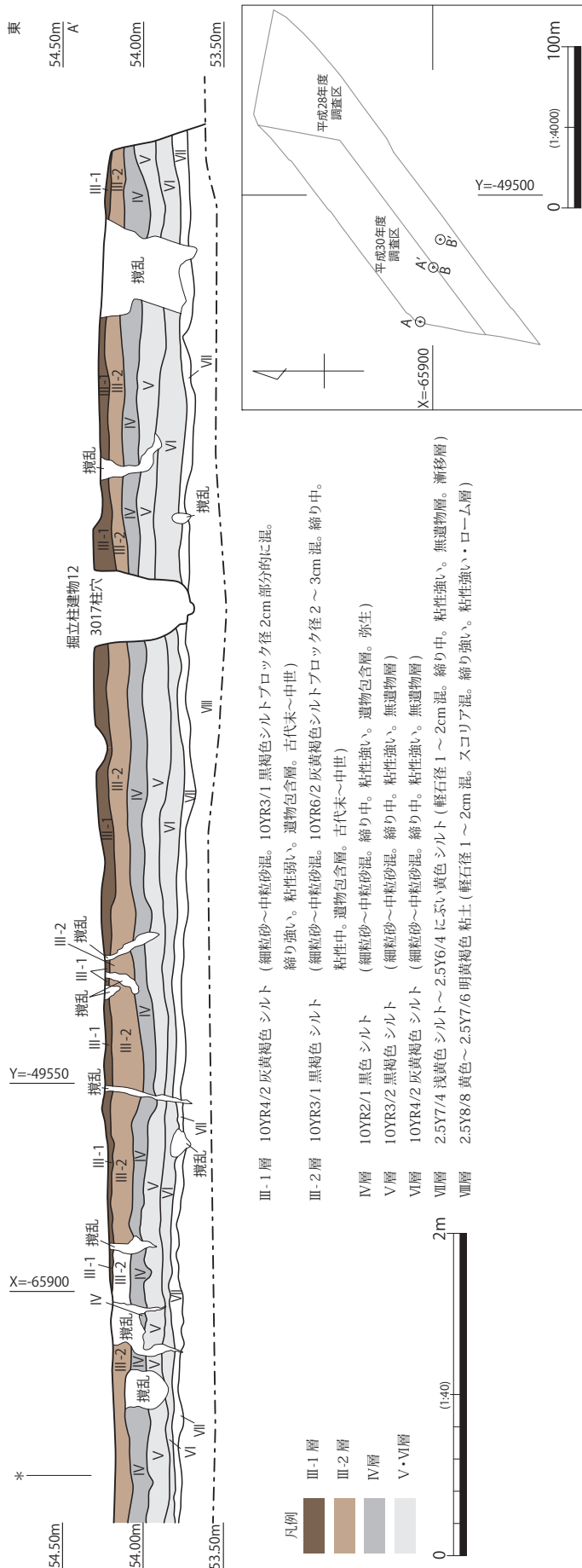
- (1) 公益財団法人鳥取県教育文化財団2018『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書120
- (2) 同上

### 1 基本層序

- I層** 現代の耕作土及びその床土である。圃場整備時に造成されたものであり、重機による除去を行った。
- II層** 圃場整備以前に存在した旧耕作土及びその直下に堆積した鋤床層と考えられる層である。本層は調査区全域に安定して堆積するのではなく、平成28年度調査により北東部を中心としたⅢ層を切り込む遺構埋土として確認されている。平成30年度調査地では明瞭に確認はできなかった。
- Ⅲ-1層** 調査区南東部付近に堆積し、灰黄褐色を呈する細粒～中粒砂混じりのシルト層を基本とする。土器小片や炭化物ブロックを混入する締まりが強い堆積であり、人為的な堆積と考えられる。本層堆積範囲は調査地で最も標高が高く、11世紀後半から12世紀の遺物が一定量出土する。本層上面を第1遺構面とする。
- Ⅲ-2層** 調査区北西から南東部付近に堆積し、黒褐色を呈する細粒～中粒砂混じりシルト層である。11世紀後半から12世紀の遺物が一定量出土する。
- IV層** 黒色を呈する細砂～中粒砂混じりシルト層。後世の削平のため遺存状況は悪い。北東-南西方向に帯状に堆積しており、やや窪んだ凹地にのみ遺存したものと考えている。他の層位と比較し砂質が強く、氾濫時にオーバーフローした堆積の可能性が考えられる。弥生時代中期の遺物を包含する。本層上面を第2遺構面とする。
- V層** 黒褐色を呈する細粒～中粒砂混じりシルト層。色調はIV層に比べやや明るく、粘性が強い。調査区北東端及び南西端を除き、調査地全域に安定して堆積が確認された。本層上面で縄文時代の落とし穴や弥生時代中期前葉に帰属する遺構を検出しており、本層はそれ以前に形成されたものと考えられる。本層上面を最終遺構面とし第3遺構面とした。本層以下、無遺物層である。
- VI層** 灰黄褐色を呈する細粒～中粒砂混じりシルト層。調査区北東端及び南西端を除き、調査地全域に堆積が確認された。



第11図 東西トレンチ土層断面図(1)



第12図 東西トレンチ土層断面図(2)

**VII層** 浅黄色～にぶい黄色シルトを基本とし、VIII層由来の軽石やシルトの小ブロックが混じる漸移層である。なお、遺構の認識漏れを防ぐため、一部本層上面において遺構の最終確認を行っている。

**VIII層** 黄色～明黄褐色粘土をからなるローム層である。調査区北東端及び南西端では直上に造成土が堆積する状況が確認されている。

## 2 遺構面

平成28年度調査では6面の遺構面を確認しているが、平成30年度調査では調査地内の削平や攪乱が著しく3面の遺構面の確認に留まった。

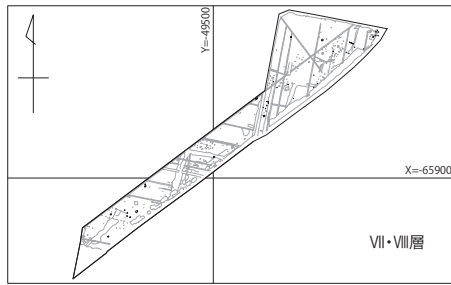
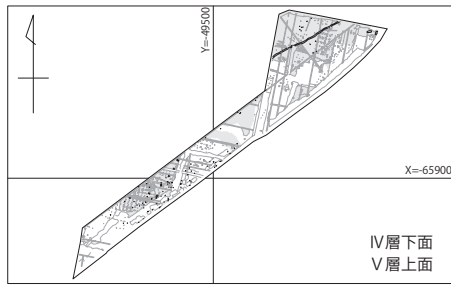
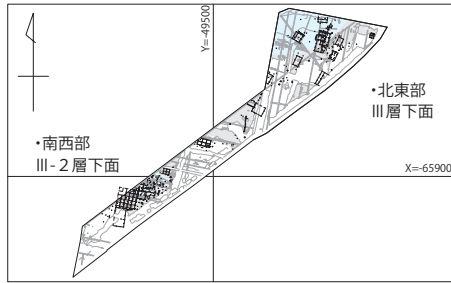
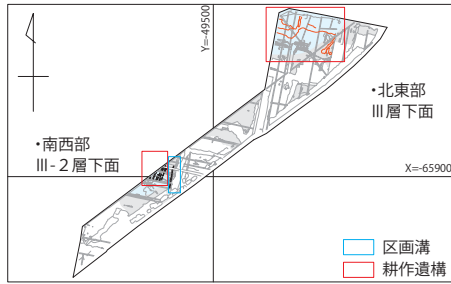
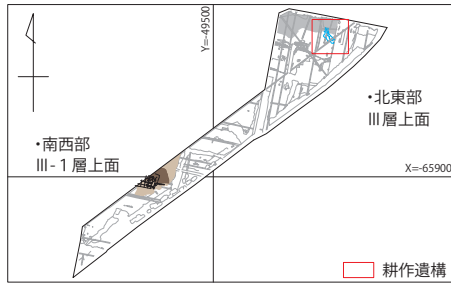
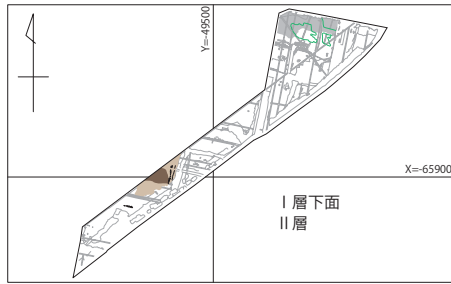
先述の通り、平成30年度調査での第1遺構面はIII-1層上面となり古代末から近世の遺構で構成されるが、中世後期以降の遺構群を第1遺構面新段階として別図としている。この新段階は平成28年度調査の第1～3遺構面に対応する。

それ以前の古代末から中世前期の遺構群の検出面を第1遺構面古段階とし、平成28年度調査の第2～4遺構面に対応する。

第2遺構面はIV層上面を検出面とし、古代末から中世前期の遺構群から構成される。平成28年度調査の第3・4遺構面に対応する。

第3遺構面はV層上面を検出面とし、弥生中期以前の遺構により構成される。平成28年度調査の第5・6遺構面が対応する。

平成28年度 調査区



第1遺構面  
Ⅲ層  
Ⅲ-1層  
Ⅲ-2層

第2遺構面  
Ⅲ層  
Ⅲ-1層  
Ⅲ-2層

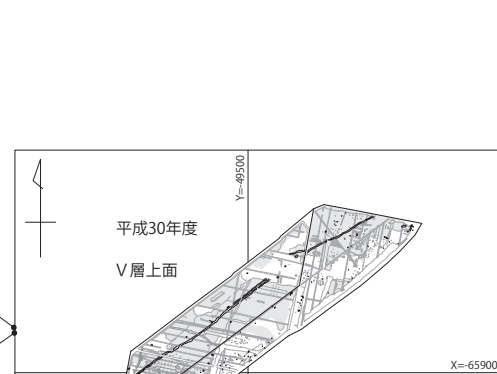
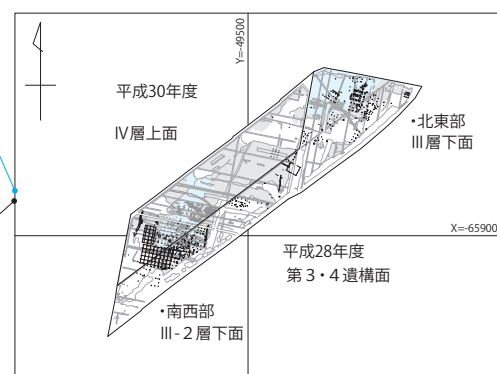
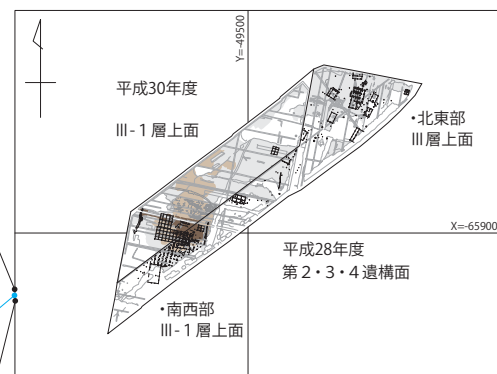
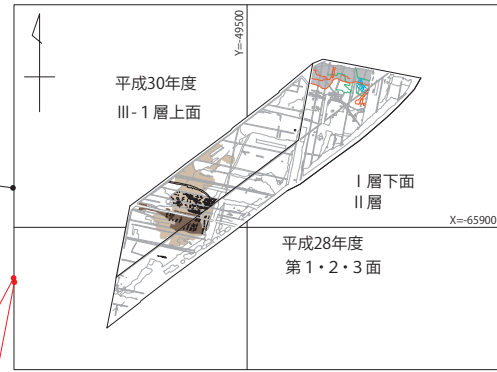
第3遺構面  
Ⅳ層  
Ⅴ・Ⅵ層

第4遺構面  
Ⅳ層  
Ⅴ・Ⅵ層

第5遺構面  
Ⅴ・Ⅵ層

第6遺構面  
Ⅴ・Ⅵ層

平成28・30年度 調査区



第1遺構面  
新段階  
Ⅲ層  
Ⅲ-1層  
Ⅲ-2層

第1遺構面  
古段階  
Ⅲ-1層  
Ⅲ-2層  
Ⅴ・Ⅵ層

第2遺構面  
Ⅳ層  
Ⅴ・Ⅵ層

第3遺構面  
Ⅴ・Ⅵ層

耕作遺構は第1遺構面新段階  
区画溝は第1遺構面古段階と第2遺構面

0 (1:5,000) 100m

第13図 平成28・30年度調査遺構検出面对応図

## 第3節 検出した遺構と遺物

### 第1項 第1遺構面の調査

#### 1 概要(第14・21図)

調査区南西部のⅠ層直下、東西約35m、南北約14mのわずかな範囲でⅢ-1層の堆積範囲を確認した。本層上面で検出した遺構及び本層以下で検出した遺構についても、Ⅲ-1層上面で検出した遺構の埋土と類似するものについては第1遺構面として扱うこととした(3022溝等)。掘立柱建物12・20のほか、666溝や耕作関連遺構の747溝群等を検出している。第1遺構面検出遺構の帰属時期は古代末から近世であるが、中世後期から近世の遺構については第1遺構面新段階として別図とした(第14図)。大型建物群を構成する古代末から中世前期は居住地として、耕作痕等からなる中世後期以降は耕作地へと土地利用が変遷していることが明らかになった。掘立柱建物12・20は柱筋が通り、L字型の配置となる。なお、建物を構成しない柱穴やピットは、遺物出土状況や埋土に特色があるもの、または掲載遺物が出土したものを取り上げている。

#### 2 検出した遺構と遺物

##### 3022溝(第15・19図、第1表、図版16・54・87~89・92)

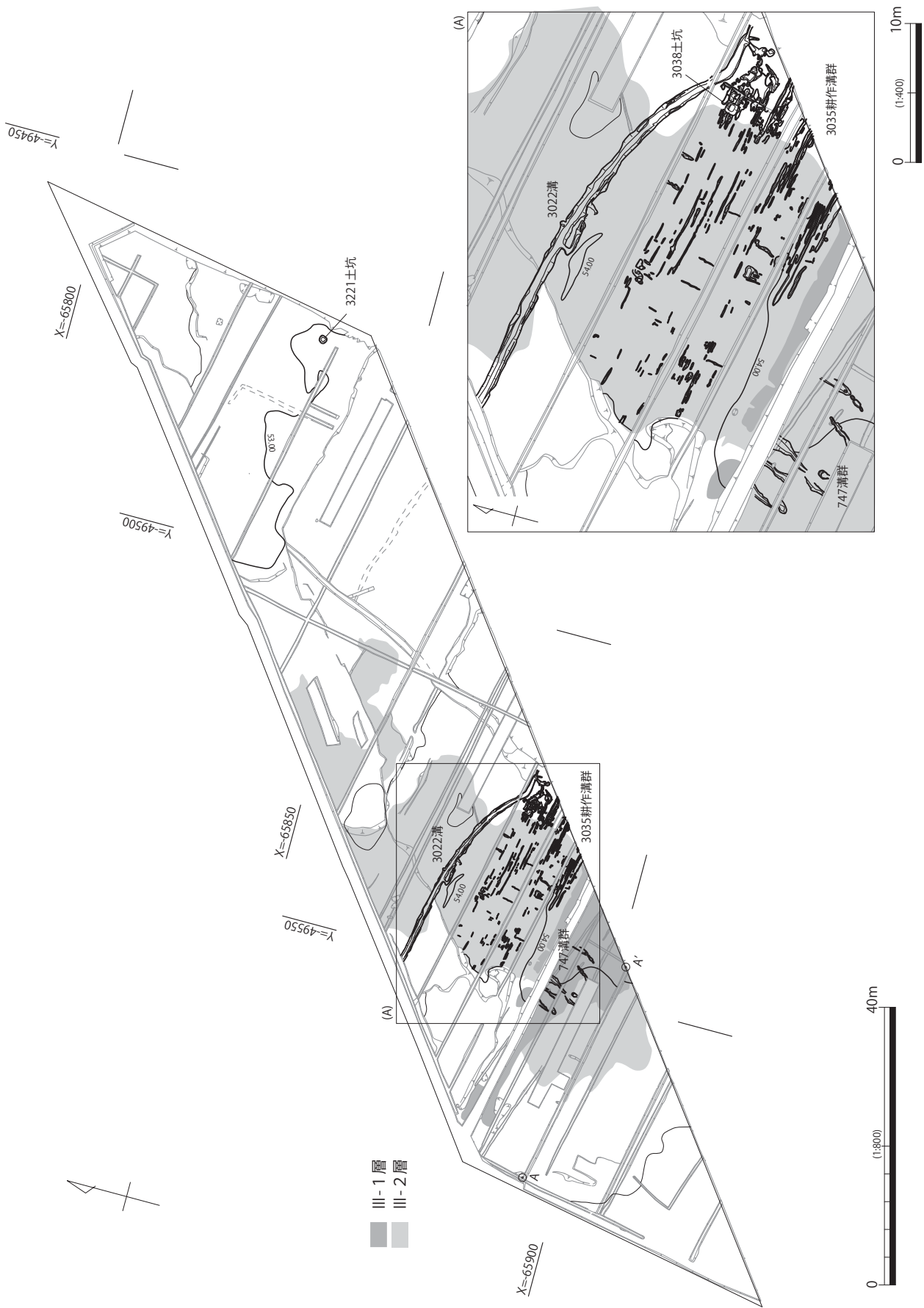
調査区中央9F-7f・8c~8f・9cグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した溝である。主軸方向を西側N-77°-W、南東側N-60°-Wにとり、凸部を北向きにして弓なり状に延びている。南東側は削平のため遺存状況は不良であるが、残存長約34m、幅0.3~1.1m、検出面からの深さは0.35mを測る。埋土は暗褐色から灰黄褐色シルトを基調とし、最下層は砂粒混じりである。底面には長さ5~6m、径0.03~0.05mのマツ属の枝が4本単位で敷設されていた(図版16参照)。調査段階では底面から地下水が湧出する状況が確認された。以上の所見から本遺構は暗渠と推定される。

出土遺物を第19図に示している。Po1は表面に格子状タタキがみられる須恵器甕の体部片である。Po2・3は瓦質土器の鍋である。受け口幅が広く、L字状を呈している。Po4は白磁皿の口縁部で森田D群に比定される。Po5は龍泉窯系青磁碗の口縁部でありI1類に該当する。Po6は国産陶器の壺の肩部であるが産地不明。Po7は常滑焼の甕肩部で押印文がみられる。

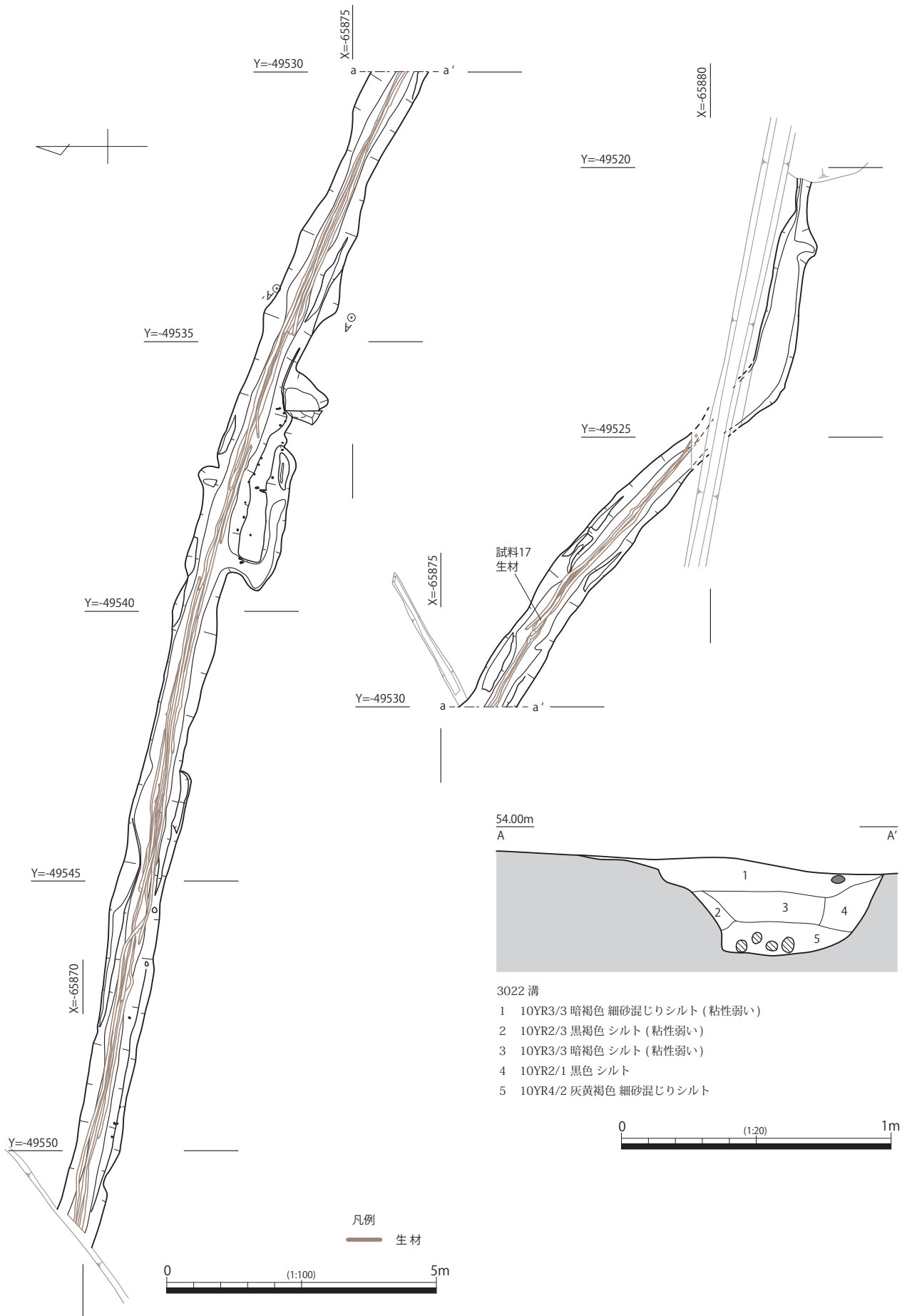
本遺構の時期は、埋土中から近世陶磁器が散見され、敷設された木材(試料17)について樹種同定を行った結果、マツ属と同定されている。また、放射性炭素年代測定を行ったところ、暦年較正年代(2σの確率1位)が151±60calBPが得られていることから、江戸時代以降と考えられる(第5章第1節参照)。

##### 3035耕作溝群(第16・17・19図、第1表、図版14・15・54)

調査区南西9F-8c~8f・9c~9f・10c・10dグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した溝群である。南北約10m、東西約27.5mの範囲において、概ねN-78°-Wを主軸とする幅0.1~0.3mの溝が筋状に検出しており、埋土も共通することから一連の遺構群として判断した。溝は遺存状態が悪く、途中で途切れている部分も認められる。埋土はⅢ-1層に類似した灰黄褐色細粒から中粒砂混じりシルトで、炭化物も散見された。各溝の位置関係と埋土の状況から、本遺構は畑等の耕作痕と考えられる。

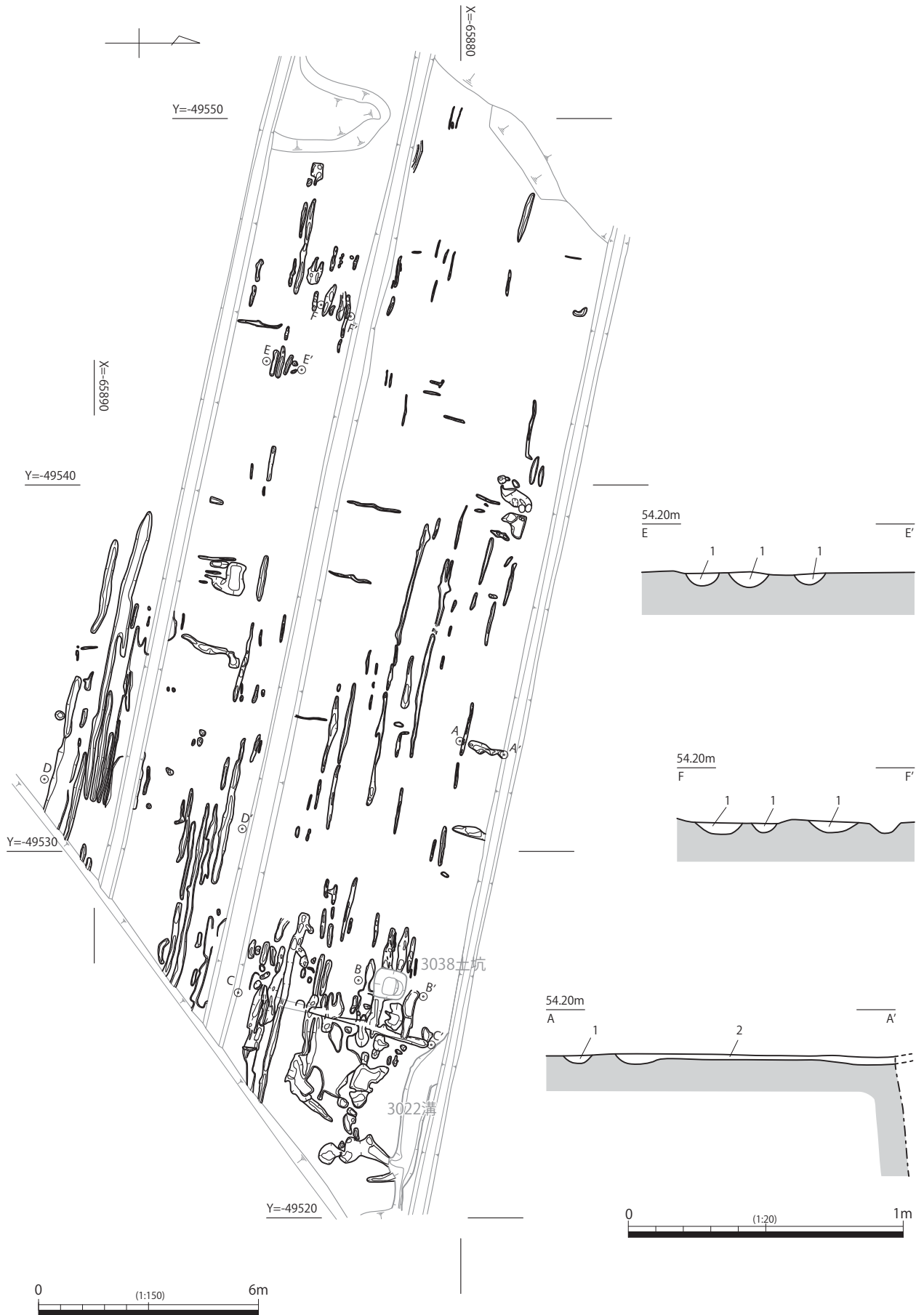


第14図 第1遺構面新段階全体図

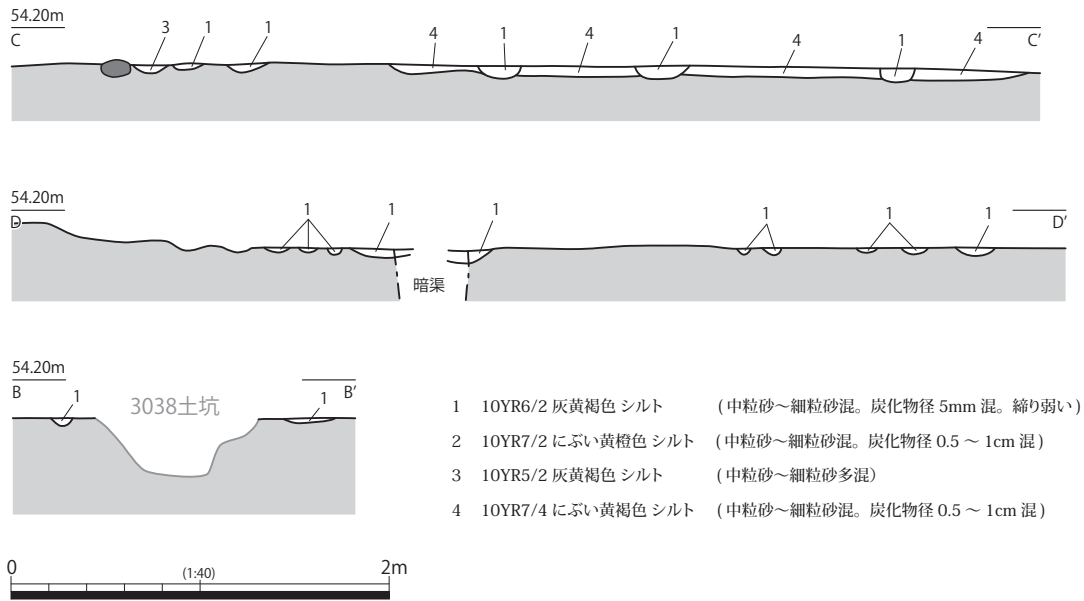


第15図 3022溝





第16図 3035耕作溝群(1)



第17図 3035耕作溝群(2)

出土遺物は、埋土中から手づくね成形の土師器皿Po8が出土している。丸みを帯びた底面から口縁部へ立ち上がり、口縁端部が外反する。

本遺構の帰属時期は、次に述べる747溝群との重複関係及び出土遺物から、13世紀中葉以降と推測される。

747溝群(第18・19図、第1表、図版13・54)

調査区南西9F-10e・10fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した溝群である。南北約5m、東西約10mの範囲で、概ねN-23°-Eを主軸とする6本の溝が並走するように検出しており、埋土も共通することから一連の遺構群と判断した。溝の遺存状態は悪く、途中で途切れている部分も認められる。埋土は主体となるⅢ-2層にⅣ層由来の黒褐色砂混じりシルトが小ブロック状に混在した層であり、Ⅲ-2層とⅣ層が攪拌された状況を示している。このことから畑等の耕作痕と推測される。

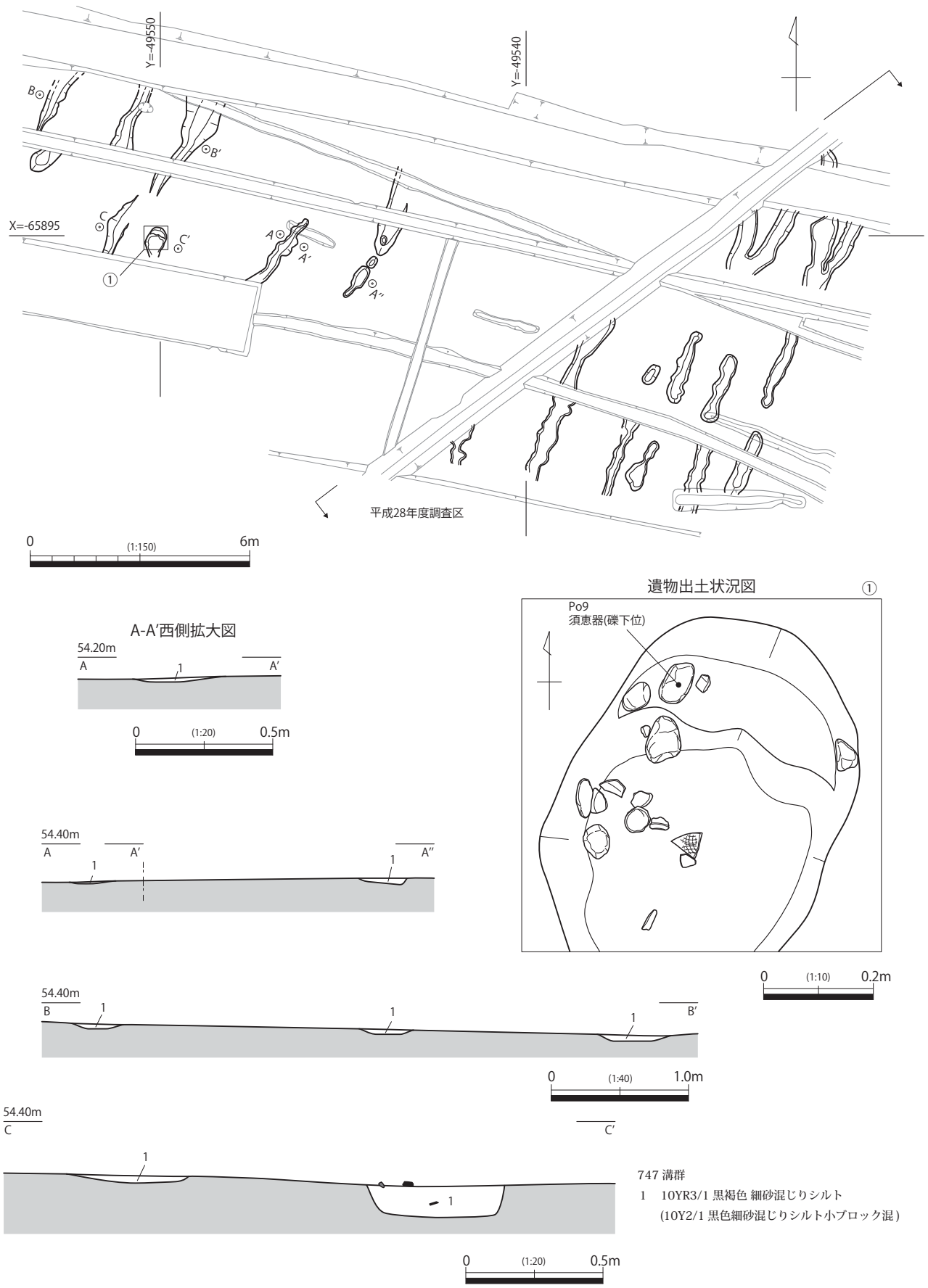
なお平成28年度調査でも隣接地で同遺構が確認されている。平成28年度調査時とは検出面が異なるが、主軸・規模から同一遺構と判断した。

遺物は須恵器甕Po9、土師器甕Po10・11、ミニチュア土器Po12が出土している。Po9は外面がタタキ、内面はナデ調整を施している。Po10・11は口縁部が外反し、体部はほぼ直立する。Po12は口縁下がやや窄み、体部が張る。表面はナデ調整を施し、指オサエの痕跡を残す。弥生土器の混入であろう。

本遺構の帰属時期は、13世紀以降と考えられる。

3038土坑(第20図、第1表)

調査区南西9F-9cグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した土坑である。平面隅丸方形を呈し、断面形は北側がテラス面を設けた二段掘り状、その他は掘鉢状を呈している。規模は長軸0.88m、短



第18図 747溝群

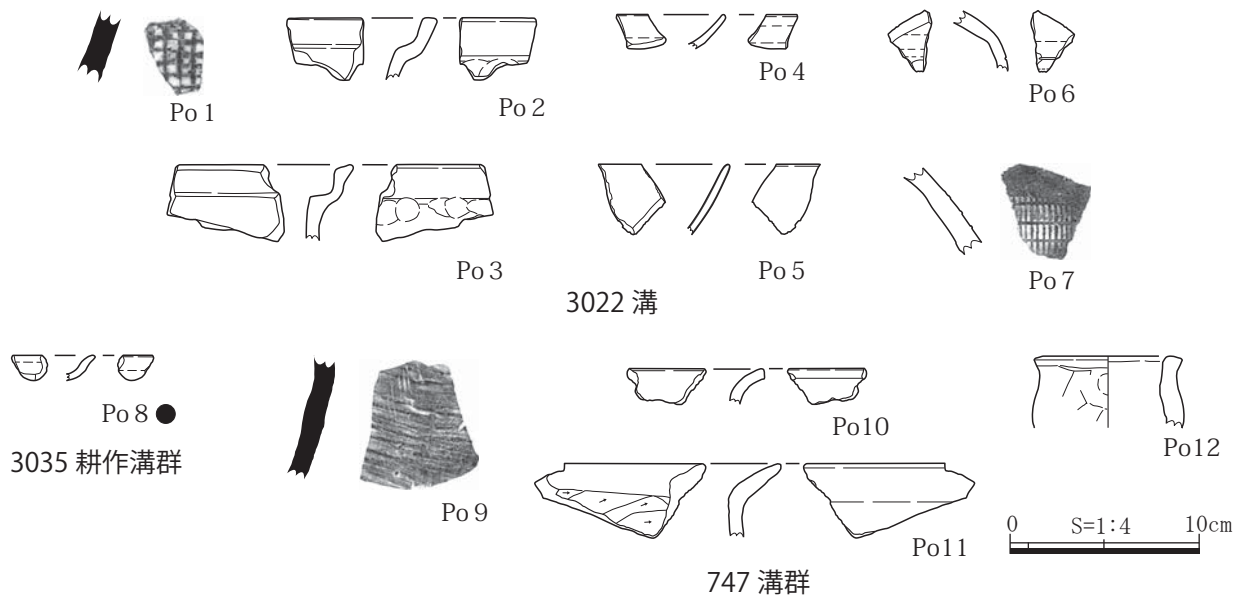
軸0.80m、検出面からの深さは0.30mを測る。埋土は灰黄褐色から黒褐色シルトが堆積する。3035耕作溝群と重複関係となっており、本遺構が新しい。遺物は出土していない。

本遺構の時期は、3035耕作溝群との重複関係から中世以降と考えられる。

**3221土坑(第20図、第1表)**

調査区北東端9E-4gグリッドにおいて、Ⅷ層上面で検出した土坑である。平面隅丸方形を呈し、断面形は椀状を呈する。規模は長軸1.07m、短軸1.00m、検出面からの深さ0.2mを測る。埋土は黒色シルトでⅧ層由来の明黄褐色ブロックが混じる。壁面には掘削痕跡とみられる幅0.06~0.15mの湾曲した浅い窪みが部分的に認められた。土坑内には径約0.1~0.4mの礫が投棄されている状況が確認された。遺物は出土していないため、本遺構の時期は不明である。

なお、本遺構の類例として、平成28年度調査129・220土坑が挙げられる。いずれも壁面から底面にかけて掘削痕跡が認められる。また、349・2096土坑では人頭大の礫が出土しており、本遺構と類似する出土状況を示す。



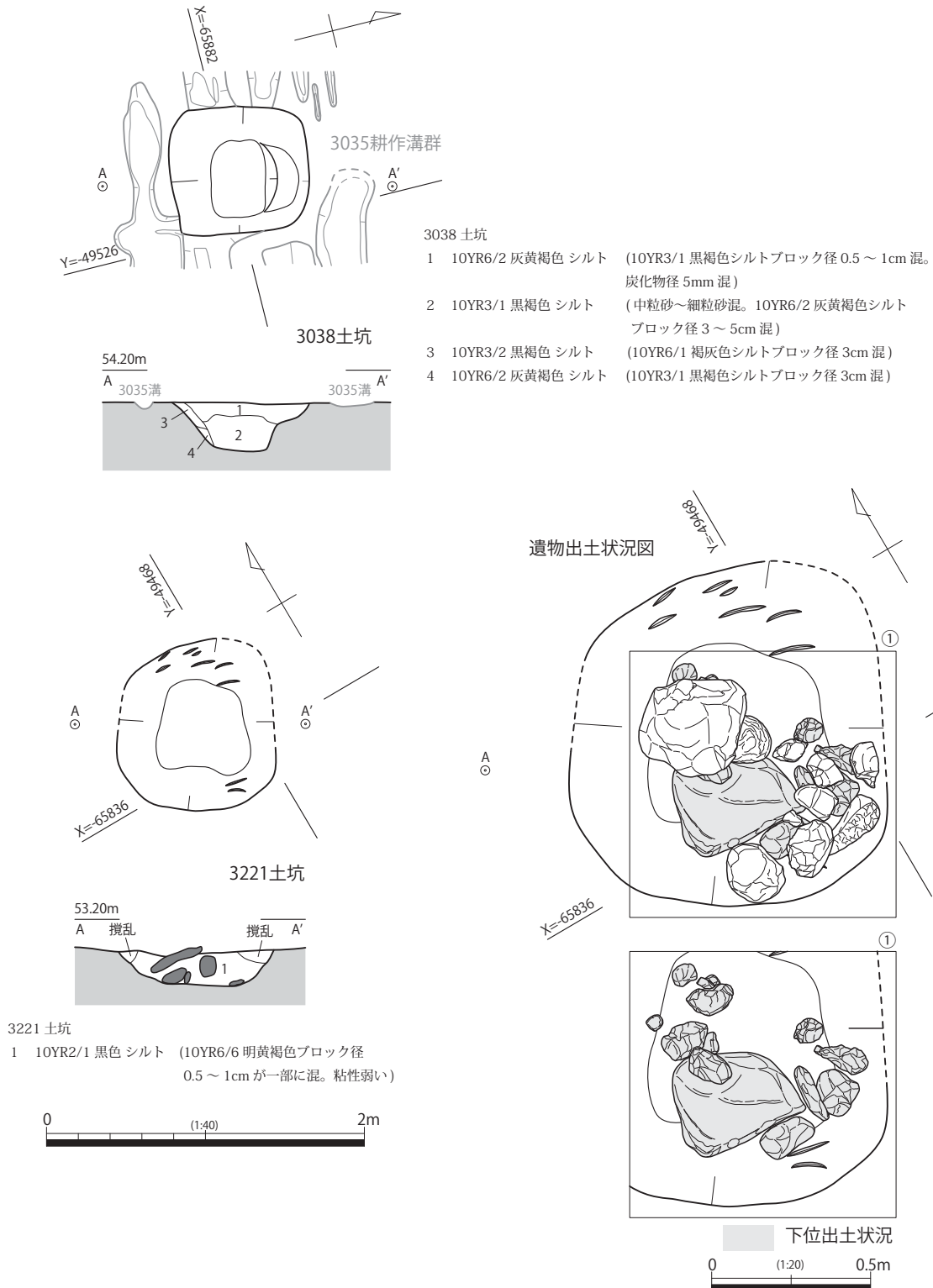
第19図 3022溝、3035耕作溝群、747溝群出土遺物

第1表 第1遺構面新段階遺構計測表

土坑						
No.	地区T45-6j-	規模(m)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
3038	9F-9c	0.88	0.80	0.30		3035耕作溝群より新
3221	9E-4g	1.07	1.00	0.20	礫	掘削痕跡あり

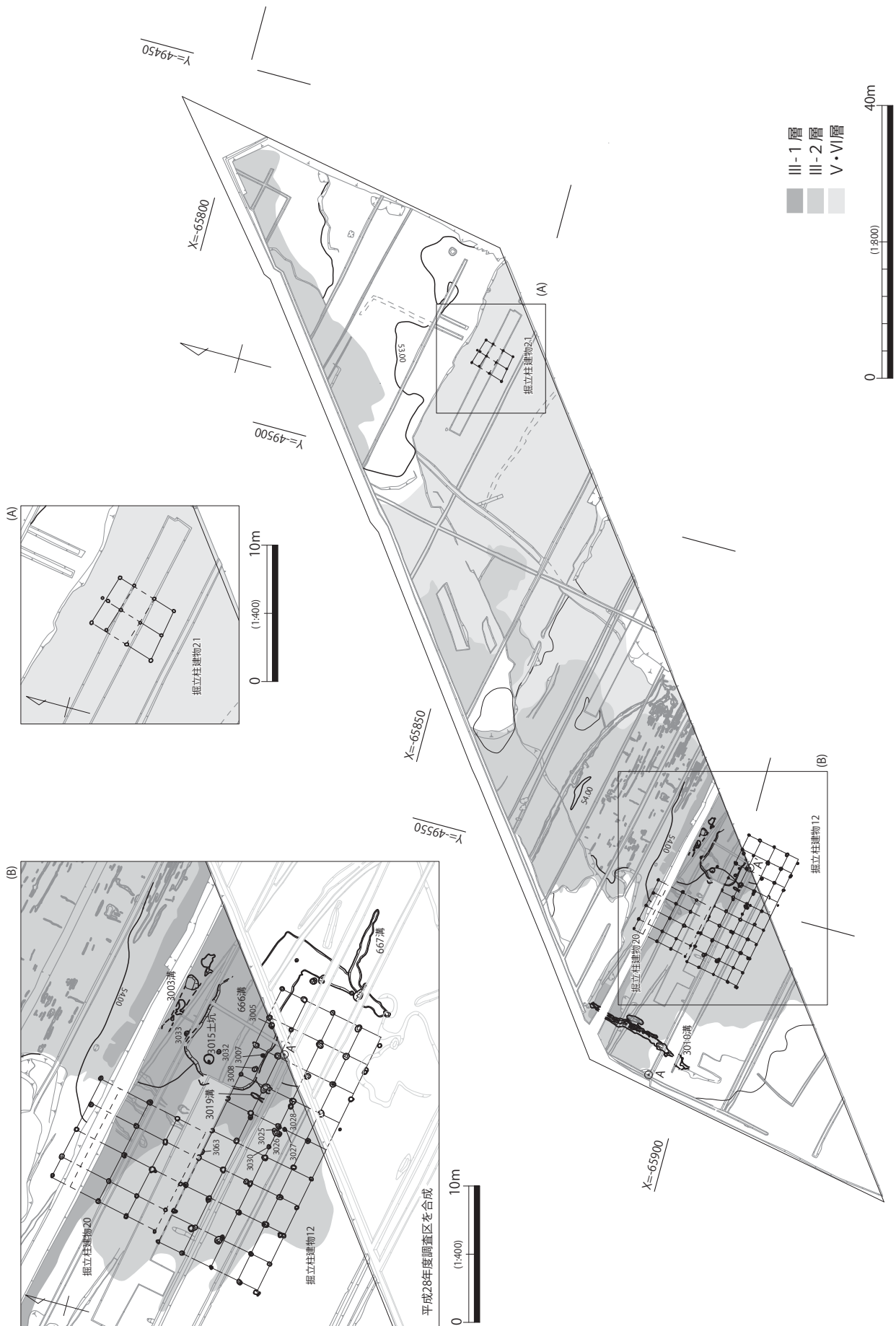
溝							
No.	地区T45-6j-	規模(m)			底面の標高(m)	主軸方位	備考
		長さ	幅	深さ			
3022溝	9F-7f・8c・8d・8e・8f・9c	34以上	0.3~1.1	0.35	西端：53.51	西側：N-77° -W	底面からマツ属の枝出土(試料17)、須恵器甕Po1、瓦質土器鍋Po2・3、白磁皿Po4、白磁壺Po968、青磁碗Po6・972、国産陶器Po6・7が出土
					南東端：53.61	南東側：N-60° -W	
3035耕作溝群	9F-8c~8f・9c・9d・9e・9f・10d・10c	9以上	0.1~0.3	0.02~0.04	西端：53.99	N-78° -W	東西に軸を持つ直線的に平行する複数条の溝、土師器皿Po8が出土
					東端：53.92		
747溝群	9F-10e・10f	5以上	0.3~1.0	0.01~0.12	北端：54.21	N-23° -E	南北に軸を持つ直線的に平行する複数条の溝、H28年調査区にわたり検出、須恵器甕Po9、土師器甕Po10・11、弥生ミニチュア土器Po12、が出土
					南端：54.17		



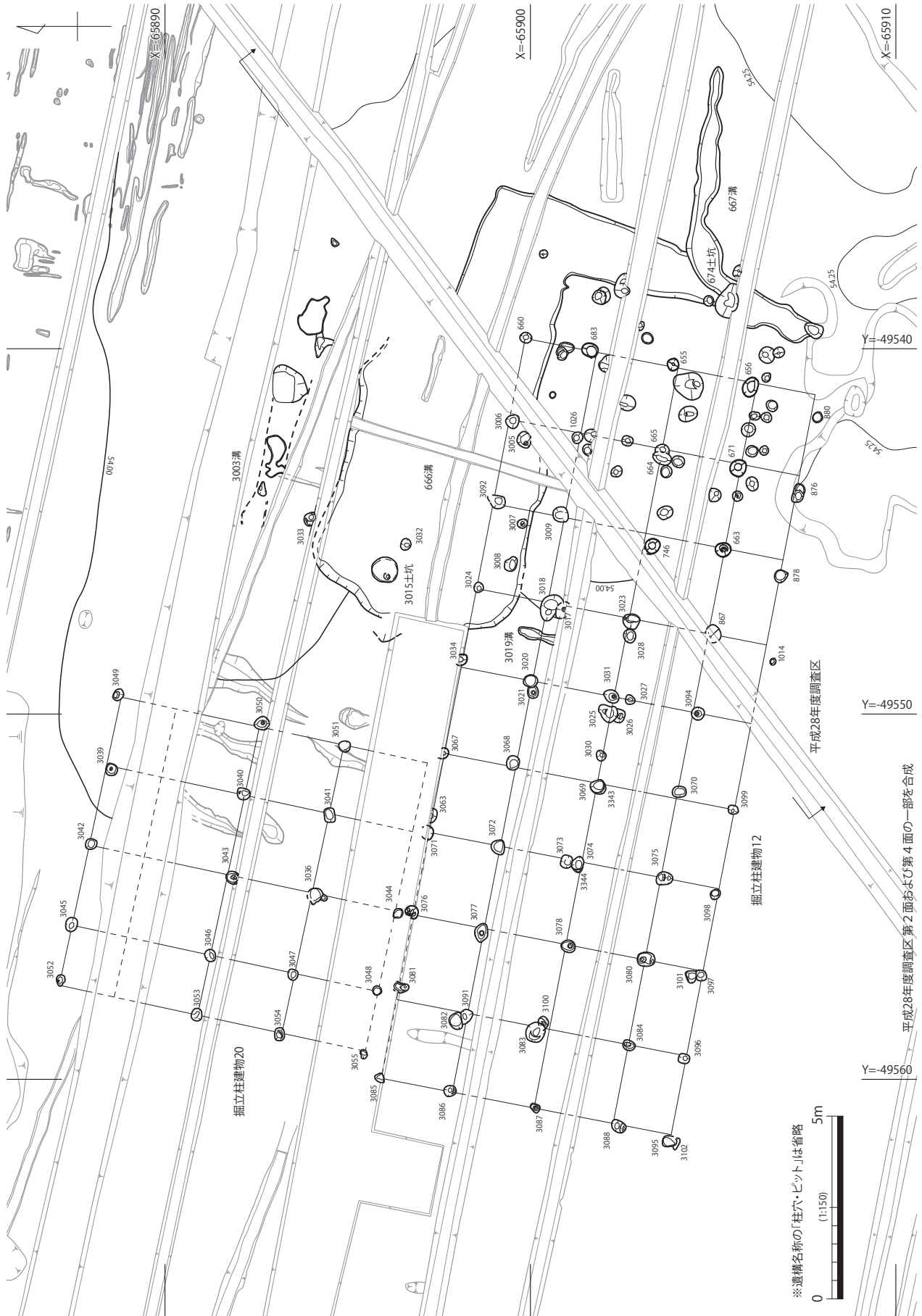
第20図 3038・3221土坑

掘立柱建物12(第22~42図、第2・3・15・16・47・48表、図版4~7・48~50)

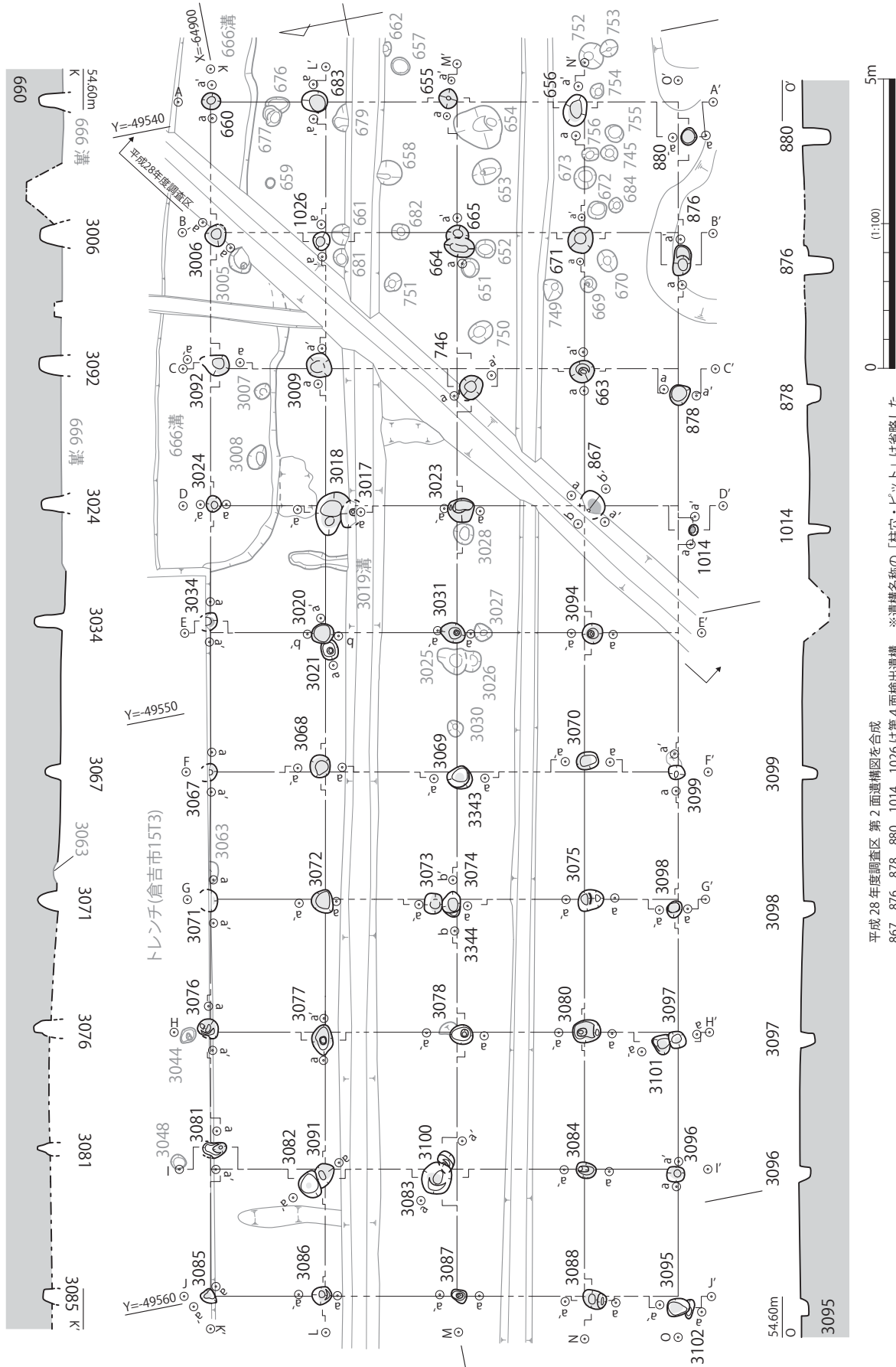
調査区南西9F-10d~10g、10F-1d~1gグリッドにおいて、Ⅲ-1・2層上面で検出した。このうちⅢ-2層で検出した柱穴は、埋土がⅢ-1層由来であること、Ⅲ-1層で検出した柱穴規模と類似し、柱筋が一致することから、本遺構を構成するものとして帰属させた。平成28年度調査で検出された掘立柱建物12の続きであり、今回の調査によって全体規模が判明した。本遺構は、655・656・660・663~665・671・683・746・867・876・878・880・1014・1026柱穴(以上、平成28年度調査)、3006・



第21図 第1遺構面古段階全体図

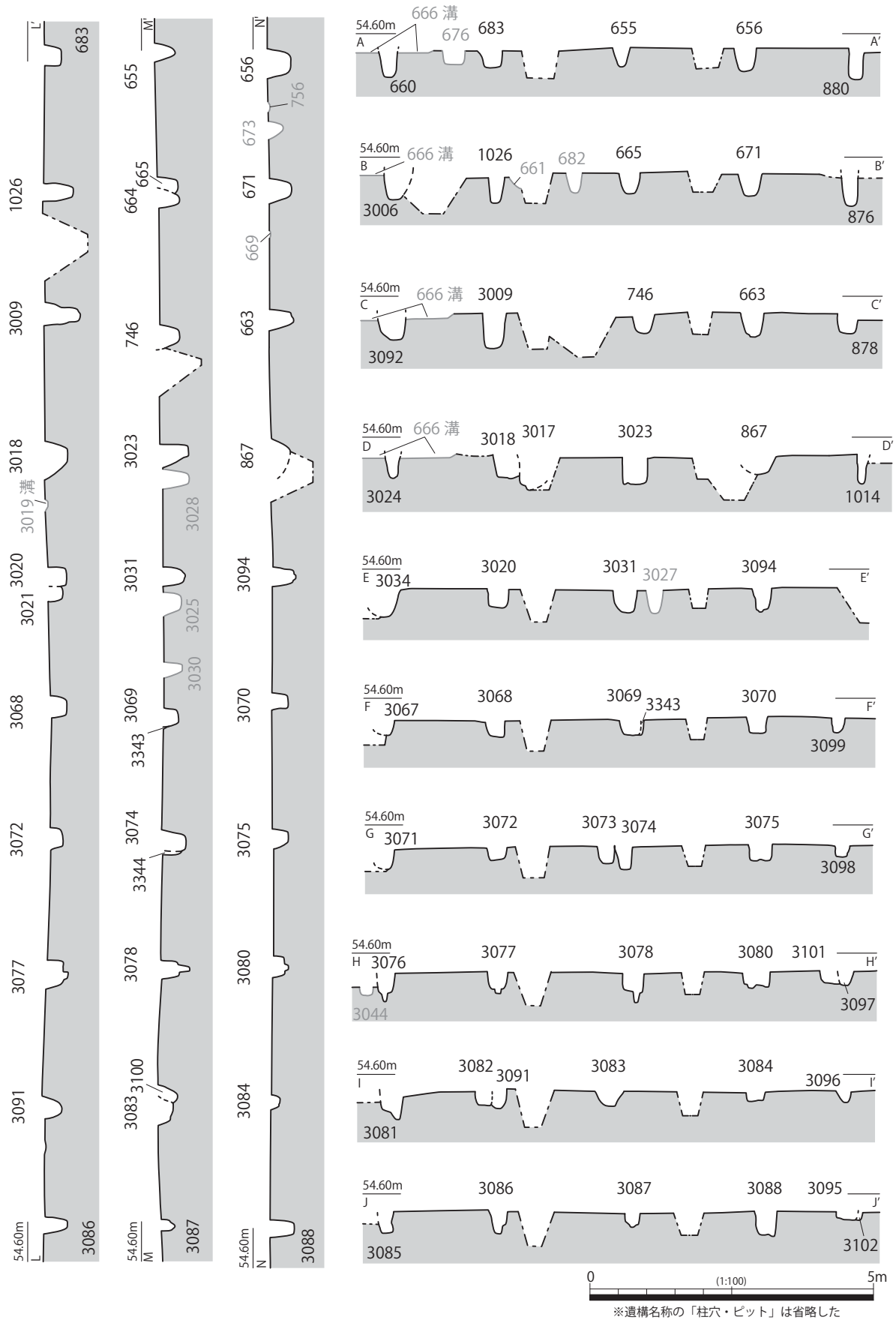


第22図 掘立柱建物12・20、666溝



第23図 掘立柱建物12(1)





第24図 掘立柱建物12(2)

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第2表 掘立柱建物12遺構計測表(1)

柱穴 (身舎) (△: 残存値)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	調査年度	備考
	長軸	短軸	深さ								
660	0.33	0.28	0.43	53.83	-	-	-	-	土器小片、炭化物(抜取痕)	H28	
683	0.45	0.37	0.28	54.01	-	-	-	礎盤石	土器小片、炭化物、礎盤石(抜取痕)	H28	礎盤石上面の標高54.13m
655	0.35	0.32	0.36	54.01	-	-	-	-	土器片(抜取痕)	H28	
656	0.54	0.40	0.39	53.97	-	-	-	礎盤石	土器片、礎盤石、須恵器壺Po51(抜取痕)	H28	礎盤石上面の標高54.05m
3006	0.38	0.35	0.44	53.85	-	0.11	-	-	土器小片、炭化物(抜取痕)	H30	掘乱に切られる
1026	0.32	0.29	0.44	53.79	0.16	-	-	礎盤石	土器小片、炭化物、礎盤石(抜取痕)	H28	礎盤石上面の標高54.02m
664	0.52	0.35	0.37	53.94	-	-	-	-	-	H28	
665	0.37	△0.33	0.36	53.96	-	-	664>665	-	小礫(抜取痕)	H28	
671	0.47	0.43	0.39	53.92	-	-	-	礎盤石	礎盤石	H28	礎盤石上面の標高54.00m
3092	0.53	0.37	0.44	53.82	-	-	-	-	土器小片、炭化物、土師器坏Po33(抜取痕)	H30	
3009	0.46	0.42	0.62	53.67	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石もしくは根巻石?)、土器片、土師器坏Po47、皿Po17、柱状高台Po24(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
746	0.41	0.37	0.34	53.95	-	-	-	-	土器小片、炭化物(抜取痕)	H28	生材(試料3)
663	0.42	0.37	0.42	53.89	-	0.13	-	-	扁平礫、小礫(礎盤石・根巻石)(抜取痕)	H28	扁平礫・小礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3024	0.28	0.26	0.35	53.88	-	-	-	-	土師器坏Po36・43・45・48、柱状高台Po26(抜取痕)	H30	
3017	0.46	△0.24	0.61	53.66	-	-	-	-	土師器皿Po16・22(抜取痕)、坏Po41	H30	
3018	0.77	△0.45	0.43	53.87	-	-	3017>3018	根巻石?	土器、小礫、扁平礫(根巻石?)、土師器坏Po41・42・44、高台付坏Po50、皿Po14・15・16(崩方埋め土)柱状高台Po25・28(抜取痕)、碗形銀治洋F1	H30	
3023	0.46	0.42	0.51	53.77	-	-	-	-	土師器坏Po32、高台付坏Po49(抜取痕)	H30	
867	0.46	△0.33	0.37	53.94	0.23	-	-	-	-	H28	排水溝に切られる
3034	△0.31	△0.20	0.50	53.76	0.10	-	-	-	-	H30	トレンチに切られる
3020	0.38	0.34	0.33	53.91	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)、土師器坏Po39(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、2段に重ねられ埋め戻し
3021	0.30	△0.28	0.25	53.97	-	0.12	3020>3021	-	礫(根巻石?)、土器片、土師器皿Po18、坏Po35・46(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3031	0.44	0.34	0.40	53.83	-	0.10	-	-	炭化物(抜取痕)	H30	
3094	0.35	0.35	0.41	53.84	-	0.09	-	-	扁平礫(礎盤石?)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、2段に重ねられ埋め戻し
3067	0.29	△0.14	0.26	53.94	-	-	-	-	-	H30	トレンチに切られる
3068	0.39	0.34	0.27	53.91	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)、土師器坏Po34・37、柱状高台Po27・29(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3069	0.38	0.34	0.26	53.95	-	-	-	-	小礫、土師器坏Po40	H30	
3343	0.35	△0.07	0.23	53.95	-	-	3069>3343	-	-	H30	大部分を3069に切られる
3070	0.38	0.30	0.27	53.98	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3071	0.36	△0.10	0.34	53.81	-	-	-	-	-	H30	トレンチに切られる
3072	0.42	0.38	0.20	53.97	-	-	-	礎盤石	礎盤石	H30	礎盤石上面の標高54.07m
3073	0.34	0.30	0.31	53.91	-	-	-	-	小礫、土師器皿Po21(抜取痕)	H30	
3074	0.37	△0.32	0.43	53.83	-	-	3073>3074>3344	-	扁平礫(礎盤石もしくは根巻石?)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3344	△0.28	△0.07	0.31	53.90	-	-	-	-	-	H30	大部分を3074に切られる
3075	0.45	0.35	0.27	53.97	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石もしくは根巻石?)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3076	0.38	0.33	0.50	53.75	-	-	-	礎盤石	礎盤石(詰め土)	H30	礎盤石上面の標高53.98m
3077	0.53	0.35	0.37	53.89	-	0.11	-	-	礫(礎盤石・根巻石)(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3078	0.39	0.34	0.50	53.74	-	0.10	-	-	角礫(抜取痕)	H30	
3080	0.46	0.38	0.26	53.98	-	0.08	-	-	扁平礫や垂角礫(礎盤石もしくは根巻石?)	H30	扁平礫・垂角礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3081	0.42	0.26	0.28	53.92	-	-	-	-	-	H30	
3082	0.47	0.35	0.24	54.06	-	-	-	-	柱状高台Po30	H30	
3091	△0.35	△0.33	0.28	54.00	-	-	3082>3091	-	土師器皿Po13	H30	
3084	0.34	0.28	0.15	54.12	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3083	0.56	0.50	0.26	54.04	-	0.12	-	-	礫(根巻石?)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3100	△0.39	0.28	0.33	53.96	-	-	3083>3100	-	礫	H30	
3085	0.31	0.24	0.23	53.92	-	-	-	-	-	H30	トレンチに切られる
3086	0.34	0.30	0.39	53.90	-	-	-	礎盤石	土師器皿Po19(抜取痕)、礎盤石(堀方埋め土)	H30	礎盤石上面の標高54.11m
3087	0.27	0.23	0.24	54.01	-	0.07	-	-	-	H30	
3088	0.43	0.30	0.44	53.86	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、掘え置く

柱穴 (廂) (△: 残存値)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	調査年度	備考
	長軸	短軸	深さ								
880	0.30	0.27	0.50	53.77	-	-	-	礎盤石	礎盤石	H28	礎盤石上面の標高53.91m
876	0.53	0.29	0.49	53.73	-	-	-	礎盤石	土器片、炭化物、礎盤石(抜取痕)	H28	礎盤石上面の標高53.82m
878	0.38	0.35	0.24	53.94	-	-	-	礎盤石	礫(礎盤石)	H28	礫が2段に重ねられている礎盤石上面の標高54.01m
1014	0.19	0.17	0.38	53.76	0.11	-	-	-	-	H28	
3099	0.28	0.24	0.26	53.99	-	-	-	-	土師器坏Po38	H30	
3098	0.31	0.25	0.18	54.04	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石?)(抜取痕)	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3097	0.28	0.27	0.24	54.04	-	0.08	-	-	-	H30	
3101	0.33	0.30	0.21	54.06	-	-	3097>3101	-	角礫	H30	角礫は柱抜き取り後、掘え置く
3096	0.30	0.26	0.18	54.11	-	0.08	-	-	柱状高台Po23(抜取痕)	H30	炭化材(試料1・2)
3095	0.38	0.30	0.12	54.14	-	-	-	-	土師器皿Po20、柱状高台Po31(抜取痕)	H30	
3102	0.33	△0.13	0.13	54.14	-	-	3095>3102	-	-	H30	

3009・3017・3018・3020・3021・3023・3024・3031・3034・3067~3078・3080~3088・3091・3092・3094~3102・3343・3344柱穴によって構成される。

桁行9間(20.55m)、梁行4間(8.05m)、平面積165.4㎡で、建物の主軸はN-79°-Wである。平面形はほぼ東西方向に広がる長方形を呈し、南辺に廂が付く総柱建物である。廂を除いた身舎の規模は桁

第3表 掘立柱建物12遺構計測表(2)

柱間寸法 (身舎：桁行方向 K,Lライン)

No.	柱間寸法(m)
660-3006	2.3
3006-3092	2.2
3092-3024	2.5
3024-3034	2.0
3034-3067	2.6
3067-3071	2.2
3071-3076	2.2
3076-3081	2.1
3081-3085	2.5
683-1026	2.3
1026-3009	2.2
3009-3018	2.5
3009-3017	2.5
3018-3020	2.1
3018-3021	2.4
3017-3020	2.1
3017-3021	2.4
3020-3068	2.3
3021-3068	2.0
3068-3072	2.3
3072-3077	2.4
3077-3091	2.3
3077-3082	2.5
3091-3086	2.1
3082-3086	1.9

柱間寸法 (身舎：桁行方向 M,Nライン)

No.	柱間寸法(m)
655-665	2.4
655-664	2.6
665-746	2.6
664-746	2.4
746-3023	2.1
3023-3031	2.2
3031-3069	2.5
3069-3074	2.2
3069-3073	2.2
3074-3078	2.2
3073-3078	2.2
3078-3083	2.5
3078-3100	2.2
3083-3087	2.0
3100-3087	2.3
656-671	2.1
671-663	2.3
663-867	2.4
867-3094	2.1
3094-3070	2.2
3070-3075	2.4
3075-3080	2.3
3080-3084	2.4
3084-3088	2.2

柱間寸法 (身舎：梁行方向 A,B,C,D,Eライン)

No.	柱間寸法(m)
656-655	2.2
655-683	2.3
683-660	1.8
671-665	2.1
671-664	2.1
665-1026	2.4
664-1026	2.4
1026-3006	1.8
663-746	2.0
746-3009	2.6
3009-3092	1.7
867-3023	2.3
3023-3017	1.7
3023-3018	2.1
3017-3024	2.4
3018-3024	2.0
3094-3031	2.3
3031-3020	2.3
3031-3021	2.2
3020-3034	2.0
3021-3034	2.1

柱間寸法 (身舎：梁行方向 F,G,H,I,Jライン)

No.	柱間寸法(m)
3070-3069	2.1
3069-3068	2.4
3068-3067	1.9
3075-3074	2.3
3075-3073	2.7
3074-3072	2.3
3073-3072	1.9
3072-3071	1.9
3080-3078	2.0
3078-3077	2.4
3077-3076	2.0
3084-3083	2.7
3084-3100	2.5
3083-3082	2.2
3083-3091	1.9
3100-3082	2.4
3100-3091	2.1
3082-3081	1.5
3091-3081	1.8
3088-3087	2.3
3087-3086	2.4
3086-3085	1.9

柱間寸法 (建物全体：桁行総長)

No.	柱間寸法(m)
(北辺) 660-3085	20.6
683-3086	20.5
655-3087	20.7
(南辺) 656-3088	20.4

柱間寸法 (建物全体：梁行総長)

No.	柱間寸法(m)
(東辺) 880-660	8.2
876-3006	8.1
878-3092	7.9
1014-3024	8.2
3099-3067	8.0
3098-3071	8.0
3097-3076	8.1
3101-3076	7.8
3096-3081	7.9
(西辺) 3095-3085	8.1
(西辺) 3102-3085	8.3

柱間寸法 (廂：桁行方向)

No.	柱間寸法(m)
880-876	2.2
876-878	2.2
878-1014	2.3
1014-3099	4.2(2間)
3099-3098	2.3
3098-3097	2.3
3098-3101	2.3
3097-3096	2.3
3101-3096	2.3
3096-3095	2.3
3096-3102	2.3

柱間寸法 (廂：梁行方向)

No.	柱間寸法(m)
880-656	1.9
876-671	1.8
878-663	1.6
1014-867	1.8
3099-3070	1.6
3098-3075	1.5
3097-3080	1.7
3101-3080	1.4
3096-3084	1.5
3095-3088	1.5
3102-3088	1.7

柱間寸法 (身舎：梁行総長)

No.	柱間寸法(m)
(東辺) 656-660	6.3
671-3006	6.3
663-3092	6.3
867-3024	6.4
3094-3034	6.6
3070-3067	6.4
3075-3071	6.5
3080-3076	6.4
3084-3081	6.4
(西辺) 3088-3085	6.6

柱間寸法 (廂：桁行総長)

No.	柱間寸法(m)
880-3095	20.1
880-3102	20.1

行9間(20.55m)、梁行3間(6.42m)、平面積131.9㎡を測る。

柱穴の平面形は円形又は楕円形で、やや歪なものも含まれる。身舎の柱穴は長軸0.27~0.77(平均0.41)m、検出面からの深さが0.15~0.62(平均0.36)mで、底面の標高は53.66~54.12(平均53.90)mである。廂の柱穴は長軸0.19~0.53(平均0.33)m、検出面からの深さが0.12~0.50(平均0.27)mで、底面の標高は53.73~54.14(平均53.97)mである。身舎に比べ、廂の柱穴規模はやや小さい。

身舎の柱間寸法は桁行で2.6~1.9(平均2.28)m、梁行で2.7~1.5(平均2.15)mであり、とくに梁行でばらつきが大きい。南辺の廂の柱間寸法は桁行で2.3~2.1(平均2.25)m、梁行で1.9~1.4(平均1.64)mである。以上、柱穴規模と柱間寸法から南辺廂付建物とした。ただし、北辺の柱穴側は倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で多くが削平されて、規模が不明なものが多いこと、K-K'ラインとL-L'ラインの柱間寸法はやや狭いことから、北辺も廂である可能性も付記しておく。その場合は、南北廂付総柱建物となる。

柱は抜き取られているものが大半を占め、抜き取り痕跡より土器や基礎固めに使用されたと考えられる拳大から人頭大の礫が出土している。656・671・683・876・878・880・1026・3072・3076・3086柱穴には礎盤石が確認された。663・3009・3020・3021・3094・3068・3070・3074・3075・3077・3080・3083・3084・3088・3098柱穴では、柱抜き取り後に礎盤石や根巻石等が埋め戻されている。使用された土器の廃棄も含め、基礎固めに使用された礫の埋め戻しは、地鎮に係る祭祀行為と想定され

る。これら柱穴出土の主な礫の特徴については、第48表にまとめている。平成30年度調査で確認された基礎固めに用いられた礫の総重量は約122kgにのぼり、このうち被熱痕跡が確認されたものは17%である。また、746柱穴からは柱材とみられる木材が出土している。なお、平成28年度調査で検出された柱穴について改めて精査した結果、既報告の679・661ピットは本建物を構成する柱穴ではなく、683・1026柱穴がそれに替わることになった。

以下、各柱穴及び関連するピットについて詳述する。

#### 660柱穴(第25図、第2表)

調査区南西9F-10d、10F-1dグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.33m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.43mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～5層からなり、1層はⅢ-1層由来の褐灰色シルトブロックと共に、土器小片や炭化物を含む。土器は小片のため、図化していない。

#### 683柱穴(第25図、第2表)

調査区南西10F-1e・1dグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.45m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.28mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2・3層からなり、1層はⅢ-1層由来の埋土であり、土器片を含む。底面には径0.23～0.33m、厚さ0.12mの礎盤石が置かれていた。1層から土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

#### 655柱穴(第25図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3・4層からなる。1層から土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

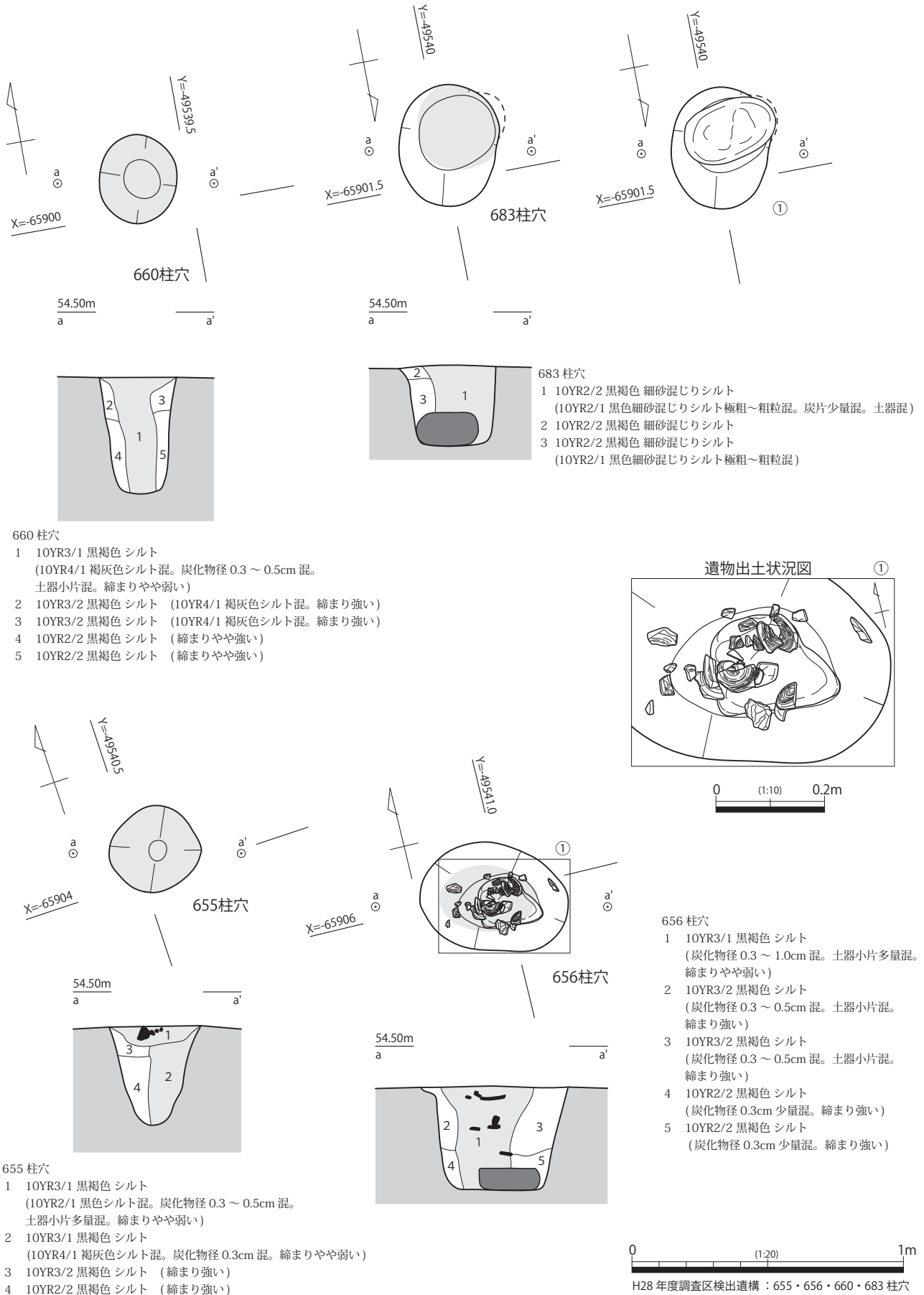
#### 656柱穴(第25・42図、第2・16表、図版50)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.54m、短軸0.40m、検出面からの深さ0.39mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2～5層からなり、1層からは土器小片が多数出土している。底面には径0.18～0.25m、厚さ0.08mの礎盤石が置かれていた。

遺物は須恵器壺Po51を図化した。Po51は掘立柱建物19の3154柱穴の南に位置する3314柱穴の抜き取り痕跡(第64・134図)及びⅢ-1層から出土した須恵器片と接合する。

#### 3006柱穴(第26図、第2表、図版4)

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.44mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1・2層からは土器片が出土したほか、1層



第25図 掘立柱建物12 655・656・660・683柱穴

には炭化物が含まれる。土器は小片のため図化していない。

#### 1026柱穴(第26図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.44mを測る。埋土は柱痕跡の1・2層と掘方埋め土3・4層からなり、1・2層からは土器小片や炭化物が出土している。4層上面には径0.18~0.23m、厚さ0.09mの礎盤石が置かれており、4層は礎盤石を設置する際の充填土とみられる。

#### 664柱穴(第26図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(M-M'ライン)。東側で665柱穴を切っている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.52m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.37mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3層からなる。

#### 665柱穴(第26図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。西側を664柱穴に切られる。平面形は円形を呈し、残存規模は長軸0.37m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3・4層からなり、1層から小礫が出土している。

#### 671柱穴(第26図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.47m、短軸0.43m、検出面からの深さ0.39mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2~5層からなり、底面には径0.19~0.22m、厚さ0.08mの礎盤石が置かれていた。

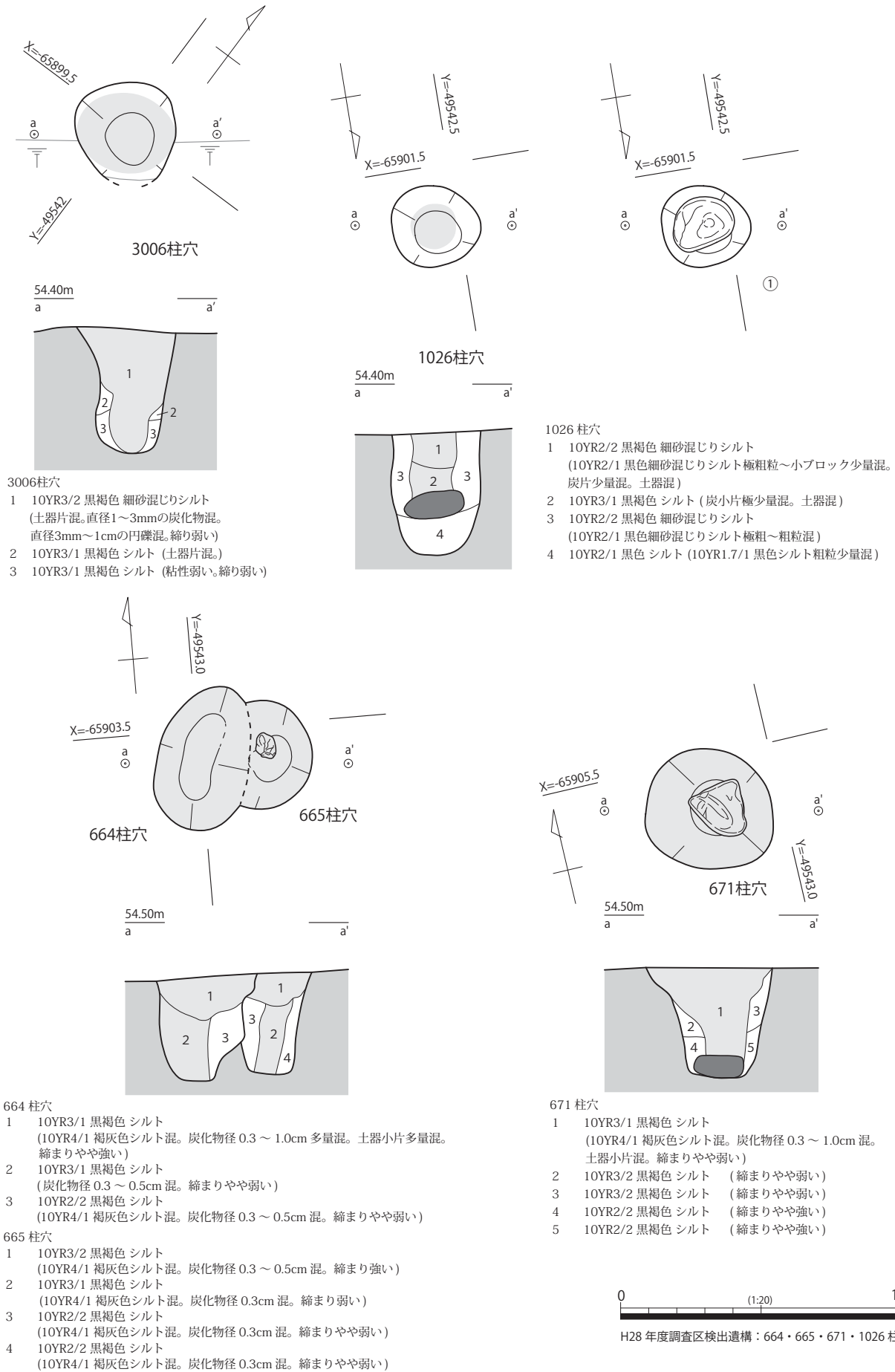
#### 3092柱穴(第27・42図、第2・15表、図版48)

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.53m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.44mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層にはⅢ-1層由来の灰黄褐色シルトブロックと共に、土器片や炭化物が含まれる。

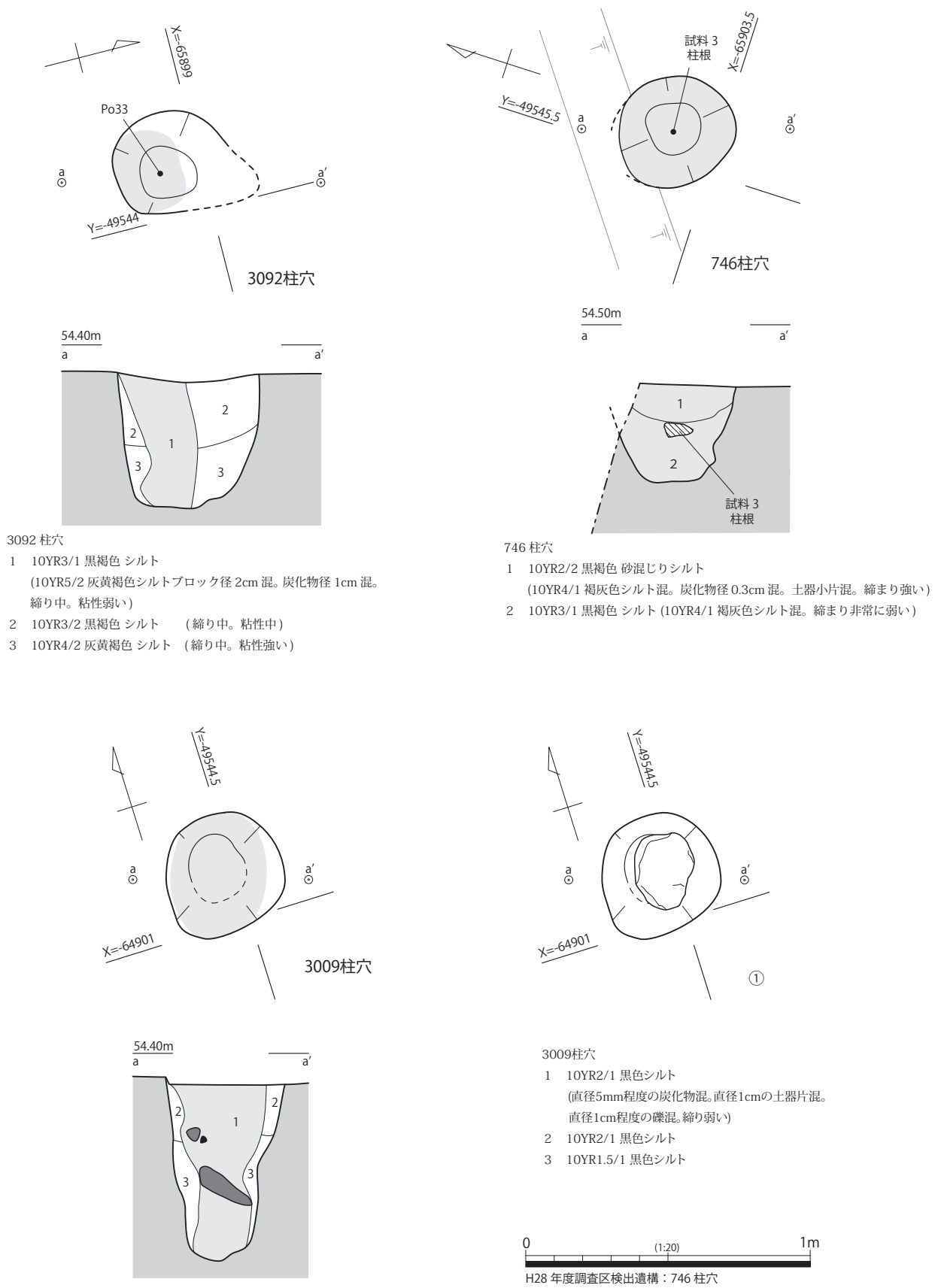
遺物は1層から出土した土師器坏Po33を図化した。

#### 746柱穴(第27図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層掘削中に検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.41m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.34mを測る。埋土は2層に分層でき、1層はⅢ-1層由来の埋土であり、土器小片や炭化物が含まれている。土器は小片のため図化していない。



第26図 掘立柱建物12 664・665・671・1026・3006柱穴



第27図 掘立柱建物12 746・3009・3092柱穴



2層上面には横倒しの状態で柱根が出土した。この柱根について樹種同定を行った結果、スギと同定されている<sup>(註1)</sup>。本報告にあたり、同一試料(試料3)について放射性炭素年代測定を行った結果、calAD989-1045(暦年較正2σの確立1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。本建物の他の柱穴から出土している土器の年代観より、若干古い年代値が得られている。

### 3009柱穴(第27・42図、第2・15・16表、図版48)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層掘削中に検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.42m、検出面からの深さ0.62mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層では径0.21~0.27mの礎盤石もしくは根巻石と考えられる扁平礫や土器片が出土している。柱抜き取り後にこれらを埋め戻したと考えられる。

遺物は1層から土師器坏Po47、柱状高台Po24が、2層または3層から皿Po17が出土している。

### 663柱穴(第28図、第2表)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.42mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡1~3層と掘方埋め土の4・5層からなり、2層から径0.28~0.32m、厚さ0.1mの根巻石や礎盤石と考えられる扁平礫や小礫が出土した。柱抜き取り後にこれらを埋め戻したものと考えられる。

### 3024柱穴(第28・42図、第2・15・16表、図版4・48・49)

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層上部には土師器坏Po36・43・45・48とその内部に柱状高台Po26が埋納されていた。

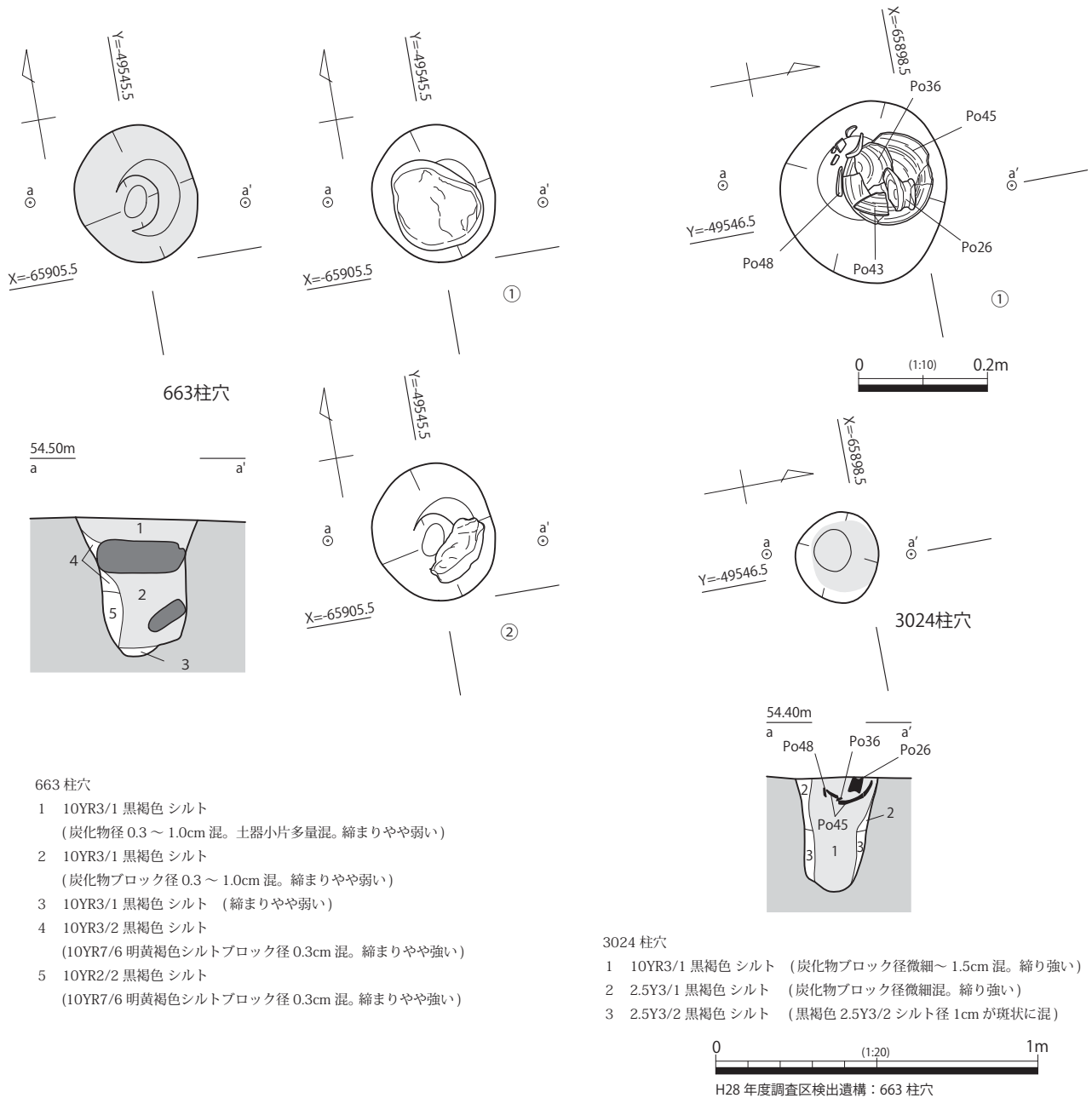
### 3017柱穴(第29・42図、第2・15表、図版48)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。北側で3018柱穴を切っており、南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈すものと推定され、残存規模は長軸0.46m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.61mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2~4層からなり、掘方埋め土から土師器皿Po22が出土している。

### 3018柱穴(第29・42・43図、第2・15・16・47表、図版4・48・50)

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。南側を3017柱穴に切られる。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.77m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.43mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2~5層からなり、2・3層を中心に多数の土器や小礫が、4層で径0.16~0.2mの根巻石と考えられる扁平礫が出土している。

遺物は土師器坏Po41・42・44、高台付坏Po50、皿Po14~16、柱状高台Po25・28、椀形鍛冶滓F1



第28図 掘立柱建物12 663・3024柱穴

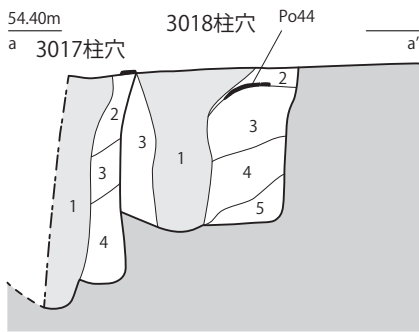
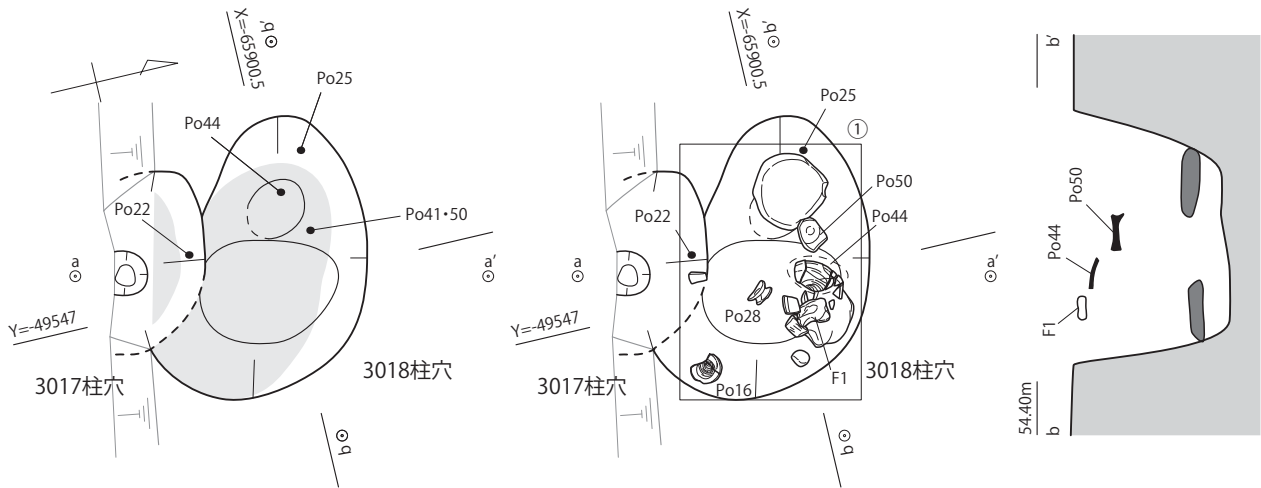
が出土している。このうち、掘方埋め土から出土したPo44・50、F 1などは建物造営時に埋納された可能性が高い。

**3023柱穴(第29・42図、第2・16表、図版48・49)**

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整円形を呈し、南側上方に浅いテラス面を設ける。規模は長軸0.46m、短軸0.42m、検出面からの深さ0.51mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、2層上面に土師器坏Po32と高台付坏Po49が重なるように埋納されていた。

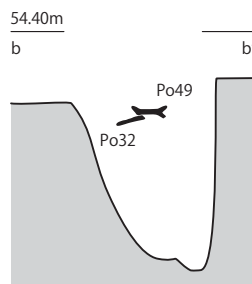
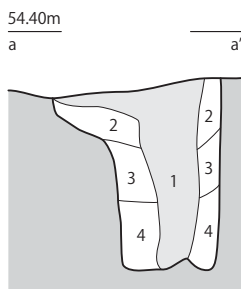
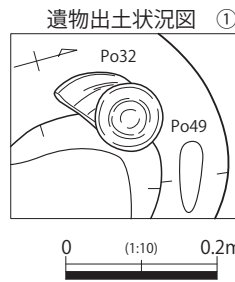
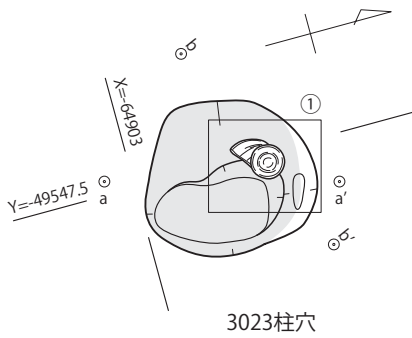
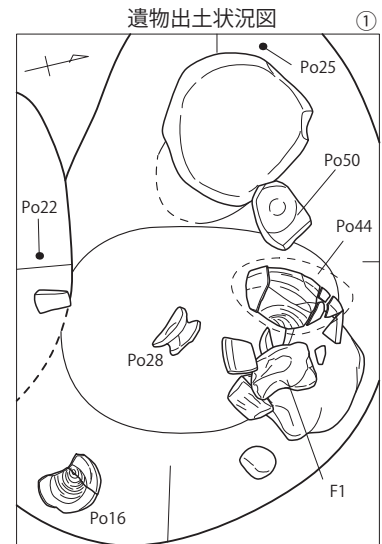
**867柱穴(第30図、第2表)**

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。北

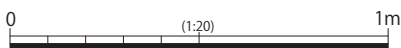


- 3017 柱穴
- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂
  - 2 10YR2/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/4 にぶい黄橙色粒径 5mm が混じる。  
縮り弱い)
  - 3 10YR2/1 黒色 シルト
  - 4 10YR3/1 黒褐色 シルト (縮り弱い)

- 3018 柱穴
- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂  
(土器片径 1 ~ 5cm が混)
  - 2 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/4 にぶい黄橙色粒径 5mm が混)
  - 3 10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト  
(粘性弱い)
  - 4 10YR2/1 黒褐色 シルト
  - 5 10YR2/2 黒褐色 シルト



- 3023 柱穴
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト  
(土器片径 1cm 程度が斑状に混)
  - 2 10YR2/1 黒色 シルト (縮り強い)
  - 3 10YR1.7/1 黒色 シルト (粘性強い)
  - 4 10YR2/2 黒褐色 シルト (粘性強い)



第29図 掘立柱建物12 3017・3018・3023柱穴

西側が排水溝により削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.46m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.37mを測る。埋土は柱痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

### 3034柱穴(第30図、第2表)

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(E-E'ライン)。北側は倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.31m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.50mを測る。埋土は中心部に黒色シルトの柱痕跡である1層と掘方埋め土の2・3層が確認された。

### 3020柱穴(第30・42図、第2・16表、図版48)

調査区南西9F-10e、10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(E-E'ライン)。西側で3021柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層から径約0.17~0.24mの礎盤石と考えられる扁平礫が2段重ねて出土している。柱抜き取り後に、これらの礫を埋め戻したものであろう。

遺物は、土師器坏Po39が出土している。

### 3021柱穴(第30・42図、第2・15・16表、図版48・49)

調査区南西9F-10e、10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(L-L'ライン)。東側を3020柱穴に切られている。平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸0.30m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2・3層からなり、1層上部から根巻石と考えられる礫や土器片が出土している。

遺物は、土師器皿Po18、坏Po35・46が出土している。

### 3031柱穴(第31図、第2表)

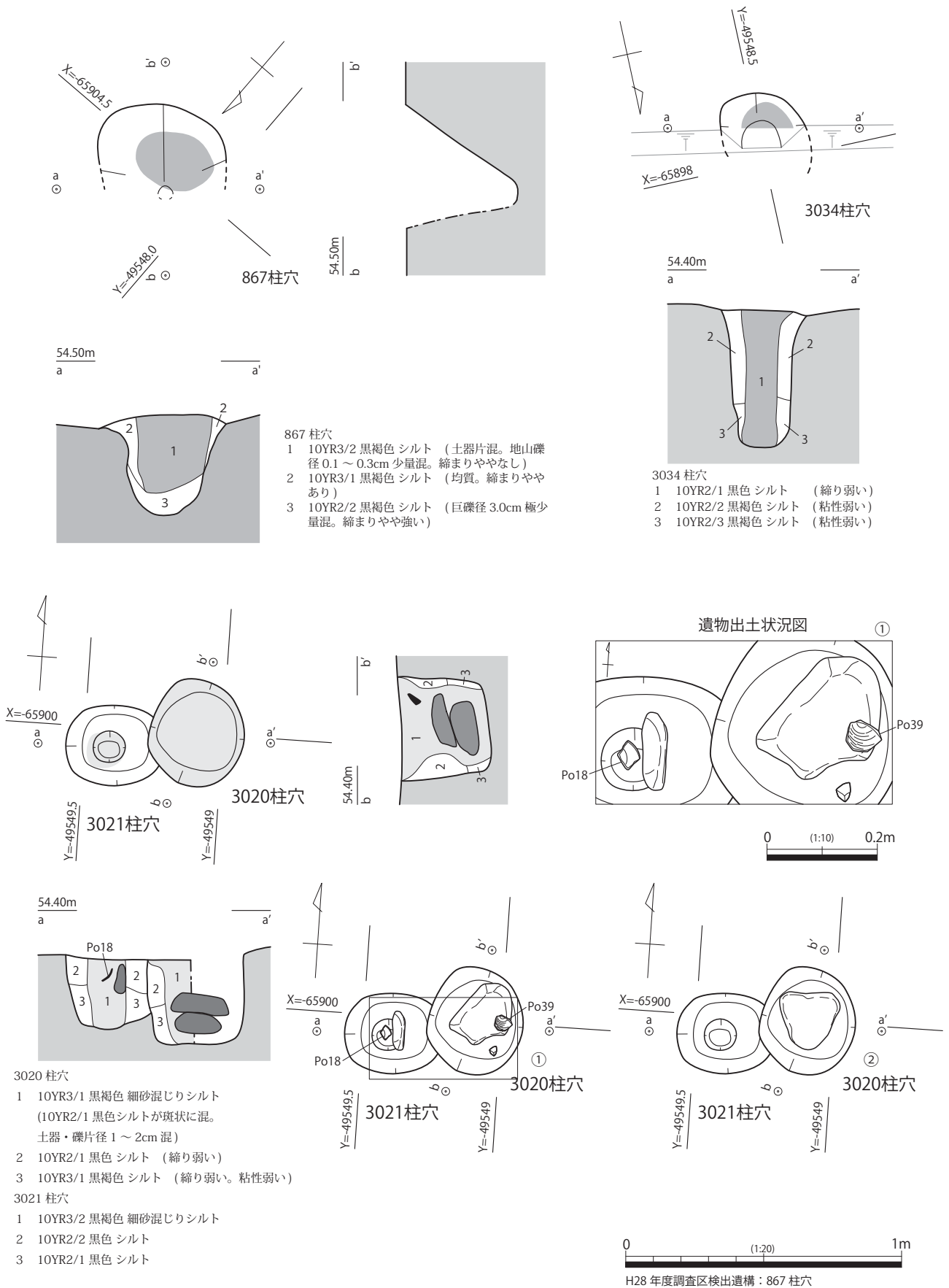
調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.44m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層には多量の炭化物が含まれていた。

### 3067柱穴(第31図、第2表)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(F-F'ライン)。北側は倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.29m、短軸0.14m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層にはⅢ-1層由来の灰黄褐色シルトブロックが含まれる。

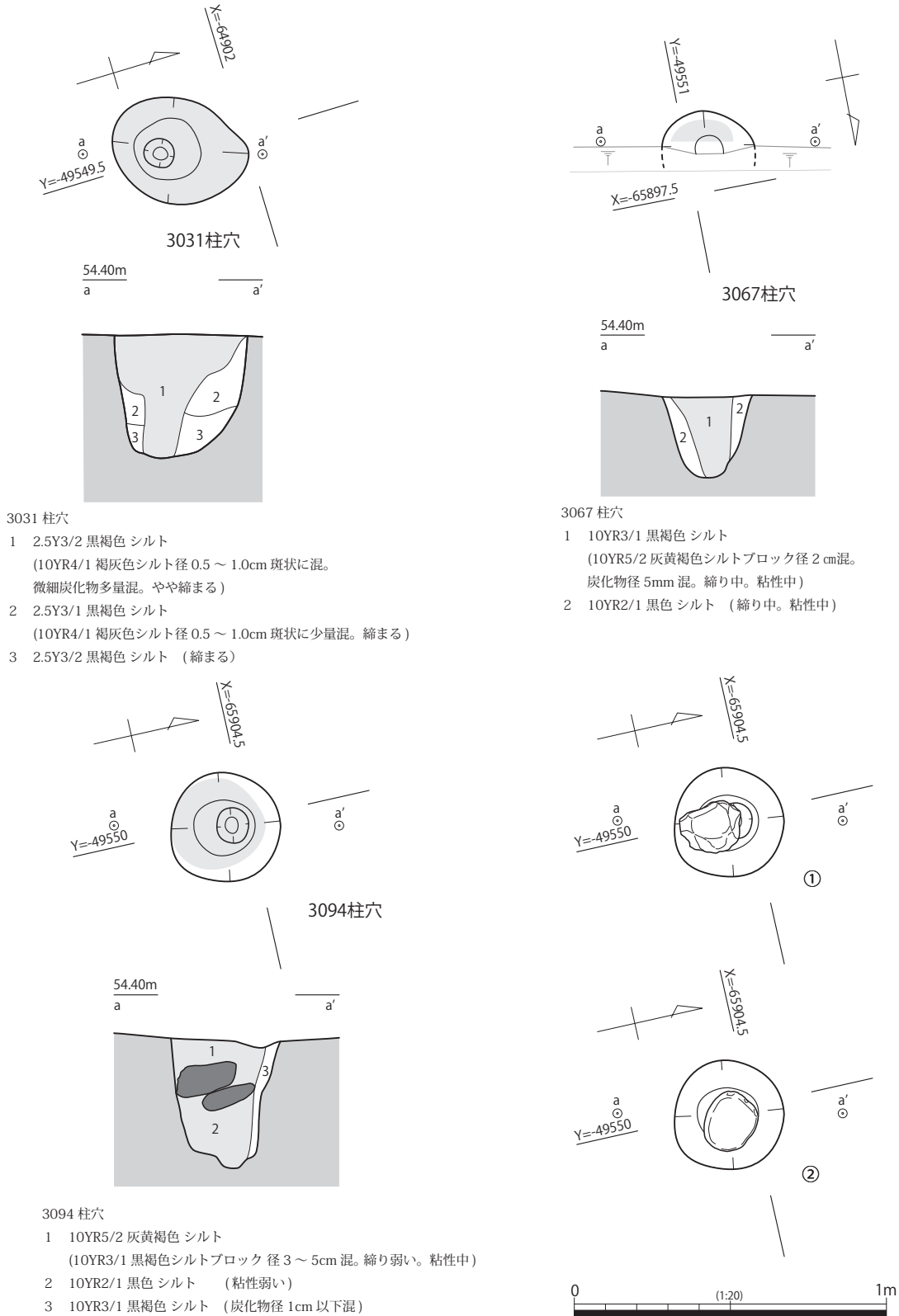
### 3094柱穴(第31図、第2表、図版4)

調査区南西10F-1e・1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は直径0.35m、検出面からの深さ0.41mを測る。埋土は柱抜き取り痕



第30図 掘立柱建物12 867・3020・3021・3034柱穴

跡の1・2層と掘方埋め土の3層からなり、2層上面には径0.16~0.19mの扁平礫が二段重ねで出土している。扁平礫は基礎固めに使用された礎盤石と考えられ、柱抜き取り後に埋め戻されたものである。



第31図 掘立柱建物12 3031・3067・3094柱穴

**3068柱穴(第32・42図、第2・15・16表、図版5・48)**

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(F-F'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.39m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層中には長軸0.28mの扁平礫や数多くの土器が出土している。扁平礫は基礎固めに使用された礎盤石と考えられ、柱抜き取り後に埋め戻されたものであろう。

遺物は、1層から出土した土師器坏Po34・37、柱状高台Po27・29を図化している。

**3069柱穴(第32・42図、第2・16表、図版5・48)**

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(F-F'ライン)。西側で3343柱穴を切る。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層中には小礫や土器片が点在していた。これらは柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、1層から土師器坏Po40が出土している。

**3343柱穴(第32図、第2表)**

調査区南西10F-1fグリッドにおいてⅢ-2層上面で検出した柱穴である(F-F'ライン)。東半部が3069柱穴に切られている。平面形は不明であり、残存規模は長軸0.35m、短軸残存0.07m、深さ0.23mを測る。埋土は掘方埋め土の1・2層からなる。

**3070柱穴(第32図、第2表、図版5)**

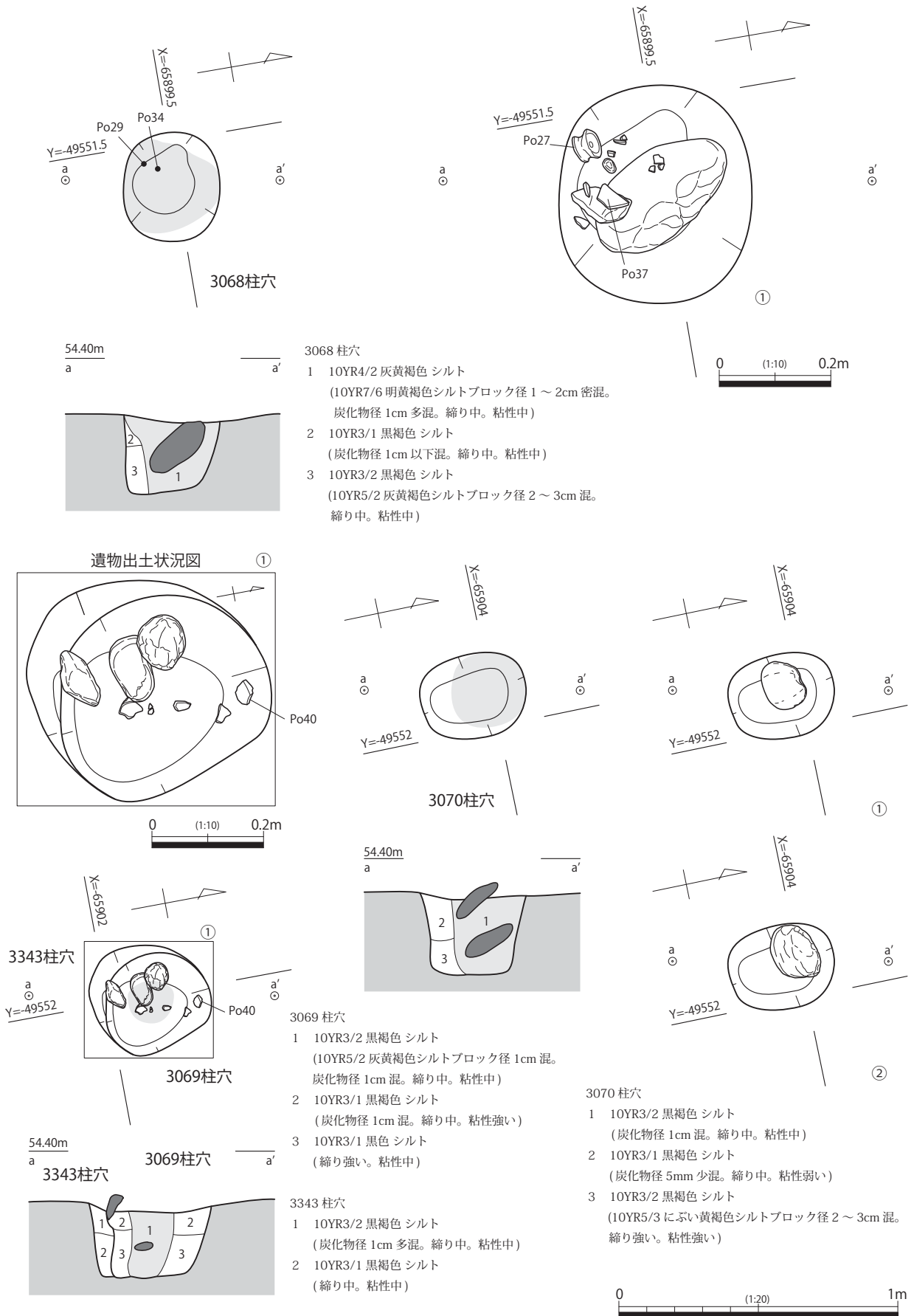
調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(F-F'ライン)。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層では径0.18mの扁平礫が斜位に2点出土している。基礎固めに使用された礎盤石が、柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

**3071柱穴(第33図、第2表)**

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(G-G'ライン)。倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で大きく削平されている。平面形は円形であろうか。残存規模は長軸0.36m、短軸0.10m、検出面からの深さ0.34mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2・3層からなり、1層にはⅢ-1層由来の褐灰色シルトブロックが混じる。

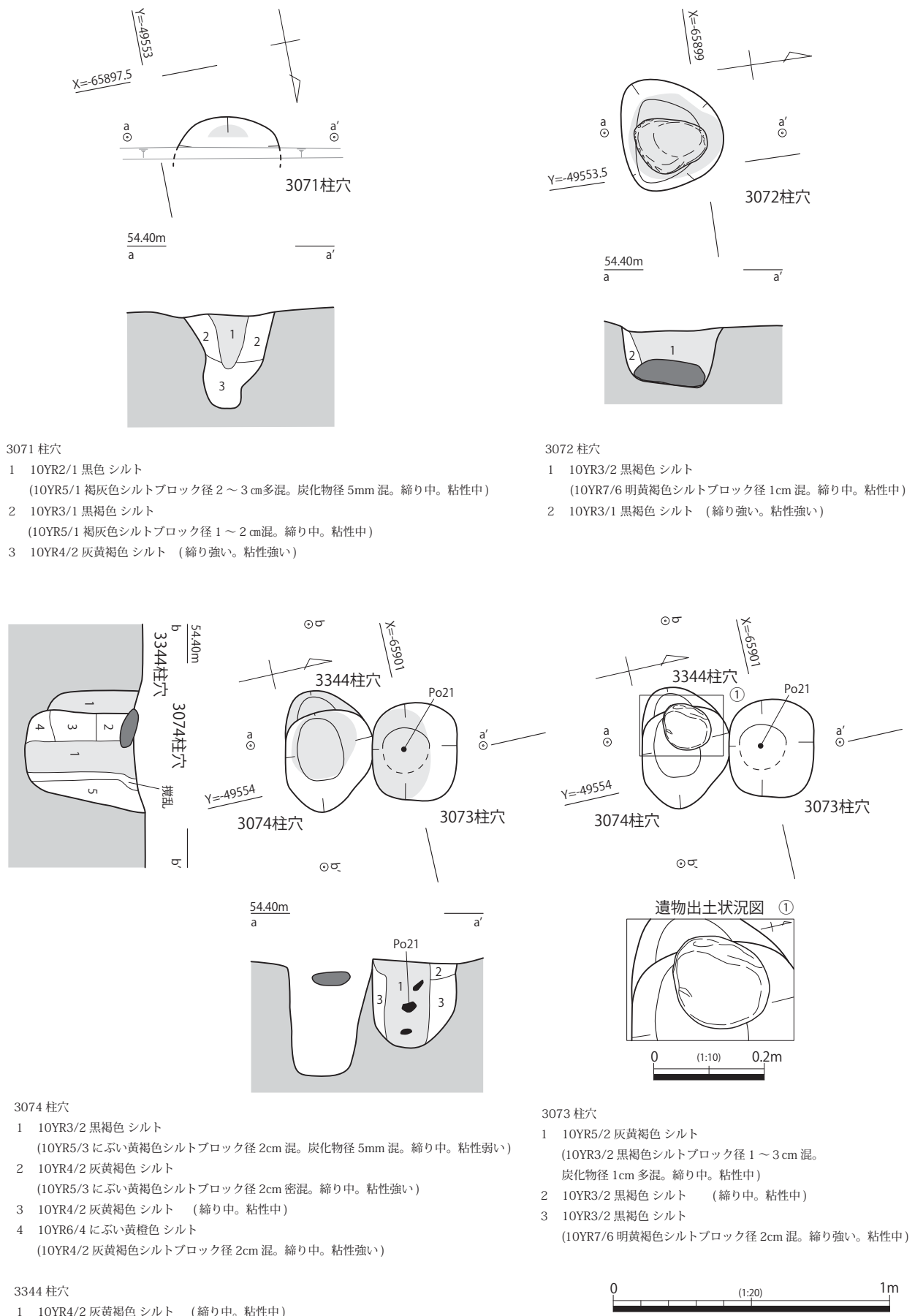
**3072柱穴(第33図、図版5)**

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(G-G'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.38m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層にはⅢ-1層由来の明黄褐色シルトブロックが混じる。底面には、長軸0.25m、短軸0.19m、厚さ0.08mの礎盤石が残されていた。



第32図 掘立柱建物12 3068~3070・3343柱穴





第33図 掘立柱建物12 3071~3074・3344柱穴

### 3073柱穴(第33・42図、第2・15表、図版48)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(G-G'ライン)。南側で3074柱穴を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.31mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2・3層からなり、1層にはⅢ-1層由来の明黄褐色シルトブロックが混じり、小礫が出土している。

遺物は、1層から出土した土師器皿Po21を図化した。

### 3074柱穴(第33図、第2表、図版5)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(G-G'ライン)。北側が僅かに3073柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.37m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.43mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～5層からなり、検出面で径0.16～0.19mの礎盤石もしくは根巻石と考えられる扁平礫が出土した。柱抜き取り後に埋め戻されたものであろう。

### 3344柱穴(第33図、第2表、図版5)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてⅢ-2層上面で検出した柱穴である(G-G'ライン)。東半部が3074柱穴に切られている。平面形は不明であり、残存規模は長軸0.28m、短軸0.07m、深さ0.31mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の灰黄褐色シルトが堆積している。

遺物は、小片のため図化していないが、検出面から土師器が出土している。

### 3075柱穴(第34図、第2表、図版5)

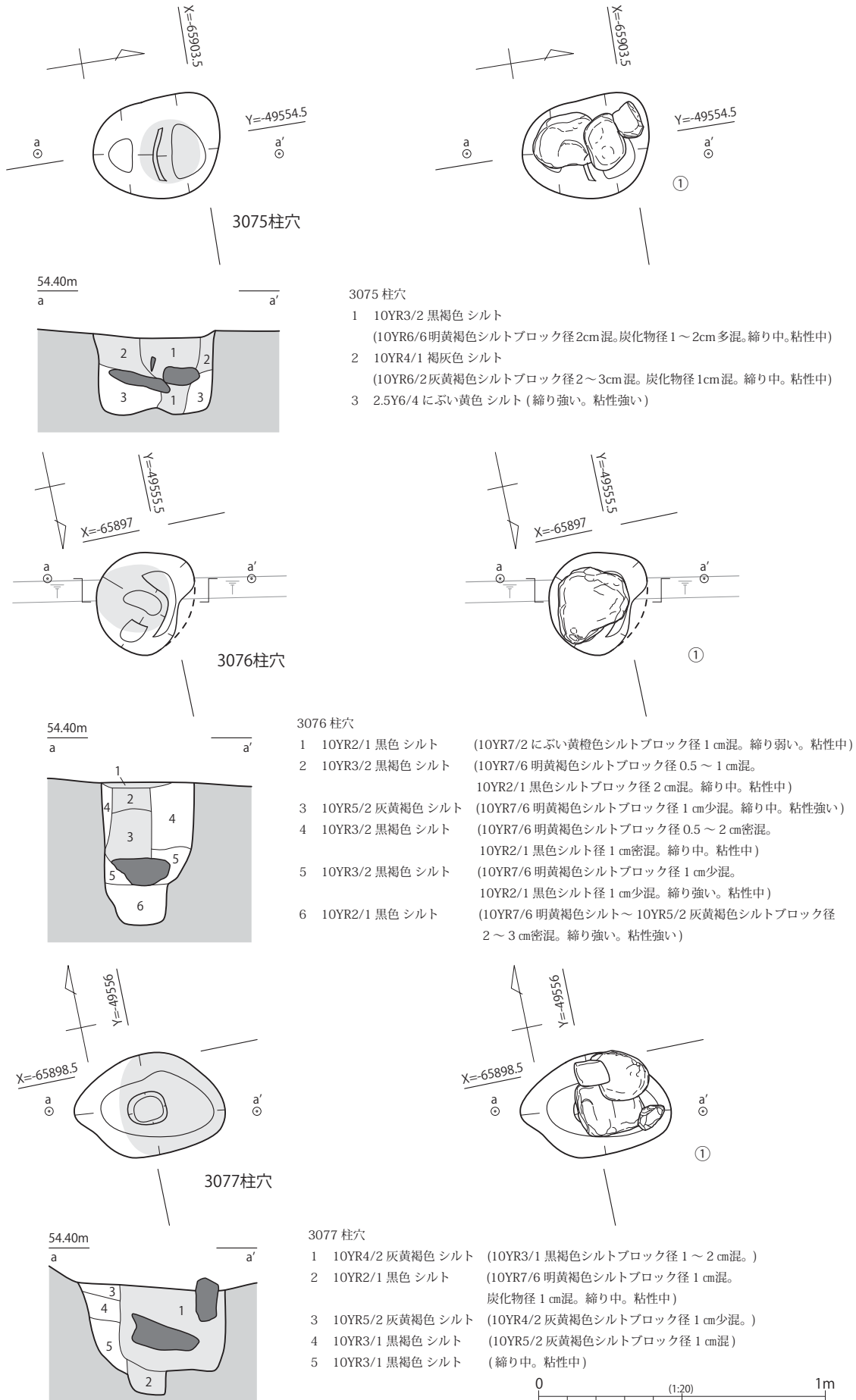
調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(G-G'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.45m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層中位及び3層上面に径約0.12～0.22mの扁平礫が確認された。1層中の扁平礫は礎盤石もしくは根巻石と考えられ、柱抜き取り後に埋め戻されたものであろう。

### 3076柱穴(第34図、第2表、図版5)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(H-H'ライン)。倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で一部削平されている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.50mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1～3層と掘方埋め土の4～6層からなり、6層上面に径0.23～0.29mの礫が出土している。締まりが強い6層は掘方埋め土であり、この礫は礎盤石と考える。

### 3077柱穴(第34図、第2表、図版6)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(H-H'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.53m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.37mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3～5層からなり、1層から径約0.1～0.25mの礫が出土し



第34図 掘立柱建物12 3075~3077柱穴

ている。これらは礎盤石もしくは根巻石と考えられ、柱抜き取り後に埋め戻されたものであろう。

#### 3078柱穴(第35図、第2表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(H-H'ライン)。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.39m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.50mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3～5層からなる。1層上位で径0.1mの角礫が出土している。

#### 3081柱穴(第35図、第2表)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(I-I'ライン)。倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で北半部を削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.28mを測る。埋土は柱痕の1層と掘方埋め土2～4層からなる。

#### 3080柱穴(第35図、第2表、図版6)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(H-H'ライン)。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.38m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、1層から径約0.1～0.2mの扁平礫や亜角礫が複数出土している。礎盤石や根巻石等に使用された礫が、柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

#### 3082柱穴(第36・42図、第2・15表、図版48)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(I-I'ライン)。南側で3091柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.47m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.24mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3～5層からなる。

遺物は、3層から柱状高台Po30が出土している。

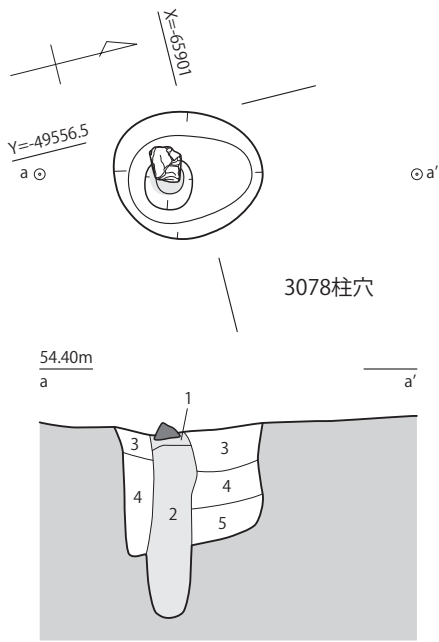
#### 3091柱穴(第36・42図、第2・15表、図版48)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(I-I'ライン)。北側が3082柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.35m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.28mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

遺物は、1層最上面から土師器皿Po13が出土している。

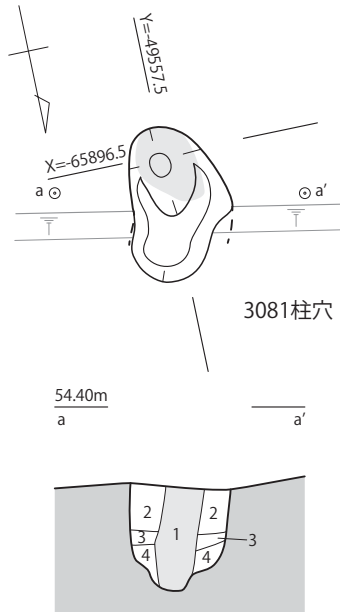
#### 3083柱穴(第36図、第2表)

調査区南西9F-10f、10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(I-I'ライン)。南東側で3100柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.56m、短軸0.50m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなる。1層から根巻石等として使用されたと考えられる礫が出土している。柱抜き取り後に埋め戻されたもので



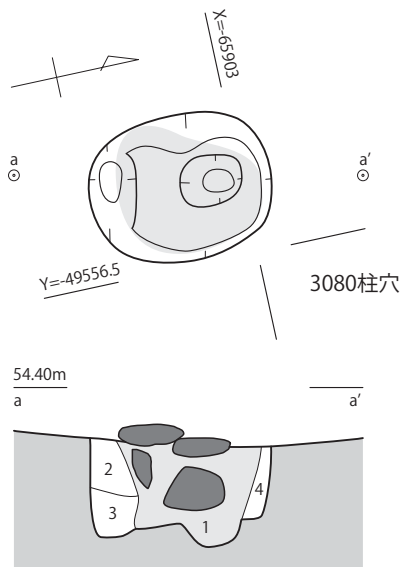
3078 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (縮り弱い。粘性弱い)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径2cm 少混。炭化物径1cm 混。縮り中。粘性中)
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト  
(10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック径2cm 混。縮り中。粘性中)
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック径3cm 混。炭化物径1cm 混。縮り中。粘性中)
- 5 2.5Y7/6 明黄褐色シルト  
(10YR3/2 黒褐色シルトブロック3cm 混。縮り強い。粘性強い)



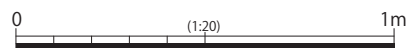
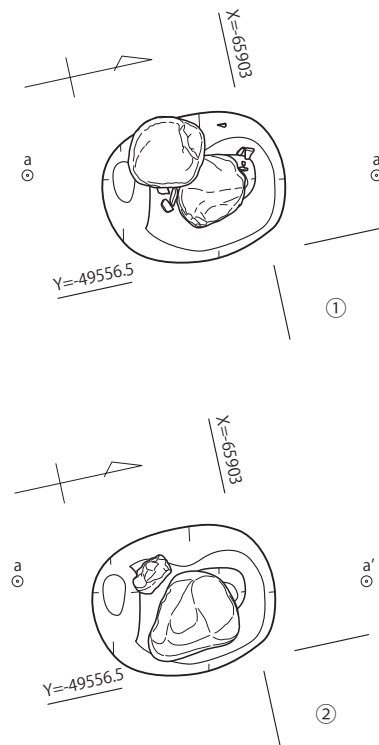
3081 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト～10YR5/3 にぶい黄褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径1cm 混。炭化物径1cm 混。縮り弱い。粘性弱い)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径1cm～10YR3/1 黒褐色シルトブロック径1cm 多混。縮り中。粘性中)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト (縮り強い。粘性強い)
- 4 2.5Y7/4 浅黄色シルト～10YR6/2 灰黄褐色シルト (縮り中。粘性中)

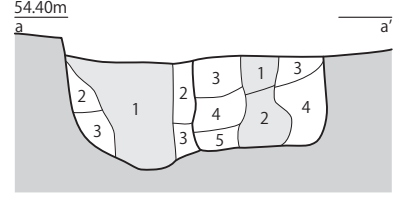
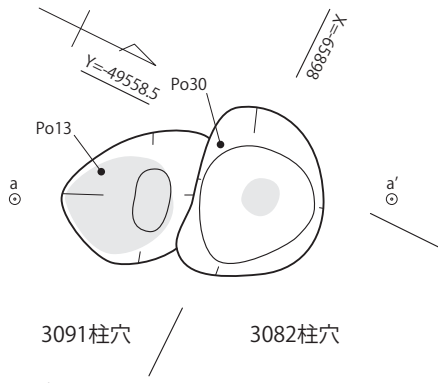


3080 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径2cm 混。炭化物径1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径3cm 混。炭化物径1cm 混。縮り中。粘性中)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径2～3cm 混。縮り中。粘性中)
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物径1cm 混。縮り中。粘性中)



第35図 掘立柱建物12 3078・3080・3081柱穴

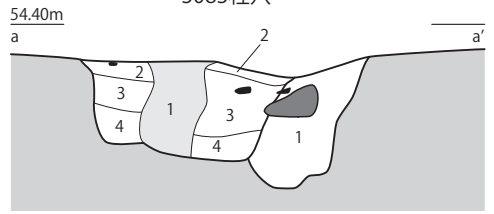
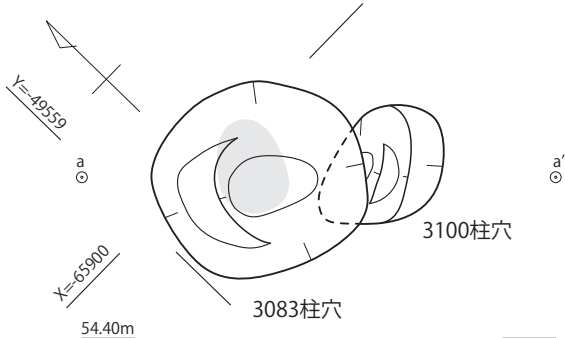


3082 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1 cm混。締り中。粘性弱い)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色 シルト (締り中。粘性中)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 2～3 cm混。炭化物径 5mm 少混。締り中。粘性中)
- 4 10YR3/1 黒褐色 シルト (締り中。粘性中)
- 5 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1 cm混。締り中。粘性中)

3091 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルトブロック  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 2 cm混。炭化物径 5mm 混。締り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色 シルト (炭化物径 5mm 混。締り中。粘性中)
- 3 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック径 2～3 cm混。締り中。粘性中)

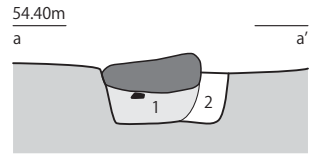
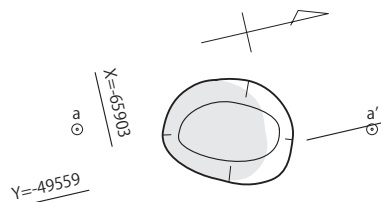
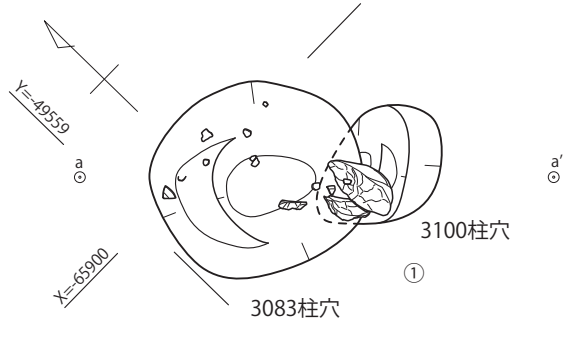


3100 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト (炭化物径 1 cm多混)

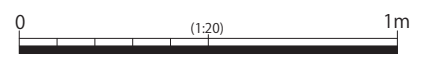
3083 柱穴

- 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1～2cm～10YR5/2 灰黄褐色シルト  
ブロック径 2cm 混。炭化物径 5mm 多混。締り弱い。粘性弱い)
- 2 10YR3/2 黒褐色 シルト  
(10YR2/1 黒色シルトブロック径 5cm 混。炭化物径 1cm 混。締り中。粘性弱い)
- 3 10YR3/2 黒褐色 シルト  
(10YR2/1 黒色シルト～10YR7/6 明黄褐色シルト。締り中。粘性中)
- 4 10YR3/2 黒褐色 シルト (締り中。粘性中)



3084 柱穴

- 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 混。炭化物径 1cm 混。締り中。粘性中)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 混。締り中。粘性中)



第36図 掘立柱建物12 3082～3084・3091・3100柱穴

あろう。

### 3100柱穴(第36図、第2表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(M-M'ライン)。北西側を3083柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.39m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層で炭化物を多く含む。埋土からは長軸0.12~0.2mの礫が出土している。

### 3084柱穴(第36図、第2表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、V層上面で検出した身舎の柱穴である(I-I'ライン)。掘方上部は削平されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層からは径0.21~0.26m、厚さ0.08mの扁平礫が出土している。柱抜き取り後に礎盤石が埋め戻されたと考えられる。

### 3085柱穴(第37図、第2表、図版6)

調査区南西9F-10f・10gグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(J-J'ライン)。倉吉市教委による試掘トレンチ(15T3)で南側の一部を削平されている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.23mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

### 3086柱穴(第37図、第2・15表、図版6・48)

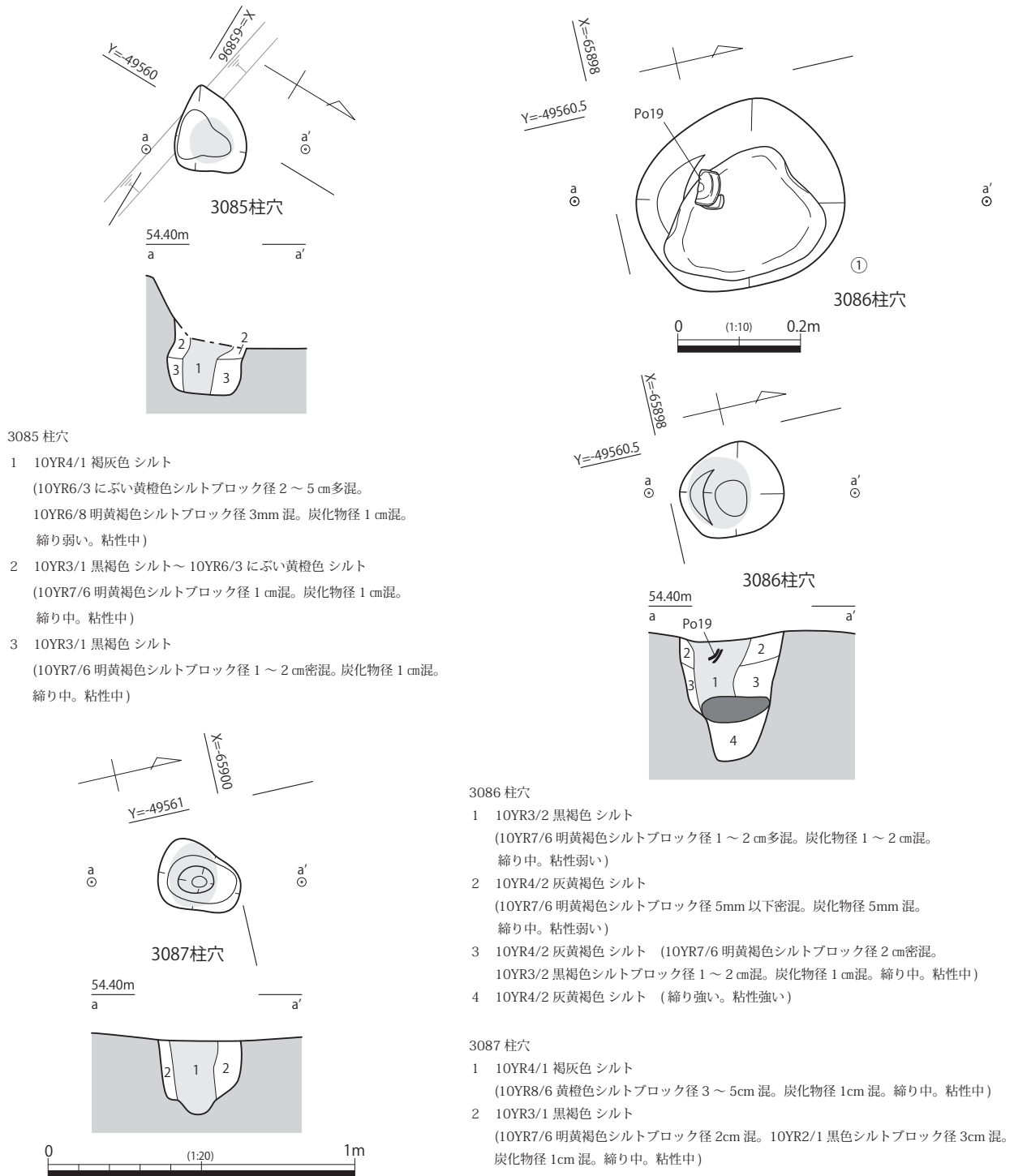
調査区南西9F-10gグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(J-J'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.39mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2~4層からなり、1層から土師器皿Po19が出土している。掘方埋め土4層上面に径0.2~0.27m、厚さ0.08mの礎盤石が確認された。

### 3087柱穴(第37図、第2表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した身舎の柱穴である(J-J'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.27m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.24mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

### 3088柱穴(第38図、第2表、図版6)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した身舎の柱穴である(J-J'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.43m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.44mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1~3層と掘方埋め土の4~6層からなる。1層上面から径0.23~0.26mの礎盤石と考えられる扁平礫が出土している。柱抜き取り後に埋め戻されたものであろう。



第37図 掘立柱建物12 3085~3087柱穴

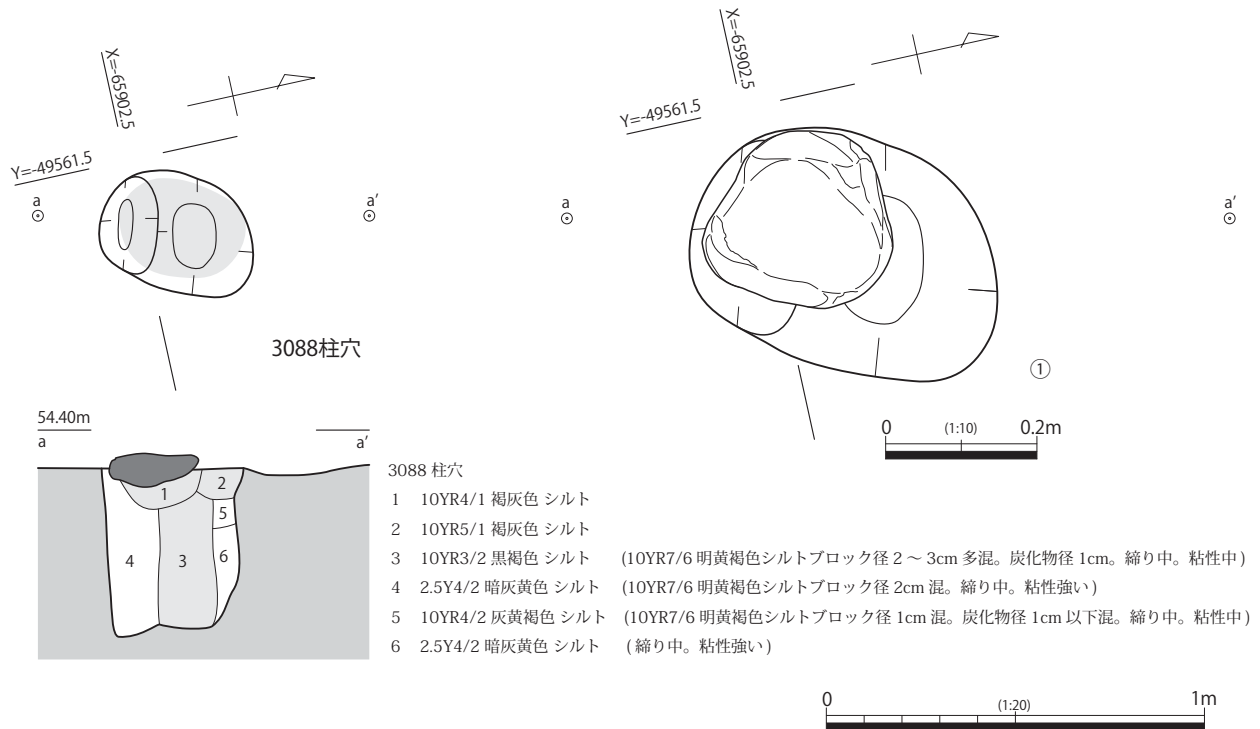
**880柱穴(第39図、第2表)**

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.50mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、底面に径約0.2mの礎盤石が置かれていた。

**876柱穴(第39図、第2表)**

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(B-B'ライン)。平面





第38図 掘立柱建物12 3088柱穴

形は楕円形を呈し、東側にテラス面を設けている。規模は長軸0.53m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.49mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層には土器片や炭化物が含まれる。底面に径約0.17~0.22mの礎盤石が置かれていた。土器は小片のため図化していない。

### 878柱穴(第39図、第2表)

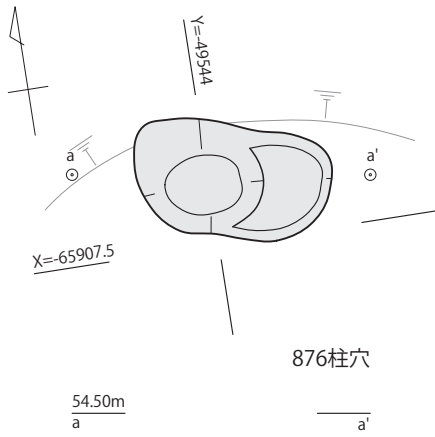
調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.24mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、底面には径約0.2m、厚さ0.06~0.15mの礫が2段重なって出土した。下段の礫は原位置を保っている可能性があるが、上段は柱抜き取り後に置かれたものと考えられる。

### 1014柱穴(第40図、第2表)

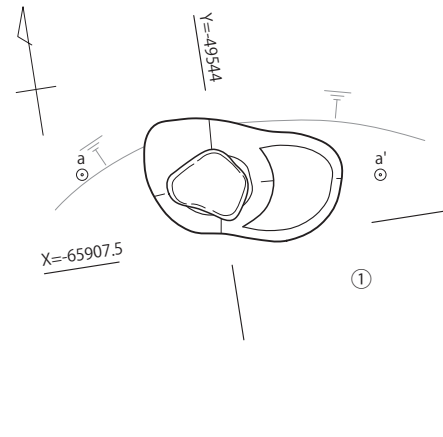
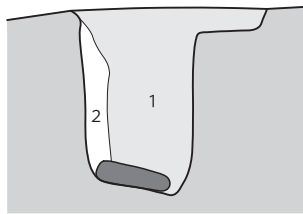
調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.19m、短軸0.17m、検出面からの深さ0.38mを測る。埋土の中心に柱痕跡と考えられる黒色シルト1・2層が堆積する。

### 3099柱穴(第40・42図、第2・16表、図版48)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(F-F'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は黒色と黒褐色シルト層が3層堆積する。

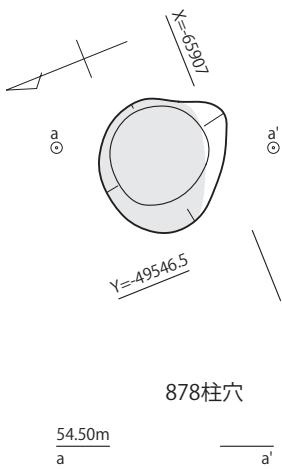


876柱穴

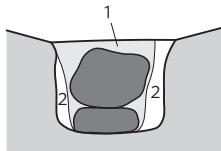


876 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(土器片・炭化物混。円礫径3～8cm混。縮まりやや強い)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト  
(地山礫径5mm少量混。粘性やや強い。縮まりやや強い)

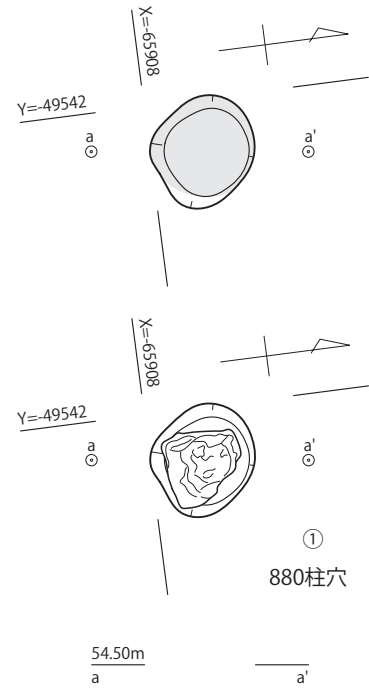
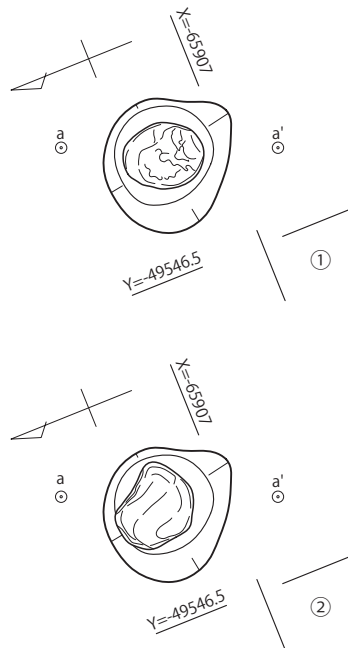


878柱穴

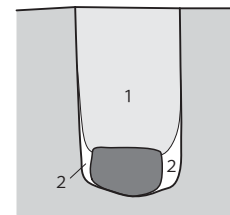


878 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(礫径0.1～0.3cm極少量混。粘性やや強い。縮まりやや強い)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト  
(粘性やや強い。縮まり強い)



880柱穴



880 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(土器片混。炭化物・礫径0.1～0.2cm混。縮まり強い)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト  
(粘性やや強い。縮まり強い)



H28年度調査区検出遺構：876・878・880柱穴

第39図 掘立柱建物12 876・878・880柱穴

遺物は2層から土師器坏Po38が出土している。

### 3098柱穴(第40図、第2表、図版5)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(G-G'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.18mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層上面から長軸0.18mの扁平礫が出土している。礎盤石もしくは根巻石が柱抜き取り後に埋め戻された可能性がある。

### 3096柱穴(第41図、第2・15表、図版6)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した廂の柱穴である(I-I'ライン)。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.18mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、前者には多量の炭化物が含まれていた。

遺物は1層から柱状高台Po23が出土している。

1層に含まれる炭化材(試料1・2)について樹種同定を行った結果、試料1はアカガシ亜属、試料2はコナラ節と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、試料1はcalAD1039-1184(暦年較正2σ)、試料2はcalAD1036-1158(暦年較正2σ)の値が得られた(第5章第1節参照)。本遺構から出土した土器の年代観と大きな矛盾はない。

### 3097柱穴(第41図、第2表、図版6)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(H-H'ライン)。北側で3101柱穴を切っている。平面形は不円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.24mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

### 3101柱穴(第41図、第2表、図版6)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した廂の柱穴である(H-H'ライン)。南側を3097柱穴に切られる。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.33m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.21mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2層からなり、1層上部に長軸0.2m、厚さ0.08mの角礫が据え置かれていた。

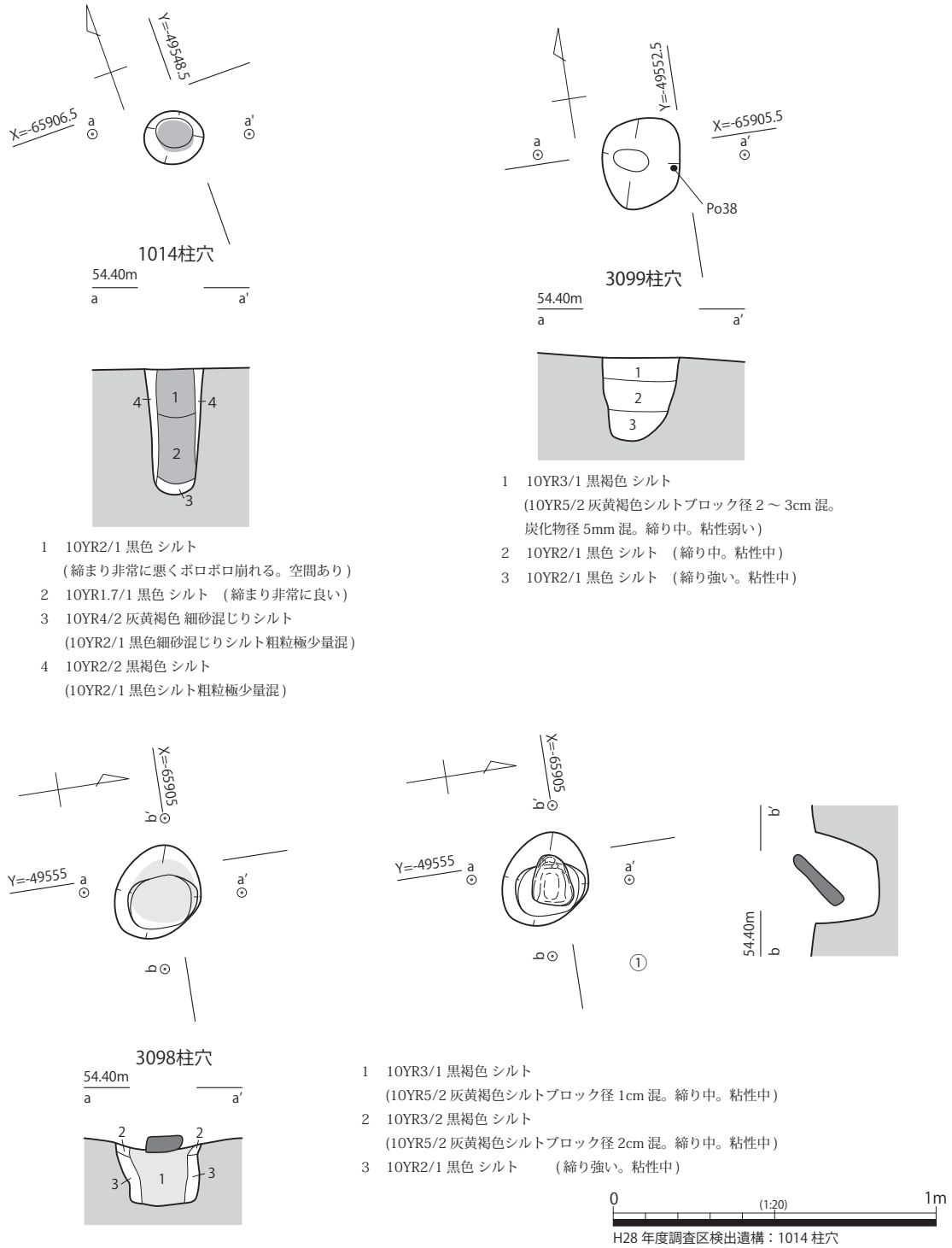
### 3095柱穴(第41・42図、第2・15表、図版6・48)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した廂の柱穴である(J-J'ライン)。南側で3102柱穴を切っている。掘方上部は削平されている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2・3層からなる。1層には多量の炭化物と土師器坏や柱状高台の破片がまとまって出土している。

遺物は、1層から土師器皿Po20、柱状高台Po31が出土している。

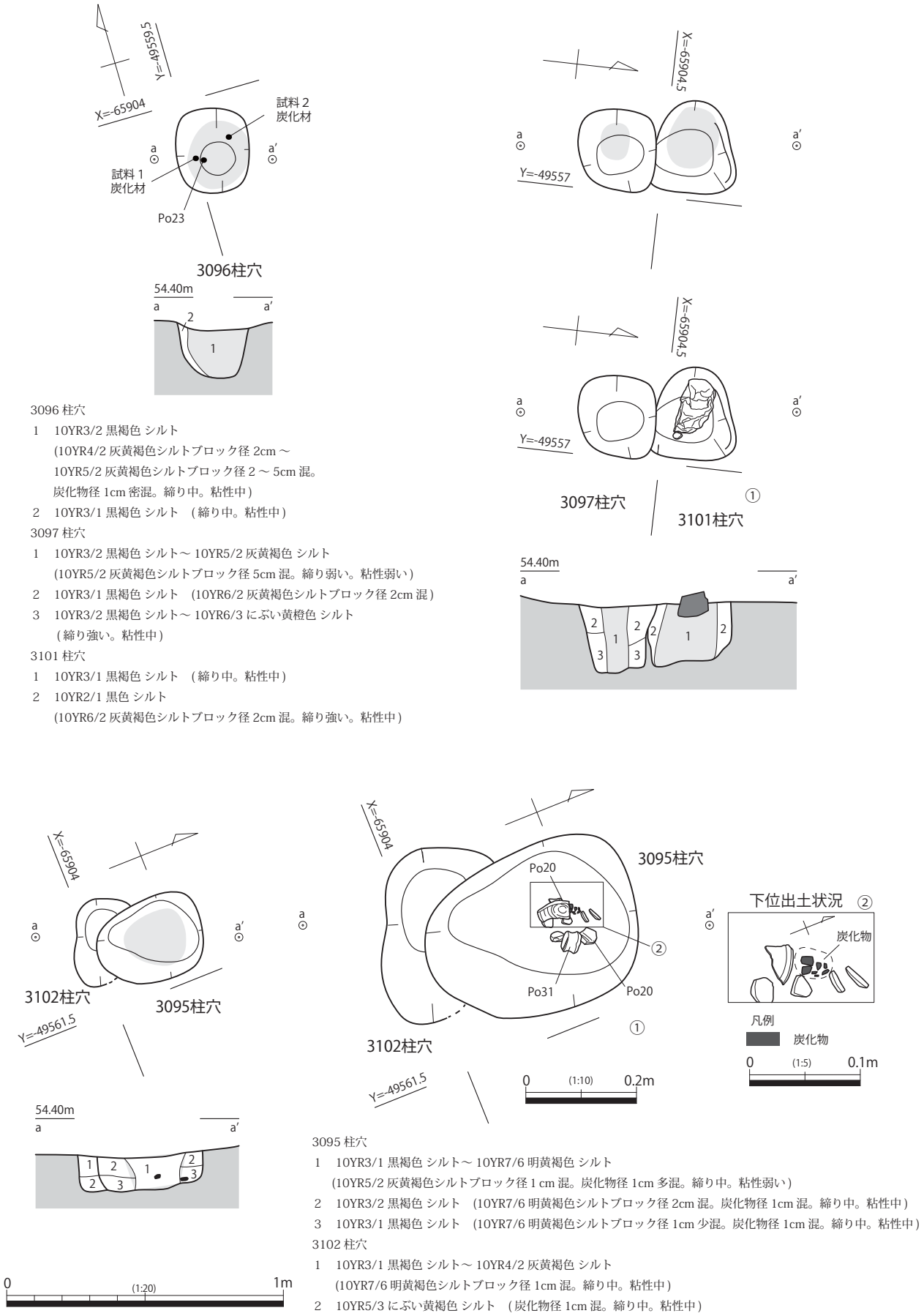
### 3102柱穴(第41図、第2表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した廂の柱穴である。北側で3095柱穴に切

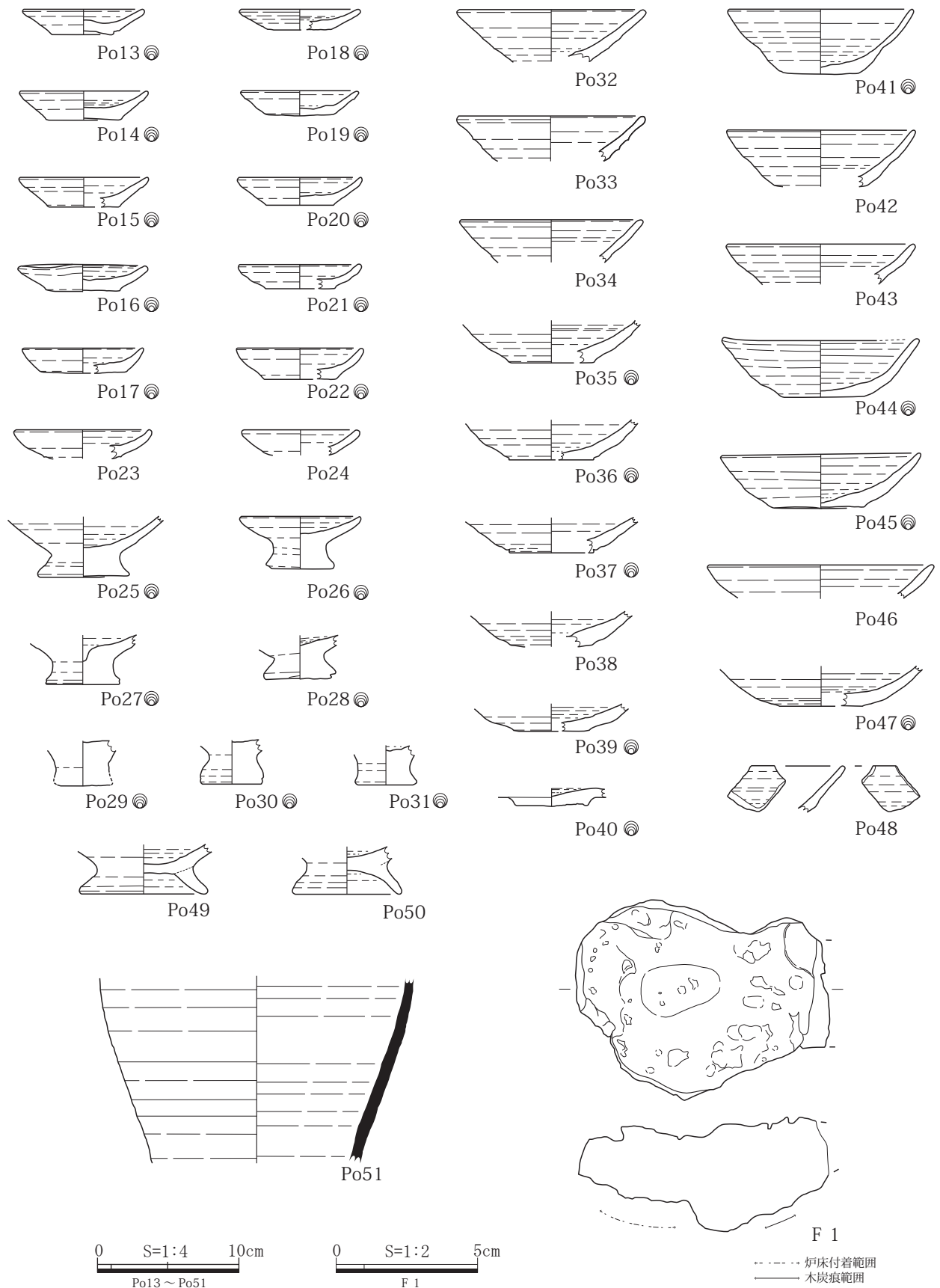


第40図 掘立柱建物12 1014・3098・3099柱穴

られ、掘方上部は削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.33m、短軸0.13m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は掘方埋め土の1・2層が堆積する。



第41図 掘立柱建物12 3095~3097・3101・3102柱穴



第42図 掘立柱建物12出土遺物

**掘立柱建物12出土遺物(第42図、第15・16・47表、図版48～50)**

本遺構からの出土遺物を第42図にまとめている。

Po13～22は回転台成形の土師器皿である。底部から口縁部が直線状に外傾するPo13～16、器高が低く口縁部が内湾するPo20～22、扁平で立ち上がりが短いPo18・19、器高が低く立ち上がりが短い逆台形のPo17があり、バリエーションがみられる。Po32～47は回転台成形の土師器坏である。器高が高く逆台形状となるPo32～34・41・42、同じく器高が高いが口縁部にかけてやや内湾するPo43・44、器高が低く口径が広く内湾するPo45・46が認められる。Po49・50は回転台成形の土師器高台付坏であり、高台が高く大きく開くPo49がある。Po23～31は回転台成形の土師器柱状高台である。柱部が一旦内湾してから開くPo25～28と裾端部が一段高くなっているPo30がみられる。Po51は須恵器壺の体部であり、内外面ナデ調整である。

F1は椀形鍛冶滓で、上面中央が窪み、下面の凸部には炉床が付着している。

**掘立柱建物20(第20・43～52図、第4・16・17・49・50表、図版4・7～9・50・87)**

調査区南西9F-9e・9f・10e・10fグリッドにおいて、Ⅲ-1・2層上面で検出した。このうちⅢ-2層で検出した柱穴は、埋土がⅢ-1層由来であること、Ⅲ-1層で検出した柱穴規模と類似し柱筋も一致することから、本遺構を構成するものとして帰属させた。南辺は倉吉市教委の試掘トレンチ(15T3)内で、総じて遺存状況が悪く、そのうち南東隅の柱穴2箇所は削平されて確認できなかった。また梁行の北から2列目は水田の用水路にかかる部分で調査ができなかったため、推定ラインとしている。本遺構は、3036・3039～3055柱穴によって構成される。

桁行4間(8.6m)、梁行4間(8.1m)、平面積69.7㎡で、建物の主軸はN-12°-Eである。平面形はほぼ南北方向に広がる長方形を呈し、東西辺と北辺に廂が付く三面廂総柱建物である。廂を除いた身舎の推定規模は桁行3間(7.0m)、梁行2間(4.5m)、平面積31.5㎡を測る。

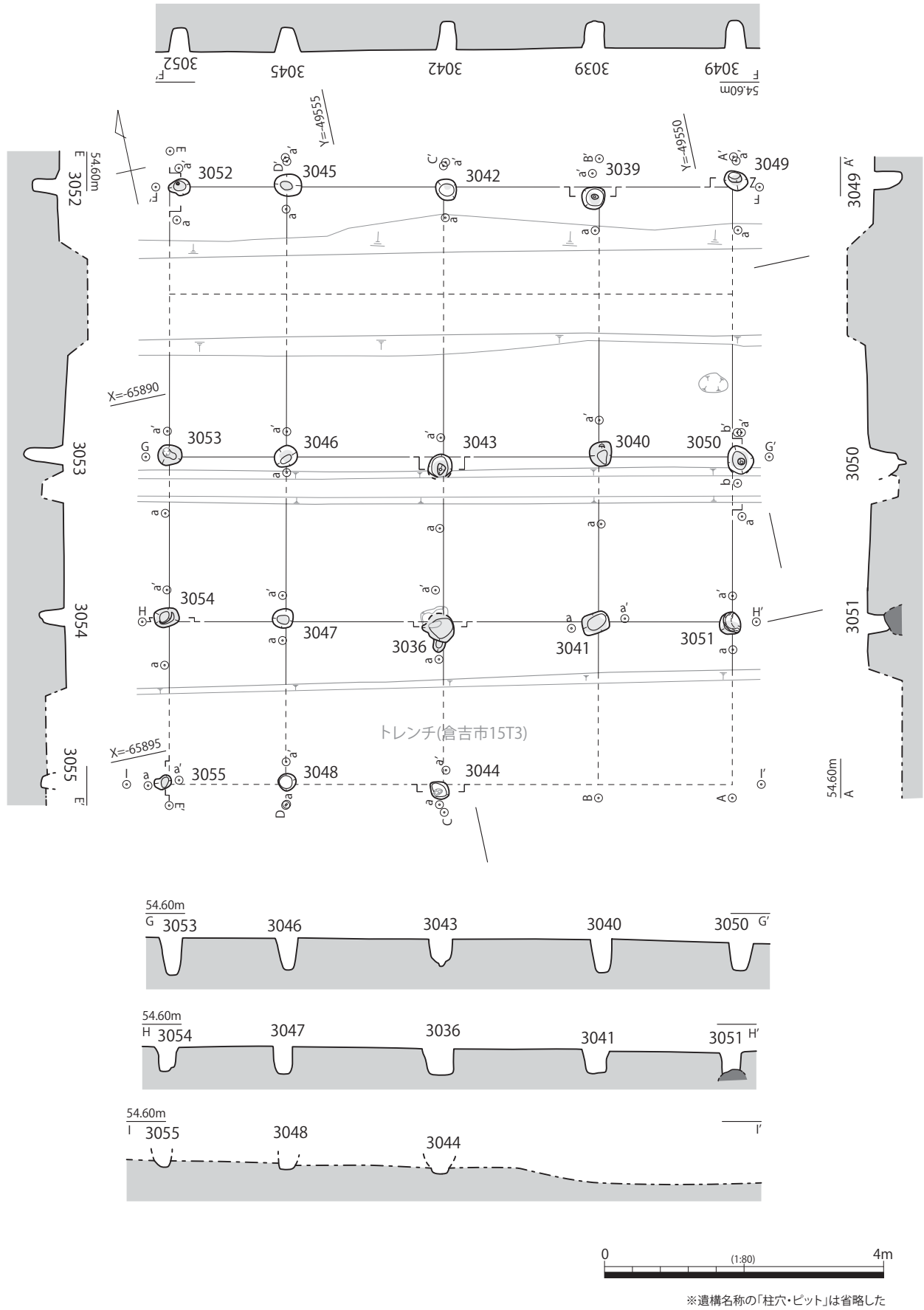
柱穴の平面形は円形又は楕円形で、やや歪なものも含まれる。身舎の柱穴は長軸0.25～0.38(平均0.32)m、検出面からの深さが0.35～0.48(平均0.40)mで、底面の標高は53.75～53.90mである。

廂の柱穴は長軸0.24～0.40(平均0.34)m、検出面からの深さが0.30～0.55(平均0.39)mで、底面の標高は53.66～53.95mである。

身舎の柱間寸法は桁行で2.2～2.4(平均2.34)m、梁行で2.2～2.3(平均2.24)mである。廂の柱間寸法は西辺が1.5～1.7(平均1.65)m、東辺が1.9～2.1(平均2.00)mを測る。

柱は抜き取られているものが大半を占め、掘方埋め土からは拳大から人頭大の礫が出土しているものもみられる。3040・3044・3047・3048柱穴には礎盤石が、3042・3047柱穴で根巻石が確認された。3036・3040・3041・3046柱穴では柱抜き取り後に礎盤石や根巻石等が埋め戻されている。さらに3050柱穴では礎盤石や根巻石と考えられる大礫を4段にわたり重ね置いていた。多数の土器の廃棄も含め、基礎固めに使用された礫の埋め戻しは地鎮に係る祭祀行為と想定される。これらの柱穴出土の主な礫の特徴については第49・50表にまとめている。確認された基礎固めに用いられた礫の総重量は約63kgであり、このうち被熱痕跡がみられるものは59%である。

以下、各柱穴及び関連する小穴について詳述する。



第43図 掘立柱建物20(1)



### 3040柱穴(第45・52図、第4・16表、図版7・50)

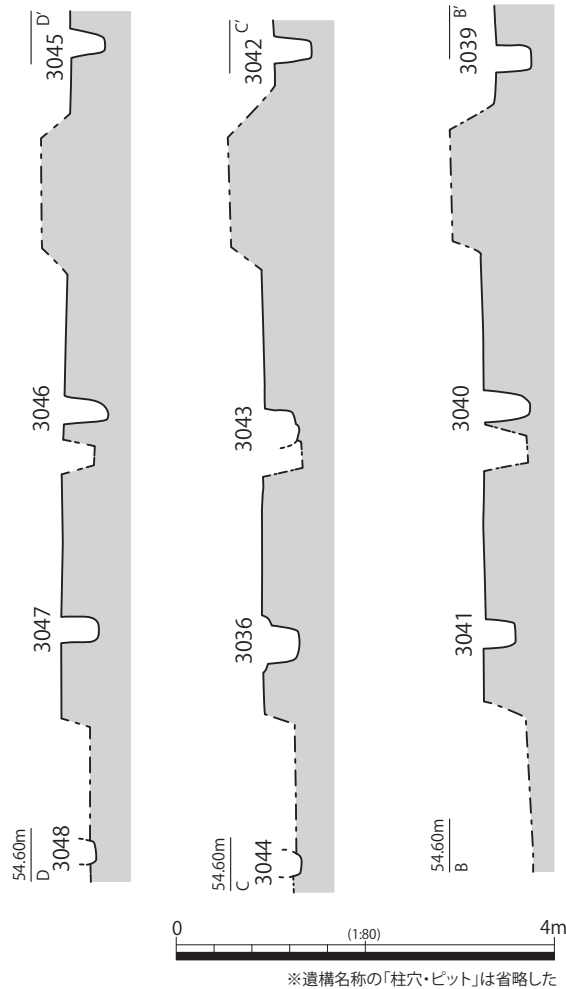
調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.48mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、1層下部から礎盤石、1層上面に長軸0.25mの大礫、1層中からは土器片が多数出土している。上面の大礫や1層中の土器片は、柱抜き取り後に埋め戻したものと考えられる。

遺物は、掘方埋め土から土師器坏Po66が出土している。

### 3041柱穴(第45・52図、第4・17表、図版7・50)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層中位から径0.23～0.24m、厚さ0.12mの扁平礫が出土している。礎盤石であったものが、柱が抜き取られた後に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、1層検出面から須恵器甕Po68が出土している。



第44図 掘立柱建物20(2)

### 3043柱穴(第46・52図、第4・16・17表、図版8・50・87)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整円形を呈し、南側は僅かに暗渠により削平されている。残存規模は長軸0.34m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、1層からは大小の礫や土器片が複数出土している。礫は根石か礎盤石と想定され、柱が抜き取られた際に巻き上げられた可能性が考えられる。

遺物は、1層から土師器坏Po62・65、埋土中から初期高麗の青磁Po69が出土している。

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第4表 掘立柱建物20遺構計測表

柱穴 (身舎) (△: 残存値)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	備考
	長軸	短軸	深さ							
3040	0.35	0.32	0.48	53.75	-	-	-	礎盤石	礎盤石・大礫、土器片(抜取痕)土師器坏Po66(堀方埋め土)	礎盤石上面の標高53.94m 上面の大礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3041	0.38	0.29	0.35	53.89	-	-	-	-	礫(礎盤石?)、須志器甕Po68(抜取痕)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3043	△0.34	0.32	0.36	53.86	-	-	-	-	礫(礎盤石もしくは根石)、土器片、土師器坏Po62・65(抜取痕)、初期高麗青磁Po69(埋土)	礫は柱抜き取りの際に巻き上げられたものか?
3036	△0.50	0.45	0.39	53.84	-	-	-	-	礫(礎盤石もしくは根巻石)、土器片、土師器皿Po53(抜取痕)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し 攪乱に切られる
3044	0.31	0.26	△0.11	53.85	-	-	-	礎盤石	礎盤石(堀方埋め土か)	礎盤石上面の標高54.02m トレンチにより削平
3046	0.34	0.29	0.45	53.78	-	-	-	-	角礫、扁平礫(礎盤石・根巻石?)、土師器皿Po54(抜取痕)	角礫・扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3047	0.30	0.28	0.39	53.89	-	-	-	礎盤石 根巻石	礎盤石・根巻石、礫(堀方埋め土)土師器坏Po60・61・64・67(抜取痕)、Po63(埋土)	礎盤石上面の標高54.10m、炭化材(試料11)
3048	0.25	0.24	△0.07	53.90	-	-	-	礎盤石	礫(堀方埋め土)	トレンチにより削平

柱穴 (廂) (△: 残存値)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	備考
	長軸	短軸	深さ							
3049	0.34	0.27	0.38	53.72	-	0.08	-	-	土師器柱状高台Po58(堀方埋め土)	
3050	0.40	0.37	0.47	53.66	-	-	-	-	大礫(礎盤石・根巻石?)、土器片(抜取痕)	大礫は柱抜き取り後に4段に重ね置き
3051	0.32	0.31	0.30	53.91	-	-	-	-	土師器甕Po59(抜取痕)	
3039	0.35	0.34	0.36	53.73	-	-	-	-	土器片、炭化物(抜取痕)	炭化物(試料9)
3042	0.34	0.30	0.40	53.74	-	-	-	-	根巻石	根巻石、土師器皿Po57(抜取痕)
3045	0.38	0.32	0.35	53.82	-	-	-	-	小礫(抜取痕)	生木(試料10)
3052	0.30	0.23	0.32	53.82	-	-	-	-	-	
3053	0.34	0.29	0.55	53.70	-	-	-	-	土師器皿Po55(抜取痕)、Po56(埋土)	
3054	0.35	0.27	0.35	53.91	-	-	-	-	小礫(抜取痕)	
3055	0.24	0.19	△0.08	53.95	-	0.07	-	-	土師器皿Po52(抜取痕)	トレンチにより削平

柱間寸法(建物全体: 桁行総長)

No	柱間寸法(m)
3042-3044	8.6
3045-3048	8.6

柱間寸法(建物全体: 梁行総長)

No	柱間寸法(m)
3049-3052	8.0
3050-3053	8.2
3051-3054	8.1

柱間寸法(廂: 桁行総長)

No	柱間寸法(m)
西辺 3052-3055	8.6(4間北辺廂含む)
東辺 3049-3051	6.5(3間北辺廂含む)

柱間寸法(廂 北辺: 梁行方向)

No	柱間寸法(m)
3039-3042	2.1
3042-3045	2.3

柱間寸法(身舎: 桁行寸法)

No	柱間寸法(m)
3040-3041	2.4
3043-3036	2.2
3036-3044	2.4
3046-3047	2.3
3047-3048	2.4

柱間寸法(身舎: 梁行総長)

No	柱間寸法(m)
3040-3046	4.5
3041-3047	4.5

柱間寸法(廂 東辺: 桁行方向)

No	柱間寸法(m)
3050-3051	2.4

柱間寸法(廂 東辺: 梁行方向)

No	柱間寸法(m)
3049-3039	2.1
3050-3040	2.0
3051-3041	1.9

柱間寸法(身舎: 梁行方向)

No	柱間寸法(m)
3040-3043	2.3
3043-3046	2.2
3041-3036	2.3
3036-3047	2.2
3044-3048	2.2

柱間寸法(廂 西辺: 桁行方向)

No	柱間寸法(m)
3053-3054	2.3
3054-3055	2.4

柱間寸法(廂 西辺: 梁行方向)

No	柱間寸法(m)
3052-3045	1.5
3053-3046	1.7
3054-3047	1.7
3055-3048	1.7

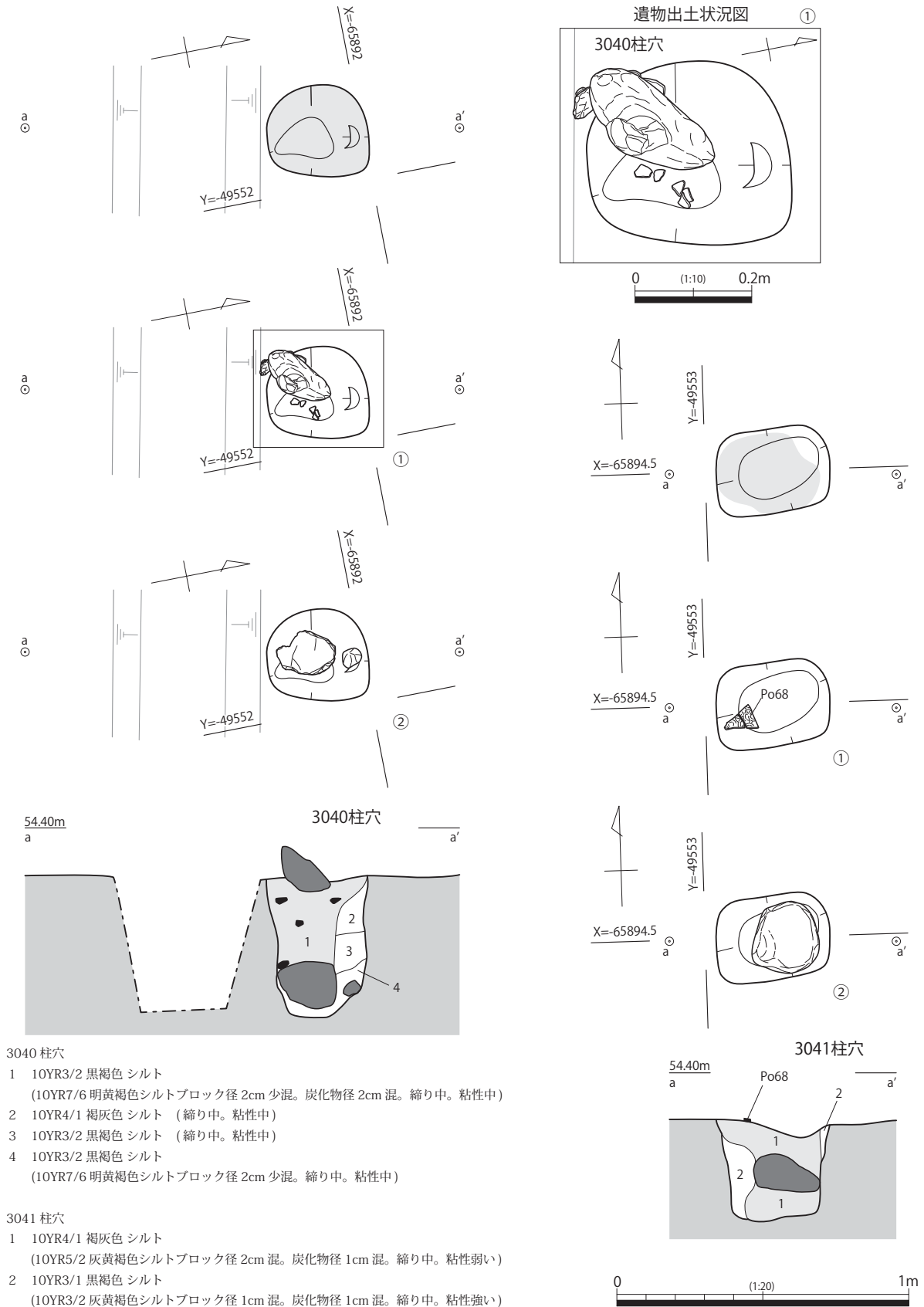
3036柱穴(第46・52図、第4・16表、図版8・50)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、北側は攪乱により削平されている。残存規模は長軸0.50m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.39mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と堀方埋め土の3・4層からなり、2層からは長軸0.18~0.19mの礫や土器片が数多く出土している。礫は礎盤石もしくは根巻石と考えられ、土器も含め、柱が抜き取られた後に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、2層から土師器皿Po53が出土している。

3044柱穴(第47図、第4表、図版8)

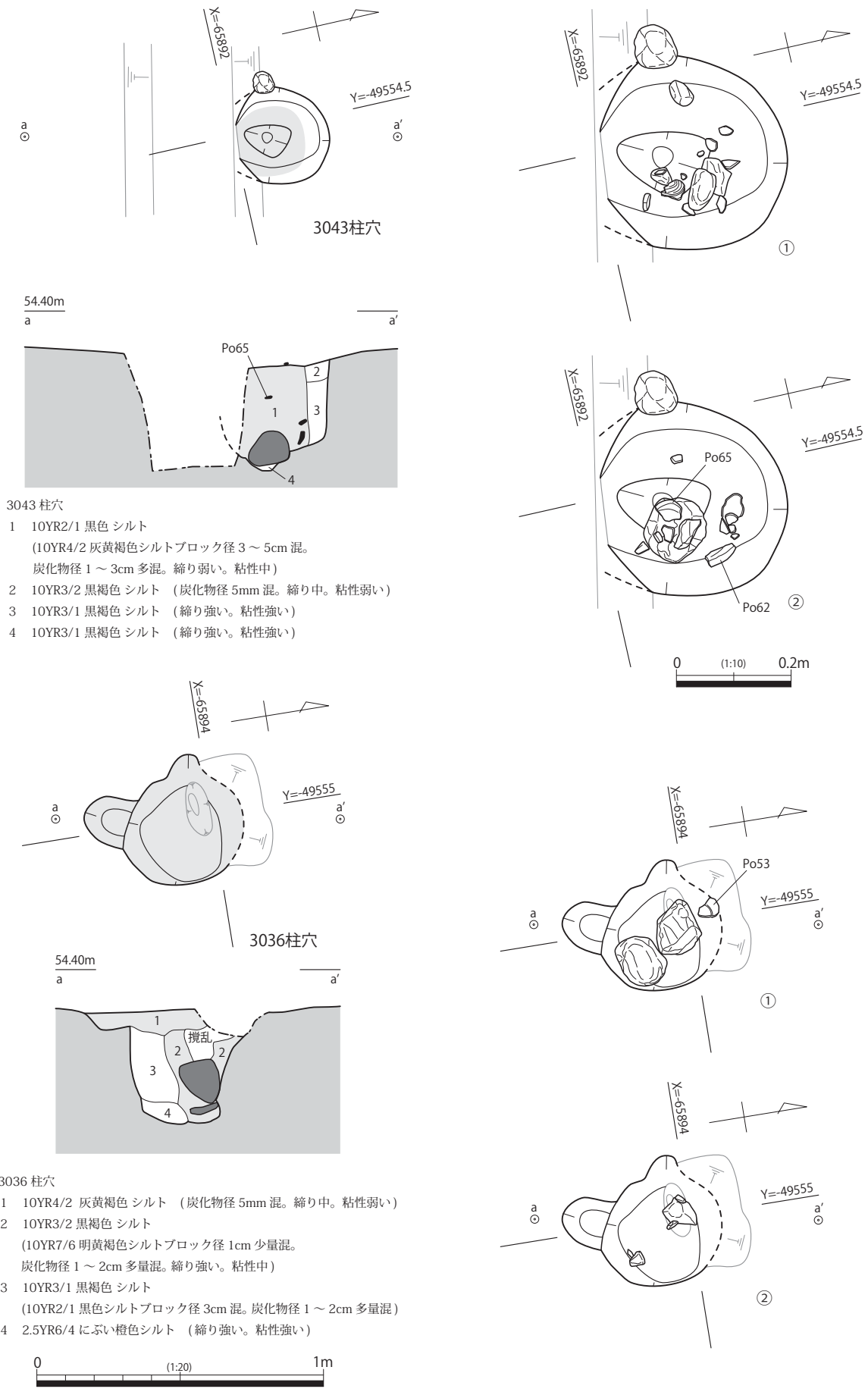
調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅷ層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、倉吉市教委試掘トレンチ内(15T3)にあるため掘方はほぼ削平され、底面付近が僅かに残存する。残存規模は長軸0.31m、短軸0.26m、掘方深さは0.11mを測る。径0.2~0.22m、厚さ0.07mの礎盤石下部に堀方埋め土であるにぶい黄色シルトが2層堆積している。



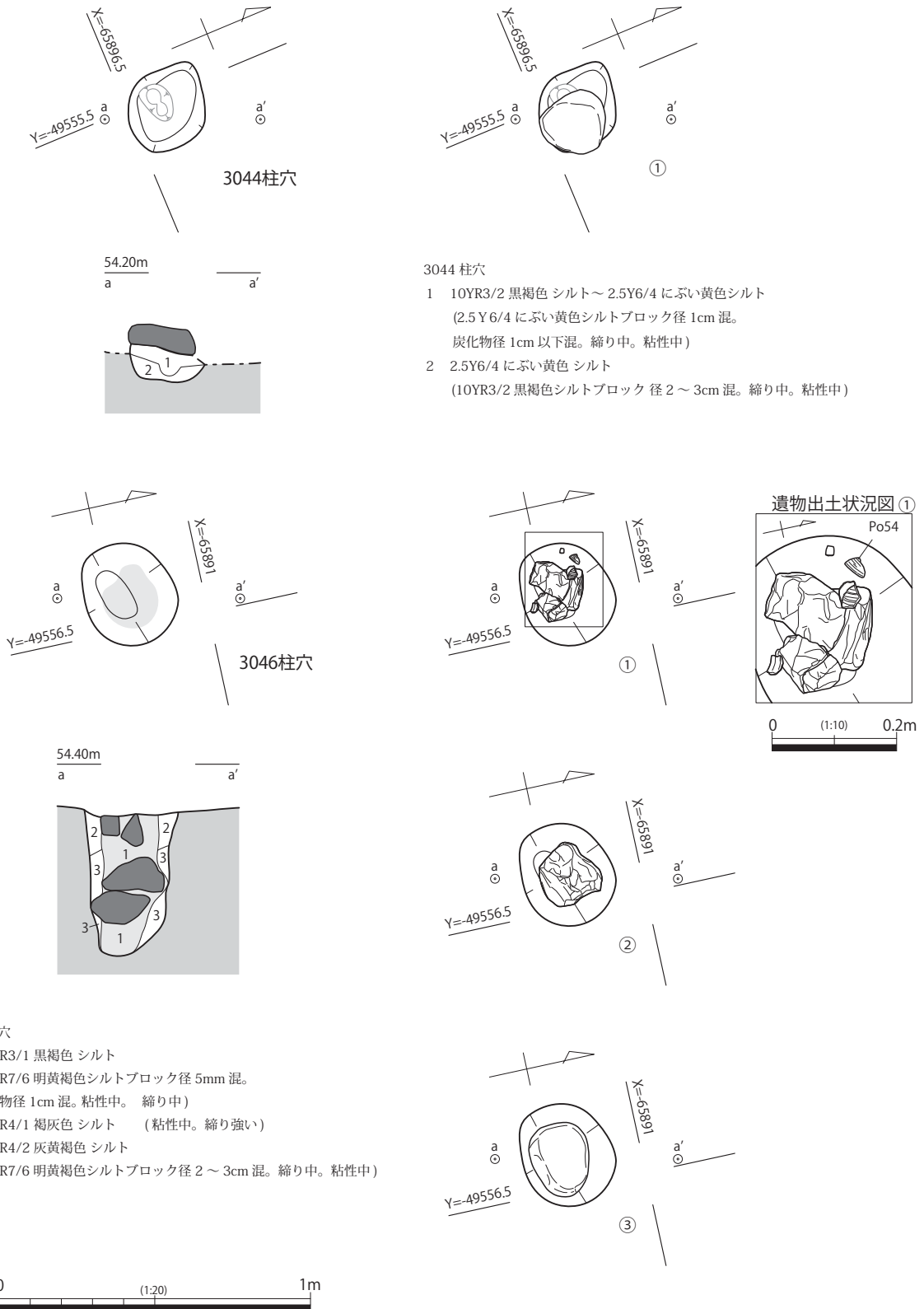
第45図 掘立柱建物20 3040・3041柱穴

3046柱穴(第47・52図、第4・16表、図版8・50)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平



第46図 掘立柱建物20 3036・3043柱穴



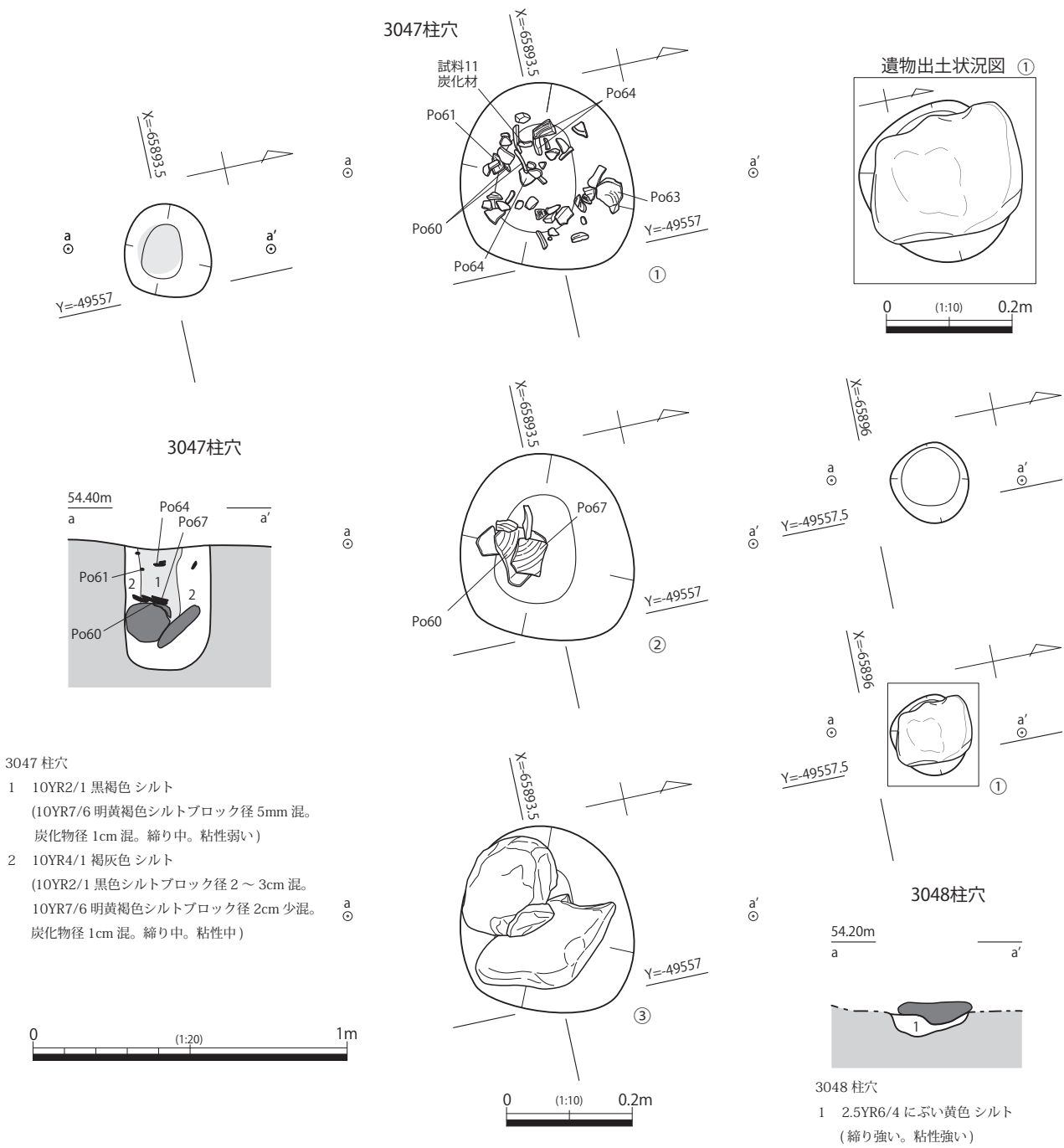
第47図 掘立柱建物20 3044・3046柱穴

面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.45mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層からは長軸0.13～0.24m、厚さ約0.1mの角礫や扁平礫が多数出土している。これらの礫は根巻石や礎盤石であったものが、柱が抜き取られた後に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、1層から土師器皿Po54が出土している。

**3047柱穴(第48・52図、第4・16・17表、図版9・50)**

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.39mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、2層下位からは長軸0.18~0.25mの扁平礫が検出されている。これらは礎盤石と根巻石の可能性がある。また1層上位から中層にわたり土師器の坏を中心に多数の土器片が出土しているが、これらは柱が抜き取られた後に埋め戻されたものと考えられ



第48図 掘立柱建物20 3047・3048柱穴

る。

遺物は、1層から土師器坏Po60・61・64・67、埋土からPo63が出土している。

1層に含まれる炭化材(試料11)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD988-1044(暦年較正2 $\sigma$ の確率1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。本遺構より出土している土器の年代観より、若干古い年代値が得られている。

### 3048柱穴(第48図、第4表、図版9)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅷ層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整円形を呈し、倉吉市教委試掘トレンチ(15T3)ではほぼ掘方は削平されている。残存規模は直軸0.25m、短軸0.24m、磔下部の掘方深さは0.07mを測る。埋土はわずかに残る掘方埋め土の1層が堆積している。1層上面には、径0.2~0.25m、厚さ0.07mの礎盤石が確認できる。

### 3049柱穴(第49・52図、第4・16表、図版7・50)

調査区南西9F-9eグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.38mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

遺物は、掘方埋め土から土師器柱状高台Po58が出土している。

### 3050柱穴(第49図、第4表、図版7)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.40m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.47mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層には大磔を4段にわたり重ね置いたり、土器片が多数廃棄されていた。土器は小片のため図化していない。

### 3051柱穴(第49・52図、第4・16表、図版7・50)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.31m、検出面からの深さ0.30mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。底面は基盤層に包含される大磔が確認され、そこを底面としている。

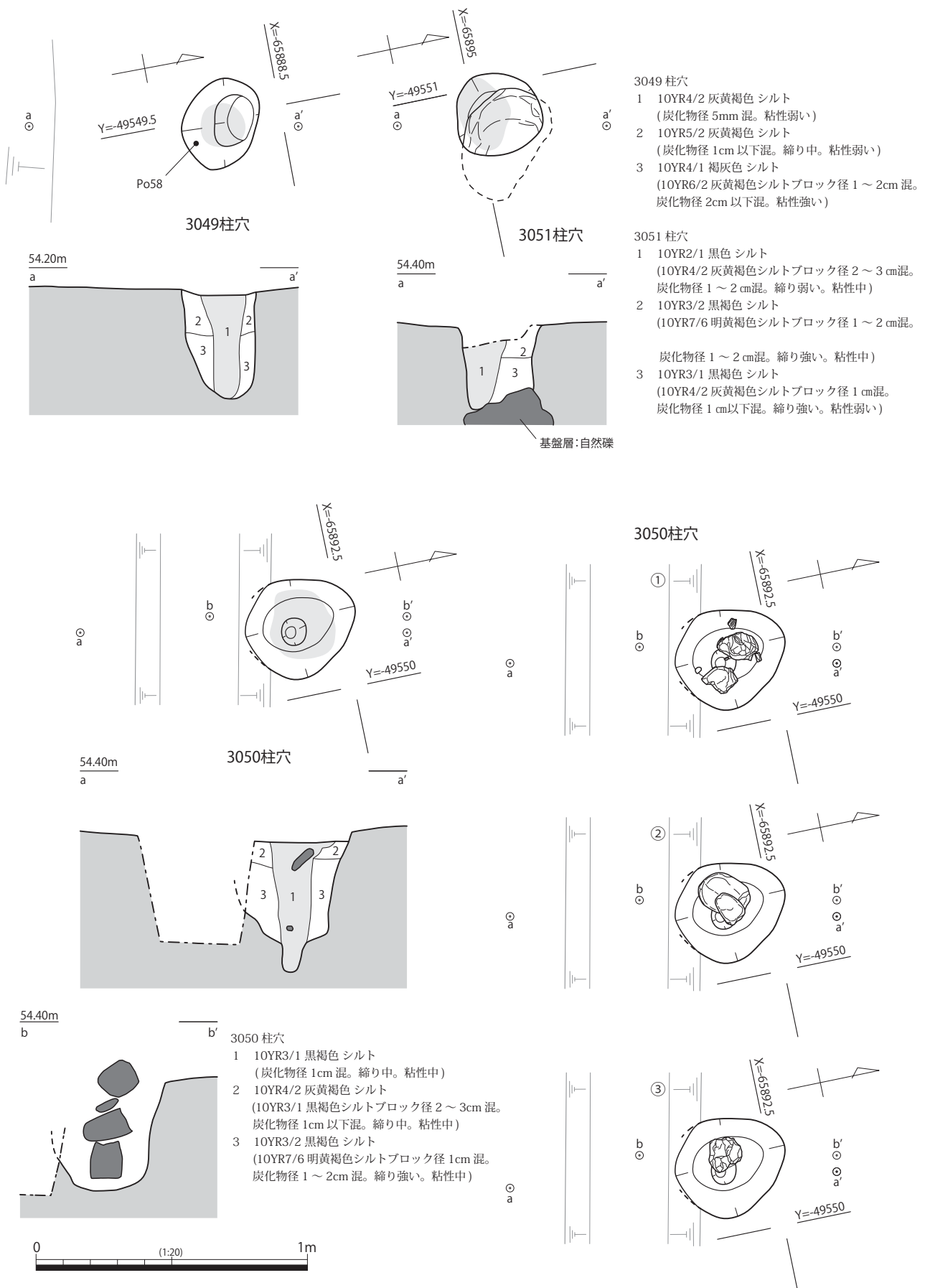
遺物は、1層から土師器甕Po59が出土している。

### 3052柱穴(第50図、第4表、図版9)

調査区南西9F-9fグリッドにおいて、Ⅴ層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.32mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

### 3053柱穴(第50・52図、第4・16表、図版9・50)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面

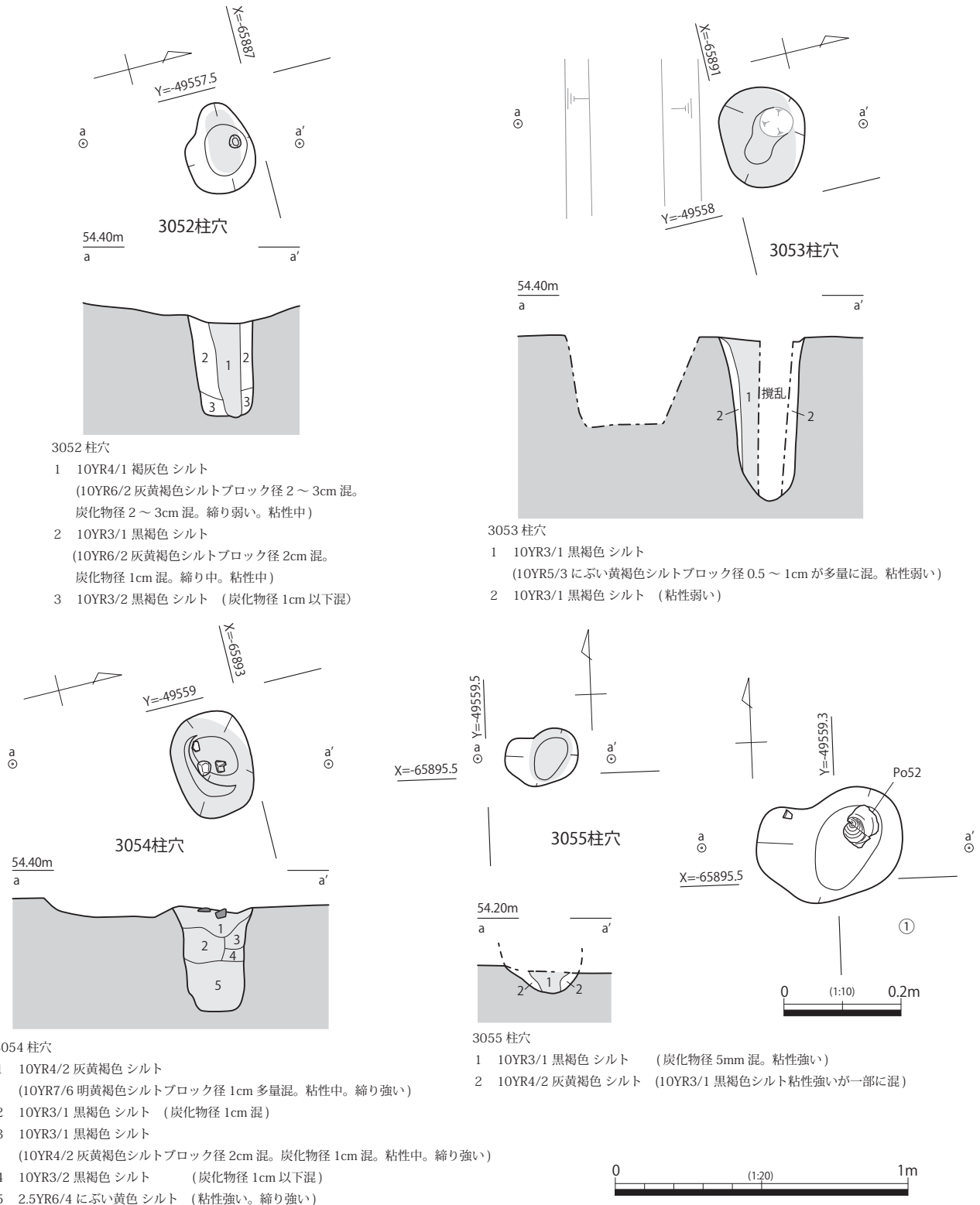


第49図 掘立柱建物20 3049~3051柱穴



形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.55mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

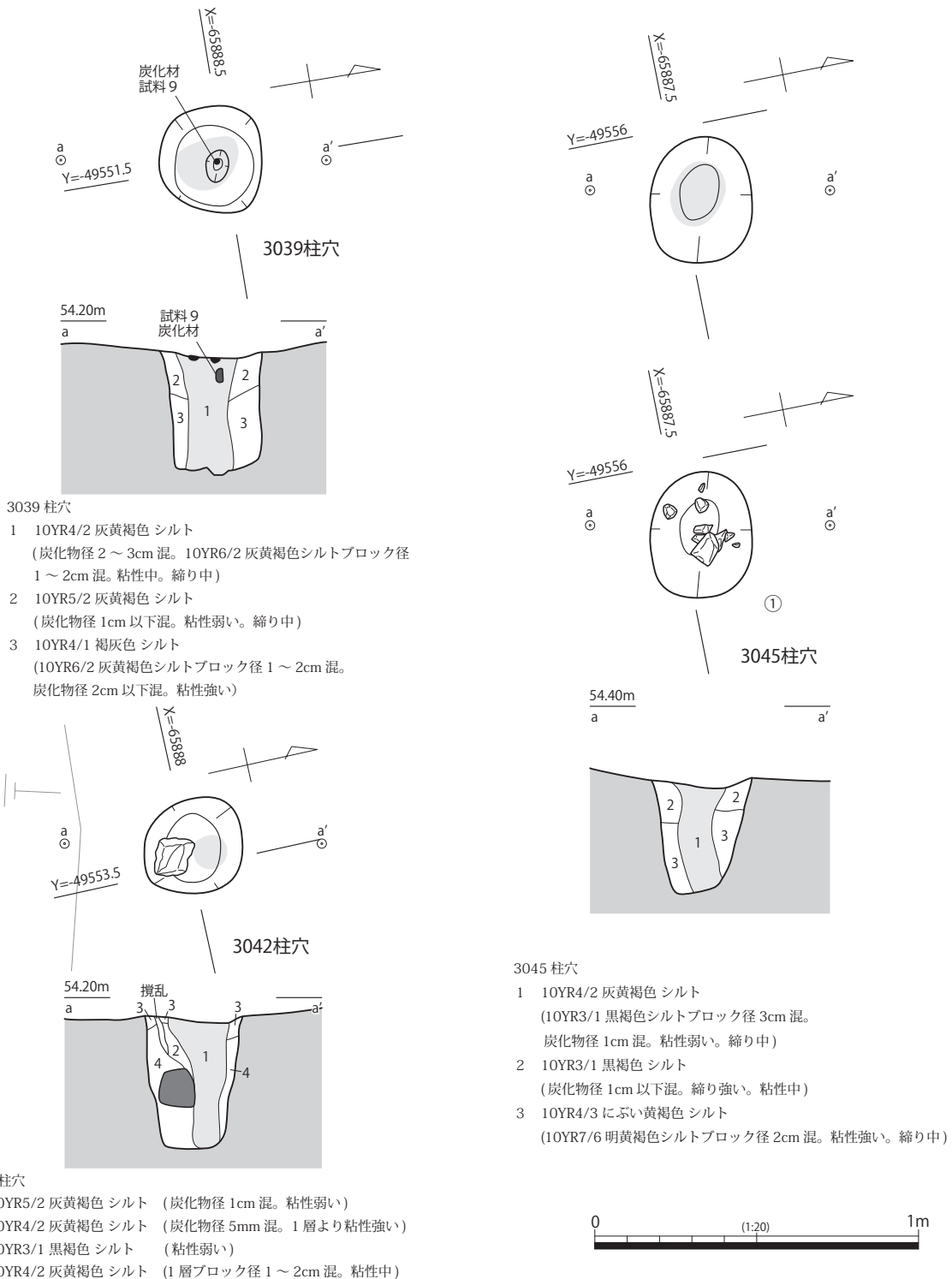
遺物は、1層から土師器皿Po55、埋土からPo56が出土している。



第50図 掘立柱建物20 3052~3055柱穴

3054柱穴(第50図、第4表、図版9)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1～5層が堆積する。1層から小礫が散見される。



第51図 掘立柱建物20 3039・3042・3045柱穴

3055柱穴(第50・52図、第4・16表、図版9・50)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅷ層で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。倉吉市教委試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方は削平され僅かに底面が残る。平面形は不整円形を呈し、残存規模は直軸0.24m、短軸0.19m、検出面からの深さは0.08mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層から土師器皿Po52が出土している。

3039柱穴(第51図、第4表、図版7)

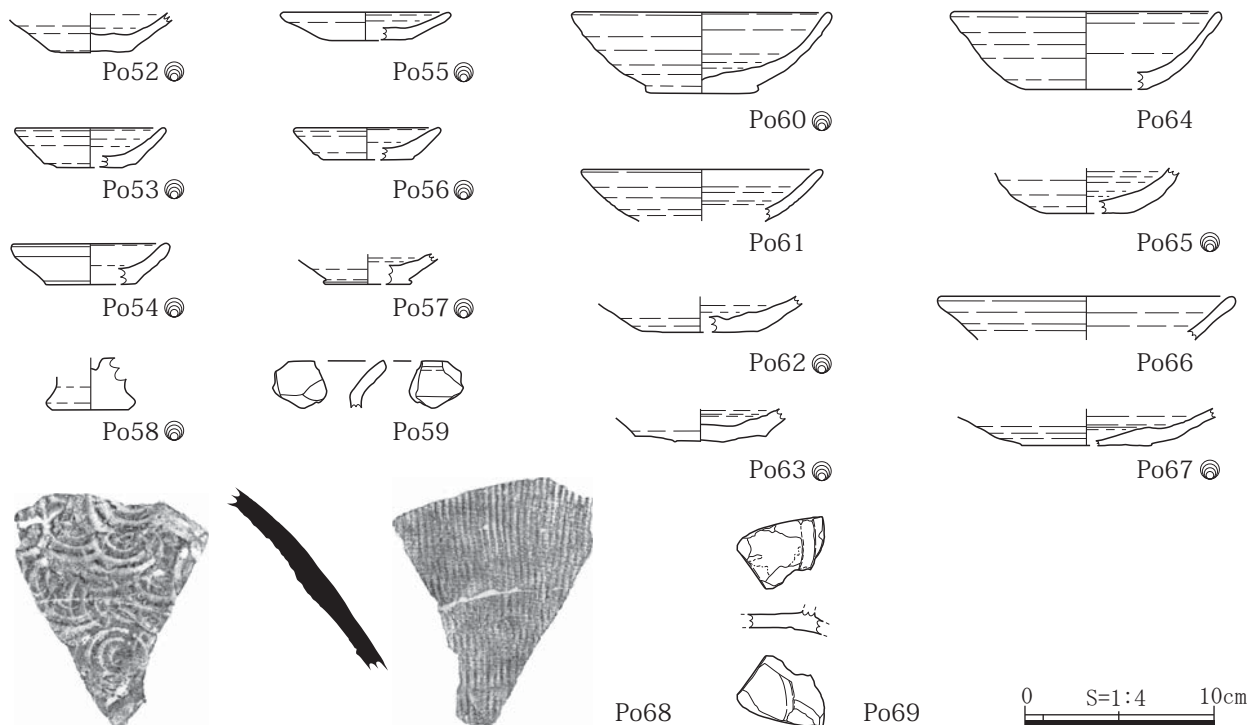
調査区南西9F-9fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層上部からは多数の土器片や炭化物が出土した。土器は小片のため図化していない。

1層に含まれる炭化材(試料9)について樹種同定を行った結果、カバノキ属?と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD892-994(暦年較正2σ)の値が得られた(第5章第1節参照)。本建物の他の柱穴から出土している土器よりの年代観より、古い年代値が得られている。

3042柱穴(第51・52図、第4・16表、図版8・50)

調査区南西9F-9fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した廂の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、後者から径0.14mの根巻石と考えられる角礫が出土している。

遺物は、1層から土師器皿Po57が出土している。



第52図 掘立柱建物20出土遺物

### 3045柱穴(第51図、第4表、図版8)

調査区南西9F-9fグリッドにおいて、V層上面で検出した廂の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層上部から小礫が多数出土している。

1層に含まれる生材(試料10)について樹種同定を行った結果、イヌガヤと同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD893-992(暦年較正2 $\sigma$ )の値が得られた(第5章第1節参照)。本建物の他の柱穴から出土している土器の年代観より、古い年代値が得られている。

### 掘立柱建物20出土遺物(第52図、第16・17表、図版50・87)

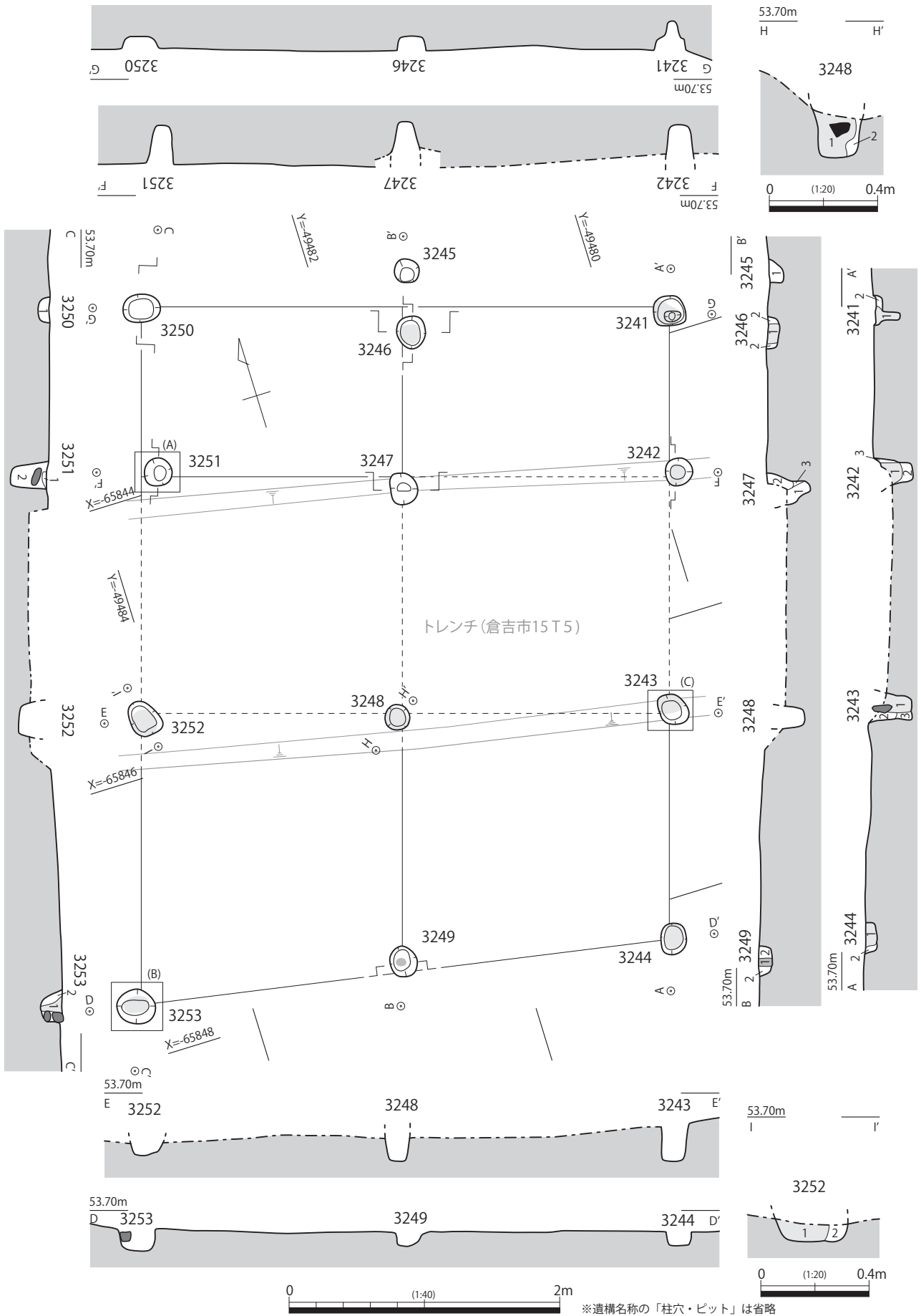
本遺構からの出土遺物を第52図にまとめている。Po52~57は回転台成形の土師器皿である。底部から口縁部が直線状に外傾するPo52、扁平で立ち上がり短いPo55・56、器高が高く、小型の坏のような形状を呈するPo53・54がみられる。Po60~67は回転台成形の土師器坏である。器高が高いが口縁部にかけてやや内湾するPo60・64、器高が低く口径が広いPo66、器高が低く口径が広く内湾するPo61が認められる。Po58は回転台成形の土師器柱状高台である。柱部が一旦内湾してから開いている。Po59は「く」の字状に口縁部が外反する土師器甕である。内外面ともナデ調整。Po68は須恵器甕の肩部であり、外面平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。Po69は初期高麗の青磁の蓋と考えられる。

### 掘立柱建物21(第53・54図、第5表、図版34・35)

調査区北東9E-5h・5iグリッドにおいて、表土掘削後、V層上面で検出した北辺に廂が付く総柱建物である。主軸はN-17°-Eにとる南北棟であり、建物全体の規模は桁行3間(4.88m)、梁行2間(3.9m)、平面積は19.0m<sup>2</sup>を測る。身舎部分の規模は桁行2間(3.6m)、梁行2間(3.9m)を測り、方形に近いプランを呈する。平面積は14.0m<sup>2</sup>を測る。

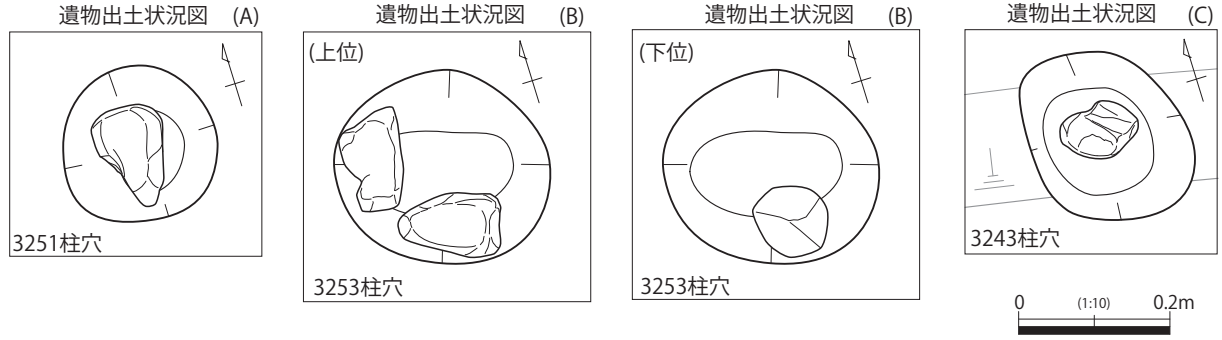
本建物は3241~3253柱穴によって構成され、その内3242・3243・3247・3248・3252柱穴は倉吉市教委試掘トレンチ(15T5)内に検出している。柱筋の通りは比較的良いが、3242・3251柱穴はやや東に、3246・3247柱穴はやや南にずれるほか、3253柱穴については大きく南にずれる。身舎の柱間寸法は桁筋1.7~2.1m、梁筋1.8~2.0m、廂の柱間寸法は桁筋1.2m、梁筋1.9~2.0mを測る。

柱穴の平面は円形を主体とし、楕円形または隅丸方形を呈するものも認められる。身舎の柱穴の規模は長軸0.19~0.28m、検出面からの深さは0.06~0.32m、底面の標高は53.16~53.44mを測る。廂の柱穴の規模は長軸0.18~0.27m、検出面からの深さは0.08~0.20m、底面の標高は53.27~53.38mを測る。本建物を構成する柱穴は平面規模については大差ないものの、3242-3251間と3243-3252間の柱穴は他の柱穴に対し底面レベルが低く、建物の中央部の構造を強固にした可能性が考えられる。柱は全て抜き取られており、柱穴の埋土はⅦ層に由来するブロックが混じる黒褐色土を主体とする。3253柱穴の掘方埋め土からは長軸0.10~0.13m程度の礫が3点出土しており、根巻石と考えられる。3243・3251柱穴の柱抜き取り痕跡からも同規模の礫が出土しており、本来根巻石等に使われていた礫が柱抜き取り穴を埋め戻す際に廃棄されたものと想定している。柱穴規模は小さいものの、少なくとも身舎の柱穴の一部には丁寧に基礎固めが行われていたものとする。また、廂の柱穴である3241柱穴の底面には径0.06mの柱のあたりを検出している。



第53図 掘立柱建物21(1)

第3章 山ノ下遺跡の調査成果



- 3241 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
  - 2 10YR3/2 黒褐色シルト (粘性弱い)
- 3242 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(2層由来のブロックを一部混。粘性弱い)
  - 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径5mmを斑状に混。粘性弱い)
  - 3 10YR3/2 黒褐色シルト (粘性やや弱い)
- 3243 柱穴
  - 1 10YR2/2 黒褐色シルト (粘性やや弱い)
  - 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(下部に10YR6/7 明黄褐色シルトが斑状に混。粘性弱い)
  - 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
(10YR6/6 明黄褐色シルトが斑状に混。粘性弱い)
- 3244 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性強い)
  - 2 10YR3/2 黒褐色シルト (粘性強い)
- 3245 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
- 3246 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
  - 2 10YR3/2 黒褐色シルト (粘性弱い)
- 3247 柱穴
  - 1 10YR2/1 黒色シルト  
(一部10YR6/6 明黄褐色シルトのブロック混。粘性弱い)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
  - 3 10YR6/6 明黄褐色シルト (10YR3/1 黒褐色シルトのブロック混)
- 3248 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
  - 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト (粘性弱い)
- 3249 柱穴
  - 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (粘性弱い)
  - 2 10YR3/2 黒褐色シルト (粘性弱い)
- 3250 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
- 3251 柱穴
  - 1 10YR7/6 明黄褐色 (極粒砂～細砂)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性強い)
- 3252 柱穴
  - 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(10YR6/6 明黄褐色ブロック径0.5～1cmが斑状に混。粘性弱い)
  - 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト
- 3253 柱穴
  - 1 10YR2/3 黒褐色シルト (粘性強い)
  - 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (粘性弱い)

第54図 掘立柱建物21(2)

第5表 掘立柱建物21遺構計測表

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	備考
	長軸	短軸	深さ							
3242	0.21	0.20	0.30	53.17	-	-	-	-	-	トレンチに切られる
3243	0.25	0.20	0.32	53.18	-	-	-	-	-	トレンチに切られる
3244	0.23	0.19	0.09	53.44	-	-	-	-	-	
3247	0.23	0.20	0.32	53.16	-	-	-	-	土師器小片(埋土)	トレンチに切られる
3248	0.19	0.18	0.15	53.20	-	-	-	-	土師器小片(抜取痕)	トレンチに削平される
3249	0.23	0.20	0.10	53.43	0.08	-	-	-	土師器小片(埋土)	
3251	0.21	0.21	0.26	53.18	-	-	-	-	礫	
3252	0.27	0.21	△0.06	53.24	-	-	-	-	-	トレンチに削平される
3253	0.28	0.25	0.15	53.40	-	-	-	根巻石	礫	

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	備考
	長軸	短軸	深さ							
3241	0.23	0.20	0.20	53.27	-	0.06	-	-	-	
3245	0.18	0.17	0.11	53.35	-	-	-	-	-	
3246	0.24	0.22	0.11	53.38	-	-	-	-	-	
3250	0.27	0.21	0.08	53.38	-	-	-	-	-	

No.	柱間寸法(m)
3242-3244	3.4
3247-3249	3.5
3251-3253	3.9

No.	柱間寸法(m)
3242-3251	3.8
3243-3252	3.9
3244-3253	4.0

No.	柱間寸法(m)
3241-3244	4.6
3246-3249	4.7
3245-3249	5.1
3250-3253	5.1

No.	柱間寸法(m)
3241-3250	3.9

No.	柱間寸法(m)
3242-3243	1.7
3243-3244	1.7
3247-3248	1.7
3248-3249	1.8
3251-3252	1.8
3252-3253	2.1

No.	柱間寸法(m)
3242-3247	2.0
3247-3251	1.8
3243-3248	2.0
3248-3252	1.9
3244-3249	2.0
3249-3253	2.0

No.	柱間寸法(m)
3241-3242	1.2
3246-3247	1.2
3245-3246	0.4
3250-3251	1.2

No.	柱間寸法(m)
3241-3246	1.9
3241-3245	1.9
3246-3250	2.0
3245-3250	2.0

なお、本建物北側に検出した3245柱穴は建物の中心軸となる3246柱穴と3249柱穴を結ぶ延長線上に位置することから、本建物を構成する柱穴と考えている。本建物の構造については明確にはできていないが、3245柱穴と3246柱穴の柱間寸法は0.40mと近接することから、いずれかの柱穴の部分的な補修等の理由により新たに設置された可能性などが考えられよう。

出土土器は凶化していないが、3247・3249柱穴の埋土中から土師器小片、3248柱穴の柱抜き取り痕跡から土師器甕とみられる破片が出土している。

本建物の帰属時期は明確にはできていないが、平成28年度調査の成果を踏まえれば、建物の主軸、柱穴規模等から判断し、12世紀後葉から13世紀に帰属する可能性が考えられる<sup>(註2)</sup>。

### 666溝(第55～58図、第6・17・18表、図版10・11・51～53・58・64・88・89)

調査区南東9F-10d・10e、10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した。平成28年度調査で検出された溝の続きであり、今回の調査によって全体規模が判明した。本遺構は掘立柱建物12の北側桁筋の柱穴と重複しており、掘立柱建物12より先行する遺構であることを確認している。今回検出した範囲においては、幅約5.6m、深さ0.09mを測り、断面形は逆台形状を呈す。平成28年度調査範囲と比較し、やや幅は広がるが、深さは大差ない。埋土はⅢ-1層に由来する細砂混じりシルトであり、ラミナ構造は確認できず、流水の環境下とは認められない。溝内からは土器が密に出土しており、小片が主体をなすが、比較的遺存状態のよい個体も認められる。

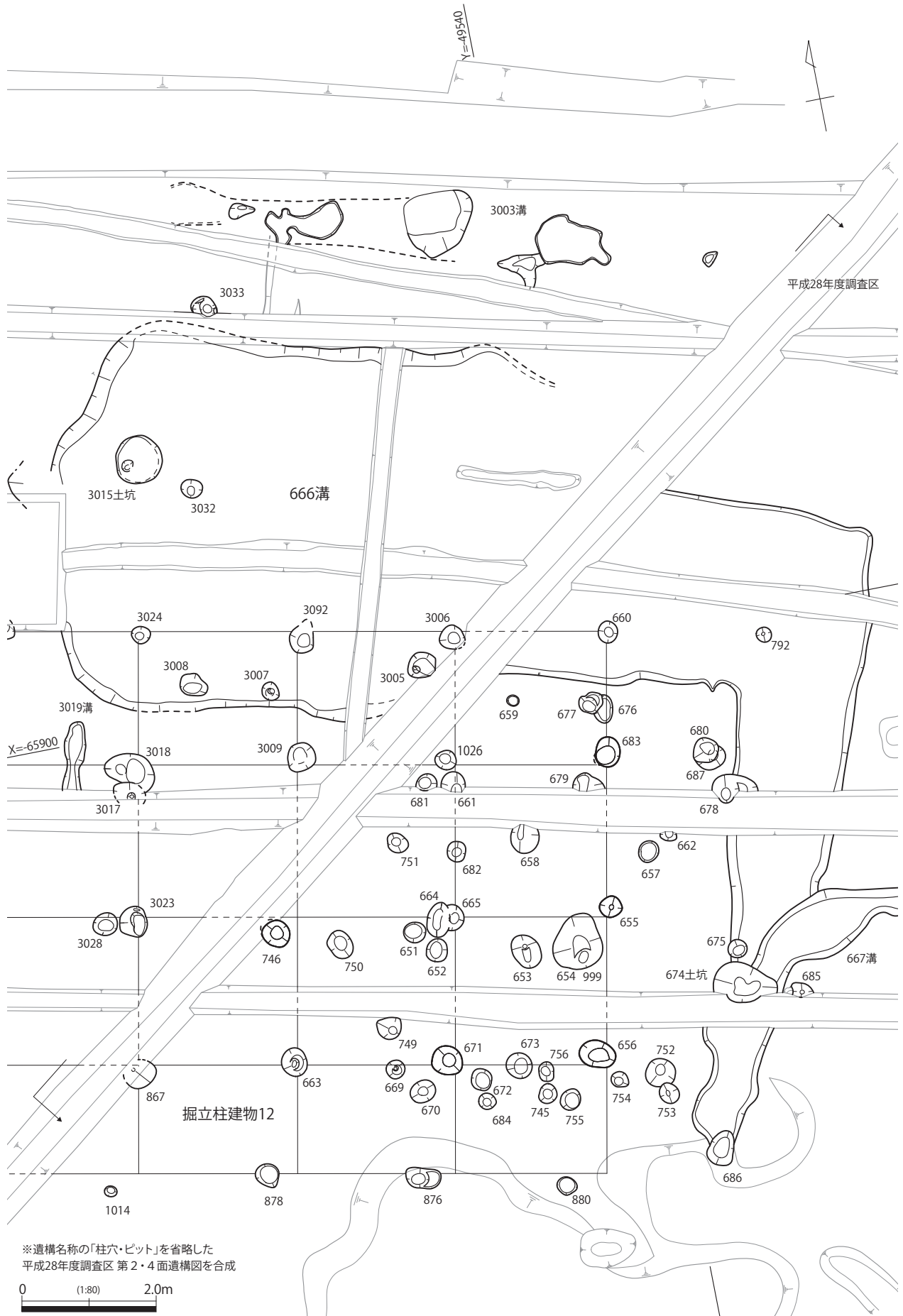
なお、平成28年度調査においては、掘立柱建物12北側桁筋と東側梁筋に沿うような「L字状」の平面形を呈していることから、666溝は建物と一連の遺構と判断し、区画溝や雨落ち溝などの可能性を指摘していたが、今回の調査により建物より先行する遺構であることが明らかとなった。しかしながら、建物に沿うL字状の平面形と周辺の遺構の状況を考えると、両遺構が有機的な繋がりをもつ可能性は高いと考えられ、その場合、建物造営前に多量の土器を伴う何らかの行為が行われた可能性などが考えられる。平成28年度調査において、土師器皿6点が意図的に重ねられた状態で出土するなど祭祀的な要素が認められることは、示唆的である(写真9)。

出土遺物を第57・58図にまとめている。Po70～116は回転台成形の土師器である。Po70～75は皿で、底部から口縁部が直線的に外傾するPo70・71・73・74、口縁部が内湾するPo72がみられる。Po76～81は柱状高台である。柱部の裾端部が欠損しているものもみられるが、一旦内湾してから開く形態をとる。Po82～109は坏である。全体形状がわかるものは限られるが、器高が高く口縁部が内湾するPo85・87、器高が低く口径が広く内湾するPo86がある。Po108・109は底部がヘラ切りであり、遺跡全体の数量は些少である。Po110～116は高台付坏であり、Po110・111・114は高台部が足高状に大きく開く。Po117～121は土師器甕である。口縁部がわずかに開き、体部がほぼ直線状になる。Po117・119はハケ調整が確認できる。Po122は白磁碗の口縁部から体部破片であり、Ⅳ類に比定される。

Po123は器壁が薄い須恵器碗の体部である。



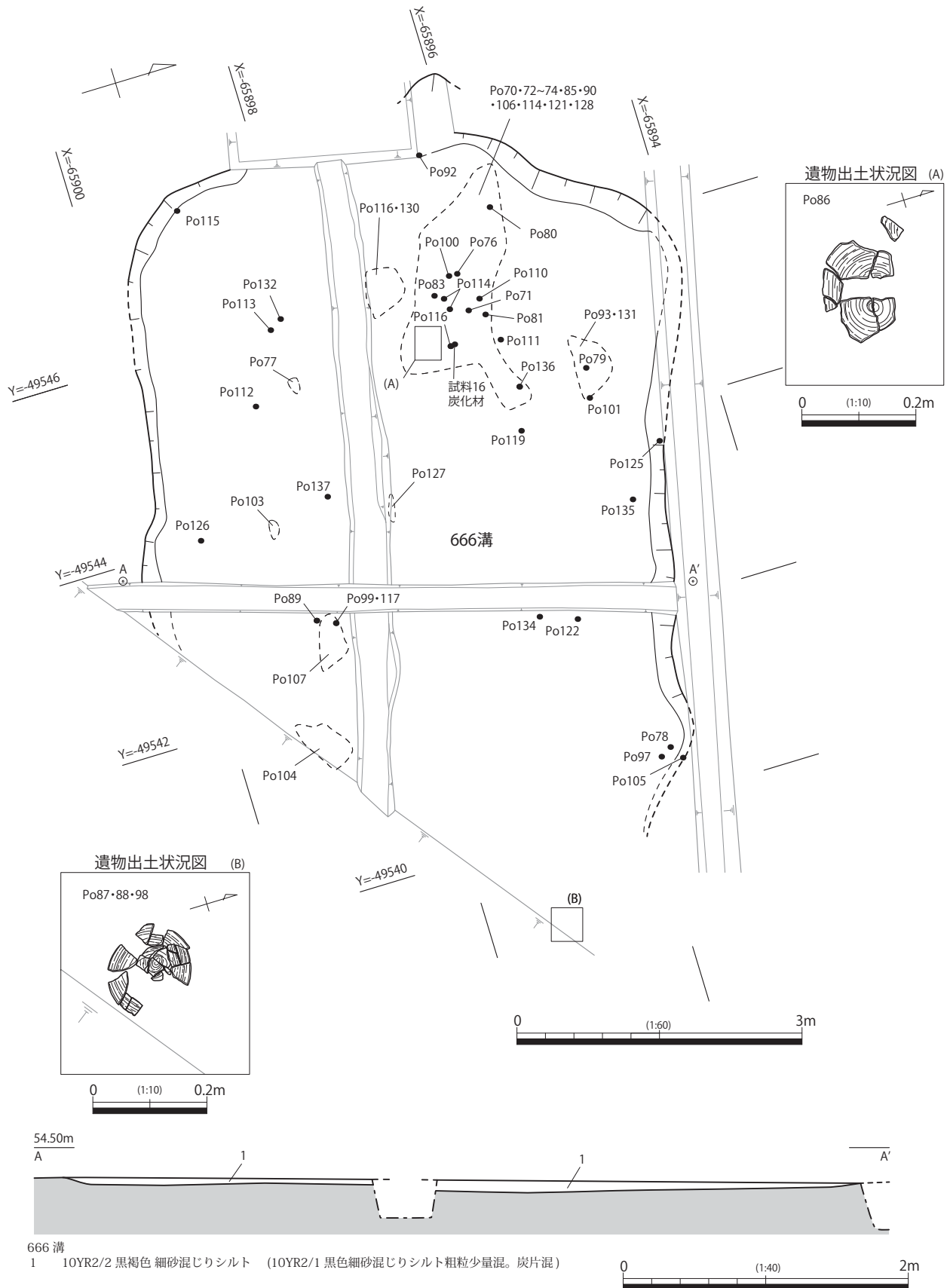
写真9 666溝遺物(平成28年度調査Po26他)  
出土状況(南から)



第55図 666溝全体図



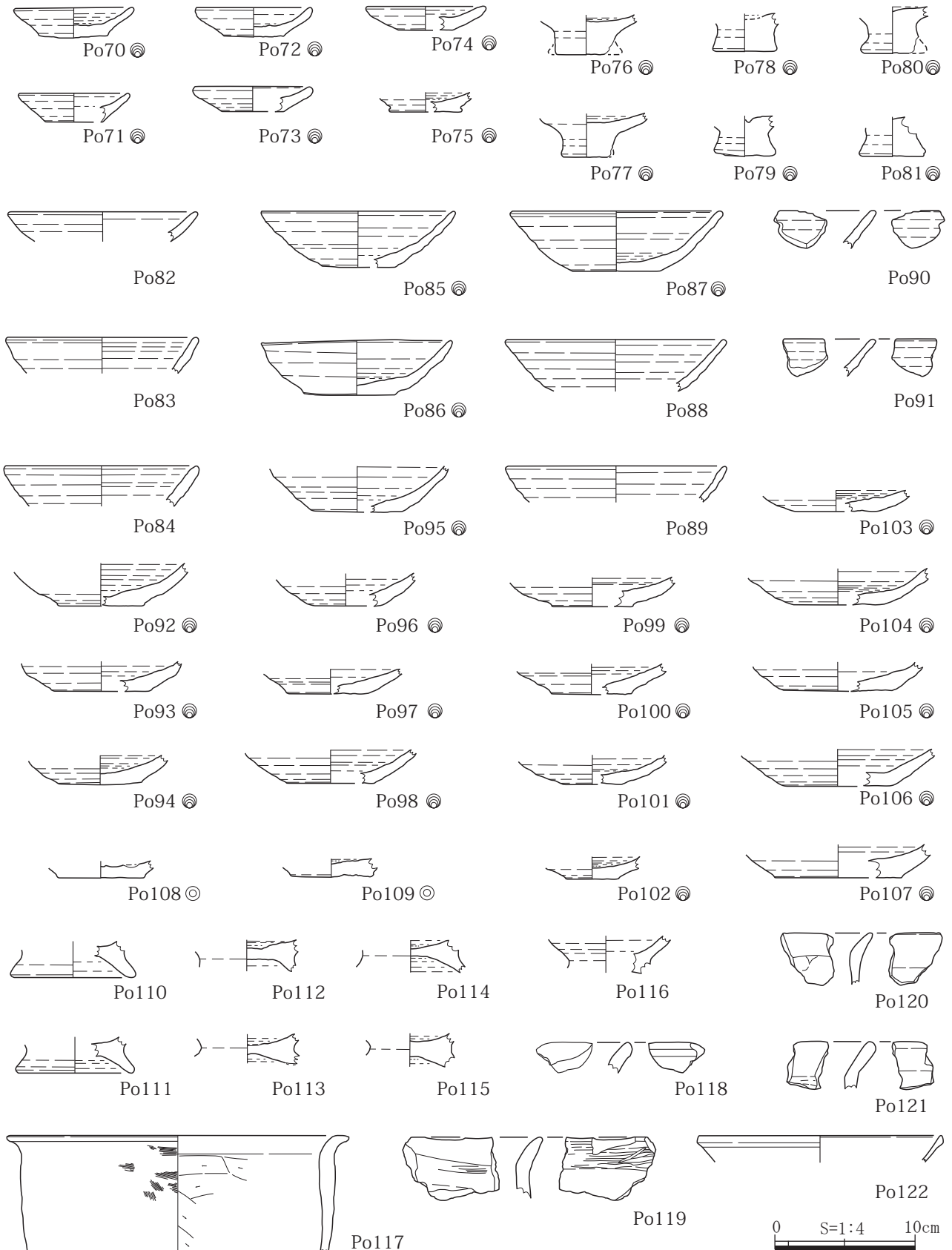
Po124は須恵器の坏の口縁部。Po125は須恵器甕の口縁部で端部がやや内湾気味となる。Po126は須恵器壺の体部であり、内外面とも丁寧なナデ調整が施される。Po127～137は須恵器甕である。Po127は外面に筋状のタタキ痕がみられる。内面はナデ調整である。Po130は内外面格子状のタタキと当て具



第56図 666溝

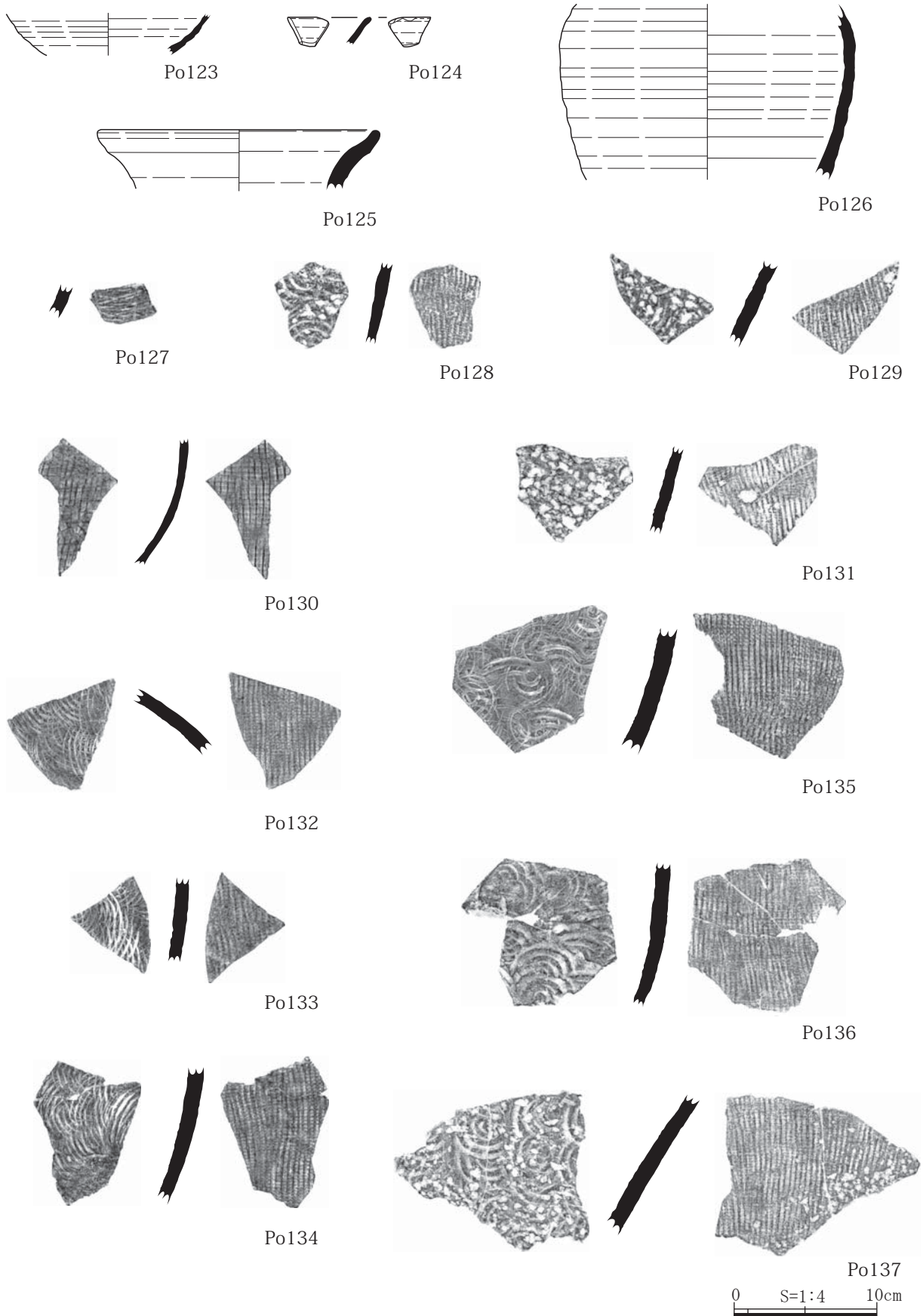
痕を残す。Po128・129・131～137は表面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕がみられる甕の肩部と体部である。なお、Po129・131は内面の風化が顕著で器壁が斑状に剥落している。

本遺構の帰属時期は出土遺物から判断し、12世紀代と考えられる。

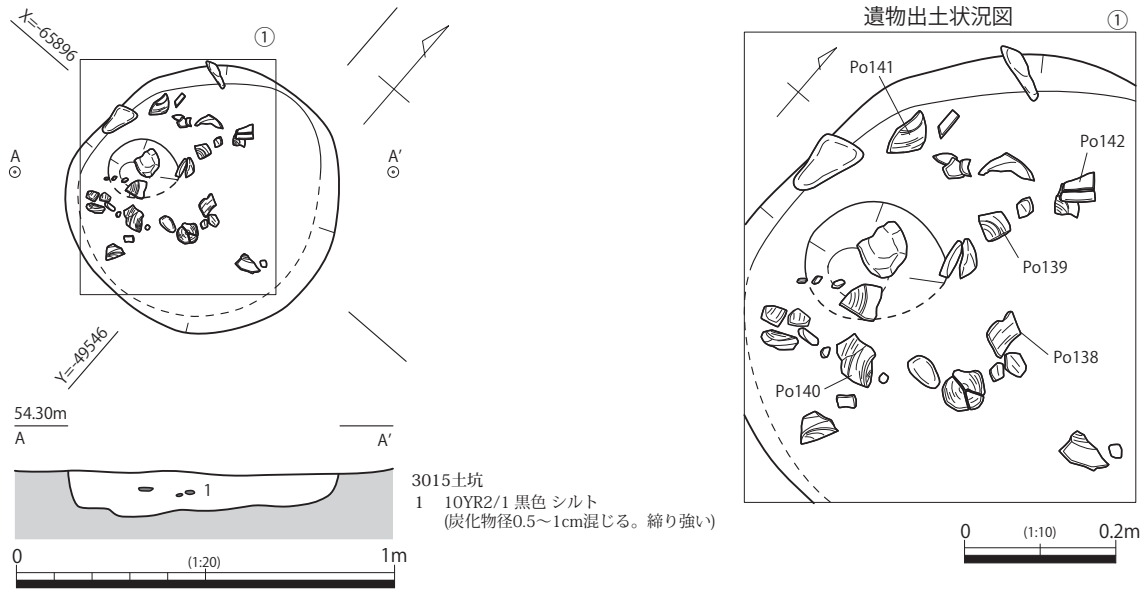


第57図 666溝出土遺物(1)

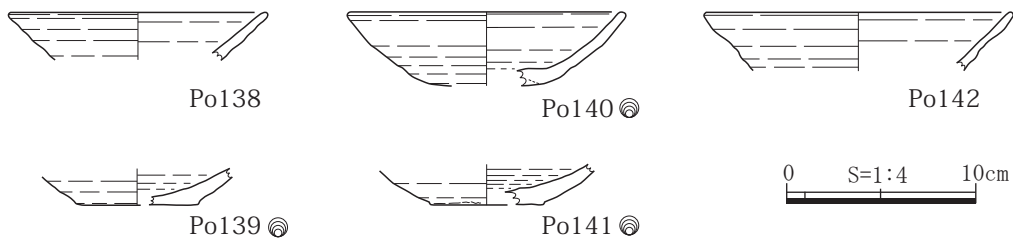
なお、1層から出土した炭化材(試料16)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定された。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD1029-1154(暦年較正 2σ)の値が得られた(第5章第1



第58図 666溝出土遺物(2)



第59図 3015土坑



第60図 3015土坑出土遺物

節参照)。得られた値は出土遺物の年代観と比較し、矛盾はない。

**3015土坑(第59・60図、第6・18・19表、図版12・54)**

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、666溝の埋土を掘削中に検出した土坑である。666溝より新しい。平面円形を呈し、断面形は逆台形状を呈す。規模は長軸0.73m、短軸0.72m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土は黒色シルトの単層(1層)で、炭化物を含む。1層中からは土師器や小礫が出土している。土師器片が主体をなし、土坑西側を中心に散乱するような出土状況を示す。

遺物は、回転台成形の土師器坏Po138~142である。Po138・142は体部から口縁部が直線的に開く。Po140は口径が広く、底部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。Po139・141は底部であり、前者は体部へ直線的に、後者はやや内湾気味に立ち上がる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**第1遺構面古段階に帰属する柱穴(第61~64図、第6・19表、図版12・13・54)**

第1遺構面古段階で検出した柱穴、または埋土の特徴(Ⅲ-1層に由来する埋土)から第1遺構面古段階に帰属すると判断した柱穴について報告する。本来は建物を構成する柱穴、または建物に関連する柱穴であると考え、それを明確にはできていない。以下、各柱穴の詳細を報告する。

**3005柱穴(第61・62図、第6・19表、図版12・54)**

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.45m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～5層からなる。

遺物は、1層から土師器柱状高台Po144が出土している。柱部の裾が開き中位が内湾する。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**3007柱穴(第61図、第6表、図版12)**

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.35mを測る。底面には径0.10mの柱当たりが認められた。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層から土師器の小片や炭化物、礎盤石と想定される扁平礫が1層中位から出土している。柱抜き取り後に埋め戻されたものであろう。

本遺構の時期は、埋土の特徴と図示していないが出土遺物から、11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**3008柱穴(第61図、第6表)**

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.58mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3～6層からなり、1層には土器片や炭化物が混じる。

遺物は小片土器が出土しているが、図示していない。

本遺構の時期は、埋土の特徴と図示していないが出土遺物から、11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**3025柱穴(第62・63図、第6・19表、図版13・54)**

調査区南西10F-1e・1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した柱穴である。南側で3026柱穴を切る。平面形は瓢形を呈し、北側上方に幅狭のテラスを設ける。規模は長軸0.54m、短軸0.47m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、1層には径0.20～0.23mの礎盤石等と想定される扁平礫が3段重ねて埋め戻されていた。

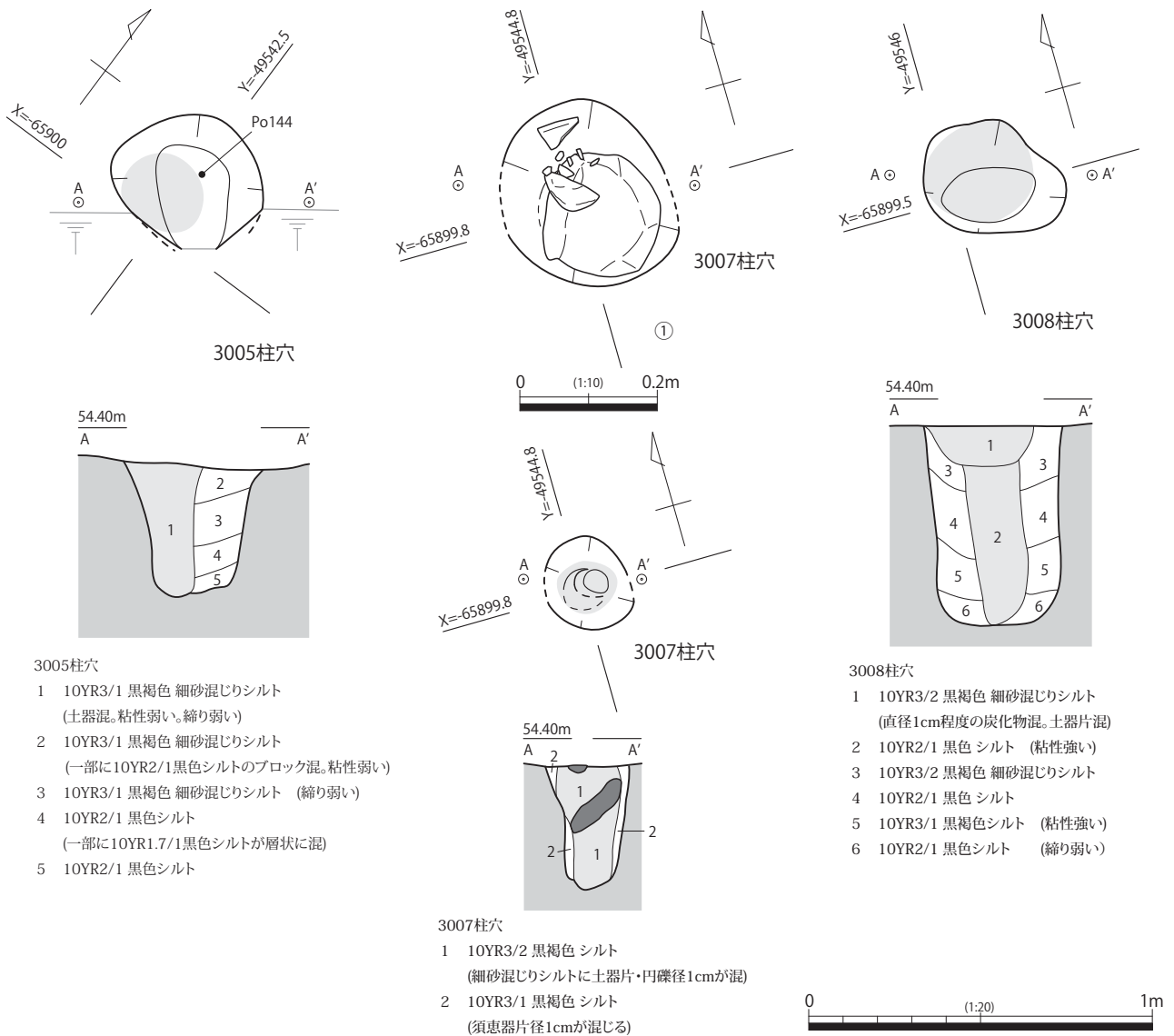
遺物は土師器坏Po143が出土している。Po143は1層中に埋め戻された礫の内、中段と下段の礫の間から出土している。器形はやや丸みを帯びた底部から体部に向かって立ち上がる。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

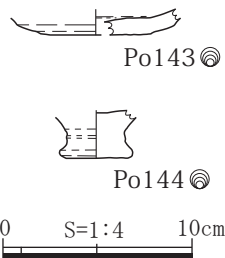
**3026柱穴(第63図、第6表、図版13)**

調査区南西10F-1e・1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した柱穴である。北側で3025柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.36m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトの単層である。

本遺構の時期は、3025柱穴との重複関係及び埋土の特徴から、11世紀後半から12世紀中葉と考えら



第61図 3005・3007・3008柱穴



第62図 3005・3025柱穴出土遺物

れる。

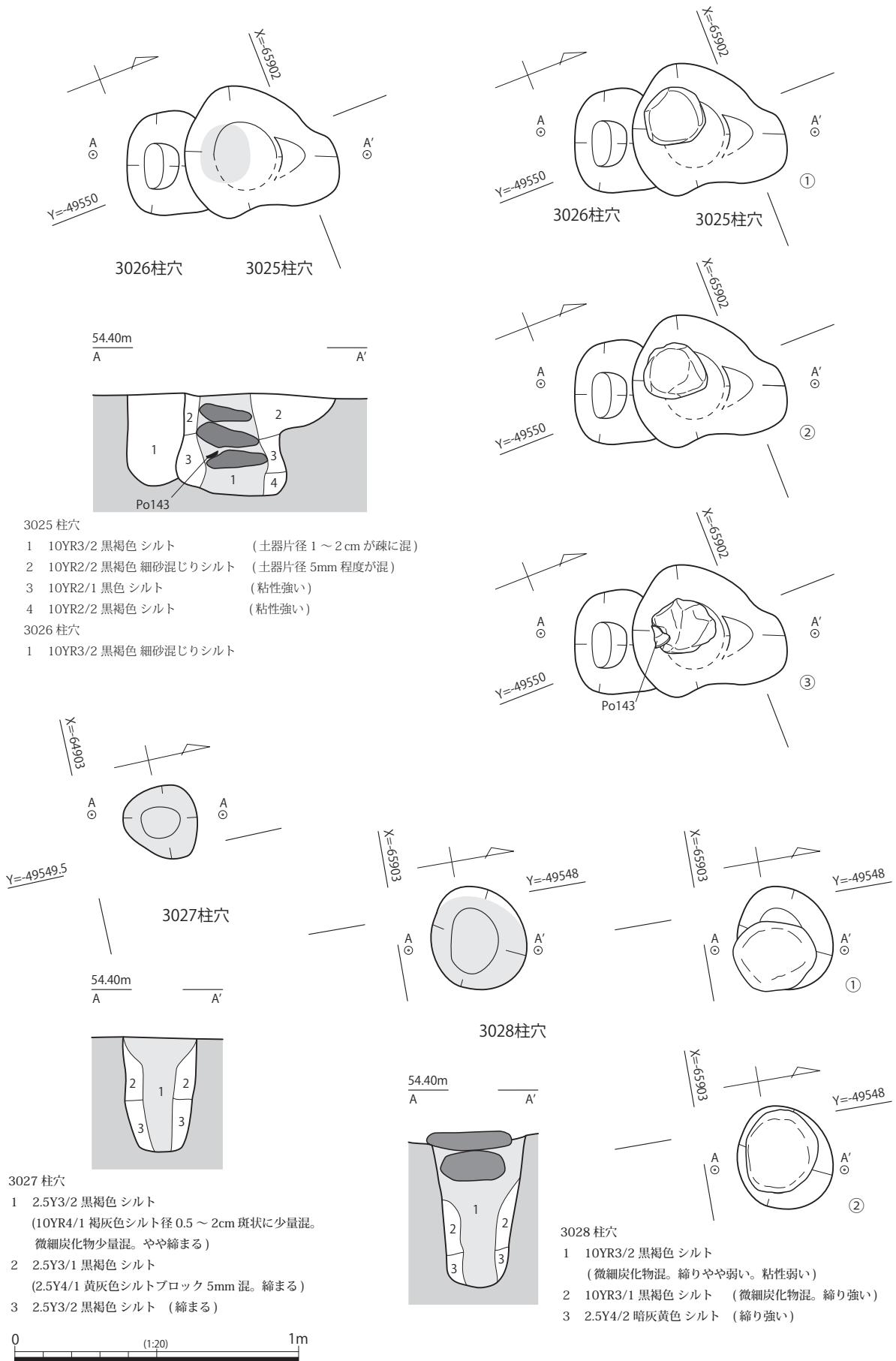
**3027柱穴(第63図、第6表)**

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した柱穴である。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層には微細炭化物が少量混じる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**3028柱穴(第63図、第6表、図版12)**

調査区南西10F-1eグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した柱穴である。平面形は円形を呈し、



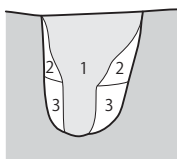
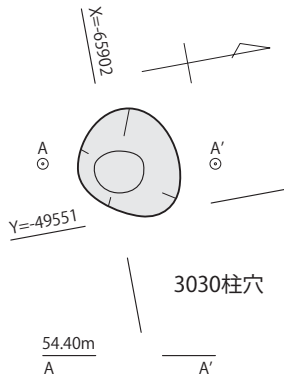
第63図 3025~3028柱穴

規模は長軸0.36m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.52mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、抜き取り痕跡上層に径0.28mの扁平礫が2段重ねて埋め戻されていた。

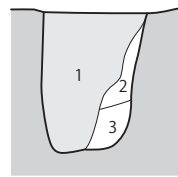
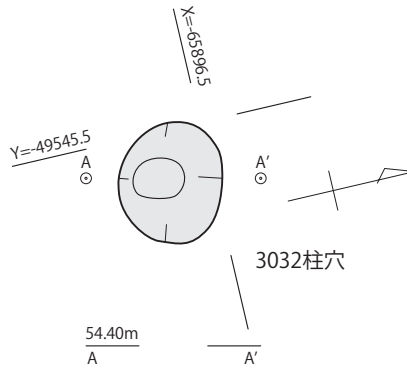
本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

### 3030柱穴(第64図、第6表)

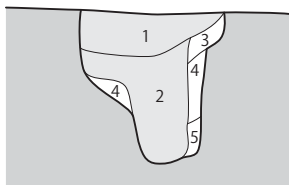
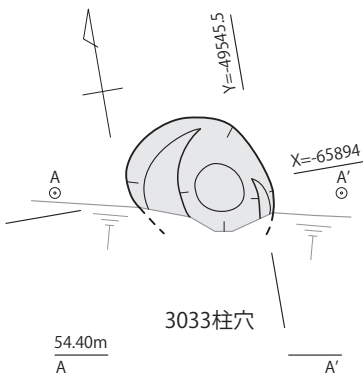
調査区南西10F-1fグリッドにおいて、Ⅲ-2層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈



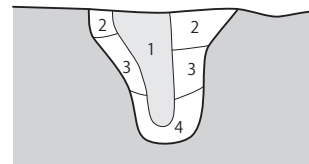
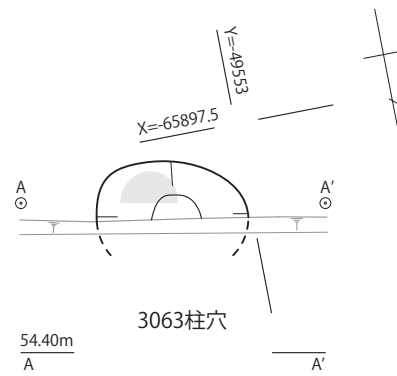
- 3030 柱穴
- 1 2.5Y3/2 黒褐色 シルト  
(土器細片多混。炭化物ブロック径  
3～5m 多量混。やや締まる)
  - 2 2.5Y3/1 黒褐色 シルト  
(微細炭化物少量混。締まる)
  - 3 2.5Y3/2 黒褐色 シルト  
(微細炭化物少量混。締まる)



- 3032 柱穴
- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト  
(炭化物径1cm程度を稀に含。粘性弱い)
  - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (粘性弱い)
  - 3 10YR2/2 黒色シルト (粘性弱い)



- 3033 柱穴
- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト  
(炭化物径5mm・砂礫径1cm および土器片を含。粘性弱い。柱抜き取り痕跡)
  - 2 10YR2/2 黒褐色 シルト (10YR2/1 黒色シルト 混。柱抜き取り痕跡)
  - 3 10YR3/2 黒褐色 シルト (粘性弱い)
  - 4 10YR3/1 黒褐色 シルト (粘性強い)
  - 5 10YR3/2 黒褐色 シルト (粘性強い)



- 3063 柱穴
- 1 10YR2/1 黒色 シルト  
(10YR5/1 褐灰色シルトブロック径2cm混。炭化物径5mm混。締り中。粘性中  
柱抜き取り痕跡)
  - 2 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR5/1 褐灰色シルトブロック径5mm混。締り強い。粘性中)
  - 3 10YR3/2 黒褐色 シルト  
(10YR5/1 褐灰色シルトブロック径1～2cm混。締り強い。粘性中)
  - 4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径1cm混。締り中。粘性強い)

第64図 3030・3032・3033・3063柱穴



し、規模は長軸0.29m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.32mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層には多量の炭化物が混じる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

### 3032柱穴(第64図、第6表)

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した柱穴である。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.38mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

### 3033柱穴(第64図、第6表)

調査区南西9F-10eグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した柱穴である。南側を暗渠によって削平されている。平面形は楕円形を呈し、北から西側にかけてテラスを設ける二段掘りである。残存規模は長軸0.35m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.38mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3～5層からなり、1層には土師器小片や炭化物が含まれる。

本遺構の時期は、図示していないが出土遺物と埋土の特徴から、11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

### 3063柱穴(第64図、第6表)

調査区南西9F-10fグリッドにおいて、Ⅲ-1層上面で検出した柱穴である。倉吉市教委試掘トレンチ(15T3)で北半部が削平されている。平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸0.40m、短軸0.15m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなり、1層には炭化物が含まれていた。遺物は出土していない。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

## 第6表 第1遺構面古段階遺構計測表

溝

No.	地区 T45-6j-	規模			底面の標高(m)	主軸方位	備考
		長さ(m)	幅(m)	深さ(m)			
666	9F-10d・10e、10F-1e	8.0以上	5.4～5.6	0.04～0.09	西端：54.16～54.22 東端：54.18～54.24	N-76°-W	東方向に直線的に伸び、平成28年調査区において南方向に約90°屈曲する、土師器皿Po70～75、土師器柱状高台Po76～81、土師器環Po82～109、土師器高台付環Po110～116、土師器甕Po117～121、須恵器埴Pol23、須恵器環Pol24、須恵器甕Po125・127～137、須恵器壺Po126、白磁碗Po122・941・942が出土、炭化材(試料16)
3003	9F-10d・10e	8.1以上	0.3～1.1以上	0.01～0.03以上	54.24～54.27	N-73°-W	666溝の北側を平行に伸びる、底面のみ切れぎれに残る
3019	9E-10e、10F-1e	1.1以上	0.2～0.3	0.03～0.06	54.23～54.27	N-16°-E	南北に直線的に伸びる、攪乱に切られる

土坑

No.	地区 T45-6j-	規模(m)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
3015	9F-10e	0.73	0.72	0.12	土師器環Po138～142	

柱穴

(△：残存値)

No.	地区 T45-6j-	規模(m)			柱のあたり 直径(m)	基礎固め	出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ				
3005	9F-10e	0.45	△0.30	0.40	-	-	土師器柱状高台Po144(抜取痕)	
3007	9F-10e	0.28	0.24	0.35	0.10	-	土器小片、炭化物、扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	扁平礫は柱抜き取り後埋め戻し
3008	9F-10e	0.42	0.33	0.58	-	-	土器片、炭化物(抜取痕)	
3025	10F-1e・1f	0.54	0.47	0.36	-	-	土師器環Po143、扁平礫(礎盤石?)(抜取痕)	扁平礫が3段重ねて埋め戻し、3026を切る
3026	10F-1e・1f	0.36	△0.28	0.33	-	-		3025に切られる
3027	10F-1e	0.28	0.25	0.40	-	-	微細炭化物(抜取痕)	
3028	10F-1e	0.36	0.34	0.52	-	-	扁平礫(礎盤石?)(抜取痕)	扁平礫が2段重ねて埋め戻し
3030	10F-1f	0.29	0.27	0.32	-	-	炭化物(抜取痕)	
3032	9F-10e	0.32	0.27	0.38	-	-		
3033	9F-10e	0.35	△0.30	0.38	-	-	土器小片、炭化物(抜取痕)	暗渠に切られる
3063	9F-10f	0.40	△0.15	0.35	-	-	炭化物(抜取痕)	トレンチに切られる

## 第2項 第2遺構面の調査

### 1 概要(第65図)

調査地北東から南西にかけてI層及びⅢ-1層下にIV層の堆積範囲を確認した。本層上面で検出した遺構及び本層以下で検出した遺構についても、Ⅲ-2層上面で検出した遺構の埋土と類似するものについては第2遺構面として扱うこととした。掘立柱建物13・19のほか、3010溝や3056・3057土坑等を検出している。掘立柱建物13・19は柱筋が通り、第1遺構面古段階で検出した掘立柱建物12・20と同様L字形の配置となる。掘立柱建物19の西側には、建物とほぼ平行する3010溝があり、屋敷地を区画している。なお、建物を構成しない柱穴やピットは、遺物の出土状況や埋土に特色があるもの、または掲載遺物が出土したものを取り上げている。

### 2 検出した遺構と遺物

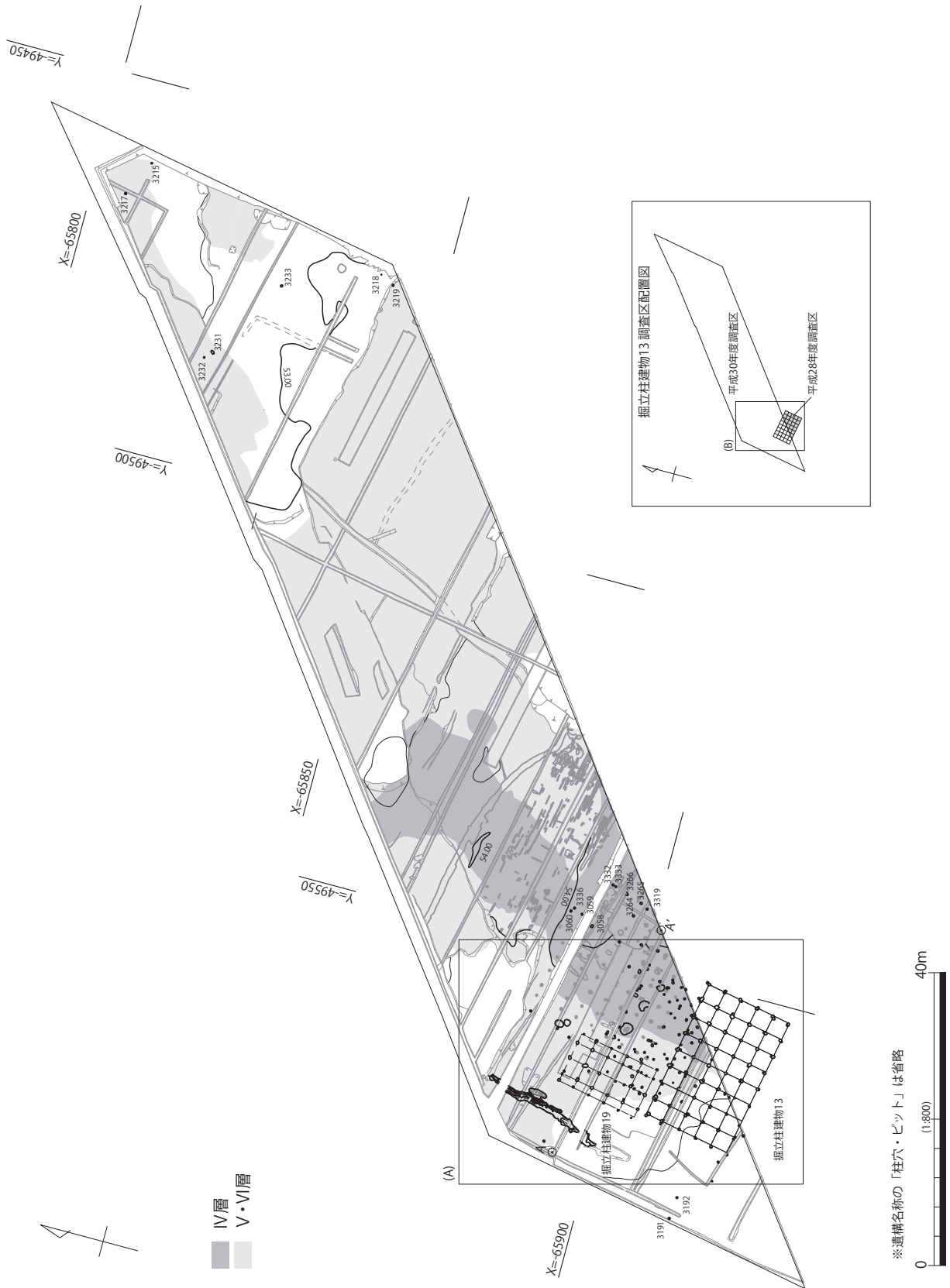
#### 掘立柱建物13(第66～84図、第7～9・19～21・44・51～53表、図版17～22・54～59・69・88・89)

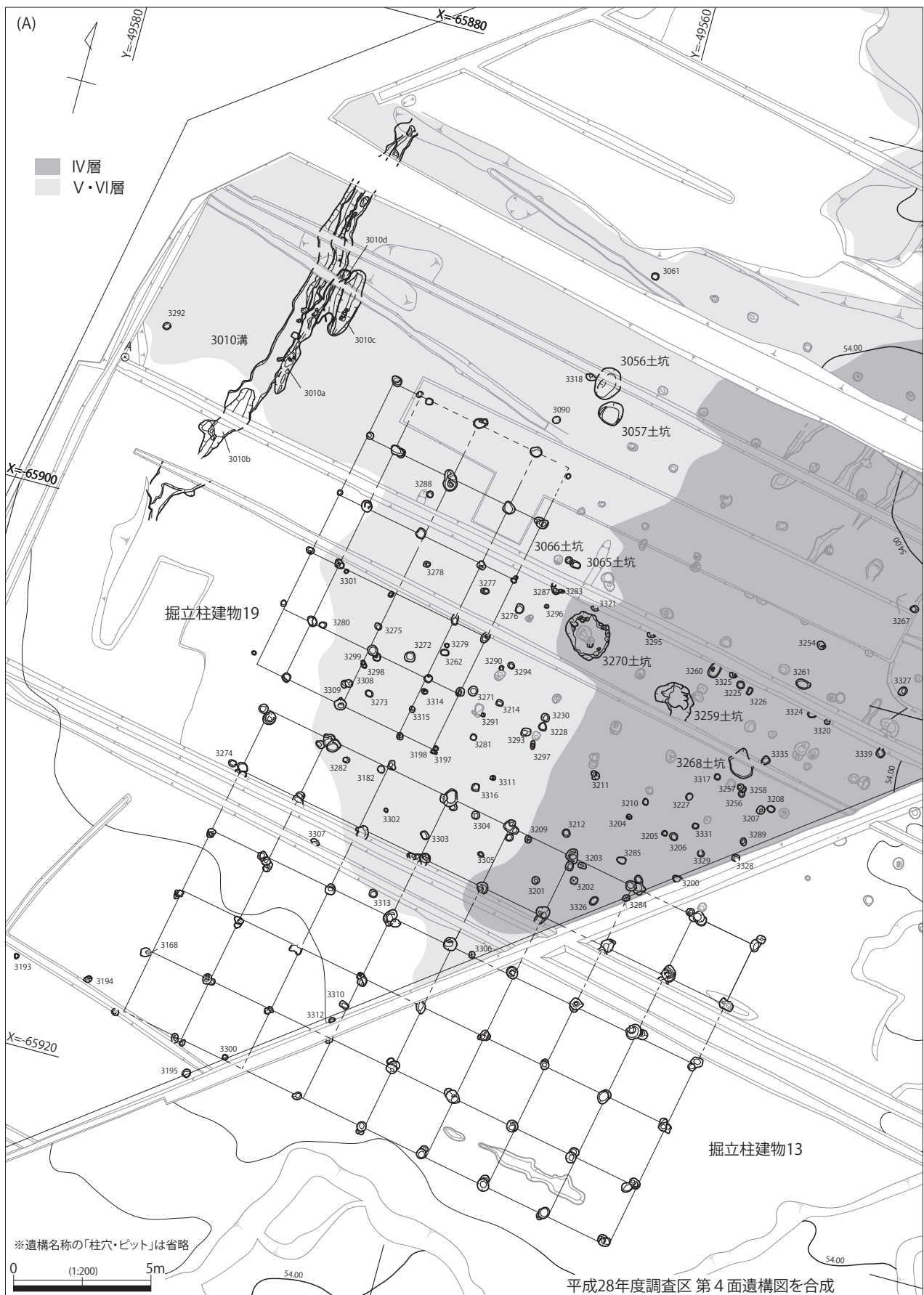
調査区南西10F-1e～1g・2f～2h・3fグリッドにおいて、Ⅲ-2層下、IV～VII層上面で検出した。本遺構は、700～730・732～744・795・861・902ピット(以上、平成28年度調査分)、3103～3145・3149・3169・3188・3189・3240・3323・3338・3342柱穴によって構成される。桁行8間(19.64m)、梁行5間(12.1m)、建物全体の平面積237.6㎡で本遺跡最大規模の建物である。建物の主軸はN-11°-Eをとり、平面形はほぼ東西棟の総柱建物である。

柱穴の平面形は円形又は楕円形で、やや歪なものも含まれる。桁行北から2列目(K-K'ライン)の柱穴は、暗渠によって部分的に削平されている。柱穴は長軸0.15～0.65(平均0.38)m、検出面からの深さが0.06～0.72(平均0.26)mで、底面の標高は53.56～54.25mである。外回りと内部の柱穴に大きな規模の差は認められない。

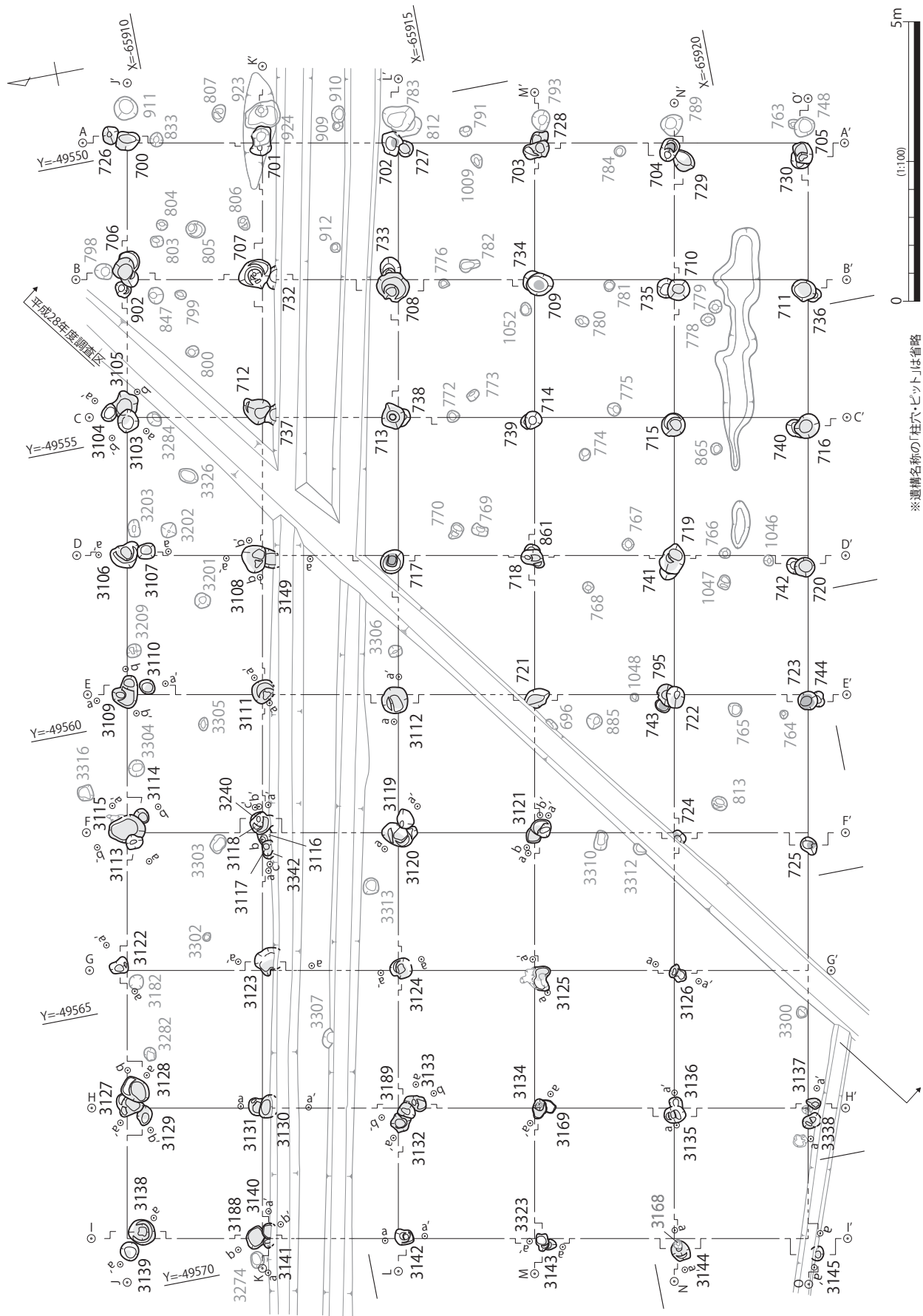
柱間寸法は桁行で2.0～2.9(平均2.45)m、梁行で2.0～2.8(平均2.42)mであり、建物全体の総長は桁行で19.4～20.0(平均19.64)m、梁行で11.6～12.5(12.1)mを測る。

柱は抜き取られているものが大半を占める。掘方埋め土からは拳大から人頭大の礫が出土しているものもみられ、704・715・717・734・795・3109・3135柱穴で礎盤石が、704・705・707・708・710・713・722・724・725・734・742・795・3109・3123・3137～3139・3323・3338柱穴で根巻石が、707・709・712・717・733・735・3137・3338柱穴で根石が確認されている。700・702・703・706・713～715・719・721・727・729・735・737・795・3103・3105・3106・3108・3109・3111・3112・3113・3115・3118～3121・3124～3126・3137～3139・3338柱穴では柱抜き取り後に礎盤石や根巻石等が埋め戻されている。多数の土器の廃棄も含め、基礎固めに使用された礫の埋め戻しは地鎮に係る祭祀行為と想定される。これらの柱穴出土礫の特徴については第51～53表にまとめている。平成30年度調査で確認された基礎固めに用いられた礫の総重量は約187kgであり、このうち被熱痕跡がみられるものは68%である。なお、本遺構の柱穴のうち700・706・727～730・733・735・736・738・740～742・744・795・3105・3106・3120・3127・3131・3133・3134・3136・3143柱穴は重複関係を有しており、いずれも切られている(第67図)。当初建て替えの可能性を想定したが、柱筋の通りが悪く、柱間寸法もバラツキが目立つことから、本報告では、建物を構成するに至っていない。ここでは、建て替えもしくは一部修繕の可能性を指摘するに留めたい。

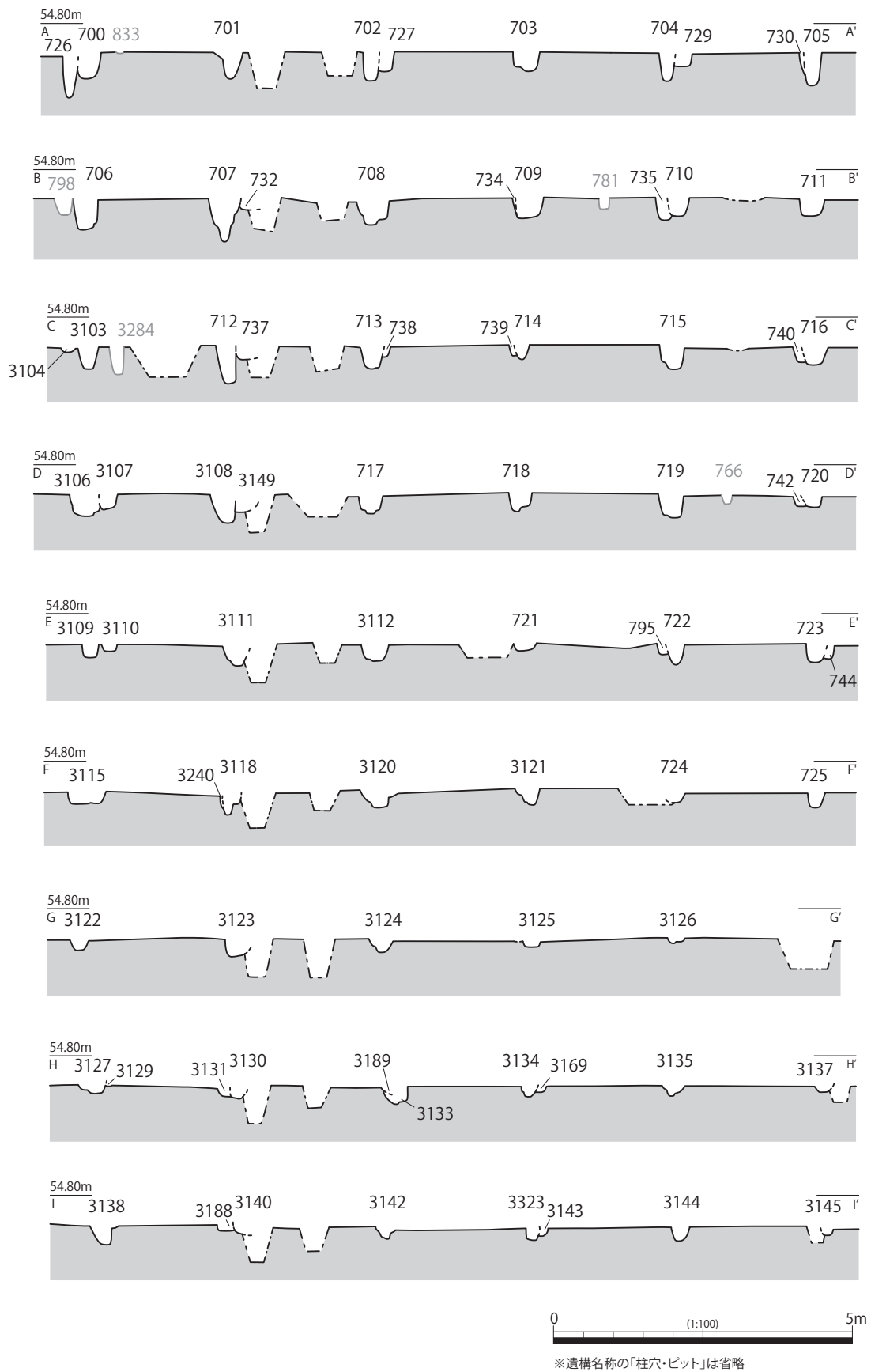




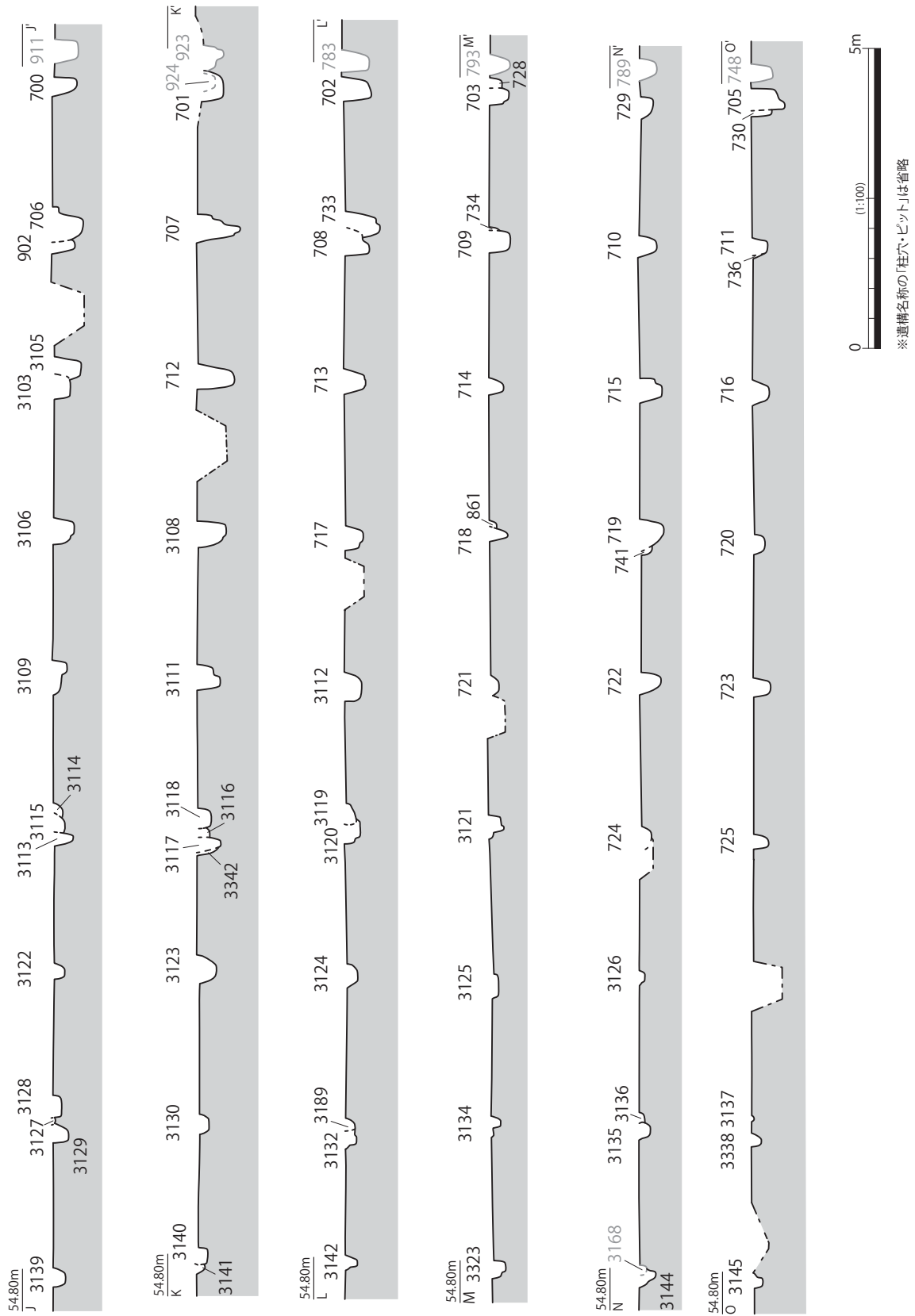
第66図 掘立柱建物13・19、3010溝



第67図 掘立柱建物13(1)



第68図 掘立柱建物13(2)



第69図 掘立柱建物13(3)

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第7表 掘立柱建物13遺構計測表(1)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱のあたり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	調査年度	備考
	長軸	短軸	深さ								
700	0.45	0.36	0.40	53.88	-	-	700>726	-	土師器皿Po115(埋め土) 礫(根巻石?) (抜き取り痕跡)	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
726	0.33	0.29	0.67	53.56	-	-	-	-	土師器細片(ピット内)	H28	
701	0.61	0.33	0.32	53.88	-	0.08	701<923・924	-	土師器細片(ピット内)	H28	
702	0.42	0.32	0.46	53.87	0.12	-	702>727	-	土師器細片(ピット内) 礫(礎盤石?) (埋め土)	H28	焼土塊(柱痕跡上部に検出) 礫は柱抜き取り後、埋め戻し
727	0.28	0.26	0.32	54.00	-	-	-	-	土師器細片(ピット内)、礫(礎盤石等) (抜取痕)	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
703	0.47	0.28	0.33	54.00	-	-	703>728	-	土師器細片(ピット内)、礫(礎盤石・根巻石?) (抜取痕) 旧石器剥片S2(埋め土)	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
728	0.29	△0.19	0.21	54.11	-	-	-	-	土師器細片(ピット内)、炭化物(薄い炭化物層:北側壁面)	H28	
704	0.42	0.31	0.35	53.96	0.15	0.15	704>729	礎盤石 根巻石	礎盤石・根巻石、土師器細片(ピット内)	H28	礎盤石上面は標高54.13m
729	0.43	0.33	0.21	54.09	-	-	-	-	土師器細片(ピット内)、礫(礎盤石もしくは根巻石) (抜取痕)	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
705	0.39	0.32	0.57	53.77	0.10	0.08	705>730	根巻石	根巻石、土師器細片(ピット内)	H28	
730	0.36	△0.24	0.36	53.98	-	-	-	-	土師器細片(ピット内)	H28	
706	0.64	0.40	0.49	53.81	0.12	-	706>902	-	土師器皿Po109・126・坏Po106(ピット底面直上) 礫(抜取痕・埋め土)	H28	1層の礫は柱抜き取り後、埋め戻し
902	0.30	0.26	0.39	53.92	0.07	-	-	-	土師器細片(ピット内)	H28	
707	0.61	0.53	0.72	53.59	-	0.10	707>732	根巻石 根石	根巻石・根石、土師器皿Po110・127・柱状高台Po128(抜取痕)	H28	
732	0.41	△0.16	0.18	54.12	-	-	-	-	土師器細片(ピット内)、礫(抜取痕)	H28	遺構基礎層中に含まれる自然礫上面をピット底面とする
708	0.56	0.50	0.41	53.87	-	0.10	708>733	根巻石 粘土塊	根巻石、土師器皿Po112(ピット内)、粘土塊:灰白色(2.5Y8/2)	H28	
733	0.36	△0.31	0.58	53.70	-	0.10	-	-	根石	H28	柱を抜き取り後、人為的に埋め戻し
709	0.48	0.40	0.34	54.00	0.12	-	709>734	根石	根石、土師器皿Po124・坏Po104・105(埋め土)	H28	根石は734ピット礎盤石・根巻石を転用か?
734	0.36	△0.19	0.17	54.15	-	-	-	-	礎盤石 根巻石	H28	
710	0.39	0.37	0.33	54.02	-	-	710>735	根巻石	根巻石、土師器細片・粘土塊(ピット内)	H28	根巻石は735ピット根石を転用か?
735	0.35	0.33	0.39	53.97	-	-	-	-	根石	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
711	0.44	0.37	0.28	54.03	-	-	711>736	-	土師器細片、礫(抜取痕・埋め土出土)	H28	
736	△0.24	0.25	0.13	54.16	-	-	-	-	-	H28	
3103	0.42	0.37	0.27	54.00	-	-	3103・3104 >3105	-	扁平礫(根巻石?) (抜取痕)・土師器壺Po192	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3104	0.30	0.25	0.20	54.04	-	-	-	-	-	H30	
3105	△0.43	0.42	0.48	53.80	-	-	-	-	礫(礎盤石または根巻石?)、土師器坏Po191、皿Po164(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
712	△0.46	0.45	0.61	53.68	-	-	712>737	根石	根石、礫(礎盤石)土師器皿Po114(抜取痕)、白磁壺Ⅱ類Po101(ピット内)	H28	
737	0.37	△0.18	0.18	54.09	-	-	-	-	-	H28	1層の礫は柱抜き取り後、埋め戻し
713	0.49	0.42	0.35	53.94	-	0.10	713>738	根巻石?	土師器皿Po111(ピット底面直上)、須恵器壺Po129、礫(根巻石?) (抜取痕)	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
738	0.33	△0.12	0.16	54.14	-	-	-	-	-	H28	
714	0.33	0.29	0.25	54.10	-	-	714>739	根石?	土師器皿Po119・礫(根石?) (抜取痕)	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
739	0.27	△0.11	0.20	54.15	-	-	-	-	礫(抜取痕?)	H28	
715	0.42	0.41	0.36	53.93	-	-	-	-	礎盤石	H28	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
716	0.46	0.41	0.29	54.01	-	-	716>740	-	土師器細片(ピット内)、礫(抜取痕)	H28	
740	△0.33	0.30	0.25	54.05	-	-	-	-	-	H28	
3106	0.53	0.45	0.35	53.94	-	-	3107>3106	-	礫(根巻石?) (抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3107	0.32	0.28	0.25	54.04	-	-	-	-	小礫や土器小片(抜取痕)	H30	
3108	0.48	0.43	0.44	53.83	-	-	3108>3149	-	礫(礎盤石・根石)、土師器坏Po189、高台付坏Po193、皿Po159(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し、炭化材(試料4)
3149	△0.38	0.18	0.25	54.00	-	-	-	-	炭化物、白磁碗Po196(抜取痕)	H30	混乱に切られる
717	0.45	0.40	0.31	53.99	0.16	-	-	礎盤石または根石	礎盤石または根石、土師器坏Po103(ピット内)	H28	礫が2段に重ねられている(717ピット6層)
718	0.38	0.27	0.31	54.02	-	0.08	718>861	-	越州窯密着Ⅲ類Po102(抜取痕)、白磁細片(ピット内)、礫(抜取痕)	H28	礫の下よりPo102出土(抜取痕)
861	0.29	△0.13	0.13	54.20	-	-	-	-	-	H28	
719	0.53	0.40	0.39	53.91	-	0.08	719>741	根石?	土師器皿Po108・116~118・123・礫(根石?)・炭化物(抜取痕)	H28	礫は、根石などの基礎固めに使用されていた礫を柱抜き取り後に埋め戻したものか?
741	0.31	△0.17	0.20	54.10	-	-	-	-	-	H28	
720	0.36	0.34	0.17	54.09	-	-	720>742	-	土師器細片(ピット内)	H28	
742	0.31	0.27	0.14	54.11	-	-	-	根巻石?	根巻石?	H28	
3109	0.58	0.45	0.22	54.08	-	-	-	礎盤石 根巻石	扁平礫、礎盤石、根巻石、土師器皿Po170(抜取痕)、土師器坏Po182、	H30	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し 礎盤石上面は標高54.14m
3110	0.28	0.25	0.13	54.16	-	-	-	-	-	H30	
3111	△0.40	0.38	0.31	53.92	-	-	-	-	大型礫(礎盤石・根巻石?)	H30	大型礫が2段重ねて出土、柱抜き取り後、埋め戻し 混乱に切られる
3112	0.48	0.47	0.30	53.99	-	-	-	-	小型礫(根巻石・根石?)、土師器坏Po184、皿Po166(抜取痕)	H30	小型礫は柱抜き取り後、埋め戻し
721	△0.43	0.34	0.14	54.15	-	-	-	-	礫(抜取痕)	H28	
722	0.37	0.32	0.35	53.96	-	-	-	根巻石	土師器細片(ピット内)	H28	
743	0.28	△0.16	0.06	54.25	0.13	-	722>795 >743	-	-	H28	
795	0.40	△0.17	0.19	54.12	-	-	-	根巻石 礎盤石	根巻石、礫(根巻石?)	H28	1層の礫は柱抜き取り後、埋め戻し

以下、各柱穴及び関連する小穴について詳述する。



第8表 掘立柱建物13遺構計測表(2)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱のあたり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	調査年度	備考
	長軸	短軸	深さ								
723	0.35	0.33	0.31	53.99	0.12	-	723>744	-	柱根(柱痕跡)、土師器細片(柱根下、底面直上)	H28	
744	0.27	△0.19	0.24	54.04	-	-	-	-	土師器細片(1層)	H28	
3113	0.30	0.26	0.34	53.94	-	0.08	-	-	礫(根巻石?) (抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3114	0.28	△0.18	0.14	54.12	-	-	3113>3115>3114	-	土師器皿Po173(抜取痕)	H30	
3115	0.65	0.48	0.20	54.07	-	-	-	-	礫(根巻石)、土器片、土師器皿Po161、須恵器甕Po204(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取りの際、露出か?
3116	△0.25	△0.20	0.15	54.10	-	-	-	-	土師器皿Po163、柱状高台Po181	H30	攪乱に切られる
3117	0.27	△0.16	0.40	53.91	-	0.08	-	-	-	H30	攪乱に切られる
3118	0.38	△0.35	0.40	53.91	-	0.10	3118>3116・3240	-	大小礫(礎盤石・根巻石)、土師器皿Po177、炭化物(抜取痕)	H30	大小礫は柱抜き取り後、埋め戻し 攪乱に切られる
3240	△0.25	△0.05	△0.30	54.01	-	-	3117>3116・3342	-	-	H30	大部分を3118に切られる
3342	△0.15	△0.05	△0.40	53.90	-	-	-	-	-	H30	大部分を3117に切られる
3119	0.34	0.28	0.20	54.09	-	-	3119>3120	-	大型礫	H30	大型礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3120	0.63	0.40	0.26	54.02	-	-	-	-	大小礫(根巻石等)、土師器皿Po145、被熱粘土塊CP16(抜取痕)	H30	大小礫は柱抜き取り後、埋め戻し、炭化材(試料5)
3121	0.53	0.35	0.27	54.06	-	0.11	-	-	小型礫(根巻石等)土玉CP1(抜取痕)	H30	小型礫は柱抜き取り後埋め戻し
724	0.27	△0.14	0.18	54.10	0.09	-	-	根巻石	根巻石	H28	
725	0.34	0.27	0.26	54.03	0.04	-	-	根巻石	根巻石、柱根(柱痕跡)	H28	生材(試料7)
3122	0.34	0.28	0.20	54.09	-	-	-	-	-	H30	
3123	0.50	△0.33	0.28	53.99	-	-	-	根巻石	根巻石(抜取痕)	H30	攪乱に切られる
3124	0.38	0.35	0.21	54.06	-	0.10	-	-	礫(根巻石・根石?)、土器片、土師器高台付坏Po194、須恵器薬壺Po201、長頸壺Po198~200(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3125	0.45	△0.32	0.13	54.16	-	-	-	-	礫(礎盤石・根巻石等)(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3126	0.32	0.24	0.08	54.25	-	-	-	-	扁平礫・礫(礎盤石・根巻石等)(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3127	0.45	△0.35	0.13	54.17	-	0.12	3128>3127>3129	-	炭化物、土器片、皿Po146・148・151・152・165・175、柱状高台Po178、須恵器甕Po202(抜取痕)	H30	
3128	0.50	0.39	0.14	54.14	-	-	-	-	炭化物、土器片、土師器皿Po162・169、柱状高台Po179(抜取痕)	H30	
3129	0.36	0.28	0.29	54.03	-	0.08	-	-	焼土塊、土師器皿Po154(抜取痕)	H30	
3130	0.40	△0.23	0.14	54.08	-	-	3130>3131	-	-	H30	攪乱に切られる
3131	0.31	△0.22	0.12	54.11	-	-	-	-	-	H30	
3134	0.35	0.25	0.13	54.15	-	-	-	-	土師器皿Po149(抜取痕)	H30	
3169	△0.20	0.18	0.06	54.22	-	-	3134>3169	-	-	H30	
3132	0.38	0.33	0.20	54.09	-	-	3189>3132・3133	-	土師器坏Po187(抜取痕)、坏Po183(堀方埋め土)	H30	炭化材(試料6)
3189	0.32	0.25	0.15	54.12	-	-	-	-	土師器皿Po147、皿Po174	H30	
3133	0.39	0.26	0.30	53.99	-	-	-	-	土師器皿Po147	H30	
3135	0.38	0.30	0.18	54.13	-	-	3135>3136	-	礎盤石、土師器坏Po186(抜取痕)	H30	礎盤石上面は標高54.26m
3136	0.23	△0.18	0.09	54.22	-	-	-	-	-	H30	
3137	0.25	0.19	0.09	54.20	-	-	-	根巻石 根石	根巻石・根石、土師器高台付坏Po195、土師器坏Po190(抜取痕)	H30	根巻石・根石は柱抜き取りの際、露出か?
3338	0.35	0.23	0.13	54.15	-	-	-	根巻石 根石	根巻石・根石(抜取痕)	H30	根巻石・根石は柱抜き取りの際、露出か?
3138	0.48	0.45	0.29	53.97	-	-	-	根巻石	礫(礎盤石・根巻石)、土器片、土師器坏Po185・188、皿Po155・160・167・171・172・176、柱状高台Po180、須恵器甕Po204(抜取痕)	H30	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3139	0.34	0.33	0.20	54.08	-	0.10	-	根巻石	根巻石、礫(根巻石)(抜取痕)、根巻石	H30	1層の礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3140	0.27	△0.15	0.16	54.13	-	-	3140>3141>3188	-	土師器皿Po158・168(抜取痕)	H30	攪乱に切られる
3141	△0.16	△0.13	0.14	54.18	-	-	-	-	土師器皿Po157	H30	攪乱に切られる
3188	0.41	△0.33	0.10	54.21	-	-	-	-	土師器皿Po153・156・157、白磁碗Po932(抜取痕)	H30	
3142	0.34	0.28	0.18	54.07	-	-	-	-	白磁壺Po197、白磁碗Po931、白磁片Po963(抜取痕)、白磁碗Po930(堀方埋め土)	H30	
3143	0.19	△0.14	0.10	54.12	-	-	3323>3143	-	-	H30	
3323	0.30	0.22	0.17	54.05	-	-	-	根巻石	小型礫(根巻石)、土師器皿Po150(抜取痕)	H30	
3144	0.37	0.32	0.25	54.03	-	-	3168>3144	-	-	H30	3146土坑を切る
3145	0.26	△0.14	0.15	54.13	-	-	-	-	-	H30	攪乱に切られる

※調査年度H28の出土遺物記載の出土遺物については鳥取県教育文化財団調査報告書120『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』を参照いただきたい

3103柱穴(第70・83図、第7・20表、図版18・55)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(C-C'ライン)。南東側で3105柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層が堆積し、1層上部から長軸0.19mの根巻石と想定される扁平礫が縦位に出土している。柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

柱間寸法(梁行総長:5間)

No.	柱間寸法(m)
A列 (東辺)700-705	12.1
A列 726-705	12.4
B列 706-711	12.1
B列 902-711	12.2
C列 3103-716	12.1
C列 3104-716	12.5
C列 3105-716	12.2
D列 3106-720	12.2
D列 3106-742	12.0
D列 3107-720	11.8
D列 3107-742	11.6
E列 3109-723	12.2
E列 3110-723	11.7
F列 3113-725	12.2
F列 3114-725	12.0
F列 3115-725	12.3
G列 3122-3126	9.9(4間)
H列 3127-3137	12.3
H列 3127-3338	12.2
H列 3128-3137	12.1
H列 3128-3338	12.0
H列 3129-3137	12.0
H列 3129-3338	11.9
I列 (西辺)3138-3145	12.1
I列 3139-3145	12.3

柱間寸法(桁行総長:8間)

No.	柱間寸法(m)
J列 (北辺)700-3138	19.6
J列 700-3139	20.0
J列 726-3138	19.6
J列 726-3139	20.0
K列 701-3140	19.4
K列 701-3141	19.6
K列 701-3188	19.5
L列 702-3142	19.5
L列 727-3142	19.4
M列 703-3143	19.7
M列 703-3323	19.6
N列 704-3144	19.7
N列 729-3144	19.5
O列 (南辺)705-3145	19.8

第9表 掘立柱建物13遺構計測表(3)

柱間寸法(梁行方向 Aライン)

No.	柱間寸法(m)
700-701	2.4
726-701	2.7
701-702	2.4
701-727	2.6
702-703	2.6
727-703	2.4
703-704	2.4
703-729	2.6
704-705	2.3
729-705	2.1

柱間寸法(梁行方向 Bライン)

No.	柱間寸法(m)
902-707	2.4
706-707	2.3
707-708	2.5
707-733	2.5
708-709	2.6
733-709	2.6
709-710	2.5
709-735	2.3
710-711	2.2
735-711	2.4

柱間寸法(梁行方向 Cライン)

No.	柱間寸法(m)
3103-712	2.3
3104-712	2.7
3105-712	2.4
712-713	2.4
713-714	2.5
714-715	2.6
715-716	2.3

柱間寸法(梁行方向 Dライン)

No.	柱間寸法(m)
3106-3108	2.4
3106-3149	2.6
3107-3108	2.0
3107-3149	2.2
3108-717	2.4
3149-717	2.2
717-718	2.4
718-719	2.6
719-720	2.4
719-742	2.2

柱間寸法(梁行方向 Eライン)

No.	柱間寸法(m)
3109-3111	2.6
3110-3111	2.1
3111-3112	2.3
3112-721	2.4
721-722	2.6
721-743	2.3
721-795	2.3
722-723	2.3
743-723	2.6
795-723	2.6

柱間寸法(梁行方向 Gライン)

No.	柱間寸法(m)
3122-3123	2.6
3123-3124	2.4
3124-3125	2.5
3125-3126	2.4

柱間寸法(梁行方向 Fライン)

No.	柱間寸法(m)
3113-3116	2.4
3113-3117	2.5
3113-3118	2.3
3114-3116	2.2
3114-3117	2.3
3114-3118	2.1
3115-3116	2.5
3115-3117	2.6
3115-3118	2.4
3116-3119	2.5
3116-3120	2.4
3117-3119	2.4
3117-3120	2.3
3118-3119	2.6
3118-3120	2.5
3119-3121	2.5
3120-3121	2.6
3121-724	2.4
724-725	2.4

柱間寸法(梁行方向 Hライン)

No.	柱間寸法(m)
3127-3130	2.5
3127-3131	2.3
3128-3130	2.3
3128-3131	2.1
3129-3130	2.2
3129-3131	2.0
3130-3132	2.3
3130-3133	2.6
3130-3189	2.4
3131-3132	2.5
3131-3133	2.8
3131-3189	2.6
3132-3134	2.5
3132-3169	2.7
3133-3134	2.2
3133-3169	2.4
3189-3134	2.4
3189-3169	2.6
3134-3135	2.5
3134-3136	2.5
3169-3135	2.3
3169-3136	2.3
3135-3137	2.5
3135-3338	2.4
3136-3137	2.5
3136-3338	2.4

柱間寸法(梁行方向 Iライン)

No.	柱間寸法(m)
3138-3140	2.3
3138-3141	2.3
3138-3188	2.1
3139-3140	2.5
3139-3141	2.5
3139-3188	2.3
3140-3142	2.4
3141-3142	2.4
3188-3142	2.6
3142-3143	2.6
3142-3323	2.5
3143-3144	2.3
3323-3144	2.4
3144-3145	2.5

柱間寸法(桁行方向 Jライン)

No.	柱間寸法(m)
700-706	2.4
700-902	2.7
726-706	2.4
726-902	2.7
706-3103	2.7
706-3104	2.5
706-3105	2.4
902-3103	2.4
902-3104	2.2
902-3105	2.1
3103-3106	2.3
3103-3107	2.3
3104-3106	2.5
3104-3107	2.5
3105-3106	2.6
3105-3107	2.6
3106-3109	2.6
3106-3110	2.5
3107-3109	2.6
3107-3110	2.5
3109-3113	2.6
3109-3114	2.2
3109-3115	2.4
3110-3113	2.7
3110-3114	2.3
3110-3115	2.5
3113-3122	2.3
3114-3122	2.7
3115-3122	2.5
3122-3127	2.4
3122-3128	2.2
3122-3129	2.6
3127-3138	2.3
3127-3139	2.7
3128-3138	2.5
3128-3139	2.9
3129-3138	2.1
3129-3139	2.5

柱間寸法(桁行方向 Kライン)

No.	柱間寸法(m)
701-707	2.3
707-712	2.4
712-3108	2.6
712-3149	2.7
3108-3111	2.5
3149-3111	2.4
3111-3116	2.6
3111-3117	2.7
3111-3118	2.2
3116-3123	2.2
3117-3123	2.1
3118-3123	2.6
3123-3130	2.6
3123-3131	2.6
3130-3140	2.2
3130-3141	2.4
3130-3188	2.3
3131-3140	2.2
3131-3141	2.4
3131-3188	2.3

柱間寸法(桁行方向 Lライン)

No.	柱間寸法(m)
702-708	2.7
702-733	2.3
727-708	2.6
727-733	2.2
708-713	2.2
733-713	2.6
713-717	2.5
717-3112	2.5
3112-3119	2.2
3112-3120	2.4
3119-3124	2.6
3120-3124	2.4
3124-3132	2.8
3124-3133	2.4
3124-3189	2.6
3132-3142	2.0
3133-3142	2.4
3189-3142	2.2

柱間寸法(桁行方向 Mライン)

No.	柱間寸法(m)
703-709	2.5
709-714	2.4
714-718	2.5
718-721	2.5
721-3121	2.4
3121-3125	2.5
3125-3134	2.4
3125-3169	2.4
3134-3143	2.5
3134-3323	2.4
3169-3143	2.5
3169-3323	2.4

柱間寸法(桁行方向 Nライン)

No.	柱間寸法(m)
704-710	2.6
704-735	2.5
729-710	2.3
729-735	2.2
710-715	2.4
735-715	2.5
715-719	2.4
719-722	2.5
719-743	2.7
719-795	2.6
722-724	2.5
743-724	2.4
795-724	2.5
724-3126	2.4
3126-3135	2.5
3126-3136	2.3
3135-3144	2.4
3136-3144	2.6

柱間寸法(桁行方向 Oライン)

No.	柱間寸法(m)
705-711	2.4
711-716	2.5
716-742	2.6
716-720	2.6
720-723	2.4
742-723	2.4
723-725	2.6
725-3137	4.6(2間)
725-3338	4.9(2間)
3137-3145	2.7
3338-3145	2.4

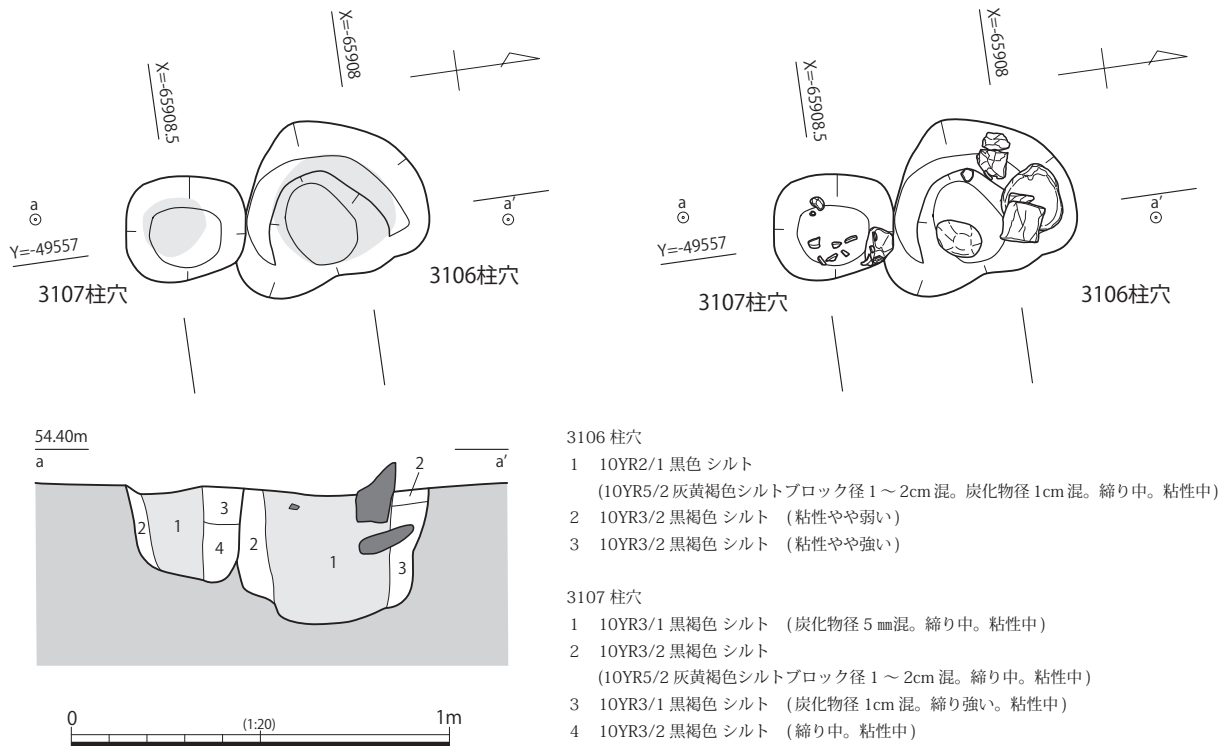
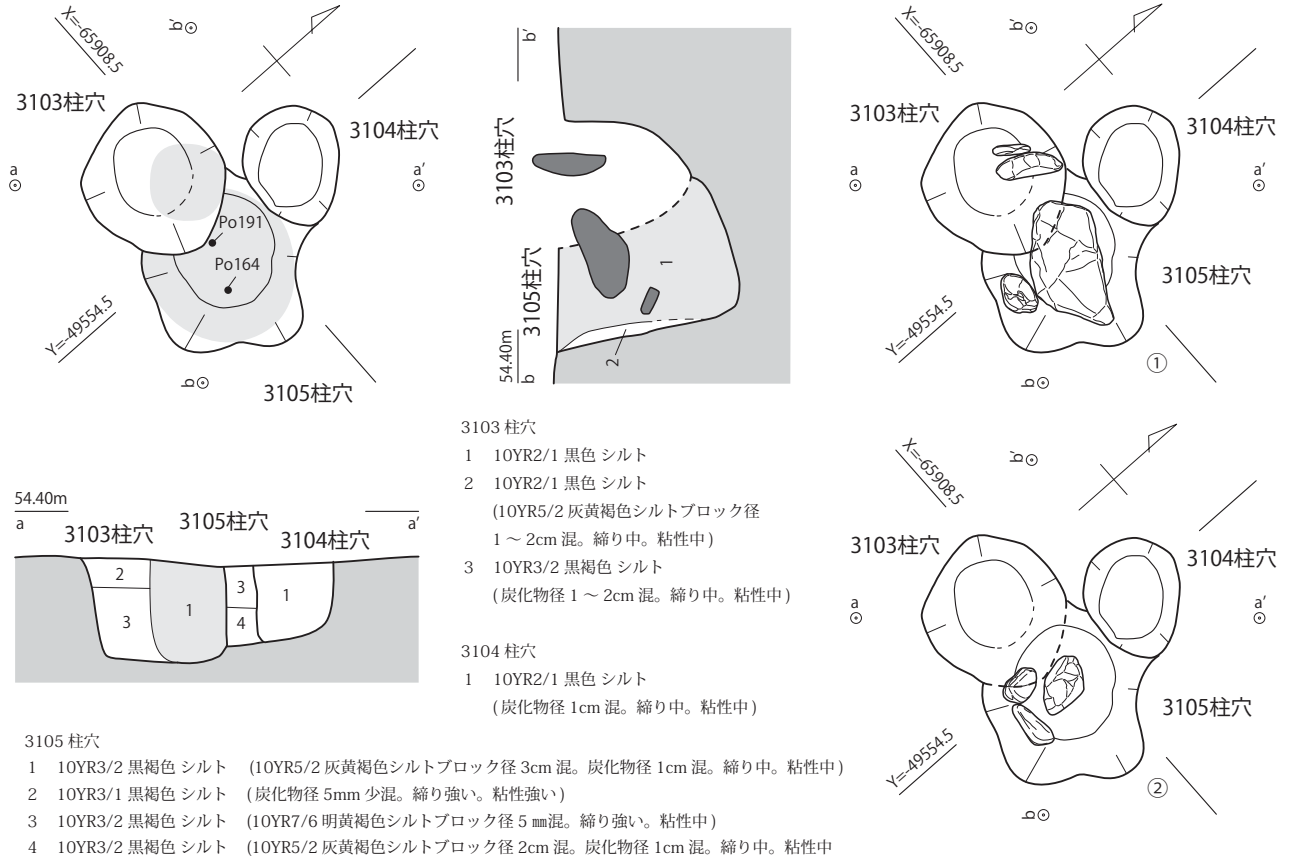
遺物は1層から出土した土師器甕Po192を図化している。

3104柱穴(第70図、第7表、図版18)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(C-C'ライン)。南側で3105柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は黒色シルトの単層である。

3105柱穴(第70・83図、第7・19・20表、図版18・55)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。西側を3103柱穴、北側を3104柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.43m、短軸0.42m、検出面からの深さ0.48mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡1層と掘方埋め土2~4層が堆積し、1



第70図 掘立柱建物13 3103~3107柱穴

層から長軸0.14～0.37mの大小礫が数多く礫が出土している。柱抜き取り後に、礎盤石もしくは根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

遺物は1層から土師器坏Po191、皿Po164が出土している。

### 3106柱穴(第70図、第7表、図版18)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(D-D'ライン)。南側を3107柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.53m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.35mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～3層が堆積し、1層上部から長軸0.07～0.18mの大小礫が数多く礫が出土している。柱抜き取り後に、根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

### 3107柱穴(第70図、第6表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(D-D'ライン)。北側で3106柱穴を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層が堆積し、1層上面を中心に小礫や土器小片が出土している。遺物は小片のため図化していない。

### 3108柱穴(71・82図、第7・19・20表、図版18・54・55)

調査区南西10F-2fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(D-D'ライン)。南側で3149柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.48m、短軸0.43m、検出面からの深さ0.44mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層下部では長軸0.14～0.2mの礎盤石や根石として使われていたと考えられる礫が埋め戻されていた。

遺物は、1層から土師器坏Po189、高台付坏Po193、皿Po159が出土している。

1層に含まれる炭化材(試料4)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD1016-1052(暦年較正2 $\sigma$ の確率1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。本遺構から出土した土器の年代観より、若干古い年代値が得られている。

### 3149柱穴(第71・83図、第7・20表、図版18・59・88・89)

調査区南西10F-2fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(D-D'ライン)。南側を暗渠、北側を3108柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.38m、短軸0.18m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡1層のみ堆積し、炭化物を多く含んでいる。

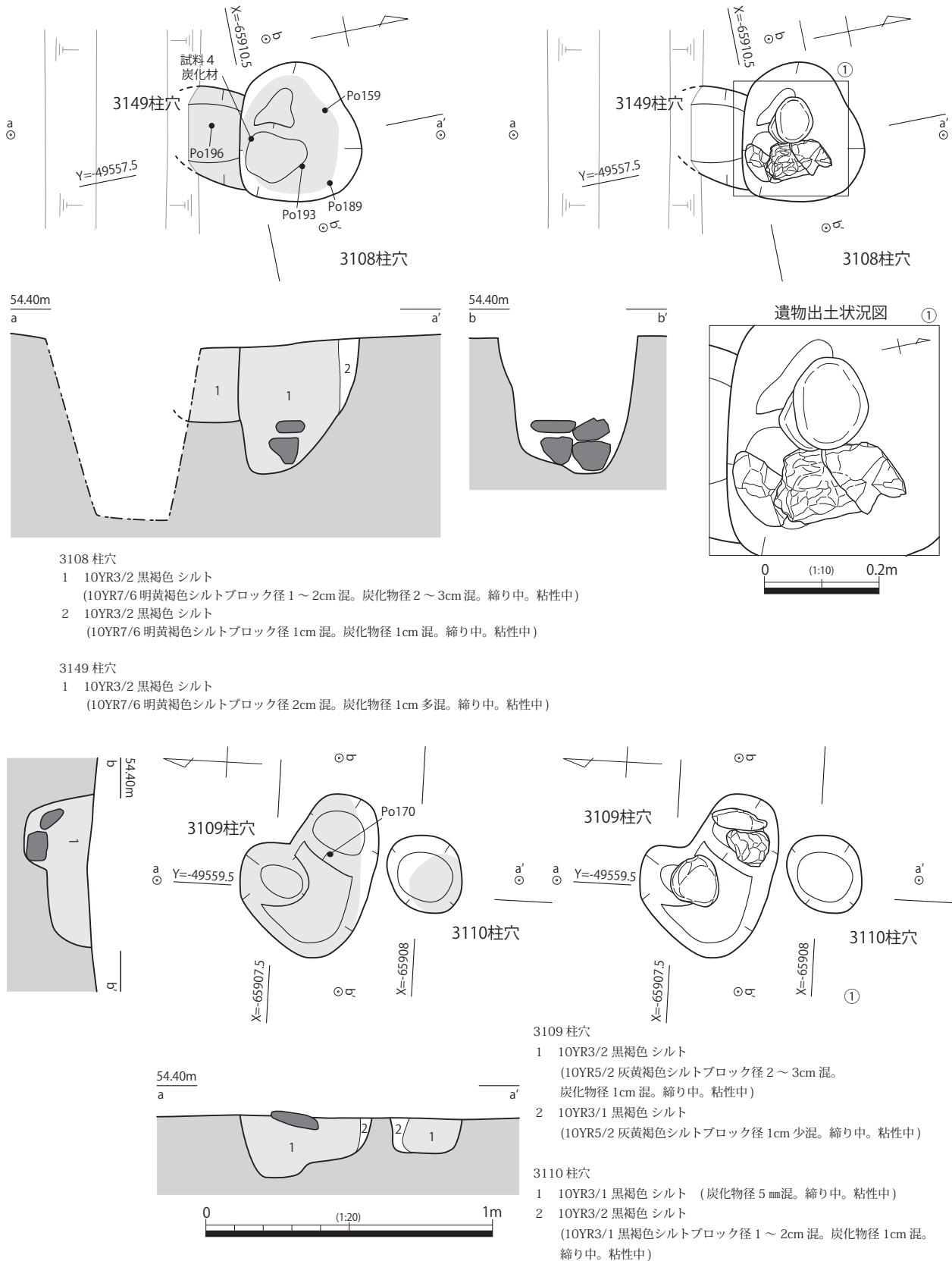
遺物は、1層から白磁碗Po196が出土している。

### 3109柱穴(第71・83図、第7・20表、図版18・54・55)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.58m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.22mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層上面で長軸0.17mの扁平礫が出土している。また底

面には長軸0.15~0.2m、厚さ0.05~0.08mの礎盤石と根巻石の一部が出土している。上面で出土した扁平礫は柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

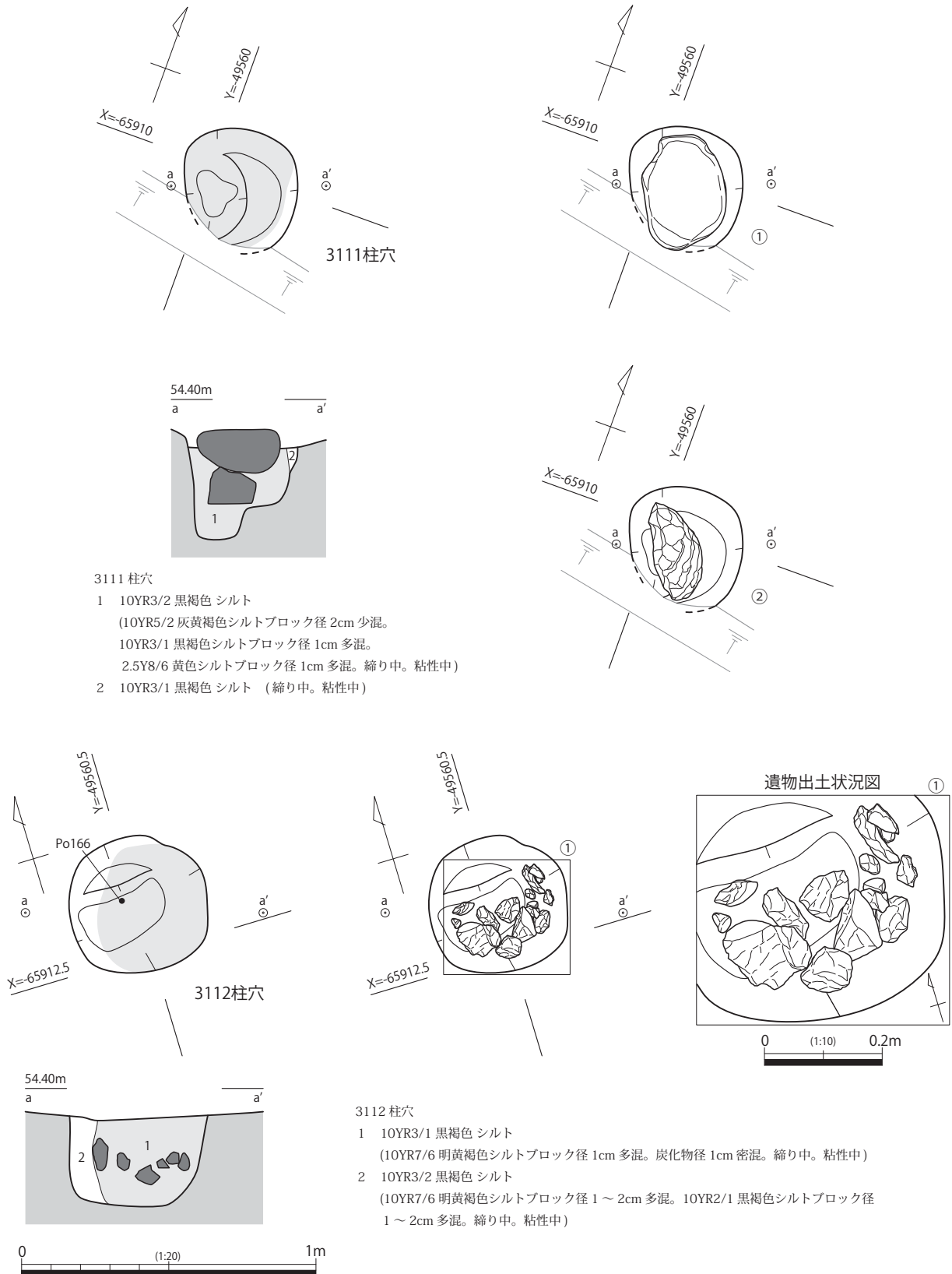
遺物は、1層から土師器皿Po170、坏Po182が出土している。



第71図 掘立柱建物13 3108~3110・3149柱穴

3110柱穴(第71図、第7表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(E-E'ライン)。北側で3109柱穴が近接する。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.13



第72図 掘立柱建物13 3111・3112柱穴

mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

### 3111柱穴(第72図、第7表)

調査区南西10F-1f・2f・1g・2gグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(E-E'ライン)。南側を暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、断面形は東側にテラス面を設ける段掘りである。残存規模は長軸0.40m、短軸0.38m、検出面からの深さ0.31mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層上部から長軸0.35~0.38m、厚さ0.13~0.14mの大型礫が2段重ねられて出土している。柱抜き取り後に、礎盤石や根巻石として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

### 3112柱穴(第72・83図、第7・19・20表、図版18・55)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.48m、短軸0.47m、検出面からの深さ0.30mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層中程から長軸0.06~0.15mの小型礫が複数出土している。柱抜き取り後に、根巻石や根石として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

遺物は、1層から土師器坏Po184、皿Po166が出土している。

### 3113柱穴(第73図、第8表、図版18)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。東側で3115柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.34mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、2層上面に長軸0.25m、厚さ0.07mの礫が出土している。柱抜き取り後に、根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

### 3114柱穴(第73・83図、第8・20表、図版54)

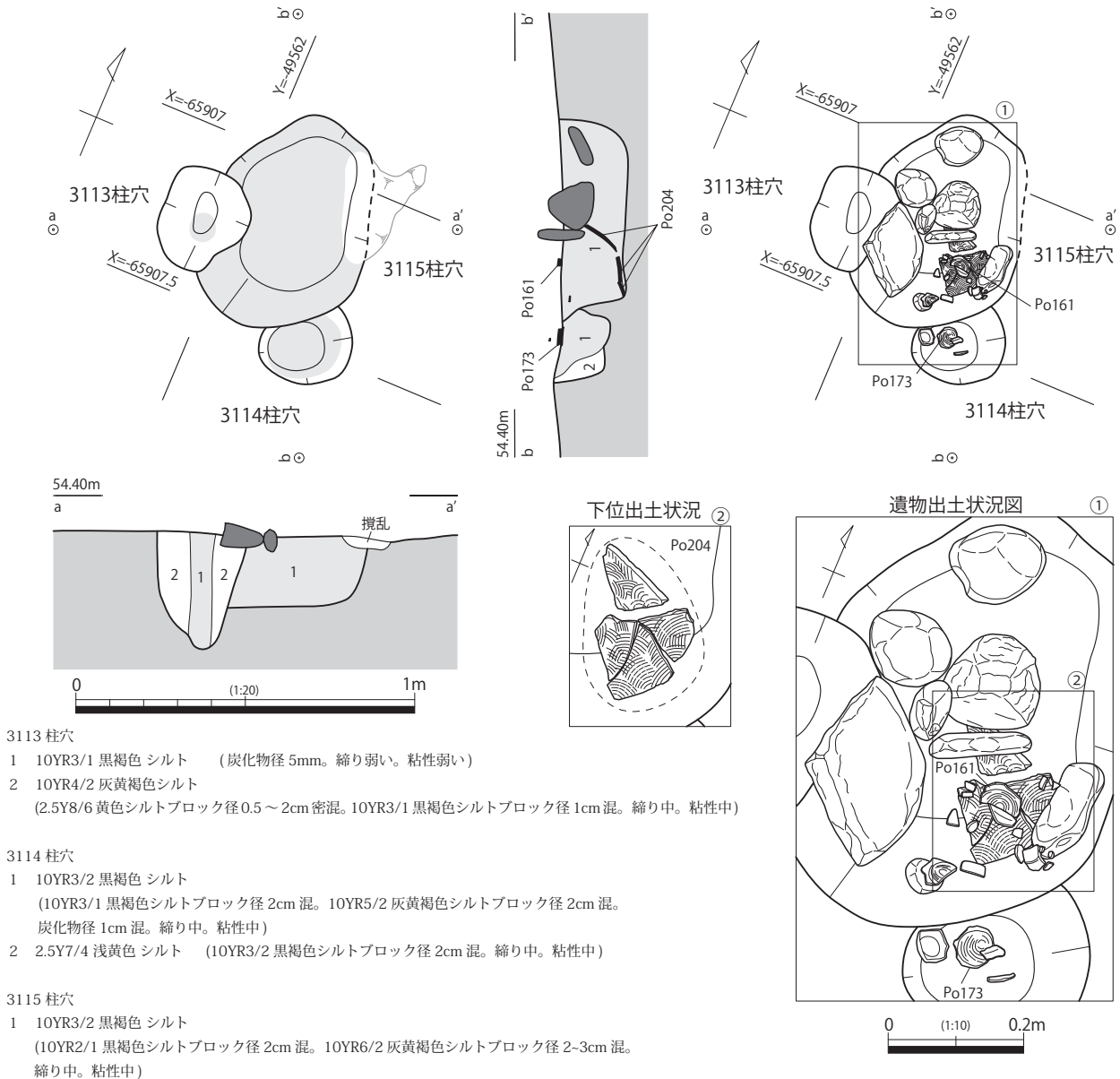
調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。北側の一部が3115柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.28m、短軸0.18m、検出面からの深さ0.14mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

遺物は、1層から土師器皿Po173が出土している。

### 3115柱穴(第73・83・84図、第8・19・21表、図版19・54・56・57)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(F-F'ライン)。西側で3113柱穴、南側で3114柱穴に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.65m、短軸0.48m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層のみが堆積し、長軸0.13~0.28mの大小礫や土器片が複数出土している。これらは本来掘方埋め土中の根巻石と割り入れた土器と考えられ、柱抜き取りの際に露出した可能性がある。

遺物は、1層から土師器皿Po161、須恵器甕Po204が出土している。Po204は体部破片の内面を上向きに埋置されていた。なお、Po204は本建物3138柱穴出土破片と接合する。



第73図 掘立柱建物13 3113~3115柱穴

**3116柱穴(第74・83図、第8・19・21表、図版54・55)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(K-K'ライン)。西側で3117柱穴、東側で3118柱穴に切られ、南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.25m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。

遺物は、埋土から土師器皿Po163、柱状高台Po181が出土している。

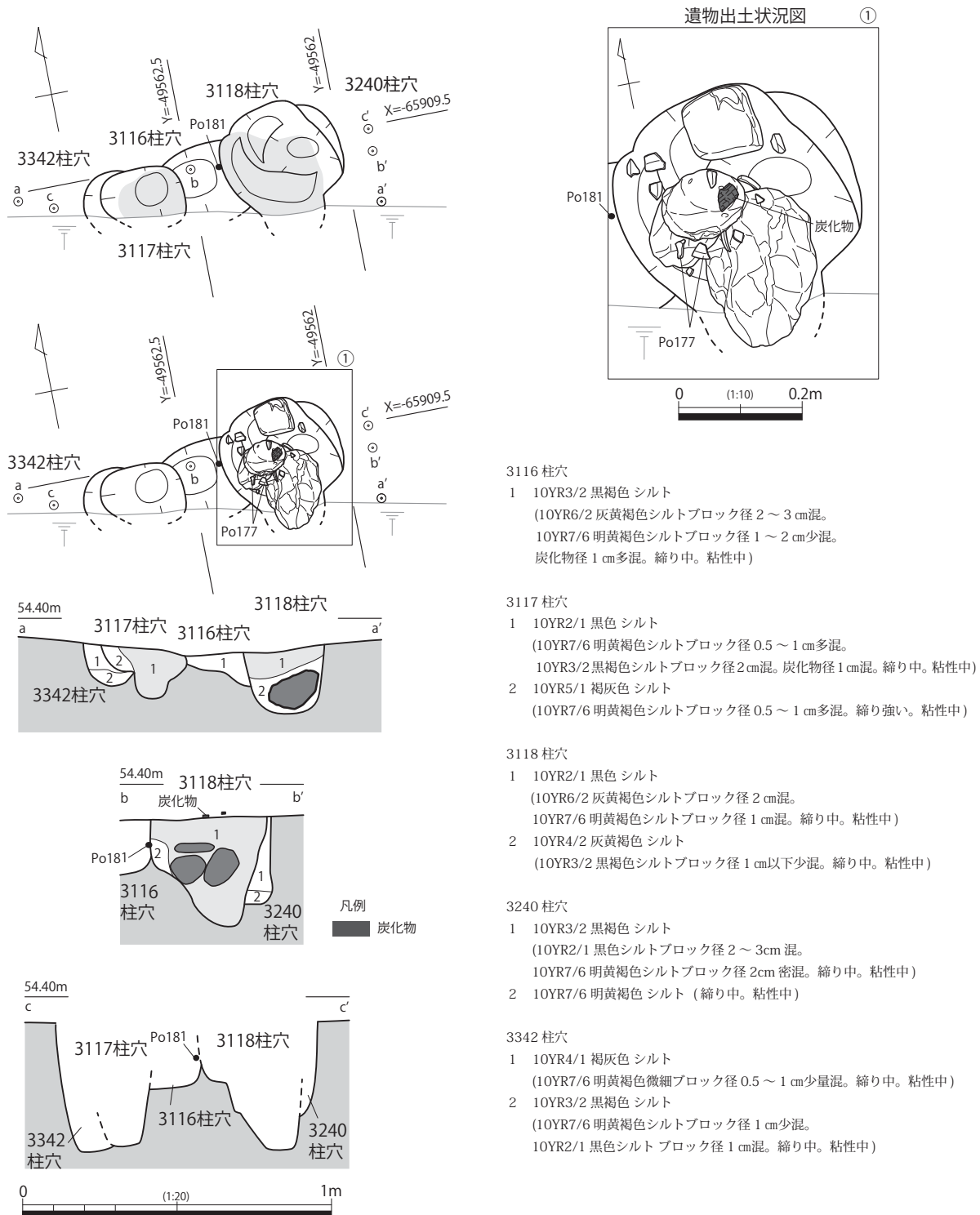
**3117柱穴(第74図、第8表)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(K-K'ライン)。西側で3342柱穴、東側で3116柱穴を切り、南側を暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.27m、短軸0.16m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。



3118柱穴(第74・83図、第8・20表、図版19・55)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(F-F'ライン)。西側で3116柱穴、東側で3240柱穴を切り、南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.38m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層から長軸0.11~0.26mの大小礫や土器片、炭化物が複数出土している。柱抜き取り後に、礎盤石や根巻石として使われていた礫や土器片等を埋め戻したものと考えられる。



第74図 掘立柱建物13 3116~3118・3240・3342柱穴

遺物は、1層から土師器皿Po177が出土している。

#### 3240柱穴(第74図、第8表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である3118柱穴(F-F'ライン)と重複し、わずかに東壁が検出された。したがって平面形は不明である。残存規模は長軸0.25m、短軸0.05m、検出面からの深さ0.30mを測る。埋土は掘方埋め土の1・2層が堆積する。

#### 3342柱穴(第74図、第8表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(K-K'ライン)。東側で3117柱穴に切られ、南側を暗渠によって削平されている。平面形は削平のため不明、残存規模は長軸0.15m、短軸0.05m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は褐灰色シルトの1層と黒褐色シルトの2層が堆積し掘方埋め土の可能性が高いと考えられる。

#### 3119柱穴(第75図、第8表、図版19)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(L-L'ライン)。西側で3120柱穴を切る。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色から灰黄褐色シルトの単層で、長軸0.27m、厚さ0.21mの大型礫が出土している。

#### 3120柱穴(第75・83図、第8・19表、図版19・55・59)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(F-F'ライン)。東側の一部を3119柱穴に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.63m、短軸0.40m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層から長軸0.1~0.2mの大小礫が複数出土している。柱抜き取り後に、根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

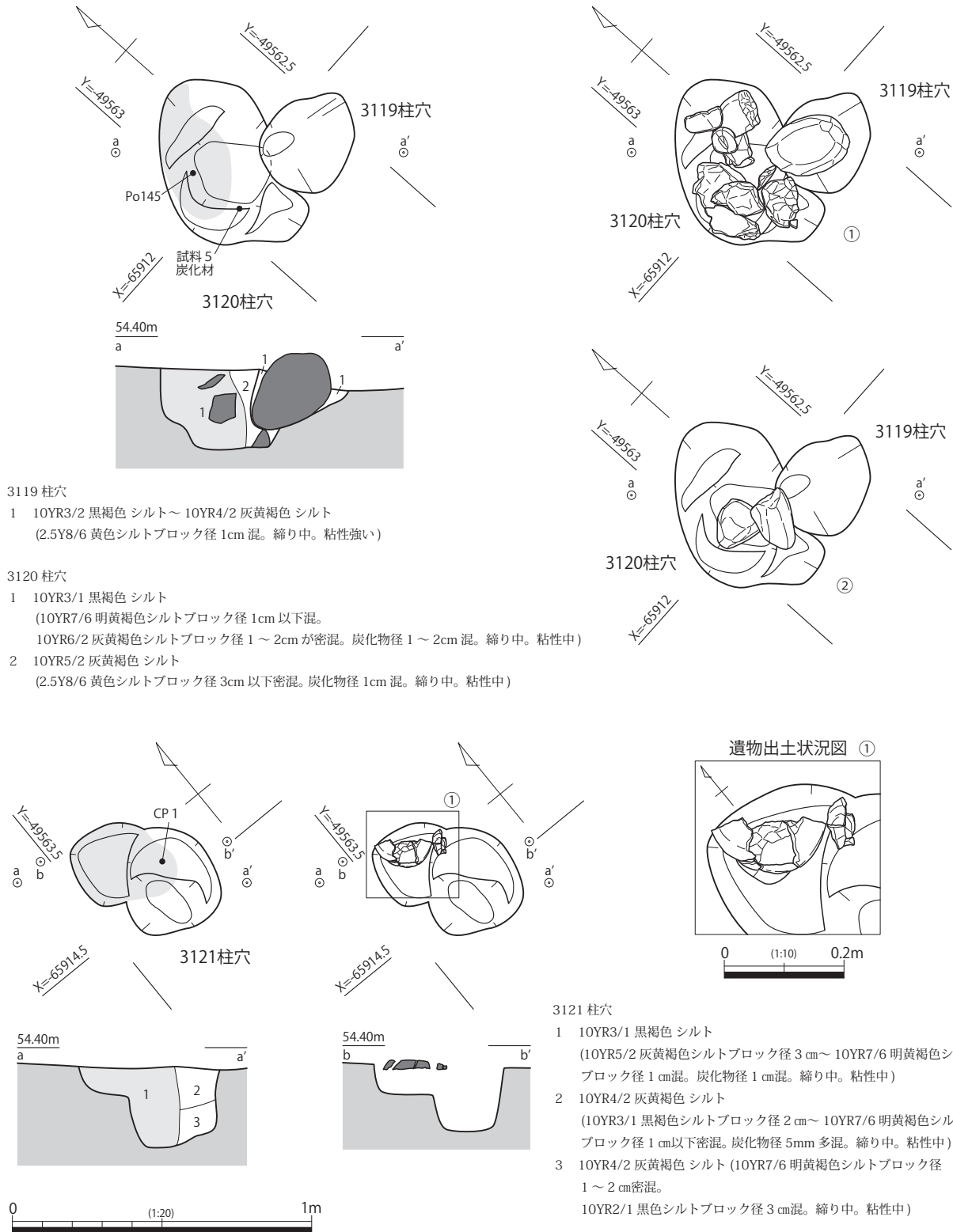
遺物は、1層から土師器皿Po145、小片のため図化していないが被熱粘土塊CP16(図版59-3)が出土している。

1層に含まれる炭化材(試料5)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD878-982(暦年較正 $2\sigma$ )の値が得られた(第5章第1節参照)。本遺構から出土している土器の年代観より、古い年代値が得られている。

#### 3121柱穴(第75・83図、第8・44表、図版19・59)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(F-F'ライン)。平面形は瓢形を呈し、西側にテラス面を設けている。規模は長軸0.53m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層が堆積する。西側テラス面には小型礫が出土している。柱抜き取り後に根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

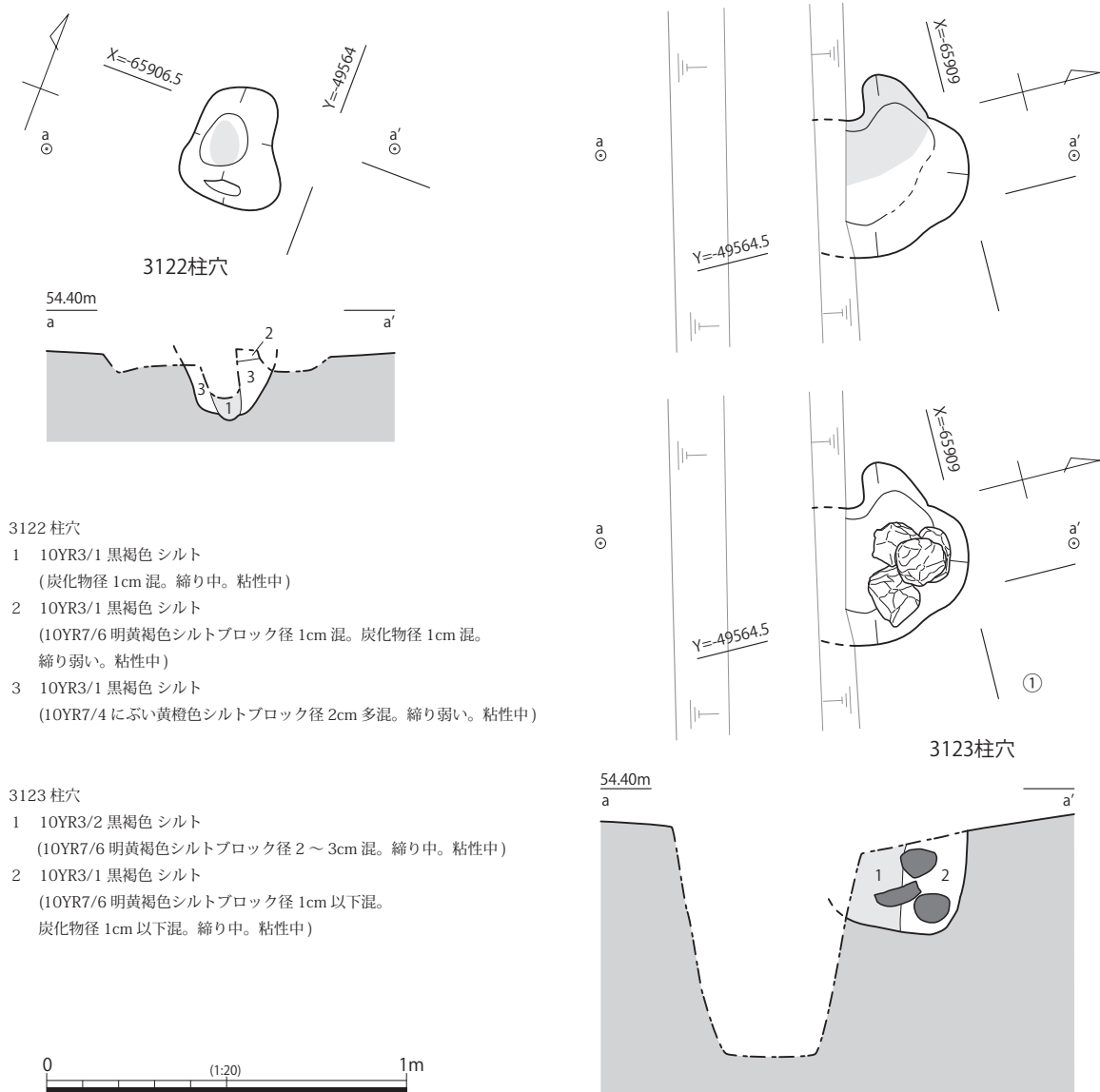
遺物は、1層上面から土玉CP1が出土している。



第75図 掘立柱建物13 3119～3121柱穴

3122柱穴(第76図、第8表、図版19)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(G-G'ライン)。平面形は瓢形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層が堆積する。1層から小礫が出土している。



- 3122 柱穴
- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
  - 2 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 混。炭化物径 1cm 混。  
縮り弱い。粘性中)
  - 3 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/4 にぶい黄褐色シルトブロック径 2cm 多混。縮り弱い。粘性中)

- 3123 柱穴
- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 2～3cm 混。縮り中。粘性中)
  - 2 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 以下混。  
炭化物径 1cm 以下混。縮り中。粘性中)

第76図 掘立柱建物13 3122・3123柱穴

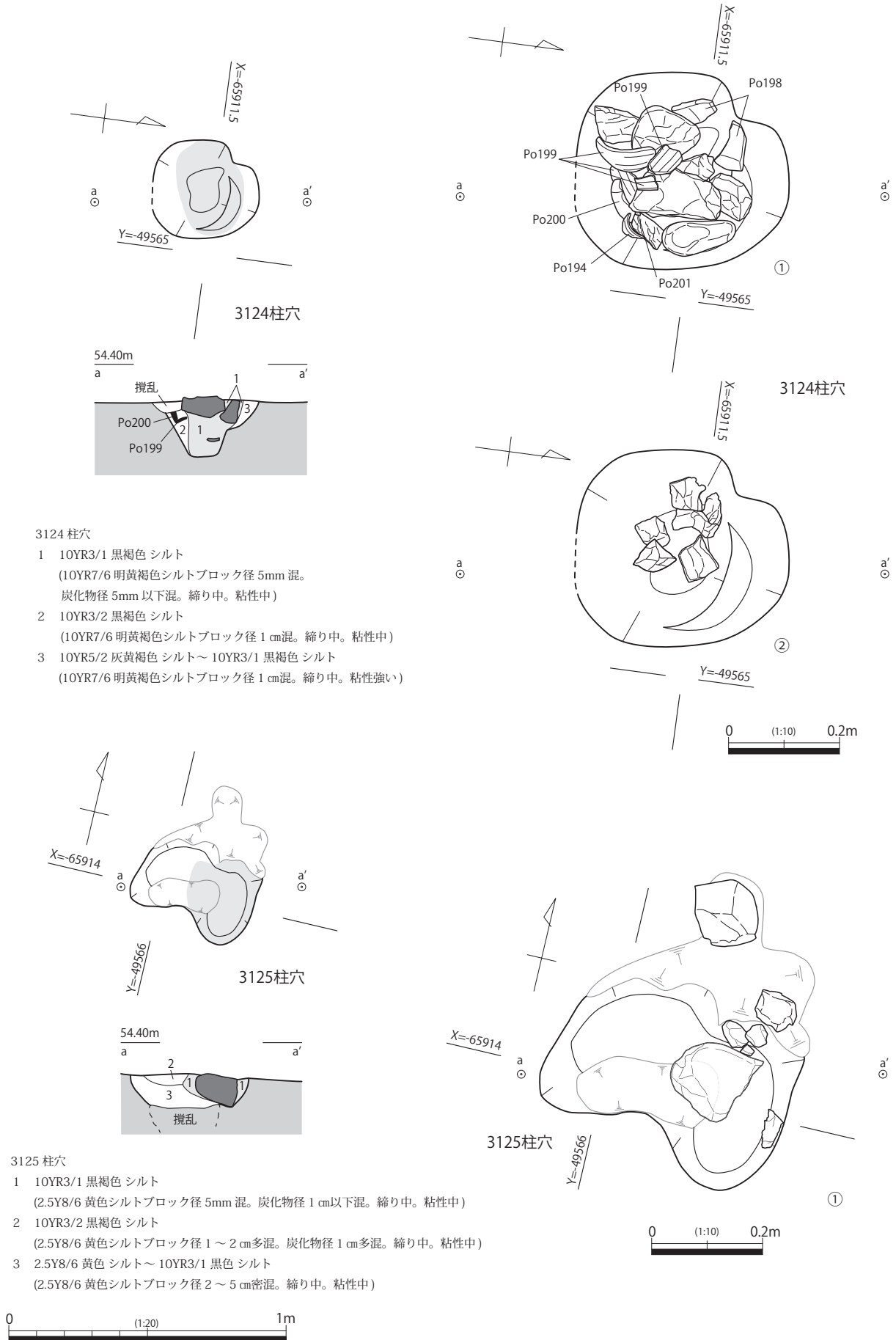
3123柱穴(第76図、第8表、図版19)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した柱穴である(G-G'ライン)。南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.50m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.28mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、2層から長軸0.13～0.15mの根巻石が出土している。

3124柱穴(第77・83・84図、第8・20表、図版20・55・58・59)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、VII層上面で検出した柱穴である(G-G'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.21mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層が堆積し、1層上面から長軸0.07～0.17mの小・中型礫や土器片が複数出土している。柱抜き取り後に、根巻石や根石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

遺物は1層より、須恵器長頸壺Po198と薬壺の可能性が考えられるPo201、2層より土師器高台付



第77図 掘立柱建物13 3124・3125柱穴

坏Po194、長頸壺Po199・200が出土している。

### 3125柱穴(第77図、第8表、図版20)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(G-G'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、北側の掘方上半を攪乱に切られる。残存規模は長軸0.45m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層が堆積し、1層から長軸0.04~0.14mの礫が複数出土している。柱抜き取り後に、礎盤石や根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

### 3126柱穴(第78図、第8表、図版20)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(G-G'ライン)。平面形は瓢形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1・2層上面から長軸0.11~0.17mの扁平礫等が出土している。掘方上半が削平されているため不明な点はあるが、柱抜き取り後に、礎盤石や根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと推測される。

### 3127柱穴(第78・83・84図、第8・19・20表、図版20・54・55・58)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。東側を3128柱穴に切れ、南西側で3129柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.45m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層には多量の炭化物が混じり、数多くの土器片が出土している。柱抜き取り後に、これらを埋め戻したものと考えられる。

遺物は、1層から土師器皿Po146・148・151・152・165・175、柱状高台Po178、須恵器甕Po202が出土している。

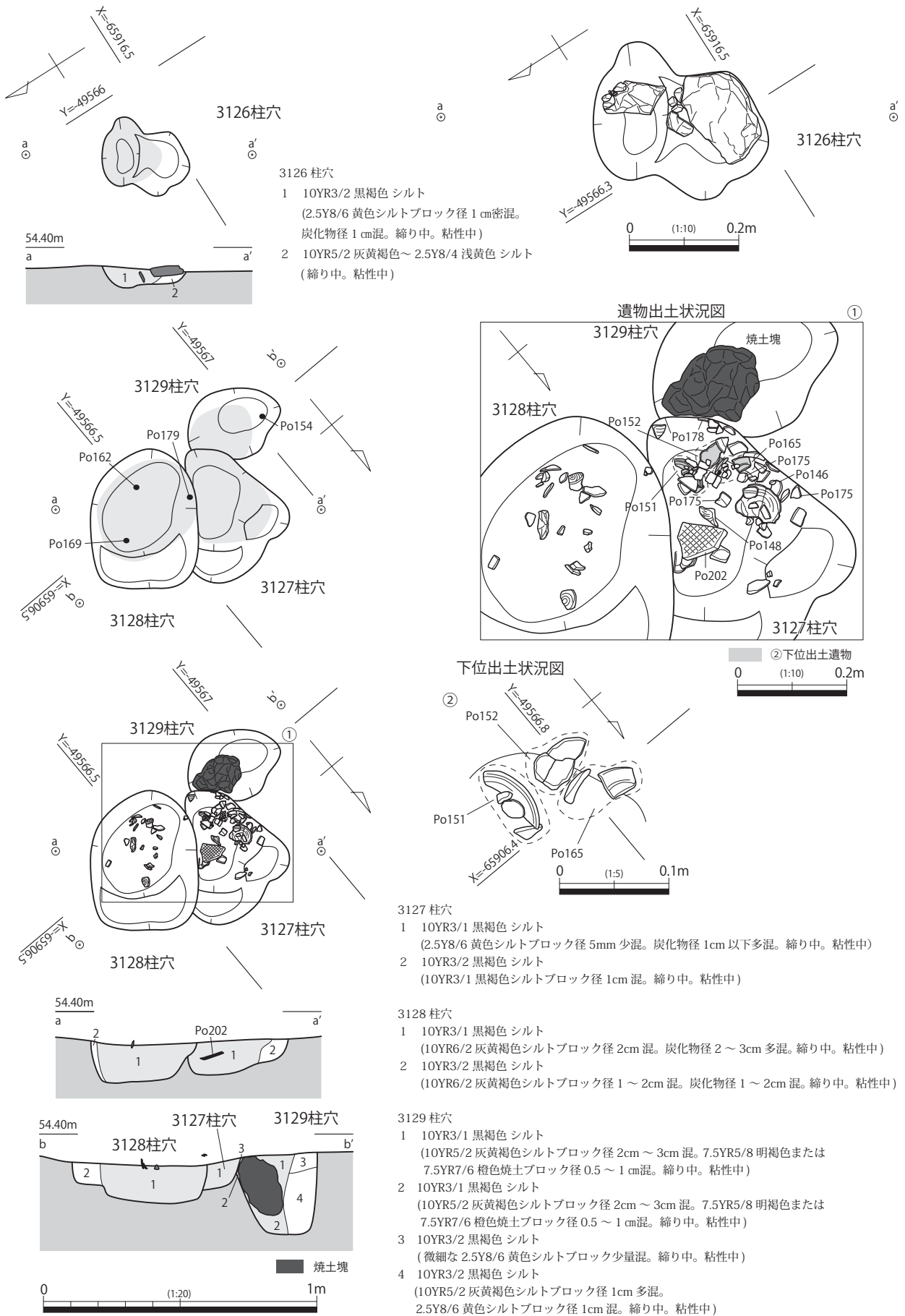
### 3128柱穴(第78・83図、第8・19・20表、図版54・55)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。西側で3127柱穴を切る。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.50m、短軸0.39m、検出面からの深さ0.14mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層には多量の炭化物が混じり、数多くの土器片が出土している。柱抜き取り後に、これらを埋め戻したものと考えられる。

遺物は、1層から土師器皿Po162・169、柱状高台Po179が出土している。

### 3129柱穴(第78・83図、第8・19表、図版20・55)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。北東側の一部が3127柱穴によって切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.36m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.29mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3・4層が堆積し、1層から長軸0.19m、厚さ0.14mの焼土塊が出土している。柱抜き取り後に埋め戻したものと考えられる。



第78図 掘立柱建物13 3126～3129柱穴

遺物は、1または2層から土師器皿Po154が出土している。

#### 3130柱穴(第79図、第8表、図版21)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。北側で3131柱穴を切り、南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.40m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.14mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

#### 3131柱穴(第79図、第8表、図版21)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。南側の一部が3130柱穴によって切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.31m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

#### 3134柱穴(第79・83図、第8・19表、図版21・55)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。南側で3169柱穴を切る。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

遺物は、1層から土師器皿Po149が出土している。

#### 3169柱穴(第79図、第8表)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。北側を3134柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.20m、短軸0.18m、検出面からの深さ0.06mを測る。埋土は黒色シルトの単層である。

#### 3132柱穴(第79・83図、第8・20表、図版20・55)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(L-L'ライン)。南東側を3189柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.38m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3層が堆積する。

遺物は、1層から土師器坏Po187、3層から坏Po183が出土している。

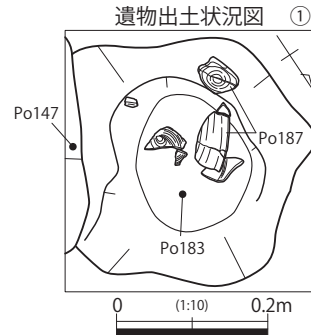
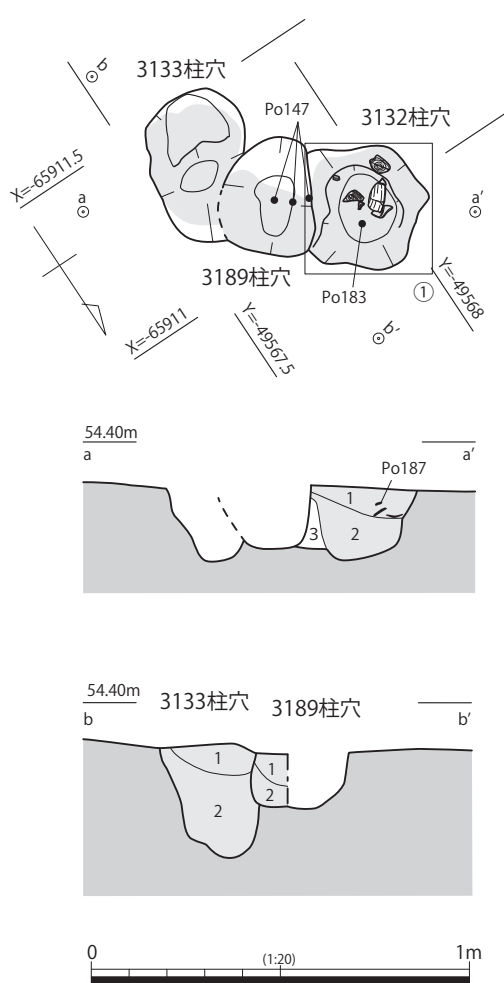
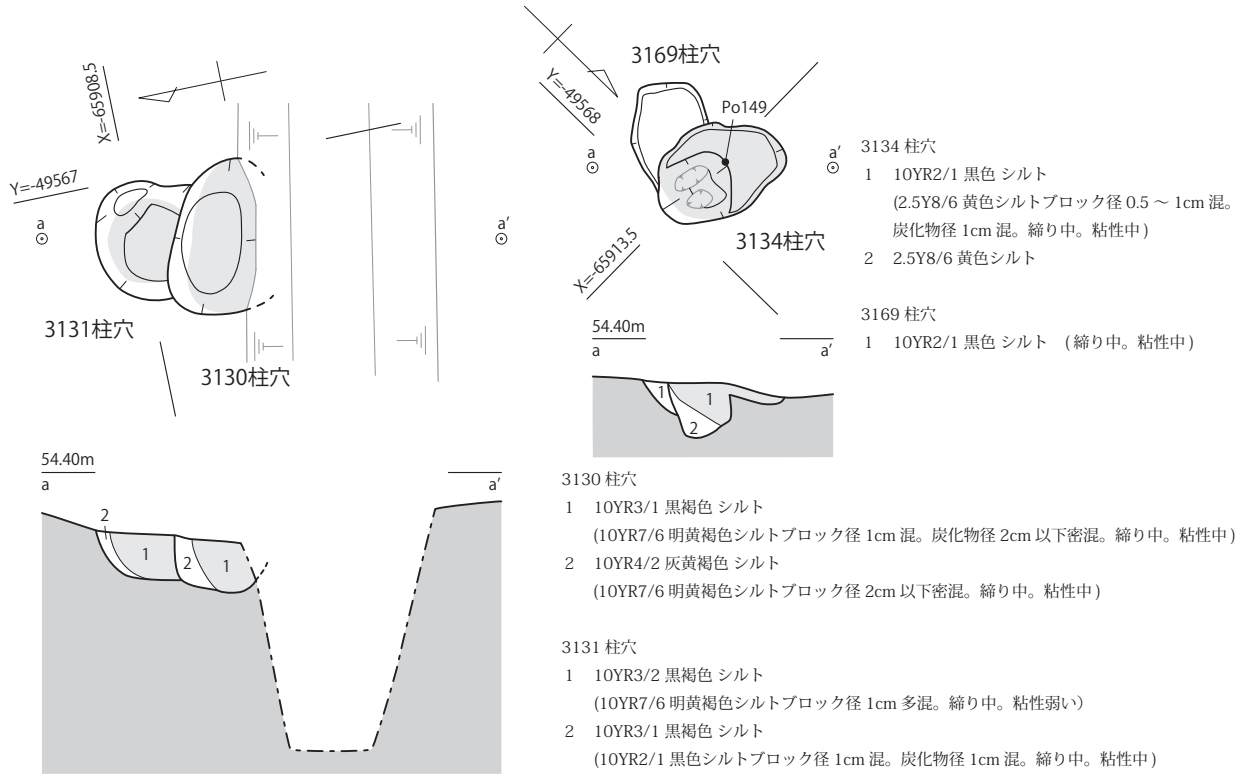
1層に含まれる炭化材(試料6)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD890-981(暦年較正 $2\sigma$ )の値が得られた(第5章第1節参照)。本遺構から出土している土器の年代観より、古い年代値が得られている。

#### 3189柱穴(第79・83図、第8・19・20表、図版20・54・55)

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。北西側で3132柱穴、南東側で3133柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

遺物は、1層から土師器皿Po147、2層から皿Po174が出土している。





- 3132 柱穴  
1 10YR4/1 褐色シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 3cm 混。2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 2cm 少混。  
炭化物径 1cm 混。締り中。粘性中)  
2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1 ~ 2cm 密混。焼土粒径 1 ~ 2cm 密混。  
炭化物径 1cm 以下多混。締り中。粘性中)  
3 2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1 ~ 2cm 密混
- 3133 柱穴  
1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR2/1 黒色シルトブロック径 1cm 以下 ~ 2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1cm 以下混。  
焼土粒径 1cm 以下混。炭化物径 1cm 以下混。締り強い。粘性中)  
2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1 ~ 2cm 密混。焼土粒径 1 ~ 2cm 密混。  
炭化物径 1cm 以下多混。締り中。粘性中)
- 3189 柱穴  
1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径 2cm 混。  
2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1cm 混。炭化物径 1cm 多混。  
焼土粒径 1cm 以下少混。締り中。粘性中)  
2 2.5Y8/6 黄色シルト  
(10YR3/2 黒褐色シルトブロック径 1cm 少混。締り強い。粘性中)

第79図 掘立柱建物13 3130~3134・3169・3189柱穴

**3133柱穴(第79図、第8表)**

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。北西側の一部を3189柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.39m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.30mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層が堆積し、平面検出で掘方埋め土が確認された。

**3135柱穴(第80・83図、第8・20表、図版21・55)**

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。東側で3136柱穴を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.18mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、2層上面から径0.19～0.25mの礎盤石が出土している。

遺物は、1層から出土した土師器坏Po186を図化している。

**3136柱穴(第80図、第8表、図版21)**

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(N-N'ライン)。西側の一部が3135柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.23m、短軸0.18m、検出面からの深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。

**3137柱穴(第80・83図、第8・20表、図版21・55)**

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅷ層上面で検出した柱穴である(H-H'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.25m、短軸0.19m、検出面からの深さ0.09mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層から長軸0.08～0.14mの根巻石や根石が出土している。これらは、柱抜き取りの際に露出した可能性がある。

遺物は、1・2層からそれぞれ出土した土師器高台付坏Po195、土師器坏Po190を図化している。

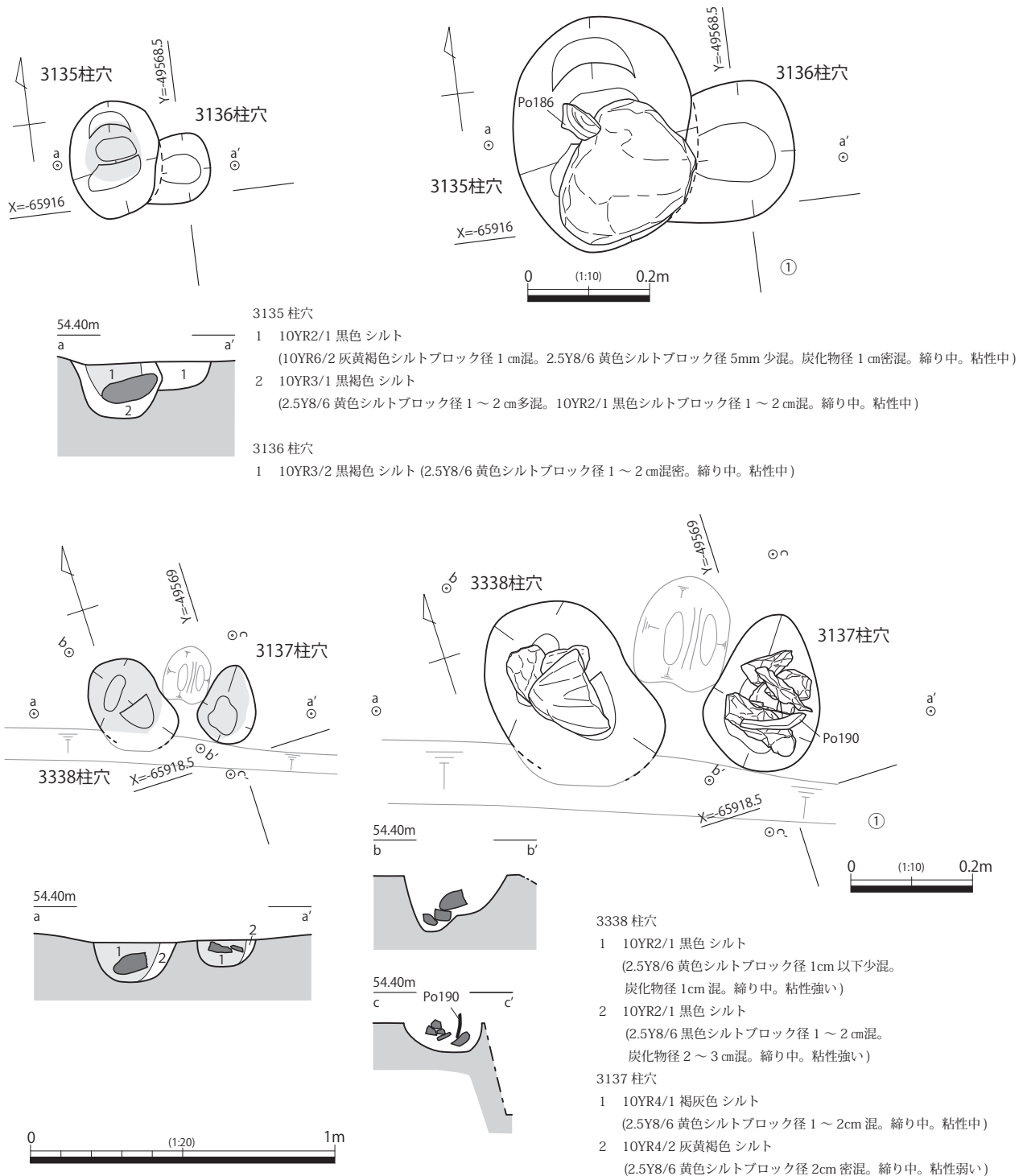
**3338柱穴(第80図、第8表、図版21)**

調査区南西10F-2gグリッドにおいて、Ⅷ層上面で検出した柱穴である(O-O'ライン)。南側の一部を暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.35m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1層下部から長軸0.10～0.14mの根石が出土している。柱抜き取りの際に露出した可能性がある。

**3138柱穴(第81・83・84図、第8・19～21表、図版22・54～57)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した身舎の柱穴である(I-I'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.48m、短軸0.45m、検出面からの深さ0.29mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層が堆積、1層から長軸0.16～0.20mの礫や土器片が複数出土している。柱抜き取り後に、礎盤石や根巻石等を埋め戻したものと考えられる。

遺物は1層より、土師器坏Po185・188、皿Po155・160・167・171・172・176、柱状高台Po180、須恵器甕Po204が出土している。なお、Po204は同じ北辺に位置し、7.2m離れた3115柱穴出土破片と接



第80図 掘立柱建物13 3135~3137・3338柱穴

合することから両者は柱を抜き取る段階で割り入れた可能性がある。

3139柱穴(第81図、第8表、図版22)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積し、1・2層から長軸0.12~0.17mの礫が出土している。礫は根巻石と考えられ、1層の礫は柱抜き取りの際に露出・移動した可能性があり、2層の礫は原位置を留めた

ものと考えられる。

**3188柱穴(第81・83図、第8・19表、図版22・54・55)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(I-I'ライン)。南側を3140・3141柱穴に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、残存規模は長軸0.41m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.10mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

遺物は、1層から土師器皿Po153・156・157、白磁碗Po932が出土している。

**3140柱穴(第81・83図、第8・19表、図版22・55)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(K-K'ライン)。北側と西側で3188・3141柱穴を切る。南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.27m、短軸0.15m、検出面からの深さ0.16mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

遺物は、1層から土師器皿Po158・168が出土している。

**3141柱穴(第81図、第8表、図版22)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(K-K'ライン)。北側で3188柱穴を切り、東側の一部が3140柱穴に切られる。南側は暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.16m、短軸0.13m、検出面からの深さ0.14mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

**3142柱穴(第81・83図、第8・20表、図版21・59・88・89)**

調査区南西10F-2g・2hグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(I-I'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.18mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積している。

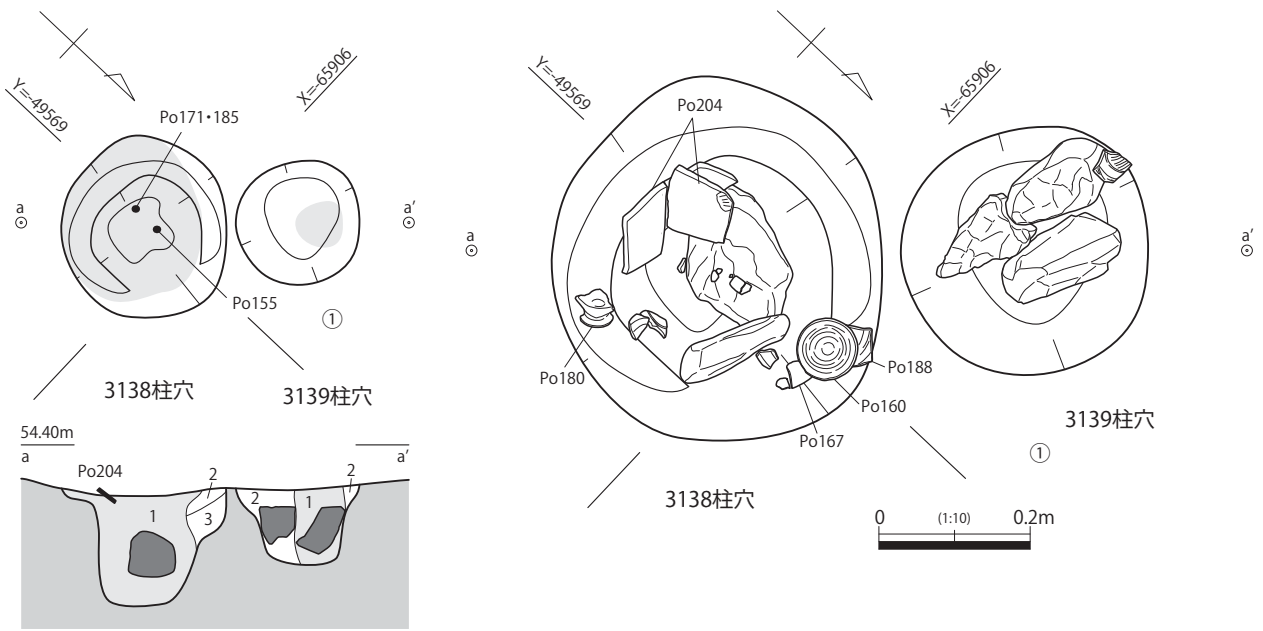
遺物は、1層から白磁壺Po197、白磁碗Po931、器種不明の白磁片Po963、2層より白磁碗Po930が出土している。

**3143柱穴(第82図、第8表)**

調査区南西10F-2hグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(I-I'ライン)。北東側で3323柱穴に切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.19m、短軸0.14m、検出面からの深さ0.10mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

**3323柱穴(第82・83図、第8・19表、図版69)**

調査区南西10F-2hグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(M-M'ライン)。南西側で3143柱穴を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.30m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.17mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。2層中程に径0.1mの小型礫が出土しているが、根巻石の一部と考えられる。

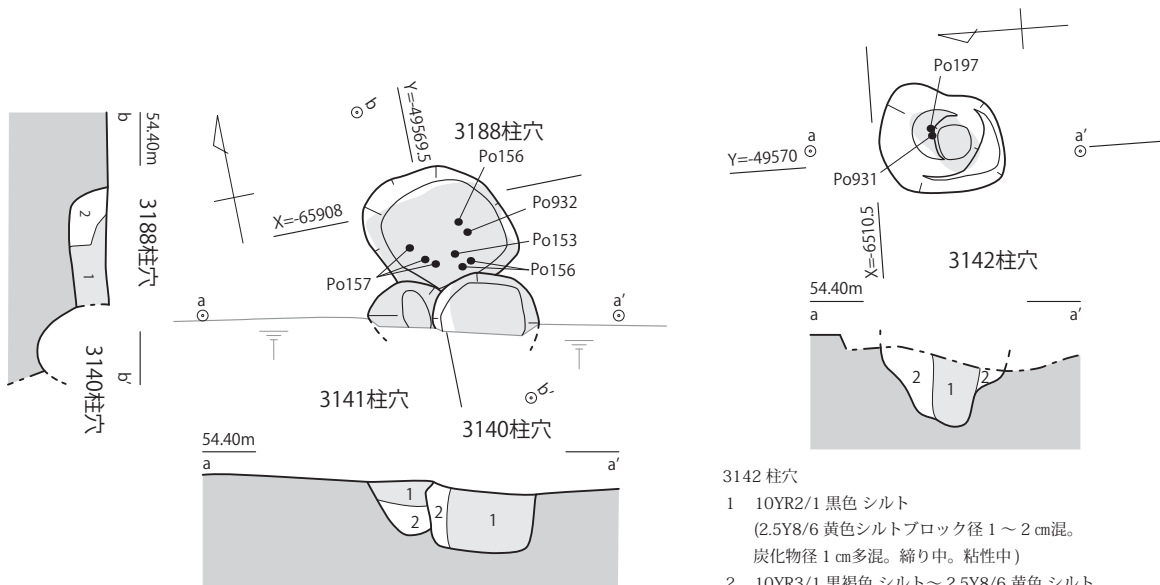


3138 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1cm 以下混。炭化物径 1cm 多混。  
縮り弱い。粘性中)
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 シルト  
(2.5Y8/6 微細な黄色シルトブロック少量混。縮り中。粘性中)
- 3 2.5Y8/6 黄色 シルト～ 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 2cm 混。縮り中。粘性中)

3139 柱穴

- 1 10YR5/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR3/2 黒褐色シルトブロック径 3～5cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1cm 以下混。縮り中。粘性中)



3140 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト～ 2.5Y8/6 黄色 シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 5cm 密混。縮り強い。粘性中)
- 2 2.5Y7/4 浅黄色 シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 1cm 混。縮り強い。粘性中)

3141 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(2.5Y8/1 黄色シルトブロック径 2～3cm 混。  
10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 2.5Y7/4 浅黄色 シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 2cm 混。縮り強い。粘性中)

3142 柱穴

- 1 10YR2/1 黒色 シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1～2 cm混。  
炭化物径 1 cm多混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト～ 2.5Y8/6 黄色 シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック 1～2 cm密混。  
炭化物径 1 cm多混。縮り中。粘性中)

3188 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(2.5Y8/6 黄色 シルトブロック径 2～3 cm混。)
- 2 2.5Y6/2 灰黄色 シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルト・2.5Y8/2 灰白色 シルトブロック径 2cm 混。)

第81図 掘立柱建物13 3138～3142・3188柱穴

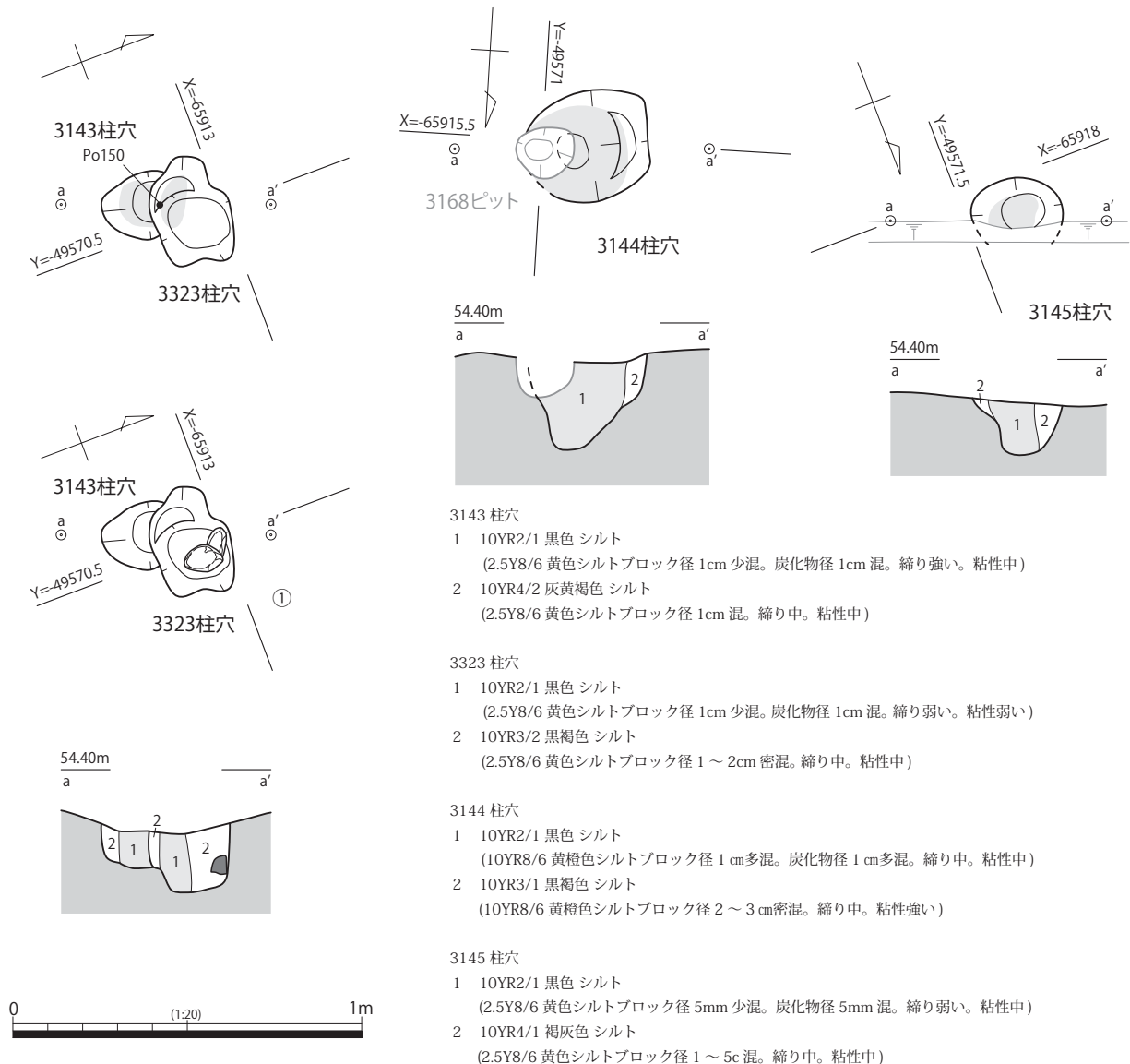
遺物は、1層から土師器皿Po150が出土している。

### 3144柱穴(第82図、第8表、図版21)

調査区南西10F-2hグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(I-I'ライン)。3146落とし穴を切り(第147図)、東側で3168ピットに切られている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.37m、短軸0.32m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。

### 3145柱穴(第82図、第8表)

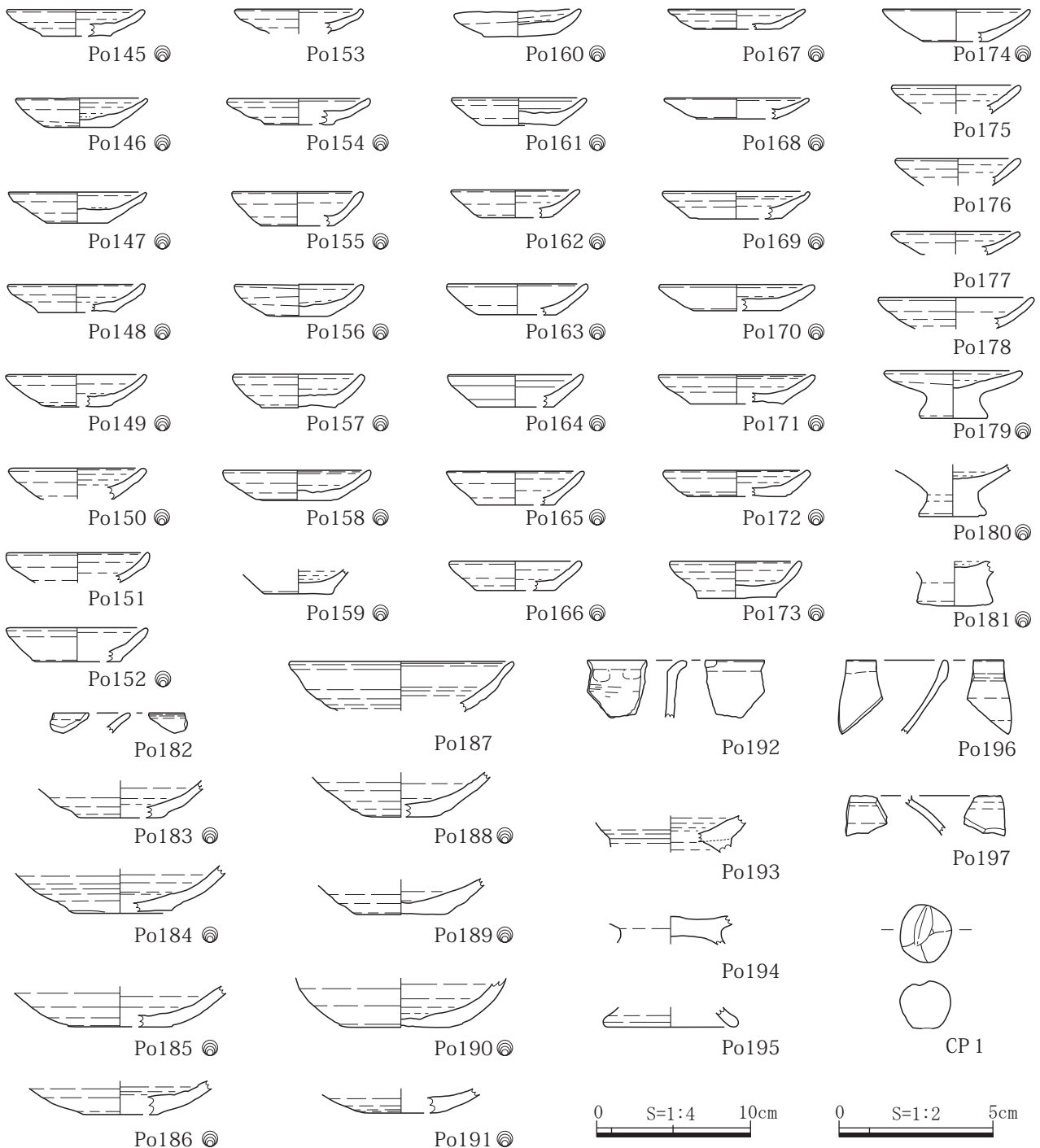
調査区南西10F-2hグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(I-I'ライン)。北側は暗渠によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.26m、短軸0.14m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。



第82図 掘立柱建物13 3143~3145・3323柱穴

725柱穴(第7表)

1次調査区10F-2gグリッドにおいて、Ⅶ層上面で検出した柱穴である(F-F'ライン)。柱痕跡内に遺存していた柱根(試料7)について、樹種同定を行った結果、スギと同定されている<sup>(註3)</sup>。本報告にあたり、同一試料について放射性炭素年代測定を行った結果、calAD950-1020(暦年較正2σの確率1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。得られた値は出土した土器の年代観と比較し、若干古い値となっている。

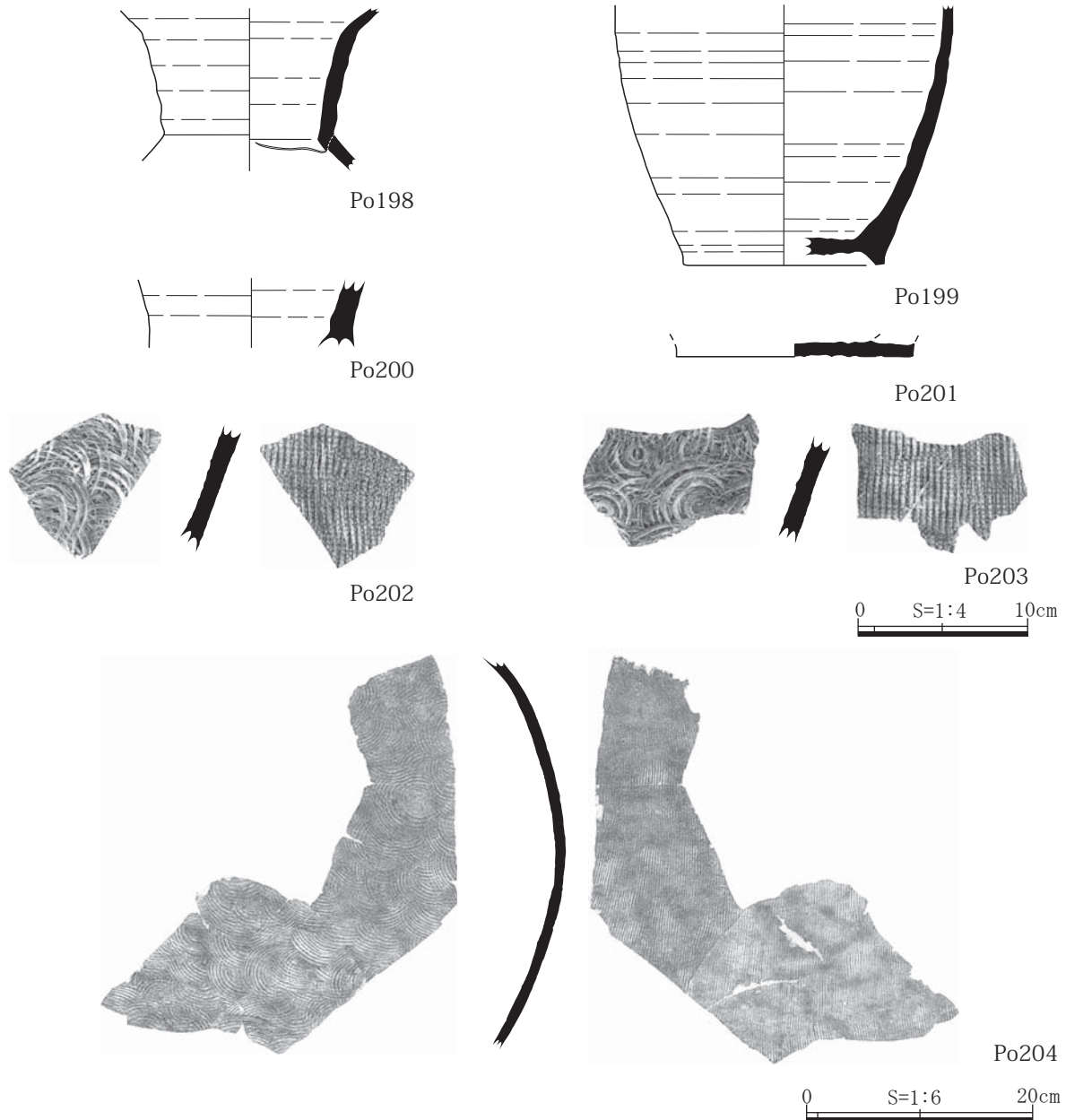


第83図 掘立柱建物13出土遺物(1)

掘立柱建物13出土遺物(第83・84図、第19～21・44表、図版54～59・69・88・89)

本遺構からの出土遺物を第83・84図にまとめている。Po145～177は回転台成形の土師器皿である。底部から口縁部が直線状に外傾するPo146・147・161・162・164～166、器高が低く口縁部が内湾するPo145・148・149・151・153・156～158・160・163・173・174、扁平で立ち上がりが短い154・167～169・171・172があり、やや内湾する器形が多い。Po182～191は回転台成形の土師器坏である。体部上半が欠損しているものが多いため、判別が難しいが器高が低く口径が広く内湾するPo187(坏b2類)に代表されるように体部もやや内湾気味である。Po193～195は回転台成形の土師器高台坏であり、Po193・194は坏部から高台部片、Po195は高台部であり、いずれも高台が高く大きく開いている。Po178～181は回転台成形の土師器柱状高台である。柱部が一旦内湾してから開くPo179～181があり、Po179は器高が低い。Po192は体部が直線的に立ち上がる土師器甕であり、「く」の字状に折れ曲がる口縁部が短い。

Po196は玉縁口縁の白磁碗Ⅳ類、Po197は壺の肩部でⅡ類もしくはⅢ類である。CP1は土玉で穿孔



第84図 掘立柱建物13出土遺物(2)



はされていない。

Po198～201は須恵器の壺である。Po198・200は長頸壺の頸部、Po199・201は体部と底部である。Po199は高台が付くがPo201は無高台である。これらの胎土は共通して黒色粒子が入る。東海系須恵器の可能性が想定される。Po202～204は須恵器甕の体部である。外面平行タタキ、内面同心円状当て具痕が観察される。

### 掘立柱建物19(第66・85～95図、第10・21・54表、図版17・23～27・59)

調査区南西9F-10g、10F-1g・1hグリッドにおいて、Ⅲ-2層及びⅣ層上面で検出した。本遺構は、3150～3167・3170～3181・3196・3199・3255・3340・3341柱穴によって構成される。桁行5間(11.4m)、梁行4間(7.1m)、平面積80.9㎡で、建物の主軸はN-11°-Eである。平面形はほぼ南北方向に広がる長方形を呈し、東西辺に廂が付く総柱建物である。廂を除いた身舎の規模は桁行5間(11.4m)、梁行2間(4.58m)、平面積52.2㎡を測る。

柱穴の平面形は円形又は楕円形で、やや歪なものも含まれる。北辺は倉吉市教委の試掘トレンチ(15T3)で内で、総じて遺存状況が悪く、暗渠によって部分的に削平された柱穴もある。身舎の柱穴は長軸0.21～0.76(平均0.38)m、検出面からの深さが0.03～0.27(平均0.14)mで、底面の標高は54.00～54.16(平均54.10)mである。廂の柱穴は長軸0.14～0.41(平均0.26)m、検出面からの深さが0.07～0.29(平均0.19)mで、底面の標高は53.96～54.19mである。

柱間寸法は身舎で桁行2.1～2.4(平均2.26)m、梁行1.9～2.6(平均2.29)mである。廂は東辺の桁行が2.0～2.4(平均2.21)m、梁行が1.2～1.5(平均1.34)m、西辺の桁行が2.1～2.4(平均2.22)m、梁行が0.9～1.5(平均1.18)mを測る。

柱は抜き取られているものが大半を占めるが、掘方埋め土より拳大から人頭大の礫が出土している。3156・3157・3162・3165・3176柱穴では礎盤石が、3156・3157・3161・3163・3177・3341柱穴では根巻石が確認された。3150～3153・3155・3157・3160・3164・3166・3167・3171・3173・3174柱穴は、柱抜き取り後に礎盤石や根巻石が埋め戻されている。使用された土器の廃棄も含め、基礎固めに使用された礫の埋め戻しは地鎮に係る祭祀行為と想定される。これらの柱穴出土の主な礫の特徴については第54表にまとめている。確認された基礎固めに用いられた礫の総重量は約114kgであり、このうち被熱痕跡がみられるものは34%である。

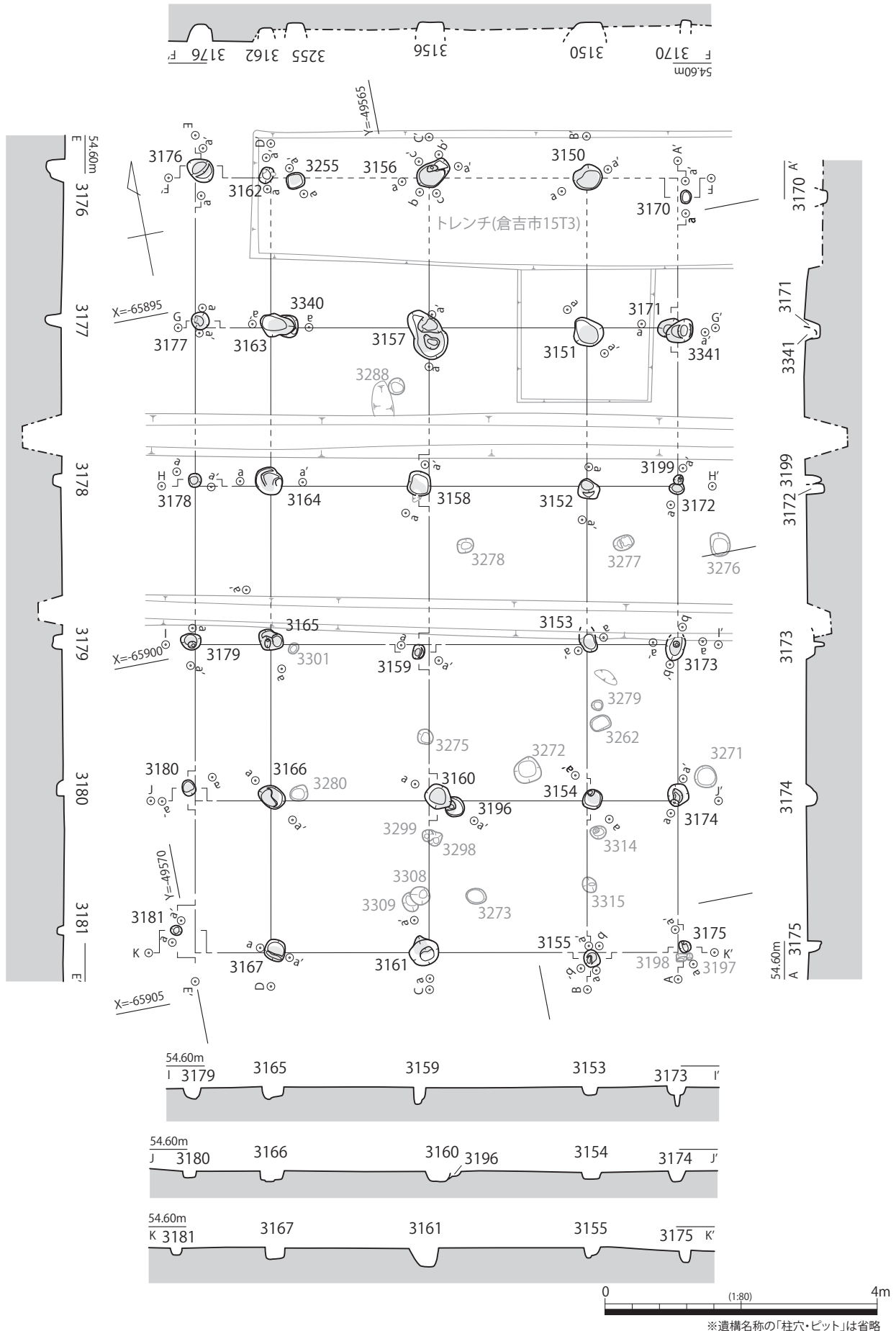
以下、各柱穴及び関連する小穴について詳述する。

### 3150柱穴(第87図、第10表、図版23)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。倉吉市教委の試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方上半は削平されている。平面形は不整形円形を呈し、残存規模は長軸0.43m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.09mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層からは長軸0.22m、厚さ0.13mの角礫が出土している。柱抜き取り後に、礎盤石もしくは根巻石等として使われていた礫を埋め戻したものと考えられる。

### 3151柱穴(第87・93図、第9・21表、図版23・59)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。倉吉



第85図 掘立柱建物19(1)

市教委の試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方上半は削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.47m、短軸0.44m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、前者からは長軸0.23m、厚さ0.14mの礫が出土している。柱抜き取り後に、礎盤石として使用された礫を埋め戻したものと考えられる。

遺物は、1層から土師器坏Po212が出土している。

遺物は、1層から土師器坏Po212が出土している。

**3152柱穴(第87図、第10表、図版23)**

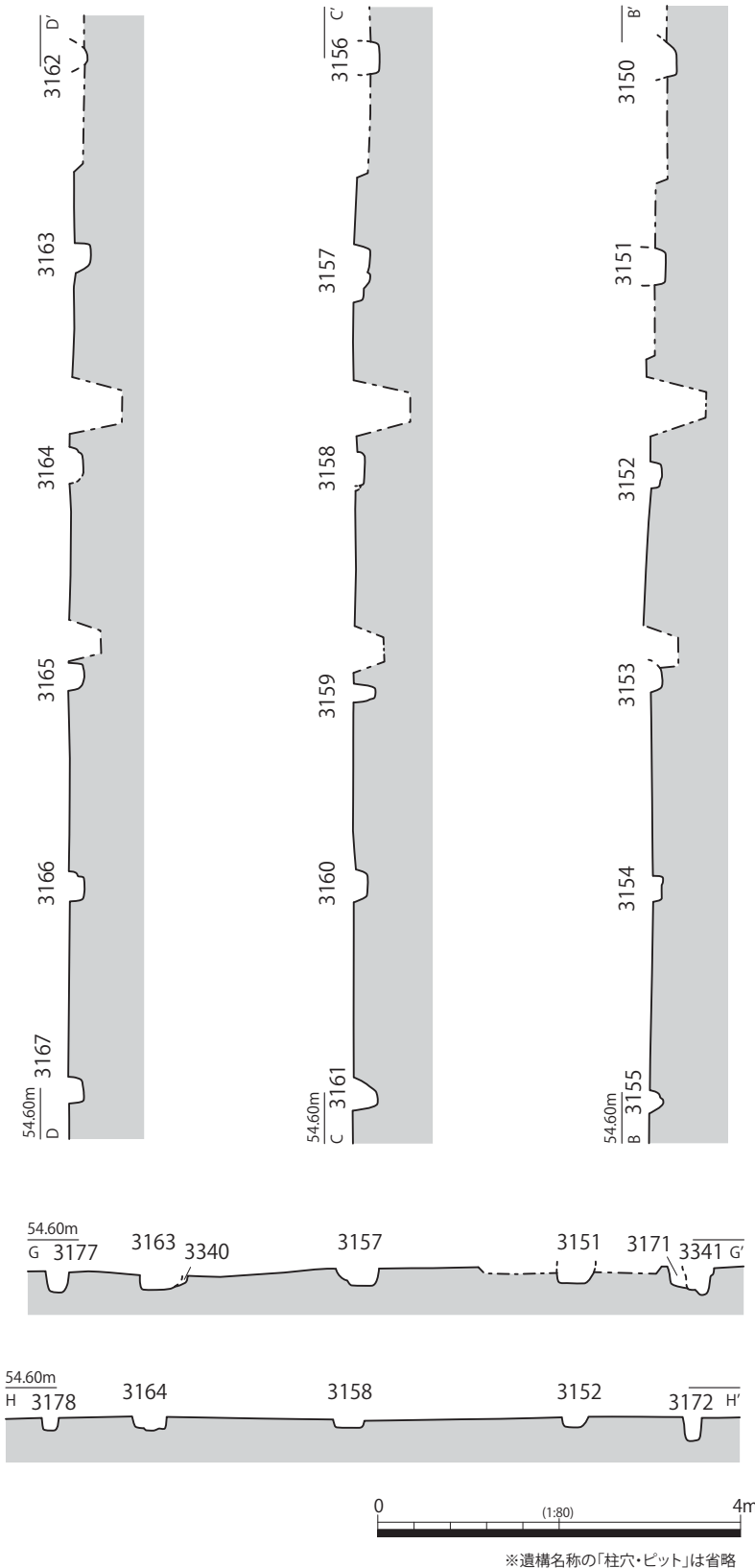
調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.10mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、前者からは根巻石もしくは根石と考えられる小礫が出土している。

**3153柱穴(第87図、第10表、図版23)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。北側の一部が暗渠によって削平されている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.27m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層からは長軸0.17m、厚さ0.07mの礫が出土している。柱抜き取り後に、礎盤石もしくは根巻石として使用された礫を埋め戻されたものと考えられる。

**3154柱穴(第87図、第10表、図版24)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は



第86図 掘立柱建物19(2)

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第10表 掘立柱建物19遺構計測表

柱穴 (身舎) (△: 残存値)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	備考
	長軸	短軸	深さ							
3150	0.43	0.37	△0.09	54.00	-	-	-	-	柱抜き取り痕跡、角礫(礎盤石もしくは根巻石)(抜取痕)	角礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3151	0.47	0.44	△0.13	54.12	-	-	-	-	礫(礎盤石)、土師器坏Po212(抜取痕)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3152	0.32	0.29	0.10	54.15	-	-	-	-	小礫(根石もしくは根巻石)(抜取痕)	小礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3153	△0.27	0.23	0.13	54.15	-	-	-	-	礫(礎盤石もしくは根巻石?)(抜取痕)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し 暗渠に切られる
3154	0.30	0.29	0.11	54.15	-	-	-	-	-	-
3155	0.26	0.22	0.15	54.14	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3156	0.52	0.35	△0.08	54.03	-	-	-	-	礎盤石 根巻石	礎盤石上面の標高54.11m
3157	0.76	0.50	0.20	54.09	-	-	-	-	礎盤石 根巻石	礎盤石、礫(根巻石)、土師器甕Po213(抜取痕)
3158	0.35	0.34	0.08	54.15	-	-	-	-	-	-
3159	0.21	0.17	0.25	54.04	-	-	-	-	-	攪乱に切られる
3160	0.40	0.35	0.13	54.13	-	-	3160>3196	-	扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3196	0.29	△0.26	0.09	54.16	-	-	-	-	-	-
3161	0.45	0.43	0.27	54.01	-	-	-	-	根巻石	根巻石、土器片、土師器坏Po210(抜取痕)、楕円礫、土師器皿Po205・206(堀方埋め土)
3162	0.25	0.20	△0.03	54.08	-	-	-	-	礎盤石	礎盤石
3255	0.27	0.22	△0.08	54.00	-	-	-	-	-	礎盤石上面の標高54.18m
3340	△0.35	△0.33	0.08	54.09	-	-	3163>3340	-	-	-
3163	0.50	0.35	0.17	54.05	-	-	-	-	根巻石	根巻石、土器片、被熱粘土塊CP17(抜取痕)
3164	0.44	0.37	0.13	54.13	-	-	-	-	-	-
3165	0.38	0.31	0.20	54.10	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石・根巻石)、小礫(抜取痕)	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3166	0.42	0.30	0.18	54.11	-	-	-	-	礎盤石(抜取痕)	礎盤石上面の標高54.22m
3167	0.31	0.30	0.16	54.12	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)、土器片、土師器坏Po208・Po209(抜取痕)	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3167	0.31	0.30	0.16	54.12	-	-	-	-	扁平礫(礎盤石)(抜取痕)	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し

柱穴 (廂) (△: 残存値)

遺構番号	規模(m)			底面の標高(m)	柱痕跡直径(m)	柱の当たり直径(m)	柱穴重複(新>旧)	基礎固め	出土遺物	備考
	長軸	短軸	深さ							
3170	0.19	0.15	△0.07	53.96	-	-	-	-	-	-
3172	0.22	△0.14	0.26	54.01	-	-	3199>3172	-	-	-
3199	0.14	0.13	0.20	54.06	-	-	-	-	-	-
3171	△0.30	△0.25	0.22	54.07	-	-	-	-	礫(根巻石)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3341	0.41	0.31	0.29	53.99	-	-	3341>3171	-	根巻石	根巻石、土師器坏Po211(抜取痕)、礫(根巻石?)(堀方埋め土)
3173	△0.34	0.28	0.26	54.01	-	-	-	-	大小礫(根巻石)(抜取痕)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し 耕作溝に切られる
3174	0.33	0.30	0.17	54.12	-	-	-	-	礫(根巻石?)(抜取痕)	礫は柱抜き取り後、埋め戻し
3175	0.18	0.17	0.19	54.06	-	-	-	-	-	-
3176	0.41	0.33	0.25	54.03	-	-	-	-	礎盤石	礎盤石
3177	0.26	0.25	0.22	54.01	-	-	-	-	根巻石	礎盤石上面の標高54.13m
3178	0.20	0.18	0.13	54.12	-	-	-	-	礫(抜取痕)	-
3179	0.30	0.24	0.15	54.11	-	-	-	-	-	-
3180	0.23	0.19	0.10	54.18	-	-	-	-	-	-
3181	0.17	0.14	0.09	54.19	-	-	-	-	-	-

柱間寸法(身舎: 桁行総長)

No.	柱間寸法(m)
3150-3155	11.4
3156-3161	11.4
3255-3167	11.4
3162-3167	11.4

柱間寸法(身舎: 桁行方向) (△: 残存値)

No.	柱間寸法(m)
3150-3151	2.2
3151-3152	2.3
3152-3153	2.3
3153-3154	2.2
3154-3155	2.4
3156-3157	2.3
3157-3158	2.3
3158-3159	2.4
3159-3160	2.2
3159-3196	2.3
3160-3161	2.2
3196-3161	2.1
3162-3163	2.2
3162-3340	△2.2
3255-3163	2.2
3255-3340	△2.2
3163-3164	2.3
3340-3164	△2.3
3164-3165	2.4
3165-3166	2.3
3166-3167	2.2

柱間寸法(身舎: 梁行総長) (△: 残存値)

No.	柱間寸法(m)
3150-3162	4.7
3150-3255	4.3
3151-3163	4.5
3151-3340	△4.4
3152-3164	4.7
3153-3165	4.7
3154-3166	4.7
3155-3167	4.6

柱間寸法(身舎: 梁行方向) (△: 残存値)

No.	柱間寸法(m)
3150-3156	2.4
3156-3162	2.3
3156-3255	1.9
3151-3157	2.3
3157-3163	2.2
3157-3340	△2.1
3152-3158	2.5
3158-3164	2.2
3153-3159	2.5
3159-3165	2.2
3154-3160	2.2
3154-3196	2.1
3160-3166	2.5
3196-3166	2.6
3155-3161	2.5
3161-3167	2.1

柱間寸法(廂: 桁行総長)

No.	柱間寸法(m)
(東側)3170-3175	11.0
(西側)3176-3181	11.1

柱間寸法(廂東辺: 桁行方向)

No.	柱間寸法(m)
3170-3171	2.0
3170-3341	2.0
3171-3172	2.3
3341-3172	2.3
3171-3199	2.2
3341-3199	2.2
3172-3173	2.3
3199-3173	2.4
3173-3174	2.2
3174-3175	2.2

柱間寸法(廂西辺: 桁行方向)

No.	柱間寸法(m)
3176-3177	2.1
3177-3178	2.3
3178-3179	2.4
3179-3180	2.2
3180-3181	2.1

柱間寸法(建物全体: 梁行総長)

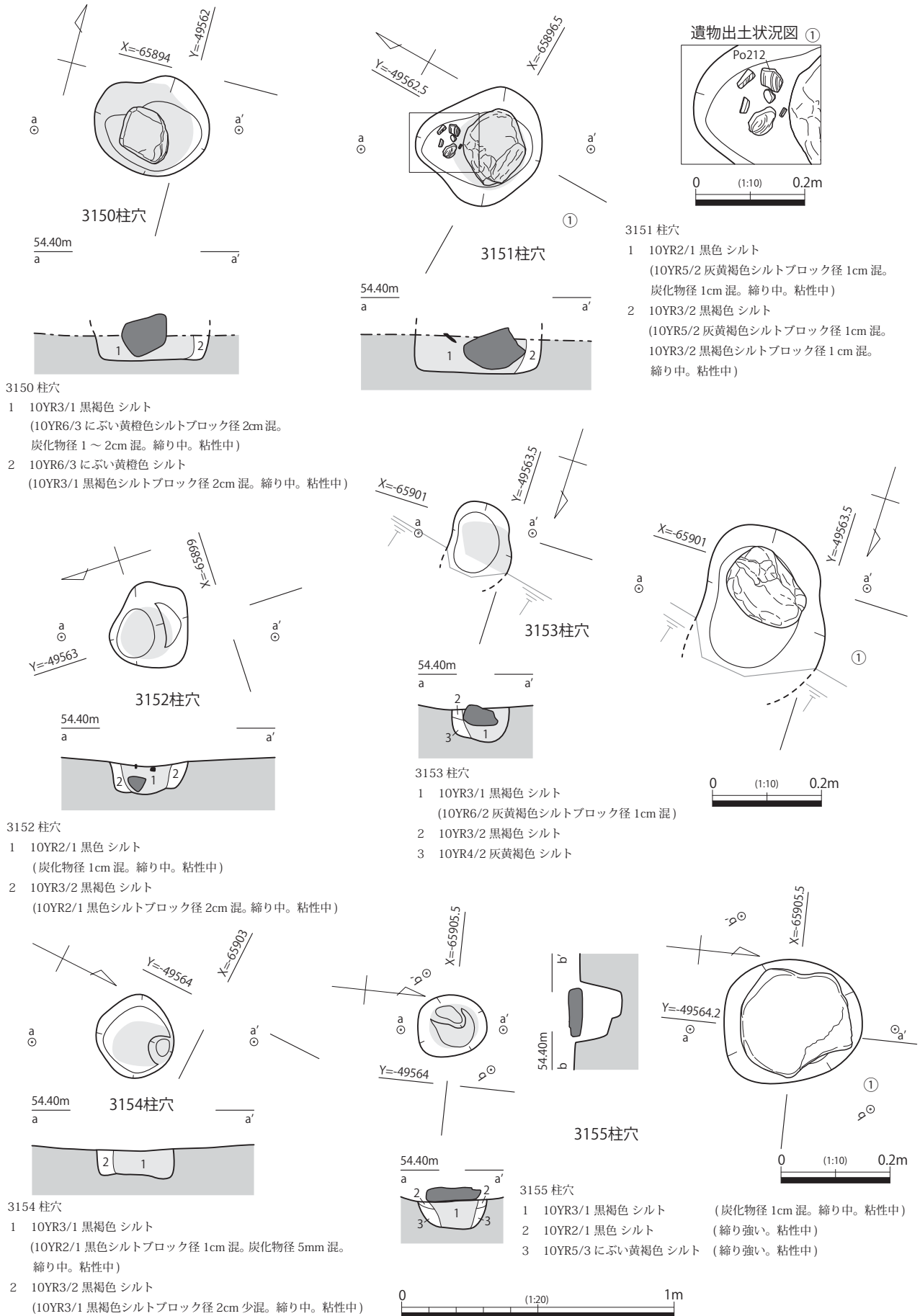
No.	柱間寸法(m)
3170-3176	7.1
3171-3177	6.8
3341-3177	7.0
3172-3178	7.0
3199-3178	7.1
3173-3179	7.1
3174-3180	7.2
3175-3181	7.5

柱間寸法(廂東辺: 梁行方向)

No.	柱間寸法(m)
3170-3150	1.5
3171-3151	1.2
3341-3151	1.4
3172-3152	1.3
3199-3152	1.4
3173-3153	1.3
3174-3154	1.2
3175-3155	1.4

柱間寸法(廂西辺: 梁行方向) (△: 残存値)

No.	柱間寸法(m)
3162-3176	0.9
3255-3176	1.3
3163-3177	1.1
3340-3177	△1.2
3164-3178	1.0
3165-3179	1.1
3166-3180	1.3
3167-3181	1.5



第87図 掘立柱建物19 3150~3155柱穴

不整円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.29m、検出面からの深さ0.11mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

#### 3155柱穴(第87図、第10表、図版24)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(B-B'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.26m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、前者から直径約0.2mの扁平礫が出土している。柱抜き取り後に礎盤石として使用された礫が埋め戻されたものと考えられる。

#### 3156柱穴(第88図、第10表、図版24)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。倉吉教委の試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方上半は削平を受けている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.52m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層上面には長軸0.17~0.27mの礎盤石と根巻石が原位置を留め出土している。

#### 3157柱穴(第88・95図、第10・21表、図版24・59)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.76m、短軸0.50m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層から長軸0.18~0.26mの礫が出土している。礫は礎盤石と根巻石と考えられるが、根巻石は原位置を留めていない。

遺物は、1層から土師器甕Po213が出土している。

#### 3158柱穴(第88図、第10表、図版24)

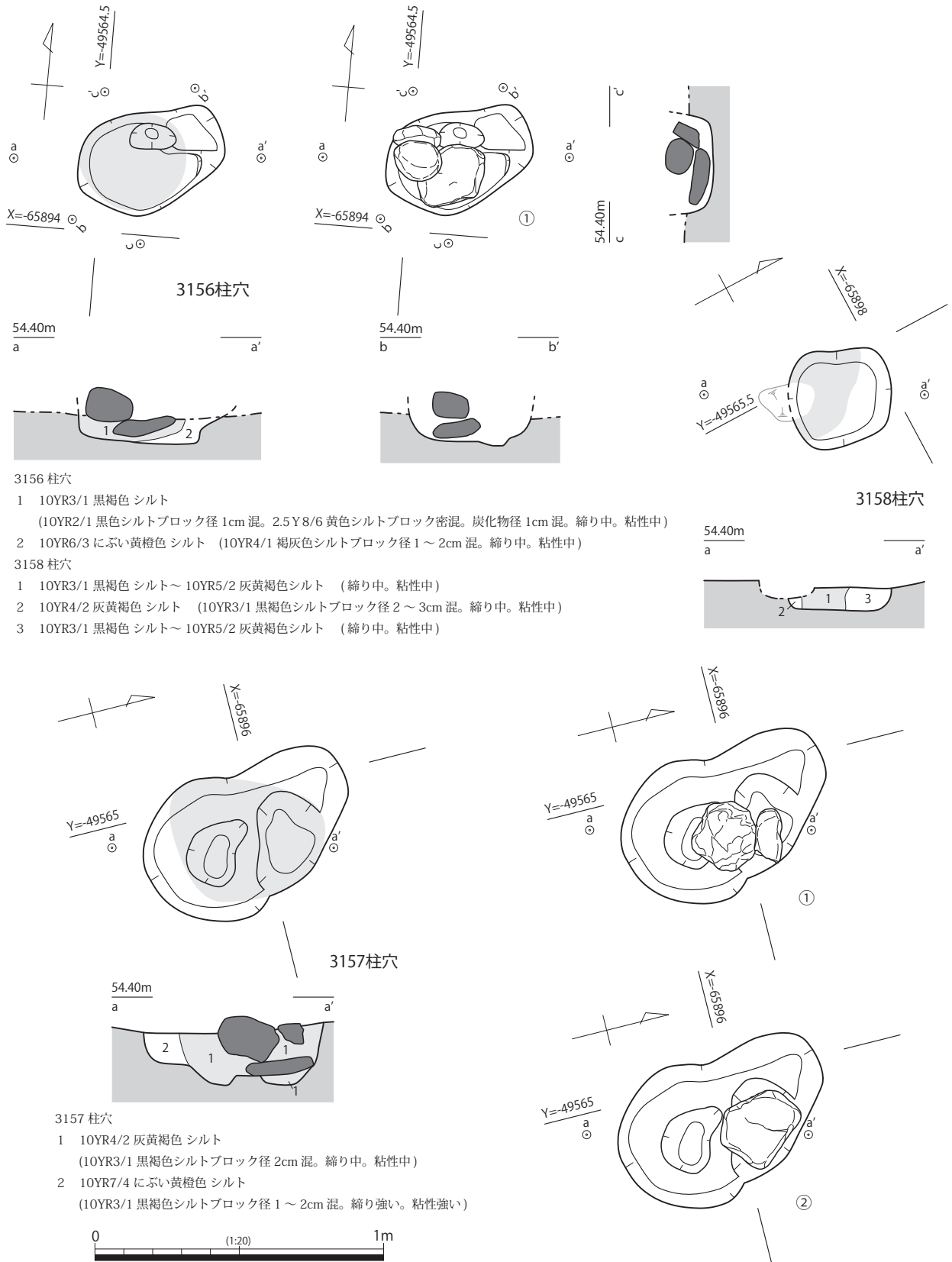
調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.34m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

#### 3159柱穴(第89図、第10表、図版24)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.21m、短軸0.17m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

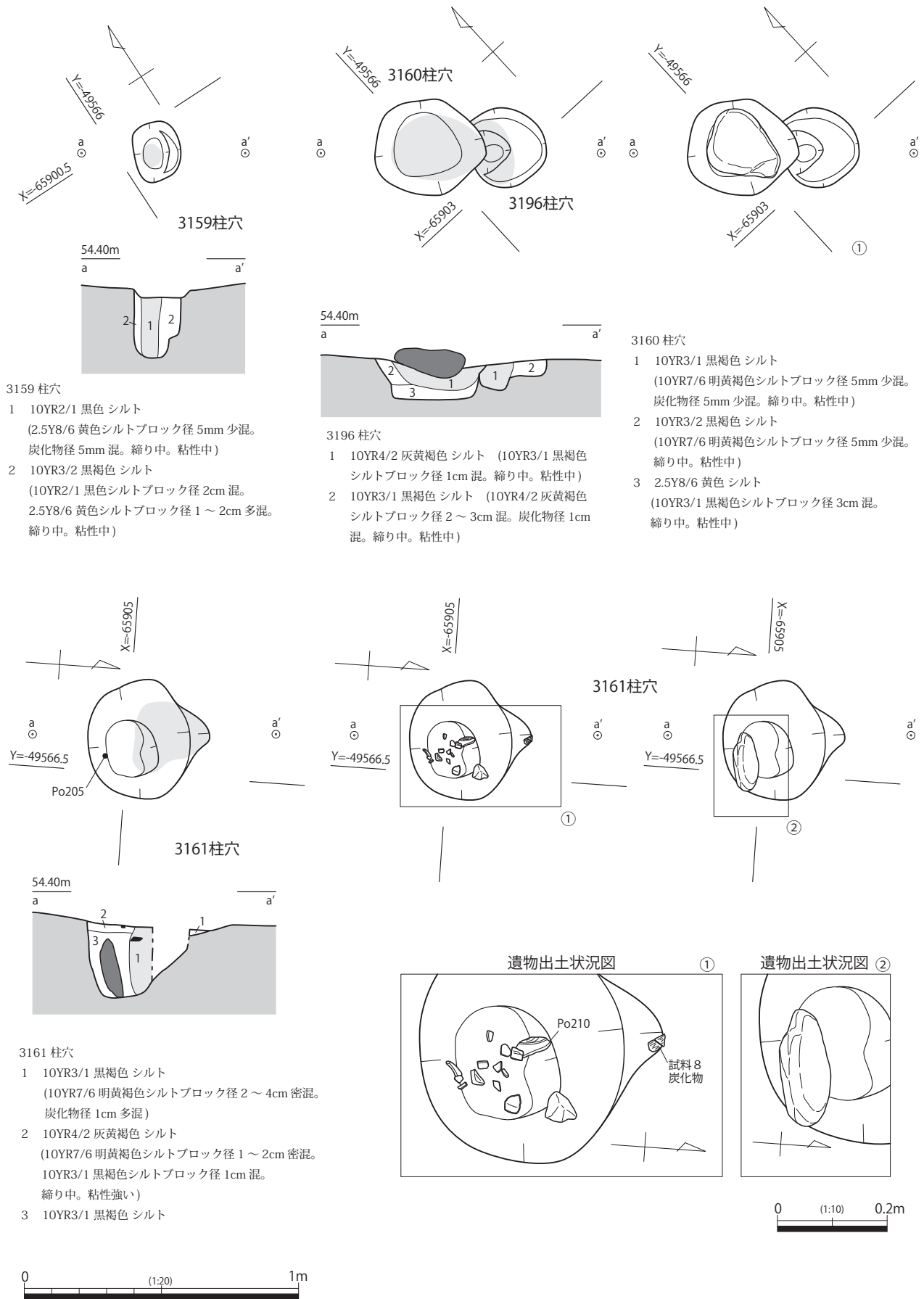
#### 3160柱穴(第89図、第10表、図版24)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。東側で3196柱穴を切る。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.4m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなり、1層上面より直径0.24~0.28mの扁平礫が出土している。柱抜き取り後に礎盤石として使用された礫が埋め戻されたものと考えられる。



第88図 掘立柱建物19 3156~3158柱穴

えられる。



第89図 掘立柱建物19 3159~3161・3196柱穴



**3196柱穴(第89図、第10表)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である(J-J'ライン)。西側を3160柱穴に切られる。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.29m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.09mを測る。

**3161柱穴(第89・95図、第10・21表、図版25・59)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(C-C'ライン)。平面は不整円形を呈し、規模は長軸0.45m、短軸0.43m、検出面からの深さ0.27mを測る。埋土は、柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土2・3層からなり、前者の上部で多数の土器片が、後者では長軸0.21m、厚さ0.07mの根巻石が縦位に出土した。

遺物は1層から出土した土師器坏Po210、2・3層から土師器皿Po206、底面から土師器皿Po205を図化している。

1層に含まれる炭化材(試料8)について樹種同定を行った結果、カエデ属と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD989-1045(暦年較正2 $\sigma$ の確率1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。本遺構から出土した土器の年代観より、若干古い年代値が得られている。

**3162柱穴(第90図、第10表、図版25)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。倉吉教委の試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方はほぼ削平を受けている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.25m、短軸0.20m、礫下部の深さは0.03mを測る。埋土は、礫下部に黒色シルト層の掘方埋め土の1層が確認された。礫は長軸0.25m、短軸0.19m、厚さ0.08mの礎盤石と考えられる。

**3255柱穴(第90・95図、第10・21表、図版25・59)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(F-F'ライン)。倉吉教委の試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方はほぼ削平を受けている。平面形は隅丸方形を呈し、残存規模は長軸0.27m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

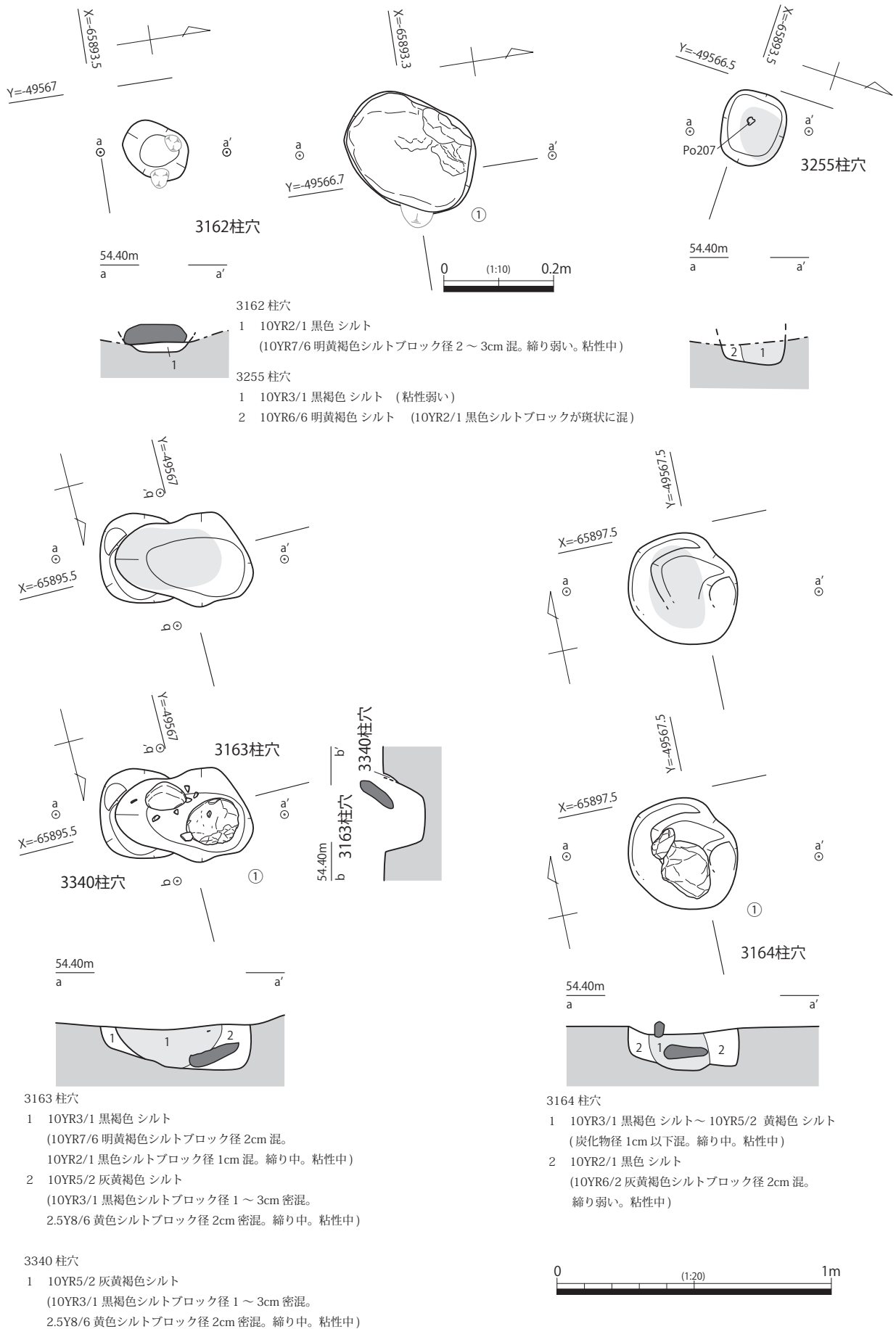
遺物は、1層から土師器柱状高台Po207が出土している。

**3340柱穴(第90図、第10表、図版25)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(G-G'ライン)。掘方のほとんどを3163柱穴によって切られている。残存規模は長軸0.35m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.08mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。

**3163柱穴(第90図、第10・44表、図版25・59)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。東側で3340柱穴を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.50m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.17mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。2層から長軸0.15



第90図 掘立柱建物19 3162~3164・3255・3340柱穴

～0.2mの根巻石及び土器片、1層より被熱粘土塊CP17(図版59-3)が出土している。

遺物は小片のため図化していない。

#### 3164柱穴(第90図、第10表、図版25)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、V層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.44m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。前者から長軸0.11～0.22mの礎盤石と根巻石の一部が出土している。柱抜き取り後に、礎盤石や根巻石として使用された礫が埋め戻されたものと考えられる。

#### 3165柱穴(第91図、第10表、図版26)

調査区南西9F-10g、10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.31m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。1層下面に長軸0.26mの礎盤石が出土している。

#### 3166柱穴(第91・95図、第10・21表、図版26・59)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.18mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。1層中から礎盤石と考えられる長軸0.25mの扁平礫や多数の土器が出土している。柱抜き取り後に、礎盤石として使用された礫が埋め戻されたものと考えられる。

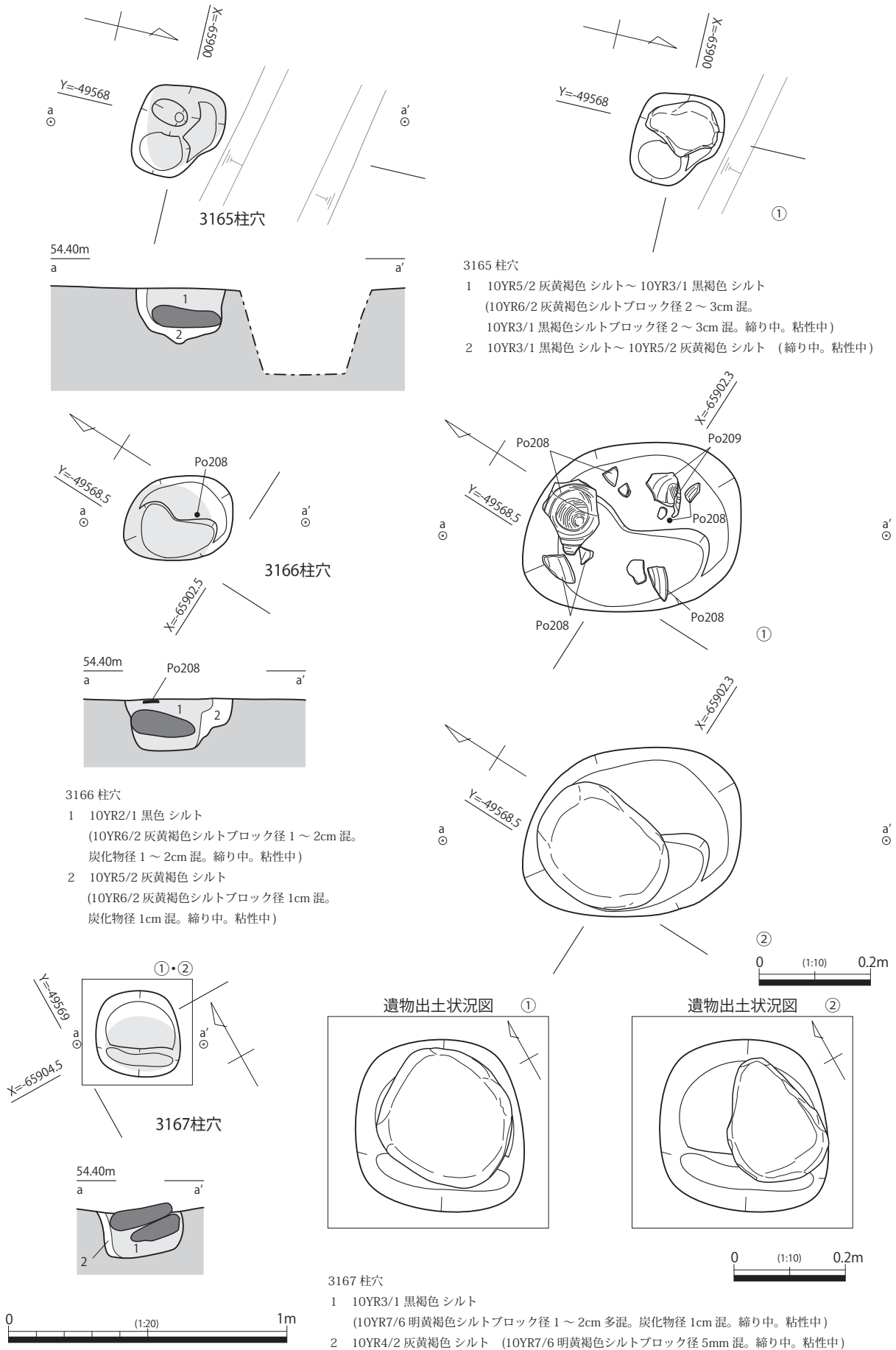
遺物は、1層から土師器坏Po208・209が出土している。

#### 3167柱穴(第91図、第10表、図版26)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した身舎の柱穴である(D-D'ライン)。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.16mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。1層下部から礎盤石と考えられる長軸0.23～0.25mの扁平礫が2枚重ねて出土している。柱抜き取り後に、礎盤石として使用された礫が埋め戻されたものと考えられる。

#### 3170柱穴(第92図、第10表)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、V層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。倉吉市教委の試掘トレンチ(15T3)内にあり、掘方上半は削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.19m、短軸0.15m、検出面からの深さ0.07mを測る。埋土は褐灰色シルトの単層である。



第91図 掘立柱建物19 3165～3167柱穴

**3172柱穴(第92図、第10表、図版26)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。北側を3199柱穴に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、残存規模は長軸0.22m、短軸0.14m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

**3199柱穴(第92図、第10表、図版26)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。南側で3172柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.14m、短軸0.13m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

**3171柱穴(第92・95図、第10・21表、図版26・59)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。東側で3341柱穴に切られている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.30m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.22mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層である。1層には直径約0.15m、厚さ0.11mの礫が含まれていた。柱抜き取り後に、根巻石として使用されたと想定される礫が埋め戻されたものと考えられる。

**3341柱穴(第92・95図、第10表、図版26)**

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。西側で3171柱穴を切っている。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.41m、短軸0.31m、検出面からの深さ0.29mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘り方埋め土の3層からなる。2層から長軸0.14mの礫が、3層から長軸0.22m、厚さ0.08mの根巻石が出土している。2層から出土した礫は根巻石と考えられ、柱を抜き取る際に巻き上げられた可能性がある。

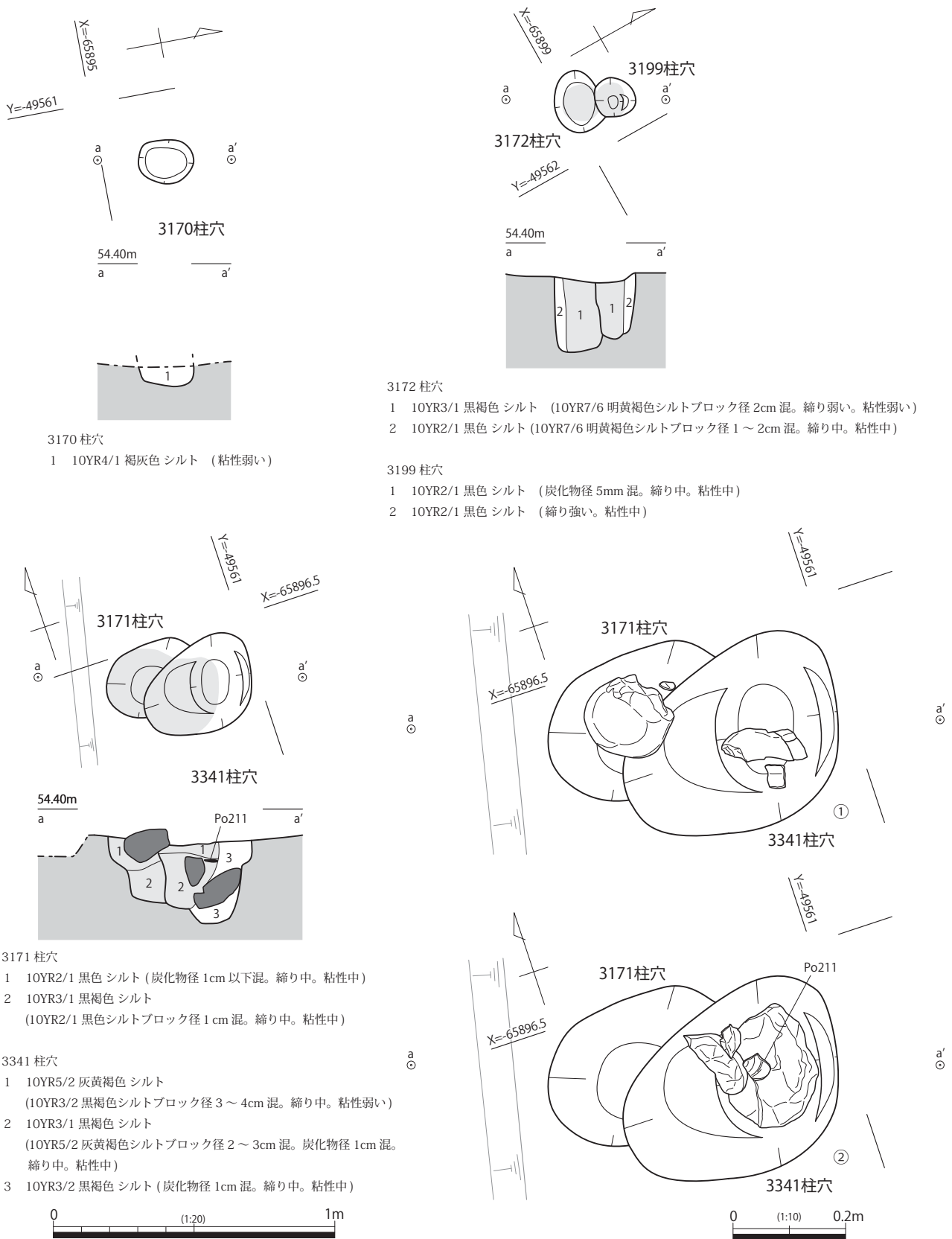
遺物は2層から出土した土師器坏Po211を図化した。

**3173柱穴(第93図、第10表、図版27)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。北側を暗渠によって削平されている。平面形は楕円形を呈し、残存規模は長軸0.34m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層には長軸0.04~0.14mの根巻石と考えられる大小礫が出土している。柱抜き取り後、根巻石として使用された礫が埋め戻されたものと考えられる。

**3174柱穴(第93図、第10表、図版27)**

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は不正円形を呈し、規模は長軸0.33m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.17mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層には長軸0.14m前後の礫が廃棄されている。柱抜き取り後、根巻石として使用されたと想定される礫が埋め戻されたものと考えられる。



第92図 掘立柱建物19 3170～3172・3199・3341柱穴

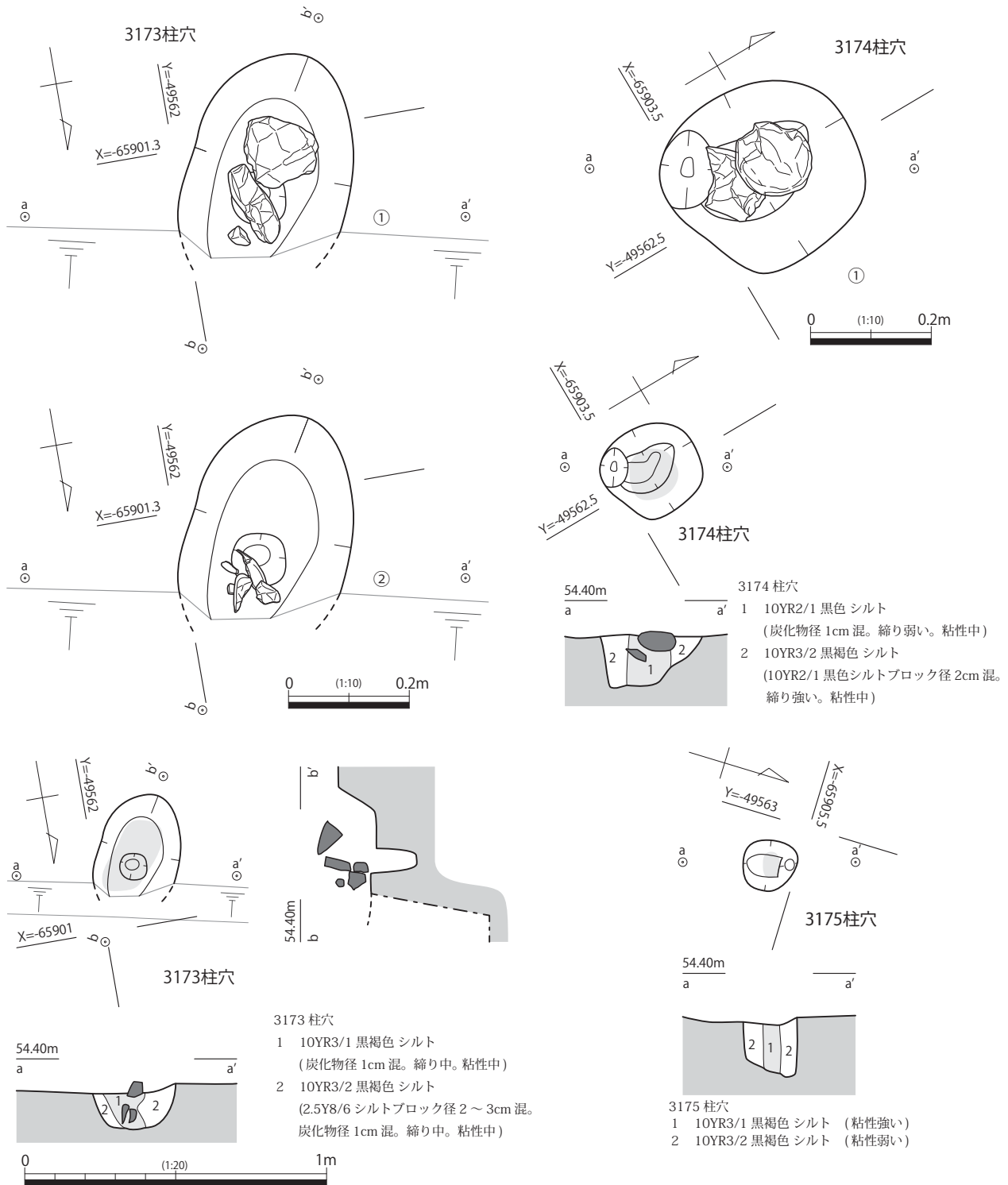
3175柱穴(第93図、第10表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(A-A'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.18m、短軸0.17m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋土は柱抜き

取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

3176柱穴(第94図、第10表、図版27)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.41m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。掘方底面には、長軸0.23m、厚さ0.09mの礎盤石が置



第93図 掘立柱建物19 3173~3175柱穴

かれている。

#### 3177柱穴(第94図、第10表、図版27)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.26m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.22mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2～4層からなる。後者には根巻石と考えられる長軸0.17mの礫が据えられていた。

#### 3178柱穴(第94図、第10表、図版26)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、250溝埋土上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.20m、短軸0.18m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

#### 3179柱穴(第94図、第10表)

調査区南西9F-10gグリッドにおいて、V層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.15mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

#### 3180柱穴(第94図、第10表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいて、V層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.23m、短軸0.19m、検出面からの深さ0.10mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

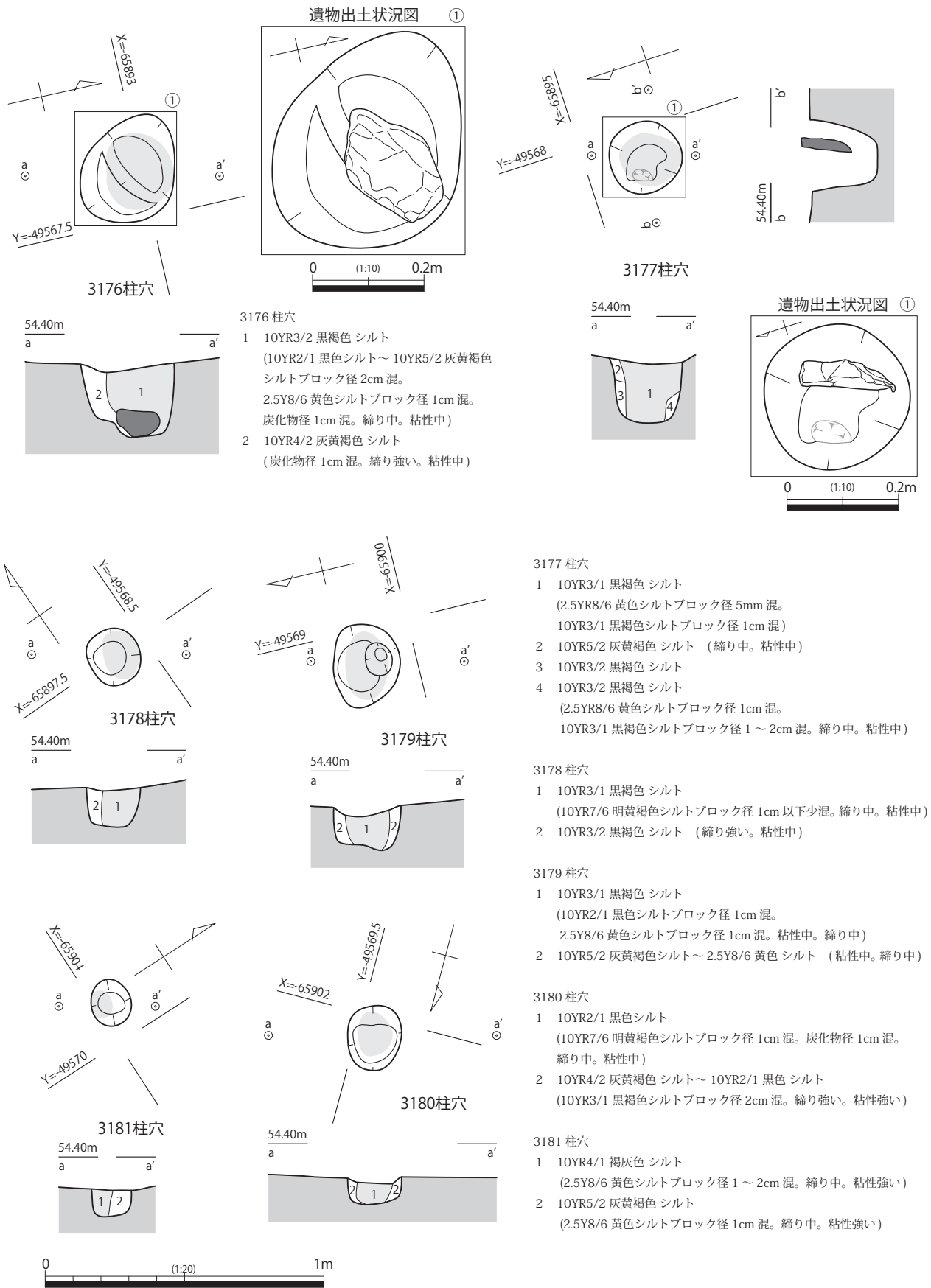
#### 3181柱穴(第94図、第10表)

調査区南西10F-1hグリッドにおいて、V層上面で検出した廂の柱穴である(E-E'ライン)。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸0.17m、短軸0.14m、検出面からの深さ0.09mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

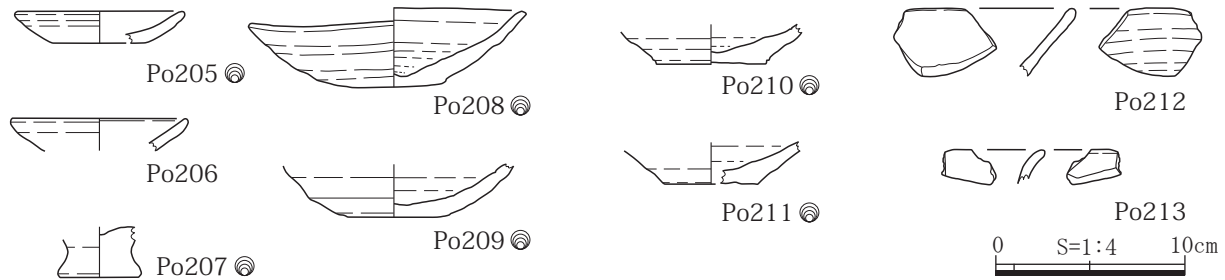
#### 掘立柱建物19出土遺物(第95図、第21表、図版59)

本遺構からの出土遺物を第93図にまとめている。Po205・206は回転台成形の土師器皿である。いずれも底部から口縁部が直線状に外傾する。Po207は回転台成形の土師器柱状高台である。柱部が一旦内湾してから開いている。Po208～212は回転台成形の土師器坏である。器高が低く口径が広く内湾するPo208・209が認められる。Po211は底部から直線的に立ち上がる器形である。Po213は口縁部が外反する土師器甕である。内外面ともナデ調整。





第94図 掘立柱建物19 3176～3181柱穴



第95図 掘立柱建物19出土遺物

**3010溝(第64・96～121図、第11・22～27・44・46表、図版28～33・58～68・88～90)**

I層(表土)直下、V～Ⅷ層上面で検出した溝である。土層断面の観察から埋没過程の変遷が大きく4段階(3010a～d溝)あり、3010d溝→3010c溝、3010d溝→3010a溝、3010c溝→3010a溝、3010b溝→3010a溝の新旧関係が確認でき、3010a溝が最も新しい。ただし、3010c溝と3010b溝、3010d溝と3010b溝の新旧関係は、直接の切り合い関係がみられず不明である。圃場整備による削平のため、特に3010c・d溝は遺存状態が悪く、3010a溝は北端、3010b溝は両端が破壊されているほか、部分的に途切れる箇所がある。また、いずれの段階も後世の暗渠により部分的に破壊されている。3010a・b溝はやや蛇行するものの概ね直線的な平面プランであり、3010c・d溝についても本来は同様の形状であったものと想定している。

3010溝は各段階において多くの遺物が出土しており、特に3010a・b溝の段階では密に出土している。後述するが、3010a～d溝から出土した遺物は近接する掘立柱建物13・19・12・20の帰属時期に並行し(第6章第1節)、各段階の溝はこれらの建物の主軸に概ね平行することから、関連性が高い遺構群と考えている。建物群との平面的な位置関係も鑑み、3010溝は屋敷地の西側を区画する溝と想定している。

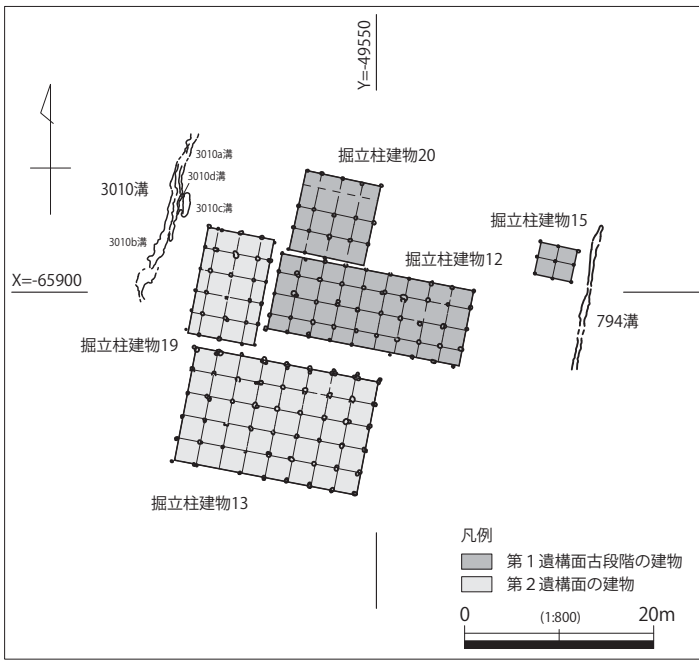
また、3010溝出土遺物は近接する建物群で使用されていたものが廃棄されたものと想定しており、3010aより出土した須恵器片が掘立柱建物13を構成する713柱穴(平成28年度調査)より出土した須恵器壺(H28Po129)と接合したことは、その蓋然性を高める<sup>(註4)</sup>。

なお、平成28年度調査区で検出した794溝は3010溝と同様に直線的な溝であり、主軸も平行する。規模も類似するほか、出土遺物から同時期のものと考えられる。既報告では794溝は用水路と想定されたが<sup>(註5)</sup>、今回の調査成果を踏まえ、794溝は3010溝と有機的な繋がりをもつ可能性が高いものとする。その場合、794溝は屋敷地東側の区画溝として機能していたものと想定している。794溝と3010a溝との間は約44.5mの距離を測り、約半町程度の屋敷地が復元できる。

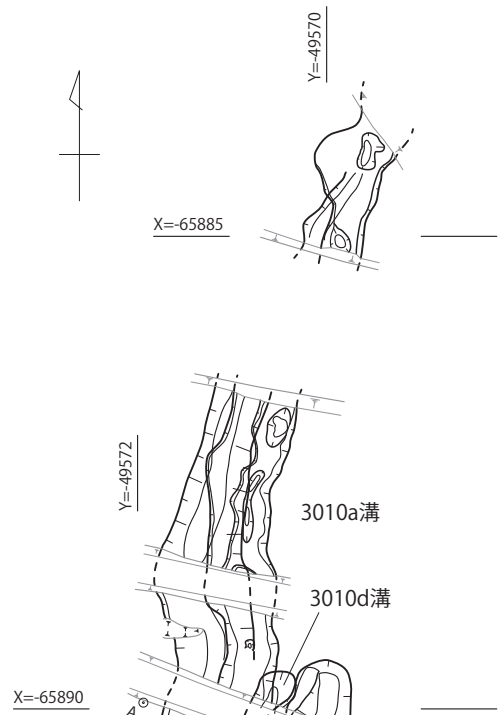
以下、各埋没過程の詳細を述べる。

**3010a溝(第98～105図、第11・22・23表、図版28～30・58～61・64・65・88・89)**

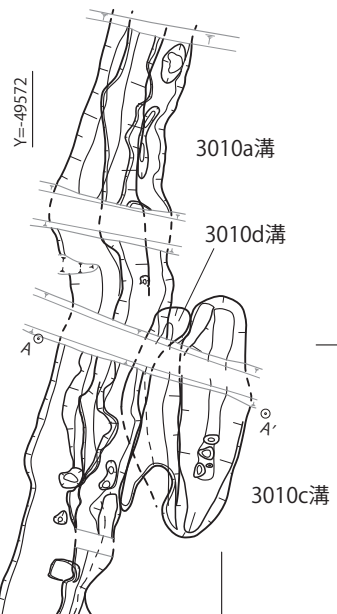
調査区西側9F-9g・9h・10hグリッドにおいて、I層直下、V層上面で検出した溝である。東側は3010c・d溝、西側は3010b溝を切る。やや蛇行するものの概ね直線的な平面プランを呈し、北端は削平される。主軸はN-10°-Eにとる。検出された範囲の規模は全長が11.0m、幅は0.4～0.8m、検出面からの深さは0.12mを測る。底面レベルは南端が54.27m、北端が54.20mであり、比高差は0.07mである。断面形は浅い椀状を呈し、埋土は3層に分層できる(第98図)。1層は黒褐色細砂混じりシルトを



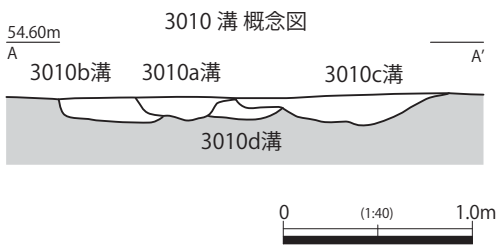
区画溝と建物群配置図



X=65890

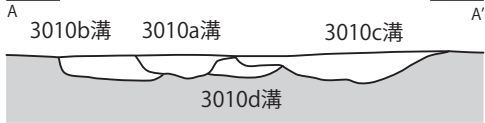


X=65895

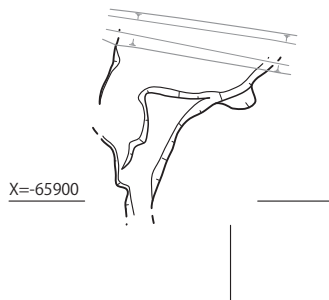


3010 溝 概念図

54.60m



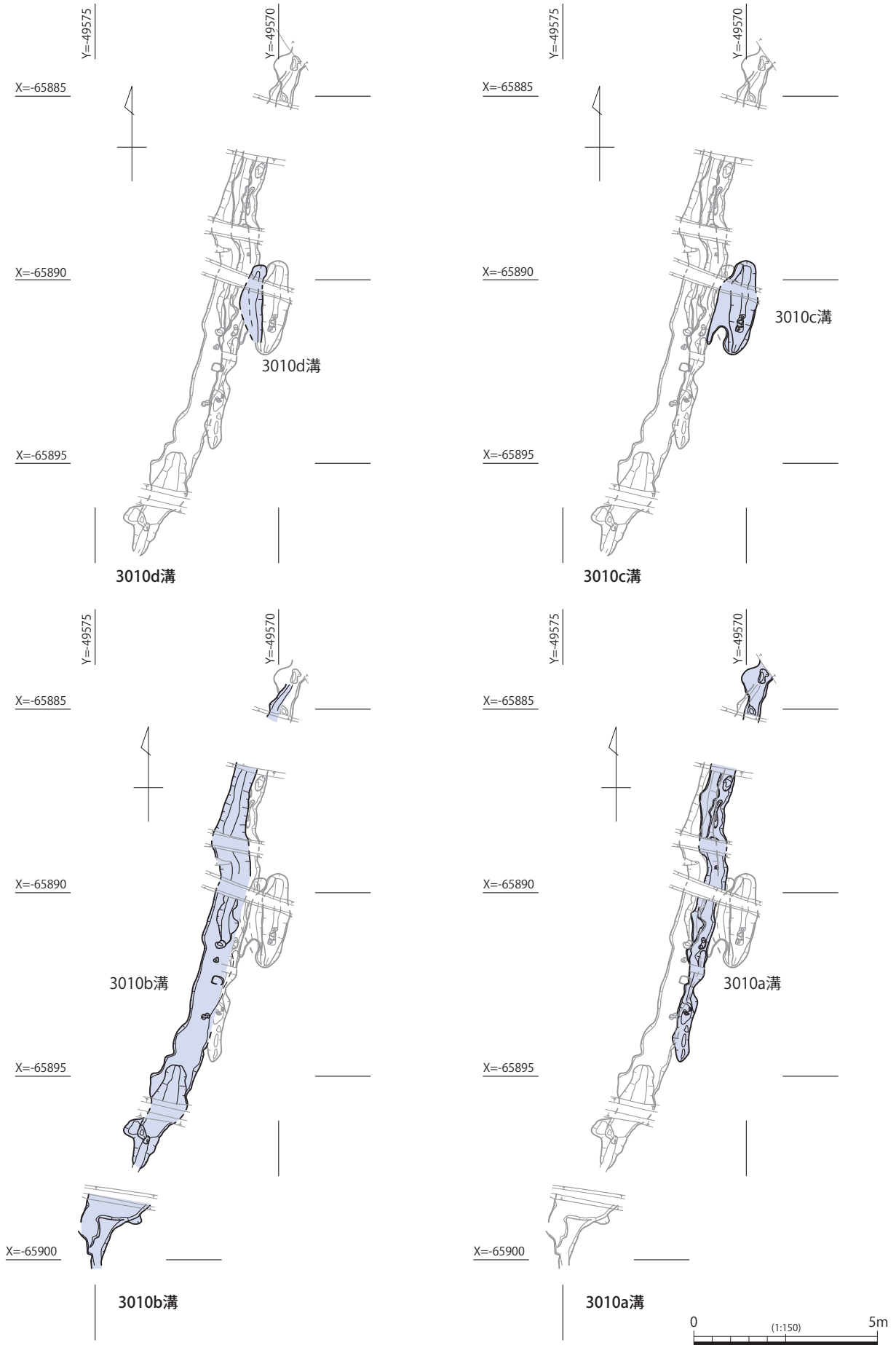
0 (1:40) 1.0m



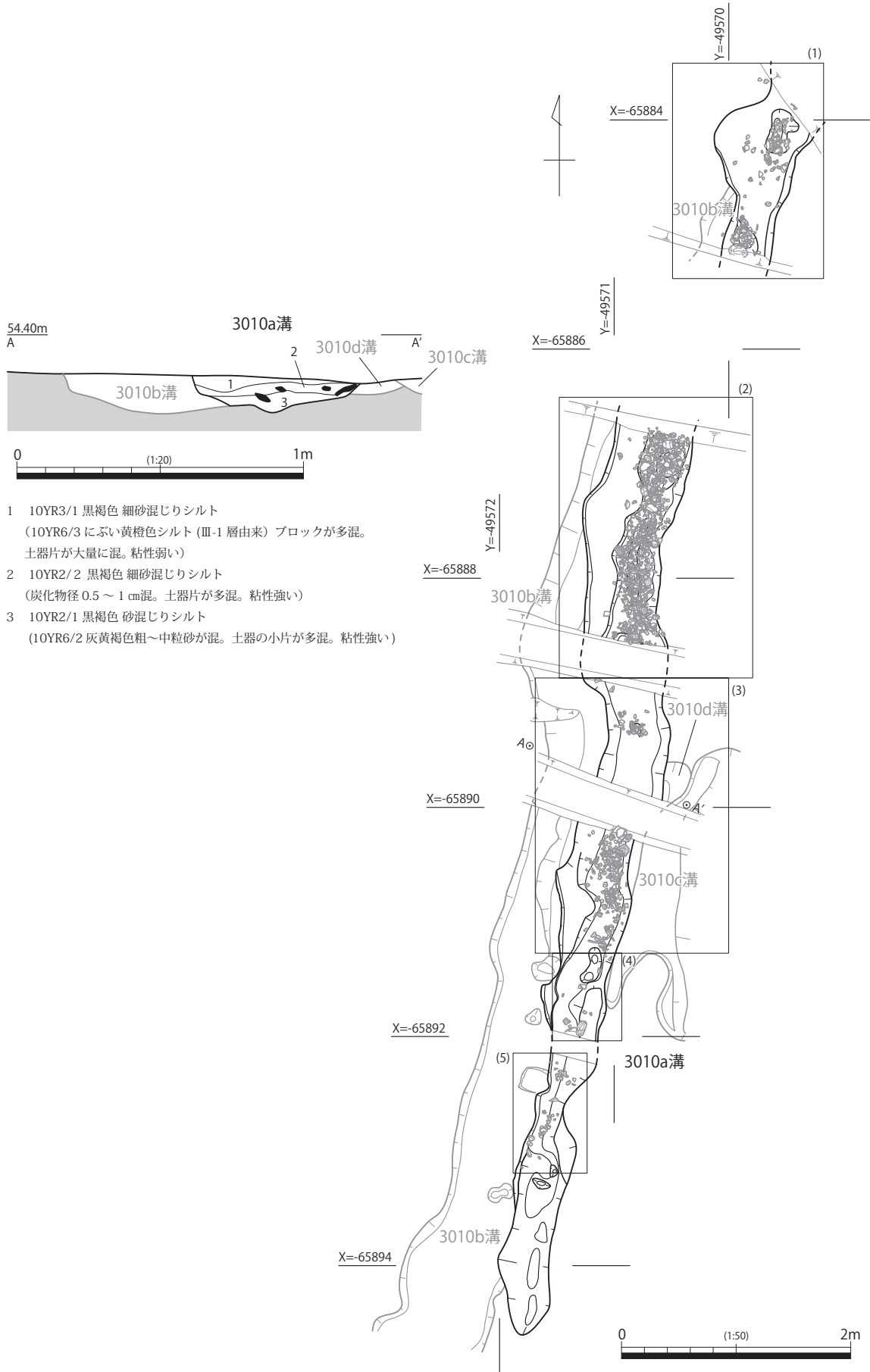
X=65900

0 (1:80) 4m

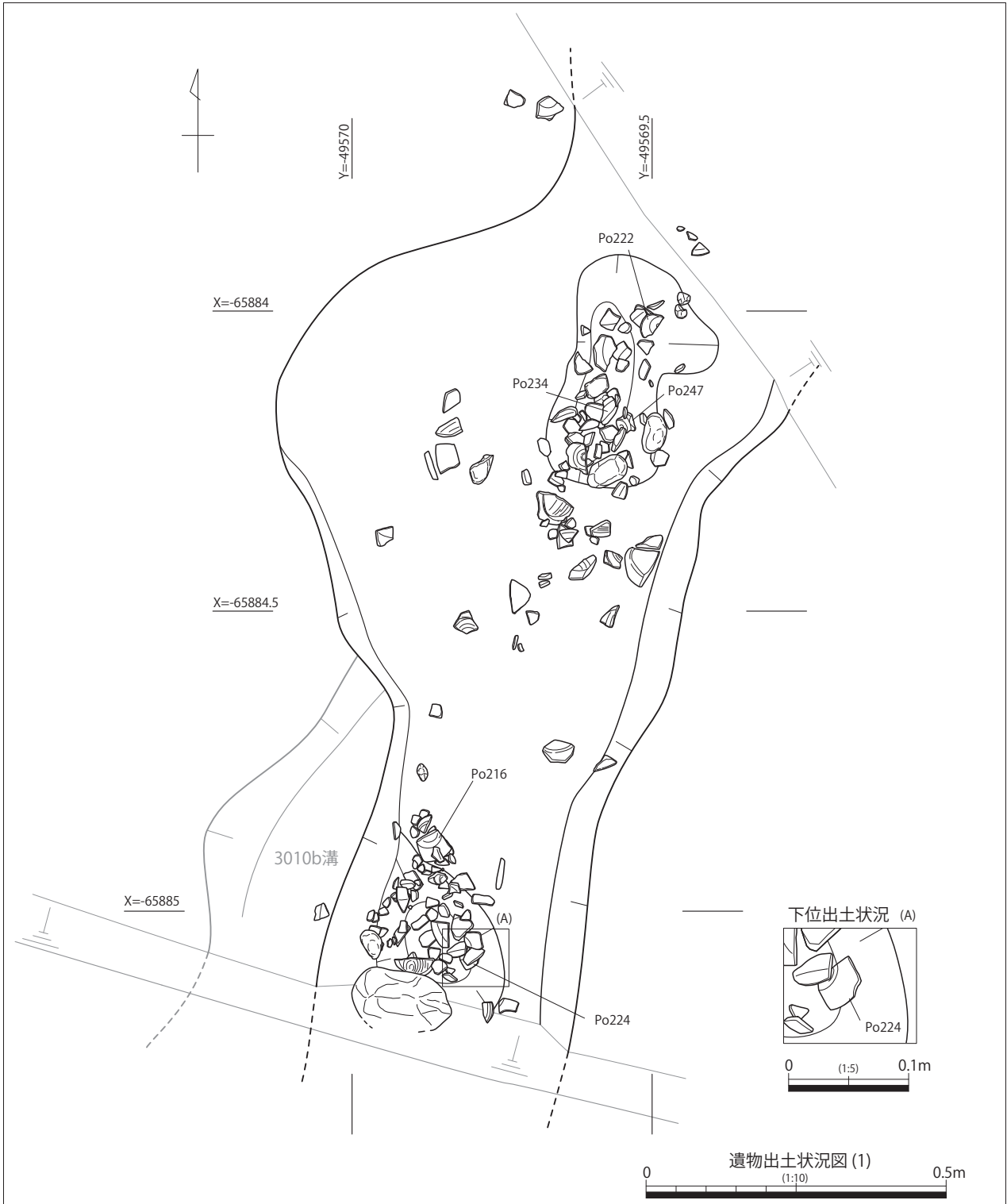
第96図 3010溝



第97図 3010溝変遷図

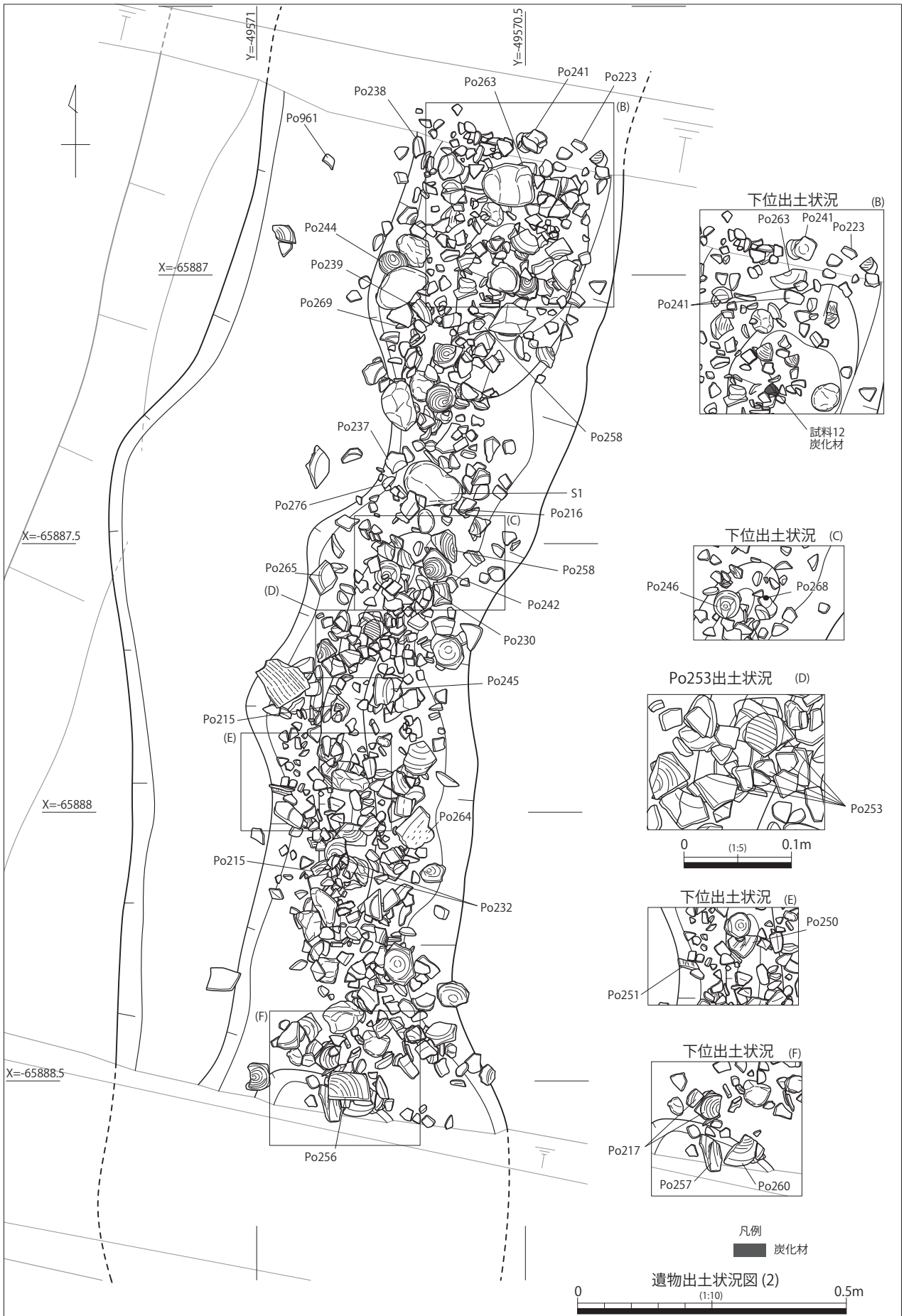


第98図 3010a溝



第99図 3010a溝遺物出土状況(1)

主体とし、Ⅲ-1層に由来するブロックが多く混じる。このことから、3010a溝はV層上面検出の遺構ではあるが、本来はⅢ-1層堆積後に掘削された遺構である可能性が高い。よって、屋敷地の区画溝と捉えるならば、Ⅲ-1層上面で検出された掘立柱建物12・20と並行するものと考えられる。2層は黒褐色細砂混じりシルト、最下層である3層は中から粗紗が混じる黒褐色砂混じりシルトが堆積し、特に、底面に検出された小ピット状の僅かな窪みの埋土はより砂質が強まる。1～3層ともラミナ構

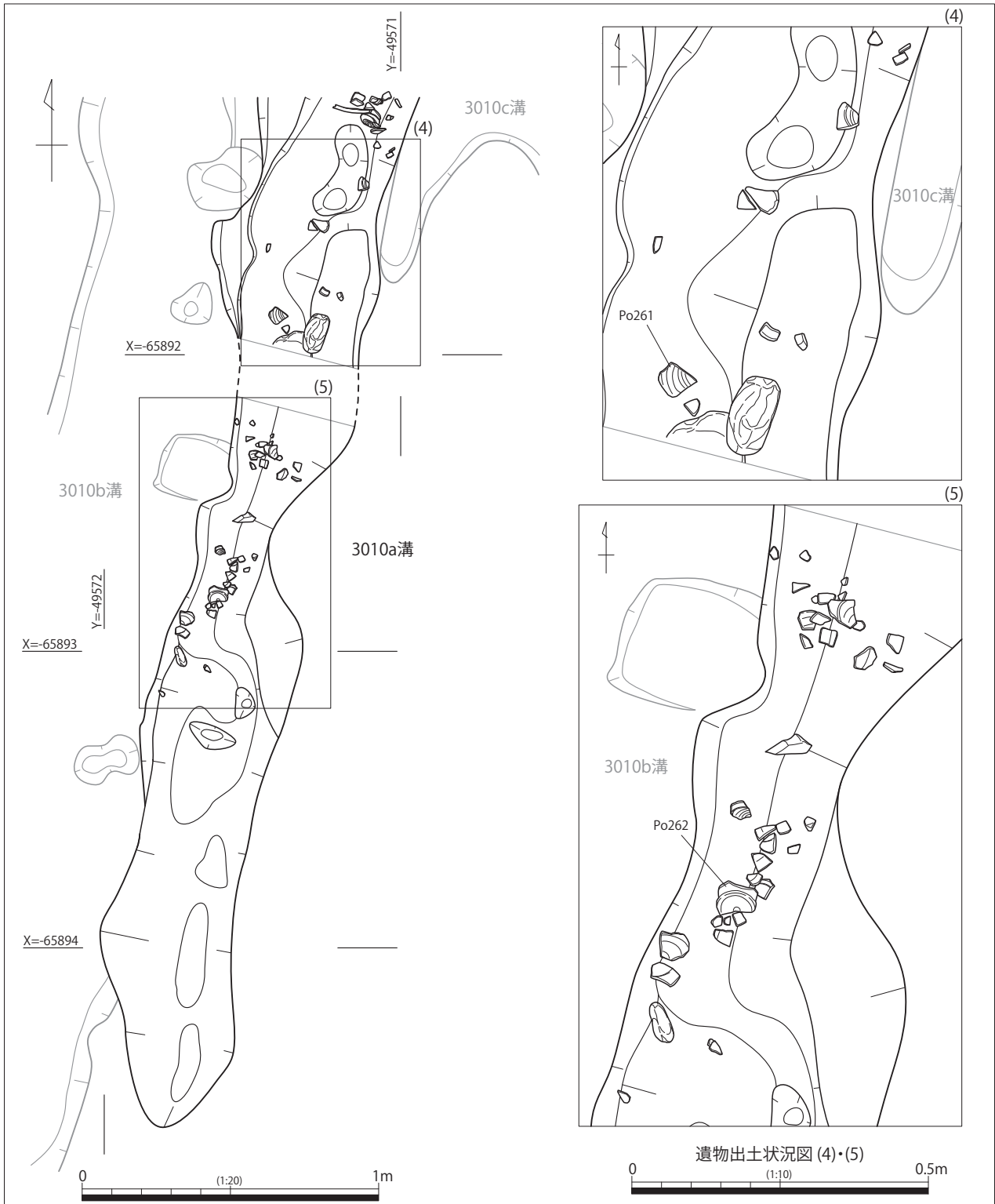


第100図 3010a溝遺物出土状況(2)



第101図 3010a溝遺物出土状況(3)

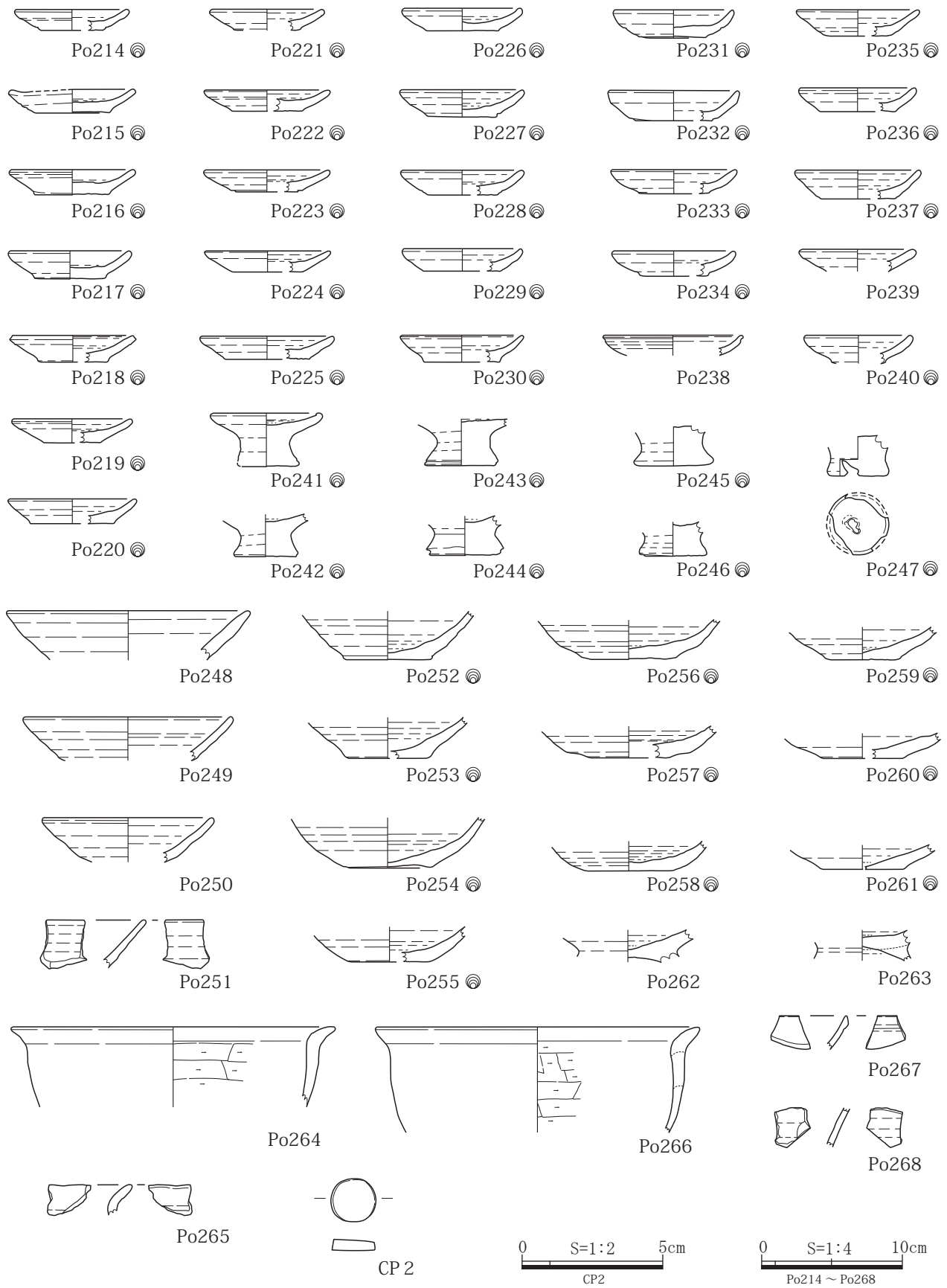




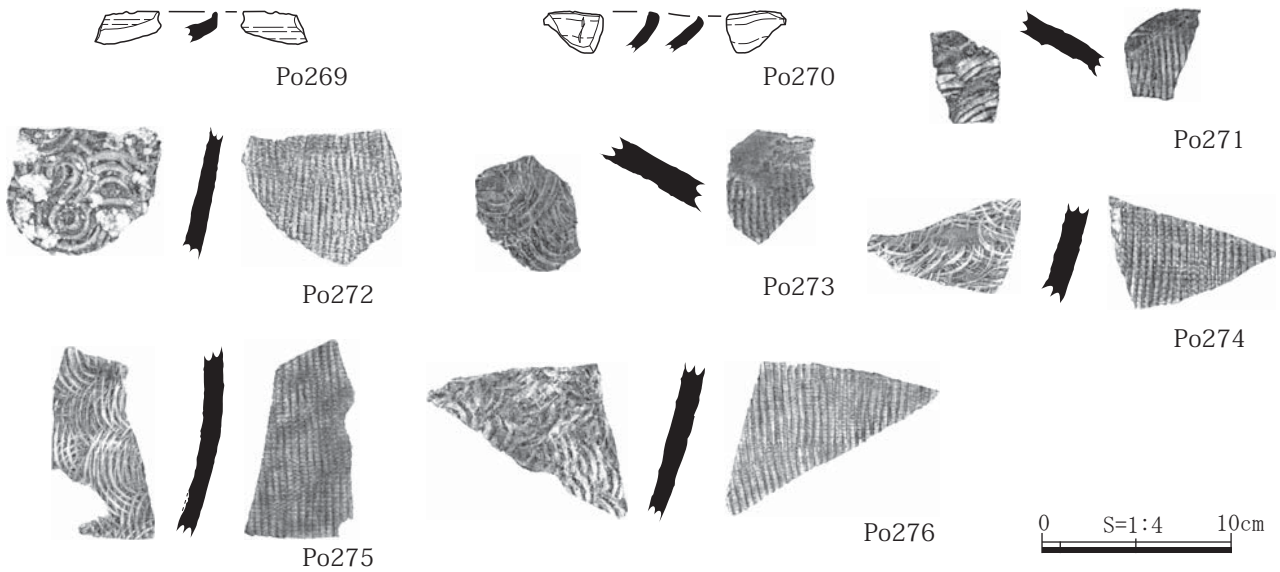
第102図 3010a溝遺物出土状況(4)

造は確認していない。これらの堆積状況から判断し、雨水の流入など、ある一定期間は緩やかな流水の環境下に置かれた可能性が考えられる。

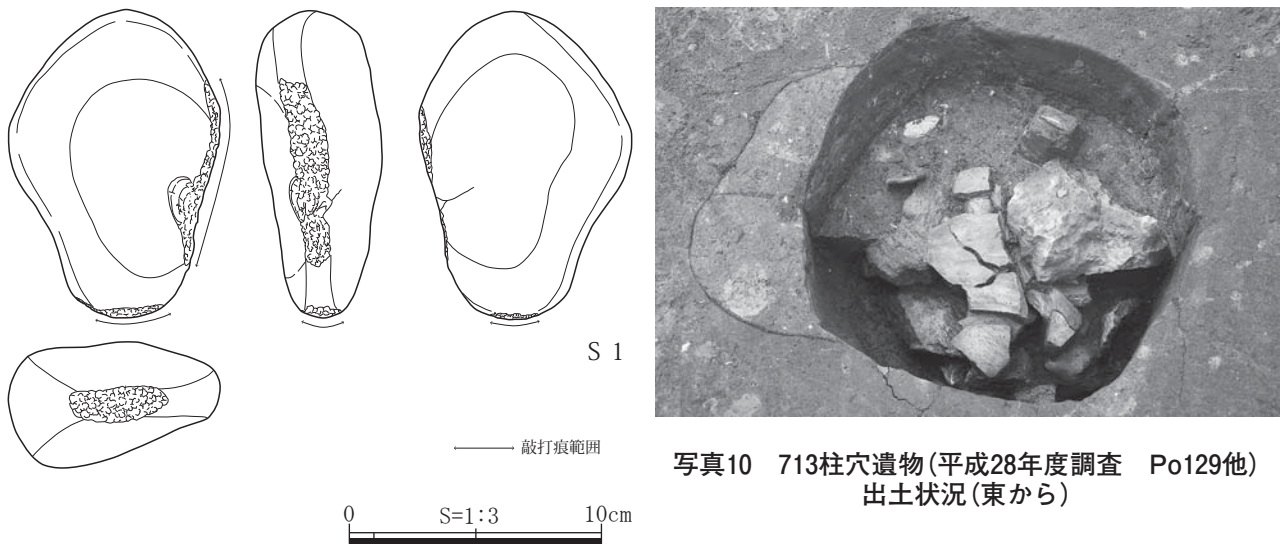
遺物は土師器、須恵器を主体とし、貿易陶磁、土製品、石器、拳大から人頭大の自然礫が各層から密な状態で出土している。土器は破片の状態で出土し、完形に復元できる個体がないことから、意図的に破碎された可能性が考えられる。接合する破片はある一定のまとまりをもって出土し、広範囲に



第103図 3010a溝出土遺物(1)



第104図 3010a溝出土遺物(2)



第105図 3010a溝出土遺物(3)

拡散する状況にはない。

図化した遺物は第103～105図に掲載している。第103図は回転台成形の土師器皿、坏、高台付坏、柱状高台と土師器甕及び貿易陶磁器をまとめている。Po214～240は皿である。底部から口縁部が直線状に外傾するPo217～219・220・227・235・237、器高が低く口縁部が内湾するPo226・228～231・233・234・236・238、扁平で立ち上がり短いPo214～216・221～225・239がみられる。

Po241～247は柱状高台である。Po241は坏部が浅く、高台裾がやや開く。その後も高台部が一旦内湾してから開く形状をしている。Po247は焼成前に底面に棒状工具により穿たれた孔が観察される。

Po248～261は坏である。体部下半のものが多く、全体形がわかるものはわずかにPo248・249・250に過ぎない。いずれも器高が低く、口径が広いPo248・249、口縁部がやや内湾するPo250がある。Po262・263は高台付坏で、いずれも器壁が厚く高台部が「ハ」の字状に開いている。

Po264～266は甕であり、短い口縁部が緩く外反して、体部はあまり張り出さない。Po267は玉縁口

縁の白磁碗Ⅳ類、Po268は白磁壺類の体部である。CP 2は径1.5cmの土製基石である。表面は丁寧にナデ調整が施されている。

第104図は須恵器をまとめている。Po269・270は須恵器の片口鉢である。産地は不明。Po271～276は須恵器甕の頸部から体部片である。いずれも外面に平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。

第105図のS 1は安山岩の垂円礫を素材とした敲石である。先の細くなった先端部と側面に敲打痕がみられる。

本溝の帰属時期は、出土遺物から判断し、12世紀中葉から後半と考えられる。

なお前述のとおり、本溝2・3層から出土した須恵器片が、掘立柱建物13を構成する713柱穴(写真10：平成28年度調査)より出土した須恵器壺(H28Po129)と接合した(第42表、図版58)。しかしながら、本溝は掘立柱建物13に後出する掘立柱建物12・20と並行する可能性が高く、この須恵器片は本溝より古い段階の溝(3010b～d溝)から巻き上げられたものと考えている。

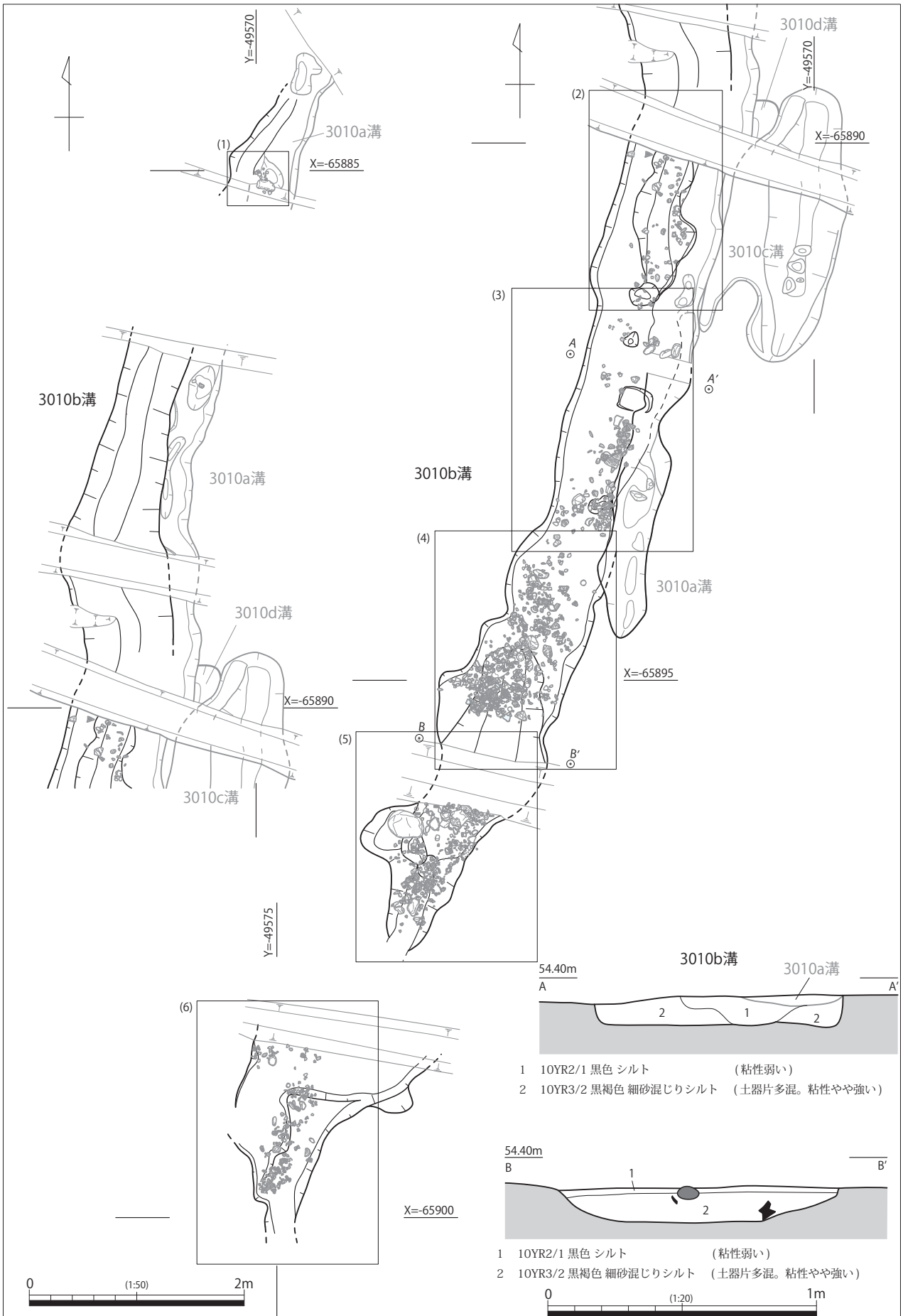
また、3層から出土した炭化材(試料12)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定され、放射性炭素年代測定の結果、calAD1030-1154(暦年較正2σ)の値が得られた(第5章第1節参照)。得られた値は出土遺物の年代観と比較し、矛盾はない。

### 3010b溝(第106～116図、第11・23～26・44・46表、図版31～33・58・59・62～67・88～90)

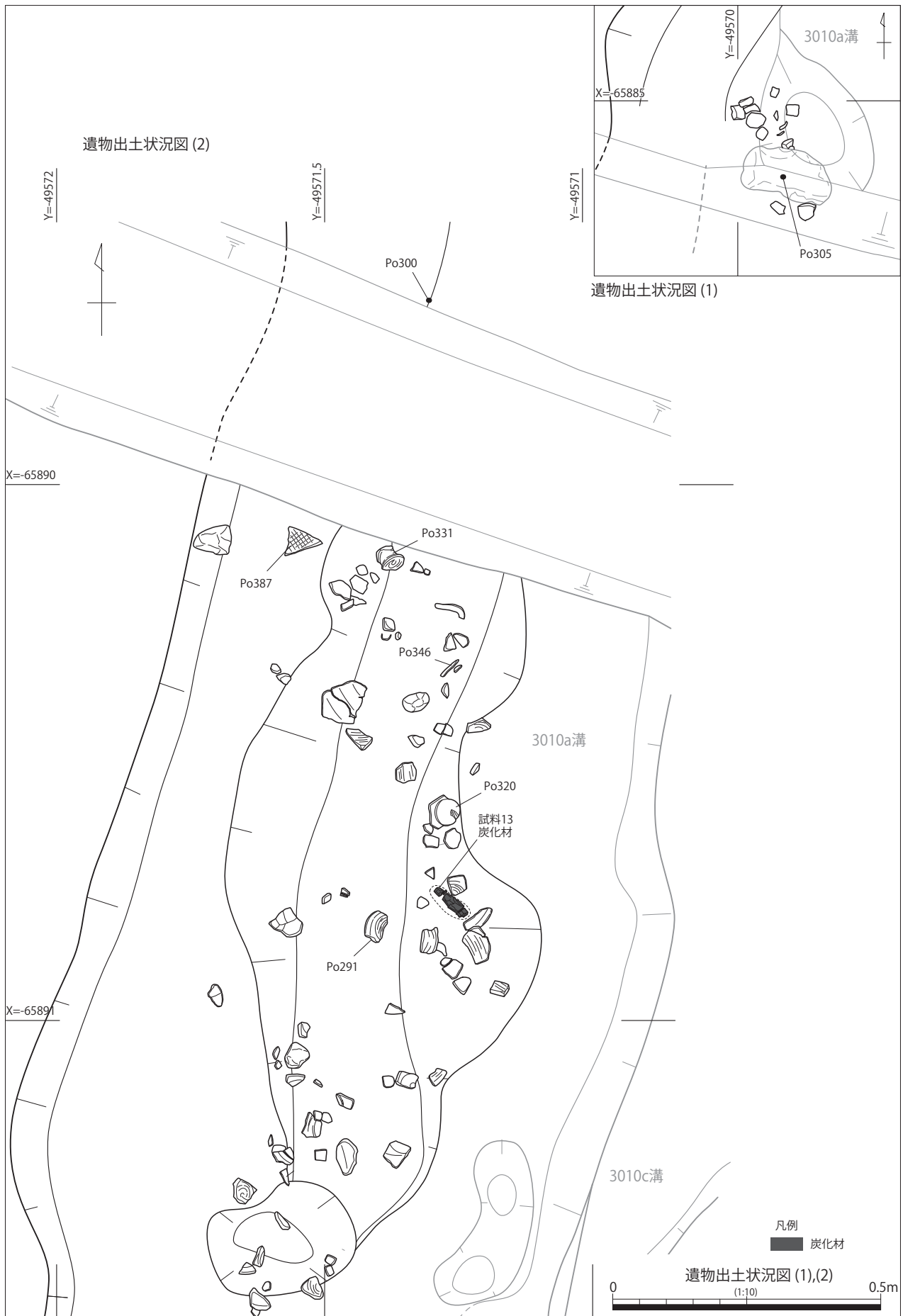
調査区西側9F-9g・9h・10hグリッドにおいて、I層直下、V～VII層上面で検出した溝である。東側は3010a溝に切られる。やや蛇行するものの概ね直線的な平面プランを呈し、南北の両端が削平されるほか、一部断続的に途切れる。主軸はN-19° -Eにとる。検出された範囲の規模は全長が16.7m、幅は0.80～1.10m、検出面からの深さは0.10～0.14mを測る。底面レベルは南端が54.18m、北端が54.14mであり、比高差は0.04mである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は2層に分層できる(第106図)。1層は黒色シルト、2層は黒褐色細砂混じりシルトが堆積し、特に、底面に検出された小ピット状の僅かな窪みの埋土はより砂質が強まる。1・2層ともラミナ構造は確認していない。これらの堆積状況から判断し、3010a溝同様、ある一定期間は緩やかな流水の環境下に置かれた可能性が考えられる。

遺物は土師器、須恵器を主体とし、貿易陶磁、土製品、錫製品、拳大から人頭大の自然礫が両層から密な状態で出土している。土器は破片の状態出土するものが大半であるが、僅かながら完形に復元できる個体がみられる。接合する破片はある一定のまとまりをもって出土し、広範囲に拡散する状況にはない。図化した遺物は第113～116図に掲載している。Po277～359・361～367は回転台成形の土師器であり、Po277～314は皿、Po315～337は柱状高台、Po338～359は坏、Po361～367は高台付坏をまとめている。皿は底部から口縁部が直線状に開くPo277～279・281・283・286、器高が低く口縁端部が内湾するPo296・301・311・313・314、扁平で立ち上がり短いPo291・292・297・302～304・308・309・312、器高が高く底部から口縁部が外傾して立ち上がるPo284・289・294・299・300・310、底部が厚く口縁部が外反しながら立ち上がるPo290がみられる。Po285は口縁端部が波打ち、両側縁が高くなる。耳皿であろうか。柱状高台はいずれも高台裾が張り出し、中位が括れることで共通する。坏部の底面中央を窪ませるPo321・332・333・335がみられる。

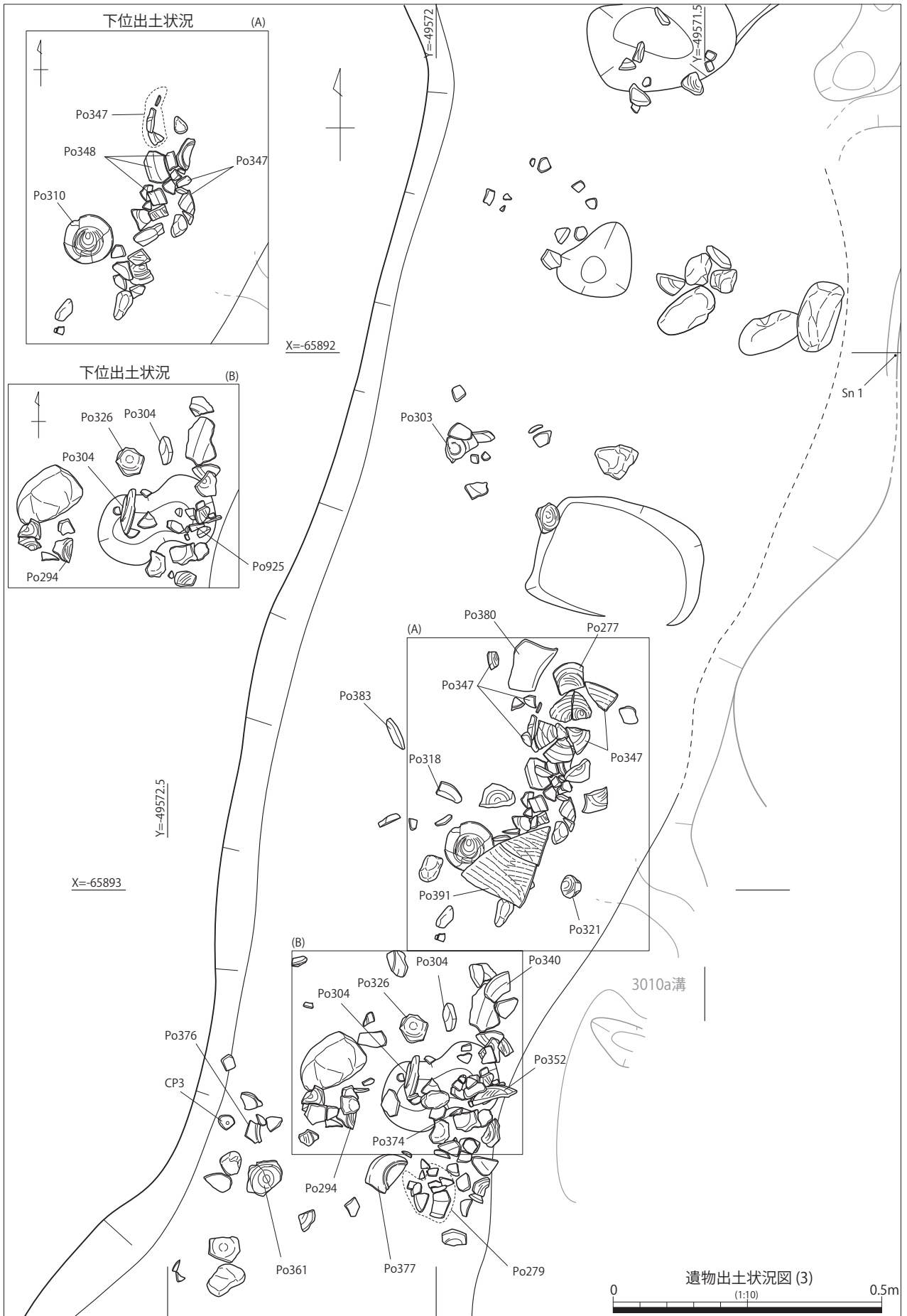
坏のPo338～341・345・347・349は底部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。Po341・346・348は底部から口縁部が直線的に立ち上がる。Po345は内面がやや黒味を帯びていることから、瓦器を意識



第106図 3010b溝



第107図 3010b溝遺物出土状況(1)

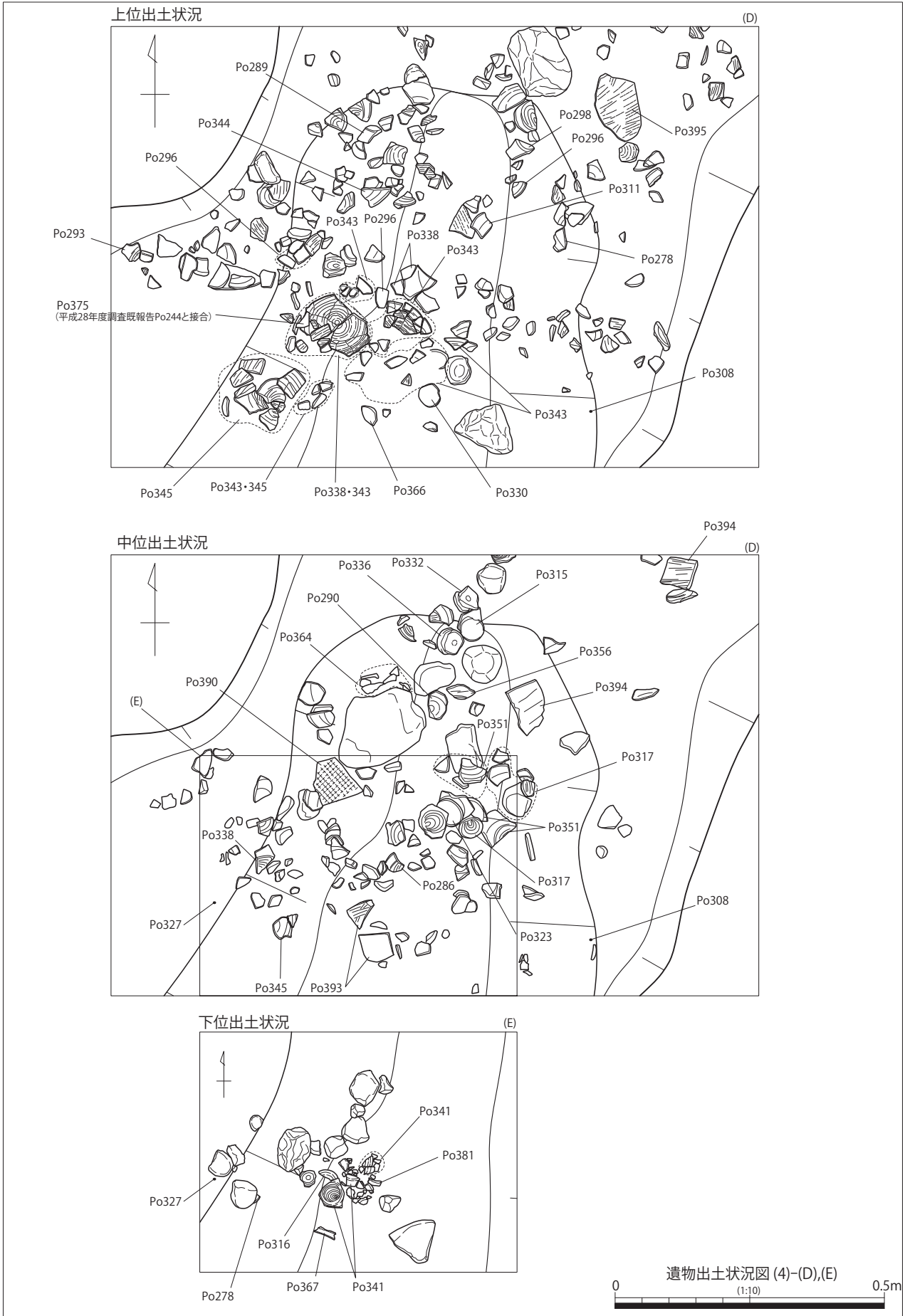


第108図 3010b溝遺物出土状況(2)

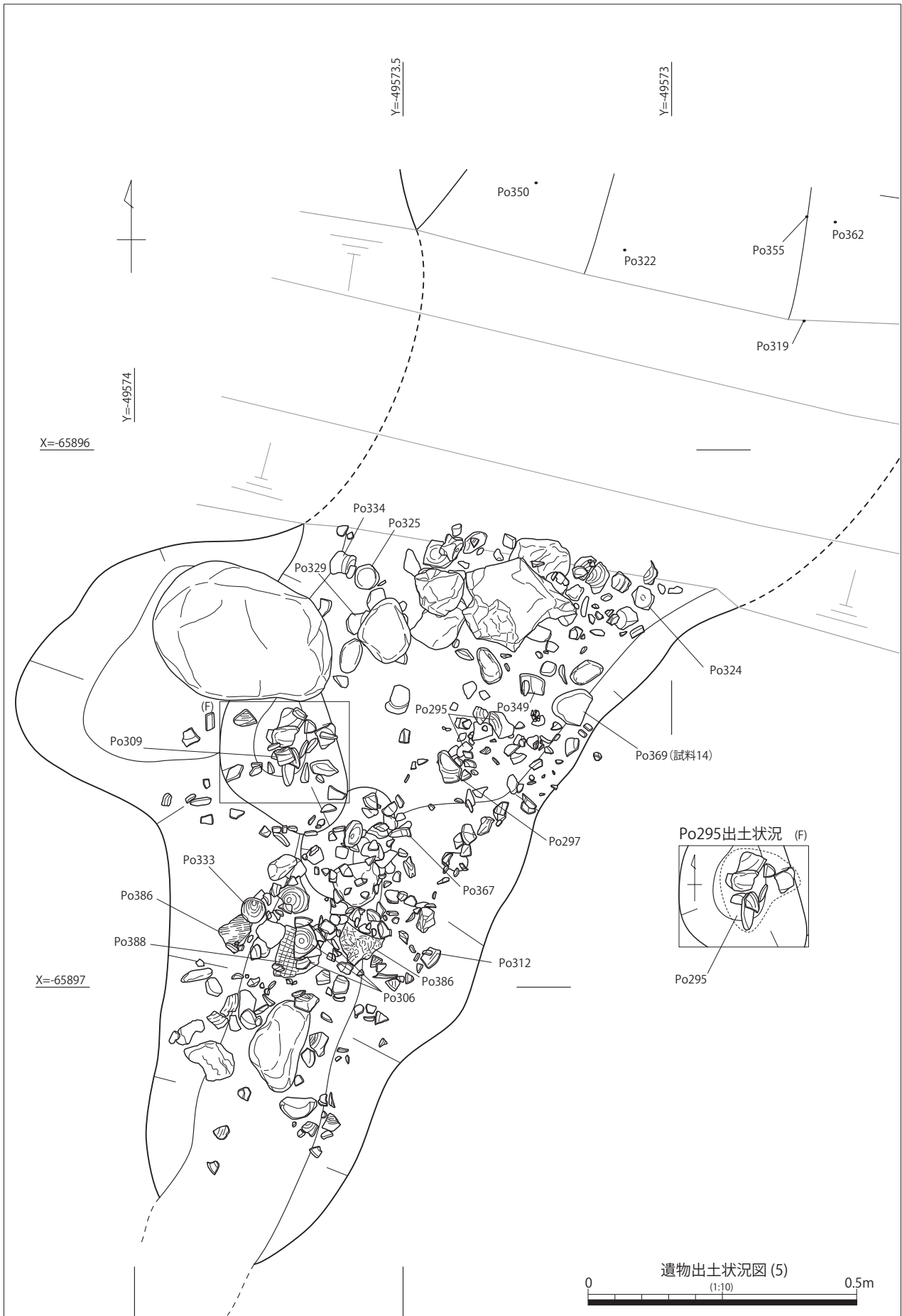


第109図 3010b溝遺物出土状況(3)





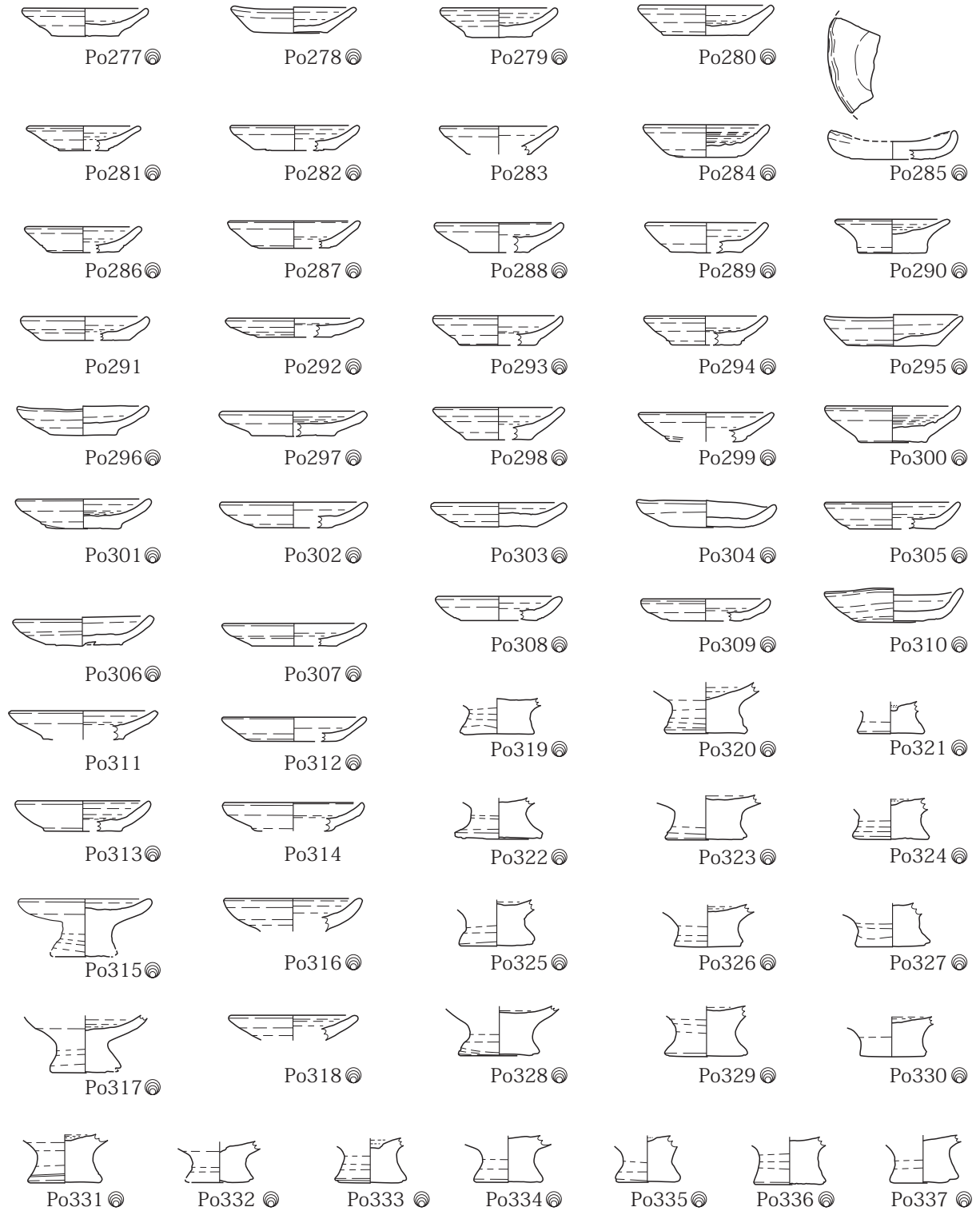
第110図 3010b溝遺物出土状況(4)



第111図 3010b溝遺物出土状況(5)



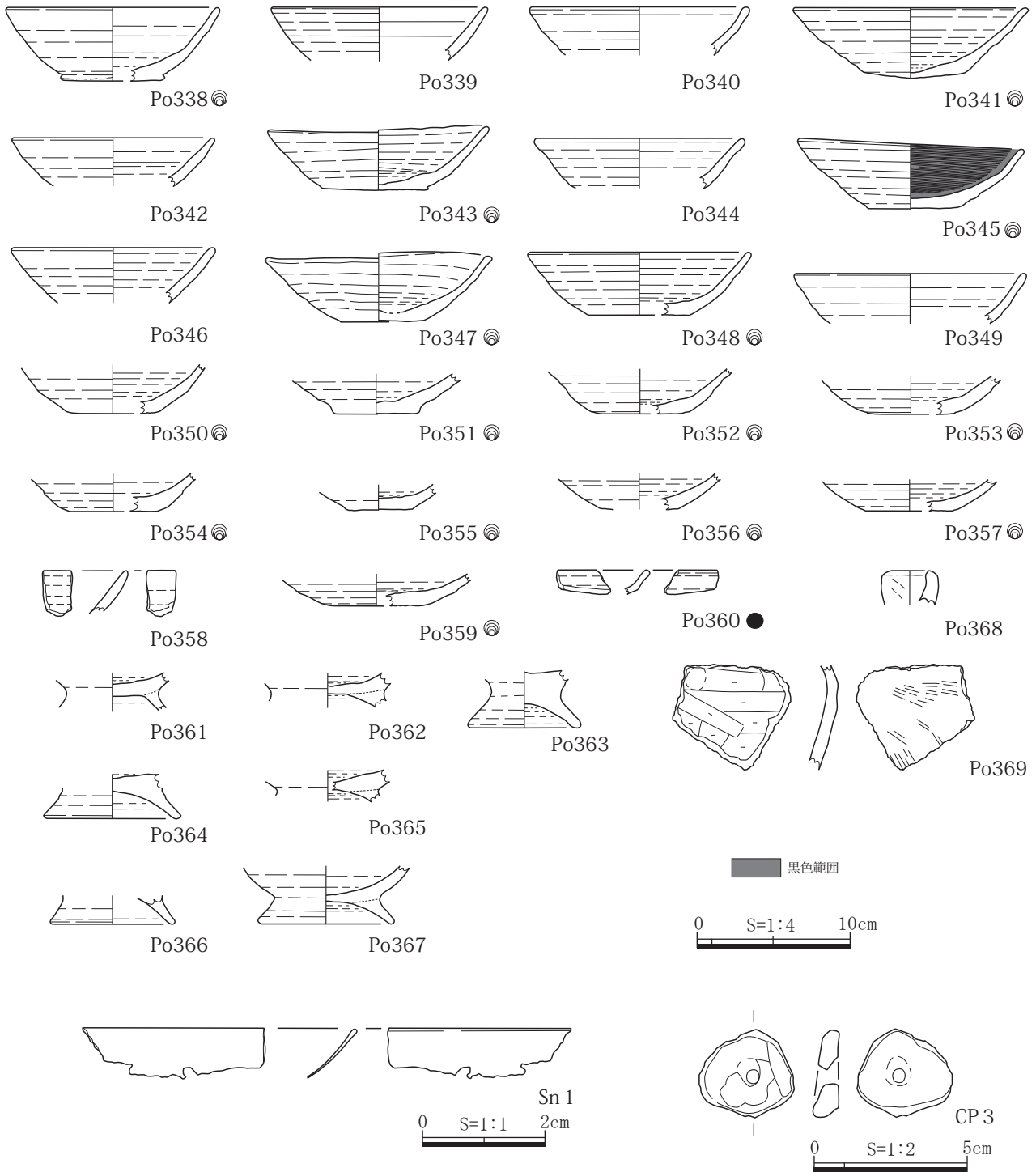
第112図 3010b溝遺物出土状況(6)



第113図 3010b溝出土遺物(1)

したものか。Po350～357・359は坏底部であり、底部から体部が直線的に外傾するPo354・351と内湾気味に立ち上がるPo356・357・359がみられる。Po358は坏の口縁部片である。

Po360は手づくね成形の土師器皿である。口縁端部が外反する。高台付坏Po361～367は器壁が厚

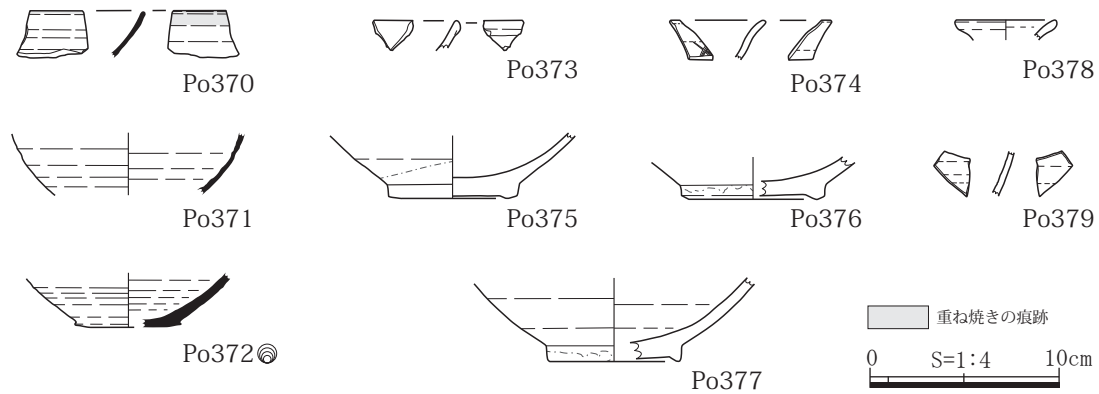


第114図 3010b溝出土遺物(2)

く、高台部は足高状に大きく開く。Po368はミニチュア土器である。

Po369(試料14)は1層から出土した土師器甕の体部であり、外面に煤が厚く付着する。外面はハケ、内面はヘラケズリ調整を施す。放射性炭素年代測定を行ったところ、calAD1076-1155(暦年較正2σの確率1位)の値が出されている(第5章第1節参照)。

CP3は柱状高台を転用して中央部に穿孔している。Sn1は端部がやや厚くなり体部に向かい薄くなり、湾曲している。金属学的分析を行ったところ、錫と銅の合成品という結果が出ている(第5章



第115図 3010b溝出土遺物(3)

第2節参照)。金属製の椀か。

Po370は初期備前の壺とみられ、体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。器壁が薄く、重ね焼きの痕跡が残る。Po371・372は須恵器坏である。Po371は器壁が薄く、体部が内湾して立ち上がる。Po372はやや厚みのある器壁で、底部が若干直立する。底部から体部が緩やかに内湾して立ち上がっている。

Po373～379は貿易陶磁器である。Po373は玉縁口縁の白磁碗Ⅳ類。Po374は口縁端部が外反する白磁碗ⅩⅢ-b類。Po375・376は削り出し高台で体部が内湾気味に立ち上がる白磁碗Ⅳ 1 a類及びⅣ 1 類。Po377は釉が高台部までかかる白磁碗Ⅳ 1 類もしくはⅥa類である。Po379は白磁壺の体部である。Po378は暗茶褐釉の壺である。

Po380～395は須恵器の甕をまとめている。Po380～382は甕の頸部と体部で内外面ナデ調整を施す。Po383～392は体部に相当し、外面は平行タタキ、内面はPo384がナデ、それ以外は同心円状当て具痕を残す。Po393～395は外面に平行タタキ後一部カキメ、内面はカキメを施している。

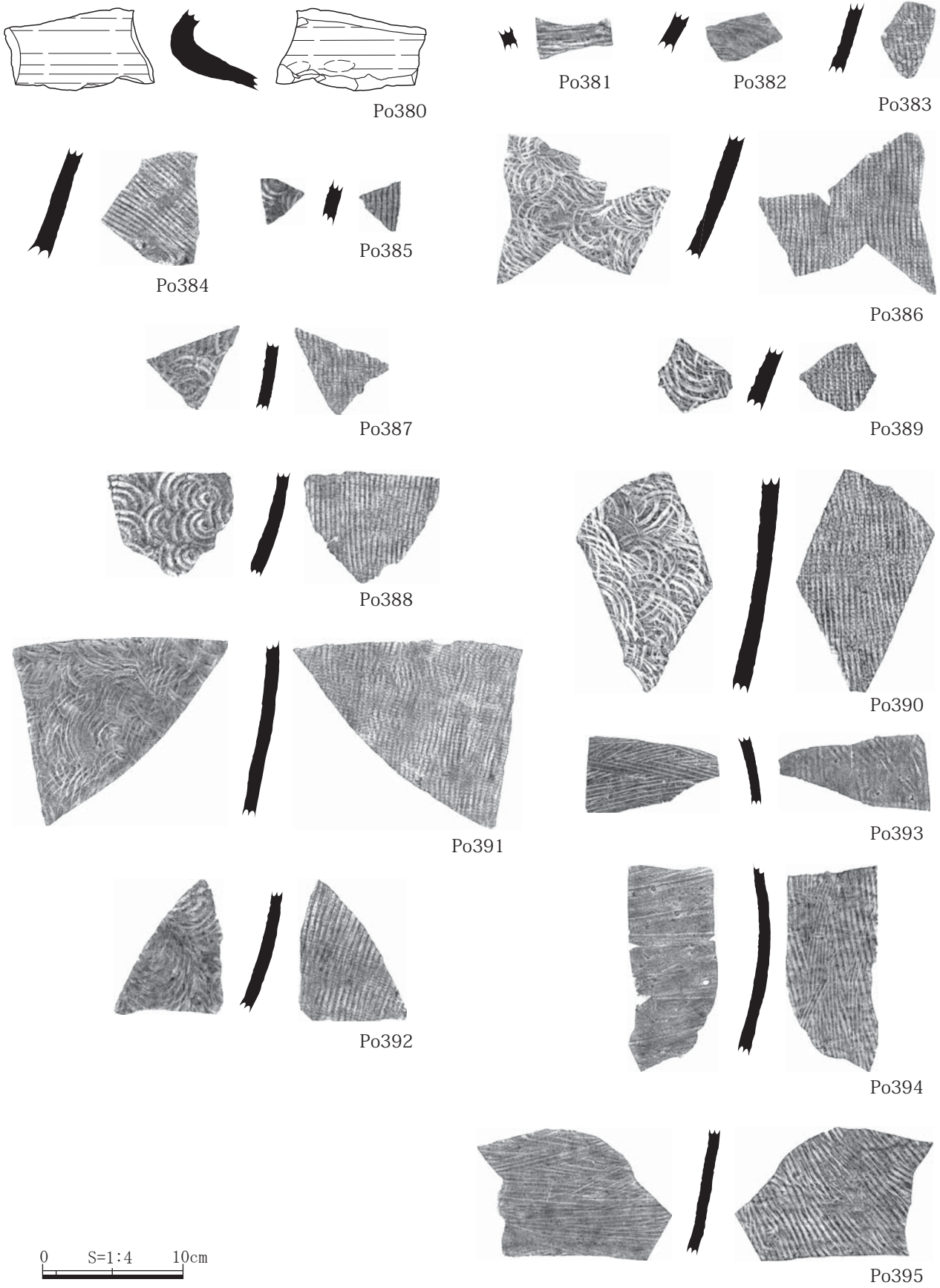
本溝の帰属時期は、出土遺物から判断し、11世紀後葉から12世紀前葉と考えられる。

なお、本溝1層から出土したPo375は、平成28年度調査区攪乱土より出土した白磁碗(H28Po244)と接合したことから再実測し、掲載している<sup>(註6)</sup>。

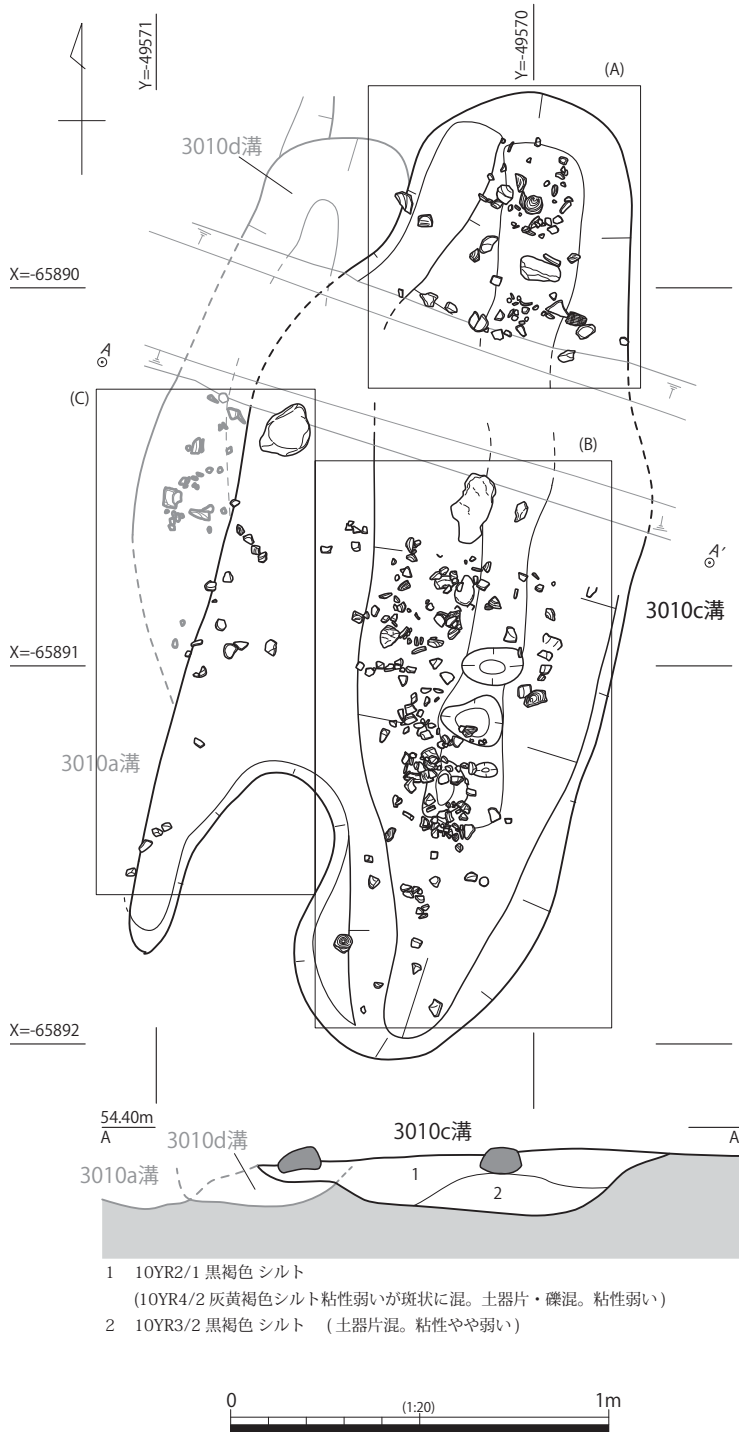
また、1層から出土した炭化材(試料13)について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属と同定され、放射性炭素年代測定の結果、calAD1036-1160(暦年較正2σ)の値が得られた(第5章第1節参照)。得られた値は出土遺物の年代観と比較し、大きな矛盾はない。

### 3010c溝(第117～119図、第11・26・27表、図版33・67・88・89)

調査区西側9F-9g・10g・9h・10hグリッドにおいて、I層直下、V層上面で検出した溝である。遺存状態は悪く、西側は3010d溝を切り、3010a溝に切られる。3010b溝との重複関係は不明であるが、後述する放射性炭素年代測定の値から判断し、3010b溝に先行する可能性が高いと考える。検出面の平面形は南側が二股状となり不定形であるが、底面は直線的な形状をなす。主軸はN-7°-Eにとる。検出された範囲の規模は全長が2.6m、幅は0.60～1.10m、検出面からの深さは0.12～0.16mを測る。底面レベルは南端が54.23m、北端が54.17mであり、比高差は0.06mである。断面形は浅い皿状を呈



第116図 3010b溝出土遺物(4)



第117図 3010c溝

なお、本溝埋土中から出土した炭化材(試料15)について樹種同定を行った結果、ツバキ属と同定され、放射性炭素年代測定の結果、calAD1016-1052(暦年較正2σの確立1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。得られた値は出土遺物の年代観と比較し、大きな矛盾はない。

**3010d溝(第120・121図、第11・27表、図版33・68・88・89)**

調査区西側9F-9h・10hグリッドにおいて、I層直下、V層上面で検出した溝である。遺存状態は悪く、東側は3010c溝に切られ、西側は3010a溝に切られる。やや蛇行するものの概ね直線的な平面ブ

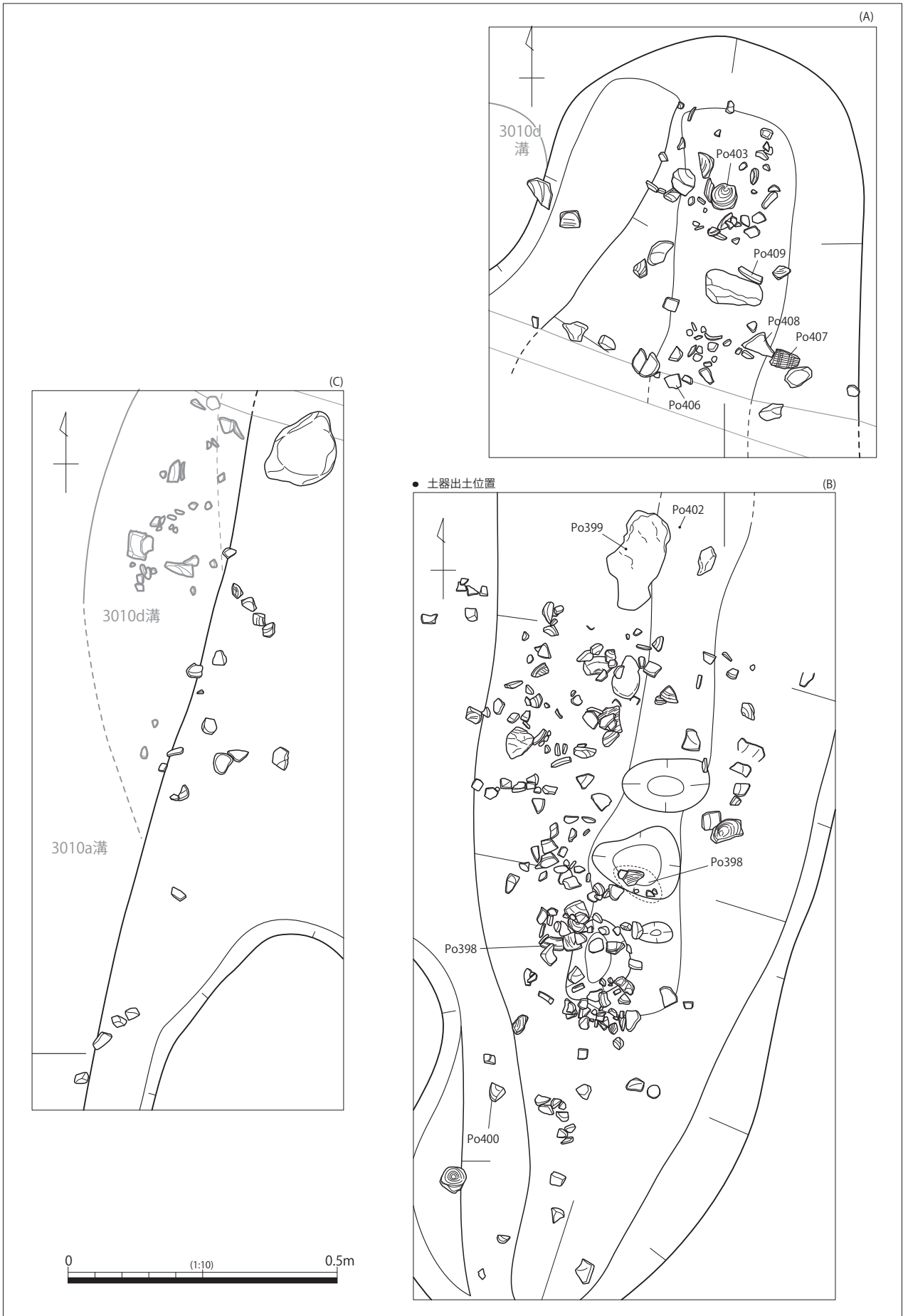
し、底面には小ピット状の浅い窪みが認められる。埋土は2層に分層でき、1・2層とも黒褐色シルトが堆積する(第117図)。

遺物は土師器、須恵器を主体とし、貿易陶磁、拳大から人頭大の自然礫が1層を中心に出土している。土器は破片の状態出土しており、完形に復元できる個体はみられない。接合する破片はある一定のまとまりをもって出土し、広範囲に拡散する状況にはない。図化した遺物は第119図に掲載している。Po396~400は回転台成形の土師器皿、Po402は坏、Po401・403は柱状高台である。皿は底部から口縁部が直線状に立ち上がるPo396、口縁部が内湾するPo397・400、扁平で立ち上がりが短いPo398・399が認められる。Po402はやや大型の坏底部で、器壁が厚い。Po401は柱状高台の坏部、Po403は裾部が張り出し、中位で内湾して開く柱状高台の高台部である。Po404・405は土師器甕の口縁部であり、前者は体部がほぼ直線的に立ち上がる。

Po407~409は須恵器甕で、外面に平行タタキ、内面に車輪状当て具痕が残る。Po406は玉縁口縁をもち器壁が薄い白磁碗Ⅱ1類である。

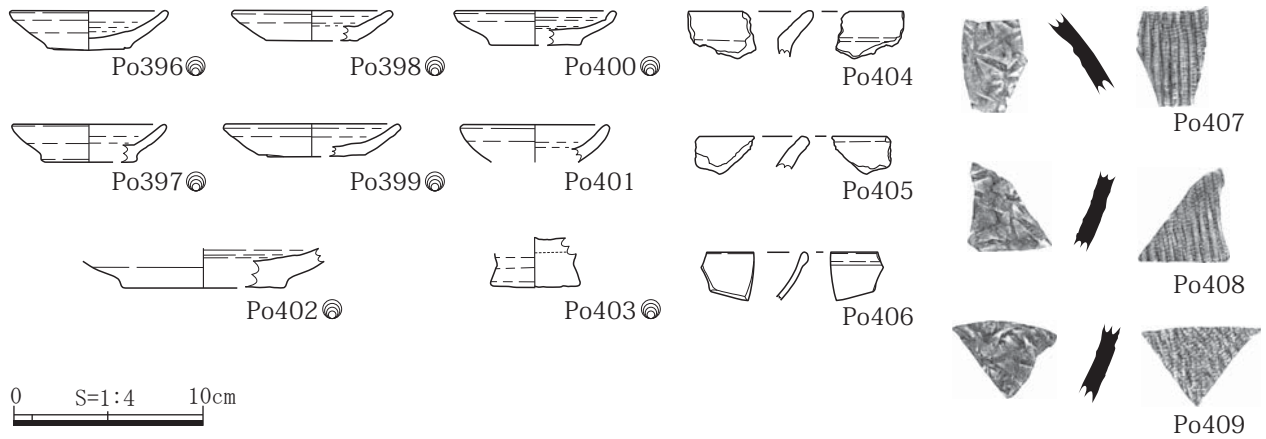
本溝の帰属時期は、出土遺物から判断し、11世紀後葉から12世紀前葉と考えられる。



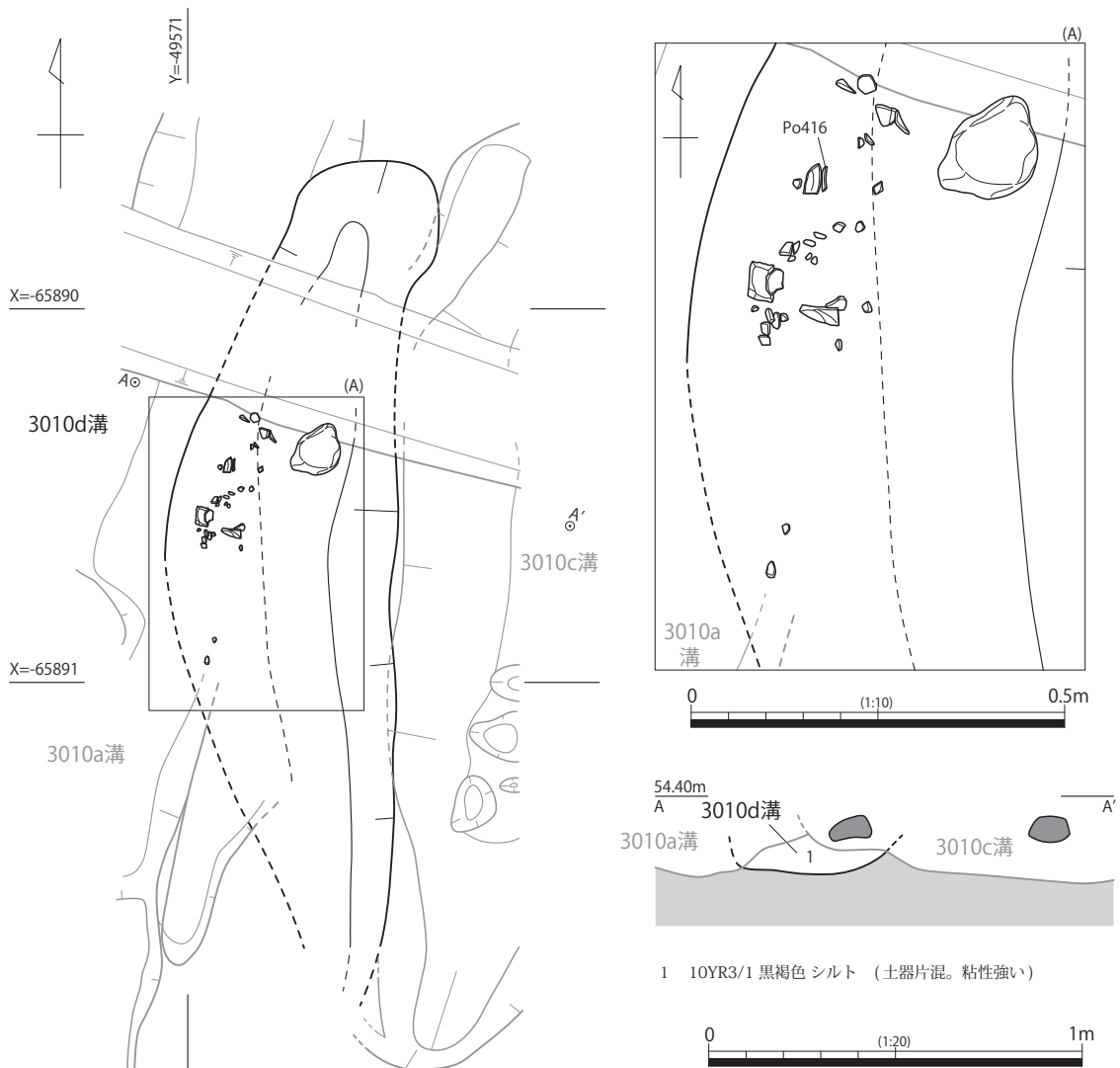


第118図 3010c溝遺物出土状況

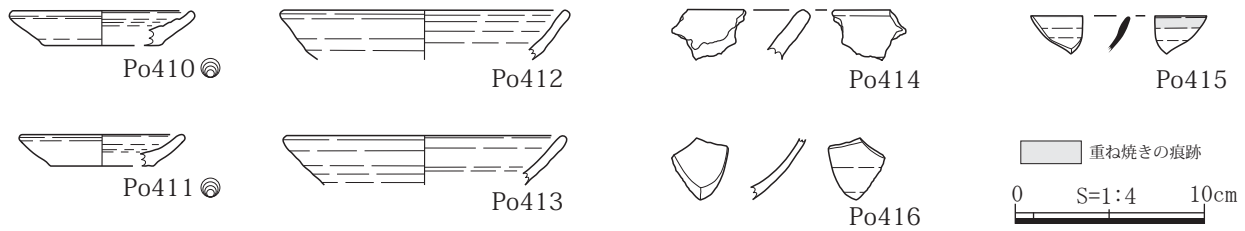
ランを呈し、南端は削平される。主軸はN-10° -Eにとる。検出された範囲の規模は全長が2.1m、幅は0.40~0.60m、検出面からの深さは0.12mを測る。底面レベルは南端が54.19m、北端が54.13mであり、比高差は0.06mである。断面形は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色シルトの単層である(第120図)。



第119図 3010c溝出土遺物



第120図 3010d溝



第121図 3010d溝出土遺物

遺物は土師器を主体とし、須恵器、貿易陶磁、拳大から人頭大の自然礫が出土している。土器は破片の状態出土しており、完形に復元できる個体はみられない。図化した遺物は第121図に掲載している。Po410～413は回転台成形の土師器である。Po410・411は皿であり、いずれも扁平で立ち上りが短い。Po412・413は坏であり、体部が直線的で口径が広い。Po414は土師器甕の口縁部で、外面に煤が付着する。

Po415は須恵器の坏である。器壁が薄く重ね焼きの痕跡が残る。Po416は白磁碗Ⅱ類の可能性がある体部。

本溝の帰属時期は、出土遺物から判断し、11世紀後葉から12世紀前葉と考えられる。

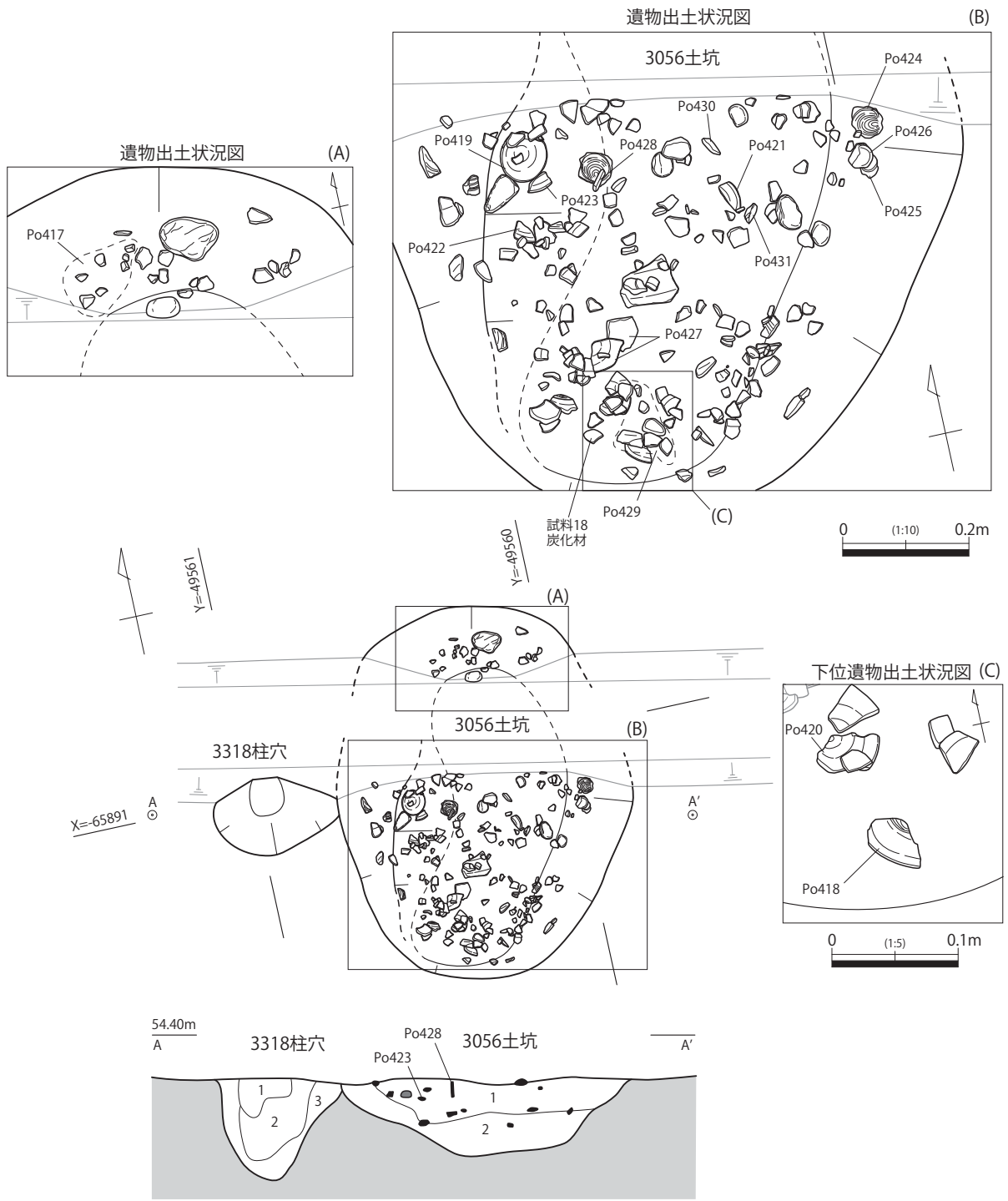
### 3056土坑(第122・123図、第11・27表、図版36・59・68・88・89)

調査区南西9F-10f・10gグリッドにおいて、Ⅳ層上面で検出した土坑である。平面は不整楕円形、断面形は播鉢状を呈している。北寄りで長さ約0.9m、幅約0.3mにわたり暗渠によって削平され、西側で3318柱穴を切っている。残存規模は長軸1.18m、短軸0.94m、検出面からの深さは0.24mを測る。埋土は2層に分層でき、灰黄褐色シルトと黒色シルトがレンズ状に堆積する(1・2層)。1・2層は多量の炭化物を含み、1層を中心に破碎された多数の土器片や小礫が出土した。これらの出土状況から、本遺構は廃棄土坑と考えられる。

遺物を第123図に示す。Po417～427・429は回転台成形の土師器である。Po417～421・423は皿で、底部から口縁部が直線状に外傾するPo417～419、器高が高く小型の坏のような形状のPo420がみられる。Po427は坏底部で、体部が内湾しながら開く。Po429は高台付坏で、器壁が厚く高台部が「ハ」の字状に開く。Po422・424～426は柱状高台である。Po422は坏部の器高が浅く、口径が広く開く。Po424～426は柱部であり、中位で内湾してから開く。Po428は瓦質土器鉢の口縁部で、端部が僅かに肥厚する。Po430は須恵器の鉢であり、口縁端部が平坦である。Po431は白磁皿の底部でⅡ類もしくはⅢ類に比定される。また、小片のため図化していないが、1層からCP20(図版59-3)が出土している。CP20は片側に平坦面を有する被熱粘土塊である。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

なお、本遺構埋土から出土した炭化材(試料18)について樹種同定を行った結果、カエデ属と同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD1081-1152(暦年較正2σの確立1位)の値が得られた(第5章第1節参照)。出土している土器年代観と概ね一致した値が得られている。



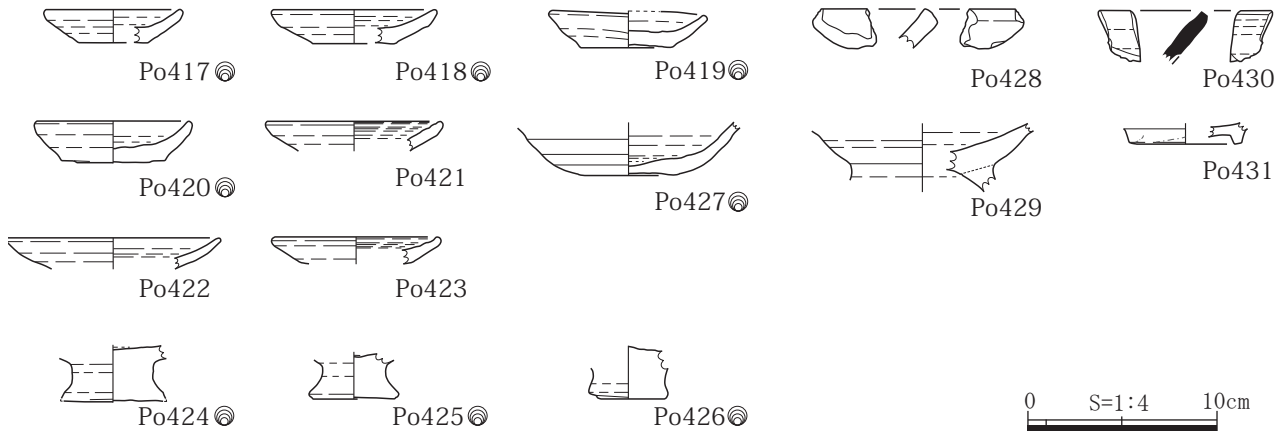
3318 柱穴

- 1 10YR6/2 灰黄褐色 シルト (炭化物径 1cm 混。縮り弱い。粘性弱い)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト  
(10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック径 1 ~ 2cm 混。炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中。柱痕)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 シルト  
(10YR7/4 にぶい黄褐色シルト炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)

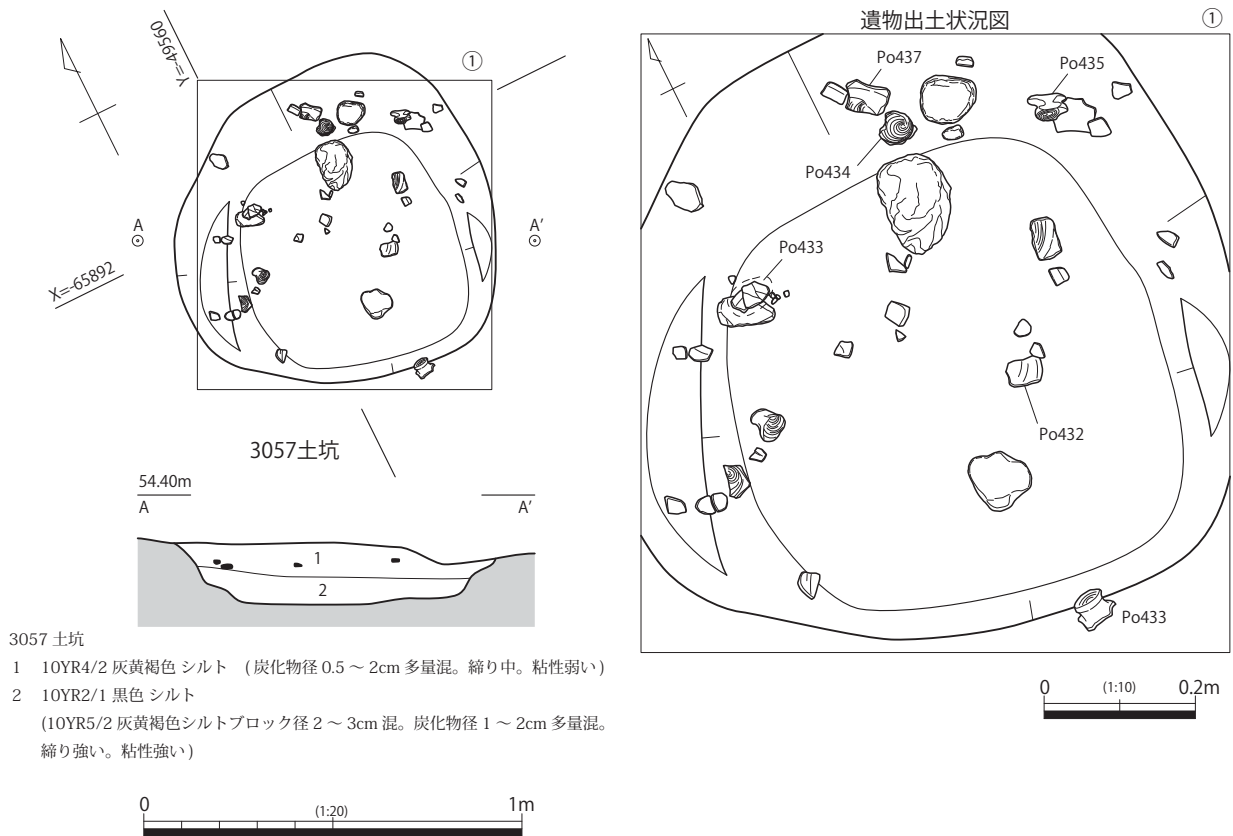
3056 土坑

- 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト (炭化物径 0.5 ~ 2cm 多量混。縮り中。粘性弱い)
- 2 10YR2/1 黒色 シルト  
(10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径 2 ~ 3cm 混。炭化物径 1 ~ 2cm 多量混。縮り強い。粘性強い)

第122図 3056土坑



第123図 3056土坑出土遺物



- 3057 土坑
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭化物径0.5~2cm 多量混。締り中。粘性弱い)
  - 2 10YR2/1 黒色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径2~3cm 混。炭化物径1~2cm 多量混。締り強い。粘性強い)

第124図 3057土坑

3057土坑(第124・125図、第11・27表、図版36・68)

調査区南西9F-10f・10gグリッドにおいて、IV層上面で検出した土坑である。平面形は不整円形、断面形は逆台形を呈している。規模は長軸0.87m、短軸0.85m、検出面からの深さは0.16mを測る。埋土は灰黄褐色シルトと黒色シルトが堆積する(1・2層)。1・2層は多量の炭化物を含み、破碎された多数の土器片や小礫が1層を中心に出土した。これらの出土状況から、本遺構は廃棄土坑と考えられる。

出土遺物は第125図に掲げる。遺物は回転台成形の土師器Po432~437である。Po432は皿で、底部

から口縁部まで直線的に外傾する。Po436・437は坏であり、前者は器高が高く逆台形状を呈する。後者は底部から体部が緩やかに内湾している。Po433～435は柱状高台である。Po433・434は高台部が一旦内湾して開く形状となり、Po435は裾端部が一段高い。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**3259土坑(第126図、第11・27・28・44表、図版37・59・68)**

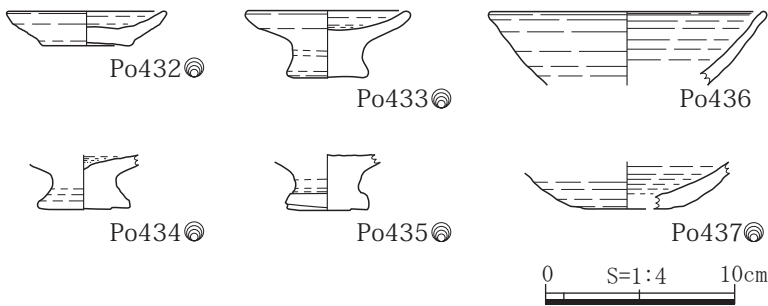
調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した土坑である。平面形は不整楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。規模は長軸1.44m、短軸1.20m、検出面からの深さは0.10mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。性格は不明。

出土遺物は第126図に図示している。Po438～440は回転台成形の土師器である。Po438・439は柱状高台で、前者は坏部、後者は柱部である。Po439は焼成前に底部から坏部の間に穿孔がなされており、底径も他と比較して広い。Po440は坏で器高が低く内湾しながら口縁部へ立ち上がる形状である。CP4は径1.6cmの円盤状の土製品である。

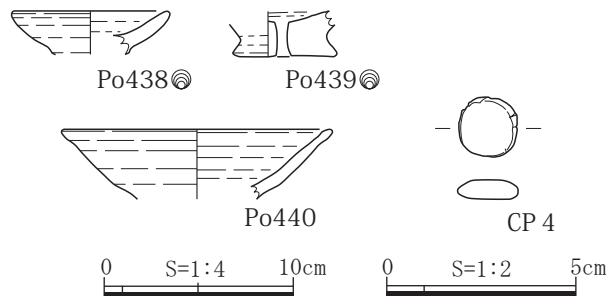
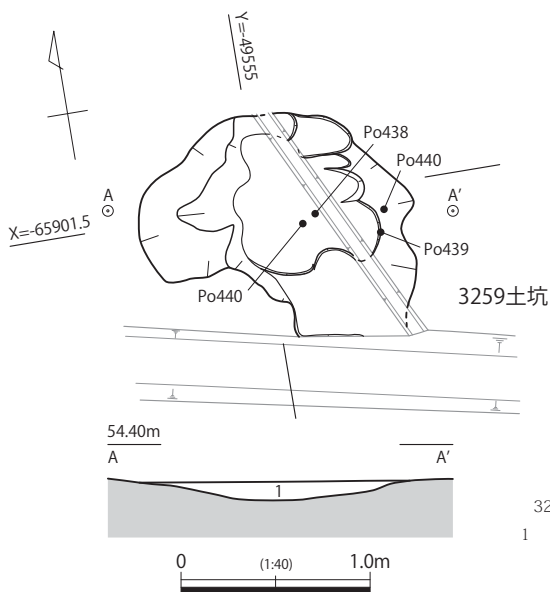
本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

**3268土坑(第127図、第11表)**

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した土坑である。北寄り暗渠によって幅約0.3m削平されている。平面形は不整楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。規模は長軸1.10m、短軸1.00m、検出面からの深さは0.08mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層で

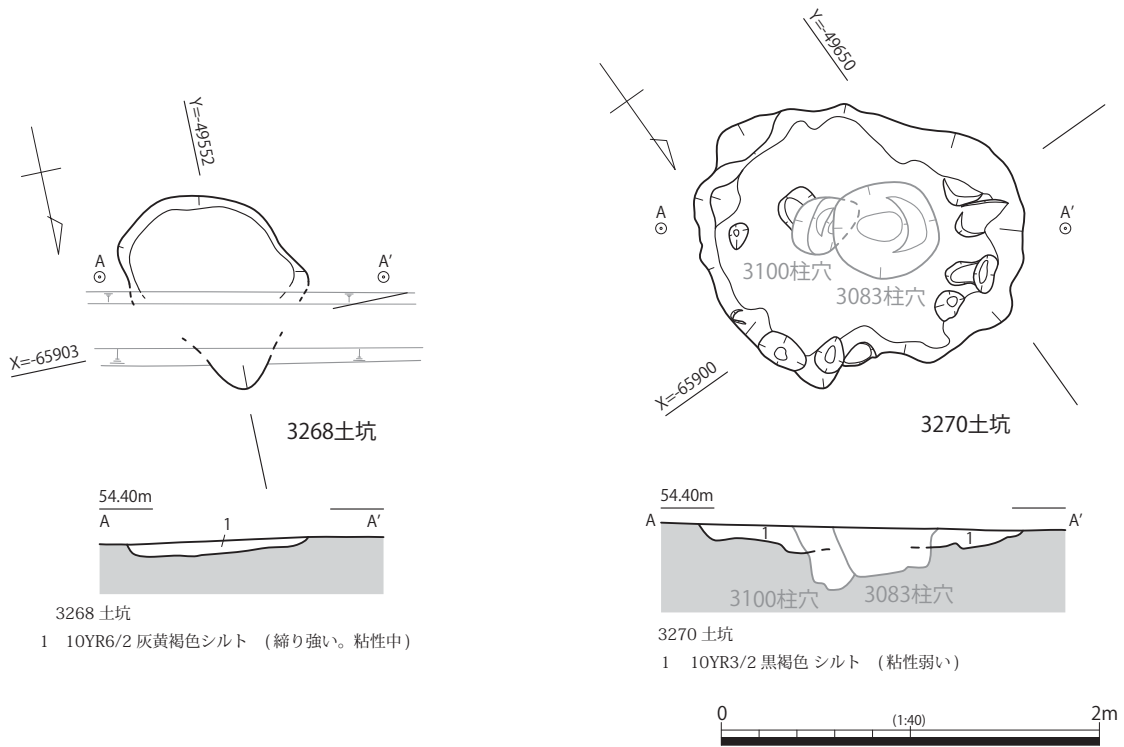


第125図 3057土坑出土遺物



3259土坑  
1 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径2～3cm混。炭化物径1cm混。締り中。粘性中)

第126図 3259土坑・出土遺物



第127図 3268・3270土坑

ある。性格は不明。なお、平面形、規模、埋土の特徴は平成28年度調査区950土坑に類似する。

本遺構の時期は、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

### 3270土坑(第127図、第11表、図版37)

調査区南西9F-10f、10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した土坑である。中心部を掘立柱建物12の3083・3100柱穴に切られている。平面形は不整楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。規模は長軸1.72m、短軸1.50m、検出面からの深さは0.14mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。性格は不明。

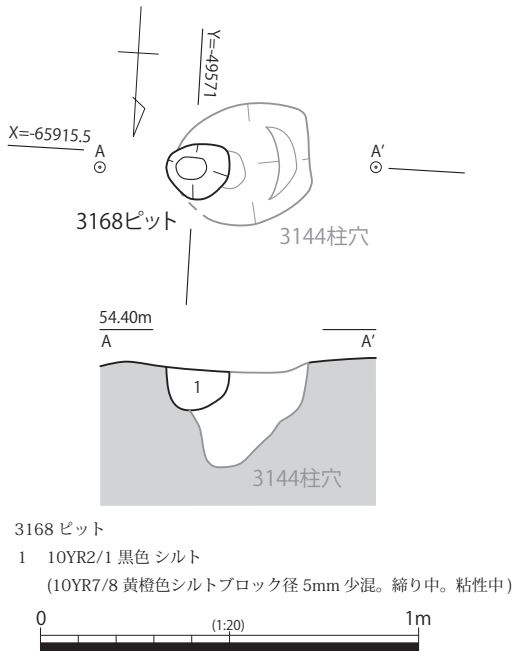
本遺構の時期は、掘立柱建物12との重複関係から12世紀中葉以降と考えられる。

### 第2遺構面に帰属する柱穴・ピット(第128～136図、第11・12・28表、図版38～40・50・56・57・69)

第2遺構面で検出した柱穴・ピット、または埋土の特徴(Ⅲ-2層に由来する埋土)から第2遺構面に帰属すると判断した柱穴・ピットについて報告する。本来は建物を構成する柱穴等、または建物に関連する柱穴等であると考えが、それを明確にはできていない。以下、各柱穴・ピットの詳細を報告する。

### 3168ピット(第128図、第11表)

調査区南西10F-2hグリッドにおいて、VII層上面で検出したピットである(N-N'ライン)。3146土坑及び掘立柱建物13の3144柱穴を切っている(第147図)。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.16m、短軸0.14m、検出面からの深さ0.11mを測る。埋土は黒色シルトの単層である。



第128図 3168ピット

これらは柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

### 3203柱穴(第129図、第11表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

### 3206柱穴(第129図、第11表、図版38)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.25mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層から長軸0.25m、厚さ0.1mの扁平礫が出土している。礎盤石として使用された礫が柱抜き取り後、埋め戻されたものと考えられる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

### 3207柱穴(第129図、第11表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.60mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

### 3208柱穴(第129図、第11表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模

### 3200ピット(第129図、第11表)

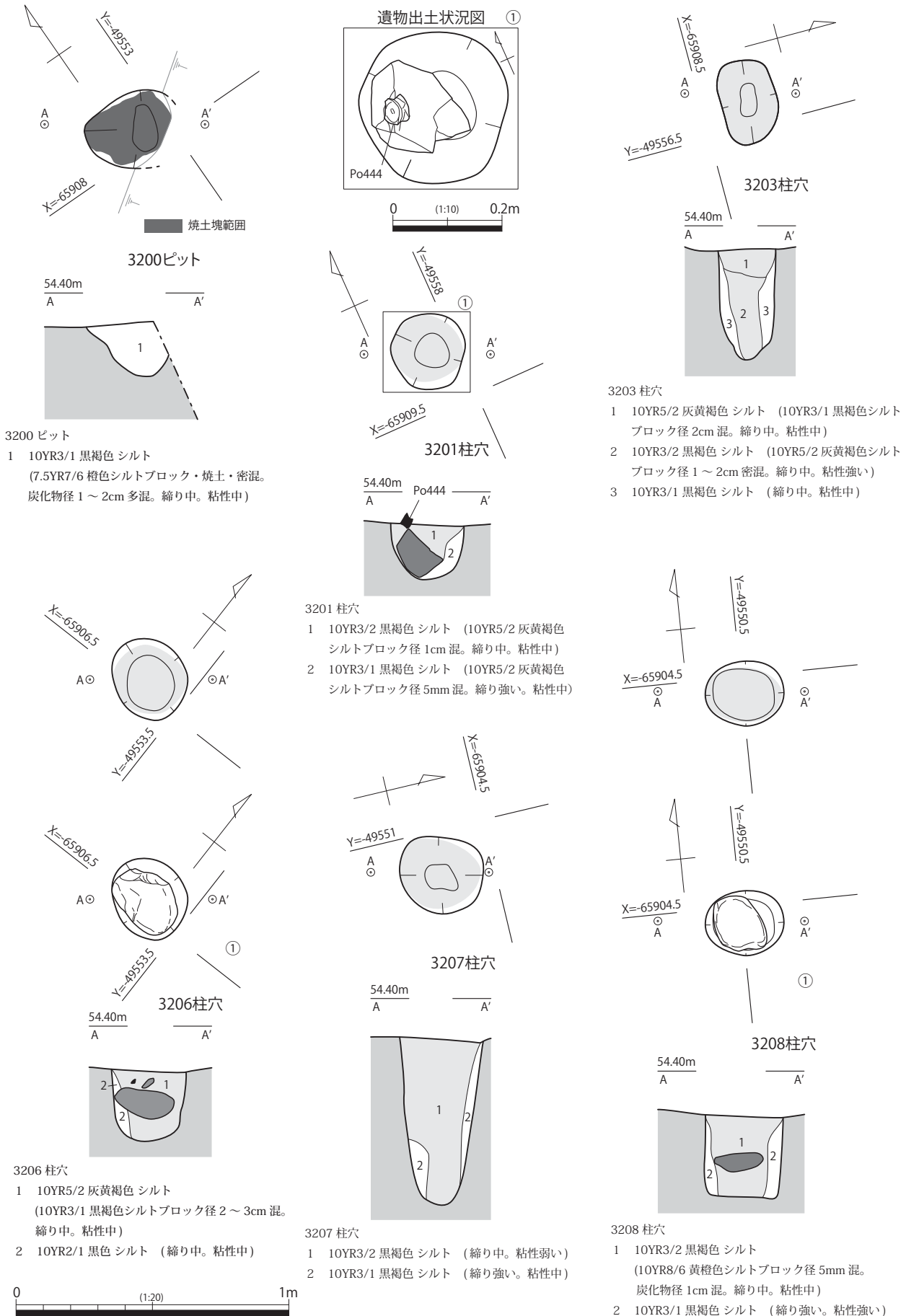
調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した小穴である。平面形は不整楕円形を呈し、東側は調査区外で削平されている。残存規模は長軸0.33m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層であり、焼土塊、炭化物を多く含む。

時期は不明である。

### 3201柱穴(第129図、第11・28表、図版38)

調査区南西10F-1fグリッドにおいて、IV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層が堆積する。1層より長軸0.17mの礫が出土したほか、土師器柱状高台Po444が出土している。Po444は幅広の高台部





第129図 3200・3201・3203・3206~3208柱穴

は長軸0.29m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.30mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層から長軸0.23m、厚さ0.06mの扁平礫が出土している。礎盤石として使用されていた礫が柱抜き取り後、埋め戻されたものと考えられる。。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3214柱穴(第130・136図、第11・28表、図版38・69)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.26m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.09mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

遺物は、1層から須恵器壺底部Po455が出土している。内外面ナデ調整が施され、底面が若干上げ底状を呈している。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3225ピット(第130・136図、第11・28表、図版69)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した小穴である。平面形は円形を呈し、規模は直径約0.29m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。

遺物は埋土から土師器杯の底部Po448が出土している。器形は、底面から体部に向かって緩やかに立ち上がる。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3228柱穴(第130図、第11表、図版38)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.29m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.31mを測る。埋土は柱痕跡1層と掘方埋め土2・3層からなり、1層から直径0.08m、長さ0.15mの柱根が出土している。樹種同定の結果イヌガヤと同定され、放射性炭素年代測定の結果、calAD870-calAD982(2 $\theta$ の確率1位)の値が得られている(第5章第1節参照)。遺物は小片のため図化していないが、本遺構より出土した土器の年代観より、古い年代値が得られている。

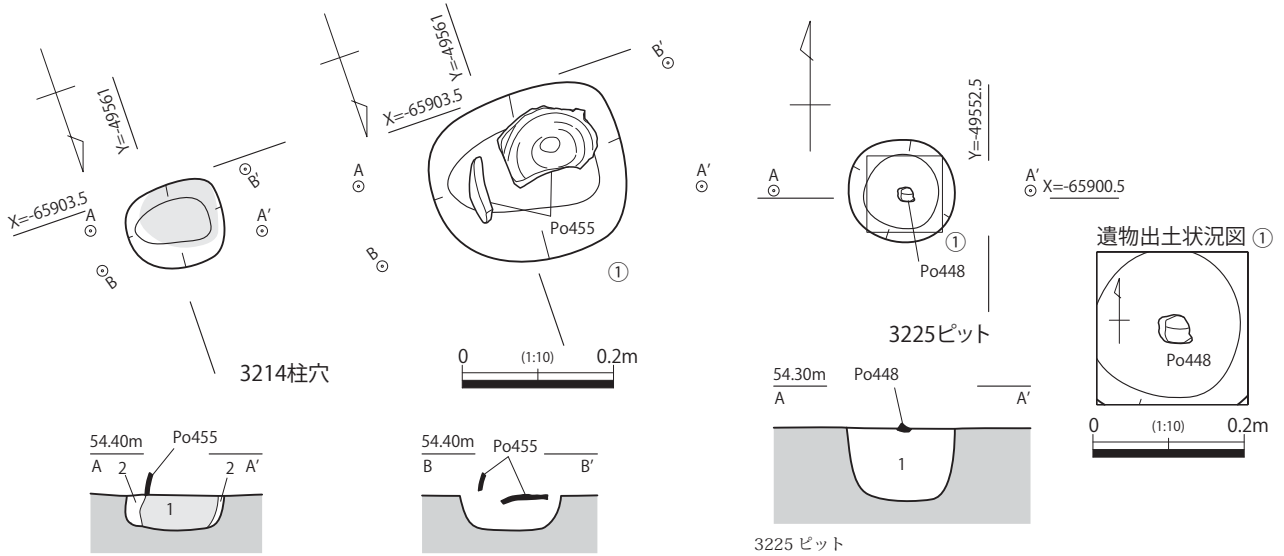
#### 3230柱穴(第130図、第11表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.29m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3254柱穴(第130図、第11表、図版38)

調査区南西9F-10fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.33m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.45mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層上面には、長軸0.25m、短軸0.16m、厚さ0.12mの大礫が置かれていた。

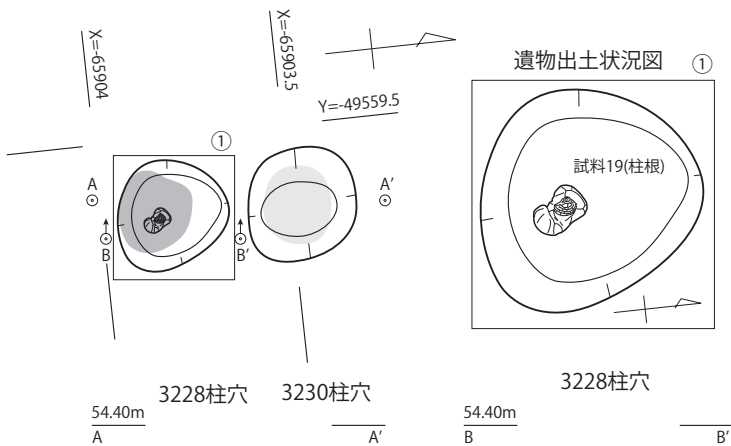


3214 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR8/6 黄褐色シルトブロック径 1cm 混。縮り中。粘性中)

3225 ピット

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック径 1cm 混。縮り中。粘性中)

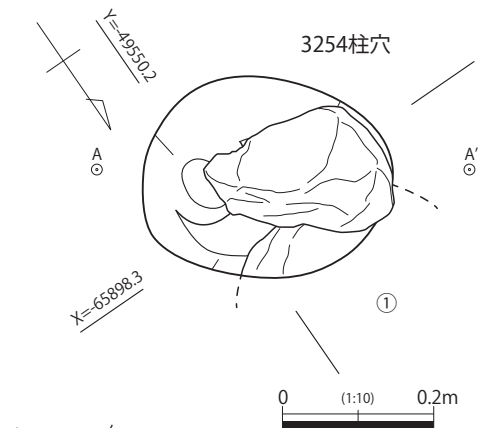
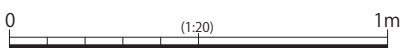


3228 柱穴

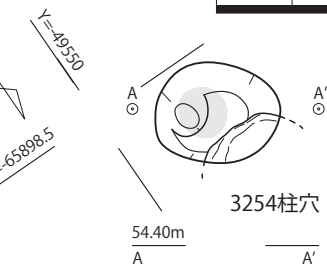
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト (10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 5cm 混。縮り中。粘性中)
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト (縮り中。粘性中)

3230 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR2/1 黒色シルト (縮り中。粘性中)



3254 柱穴



3254 柱穴

3254 柱穴

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト (縮り弱い。粘性弱い)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト (10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック径 2~3cm 混。縮り中。粘性中)

第130図 3214・3228・3230・3254柱穴、3225ピット

底面には地山に含まれる大型礫が確認されている。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3256柱穴(第131図、第11表、図版39)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は円形を呈し、北側を3258柱穴に切られている。残存規模は長軸0.23m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3257柱穴(第131図、第11表、図版39)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整形円形を呈し、東側で3258柱穴を切っている。規模は長軸0.24m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.23mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。1層下部には礎盤石と考えられる長軸0.14m、短軸0.11mの扁平礫が認められる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3258柱穴(第131図、第11表、図版39)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整形円形を呈し、南側で3256柱穴を切り、西側で3257柱穴に切られている。残存規模は長軸0.23m、短軸0.12m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。1層下部には礎盤石と考えられる長軸0.14m、短軸0.11mの扁平礫が認められる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3261柱穴(第131・136図、第11・28表、図版39・56・57・69)

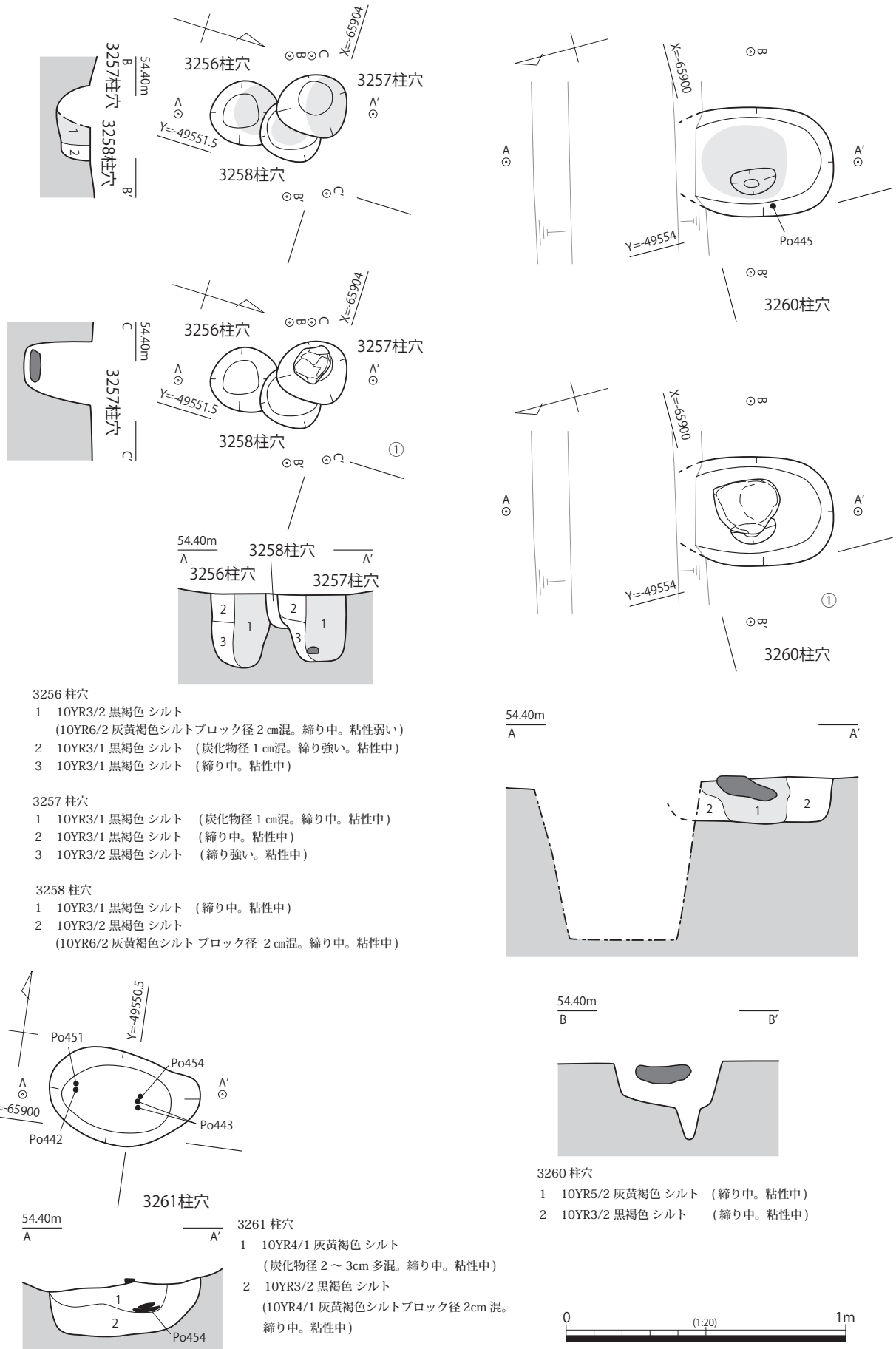
調査区南西9F-10f、10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整形楕円形を呈し、規模は長軸0.54m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.18mを測る。埋土は1層の灰黄褐色シルトと2層の黒褐色シルトが堆積し、1層から多数の土器と炭化物が出土している。

遺物は1層から出土した土師器皿Po442・443、坏Po451、須恵器甕Po454を凶化した。Po442は底部から口縁部が直線状に外傾している。Po443は扁平で口縁部の立ち上がりが短い。Po451は口径が広く、口縁部が直線的に外傾している。Po454は肩部であり、外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3260柱穴(第131・136図、第11・28表、図版39・69)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、北側が暗渠によって削平されている。残存規模は長軸0.50m、短軸0.39m、検出面からの深さ0.17mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層上部から直径0.19~0.23mの扁平礫が出土している。礎盤石として使用された礫が、柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられ



第131図 3256~3258・3260・3261柱穴

る。

遺物は、2層から土師器柱状高台Po445が出土している。Po445は裾部が僅かに張り出し、中位で括れる。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3264柱穴(第132図、第11・44表、図版59)

調査区南西9F-10eグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.29m、短軸0.27m、検出面からの深さ0.62mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。

遺物は小片のため図化していないが、被熱粘土塊CP18(図版59-3)が出土している。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3265柱穴(第132図、第11表)

調査区南西9F-10eグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.32m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.44mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3271柱穴(第132図、第11表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.36m、短軸0.33m、検出面からの深さ0.39mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3272柱穴(第132図、第11表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.38m、短軸0.37m、検出面からの深さ0.32mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

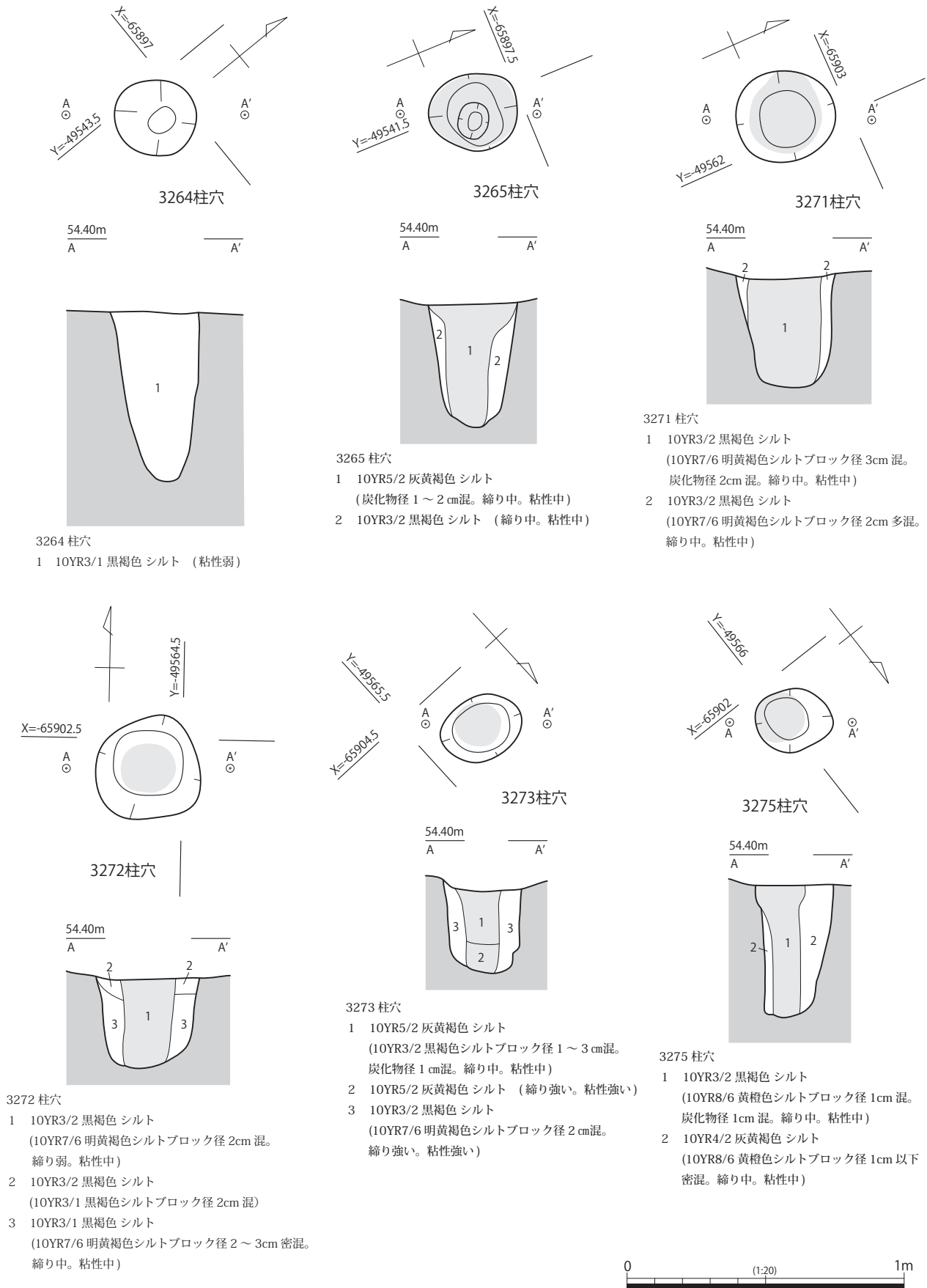
#### 3273柱穴(第132図、第11表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.29mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3275柱穴(第132図、第12表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.47mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘



第132図 3264・3265・3271~3273・3275柱穴

方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3278柱穴(第133図、第12表)

調査区南西9F-10gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.23m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3282柱穴(第133図、第12表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.23m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3292柱穴(第133・136図、第12・28表、図版69)

調査区南西9F-10hグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.28m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.11mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

遺物は、1層から土師器坏Po447が出土している。器形は体部から口縁部が外傾して立ち上がる。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3294柱穴(第133図、第12表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.25m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.33mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3297柱穴(第133図、第12表、図版39)

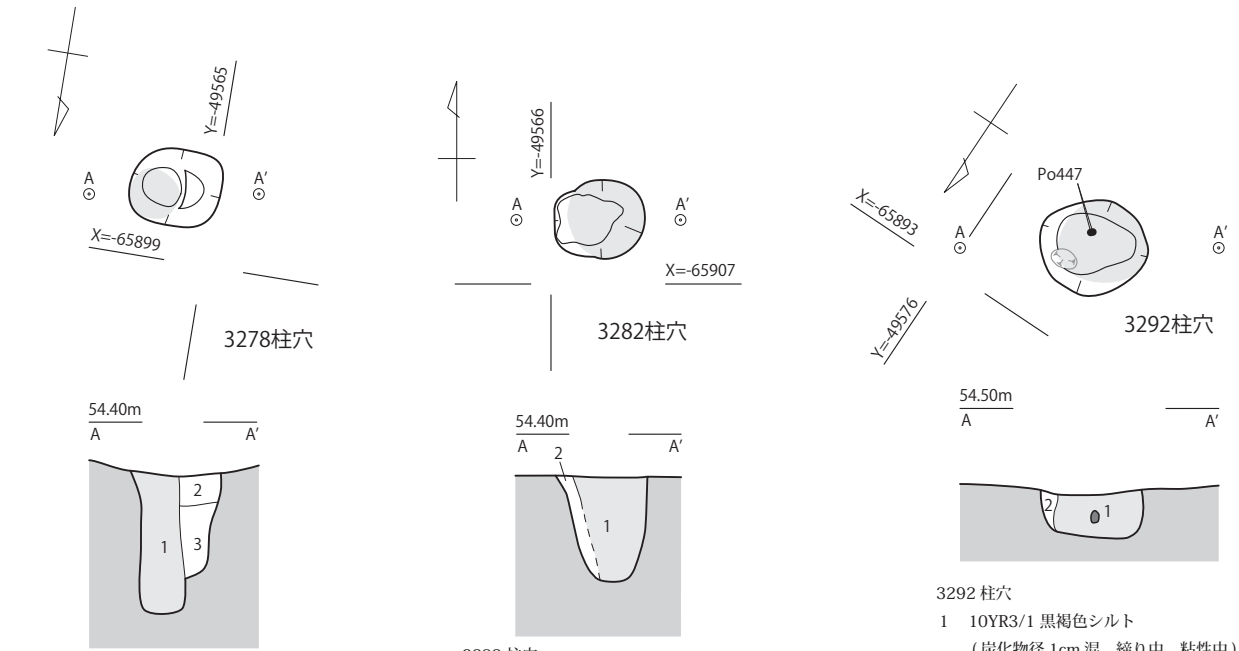
調査区南西10F-1fグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.31m、短軸0.15m、検出面からの深さ0.24mを測る。埋土は柱痕跡1層と掘方埋め土2層からなり、1層から直径0.05m、長さ0.17mの柱根が出土している。柱根は腐食が進み、遺存状況は不良である。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3298柱穴(第133・136図、第12・28表、図版39・69)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈し、北側を3299柱穴に切られる。残存規模は長軸0.18m、短軸0.13m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋





3278 柱穴

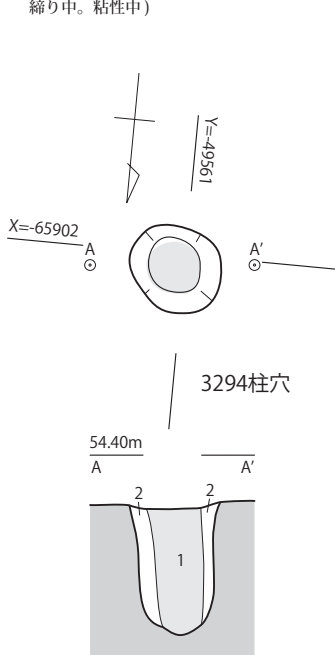
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (縮り弱。粘性弱)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 2~3cm 混。  
炭化物径 1cm 以下混。縮り中。粘性中)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 密混。  
縮り中。粘性中)

3282 柱穴

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト  
(炭化物径 1cm 以下混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(2.5Y7/6 明黄褐色シルトブロック径 2cm 混)

3292 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト



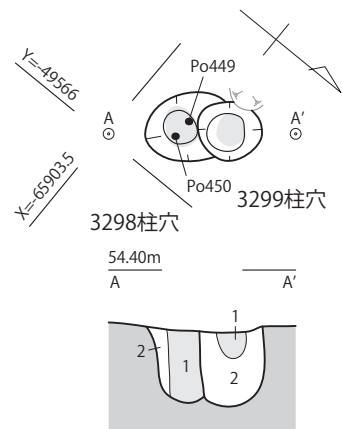
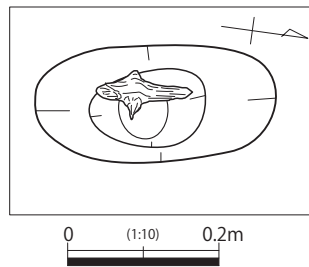
3294 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 2cm 混。  
縮り中。粘性弱い)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 密混。  
縮り中。粘性中)

3297 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(炭化物径 1cm 混。縮り弱い。粘性弱い)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト (縮り中。粘性中)

遺物出土状況図 ①

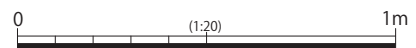


3298 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 1cm 混。  
縮り中。粘性中)

3299 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 1cm 混。  
縮り中。粘性中)



第133図 3278・3282・3292・3294・3297~3299柱穴

土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

遺物は、1層から土師器坏Po449・450が出土している。いずれも体部から口縁部が直線的に立ち上がる器形である。

本遺構の時期は、出土土器から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3299柱穴(第133図、第12表、図版39)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、南側で3298柱穴を切る。規模は長軸0.17m、短軸0.15m、検出面からの深さ0.20mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3304柱穴(第134図、第12表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.3m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.34mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1・2層と掘方埋め土の3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3306柱穴(第134図、第12・44表、図版59)

調査区南西10F-2fグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.25m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.36mを測る。埋土は褐灰色シルトの単層である。

遺物は埋土から漆膜とみられるCP19(図版59-3)が出土している。小片のため図化はしていない。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3310柱穴(第134図、第12表)

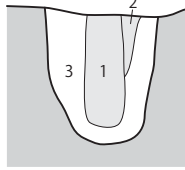
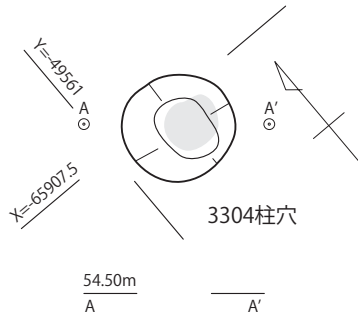
調査区南西10F-2gグリッドにおいてⅧ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.23m、検出面からの深さ0.42mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3314柱穴(第134・136図、第12表、図版40)

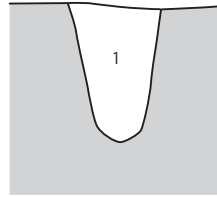
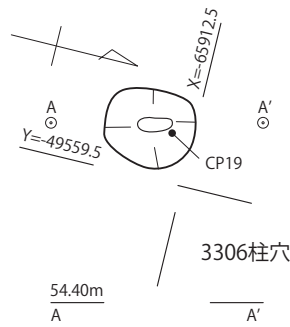
調査区南西10F-1gグリッドにおいてV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.23m、短軸0.19m、検出面からの深さ0.22mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層上部には多数の土器が重なるように埋置されていた。

遺物は、1層から出土した須恵器壺Po452・453を図化した。いずれも口縁部が大きく開き、ナデ肩の器形を呈する。内外面丁寧にナデが施される。なお、抜き取り痕跡から出土した須恵器片がⅢ-1層上面で検出している掘立柱建物12の656柱穴(第25図)出土須恵器壺Po51と接合する。本遺構はV層上面で検出しているが、掘立柱建物12の656柱穴埋土と類似していることから、本来の掘り込み面



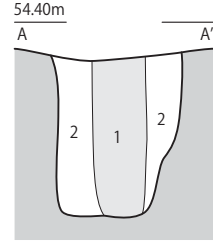
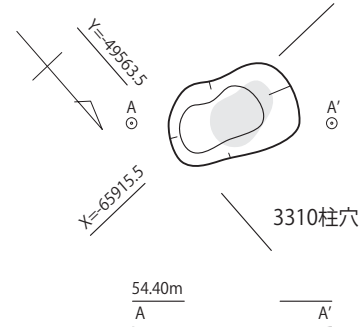
3304 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 5mm 以下混。  
炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1～2cm 密混。  
縮り中。粘性中)
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 2～3cm 混。  
縮り中。粘性中)



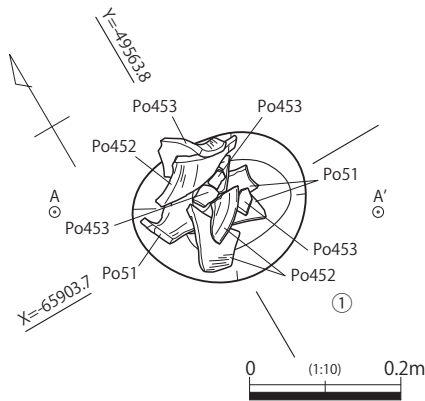
3306 柱穴

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト  
(10YR3/2 黒褐色シルトブロック径 2～3cm 混。  
炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)

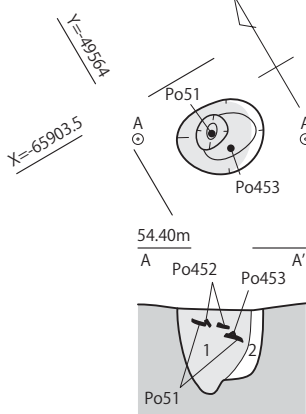


3310 柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト  
(10YR7/6 明黄褐色シルトブロック径 5mm 混。  
縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR3/1 黒褐色シルトブロック径 2～3cm 多混。  
縮り中。粘性中)



3314 柱穴



3314 柱穴

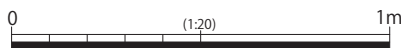
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR8/6 黄褐色シルトブロック径 1cm 混。縮り中。粘性中)

3315 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 2～3cm 多混。炭化物径 1cm 混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト  
(2.5Y8/6 黄色シルトブロック径 1cm 少混。10YR2/1 黒色シルトブロック径 2～4cm 混。縮り中。粘性中)

3317 柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト  
(10YR6/2 灰黄褐色シルトブロック径 1cm 混。炭化物径 1～2cm 多混。縮り中。粘性中)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト (縮り中。粘性中)



第134図 3304・3306・3310・3314・3315・3317柱穴

は上層のⅢ-1層であった可能性がある。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3315柱穴(第134図、第12表)

調査区南西10F-1gグリッドにおいてⅣ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.24m、短軸0.20m、検出面からの深さ0.43mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3317柱穴(第134・136図、第12・28表、図版39・69)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてⅢ-2層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.24m、短軸0.22m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなる。

遺物は、1層から土師器皿Po441が出土している。器形は底部から口縁部が直線状に外傾する。内外面に油煙が付着していることから、灯明皿として使用されたものであろう。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後半から12世紀中葉と考えられる。

#### 3326柱穴(第135図、第12表)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてⅣ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.36m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.26mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2・3層からなる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3327柱穴(第135図、第12表、図版40)

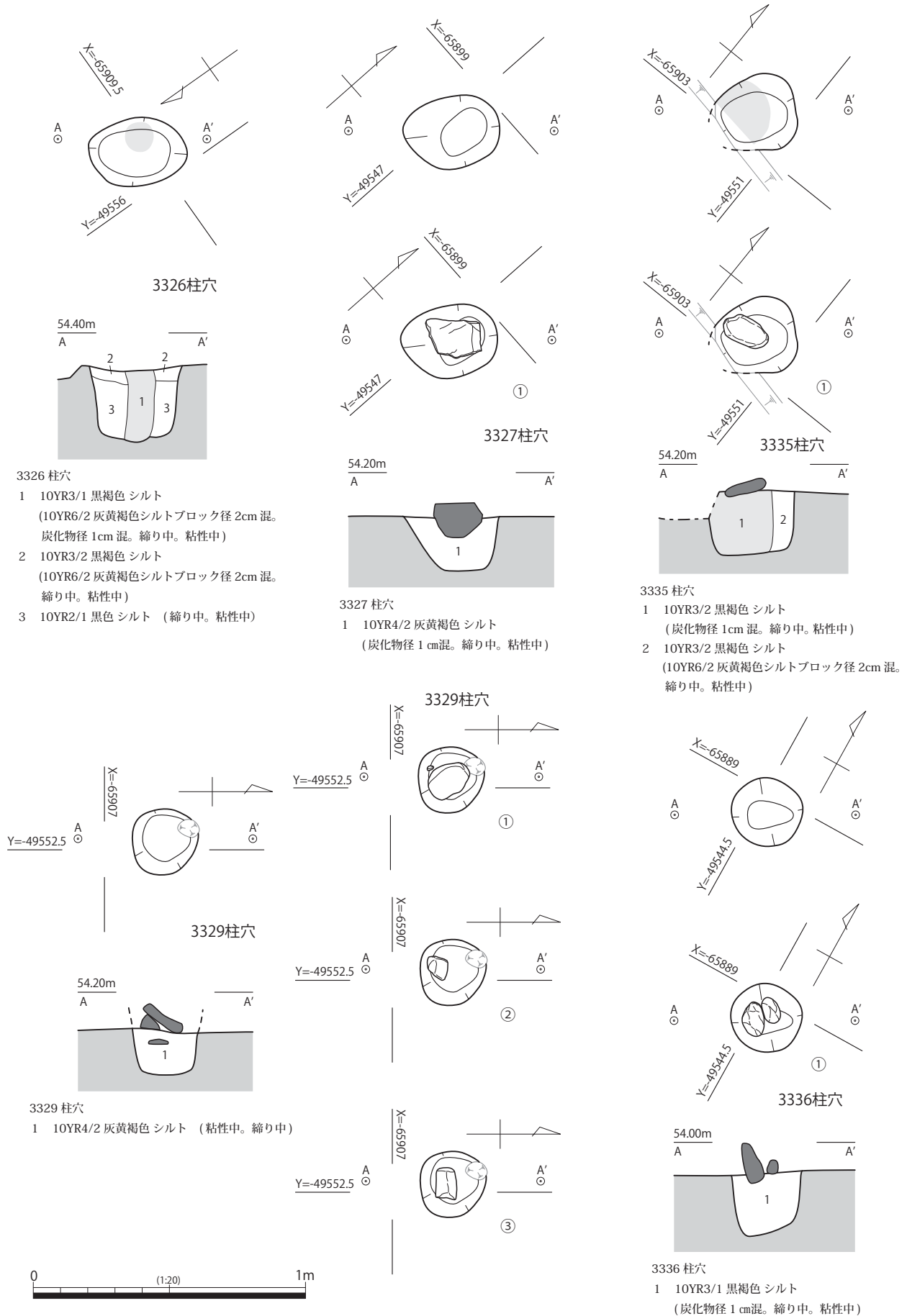
調査区南西9F-10eグリッドにおいてⅣ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.35m、短軸0.26m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。埋土上面から長軸0.19m、厚さ0.12mの角礫が出土している。礎盤石等として使用された礫が、柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

#### 3335柱穴(第135図、第12表、図版40)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてⅣ層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、南側は暗渠によって削平されている。残存規模は長軸0.30m、短軸0.28m、検出面からの深さ0.23mを測る。埋土は柱抜き取り痕跡の1層と掘方埋め土の2層からなり、1層上面から長軸0.17m、厚さ0.04mの扁平礫が出土している。扁平礫は礎盤石もしくは根巻石と想定され、柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。



第135図 3326・3327・3329・3335・3336柱穴

3329柱穴(第135・136図、第12・28表、図版40・69)

調査区南西10F-1fグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。掘方上半は大きく削平を受けている。平面形は不整円形を呈し、残存規模は長軸0.26m、短軸0.24m、検出面からの深さ0.16mを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。検出面で長軸0.08~0.17m、厚さ0.03~0.05mの礫が重なって出土している。礫は根巻石と想定され、柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

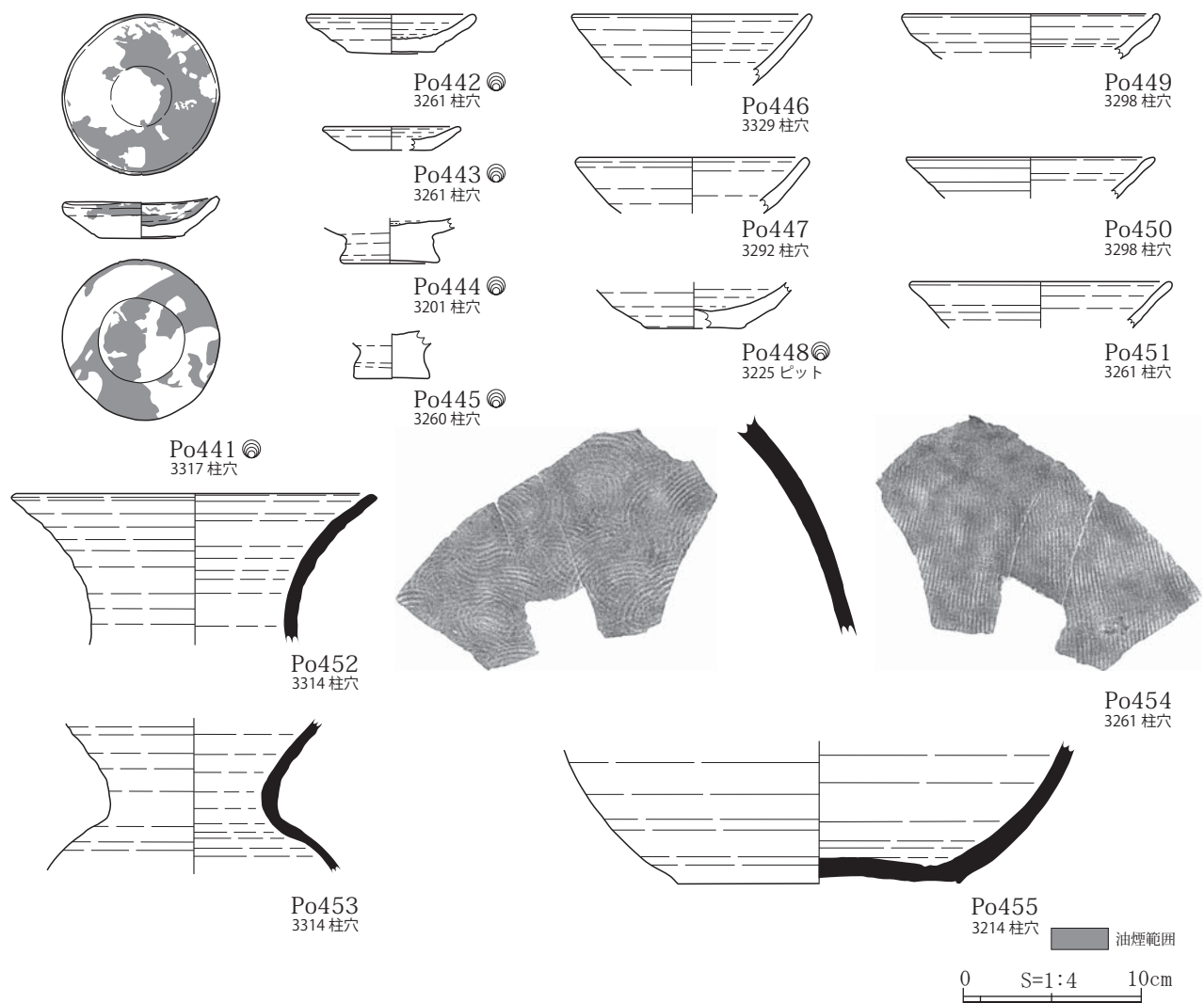
遺物は埋土から土師器坏Po446が出土している。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。

3336柱穴(第135図、第12表、図版40)

調査区南西9F-9eグリッドにおいてIV層上面で検出した柱穴である。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸0.26m、短軸0.25m、検出面からの深さ0.23mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。埋土上面で長軸0.1~0.15m、厚さ0.04~0.07mの礫が確認された。根巻石として使用された礫が柱抜き取り後に埋め戻されたものと考えられる。

本遺構の時期は、埋土の特徴から11世紀後半以降と考えられる。



第136図 第2遺構面柱穴・ピット出土遺物

第11表 第2遺構面遺構計測表(1)

(△: 残存値)

No.	地区T45-6j-	規模(m)			底面の標高(m)	主軸方位	備考
		長さ	幅	深さ			
3010a	9F-9g・9h・10h	△11.0	0.4~0.8	0.12	北端: 54.20	N-10° -E	南北に軸を持ち直線的に伸びる。北側は削平、3010b・c・d溝を切る、土師器Po214~266(皿・柱状高台・坏・高台付坏・甕)、須恵器Po269~276(鉢・片口鉢・甕)、白磁Po267・268・954・961・962(碗・壺)、殿石S1、土製基石CP2が出土、炭化材(試料12)
					南端: 54.27		
3010b	9F-9g・9h・10h	△16.7	0.8~1.1	0.10~0.14	北端: 54.14	N-19° -E	南北に軸を持ち直線的に伸びる。北側は削平、3010a溝に切られる、土師器Po277~367・369(皿・柱状高台・坏・高台付坏・甕)、須恵器Po371・372・380~395(碗・坏・甕)、初期備前焼Po370、白磁Po373~377・379・915・925・935(碗・壺)、陶器壺Po378、ミニチュア土器Po368、紡錘車CP3、錫製皿Sn1が出土、炭化材(試料13・14)
					南端: 54.18		
3010c	9F-9g・9h・10g・10h	2.6	0.6~△1.1	0.12~0.16	北端: 54.17	N-7° -E	南北に軸を持つ楕円形の溝、西側を3010a溝に切られる、3010d溝を切る、土師器Po396~405(皿・坏・甕・柱状高台・柱状高台皿?)、須恵器Po407~409、白磁碗Po406が出土、炭化材(試料15)
					南端: 54.23		
3010d	9F-9h・10h	△2.1	0.4~0.6	0.12	北端: 54.13	N-10° -E	南北に軸を持ち北側と東側の一部のみ残る、3010a・c溝に切られる、土師器Po410~414(皿・坏・甕)、須恵器坏Po415、白磁碗Po416が出土
					南端: 54.19		

(△: 残存値)

No.	地区T45-6j-	規模(m)			出土遺物	備考
		長軸	短軸	深さ		
3056	9F-10f・10g	1.18	0.94	0.24	土師器Po417~427・429(皿・柱状高台・坏・高台付坏)、瓦質土器鉢Po428、須恵器鉢Po430、白磁皿Po431、被熱粘土塊CP20が出土	3318柱穴を切る、炭化材(試料18)
3057	9F-10f・10g	0.87	0.85	0.16	土師器Po432~437(皿・柱状高台・坏)が出土。多量の小礫炭化物	
3259	10F-1f	1.44	1.20	0.10	土師器Po438~440(柱状高台皿・柱状高台・坏)、土製基石CP4が出土	
3065	9F-10f	△0.40	0.26	0.26		3066土坑>3065土坑
3066	9F-10f・10g	0.25	0.20	0.25		3066土坑>3065土坑
3268	10F-1f	1.10	1.00	0.08		
3270	9F-10f、10F-1f	1.72	1.50	0.14		掘立12の3083・3100柱穴に切られる

(△: 残存値)

No.	種別	地区T45-6j-	規模(m)			柱のあたり直径(m)	基礎固め	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ				
3058	ビット	9F-10e	0.41	0.31	-	-	-	遺構上端のみ検出	
3059	ビット	9F-10e	0.25	0.21	-	-	-	遺構上端のみ検出	
3060	ビット	9F-9e	0.31	0.23	-	-	-	遺構上端のみ検出	
3061	ビット	9F-9f	0.27	0.25	0.14	-	-		
3090	ビット	9F-10g	0.28	0.25	-	-	-		
3168	ビット	10F-2h	0.16	0.14	0.11	-	-	3168ビット>掘立13 3144柱穴	
3191	ビット	10F-2i	0.29	0.27	0.08	-	-		
3192	ビット	10F-2h	0.27	0.24	0.11	-	-		
3193	ビット	10F-2h	0.19	0.17	0.04	-	-		
3194	ビット	10F-2h	0.32	0.22	0.05	-	-		
3195	ビット	10F-2g	0.32	0.31	0.12	-	-		
3197	ビット	10F-1g	0.10	0.08	0.15	-	-		
3198	ビット	10F-1g	0.17	0.11	0.04	-	-		
3200	ビット	10F-1f	0.33	△0.26	0.20	-	-	東側は調査区外	
3201	柱穴	10F-1f	0.28	0.27	0.20	-	-	礫(礎盤石?) (柱根採取痕)、土師器柱状高台Po444	
3202	ビット	10F-1f	0.29	0.28	0.30	-	-	礫は柱抜き取り後、埋め戻し	
3203	柱穴	10F-1f	0.31	0.20	0.40	-	-		
3204	ビット	10F-1f	0.20	0.18	0.36	-	-		
3205	ビット	10F-1f	0.22	0.19	0.15	-	-	炭化物	
3206	柱穴	10F-1f	0.31	0.26	0.25	-	-	扁平礫(礎盤石)(柱根採取痕)	
3207	柱穴	10F-1f	0.30	0.28	0.60	-	-	礫は柱抜き取り後、埋め戻し	
3208	柱穴	10F-1f	0.29	0.24	0.30	-	-	扁平礫(礎盤石)	
3209	ビット	10F-1f	0.26	0.23	0.43	-	-	礫は柱抜き取り後、埋め戻し	
3210	ビット	10F-1f	0.25	0.20	0.23	-	-		
3211	ビット	10F-1f	0.29	0.35	0.36	-	-		
3212	ビット	10F-1f	0.30	0.27	0.18	-	-		
3214	柱穴	10F-1g	0.26	0.22	0.09	-	-	須恵器壺底部Po455(柱根採取痕)	
3215	ビット	9E-1g	0.20	0.15	0.14	-	-		
3217	ビット	9E-1g	0.27	0.26	0.15	-	-		
3218	ビット	9E-5g	0.13	0.10	0.05	-	-		
3219	ビット	9E-5g	0.29	0.25	0.32	-	-		
3225	ビット	10F-1f	0.29	0.29	0.19	-	-	土師器坏底部Po448	
3226	ビット	10F-1f	0.28	0.17	0.15	-	-		
3227	ビット	10F-1f	0.25	0.24	0.11	-	-		
3228	柱穴	10F-1f	0.29	0.28	0.31	-	-	柱根(柱痕)	
3230	柱穴	10F-1f	0.29	0.28	0.26	-	-	生木(試料19)	
3231	ビット	9E-3i	0.53	0.33	0.17	-	-		
3232	ビット	9E-3i	0.21	0.17	0.16	-	-		
3233	ビット	9E-3h	0.29	0.27	0.12	-	-		
3254	柱穴	9F-10f	0.33	0.27	0.45	-	-	大礫(柱根採取痕)	
3256	柱穴	10F-1f	0.23	△0.22	0.26	-	-	3258柱穴>3256柱穴	
3257	柱穴	10F-1f	0.24	0.22	0.23	-	-	礎盤石	
3258	柱穴	10F-1f	0.23	△0.12	0.12	-	-	3257柱穴>3258柱穴>3256柱穴	
3260	柱穴	10F-1f	△0.50	0.39	0.17	-	-	扁平礫(礎盤石)(柱根採取痕)土師器柱状高台Po445(掘方埋め土)	
3261	柱穴	9F-10f、10F-1f	0.54	0.33	0.18	-	-	扁平礫は柱抜き取り後、埋め戻し	
3262	ビット	10F-1g	0.31	0.22	0.22	-	-	攪乱に切られる	
3264	柱穴	9F-10e	0.29	0.27	0.62	-	-	炭化物、土師器皿Po442・443、坏Po451、須恵器壺Po454	
3265	柱穴	9F-10e	0.32	0.28	0.44	-	-	被熱粘土塊CP18	
3266	ビット	9F-10e	△0.42	0.35	0.45	-	-		
3267	ビット	9F-10e	0.31	0.25	0.28	-	-	666溝>3266ビット	
3271	柱穴	10F-1g	0.36	0.33	0.39	-	-		
3272	柱穴	10F-1g	0.38	0.37	0.32	-	-		
3273	柱穴	10F-1g	0.30	0.22	0.29	-	-		

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第12表 第2遺構面遺構計測表(2)

(△: 残存値)

No.	種別	地区 T45-6j-	規模(m)			柱のあたり 直径(m)	基礎固め	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ				
3274	ピット	10F-1g	0.30	0.23	0.37	-	-		
3275	柱穴	10F-1g	0.28	0.23	0.47	-	-		
3276	ピット	9F-10g,10F-1g	0.35	0.29	0.13	-	-		
3277	ピット	9F-10g	0.31	0.21	0.24	-	-		
3278	柱穴	9F-10g	0.23	0.20	0.36	-	-		
3279	ピット	10F-1g	0.17	0.15	0.27	-	-	炭化物	
3280	柱穴	10F-1g	0.23	0.22	0.10	-	-		
3281	ピット	10F-1g	0.26	0.24	0.36	-	-		
3282	柱穴	10F-1g	0.23	0.22	0.26	-	-		
3283	ピット	9F-10g,10f	0.23	△0.15	0.36	-	-	3283ピット>3287ピット、攪乱に切られる	
3284	ピット	10F-1f	0.28	0.22	0.42	-	-		
3285	ピット	10F-1f	0.34	0.25	0.35	-	-	炭化物	
3287	ピット	9F-10g,10f	0.47	0.32	0.24	-	-	3283ピット>3287ピット、攪乱に切られる	
3288	ピット	9F-10g	0.24	0.23	0.19	-	-		
3289	ピット	10F-1f	0.29	0.22	0.17	-	-		
3290	ピット	10F-1g	△0.18	0.15	0.30	-	-	掘立12 3088柱穴>3290ピット	
3291	ピット	10F-1g	0.12	0.11	0.06	-	-	掘立12 3095・3102柱穴>3291ピット	
3292	柱穴	9F-10h	0.28	0.25	0.11	-	-	土師器環Po447(柱抜取痕)	
3293	ピット	10F-1f	0.37	0.28	0.37	-	-		
3294	柱穴	10F-1g	0.25	0.22	0.33	-	-		
3295	ピット	9F-10f	0.30	△0.16	0.10	-	-	攪乱に切られる	
3296	ピット	9F-10g	0.16	0.13	0.20	-	-		
3297	柱穴	10F-1f	0.31	0.15	0.24	-	-	柱根(柱痕)	
3298	柱穴	10F-1g	0.18	△0.13	0.19	-	-	土師器環Po449・450(柱抜取痕)	
3299	柱穴	10F-1g	0.17	0.15	0.20	-	-	3298柱穴<3299柱穴	
3300	ピット	10F-2g	0.21	0.20	0.11	-	-		
3301	柱穴	10F-1g	0.17	0.13	0.10	-	-	炭化物	
3302	ピット	10F-1g	0.16	0.14	0.28	-	-		
3303	ピット	10F-1g	0.33	0.24	0.17	-	-		
3304	柱穴	10F-1g	0.30	0.28	0.34	-	-		
3305	ピット	10F-1g	0.23	0.16	0.19	-	-		
3306	柱穴	10F-2f	0.25	0.22	0.36	-	-	漆腺CP19	
3307	ピット	10F-1g・2g	0.36	△0.16	0.31	-	-	攪乱に切られる	
3308	ピット	10F-1g	0.29	0.27	0.28	-	-	3308ピット>3309ピット	
3309	ピット	10F-1g	0.28	△0.15	0.20	-	-	3308ピット>3309ピット	
3310	柱穴	10F-2g	0.34	0.23	0.42	-	-		
3311	ピット	10F-1g	0.20	0.17	0.27	-	-		
3312	ピット	10F-2g	0.28	△0.16	0.07	-	-	攪乱に切られる	
3313	ピット	10F-2g	0.31	0.29	0.26	-	-		
3314	柱穴	10F-1g	0.23	0.19	0.22	-	-	須恵器壺Po51・452・453(柱抜取痕)	
3315	柱穴	10F-1g	0.24	0.20	0.43	-	-		
3316	ピット	10F-1g	0.31	0.30	0.26	-	-		
3317	柱穴	10F-1f	0.24	0.22	0.13	-	-	土師器皿Po441(柱抜取痕)	
3319	ピット	9F-10e	0.25	0.24	0.30	-	-	攪乱に切られる	
3320	ピット	10F-1e	0.21	△0.15	0.40	-	-	攪乱に切られる	
3321	ピット	9F-10f	0.28	△0.15	0.29	-	-	攪乱に切られる	
3324	ピット	10F-1e・1f	0.31	△0.14	0.05	-	-	炭化物	
3325	ピット	10F-1f	0.29	△0.21	0.40	-	-	攪乱に切られる	
3326	柱穴	10F-1f	0.36	0.25	0.26	-	-	攪乱に切られる	
3327	柱穴	9F-10e	0.35	0.26	0.19	-	-	角礫(礎盤石?)	
3328	ピット	10F-1f	0.29	△0.24	0.16	-	-	角礫は柱抜き取り後、埋め戻し	
3329	柱穴	10F-1f	0.26	0.24	△0.16	-	-	礫(根巻石?)、土師器環Po446	
3331	ピット	10F-1f	0.22	0.21	0.17	-	-	礫は柱抜き取り後、埋め戻し	
3332	ピット	9F-10d・10e	0.29	0.25	0.28	-	-		
3333	ピット	9F-10e	0.24	0.23	0.28	-	-		
3335	柱穴	10F-1f	△0.30	0.28	0.23	-	-	扁平礫(礎盤石もしくは根巻石)	
3336	柱穴	9F-9e	0.26	0.25	0.23	-	-	礫(根巻石?)	
3339	ピット	9F-1e	△0.33	0.32	0.18	-	-	攪乱に切られる	

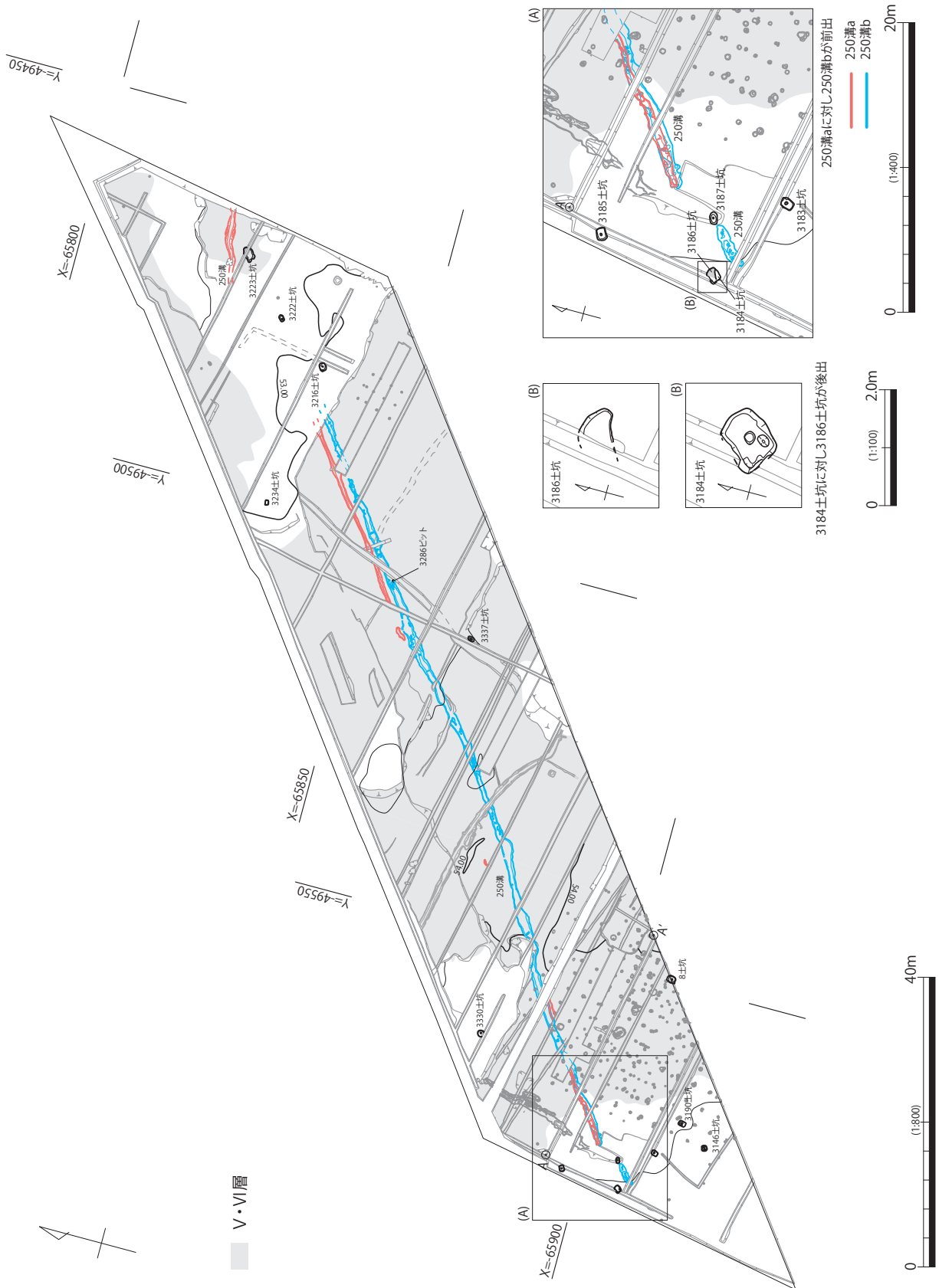
\*省略表記「掘立柱建物」を「掘立」と記載

第3項 第3遺構面の調査

1 概要(第137図)

IV層下部(弥生時代中期の遺物を含む)を第3遺構面とする。調査区は削平されており、各層とも遺存状態が悪く、確実にIV層下面といえる遺構は少ない。大半はV~VII層上面で検出した遺構であり、これらも第3遺構面に帰属するものと判断している。またV~VII層上面で検出した遺構のうち、帰属時期が新しいと判断したものについては、上位の遺構面において報告している。本遺構面では、弥生時代の土坑や縄文時代と推定される落とし穴を検出している。





第137図 第3遺構面全体図

## 2 検出した遺構と遺物

### 250溝(第138～144図、第13・28・29・45表、図版41・42・70・71)

調査区に並行して直線的に伸びる溝でV層上面で検出した。平成28年度調査で検出された250溝の続きである。今回の調査で2条に分かれることが明らかとなり、それぞれ250溝a、250溝bと呼称する。土層断面の切り合いから、新旧関係は250溝b→250溝aとなる。

### 250溝a(第138～142図、第13・28・45表、図版41・42・70・71)

250溝aは主軸方向をN-54° -Eとし北東部において東方向へ屈曲しN-66° -Eとなる、9E-3h・4i、9F-6b・7cグリッド付近は圃場整備により削平され、断続的に検出されている。また一部は250溝bと入れ子状に重なっている。検出面での規模は、残存長約61m、幅0.4～1.2m、深さ0.05～0.18mを測る。底面の標高は南西端で54.20m、北東端で52.92mであり、比高差が約1.28mである。埋土は黒褐色砂混じりシルトが堆積する。底面には円形の小穴が点在し、礫が抜けた痕跡と想定される。埋土が砂混じりシルトであることから、流水の環境下に置かれた時期があったものと考えられる。遺存状況や埋土の特徴等から平成28年度調査での250溝に繋がるものと考えられ、総延長は約190mとなる。

出土遺物を第141・142図に示す。Po456・460は逆L字状の口縁部をもち、前者は口縁端部に刻みを施し、後者は体部上半に櫛描きによる平行沈線文が施文されている。Po457～459・461は壺である。Po457は口縁端部が肥厚し、浅くて細い刻みを施す。Po458は体部上半が大きく張り、内外面にミガキを施している。Po461は口縁端部に刺突を巡らせ、肩部に櫛描きの平行沈線文が施文されている。Po459は壺の体部であり、内外面丁寧なミガキが施される。外面に幅3cmの黒色塗彩がみられる。以上は、弥生時代前期末から中期中葉に比定されよう。Po462は壺か甕の底部である。

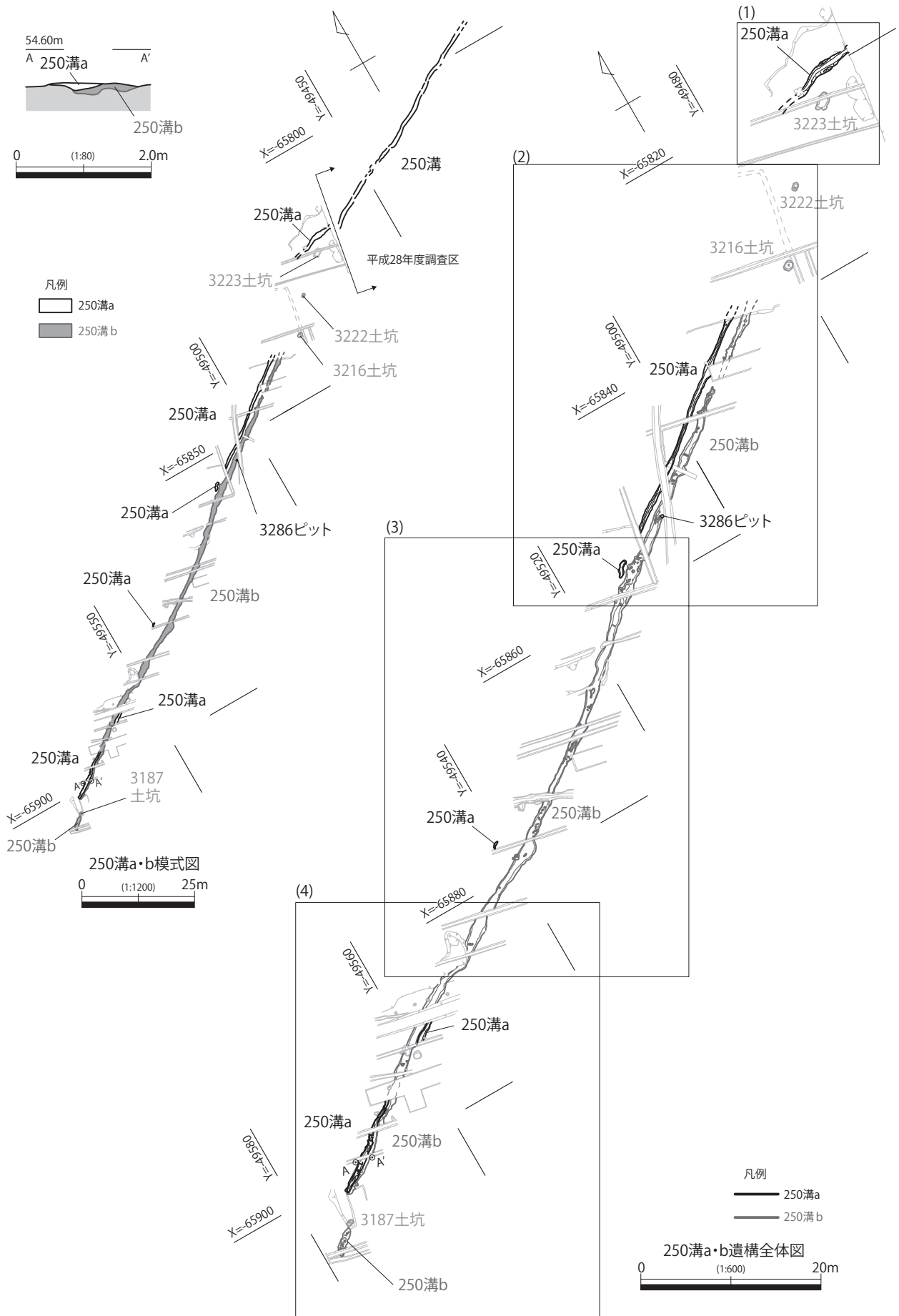
S2は安山岩製の石鋏である。やや厚みのある素材を用い、側縁の加工により括れを作出する。刃部・基部とも欠損している。

### 250溝b(第138～141・143・144図、第13・28・29・45表、図版41・42・70・71)

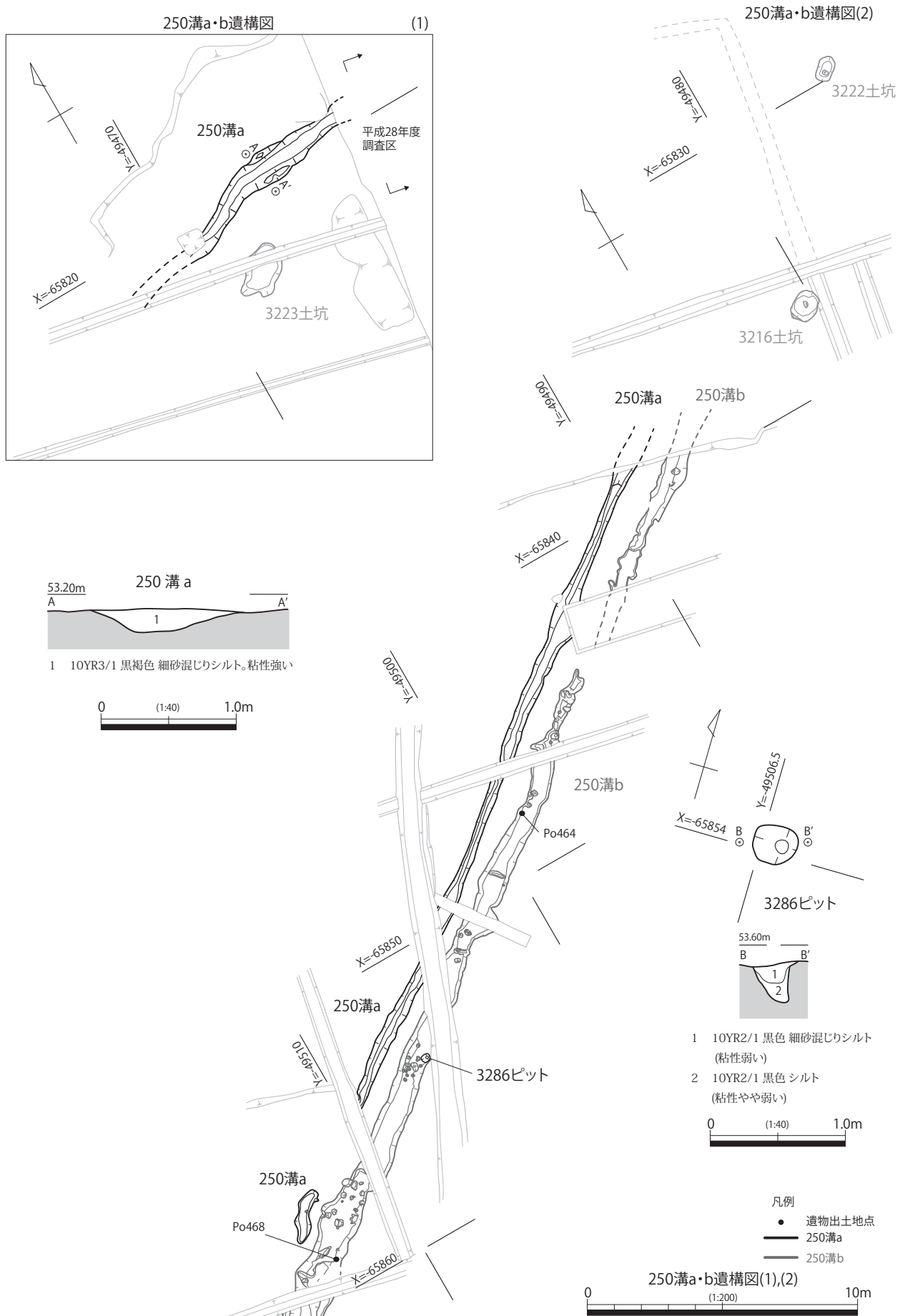
250溝bは主軸方向をN-54° -Eとし、9E-3h・4iグリッド付近は圃場整備により削平されているものの、250溝aに比べ総じて遺存状況は良い。検出面の規模は、残存長約117m、幅0.5～1.3m、深さ0.08～0.20mを測る。底面の標高は南西端で54.08m、北東端で53.27mであり、比高差は約0.81mである。埋土は1層が黒褐色の細粒砂～中粒砂、2層が灰黄褐色の砂混じりシルト、3層が黒褐色の細粒砂で底面の一部には小穴や凹みがあり、粗砂や小礫が堆積していることから、250溝aと同じく流水の環境下に置かれた時期があったものと推定される。

出土遺物を第143・144図に示す。遺物は弥生土器Po463～488である。Po463～472は逆L字状口縁をもつ甕をまとめている。Po463～466・472は口縁端部に刻みを施し、体部上半に櫛描きによる平行沈線文が施文される。Po470は平行沈線間に「ハ」字状の意匠を施し、Po471は平行沈線間に波状文と平行沈線下に円形刺突文を加える。外面調整はハケを基調とし、その上からミガキを加えるものもみられる。Po467～469は体部外面がナデもしくはハケ調整のみ施される。Po469は口縁部が「く」の字状を呈し、水平気味に倒れる甕である。体部外面はハケ、内面はミガキ調整を施している。

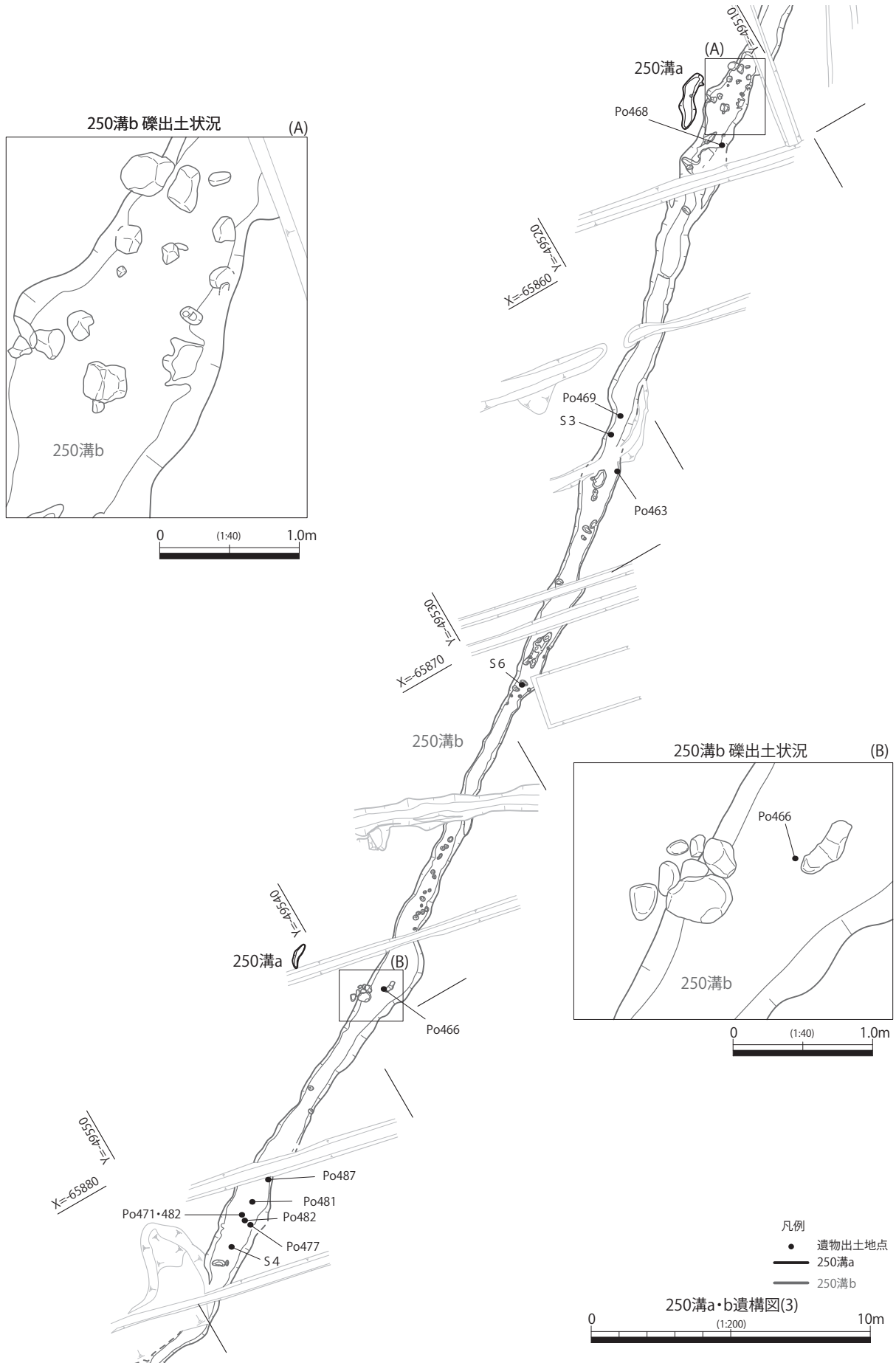
Po473～482は壺である。Po473・474・476は無頸壺であり、Po473は口縁端部に刻みを施し、Po476は外面にハケ調整後、櫛描き波状文を施文する。Po475は壺の口縁部で、ナデ調整を施す。擬



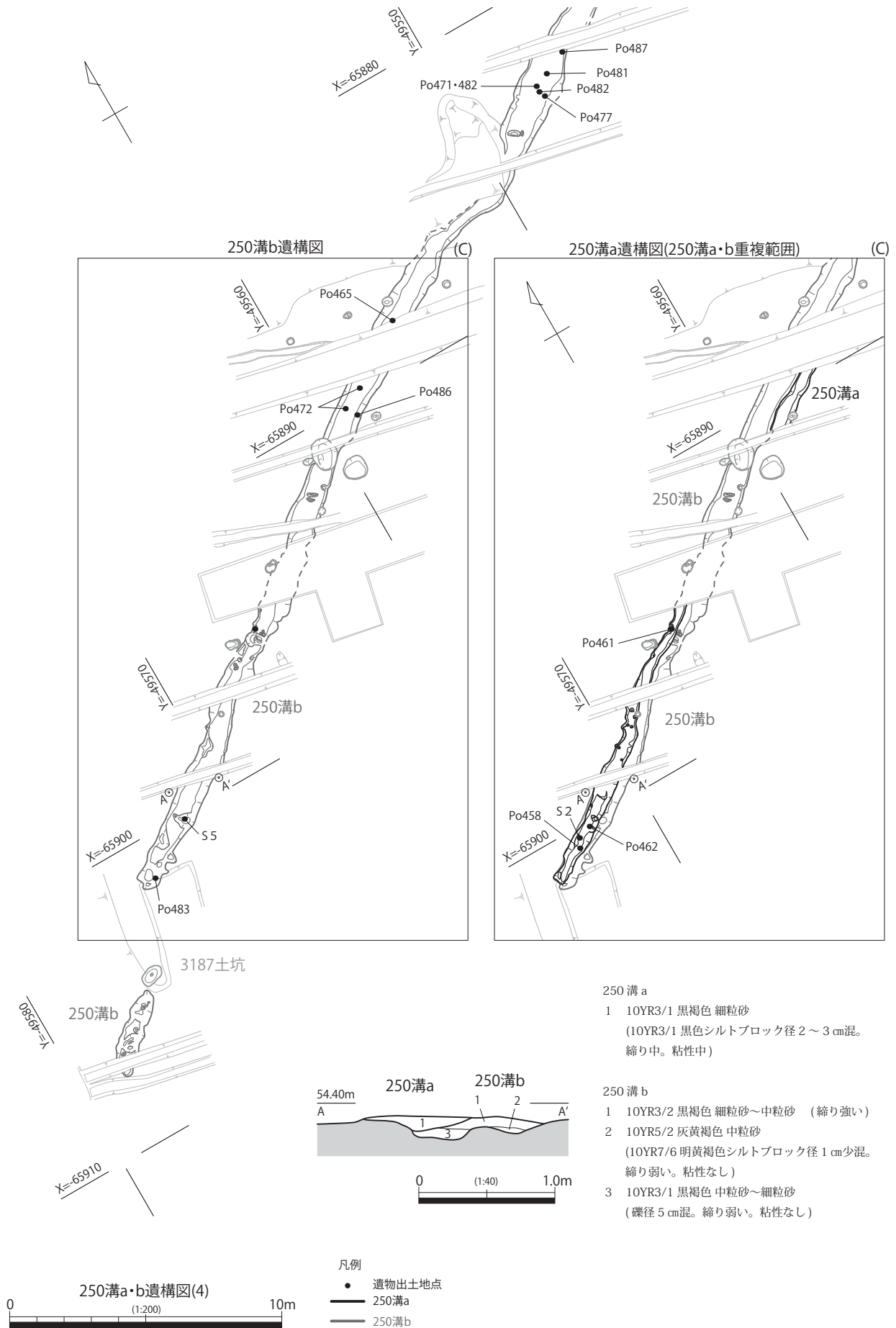
第138図 250溝全体図



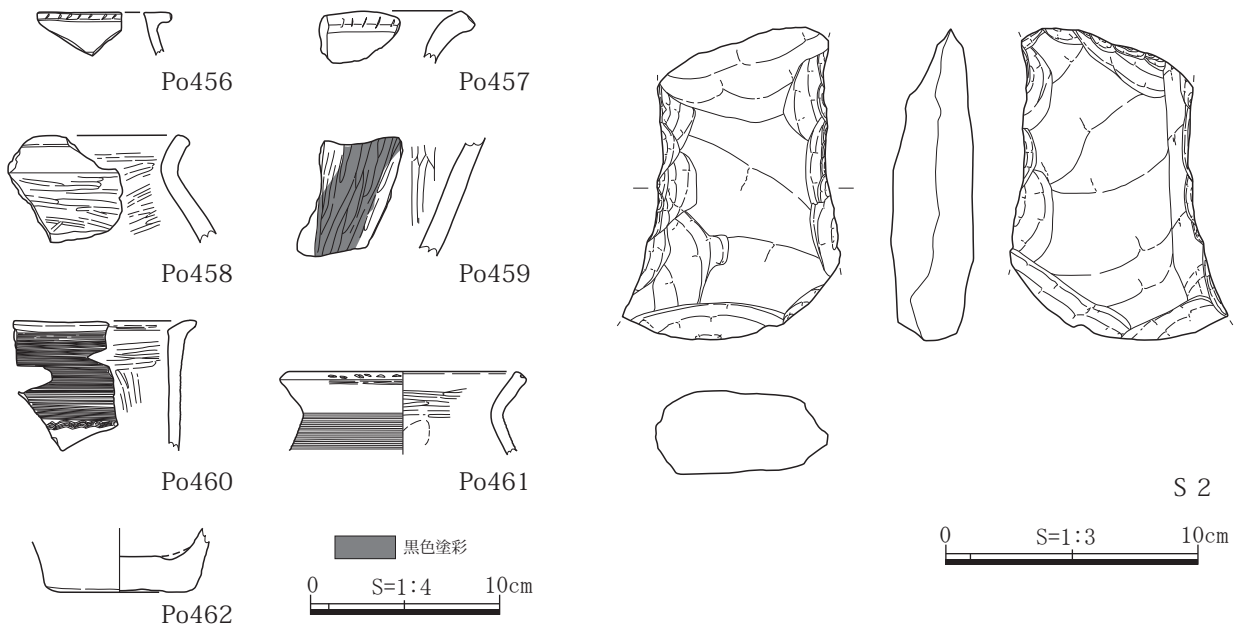
第139図 250溝(1)、3286ピット



第140図 250溝(2)



第141図 250溝 (3)



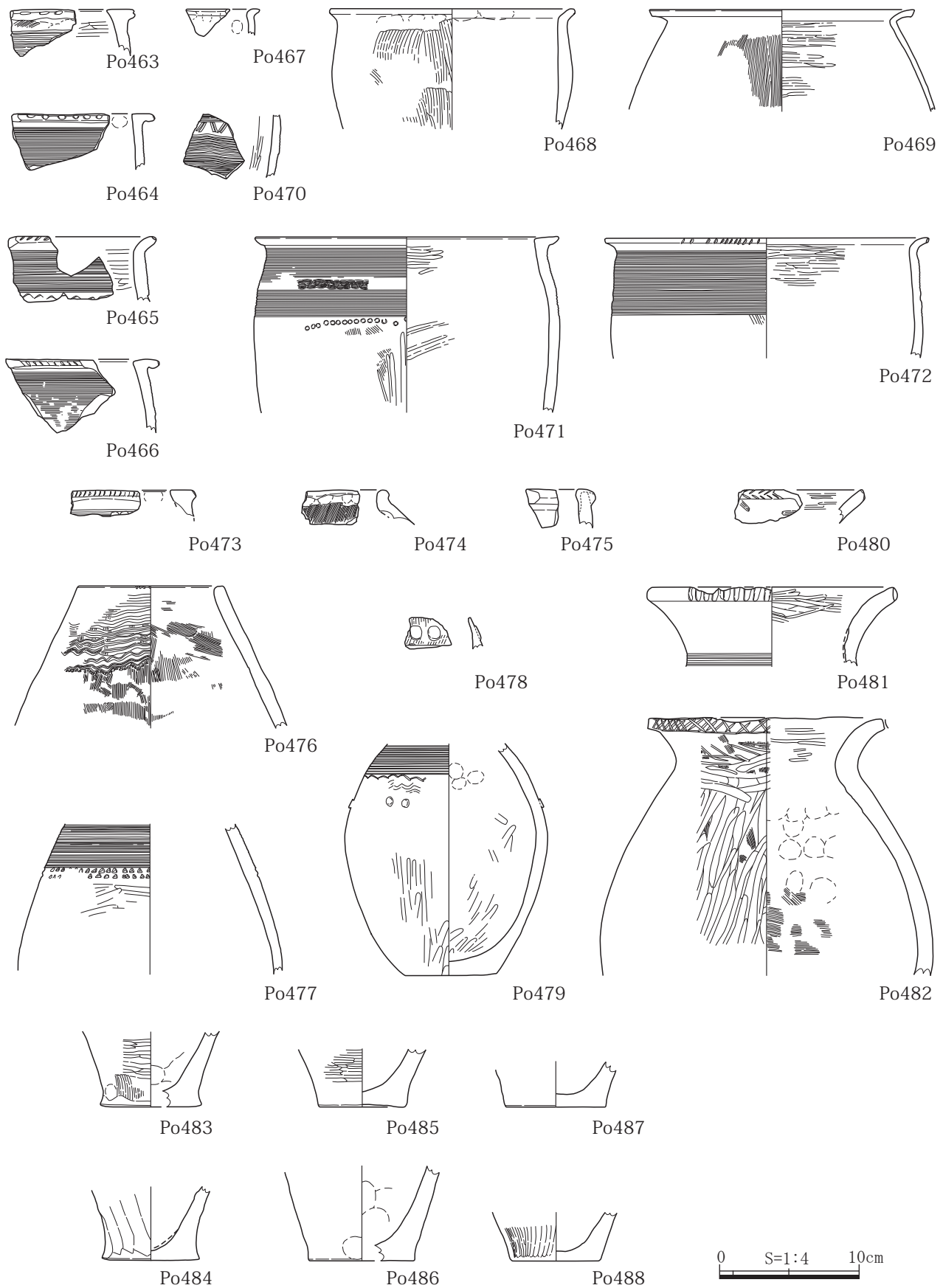
第142図 250溝a出土遺物

朝鮮無文土器の可能性がある。Po477・479は体部上半に櫛描き沈線文をめぐらせ、その下部に断面三角形の連続刺突文を施すもの、円形浮文を貼り付けるものがみられる。Po478は円形浮文が貼り付けられた口縁部。Po480は口縁端部に矢羽根状の刻みを入れる。Po481・482は口縁端部に刻みや斜格子文を施文する。Po483～488は壺もしくは甕の底部である。外面調整はハケ後ミガキを施すPo483、ミガキを丁寧に加えるPo485・488がみられる。

S3は背部と刃部が外湾する磨製石庖丁である。紐かけ孔が1箇所みられ器体の半分程度が欠損する。S4は板状安山岩製の大型直縁刃石器であり、刃部は使用による摩滅が顕著に残る。S5は石鋤で周縁に二次加工を加え、細身の器体を形成する。基部が欠損している。S6は板状安山岩製の抉り入り石器である。側縁部を中心に加工を加え、抉りを形成している。

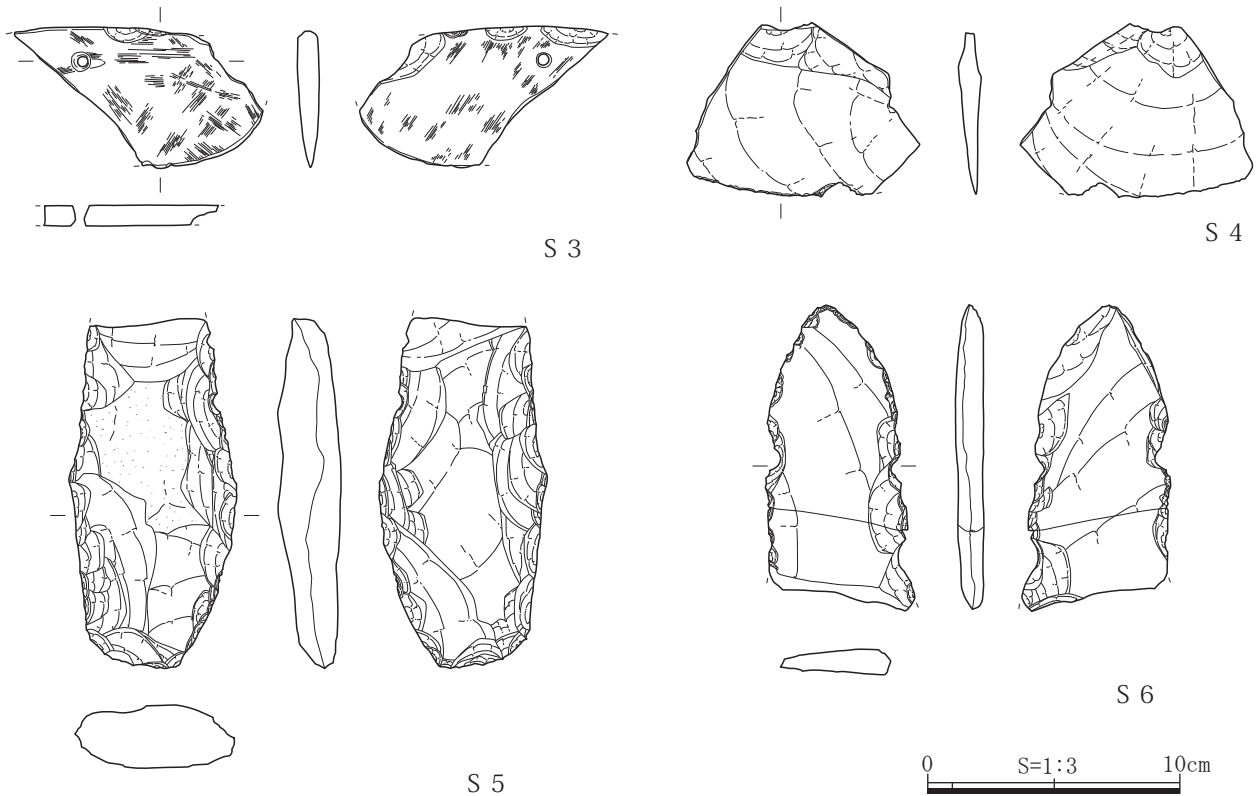
本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代前期末から中期中葉である。

なお、本遺構埋土から出土した生材(試料20)について樹種同定を行った結果、スギと同定されている。また、放射性炭素年代測定の結果、calAD536-620(暦年較正2σの確立1位)の値が得られているが(第5章第1節参照)、遺構の年代観と乖離していることから、混入の可能性を指摘したい。



第143図 250溝b出土遺物(1)





第144図 250溝b出土遺物(2)

3186土坑(第137・145・146図、第13・29・44・45表、図版43・72)

調査区南西10F-1hグリッドにおいて、V層上面で検出した土坑である。西側は暗渠で削平されている。また次に述べる3184土坑(落とし穴)と入れ子状に重複しており、土坑埋土内に掘方が確認された。平面形は不整三角形、断面形は逆台形状を呈する。残存規模は長軸0.60m、短軸0.57m、検出面からの深さ0.13mを測る。埋土は黒褐色粗砂混じりシルトの1層と粗砂の2層に分かれ、1層下部(2層上面)に多くの遺物が遺棄されていた。遺物の多くは破碎した土器や礫、石器が面的に堆積する状況である。

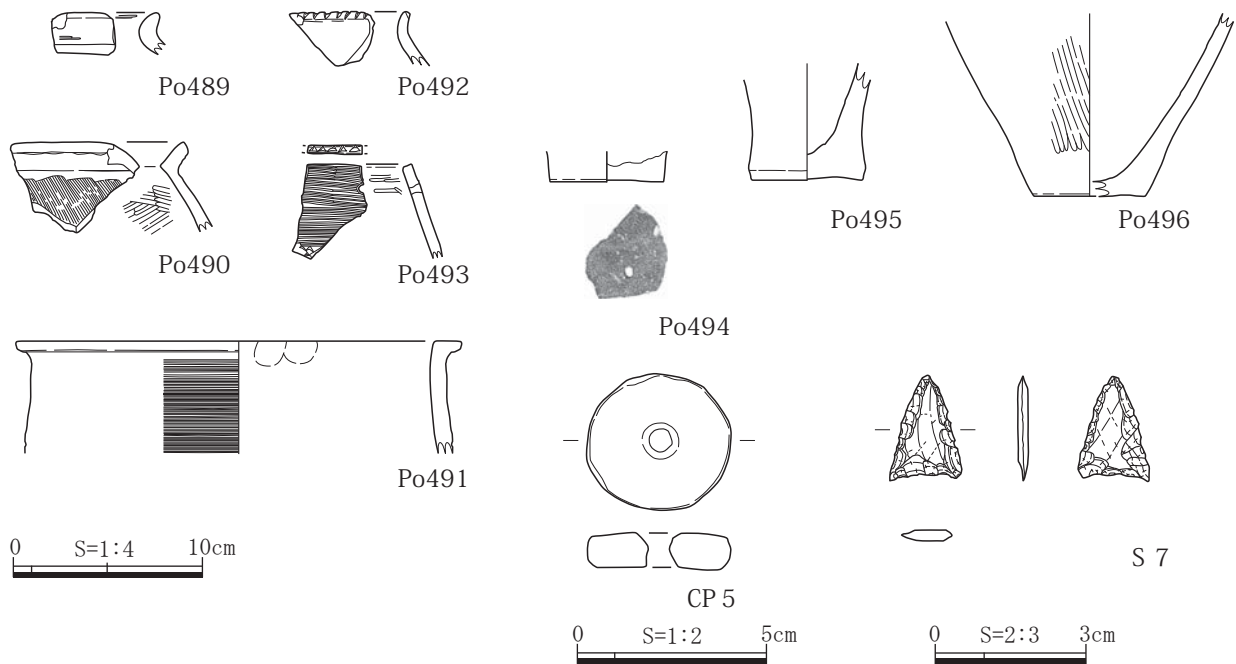
遺物は第146図にまとめている。Po489は口縁端部がわずかに外反する小型の壺である。Po490は「く」の字状に口縁が外反し、体部中位が膨らむ壺である。外面はハケ、内面はミガキを施す。Po491は逆L字状口縁をもち、体部上半に櫛描きの平行沈線が施文されている。Po492は口縁端部に刻みを施し、体部が膨らむ壺である。Po493は無頸壺である。口縁端部が内傾する面をなし、その端部に刻みを施す。口縁下には穿孔している。外面はハケ、内面はミガキを施す。Po494～496は甕もしくは壺の底部で、Po494は底面に舂圧痕が観察される。以上は、弥生時代前期末から中期中葉に相当する。

CP5は直径約3.8cm、中心部が穿孔された紡錘車である。S7は無斑晶安山岩製の凹基無茎式石鏃である。押圧剥離による成形で表裏面に素材面を残す。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期前葉と考えられる。



第145図 8・3186土坑



第146図 3186土坑出土遺物

### 8土坑(第145図、第13表、図版44)

調査区南西10F-1e・1fグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。平成28年度調査で検出された遺構の続きであり、南北方向に主軸をとる。平面形は歪な円形を呈し、残存規模は長軸1.3m、短軸0.98mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.50mである。底面のほぼ中央に径約0.20m、深さ約0.26mの小ピットが存在する。小ピット上面から逆茂木を固定するための礫が1点出土している。埋土は黒色の砂混じりシルトを主体とする4層に分かれる。

本遺構の時期は不明である。

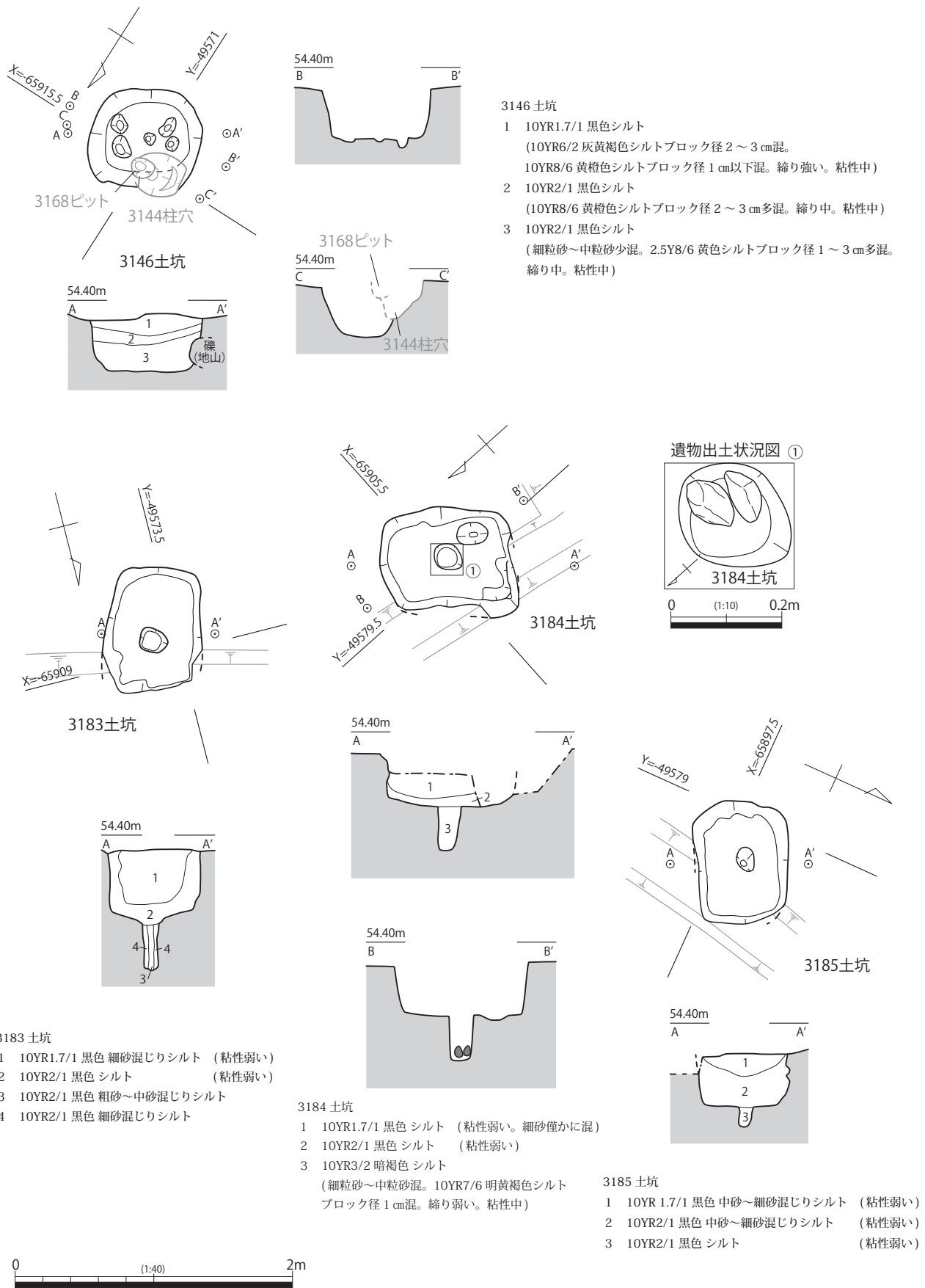
### 3146土坑(第147図、第13表、図版44)

調査区南西10F-2hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。北東-南西方向に主軸をとる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.80m、短軸0.70mを測る。断面形は箱形を呈し、検出面からの深さは0.40mである。底面には径0.1~0.15m、深さ0.03~0.08mの小ピットが5箇所存在する。埋土は黒色の砂混じりシルトを主体とする3層に分かれる。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明である。

### 3183土坑(第147図、第13表、図版44)

調査区南西10F-1hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。北側の掘方上部が暗渠によって削平されている。南北方向に主軸をとる。平面形は隅丸方形を呈し、残存規模は長軸0.9m、短軸0.7mを測る。断面形は箱形を呈し、検出面からの深さは0.54mである。底面のほぼ中央に径約0.20m、深さ約0.32mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で2層、小ピットで2層の計4層に分層でき、土坑内は黒色の砂混じりシルトを主体とする。小ピットの埋土には逆茂木の痕跡(3層)が



第147図 3146・3183~3185土坑

残されていた。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明である。

#### 3184土坑(第137・147図、第13表、図版43)

調査区南西10F-1hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。3186土坑と重複し、切られている。北東-南西方向に主軸をとる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.00m、短軸0.78mを測る。断面形は箱形で、検出面からの深さは0.40mである。底面のほぼ中央に径約0.22m、深さ約0.32mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で2層、小ピットで1層に分層でき、黒色の砂混じりシルトを基調とするが、小ピット内にはⅧ層由来の明黄褐色シルトブロックが混じる。小ピット底面には逆茂木を固定するための小礫が2点出土している。

本遺構の時期は不明である。

#### 3185土坑(第147図、第13表、図版45)

調査区南西9F-10hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。東側の掘方上部が暗渠によって削平されている。北東-南西方向に主軸をとる。平面形は隅丸方形を呈し、残存規模は長軸0.89m、短軸0.68mを測る。断面形は箱形を呈し、検出面からの深さは0.38mである。底面のほぼ中央に径約0.18m、深さ約0.14mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で2層、小ピットで1層に分層でき、黒色の砂混じりシルトを基調とする。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明である。

#### 3187土坑(第148図、第13表、図版45)

調査区南西10F-1hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。東西方向に主軸をとる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.86m、短軸0.50mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.48mである。底面のほぼ中央に径約0.14m、深さ約0.18mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で3層、小ピットで1層に分層でき、黒色で砂の混じるシルトを基調とするが、壁際の3層は風化による壁面崩落土と考えられる。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明である。

#### 3190土坑(第148図、第13表、図版46)

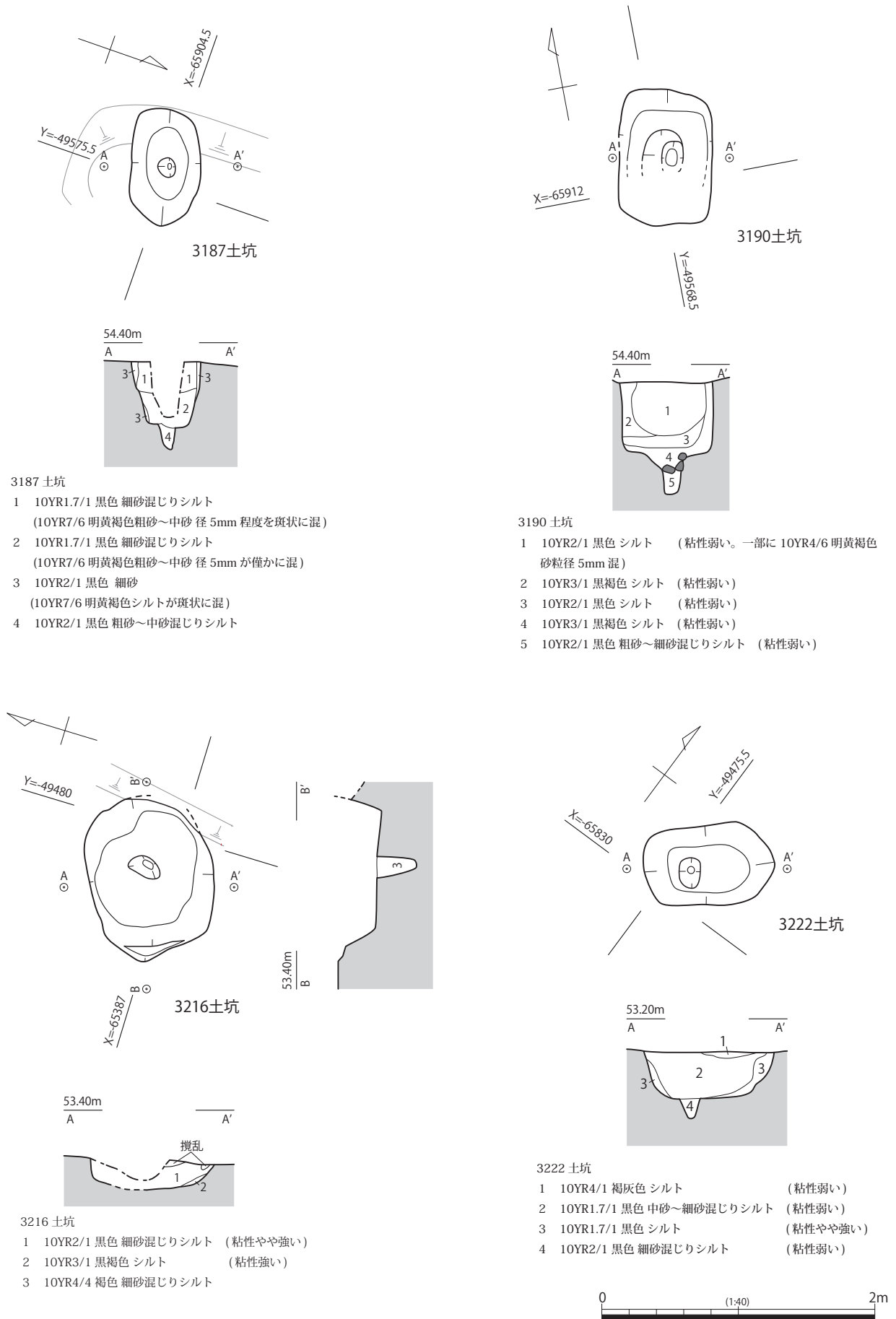
調査区南西10F-2gグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。南北方向に主軸をとる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.00m、短軸0.70mを測る。断面形は箱形を呈し、検出面からの深さは0.52mである。底面のほぼ中央に径約0.20m、深さ約0.26mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で4層、小ピットで1層に分層でき、黒色から黒褐色シルトを基調とするが、小ピットには砂が混じる。小ピット上面から逆茂木を固定するための小礫が3点出土している。

本遺構の時期は不明である。

#### 3216土坑(第148図、第13表、図版46)

調査区中央9E-4i・4hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。掘方上方が大きく

第3章 山ノ下遺跡の調査成果



第148図 3187・3190・3216・3222土坑

削平を受け、遺存状態は不良。北東-南西方向に主軸をとる。平面形は隅丸方形を呈し、残存規模は長軸1.20m、短軸0.90mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.22mである。底面のほぼ中央に径約0.24m、深さ約0.30mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で2層、小ピットで1層に分層でき、土坑部分は黒色から黒褐色シルトを基調とし、小ピットは地山由来の褐色細粒混じりシルトが堆積する。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明である。

#### 3222土坑(第148図、第13表、図版46)

調査区南西9E-3h・4hグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。北東-南西方向に主軸をとる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.96m、短軸0.60mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.33mである。底面南西寄りに径約0.22m、深さ約0.14mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で3層、小ピットで1層に分層でき、黒色の砂混じりシルトを主体とする。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明である。

#### 3223土坑(第149図、第13表、図版47)

調査区北東端9E-3gグリッドにおいて、V層上面で検出した土坑である。中心部分を暗渠によって分断されている。平面形は楕円形、断面形は擂鉢状を呈する。規模は長軸2.16m、短軸1.30m、検出面からの深さ0.19mを測る。埋土は黒色シルトの単層である。

本遺構の時期は、不明である。

#### 3330土坑(第149図、第13表、図版47)

調査区南西9F-9gグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。掘方上部は大きく削平を受け、遺存状況は不良である。東西方向に主軸をとる。平面形は不整形を呈し、残存規模は長軸0.90m、短軸0.76mを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.10mである。底面東寄りに径約0.24m、深さ約0.30mの小ピットが存在する。埋土は土坑部分で2層、小ピットで2層の計4層に分層できるが、4層は掘方埋め土である。したがって3・4層上面が土坑部分の本来の底面と考えられる。小ピットには逆茂木の痕跡が残存し、それを固定するための小礫が1点出土している。

本遺構の時期は不明である。

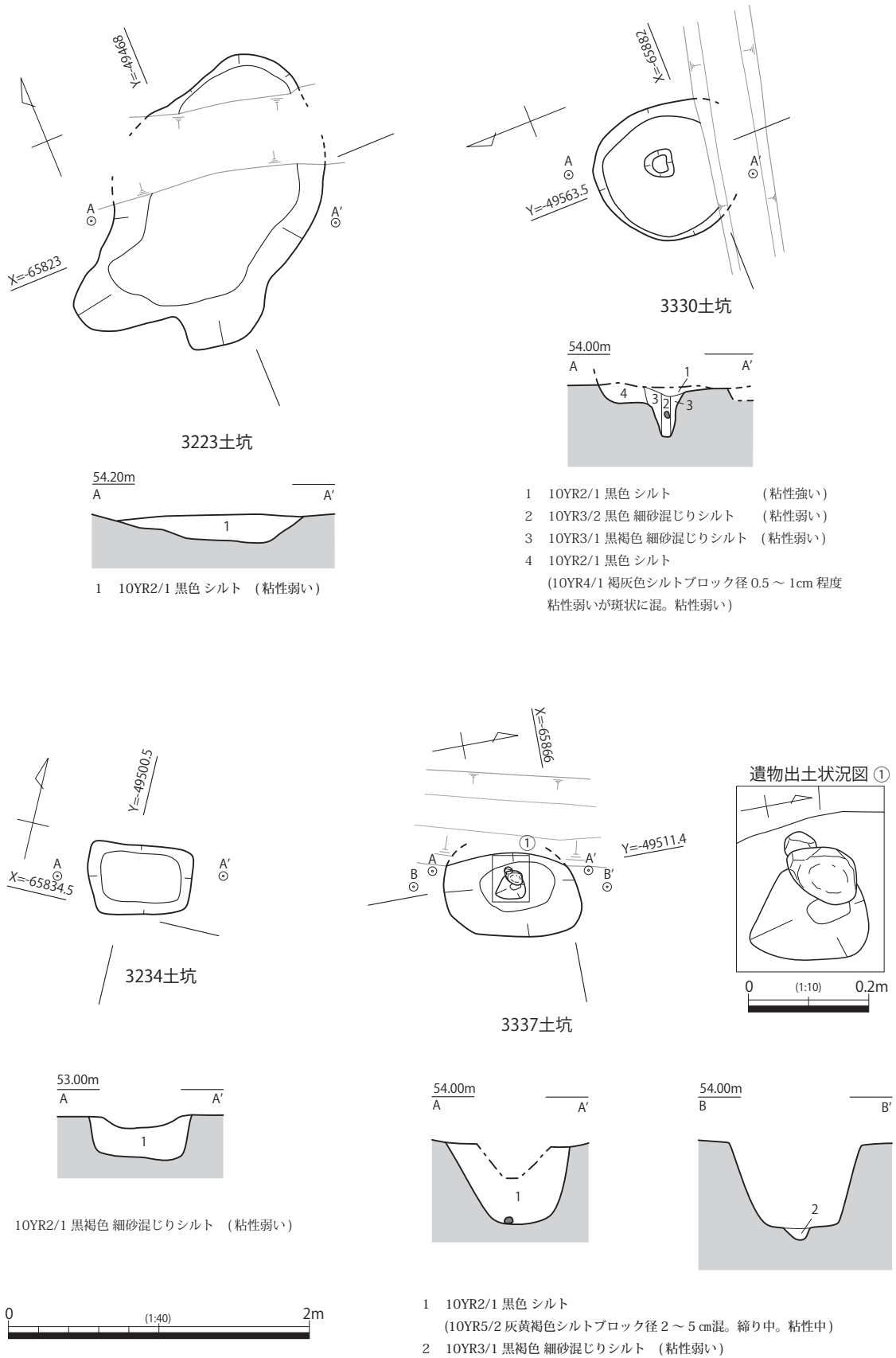
#### 3234土坑(第149図、第13表、図版47)

調査区北東端9F-4aグリッドにおいて、V層上面で検出した土坑である。平面形は方形、断面形は箱形を呈する。規模は長軸0.70m、短軸0.48m、検出面からの深さ0.28mを測る。埋土は黒褐色の細粒砂混じりシルトの単層である。

本遺構の時期は、不明である。

#### 3337土坑(第149図、第13表、図版47)

調査区南西9F-7bグリッドにおいて、V層上面で検出した落とし穴である。南北方向に主軸をとる



第149図 3223・3234・3330・3337土坑



土坑である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.90m、短軸0.58mを測る。断面形はU字形を呈し、検出面からの深さは0.56mである。底面のほぼ中央に径約0.20m、深さ0.08mの小ピットが存在する。埋土は土坑部と小ピットそれぞれ黒褐色の砂混じりシルトが堆積し、小ピット上面から逆茂木を固定するための小礫が出土している。

本遺構の時期は不明である。

**3286ピット(第139図、第13表)**

調査区南西9F-6aグリッドにおいて、V層上面で検出した小穴であり、250溝bを切る。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.33m、短軸0.30m、検出面からの深さ0.28mを測る。埋土は黒色の細粒混じりシルトの上層と黒色シルトの下層である。

本遺構の時期は、不明である。

**第13表 第3遺構面遺構計測表**

(△: 残存値)

No.	地区T45-6j-	規模			底面の標高(m)	主軸方位	備考	
		長さ(m)	位置	幅(m)				深さ(m)
250溝a	9E-2g・3g・3h・4i・4j・5j・9F-5a・6a・6b・8e・9f・10f・10g・10h,10F-1h	140以上(削平部含) 残存部61	北東端	0.60-1.20	約0.18	52.92	N-66° -E	北東-南西に軸を持ち直線的に伸びる。北東端部は一部削平され北東端において東方向に曲折しH28年度検出遺構250溝と接続すると総延長約190m。溝bと北東端は平行し中央部は残りが悪く部分的に検出され南西側は溝bを切る。弥生土器(壺(Po456・460・462)・壺(Po457~459・461)、石鏃S2)が出土。
			a・b溝平行部:北東端	0.40-0.60	約0.05	53.45		
			a・b溝平行部:南西端	0.40-0.60	約0.10	53.51	N-54° -E	
			南西端	0.60	約0.10	54.20		
250溝b	9E-4i・5i・5j,9F-5a・6a・6b・7b・7c・8c・8d・8e・9e・9f・10f・10g・10h・10F-1h	117以上	a・b溝平行部:北東端	0.50-0.90	約0.08	53.27	N-54° -E	北東-南西に軸を持ち直線的に伸びる。北東端部から削平され消失する。北東端は溝aと平行し南西側は溝aに切られる。南東端付近は攪乱に切られ部分的に検出された。弥生土器(壺(Po463~472・484~488)・無頭壺(Po473・474・476)・壺(Po475・477~483)、石包丁(S3)・大型直線刃石器(S4)・石鏃(S5)・抉り入り石器(S6)が出土。生木(試料20)
			a・b溝平行部:南西端	1.00-1.30	約0.20	53.40		
			a・b溝重複部:南西端	1.00 (西側をa溝に切られる)	約0.18	54.12		
			南西端	0.80	約0.12	54.08		

(△: 残存値)

No.	地区T45-6j-	規模(m)			小ピット規模(m)		備考
		長軸	短軸	深さ	径	深さ	
8	10F-1e・1f	1.30	△0.98	0.50	0.20	0.26	礫1点(小ピット上面)
3146	10F-2h	0.80	0.70	0.40	0.10-0.15	0.03-0.08	小ピット5基
3183	10F-1h	△0.90	0.70	0.54	0.20	0.32	逆茂木の痕跡
3184	10F-1h	1.00	0.78	0.40	0.22	0.32	小礫2点(小ピット底面)、3186土坑>3184土坑
3185	9F-10h	△0.89	△0.68	0.38	0.18	0.14	
3186	10F-1h	0.60	△0.57	0.13	-	-	攪乱に切られる。3186土坑>3184土坑、弥生土器・壺(Po489・490・492)・壺(Po491)・壺または甕(Po494~496)・無頭壺(Po493)、紡錘車(CP5)、凹基無蓋式石鏃(S7)
3187	10F-1h	0.86	0.50	0.48	0.14	0.18	
3190	10F-2g	1.00	0.70	0.52	0.20	0.26	小礫3点(小ピット上面)
3216	9E-4i・4h	1.20	0.90	△0.22	0.24	0.30	攪乱に切られる
3222	9E-3h・4h	0.96	0.60	0.33	0.22	0.14	
3223	9E-3g	2.16	1.30	0.19	-	-	攪乱に切られる
3234	9F-4a	0.70	0.48	0.28	-	-	
3330	9F-9g	0.90	△0.76	△0.10	0.24	0.30	攪乱に切られる。小礫1点、逆茂木の痕跡
3337	9F-7b	0.90	0.58	0.56	0.20	0.08	小礫2点(小ピット上面)

ピット

No.	地区T45-6j-	規模(m)			備考
		長軸	短軸	深さ	
3286	9F-6a	0.33	0.30	0.28	250溝b底面

## 第4項 遺構外出土遺物

### Ⅲ-1層(第150・151図、表29・30・41・42・44、図版49・58・59・65・66・72・73・87～89)

Po501～506は回転台成形の土師器である。Po501～504は柱状高台の高台部で、Po501～503は裾部が少し張り出し、Po504は段を形成する。Po505は高台付坏で、高台部は足高状に高く大きく開いている。Po506は坏の底部で、やや底部が直立する。Po497～500は手づくね成形の土師器皿である。いずれも丸底気味の底部から内湾気味に立ち上がる。底部は粗いナデ調整で指オサエ痕跡を残すものが多い。Po508は瓦質土器の羽釜、509・510は土師器の鍋と鉢である。Po511は器壁が厚い土師器の甕であり、口縁部は「く」の字状に屈曲するが短い。Po507は体部から口縁部が外傾気味に立ち上がる須恵器の坏である。Po512は有段口縁の弥生時代後期の甕である。Po513～516は貿易陶磁器である。Po513は器壁が薄く外傾する白磁碗の体部であり、Ⅳ類かⅤ類もしくはⅪ類に比定される。Po514は同じく器壁が薄い白磁碗の体部であり、Ⅳ～Ⅷ類に該当する。Po515は体部から口縁部が内湾気味に立ち上がって開く白磁碗でありⅤ1類に比定される。Po516は外面に蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗Ⅲ2C類である。

Po517～524は須恵器甕の体部をまとめている。Po517は内外面にカキメが施されている。Po518は外面が平行タタキ、内面は車輪状当て具痕を残す。Po519～524は外面が平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。Po523・524の内面は風化が著しく斑状に剥落している。

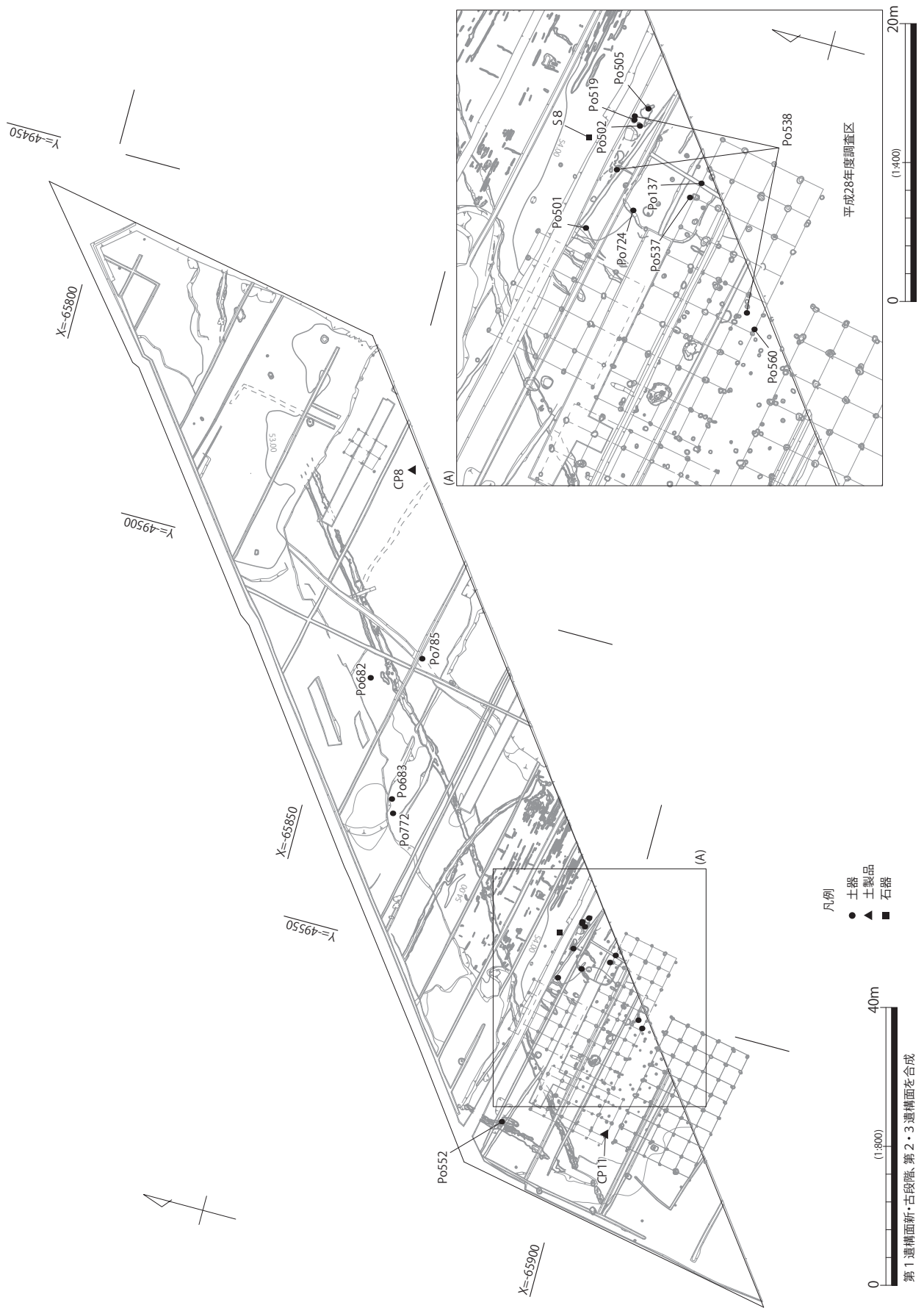
### Ⅲ-2層(第150・152・153図、表30・41・42・45、図版56・57・73・74・88・89)

Po525～527は回転台成形の土師器である。Po525は皿で底部から口縁部が内湾気味に立ち上がる。Po526は器高が低く、立ち上がりが短い皿である。Po527は柱状高台で、柱部裾が張り出す。Po528～530は手づくね成形の土師器皿である。いずれも丸底から口縁部に内湾気味に立ち上がる。Po528・529は底面に指オサエ痕跡を残す。Po531は須恵器坏であり、口径は広くかえりが高い。Po532は体部から口縁部が直線的に外傾して立ち上がる須恵器坏である。Po533は口縁部が大きく開く須恵器広口壺の口縁部。Po534・535は逆L字状口縁の弥生土器甕である。前者は外面がナデ、内面はハケ後にナデ調整、後者は外面がハケ、内面にミガキを施す。弥生時代前期末から中期前葉に比定される。Po536は口縁帯に波状文を施す弥生時代後期後葉の甕の口縁部である。Po537はミニチュア土器である。Po538・539は須恵器甕の体部であり、外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。Po540は内面に櫛目文と圏線を有する白磁碗Ⅴ類もしくはⅥ類である。Po541は削り出し高台をもつ白磁碗Ⅱ類。

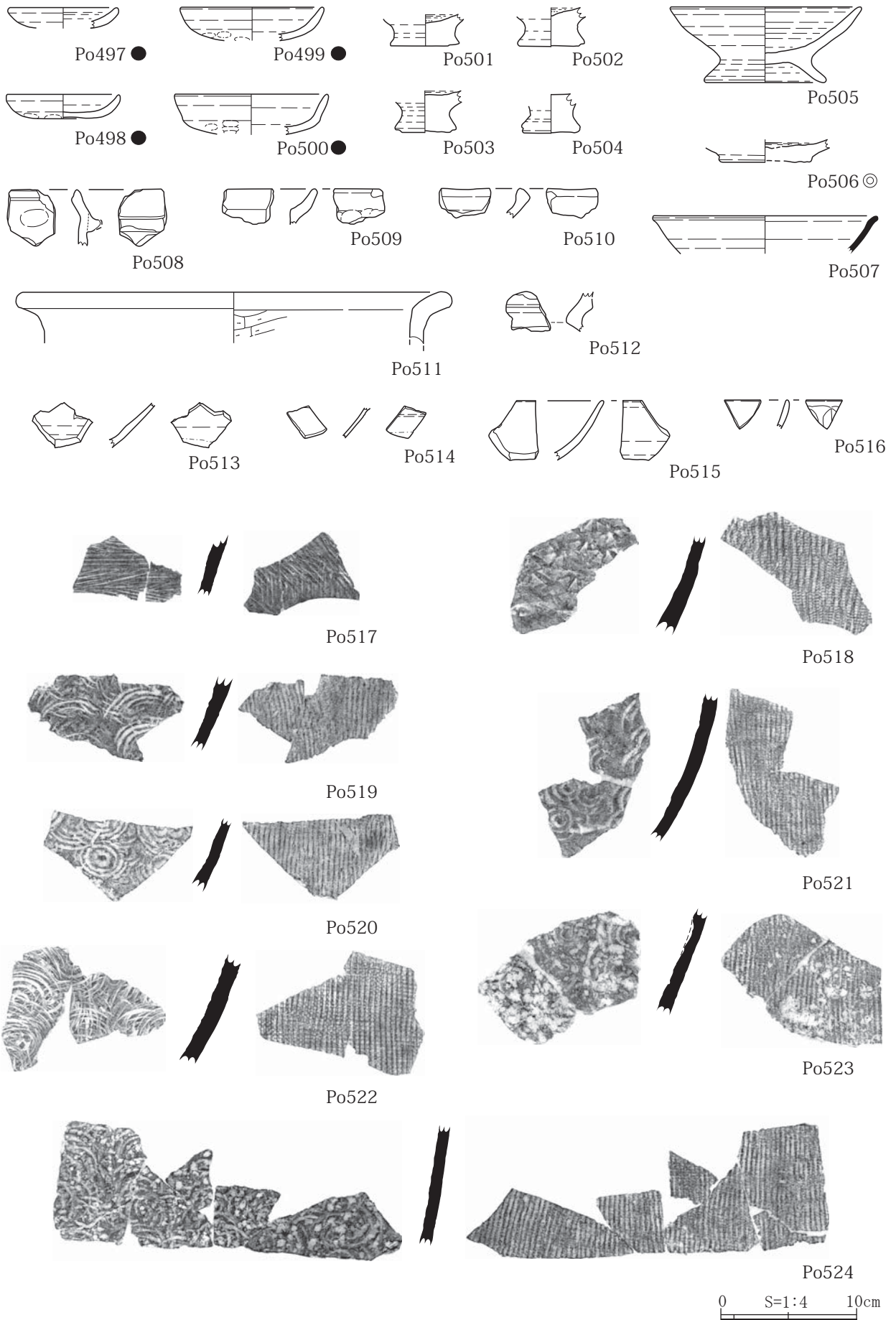
S 8は無斑晶安山岩製の平基無茎式の石鏃である。押圧剥離による成形で、裏面に素材面を残している。S 9は碧玉製の剥片。S 10は黒曜石製の剥片。表面に自然面を残り、上部に加工が施される。

### Ⅳ層(第154図、表45、図版72・92)

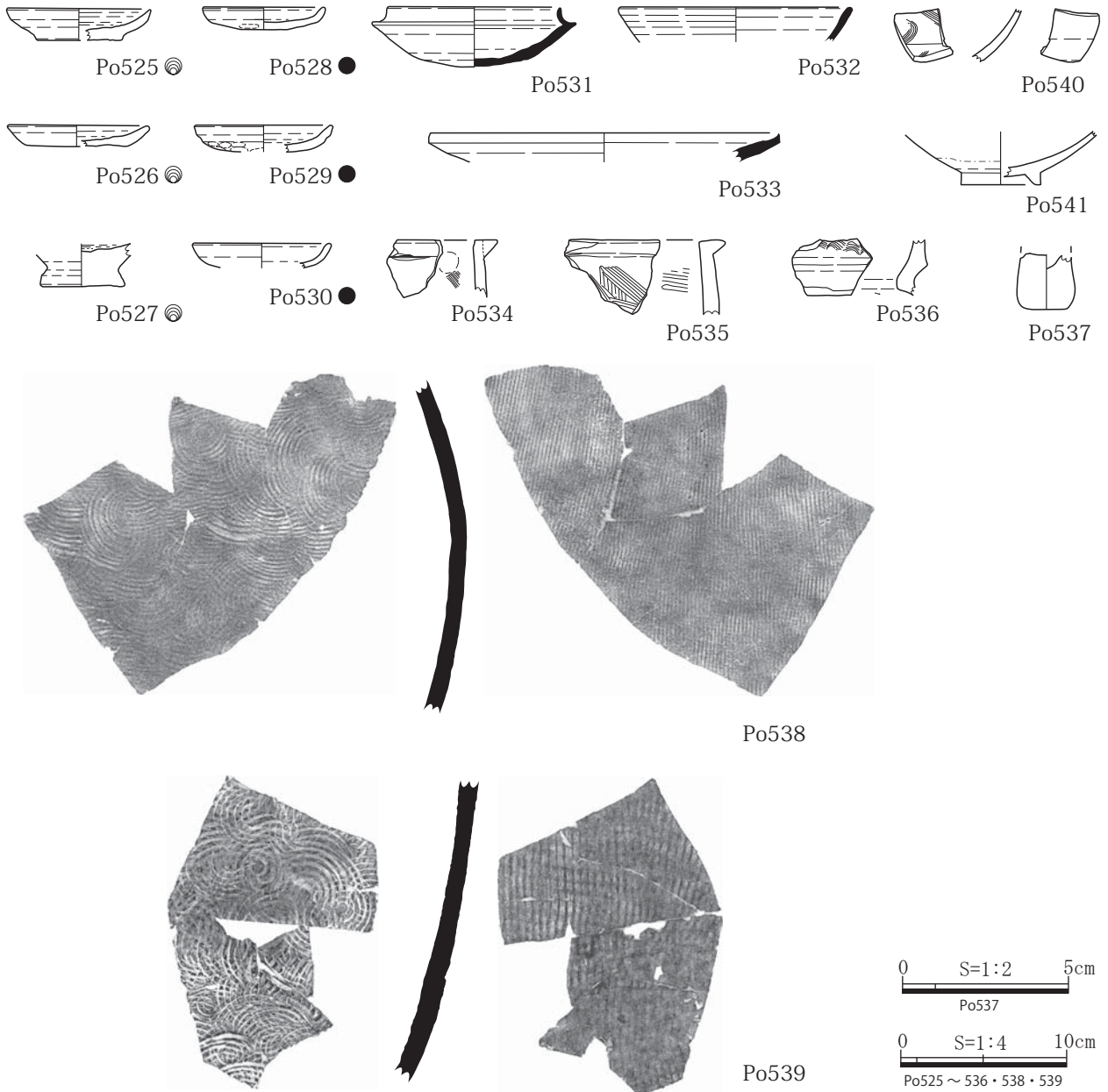
S 11は無斑晶安山岩製の平基無茎式の石鏃。押圧剥離による成形がなされ、裏面に素材面が残る。S 12は大型蛤刃石斧である。使用によって半分ほど折損している。



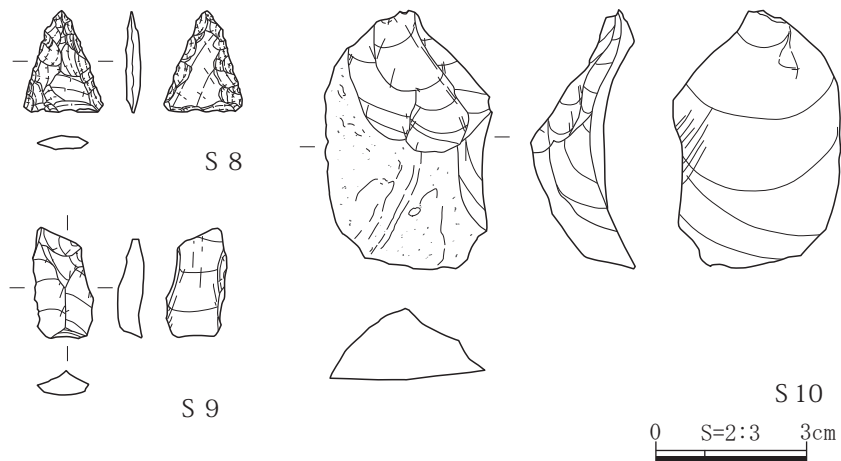
第150図 包含層遺物出土地点



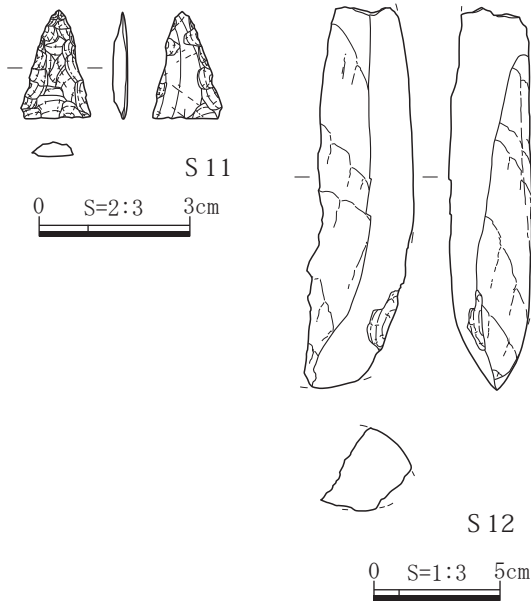
第151図 III-1層出土遺物



第152図 Ⅲ-2層出土遺物(1)



第153図 Ⅲ-2層出土遺物(2)



第154図 IV層出土遺物

表土・攪乱土等(第150・155~169図、表31~38・41  
・42・44・45、図版58・65・74~81・87~90・92)

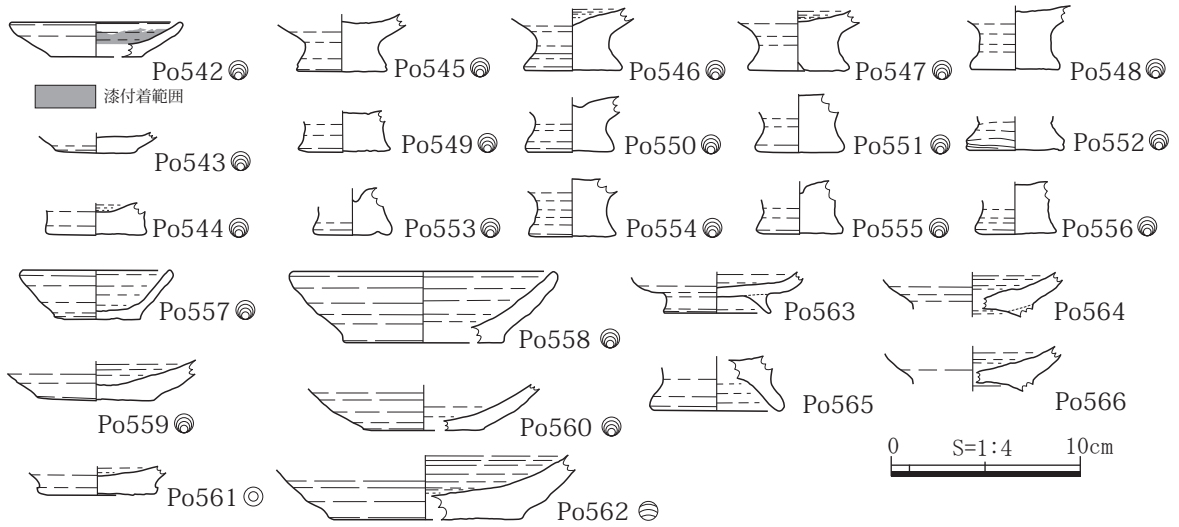
第155図には回転台成形の土師器を図示している。Po542・543・557は皿である。Po542は底部から口縁部が直線状に外傾し、内面には漆が付着する。Po557は器高が高く、小型の坏のような器形をとる。Po544~556は柱状高台の高台部である。Po544は円柱状に立ち上がり、本遺跡では少ない。その他は裾部が開き中位がすぼまる。Po558~562は坏であり、Po558は大型の坏で底径が広く、底部から口縁部に直線的に外傾する。皿を大型にしたような器形をとり本遺跡では珍しい。Po563~566は高台付坏である。Po563は高台部が薄く短い。Po564~566は高台が太く、「ハ」の字状に大きく開いている。

第156図は手づくね成形の土師器をまとめている。Po567は所謂コースター状の皿といわれる短口縁が内湾する皿である。「て」の字状口縁をもつPo569・572~574・577・592、平底で口縁部が外傾し、器高が低いPo570・571・576・588・590・601・611、やや丸底で口縁部が外反し器高が高いPo628~631がみられ、その他はやや丸底で口縁部が外反し器高が低い。いずれも底面は粗いナデ、未調整に近く指オサエ痕が顕著に残し、口縁部はナデを加えることを特徴とする。

第157図は口径が大きく、器高も比較的高い皿をまとめている。Po632~636・640・642・643・653・654・659・661は平底で体部から口縁部まで直立気味もしくは外傾気味に立ち上がる。Po637~639・647~649・655~658は体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がり、口縁端部が外反する。いずれも口縁部が1段ナデの京都系土師器皿のAタイプに類似し、後者は胎土が灰白色系のものが多い。京都系土師器皿のGaタイプを技術的に志向していたものと考えられる。ただし、胎土、器形、調整が京都のものとは異なるため、在地で製作されたものと考えられる。

第158図は土師器甕をまとめている。Po662~670・675は器壁の厚い体部がほぼ直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。外面はハケ調整を施すPo668・675を除き、ナデ調整を基調とする。Po671・672は器壁が薄く、「く」の字状に口縁部が外反する。いずれも外面がナデ、内面はハケ調整を施し、Po671のように外面に指オサエ痕跡を残すものもみられる。Po673・674は体部が弱く張り、口縁部が「く」の字状に外反する。外面は粗いナデ調整で指オサエ痕跡を残す。Po671~674は体部の整形や調整等は鍋に近いが、口縁部の受け口は完成しておらず、甕から鍋へ移行する過渡期の形態と考えられる。

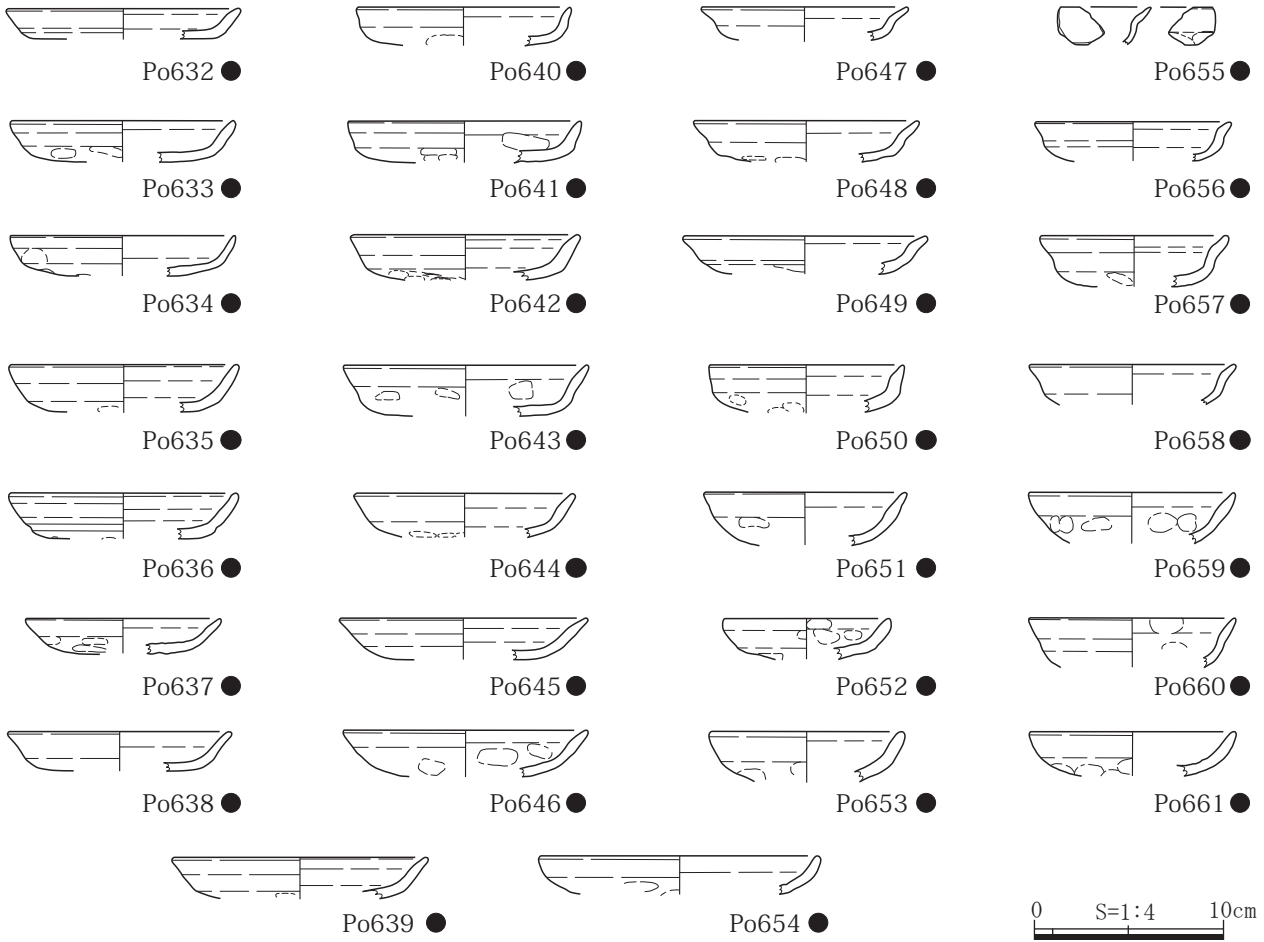
第159~161図は須恵器である。Po676~679は体部から口縁部に内湾気味に立ち上がる坏である。Po676~678は重ね焼きの痕跡を残す。Po682は器壁が厚くかえりをもつ坏の口縁端部で、時期的にも古い。Po684は高台付坏の底部である。Po685・686は底部がやや直立気味となる坏であり、器壁が薄い。Po688は広口壺の口縁部。Po689は2条突帯の付く広口壺の体部で西播磨産か。Po690・691は甕の肩部で、外面平行タタキ、内面はナデを施す。Po692は壺の底部か。内面に車輪状当て具痕が残



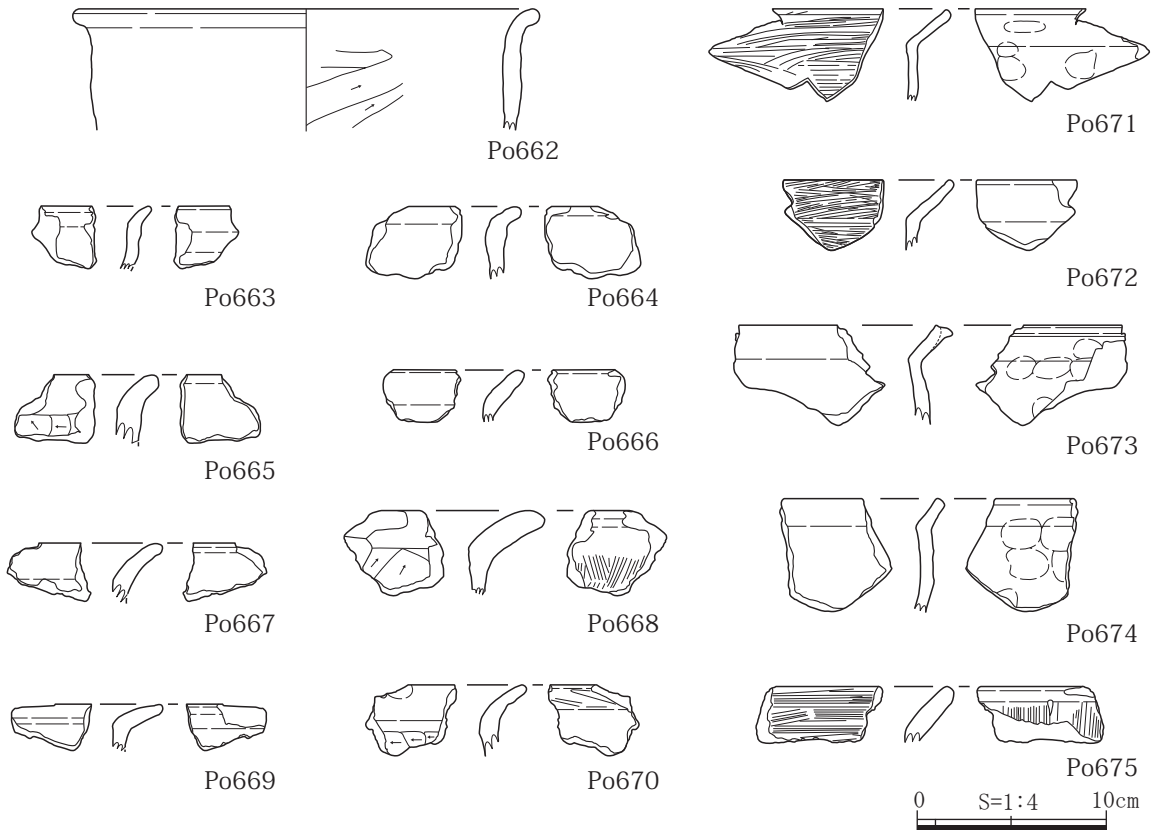
第155図 表土・攪乱土等出土遺物(1)



第156図 表土・攪乱土等出土遺物(2)

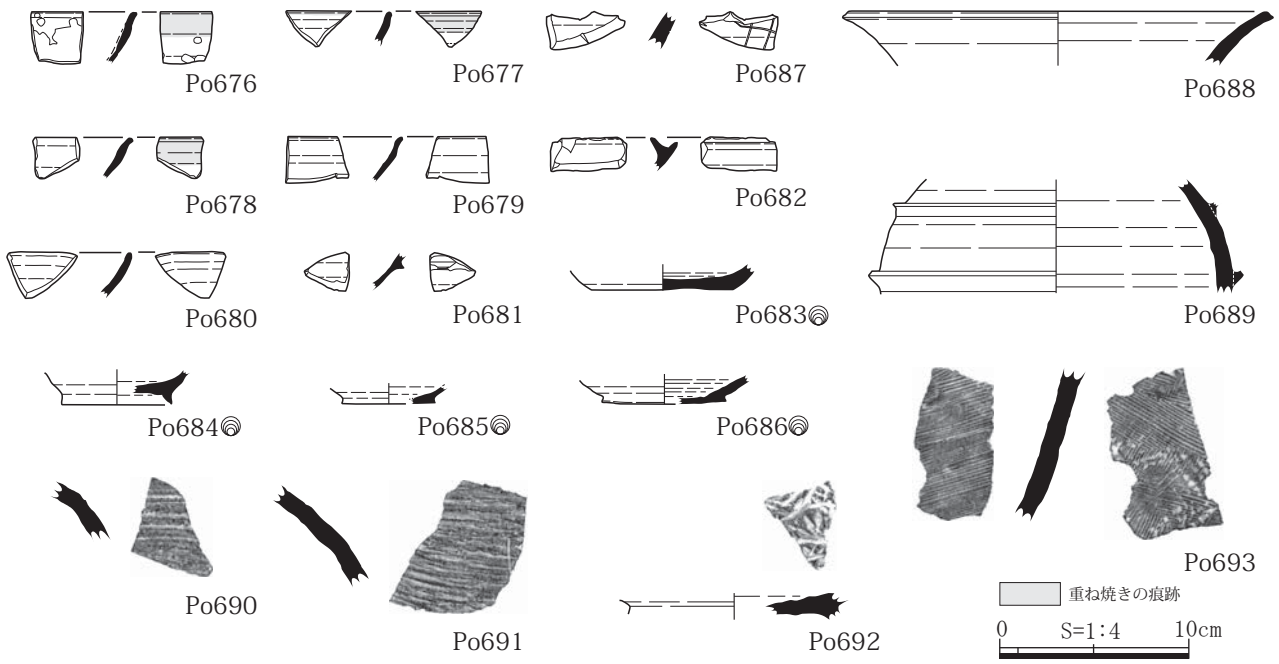


第157図 表土・攪乱土等出土遺物(3)

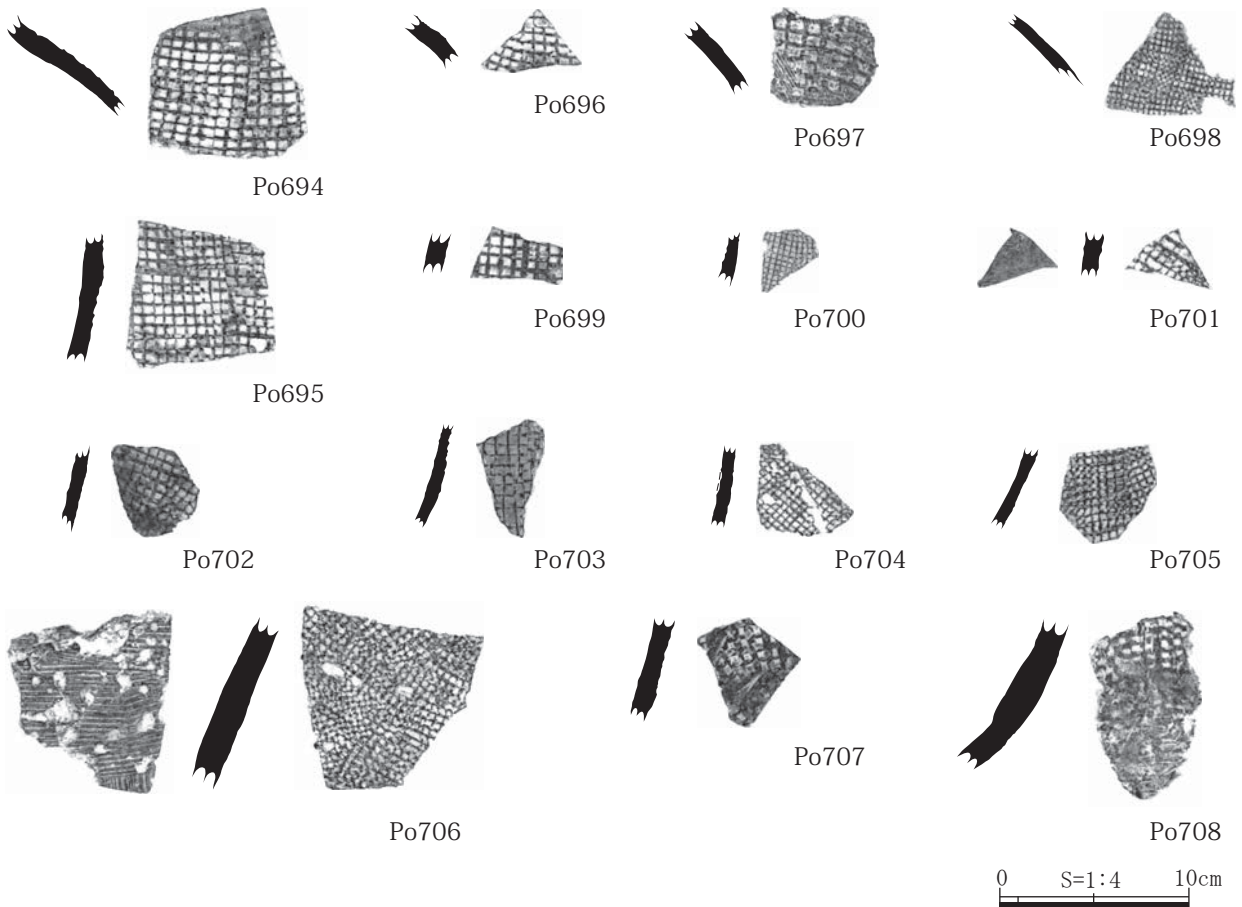


第158図 表土・攪乱土等出土遺物(4)

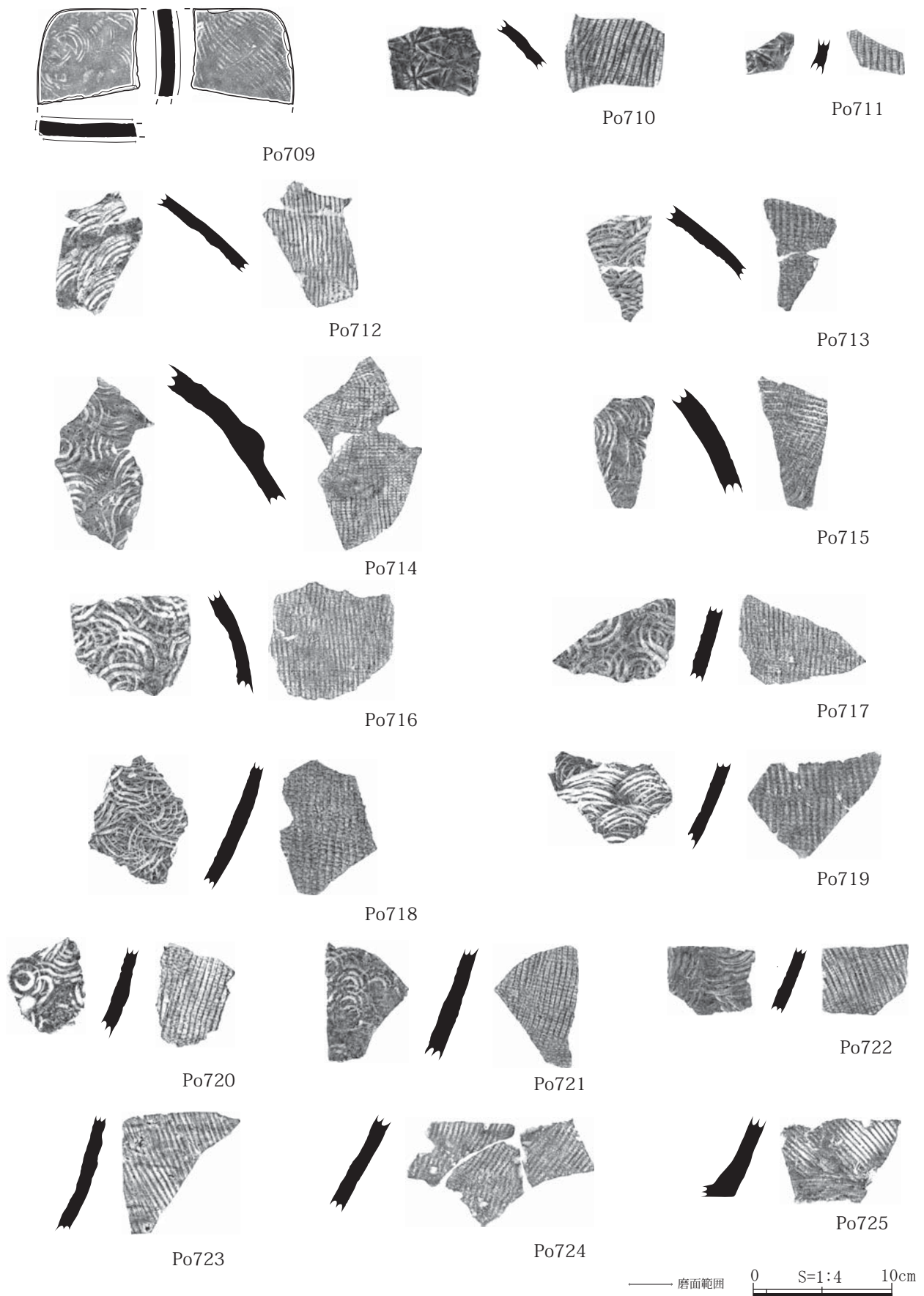




第159図 表土・攪乱土等出土遺物(5)



第160図 表土・攪乱土等出土遺物(6)



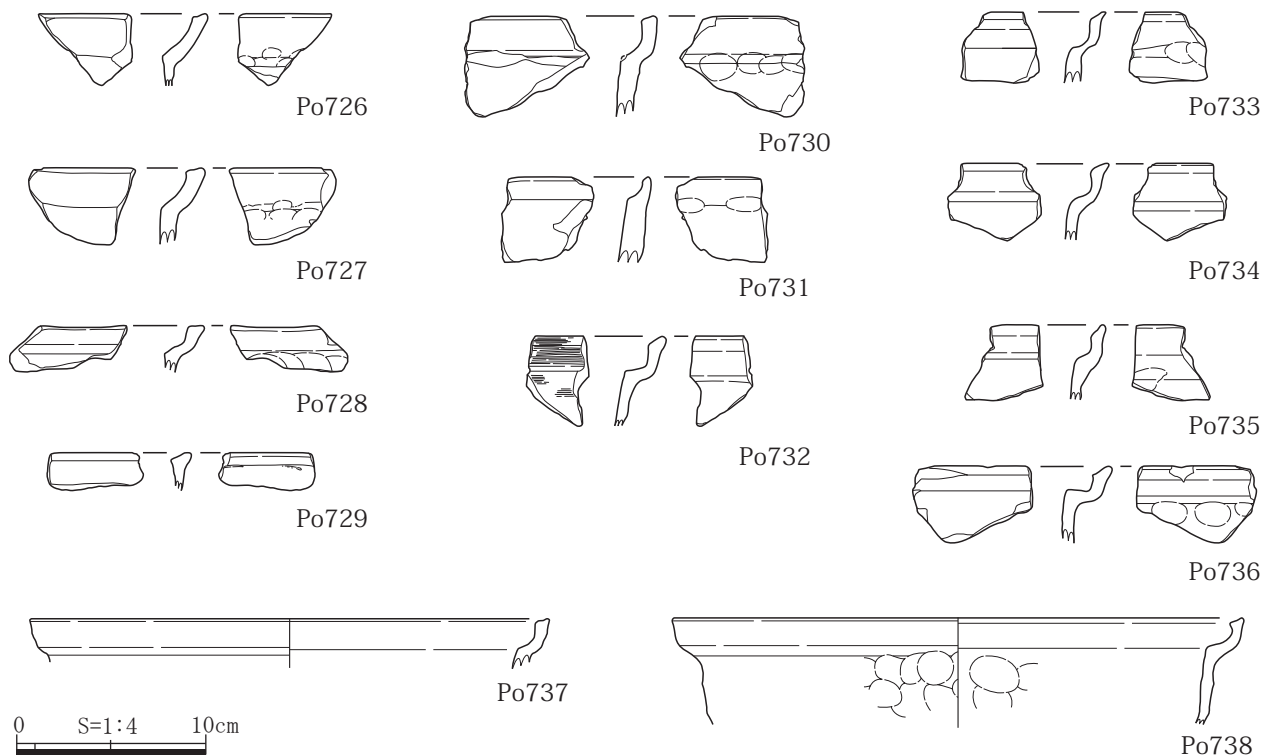
第161図 表土・攪乱土等出土遺物(7)

る。Po693は内外面カキメ調整を施す甕の体部。Po694～708は外面に格子目タタキを施す甕の一群である。内面はナデ調整を施すものを基調とするが、Po706はハケ調整がみられる。胎土や色調にバラエティーがあり、全てが勝間田産とはいえないようである。Po709～725は外面に平行タタキを施す一群をまとめている。内面は同心円状当て具を用いるものが多いが、車輪状当て具痕を残すPo710・711、ナデ調整を施すPo723～725も認められる。Po709は甕体部を転用した硯であり、側面が丁寧に整形されている。

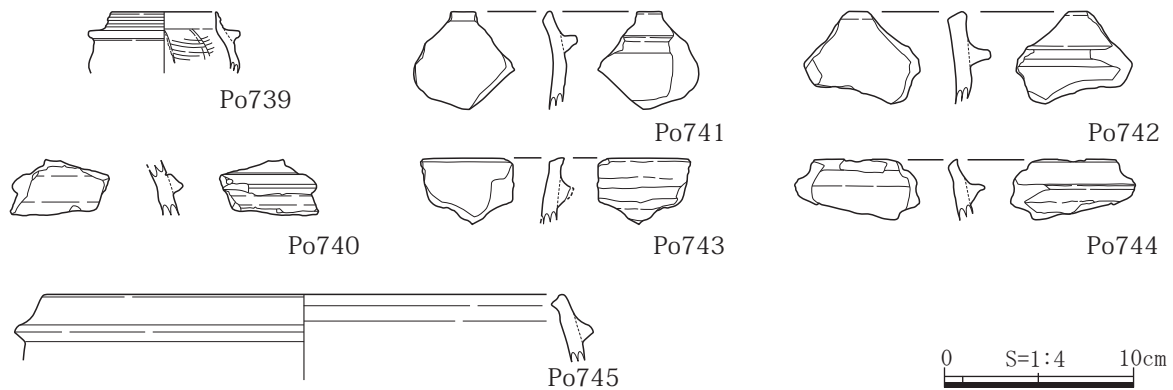
第162図は土師器と瓦質土器の鍋をまとめている。Po727・731～734は土師器、それ以外は瓦質土器である。Po726・727・730・737は口縁の受け部の段が甘く、緩やかに口縁部へ立ち上がる。口縁端部は比較的平坦である。Po731は受け部が狭く、口縁部が外側に開かない珍しい器形である。Po732・733～736・738は口縁端部が外側に向かって尖り、受け部の段が意識されてL字状に直立して口縁部へ立ち上がる。以上は概ね器壁が厚く、口縁部がヨコナデ、体部は粗いナデで指オサエの痕跡が残るものを基調とする。13世紀代に相当するものと考えられる。

第163図は土師器と瓦質土器の羽釜をまとめている。Po741は土師器、それ以外は瓦質土器である。Po739は器壁が薄く、内傾した口縁部に3条の凹線がめぐる。小型の三足土器で、器面の炭素は抜けている。楠葉型と推定される。口縁部がわずかに内傾するPo740・741・744・745と、ほぼ直立もしくは外傾気味となるPo742・743がみられる。京都系と比べ概ね器壁が厚く、屈曲が弱いようである。鍋と同じく13～14世紀代に収まるものと考えられる。

第164図は瓦質土器、須恵器、土師器の鉢をまとめている。Po746～752は須恵器の鉢である。Po746は片口鉢である。Po747・748は口縁端部が平坦である。Po749は口縁端部が内折する。Po750は口縁端部が内剥ぎ状になっている。Po751は口縁端部がやや外剥ぎ状となる。



第162図 表土・攪乱土等出土遺物(8)



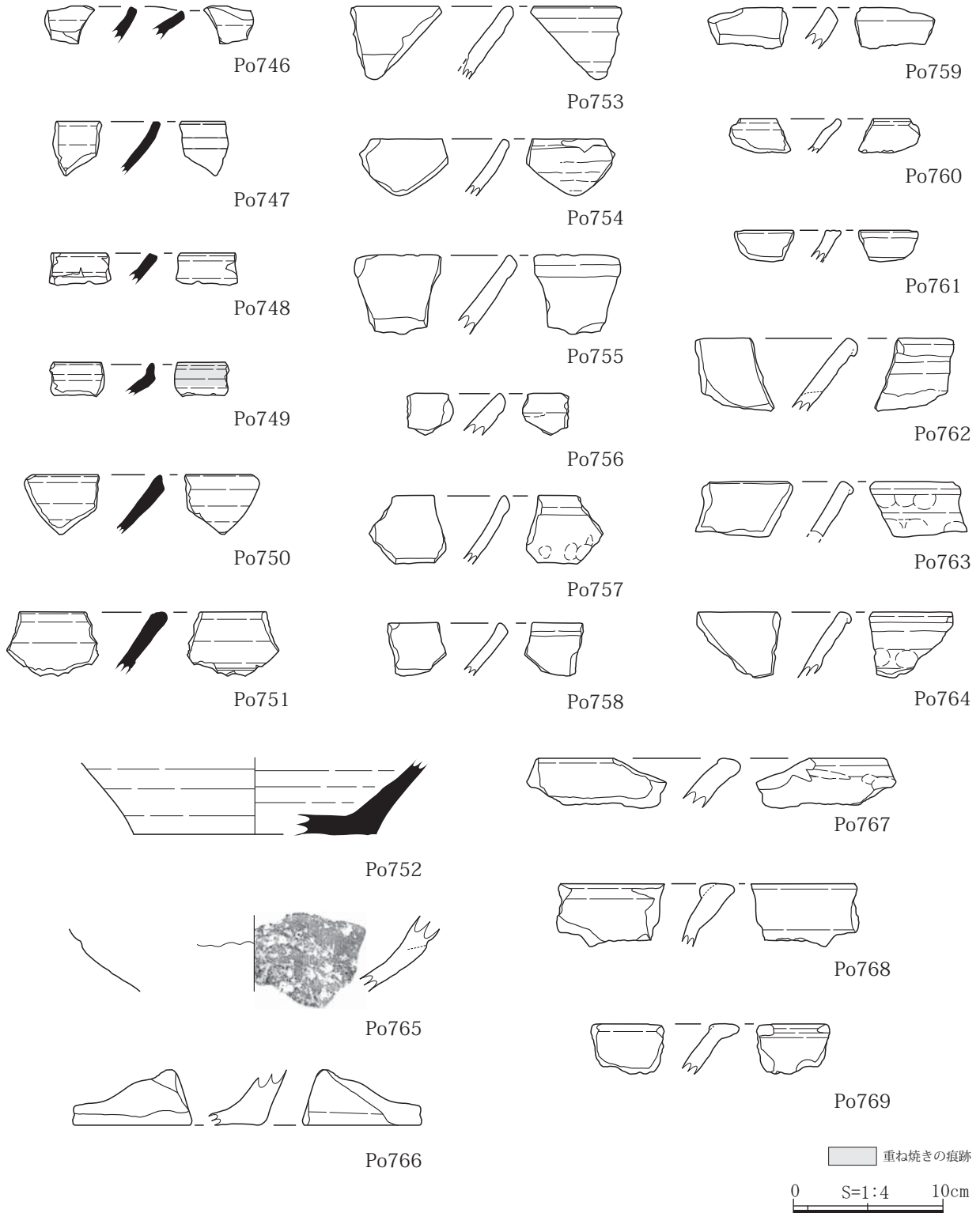
第163図 表土・攪乱土等出土遺物(9)

Po753・755～758・763・767～769は瓦質土器、Po754は土師器の鉢であり、Po753・754のように口縁端部を丸く整形するもの、Po755～757・763の端部外側が弱く肥厚するもの、Po767～769は口縁端部が内側もしくは外側に張り出して肥厚した火鉢である。Po769は13世紀前半頃の所産である。

Po759～762・764は瓦質土器の鉢である。端部外側が面取りされるPo759、内側が窪むPo760、外側に張り出すPo761、外側に折り返して肥厚させるPo762・764などバラエティーに富む。口縁端部を外側に肥厚させるものは、体部外面に輪積痕や指オサエの痕跡を残すものがみられ、鍋等と同じ製作技術である。Po765は土師器の播鉢で浅い播目が残る。Po766は土師器の鉢の底部である。以上は、12世紀終わりから13世紀半ばに該当しよう。

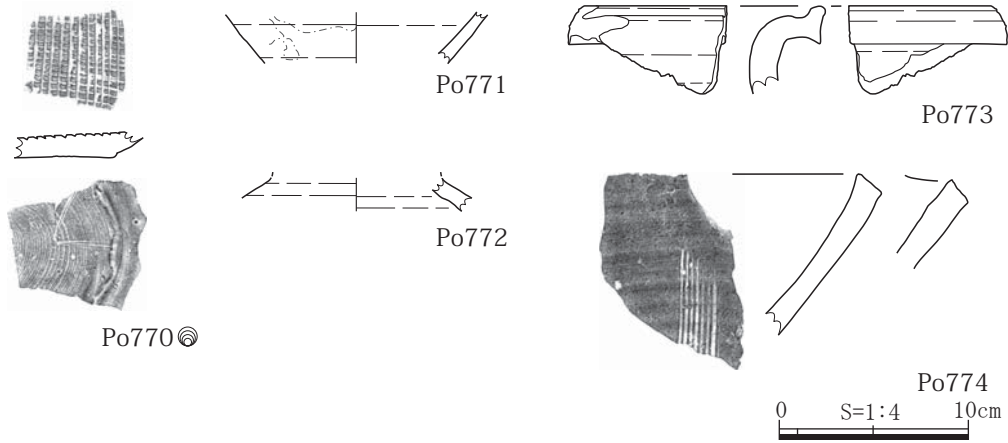
第165図は国産陶器を図示している。Po770は瀬戸系の卸皿の底部で胎土が灰白色からにぶい黄橙色を呈す。Po771・772は瀬戸美濃系の碗と壺であり、施釉がなされている。Po773は口縁部が外側に湾曲して口縁端部が直立する越前焼の甕口縁部。Po774は口縁端部が面取りされる備前焼の播鉢である。Po774は14世紀前葉から中葉頃の所産であろう。

第166図は貿易陶磁器の白磁と青白磁を図示している。Po775～777は体部が内湾して丸みを帯び、Po776・777は小さな玉縁口縁をもつ。Po775は碗Ⅱ類、Po776・777は碗Ⅱ 1類に比定される。Po778～781はやや肉厚な玉縁をもつ。Po784は幅広の高台で削り出しが浅い。これらは碗Ⅳ類に該当する。Po782・783は内面見込みに段を有する碗Ⅳ類～Ⅷ類(Ⅶ類を除く)である。Po785は体部が丸みを帯び、口縁部に向かって外傾する碗Ⅴ 1類もしくはⅧ 2類。Po786・787は内面見込みの釉を環状に掻き取っている碗Ⅷ類である。Po789は口縁端部が外反し、釉を掻き取る。碗Ⅸ類に相当しよう。Po788は体部から口縁部が内湾気味に立ち上がる碗Ⅴ 1類もしくはⅥ 1類か皿Ⅱ類である。Po791～793は高台が低く幅広の皿Ⅱ類。Po795は口縁端部の釉が掻き取られ、外反気味となる皿Ⅸb類もしくはⅨc類。Po796は体部中位で内面に花文状の櫛描文が施されている。Po797は口縁部が外傾気味となって立ち上がる皿Ⅶ類もしくは森田D群。Po798は底部から体部が内湾する森田B群もしくはD群に比定される。Po802・803は壺の体部であり、内面は前者が無釉、後者は施釉されている。壺Ⅱ類もしくはⅢ類か。Po799は胎土が硬質で体部から口縁が内湾気味に立ち上がる。森田D群皿に相当する。Po800は口縁端部が外反する森田E群の皿。Po801は小坏であろうか。森田E群に該当する。Po804～806は青白磁である。Po804は梅瓶の可能性はある。Po805は印花文を有する坏であり、B'に比定される。Po806は無釉の削り出し高台で見込みには圏線を有する。

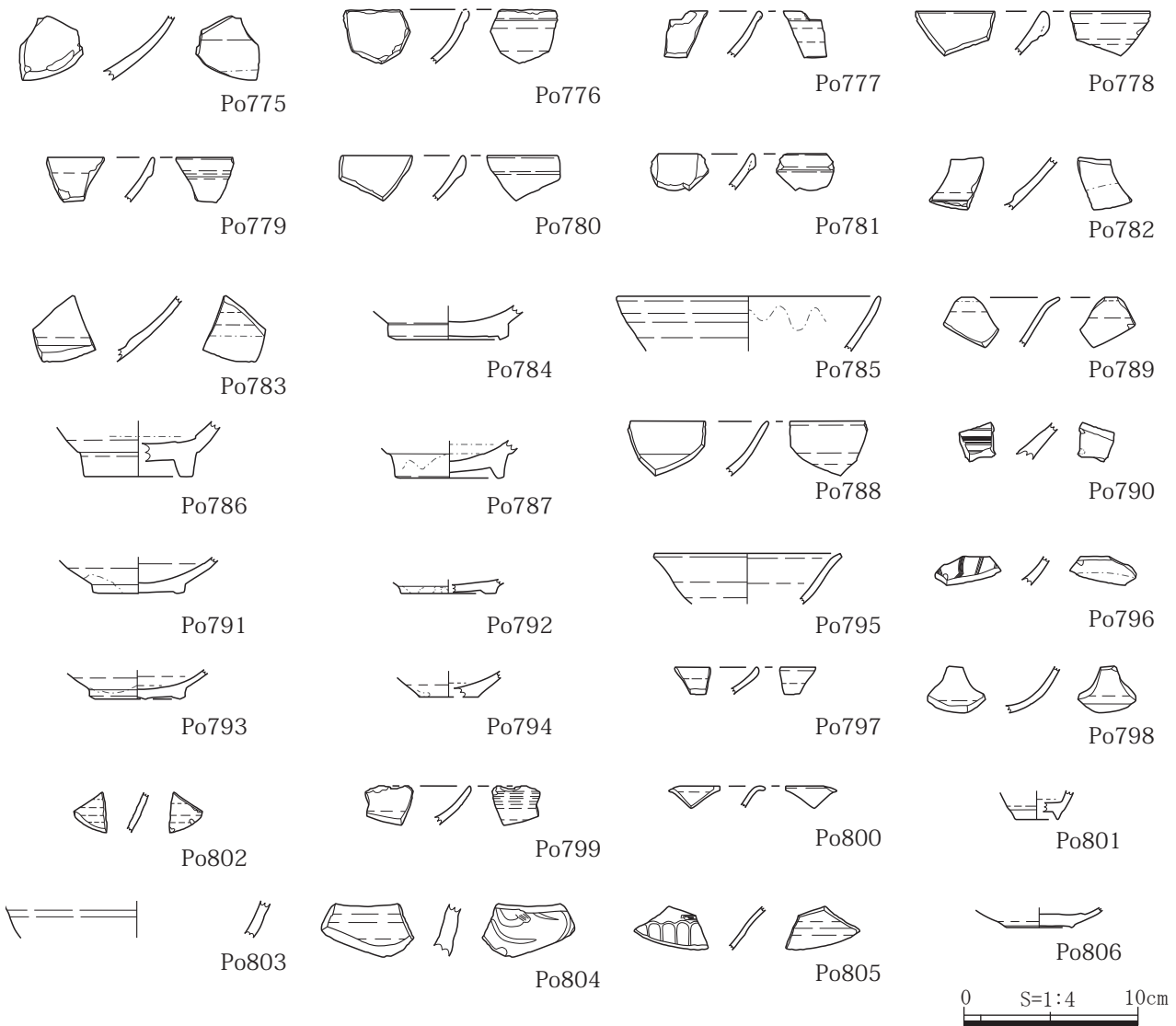


第164図 表土・攪乱土等出土遺物(10)

第167図は貿易陶磁器の青磁と朝鮮陶器及び中国陶器をまとめている。Po807は中国産青磁または陶器水注である。Po808は越州窯系Ⅲ類もしくは龍泉窯系Ⅰ類の水注把手と見られる。Po809は龍泉窯系の椀Ⅰ類の口縁。Po810は龍泉窯系の碗Ⅰ 2～4類の体部。Po811は龍泉窯系の碗Ⅰ 4類の口縁から体部片。Po812・813は体部外面に連弁文、鎬連弁文をもつ龍泉窯系の碗Ⅱb類。Po814は体部内面に劃花文を有する龍泉窯系碗Ⅲ 1 B類。Po815は外面に連弁文を有する龍泉窯系の碗Ⅲ 2 C類に比定



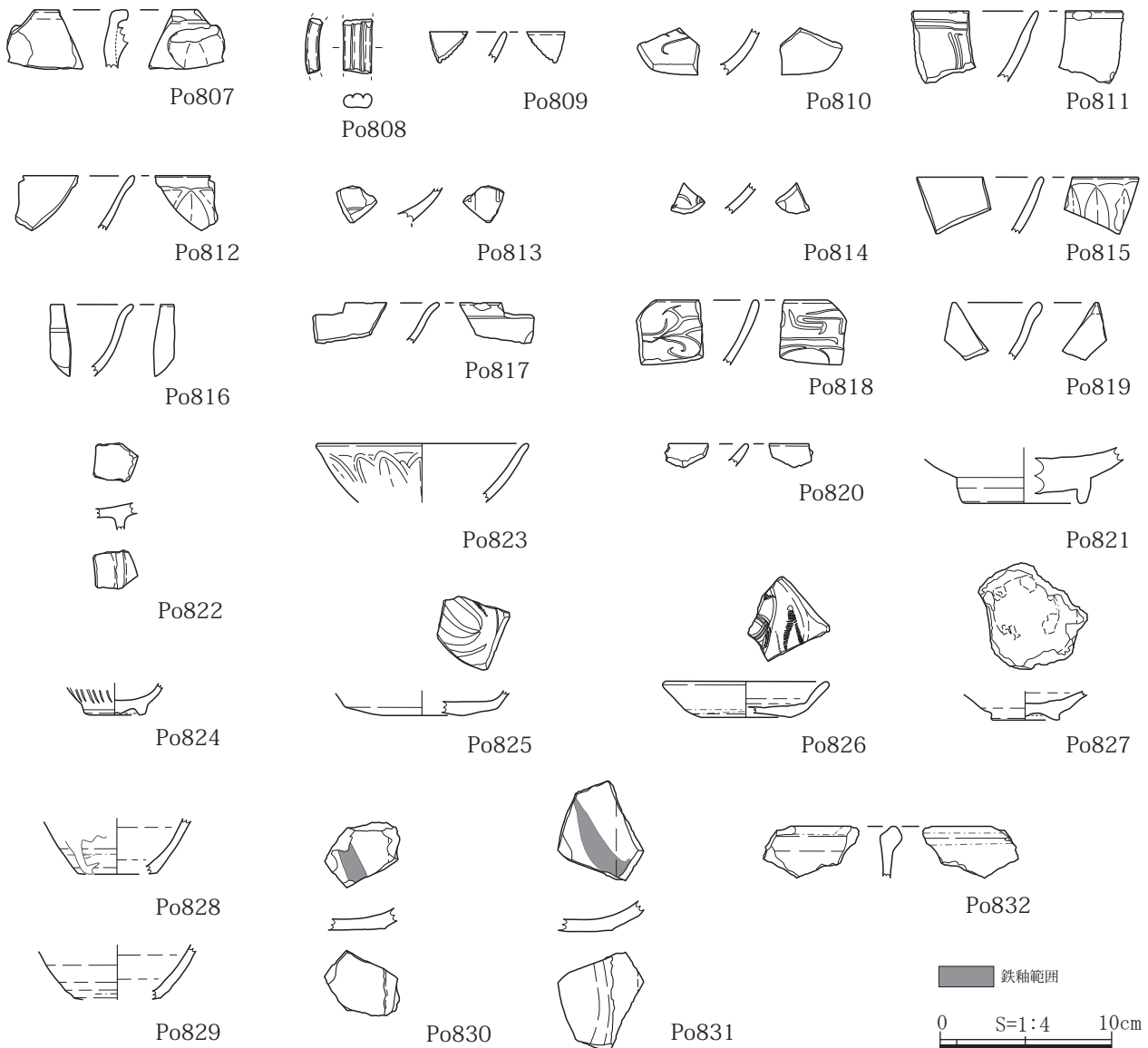
第165図 表土・攪乱土等出土遺物(11)



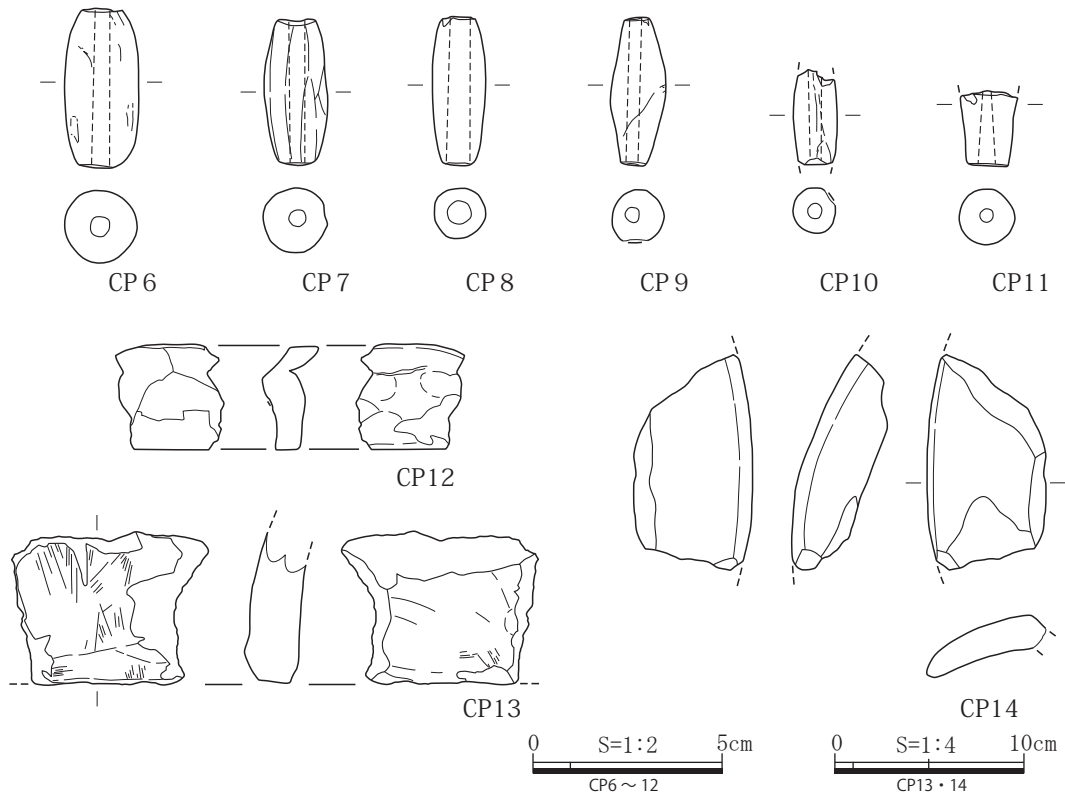
第166図 表土・攪乱土等出土遺物(12)

される。Po816は口縁端部が外反する龍泉窯系の碗Ⅳ類。Po817は元～明代の碗である。Po818は内外面に雷文を有する上田CⅡ類の碗。Po819は口縁が外反する碗で上田DⅡ類に比定される。Po822は大坏の高台部でⅢ類に相当する。Po823は外面に連弁文を有する龍泉窯系の小碗Ⅱb類。Po820は碗の口縁部である。Po821は碗高台部で器壁が厚い。Po824は小壺あるいは合子の身であり、Ⅳ類もしくは明に比定される。Po825は体部中位で屈曲し口縁部が立ち上がる龍泉窯系の皿Ⅰ-1c類である。内面に片彫花文を施している。Po826は体部中位で屈曲し、内面が段状となる同安窯系の皿Ⅰ-1b類。内面は篋による文様とジグザグ状の櫛点描文を有している。Po827は朝鮮陶器の皿で内面に胎土目が付着している。Po828・829は天目碗の体部から底部である。Po830～832は中国産陶器の盤であり、前二者は内面に鉄絵を有する。

第168図は土製品をまとめている。CP6～11は上下端がすぼまる紡錘形の土錘である。CP12は不明土製品。Po13・14は竈の庇と本体の裾部である。CP13は外面にハケ、内面はナデ調整を施している。



第167図 表土・攪乱土等出土遺物(13)



第168図 表土・攪乱土等出土遺物(14)

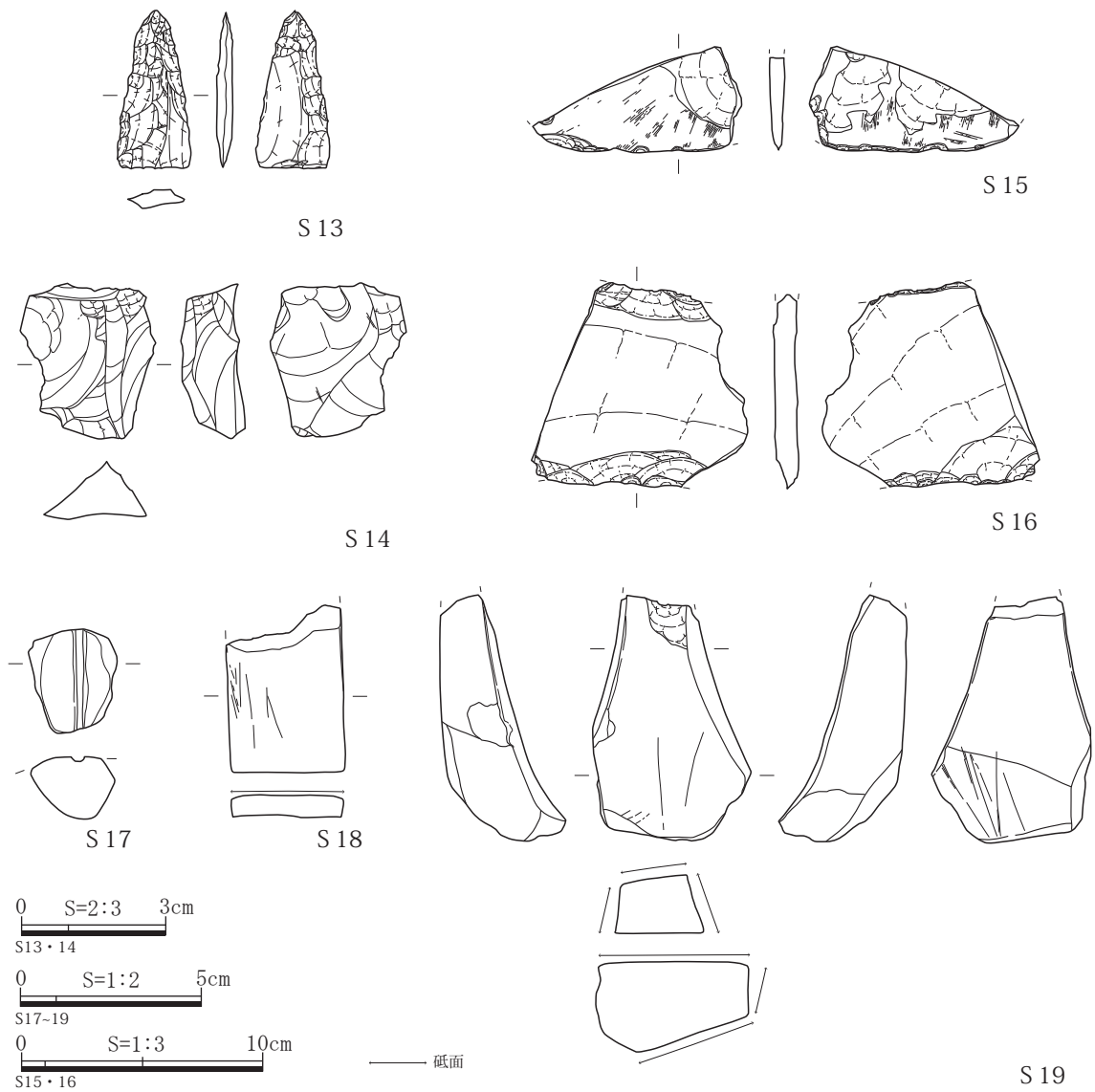
169図は石器をまとめている。S 13は無斑晶安山岩製の平基無茎式石鏃である。押圧剥離による成形がなされ、裏面に素材の剥離面を残す。S 14は黒曜石製の剥片。S 15は板状安山岩製の石庖丁であり、背部を中心に大きく欠損している。表裏面は擦痕が顕著に残り、刃部は摩滅している。S 16は板状安山岩製の大型直縁刃石器である。上下の両側縁に二次加工を加える。S 17は花崗岩製の砥石。中心部に断面U字状の溝が形成されている。S 18は長方形に成形された砂岩製の砥石である。S 19は撥形を呈するアプライト製の砥石である。背部の一部に線状の擦痕が顕著に観察される。

実測図非掲載遺物(表41・42、図版59・90・91)

小片のため図化はできないが、以下は観察表に特徴を記し巻末図版に写真を掲載した。なお、第6章第2節の貿易陶磁の考察では、実測図を掲載していないものも含め検討を行っている。

図版59-3は被熱粘土塊等をまとめている。CP16は掘立柱建物13の3120柱穴の柱抜き取り痕跡から出土したもので、長軸約2cm、厚さ約1cmを測る。CP17は掘立柱建物19の3163柱穴の柱抜き取り痕跡から出土したもので、長軸約1cm、厚さ1cmを測る。CP18は第2遺構面3264柱穴の埋土から出土しており、長軸約1.5cm、厚さ約1cmを測る。色調は黒味を帯びている。CP19は第2遺構面3306柱穴の柱抜き取り痕跡から出土している。器面の片面には黒褐色の薄い膜のようなのみられ、漆の可能性も考えられる。長軸約5.5cm、厚さ約1cmを測る。CP20は第2遺構面3056土坑1層から出土している。表面は褐灰色、内面はにぶい橙色を呈している。長軸約1.5cm、厚さ約1.5cmを測る。CP21は9F-9eグリッドⅢ-1層より出土している。表面はオリーブ黒から灰オリーブ色、内面はにぶい橙色を呈している。羽口の先端部の可能性も推測される。長軸約2.5cm、厚さ約1cmを測る。





第169図 表土・攪乱土等出土遺物(15)

図版90のPo971～980は青磁である。

図版91のPo912～969は白磁、Po970は青白磁である。

## 第5項 その他出土遺物

平成31年2月の橋本久和氏による調査指導及び令和元年6月に開催した中世土器検討会で、平成28・30年度調査で出土した中世土器の検討を行った。その結果、主に表土や攪乱土等から出土していることから前回の報告書で非掲載となった土器についても、遺跡を評価する上で重要なものが含まれていることが明らかとなり、ここでは追加掲載する。

### 鍋(第170・171図、表38～40、図版82～85)

Po833～871は瓦質土器の鍋をである。受け部が狭く、口縁端部がほぼ平坦もしくは丸みを帯びるPo833・834・838・841～843・847、口縁端部が外側へ張り出すPo835～837・839・840・844～846・848～853、受け部が比較的広く、口縁端部が斜め上方に張り出すことにより二股状になるPo854～870がみられる。調整は口縁外面がヨコナデ、体部は粗いナデと指オサエを基調とする。内面は丁寧なナデを施すPo838・841・844～846・849～852・854～857・859・860・862～870、内面にハケ調整を施すPo835～837・839・840・842・843・847・848・853・858・861・871がある。

### 羽釜(第172図、表40、図版86)

Po882・885・891・893は土師器、それ以外は瓦質土器である。口縁端部が平坦なPo874・879・882・883・888～892、丸みを帯びるPo881・884・885・893、口縁端部が上方に伸びて尖るPo872・873・875～878がみられる。以上は口縁部が内傾する。Po886・887は体部から口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が外側に張り出す。いずれも小型という特徴を示す。Po894は内湾する口縁に3段の凹みがみられ、内面はハケ調整を施す。搬入品の可能性がある。羽釜は体部外面が粗いナデ、内面はナデを基調とするが、内面にハケを施すPo873～876・880・883がある。

### 甕・鉢・竈(第173図、表40・41、図版81)

Po895・899は口縁端部が平坦な鉢と片口鉢である。後者は外面に指オサエ痕を顕著に残し、内面はハケ調整を施す。Po900～906は口縁端部が外側に肥厚する鉢と片口鉢である。なおPo905は土師器、それ以外は瓦質土器である。内面調整はナデのPo900～902・904～906とハケのPo903がみられる。

Po896～898は口縁部が「く」の字状に外反する土師器甕であり、内外面ハケ調整を施している。

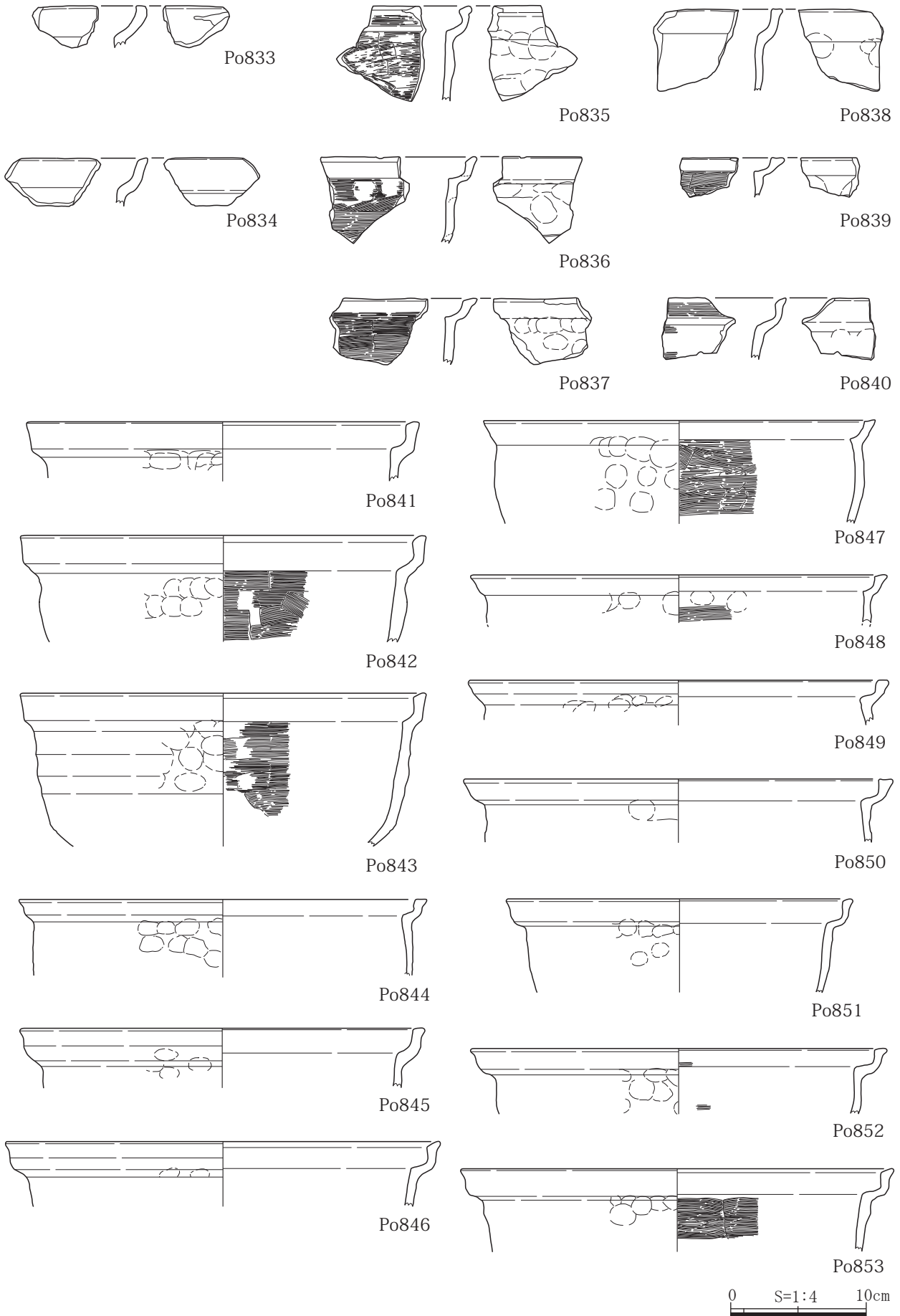
CP15は竈の本体の裾部で、外面がハケ、内面がヘラケズリの調整を施している。

### 須恵器・貿易陶器・国産陶器(第174図、表41、図版64・90・92)

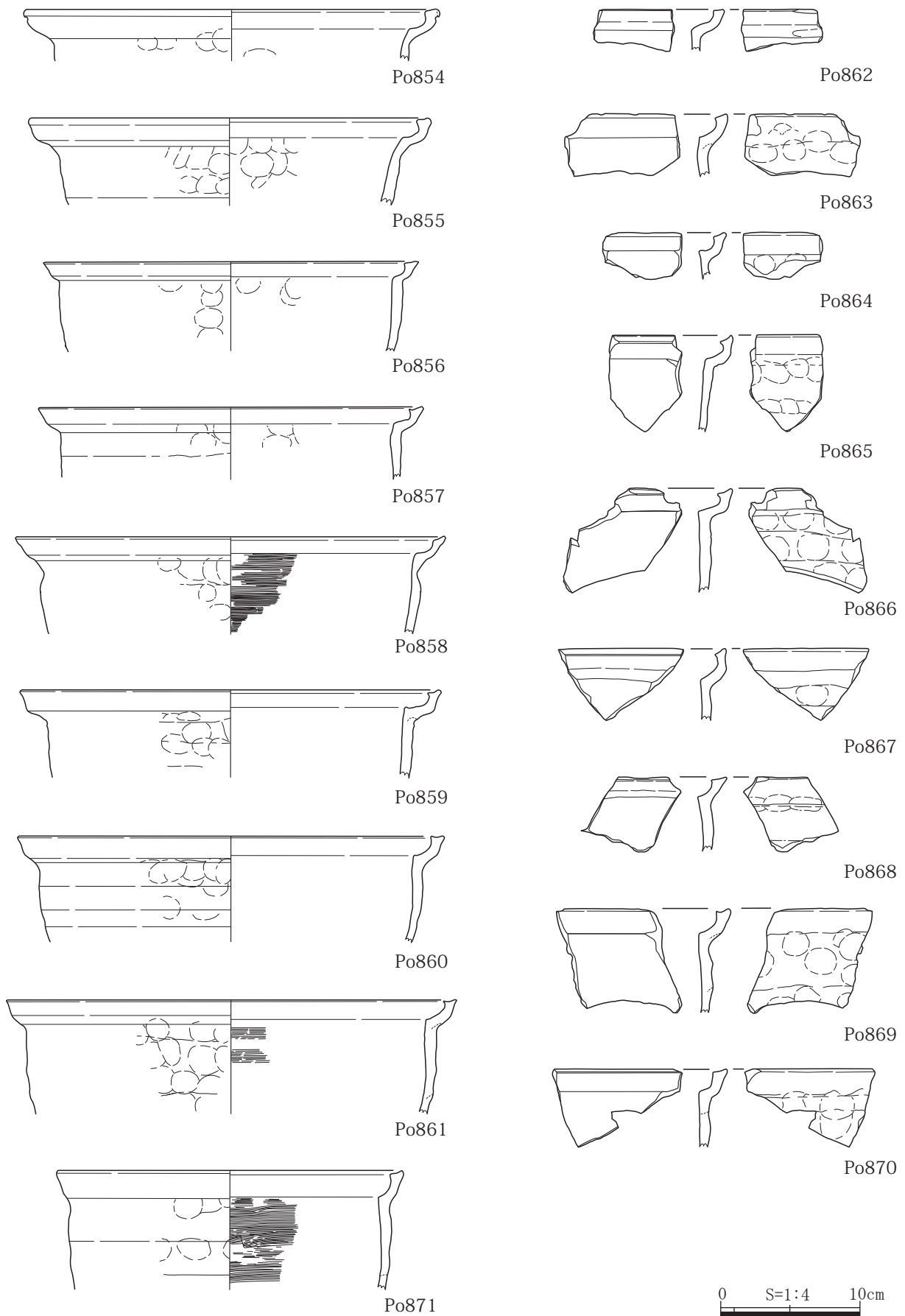
第171図は須恵器と貿易陶器及び国産陶器である。Po907は須恵器甕の肩部で、外面は平行タタキ、内面は同心円状当て具痕を残す。Po908は中国産雑釉の壺体部である。Po909～911は備前焼もしくは常滑焼の甕体部である。

#### 【註】

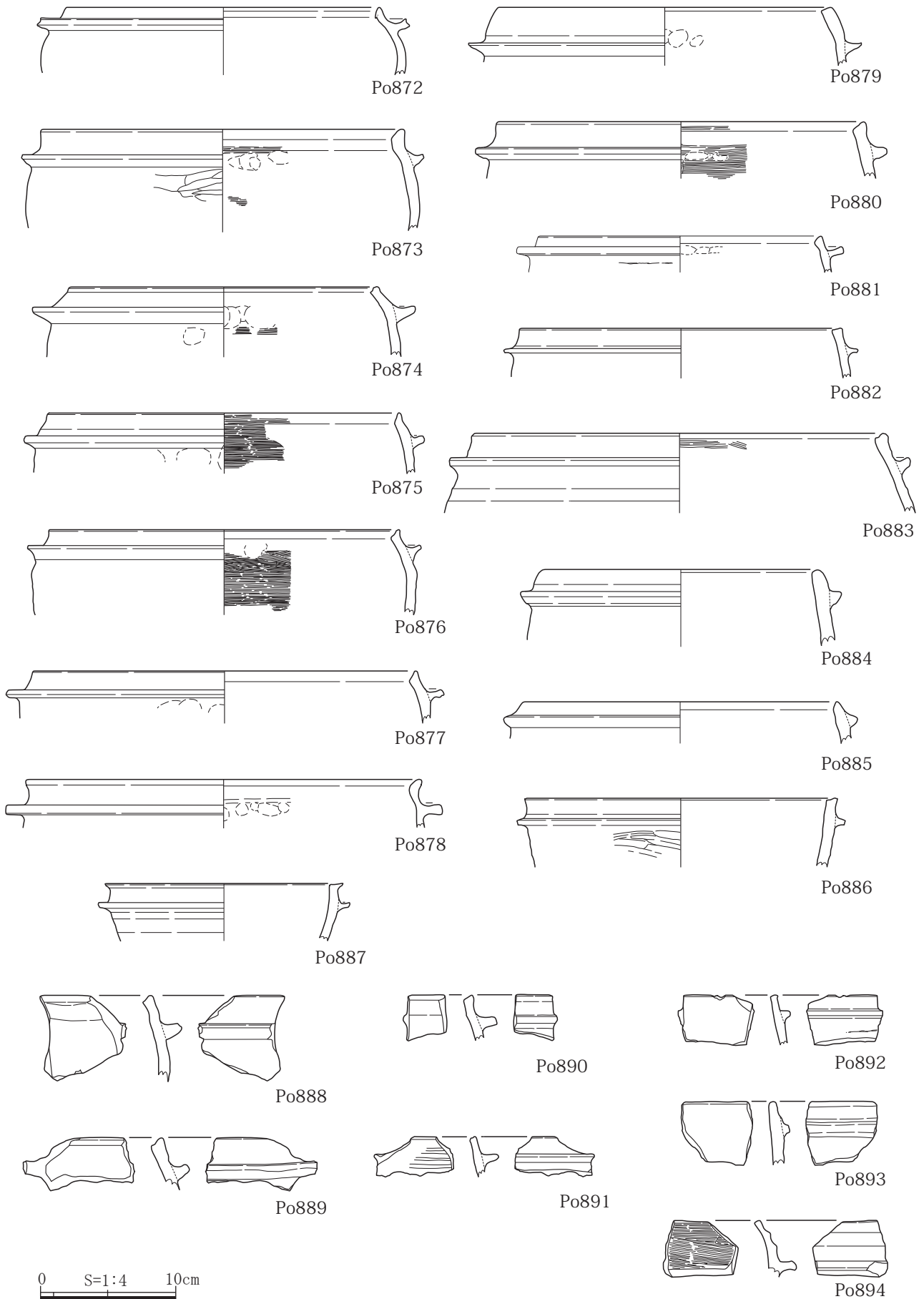
- (1) 公益財団法人鳥取県教育文化財団2018「第5章 第1節 山ノ下遺跡の自然科学分析」P210『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書120



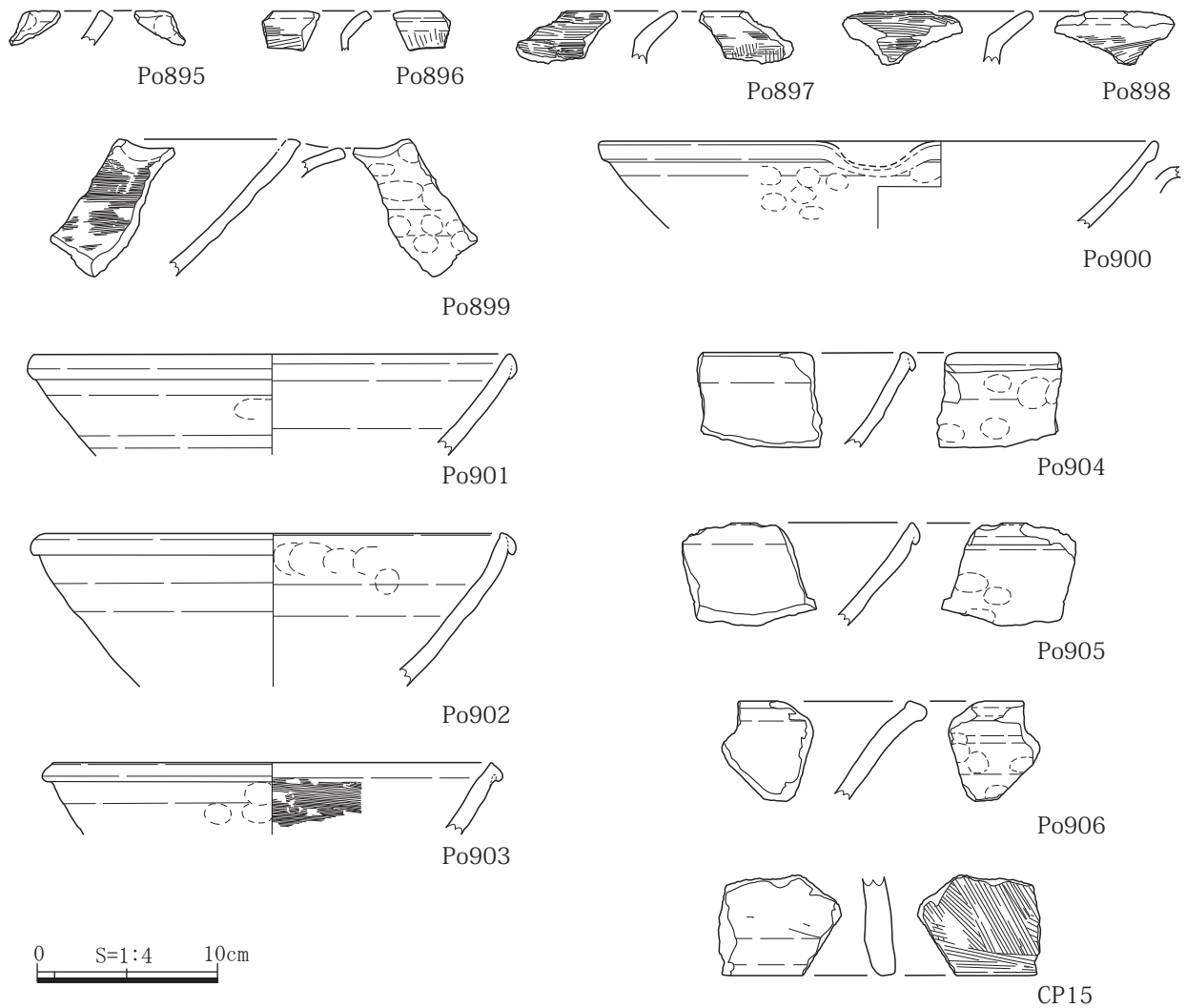
第170図 その他出土遺物(1)



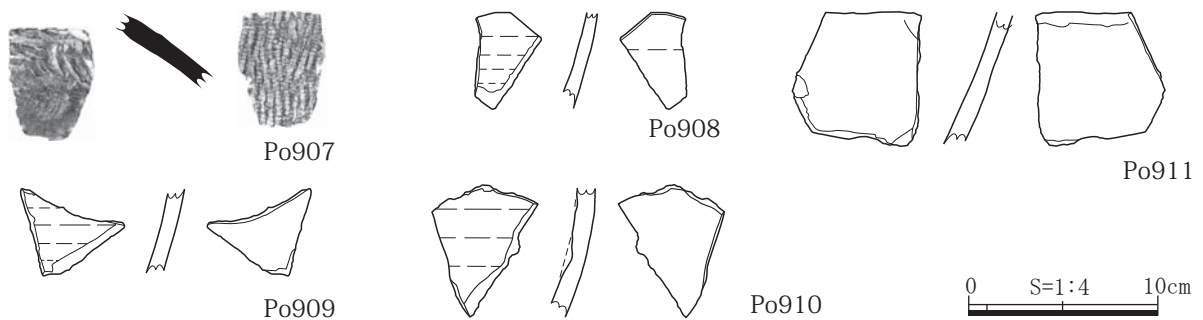
第171図 その他出土遺物(2)



第172図 その他出土遺物(3)



第173図 その他出土遺物(4)



第174図 その他出土遺物(5)

- (2) (1)同書「第6章 第1節 第1項 山ノ下遺跡の遺構」P229
- (3) (1)同書「第3章 第3節 検出した遺構と遺物」第93図、「第5章 第1節 山ノ下遺跡の自然科学分析」P210
- (4) (1)同書「第3章 第3節 検出した遺構と遺物」第94図Po129
- (5) (1)同書「第3章 第3節 検出した遺構と遺物」P57
- (6) (1)同書「第3章 第3節 検出した遺構と遺物」第154図Po244

## 第4節 掘立柱建物計測表・遺物観察表

第14表 掘立柱建物計測表

建物名称	建物区分	地区 T45-6j	規模(m)		面積(m <sup>2</sup> )		主軸方位	調査年度	備考
			桁行	梁行	建物全体				
掘立柱建物1	-	8E-10c-10d	建物全体		建物全体		N-85°-W	H28	南西辺に廂あり 梁行の北側は調査区外のため未調査
			2間(6.1)	1間(2.0)以上	12.2以上				
			身舎のみ		身舎	廂			
			2間(6.1)	-	-	12.2			
掘立柱建物2	総柱建物	9D-1j	2間(2.9)	2間(北側:2.2) (南側:2.5)	7.3		N-15°-E	H28	
掘立柱建物3	側柱建物	9E-1c-1d	2間(4.5)	1間(西側:2.7) (東側:2.4)	10.8		N-79°-W	H28	
掘立柱建物4	総柱建物?	9E-1c-2c	建物全体		建物全体		N-11°-E	H28	西辺に廂あり
			3間(西側:8.2) (東側:8.4)	3間(5.2)	43.7				
			身舎のみ		身舎	廂			
掘立柱建物5	総柱建物?	9E-1c-2c-1d-2d	3間(西側:7.8) (東側:7.9)	2間(北側:4.2) (南側:4.6)	36.3		N-15°-E	H28	
掘立柱建物6	総柱建物?	9E-1e-2e	建物全体		建物全体		N-32°-E	H28	北西辺に廂あり 39溝を伴う
			2間(西側:5.1) (東側:5.3)	3間(北側:5.1) (南側:5.3)	26.0				
			身舎のみ		身舎	廂			
掘立柱建物7	総柱建物?	9E-4g	3間(6.1)	1間(1.7)以上	10.4以上		N-30°-E	H28	北東辺に廂が付く梁間は1間以上と想定される総柱建物となる可能性が高い
掘立柱建物8	側柱建物	9E-4c-4d	建物全体		建物全体		N-30°-E	H28	北西辺に廂が付く梁間は1間以上と想定される総柱建物となる可能性が高い
			4間(9.4)	1間(1.9)以上	17.9以上				
			身舎のみ		身舎	廂			
掘立柱建物9	側柱建物	9E-1b-2b	2間(5.2)	1間(北側:3.4) (南側:3.3)	17.2		N-26°-E	H28	
掘立柱建物10	側柱建物	9E-2e-3e	2間(西側:6.3) (東側:6.4)	2間(北側:3.8) (南側:3.6)	24.3		N-25°-E	H28	
掘立柱建物11	側柱建物	9E-2b-3b-2c-3c	2間(西側:5.4) (東側:5.6)	2間(3.3)	17.8		N-26°-E	H28	
掘立柱建物12	総柱建物	9F-10d~10g, 10F-1d~1g	建物全体		建物全体		N-79°-W (N-11°-E)	H28・30	南辺に廂が付く
			9間(20.55)	4間(8.05)	165.4				
			身舎のみ		身舎	廂			
掘立柱建物13	総柱建物	10F-1e~1g- 2f~2h-3f	8間(19.64)	5間(12.1)	237.6		N-79°-W (N-11°-E)	H28・30	
掘立柱建物14	側柱建物	9E-6g-7g-6h-7h	3間(7.1)	3間(6.0)	42.6		N-62°-W	H28	中央部分は溝状の擾乱により破壊され桁行は確定しない
掘立柱建物15	総柱建物	9F-10c-10d	2間(北側:4.2) (南側:4.0)	2間(西側:3.5) (東側:3.4)	14.0		N-78°-W	H28	
掘立柱建物16	総柱建物?	10F-3f-4f-3g-4g	5間(12.2)	3間(7.0)	85.4		N-8°-E	H28	開場整備と現代擾乱により中央部は削割を受ける桁行は5間と想定
掘立柱建物17	側柱建物	10F-1e-2e-1f-2f	2間(5.0)	2間(西側:4.8) (東側:5.0)	24.0		N-79°-W	H28	
掘立柱建物18	総柱建物	9F-8a-9a-8b-9b	3間(8.1)	2間(4.6)	37.3		N-75°-W	H28	
掘立柱建物19	総柱建物	9F-10g, 10F-1g-1h	建物全体		建物全体		N-11°-E (N-79°-W)	H30	東西辺に廂が付く
			5間(11.4)	4間(7.1)	80.9				
			身舎のみ		身舎	廂			
掘立柱建物20	総柱建物	9F-9e-9f-10e-10f	建物全体		建物全体		N-12°-E	H30	東西・北辺の三辺に廂が付く 北辺の廂柱筋は水路にかかるため不明 身舎・廂の規模は推定値
			4間(8.6)	4間(8.1)	69.7				
			身舎のみ		身舎	廂			
掘立柱建物21	総柱建物	9E-5h-5i	建物全体		建物全体		N-17°-E	H30	北辺に廂が付く
			3間(4.88)	2間(3.9)	19.0				
			身舎のみ		身舎	廂			
			2間(3.6)	2間(3.9)	14.0				5.0

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第15表 土器及び陶磁器観察表(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区T45-6j-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po1	19	54-3	449	9F-8e	1面	3022溝	埋土	須恵器 甕	△3.9	—	—	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po2	19	54-3	462	9F-8d	1面	3022溝	埋土	瓦質土器 鍋	△3.3	—	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部横ナデ、体部粗いナデ・指オサエ 内面：ナデ	密良好	内外面とも黒色	外面一部煤付着
Po3	19	54-3	450	9F-8d	1面	3022溝	埋土	瓦質土器 鍋	△4.1	—	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部横ナデ、体部粗いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ナデ	密良好	外面：黄灰色・黒褐色 内面：灰白色・黄灰色	外面煤付着
Po4	19	88-89	790	9F-8c	1面	3022溝	埋土	白磁 皿	△1.8	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	皿・森田D群
Po5	19	87-1 87-2	2620	9F-8d	1面	3022溝	埋土	青磁 碗	△3.7	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：オリーブ灰色	龍泉窯系 碗 I 1類
Po6	19	92-1	777	9F-8d	1面	3022溝	埋土	国産陶器 壺	△2.0	—	—	外面：施釉、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	施釉部：灰黄色 内面：灰白色	
Po7	19	92-1	450	9F-8d	1面	3022溝	埋土	陶器常滑 甕	△4.6	—	—	外面：タタキ 内面：ナデ	密良好	外面：暗灰色 内面：灰色	
Po8	19	54-2	1766	9F-9c	1面	3035耕作溝群	埋土	土師器 皿	△1.3	—	—	内外面とも口縁部横ナデ、体部下ナデ	密良好	外面：橙色・褐灰色 内面：ぶい褐色・ぶい褐色	手づくね成形
Po9	19	54-2	4348	9F-10f	1面	747溝群	埋土	須恵器 甕	△6.6	—	—	外面：タタキ 内面：ナデ	密良好	内外面とも灰色	
Po10	19	54-2	3458	9F-10e・f	1面	747溝群	埋土	土師器 甕	△1.9	—	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部横ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：黒色 内面：ぶい黄褐色・褐灰色	外面煤付着
Po11	19	54-2	3472	9F-10f	1面	747溝群	埋土	土師器 甕	△3.9	—	—	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：黒色・灰黄褐色 内面：ぶい黄褐色・褐灰色	
Po12	19	54-2	3247	9F-10e・f	1面	747溝群	埋土	ミニチュア 土器	△3.8	※6.8	—	外面：口縁端部ナデ、口縁部横ナデ・指オサエ 内面：ナデ	密良好	外面：灰黄色 内面：淡黄色	
Po13	42	48-2	2702 2685	9F-10f	1面	掘立柱建物12 3091柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	1.8	8.4	4.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：ぶい黄褐色～灰黄褐色 内面：ぶい黄褐色～灰黄褐色	
Po14	42	48-2	638	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	2.1	※8.9	※5.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・ぶい黄褐色・灰色 内面：ぶい黄褐色・灰色	
Po15	42	48-1	692	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	2.1	※9.0	※5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも淡赤褐色	
Po16	42	48-2	417 433	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3017・3018 柱穴 掘立柱建物12 3018柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	1.9	8.8	5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	
Po17	42	48-1	353	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3009柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	1.8	※8.3	※6.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：ぶい黄褐色	
Po18	42	48-1	937	9F-10e 10F-1e	1面	掘立柱建物12 3021柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	1.5	※8.3	※4.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po19	42	48-2	2668 2358	9F-10g	1面	掘立柱建物12 3086柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	1.8	※8.0	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po20	42	48-2	2662 2664 2757	10F-1g	1面	掘立柱建物12 3095柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	2.0	※8.6	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：橙色 内面：灰白色	
Po21	42	48-1	4439	10F-1f	1面	掘立柱建物12 3073柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	1.7	※8.5	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：ぶい褐色 内面：浅黄褐色	
Po22	42	48-1	681	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3017柱穴	2層	土師器 皿	2.2	※8.8	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：ぶい褐色 内面：ぶい褐色～ぶい褐色	
Po23	42	48-2	2364	10F-1f	1面	掘立柱建物12 3096柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△2.1	※9.5	—	外面：回転ナデ 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po24	42	48-2	360	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3009柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△1.8	※8.0	—	外面：回転ナデ 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	内外面とも灰黄褐色	
Po25	42	48-2	713 691	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△4.3	—	6.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：ぶい黄褐色	
Po26	42	48-2	682	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3024柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	3.7	※8.4	4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：ぶい黄褐色	
Po27	42	48-2	2525	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3068柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△3.5	—	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・褐色 内面：灰白色	
Po28	42	48-2	435	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△3.1	—	※5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po29	42	48-2	2679	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3068柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△3.2	—	—	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
Po30	42	48-2	2703	9F-10f	1面	掘立柱建物12 3082柱穴	3層	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po31	42	48-2	2663	10F-1g	1面	掘立柱建物12 3095柱穴	掘方埋め土	土師器 柱状高台	△2.8	—	3.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po32	42	48-1	718	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3023柱穴	掘方埋め土	土師器 環	△3.7	※13.0	—	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	
Po33	42	48-1	2571 2690	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3092柱穴	掘方埋め土	土師器 環	△3.2	※13.1	—	外面：回転ナデ 内面：口縁端部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：黒色 内面：ぶい褐色	



第16表 土器及び陶磁器観察表(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区 T45-6j-	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po34	42	48-1	2678	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3068柱穴	抜取痕	土師器 環	△5.0	※12.7	—	内外面とも回転ナデ	審 良好	外面：浅黄橙色・灰白色 内面：浅黄橙色・にぶい黄橙色	
Po35	42	48-1	420	9F-10e 10F-1e	1面	掘立柱建物12 3021柱穴	埋土	土師器 環	△3.0	—	※6.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも浅黄橙色	
Po36	42	48-1	676 684	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3024柱穴	抜取痕 抜取痕	土師器 環	△2.9	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：灰白色・橙色	
Po37	42	48-1	2528	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3068柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.5	—	※6.0	内外面とも回転ナデ	審 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：浅黄橙色	
Po38	42	48-1	2567	10F-1f	1面	掘立柱建物12 3099柱穴	2層	土師器 環	△2.5	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部調整不 明 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも灰白色	
Po39	42	48-1	442	9F-10e 10F-1e	1面	掘立柱建物12 3020柱穴	埋土	土師器 環	△2.0	—	※5.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも灰白色	
Po40	42	48-1	2356	10F-1f	1面	掘立柱建物12 3069柱穴	抜取痕	土師器 環	△1.3	—	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも灰白色・橙 色	
Po41	42	49-1	417 709 692 700 469	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3017・3018 柱穴	埋土 堀方埋め土 堀方埋め土 堀方埋め土 埋土	土師器 環	4.6	※12.9	5.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	外面：にぶい黄橙色・ 褐灰色 内面：灰白色・褐灰色	
Po42	42	48-1	732	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	堀方埋め土	土師器 環	△4.0	※13.2	※6.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	審 良好	内外面ともにぶい黄橙 色	
Po43	42	48-1	683	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3024柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.9	※13.1	—	内外面とも回転ナデ	審 良好	外面：浅黄橙色にぶい 黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
Po44	42	49-1	699 475	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	堀方埋め土 2層	土師器 環	4.2	13.7	5.9	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審 良好	外面：灰白色にぶい 黄橙色・褐灰色 内面：灰白～褐灰色	
Po45	42	49-1	686	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3024柱穴	抜取痕	土師器 環	3.9	13.9	6.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも灰白色・に ぶい褐色	体部下～底部煤付着
Po46	42	48-1	420	9F-10e 10F-1e	1面	掘立柱建物12 3021柱穴	埋土	土師器 環	△2.4	※15.8	—	内外面とも回転ナデ	審 良好	外面：灰白色 内面：浅黄橙色	
Po47	42	48-1	360 244	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3009柱穴	抜取痕 埋土	土師器 環	△2.9	—	※5.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	審 良好	内外面とも褐灰色	
Po48	42	48-1	687	9F-10e	1面	掘立柱建物12 3024柱穴	抜取痕	土師器 環	△3.3	—	—	内外面とも回転ナデ	審 良好	内外面とも灰白色	
Po49	42	49-1	716	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3023柱穴	堀方埋め土	土師器 高台付環	△3.5	—	8.7	内外面とも回転ナデ	審 良好	内外面とも橙色	
Po50	42	49-1	700	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	堀方埋め土	土師器 高台付環	△3.4	—	※7.4	内外面とも回転ナデ	審 良好	内外面とも灰白色	
Po51	42	50-1	16-937 4785 4786 4787 4788 16-712	10F-1e 10F-1g 10F-1g 10F-1g 10F-1g 9F-10d	1面	掘立柱建物12 656柱穴 3314柱穴 3314柱穴 3314柱穴 3314柱穴 —	埋土 抜取痕 抜取痕 抜取痕 抜取痕 — 1層	須恵器 壺	△13.2	—	—	内外面とも横ナデ	審 良好	外面：灰色・黒色 内面：灰色	H28出土遺物接合
Po52	52	50-3	1992	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3055柱穴	抜取痕	土師器 皿	△2.1	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも灰黄褐色	
Po53	52	50-4	1994	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3036柱穴	2層	土師器 皿	2.1	※7.8	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも灰黄色	
Po54	52	50-4	1962	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3046柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.1	※8.1	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	審 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po55	52	50-4	1893	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3053柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.5	※8.7	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po56	52	50-4	1858	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3053柱穴	埋土	土師器 皿	1.7	※7.6	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	審 良好	外面：にぶい橙色・灰 白色 内面：にぶい橙色	
Po57	52	50-4	1861	9F-9f	1面	掘立柱建物20 3042柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.6	—	※4.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po58	52	50-3	1849	9F-9e	1面	掘立柱建物20 3049柱穴	堀方埋め土	土師器 柱状高台	△2.7	—	※4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po59	52	50-4	1850	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3051柱穴	抜取痕	土師器 甕	△2.5	—	—	内外面ともナデ	審 良好	外面：黒褐色 内面：黒褐色にぶい 褐色	外面煤付着
Po60	52	50-3	2586 2367 2377	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3047柱穴	抜取痕	土師器 環	4.3	※13.5	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	審 良好	内外面ともにぶい黄橙 色	
Po61	52	50-4	2378	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3047柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.8	※12.5	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	審 良好	外面：にぶい黄褐色～ 灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	
Po62	52	50-4	2002	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3043柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.0	—	※6.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ?	審 良好	内外面とも浅黄褐色～ にぶい褐色	
Po63	52	50-4	1916	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3047柱穴	埋土	土師器 環	△1.8	—	※7.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り、板目残る 内面：回転ナデ、底部ナデ	審 良好	外面：褐色～明赤褐 色 内面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色	
Po64	52	50-4	2376 2371 1907	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3047柱穴	抜取痕 抜取痕 埋土	土師器 環	4.1	※14.0	※6.5	外面：回転ナデ、底部調整不 明 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	審 良好	外面：灰白色・黒褐色 内面：浅黄褐色・褐灰 色	
Po65	52	50-4	2000	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3043柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.4	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	審 良好	内外面とも褐色・灰白 色	
Po66	52	50-4	2477	9F-10f	1面	掘立柱建物20 3040柱穴	堀方埋め土	土師器 環	△2.3	※15.4	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	審 良好	外面：褐灰色・褐色 内面：灰白色・褐灰色	

第17表 土器及び陶磁器観察表(3)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区T45-Gj	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po67	52	50-4	2584	9F-10f	1面	掘立柱建物203047柱穴	抜取痕	土師器環	△2.0	—	※6.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	審良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
Po68	52	50-4	1900	9F-10f	1面	掘立柱建物203041柱穴	1層	須恵器甕	△9.8	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円文状当て具痕	審良好	外面：褐灰色 内面：灰黄褐色	
Po69	52	50-2 87-1 87-2	2632	9F-10f	1面	掘立柱建物203043柱穴	埋土	青磁蓋	△1.2	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉	審良好	施釉部：内外面とも灰オリブ色 露胎部：にぶい黄褐色	初期高麗青磁蓋Ⅱ類?
Po70	57	51-2	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器皿	2.2	8.3	4.9	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：浅黄褐色 内面：灰黄褐色	
Po71	57	51-1	567	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器皿	2.1	※7.7	※4.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
Po72	57	51-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器皿	2.1	※8.4	※4.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	審良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po73	57	51-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器皿	1.8	※8.2	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも浅黄褐色	
Po74	57	51-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器皿	1.7	8.2	※4.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po75	57	51-1	626	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器皿	△1.4	—	※5.2	外面：回転ナデ、ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	
Po76	57	51-2	577	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器柱状高台	△2.8	—	※5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po77	57	51-2	597	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器柱状高台	△3.1	—	※3.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po78	57	51-2	509	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器柱状高台	△2.7	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po79	57	51-2	588	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器柱状高台	△2.9	—	4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ?	審良好	外面：橙色、浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
Po80	57	51-2	579	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器柱状高台	△3.3	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po81	57	51-2	565	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器柱状高台	△2.8	—	4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po82	57	51-1	470	9F-10d 10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.1	※13.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	審良好	外面：灰黄色 内面：黄灰色	
Po83	57	51-1	575	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.6	※13.5	—	内外面とも回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po84	57	51-1	480	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.9	※13.7	—	内外面とも回転ナデ	審良好	外面：にぶい黄褐色・灰黄褐色 内面：にぶい橙色	
Po85	57	52-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	4.0	※13.7	※5.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po86	57	52-1	629	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	4.0	13.2	6.5	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：灰白色、褐灰色 内面：灰白色、淡橙色	
Po87	57	52-1	628	9F-10d	1面	666溝	埋土	土師器環	4.3	※14.8	※6.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po88	57	52-1	628	9F-10d	1面	666溝	埋土	土師器環	△3.7	※15.4	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po89	57	51-1	591	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.6	※15.4	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po90	57	51-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.7	—	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	審良好	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色・灰黄褐色	
Po91	57	51-1	626	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.7	—	—	内外面とも回転ナデ	審良好	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色	
Po92	57	51-1	584	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△3.0	—	※5.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：浅黄褐色・灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po93	57	51-1	623	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.1	—	※7.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	審良好	外面：灰白色 内面：淡黄色	
Po94	57	52-1	672	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.1	—	6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：灰白色 内面：灰白色・褐灰色	
Po95	57	52-1	470 439	9F-10d 10e 9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△3.3	—	6.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：にぶい橙色・橙色 内面：橙色	
Po96	57	51-1	451	9F-10d 10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.3	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部調整不明 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po97	57	52-1	510	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△1.8	—	5.7	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po98	57	51-1	628	9F-10d	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.4	—	※6.3	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：褐灰色・灰白色 内面：褐灰色	
Po99	57	51-1	590	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.1	—	※5.7	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	外面：褐灰色 内面：褐灰色・灰黄褐色	
Po100	57	51-1	576	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.2	—	※5.6	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po101	57	51-1	586	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.1	—	※4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	
Po102	57	51-1	471	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器環	△2.1	—	※3.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	審良好	内外面とも灰白色	

第18表 土器及び陶磁器観察表(4)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po103	57	51-1	603	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△1.5	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面、回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色・灰黄褐色	
Po104	57	52-1	611	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△2.6	—	※6.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面、回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色・黒褐色	
Po105	57	51-1	512	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△2.1	—	※7.7	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面、回転ナデ、底部ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：褐灰色・灰黄色	
Po106	57	51-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△2.6	—	※7.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面、回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・黒褐色 内面：灰黄褐色	
Po107	57	51-1	607 439 670	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△2.4	—	※9.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面、回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	
Po108	57	51-1	480	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△1.2	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り 内面、回転ナデ、底部ナデ	密良好	外面：褐灰色・にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	ヘラ切り
Po109	57	51-1	641	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 環	△1.3	—	5.8	外面：回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面、回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	ヘラ切り
Po110	57	52-2	566	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.6	—	※8.5	高台部：内外面とも回転ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰白色	
Po111	57	52-2	563 451 471	9F-10e 9F-10d・e 9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.6	—	※802	高台部：内外面とも回転ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・褐灰色 内面：にぶい黄褐色	
Po112	57	52-2	520 626 480	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.3	—	—	高台部：内外面とも回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	
Po113	57	52-2	498	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.1	—	—	高台部：内外面とも回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・黄灰色 内面：灰白色	
Po114	57	52-2	637 574 613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.3	—	—	高台部：内外面とも回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	
Po115	57	52-2	517 468	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.4	—	—	高台部：内外面とも回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰黄褐色・にぶい橙色 内面：灰黄褐色	
Po116	57	52-2	570 621	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 高台付環	△2.7	—	—	高台部：内面回転ナデ、ナデ 内外面とも回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po117	57	51-1	590	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 甕	△8.3	※22.0	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐色・にぶい橙色 内面：明褐色	外面煤付着、被熱による剥落
Po118	57	51-1	451	9F-10e ・10d	1面	666溝	埋土	土師器 甕	△2.2	—	—	内外面ともナデ	密良好	外面：黒色 内面：灰黄褐色	外面煤付着
Po119	57	51-1	562	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 甕	△4.5	—	—	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：横ナデ、ヘラケズリ後 ハケ→ナデ	密良好	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	外面煤付着
Po120	57	51-1	470	9F-10d ・10e	1面	666溝	埋土	土師器 甕	△3.8	—	—	外面：ナデ 内面：横ナデ、ヘラケズリ後 ナデ、指オサエ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po121	57	51-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	土師器 甕	△3.4	—	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ、ナデ、指オサエ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po122	57	53-2 88 89	507 543	9F-10e 9F-10d	1面 —	666溝 —	埋土 表土	白磁 碗	△1.9	※17.3	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：内外面とも灰白色	碗IV類
Po123	58	53-1	439 384	9F-10e 9F-10d	1面 —	666溝 —	埋土 表土	須恵器 甕	△3.0	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面とも黄灰色	
Po124	58	53-1	480	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 環	△2.1	—	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po125	58	53-1	674	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△4.2	※19.4	—	外面：口縁端部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：灰白色～褐灰色 内面：にぶい黄褐色	内外面とも自然釉
Po126	58	53-3 53-4	618 16-1086	9F-10e 9F-10c	1面 —	666溝 —	埋土 表土	須恵器 甕	△12.3	—	—	内外面とも横ナデ	密良好	内外面とも灰色	H28出土遺物接合
Po127	58	53-1	606	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△2.4	—	—	外面：タタキ 内面：ナデ	密良好	内外面とも灰色	
Po128	58	53-1	613	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△5.7	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕、風化が著しい	密良好	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	
Po129	58	53-1	486	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△6.1	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕(一部剥落)	密良好	外面：にぶい黄褐色～明黄褐色 内面：にぶい黄褐色～橙色	
Po130	58	53-1	621	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△8.9	—	—	外面：格子状タタキ 内面：格子状当て具痕	密良好	内外面とも黄灰色	
Po131	58	53-1	623	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△6.2	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕(一部剥落)	密良好	外面：褐灰色 内面：灰黄褐色	
Po132	58	64-5	497	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△4.6	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：褐灰色	Po133,134,275,276,391,392,907と同一個体の可能性あり
Po133	58	64-5	626	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△5.9	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰白色・灰黄色 内面：褐灰色	Po132,133,275,276,391,392,907と同一個体の可能性あり
Po134	58	64-5	514 4635	9F-10e 9F-7c	1面 —	666溝 —	埋土 攪乱土	須恵器 甕	△9.6	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：黄灰色	Po132,133,275,276,391,392,907と同一個体の可能性あり
Po135	58	58-1	589	9F-10e	1面	666溝	埋土	須恵器 甕	△8.9	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：褐灰色 内面：灰色	Po202,203,273,274,386,522,713と同一個体の可能性あり
Po136	58	53-1	561 451 385	9F-10e 9F-10e・d 9F-10e	1面 1面 —	666溝 666溝 —	埋土 埋土 表土	須恵器 甕	△10.2	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：黄灰色 内面：暗灰黄色	
Po137	58	53-1	502 324 385	9F-10e 9F-10e 9F-10d	1面 — —	666溝 — —	埋土 埋土 表土	須恵器 甕	△9.8	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	
Po138	60	54-1	708	9F-10e	1面	3015土坑	埋土	土師器 環	△2.5	※13.5	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・灰白色 内面：灰白色	
Po139	60	54-1	899 668	9F-10e	1面	3015土坑	1層埋土	土師器 環	△2.0	—	※6.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第19表 土器及び陶磁器観察表(5)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po140	60	54-1	705 712 714	9F-10e	1面	3015土坑	埋土 埋土 埋土	土師器 環	△3.9	※14.3	※6.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po141	60	54-1	754	9F-10e	1面	3015土坑	埋土	土師器 環	△2.2	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄橙色・黄灰色	
Po142	60	54-1	752	9F-10e	1面	3015土坑	埋土	土師器 環	△3.1	※16.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄橙色・にぶ い橙色	
Po143	62	54-4	895	10F-1e・1f	1面	3025柱穴	抜取痕	土師器 環	△1.4	—	※5.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・橙色 内面：灰白色・にぶ い黄橙色	
Po144	62	54-4	323	9F-10e	1面	3005柱穴	抜取痕	土師器 柱状高台	△2.6	—	※3.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po145	83	55-1	2951	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3120柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.7	※8.8	※4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・にぶ い黄橙色	
Po146	83	54-5	4298 2730	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕 段掘り	土師器 皿	1.9	※8.4	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面ともにぶい黄桃 色	
Po147	83	54-5	4173 4174 4187 3057	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3189柱穴 3189柱穴 3189柱穴 3133柱穴	抜取痕 抜取痕 掘方埋め土 抜取痕	土師器 皿	2.0	※8.8	※4.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po148	83	54-5	3002 2730	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕 段掘り	土師器 皿	1.8	※8.7	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po149	83	55-1	3981	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3134柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.1	※8.8	※4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	
Po150	83	69-1	3968	10F-2h	2面	掘立柱建物13 3323柱穴	抜取痕	土師器 皿	△2.0	※8.5	※4.8	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り？ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白～褐灰 色	
Po151	83	55-1	4291	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.9	※9.3	—	外面：回転ナデ 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：にぶい黄橙色～ 灰黄褐色 内面：にぶい橙色～灰 褐色	
Po152	83	55-1	4292	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.2	※8.7	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：黒褐色 内面：黄灰色	
Po153	83	55-1	4323	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3188柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.6	※8.0	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	
Po154	83	55-1	4113	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3129柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.7	※9.2	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po155	83	55-1	4256	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.2	※8.4	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも橙色	
Po156	83	54-5	4321 3077 3078 4319	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3188柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.1	※8.2	※4.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：浅黄褐色～橙色 内面：灰白色～橙色	
Po157	83	54-5	3088 3089 3091 4318 4319	10F-1g 10F-1g 10F-1g 10F-2h 10F-1g	2面	掘立柱建物13 3188柱穴 3188柱穴 3188柱穴 3141柱穴 3188柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.1	※8.2	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも橙色	
Po158	83	55-1	4199	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3140柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.0	※9.3	※4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面ともにぶい橙 色	
Po159	83	54-5	4065	10F-2f	2面	掘立柱建物13 3108柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.7	—	※4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po160	83	54-5	3013	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.8	8.1	4.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po161	83	54-5	4280	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3115柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.8	※8.4	※4.8	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：灰黄色～黄灰色 内面：灰白色～黄灰色	
Po162	83	55-1	4072	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3128柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.8	※8.1	※5.0	外面：回転ナデ、底部調整不 明 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po163	83	55-1	4206	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3116柱穴	埋土	土師器 皿	2.0	※9.0	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po164	83	55-1	4395	10F-1f	2面	掘立柱建物13 3105柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.1	※8.6	※5.0	外面：回転ナデ、底部調整不 明 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po165	83	55-1	4293	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.2	※8.7	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po166	83	55-1	4032	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3112柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.9	※8.4	※5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：灰白色・にぶ い黄褐色 内面：灰白色	
Po167	83	55-1	3015	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.3	※8.8	※5.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
Po168	83	55-1	4199	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3140柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.4	※9.2	※5.3	外面：回転ナデ、底部調整不 明 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	

第20表 土器及び陶磁器観察表(6)

遺物 番号	挿固 番号	図版 番号	取上No.	調査区 T45-6j-	遺構 面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po169	83	55-1	4084	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3128柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.8	※9.4	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po170	83	54-5	4215	10F-1f	2面	掘立柱建物13 3109柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.7	※10.0	※5.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po171	83	54-5	4036 2517	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕 埋土	土師器 皿	1.9	※9.9	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面ともいぶい黄橙 色	
Po172	83	55-1	2517	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 皿	1.7	※9.3	※6.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：いぶい黄橙色～ 褐色 内面：いぶい黄褐色	
Po173	83	54-5	3295 4465	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3114柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.4	※8.4	※5.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	内外面ともいぶい橙 色	
Po174	83	55-1	4188	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3189柱穴	堀方埋め土	土師器 皿	2.1	※9.4	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po175	83	55-1	4300 4307 4309 4310	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.9	※8.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：いぶい黄橙色・ 暗灰色 内面：いぶい黄橙色・ 褐色	
Po176	83	55-1	2517	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.8	※7.9	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：いぶい黄橙色 内面：いぶい黄褐色	
Po177	83	55-1	4045 4046	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3118柱穴	抜取痕	土師器 皿	△1.5	※8.0	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙 色	
Po178	83	55-1	4305	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕	土師器 柱状高台	△2.0	※10.0	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po179	83	54-5	4096 3449	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3128柱穴	抜取痕	土師器 柱状高台	3.1	※8.6	※4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：口縁端部ナデ、回転ナ デ	密 良好	外面：灰白色～褐色 内面：灰白色～黄灰色	
Po180	83	54-5	3009 2759	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 柱状高台	△3.4	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po181	83	54-5	4425	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3116柱穴	埋土	土師器 柱状高台	△2.9	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po182	83	55-1	4259	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3109柱穴	抜取痕	土師器 環	△1.3	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面ともいぶい橙 色	
Po183	83	55-1	4190	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3132柱穴	堀方埋め土	土師器 環	△2.7	—	※6.7	外面：ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：いぶい黄橙色	
Po184	83	55-1	4140	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3112柱穴	抜取痕	土師器 環	△3.1	—	※6.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：浅黄橙色	
Po185	83	55-1	4036	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.7	—	※6.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po186	83	55-1	4089	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3135柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.2	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：黒色	
Po187	83	55-1	4248 4245	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3132柱穴	抜取痕	土師器 環	△3.2	※14.5	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：黄褐色 内面：橙褐色	
Po188	83	55-1	3014	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.9	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：褐色～灰白色	
Po189	83	55-2	3044 2735	10F-2f	2面	掘立柱建物13 3108柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.3	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
Po190	83	55-2	4198 3060	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3137柱穴	堀方埋め土 抜取痕	土師器 環	△3.2	—	※8.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも橙 色	
Po191	83	55-1	4396	10F-1f	2面	掘立柱建物13 3105柱穴	抜取痕	土師器 環	△1.6	—	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色～黄 灰色	
Po192	83	55-1	4112	10F-1f	2面	掘立柱建物13 3103柱穴	抜取痕	土師器 甕	△3.8	—	—	外面：横ナデ 内面：ハケ後ナデ、一部指オ サエ	密 良好	外面：灰白色・灰黄褐 色・黒褐色 内面：灰白色	外面煤付着
Po193	83	55-1	3047	10F-2f	2面	掘立柱建物13 3108柱穴	抜取痕	土師器 高台付環	△2.4	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色～いぶい 黄褐色・橙褐色	
Po194	83	55-2	3023	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3124柱穴	堀方埋め土	土師器 高台付環	△1.8	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：黒褐色 内面：褐色・黄灰色	坏部・高台部欠損
Po195	83	55-1	3060	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3137柱穴	抜取痕	土師器 高台付環	△1.3	—	※8.3	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：いぶい黄褐色・ 灰黄褐色	
Po196	83	59-4 88 89	4265	10F-2f	2面	掘立柱建物13 3149柱穴	抜取痕	白磁 碗	△4.8	—	—	内外面とも施軸	密 良好	施軸部：内外面とも灰 白色	碗Ⅳ類
Po197	83	59-4 88 89	3975	10F-2f・2g	2面	掘立柱建物13 3142柱穴	抜取痕	白磁 壺	△2.6	—	—	内外面とも施軸	密 良好	施軸部：内外面とも灰 白色	壺Ⅱ×Ⅲ類
Po198	84	58-2	4154 4153	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3124柱穴	抜取痕	須恵器 長頸壺	△9.6	—	—	内外面とも横ナデ、一部自然 軸かかる	密 良好	外面：灰黄色・いぶい 黄褐色 内面：暗灰色～灰黄 色	Po199と同一個体の可能 性あり
Po199	84	58-2	4151 3026 4152 10F-2g 3024 10F-2g 3025 10F-2g 48	2面 2面 2面 2面 2面 2面 2面 2面	掘立柱建物13 3124柱穴 掘立柱建物13 3124柱穴 掘立柱建物13 3124柱穴 掘立柱建物13 3124柱穴 掘立柱建物13 3124柱穴	堀方埋め土 抜取痕 抜取痕 抜取痕 抜取痕 表土以下	須恵器 壺	△10.3	—	※12.0	外面：横ナデ、高台部～底部 ナデ 内面：横ナデ、一部自然軸か かる	密 良好	外面：灰白色～黄灰色 内面：灰白・褐色	Po198と同一個体の可能 性あり	
Po200	84	59-1	4150	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3124柱穴	堀方埋め土	須恵器 壺	△4.1	—	—	内外面とも横ナデ	密 良好	内外面とも灰 色	
Po201	84	59-1	4149 4155	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3124柱穴	抜取痕	須恵器 薬壺	△0.7	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：灰色・灰白色 内面：灰色	
Po202	84	58-1	4290	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3127柱穴	抜取痕	須恵器 甕	△7.5	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも灰 色	Po135,203,273,274, 386,522,713と同一個 体の可能性あり

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第21表 土器及び陶磁器観察表(7)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	取上No.	調査区 T45-6j-	遺構 面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po203	84	58-1	16-1640 16-719	10F-2f	2面 —	掘立柱建物13 712柱穴 —	採取痕 掘乱土	須恵器 甕	△6.5	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも黄灰色	H28出土遺物接合 Po135,202,273,274, 386,522,713と同一個 体の可能性あり
Po204	84	56 57	4020 4021 4334 4335 4336 4337	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3138柱穴 3138柱穴 3115柱穴 3115柱穴 3115柱穴 3115柱穴	採取痕	須恵器 甕	△35.0	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：灰黄褐色～黒褐 色・浅黄褐色 内面：灰色	Po538と同一個体の可能 性あり
Po205	95	59-5	3459	10F-1g	2面	掘立柱建物19 3161柱穴	底面	土師器 皿	1.7	※8.8	※4.6	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：灰白色	
Po206	95	59-5	3447	10F-1g	2面	掘立柱建物19 3161柱穴	掘方埋め土	土師器 皿	△1.7	※9.2	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、体部下半へ ラケズリ後ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po207	95	59-5	4370	9F-10g	2面	掘立柱建物19 3255柱穴	採取痕	土師器 柱状高台	△2.7	—	※4.2	外面：ナデ、底部回転系切り 内面：ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po208	95	59-5	3028 3029 3030 3031 3034 3036 3038 3099	10F-1g	2面	掘立柱建物19 3166柱穴	採取痕	土師器 杯	4.2	14.3	5.3	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po209	95	59-5	3033	10F-1g	2面	掘立柱建物19 3166柱穴	採取痕	土師器 杯	△2.8	—	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも黄灰色	
Po210	95	59-5	3272	10F-1g	2面	掘立柱建物19 3161柱穴	採取痕	土師器 杯	△2.1	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色 内面：灰白色	
Po211	95	59-5	4092	9F-10g	2面	掘立柱建物19 3341柱穴	採取痕	土師器 杯	△2.2	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po212	95	59-5	3139	9F-10g	2面	掘立柱建物19 3151柱穴	採取痕	土師器 杯	—	—	—	内外とも回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
Po213	95	59-5	3470	9F-10g	2面	掘立柱建物19 3157柱穴	採取痕	土師器 甕	△1.8	—	—	内外面ともナデ	密 良好	内外面ともいふ黄橙 色	外面煤付着
Po214	103	60-1	1364	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.5	※7.9	※4.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・橙色・ 浅黄褐色 内面：浅黄褐色～灰黄 褐色	
Po215	103	60-2	1521 1538 1279 1230	9F-9h	2面	3010a溝	3層 2・3層 2・3層	土師器 皿	1.7	8.7	5.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色・にふい 黄褐色・褐色 内面：浅黄褐色・褐色	
Po216	103	60-2	1547 1563 1588	9F-9h 9F-9h 9F-9g	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.8	※8.7	※5.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともいふ黄橙 色～褐灰色	
Po217	103	60-2	1493 1494	9F-9h 9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	2.0	※8.4	※5.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
Po218	103	60-1	910	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.9	※8.6	※5.0	外面：口縁端部ナデ、体部回 転ナデ一部ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：にふい黄褐色～ 灰黄褐色	
Po219	103	60-1	1461	9F-10h	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.7	※8.2	※4.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po220	103	60-1	847	9F-9h	2面	3010a溝	1層	土師器 皿	1.8	※8.9	※6.1	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともいふ黄橙 色	
Po221	103	60-1	910	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.5	※7.8	※4.8	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色～にふい 黄褐色・褐灰色 内面：灰白色・灰黄褐 色	
Po222	103	60-1	1053	9F-9g	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.5	※8.7	※5.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：灰白色～灰黄褐 色	
Po223	103	60-1	1706	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.6	※8.7	※5.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色・灰黄 色・褐色・にふい褐色 内面：灰白色	
Po224	103	60-1	1592	9F-9g	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.5	※8.7	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：褐色・浅黄褐色	
Po225	103	60-1	846	9F-9h	2面	3010a溝	1層	土師器 皿	1.7	※9.3	※6.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po226	103	60-2	1465 1476 1483 910	9F-10h 9F-10h 9F-10h 9F-9h	2面	3010a溝	3層 3層 2・3層	土師器 皿	1.7	※8.2	※5.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：浅黄褐色	
Po227	103	60-2	1172 1176 1237 910	9F-10h 9F-10h 9F-9h 9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	2.0	※8.6	5.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色・ 褐色	
Po228	103	60-1	910	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.8	※8.5	※5.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・浅黄橙 色	
Po229	103	60-1	1482	9F-10h	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.6	※8.3	※5.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po230	103	60-1	1346	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.9	※8.5	※5.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にふい黄褐色・ 浅黄褐色 内面：にふい黄褐色	
Po231	103	60-2	1130	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	2.0	※8.4	4.8	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：褐灰色・にふい 黄褐色	
Po232	103	60-1	1267	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	2.2	※9.1	※5.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：黄褐色	
Po233	103	60-1	1260	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.7	※8.8	※5.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り？ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	

第22表 土器及び陶磁器観察表(8)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	取上No.	調査区 T45-Gj	遺構 面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po234	103	60-1	1598	9F-9g	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.8	※5.5	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色・灰黄色 内面：灰白色	
Po235	103	60-1	1145	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	1.9	※8.5	※4.8	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
Po236	103	60-1	1489	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 皿	1.7	※8.1	※5.5	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色・灰黄色 内面：黄灰色	
Po237	103	60-1	1329	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	2.1	※8.7	※5.5	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po238	103	60-1	1215	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	△1.5	※8.7	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともいぶ黄橙 色	
Po239	103	60-1	1294	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	△1.6	※7.8	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po240	103	60-1	1277	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 皿	△2.0	※7.4	※3.9	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り？ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面ともいぶ黄橙 色・灰白色	
Po241	103	60-2	1708 1577	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 柱状高台	3.8	※7.5	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・いぶ 黄褐色 内面：黄灰色	
Po242	103	60-2	1348	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 柱状高台	△3.0	—	4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po243	103	60-2	1174	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 柱状高台	△3.3	—	5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色 内面：灰黄褐色	
Po244	103	60-2	1295	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 柱状高台	△2.8	—	5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・灰黄褐 色 内面：褐灰色	
Po245	103	60-2	826	9F-9h	2面	3010a溝	1層	土師器 柱状高台	△2.9	—	5.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：表面摩滅	密 良好	外面：灰白色 内面：不明	
Po246	103	60-2	1534	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 柱状高台	△2.5	—	4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色・いぶ 橙色・浅黄褐色 内面：橙色・浅黄褐色	
Po247	103	60-2	1606	9F-9g	2面	3010a溝	3層	土師器 柱状高台	△2.9	—	※4.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：いぶ橙色	
Po248	103	60-1	1166	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 環	△3.5	※17.0	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・褐灰色	
Po249	103	60-1	1136	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 環	△3.1	※14.6	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・橙 色	
Po250	103	60-1	1660	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 環	△3.2	※11.9	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・灰黄 褐色 内面：灰白色・いぶ 黄褐色	
Po251	103	60-1	1658	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 環	△3.5	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：いぶ黄褐色	
Po252	103	61-4	1163	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 環	△3.5	—	※6.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色～浅 黄褐色	
Po253	103	61-4	1360 1361 1364	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 環	△2.9	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：灰白色～黄灰色	
Po254	103	61-4	1164 1165	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 環	△3.6	—	6.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po255	103	60-1	1477	9F-10h	2面	3010a溝	3層	土師器 環	△2.5	—	※6.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：いぶ黄褐色・ 灰黄褐色・褐灰色 内面：灰白色	
Po256	103	61-4	833	9F-9h	2面	3010a溝	1層	土師器 環	△2.8	—	※6.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po257	103	60-1	1496	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 環	△2.3	—	※5.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り？ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・いぶ 橙色・灰白色 内面：灰白色	
Po258	103	61-4	1558 1349	9F-9h	2面	3010a溝	3層 2・3層	土師器 環	△2.2	—	※6.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色・灰白色 内面：黄灰色	内面煤付着？
Po259	103	60-1	3925	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 環	△2.4	—	※5.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色・いぶ 褐色 内面：橙色・浅黄橙 色・暗赤褐色	
Po260	103	60-1	1492	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 環	△1.8	—	※6.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po261	103	60-1	1099	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 環	△1.8	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：灰白色	
Po262	103	60-2	1079	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 高台付環	△2.3	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰黄褐色	
Po263	103	60-2	1707	9F-9h	2面	3010a溝	3層	土師器 高台付環	△2.2	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po264	103	61-1	1263 932 808	9F-9h 9F-9・10g 9h・10h	2面	3010a溝	2・3層 2・3層 1層	土師器 甕	△5.7	※22.0	—	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラ ケズリ	密 良好	外面：いぶ褐色～黒 色 内面：いぶ褐色	外面一部煤付着
Po265	103	61-1	1338	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	土師器 甕	△2.2	—	—	内外面ともナデ	密 良好	内外面ともはきつ褐色	外面一部煤付着
Po266	103	61-1	908 847 808	9F-9h 9F-9h 9F-9・10g 9h・10h	2面	3010a溝	2・3層 1層 1層	土師器 甕	△7.5	※22.0	—	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラ ケズリ	密 良好	外面：黒色～いぶ 褐色 内面：褐灰色～いぶ 褐色	
Po267	103	61-2 88 89	1150	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	白磁 碗	△2.4	—	—	内外面とも施軸	密 良好	施軸部：灰白色	碗Ⅳ類
Po268	103	61-2 88 89	865	9F-9h	2面	3010a溝	1層	白磁 壺	△2.8	—	—	内外面とも施軸	密 良好	施軸部：灰白色	壺Ⅲ類

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第23表 土器及び陶磁器観察表(9)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構 面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po269	104	61-3	1564	9F-9h	2面	3010a溝	3層	須恵器 片口鉢	△1.7	—	—	外面：口縁部ナデ、口縁部 横ナデ 内面：口縁部横ナデ	密 良好	外面：暗赤灰色～青黒 色 内面：赤灰色	
Po270	104	61-3	908	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	須恵器 片口鉢	△2.2	—	—	外面：口縁部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po271	104	65-3	1227	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	須恵器 甕	△3.6	—	—	外面：平行タタキ、ナデ 内面：同心円状当て具痕、 ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：黄灰色	Po385,519,520,712と同一 個体の可能性あり
Po272	104	61-3	1474	9F-10h	2面	3010a溝	3層	須恵器 甕	△7.1	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも黄灰色	
Po273	104	58-1	869	9F-10h	2面	3010a溝	1層	須恵器 甕	△5.8	—	—	外面：平行タタキ、ナデ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも灰色	Po135,202,203,274, 386,522,713と同一個 体の可能性あり
Po274	104	58-1	1183	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	須恵器 甕	△5.4	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：灰色・灰黄色 内面：黄灰色	Po135,202,203,273, 386,522,713と同一個 体の可能性あり
Po275	104	64-5	1149	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	須恵器 甕	△10.1	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：灰色	Po132,133,134,276, 391,392,907と同一個 体の可能性あり
Po276	104	64-5	1132	9F-10h	2面	3010a溝	2・3層	須恵器 甕	△8.6	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも褐灰色	Po132,133,134,275, 391,392,907と同一個 体の可能性あり
Po277	113	62-1	2092	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.9	※8.1	※4.5	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po278	113	62-1	4002 2228 2315 1846 76	9F-10h 9F-10h 9F-10h 9F-10h 9F-9h	2面 2面 2面 2面 —	3010b溝 3010b溝 3010b溝 3010b溝 —	2層 1層 1層 埋土 攪乱土	土師器 皿	1.8	8.0	4.9	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・淡 黄橙色	
Po279	113	62-1	2139	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	※7.5	※4.4	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色・黄灰色 内面：黄灰色	
Po280	113	62-1	2202	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	※8.6	※5.6	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色、灰白色 内面：褐灰色・灰白 色・黄橙色	
Po281	113	63-1	2290	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.7	※7.2	※3.3	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：淡橙色・淡赤橙 色 内面：浅黄橙色	
Po282	113	63-1	1890	9F-10h	2面	3010b溝	埋土	土師器 皿	1.7	※8.3	※5.3	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po283	113	63-1	2029	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	△1.9	※7.5	※4.3	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色・浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
Po284	113	63-1	3910 1608	9F-10h 9F-9h	2面	3010b溝 3010a溝	2層 3層	土師器 皿	2.15	※8.1	※4.6	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄色 内面：灰白色・灰色	
Po285	113	64-1	3576	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.9	※8.1	※5.6	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色・ 灰白色	耳皿？
Po286	113	63-1	3522	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.7	※7.3	※4.8	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも橙色	
Po287	113	63-1	2170	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.8	※8.5	※5.6	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄橙色	
Po288	113	63-1	2191	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	※8.3	※4.0	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po289	113	63-1	2248	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	※7.7	※4.9	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	
Po290	113	62-1	3540	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	2.3	※7.2	※4.6	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po291	113	62-1	2057	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.6	※8.2	※5.9	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
Po292	113	63-1	2250	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.3	※8.7	※4.9	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄橙色	
Po293	113	63-1	2241	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	※8.3	※5.2	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・ 橙色 内面：浅黄橙色・橙色	
Po294	113	63-1	3586	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.9	※7.8	※4.6	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・に ぶい黄橙色	
Po295	113	62-1	3786 3789 3769 3774 3788 3790 2520 2170 2179	9F-10h	2面	3010b溝	2層 2層 2層 2層 2層 2層 1層 1層	土師器 皿	2.1	9.0	6.1	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り、板目痕 残る 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：橙色・にぶい橙 色 内面：橙色・にぶい橙 色	
Po296	113	62-1	2221 2420 2423 2316	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	8.5	4.4	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り、板目痕 残る 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも橙色・灰白 色	
Po297	113	62-1	2252	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.7	※9.3	※5.5	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り、板目痕 残る 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・褐 灰色	
Po298	113	63-1	2220	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.2	※8.3	※4.5	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色・浅黄橙色 内面：浅黄橙色・橙色	
Po299	113	63-1	3910	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	△1.9	※8.6	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転系 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
Po300	113	62-1	3923	9F-9h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.4	※8.7	4.5	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ、底部回転系切り 内面：回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色・ 灰黄褐色	



第24表 土器及び陶磁器観察表(10)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	取上No	調査区 T45-6j-	遺構 面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po301	113	62-1	3558	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	2.0	※8.7	※5.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、 底部回転糸切り、板目痕残る 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po302	113	63-1	4015	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.7	※9.5	※5.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	密 良好	外面：褐灰色・灰白色 内面：灰白色	
Po303	113	62-1	2087	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.6	※8.6	※5.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰黄色	
Po304	113	62-1	3581 3597	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.9	9.0	5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：浅黄褐色・褐灰 色・橙色・淡褐色・褐 灰色	
Po305	113	63-1	2747	9F-9g	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.8	※8.7	※5.8	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・浅 黄褐色	
Po306	113	62-1	2175	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	8.9	5.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り、板目痕 残る 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：褐灰色・灰黄褐 色・浅黄褐色 内面：褐灰色・浅黄橙 色	
Po307	113	63-1	2520	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.5	※9.2	※5.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り、板目痕残る 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・黄 灰色	
Po308	113	63-1	3918	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	1.6	※8.0	※5.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：にぶい黄褐色	
Po309	113	63-1	2256	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.5	※8.3	※4.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色・ 褐灰 内面：にぶい黄褐色・ 灰色	
Po310	113	62-1	3600	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	2.3	9.0	5.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り、板目痕 残る 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：橙色・暗灰色・ 灰白色 内面：橙色・にぶい橙 色・褐灰色・にぶい黄 褐色	
Po311	113	63-1	2229	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	△1.9	※9.5	※5.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色 内面：褐灰色・暗灰色	
Po312	113	63-1	2261	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	1.6	※9.3	6.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：橙色・褐灰色 内面：にぶい褐色	
Po313	113	63-1	2296	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 皿	2.0	※8.7	※5.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ後ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
Po314	113	63-1	3922	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	△1.9	※9.1	※5.1	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：淡赤褐色・灰白 色 内面：橙色・浅黄褐色	
Po315	113	62-2	3544 908	9F-10h 9F-9h	2面	3010b溝 3010a溝	2層 2・3層	土師器 柱状高台	3.8	※8.5	※4.2	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも橙色	
Po316	113	62-2	3991	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.2	※8.8	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po317	113	62-2	3526 3529	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△3.8	—	4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：黄灰色・灰白色	
Po318	113	63-1	2107	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器皿or 柱状高台	△1.7	※8.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po319	113	62-2	3930	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.4	—	4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り、板目痕残る 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po320	113	62-2	2046	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	△3.4	—	※5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：灰白色	
Po321	113	62-2	2102	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	△2.1	—	※4.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色・灰 褐色	
Po322	113	62-2	3929	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.8	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
Po323	113	62-2	3525	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	3	—	5	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：灰白色	
Po324	113	62-2	3812	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.7	—	4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ？	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
Po325	113	62-2	3798	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△3.1	—	4.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色・ 灰色	
Po326	113	62-2	3583	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.8	—	4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
Po327	113	62-2	3927	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.9	—	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色・ にぶい黄褐色	
Po328	113	62-2	2268 2301	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	△3.3	—	※5.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色・褐 灰色	
Po329	113	62-2	3795	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△3.4	—	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・灰黄褐 色 内面：灰白色	
Po330	113	62-2	2413	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	△2.7	—	4.3	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・黄灰色 内面：灰白色・黄灰色	
Po331	113	62-2	2035	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	△3.2	—	4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・灰白色 内面：黄灰色	
Po332	113	62-2	3545	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△2.7	—	—	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：ナデ	密 良好	外面：灰白色・黄灰色 内面：灰白色	
Po333	113	62-2	2174	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	3.0	—	※4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：灰白色	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第25表 土器及び陶磁器観察表(11)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po334	113	62-2	3800	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸切り、板目痕残る 内面：回転ナデ	密良好	外面：橙色・にぶい橙色 内面：橙色・灰白色	
Po335	113	62-2	2287	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：灰色	
Po336	113	62-2	3541	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△3.2	—	4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい橙色・にぶい褐色 内面：灰黄褐色	
Po337	113	62-2	3757	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 柱状高台	△3.2	—	4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po338	114	63-2	3836 2233 2416	9F-10h	2面	3010b溝	2層 1層 1層	土師器 環	4.8	※13.7	※6.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密良好	外面：灰黄褐色・灰白色 内面：灰黄褐色	
Po339	114	63-1	3935	9F-9h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△3.5	※13.8	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：橙色・灰白色 内面：にぶい黄褐色・橙色	
Po340	114	63-1	2113	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	△3.2	※14.0	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色・浅黄褐色	
Po341	114	63-2	3992 3994 3998	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	4.6	※15.1	6.7	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色・淡黄色	
Po342	114	63-1	2045	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	△3.2	※13.0	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色・明黄褐色 内面：黄灰色・明黄褐色	外面煤付着
Po343	114	63-2	2231 2415 2416 2417 2419 2421 2428	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	4.3	14.1	7.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色・褐灰色	
Po344	114	63-1	2247	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	△3.3	※13.4	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・灰黄褐色・浅黄褐色 内面：橙色・灰白色	
Po345	114	63-2	3838 2411 2415 2428 41	9F-10h	2面	3010b溝 3010b溝 3010b溝 3010b溝 一	2層 1層 1層 1層 表土以下	土師器 環	4.7	14.5	6.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：ハケ	密良好	外面：灰黄褐色・にぶい黄褐色 内面：褐灰色	内面炭素吸着
Po346	114	63-1	2041	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	△3.7	※12.9	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：橙色・浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
Po347	114	63-2	3852 3857 3858 3859 2097 2098 2100	9F-10h	2面	3010b溝	2層 2層 2層 1層 1層 1層	土師器 環	4.5	14.4	5.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り、板目痕残る 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・浅黄褐色・灰色 内面：灰白色・淡黄褐色	
Po348	114	63-2	3853 3855 3860 1888	9F-10h	2面	3010b溝	2層 2層 2層 埋土	土師器 環	4.1	※14.2	※6.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・褐灰色 内面：浅黄褐色・褐灰色	
Po349	114	63-1	2166	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	△3.3	※14.8	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色・明黄褐色	
Po350	114	63-1	3941	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△3.2	—	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色・灰白色	
Po351	114	63-2	3527 3526 3528	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△2.6	—	5.6	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色 内面：灰白色・黄灰色	
Po352	114	63-2	2181	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 環	△2.9	—	※6.4	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄褐色・灰白色 内面：灰白色・灰黄色	
Po353	114	63-1	3922	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△2.5	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・橙色 内面：にぶい橙色	
Po354	114	63-1	3922	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△2.5	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・褐灰色 内面：灰白色・褐灰色	
Po355	114	63-2	3928 3935 4015	9F-10h 9F-9h 9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△1.7	—	4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：暗灰色・灰色 内面：暗灰色・灰色	
Po356	114	63-1	3539	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△2.4	—	※5.3	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色・浅黄褐色 内面：淡黄色	
Po357	114	63-1	3570	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△2.1	—	※5.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	
Po358	114	63-1	1889	9F-10h	2面	3010b溝	埋土	土師器 環	△3.0	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面とも褐灰色・灰黄褐色	
Po359	114	63-2	3560 3558	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 環	△2.1	—	※6.2	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：褐灰色・灰白色 内面：にぶい黄褐色・灰白色	
Po360	114	63-1	3922	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 皿	△1.6	—	—	内外面ともナデ	密良好	外面：にぶい橙色・灰白色 内面：浅黄褐色・灰白色	手づくね成形
Po361	114	63-2	2130	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 高台付環	△2.5	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色・淡黄色	
Po362	114	63-2	3914	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 高台付環	△2.3	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色・にぶい橙色	
Po363	114	61-5	3555	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 高台付環	△3.8	—	※7.0	外面：回転ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：黄灰色・灰白色 内面：灰白色・黄灰色	
Po364	114	61-5	3850	9F-10h	2面	3010b溝	2層	土師器 高台付環	△2.9	—	※8.4	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色・灰色 内面：灰黄色・灰白色	
Po365	114	63-2	2271	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 高台付環	△2.1	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po366	114	63-2	2414	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 高台付環	△1.9	—	※7.8	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	

第26表 土器及び陶磁器観察表(12)

遺物番号	挿回番号	図版番号	取上No	調査区T45-Gj	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po367	114	61-5	3989 3934 2173	9F-10h 9F-9h 9F-10h	2面	3010b溝	2層 2層 1層	土師器 高台付坏	△3.7	—	8.5	外面：回転ナデ、回転ナデ後 ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・にぶ い褐色 内面：淡褐色・にぶ い褐色	
Po368	114	67-2	4923	9F-9hまた は10h	2面	3010b溝	2層	ミニチュア 土器	△2.2	※2.5	—	外面：ナデ	密 良好	にぶい黄褐色	
Po369	114	67-1	2164	9F-10h	2面	3010b溝	1層	土師器 甕	△6.9	—	—	外面：ハケ 内面：ヘラケズリ・一部指オ サエ	密 良好	外面：煤付着のため不 明 内面：にぶい褐色・灰 褐色	外面と内面上部煤付着 自然科学分析試料No14
Po370	115	65-1	2624	9F-10h	2面	3010b溝	埋土	初期備前 埴	△2.5	—	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色～黄灰色 内面：灰白色	重ね焼き
Po371	115	65-1	2204	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 坏	△3.3	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po372	115	65-1	2195 41	9F-10h	2面 —	3010b溝 —	1層 表土以下	須恵器 埴	△2.9	—	△5.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po373	115	64-2 88 89	2638	9F-10h	2面	3010b溝	埋土	白磁 碗	△1.6	—	—	内外面とも施釉	密 良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類
Po374	115	64-2 88 89	2119	9F-10h	2面	3010b溝	1層	白磁 碗	△2.1	—	—	内外面とも施釉	密 良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ～Ⅵ類
Po375	115	64-3 64-4 88 89	2238 16-311	9F-10h 9E-5g	2面 —	3010b溝 —	1層 攪乱土	白磁 碗	△3.5	—	6.8	外面：施釉、体部下半～底部 露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	碗ⅣⅠa類 H28年度調査Po244に接 合、再実測
Po376	115	64-3 64-4 88 89	2121 372	9F-10h 9F-9c	2面 —	3010b溝 —	1層 表土以下	白磁 碗	△2.3	—	※7.6	外面：施釉、高台部～底面露 胎・一部釉付着 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：外面灰色	碗ⅣⅠ類
Po377	115	64-3 64-4 88 89	3578 2120 1332	9F-10h 9F-10h 9F-9h	2面	3010b溝 3010b溝 3010a溝	2層 1層 2・3層	白磁 碗	△4.4	—	※7.0	外面：施釉、高台部～底面露 胎 内面：施釉、内面付着物あり	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：外面灰色	碗ⅣⅠ類×Ⅵa類
Po378	115	64-2 90-1 90-2	1903	9F-10h	2面	3010b溝	埋土	陶器 壺	△1.1	※5.2	—	内外面とも施釉	密 良好	施釉部：黒色・黄褐色	暗茶褐釉小壺口縁小片
Po379	115	64-2 88 89	3629	9F-10h	2面	3010b溝	2層	白磁 壺	△2.4	—	—	外面：施釉 内面：回転ナデ	密 良好	施釉部：灰白色	壺Ⅱ類
Po380	116	65-1	2091	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△5.9	—	—	外面：横ナデ、指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：褐灰色～灰白色 内面：褐灰色	
Po381	116	65-1	3996	9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△1.9	—	—	外面：ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po382	116	65-1	3721	9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△3.0	—	—	内外面ともナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po383	116	65-1	2095	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△5.1	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕(一部 剥落)	密 良好	外面：灰色 内面：灰黄色	
Po384	116	65-1	3554	9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△8.0	—	—	外面：平行タタキ 内面：板ナデ、丁寧なナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰黄色	
Po385	116	65-3	2282	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△3.5	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	Po271.519.520.712と同一 個体の可能性あり
Po386	116	58-1	3733 2178	9F-10h	2面	3010b溝	2層 1層	須恵器 甕	△8.9	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	内外面とも灰色	Po135.202.203.273, 274.522.713と同一個 体の可能性あり
Po387	116	65-4	2033	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△5.0	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰黄色	Po388.521.716.717と同一 個体の可能性あり
Po388	116	65-4	3736	9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△7.5	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：黄灰色 内面：灰黄色	Po387.521.716.717と同一 個体の可能性あり
Po389	116	65-2	2274	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△4.6	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：黄灰色 内面：黄灰色	Po390と同一個体の可能 性あり
Po390	116	65-2	3842 3568	9F-10h 9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△15.5	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	Po389と同一個体の可能 性あり
Po391	116	64-5	2105	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△12.8	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：黄灰色 内面：褐灰色	Po132.133.134.275, 276.392.907と同一個 体の可能性あり
Po392	116	64-5	2292	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△8.7	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密 良好	外面：黄灰色・灰白色 内面：灰色	Po132.133.134.275, 276.391.907と同一個 体の可能性あり
Po393	116	66-1 66-2	3844 3845	9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△5.0	—	—	外面：平行タタキ後一部カキ メ 内面：カキメ	密 良好	外面：暗灰黄色・褐色 内面：灰黄褐色	Po394.395.517と同一個 体の可能性あり
Po394	116	66-1 66-2	3536 3552	9F-10h	2面	3010b溝	2層	須恵器 甕	△13.7	—	—	外面：平行タタキ後一部カキ メ 内面：横ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：褐灰色	Po393.395.517と同一個 体の可能性あり
Po395	116	66-1 66-2	2210	9F-10h	2面	3010b溝	1層	須恵器 甕	△9.0	—	—	外面：平行タタキ後一部カキ メ 内面：カキメ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～ 褐灰色 内面：明赤褐色～灰黄 褐色	Po393.394.517と同一個 体の可能性あり
Po396	119	67-3	3926	9F-10g ・10h	2面	3010c溝	1層	土師器 皿	2.1	※8.1	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po397	119	67-4	3911	9F-10g ・10h	2面	3010c溝	1層	土師器 皿	2.0	※8.0	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po398	119	67-4	3367 2876	9F-10h	2面	3010c溝	2層 1層	土師器 皿	1.6	※8.2	※4.9	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰黄色・黄灰色 内面：褐灰色	
Po399	119	67-4	3960	9F-10h	2面	3010c溝	2層	土師器 皿	△1.8	※9.1	※5.7	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り、板目痕 残る 内面：回転ナデ、底部回転ナ デ後ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	
Po400	119	67-3	2846	9F-10h	2面	3010c溝	1層	土師器 皿	1.8	※8.3	※4.8	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ?	密 良好	内外面とも灰白色	
Po401	119	67-4	3926	9F-10g ・10h	2面	3010c溝	1層	土師器 柱状高台	△2.0	※7.6	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐色・灰白色 内面：灰白色	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第27表 土器及び陶磁器観察表(13)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	取上No.	調査区 T45-6j-	遺構 面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po402	119	67-3	3963	9F-10h	2面	3010c溝	2層	土師器 環	△2.1	—	※8.7	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・灰黄褐色 内面：灰白色・にぶい 黄褐色	
Po403	119	67-3	2921	9F-9g・9h	2面	3010c溝	1層	土師器 柱状高台	△2.7	—	※4.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po404	119	67-4	3926	9F-10g ・10h	2面	3010c溝	1層	土師器 甕	△2.4	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：黒褐色・灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
Po405	119	67-4	1949	9F-9g・ 9h・10g	2面	3010c溝	1層	土師器 甕	△1.7	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：オリーブ黒色 内面：黒褐色	外面煤付着
Po406	119	67-5 88 89	3400	9F-10h	2面	3010c溝	2層	白磁 碗	△2.6	—	—	内外面とも施釉	密 良好	施釉部：灰白色	碗Ⅱ1類
Po407	119	67-6 67-7	2910	9F-10g	2面	3010c溝	1層	須恵器 甕	△4.4	—	—	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密 良好	内外面とも褐灰色	Po408,409と同一個体の 可能性あり
Po408	119	67-6 67-7	2909	9F-10g	2面	3010c溝	1層	須恵器 甕	△4.3	—	—	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密 良好	内外面とも褐灰色	Po407,409と同一個体の 可能性あり
Po409	119	67-6 67-7	2916	9F-9g	2面	3010c溝	1層	須恵器 甕	△4.2	—	—	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密 良好	内外面とも灰白色	Po407,408と同一個体の 可能性あり
Po410	121	68-1	4760	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	土師器 皿	1.8	※9.4	※6.4	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り？ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：灰白色・褐灰 色・黒褐色	口縁端部内外面に煤付 着
Po411	121	68-1	4760	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	土師器 皿	1.8	※8.5	※5.6	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り？ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色・淡赤褐色 内面：灰白色・にぶい 橙色	
Po412	121	68-1	4760	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	土師器 環	△2.6	※14.8	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色・ にぶい橙色	
Po413	121	68-2	4760	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	土師器 環	△2.6	※14.6	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙色・灰白色 内面：にぶい黄褐色・ 浅黄褐色	
Po414	121	68-1	4760	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	土師器 甕	△2.6	—	—	内外面とも横ナデ、ナデ	密 良好	内外面とも黒褐色	外面煤付着
Po415	121	68-1	4760	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	須恵器 環	△2.0	—	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色～暗灰色 内面：灰色	重ね焼き
Po416	121	68-3 88 89	4759	9F-10h	2面	3010d溝	埋土	白磁 碗	△3.3	—	—	内外面とも施釉	密 良好	施釉部：灰白色	碗Ⅱ類？
Po417	123	68-7	2437	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	土師器 皿	△1.8	※7.1	※3.7	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po418	123	68-7	2832	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 皿	△1.8	※8.6	※4.5	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	密 良好	外面：灰白色・浅黄橙 色 内面：浅黄褐色	
Po419	123	68-6	2800	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 皿	△2.0	8.0	5.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・橙色 内面：灰白色	
Po420	123	68-6	2834 2676	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 皿	2.2	※8.1	※5.5	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・橙色 内面：浅黄褐色	
Po421	123	68-7	2809 2793	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 皿	△1.6	※9.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	
Po422	123	68-7	2806	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 柱状高台	△1.7	※11.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色～黄 灰色	
Po423	123	68-7	2802	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 皿	△1.4	※8.6	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・暗灰色	
Po424	123	68-6	2442	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	土師器 柱状高台	△3.0	—	※6.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・黄灰 色・橙色 内面：灰白色・暗灰色	
Po425	123	68-6	2441	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	土師器 柱状高台	△2.5	—	※4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・にぶ い黄褐色 内面：浅黄褐色	
Po426	123	68-6	2440	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	土師器 柱状高台	△2.8	—	※4.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po427	123	68-7	2812 2814	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	下層	土師器 環	△2.8	—	5.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色・に ぶい黄褐色	
Po428	123	68-7	2468	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	瓦質土器 鉢	△2.1	—	—	内外面ともナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po429	123	68-7	2457	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	土師器 高台付環	△3.6	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色～にぶい 黄褐色	
Po430	123	68-7	2446	9F-10f ・10g	2面	3056土坑	上層	須恵器 鉢	△2.7	—	—	外面：口縁端部ナデ、横ナ デ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po431	123	68-5 88 89	2448 152	9F-10f・g 9F-10e	2面	3056土坑 —	南側上層 表土以下	白磁 皿	△1.1	—	※6.0	外面：施釉、登付～底部露胎 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：黄灰色・浅黄 色	皿Ⅱ×Ⅲ類
Po432	125	68-7	2392	9F-10f ・10g	2面	3057土坑	上層	土師器 皿	1.8	※8.3	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部ナ デ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色～灰色	
Po433	125	68-6	2382 2406	9F-10f ・10g	2面	3057土坑	上層	土師器 柱状高台	3.6	※8.4	※4.3	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色～灰 黄色	
Po434	125	68-6	2395	9F-10f ・10g	2面	3057土坑	上層	土師器 柱状高台	△2.9	—	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・橙色 内面：灰白色	
Po435	125	68-6	2387	9F-10f ・10g	2面	3057土坑	上層	土師器 柱状高台	△3.0	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	
Po436	125	68-7	1885	9F-10f ・10g	2面	3057土坑	埋土	土師器 環	△3.9	※14.4	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色・灰 黄褐色	内面煤付着？
Po437	125	68-7	2394	9F-10f ・10g	2面	3057土坑	上層	土師器 環	△2.5	—	※6.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・淡橙 色 内面：浅黄褐色	
Po438	126	68-6	4411	10F-1f	2面	3259土坑	埋土	土師器 柱状高台	△2.3	※8.1	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り？ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・浅黄橙 色	

第28表 土器及び陶磁器観察表(14)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po439	126	68-6	4379	10F-1f	2面	3259土坑	埋土	土師器 柱状高台	△2.4	—	※5.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	貫通孔あり
Po440	126	68-7	4410 4378	10F-1f	2面	3259土坑	埋土	土師器 環	△3.7	※14.1	—	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po441	136	69-2	4805	10F-1f	2面	3317柱穴	抜取痕	土師器 皿	2.4	8.5	4.9	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色～灰黄褐色 内面：灰白色	内面煤付着
Po442	136	69-2	4579	9F-10f	2面	3261柱穴	1層	土師器 皿	2.2	※8.6	5.0	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	
Po443	136	69-1	4416 4571	9F-10f	2面	3261柱穴	1層 1層	土師器 皿	△1.4	※7.5	※4.5	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄褐色・灰白色 内面：浅黄褐色	
Po444	136	69-2	3439	10F-1h	2面	3201柱穴	抜取痕	土師器 柱状高台	△2.6	—	※5.6	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：浅黄褐色・淡褐色 内面：浅黄褐色	
Po445	136	69-2	4407	10F-1f	2面	3260柱穴	堀方埋め土	土師器 柱状高台	△2.7	—	※4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	
Po446	136	69-1	3433	10F-1h	2面	3329柱穴	埋土	土師器 環	△4.0	※13.3	—	内外面とも回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po447	136	69-1	4485 4525	9F-10h	2面	3292柱穴	抜取痕	土師器 環	△3.2	※12.7	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：褐灰色・灰白色	
Po448	136	69-1	4447 3473	10F-1f	2面	3225ピット	埋土	土師器 環	△2.6	—	※5.7	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色～にぶい黄褐色 内面：褐灰色	
Po449	136	69-1	4543	10F-1g	2面	3298柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.5	※14.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：橙色・灰白色 内面：橙色	
Po450	136	69-1	4507 4544	10F-1g	2面	3298柱穴	抜取痕	土師器 環	△2.3	※13.9	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：灰黄褐色・橙色 内面：にぶい橙色・褐色	
Po451	136	69-1	4569	9F-10f	2面	3261柱穴	1層	土師器 環	△2.6	※14.5	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色～にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色・浅黄褐色～にぶい褐色	
Po452	136	50-1	4778 4779 4782 64	10F-1g 10F-1g 10F-1g —	2面 2面 2面 —	3314柱穴 3314柱穴 3314柱穴 —	抜取痕 抜取痕 抜取痕 攪乱土	須恵器 長頸壺	△8.5	—	—	外面：口縁端部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：黒褐色～灰白色 内面：灰白色～黒色	
Po453	136	50-1	4545 4784 4783 4781 4780	10F-1g	2面	3314柱穴	抜取痕	須恵器 長頸壺	△8.7	—	—	外面：横ナデ、一部自然釉 内面：横ナデ	密良好	内外面とも灰色～暗灰	
Po454	136	56 57	4417 1 49	9F-10f 9F-10d1c 9F-10f	2面 — —	3261柱穴 — —	1層 表土 表土以下	須恵器 甕	△12.4	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円文状当て具痕	密良好	外面：灰黄褐色～浅黄褐色 内面：灰色	
Po455	136	69-3	4106 4107 16-96 16-106 16-663 16-664 16-675	10F-1g 10F-1g 10F-1・2de 10F-1・2bc 10F-1d 10F-1e 10F-1d	2面 2面 — — — — —	3214柱穴 3214柱穴 — — — — —	抜取痕 抜取痕 表土 表土 攪乱土 攪乱土	須恵器 薬壺	△8.0	—	※16.0	外面：横ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ、一部自然釉 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：灰色・黒色 内面：褐灰色	H28出土遺物接合
Po456	142	70	4559	9F-10h 10F-1h	3面	250溝a	埋土	弥生土器 甕	△2.3	—	—	外面：口縁端部刻み、ナデ 内面：ナデ	密良好	内外面とも灰白色	外面一部煤付着
Po457	142	70	4559	9F-10h 10F-1h	3面	250溝a	埋土	弥生土器 甕	△2.8	—	—	外面：口縁端部刻み 内面：磨耗のため調整不明	密良好	内外面とも浅黄色	
Po458	142	70	4557	10F-1h	3面	250溝a	埋土	弥生土器 甕	△5.7	—	—	外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ	密良好	内外面とも明褐色	
Po459	142	70	4562	9F-10g 10h	3面	250溝a	埋土	弥生土器 甕	△14.3	—	—	外面：ミガキ 内面：ナデ後ミガキ	密良好	外面：浅黄色～黄灰色 内面：浅黄色	
Po460	142	70	4703	9F-7b	3面	250溝a・b	埋土下層	弥生土器 甕	△6.9	—	—	外面：口縁端部ナデ、櫛描平行沈線 内面：ミガキ	密良好	外面：橙色～褐灰色 内面：にぶい褐色	
Po461	142	70	4568	9F-10g	3面	250溝a	埋土	弥生土器 甕	△4.4	※12.0	—	外面：口縁端部ナデ、刺突文、ハケ後横ナデ、櫛描平行沈線 内面：ナデ、ミガキ、指オサエ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	
Po462	142	71-2	4556	10F-1h	3面	250溝a	埋土	弥生土器 甕or甕	△3.4	—	8.0	外面：ナデ、底部ナデ・表面風化 内面：ナデ	密良好	内外面とも明褐色	
Po463	143	70	4726	9F-7c	3面	250溝b	底面直上	弥生土器 甕	△3.4	—	—	外面：口縁端部刺突文、ハケ・指オサエ、櫛描平行沈線 内面：ミガキ	密良好	外面：黒褐色 内面：褐灰色	
Po464	143	70	4649	9E-5j	3面	250溝b	埋土(底面直上)	弥生土器 甕	△4.1	—	—	外面：口縁端部刻み、ナデ、櫛描平行沈線 内面：ナデ、指オサエ	密良好	内外面とも浅黄色	
Po465	143	70	4819 4798	9F-9f	3面	250溝b	埋土	弥生土器 甕	△4.7	—	—	外面：口縁端部刻み、ナデ、櫛描平行沈線、刺突文 内面：ミガキ	密良好	外面：黄褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	
Po466	143	70	4774	9F-8d	3面	250溝b	埋土	弥生土器 甕	△5.2	—	—	外面：口縁端部刻み、櫛描平行沈線 内面：ミガキ、ナデ	密良好	内外面とも黄褐色	外面一部煤付着
Po467	143	70	4749	9F-10g	3面	250溝b	埋土	弥生土器 甕	△2.0	—	—	内外面ともナデ、指オサエ	密良好	内外面とも灰黄色	外面一部煤付着
Po468	143	70	4707	9F-6b	3面	250溝b	底面直上	弥生土器 甕	△8.7	※17.0	—	外面：口縁端部ナデ、指オサエ、ハケ 内面：口縁部指オサエ・ナデ、ナデ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：橙色～にぶい黄褐色	外面煤付着
Po469	143	70	4724 4677 4709 4719 4727 4728	9F-7c 9F-6b 9F-7b 9F-7c 9F-7c 9F-8c	3面	250溝b	底面直上 埋土 埋土 埋土 埋土	弥生土器 甕	△7.3	※19.0	—	外面：口縁端部ナデ、ナデ、ハケ 内面：ナデ、ミガキ	密良好	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
Po470	143	70	4719	9F-7c	3面	250溝b	埋土	弥生土器 甕	△4.6	—	—	外面：櫛描平行沈線 内面：ミガキ	密良好	外面：橙色～黒褐色 内面：褐色	外面一部煤付着
Po471	143	70	4823 4697 4713 4716 4721	9F-9e 9F-9e 9F-9e 9F-9d 9F-9e	3面	250溝b	底面直上 Ⅲ-2層 Ⅲ-2層 Ⅲ-2層 Ⅲ-2層	弥生土器 甕	△12.6	※21.8	—	外面：櫛描平行沈線・波状文、円形刺突文、ハケ後タテミガキ 内面：ミガキ	密良好	外面：暗灰黄色 内面：浅黄色	

第29表 土器及び陶磁器観察表(15)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区T45-Gj-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po472	143	70	4804 4583 4737 4770 4792 4802	9F-9f 9F-10g 9F-9e 9F-9f 9F-9f・10f 9F-10f	3面 3面 — 3面 3面 3面	250溝 b 250溝 b 250溝 b 250溝 b 250溝 b	埋土 砂層 IV層 埋土 埋土 埋土	弥生土器 甕	△8.6	※22.8	—	外面：口縁端部刻み、櫛描平行沈線、ミガキ 内面：ミガキ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色～にぶい黄褐色	
Po473	143	70	4675	9F-6a	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 無頸壺	△1.9	—	—	外面：口縁端部刻み、ナデ、沈線 内面：ナデ、指オサエ	密良好	内外面とも灰白色	
Po474	143	70	4749	9F-10g	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 無頸壺	△2.5	—	—	外面：口縁端部ナデ、指オサエ、ハケ 内面：ナデ	密良好	内外面とも赤褐色	
Po475	143	70	4621	9E-5j・5i	3面	250溝 b	埋土(砂層)	弥生土器 壺	△2.8	—	—	内外面ともナデ	密良好	内外面とも浅黄色	擬朝鮮無文土器?
Po476	143	70	4764 4703	9F-9d 9F-7b	3面	250溝 b 250溝a・b	埋土 土層下層	弥生土器 無頸壺	△10.2	※10.3	—	外面：口縁端部横ナデ、刻み、ハケ後櫛描波状文、ハケ後ナデ 内面：ハケ、ハケ後ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po477	143	70	4835 4811	9F-9e	3面	250溝 b	底面直上 埋土	弥生土器 壺	△10.8	—	—	外面：櫛描平行沈線、刺突文、ミガキ 内面：ナデ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po478	143	70	4762	9F-10g 10h	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 壺	△2.3	—	—	外面：ハケ、円形浮文、液状文 内面：剥離のため調整不明	密良好	外面：橙色 内面：淡黄色	
Po479	143	71-1	4664 4676 4675 4640	9F-6a 9F-6a 9F-6a 9F-7a	3面	250溝 b 250溝 b 250溝 b 250溝 a	埋土	弥生土器 壺	△16.6	—	6.4	外面：櫛描平行沈線、液状文、浮文、ミガキ、一部磨減により調整不明 内面：指オサエ、ミガキ	密良好	外面：にぶい黄褐色、褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po480	143	70	4677	9F-6b	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 壺	△2.4	—	—	外面：口縁端部矢羽状刻み、ミガキ 内面：ミガキ	密良好	外面：褐色 内面：灰黄褐色	
Po481	143	70	4824	9F-9e	3面	250溝 b	底面直上	弥生土器 壺	△5.7	※17.4	—	外面：刻み、横ナデ、櫛描平行沈線 内面：ミガキ	密良好	内外面とも浅黄色	
Po482	143	71-1	4823 4822 4811	9F-9e	3面	250溝 b	底面直上 底面直上 埋土	弥生土器 壺	△18.5	※16.7	—	外面：口縁端部斜格子状刻み、口縁部ハケ後部分的ミガキ、ハケ後ミガキ 内面：ミガキ、ナデ・指オサエ、ハケ後ナデ	密良好	外面：浅黄色～灰黄色 内面：暗灰黄色～浅黄色	
Po483	143	71-2	4755	10F-1h	3面	250溝 b	砂層	弥生土器 壺	△5.4	—	※7.2	外面：ハケ後横ミガキ・縦ミガキ、底部ナデ 内面：指オサエ、ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po484	143	71-2	4729	9F-8c	3面	250溝 b	底面直上	弥生土器 甕	△5.3	—	※7.0	外面：ヘラによるナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	内面一部煤付着
Po485	143	71-2	4667	9E-5i	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 甕	△4.2	—	※6.2	外面：ミガキ、ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：浅黄色 内面：黒褐色	内面焦げ付着
Po486	143	71-2	4801	9F-10f	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 甕	△6.8	—	※7.6	外面：ナデ、指オサエ、底部ナデ 内面：指オサエ、ナデ	密良好	内外面とも浅黄色	外面一部煤付着
Po487	143	71-2	4775 4765 4811	9F-9e 9F-9f 9F-9e	3面	250溝 b	埋土	弥生土器 甕	△3.3	—	7.2	外面：ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：橙色 内面：浅黄色	
Po488	143	71-2	4811 4737	9F-9e	3面	250溝 b	埋土 IV層	弥生土器 甕	△3.5	—	※6.2	外面：ミガキ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：橙色～にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
Po489	146	72-1	3230	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 壺	△2.3	—	—	内外面ともミガキ	密良好	内外面とも橙色	
Po490	146	72-1	3061	10F-1h	3面	3186土坑	砂層	弥生土器 壺	△4.8	—	—	外面：口縁端部ナデ、ナデ、ハケ 内面：ミガキ	密良好	外面：にぶい橙色～灰褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po491	146	72-1	3153 3173 3177	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 甕	△6.0	※23.4	—	外面：ナデ、櫛描平行沈線 内面：ナデ、指オサエ	密良好	外面：にぶい橙色～黒褐色 内面：にぶい橙色	外面煤付着
Po492	146	72-1	3155	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 壺	△2.9	—	—	外面：口縁端部刻み、横ナデ 内面：横ナデ	密良好	内外面とも黄褐色	
Po493	146	72-1	3222	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 無頸壺	△5.1	—	—	外面：口縁端部連続刺突文、焼成前穿孔、櫛描平行沈線、連続刺突文 内面：ミガキ	密良好	外面：黒褐色～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po494	146	72-1	3175	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 壺or甕	△1.7	—	※6.0	外面：ナデ、底部初圧痕 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色～黒褐色 内面：黒褐色	初圧痕あり
Po495	146	72-1	3181	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 壺or甕	△5.7	—	※6.0	外面：縦ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：明赤褐色 内面：黄褐色	内面煤付着
Po496	146	72-1	3146 3194	10F-1h	3面	3186土坑	砂層(上層)	弥生土器 壺or甕	△9.7	—	※6.0	外面：ミガキ、ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：橙色～にぶい黄褐色 内面：黒褐色	内面焦げ付着
Po497	151	73-1	1395	9F-9g	—	—	Ⅲ-1層	土師器 皿	△1.5	※7.9	—	外面：口縁部横ナデ、底部ナデ 内面：口縁部横ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・褐灰色 内面：にぶい黄褐色・灰黄褐色	手づくね成形
Po498	151	73-1	200	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	土師器 皿	1.8	※8.2	—	外面：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ+指オサエ 内面：口縁部横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：褐灰色・にぶい黄褐色 内面：にぶい橙色・灰黄褐色	手づくね成形
Po499	151	73-1	1395	9F-9g	—	—	Ⅲ-1層	土師器 皿	△2.5	※10.0	—	外面：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ+指オサエ 内面：口縁部～体部横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：浅黄褐色・にぶい黄褐色 内面：橙色	手づくね成形
Po500	151	73-1	200	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	土師器 皿	△3.0	※11.2	—	外面：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ+指オサエ 内面：口縁部～体部横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色・にぶい橙色	手づくね成形
Po501	151	72-3	930	9F-10e	—	—	Ⅲ-1層	土師器 柱状高台	△2.3	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色・褐灰色	
Po502	151	72-3	926	9F-10e	—	—	Ⅲ-1層	土師器 柱状高台	△2.8	—	※4.9	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黒褐色	
Po503	151	72-3	246	10F-1f	—	—	Ⅲ-1層	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色・灰白色 内面：灰白色	
Po504	151	72-3	1798	9F-10d	—	—	Ⅲ-1層	土師器 柱状高台	△2.9	—	4.1	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：磨耗のため調整不明	密良好	内外面とも灰白色	

第30表 土器及び陶磁器観察表(16)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区T45-Gj-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po505	151	72-3	927 385 384	9F-10d 9F-10e 9F-10d	—	—	Ⅲ-1層 表土	土師器 高台付坏	5.6	※14.0	8.8	内外面ともに回転ナデ	密良好	外面：橙色 内面：橙色・にぶい橙色	
Po506	151	73-1	246 385 202	10F-1f 9F-10e 9F-10d	—	—	Ⅲ-1層 表土	土師器 坏	△1.7	—	6.6	外面：回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黄灰色・灰白色	ヘラ切り
Po507	151	73-1	1450	9F-9g	—	—	Ⅲ-1層	須恵器 坏	△2.8	※16.2	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：褐灰色～黒褐色 内面：褐灰色～黒色	
Po508	151	73-1	200	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	瓦質土器 羽釜	△4.2	—	—	外面：口縁部ナデ、体部ナデ 内面：ナデ、指オサエ	密良好	外面：オリーブ黒色～灰白色 内面：オリーブ黒色～灰色	
Po509	151	73-1	940	9F-10d・ 10e・10f	—	—	Ⅲ-1層	土師器 鍋	△2.6	—	—	外面：ナデ、粗いナデ、指オサエ 内面：横ナデ、ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：明黄褐色～浅黄色 内面：明黄褐色	
Po510	151	73-1	253	9F-10f	—	—	Ⅲ-1層	土師器 鉢	△2.2	—	—	外面：ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：浅黄色 内面：黄灰色	
Po511	151	73-1	1108	9F-10d	—	—	Ⅲ-1層	土師器 甕	△3.8	※30.2	—	外面：ナデ 内面：横ナデ、ヘラケズリ	密良好	外面：暗黄褐色～黒色 内面：浅黄色	外面煤付着
Po512	151	73-1	1107	9F-10e	—	—	Ⅲ-1層	弥生土器 甕	△3.0	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	密良好	外面：明黄褐色 内面：浅黄色	
Po513	151	88 89	2603	9F-10f	—	—	Ⅲ-1層	白磁 碗	△3.3	—	—	内外面とも施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：黄灰色	碗Ⅳ×Ⅴ×Ⅵ?類
Po514	151	88 89	1747	9F-9g	—	—	Ⅲ-1層	白磁 碗	△2.3	—	—	内外面とも施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	碗Ⅳ-Ⅴ類
Po515	151	88 89	1372	9F-5c	—	—	Ⅲ-1・2層	白磁 碗	△4.4	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ1類口縁
Po516	151	87-1 87-2	1746	9F-9g	—	—	Ⅲ-1層	青磁 小碗	△2.2	—	—	外面：施釉、蓮弁文 内面：施釉	密良好	施釉部：明オリーブ灰色・オリーブ灰色	龍泉窯系 小碗Ⅲ2C類・直口縁
Po517	151	66-1 66-2	2651 89	9F-10e 9F-9e・9d	—	—	Ⅲ-1層 表土以下	須恵器 甕	△4.6	—	—	外面：平行タタキ 内面：カキメ	密良好	外面：褐色～灰褐色 内面：黄褐色	Po393,394,395と同一個体の可能性あり
Po518	151	73-1	1450	9F-9g	—	—	Ⅲ-1層	須恵器 甕	△7.3	—	—	外面：平行タタキ後ナデ? 内面：車輪状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	
Po519	151	65-3	2796 73	9F-10d	—	—	Ⅲ-1層 攪乱土	須恵器 甕	△5.6	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：褐灰色	Po271,385,520,712と同一個体の可能性あり
Po520	151	65-3	223 16-712	9F-10e 9F-10d	—	—	Ⅲ-1層	須恵器 甕	△5.5	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：褐灰色	Po271,385,519,712と同一個体の可能性あり
Po521	151	65-4	1773 252	9F-10e 9F-9g	—	—	Ⅲ-1層 表土以下	須恵器 甕	△11.0	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：黄灰色 内面：灰黄色	Po387,388,716,717と同一個体の可能性あり
Po522	151	58-1	1450 1	9F-9g 9F-10d1c	—	—	Ⅲ-1層 表土	須恵器 甕	△8.1	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰白色・黄灰色 内面：灰黄色	Po135,202,203,273,274,386,713と同一個体の可能性あり
Po523	151	73-1	1776 1799	9F-10e 9F-10e	—	—	Ⅲ-1層	須恵器 甕	△7.8	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕、一部剥落	密良好	外面：黄灰色 内面：灰黄色	
Po524	151	49-3	643 644 355 16-1920 16-875	9F-10e 9F-10e 9F-10d 10F-1e 10F-1d	—	—	Ⅲ-1層 表土 埋土 2層	須恵器 甕	△8.9	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：黄灰色 内面：灰黄色	H28出土遺物接合
Po525	152	73-2	4565	9F-10e	—	—	Ⅲ-2層	土師器 皿	1.9	※8.6	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも褐灰色・灰白色	
Po526	152	73-2	4565	9F-10e	—	—	Ⅲ-2層	土師器 皿	1.3	※8.3	※6.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰白色	
Po527	152	73-2	4763	9F-9d	—	—	Ⅲ-2層	土師器 柱状高台	△2.6	—	5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	
Po528	152	73-2	4660	9F-7d	—	—	Ⅲ-2層	土師器 皿	△1.4	※7.2	—	外面：横ナデ、体部～底部ナデ、指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：ぶい橙色・灰白色・橙色 内面：ぶい橙色	手づくね成形
Po529	152	73-2	19	9F-5c	—	—	Ⅲ-2層	土師器 皿	△1.6	※8.1	—	外面：横ナデ、体部～底部ナデ、指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色・黄灰色・橙色	手づくね成形
Po530	152	73-2	4619	9F-6b	—	—	Ⅲ-2層	土師器 皿	△1.5	※8.1	—	外面：横ナデ、体部～底部ナデ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：暗灰色・褐色 内面：褐色・ぶい黄褐色	手づくね成形
Po531	152	74-1	4685	9F-8e	—	—	Ⅲ-2層	須恵器 坏	3.6	※10.3	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色～褐灰色 内面：灰白色	
Po532	152	73-3	2615	9F-10e	—	—	Ⅲ-2層	須恵器 坏	△2.1	※13.8	—	外面：口縁端部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	
Po533	152	73-3	4681 392	9F-8e 9F-8d	—	—	Ⅲ-2層 表土以下	須恵器 壺	△1.8	※21.0	—	外面：口縁端部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：灰白色～ぶい黄褐色 内面：灰白色	
Po534	152	73-3	4721	9F-9e	—	—	Ⅲ-2層	弥生土器 甕	△3.5	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ、指オサエ、ハケ	密良好	外面：明黄褐色 内面：ぶい黄褐色	
Po535	152	73-3	4692	9F-9e	—	—	Ⅲ-2層	弥生土器 甕	△4.5	—	—	外面：口縁端部ミガキ、ナデ、ミガキ 内面：ミガキ	密良好	内外面とも浅黄色	
Po536	152	73-3	4745	9F-10f北	—	—	Ⅲ-2層	弥生土器 甕	△3.5	—	—	外面：櫛播波状文、ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	密良好	内外面とも明黄褐色	
Po537	152	74-2	1399	9F-10e	—	—	Ⅲ-2層	ミニチュア 土器	△1.7	—	1.4	内外面ともナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po538	152	56 57	2558 924 929	10F-1f 9F-10e 9F-10d	—	—	Ⅲ-2層 Ⅲ-1層 Ⅲ-1層	須恵器 甕	△20.2	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：浅黄褐色	Po204と同一個体の可能性あり
Po539	152	73-4	4659 4661 412 4635	9F-7c 9F-7d 9F-8c 9F-7c	—	—	Ⅲ-2層 Ⅲ-2層 攪乱土	須恵器 甕	△18.3	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	密良好	外面：灰白色 内面：褐灰色	
Po540	152	88 89	4898	9F-7d	—	—	Ⅲ-2層	白磁 碗	△3.2	—	—	外面：施釉 内面：施釉、櫛目文、圏線	密良好	外面施釉部：灰白色 内面施釉部：灰白色・灰オリーブ色	碗Ⅴ×Ⅵ類
Po541	152	88 89	4899	9F-7d	—	—	Ⅲ-2層	白磁 碗	△3.2	—	※4.8	外面：施釉、体部下半～底部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：内外面とも灰黄色 露胎部：灰白色	碗Ⅱ類
Po542	155	—	366	9F-10h	—	—	表土以下	土師器 皿	1.9	※8.9	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	内面に漆付着

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第31表 土器及び陶磁器観察表(17)

遺物番号	押岡番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po543	155	75-1	335	9F-10f	—	—	表土	土師器 皿	△1.1	—	4.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄橙色	
Po544	155	75-1	5	—	—	—	表土	土師器 柱状高台	△1.7	—	4.3	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・ 浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
Po545	155	75-1	335	9F-10f	—	—	表土	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.6	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：褐灰色	
Po546	155	75-1	41	9F-10h	—	—	表土以下	土師器 柱状高台	△3.3	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：褐灰色	
Po547	155	75-1	384	9F-10d	—	—	表土	土師器 柱状高台	△3.2	—	※5.2	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色、 にぶい橙色	
Po548	155	75-1	354	9F-10f	—	—	表土	土師器 柱状高台	△3.4	—	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
Po549	155	75-1	385	9F-10e	—	—	表土	土師器 柱状高台	△2.2	—	※4.8	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色・ 褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
Po550	155	75-1	385	9F-10e	—	—	表土	土師器 柱状高台	△2.9	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・褐灰色	
Po551	155	75-1	356	9F-10e	—	—	表土	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色・に ぶい黄橙色 内面：にぶい橙色	
Po552	155	75-1	4789	9F-9h	—	—	攪乱土	土師器 柱状高台	△1.8	—	※5.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・灰白色	
Po553	155	75-1	354	9F-10f	—	—	表土	土師器 柱状高台	△2.5	—	※4.0	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：風化のため調整不明	密 良好	内外面とも浅黄橙色	
Po554	155	75-1	351	9F-10f	—	—	表土	土師器 柱状高台	△3.1	—	※4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：ナデ	密 良好	外面：褐灰色・にぶい 黄橙色 内面：灰白色	
Po555	155	75-1	385	9F-10e	—	—	表土	土師器 柱状高台	△2.8	—	4.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po556	155	75-1	335	9F-10f	—	—	表土	土師器 柱状高台	△2.8	—	4.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色・灰黄色 内面：灰黄色	
Po557	155	75-1	817	9F-5c	—	—	攪乱土	土師器 皿	2.6	※7.8	4.5	外面：口縁端部ナデ、回転ナ デ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙 色	
Po558	155	75-2	4612	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器 坏	3.8	※13.8	※8.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰黄褐色・ にぶい黄橙色	
Po559	155	75-2	335	9F-10f	—	—	表土	土師器 坏	△2.1	—	6.1	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色・にぶい 黄橙色	
Po560	155	69-1	4429	10F-1f	—	—	攪乱土	土師器 坏	△2.4	—	※6.4	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po561	155	74-5 75-2	341	9F-10e 10F-1e	—	—	攪乱土	土師器 坏	△1.5	—	※6.2	外面：回転ナデ、底部ヘラ切 り 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	ヘラ切り
Po562	155	75-2	73	—	—	—	攪乱土	土師器 坏	△3.4	—	※10.1	外面：回転ナデ、底部静止糸 切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：褐灰色・灰白 色・黄灰色 内面：黄灰色・褐灰色	静止糸切り
Po563	155	74-5 75-2	95	9F-8e	—	—	表土以下	土師器 高台付坏	△2.2	—	※5.6	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・灰白 色 内面：浅黄褐色	
Po564	155	75-2	354	9F-10f	—	—	表土	土師器 高台付坏	△2.4	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・灰白 色 内面：浅黄褐色	
Po565	155	75-2	385	9F-10e	—	—	表土	土師器 高台付坏	△2.9	—	※6.6	内外面とも回転ナデ	密 良好	外面：灰白色・橙色 内面：灰白色	
Po566	155	75-2	385	9F-10e	—	—	表土	土師器 高台付坏	△2.4	—	—	内外面とも回転ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po567	156	76	4860	9F-5b	—	—	層位不明	土師器 皿	△1.4	※7.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指 オサエ 内面：ナデ、横ナデ、底部ナ デ	密 良好	外面：灰黄色・灰黄褐 色 内面：灰白色	手づくね成形
Po568	156	76	1445	—	—	—	表土	土師器 皿	1.1	※6.2	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色・褐灰 色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po569	156	76	821	9F-5c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.4	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指 オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙 色	手づくね成形
Po570	156	76	4610	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.3	※6.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙 色	手づくね成形
Po571	156	76	821	9F-5c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.4	※7.1	—	内外面とも横ナデ、底部ナ デ・指オサエ	密 良好	内外面とも灰白色	手づくね成形
Po572	156	76	950	9E-5i	—	—	表土	土師器 皿	△1.5	—	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po573	156	76	884	9E-5j	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.5	※8.0	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指 オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面ともにぶい黄橙 色	手づくね成形
Po574	156	76	3620	9F-7d	—	—	表土以下	土師器 皿	△1.4	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指 オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色・にぶ い黄褐色・橙色 内面：にぶい黄褐色・ にぶい橙色	手づくね成形
Po575	156	76	950	9E-5i	—	—	表土	土師器 皿	1.4	※7.2	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：橙色・灰黄褐色 内面：橙色	手づくね成形
Po576	156	76	693	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.4	※7.7	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指 オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：橙色・にぶい黄 褐色・褐灰色 内面：にぶい黄褐色	手づくね成形
Po577	156	76	743	9F-6a	—	—	表土	土師器 皿	1.4	※8.0	—	外面：横ナデ、体部ナデ、底 部指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色・ 橙色 内面：橙色	手づくね成形
Po578	156	76	662	9F-7c	—	—	表土以下	土師器 皿	△1.6	※7.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指 オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色・ 褐色 内面：明赤褐色・にぶ い橙色	手づくね成形
Po579	156	76	3619	9F-7c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.4	※7.2	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	手づくね成形



第32表 土器及び陶磁器観察表(18)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区T45-6j	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po580	156	76	253	9F-10f	—	—	表土	土師器皿	△1.5	※7.4	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：橙色・にぶい黄褐色 内面：橙色	手づくね成形
Po581	156	76	883	9E-6i	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.3	※8.7	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	外面：灰黄褐色・褐灰色 内面：灰黄色・灰黄褐色	手づくね成形
Po582	156	76	744	9E-6j	—	—	表土	土師器皿	△1.4	※7.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	手づくね成形
Po583	156	76	4620	9F-7c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.8	※6.7	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ・指オサエ	密良好	外面：ぶい橙色・褐灰色・黒褐色 内面：ぶい黄褐色・褐灰色	手づくね成形
Po584	156	76	4610	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.5	※7.0	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ・指オサエ	密良好	内外面とも明褐色・ぶい黄褐色	手づくね成形
Po585	156	76	4617	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.2	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	手づくね成形
Po586	156	76	662	9F-7c	—	—	表土以下	土師器皿	△2.2	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密良好	内外面とも灰白色	手づくね成形
Po587	156	76	820	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.2	※8.0	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：ぶい橙色・橙色 内面：ぶい橙色	手づくね成形
Po588	156	76	186	9F-9e・9f	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.0	※8.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	手づくね成形
Po589	156	76	4701	9F-8c	—	—	表土	土師器皿	1.0	※8.6	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面とも灰白色	手づくね成形
Po590	156	76	944	9F-4a	—	—	表土	土師器皿	△1.3	※9.5	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：橙色 内面：ぶい橙色	手づくね成形
Po591	156	76	633	9F-8d	—	—	表土	土師器皿	△1.2	※8.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po592	156	76	356	9F-10e	—	—	表土	土師器皿	△1.5	※7.5	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：ぶい橙色 内面：ぶい橙色・灰褐色	手づくね成形
Po593	156	77-1	950	9E-5i	—	—	表土	土師器皿	△1.2	※6.9	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色・橙色	手づくね成形
Po594	156	77-1	817	9F-5c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.3	※6.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	外面：ぶい黄褐色・橙色 内面：ぶい橙色	手づくね成形
Po595	156	77-1	4860	9F-5b	—	—	層位不明	土師器皿	△1.2	※6.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	外面：明赤褐色・褐灰色・灰白色 内面：灰白色・橙色	手づくね成形
Po596	156	77-1	820	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.3	※6.6	—	外面：口縁端部ナデ、横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、指オサエ、底部ナデ	密良好	外面：浅黄褐色・橙色 内面：橙色	手づくね成形
Po597	156	77-1	4645	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.5	※6.7	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：ぶい黄褐色 内面：ぶい黄褐色	手づくね成形
Po598	156	77-1	950	9E-5i	—	—	表土	土師器皿	△1.4	※7.0	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po599	156	77-1	4610	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器皿	△2.1	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：ぶい橙色・灰黄褐色・橙色 内面：灰黄褐色・明褐色・ぶい橙色	手づくね成形
Po600	156	77-1	1445	—	—	—	表土	土師器皿	2.0	※7.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：口縁端部横ナデ+ナデ、横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：ぶい橙色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po601	156	77-1	744	9E-6j	—	—	表土	土師器皿	1.1	※7.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	手づくね成形
Po602	156	77-1	852	9F-5b	—	—	表土	土師器皿	1.4	※8.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：橙色 内面：ぶい黄褐色・橙色	手づくね成形
Po603	156	77-1	4636	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.3	※6.9	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po604	156	77-1	822	9F-5b	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.4	※8.0	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：ぶい橙色・灰黄褐色・明褐色 内面：ぶい黄褐色	手づくね成形
Po605	156	77-1	821	9F-5c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.5	※7.8	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面とも灰白色	手づくね成形
Po606	156	77-1	4610	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.3	※7.4	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：浅黄褐色・橙色 内面：ぶい橙色	手づくね成形
Po607	156	77-1	744	9E-6j	—	—	表土	土師器皿	△1.5	※7.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：黒褐色 内面：浅黄褐色	手づくね成形 外面炭素吸着
Po608	156	77-1	24	9F-7e	—	—	表土以下	土師器皿	△1.6	※7.3	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色・褐灰色	手づくね成形
Po609	156	77-1	253	9F-10f	—	—	表土	土師器皿	△1.5	※7.2	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：明褐色・ぶい黄褐色 内面：ぶい黄褐色	手づくね成形
Po610	156	77-1	4617	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.2	※7.4	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色・黒褐色	手づくね成形
Po611	156	77-1	724	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.3	※7.6	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ・指オサエ	密良好	内外面とも褐灰色・ぶい橙色	手づくね成形
Po612	156	77-1	202	9F-10d	—	—	表土	土師器皿	△1.4	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	手づくね成形
Po613	156	77-1	725	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器皿	△1.4	※7.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：橙色・ぶい橙色 内面：ぶい橙色	手づくね成形
Po614	156	77-1	751	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器皿	1.5	※6.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密良好	外面：橙色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po615	156	77-1	356	9F-10e	—	—	表土	土師器皿	△1.7	※8.4	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい橙色	手づくね成形

第33表 土器及び陶磁器観察表(19)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po616	156	77-1	816	9F-6c	—	—	表土	土師器 皿	△1.3	※6.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面ともいぶい黄橙色	手づくね成形
Po617	156	77-1	1445	—	—	—	表土	土師器 皿	△1.1	※7.3	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：いぶい黄橙色・明褐色 内面：いぶい橙色	手づくね成形
Po618	156	77-1	4618	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.1	※7.7	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	手づくね成形
Po619	156	77-1	4612	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.4	※8.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、指オサエ	密 良好	外面：いぶい橙色・褐灰色 内面：褐灰色・いぶい黄橙色	手づくね成形
Po620	156	77-1	253	9F-10f	—	—	表土	土師器 皿	△1.5	※8.2	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面ともいぶい橙色	手づくね成形
Po621	156	77-1	725	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.7	※8.6	—	外面：口縁端部ナデ、横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	手づくね成形
Po622	156	77-1	747	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.7	※9.0	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面ともいぶい橙色	手づくね成形
Po623	156	77-1	4610	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.5	※7.7	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも浅黄橙色	手づくね成形
Po624	156	77-1	725	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.3	※8.8	—	内外面とも横ナデ、ナデ、指オサエ	密 良好	外面：いぶい黄橙色・橙色 内面：浅黄橙色・灰白色・橙色	手づくね成形
Po625	156	77-1	1381	9E-1g	—	—	表土	土師器 皿	1.0	※8.4	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面ともいぶい黄橙色～灰黄褐色	手づくね成形
Po626	156	77-1	955	9E-5i	—	—	表土	土師器 皿	△1.1	※8.4	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面ともいぶい橙色	手づくね成形
Po627	156	77-1	816	9F-6c	—	—	表土	土師器 皿	△1.3	—	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色・橙色 内面：橙色・いぶい黄褐色	手づくね成形
Po628	156	77-1	4620	9F-7c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.4	※7.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも橙色	手づくね成形
Po629	156	77-1	950	9E-5i	—	—	表土	土師器 皿	△1.6	※8.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも淡黄褐色	手づくね成形
Po630	156	77-1	1731	9F-10f	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.4	※9.8	—	外面：横ナデ、底部粗いナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも橙色・灰黄褐色	手づくね成形
Po631	156	77-1	95	9F-8e	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.2	※9.9	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ、ナデ	密 良好	内外面ともいぶい黄褐色・明赤褐色	手づくね成形
Po632	157	76	916	9E-5i	—	—	表土	土師器 皿	△1.6	※12.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po633	157	76	4646	9F-7e	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.2	※11.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po634	157	76	881	9E-6j	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.2	※11.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：いぶい黄褐色・褐灰色 内面：いぶい黄褐色	手づくね成形
Po635	157	76	816	9F-6c	—	—	表土	土師器 皿	△2.5	※11.9	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：いぶい橙色 内面：いぶい黄褐色・橙色	手づくね成形
Po636	157	76	662	9F-7c	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.4	※11.9	—	外面：横ナデ、底部指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒褐色・いぶい褐色 内面：いぶい褐色	手づくね成形
Po637	157	76	881	9E-6j	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.9	※10.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po638	157	76	16	9F-4a	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.1	※11.08	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：いぶい黄褐色・浅黄褐色	手づくね成形
Po639	157	76	4607	9F-4a	—	—	表土	土師器 皿	△2.2	※13.3	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：橙色・いぶい黄褐色 内面：いぶい褐色・灰黄褐色	手づくね成形
Po640	157	76	4650	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.0	※11.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面ともいぶい黄褐色	手づくね成形
Po641	157	76	724	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.2	※12.2	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ・指オサエ	密 良好	外面：灰黄褐色・いぶい褐色 内面：いぶい褐色	手づくね成形
Po642	157	76	13	9E-1h	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.4	※11.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po643	157	76	20	9F-5c	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.7	※12.8	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ・指オサエ	密 良好	内外面ともいぶい黄褐色・褐色	手づくね成形
Po644	157	76	1443	9E-3j	—	—	表土	土師器 皿	△2.3	※11.4	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：いぶい黄褐色・褐色・褐灰色 内面：いぶい黄褐色・褐色	手づくね成形
Po645	157	76	950	9E-5i	—	—	表土	土師器 皿	△2.2	※13.0	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	手づくね成形
Po646	157	76	884	9E-5j	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.5	※12.8	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ・指オサエ	密 良好	外面：いぶい黄褐色・褐灰色 内面：褐色・褐灰色	手づくね成形
Po647	157	76	881	9E-6j	—	—	攪乱土	土師器 皿	△1.8	※11.0	—	内外面とも横ナデ、底部ナデ	密 良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po648	157	76	662	9F-7c	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.2	※11.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po649	157	76	4610	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.0	※12.7	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面ともいぶい黄褐色	手づくね成形
Po650	157	76	1445	—	—	—	表土	土師器 皿	△2.5	※10.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、底部ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色～いぶい黄褐色 内面：いぶい黄褐色	手づくね成形
Po651	157	76	725	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.8	※10.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：いぶい黄褐色	手づくね成形

第34表 土器及び陶磁器観察表(20)

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po652	157	76	662	9F-7c	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.2	※8.7	—	内外面とも横ナデ、指オサエ、底部ナデ・指オサエ	密良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po653	157	76	4612	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.7	※10.0	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	手づくね成形
Po654	157	76	391	9F-8d	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.0	※14.7	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ、ナデ	密良好	外面：灰白色・浅黄褐色 内面：浅黄褐色	手づくね成形
Po655	157	76	663	9F-7b	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.0	—	—	外面：ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po656	157	76	944	9F-4a	—	—	表土	土師器 皿	△2.1	※10.2	—	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密良好	内外面とも浅黄褐色	手づくね成形
Po657	157	76	4634	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.7	※9.6	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	手づくね成形
Po658	157	76	1443	9E-3j	—	—	表土	土師器 皿	△2.2	※10.8	—	外面：横ナデ、ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：にぶい褐色・橙色 内面：にぶい黄褐色・明褐色	手づくね成形
Po659	157	76	96	9F-8f	—	—	表土以下	土師器 皿	△2.2	※10.8	—	内外面とも横ナデ、ナデ、指オサエ	密良好	外面：にぶい黄褐色・灰黄褐色 内面：灰白色・浅黄褐色	手づくね成形
Po660	157	76	725	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.6	※10.8	—	外面：横ナデ、ナデ 内面：横ナデ、指オサエ	密良好	外面：灰白色・灰黄褐色 内面：灰白色・褐灰色	手づくね成形
Po661	157	76	4612	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器 皿	△2.3	※10.8	—	外面：横ナデ、底部ナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・灰白色 内面：にぶい黄褐色	手づくね成形
Po662	158	80-1	8	—	—	—	表土	土師器 甕	△6.5	※24.0	—	外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄褐色・にぶい褐色 内面：灰黄褐色・にぶい黄褐色	外面一部煤付着
Po663	158	80-1	202	9F-10d	—	—	表土	土師器 甕	△3.3	—	—	内外面とも横ナデ	密良好	外面：黒色・褐灰 内面：灰黄褐色・にぶい黄褐色	外面煤付着
Po664	158	80-1	188	9F-9h・9g	—	—	表土以下	土師器 甕	△3.8	—	—	外面：横ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色・にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
Po665	158	80-1	955	9F-5i	—	—	表土	土師器 甕	△3.5	—	—	外面：口縁部横ナデ、横ナデ 内面：横ナデ、ナデ、ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色・橙色	
Po666	158	80-1	384	9F-10d	—	—	表土	土師器 甕	△2.8	—	—	内外面ともナデ	密良好	外面：褐色 内面：褐色・褐灰色	
Po667	158	80-1	1381	9E-1g	—	—	表土	土師器 甕	△2.7	—	—	内外面とも横ナデ	密良好	外面：黒色・灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色・褐灰色	外面煤付着
Po668	158	80-1	391	9F-8d	—	—	表土以下	土師器 甕	△4.3	—	—	外面：横ナデ、ハケ 内面：ナデ、ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色・褐灰色 内面：にぶい黄褐色・黄灰色	
Po669	158	80-1	385	9F-10e	—	—	表土	土師器 甕	△2.3	—	—	外面：横ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：褐灰色 内面：灰黄色	
Po670	158	80-1	250	9F-9h	—	—	表土以下	土師器 甕	△3.8	—	—	外面：口縁部横ナデ、ナデ 内面：指おさえ、ヘラケズリ	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色・褐灰色	外面煤付着
Po671	158	80-1	395 4892	9F-7c 9F-7d	—	—	表土以下 攪乱土	土師器 甕	△4.9	—	—	外面：ナデ、指おさえ 内面：ハケ	密良好	内外面とも灰白色	
Po672	158	80-1	4887	9F-6c	—	—	攪乱土	土師器 甕	△3.8	—	—	外面：横ナデ 内面：ハケ	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
Po673	158	80-1	4627	9F-7c	—	—	攪乱土	土師器 甕	△5.3	—	—	外面：口縁部横ナデ、ナデ、指おさえ 内面：ナデ	密良好	外面：暗灰色・明オリ 一ツ灰色 内面：暗灰色・浅黄褐色	
Po674	158	80-1	395	9F-7c	—	—	表土以下	土師器 甕	△5.8	—	—	外面：口縁部横ナデ、ナデ、指おさえ 内面：ナデ	密良好	外面：黄灰色 内面：灰白色・灰黄褐色	外面煤付着
Po675	158	80-1	4636	9F-7d	—	—	攪乱土	土師器 甕	△3.0	—	—	外面：ナデ、ハケ 内面：ハケ	密良好	外面：黒褐色 内面：にぶい黄褐色・黒褐色	外面煤付着
Po676	159	77-2	184	9F-10h・ 8g・9g	—	—	攪乱土	須恵器 環	△2.8	—	—	外面：口縁部ナデ、回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、体部剥落のため調整不明	密良好	内外面とも灰色	重ね焼き
Po677	159	77-2	229	9F-9h・ 10h	—	—	表土以下	須恵器 環	△1.9	—	—	外面：口縁部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰黄褐色・褐灰色	重ね焼き
Po678	159	77-2	40	10F-1h	—	—	表土以下	須恵器 環	△2.2	—	—	外面：口縁部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも灰色	重ね焼き
Po679	159	77-2	4637	9F-7c	—	—	攪乱土	須恵器 環	△2.4	—	—	外面：口縁部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：褐灰色～褐色 内面：灰色	
Po680	159	77-2	4637	9F-7c	—	—	攪乱土	須恵器 環	△2.4	—	—	外面：口縁部ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：にぶい赤褐色・褐灰色 内面：褐灰色	
Po681	159	77-2	393	9F-8c・8d	—	—	攪乱土	須恵器 環	△2.0	—	—	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色～灰黄褐色	
Po682	159	77-2	4616	9F-6b	—	—	攪乱土	須恵器 環	△1.8	—	—	内外面とも回転ナデ、ナデ	密良好	外面：灰黄色～黄灰色 内面：黄灰色	
Po683	159	77-2	4628	9F-7d	—	—	攪乱土	須恵器 環	△1.4	—	※7.7	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも黄灰色	
Po684	159	77-2	87	9F-10e	—	—	攪乱土	須恵器 高台付環	△1.8	—	※5.9	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：黄灰色	
Po685	159	77-2	388	9F-8g・8f	—	—	攪乱土	須恵器 環	△1.0	—	※5.0	外面：調整不明、底部回転系切り 内面：調整不明	密良好	内外面とも灰色	
Po686	159	77-2	235	9F-10d	—	—	表土以下	須恵器 環	△1.6	—	※6.6	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色 内面：暗黄褐色	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第35表 土器及び陶磁器観察表(21)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区T45-6j	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po687	159	78-1	4896	9F-7e	—	—	攪乱土	須恵器壺	△2.0	—	—	外面:回転ナデ後沈線文 内面:回転ナデ	密良好	内外面とも灰黄褐色	
Po688	159	79	385	9F-10e	—	—	表土	須恵器広口壺	△2.9	※21.9	—	内外面ともナデ、回転ナデ	密良好	外面:褐灰色~灰白色 内面:にぶい黄色	
Po689	159	78-1	391	9F-8d	—	—	表土以下	須恵器壺	△6.0	—	—	外面:回転ナデ、突帯 内面:ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	2条の突帯
Po690	159	78-1	881	9E-6j	—	—	攪乱土	須恵器甕	△3.2	—	—	外面:平行タタキ 内面:横ナデ	密良好	内外面とも灰色	
Po691	159	78-1	5	—	—	—	表土	須恵器甕	△5.4	—	—	外面:平行タタキ 内面:横ナデ	密良好	外面:灰色 内面:黄灰色	
Po692	159	78-2 78-3	249	—	—	—	排土	須恵器高台付壺	△1.4	—	—	外面:回転ナデ 内面:車輪状当て具痕	密良好	外面:黄褐色~暗灰黄色 内面:暗灰黄色	
Po693	159	78-1	744	9E-6j	—	—	表土	須恵器甕	△8.2	—	—	内外面ともカキメ	密良好	内外面とも灰色	
Po694	160	79	724	9F-6b	—	—	攪乱土	須恵器甕	△5.3	—	—	外面:上部横ナデ、格子目タタキ 内面:横ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po695	160	79	630	9F-8e	—	—	表土	須恵器甕	△6.8	—	—	外面:格子目タタキ 内面:横ナデ	密良好	外面:褐灰色・灰白色 内面:褐灰色	
Po696	160	79	946	9E-5j	—	—	攪乱土	須恵器甕	△2.9	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po697	160	79	5	—	—	—	表土	須恵器甕	△3.9	—	—	外面:格子目タタキ後一部ナデ 内面:横ナデ	密良好	外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄褐色	
Po698	160	79	816	9F-6c	—	—	表土	須恵器甕	△3.7	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ナデ	密良好	外面:褐灰色 内面:黒褐色	
Po699	160	79	955	9F-5i	—	—	表土	須恵器甕	△2.2	—	—	外面:格子目タタキ 内面:横ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po700	160	79	411	9F-10e ・10d	—	—	攪乱土	須恵器甕	△2.9	—	—	外面:格子目タタキ 内面:当て具痕(文不明)	密良好	外面:暗灰黄色 内面:にぶい黄色	
Po701	160	79	662	9F-7c	—	—	表土以下	須恵器甕	△2.4	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ナデ	密良好	外面:灰褐色・黒褐色 内面:褐灰色	
Po702	160	79	391	9F-8d	—	—	表土以下	須恵器甕	△4.6	—	—	外面:格子目タタキ 内面:風化が著しく調整不明	密良好	外面:褐色 内面:浅黄褐色	
Po703	160	79	188	9F-9h・9g	—	—	表土以下	須恵器甕	△5.6	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ナデ	密良好	外面:褐灰色 内面:灰色	
Po704	160	79	4646	9F-7e	—	—	攪乱土	須恵器甕	△4.3	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ナデ、一部剥落	密良好	内外面ともにぶい橙色	
Po705	160	79	18	9F-5b	—	—	表土以下	須恵器甕	△4.4	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ナデ	密良好	外面:褐灰色・暗灰黄色 内面:にぶい黄褐色	
Po706	160	79	3516	9E-6i	—	—	表土	須恵器甕	△9.1	—	—	外面:格子目タタキ 内面:ハケ	密良好	外面:暗灰黄色 内面:黄褐色	
Po707	160	79	488	9F-9e	—	—	攪乱土	須恵器甕	△5.5	—	—	外面:格子目タタキ 内面:横ナデ	密良好	外面:浅灰色~橙色、 褐灰色 内面:灰白色	
Po708	160	79	77	—	—	—	攪乱土	須恵器甕	△8.0	—	—	外面:上半部格子目タタキ、 下半部ナデ 内面:横ナデ	密良好	外面:灰褐色・にぶい 褐色 内面:褐灰色	
Po709	161	78-4 78-5	460	9F-10f	—	—	表土	須恵器 転用硯	—	—	—	内外面とも磨面、タタキ痕残 る	密良好	内外面とも灰白色~灰 色	最大長6.9、最大幅7.4、 最大厚1.1
Po710	161	78-2 78-3	231	9F-9f・ 9h・9g	—	—	表土以下	須恵器甕	△3.7	—	—	外面:平行タタキ 内面:車輪状当て具痕	密良好	内外面とも褐灰色	
Po711	161	78-2 78-3	188	9F-9h・9g	—	—	表土以下	須恵器甕	△2.7	—	—	外面:平行タタキ 内面:車輪状当て具痕	密良好	内外面とも褐灰色	
Po712	161	65-3	73 1731	9F-10f	—	—	攪乱土	須恵器甕	△5.7	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	外面:灰色 内面:黄灰色	Po271,385,519,520と同一 個体の可能性あり
Po713	161	58-1	9	—	—	—	表土	須恵器甕	△5.4	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	外面:黄灰色 内面:灰色	Po135,202,203,273, 274,386,522と同一個 体の可能性あり
Po714	161	79	385 398	9F-10e 9F-10e ・10d	—	—	表土	須恵器甕	△10.1	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	内外面とも黄灰色	
Po715	161	79	4853	9F-10g	—	—	表土	須恵器甕	△7.6	—	—	外面:平行タタキ後ナデ 内面:同心円状当て具痕	密良好	内外面とも灰色	
Po716	161	65-4	184	9F-10h・ 8h・9g	—	—	攪乱土	須恵器甕	△7.5	—	—	外面:平行タタキ後ナデ 内面:同心円状当て具痕	密良好	外面:黄灰色 内面:暗灰黄色	Po387,388,521,717と同一 個体の可能性あり
Po717	161	65-4	354	9F-10f	—	—	表土	須恵器甕	△5.5	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	外面:黄灰色 内面:灰黄色	Po387,388,521,716と同一 個体の可能性あり
Po718	161	79	957	9E-5h	—	—	表土	須恵器甕	△9.2	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	外面:黒褐色 内面:灰色	Po719と同一個体の可能 性あり
Po719	161	79	958 16-177 16-824	9e-5g 9e-5g 9E-6h	—	—	表土 攪乱土 攪乱土	須恵器甕	△6.3	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	外面:褐灰色 内面:黄灰色	H28出土遺物接合Po718 と同一個体の可能性あり
Po720	161	79	751	9F-6b	—	—	攪乱土	須恵器甕	△6.7	—	—	外面:平行タタキ後ナデ 内面:同心円状当て具痕	密良好	内外面とも黄灰色	
Po721	161	79	632	9F-8e	—	—	表土	須恵器甕	△8.1	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	内外面とも褐灰色	
Po722	161	79	385	9F-10e	—	—	表土	須恵器甕	△5.3	—	—	外面:平行タタキ 内面:同心円状当て具痕	密良好	内外面とも黄灰色	
Po723	161	79	53 385	9F-10e	—	—	表土以下 表土	須恵器甕	△8.4	—	—	外面:平行タタキ 内面:ナデ	密良好	内外面とも灰黄褐色	
Po724	161	79	422 356 385 16-204	9F-10e 9F-10e 9F-10e 9F-10d	—	—	攪乱土 表土 表土 層位不明	須恵器甕	△7.1	—	—	外面:平行タタキ 内面:風化が著しく調整不明	密不良	外面:黄灰色 内面:灰黄色	H28出土遺物接合
Po725	161	79	55	9F-10e ・10f	—	—	攪乱土	須恵器甕	△5.8	—	—	外面:平行タタキ、横ナデ、 底部ナデ 内面:横ナデ	密良好	外面:にぶい黄褐色 内面:灰黄色	
Po726	162	80-1	720	9F-6b	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△3.8	—	—	外面:口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面:口縁部横ナデ、体部ナ デ	密良好	外面:オリーブ黒色 内面:オリーブ黒色・ 灰白色	
Po727	162	80-1	630	9F-8e	—	—	表土	土師器 鍋	△4.1	—	—	外面:口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面:横ナデ	密良好	外面:橙色 内面:にぶい黄褐色	
Po728	162	80-1	881	9E-6j	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△2.5	—	—	外面:口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面:横ナデ	密良好	内外面とも灰色	外面体部煤付着
Po729	162	81-1	743	9F-6a	—	—	表土	瓦質土器 鍋	△2.0	—	—	外面:口縁部横ナデ、体部粗 いナデ 内面:ナデ	密良好	外面:黒色 内面:灰黄色	外面体部煤付着

第36表 土器及び陶磁器観察表(22)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po730	162	80-1	725	9F-7d	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△5.3	—	—	外面：口縁部横ナデ、頭部指 おさえ、体部粗いナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ナ デ	密 良好	外面：黒色～灰色 内面：灰色	外面煤付着
Po731	162	80-1	4618	9F-5b	—	—	攪乱土	土師器 鍋	△4.5	—	—	外面：ナデ、指おさえ 内面：ナデ	密 良好	外面：淡黄色～浅黄橙 色 内面：灰白色	
Po732	162	80-1	88	9F-9d ・10d	—	—	表土以下	土師器 鍋	△4.8	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ 内面：ハケ後ナデ	密 良好	内外面とも淡黄色	
Po733	162	80-1	817	9F-5c	—	—	攪乱土	土師器 鍋	△3.8	—	—	外面：口縁部ナデ、体部粗い ナデ・指おさえ 内面：ナデ	密 良好	内外面とも淡黄色	
Po734	162	80-1	1445	—	—	—	表土	土師器 鍋	△4.1	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ナ デ	密 良好	内外面とも灰白色	
Po735	162	80-1	1105	9E-2g	—	—	表土	瓦質土器 鍋	△4.0	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指おさえ 内面：横ナデ	密 良好	外面：灰色～灰白色 内面：灰色	
Po736	162	80-1	14	9E-2i	—	—	表土以下	瓦質土器 鍋	△4.1	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指おさえ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰色～灰白色 内面：灰色～オリーブ 黒色	
Po737	162	80-1	4648	9F-7e	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△2.6	※27.4	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナ デ 内面：横ナデ	密 良好	外面：褐灰色 内面：黒色	外面煤付着
Po738	162	80-1	947	9E-5j	—	—	表土	瓦質土器 鍋	△5.7	※30.0	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指おさえ 内面：口縁部横ナデ、体部横 ナデ・指おさえ	密 良好	外面：灰白色～灰色 内面：淡黄色	外面頸部煤付着
Po739	163	80-3	4886	9F-6c	—	—	攪乱土	瓦質土器 脚付羽釜	△3.2	※5.5	—	外面：口縁部沈線・ナデ、突 帯、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部シボ リ・ハケ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色～浅黄色	楠葉型 13C後半～14初
Po740	163	80-2	3620	9F-7d	—	—	表土以下	須恵器 羽釜	△2.9	—	—	内外面とも横ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：黄灰色	
Po741	163	80-2	632	9F-8e	—	—	表土	土師器 羽釜	△5.2	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：浅黄色 内面：灰白色	
Po742	163	80-2	816	9F-6c	—	—	表土	瓦質土器 羽釜	△4.9	—	—	外面：ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：灰白色～オリー ブ黒色 内面：灰白色～灰オリ ーブ色	
Po743	163	80-2	53	9F-10e	—	—	表土以下	瓦質土器 羽釜	△3.5	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：オリーブ黒色～ 灰白色 内面：オリーブ黒色	外面体部煤付着
Po744	163	80-2	85	9F-10e ・10f	—	—	表土以下	瓦質土器 羽釜	△3.2	—	—	内外面ともナデ	密 良好	内外面とも灰色	
Po745	163	80-2	29	9E-4g	—	—	表土以下	瓦質土器 羽釜	△3.6	※27.4	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
Po746	164	81-1	45	9F-10f	—	—	表土以下	須恵器 片口鉢	△2.5	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色・褐灰 色	
Po747	164	81-1	182	9F-9d <sup>9f</sup> ・10d <sup>辺り</sup>	—	—	攪乱土	須恵器 鉢	△3.6	—	—	外面：口縁部ナデ、回転ナ デ 内面：回転ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po748	164	81-1	183	9F-9d ・9e・9f	—	—	攪乱土	須恵器 鉢	△2.3	—	—	外面：口縁部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも褐灰色	
Po749	164	81-1	662	9F-7c	—	—	表土以下	須恵器 鉢	△2.3	—	—	内外面とも横ナデ	密 良好	内外面とも黄灰色	重ね焼き
Po750	164	81-1	221	9F-8b	—	—	表土以下	須恵器 鉢	△4.0	—	—	外面：口縁部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～ 灰黄褐色 内面：浅黄色	東播系
Po751	164	81-1	34	10F-1i	—	—	表土以下	須恵器 鉢	△4.3	—	—	外面：口縁部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色～浅黄 橙色	東海系
Po752	164	81-1	188	9F-9h・9g	—	—	表土以下	須恵器 鉢	△5.1	—	※16.3	外面：横ナデ、底部ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～ 灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po753	164	81-1	355	9F-10d	—	—	表土	土師器 鉢	△4.9	—	—	外面：粗いナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰黄褐色～黒色	
Po754	164	81-1	957	9E-5h	—	—	表土	土師器 鉢	△3.8	—	—	外面：口縁部ナデ、粗いナ デ 内面：横ナデ	密 良好	外面：褐灰色～にぶい 黄褐色 内面：灰黄褐色～にぶ い黄褐色	
Po755	164	81-1	4618	9F-5b	—	—	攪乱土	瓦質土器 鉢	△5.3	—	—	外面：口縁部ナデ、ナデ、 横ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：黒色～浅黄色	外面体部煤付着
Po756	164	81-1	1103	9E-3h	—	—	表土	瓦質土器 鉢	△2.8	—	—	外面：口縁部ナデ、粗いナ デ 内面：ナデ	密 良好	内外面とも黒色	外面煤付着
Po757	164	81-1	4635	9F-7c	—	—	攪乱土	瓦質土器 鉢	△4.6	—	—	外面：口縁部ナデ、体部粗い ナデ・指おさえ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも黒色	
Po758	164	81-1	923	9F-5a	—	—	攪乱土	瓦質土器 鉢	△3.6	—	—	外面：口縁部ナデ、ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも淡黄色～灰 色	
Po759	164	81-1	950	9E-5i	—	—	表土	瓦質土器 鉢	△2.8	—	—	外面：口縁部ナデ、ケズリ 後ナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：泡黄色～黒色	
Po760	164	81-1	1381	9E-1g	—	—	表土	瓦質土器 鉢	△2.3	—	—	内外面とも口縁部横ナデ、ナ デ	密 良好	内外面とも黒褐色・褐 灰色	
Po761	164	81-1	54	9F-10d	—	—	表土以下	瓦質土器 鉢	△2.1	—	—	外面：口縁部ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも黒色	
Po762	164	81-1	53	9F-10e	—	—	表土以下	瓦質土器 鉢	△5.0	—	—	外面：口縁部ナデ、粗いナ デ 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色～黒 褐色 内面：黒褐色	
Po763	164	81-1	697	9F-6b	—	—	攪乱土	土師器 鉢	△3.7	—	—	外面：口縁部ナデ、体部粗い ナデ・指おさえ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：淡黄色～灰黄色	
Po764	164	81-1	1441	9E-2i	—	—	表土	瓦質土器 鉢	△4.4	—	—	外面：口縁部ナデ、体部粗い ナデ・指おさえ 内面：横ナデ	密 良好	外面：淡黄色～黄灰色 内面：黒色～淡黄色	
Po765	164	81-1	632	9F-8e	—	—	表土	土師器 鉢	△5.1	—	—	外面：ナデ 内面：播り目、ナデ	密 良好	外面：オリーブ黒色・ 橙色 内面：淡黄色、灰色	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第37表 土器及び陶磁器観察表(23)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po766	164	81-1	356	9F-10e	—	—	表土	土師器 鉢	△3.7	—	—	外面：ナデ、底部ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：灰白色・にぶい 褐色 内面：灰白色	
Po767	164	81-1	32	8E-10g 9E-1g	—	—	表土以下	土師器 火鉢	△3.3	—	—	外面：口縁端部ナデ、指おさ え、横ナデ、ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po768	164	81-1	90	9F-9f	—	—	表土以下	土師器 火鉢	△4.2	—	—	外面：ナデ 内面：横ナデ	密良好	外面：にぶい褐色・灰 色 内面：褐色・浅黄褐色	
Po769	164	81-1	632	9F-8e	—	—	表土	土師器 火鉢	△3.4	—	—	外面：ナデ 内面：横ナデ、ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色・ 灰黄褐色	
Po770	165	92-1	70	10F-1g	—	—	表土以下	陶器瀬戸	△1.4	—	—	外面：回転ナデ、底部回転糸 切り 内面：卸目	密良好	外面：灰白色・にぶい 黄褐色 内面：灰白色	卸皿
Po771	165	92-1	1409 2626	9F-4a 9F-10h	—	—	表土 攪乱土	瀬戸美濃 碗	△2.7	—	—	外面：施釉、露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：浅黄色～暗オ リーブ色 露胎部：灰白色	
Po772	165	92-1	4626	9F-7d	—	—	攪乱土	瀬戸美濃系 壺	△1.8	—	—	内外面とも施釉(灰釉)	密良好	外面施釉部：灰白色～ 灰オリーブ色 内面施釉部：灰白色	
Po773	165	92-1	4283	9F-6b	—	—	攪乱土	越前焼 甕	△4.7	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：にぶい赤褐色 内面：褐色・にぶい 褐色	
Po774	165	92-1	1825	9F-8c	—	—	攪乱土	陶器備前 片口播鉢	△8.5	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ、横ナデ、卸目	密良好	外面：灰赤色 内面：灰赤色・赤灰色	
Po775	166	88 89	1424	9E-5h	—	—	表土	白磁 碗	△3.7	—	—	内外面とも施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	碗Ⅱ類
Po776	166	88 89	268	9F-10e	—	—	攪乱土	白磁 碗	△3.0	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：内外面とも灰 白色	碗Ⅱ-1類
Po777	166	88 89	340	9F-10e 10F-1e	—	—	攪乱土	白磁 碗	△2.7	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：内外面とも灰 白色	碗Ⅱ-1類
Po778	166	88 89	4609	9F-6b	—	—	攪乱土	白磁 碗	△2.6	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類
Po779	166	88 89	287	9F-9g	—	—	表土以下	白磁 碗	△2.6	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類
Po780	166	88 89	459	9F-9g	—	—	表土以下	白磁 碗	△2.6	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類
Po781	166	88 89	528	9F-10f	—	—	表土	白磁 碗	△1.6	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類
Po782	166	88 89	306	9F-9h・9g	—	—	表土以下	白磁 碗	△3.0	—	—	外面：施釉、体部下半露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類(Ⅶ類を除 く) 内面体部下位の見込み 周囲に段①を持つ
Po783	166	88 89	364	—	—	—	排土	白磁 碗	△3.8	—	—	内外面施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 内面下位 に段①を持つ
Po784	166	88 89	4611	9F-6c	—	—	攪乱土	白磁 碗	△2.0	—	※6.9	外面：露胎、体部ヘラによる ケズリ調整 底面ヘラによる調整 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色～黄灰 色	碗Ⅳ類
Po785	166	88 89	3603	9F-7a	—	—	攪乱土	白磁 碗	△3.2	※15.0	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ1×Ⅶ2類
Po786	166	88 89	106	—	—	—	表土	白磁 碗	△3.2	—	※6.2	外面：施釉、体部下半～底部 露胎 内面：施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰黄色～黄灰 色	碗Ⅶ類
Po787	166	88 89	4623	9F-5b	—	—	攪乱土	白磁 碗	△2.2	—	※6.3	外面：施釉、高台～底部露胎 内面：施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 外面露胎部：灰白色～ 黄灰色 内面露胎部：灰白色～ 褐色	碗Ⅶ類
Po788	166	88 89	108	9E-3j	—	—	表土以下	白磁碗 または皿	△3.2	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	碗Ⅴ1×Ⅶ1類・(ⅢⅡ 類?)
Po789	166	88 89	978	9F-6c	—	—	攪乱土	白磁 碗	△2.9	—	—	外面：施釉 内面：施釉、口縁部露胎	密良好	施釉部：明オリーブ色 露胎部：黄褐色	碗Ⅸ類
Po790	166	88 89	315	9F-10d	—	—	表土	白磁 碗	△2.2	—	—	外面：露胎、一部釉付着 内面：施釉、襷描文、圈線	密良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：灰白色	碗 [C×D期]
Po791	166	88 89	170	9F-10f	—	—	攪乱土	白磁 皿	△2.1	—	※5.3	外面：施釉、高台部～底部露 胎 内面：施釉	密良好	施釉部：内外面とも灰 白色 露胎部：にぶい黄橙 色・黄灰色	ⅢⅡ類
Po792	166	88 89	534	9F-10f	—	—	表土	白磁 皿	△0.8	—	※5.5	外面：施釉、高台部～底部露 胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	ⅢⅡ類
Po793	166	88 89	4644	9F-7d	—	—	攪乱土	白磁 皿	△1.7	—	※5.5	外面：露胎、体部上半施釉 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	ⅢⅡ類
Po794	166	88 89	4624	9F-6b	—	—	攪乱土	白磁 皿	△1.5	—	※3.4	外面：施釉、底部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：赤褐色、底部 灰白色	ⅢⅤ×Ⅶ類
Po795	166	88 89	305	9F-9h・9g	—	—	表土以下	白磁 皿	△2.9	※10.8	—	内外面とも施釉、口縁端部露 胎	密良好	施釉部：灰白色 外面露胎部：灰黄色 内面露胎部：暗黄褐色	ⅢⅨb×Ⅸc類
Po796	166	88 89	431	10F-1e	—	—	攪乱土	白磁 皿	△1.7	—	—	内外面とも施釉、一部露胎	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	ⅢⅦb～Ⅶb類 C期広 東系
Po797	166	88 89	1030	9F-5a	—	—	攪乱土	白磁 皿	△1.6	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	ⅢⅦ類? ×森田D群硬 質
Po798	166	88 89	981	9F-7d	—	—	攪乱土	白磁 皿	△2.7	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：明緑灰色	Ⅲ・森田B群×森田D群 硬質?
Po799	166	88 89	103	—	—	—	表土	白磁 皿	△2.3	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	Ⅲ・森田D群硬質?
Po800	166	88 89	290	9F-9d・ 9e・9f	—	—	攪乱土	白磁 皿	△1.3	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	Ⅲ・森田E群
Po801	166	88 89	2490	10F-1h	—	—	攪乱土	白磁 小坏	△1.6	—	※2.4	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	小坏・森田E群
Po802	166	88 89	998	9F-6a	—	—	表土	白磁 壺	△2.4	—	—	外面：施釉 内面：回転ナデ	密良好	施釉部：明緑灰色 内面：にぶい褐色	壺Ⅱ×Ⅲ類
Po803	166	88 89	3672	9F-7d	—	—	表土以下	白磁 壺類	△2.1	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉痕あり、摩滅著し い	密良好	外面：施釉部灰白色、 露胎部褐色 内面：灰白色	壺Ⅱ×Ⅲ類? 断面に漆痕跡を残す
Po804	166	88 89	1003	9F-6b	—	—	攪乱土	青白磁 梅瓶	△3.0	—	—	外面：施釉、太ヘラ彫り・ハ ケタメ 内面：回転ナデ、無釉	密良好	施釉部：明緑灰色・オ リーブ灰色 内面：灰白色	梅瓶

第38表 土器及び陶磁器観察表(24)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区 T45-6j-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po805	166	88 89	1819	9F-8e	—	—	表土	青白磁環	△2.5	—	—	外面：施釉 内面：施釉、印花文(蓮弁文)	密良好	外面施釉部：灰白色～明青灰色 内面施釉部：灰白色・明緑灰色	B'
Po806	166	88 89	282	9F-9e・ 10d	—	—	表土以下	青白磁皿	△1.2	—	※3.7	外面：施釉、削り出し高台、 底部無釉・黒色の焼台の目が 付く 内面：施釉、園線	密良好	外面施釉部：灰白色～ 明緑灰色 外面露胎部：灰白色 内面施釉部：灰白色	平底皿
Po807	167	87-1 87-2	1430	9E-3h	—	—	表土	青磁または 陶器水注	△3.5	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰オリーブ色	中国産青磁×陶器水注
Po808	167	87-1 87-2	118	9F-10f	—	—	表土以下	青磁 水注	△3.2	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：オリーブ灰色	越州窯系Ⅲ×龍泉窯系 0類 水注 C期
Po809	167	87-1 87-2	3669	—	—	—	攪乱土	青磁 碗	△1.8	—	—	内外面とも施釉	密良好	外面施釉部：灰白色～ オリーブ黄色 内面施釉部：オリーブ 黄色	龍泉窯系 碗 I類
Po810	167	87-1 87-2	979	9F-6b	—	—	攪乱土	青磁 碗	△2.3	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部外面：オリーブ 灰色 施釉部内面：灰オリーブ 色	龍泉窯系 碗 I 2～4 類
Po811	167	87-1 87-2	286	9F-9f	—	—	表土以下	青磁 碗	△4.2	—	—	内外面とも施釉	密良好	外面施釉部：オリーブ 灰色・緑灰色 内面施釉部：オリーブ 灰色～緑灰色	龍泉窯系 碗 I 4類
Po812	167	87-1 87-2	1021	9F-5a	—	—	攪乱土	青磁 碗	△3.2	—	—	外面：施釉、蓮弁文 内面：施釉	密良好	施釉部：明オリーブ灰 色・オリーブ灰色	龍泉窯系 碗 II b類
Po813	167	87-1 87-2	361	9F-10h・ 10F-3h	—	—	表土	青磁 碗	△2.2	—	—	外面：施釉、竊蓮弁文、高台 部への稜 内面：施釉、園線	密良好	施釉部：灰オリーブ色	龍泉窯系 碗 II b類
Po814	167	87-1 87-2	117	10F-li	—	—	表土以下	青磁 碗	△1.8	—	—	外面：施釉 内面：施釉、劃花文	密良好	施釉部：オリーブ灰色	龍泉窯系 碗 III 1 B類
Po815	167	87-1 87-2	111	9F-4c	—	—	表土以下	青磁 碗	△3.3	—	—	外面：施釉、竊蓮弁 内面：施釉	密良好	外面施釉部：明緑灰色 ～緑灰色 内面施釉部：オリーブ 灰色	龍泉窯系 碗 III 2 C類直 口縁
Po816	167	87-1 87-2	1002	9F-6b	—	—	攪乱土	青磁 碗	△4.2	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：明緑灰色	龍泉窯系 碗 IV類
Po817	167	87-1 87-2	996 997	9F-6a	—	—	表土	青磁 碗	△2.4	※14.2	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：明オリーブ灰 色	龍泉窯系 碗 元～明 色
Po818	167	87-1 87-2	1008	9F-6c	—	—	表土	青磁 碗	△3.8	—	—	内外面とも施釉、雷文	密良好	施釉部：明緑灰色、緑 灰色	龍泉窯系 碗・上田C II 類
Po819	167	87-1 87-2	549	9F-7d	—	—	表土以下	青磁 碗	△3.3	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：オリーブ灰色	龍泉窯系 碗・上HD II類
Po820	167	87-1 87-2	554	9F-8d	—	—	表土以下	青磁 碗	△1.4	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部灰オリーブ色	龍泉窯系 碗
Po821	167	87-1 87-2	1371	9F-6b	—	—	攪乱土	青磁 碗	△3.3	—	—	外面：施釉、高台内面露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：にぶい赤褐色	龍泉窯系 碗 IV類以降 元・明代
Po822	167	87-1 87-2	1416	9E-5i	—	—	表土	青磁 大坏	△1.8	—	—	内外面とも施釉、畳付欠損	密良好	外面施釉部：灰オリーブ 色、オリーブ灰色 内面施釉部：オリーブ 灰色	龍泉窯系 大杯Ⅲ類
Po823	167	87-1 87-2	3	9F-10h・ 10F-3h	—	—	表土	青磁 碗	△3.5	※12.2	—	外面：施釉、竊蓮弁文 内面：施釉	密良好	施釉部：明緑灰色	龍泉窯系 小碗 II b類
Po824	167	87-1 87-2	995	9F-6a	—	—	表土	青磁小壺 または合子	△1.9	—	※3.6	外面：施釉、蓮弁文、畳付軸 掻き取り 内面：施釉	密良好	外面施釉部：明オリーブ 灰色～緑灰色 外面露胎部：灰色 内面施釉部：明緑灰色	龍泉窯系 小壺×合子 身IV類～明代
Po825	167	87-1 87-2	1425	9E-5h	—	—	表土	青磁 皿	△1.5	—	※4.6	外面：体部施釉、底部露胎 内面：施釉、片彫花文	密良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：灰色	龍泉窯系 皿 I 1 c類
Po826	167	87-1 87-2	1403	9E-6j	—	—	攪乱土	青磁 皿	2.1	※9.4	※5.1	外面：口縁～体部上半施釉、 体部下半～底部露胎 内面：施釉	密良好	外面施釉部：明オリーブ 灰色 外面露胎部：灰黄色 内面施釉部：明オリーブ 灰色～緑灰色	同安窯系 皿 I 1 b類
Po827	167	87-1 87-2	1001	9F-6b	—	—	攪乱土	朝鮮陶器 皿	△1.7	—	4.0	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉、付着物あり	密良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：灰色、明褐色	皿 李期 16世紀
Po828	167	90-1 90-2	4836	—	—	—	排土	中国産 天目碗	△3.0	—	※4.6	外面：施釉、体部下半～底部 露胎 内面：施釉	密良好	外面施釉部：黒褐色・ 黒色 外面露胎部：灰黄色 内面施釉部：黒色	黒釉碗
Po829	167	90-1 90-2	1376	9F-6a	—	—	表土	中国産 天目碗	△2.9	—	※4.5	外面：体部施釉、底部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：黒色 露胎部：浅黄褐色	黒釉碗
Po830	167	90-3 90-4	134	10F-1g	—	—	表土以下	中国陶器 盤	△1.3	—	—	外面：体部横ナデ、底部ナデ 内面：施釉(一部鉄釉)	密良好	施釉部：浅黄色・黄褐色 内面施釉部：浅黄色・ 黄褐色	盤 I b類 黄釉鉄絵 陶 器C群
Po831	167	90-3 90-4	524	9F-10f	—	—	表土	中国陶器 盤	△1.8	—	—	外面：体部横ナデ、底部ナデ 内面：施釉(一部鉄釉)	密良好	施釉部：浅黄色・黄褐色 露胎部：灰白色	盤 I b類 黄釉鉄絵 陶 器C群
Po832	167	90-3 90-4	299	9F-10h・ 8g・9g	—	—	攪乱土	中国陶器 盤	△3.0	—	—	内外面とも施釉、口縁部一部 露胎	密良好	外面施釉部：灰白色 外面露胎部：にぶい黄 褐色 内面施釉部：オリーブ 黄色 内面露胎部：褐灰色・ 褐色	盤 I 2類 黄釉 陶器C 群
Po833	170	82 83	16-146	9E-1c	1面	2田	1層	瓦質土器 鍋	△3.1	—	—	内外面とも横ナデ	密良好	外面：黒色～灰黄色 内面：黒色	H28出土 外面煤付着
Po834	170	82 83	16-210	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△3.6	—	—	内外面とも口縁部横ナデ、体 部ナデ	密不良	外面：黒色～にぶい橙 色 内面：にぶい黄褐色	H28出土
Po835	170	82 83	16-161	9E-1c	1面	2田	1層	瓦質土器 鍋	△7.0	—	—	外面：口縁部ナデ、体部粗い ナデ・指オサエ 内面：口縁部ハケ後ナデ、体 部ナデ	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色	H28出土 外面煤付着
Po836	170	82 83	16-515	9E-1b	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△6.4	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部ハケ後ナデ、体 部ハケ、指オサエ	密良好	外面：黒色 内面：灰白色～黒色	H28出土 外面煤付着、口縁下位 から胸部に重ね焼きの 痕跡有り
Po837	170	82 83	16-364	9E-1c	—	—	Ⅱ～Ⅳ層	瓦質土器 鍋	△4.9	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ハ ケ	密良好	外面：黒色 内面：灰白色	H28出土 外面煤付着
Po838	170	82 83	16-243	9E-2c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△6.1	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ナ デ	密良好	外面：黒色 内面：灰白色～黒色	H28出土 外面煤付着

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第39表 土器及び陶磁器観察表(25)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po839	170	82 83	16-208	8E-10c ・10d	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△2.9	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ハ ケ	密 不良	外面：黒色～にぶい橙 色 内面：褐灰色～にぶい 黄褐色	H28出土 外面煤附着
Po840	170	82 83	16-298	9E-2c	3面	9溝	1層	瓦質土器 鍋	△4.6	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：ハケ後ナデ	密 良好	外面：淡黄色～灰色 内面：淡黄色	H28出土 外面頸部煤附着
Po841	170	82 83	16-168	9E-1d	1面	3田	1層	瓦質土器 鍋	△4.4	※28.4	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナ デ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：オリーブ黒色～ 灰色 内面：灰色～灰白色	H28出土
Po842	170	82 83	16-249	9E-1e	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△7.9	※29.6	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ 後ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色～黒色	H28出土 外面煤附着
Po843	170	82 83	16-317	9E-1d	—	—	Ⅱ・Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△11.3	※29.6	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ 後ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色～黒色	H28出土 外面煤附着
Po844	170	82 83	16-317	9E-1d	—	—	Ⅱ・Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△5.7	※28.2	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ナ デ	密 不良	外面：灰色～黒色 内面：灰白色～灰色	H28出土 外面煤附着
Po845	170	82 83	16-253	8E-10e	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△4.4	※29.6	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ナ デ	密 良好	外面：灰白色～黒色 内面：灰白色	H28出土 外面口縁部煤附着
Po846	170	82 83	16-91	9E-2b・2c	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△4.8	※31.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも灰色	H28出土 外面口縁部煤附着
Po847	170	82 83	16-285	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△7.6	※28.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、ハケ、 指オサエ	密 良好	外面：黒色～にぶい黄 色 内面：黒色～淡黄色	H28出土 外面口縁部・体部下位 煤附着
Po848	170	82 83	16-285	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△5.6	※30.4	—	外面：口縁部ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、ハケ後 ナデ、ハケ、指オサエ	密 良好	内外面とも黒色	H28出土 外面体部煤附着
Po849	170	82 83	16-168	9E-1d	1面	3田	1層	瓦質土器 鍋	△3.3	※29.5	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナ デ・指オサエ 内面：横ナデ	密 不良	外面：黒色 内面：黒色～灰白色	H28出土 外面煤附着
Po850	170	82 83	16-152	8E-10c	1面	1田	1層	瓦質土器 鍋	△4.7	※29.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色～オリー ブ黒色	H28出土 外面頸部煤附着
Po851	170	82 83	16-275	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△6.9	※25.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色～暗黄灰色 ～灰白色 内面：灰黄色	H28出土
Po852	170	82 83	16-156	9E-1c	1面	2田	1層	瓦質土器 鍋	△4.8	※28.8	—	外面：口縁部ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：ハケ後ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：灰白色	H28出土
Po853	170	82 83	16-26	9E-3c	—	—	表土	瓦質土器 鍋	△6.1	※31.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、ハケ	密 良好	外面：オリーブ黒色 内面：灰色～オリーブ 黒色	H28出土
Po854	171	84 85	16-244 16-203	9E-1c 9E-1b	2面	7田	1層 Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△3.7	※29.6	—	外面：口縁部ナデ、体部ナ デ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ナ デ・指オサエ	密 やや 不良	外面：黒色 内面：灰黄色	H28出土 口縁部～外面煤附着
Po855	171	84 85	16-240	9E-2c	2面	5溝	1層	瓦質土器 鍋	△6.3	※27.5	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、体部ナ デ・指オサエ	密 良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色～ 灰黄褐色	H28出土 口縁部～外面、内面 体部煤附着
Po856	171	84 85	16-113	8E-10c	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△6.4	※26.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、体部横ナ デ・指オサエ	密 良好	外面：灰白色～黒褐色 内面：黒色	H28出土 外面頸部煤附着
Po857	171	84 85	16-276	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△5.2	※27.4	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ、指オサエ	密 不良	外面：黒色～浅黄色 内面：灰白色～黒色	H28出土 外面体部煤附着
Po858	171	84 85	16-91	9E-2b・2c	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△7.0	※30.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ハ ケナ	密 良好	内外面ともオリーブ黒 色	H28出土 外面煤附着
Po859	171	84 85	16-297	9E-1c	3面	9溝	1層	瓦質土器 鍋	△6.5	※30.0	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色～灰色	H28出土 外面体部煤附着
Po860	171	84 85	16-297	9E-1c	3面	9溝	1層	瓦質土器 鍋	△7.6	※30.4	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：黒色～灰色	H28出土 口縁部～外面煤附着
Po861	171	84 85	16-199	9E-1c	—	—	Ⅲ・Ⅳ層	瓦質土器 鍋	△8.2	※32.2	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナ デ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ハ ケ後ナデ	密 良好	外面：灰白色～黒色 内面：灰白色	H28出土 外面体部煤附着
Po862	171	84 85	16-121	9E-5e	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△3.0	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ 内面：横ナデ	密 良好	内外面とも灰色	H28出土
Po863	171	84 85	16-241	9E-1c	2面	5溝	1層	瓦質土器 鍋	△4.5	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部指 オサエ・粗いナデ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色～オリー ブ黒色	H28出土 外面煤附着
Po864	171	84 85	16-205	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△3.4	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナ デ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ハ ケ後ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：黄灰色	H28出土 外面煤附着
Po865	171	84 85	16-202	9E-2c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△7.0	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：オリーブ黒色	H28出土 外面煤附着
Po866	171	84 85	16-116	9E-3c	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△7.5	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：灰白色	H28出土 外面煤附着
Po867	171	84 85	16-17	9E-2c	—	—	表土	瓦質土器 鍋	△5.2	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：黒色～灰白色	H28出土 外面煤附着
Po868	171	84 85	16-156	9E-1c	1面	2田	1層	瓦質土器 鍋	△5.4	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：灰白色～黄灰色 内面：黄灰色	H28出土 口縁部炭素吸着
Po869	171	84 85	16-276	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鍋	△7.5	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗 いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰色～黒色	H28出土 内外面口縁部・外面・ 内面一部煤附着



第40表 土器及び陶磁器観察表(26)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po870	171	84 85	16-85	9E-1c	—	—	攪乱土	瓦質土器 鍋	△5.6	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ・指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白色	H28出土 外面煤附着
Po871	171	84 85	16-297	9E-1c	3面	9溝	1層	瓦質土器 鍋	△8.6	※24.6	—	外面：口縁部ナデ、体部粗いナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、体部ハケ	密 良好	外面：黒色 内面：灰色～灰白色	H28出土 外面煤附着
Po872	172	86	16-284 16-243	9E-1b 9E-2c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△5.0	※23.1	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ナデ	密 良好	内外面ともオリブ黒色～灰色	H28出土
Po873	172	86	16-37	9E-1a	—	—	攪乱土	瓦質土器 羽釜	△7.6	※26.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部ハラ状工具によるナデ・粗いナデ 内面：口縁部ナデ、体部指オサエ・ハケ後ナデ	密 良好	内外面とも灰色	H28出土 体部煤附着
Po874	172	86	16-41	9E-1b	—	—	攪乱土	瓦質土器 羽釜	△5.2	※22.7	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：口縁部ナデ、体部指オサエ・ハケ後ナデ	密 良好	外面：オリブ黒色 内面：オリブ黒色～灰色	H28出土 口縁部下端～体部煤附着
Po875	172	86	16-273	8E-10d	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△4.5	※26.0	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ・指オサエ 内面：口縁部ハケ、体部ハケ	密 良好	外面：オリブ黒色～灰色 内面：黒色	H28出土 体部一部煤附着
Po876	172	86	16-244	9E-1c	2面	7田	1層	瓦質土器 羽釜	△6.3	※25.8	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：口縁部ナデ、体部ナデ・指オサエ・ハケ	密 良好	外面：灰黄色～黒色 内面：灰白色～黄灰色	H28出土 体部煤附着
Po877	172	86	16-168 16-195	9E-1d	1面 —	3田 —	1層 Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△3.9	※28.2	—	外面：口縁部ナデ、体部粗いナデ、指オサエ 内面：口縁部ナデ、体部ナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	H28出土 体部煤附着
Po878	172	86	16-276	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△3.6	※29.0	—	外面：口縁部ナデ、体部ナデ 内面：ナデ、指オサエ	密 良好	内外面ともオリブ黒色	H28出土
Po879	172	86	16-523	9E-2c	—	—	攪乱土	瓦質土器 羽釜	△4.3	※24.7	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：口縁部ナデ、体部ナデ・指オサエ	密 良好	内外面とも灰黄色	H28出土 体部煤附着
Po880	172	86	16-2024	—	—	—	表探	瓦質土器 羽釜	△4.2	※27.0	—	外面：口縁部ナデ、体部ナデ 内面：口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ・指オサエ	密 良好	内外面とも黒色	H28出土
Po881	172	86	16-315	9E-1c	—	—	Ⅱ・Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△2.7	※20.9	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：口縁部ナデ、体部横ナデ・指オサエ	密 良好	内外面とも灰色	H28出土 外面口縁部煤附着
Po882	172	86	16-169	9E-1e	1面	3田	1層	土師器 羽釜	△3.7	※23.8	—	外面：口縁部ナデ、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ナデ	密 良好	内外面とも灰白色	H28出土
Po883	172	86	16-91	9E-2b・2c	—	—	攪乱土	瓦質土器 羽釜	△5.9	※30.0	—	外面：口縁部ナデ、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ	密 良好	外面：オリブ黒色～灰色 内面：黒色～オリブ黒色	H28出土 外面体部一部煤附着
Po884	172	86	16-147	8E-10c	1面	1田	1層	瓦質土器 羽釜	△5.7	※20.2	—	外面：口縁部ナデ、体部ケズリ後ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄色	H28出土
Po885	172	86	16-27	9E-1d	—	—	表土	土師器 羽釜	△3.1	※23.0	—	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	内外面とも暗灰黄色	H28出土 外面口縁部煤附着
Po886	172	86	16-141 16-13	9E-2d 9E-1c・1d・1e・1f	—	—	Ⅲ層 表土	瓦質土器 羽釜	△5.1	※23.0	—	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部横ナデ	密 良好	外面：灰色～オリブ黒色 内面：灰色	H28出土 外面体部一部煤附着
Po887	172	80-3 86	16-824	9E-6h	—	—	攪乱土	瓦質土器 羽釜	△4.3	※17.6	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：口縁部ナデ、体部横ナデ	密 良好	内外面とも灰色	H28出土 羽釜の小型品
Po888	172	86	16-553	9E-1c	4面	352ピット	1層	瓦質土器 羽釜	△6.4	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナデ 内面：ナデ	密 良好	内外面ともオリブ黒色	H28出土
Po889	172	86	16-13	9E-1c・1f	—	—	表土	瓦質土器 羽釜	△3.9	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部横ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：オリブ黒色	H28出土
Po890	172	86	16-131	9E-6f	—	—	攪乱土	瓦質土器 羽釜	△3.4	—	—	内外面ともナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	H28出土
Po891	172	86	16-83	9E-1d	—	—	攪乱土	土師器 羽釜	△3.0	—	—	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄色～にぶい黄褐色	H28出土 外面体部一部煤附着
Po892	172	86	16-191	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△3.7	—	—	外面：口縁部横ナデ、体部粗いナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰色～にぶい黄褐色 内面：灰色	H28出土
Po893	172	86	16-151	9E-1c	1面	1田	1層	土師器 羽釜	△4.7	—	—	外面：口縁部ナデ、体部粗いナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：淡黄色～黄褐色 内面：黄褐色～浅黄褐色	H28出土
Po894	172	86	16-201	9E-2d	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 羽釜	△4.2	—	—	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、ハケ	密 良好	内外面ともオリブ黒色	H28出土
Po895	173	81-2	16-180	9E-1e・2e	1面	3田	1層	瓦質土器 鉢	△1.9	※	—	外面：口縁部横ナデ、横ナデ、指オサエ 内面：横ナデ、指オサエ、ナデ	密 良好	内外面とも灰色	H28出土
Po896	173	81-2	16-287	8E-10e	3面	10田	1層	土師器 甕	△2.2	※	—	外面：口縁部ナデ、頭部ハケ 内面：横ナデ、ハケ	密 良好	外面：にぶい赤褐色 内面：明赤褐色	H28出土
Po897	173	81-2	16-1882	10F-1c	—	—	Ⅲ-1層	土師器 甕	△2.9	※	—	外面：口縁部横ナデ、頭部ハケ 内面：ハケ	密 良好	外面：灰色、暗灰色 内面：にぶい黄褐色、褐色	H28出土 外面煤附着
Po898	173	81-2	16-1882	10F-1c	—	—	Ⅲ-1層	土師器 甕	△3.0	※	—	外面：口縁部横ナデ、頭部ハケ 内面：ハケ	密 良好	外面：灰色 内面：にぶい黄褐色	H28出土 外面煤附着
Po899	173	81-2	16-649 16-658	9E-2b	4面	523ピット	1層 埋土	瓦質土器 片口鉢	△7.6	※	—	外面：ナデ、指オサエ 内面：ナデ、指オサエ、ハケ	密 良好	内外面とも暗灰色	H28出土
Po900	173	81-2	16-264 16-316	8E-10d	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 片口鉢	△4.9	※30.8	—	外面：口縁部横ナデ、指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：灰色、暗灰色 内面：淡黄色、灰色、灰白色	H28出土
Po901	173	81-2	16-188	8E-10d	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鉢	△5.6	※26.4	—	外面：横ナデ、指オサエ 内面：横ナデ	密 良好	外面：暗灰色、灰色、灰白色 内面：暗灰色、にぶい黄色	H28出土
Po902	173	81-2	16-265	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鉢	△8.5	※25.5	—	外面：口縁部横ナデ、横ナデ、ナデ 内面：指オサエ、横ナデ	密 良好	外面：灰色、浅黄褐色、暗灰色 内面：暗灰色	H28出土

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第41表 土器及び陶磁器観察表(27)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No.	調査区 T45-6j-	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土 焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po903	173	81-2	16-171 16-84	9E-2c 9E-2b	1面	2田	1層 攪乱土	瓦質土器 鉢	△4.0	※24.2	—	外面：口縁部横ナデ、指オサエ、ナデ 内面：横ナデ、ハケ	密良好	外面：浅黄橙色、灰色、暗灰色 内面：灰色、暗灰色	H28出土
Po904	173	81-2	16-253	8E-10e	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鉢	△5.3	—	—	外面：口縁部横ナデ、指オサエ、ナデ 内面：横ナデ、ナデ	密良好	外面：灰白色、灰色 内面：にぶい黄橙色、灰黄褐色	H28出土
Po905	173	81-2	16-121	9E-5e	—	—	攪乱土	土師器 鉢	△5.7	—	—	外面：口縁部横ナデ、指オサエ、ナデ 内面：横ナデ、ナデ	密良好	内外面とも暗灰色	H28出土
Po906	173	81-2	16-210	9E-1c	—	—	Ⅲ層	瓦質土器 鉢	△5.5	—	—	外面：口縁部横ナデ、指オサエ 内面：横ナデ、ナデ	密良好	外面：灰色 内面：黄灰色、灰色	H28出土
Po907	174	64-5	16-179	9E-1d・2d	1面	3田	1層	須恵器 甕	△4.1	—	—	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕後一部ナデ	密良好	内外面とも黄灰色	H28出土 Po132,133,134,275, 276,391,392と同一個 体の可能性あり
Po908	174	90-1 90-2	16-169	9E-1e	1面	3田	1層	中国産雑釉 陶器壺	△5.1	—	—	外面：施釉 内面：ハケぬり	密良好	施釉部：黒色・褐色・ 灰黄褐色 内面：灰白色	H28出土
Po909	174	92-1	16-110	9E-1d	—	—	攪乱土	陶磁 甕体部	△4.6	—	—	外面：施釉 内面：ナデ	密良好	施釉部：オリープ黒色 ・にぶい黄色 内面：にぶい黄褐色	H28出土
Po910	174	92-1	16-11	9E-1b	—	—	表土	陶磁 甕体部	△7.0	—	—	外面：施釉 内面：回転ナデ	密良好	施釉部：灰色・淡黄色 内面：灰褐色	H28出土
Po911	174	92-1	16-168	9E-1d	1面	3田	1層	陶磁 甕体部	△7.0	—	—	外面：施釉 内面：多方向のナデ	密良好	施釉部：灰オリープ 内面：暗灰黄色	H28出土
Po912	—	91-1 91-2	529	9F-10e	—	—	表土	白磁 碗	—	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露体部：灰白色	碗Ⅱ類 体部
Po913	—	91-1 91-2	292	—	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露体部：灰白色	碗Ⅱ類? 体部
Po914	—	91-1 91-2	285	9F-9f	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類 口縁部
Po915	—	91-1 91-2	2623	9F-9f	2面	3010b溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類 口縁部
Po916	—	91-1 91-2	312	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	外面施釉部：明オリープ 灰色 内面施釉部：明オリープ 灰色・灰白色	碗Ⅳ類 口縁部
Po917	—	91-1 91-2	266	9F-10e	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ類 口縁部
Po918	—	91-1 91-2	298	9F-10h・ 8g・9g	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	外面：露胎 内面：施釉	密良好	露体部：灰白色 施釉部：灰白色	碗Ⅳ類 底部～高台部
Po919	—	91-1 91-2	4893	9F-7d	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：明オリープ灰色 露体部：灰白色	碗Ⅳ類 底部～高台部
Po920	—	91-1 91-2	379	—	—	—	排土	白磁 碗	—	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉	密良好	外面施釉部：灰黄色 外面露体部：灰白色 内面施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅵ類 体部
Po921	—	91-1 91-2	3680	9F-5b	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po922	—	91-1 91-2	551	9F-10f	—	—	表土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	外面施釉部：灰白色・ 明オリープ灰色 内面施釉部：明緑灰色	碗Ⅳ類 口縁部
Po923	—	91-1 91-2	965	9F-7c	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	外面施釉部：灰白色 内面施釉部：灰色	碗Ⅳ×Ⅴ類 体部
Po924	—	91-1 91-2	3670	9F-7a	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	外面：露胎 内面：施釉	密良好	露体部：灰白色 施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅵ類 底部～高台部
Po925	—	91-1 91-2	3592	9F-10h	2面	3010b溝	2層	白磁 碗	—	—	—	外面：施釉、一部露胎 内面：施釉	密良好	施釉部：灰白色 露体部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部 内面下位見込みに段① を持つ
Po926	—	91-1 91-2	1867	—	—	—	Ⅲ-2層	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po927	—	91-1 91-2	560	9F-10d ・10e	—	—	表土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po928	—	91-1 91-2	311	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	白磁 碗	—	—	—	外面：露胎 内面：施釉	密良好	露体部：灰白色 施釉部：灰オリープ色	碗Ⅳ～Ⅶ類(Ⅶ類は除 外) 体部
Po929	—	91-1 91-2	1417	9E-5i	—	—	表土	白磁 碗	—	—	—	外面、露胎、一部施釉 内面：施釉	密良好	外面施釉部：灰黄色 外面露体部：灰白色 内面施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po930	—	91-1 91-2	3678	10F-1g ・1h	2面	掘立柱建物13 3142柱穴	堀方埋め土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po931	—	91-1 91-2	3980	10F-1g ・1h	2面	掘立柱建物13 3142柱穴	抜取痕	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po932	—	91-1 91-2	4320	10F-1g	2面	掘立柱建物13 3188柱穴	抜取痕	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅳ～Ⅶ類 体部
Po933	—	91-1 91-2	127	10F-2h	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ×Ⅵ×Ⅶ類 口縁部
Po934	—	91-1 91-2	271	9F-10e	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ～Ⅶ類 体部
Po935	—	91-1 91-2	2634	—	2面	3010b溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ×Ⅵ×Ⅶ類 口縁部-体部
Po936	—	91-1 91-2	160	9F-10d	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ×Ⅵ×Ⅶ類 外反口縁部
Po937	—	91-1 91-2	264	9F-10e	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗Ⅴ×Ⅵ×Ⅶ類×Ⅲ Ⅱ～Ⅴ・Ⅶ類 口縁部
Po938	—	91-1 91-2	273	9F-10e	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉、一部露胎	密良好	露体部：灰白色 施釉部：灰白色	碗Ⅶ類 体部小片
Po939	—	91-1 91-2	272	9F-10e	—	—	攪乱土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	Ⅲ・森田E群? 体部小片
Po940	—	91-1 91-2	284	9F-9f	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗 体部
Po941	—	91-1 91-2	499	9F-10e	1面	666溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗 体部
Po942	—	91-1 91-2	508	9F-10e	1面	666溝	埋土	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗 体部
Po943	—	91-1 91-2	380	9F-10e	—	—	表土以下	白磁 碗?	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗? 体部
Po944	—	91-1 91-2	313	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉、一部露胎	密良好	露体部：黄灰色 施釉部：灰白色	碗 体部
Po945	—	91-1 91-2	125	10F-2h	—	—	表土以下	白磁 碗	—	—	—	内外面とも施釉	密良好	施釉部：灰白色	碗 体部

第42表 土器及び陶磁器観察表(28)

遺物番号	挿回番号	図版番号	取上No	調査区T45-6j	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po946	—	91-1 91-2	1418	9E-5i	—	—	表土	白磁碗	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗 体部
Po947	—	91-1 91-2	1373	9F-6c	—	—	攪乱土	白磁碗？	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：明オリブ灰色	碗？ 体部
Po948	—	91-1 91-2	1375	9F-5b	—	—	攪乱土	白磁碗？	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：剥離のため不明	審良好	施軸部：灰白色 露体部：灰白色	碗？ 体部
Po949	—	91-1 91-2	371	9F-9c	—	—	表土以下	白磁碗 または皿	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿類 体部
Po950	—	91-1 91-2	158	9F-10e	—	—	表土以下	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿類
Po951	—	91-1 91-2	301	9F-10h ・8g ・9g	—	—	攪乱土	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	福建系 碗×皿
Po952	—	91-1 91-2	523	9F-10f	—	—	表土	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿 福建系
Po953	—	91-1 91-2	130	9F-10e ・10f	—	—	表土以下	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿類
Po954	—	91-1 91-2	1436	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿類
Po955	—	91-1 91-2	280	9F-9e ・10d	—	—	表土以下	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿 福建系
Po956	—	91-1 91-2	102	—	—	—	表土	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	碗×皿 体部 福建系
Po957	—	91-1 91-2	548	9F-8b または c	—	—	攪乱土	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	皿Ⅱ 1a×皿類 口縁部
Po958	—	91-1 91-2	294	9F-10g ・10h	—	—	攪乱土	白磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	皿V～VII？ 体部
Po959	—	91-1 91-2	278	9F-9d ・10d	—	—	表土以下	白磁碗 または皿	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	外面露体部：灰黄褐色 内面露体部：灰白色 施軸部：灰白色	皿・森田D群 体部
Po960	—	91-1 91-2	2605	10F-1e・1f	—	—	Ⅲ-2層	白磁	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	施軸部：灰白色 露体部：灰白色	体部小片
Po961	—	91-1 91-2	835	9F-9e	2面	3010a溝	1層	白磁	—	—	—	外面、剥離のため不明 内面：施軸	審良好	施軸部：灰白色	体部小片
Po962	—	91-1 91-2	1380	—	2面	3010a溝	2・3層	白磁	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	体部小片
Po963	—	91-1 91-2	3642	10F-2g ・2h	2面	掘立柱建物13 3142柱穴	抜取痕 (西側)	白磁	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	器種不明 体部小片
Po964	—	91-1 91-2	1031	9F-6a	—	—	攪乱土	白磁	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	皿 口縁部 不明
Po965	—	91-1 91-2	522	9F-10f	—	—	表土	白磁 壺	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	施軸部：灰白色 露体部：灰白色	壺Ⅱ類 体部
Po966	—	91-1 91-2	173	9F-10f	—	—	攪乱土	白磁 壺	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	施軸部：灰白色 露体部：褐灰色	壺Ⅱ類 体部
Po967	—	91-1 91-2	293	—	—	—	攪乱土	白磁 壺	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	施軸部：灰白色 露体部：灰白色	壺Ⅱ類 体部
Po968	—	91-1 91-2	774	9F-8d	1面	3022溝	埋土	白磁 壺	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	壺Ⅲ類 体部
Po969	—	91-1 91-2	539	9F-10e	—	—	表土	白磁 壺	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	壺Ⅲ類 体部
Po970	—	91-1 91-2	555	9F-8d	—	—	表土以下	青白磁？ 皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	外面施軸部：灰白色 内面施軸部：灰白色・ 明オリブ灰色	皿 体部
Po971	—	90-5 90-6	3673	9F-7d	—	—	表土以下	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：オリブ灰色	龍泉窯系 碗Ⅰ類 体部片
Po972	—	90-5 90-6	2619	9F-8d	1面	3022溝	埋土	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：オリブ灰色	龍泉窯系 碗Ⅰ類 体部
Po973	—	90-5 90-6	1749	9E-3j	—	—	表土	青磁 碗	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	露体部：灰白色 施軸部：灰黄色	龍泉窯系？ 碗 体部
Po974	—	90-5 90-6	171	9F-10f	—	—	攪乱土	青磁	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰白色	元～明の龍泉窯系？ 体部
Po975	—	90-5 90-6	168	9F-10f	—	—	表土以下	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：オリブ灰色	龍泉窯系 碗 体部
Po976	—	90-5 90-6	162	9F-12d	—	—	表土以下	青磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：明オリブ灰色	龍泉窯系 碗×皿Ⅰ類？ 体部
Po977	—	90-5 90-6	999	9E-7j	—	—	表土	青磁 碗	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：オリブ灰色	龍泉窯系 碗Ⅳ類以降 体部
Po978	—	90-5 90-6	116	8E-10g 9E-1g	—	—	表土以下	青磁碗 または皿	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：オリブ灰色	龍泉窯系 碗×皿 口縁部 元～明
Po979	—	90-5 90-6	4927	9F-10e	—	—	表土	青磁壺	—	—	—	外面、露胎、一部施軸 内面：施軸	審良好	施軸部：オリブ黄色 露体部：灰色	越前窯系 壺Ⅲ類体部 H28 Po102(掘立柱建物 13柱穴718出土)と同一 個体と見られる軸はや や黄色味だが、胎土や 内面は同様
Po980	—	90-5 90-6	314	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	青磁	—	—	—	内外面とも施軸	審良好	施軸部：灰オリブ色	不明 体部片

第43表 土器参考資料観察表

遺物番号	挿回番号	図版番号	取上番号	調査区T45-6j	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
参考資料	16-Po 129	58-3	16-1051	10F-2f	H28調査4面	掘立柱建物13 713柱穴	1層 1層 埋土	須恵器壺	△17.8	—	※12.6	外面：回転ナデ、下部ケズ リ、底部ナデ 内面：回転ナデ	審良好	外面：黄灰色 内面：灰白色	H28年度調査Po129と H30年度調査3010溝の 遺構間接合 内面に黒色の付着物あり
			16-1152												

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第44表 土製品観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区T45-6j-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm・g)				特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									最大長	最大幅	最大厚	重量				
CP1	81	59-2	4040	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3121柱穴	抜取痕	土玉	最大長:1.9 最大幅:1.7 最大厚:1.5 重量:5.0	ナデ	—	密良好	灰白色	棒状工具による押圧あり 一部剥離あり		
CP2	103	59-2	2489	9F-9g・ 10g・9h ・10h	2面	3010a溝	1層	土製碁石	最大長:1.6 最大幅:1.5 最大厚:0.4 重量:1.0	ナデ	—	密良好	灰黄色			
CP3	114	59-2	2128	9F-10h	2面	3010b溝	1層	紡錘車	最大長:2.9 最大幅:3.1 最大厚:0.9 重量:6.0	ナデ	—	密良好	浅黄橙色	回転台成形の土師器を転用 裏面に回転糸切りによる切り離し 痕跡が残る		
CP4	126	59-2	4922	10F-1f	2面	3259土坑	埋土	土製碁石	最大長:1.6 最大幅:1.6 最大厚:0.5 重量:1.0	ナデ	—	密良好	灰黄色			
CP5	146	72-1	3157	10F-1h	3面	3186土坑	砂層 (上層)	紡錘車	最大長:3.8 最大幅:3.6 最大厚:0.9 重量:14.0	ナデ	—	密良好	にぶい黄橙色	中央に径約1cmの円孔を両面から 穿く		
CP6	168	74-2	1750	9E-3j	—	—	表土	土錘	最大長:4.3 最大幅:2.0 最大厚:1.9 重量:17.0	ナデ	—	密良好	にぶい黄橙色			
CP7	168	74-2	963	9F-7d	—	—	表土以下	土錘	最大長:3.8 最大幅:1.7 最大厚:1.7 重量:10.0	面取り後ナデ、指オサエ	—	密良好	にぶい黄橙色			
CP8	168	74-2	3515	9E-6i	—	—	表土	土錘	最大長:3.9 最大幅:1.4 最大厚:1.3 重量:7.0	ナデ	—	密良好	浅黄色			
CP9	168	74-2	2602	9E-1h付近	—	—	表土	土錘	最大長:3.9 最大幅:1.5 最大厚:1.4 重量:7.0	丁寧なナデ	—	密良好	褐色			
CP10	168	74-2	546	9F-8c	—	—	表土以下	土錘	最大長:△2.5 最大幅:1.2 最大厚:1.2 重量:3.0	ナデ	—	密良好	にぶい黄橙色～橙色			
CP11	168	74-2	2706	10F-1g	—	—	攪乱土	土錘	最大長:△2.0 最大幅:1.5 最大厚:1.5 重量:4.0	ナデ	—	密良好	褐灰色			
CP12	168	67-2	744	9F-6b	—	—	表土	不明土製品	最大長:2.8 最大幅:△2.9 最大厚:0.9	ナデ、指オサエ	—	密良好	にぶい黄橙色			
CP13	168	74-4	736	9F-6b	—	—	攪乱土	甕	最大長:△8.1 最大幅:△10.5 最大厚:△2.9	外面:ハケ 内面:ナデ、ハケ	—	密良好	にぶい橙色			
CP14	168	74-4	751	9F-6b	—	—	攪乱土	甕	最大長:△11.4 最大幅:△6.3 最大厚:△3.3	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	—	密良好	外面:浅黄褐色 内面:橙色			
CP15	173	81-2	16-44	9E-1a	—	—	攪乱土	甕	最大長:5.6 最大幅:6.8 最大厚:1.6	外面:ハケ 内面:横ナデ、ケズリ	—	密良好	外面:にぶい橙色 内面:灰黄褐色			
CP16	—	59-3	3640	10F-2g	2面	掘立柱建物13 3120柱穴	抜取痕 (南側)	被熱粘土塊	最大長:△2.0 最大幅:△2.0 最大厚:△1.0	—	—	—	内外面とも橙色			
CP17	—	59-3	3639	9F-10g	2面	掘立柱建物19 3163柱穴	抜取痕 (北側)	被熱粘土塊	最大長:△1.0 最大幅:△1.0 最大厚:△1.0	—	—	—	外面:褐灰色 内面:灰白色			
CP18	—	59-3	4383	9F-10e	2面	3264柱穴	埋土	被熱粘土塊	最大長:△1.5 最大幅:△6.8 最大厚:△1.0	—	—	—	内外面とも黒色			
CP19	—	59-3	4552	10F-2f	2面	3306柱穴	抜取痕	漆膜?	最大長:△5.5 最大幅:△3.0 最大厚:△1.0	—	—	—	外面:黒褐色 内面:褐灰色			
CP20	—	59-3	2009	9F-10g ・10f	2面	3056土坑	1層	被熱粘土塊	最大長:△1.5 最大幅:△1.5 最大厚:△1.5	—	—	—	外面:褐灰色 内面:にぶい橙色			
CP21	—	59-3	200	9F-9e	—	—	Ⅲ-1層	羽口溶解物?	最大長:2.5 最大幅:2.0 最大厚:1.0	—	—	—	外面:オリープ黒色～灰オ リープ色 内面:にぶい橙色			

第45表 石器観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区T45-6j-	遺構面	集合遺構個別遺構	層位	種別	法量(cm・g)				石材	備考
									最大長	最大幅	最大厚	重量		
S1	105	68-4	1334	9F-9h	2面	3010a溝	2・3層	敲石	12.2	8.4	5.0	490.0	安山岩	
S2	142	71-4	4558	10F-1h	3面	250溝a	埋土	石鋏	12.3	8.5	3.3	419.5	硬質安山岩	
S3	144	71-3	4725	9F-7c	3面	250溝b	埋土	石包丁	△9.9	5.6	0.8	46.4	硬質安山岩	
S4	144	71-3	4820	9F-9e	3面	250溝b	埋土	大型直縁刃石器	△9.2	6.9	0.9	47.1	安山岩	バカ包丁 刃部:コーングロス付着 被熱痕
S5	144	71-4	4598	10F-1h	3面	250溝b	埋土	石鋏	△13.8	6.7	2.5	271.0	硬質安山岩	
S6	144	71-3	4768 4903	9F-8c 9F-8d	3面	250溝b	埋土 Ⅲ-2層	抉り入り石器	△12.1	6.0	1.1	92.2	硬質安山岩	鉢伏安山岩
S7	146	72-2	3079	10F-1h	3面	3186土坑	砂層	凹基無茎式石鏃	2.1	1.4	0.2	0.6	無斑晶安山岩	押圧剥離による成形、表裏面に素材の剥離面を残す
S8	153	72-2	255	9F-10e	—	—	Ⅲ-2層	平基無茎式石鏃	2.0	1.6	0.3	0.8	無斑晶安山岩	押圧剥離による成形、裏面に素材の剥離面を残す
S9	153	74-3	2614	9F-10f	—	—	Ⅲ-2層	剥片	2.2	1.2	0.5	1.5	玉髓	
S10	153	74-3	4705	9F-8c	—	—	Ⅲ-2層	剥片	5.1	3.3	2.0	20.5	黒曜石	
S11	154	72-2	4912	9F-8d	—	—	Ⅳ層	石鏃	2.1	1.3	0.3	0.7	無斑晶安山岩	
S12	154	92-3	4712	9F-8d	—	—	Ⅳ層	大型給刃石斧	△15.1	△4.3	△3.3	250.0	閃緑岩	
S13	169	72-2	1378	9F-6a	—	—	攪乱土	平基無茎式石鏃	3.2	1.5	0.3	1.5	無斑晶安山岩	押圧剥離による成形、裏面に素材の剥離面を残す
S14	169	74-3	3668	9F-6c	—	—	表土	剥片	3.2	2.8	1.3	9.3	黒曜石	
S15	169	92-2	4873	9E-5j	—	—	表土	石包丁	△8.7	4.3	0.6	28.4	板状安山岩	
S16	169	92-2	261	—	—	—	攪乱土	大型直縁刃石器	△9.0	8.5	0.9	90.6	板状安山岩	
S17	169	92-3	1401	9E-6i	—	—	攪乱土	砥石	△2.9	△2.9	△1.7	10.4	花崗岩	
S18	169	92-3	1419	9E-5i	—	—	表土	砥石	△4.6	3.2	0.6	16.2	砂岩	
S19	169	92-3	2644	9E-3j	—	—	表土	砥石	△6.7	4.4	3.5	77.4	アブライト	工具痕

第46表 錫製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j-	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm)			備考
									最大長	最大幅	最大厚	
Sn1	114	66-3・4	4777	9F-10h	2面	3010b溝	埋土	錫製腕	△0.8	—	0.02~0.1	錫と銅の合成品

第47表 鉄関連遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上No	調査区 T45-6j-	遺構面	集合遺構 個別遺構	層位	種別	法量 (cm・g)				備考
									最大長	最大幅	最大厚	重量	
F1	42	49-2	465	10F-1e	1面	掘立柱建物12 3018柱穴	掘方埋め土	腕形鍛冶滓	△11.0	7.1	4.1	248	炉床粘土付着、溶解時の木炭痕

第48表 掘立柱建物12柱穴出土礫観察表

遺構挿図番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
27	10F-1e	掘立柱建物12	3009柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	5.60	
29	10F-1e	掘立柱建物12	3018柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	2.50	
29	10F-1e	掘立柱建物12	3018柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	2.10	
30	9F-10e,10F-1e	掘立柱建物12	3020柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	4.70	被熱痕
30	9F-10e,10F-1e	掘立柱建物12	3020柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	5.40	被熱痕
31	10F-1e・1f	掘立柱建物12	3094柱穴	採取痕	礎盤石?	角閃石安山岩	3.00	
31	10F-1e・1f	掘立柱建物12	3094柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	2.20	
32	9F-10f	掘立柱建物12	3068柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	5.50	
32	9F-10f	掘立柱建物12	3068柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	0.17	
32	10F-1f	掘立柱建物12	3069柱穴	採取痕		安山岩	0.47	
32	10F-1f	掘立柱建物12	3069柱穴	掘方埋め土		安山岩	0.43	被熱痕
32	10F-1f	掘立柱建物12	3069柱穴	採取痕		安山岩	0.53	
32	10F-1f	掘立柱建物12	3070柱穴	採取痕		安山岩	3.00	
32	10F-1f	掘立柱建物12	3070柱穴	採取痕	礎盤石?	角閃石安山岩	3.50	
33	9F-10f	掘立柱建物12	3072柱穴	底面	礎盤石	安山岩	6.00	
33	10F-1f	掘立柱建物12	3074柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	2.36	
34	10F-1f	掘立柱建物12	3075柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	2.50	被熱痕
34	10F-1f	掘立柱建物12	3075柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	1.18	被熱痕
34	10F-1f	掘立柱建物12	3075柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	5.50	
34	9F-10f	掘立柱建物12	3076柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	角閃石安山岩	8.70	
34	9F-10f	掘立柱建物12	3077柱穴	採取痕		角閃石安山岩	1.21	被熱痕
34	9F-10f	掘立柱建物12	3077柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	5.50	
34	9F-10f	掘立柱建物12	3077柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	7.00	
35	10F-1f	掘立柱建物12	3078柱穴	柱痕		安山岩	0.56	
35	10F-1f	掘立柱建物12	3080柱穴	採取痕	根巻石?	角閃石安山岩	0.53	被熱痕
35	10F-1f	掘立柱建物12	3080柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	3.70	
35	10F-1f	掘立柱建物12	3080柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	3.70	
35	10F-1f	掘立柱建物12	3080柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	7.00	
36	9F-10f,10F-1f	掘立柱建物12	3083柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	2.60	被熱痕
36	10F-1f	掘立柱建物12	3084柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	6.15	
37	9F-10g	掘立柱建物12	3086柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	安山岩	8.00	
38	10f-1g	掘立柱建物12	3088柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	6.30	
40	10F-1f	掘立柱建物12	3098柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	2.55	
41	10F-1f	掘立柱建物12	3101柱穴	採取痕		安山岩	2.20	被熱痕
						総重量	122.35	

第49表 掘立柱建物20柱穴出土礫観察表(1)

遺構挿図番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
45	9F-10f	掘立柱建物20	3040柱穴	採取痕		花崗岩	4.40	被熱痕
45	9F-10f	掘立柱建物20	3040柱穴	底面	礎盤石	安山岩	5.30	被熱痕
45	9F-10f	掘立柱建物20	3041柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	5.40	
51	9F-9f	掘立柱建物20	3042柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩質凝灰岩	1.65	被熱痕
46	9F-10f	掘立柱建物20	3043柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	0.05	被熱痕
46	9F-10f	掘立柱建物20	3043柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	0.41	
46	9F-10f	掘立柱建物20	3043柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	角閃石安山岩	2.11	被熱痕
46	9F-10f	掘立柱建物20	3036柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	角閃石安山岩	3.15	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第50表 掘立柱建物20柱穴出土礫観察表(2)

遺構挿図番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
46	9F-10f	掘立柱建物20	3036柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	角閃石安山岩	5.55	被熱痕
47	9F-10f	掘立柱建物20	3044柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	安山岩	2.80	
47	9F-10f	掘立柱建物20	3046柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	花崗岩	1.65	被熱痕
47	9F-10f	掘立柱建物20	3046柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	花崗岩	1.55	被熱痕
47	9F-10f	掘立柱建物20	3046柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	4.20	
47	9F-10f	掘立柱建物20	3046柱穴	採取痕	礎盤石?	角閃石安山岩	6.00	被熱痕
48	9F-10f	掘立柱建物20	3047柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	3.50	
48	9F-10f	掘立柱建物20	3047柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	角閃石安山岩	3.95	被熱痕
48	9F-10f	掘立柱建物20	3048柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	安山岩	3.25	
49	9F-10f	掘立柱建物20	3050柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	0.63	被熱痕
49	9F-10f	掘立柱建物20	3050柱穴	採取痕	根巻石?	角閃石安山岩	1.23	被熱痕
49	9F-10f	掘立柱建物20	3050柱穴	埋土	根巻石?	花崗岩	1.04	被熱痕
49	9F-10f	掘立柱建物20	3050柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	1.94	被熱痕
49	9F-10f	掘立柱建物20	3050柱穴	底面	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	3.55	
						総重量	63.31	

第51表 掘立柱建物13柱穴出土礫観察表(1)

遺構挿図番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
68	10F-1f	掘立柱建物13	3103柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	0.73	被熱痕
68	10F-1f	掘立柱建物13	3103柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	0.04	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3103柱穴	採取痕	根巻石?	細粒花崗岩	0.01	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3104柱穴	採取痕		安山岩	0.08	被熱痕
68	10F-1f	掘立柱建物13	3105柱穴	採取痕	礎盤石?	角閃石安山岩	12.00	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3105柱穴	採取痕	根巻石・根石?	角閃石安山岩	2.80	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3105柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.67	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3105柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	1.18	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3105柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.65	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3106柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	2.50	被熱痕
68	10F-1f	掘立柱建物13	3106柱穴	採取痕	根巻石?	角閃石安山岩	2.00	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3106柱穴	採取痕	根巻石?	花崗岩	0.50	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3106柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	1.85	
68	10F-1f	掘立柱建物13	3107柱穴	採取痕		安山岩	1.07	
69	10F-1f	掘立柱建物13	3108柱穴	底面	根石?	安山岩	1.40	
69	10F-1f	掘立柱建物13	3108柱穴	底面	根石?	花崗岩?	1.29	被熱痕
69	10F-1f	掘立柱建物13	3108柱穴	底面	根石?	角閃石安山岩	1.15	被熱痕
69	10F-1f	掘立柱建物13	3108柱穴	底面	礎盤石・根石?	安山岩	3.60	被熱痕
69	10F-1f	掘立柱建物13	3108柱穴	底面	根石?	安山岩	0.99	被熱痕
69	10F-1f	掘立柱建物13	3109柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	2.40	
69	10F-1f	掘立柱建物13	3109柱穴	採取痕	礎盤石・根石?	安山岩	2.40	
69	10F-1f	掘立柱建物13	3109柱穴	採取痕	礎盤石・根石?	角閃石安山岩	1.54	被熱痕
70	10F-1f・1g,10F-2f・2g	掘立柱建物13	3111柱穴	採取痕	礎盤石・根巻石?	安山岩	7.00	被熱痕
70	10F-1f・1g,10F-2f・2g	掘立柱建物13	3111柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	28.00	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕		角閃石安山岩	0.44	
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	角閃石安山岩	0.43	
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.29	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.29	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.56	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.55	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.07	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	角閃石安山岩	0.51	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.07	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	角閃石安山岩	0.04	
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	0.09	被熱痕
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	角閃石安山岩	0.02	
70	10F-2g	掘立柱建物13	3112柱穴	採取痕	根巻石・根石?	安山岩	1.51	被熱痕
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根巻石	花崗岩	3.00	被熱痕
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根巻石	安山岩	0.44	
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根巻石	安山岩	1.00	

第52表 掘立柱建物13柱穴出土礫観察表(2)

遺構挿入番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根卷石	安山岩	1.60	被熱痕
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根卷石	花崗岩	4.70	被熱痕
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根卷石	安山岩	0.87	
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根卷石	安山岩	1.16	
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根卷石	安山岩	2.20	被熱痕
71	10F-1g	掘立柱建物13	3115柱穴	採取痕	根卷石	安山岩	0.13	
72	10F-1g	掘立柱建物13	3118柱穴	採取痕	礎盤石?	角閃石安山岩	10.00	被熱痕
72	10F-1g	掘立柱建物13	3118柱穴	採取痕	根卷石?	安山岩	0.75	
72	10F-1g	掘立柱建物13	3118柱穴	採取痕	根卷石?	安山岩	1.95	被熱痕
72	10F-1g	掘立柱建物13	3118柱穴	採取痕	根卷石?	安山岩	1.64	
73	10F-2g	掘立柱建物13	3119柱穴	採取痕		角閃石安山岩	13.50	
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	1.70	
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	0.51	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	0.03	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	0.25	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	0.26	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	3.30	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	2.26	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	2.35	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	1.98	
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	角閃石安山岩	4.06	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	採取痕	根卷石・根石?	安山岩	2.30	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	底面	根卷石・根石?	安山岩	2.75	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3120柱穴	底面	根卷石・根石?	角閃石安山岩	2.60	被熱痕
73	10F-2g	掘立柱建物13	3121柱穴	採取痕	根卷石?	安山岩	2.10	被熱痕
74	10F-1g	掘立柱建物13	3122柱穴	採取痕		安山岩	1.39	被熱痕
74	10F-1g	掘立柱建物13	3122柱穴	採取痕		安山岩	1.46	被熱痕
74	10F-1g	掘立柱建物13	3123柱穴	掘方埋め土	根卷石	角閃石安山岩	1.65	被熱痕
74	10F-1g	掘立柱建物13	3123柱穴	掘方埋め土	根卷石	角閃石安山岩	2.80	被熱痕
74	10F-1g	掘立柱建物13	3123柱穴	掘方埋め土	根卷石	安山岩	3.25	被熱痕
74	10F-1g	掘立柱建物13	3123柱穴	掘方埋め土	根卷石	安山岩	0.85	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	安山岩	1.16	
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	花崗岩	1.20	
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	安山岩	0.50	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	安山岩	0.32	
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	安山岩	0.28	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	板状安山岩	0.10	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	板状安山岩	0.27	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	安山岩	0.11	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	板状安山岩	0.05	
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	板状安山岩	0.10	
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	板状安山岩	0.13	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3124柱穴	採取痕	根卷石・根石	安山岩	0.65	
75	10F-2g	掘立柱建物13	3125柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	2.55	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3125柱穴	採取痕	根卷石?	花崗岩	0.14	被熱痕
75	10F-2g	掘立柱建物13	3125柱穴	採取痕	根卷石?	板状安山岩	0.02	被熱痕
76	10F-2g	掘立柱建物13	3126柱穴	底面	礎盤石・根卷石?	花崗岩	0.73	被熱痕
76	10F-2g	掘立柱建物13	3126柱穴	底面	礎盤石・根卷石?	花崗岩	1.19	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3135柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	安山岩	5.35	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	掘方埋め土	根卷石・根石?	安山岩	1.11	
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	掘方埋め土	根卷石・根石?	花崗岩	0.22	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	掘方埋め土	根卷石・根石?	安山岩	0.32	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	掘方埋め土・底面	根卷石・根石?	安山岩	0.39	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	底面	根卷石・根石?	安山岩	0.23	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	底面	根卷石・根石?	安山岩	0.22	被熱痕
78	10F-2g	掘立柱建物13	3137柱穴	底面	根卷石・根石?	安山岩	0.05	被熱痕
79	10F-1g	掘立柱建物13	3138柱穴	採取痕	根卷石?	安山岩	1.22	
79	10F-1g	掘立柱建物13	3138柱穴	採取痕	礎盤石?	角閃石安山岩	2.55	被熱痕
79	10F-1g	掘立柱建物13	3139柱穴	掘方埋め土	根卷石	安山岩	0.06	

第3章 山ノ下遺跡の調査成果

第53表 掘立柱建物13柱穴出土礫観察表(3)

遺構挿図番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
79	10F-1g	掘立柱建物13	3139柱穴	採取痕	根巻石	花崗岩	0.04	
79	10F-1g	掘立柱建物13	3139柱穴	採取痕	根巻石	安山岩	1.85	被熱痕
79	10F-1g	掘立柱建物13	3139柱穴	採取痕	根巻石	角閃石安山岩	0.84	被熱痕
80	10F-2h	掘立柱建物13	3323柱穴	掘方埋め土	根巻石	角閃石安山岩	0.64	被熱痕
80	10F-2h	掘立柱建物13	3323柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	0.40	被熱痕
						総重量	187.04	

第54表 掘立柱建物19柱穴出土礫観察表

遺構挿図番号	調査区 T45-6j-	集合遺構名	遺構名	層位	器種	石材	重量(kg)	備考
85	9F-10g	掘立柱建物19	3150柱穴	採取痕	礎盤石・根巻石?	角閃石安山岩	5.30	
85	9F-10g	掘立柱建物19	3151柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	10.50	打ち欠き痕
85	9F-10g	掘立柱建物19	3152柱穴	採取痕	根巻石もしくは根石?	角閃石安山岩	2.75	被熱痕
85	10F-1g	掘立柱建物19	3153柱穴	採取痕	礎盤石もしくは根巻石?	安山岩	1.80	被熱痕
85	10F-1g	掘立柱建物19	3155柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	4.15	被熱痕
86	9F-10g	掘立柱建物19	3156柱穴	採取痕	礎盤石	安山岩	5.10	
86	9F-10g	掘立柱建物19	3156柱穴	採取痕	根巻石	花崗岩	1.33	被熱痕
86	9F-10g	掘立柱建物19	3156柱穴	採取痕	根巻石	安山岩	3.10	被熱痕
86	9F-10g	掘立柱建物19	3157柱穴	底面	礎盤石	角閃石安山岩	10.00	
86	9F-10g	掘立柱建物19	3157柱穴	採取痕	根巻石	角閃石安山岩	7.50	被熱痕
86	9F-10g	掘立柱建物19	3157柱穴	採取痕	根巻石	安山岩	1.51	被熱痕
87	10F-1g	掘立柱建物19	3160柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	9.30	
87	10F-1g	掘立柱建物19	3161柱穴	掘方埋め土	根巻石	角閃石安山岩	3.10	
87	10F-1g	掘立柱建物19	3161柱穴	採取痕		角閃石安山岩	0.12	被熱痕
88	9F-10g	掘立柱建物19	3162柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	安山岩	4.50	
88	9F-10g	掘立柱建物19	3163柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	1.50	
88	9F-10g	掘立柱建物19	3163柱穴	掘方埋め土	根巻石	安山岩	1.85	
88	9F-10g	掘立柱建物19	3164柱穴	採取痕	根巻石?	角閃石安山岩	0.70	
88	9F-10g	掘立柱建物19	3164柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	2.65	
89	9F-10g	掘立柱建物19	3165柱穴	底面(掘方埋め土上面)	礎盤石	安山岩	5.10	
89	10F-1g	掘立柱建物19	3166柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	5.50	
89	10F-1g	掘立柱建物19	3167柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	6.60	
89	10F-1g	掘立柱建物19	3167柱穴	採取痕	礎盤石?	安山岩	3.50	
90	9F-10g	掘立柱建物19	3171柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	3.05	被熱痕
90	9F-10g	掘立柱建物19	3171柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	3.10	被熱痕
90	9F-10g	掘立柱建物19	3171柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	1.47	被熱痕
91	10F-1g	掘立柱建物19	3173柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	1.20	被熱痕
91	10F-1g	掘立柱建物19	3173柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	0.92	被熱痕
91	10F-1g	掘立柱建物19	3174柱穴	採取痕	根巻石?	安山岩	0.64	被熱痕
91	10F-1g	掘立柱建物19	3174柱穴	採取痕	根巻石?	角閃石安山岩	1.06	被熱痕
92	9F-10g	掘立柱建物19	3176柱穴	底面	礎盤石	安山岩	3.25	被熱痕
92	9F-10g	掘立柱建物19	3177柱穴	掘方埋め土	根巻石	板状安山岩	1.77	被熱痕
						総重量	113.92	



## 第4章 平ノ前遺跡の調査成果

### 第1節 概要

平ノ前遺跡は、天神野台地から東に延びる手指状の小丘陵による微地形とその裾を流れていた自然流路による土砂の供給によって形成されており、遺跡内の堆積は一様でない。このことは、平成29年度に実施した当財団の調査成果によって明らかにされ、今回の調査でも追認された<sup>(註1)</sup>。令和元年度は遺跡の南端にあたるA1区盛土部と、ここから約100m北に位置するP3区の2地点の調査を行った。A1区盛土部では平成29年度調査で検出された流路<sup>(註2)</sup>の続きの調査を行い、流路の両岸が確認されたことで、流路幅がさらに広がることが明らかとなった。P3区では平成29年度調査地点のP4区<sup>(註3)</sup>で検出された古墳時代前期の溝の続きが2条確認された。A1区盛土部で検出された流路内からは、上流や周辺から流されてきた遺物が数多く見られた。流路は出土土器や放射性炭素年代測定から、少なくとも縄文時代晩期にはすでに機能しており、鎌倉時代に埋没したものと考えられる。

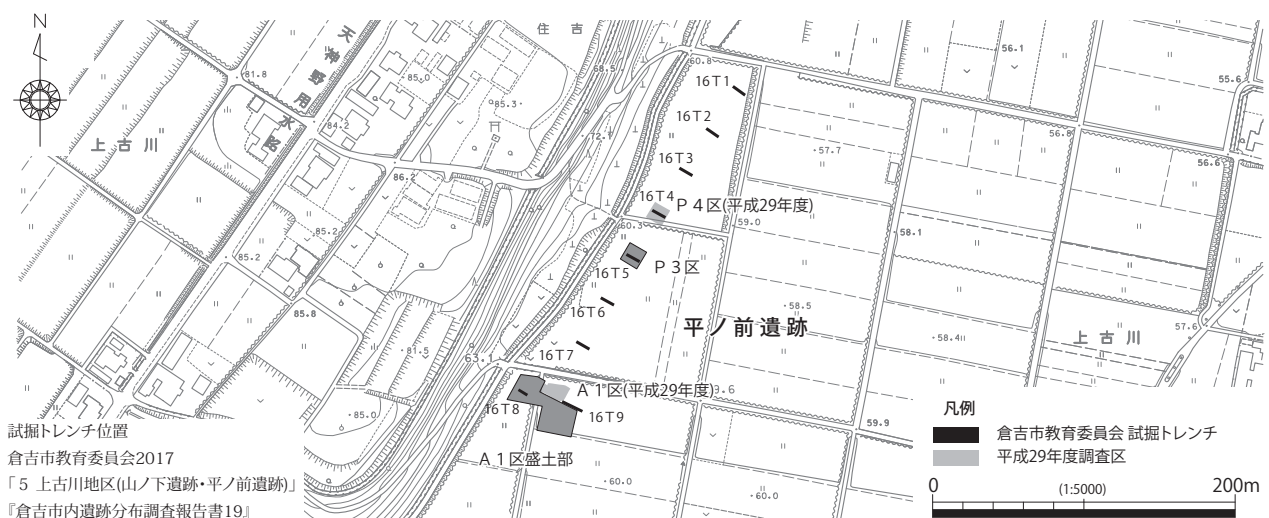
#### 【註】

- (1) 公益財団法人鳥取県教育文化財団2018「第4章 平ノ前遺跡の調査成果」『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書120
- (2) (1)同書「第4章 第2節 A1区の調査」
- (3) (1)同書「第4章 第3節 P4区の調査」

### 第2節 A1区盛土部の調査

#### 第1項 概要と基本層序

A1区盛土部は、天神野台地の崖下線から約10m東に位置し、台地上との比高差は約20mを測る。調査区の現況は2筆の水田であり、南北を縦走する農道によって西側上段面と東側下段面に分かれ

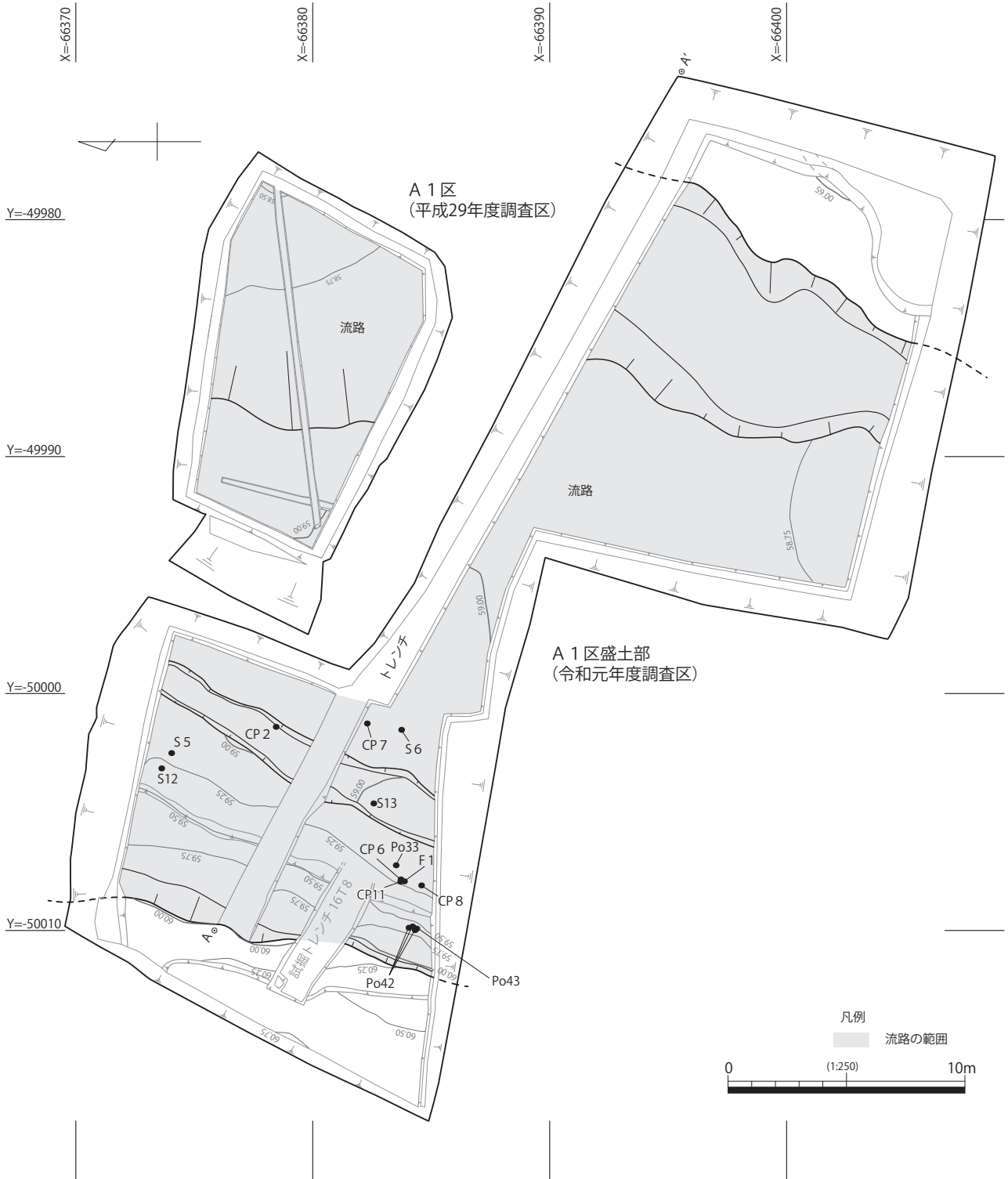


る。東に向けて緩やかに下がる旧地形は圃場整備によって大きく改変されているものの、上下段の水田によってその痕跡はわずかながら残されていた。重機による造成土と耕作土の除去後、調査区北壁及び南壁に掘削した排水用トレンチ断面の観察及び平成29年度調査成果から、本調査区は丘陵裾を南北方向に流れていた幅約30mの自然流路上に位置することが明らかとなった。そこで、調査区の東西を貫き自然流路と直交するトレンチを設置し、以下の堆積を確認し記録した。

- 1層 流路の最上層でほぼ全面に堆積する黒褐色細砂～中砂混じりシルト層である。古代から中世の土師器、古代の瓦等を含む。
- 2層 流路のほぼ全面に堆積する黒褐色細砂～中砂混じりシルト層であり、古墳時代から古代の土師器や須恵器を含む。
- 3・4層 黒褐色シルト混じり砂層で、中～大礫を含む。流路西側に堆積する。
- 5・6層 黒褐色シルト混じり砂～砂混じりシルトの堆積層。流路西端に位置する古墳時代前期の溝である。
- 7層 浅黄色シルト混じり粗砂の堆積層。流路西端に位置する古墳前期の溝である。
- 8層 黒色細砂～中砂混じりシルトの堆積層。流路西端に位置する古墳前期の溝である。
- 9a層 褐灰色・灰黄褐色細砂～中砂混じりシルトで、流路全面に堆積する。
- 9b層 浅黄色中粒砂～粗粒砂で、流路東半に堆積する。
- 10a層 褐灰色細砂～中砂混じりシルトで、ほぼ流路全面に堆積する。
- 10b層 浅黄色細粒砂～粗粒砂で、ほぼ流路全面に堆積する。
- 10c層 褐灰色細粒砂～中粒砂混じりシルトで、ほぼ流路全面に堆積する。
- 11・12層 浅黄色・灰黄色中砂～粗砂で、調査区西から東に断続的に広がる堆積層である。縄文時代晩期の土器を含む。
- 13～14a・b層 黒色シルトで、流路全域に堆積する無遺物層である。
- 15層 黒褐色細砂～中砂混じりシルトで、流路西端に堆積する。
- 16a層 褐灰色シルト混じり細砂で、流路に堆積する無遺物層である。
- 16b層 黒褐色細粒砂混じりシルトで、流路に堆積する無遺物層である。
- 17層 灰黄褐色細礫～巨礫層で、流路に堆積する無遺物層である。
- 18層 黄色シルト層(ローム層)で流路外の東西端に堆積する。

土層観察用トレンチでは18層まで掘削し、流路内の堆積状況を確認したが、それ以外は14層上面までの掘削によって調査を終了した(第176～179図、図版93～95)。なお、調査区南東隅では近世以降の溝が確認されたが、底面までの掘削は行っていない。

1・4・9a・11・12・14b・16a層の土壌サンプルの自然科学分析の結果、古代から中世の流路内は水の動きが少なく湿地的な環境であったことが示されている。また、イネ科やソバ属などの花粉が同定され、流路沿いにおいて稲作や畑作などが行われていたことが推測されている。縄文から弥生時代の流路内は、流水による堆積と削剥を繰り返していたが、基本的に好气的環境下であった状況が推測されている(第5章第3節参照)。

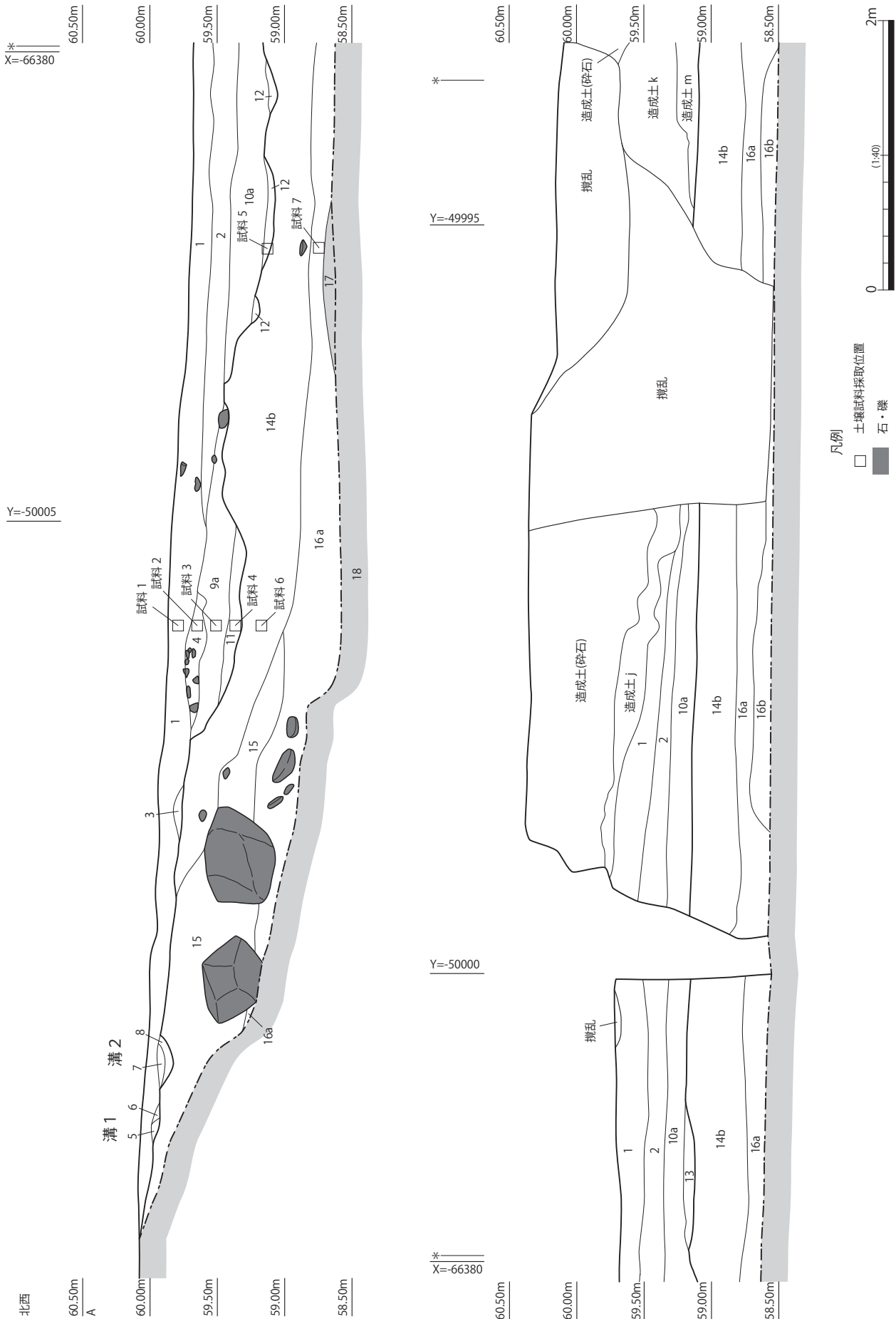


第176図 A1区・A1区盛土部全体図

## 第2項 検出した遺構と遺物

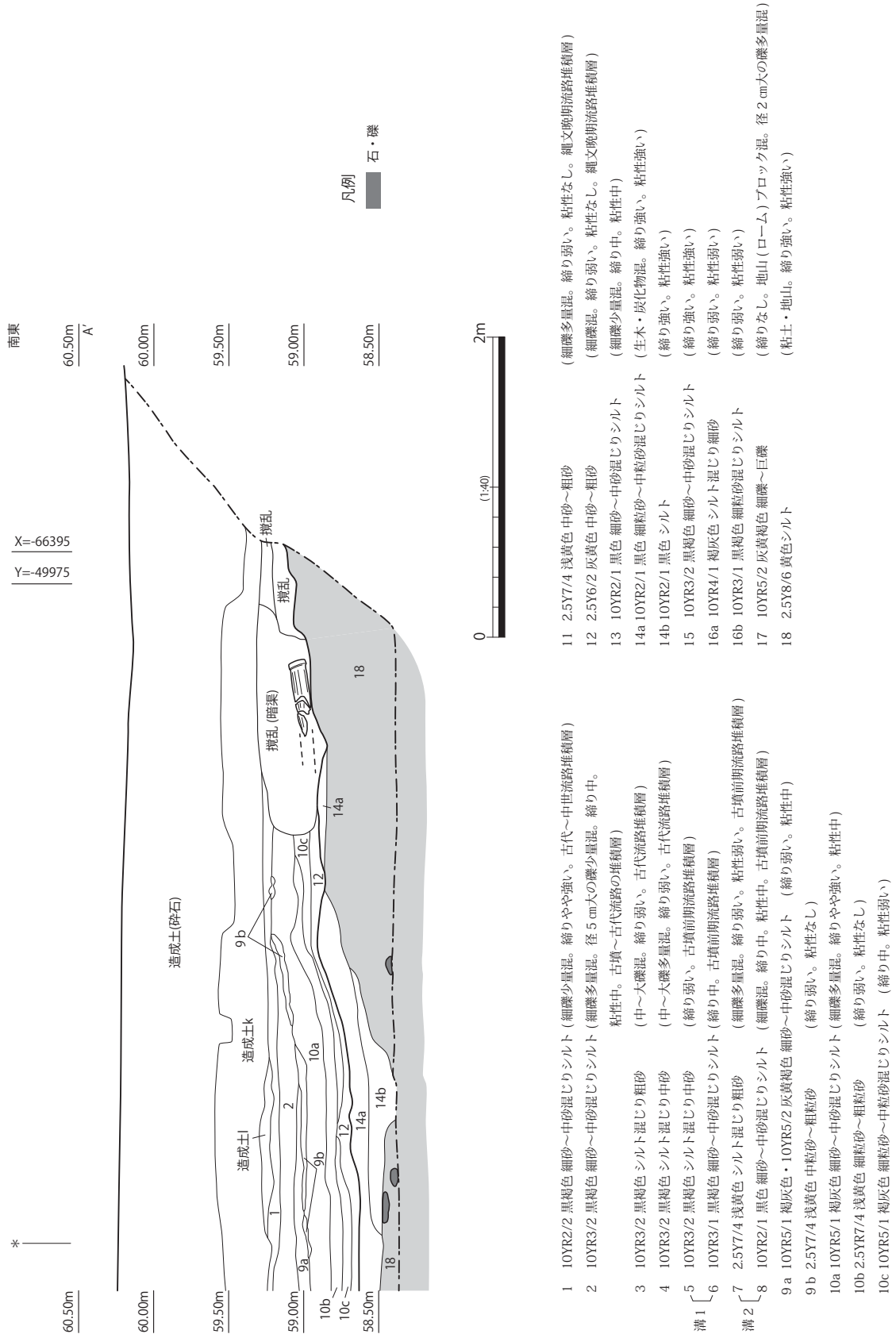
### 流路(第177～179図、第55・57～62表、図版93～95・99～106)

中央トレンチによって確認された18層(ローム層)が調査区東西端で立ち上がる状況が確認され、その間に1～17層のシルト及び砂層が互層を呈して堆積する。このような堆積状況から、17層より上層を流路として認識した。最大幅は約30m、長さは約27m(平成29年度調査分を合わせると長さ約30m)、最上層の1層上面から17層上面までの深さは1.1mを測る。流路の堆積土13～17層は無遺物層



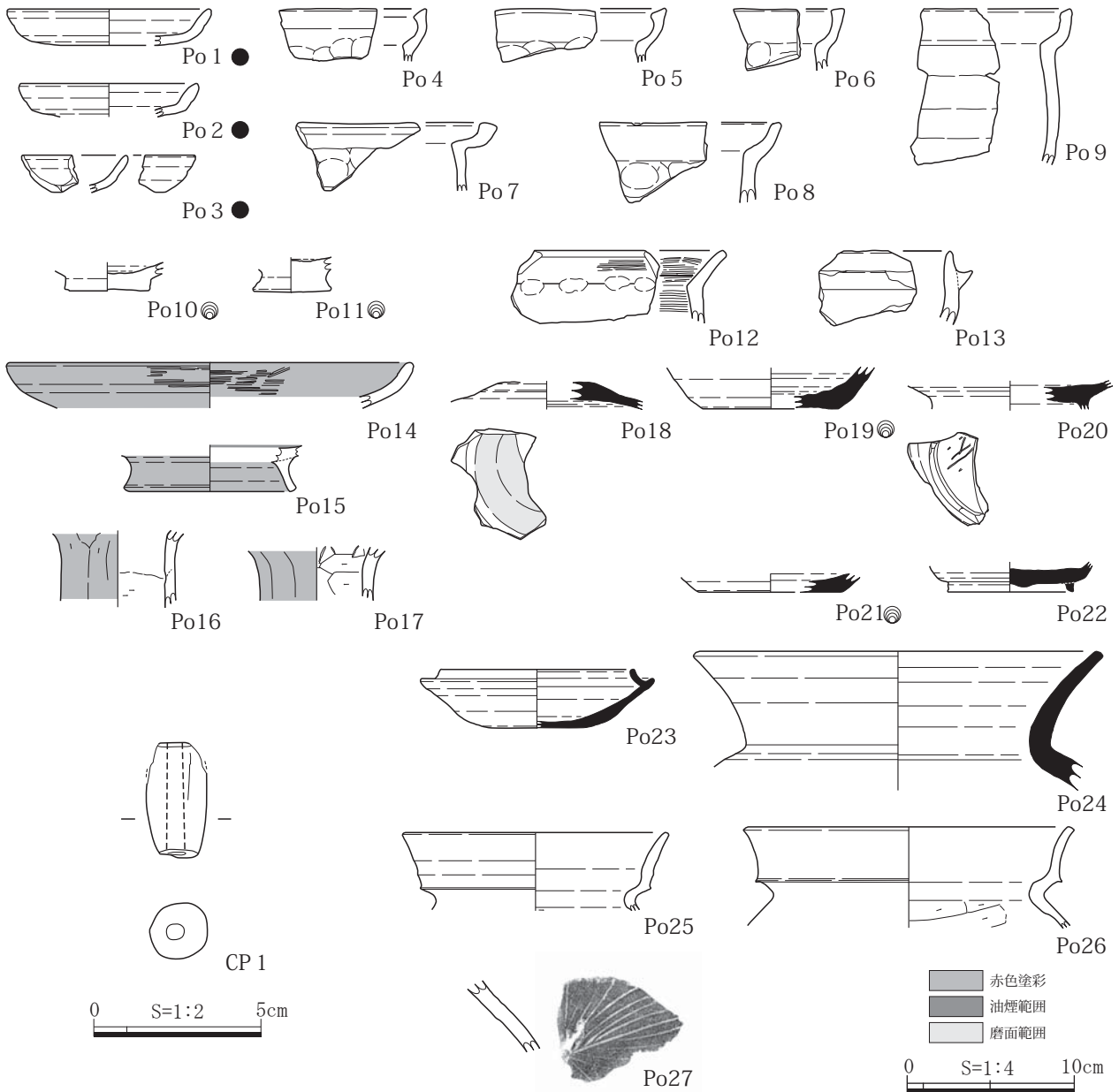
第177図 A 1区盛土部トレンチ土層断面図(1)





第179図 A 1区盛土部トレンチ土層断面図(3)

で、14a・b層黒色シルトが平成29年度調査で確認された8層に相当する。11～12層は砂層で摩耗した縄文時代晩期後半の土器片が出土している。なお、12・13層の下層である14a層で抽出した黒色の植物遺体(試料8)について放射性炭素年代測定を実施したところ、歴年較正年代(2σの確率1位)が

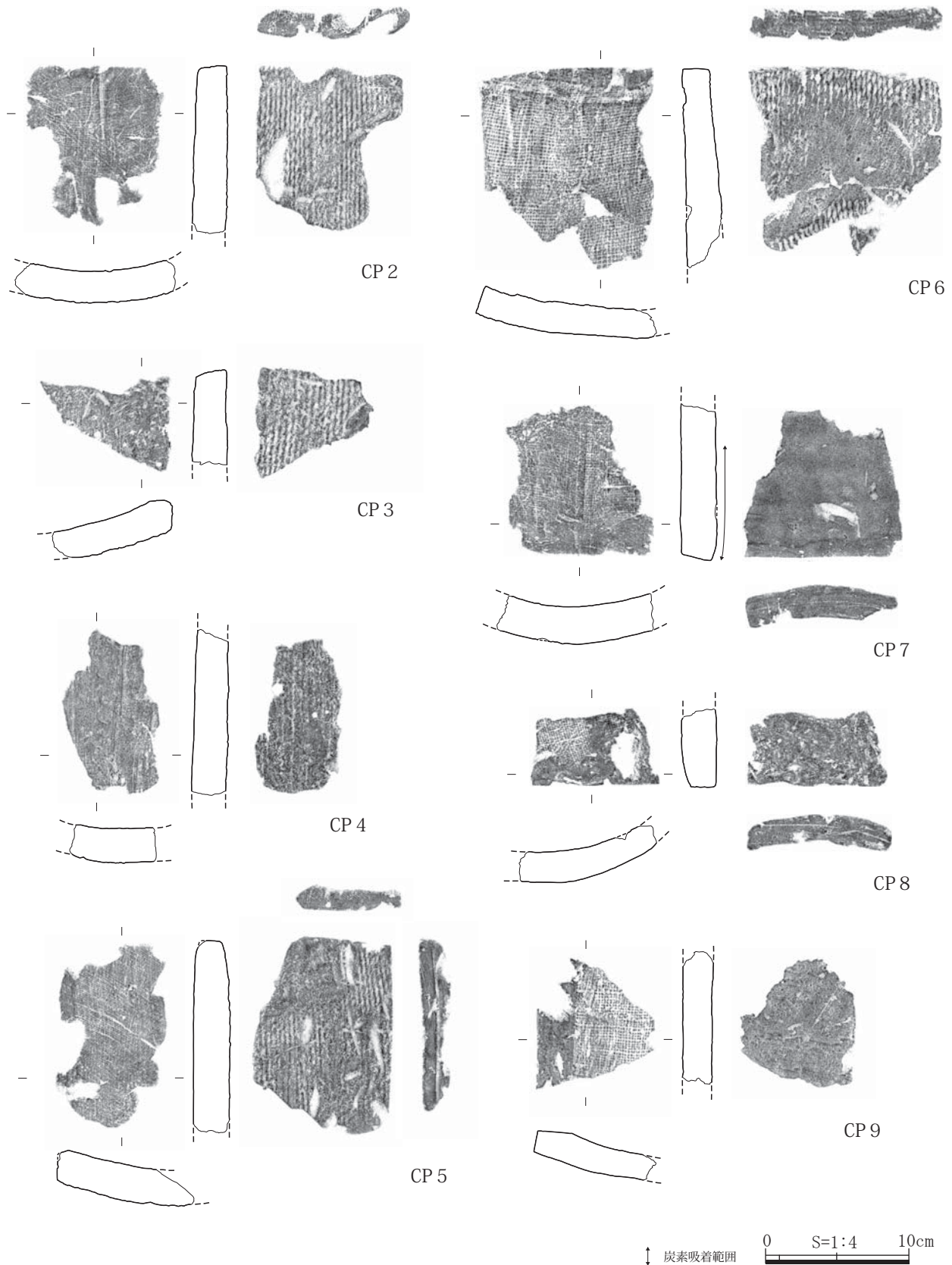


第180図 流路1層出土遺物(1)

2,714~2,458calBPの値が得られており調査成果と調和している(第5章第3節参照)。9・10層は遺物が散漫で、1~4層に古代から中世に至る数多くの遺物が出土した。なお、流路内の出土遺物は丘陵に面する西寄りほど多く、東ほど希薄になる状況が確認された。

出土遺物(第180~188図、第57~62表、図99~106)

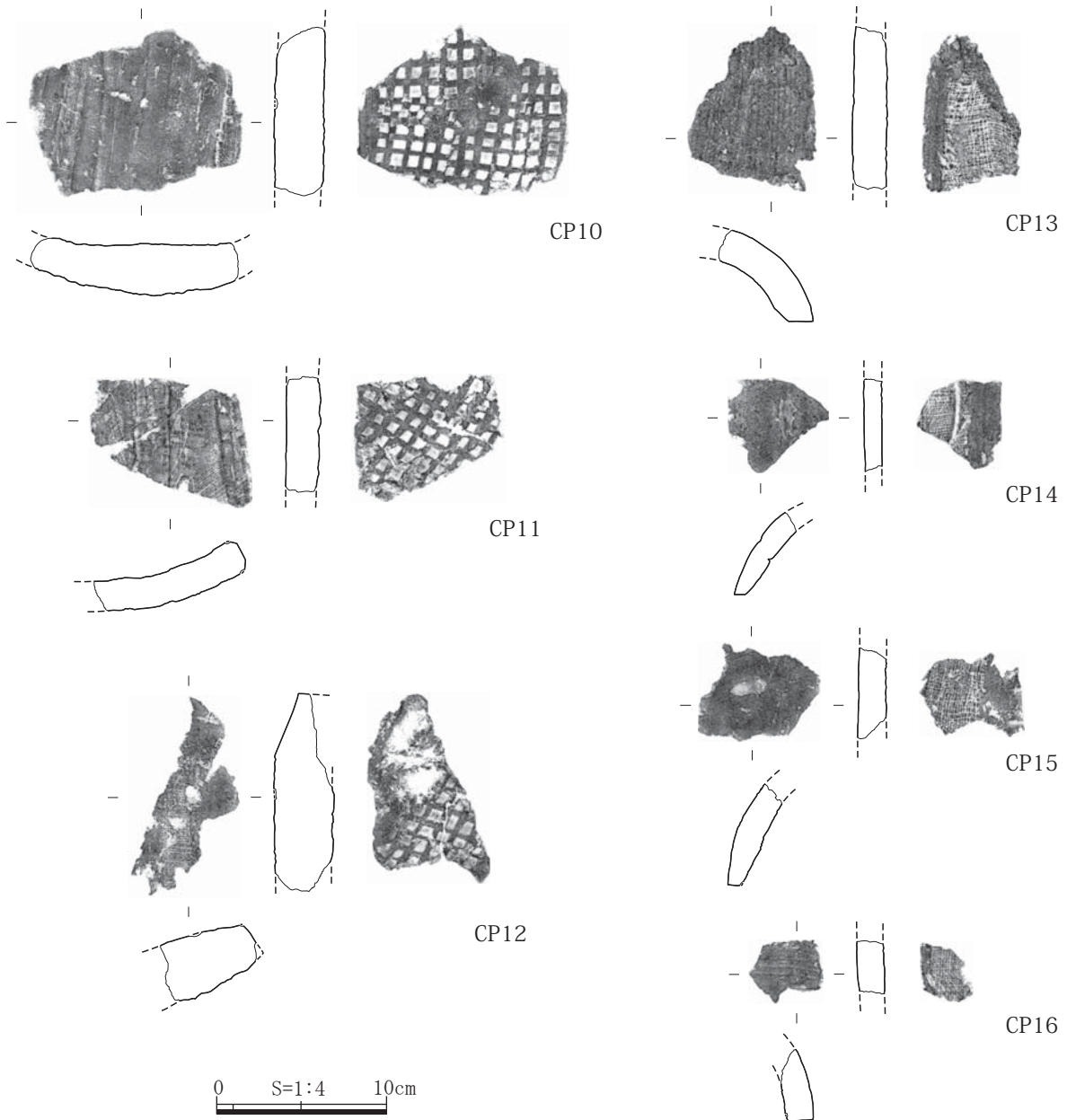
流路1層より出土した遺物を第180~182図に掲載している。Po1~3は手づくね成形の土師器皿である。Po4~9は瓦質土器鍋であり、いずれもクランク状の浅い受け口となっている。Po4~8の体部外面には成形時の指オサエの痕跡が顕著に残る。Po13は瓦質土器羽釜で、口縁部はほぼ直立する。以上は、12世紀後葉から13世紀中葉に帰属する。Po10・11は回転糸切りの土師器皿と柱状高台である。Po12は「く」の字状に外反する土師器甕であり、内外面にハケ調整を施す。これらは11世紀後葉から12世紀中葉に比定される。Po14~17は赤彩された土師器皿、高台付皿、高坏である。



第181図 流路1層出土遺物(2)

Po14は内外面丁寧なミガキが施される。Po15は高台付坏の底部であり、高台部は内外面赤色塗彩がなされている。Po16・17は高坏脚部であり、面取り状に下から上方向にヘラケズリをして仕上げている。Po18～24は須恵器である。Po18は蓋でつまみとかえりは欠損。内面は硯として転用されてい

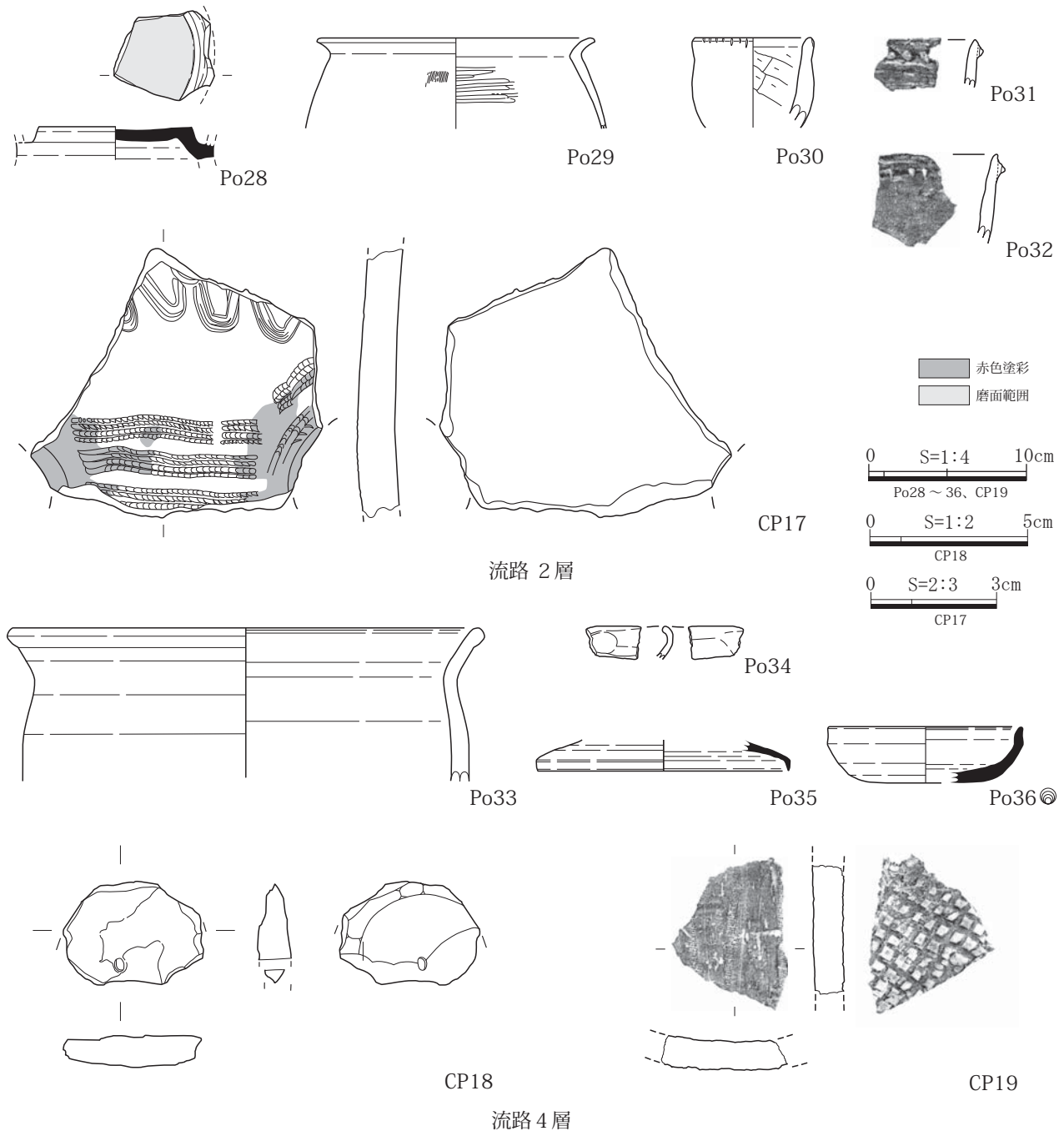




第182図 流路1層出土遺物(3)

る。Po19は壺の底部。Po20～22は坏と高台付坏でPo20底面にはヘラ記号が見られる。以上は、7世紀末から9世紀前半に帰属しよう。Po23・24は須恵器坏と大甕である。Po23は口縁部が内傾し、体部が緩やかに立ち上がる。7世紀前半に帰属する。Po25・26は土師器甕であり、古墳時代前期中葉に比定される。Po27は弥生土器壺の肩部に木葉文が描かれる。弥生時代前期後葉に相当する。CP1は紡錘型の土錘である。表面は丁寧なナデ調整が施される。古代以降のものであろう。

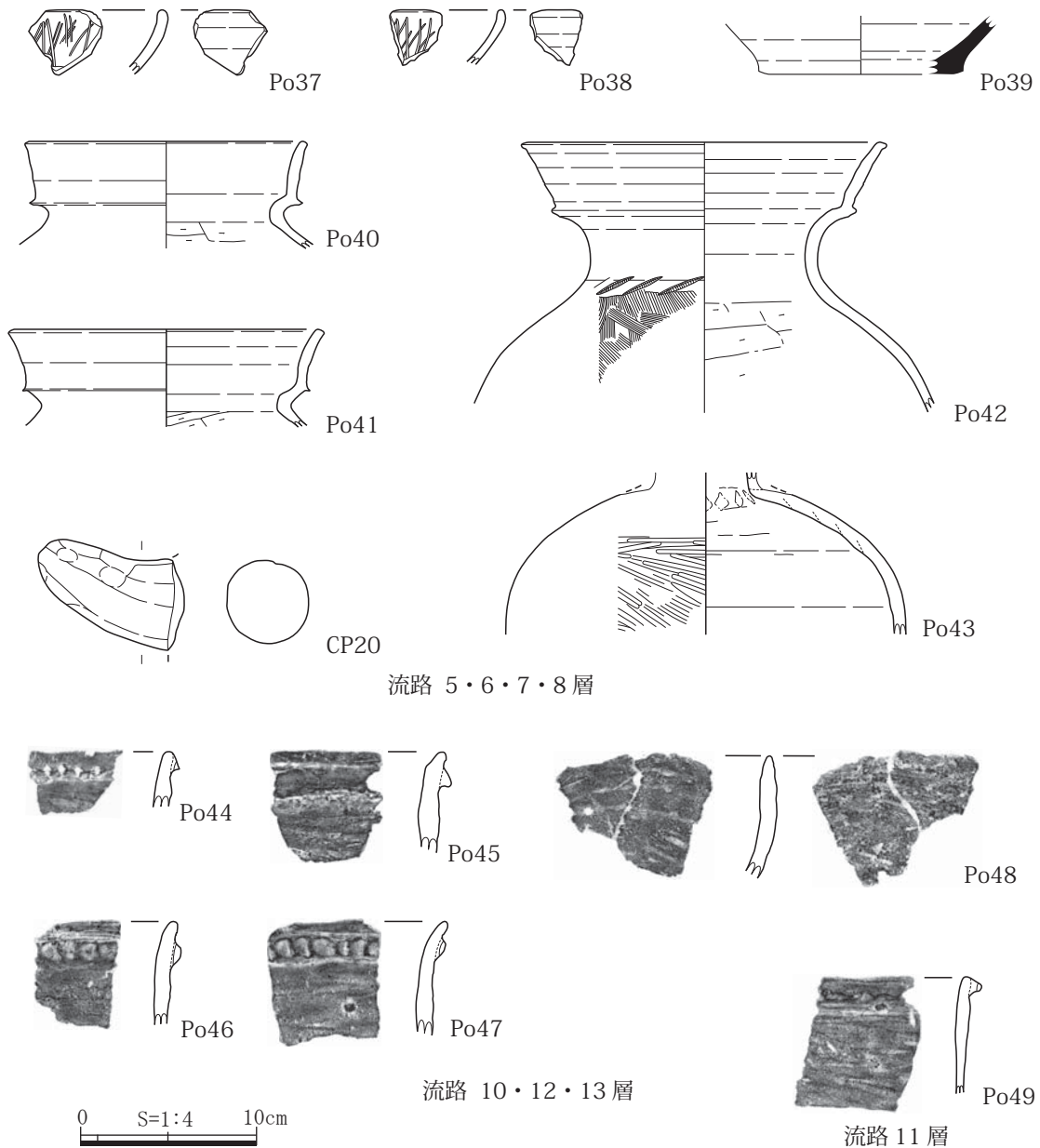
CP2～16は丸・平瓦をまとめている。CP2～6は平瓦で縄目叩き、CP10～12は正方形格子目叩きが認められる。CP13～16は丸瓦である。CP13は凸面ヘラケズリ後ナデ、凹面布目が観察される。以上のなかで平瓦CP9、丸瓦CP14・15は凸面がナデ調整で、凹面側が幅広に面取りされている。出土瓦は総じて焼成が硬軟両者見られ、色調もバラエティーに富んでいる。瓦窯の違いを示すものか。遺跡の南西約300mには8世紀前半に創建されたとされる石塚廃寺があり、10世紀代には廃絶したことが倉吉市教育委員会の試掘調査で明らかにされている<sup>(註1)</sup>。出土した瓦や赤彩土師器は摩耗を受けて



第183図 流路2・4層出土遺物

いるものも散見され、これらは石塚廃寺廃絶後に本流路に流れてきたものと考えられる。

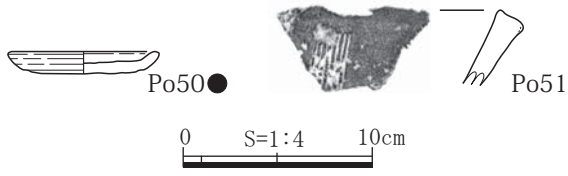
2・4層から出土した遺物を第183図にまとめている。Po28は圈足円面硯である。残存率は硯部が全体の1/6ほどで脚台部及び外堤は欠損している。Po29は弥生土器甕で外面体部はハケ調整、内面体部はミガキ調整が認められる。Po30は頸部がやや括れるがほぼ直線的に口縁が立ち上がるミニチュア土器甕である。口縁端部に刻みが施される。いずれも弥生時代中期中葉に比定される。Po31・32は縄文時代晩期の刻目突帯文土器の深鉢である。口縁端部よりやや下がった位置に粘土紐が貼り付けられ、その頂部にPo47は指頭押圧、Po48はヘラ状工具によって刻みが施されている。CP17は大型の分銅形土製品で、表面に細密な押引文と波状文が描かれる。表面及び側面に赤色塗彩がなされている。弥生時代中期中葉～後葉に比定されよう。Po33は口縁部が緩やかに外反する土師器甕である。



第184図 流路5～8・10～13層出土遺物

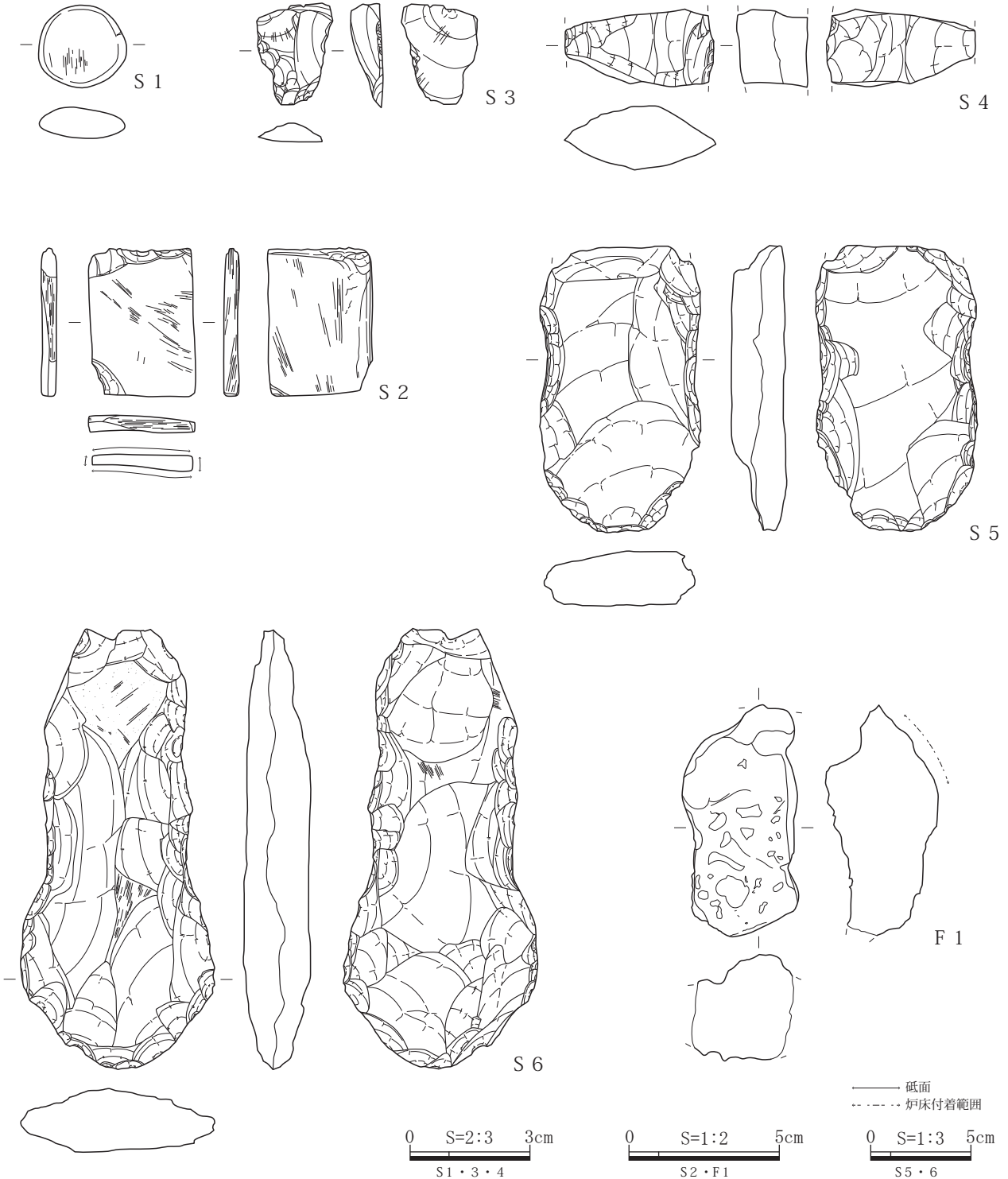
Po35・36は須恵器蓋と坏である。Po35は天井部が緩やかに立ち上がり、口縁端部は直角に折れ曲がる。Po36は体部が内彎して立ち上がる。これらは8世紀末から9世紀前半に比定される。Po34は器壁が薄く、口縁部が大きく内彎する。内外面粗いナデ調整で指オサエ痕を残す。製塩土器と考えられる。CP18は土器片を転用した紡錘車である。中心部に焼成後穿孔があり、下部が欠損し内外面表面も部分的に剥落している。CP19は正方形格子目叩きが見られる平瓦。

5～8層及び10～13層から出土した遺物を第184図に掲載している。Po37・38は土師器坏の口縁部である。体部が内彎して立ち上がり、内面には暗文が認められる。7世紀末から8世紀前半に比定される。Po39は須恵器壺の底部。Po40～41は土師器甕、Po42～43は土師器壺である。前者は口縁がほぼ直立か外反し、内外面丁寧なナデ調整が施される。Po42は口縁部が外反し、端部は平坦に仕上げられる。肩部にはハケによる刺突、体部はハケ調整である。Po43は大きく肩が張った器形で、体部がハケ調整、頸部内面には大きな絞り痕が残されている。以上は、古墳時代前期前葉から中葉に相当する。CP20は土師器甑の把手である。表面は面取りされナデ調整で仕上げられる。Po44～47は縄文



第185図 遺構外出土遺物

時代晩期の突帯文土器の深鉢である。Po44は口縁端部沿い、Po45～47は口縁端部よりやや下に粘土紐が貼り付けられる。Po45は棒状工具による刻み、Po46・47は指頭押圧による刻みが施される。Po48は体部が内彎し、波状口縁となる縄文時代晩期の粗製土器である。内外面二枚貝による粗いナデ



第186図 流路1層出土遺物(4)

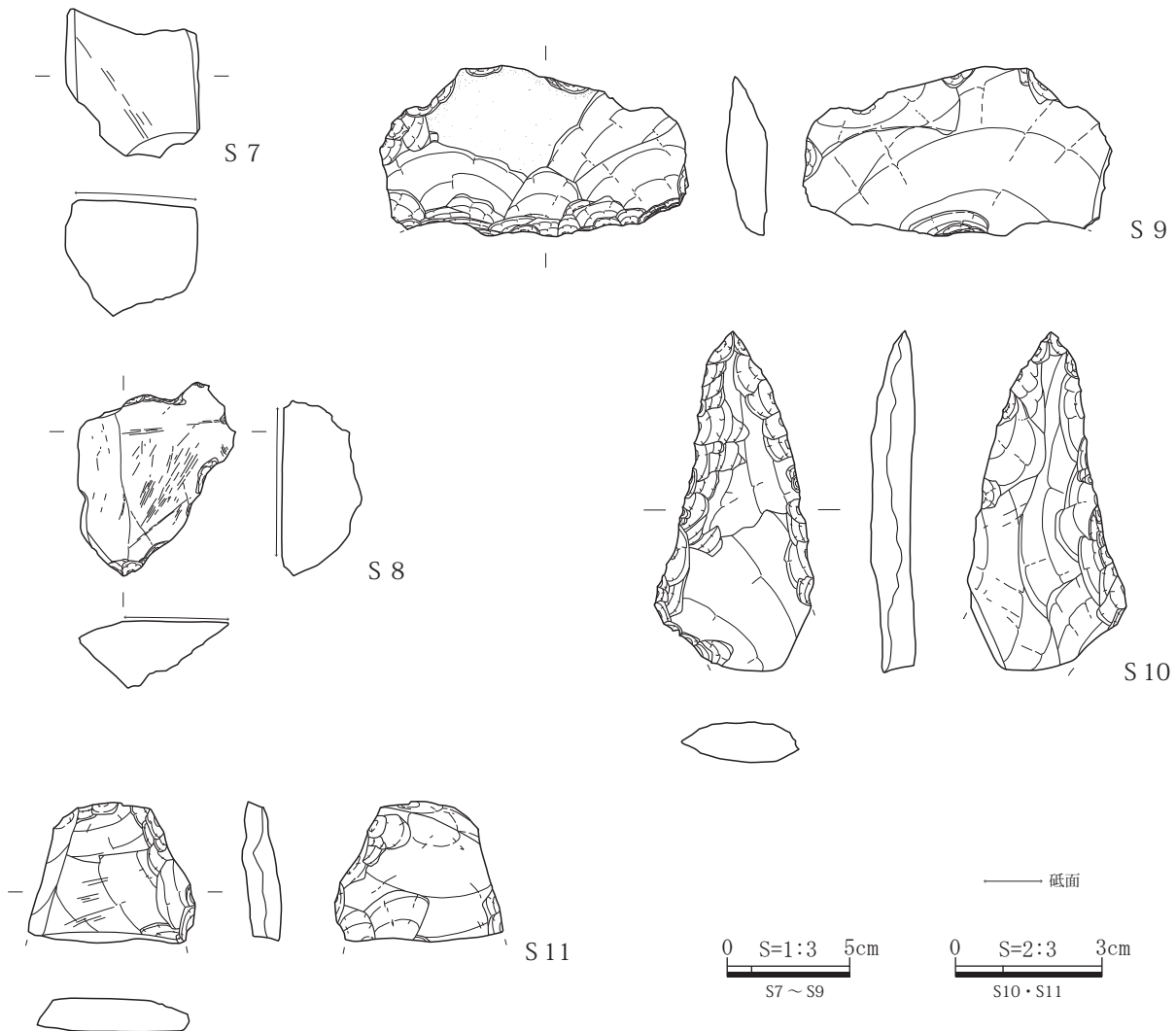
調整が施される。

11層より縄文時代晩期の突帯文土器の深鉢Po49が出土している。口縁端部よりやや下に粘土紐が貼り付けられる。

第185図は遺構外から出土した土師器皿Po50、備前焼播鉢Po51を図示している。Po50は器高が低く、器壁が厚い。13世紀後葉から14世紀に比定されようか。Po51は7本1単位の摺目を有し、口縁端部が撥状に肥厚する。14世紀代の所産であろう。

石器及び鉄関連遺物を第186～188図に掲げている。1層出土遺物はS1～6、F1である。S1は直径約2cm、厚さ0.8cmの安山岩製の基石である。表面にわずかに擦痕がみられる。S2は細粒の小型砥石であり、上面以外の各面に研磨痕を残す。S3は黒曜石製の剥片である。両側縁に二次加工の剥離面が観察される。S4は断面菱形からサヌカイト製の尖頭器。周縁の加工は器体中央まで及び、先端及び基部は折損している。S5・6は板状安山岩製の石鋏である。扁平な長楕円礫を素材とし、周縁に加工を加える。S5は基部が欠損し、S6は使用による線状痕が散見される。F1は椀形鍛冶滓の中心部で、側縁が欠損している。底面の一部に炉床が付着している。

2層出土遺物はS7～11である。S7・8は砥石で、本来は表裏面を広く使用していたものと考えられるが、上面のみ残存している。S9は板状安山岩製の大型直縁刃石器である。表面の一部に自然面を残し、下方の縁辺部に二次加工による刃部を形成する。S10は基部が欠損した安山岩製の有茎尖



第187図 流路2層出土遺物

頭器か。中軸線がやや湾曲するが両側縁に二次加工による刃部を作出している。S11は安山岩製の二次加工剥片である。

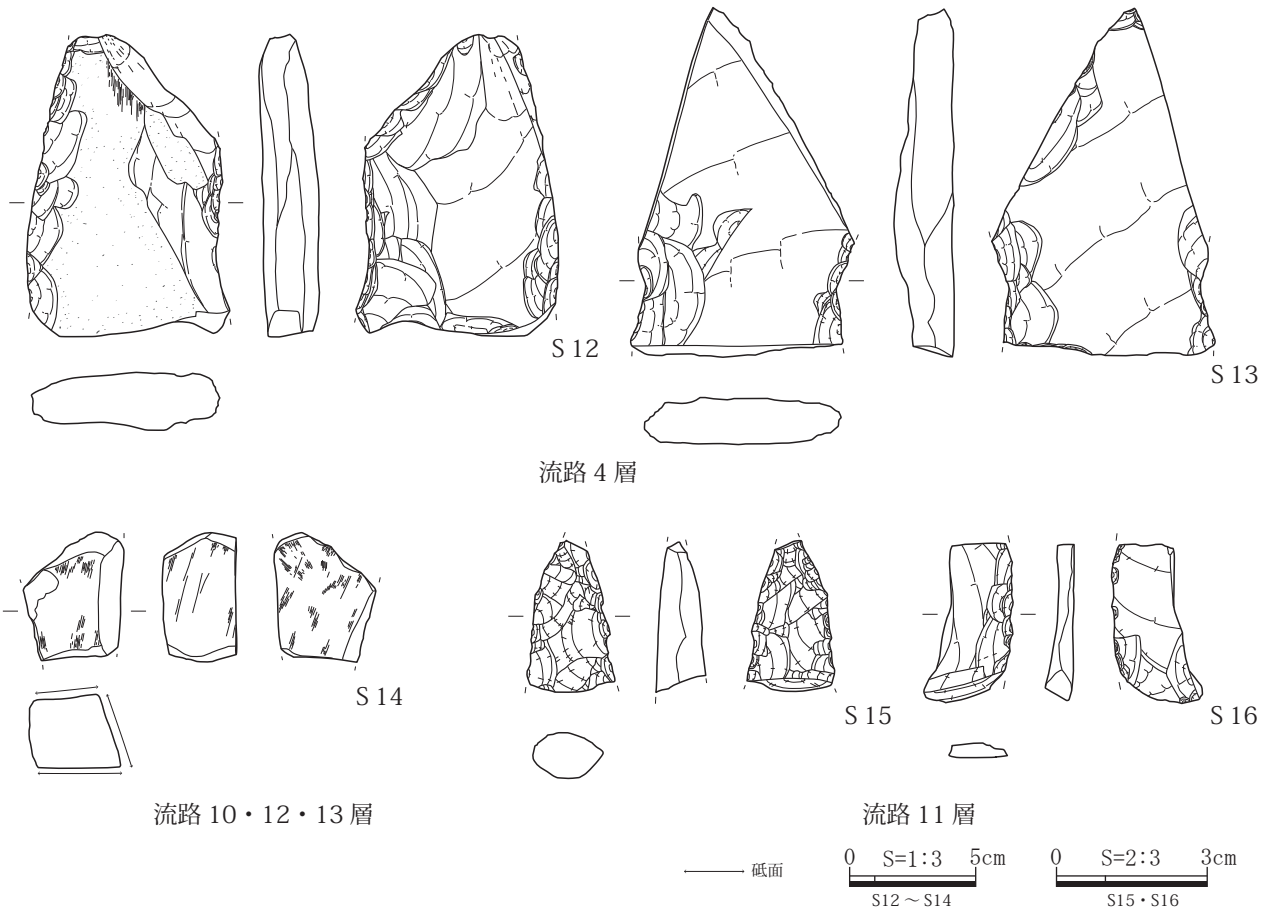
4・10～13層出土遺物を第188図に示している。S12・13は石鋏であり、板状安山岩製のS13は先端と基部を欠損している。板状安山岩製のS12は素材の自然面を広く残し、側縁に二次加工を加える。S14は細粒花崗岩製の砥石で、3面に研磨痕が観察される。S15は先端部と基部が欠損した黒曜石製の尖頭器。周縁の加工は器体中央まで及んでいる。S16は板状安山岩製の二次加工剥片である。

【註】

(1) 倉吉市教育委員会2015『倉吉市内遺跡分布調査報告書18』倉吉市文化財調査報告書第144集

第55表 A1区盛土部遺構計測表

流路		規模(m)			底面の標高(m)	主軸方位	備考
地区	長さ	幅	深さ				
T45-7j-4j-10h 4j-9i・10i 4j-8j-10j 5j-1i・1j T52-7a-4A-8a・9a・8b・9b	25以上	35	1.1	北端：58.57 南端：58.75	N-22°-E	南北に軸を持ち直線的に伸びる、南北側とも調査区外への拡張が想定される、出土遺物(土器)土師器皿Po1～3・10・14・50、土師器杯Po37・38、土師器壺Po42・43、土師器鍋Po6、土師器柱状高台Po11、土師器甕Po12・25・26・33・40・41、土師器製塩土器Po34、土師器高台付皿Po15、土師器高坏脚部Po16・17、瓦質土器鍋Po4・5・7～9、瓦質土器羽釜Po13、須恵器蓋Po18・35、須恵器壺Po19・39、須恵器高台付坏Po20・22、須恵器坏Po21・23・36、須恵器大甕Po24、須恵器円面甕Po28、弥生土器壺Po27、弥生土器甕Po29、ミニチュア土器甕Po30、縄文土器深鉢Po31・32・44～47・49、縄文土器粗製土器Po48、備前播鉢Po51(土製品)土錘CP1、平瓦CP2～12・19、丸瓦CP13～16、分銅形土製品CP17、紡錘車CP18、瓶把手CP20(石器)碁石S1、砥石S2・7・8・14、剥片S3、尖頭器S4・15、有茎尖頭器S10、石鋏S5・6・12・13、大型直縁刃石器S9、二次加工剥片S11・16、(鉄関連)桃形鍛冶滓F1が出土	
溝		規模(m)			底面の標高(m)	主軸方位	備考
No.	地区	長さ	幅	深さ			
1	T52-7a-4A-8a	-	0.30	0.06	59.93	-	トレンチ土層断面図において検出。南北に軸を持ち南北側とも調査区外への拡張が想定される
2	T52-7a-4A-8a	-	0.40	0.13	59.83	-	トレンチ土層断面図において検出。南北に軸を持ち南北側とも調査区外への拡張が想定される



第188図 流路4・10～13層出土遺物

## 第3節 P3区の調査

### 第1項 概要と基本層序

P3区は、A1区盛土部から約110m北北東に位置し、天神野台崖下線からの距離は約40m、台地上からの比高差は約20mを測る(第175図)。調査前の現況は水田である。東に向けて緩やかに下がる本来の地形は、圃場整備によって著しく削平を受け、調査区北西側ではそれがソフトロームまで、東側では基盤層まで及んでいた。したがって、基本層序の認識は調査区北東壁と北西壁をもって行うこととし、以下の基本層序を設定した(第189・190図、図版96・98)。

- I層 近代以降の耕作土と考えられ、調査区北西から南西にかけて堆積が確認された。
- II層 黒褐色シルト(黒ボク)層であり、調査区北西から南西にかけて堆積が確認された。
- III層 灰黄褐色シルト(漸移)層であり、調査区北西から南西にかけて堆積が確認された。
- IV層 黄色シルト(ソフトローム)。

現代造成土及び耕作土を重機で除去し、II・III層上面で古墳時代前期の溝2条、古墳時代前期以前の溝1条を検出した。IV層上面まで掘削を行い遺構が検出されないことを確認し調査を終了した。

### 第2項 検出した遺構と遺物

#### 溝1(第192・194図、第56・58表、図版96・97)

調査区南西寄り、北東-南西方向に延びる。長さ7.0m以上、幅0.5~0.7m、深さ0.22mを測る。北東側は削平を受けて消失し、南西端で溝2に切られる。埋土は黒褐・浅黄色細粒砂~中粒・粗粒砂まじりシルトと黒色細粒砂~中粒砂混じりシルトの3層からなる。

#### 溝2(第192~194図、第56表、図版96・97・106)

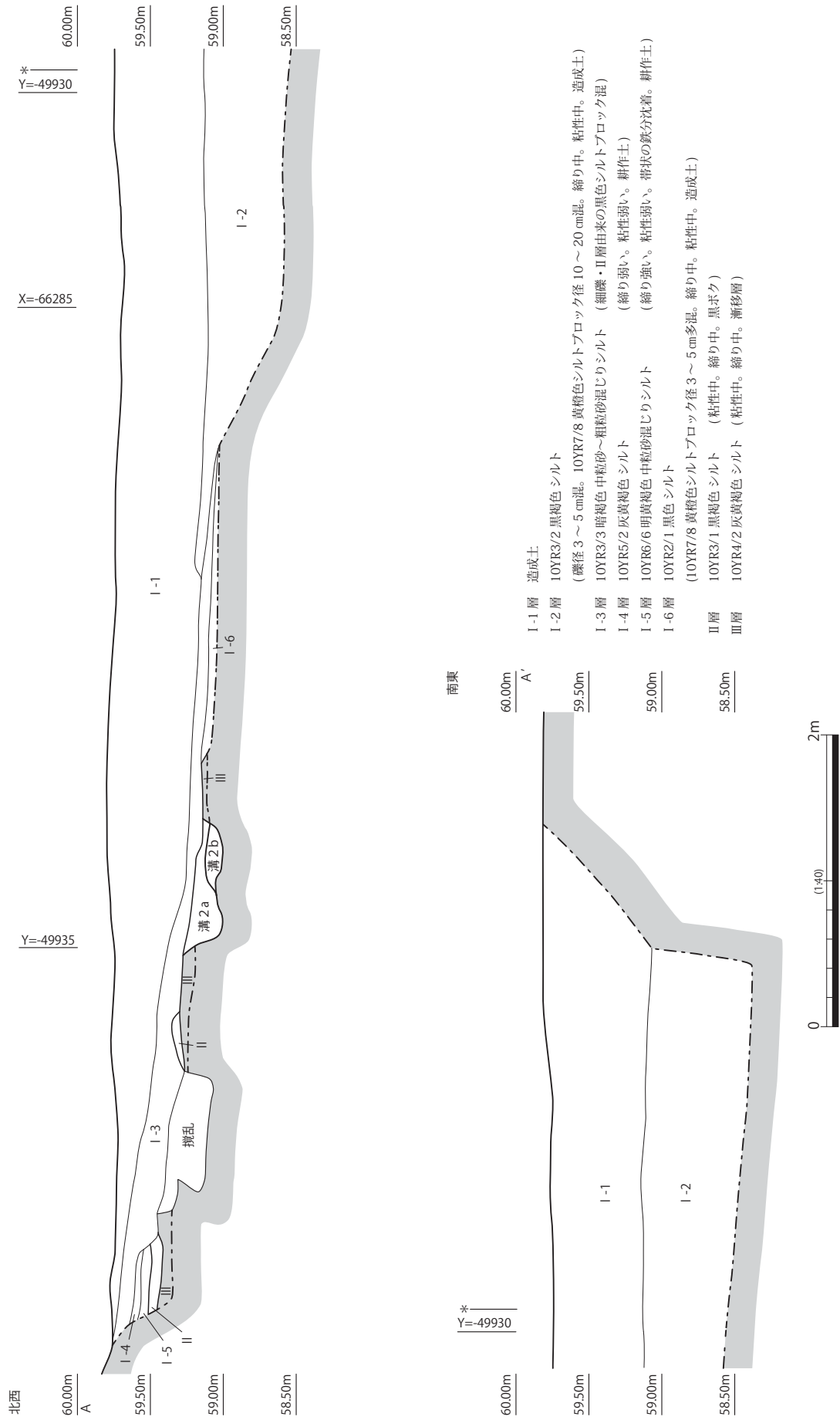
調査区北西寄り、北東-南西方向に延びる。検出段階でほぼ色調が近く1条の溝と判断したが、掘削が進み2条に分かれることが判明したため、溝2a・bに分けて記述する。

溝2aは長さ12m、幅0.6~1.2m、深さ0.24mを測る。溝2bを切っていることから、新旧関係は溝2b→溝2aとなる。埋土は黒褐色細粒砂~粗粒砂混じりシルトが2層堆積する。出土遺物は、土師器甕Po52が埋土中から出土している。口縁部が外反し体部が張る器形で、器壁が薄く、口縁端部に平坦面が作られる。古墳時代前期前葉に相当する。このことから、当遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。

溝2bは長さ12m、幅0.5~1.5m、深さ0.26mを測る。溝2aと交差し切られることから、新旧関係は溝2b→溝2aとなる。また溝1も切っている。埋土は3層に分層され、黒褐色細粒砂~粗粒砂混じりシルトが堆積する。

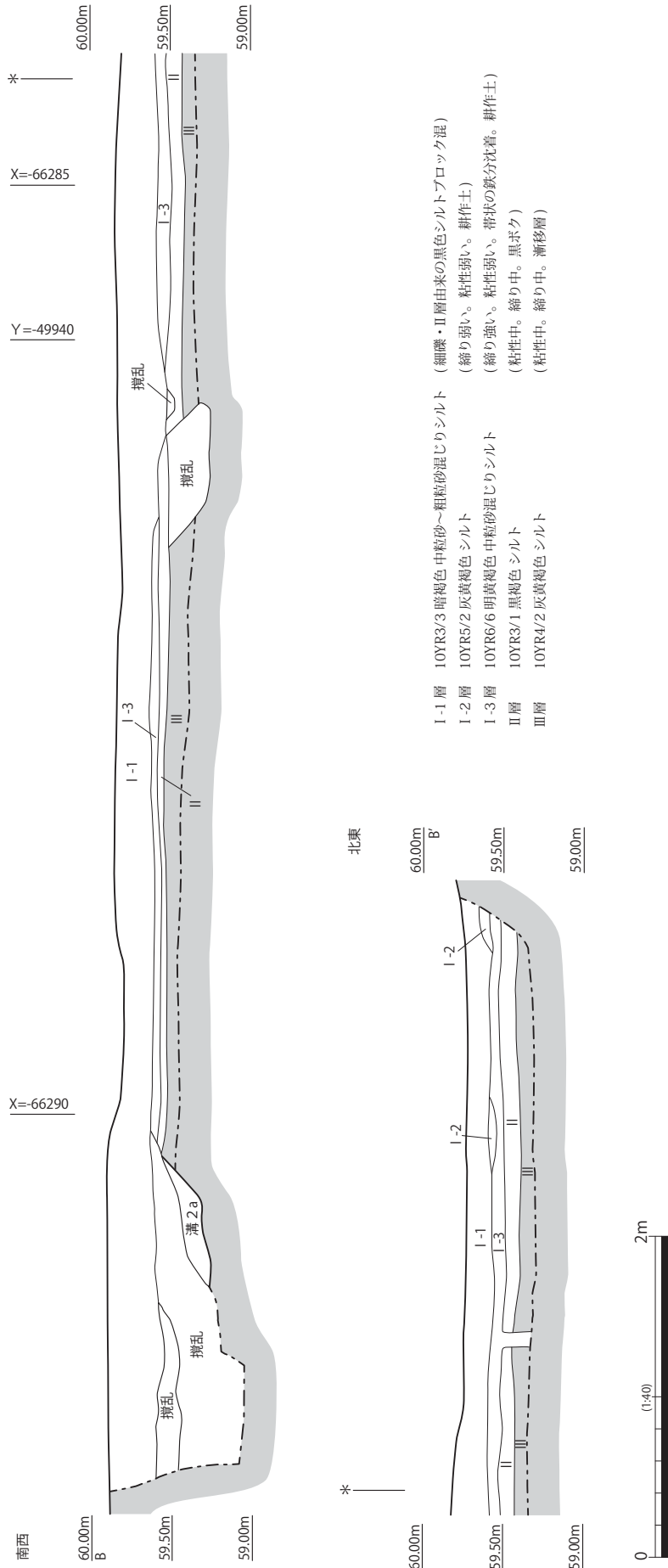
当遺構の時期は、溝2aに切られることから古墳時代前期前葉以前となるが、溝の規模や埋土の特徴からほぼ同時期と推定される。

なお、溝2a・bそれぞれの土壌試料を対象として植物珪酸体分析を行ったところ、わずかである

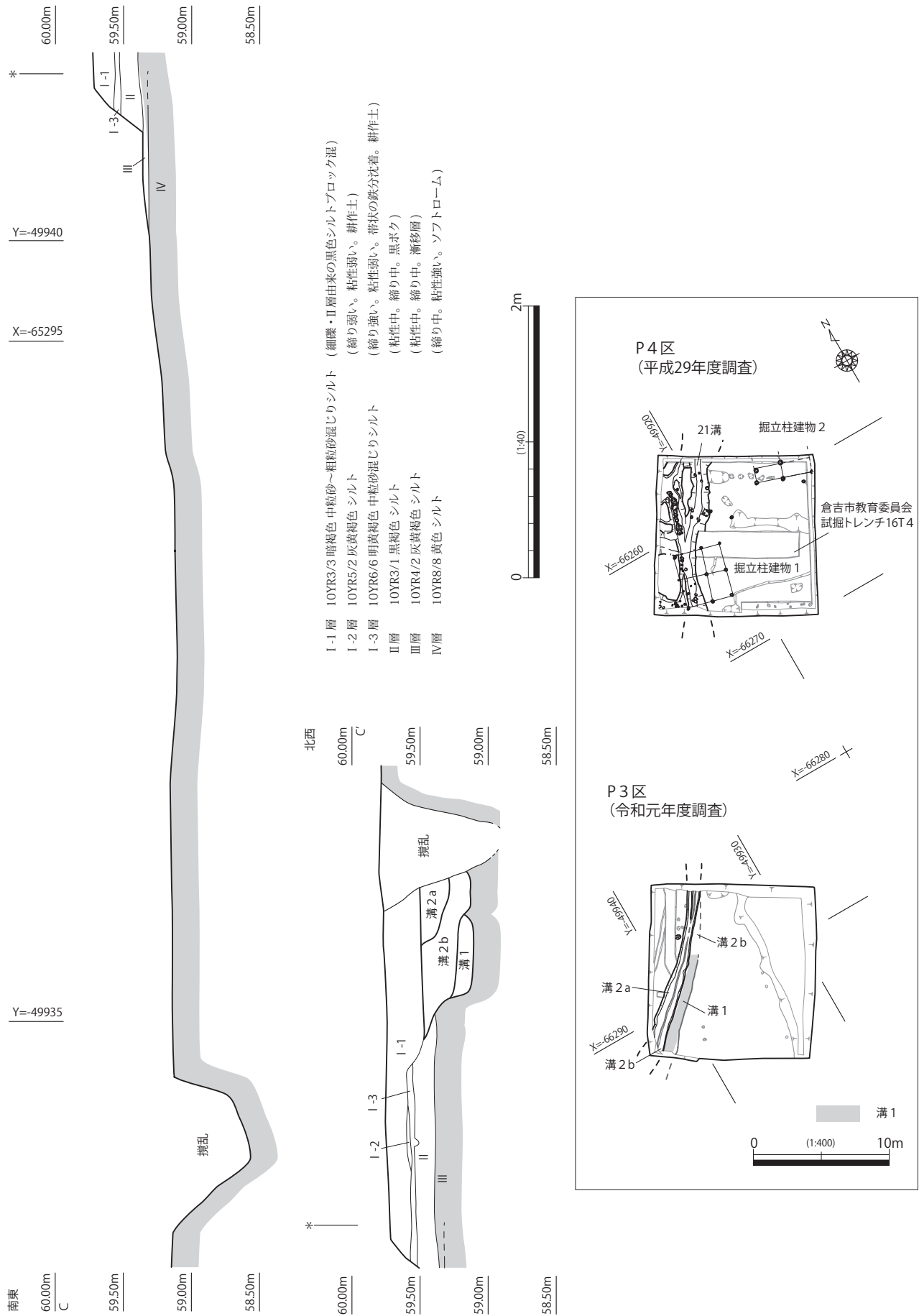


第189図 P3区北東壁土層断面図

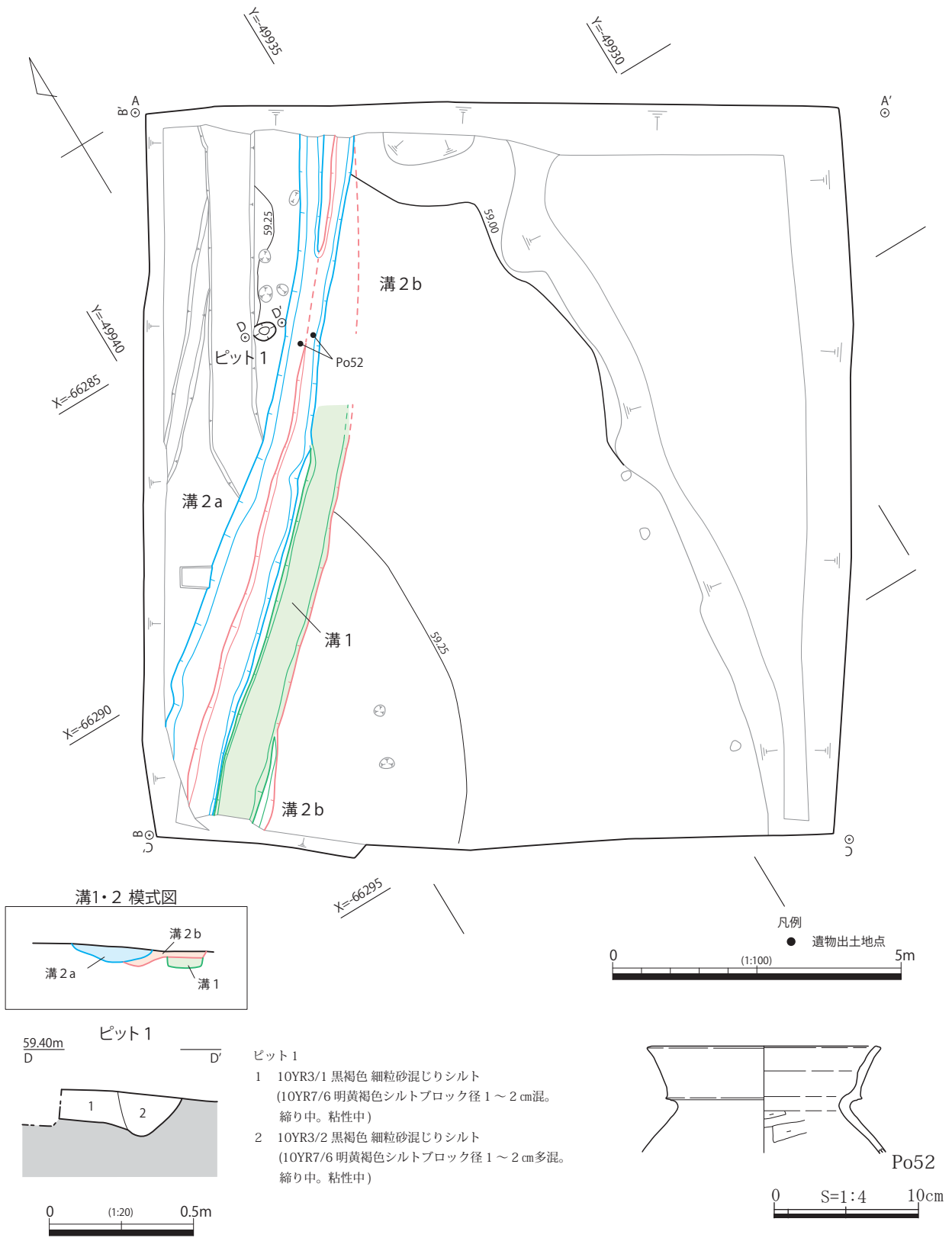




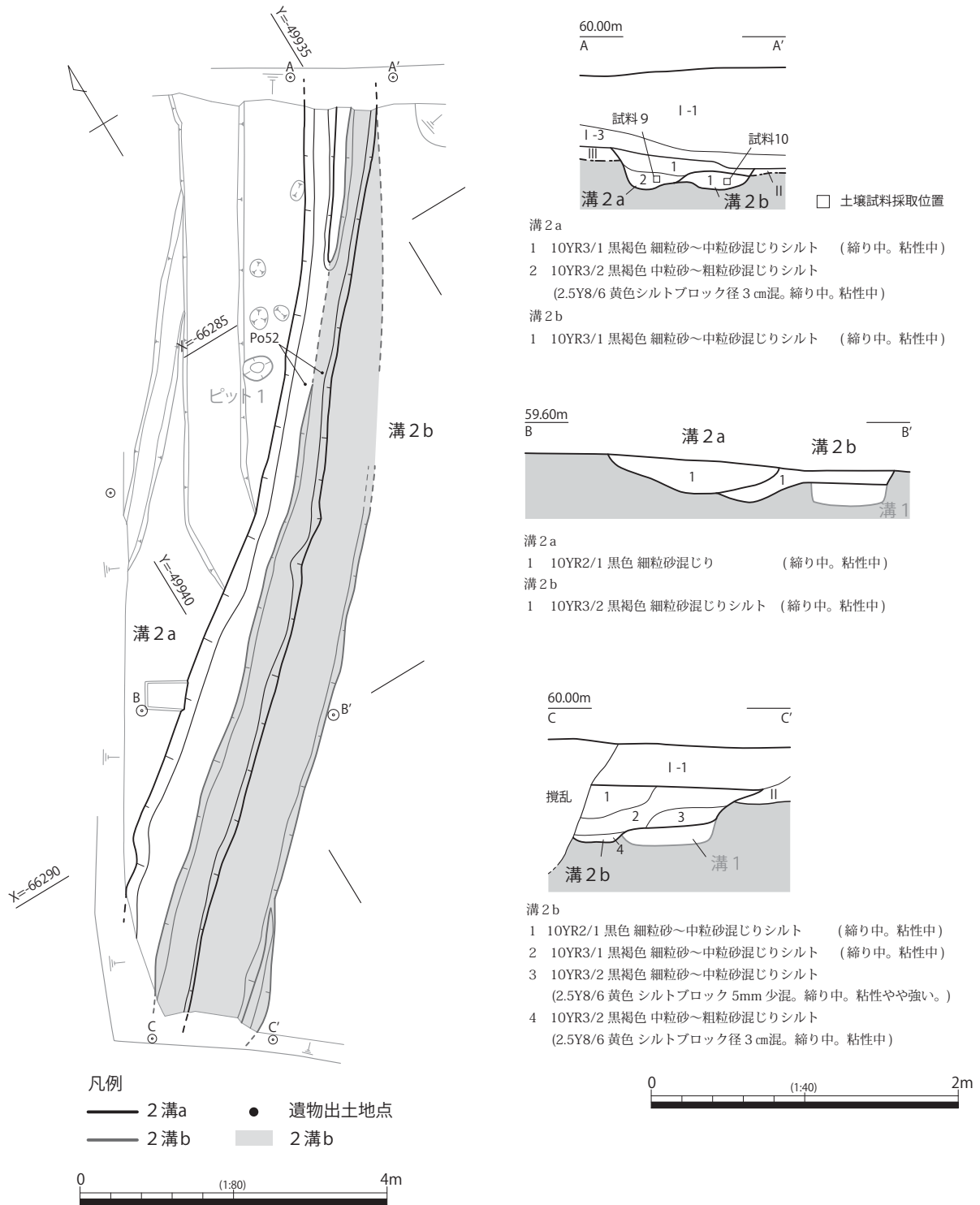
第190図 P3区北西壁土層断面図



第191図 P3区南西壁土層断面図、P3・4区位置図



第192図 溝1・2、ピット1、溝2a出土遺物

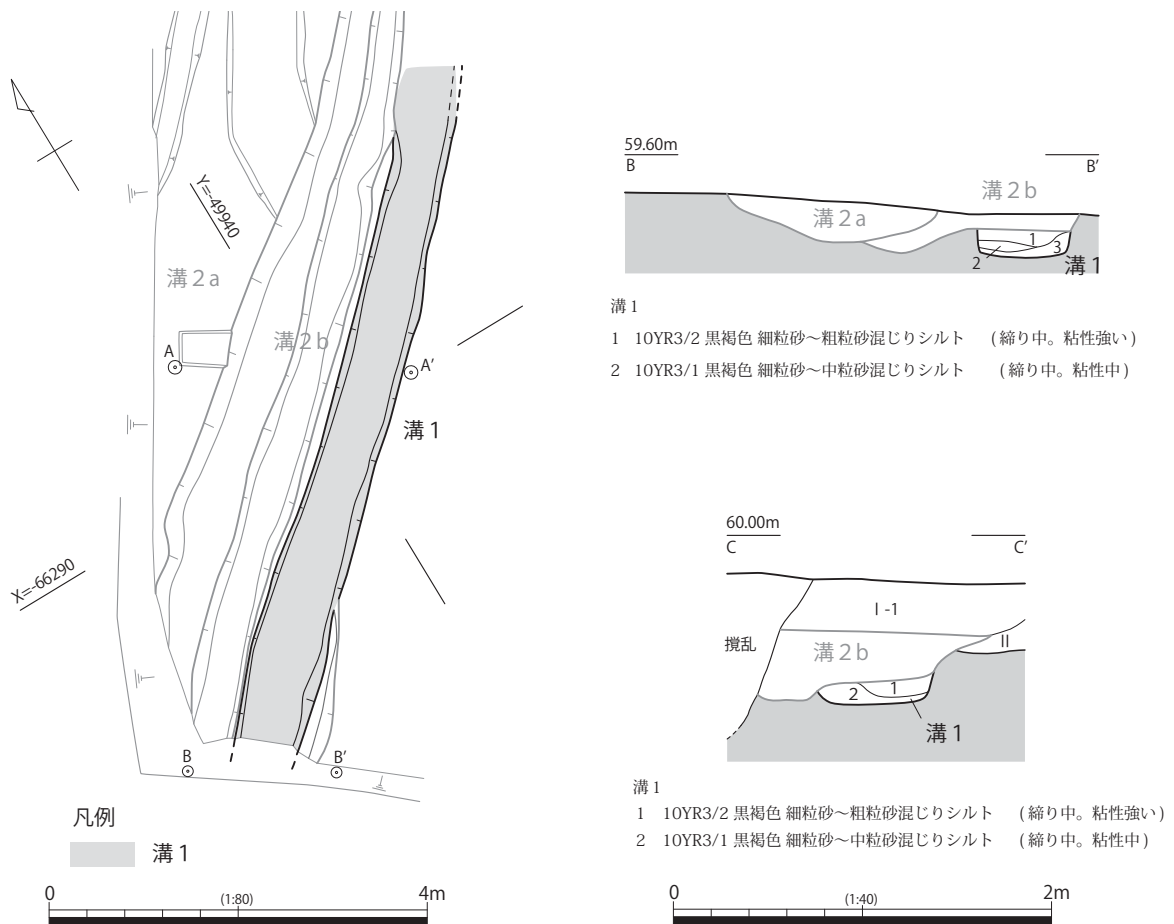
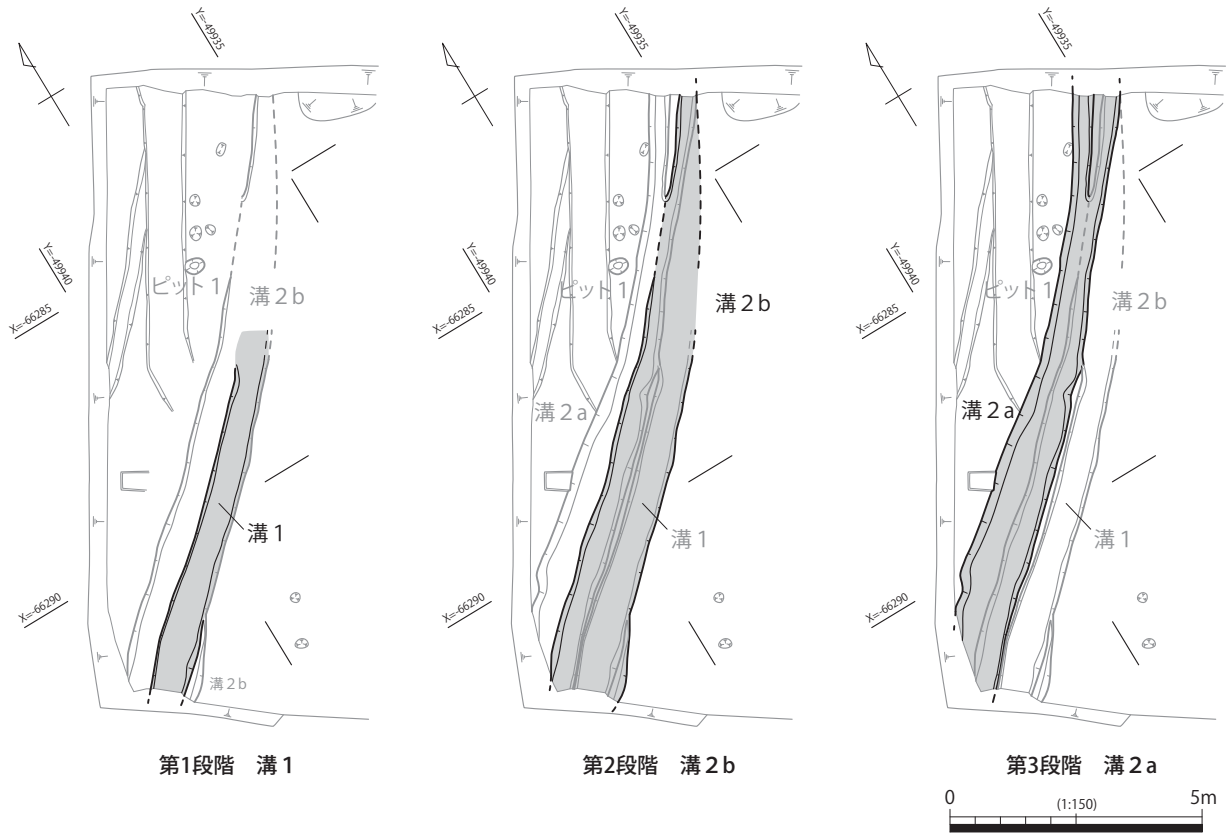


第193図 溝2

が栽培種のイネ属が産出している(第5章第3節参照)。

**ピット 1 (第192図、第56表、図版96・97)**

調査区北西溝 2 aの脇に位置する。残存規模は長軸0.42m、短軸0.3m、深さ0.15mを測る。西端の一部が攪乱溝によって削平されている。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトが堆積し、明黄褐色シルトブロックの多寡で2層に分かれる。



第194図 溝1・2変遷図

第4章 平ノ前遺跡の調査成果

第56表 P3区 遺構計測表

No.	地区T45-7j-	規模(m)			底面の標高(m)	主軸方位	備考
		長さ	幅	深さ			
1	3J-9d・9e、3J-10d・10e	△7.0	△0.5~△0.7	△0.22	北東端：59.09 南西端：59.10	N-46° -E	北東-南西に軸を持ち直線的に伸びる、南西側は調査区外に拡張し北東側は削平され消失する、溝2に切られる
2a	3J-9d・9e、3J-10d・10e	△12.0	0.6~1.2	0.24	北東端：59.02 南西端：59.29	N-44° -E	北東-南西に軸を持ち直線的に伸びる、北東-南西側は調査区外に拡張する、溝2bを切る、土師器甕P652出土
2b	3J-9d・9e、3J-10d・10e	△12.0	△0.5~△1.5	0.26	北東端：59.00 南西端：59.13	N-41° -E	北東-南西に軸を持ち直線的に伸びる、北東-南西側は調査区外に拡張する、北東側は大部分が削平される、溝1を切り溝2aに切られる、

(△：残存値)

No.	地区	規模(m)			備考
		長軸	短軸	深さ	
1	T45-7j-3J-9d	△0.43	0.30	0.15	

(△：残存値)

第4節 遺物観察表

第57表 土器観察表(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区グリッド	調査区	遺構名	層位	種別	法量(cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po1	180	99-1	40	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器皿	22	※11.8	※9.1	外面：横ナデ、底部ヘラケズリ後粗いナデ 内面：口縁部ナデ、横ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	手づくね
Po2	180	99-1	86	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器皿	2.0	※10.4	—	外面：横ナデ、底部ヘラケズリ後粗いナデ 内面：口縁部ナデ、横ナデ	密良好	外面：明黄褐色～灰黄褐色 内面：橙色～ぶい黄褐色	手づくね
Po3	180	99-1	93	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器皿	△2.2	—	—	外面：横ナデ、底部ヘラケズリ 内面：口縁部ナデ、横ナデ	密良好	外面：ぶい黄褐色～明褐色 内面：ぶい黄褐色	手づくね
Po4	180	99-1	50	T45-7j-4J-9j	A1区盛土部	流路	1層	瓦質土器鍋	△3.1	—	—	外面：口縁部横ナデ、粗いナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、口縁部横ナデ、ナデ	密良好	外面：黒褐色 内面：黄灰色	外面に煤附着
Po5	180	99-1	78	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	瓦質土器鍋	△3.2	—	—	外面：横ナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、横ナデ	密良好	外面：黒褐色 内面：浅黄色	外面に煤附着
Po6	180	99-1	86	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器鍋	△3.7	—	—	外面：ナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、ナデ	密良好	内外面ともに灰白色	
Po7	180	99-1	95	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	瓦質土器鍋	△4.1	—	—	外面：口縁部ナデ、ナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、ナデ	密良好	外面：黄灰色～灰黄色 内面：灰黄色	外面に煤附着
Po8	180	99-1	81	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	瓦質土器鍋	△4.8	—	—	外面：口縁部ナデ、ナデ・指オサエ 内面：口縁部横ナデ、ナデ	密良好	内外面とも黄灰色	外面に煤附着
Po9	180	99-1	86 137	T52-7a-4A-9a T45-7j-4J-9j	A1区盛土部	流路	1層	瓦質土器鍋	△9.4	—	—	外面：口縁部横ナデ、粗いナデ・接合痕 内面：口縁部ナデ、口縁部横ナデ、ナデ	密良好	外面：黒褐色 内面：黄灰色	外面に煤附着
Po10	180	99-1	9	—	A1区盛土部	流路	1層	土師器皿	△1.7	—	5.0	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po11	180	99-1	93	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器柱状高台	△2.1	—	※4.5	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：明黄褐色 内面：ぶい黄褐色、ぶい黄褐色	
Po12	180	99-1	21 110	— T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器甕	△4.4	—	—	外面：口縁部ハケメ、頭部指オサエ、粗いナデ 内面：ハケメ	密良好	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：ぶい黄褐色	外面に煤附着
Po13	180	99-1	84	T45-7j-4J-8j	A1区盛土部	流路	1層	瓦質土器羽釜	△4.5	—	—	外面：口縁部横ナデ、突部ナデ、粗いナデ 内面：ナデ	密良好	内外面ともに灰白色	
Po14	180	102-1	21 39	— T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	土師器皿	△2.8	※23.9	—	外面：口縁部横ナデ後ミガキ、ヘラケズリ 内面：横ナデ後ミガキ	密良好	内外面ともに明赤褐色	内外面赤色塗彩
Po15	180	102-1	76	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器高台付坏	△2.7	—	※10.2	外面：横ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：明赤褐色・褐灰色 内面：明赤褐色	内外面赤色塗彩 内面油埋付着
Po16	180	102-1	64	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	土師器高坏脚部	△4.6	—	—	外面：ヘラケズリ後ナデ 内面：ヘラケズリ後ナデ・輪横み痕	密良好	外面：明赤褐色 内面：ぶい黄褐色	外面赤色塗彩
Po17	180	102-1	95	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器高坏脚部	△3.2	—	—	外面：ヘラケズリ・ナデ 内面：ヘラケズリ、ヘラケズリ具押し当て痕	密良好	外面：明赤褐色～ぶい黄褐色 内面：ぶい黄褐色	外面赤色塗彩
Po18	180	102-2	102	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	須恵器蓋	△1.6	—	—	外面：回転ナデ 内面：調整不明	密良好	内外面とも灰色	転用規 内面磨面・墨付着
Po19	180	99-2	94 215	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	須恵器蓋	△2.5	—	※8.0	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：黄灰色・灰黄色 内面：黄灰色	
Po20	180	99-2	103	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	須恵器高台付坏	△1.8	—	—	内外面とも回転ナデ	密良好	外面：灰白色・灰色 内面：灰色	内面坏底部へら記号 あるいは刻書文字
Po21	180	99-2	214	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	須恵器坏	△1.1	—	※9.0	外面：回転ナデ、底部回転系切り 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	
Po22	180	99-2	55	T45-7j-4J-9j	A1区盛土部	流路	1層	須恵器高台付坏	△1.8	—	7.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、坏底部ナデ	密良好	内外面とも灰色	
Po23	180	99-2	64 70	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	須恵器坏	3.5	※13.9	※6.4	外面：回転ナデ、底部回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも褐灰色	
Po24	180	99-2	24	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	須恵器大甕	△8.3	※23.8	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、肩部タタキ	密良好	内外面とも灰白色	
Po25	180	102-3	70 215	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	土師器甕	△4.7	※15.6	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po26	180	102-3	76	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	土師器甕	△6.0	※19.3	—	外面：横ナデ、頭部ナデ 内面：口縁部ナデ、横ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	外面口縁一部に煤付着
Po27	180	102-3	101	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	弥生土器壺	△4.3	—	—	外面：ヘラミガキ後木の葉文 内面：ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po28	183	103-2	135	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	2層	須恵器内面規	△2.1	※12.6	—	外面：回転ナデ、底部ナデ 内面：調整不明	密良好	内外面とも黄灰色	
Po29	183	103-4	132	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	2層	弥生土器甕	△5.7	※17.2	—	外面：口縁部ナデ、ハケ後ナデ 内面：口縁部ナデ、ヘラミガキ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	

第58表 土器観察表(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区グリッド	調査区	遺構名	層位	種別	法量 (cm)			特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
									器高	口径	底径				
Po30	183	103-4	117	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	2層	ミニチュア土器甕	△5.7	※7.2	—	外面：口縁部刻み、ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄色 内面：暗灰黄色	
Po31	183	103-4	130	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	2層	縄文土器深鉢	△3.1	—	—	外面：ナデ、刻目突帯 内面：ナデ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：浅黄褐色	外面突帯部棒状工具押し当て
Po32	183	103-4	168	T45-7j-4J-10j	A1区盛土部	流路	2層	縄文土器深鉢	△5.7	—	—	外面：ナデ、刻目突帯 内面：ナデ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面突帯部棒状工具押し当て
Po33	183	104-3	112 180	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	4層 1層	土師器甕	△9.7	※29.6	—	外面：口縁部横ナデ、ナデ 内面：口縁部ナデ、横ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色～黒色 内面：にぶい黄褐色	
Po34	183	104-2	107	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	4層	土師器製塩土器	△2.1	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ・指オサエ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面とも浅黄褐色	
Po35	183	104-2	112 110	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	4層 1層	須恵器蓋	△2.0	※15.9	—	外面：回転ナデ、一部ナデ 内面：口縁部ナデ、回転ナデ	密良好	内外面とも黄灰色	
Po36	183	104-2	107 217	T52-7a-4A-9a T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	4層 1層	須恵器環	△3.6	※12.1	※9.7	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部ナデ、回転ナデ	密良好	外面：暗灰黄色～黄灰色 内面：黄灰色	
Po37	184	106-1	69	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	5～8層	土師器環	△3.7	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ・暗文	密良好	内外面とも明褐色	暗文
Po38	184	106-1	69	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	5～8層	土師器環	△3.1	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ・暗文	密良好	内外面とも明褐色	暗文
Po39	184	106-2	77	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	5～8層	須恵器壺	△3.1	—	※11.7	外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密良好	内外面とも黄灰色	
Po40	184	106-2	119	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	5～8層	土師器甕	△6.1	※15.5	—	外面：口縁部横ナデ、頭部ナデ 内面：口縁部ナデ、横ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐色～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面口縁部煤付着
Po41	184	106-2	228	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	7・8層	土師器甕	△5.6	※17.3	—	外面：口縁部横ナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、横ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po42	184	105-2	125 189 190 191	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	5～8層	土師器壺	△15.4	※20.0	—	外面：口縁～頸部横ナデ、頸部キザミ、肩～体部ハケス 内面：口縁～頸部横ナデ、肩～体部ケズリ後ナデ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
Po43	184	105-2	119 125 192	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	5～8層	土師器壺	△9.2	—	—	外面：頸部調整不明、肩部ナデ、体部ミガキ 内面：頸部ナデ、肩部シボリ、体部ナデ・輪積み痕	密良好	外面：にぶい黄褐色・灰白色～黄灰色 内面：灰白色	
Po44	184	106-3	172	T45-7j-4J-10i	A1区盛土部	流路	10・12・13層	縄文土器深鉢	△3.1	—	—	外面：口縁部ナデ、刻目突帯棒状工具による押圧、横ナデ 内面：ナデ	密良好	内外面とも黒褐色～灰黄褐色	
Po45	184	106-3	159	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	10・12・13層	縄文土器深鉢	△5.8	—	—	外面：口縁部ナデ、ナゾリ、突帯部ナデ、ケズリ 内面：横ナデ	密良好	外面：橙色～灰黄褐色 内面：橙色	
Po46	184	106-3	159	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	10・12・13層	縄文土器深鉢	△5.9	—	—	外面：口縁部ナデ・突帯ナゾリ、刻目突帯、ケズリ後粗いナデ 内面：ナデ	密良好	内外面とも灰黄褐色	外面煤付着・突帯部指でつまみ上げ
Po47	184	106-3	143	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	10・12・13層	縄文土器深鉢	△6.5	—	—	外面：口縁部ナデ・棒状工具によるナゾリ、刻目突帯(貼付)、粗い横ナデ 内面：ナデ	密良好	内外面とも浅黄色～灰黄色	外面煤付着・突帯部指でつまみ上げ
Po48	184	106-3	227	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	12層	縄文土器粗製土器	△7.0	—	—	内外面ともケズリ後二枚目による粗いナデ	密良好	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：にぶい黄褐色～灰黄褐色	
Po49	184	106-3	226	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	11層	縄文土器深鉢	△6.6	—	—	外面：口縁部ナデ、刻目突帯(貼付)ケズリ後粗いナデ 内面：ヘラ状工具による横ナデ	密良好	外面：浅黄色 内面：黄灰色	外面突帯部指でつまみ上げ
Po50	185	106-5	140	T45-7j-4J-9j	A1区盛土部	—	攪乱土	土師器皿	12	※7.6	※6.0	外面：口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ 内面：口縁部横ナデ、底部ナデ	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	
Po51	185	106-5	87	T45-7j-4J-9j	A1区盛土部	—	攪乱土	備前深鉢	△4.0	—	—	外面：ナデ・指オサエ 内面：口縁部ナデ、ナデ・摺目(8本)	密良好	外面：橙色～浅黄色 内面：浅黄色	
Po52	192	106-6	12 13	T45-7j-3J-9d	P3区	溝2a	埋土	土師器甕	△7.4	※15.6	—	外面：口縁部横ナデ、頭部～肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、口縁部横ナデ、肩部ヘラケズリ後部分的にナデ消し	密良好	内外面ともにぶい黄褐色	

第59表 土製品観察表(1)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区グリッド	調査区	遺構名	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
CP1	180	99-1	11	—	A1区盛土部	流路	1層	土錘	最大長：3.45 最大幅：1.75 最大厚：1.7 重量：8.5	ナデ	密良好	灰黄褐色	裏側欠損
CP2	181	100 101	177	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△11.7 最大幅：△11.2 最大厚：2.4 重量：431.0	上端部：布目、ナデ 凸面：縄目タタキ 凹面：布目	密良好	凸面：にぶい黄褐色 凹面：浅黄褐色～にぶい黄褐色	
CP3	181	100 101	37	T45-7j-4J-10j	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△6.6 最大幅：△8.4 最大厚：2.5 重量：188.0	上端部：布目、ナデ 凸面：縄目タタキ 凹面：布目、面取り・ナデ 側面：ナデ	密良好	凸面：にぶい黄褐色 凹面：浅黄褐色～にぶい黄褐色	
CP4	181	100 101	91	T45-7j-4J-8j	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△11.5 最大幅：△6.1 最大厚：2.4 重量：239.5	凸面：縄目タタキ 凹面：ヘラケズリ	密良好	凸面：にぶい黄褐色 凹面：にぶい黄褐色	
CP5	181	100 101	88	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△13.5 最大幅：△9.5 最大厚：2.5 重量：449.5	上端部：布目、ナデ 凸面：縄目タタキ 凹面：布目、面取り・ナデ 側面：ナデ	密良好	凸面：にぶい黄褐色・灰黄褐色 凹面：にぶい黄褐色	
CP6	181	100 101	181	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△14.0 最大幅：△12.6 最大厚：2.4 重量：583.5	上端部：ナデ 凸面：縄目タタキ後一部ナデ 凹面：布目 側面：ナデ	密良好	凸面：黄灰色 凹面：灰黄色～暗灰黄色	
CP7	181	100 101	179	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△10.3 最大幅：△10.5 最大厚：2.6 重量：441.5	凸面：ナデ、面取り 凹面：布目 下端面：ナデ	密良好	凸面：にぶい黄褐色～暗褐色 凹面：にぶい黄褐色～暗褐色	凸面に炭素吸着
CP8	181	100 101	185	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長：△5.4 最大幅：△9.1 最大厚：2.45 重量：170.0	凸面：ナデ 凹面：布目 下端面：ナデ	密良好	凸面：灰白色～にぶい黄褐色 凹面：浅黄褐色～灰黄褐色	

第4章 平ノ前遺跡の調査成果

第60表 土製品観察表(2)

遺物番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区グリッド	調査区	遺構名	層位	種別	法量 (cm・g)	特徴(調整等)	胎土焼成	色調	備考
CP9	181	100-101	93	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長:△92 最大幅:△85 最大厚:2.1 重量:2010	凸面:ナデ 凹面:布目、ヘラケズリ 側面:ナデ	密良好	凸面:にぶい橙色 凹面:浅黄褐色	
CP10	182	100-101	23	T52-7a-9A-4a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長:△99 最大幅:△122 最大厚:3.0 重量:4225	凸面:正方形格子タタキ 凹面:布目、布目後ヘラケズリ、ヘラケズリ	密良好	凸面:黄灰色~灰黄色 凹面:黄灰色~暗灰黄色	
CP11	182	100-101	182	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長:△67 最大幅:△89 最大厚:2.0 重量:200.0	凸面:正方形格子タタキ 凹面:布目後ヘラケズリ 側面:ナデ、面取り・ナデ	密良好	凸面:灰色 凹面:灰色	
CP12	182	100-101	219	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	平瓦	最大長:△116 最大幅:△42 最大厚:3.6 重量:261.0	上端部:ナデ 凸面:正方形格子タタキ 凹面:布目後ヘラケズリ、面取り・ナデ 側面:ナデ	密良好	凸面:黄灰色~灰白色 凹面:黄灰色~暗灰黄色	
CP13	182	102-4	88	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	丸瓦	最大長:△95 最大幅:△56 最大厚:2.0 重量:161.0	凸面:ヘラケズリ後ナデ 凹面:布目、面取り・ナデ 側面:ナデ	密良好	凸面:灰黄褐色 凹面:にぶい黄褐色	
CP14	182	102-4	81	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	丸瓦	最大長:△54 最大幅:△36 最大厚:1.4 重量:47.0	凸面:ナデ 凹面:布目、ヘラケズリ 側面:ナデ	密良好	凸面:黄灰色 凹面:黄灰色	
CP15	182	102-4	68	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	丸瓦	最大長:△53 最大幅:△31 最大厚:1.65 重量:67.0	凸面:ナデ 凹面:布目、ヘラケズリ 側面:ナデ	密良好	凸面:にぶい黄褐色 凹面:にぶい黄褐色~灰黄褐色	
CP16	182	102-4	95	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	丸瓦	最大長:△30 最大幅:△19 最大厚:1.6 重量:30.0	凸面:ナデ 凹面:布目、面取り・ナデ 側面:ナデ	密良好	凸面:黄灰色 凹面:灰色	
CP17	183	103-3	43	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	2層	分銅形土製品	最大長:△6.4 最大幅:△7.0 最大厚:0.9	表面:丁寧なナデ、ハケ状工具による押引文(4列)・波状文 裏面:丁寧なナデ	密良好	表裏面ともにぶい黄色	表面:赤色塗彩
CP18	183	104-2	218	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	4層	紡錘車	最大長:△325 最大幅:45 最大厚:1.1 重量:129	両面とも剥落のため、調整不明	密良好	にぶい黄褐色~褐灰色	欠損2/5
CP19	183	104-4	112	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	4層	平瓦	最大長:△81 最大幅:△80 最大厚:2.0 重量:166.5	凸面:正方形格子タタキ 凹面:布目後ヘラケズリ	密良好	凸面:浅黄色~黄灰色 凹面:暗灰黄色	
CP20	184	106-2	79	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	5・6・7・8層	甌把手	最大長:△835 最大幅:46 最大厚:4.7	上面:面取り後ナデ・指オサエ 下面:ナデ	密良好	灰黄褐色~にぶい黄褐色	

第61表 石器観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区グリッド	調査区	遺構名	層位	種別	法量法量 (cm・g)				石材	備考
									最大長	最大幅	最大厚	重量		
S1	186	103-1	78	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	礫石	2.2	2.1	0.8	4.1	安山岩	
S2	186	103-1	83	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	礫石	4.8	3.5	0.5	15.5		
S3	186	103-1	104	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	剥片	2.5	2.0	0.8	2.5	黒曜石	
S4	186	103-1	104	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	尖頭器	△2.0	3.8	1.8	12.6	サヌカイト	
S5	186	103-1	106	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	1層	石鍬	△14.2	8.1	2.8	454.5	板状安山岩	
S6	186	103-1	105	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	石鍬	22.0	9.7	3.4	823.0	板状安山岩	
S7	187	104-1	44	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	2層	礫石	△4.0	3.6	3.2	52.6		
S8	187	104-1	45	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	2層	礫石	△7.9	△6.4	3.3	149.0	アブライト	
S9	187	104-1	44	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	2層	大型直縁刃石器	△12.6	6.9	1.7	142.0	板状安山岩	
S10	187	104-1	129	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	2層	有茎尖頭器	△7.0	3.2	0.9	19.0	安山岩	
S11	187	104-1	123	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	2層	二次加工剥片	△2.9	3.4	0.8	9.3	安山岩	
S12	188	105-1	176	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	4層	石鍬	△12.0	8.1	2.4	301.5	板状安山岩	
S13	188	105-1	178	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	4層	石鍬	△13.8	8.9	2.4	293.5	板状安山岩	
S14	188	106-4	197	T45-7j-4J-10j	A1区盛土部	流路	10・12・13層	礫石	△5.1	4.0	3.0	81.0	細粒花崗岩	
S15	188	106-4	161	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	11層	尖頭器	△3.0	1.8	0.9	4.4	黒曜石	上下端欠損
S16	188	106-4	145	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	流路	11層	二次加工剥片	△3.1	△1.8	0.6	2.5	板状安山岩	

第62表 鉄関連遺物観察表

掲載番号	挿図番号	図版番号	取上番号	調査区グリッド	調査区	遺構名	層位	種別	法量法量 (cm・g)				備考
									最大長	最大幅	最大厚	重量	
F1	186	99-1	183	T52-7a-4A-9a	A1区盛土部	流路	1層	桃形鍛冶滓	△7.7	△3.9	3.7	100.5	炉床付着、端部欠損



## 第5章 自然科学分析

### 第1節 山ノ下遺跡出土材の年代測定および樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

鳥取県倉吉市小鴨上古川に所在する山ノ下遺跡では、平安時代から鎌倉時代の集落跡などが確認されている。本分析調査では、建物跡や溝から検出された炭化材を中心とする遺物の年代測定と樹種同定を行い、遺構の年代や用材に関する情報を得る。

#### 第1項 試料

年代測定を行う試料は遺構から検出された炭化材や生材、土器付着炭化物など20点である。分析試料の詳細は第63表に示す。樹種同定用試料は、年代測定用試料のNo.10、No.17、No.19、No.20の4点である。ただし、年代を検討する上で樹種の違いが重要になってくることもあるため、全ての木材について樹種の確認を行っている。各試料の樹種は、第63表に併記する。

#### 第2項 分析方法

##### (1) 樹種同定

生材は、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の切片を作成する。ガムクロラルで封入、光学顕微鏡で観察する。炭化材は、年代測定用にトリミングを行った残滓を用い、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の各切片を作成し、電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

##### (2) 放射性炭素年代測定

生材に関しては、できるだけ年輪の外側で、かつ保存状態の良い場所から適量を採取し、さらに、周囲をトリミングして付着物を除去し、100mg程度に調整する(湿っているため多めに採取する)。炭化材も同様に、適量を採取し、さらに周囲を削り落として50mg程度に調整する(削り落とした部分で樹種を観察する)。土器付着炭化物は、顕微鏡で観察し、状態が良い場所から付着物を50mg程度採取する。

試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・

アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社の vario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)である。

### 第3項 結果

#### (1) 樹種同定(図版107)

結果を第63表に示す。分析対象のNo.10はイヌガヤ、No.17はマツ属複維管束亜属、No.19はイヌガヤ、No.20はスギである。これ以外の年代測定試料に関しても樹種を同定し、第62表に示した。年代測定試料も含めた樹種は、針葉樹3種類(マツ属複維管束亜属、スギ、イヌガヤ)、広葉樹5種類(カバノキ属、コナラ亜属コナラ節、アカガシ亜属、カエデ属、ツバキ属)である。以下に検出された種類の解剖学的特徴を記す。

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylon) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高。

・スギ(Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1~10細胞高。

・カヤ(Torreya nucifera Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にある2本が対をなしたらせん肥厚が特徴である。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型。放射組織は単列で、細胞高が低い(4~5細胞高)ものが多い。

・イヌガヤ(Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道

第63表 樹種同定結果

試料番号	集合遺構名	遺構名	取上番号	性状	樹種	備考
1	掘立柱建物12	3096柱穴	2366	炭化材	アカガシ亜属	
2	〃	3096柱穴	2580	炭化材	コナラ節	
3	〃	746ピット	1010 <sup>**</sup>	生材	スギ	
4	掘立柱建物13	3108柱穴	3040	炭化材	アカガシ亜属	
5	〃	3120柱穴	2948	炭化材	アカガシ亜属	
6	〃	3132柱穴	3056	炭化材	アカガシ亜属	
7	〃	725ピット	933 <sup>**</sup>	生材	スギ	
8	掘立柱建物19	3161柱穴	3266	炭化材	カエデ属	
9	掘立柱建物20	3039柱穴	1898	炭化材	カバノキ属?	
10	〃	3045柱穴	2627	生材	イヌガヤ	
11	〃	3047柱穴	2374	炭化材	アカガシ亜属	
12	-	3010a溝	1694	炭化材	アカガシ亜属	
13	-	3010b溝	2070	炭化材	アカガシ亜属	
14	-	3010b溝	2164	土器付着炭化物	-	第114図 Po369
15	-	3010c溝	2643	炭化材	ツバキ属	
16	-	666溝	473	炭化材	アカガシ亜属	
17	-	3022溝	1826	生材	マツ属複維管束亜属	
18	-	3056土坑	2456	炭化材	カエデ属	
19	-	3228柱穴	4484	生材	イヌガヤ	
20	-	250溝b	4837	生材	スギ	

※平成28年度調査出土

管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部・晩材部双方に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列で、細胞高が低い(4～5細胞高)ものが多い。

・カバノキ属(*Betula*) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有する。壁孔は密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。柔組織はターミナル状および散在状～短接線状。年輪界はやや不明瞭。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・カエデ属(*Acer*) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、単独および2～3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・ツバキ属(*Camellia*) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放

射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

(2)放射性炭素年代測定(第190図、第64・65表、図版108・109)

結果を第64・65表、第195図に示す。土器付着炭化物(No.14)は試料が脆弱でアルカリの濃度を薄く(通常の1万分の1)したが、他の試料は定法での処理を行っている。全ての試料で加速器質量分析装置を用いた年代測定に必要な炭素量が回収できている。同位体補正を行った測定値は、No.1が910±

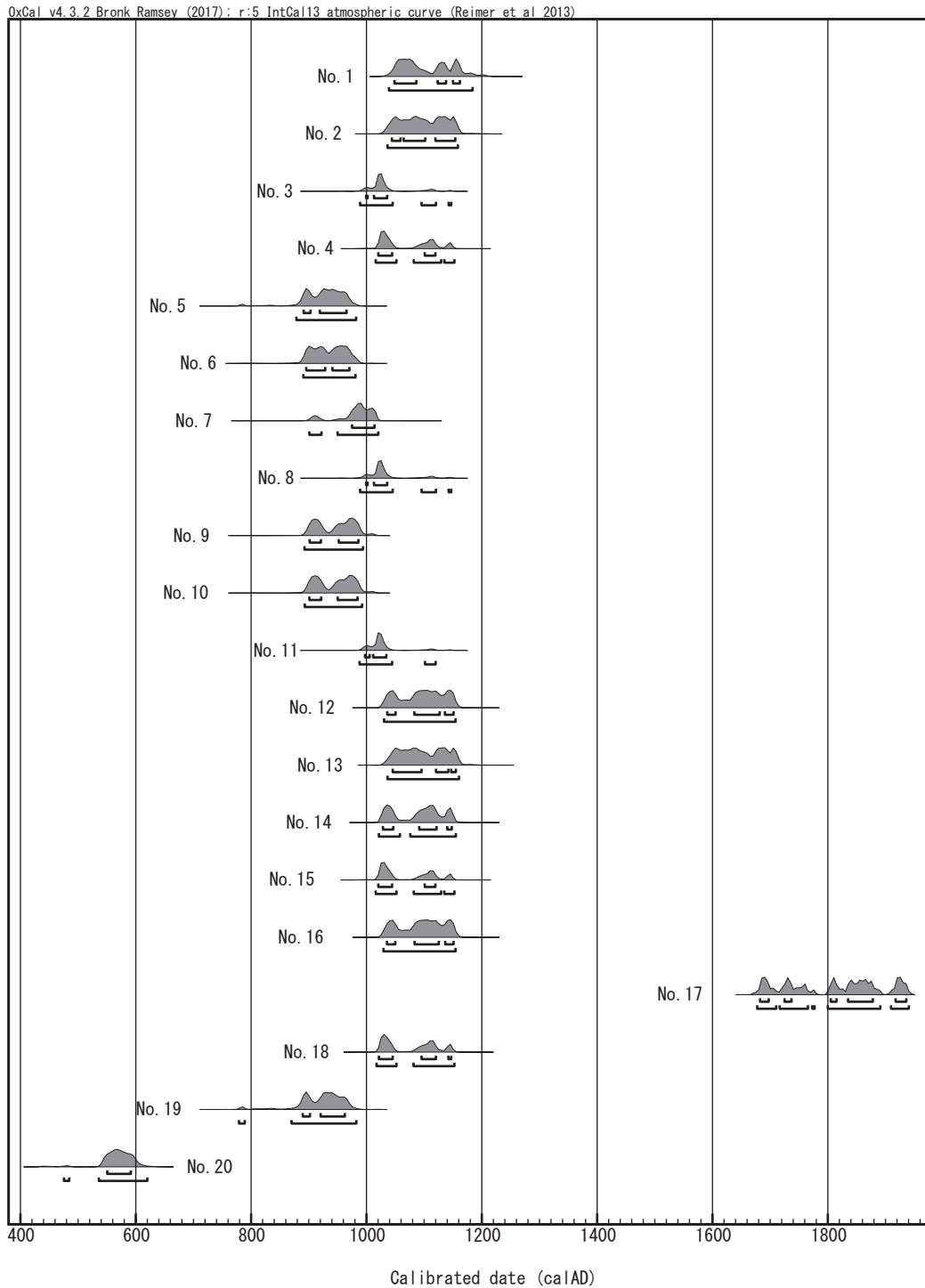
第64表 放射性炭素年代測定結果(1)

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代			Code No.		
					年代値		確率 %			
1	炭化材	AAA (1M)	910 ± 20 (908 ± 20)	-27.97 ± 0.53	$\sigma$	calAD1048-calAD1086 calAD1123-calAD1138 calAD1150-calAD1162	902-864calBP 827-813calBP 801-789calBP	42.4 13.5 12.3	YU- 9154	pal- 11944
					$2\sigma$	calAD1039-calAD1184	912-767calBP	95.4		
2	炭化材	AAA (1M)	925 ± 20 (927 ± 20)	-26.09 ± 0.44	$\sigma$	calAD1044-calAD1059 calAD1064-calAD1102 calAD1119-calAD1154	907-892calBP 886-849calBP 831-797calBP	12.4 27.5 28.4	YU- 9155	pal- 11945
					$2\sigma$	calAD1036-calAD1158	914-792calBP	95.4		
3	生材	AAA (1M)	1000 ± 20 (999 ± 20)	-26.53 ± 0.41	$\sigma$	calAD999-calAD1002 calAD1013-calAD1036	951-949calBP 938-915calBP	2.5 65.7	YU- 9156	pal- 11946
					$2\sigma$	calAD989-calAD1045 calAD1095-calAD1120 calAD1142-calAD1147	962-905calBP 855-830calBP 808-804calBP	86.7 7.8 0.9		
4	炭化材	AAA (1M)	975 ± 20 (977 ± 20)	-28.60 ± 0.60	$\sigma$	calAD1020-calAD1044 calAD1101-calAD1119	930-906calBP 850-831calBP	46.6 21.6	YU- 9157	pal- 11947
					$2\sigma$	calAD1016-calAD1052 calAD1082-calAD1129 calAD1135-calAD1152	935-899calBP 869-821calBP 816-798calBP	51.2 35.0 9.2		
5	炭化材	AAA (1M)	1130 ± 20 (1130 ± 20)	23.79 ± 0.50	$\sigma$	calAD891-calAD903 calAD919-calAD965	1060-1048calBP 1032-985calBP	14.0 54.2	YU- 9158	pal- 11948
					$2\sigma$	calAD878-calAD982	1072-969calBP	95.4		
6	炭化材	AAA (1M)	1115 ± 20 (1116 ± 20)	-27.87 ± 0.51	$\sigma$	calAD895-calAD928 calAD941-calAD970	1055-1022calBP 1010-980calBP	35.2 33.0	YU- 9159	pal- 11949
					$2\sigma$	calAD890-calAD981	1060-970calBP	95.4		
7	生材	AAA (1M)	1065 ± 20 (1065 ± 20)	-25.37 ± 0.34	$\sigma$	calAD975-calAD1014	976-937calBP	68.2	YU- 9160	pal- 11950
					$2\sigma$	calAD901-calAD922 calAD950-calAD1020	1050-1029calBP 1001-930calBP	10.2 85.2		
8	炭化材	AAA (1M)	1000 ± 20 (999 ± 20)	-26.57 ± 0.43	$\sigma$	calAD999-calAD1002 calAD1013-calAD1036	951-949calBP 938-915calBP	2.5 65.7	YU- 9161	pal- 11951
					$2\sigma$	calAD989-calAD1045 calAD1095-calAD1120 calAD1142-calAD1147	962-905calBP 855-830calBP 808-804calBP	86.7 7.8 0.9		
9	炭化材	AAA (1M)	1095 ± 20 (1094 ± 20)	-24.11 ± 0.37	$\sigma$	calAD901-calAD921 calAD952-calAD986	1049-1030calBP 999-965calBP	25.5 42.7	YU- 9162	pal- 11952
					$2\sigma$	calAD892-calAD994	1058-957calBP	95.4		
10	生材	AAA (1M)	1095 ± 20 (1096 ± 20)	-24.56 ± 0.55	$\sigma$	calAD901-calAD921 calAD950-calAD984	1050-1029calBP 1001-966calBP	26.3 41.9	YU- 9163	pal- 11953
					$2\sigma$	calAD893-calAD992	1058-958calBP	95.4		
11	炭化材	AAA (1M)	1000 ± 20 (1002 ± 20)	-23.39 ± 0.36	$\sigma$	calAD997-calAD1005 calAD1011-calAD1034	953-945calBP 939-916calBP	8.6 59.6	YU- 9164	pal- 11954
					$2\sigma$	calAD988-calAD1044 calAD1101-calAD1120	963-906calBP 849-831calBP	90.5 4.9		
12	炭化材	AAA (1M)	940 ± 20 (941 ± 20)	-25.59 ± 0.44	$\sigma$	calAD1036-calAD1050 calAD1083-calAD1127 calAD1136-calAD1151	915-900calBP 868-824calBP 815-800calBP	13.0 41.2 13.9	YU- 9165"	pal- 11955
					$2\sigma$	calAD1030-calAD1154	920-796calBP	95.4		

第65表 放射性炭素年代測定結果(2)

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代			Code No.		
						年代値	確率 %			
13	炭化材	AAA (1M)	925 ± 20 (924 ± 20)	-25.95 ± 0.37	$\sigma$	calAD1045-calAD1095 calAD1120-calAD1142 calAD1147-calAD1155	905-855calBP 830-809calBP 804-796calBP	42.4 19.1 6.7	YU- 9166	pal- 11956
					$2\sigma$	calAD1036-calAD1160	914-790calBP	95.4		
14	土器 付着 炭化物	AaA (00001M)	955 ± 20 (957 ± 20)	-19.22 ± 0.40	$\sigma$	calAD1028-calAD1046 calAD1091-calAD1121 calAD1140-calAD1148	922-904calBP 859-829calBP 811-803calBP	23.0 36.5 8.7	YU- 9167	pal- 11957
					$2\sigma$	calAD1021-calAD1058 calAD1076-calAD1155	929-893calBP 875-796calBP	30.5 64.9		
15	炭化材	AAA (1M)	975 ± 20 (977 ± 20)	-21.74 ± 0.35	$\sigma$	calAD1020-calAD1044 calAD1101-calAD1119	930-906calBP 850-831calBP	46.6 21.6	YU- 9168	pal- 11958
					$2\sigma$	calAD1016-calAD1052 calAD1082-calAD1129 calAD1135-calAD1152	935-899calBP 869-821calBP 816-798calBP	51.2 35.0 9.2		
16	炭化材	AAA (1M)	940 ± 20 (942 ± 20)	-27.51 ± 0.41	$\sigma$	calAD1035-calAD1050 calAD1083-calAD1125 calAD1136-calAD1151	915-901calBP 867-825calBP 814-800calBP	13.5 40.9 13.8	YU- 9169	pal- 11959
					$2\sigma$	calAD1029-calAD1154	921-796calBP	95.4		
17	生材	AAA (1M)	135 ± 20 (134 ± 20)	-26.52 ± 0.49	$\sigma$	calAD1682-calAD1697 calAD1725-calAD1737 calAD1805-calAD1815 calAD1835-calAD1878 calAD1917-calAD1936	268-253calBP 226-214calBP 146-136calBP 116-73calBP 33-15calBP	11.4 8.3 7.0 28.1 13.5	YU- 9170	pal- 11960
					$2\sigma$	calAD1677-calAD1710 calAD1716-calAD1765 calAD1773-calAD1777 calAD1800-calAD1891 calAD1909-calAD1940	273-240calBP 234-185calBP 178-174calBP 151-60calBP 41-10calBP	15.6 20.1 0.8 42.8 16.1		
18	炭化材	AAA (1M)	970 ± 20 (972 ± 20)	-27.60 ± 0.52	$\sigma$	calAD1021-calAD1045 calAD1095-calAD1120 calAD1142-calAD1147	929-905calBP 855-830calBP 809-804calBP	37.3 26.7 4.3	YU- 9171	pal- 11961
					$2\sigma$	calAD1017-calAD1052 calAD1081-calAD1152	933-899calBP 869-798calBP	44.5 50.9		
19	生材	AAA (1M)	1135 ± 20 (1134 ± 20)	-25.82 ± 0.50	$\sigma$	calAD889-calAD902 calAD920-calAD962	1061-1049calBP 1030-988calBP	15.8 52.4	YU- 9172	pal- 11962
					$2\sigma$	calAD779-calAD789 calAD870-calAD982	1172-1162calBP 1081-968calBP	1.6 93.8		
20	生材	AAA (1M)	1500 ± 20 (1501 ± 20)	-21.76 ± 0.37	$\sigma$	calAD550-calAD591	1400-1359calBP	68.2	YU- 9173	pal- 11963
					$2\sigma$	calAD475-calAD484 calAD536-calAD620	1475-1466calBP 1415-1331calBP	0.9 94.5		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、Intcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ が68.2%、 $2\sigma$ が95.4%である



第195図 暦年較正結果

20BP、No. 2 が $925 \pm 20$ BP、No. 3 が $1,000 \pm 20$ BP、No. 4 が $975 \pm 20$ BP、No. 5 が $1,130 \pm 20$ BP、No. 6 が $1,115 \pm 20$ BP、No. 7 が $1,065 \pm 20$ BP、No. 8 が $1,000 \pm 20$ BP、No. 9 が $1,095 \pm 20$ BP、No.10が $1,095 \pm 20$ BP、No.11が $1,000 \pm 20$ BP、No.12が $940 \pm 20$ BP、No.13が $925 \pm 20$ BP、No.14が $955 \pm 20$ BP、No.15が $975 \pm 20$ BP、No.16が $940 \pm 20$ BP、No.17が $135 \pm 20$ BP、No.18が $970 \pm 20$ BP、No.19が $1,135 \pm 20$ BP、No.20が $1,500 \pm 20$ BPである。

暦年較正は、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、その後訂正された半減期( $^{14}\text{C}$ の半減期

5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、Intcal13 (Reimer et al.,2013)を用いる。2σの値は、No.1がcalAD1,039~1,184、No.2がcalAD1,036~1,158、No.3がcalAD989~1,147、No.4がcalAD1,016~1,152、No.5がcalAD878~982、No.6がcalAD890~981、No.7がcalAD901~1,020、No.8がcalAD989~1147、No.9がcalAD892~994、No.10がcalAD893~992、No.11がcalAD988~1,120、No.12がcalAD1,030~1,154、No.13がcalAD1,036~1,160、No.14がcalAD1,021~1,155、No.15がcalAD1,016~1,152、No.16がcalAD1,029~1,154、No.17がcalAD1,677~1,940、No.18がcalAD1,017~1,152、No.19がcalAD779~982、No.20がcalAD475~620である。

#### 第4項 考察

樹種同定対象となっている試料は、No.10、No.19はイヌガヤ、No.17はマツ属複維管束亜属、No.20はスギである。伊東・山田編(2012)の木材データベースで、山陰地方の出土状況をみても上記の種類はいずれも複数の遺跡で検出されている。

イヌガヤの木材は緻密で硬く、粘りがある。カヤよりはやや劣るが耐久性にも優れる。上記のデータベースでは、山陰地方では比較的小さな道具を作るのに用いられている例が多い。成長が遅く、太い木材が得られにくいのが理由と思われる。

マツの木材は針葉樹材の中では重硬、強靱で、油脂分が多い。このため、建築材、土木材のほか、家具、建具、農機具等用途は広い。マツ属複維管束亜属は成長が早く痩せ地でも育つため、伐採地等人の手が加わった山野に先駆的に進入してマツ林を構成する。また土地条件が悪い場所に耐性があり、尾根沿いなどによくみられる。さらに、上記のような性質から、人家や城郭の周りに植えられることも多い。年代測定の結果、No.17は近世以降の年代値を示し、発掘所見でも同様である。山陰地方では、近世にはマツが増加していたことが花粉分析の結果から明らかになっており(三好,1998など)、マツ材の検出は調和的である。

スギは比重、強度は中庸であるが、割裂性がよく、加工が容易である。スギは建築の構造材、建具などに使用されるほか、芳香があり加工しやすい特徴を生かして、樽、桶、箸などにも使われる。このようにスギは、材質に硬さが必要な用途(農具の柄など)以外において、様々な用途で使われる。伊東・山田編(2012)の木材データベースによる県内の出土例をみると、山陰地方では弥生時代以降、全ての時代でスギが多用されている。スギは、現在では植栽を除けば山沿いの谷筋などに分布することが多いが、埋没林や遺跡出土材の調査によって、かつては扇状地や低地などにも分布していたことが明らかになっている(鈴木,2002)。このことから、当時は比較的周辺で得やすい木材の一つであったと考えられる。

なお、年代測定を行った建物跡の生材2点(No.3とNo.7)はいずれもスギであった。また、炭化材は全て広葉樹であり、5種類の炭化材(カバノキ属、コナラ亜属コナラ節、アカガシ亜属、カエデ属、ツバキ属)は、林縁など人里近くに生育することから、周囲から得やすい木材を採取し、燃料材等として利用したと思われる。

建物跡は、現地所見では13、19が第1段階、12と20が第2段階と考えられている。しかし、年代測定の結果では、13と20が10世紀頃、12と19が11~12世紀前半の試料が中心となっている。ただし、13

と20にも11～12世紀頃の値を示す試料が混じっており、現地所見と必ずしも異なっているとはいえない。特に13では建て替えが行われたと考えられていることから、これが影響している可能性もある。なお、生材(No.3、No.7、No.10)はいずれも針葉樹である。これらは寿命が長いことから、中心部分を測定すると年代が古くなる可能性もあるが、今回は他の広葉樹と比べてみると、このような効果(古木効果)があったとは考えにくい。

溝及び土坑の結果は、3010溝(No.12～15)、666溝(No.16)、3056土坑(No.18)ともに11～12世紀前半の年代値を示し、現地所見と調和的である。3010a～3010c溝はほぼ同年代を示し、年代測定から時期差を考えることは難しい。

No.17(3022溝)は所見の通り近世以降の年代値が得られている。暦年較正值の年代幅が広く、一部は現代近く(1950年)まで及ぶ。これは織豊期～現代にかけて較正データの変動が大きく、較正曲線がジグザクなっているために起こる現象である。

No.19(3228柱穴)は10世紀頃の年代を示し、建物跡13や20の一部試料と年代値に近い。No.20(250溝b)は6世紀頃の年代値を示し、他の試料より古い。樹種がスギであるため、長い樹齢の心材部分であるとすれば、古木効果により年代が古くなった可能性もある。

#### 引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.

林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.

三好教夫,1998,中国・四国地方の植生史.図説 日本列島植生史,安田喜憲・三好教夫編,朝倉書店,p.138-150.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafliðason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton T.J., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

鈴木三男,2002,日本人と木の文化.八坂書房,255p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .



## 第2節 山ノ下遺跡出土の金属製品の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

鳥取県倉吉市小鴨上古川に所在する山ノ下遺跡では、平安時代から鎌倉時代の集落跡などが確認されている。掘立柱建物群の西側に位置する3010溝では、廃棄された数多くの土器が出土しており、その中には金属製品も含まれる。遺構年代は、出土土器から平安時代後期から鎌倉時代と見られるが、溝自体は4段階の変遷が確認される。

本分析調査では、最古段階の溝の埋土から出土した性格不明の金属製品の材質に関する情報を得ることを目的とし、蛍光X線分析による非破壊調査を実施する。

### 第1項 試料

試料は、金属製品(3010d溝 Sn1)の1点である。全体がやや湾曲している金属片で、表面には埋土の付着が残る。長軸辺の片側は破面とはなっておらず、厚みはかなり薄い。電子顕微鏡を用いた破断面の測長では、厚さはおよそ0.2mm(196.4~208.4 $\mu$ m)である。

### 第2項 分析方法

蛍光X線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であり、エネルギー分散型装置(EDX)は、試料を破壊せずに元素情報を引き出せるため多用される調査法である。表面分析法であるために、遺物表面の状況によって結果が大きく左右され、遺物表面が腐食している場合には遺物本来の元素組成を求めることが難しいが、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は遺物の構成元素を知るためには極めて有効な手法となる。

本調査は、非破壊を前提とした材質調査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や腐食生成物の除去を行わず、調査に供する。材質調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ(株)製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)である。本装置は、下面照射型の装置であり、X線管球はRh、コリメーターサイズは10mm $\phi$ である。測定条件の詳細は結果とともに図中に掲げる。なお、試料写真に示した赤枠が今回測定を行ったおよその測定箇所である。

### 第3項 結果および考察

蛍光X線定性スペクトルを第196図に示す。

検出された元素は、Fe(鉄),Cu(銅),As(ヒ素),Ag(銀),Sn(錫),Pb(鉛)である。このうち、鉄は表面に残る埋土によるところが大きいと思われる。試料表面に埋土や腐食生成物が残るため、定量的評価は避けるが、スペクトルを見る限りでは錫を主とし、銅を伴う。あくまでも成分比の目安としてであるが、FP法を用いたスタンダードレス分析による演算を行ったところでは、Sn:71.94%,Cu:18.41%

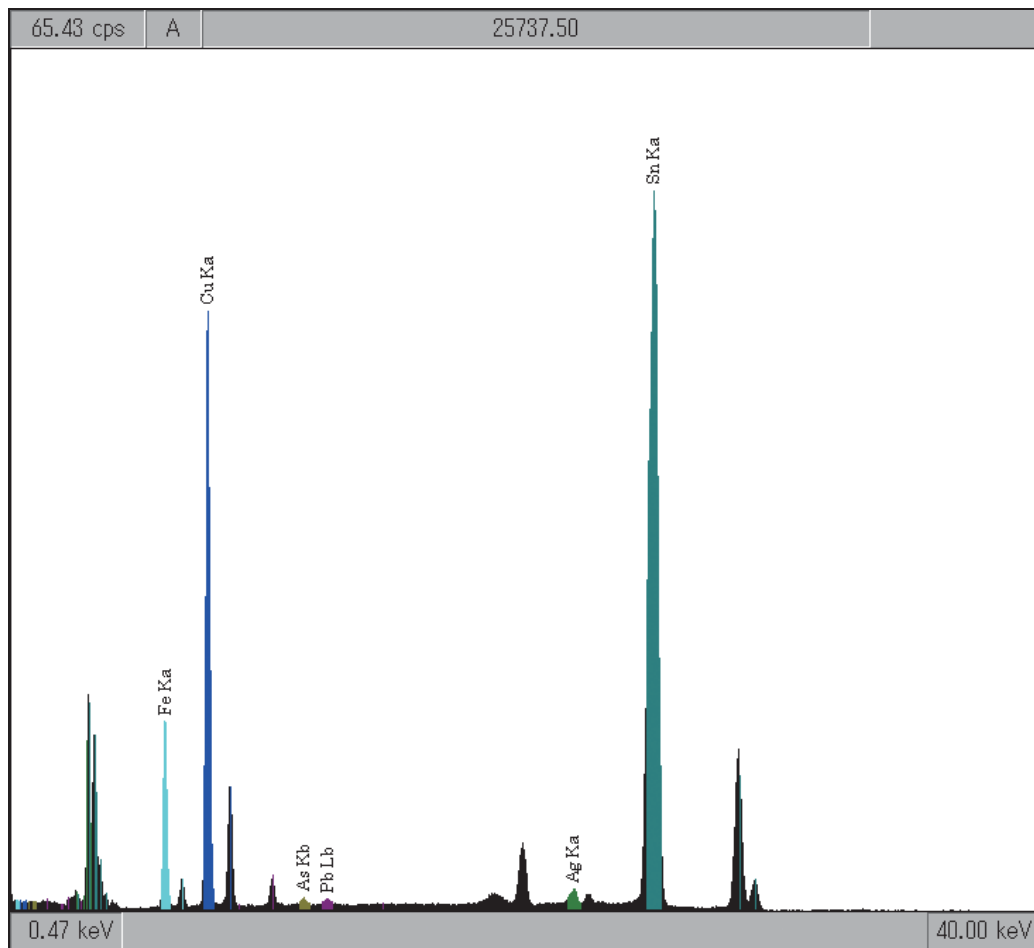
[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	11
フィルタ	なし
マイラー	OFF

[試料写真]



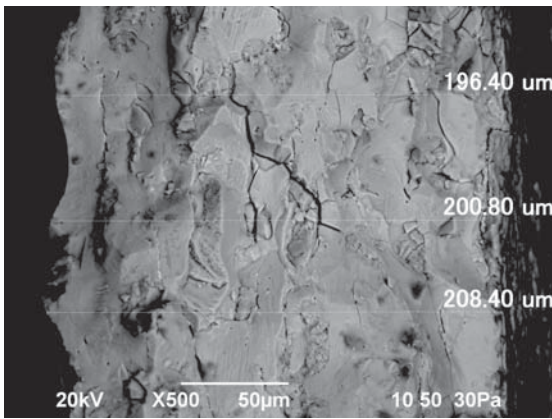
[スペクトル]



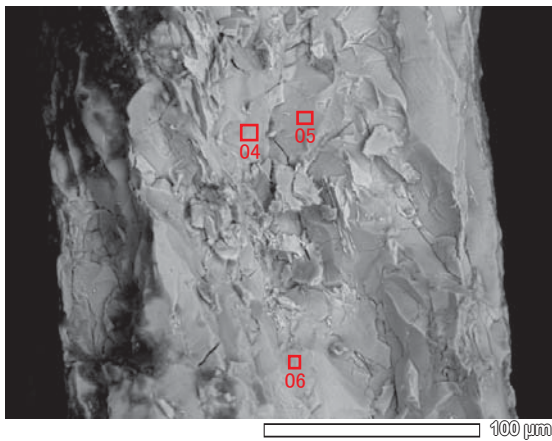
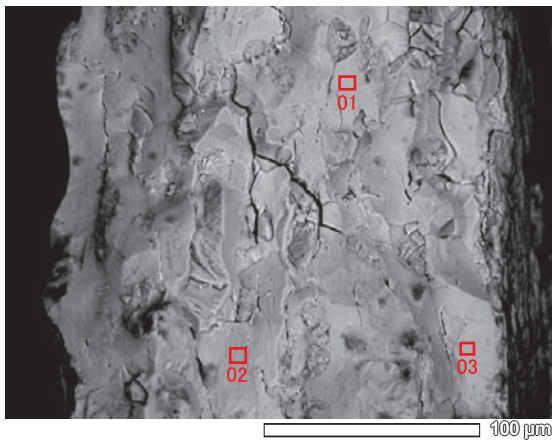
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	120.107	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	407.829	7.87- 8.21
33	As	ヒ素	Kβ	13.362	11.53-11.92
47	Ag	銀	Kα	28.468	21.85-22.35
50	Sn	スズ	Kα	1004.747	24.93-25.46
82	Pb	鉛	Lβ	13.562	12.43-12.82

第196図 金属製品(Sn 1)の蛍光X線定性スペクトル



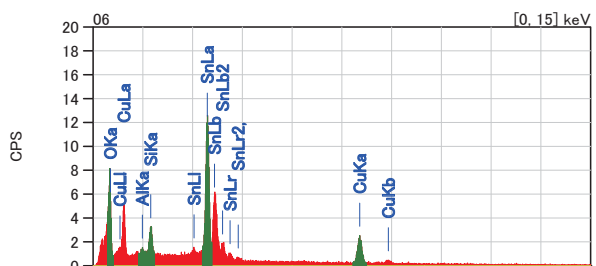
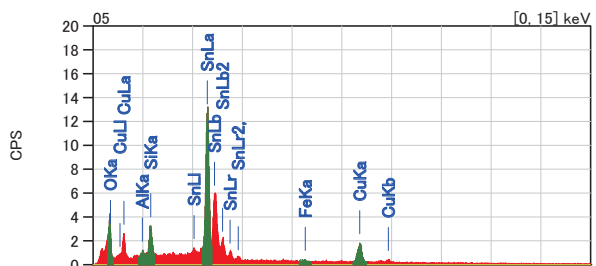
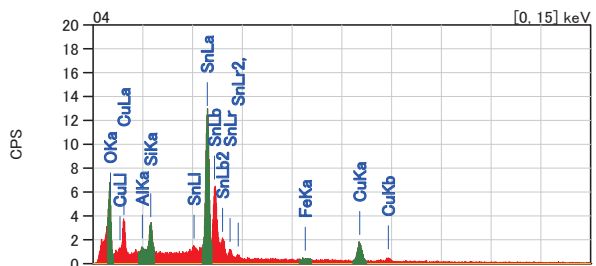
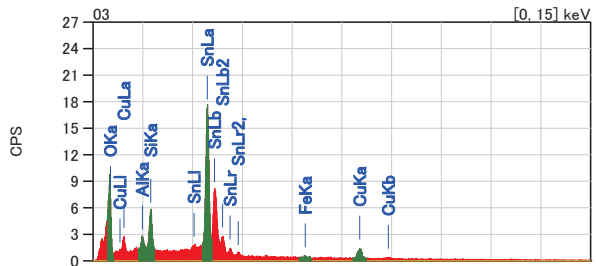
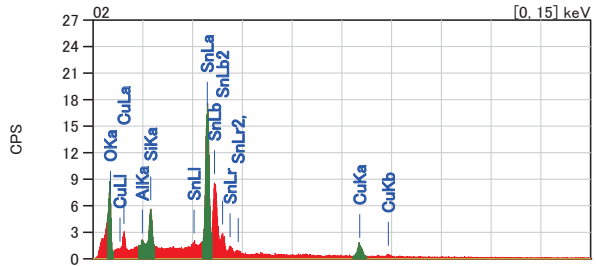
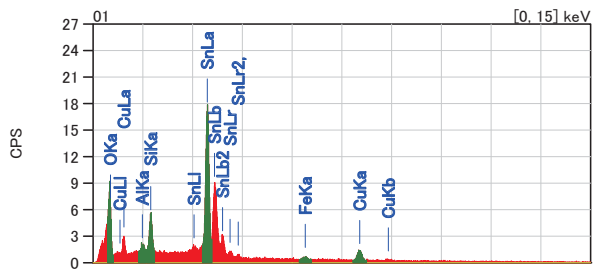
破断面測長



破断面測定位置

測定位置	Al	Si	Fe	Cu	Sn	合計
01	1.16	6.14	1.43	11.36	79.92	100.00
02	1.45	6.29	-	12.75	79.51	100.00
03	2.51	6.75	0.80	11.04	78.89	100.00
04	0.96	4.39	0.68	19.14	74.83	100.00
05	0.87	4.45	0.52	19.20	74.95	100.00
06	1.01	4.44	-	25.53	69.03	100.00

簡易定量分析結果 (質量%)



第197図 金属製品(Sn 1)のSEM-EDS分析結果

,Pb:0.22%,As:0.66%である。青銅中の銅が選択的に溶出したため見かけ上2次成分である錫が増加する結果となった可能性もあるが、金属製品がかなり薄い作りであることや、表面に緑青が見られないことも含めると、青銅(Cu-Sn合金)とは捉えがたい。一方で、A. Giunlia-Mair(2005)の報告のように銅に鍍錫した可能性もあるが、表面分析では判断材料に欠ける。

破断面で材質を見る必要性から、分析SEM(SEM-EDS)を用いて反射電子像で観察したが(第197図)、鍍錫の可能性を疑うような構造は見えない。複数箇所破断面のEDSスペクトルを取得したところ、装置の加速電圧が20kVと低いために蛍光X線定性スペクトルで認められたAs,Ag,Pbは見えないが、Snが特徴的に検出され、Cuを伴う。ZAF補正法を用いた簡易定量(スタンダードレス)分析を行ったところでは、Sn:69.03-79.92%,Cu:11.04-25.53%の組成である。

これらの分析結果を踏まえると、出土した性格不明の金属製品は錫を基として銅を含む錫合金(Sn-Cu合金)である可能性が高く評価される。

#### 引用文献

A. Giunlia-Mair,2005,Tin rich layers on ancient copper based objects,Surface Engineering,21,359-367.

## 第3節 平ノ前遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

平ノ前遺跡(鳥取県倉吉市上古川地内)は、大山山麓より流下する小鴨川中流域左岸の河岸段丘上に位置し、西側に分布する天神野台地の丘陵部裾部付近に立地する。平成29年度にも自然科学分析を実施しており、古環境変遷などに関する情報を蓄積している。本年度の発掘調査では、A1区盛土部から、縄文時代晩期～鎌倉時代までの流路、P3区から古墳時代前期の溝などの遺構が検出されている。

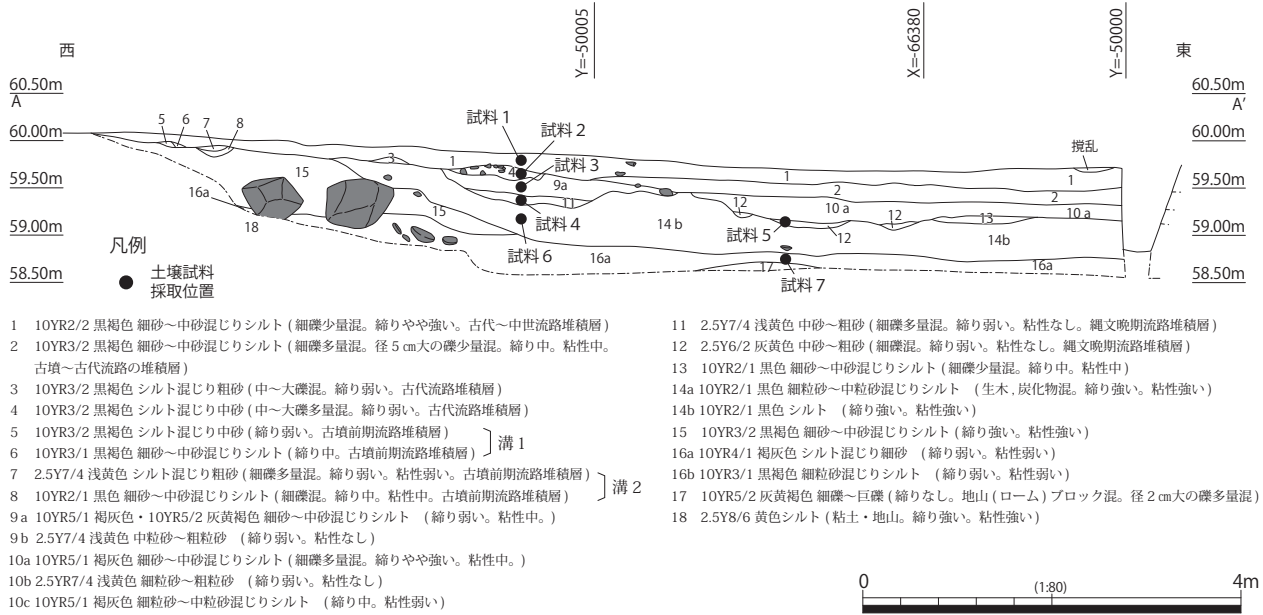
本分析調査では、堆積年代に関する情報を得ることを目的として放射性炭素年代測定を、古環境変遷(堆積環境や古植生)に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

### 第1項 試料

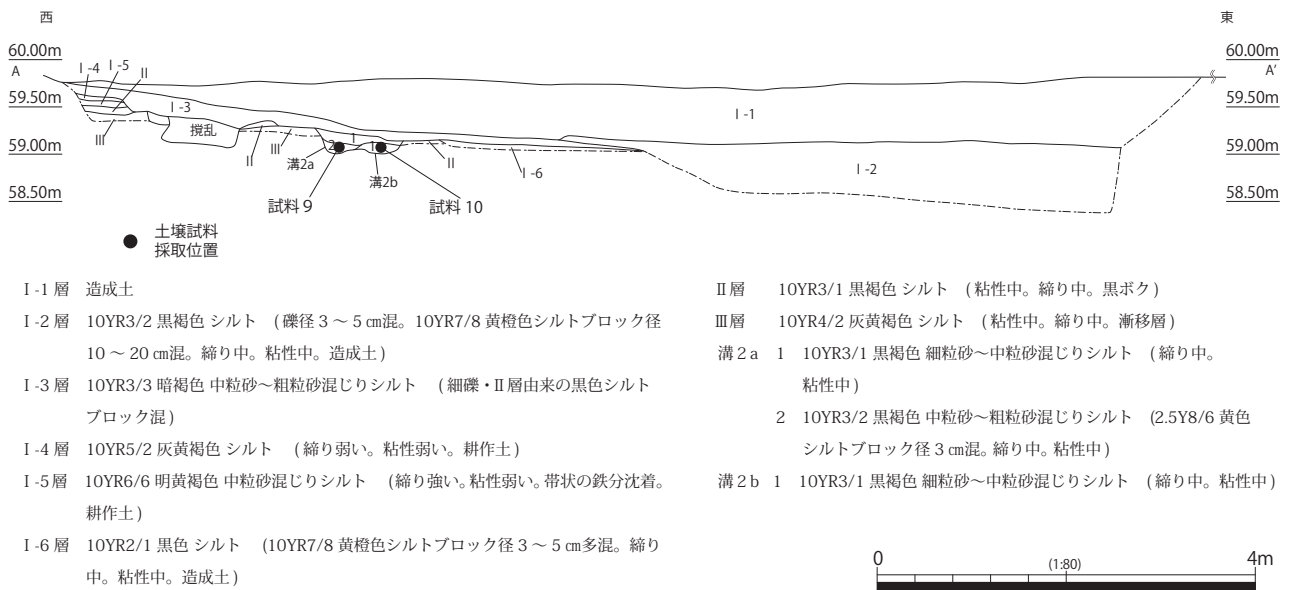
土壌試料は、A1区盛土部とP3区の2地区から採取されている。A1区盛土部の流路にあたるT52-7a-4A-8aグリッドからは、1、4、9a、11、12、14b、16a層の各層より計7点(試料番号1～7)が採取されている。この7点について珪藻分析、花粉分析を実施する。同じくA1区盛土部のT45-7j-4J-10hグリッドからは、14a層より1点(試料番号8)が採取されている。この試料中より抽出した黒色の植物遺体(生材：破片)について、放射性炭素年代測定を実施する。

第66表 分析試料及び分析項目一覧

試料番号	グリッド	地区名	取上番号	遺構名	層位	層相・所見	分析項目			
							AMS	珪藻	花粉	珪酸体
1	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	206	流路	1層	黒褐色細粒～中粒砂混じりシルト (古代～中世流路堆積層)		○	○	
2	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	207	流路	4層	黒褐色シルト混じり中粒砂 (古代流路堆積層)		○	○	
3	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	208	流路	9a層	灰褐色・灰黄褐色 細粒～中粒砂混じりシルト		○	○	
4	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	209	流路	11層	浅黄色中粒～粗粒砂 (縄文時代晩期流路堆積層)		○	○	
5	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	210	流路	12層	灰黄色中粒～粗粒砂 (縄文時代晩期流路堆積層)		○	○	
6	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	211	流路	14b層	黒色シルト		○	○	
7	T52-7a-4A-8a	A1区盛土部	212	流路	16a層	灰褐色シルト混じり細粒砂		○	○	
8	T45-7j-4J-10h	A1区盛土部	235	流路	14a層	黒色細粒～中粒砂混じりシルト (生木、炭化物混じる)	○			
9	T45-7j-3J-9d	P3区	16	溝2a	2層	黒褐色中粒～粗粒砂混じりシルト (黄色シルトブロック径3cm混)				○
10	T45-7j-3J-9d	P3区	17	溝2b	1層	細粒～中粒砂混じりシルト				○



第198図 A1区盛土部 土壌試料採取位置



第199図 P3区 土壌試料採取位置

P3区の溝2にあたるT45-7j-3J-9dグリッドからは、溝2aの2層、溝2bの1層より各1点(試料番号9・10)が採取されている。この2点について植物珪酸体分析を実施する。

層相、所見を含めた分析試料の詳細、および分析項目の一覧を第66表に示す。

## 第2項 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物

理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態処理を終える。その場合はAaAと記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach,1977)。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪(年輪は細胞壁のみなので、形成当時の<sup>14</sup>C年代を反映している)等を用いて作られている。暦年較正に用いるソフトウェアはOxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値(1年単位)を記す。

## (2)珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプレウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する(化石の少ない場合は、この限りではない)。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachary(1987)、Lange-Bertalot(2000)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産

出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために、珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、1%以上の出現率を示す分類群についてのみ表示する(図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物(岩石・大型の藻類・水生植物など)に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

### (3)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れが



あるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

#### (4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を乾土1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

### 第3項 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定(第200図、第67表)

結果を第67表、第200図に示す。A1区盛土部の14a層(試料番号8)は、測定年代(補正年代)が $2,470 \pm 20$ yrBPの値を示し、暦年較正年代は2,714~2,443 calBPである。なお、対象とした生材は多数の破片であったため、樹種の同定には至らなかった。

第67表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年 較正用	暦年較正年代			Code No.		
						年代値		確率 %			
A1区 盛土部 14a層 8	生材 (破片)	AAA	$2,470 \pm 20$	$-30.89 \pm 0.16$	$2,471 \pm 20$	$\sigma$	calBC750-calBC683	2699-2632calBP	31.1	pal- 12321	YU- 10381
							calBC668-calBC638	2617-2587calBP	14.9		
						calBC590-calBC540	2539-2489calBP	22.2			
						$2\sigma$	calBC765-calBC509	2714-2458calBP	95.1		
calBC497-calBC494	2446-2443calBP	0.3									

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

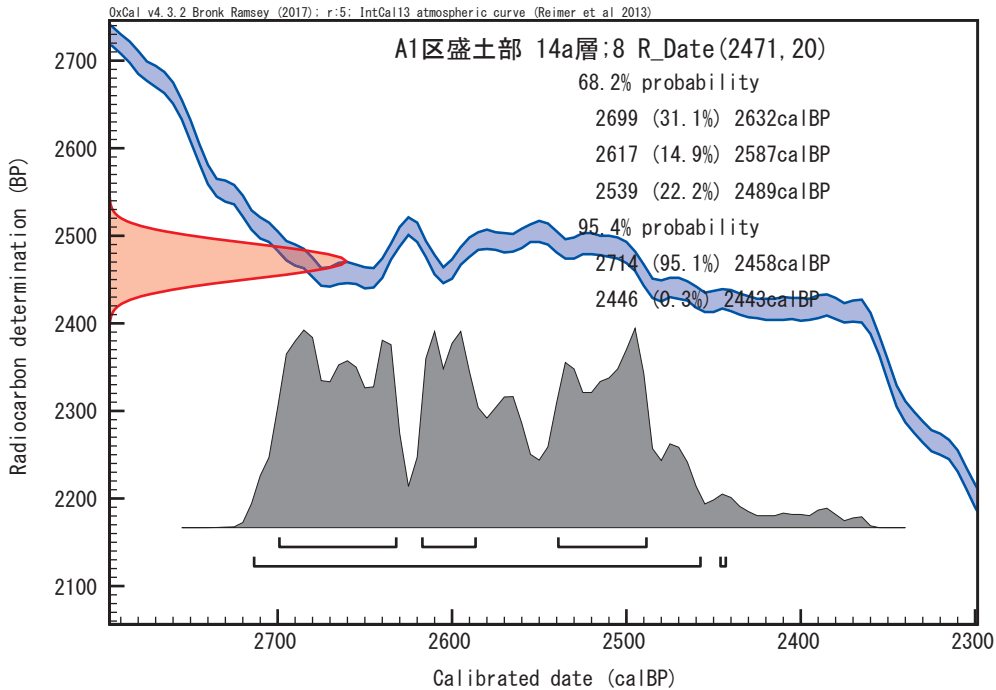
4) AAAは酸-アルカリ-酸処理を示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。

6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である。



第200図 暦年較正結果

(2)珪藻分析(第201図、第68表、図版110)

結果を第68表、第201図に示す。分析した。A 1 区盛土部の7 試料のうち、1 層～12層(試料番号1～5)から珪藻化石が産出したものの、100個体以上産出したのは1 層のみで、その他の産出数は少なかった。

16a層、14b層(試料番号7・6)は無化石であった。

12層、11層、9a層、4 層の4 試料は、産出した種に多少の差異はあるものの、ほぼ同様の傾向を示す。算出個体数は、それぞれ52個体、26個体、33個体、38個体であった。保存状態は壊れている殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種の種類群は、淡水生種を主にして、淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*、淡水生種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *euglypta*、*Cymbella turgidula*、淡水生種で流水不定性種の *Encyonema silesiacum*、*Fragilaria ulna*、*Pinnularia viridis* 等である。

1 層からは143個体産出した。保存状態は壊れている殻が多いため、不良である。産出した種類群は、淡水生種を主にして、淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。本試料の淡水生の群集の特徴について、生態性(珪藻の3つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性)を整理してみると、まず、塩分に対する適応性は、全体的に貧塩不定性種が優占する。次に、pHに対する適応性は、アルカリ性種が優先する。流水に対する適応性は、流水不定性種が優占するが、流水性種が10%程度、止水性種も20%程度産出する。また、本試料は水生珪藻が優先し、陸生珪藻は極低率にしか産出しない。

特徴的に産出した種は、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*、淡水生種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *euglypta*、*Cymbella turgidula*、淡水生種で流水不定性種の *Cymbella tumida*、

第68表 珪藻分析結果

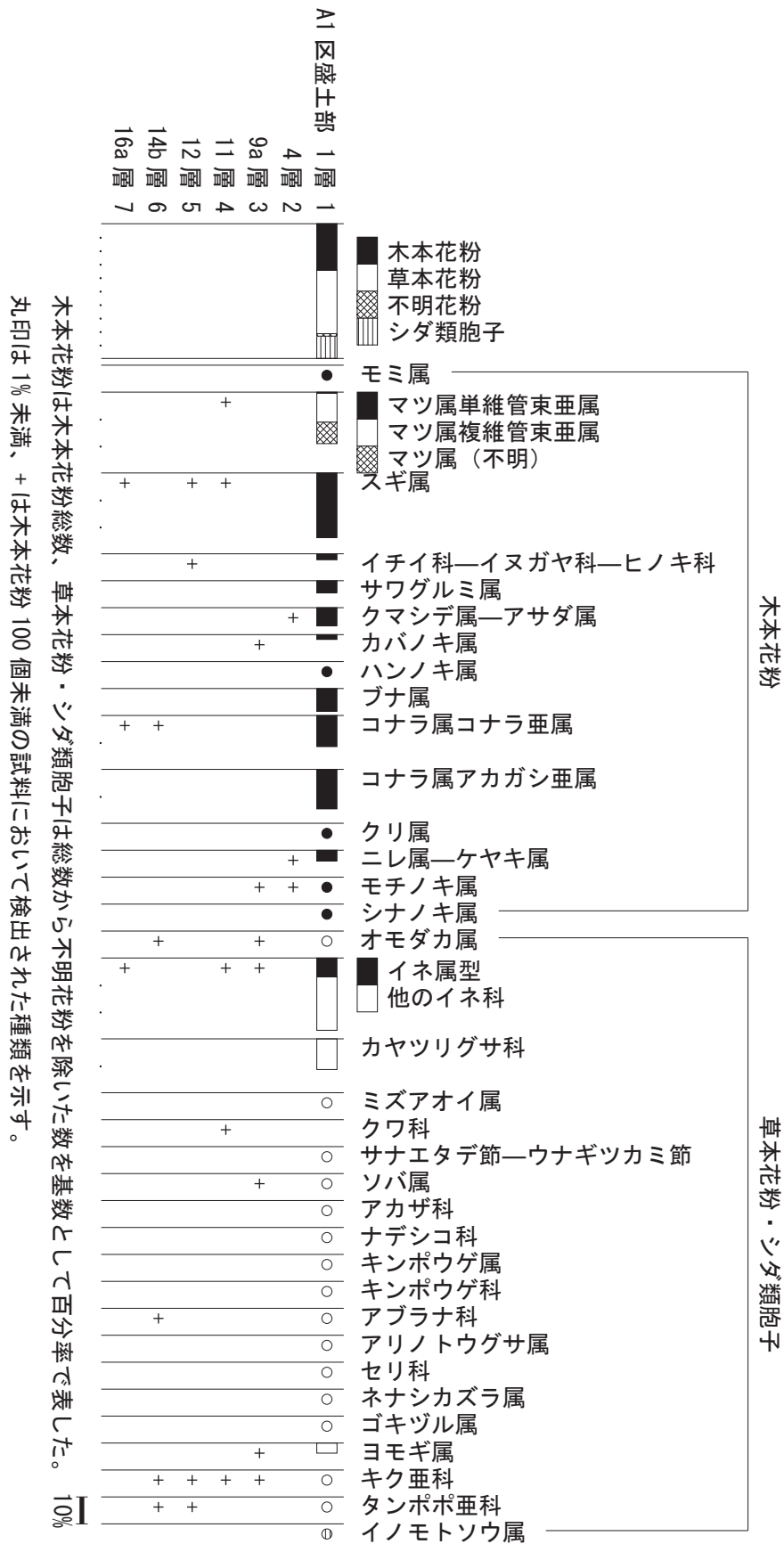
種 類	生態性			環境 指標種	A1区盛土部						
	塩分	pH	流水		1層	4層	9a層	11層	12層	14b層	16a層
					1	2	3	4	5	6	7
Rhopalodia gibberula (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	5	4	3	2	3	-	-
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	7	2	-	-	-	-	-
Aulacoseira granulata (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	2	-	-	-	-	-	-
Aulacoseira spp.	Ogh-unk	unk	l-ph	U	2	-	-	-	-	-	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	8	-	4	3	7	-	-
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-	-	-
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	1	4	-	-
Craticula halophila (Grun. ex Van Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-	-	-	-
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	1	-	-
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	5	-	-	-	-	-	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	17	-	-	-	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	3	2	-	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		8	2	2	2	4	-	-
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	-	1	-	-
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	1	-	-	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	8	2	3	3	4	-	-
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Epithemia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	-	1	-	1	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	3	-	1	2	2	-	-
Eunotia praerupta var. bidens (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	1	1	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		7	-	-	-	1	-	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	3	-	-	-	-	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	5	3	5	1	5	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	8	4	2	4	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	3	-	-	-	-	-	-
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	4	2	-	-	2	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	1	1	1	3	-	-
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-	-	-	-	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	3	-	-	-	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	-	-	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	N,O,U	4	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brebissonii (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-	-	1	1	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	4	1	-	-	-	-	-
Pinnularia interrupta W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	1	1	-	-	-
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	5	2	-	-	-	-	-
Pinnularia sudetica (Hilse) M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O,P	3	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	5	-	3	3	4	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	3	2	2	3	-	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	1	1	1	-	-
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	2	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	2	-	-	-	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-
Tabellaria fenestrata (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O,T	1	-	-	-	-	-	-
Tabellaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	1	1	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					5	4	3	2	3	0	0
淡水生種					138	34	30	24	49	0	0
珪藻化石総数					143	38	33	26	52	0	0

凡例  
 塩分濃度に対する適応性    pH水素イオン濃度に対する適応性    流水・流水に対する適応性  
 Euh :海水生種    al-bi:真アルカリ性種    l-bi:真止水性種  
 Euh-Meh:海水生種-汽水生種    al-il:好アルカリ性種    l-ph:好止水性種  
 Meh :汽水生種    ind :pH不定性種    ind :流水不定性種  
 Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種    ac-il:好酸性種    r-ph:好流水性種  
 Ogh-hil:貧塩好塩性種    ac-bi:真酸性種    r-bi:真流水性種  
 Ogh-ind:貧塩不定性種    unk :pH不明種    unk :流水不明種  
 Ogh-hob:貧塩嫌塩性種  
 Ogh-unk:貧塩不明種  
 環境指標種  
 A:外洋指標種    B:内湾指標種    C1:海水藻場指標種    C2:汽水藻場指標種  
 D1:海水砂質干潟指標種    D2:汽水砂質干潟指標種  
 E1:海水泥質干潟指標種    E2:汽水泥質干潟指標種    F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)  
 G:淡水浮遊性種群    H:河口浮遊性種群    J:上流性河川指標種    K:中～下流性河川指標種  
 L:最下流性河川指標種群    M:湖沼浮遊性種    N:湖沼沼沢地指標種    O:沼沢地付着生種  
 P:高層湿原指標種群    Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)  
 S:好汚濁性種    U:広適応性種    T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995)  
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)



第69表 花粉分析結果

種 類	A1区盛土部						
	1層	4層	9a層	11層	12層	14b層	16a層
	1	2	3	4	5	6	7
木本花粉							
モミ属	2	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	1	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	24	-	-	2	-	-	-
マツ属(不明)	18	-	-	1	-	-	-
スギ属	54	-	-	1	1	-	1
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	5	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属	10	-	-	-	-	-	-
クマシデ属—アサダ属	15	1	-	-	-	-	-
カバノキ属	4	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	2	-	-	-	-	-	-
ブナ属	19	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	26	-	-	-	-	1	1
コナラ属アカガシ亜属	33	-	-	-	-	-	-
クリ属	1	-	-	-	-	-	-
ニレ属—ケヤキ属	9	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	1	1	1	-	-	-	-
シナノキ属	1	-	-	-	-	-	-
草本花粉							
オモダカ属	2	-	1	-	-	1	-
イネ属型	45	-	-	-	-	-	-
他のイネ科	127	-	1	1	-	-	1
カヤツリグサ科	73	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	1	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	6	-	-	-	-	-	-
ソバ属	5	-	1	-	-	-	-
アカザ科	2	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	1	-	-	-	-	-	-
キンボウゲ属	1	-	-	-	-	-	-
キンボウゲ科	1	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	3	-	-	-	-	1	-
アリノトウグサ属	1	-	-	-	-	-	-
セリ科	6	-	-	-	-	-	-
ネナシカズラ属	1	-	-	-	-	-	-
ゴキヅル属	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	24	-	1	-	-	-	-
キク亜科	6	-	2	2	1	6	-
タンポポ亜科	2	-	-	-	1	1	-
不明花粉							
不明花粉	12	-	-	-	1	-	-
シダ類孢子							
イノモトソウ属	1	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	107	2	2	3	-	-	-
合 計							
木本花粉	225	3	2	4	2	1	2
草本花粉	308	0	6	4	2	9	1
不明花粉	12	0	0	0	1	0	0
シダ類孢子	108	2	2	3	0	0	0
合計(不明を除く)	641	5	10	11	4	10	3

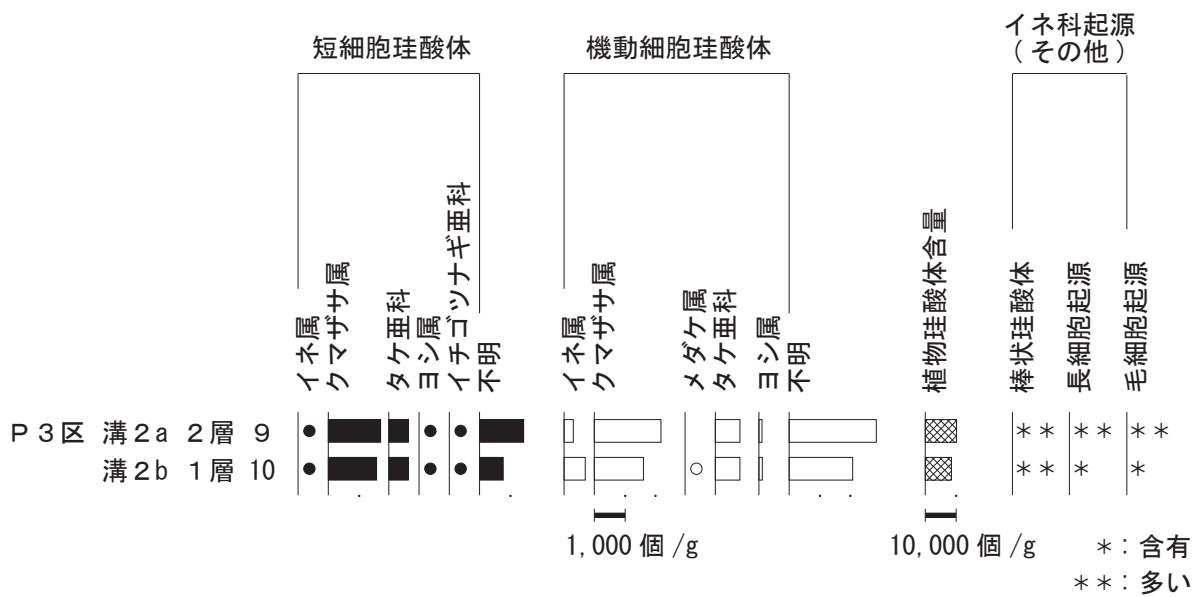


第202図 花粉化石群集の層位分布

第70表 植物珪酸体含量

種類	P3区	
	溝2a2層	溝2b1層
	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ属	<100	<100
クマザサ属	1,700	1,600
タケ亜科	600	600
ヨシ属	<100	<100
イチゴツナギ亜科	<100	<100
不明	1,500	800
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ属	300	700
クマザサ属	2,200	1,600
メダケ属	-	<100
タケ亜科	800	800
ヨシ属	100	100
不明	2,900	2,100
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	4,000	3,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,300	5,400
植物珪酸体含量	10,300	8,600
イネ科起源(その他)		
棒状珪酸体	**	**
長細胞起源	**	*
毛細胞起源	**	*

- 1) 含量は10の位で丸めている(100単位にする)。
- 2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
- 3) <100: 100個/g未満。
- 4) -: 未検出、\*: 含有、\*\*: 多い。



乾土 1g あたりの個数で示す。●○は 100 個未満を定性的に示す。

第203図 植物珪酸体含量

*Encyonema silesiacum*、淡水生種で止水生種の*Cymbella subaequalis*等である。

### (3)花粉分析(第202図、第69表、図版111)

結果を第69表、第202図に示す。A1区盛土部の7試料のうち、4層～16a層(試料番号2～7)からは、花粉化石が産出するものの含有量は少なく、定量解析を行えるだけの個体数が得られなかった。保存状態も、花粉外膜が破損しているものが多いなど、全体的に悪い。産出した種類についてみると、木本花粉ではマツ属、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クマシデ属—アサダ属、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属、モチノキ属など、草本花粉ではオモダカ属、イネ科、クワ科、ソバ属、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが、わずかに認められる程度である。

1層(試料番号1)からは、花粉化石が豊富に産出し、保存状態もやや良い～普通程度である。花粉化石群集組成についてみると、草本花粉の割合がやや高い。木本花粉ではマツ属、スギ属、ブナ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が多く産出し、サワグルミ属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、セリ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。多産するイネ科には、栽培種であるイネ属に形態が類似した個体(以下、イネ属型とする)も含まれており、その他に栽培種であるソバ属も確認された。

### (4)植物珪酸体分析(第203図、第70表、図版112)

結果を第70表、第203図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が概して悪いものが多い。

P3区の溝2aの2層、溝2bの1層(試料番号9・10)では、同様な産状が見られ、植物珪酸体含量は溝2aの2層が10,300個/g、溝2bの1層が8,600個/gである。いずれもクマザサ属などを含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科などが認められる。

また、栽培植物であるイネ属も僅かに産出し、土壤中の含量は溝2aの2層の短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が300個/g、溝2bの1層の短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が700個/gであった。

この他に、イネ科起源(棒状珪酸体,長細胞起源,毛細胞起源)も検出される。

## 第4項 考察

### (1)堆積層の年代観

A1区盛土部の14a層(試料番号8)から抽出した黒色の植物遺体について放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代で $2,470 \pm 20$ yrBP、暦年代で2,714～2,443 calBPの値が得られた。この年代は縄文時代晩期に比定される。14a層の直上層(12層)からは縄文時代晩期の土器が出土することから、調査所見とも矛盾しない。よって、得られた年代は14a層の堆積年代を示すと考えられる。

### (2)A1区盛土部における堆積環境

A1区盛土部の流路堆積物のうち、4層～16a層(試料番号2～7)は、珪藻化石、花粉化石ともに検出個数が極めて少ない。

特に16a層、14b層(試料番号7・6)では、珪藻化石が1個体も検出されない。



珪藻化石は、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。また、小杉(1986)によると、珪藻の遺骸は、堆積する際にシルトと挙動と共にするとされていることから、粗粒な堆積物の場合、珪藻殻は取り込まれにくいことが推定される。また、花粉化石もシルト以下の微細粒子と挙動をともにし、さらに堆積した場所が酸化状態にあるような場合、酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。

なお、4層～12層(試料番号2～5)では、淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*、*Cymbella turgidula*、淡水生種で流水不定性種の*Encyonema silesiacum*、*Fragilaria ulna*、*Pinnularia viridis*などの珪藻化石がわずかに産出した。珪藻化石が少ないため詳細な検討を行うことは差し控えたいが、いずれの試料も流水不定性種がみられ、流水不明種、陸生珪藻などの他に好流水性種も認められるなど、分類群の生態性にはばらつきがある。このような複数の生育環境を指標する種群が混在することで特徴付けられる群集組成を「混合群集」と呼び、堆積物中からの産出率は低い割に構成種数は多い、流れ込み等による二次化石種群を多く含むなどの特徴がある(堀内ほか,1996)。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物などの一過性堆積物で認められる場合が多いが、この場合は検出率が低い傾向(堆積物中の絶対量が少ない)にある。他方、一過性ではなく定常的に堆積物が供給されるような場所の場合、例えば河口付近や低地部の湿地等において同様な環境が長期間続いた場合も混合群集が認められるが、この場合は長い間に徐々に堆積して行く中で珪藻の生産が繰り返し行われること、堆積物の表層部付近での自然の攪乱が行われること、多少の流れ込みもあることなどから検出率はやや高い傾向になる。以上のことから、4層～12層は一過性の堆積物を多く含み、流水による堆積と削剥を繰り返していたが、基本的には好気的環境下であった可能性がある。

古代～中世の流路堆積層とされる1層(試料番号1)から特徴的に産出した種は、淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*、*Cymbella turgidula*、淡水生種で流水不定性種の*Cymbella tumida*、*Encyonema silesiacum*、淡水生種で止水生種の*Cymbella subaequalis*などである。産出した種の生態性について述べると、淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*は、田中(1987)によると、群馬県で発掘された古代水田から多産しており、当時の水田土壌に本種が多量に出現したことは、水田の水が塩類を豊富に含んでいたことを示しているとしている。基本的には淡水生種と考えられるため、海域には生育できないと思われるが、前述のように塩分に対しては他の種群にくらべて耐性が高いため、沿岸部の海水の影響がおよんで塩濃度が高くなる後背湿地をはじめ、湿地や河岸などで比較的水が停滞することの多い場所(淀み)などの水中の塩濃度が高い水域に特徴的に認められる。流水性種の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*は、河川等の流水域の基物(礫等)に大型の藻類と共に付着生育する種である。Asai and Watanebe(1995)は、清浄な水域に生育する種であることから、好清水性種としている。流水性種の*Cymbella turgidula*は中～下流性河川指標種群(安藤,1990)と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。流水不定性種の*Encyonema silesiacum*は、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。淡水生種で流水不定性種の*Fragilaria ulna*は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一つで広範のさまざまな水域から見出される。*Pinnularia viridis*は、好湿地性種とも呼ばれ泥炭性の湿源・沼に特徴的に認められるほか、比較的広範に生育し、他の種群に比較して殻が大きく、生産力の高い種であ

る。流水不定性種の*Cymbella tumida*は、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地に普遍的に認められ、Asai and Watanebe(1995)によると好清水性種とされる。止水性種の*Cymbella subaequalis*は、安藤(1990)によれば沼沢湿地付着生種群の中の一つとされている。一般的には湿地に普遍的に認められ、Asai and Watanebe(1995)によると好清水性種とされる。以上のことを踏まえると、古代～中世の流路内は、基本的には水の動きが少なく、湿地的な環境であり、そのために塩濃度がやや高い状態であったと考えられる。

### (3) A 1 区盛土部における古植生

4層～16a層(試料番号2～7)でわずかに認められた花粉化石をみると、木本類ではマツ属、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などの針葉樹、クマシデ属—アサダ属、カバノキ属、コナラ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属、モチノキ属などの広葉樹が確認されている。この内、マツ属、スギ属、コナラ亜属、モチノキ属などは本地域周辺の森林に一般的な種類であり、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などは沢沿いや河畔などに生育する。これらの花粉は、縄文時代晩期～古代の周辺植生に由来すると思われる。

草本類ではオモダカ属、イネ科、クワ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが認められる。このうち、オモダカ属は水湿地に生育することから、流路内などに生育していた可能性がある。また、イネ科、クワ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などは、開けた明るい場所に生育する、いわゆる人里植物であることから、調査区内の草地植生などに由来する可能性がある。なお、9a層(試料番号3)から栽培種であるソバ属が確認された。よって、9層堆積当時の周辺でソバ属が栽培・利用されていた可能性がある。なお、平成29年度に調査したA 1区中央ベルトの縄文時代晩期より古い流路堆積層(8層)、縄文時代晩期以降の土壌層?(6層)、平安時代末以降の耕作土(2層)でも花粉分析を実施しているが、今回検出された種類と同様の花粉化石がわずかに認められている。

古代～中世の流路堆積物である1層(試料番号1)の花粉化石群集をみると、木本類ではマツ属(主にマツ属複維管束亜属)、スギ属などの針葉樹、ブナ属、コナラ亜属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹が多く産出し、サワグルミ属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹も認められる。よって、当時の調査地周辺は、海岸沿い、尾根沿いなどの土地条件の悪い場所にマツ属が、低地などにアカガシ亜属などが、後背山地のやや標高の高い部分にブナ属、コナラ亜属などの落葉広葉樹林が分布していたと考えられる。また、スギ属、サワグルミ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ亜属などは周辺の後背山地から河岸段丘上に、ニレ属—ケヤキ属、ハンノキ属、シナノキ属などは小鴨川などの周辺河川沿いに生育していたと可能性がある。周辺の調査事例では宍道湖のボーリングコアで実施された花粉分析結果があり、同様にマツ属複維管束亜属、アカガシ亜属、コナラ亜属、ブナ属、クマシデ属—アサダ属、ハシバミ属、ニレ属—ケヤキ属などが多く産出する群集が認められており、その時期は縄文海進後の減暖期から中世～近世のマツ属の急増の間である(三好,1998)。1層は調査所見から古代～中世とされることから、既存の調査事例とも調和的である。

一方、草本類ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、セリ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。いずれも人里植物であることから、当時の流路沿いや調査区内、周辺の林縁部など、比較的開けた草地植生に由来すると思われる。なお、多産するイネ科には栽

培種の可能性があるイネ属型が含まれており、それ以外にもソバ属も確認された。1層が流路堆積物であるが、前記したように流れの緩やかな湿地的な環境であったことを考慮すると、流路沿いにおいて稲作やソバ栽培などの畑作などが行われていたことが想定される。

#### (4) P3区における古植生

P3区の溝2埋積物である溝2aの2層、溝2bの1層(試料番号9・10)では、植物珪酸体の保存状態が概して悪いものが多かった。乾湿を繰り返すような場所やpHの高い場所では特に分解が進みやすい(近藤,2010など)。そのため、溝内に土壌化が進行した堆積物が埋積していた可能性がある。

溝2aの2層と溝2bの1層での産状からは、クマザサ属を含むタケ亜科をはじめとして、ヨシ属やイチゴツナギ亜科などのイネ科が生育していたと考えられる。クマザサ属を含むタケ亜科は、落葉広葉樹林の林床や林縁に生育していたものに由来すると思われる。鳥取県沿岸部での植物珪酸体の産状はタケ亜科が多く、落葉広葉樹林の林床に生育するササ類に由来すると考えられている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2016,2017など)。また、湿潤な場所に生育するヨシ属も見られることから、溝の周辺や上流域に湿地のような環境も存在した可能性がある。

なお、栽培種のイネ属も僅かに産出した。溝2は、天神野丘陵沿いに掘削された水路の可能性が推定されており、水田開発に伴うものかどうかは課題としてあげられている。今回、イネ属由来の植物珪酸体が検出されたことから、溝2は、埋積する過程で溝の周辺や上流域で稲作が行われていたことが考えられ、水田開発に伴って構築された可能性もある。この点については、周辺の遺構や微地形の分布、発掘調査所見を含めて検討する必要がある。

#### 引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35-47.
- Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
- Desikachary, T. V.,1987,Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at T.T. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- Hustedt, F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1,920p.
- Hustedt, F.,1937-1938,Systematische und okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I~III. Arch. Hydrobiol. Suppl.,15,131-809,1-155,274-349.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2,845p.
- Hustedt, F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3,816p.

## 第5章 自然科学分析

- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫,1996,珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－.日本文化財科学会 第13回大会研究発表要旨集,62-63.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 小杉正人,1986,陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－.植生史研究,1,9-44.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1985,Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica,9,250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1986,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1988,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1990,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1991,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- Lange-Bertalot, H.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pls. 4504 figs. 925 pgs.
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
- 三好教夫,1998,中国・四国地方の植生史.安田喜憲・三好教夫(編著),図説 日本列島植生史,朝倉書店,138-150.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2016,常松菅田遺跡の古環境解析.－一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X II－常松菅田遺跡II,鳥取県教育委員会,105-120.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2017,大柵遺跡15(4区～6区)の自然科学分析.大柵遺跡II－一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X VI－,鳥取県教育委員会,147-164.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.,2013,IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,55,1869-1887.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.
- 田中宏之,1987,群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻.群馬県立歴史博物館紀要,8,1-20.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

## 第6章 総括

八峠 興

### 第1節 山ノ下遺跡の中世土器について

山ノ下遺跡は史跡伯耆国庁跡から南に約3kmに位置する大型建物をもつ拠点的な遺跡である。調査の結果、古代末から中世前期にかけて大型の掘立柱建物4棟と、600点を越える中世土師器、90点程の煮炊具、238点の貿易陶磁器が出土した。

近年の発掘調査の成果によると、史跡伯耆国庁跡は10世紀代に姿を消したわけではなく、南門周辺では12～13世紀に下る遺物が出土しており、何らかの形で建物は存在し続けたと指摘されている(岡平2015)。また倉吉周辺は、中世前期の手づくね手法で成形する土師器皿が出土する県内でも特別な地域であり、その類似から京都など畿内との強い繋がりが指摘されている(中井2011)。

#### 第1項 中世土師器の分類と変遷

##### (1) 中世土師器の坏・皿(回転台成形)

山ノ下遺跡で分類の対象となるのはおおよそ12～13世紀の土器(岡田・八峠2014)、時代としては平安時代の末から鎌倉時代にあたる。古代から中世にかけての土師器の供膳具は、地域による差はあるものの、10世紀までは古代の延長で、概ね11世紀に中世土師器の供膳具が成立したと考えられる(中世土器研究会1995)。在地の土器は回転台成形で、皿と坏がある。ほか京都など畿内と共通する手づくねで成形した皿がある。はじめに基準となる土器の分類案を示す。

皿a類：底から口縁部が直線状に大きく外傾する。古代の皿の系譜にあたる。

皿b類：器高が低く、口縁部は内湾する。

皿c類：扁平で、立ち上がりが短い。

皿d類：器高が高く、坏を小型にした形状。

皿e類：口縁部が外反しながら立ち上がる。

皿f類：器高は低く、立ち上がりの短い逆台形状。

坏a類：器高の高い逆台形状のもの。口縁部が直線状に外傾するものを坏a1類、口縁部がやや内湾するものを坏a2類とする。

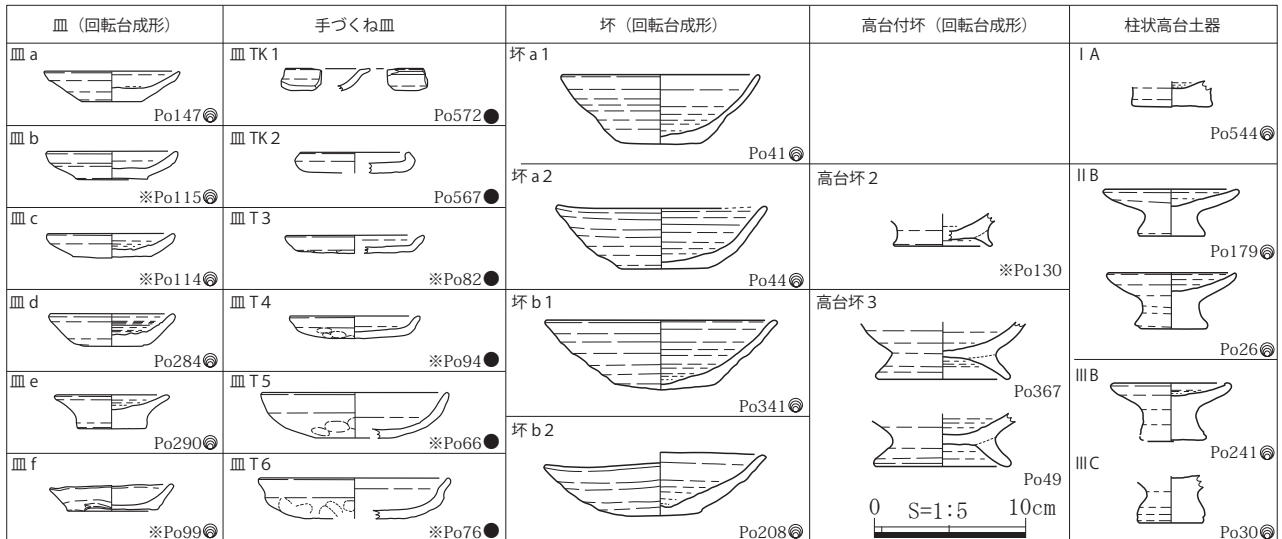
坏b類：器高が低く口径が広いもの。口縁部が直線状に大きく外傾するものを坏b1類、口縁部が内湾するものを坏b2類とする。

高台杯：高台をもつ坏があるものの、完存の状況では出土していない。高台が直立するものを高台坏1類、「ハ」の字状に開くものを高台坏2類、足高状に大きく開くものを高台坏3類とする。

##### (2) 中世土師器の皿(手づくね成形)

TK1類：古代から続く器形。「て」の字状の口縁部をもつ。平底で口縁端部付近を屈曲させる。

TK2類：古代から続く器形。平らな底面から短い口縁部が立ち上がる。コースターのような形状。



※Po: 鳥取県教育文化財団調査報告書 120 『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』掲載資料

### 第204図 中世土師器の分類

T 1 類：やや深い平底。二段ナデをもち、口縁部は丸くおわる。T 2 類は平底で口縁端部は内湾し、端部を面取りする。いずれも山ノ下遺跡で該当するものは確認できない。

T 3 類：平底で口縁部は外傾する。旧 2 タイプ。側面観は逆台形で器高は低い。

T 4 類：やや丸底で口縁部は外反する。旧 1 タイプ。側面観は弓形で器高は低い。

T 5 類：やや丸底で口縁部は外反する。旧 3 タイプ。側面観は弓形で器高は高い。

T 6 類：旧 4 タイプ。やや丸底で口縁部が強いヨコナデによって外反する。

#### (3) 柱状高台土器(回転台成形)

底径を基準として高さと比較し、概ね40%未満を I 類、40~75%を II 類、それ以上を III 類とし、円柱状に立ち上がるものを A 類、一旦内湾してから開くものを B 類、裾端部が一段高く、柱部は内湾してから開くものを C 類とする(八峠2019)。

#### (4) 変遷

杯・皿・柱状高台土器がセットとなる。古代からの変遷は、高台をもつ坏から無台の坏となり、土師器の皿と柱状高台土器が加わる。出土数の多い遺構については、より正確な計測値が求められるため、完形に復元実測できるものを中心に抽出した。

##### [山ノ下 I 期]

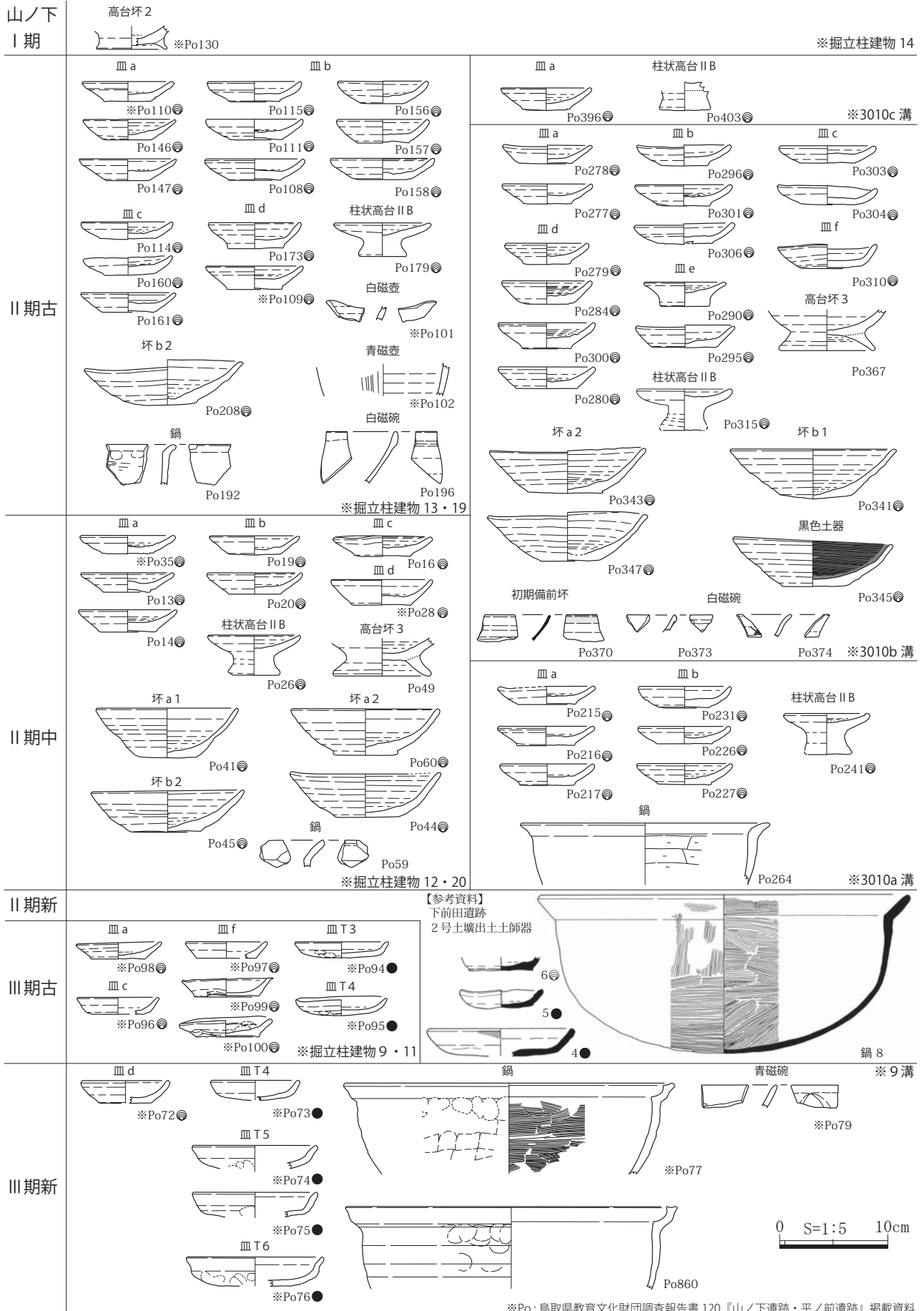
当該期の遺構は少ない。掘立柱建物14で高台坏 2 類の※Po130(※は前報告書掲載、以下同)が出土している。断面三角形の小さな高台をもつ。

##### [山ノ下 II 期古]

掘立柱建物13・19を基本とする。皿 a 類 3 点、皿 b 類 6 点、皿 c 類 3 点、皿 d 類 2 点、坏 b 2 類 1 点、柱状高台 II B 類 1 点を図示した。貿易陶磁は白磁の壺※Po101と越州窯系青磁の壺または水注の※Po102、白磁碗Po196がある。煮炊具Po192は口縁部の短い鍋形状か。

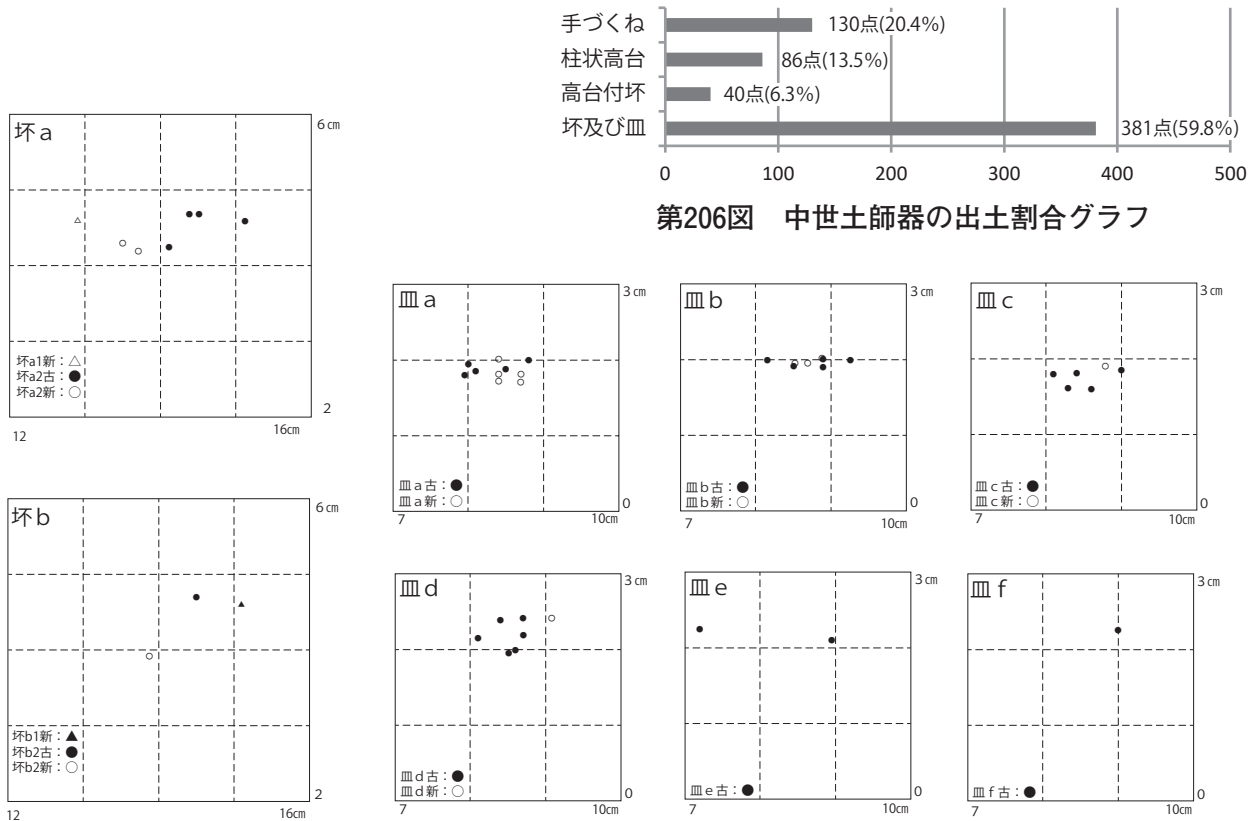
##### [山ノ下 II 期中]

掘立柱建物12・20を基本とする。皿 a 類 3 点、皿 b 類 2 点、皿 c 類 1 点、皿 d 類 1 点、坏 a 1 類 1



※Po: 鳥取県教育文化財団調査報告書 120 『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』 掲載資料

第205図 中世土師器の変遷



第207図 中世土師器の法量

点、坏 a 2 類 2 点、坏 b 2 類 1 点、高台坏 3 類 1 点、柱状高台 II B 類 1 点を図示した。煮炊具 Po59 は立ち上がりやや長い。

区画溝3010は古い溝から新しい順に、3010dから3010c、3010bから3010aで、3010cと3010bには直接の切り合いはない。遺物の接合関係を見ると、掘立柱建物13の柱抜き取り痕跡から出土している須恵器壺に3010aと接合するものが1点、接合関係はないものの、3010bの中に同一個体とみられる甕の体部片が複数ある。3010aは溝の最新の段階なので、古い段階のものが混入したと判断できる。このことから掘立柱建物13は、3010bと同時期に埋没したと考えられる。

山ノ下 II 期古から山ノ下 II 期中にかけて、3010cは遺構の遺存状況がよくないため、皿a類1点、柱状高台 II B 類1点を図示した。3010bでは、皿 a 類 2 点、皿 b 類 3 点、皿 c 類 2 点、皿 d 類 4 点、皿 e 類 2 点、皿 f 類 1 点、坏 a 2 類 2 点、坏 b 1 類 1 点、黒色土器の坏 1 点、高台坏 3 類 1 点、柱状高台 II B 類 1 点を図示した。共伴するのは初期備前の坏口縁部 Po370、白磁碗の口縁部 Po373・374である。3010aでは、皿 a 類 3 点、皿 b 類 3 点、柱状高台 II B 類 1 点を図示した。煮炊具は立ち上がりが短く、屈曲部の器壁は厚いものの、体部は鍋形状となる。

[山ノ下 II 期新]

良好な資料は確認できない。参考資料として、史跡伯耆国庁跡の東側に位置する下前田遺跡の 2 号土壇の一部を図示した。6 は回転台成形の底部、4・5 は手づくね成形の皿である。4 の口縁端部は外側を強くナデて、二段ナデを省略した三角形の端部である。煮炊具 8 は口縁部が長く、体部は鍋形状で内外面をハケ調整する、受け口の鍋や羽釜の前段階の器形(八峠2004)である。いずれも山ノ下遺跡の III 期を遡る。



[山ノ下Ⅲ期古]

掘立柱建物9・11を基本とする。Ⅱ期中までの大型建物群から約140m北東に位置する。主軸や位置から近い時期の建物とみられる。掘立柱建物11では、皿a類1点、皿c類1点、皿f類3点がある。掘立柱建物9からは手づくね成形の皿、皿T3類1点、皿T4類1点がある。いずれも建物の廃絶に伴う。

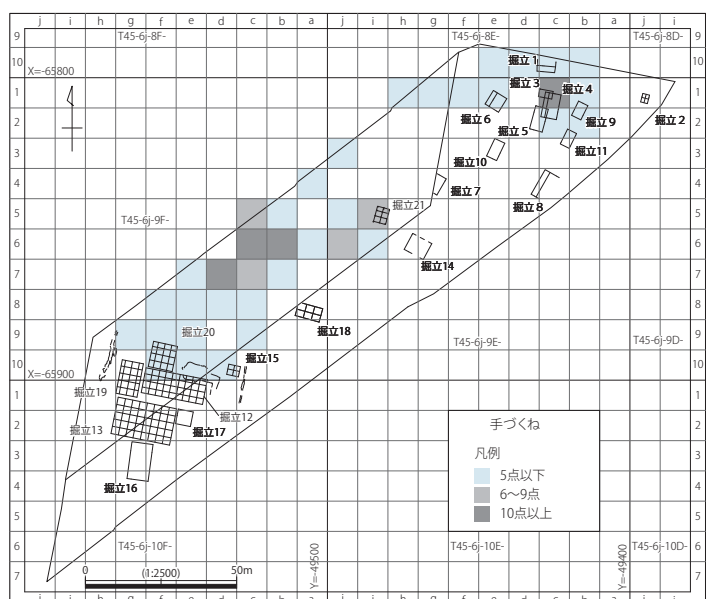
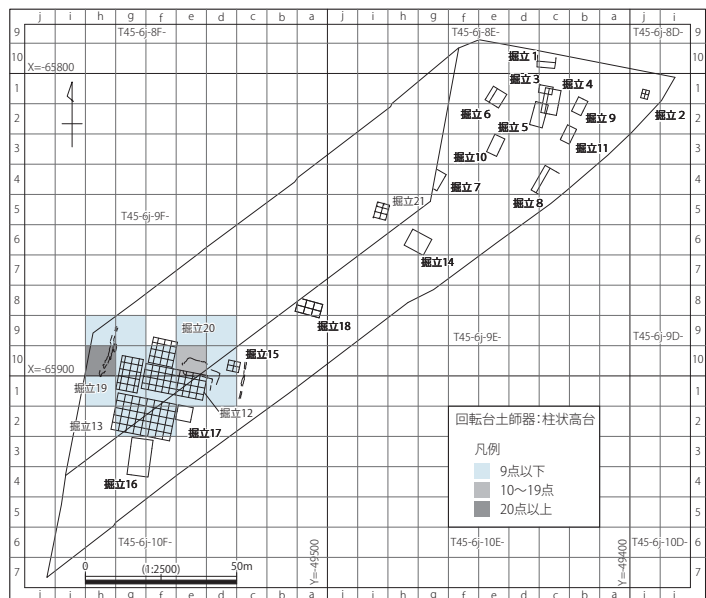
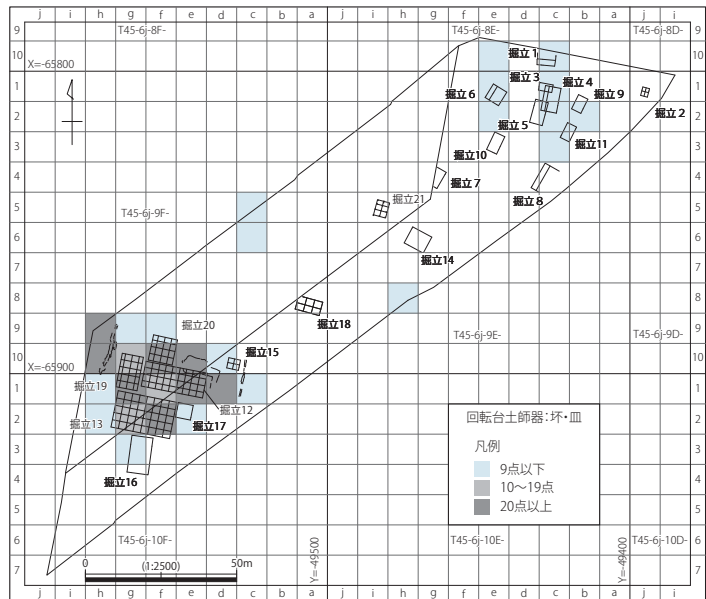
[山ノ下Ⅲ期新]

9溝の資料を基本とする。田や溝、包含層からの出土が大半であるため、建物群は礎石等ではなく、周辺に移動したと考えられる。皿d類1点、皿T4類1点、皿T5類2点、皿T6類1点である。鍋※Po77と新たに出土したPo860、青磁の鎬連弁文碗※Po79と共伴する。

出土する土師器皿の法量に変化が認められないかを比較するため、山ノ下Ⅱ期古とⅡ期新の段階で掲載した土器について、分類ごとに口径と器高を比較した。皿a類では変化の方向性は認めにくいものの、次第に法量のばらつきが小さくなり、定法量化する傾向が認められる。皿b類では器高が2cm程に安定しているものの、口径には差がある。皿c類の器高は2cmを下回り、皿d類では2cmを越える。全体的に若干大型化するものの法量の差は認めにくい。

坏の口径については差が認められた。口径は約14cmより大きいものから14cm以下へ縮小する。柱状高台土器については点数が少ないため図示していないが、底径と比較して器高が高くなる傾向がある。

全体的に中世土師器の皿については法量の明確な差は認めにくい。これは出現期の皿は坏に比べて器形が定形化していないことが要因と考えられる。共伴する遺物から時期を特定していく必要がある。ただし中



第208図 中世土師器の分布

世後期のものに比べると胎土のやや粗いものが主体で、色調も白色のものが目立つ。立ち上がり際を安定させてから切り離すことから、厚めに切り離すものには切り離し際にエッジ状の突出部が痕る。確認したほぼ全て時計回りの切り離しやロクロ目の痕がある。

### (5) 暦年代

暦年代を示すものに年代測定資料のほかに貿易陶磁器がある(山本2018)。煮炊具は甕から「く」の字状の鍋、受け口への変化、羽釜は内傾する口縁部から次第に直立に向かう変化がある(八峠2004、岡田・八峠2014)。これに科学分析も含めた暦年代を付与すると、Ⅱ期古は11世紀後葉から12世紀前半、Ⅱ期中は12世紀中葉から後半、Ⅲ期古は13世紀前半、Ⅲ期新は13世紀後半から14世紀初頭となる。

遺跡内の遺構をみると11世紀まで遺構は少なく、主要な建物群と周囲の区画溝は概ね12世紀の前葉から中葉頃に機能し、建物群は12世紀のうちには廃絶、若干の空白期が認められる。手づくね皿はそれまでの主要な建物群の位置よりも北東側を中心に出土する。

### (6) 分布

中世土師器の出土点数は総数637点で、回転台成形の坏及び皿は381点で59.8%、高台付きの坏は40点で6.3%、柱状高台土器が86点で13.5%、手づくね土師器皿が130点で20.4%となる。煮炊具の出土が僅かで供膳具に特化した状況がうかがえる。

調査範囲内からの出土分布をみると、回転台土師器の皿・坏は南西側の大型建物群周辺に最も集中し、北東側の建物群周辺からも一定量出土する。柱状高台土器は南西側の大型建物群付近に集中する。柱状高台土器は山陰地域から出土が多く、13世紀代から出土する遺跡もあるが、12世紀後半を一つの画期とし、以降は出土する遺跡が限られ、出土する遺跡は山陰地域では国庁や神社関連などの特別な性格の遺跡に多い(八峠2019)。

手づくね土師器の出土量は大型建物群よりも北東側の遺構の検出されていない位置と、調査区の北東隅の比較的小規模な建物群周辺の出土が多い。ただし大半は表土や包含層からで遺構に伴うものは少なく、評価は難しい。

## 第2項 煮炊具の分類と分布

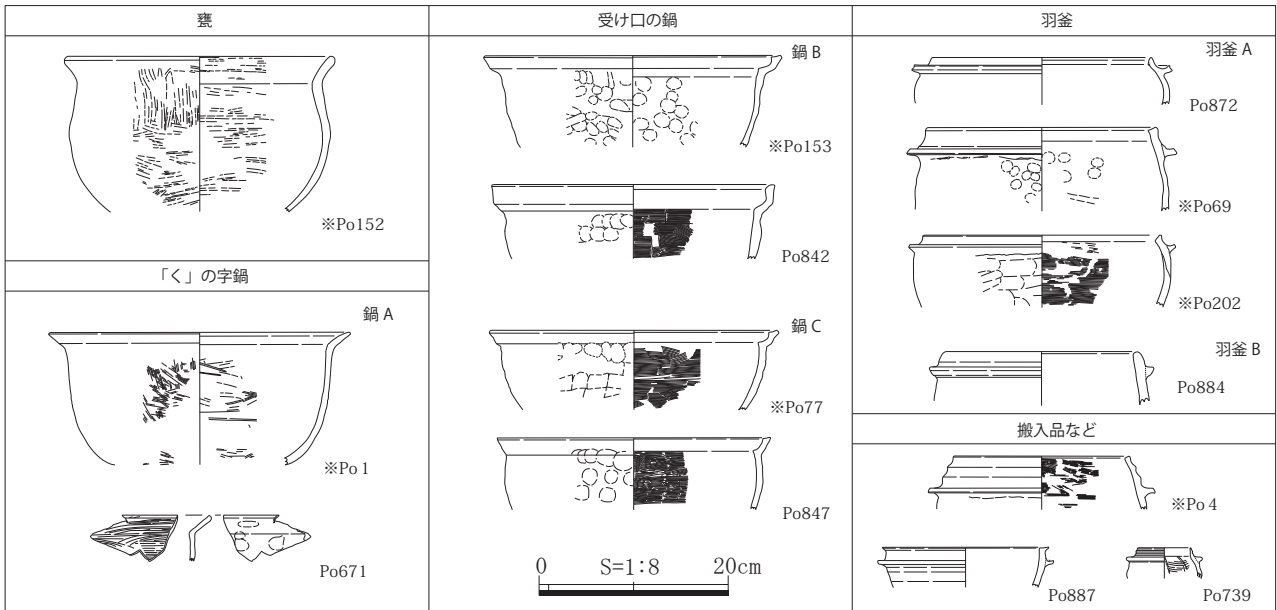
### (1) 分類

県内における煮炊具の変遷については、古代から中世にかけて甕形状から鍋形状となり、受け口の鍋と羽釜が主体となる(八峠2004)。出土した煮炊具を分類する。

甕：古代からの形状。口縁部は外傾または外反する。「く」の字鍋と異なるのは丸底で体部が膨らみ、甕形状を踏襲する点がある。口縁部の屈曲部に厚みがあれば特定が容易であるが、薄いものでは分類の難しいものもある。内外面ともにハケ調整が基本である。

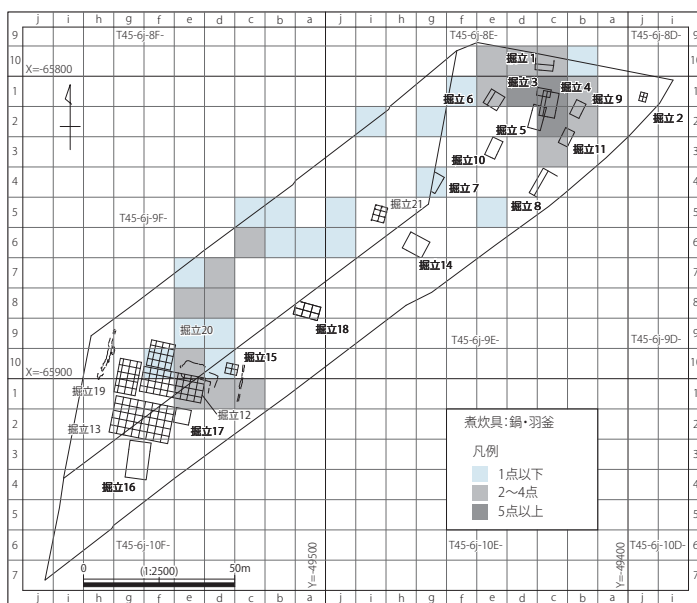
鍋A：「く」の字形の口縁部をもち、平底から体部が垂直方向に立ち上がる。甕と比較すると、器壁が薄く硬質のものが主体である。内外面ともにハケ調整が主体ではあるが、一部ナデ消すものもある。

鍋B：受け口の鍋で、段状の受け部をもつ。段の突出には大小があるほか、端部も平坦なもの、中央



※Po: 鳥取県教育文化財団調査報告書 120 『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』掲載資料

第209図 煮炊具の分類



第210図 煮炊具の分布

が窪んで両端に稜をもつもの、丸いもの等がある。内外面ともにナデを主体とするが、省略してハケを残すものもある。焼成は瓦質のもののほか、土師質でやや硬質のものもある。

鍋C：受け口の鍋ではあるが、明瞭な段を持たない。口縁部は「く」の字形にちかいが、受け口を意識して口縁部の中央が外に膨らむ。内面口縁部の立ち上がりの際が屈曲し、口縁端部の内側にも稜をもつものがある。調整や焼成は鍋Bと同様である。

羽釜A：口縁部は内傾し、体部は丸く平底である。県内では口縁部が内傾するものは時期的に遡る(八峠2004)。口縁端部には中央が窪み先端が突出するもの、外端のみ突出するもの、平坦なものがある。鏝の長短や上下水平の向き等、細分できる要素がある。調整は鍋類と共通する。

羽釜B：口縁部から体部、底部まで丸みが少なく、箱形状にちかい。器壁は厚く鏝の突出もあるが小さい。県内でも後出する形状である。調整は内外面ともにナデを主体とする。

搬入品など：畿内周辺からの搬入品や、小型の羽釜がある。※Po4は口縁部が長く内傾し、複数のナデ痕を残す。Po739は小型の羽釜で、橋本久和氏の教示によると樟葉型で祭祀に使用されたか。Po887はやや小型の羽釜である。

搬入品など：畿内周辺からの搬入品や、小型の羽釜がある。※Po4は口縁部が長く内傾し、複数のナデ痕を残す。Po739は小型の羽釜で、橋本久和氏の教示によると樟葉型で祭祀に使用されたか。Po887はやや小型の羽釜である。

(2) 分布

大型の掘立柱建物に伴うものは僅かで、手づくね皿の分布域と重なる。樟葉型の小型羽釜や、畿内周辺産の羽釜があり、手づくね皿とともに畿内地域との繋がりを示すものといえる。

### 第3項 柱穴から出土した土器と陶磁器

山ノ下遺跡では、大型の掘立柱建物4棟を調査したが、多数の柱穴から土器や陶磁器が出土した。これを見ると、建物を建てる際の掘方から出土するもの、柱抜き取り後の埋土から出土する場合がある。遺物には供膳具の皿、坏、柱状高台が単独あるいはセットで、ほか白磁や青磁などの陶磁器、土師器の甕や鍋等の煮炊具、貯蔵具である須恵器がある。遺跡内の他の建物の柱穴からはほとんど遺物は出土していない。こうした土器や陶磁器の多くは意図的に入れたと考え、各々の柱穴から出土した遺物の種類と数、建物の出土位置や種別について検討した。

掘立柱建物13：Ⅱ期古段階。桁行8間(19.64m)、梁行5間(12.1m)の東西棟の総柱建物である。建物の主軸はN-11° -E、平面積は237.6㎡を測る。

掘方では、北東隅に700柱穴の土師器皿※Po115、709柱穴の土師器坏※Po104・105、土師器皿※Po124、建物東側の3189柱穴から皿Po174、3132柱穴から坏Po183、3142柱穴から白磁片Po930が出土した。これ以外は抜き取りの中に入れられる。北辺の柱は外側に位置しているために腐食が激しく、頻繁に建て直しをされているが、むしろ建物中央から出土するものが多い。建物を四分分割するならば、最も密度が高いのは北東、続いて南東、北西で、低いのは南西である。陶磁器類は西側中央の3142柱穴から白磁壺片Po197と白磁片Po931・963、北東隅の3138柱穴から白磁片Po932、建物中央東側の712柱穴から白磁壺※Po101、3149柱穴から白磁碗Po196、718柱穴から越州の水注※Po102が出土した。皿や坏と柱状高台がセットで出土したのものには、707・3116・3127・3128・3138柱穴がある。3127・3128柱穴は同じ位置での建て替えである。須恵器には他の遺構と接合したものがあり、3115柱穴の須恵器体部は3138柱穴と接合し、いずれも北側の柱であることから同時に抜き取られたことを示す。ほか713柱穴から出土した須恵器壺※Po129は3010a溝のものと接合した。3010溝からは建物内で使用されたとみられる多数の供膳具が出土している。

掘立柱建物19：Ⅱ期古段階の建物。桁行5間(11.4m)、梁行4間(7.1m)の南北棟の総柱建物で、東西方向に廂をもつ。建物の主軸はN-11° -E、平面積は80.9㎡を測る。

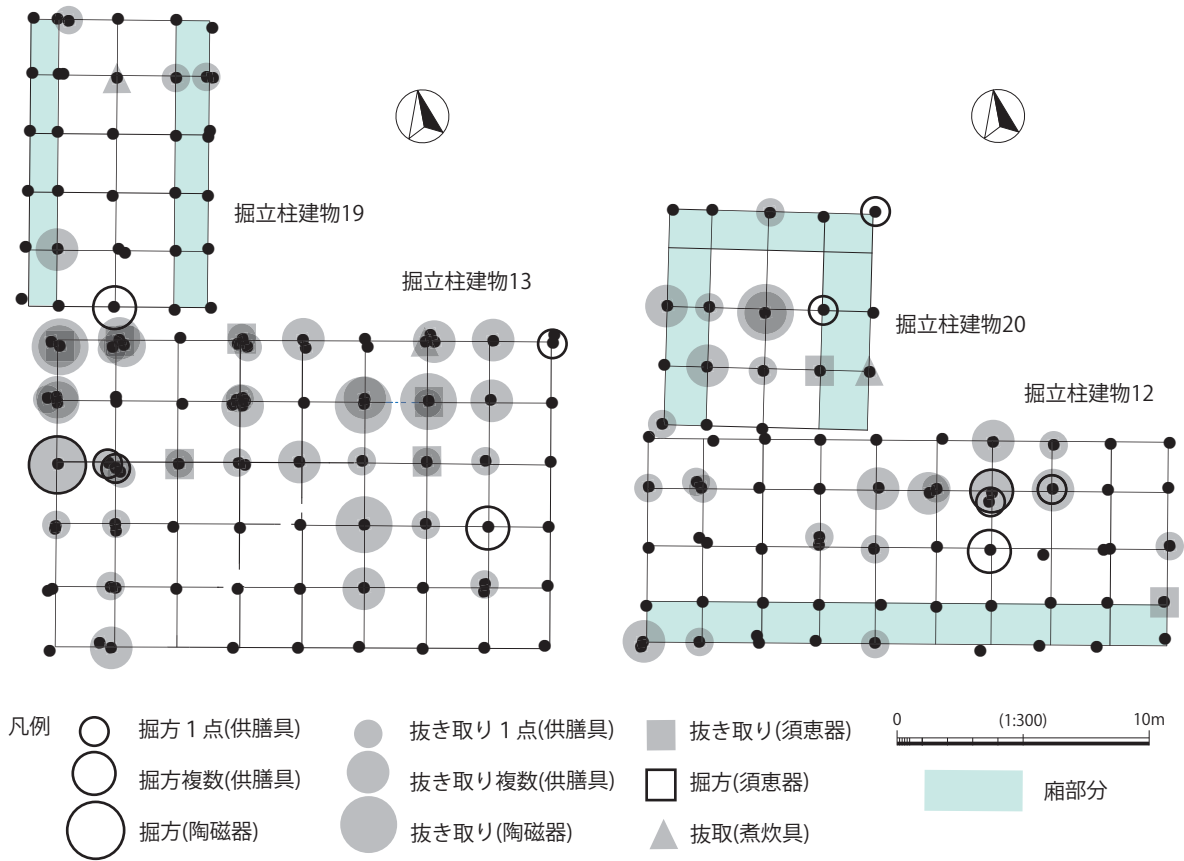
掘方では、南側中央の3161柱穴から皿Po205・206が出土した。抜き取りからは、北西身舎端の3255柱穴から柱状高台Po207、3166柱穴から坏Po208・209、3151柱穴からPo212が出土した。ほか3151柱穴から土師器の甕Po213が出土した。

掘立柱建物12：Ⅱ期中段階の建物。桁行9間(20.55m)、梁行4間(8.05m)の東西棟の総柱建物で、南側に廂をもつ。建物の主軸はN-11° -E、平面積165.4㎡を測る。

掘方では、建物北東の3009柱穴からPo17、3017柱穴からPo22の皿、3018柱穴からPo15・16の皿と坏Po41・42、高台付坏Po50、柱状高台Po25、椀形鍛冶滓F1、3023柱穴から坏Po32と高台付坏Po49が出土した。陶磁器は出土していない。3009・3024・3068・3095柱穴から皿や坏と柱状高台のセットが出土した。土器の多い柱穴をみると、廂を除く身舎では四方向というより、中央やや東側の柱穴からの出土が多い。ほか656柱穴から出土した須恵器壺Po51と3314ピット、Ⅲ-1層が接合した。

掘立柱建物20：Ⅱ期中段階の建物。桁行4間(8.6m)、梁行4間(8.1m)の南北棟の総柱建物で、北と東西方向に廂をもつ。建物の主軸はN-12° -E、平面積は69.7㎡を測る。

掘方では、北東隅の3049柱穴から柱状高台Po58、中央東側の3040柱穴から坏Po66が出土した。抜き取りからは、中央の3043柱穴から初期高麗青磁のPo69が出土したものの、皿や坏と柱状高台のセ



第211図 掘立柱建物12・13・19・20出土遺物分布(土器・陶磁器)

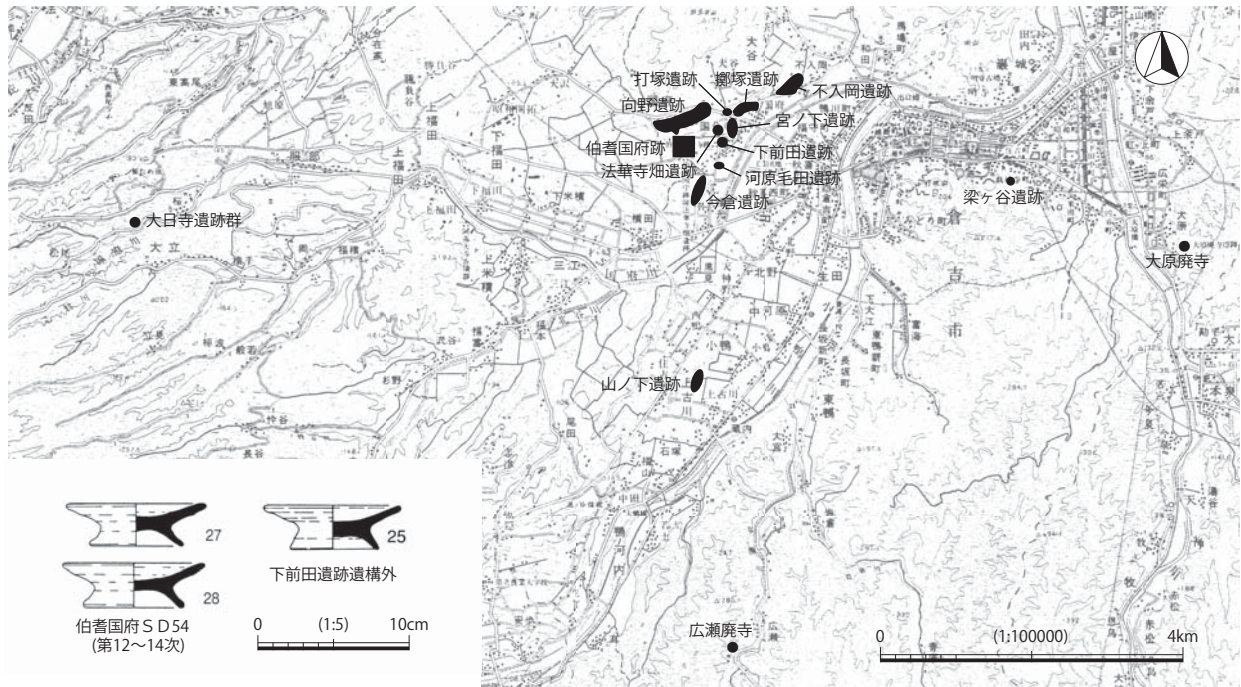
ットは確認できない。柱穴からの土器は、一部の廂にもあるが、南側中央の身舎に集中するようにみえる。

このように、柱穴から出土した土器や陶磁器から建物空間の軽重を推察することができそうである。柱状高台は皿の受け台として使用される補助的な性格をもつ器で、土器から見た古代から中世への転換期に成立し、主として新たな階層により使用された器である(八峠2019)。意図的に柱穴に入れることで建物のもつ性格を具体的に示したと考えられる。

各々の建物をみていく。建物13では建物中央の東側に皿や坏と柱状高台のセット関係の供膳具が多数使用され、全体的に廂をもたない閉じられた空間で、身舎の中央東側が最も重要であることが分かる。建物19は東西方向に廂をもつ開かれた建物である。建物13は柱の建て替え状況から長期間にわたるとみられ、これより小型の建物19が先行して建てられているとは、遺物から見て考えにくい。建物13の北側の柱列は建物19の南側であっても頻繁に建て替えられていることからみて、建物13の最終段階もしくは直後であろう。

建物12は南側に廂をもつ構造で、建物13と同様に身舎中央から東側にかけてセット関係を中心とした土師器の供膳具が集中することから、建物13の後継建物であろう。建物20では北東隅の柱穴から陶磁器が出土しているものの、南側以外には廂があり、セット関係の供膳具も出土していない。

遺構の切り合い関係はないものの、上記と遺物の変遷からみて大型建物の順序は、建物13→12・19→20と考えられる。一体の建物構造として機能した可能性があるとするれば、建物12・20であろう。これは建物12・20の間が極端に狭いこと、建物20の南側の身舎には柱穴を確認できない箇所があり、



第212図 史跡伯耆国府ほか出土の高台付皿

第213図 高台付皿・柱状高台・手づくね皿出土遺跡位置

第71表 高台付皿・柱状高台・手づくね皿出土遺跡一覧

遺跡名	種別	高台付皿	柱状高台	手づくね皿	報告書
山ノ下遺跡	居館か		○	○	鳥取県教育文化財団調査報告書120・2018年
宮ノ下遺跡	集落			○	倉吉市文化財調査報告書・1977年
擲塚遺跡	集落		○		倉吉市文化財調査報告書第16集・1979年
広瀬廃寺	寺院			○	倉吉市文化財調査報告書・1980年
今倉遺跡	集落		○		倉吉市文化財調査報告書第27集・1983年
打塚遺跡	墓		○		倉吉市文化財調査報告書第32集・1984年
大日寺遺跡群	寺院		○	○(記述のみ)	倉吉市文化財調査報告書第73集・1993年
不入岡遺跡ほか2次	官衙		○		倉吉市文化財調査報告書第83集・1995年
河原毛田遺跡	集落		○		倉吉市文化財調査報告書第96集・1998年
大原廃寺	寺院		○		倉吉市文化財調査報告書第100集・1999年
法華寺畑遺跡	寺院		○		倉吉市文化財調査報告書第106集・2001年
向野遺跡	集落		○(記述のみ)		倉吉市文化財調査報告書第114集・2003年
下前田遺跡	集落	○	○	○	倉吉市文化財調査報告書第118集・2003年
梁ヶ谷遺跡	集落		○		倉吉市文化財調査報告書第129集・2007年
伯耆国府跡	官衙	○	○		倉吉市文化財調査報告書第141集・2012年ほか

ここが両建物を繋ぐ可能性がある。また建物20では東西北方向の廂、建物12では南方向に廂があり、建物20の北東隅では青磁片が出土し、建物12の南西隅からは皿と柱状高台がセットで出土している。

このように出土遺物からみた建物の利用は、建物12・13はいずれも身舎中央から東側にかけて供膳具を伴う特別な箇所であり、これについても建物12は廂をもつことから建物13よりもその性格が弱まるといえる。建物19・20はセットの供膳具がないこと、とくに建物20では三方に廂をもつ外空間との繋がりを重視した構造をもつことから、供膳具を伴う政治的な箇所とはやや性格が異なるようにもみえる。ただしいずれの建物からも出土するのは供膳具が主体で、日常的に使われていた建物とは考えにくい。政や饗宴の場として使用された空間であると考えられる。

## 第4項 周辺遺跡との関わり

11世紀には高台付きの坏よりも無台の坏が主体となり、皿には高台をもつ小皿が加わる。12世紀になると器形は坏と皿を主体とし、皿の受け台とみられる柱状高台土器が出土する。13世紀になると倉吉地域では、回転台成形の坏と皿のほかに、手づくね土師器の皿が定量出土する(岡田・八峠2014)。古代から中世前期にかけての供膳具は、古代的な皿・高台付きの坏に、無台坏と台付皿が加わり、その後小型の皿と柱状高台、無台坏が主体となる12世紀である(八峠2019)。13世紀代になると倉吉地域で手づくねの皿が出土するようになる。このように台付皿、柱状高台、手づくね土師器をみることで、おおよそ11から13世紀の遺跡を特定することができる。これをふまえて、倉吉地域における古代から中世前期にかけての遺跡の分布を検討する。

台付皿は国庁跡と南東隣の下前田遺跡から出土する。山ノ下遺跡ではI期に該当する時期である。

柱状高台は、山ノ下遺跡のほか、国庁跡と南から東隣に位置する今倉遺跡、河原毛田遺跡、法華寺畑遺跡、打塚遺跡、擲塚遺跡、東側の築ヶ谷遺跡、大原廃寺、西側の大日寺遺跡群から出土する。山ノ下遺跡では柱状高台は86点を数える。大型の掘立柱建物の柱穴や溝状の遺構から出土するものがある。柱状高台の前段階で出土するのが厚底の器形である。これは柱状高台が出現する直前によくみられる形状(八峠2019)で、周辺では築ヶ谷遺跡と擲塚遺跡で出土している。

手づくね皿は山ノ下遺跡で出土するものの、主体となるのは口縁部を一段ナデしたものである。中世前期の手づくね皿は、いずれも二段ナデから一段ナデへの変遷を辿る(中世土器研究会1995)。山ノ下遺跡では二段ナデする段階の手づくね皿と併行する遺物、陶磁器でいうならば青磁の内面に劃花文をもつ段階のものが少ない時期が存在し、下前田遺跡の2号土壇は二段ナデから一段ナデへの過渡期とみられる資料である。一段ナデの手づくね皿が出土しているのは、山ノ下遺跡のほか宮ノ下遺跡、広瀬廃寺、西側の大日寺遺跡群がある。広瀬廃寺は庭園をもつ寺院で、池跡から多数の手づくね皿が出土した。

倉吉地域の古代末から中世前期における遺跡の変遷について概観すると、11世紀代は台付皿の分布にみられるように国庁跡と周辺の一部に主要な遺跡がある。12世紀の様相を柱状高台の分布で見ると、国庁周辺は集約的から面的に広がりをもつようになり、東側の大原廃寺は機能するもの下限の様相を示す。山ノ下遺跡で拠点的な様相を示す。13世紀に出土する手づくね皿や畿内周辺の瓦質土器の分布をみると、山ノ下遺跡では北西側に建物群があるものの建物の規模からみて拠点的な性格は失われる。むしろさらに南側に位置する広瀬廃寺では四面廂の建物や庭園など、京都との繋がりをもつ性格が想定される。

14世紀以降、鎌倉時代の終わりから南北朝期にかけて遺物は減少し、様相は不明瞭となる。ただし大日寺遺跡群や広瀬廃寺の周辺で多数の石造物がみられるようになる。山ノ下遺跡では北東側に中世後期の陶磁器類が出土する。これは北側に位置する市場城との関係を示すと考えられる。

## 第5項 まとめ

山ノ下遺跡から出土した土師器は、煮炊具が少なく供膳具を主体とし、とりわけ柱状高台土器の割合が高く、主要な建物の周辺や柱の抜き取り痕から出土する。柱状高台は主に皿や坏の受け台として

饗宴で使用されることが明らかになりつつある(八峠2019)。主要建物群は、おおよそ11世紀後葉から12世紀後半にかけて、大型の掘立柱建物の柱を補修し、あるいは建て替えを行いながら維持された。実際に柱状高台は伯耆国府と周辺域である下前田遺跡、河原毛田遺跡、今倉遺跡、不入岡遺跡のほか、中世の墓を検出した打塚遺跡、宮ノ下遺跡や、古代や中世の寺院である法華寺畑遺跡、大原廃寺、広瀬廃寺など、墓や寺院から出土する。さらに遺跡の分布をみると、山ノ下遺跡は伯耆国府のほぼ南、さらに南に広瀬廃寺があり、伯耆国府や法華寺畑遺跡の東側には大原廃寺、西側には大日寺遺跡群があり、これらの寺院は距離的にも方位的にも、境界としての位置にあたると思われる。

このような寺院の中で注目すべきは広瀬廃寺である。伯耆国府の南約7.3kmに位置し、廂をもつ建物跡、池や鑊水状遺構を含めた庭園遺構等、当時の京都における浄土式庭園に類似する。この池跡を中心に手づくね皿が多数出土している。

山ノ下遺跡の主要な建物群は12世紀後葉段階には柱が抜き取られ、土師器の皿や坏、柱状高台等が入られる。その後13世紀になると北東側に建物群が展開するものの、区画溝や大型の建物はなく一般的な集落にちかい。出土遺物は手づくね皿、瓦質土器の鍋や羽釜、青磁などの貿易陶磁があり、畿内周辺から搬入されたとみられる立ち上がりの高い羽釜や小型の羽釜は県内でも他に類例がなく、畿内周辺との強い結びつきを示すものである。周辺には中世後期の陶磁器類が出土するようになり、北西の丘陵際に位置する市場城との関係がうかがえる。

中世土器からみた倉吉地域の変遷は、伯耆国府は庁内の遺構は減少するものの、西側周辺に広がりを見せる。山ノ下遺跡では概ね12世紀代に有力者による中心施設が機能する。13世紀になると中心施設は移動し、北東側には集落が展開する。南側には庭園をもつ広瀬廃寺が造られる。

山ノ下遺跡で大型の建物群の展開した時期は伯耆国庁跡の衰退期にあたる。中世前期における国庁域の機能はもとより、小鴨氏の果たした役割等を検討していく必要がある。今後とも資料の増加に期待したい。

## 参考文献

- 伊野近富2019「平安京左京内膳町跡の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』27日本中世土器研究会
- 岡田裕之・八峠興2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要5』鳥取県埋蔵文化財センター
- 岡平拓也2015「Ⅲ 五畿七道の国府 山陰道 伯耆」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会編 吉川弘文館
- 鳥取県教育文化財団2002『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡ほか』
- 鳥取県教育文化財団2005『南原千軒遺跡』
- 鳥取県埋蔵文化財センター2007『南原千軒遺跡2』
- 鳥取県埋蔵文化財センター2008『南原千軒遺跡Ⅲほか』
- 中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』
- 中井淳史2011『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
- 八峠興2004「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』XⅧ 日本中世土器研究会
- 八峠興2019「柱状高台土器の再検討－山陰地域の視点から－」第38回中世土器研究会資料
- 山本信夫2018「第6章 第2節 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の分析」『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団



## 第2節 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の分析

山本信夫

### はじめに

山ノ下遺跡の平成28年度調査分は報告書として刊行済みであり、出土貿易陶磁について定量分析を行い、大形掘立柱建物その他建物について時代考証など基礎成果を得ている。今回は平成30年度に隣接地の調査を実施し、前回以上に貿易陶磁を出土した。大形掘立柱建物についてさらなる全体規模や配置など知見が得られており、貿易陶磁からの追加検討を行う。内容構成順や表はできるだけ前回と統一的仕様とし、後段で前回と今回分を総合化する。

### 第1項 陶磁分類の前提

出土貿易陶磁のうち古代・中世について細片を含め全点抽出した。陶磁分類は註1に示す前回と同じ文献を使用する。今回新たに追加された陶磁種類については関連図(第214～218図)を補足した。表A(第72・73表)は本文中で記述省略した資料を含む陶磁器全点の層位、遺構別内訳である。

#### 1 陶磁の記録化方法と総合化

今回出土数は152点。調査面積は前回7000㎡に対して今回5000㎡と少ないが、出土陶磁数は約2倍弱に達している。ただし遺構出土陶磁数は前回同様少ない。

一部の陶磁は別の遺構や層位で接合し、この場合は1点としている。

中世までの全出土陶磁第A表では器種分類の後に( )の点数表記があり、別遺構や層位で接合した同一個体は第A表にはそれぞれ点数を記入し、帰属する一方の遺構・層位に1個体資料として表示する。

(1△1)の表示は異なる遺構・土層出土の接合により一方に帰属させ、他方の数値には計上しない印で(1△1)=0点を示す。遺物帰属遺構・層は発掘による新旧関係がある場合、古期の出土層に含む事が前提で、新期からの混入(可能性)が明らかな場合は説明を付記する。また新旧関係不明の場合はどちらか一方に帰属させる。

#### 2 推定出土個体数と総破片数の関係

今回出土陶磁の中に少数接合例があり、また前回と今回出土が接合した例もごく少数ある。接合資料は全体数からみれば僅かな数であり、総破片数が想定可能な最大個体数となる。一方、口縁・底部のみで残存率を基準にした一定個体算出法もある。二つを較べた場合、消費地においては総破片数の方が適正であり、その理由は、出土陶磁が各多産地で構成され、個別資料の分類は産地推定に有用だがこれも1基のみの窯製品とは限らない事による。口縁、底部などの要件を欠く体部破片でも他の陶磁と完全に差別化できるものがあるが、これは形状不明でも1個体となる。この属性範疇の把握は陶磁分類精度によるところが大きく、さらに各遺跡間の比較や評価といった点において、総破片数と内容は共通土台として活用しやすい。

なお個体算出法は単一の窯における時期別、生産量推定や、一過的な特定儀式などに応じた生産・廃棄行為では有効となる場合もあるだろう。

## 第2項 山ノ下遺跡貿易陶磁(平成30年度出土)の分類

註1にあげた各陶磁分類原書は「類」、「群」の型式名の別がある。条坊XVと上田青磁分類は「類」、森田白磁分類と小野染付分類は「群」としている。「群」は椀・皿・坏など個別器種を括ったより広い大分類であり、「類」は器種別大分類が先頭となり記号順序が異なる。以下の説明は椀・皿など器種名を先に示す。陶器は胴部破片のみで器種を絞るのが難しく釉も多様であり、器種固定できない場合は胎土、成形・調整、施釉法などの共通要素として括れるA・B・Cの群別表記としている。

一部は他地域から搬入された国産陶器他を取り上げており、これは掘立柱建物の年代検討に有用と目される資料であるが、器形全体まで判明するものがない。破片は胎土、手法に限られるため大枠の分別に止めた。これらの確定は産地製品に通じた各専門分野の目を必要とする。

以下は資料番号[Po--◆]・器種分類名・(破片数)の順に記す。[Po--◆]は本文前記の遺構説明内記述および遺物観察表、陶磁写真図版番号と一致する。

### 1 遺構出土陶磁

#### 掘立柱建物13[3142・3149・3188柱穴] 出土陶磁器(第83図、第20・41・42表、図版59・88・89・91)

遺物は柱穴抜き取り跡出土が大半であり、建物創建時を直接的に示すものではない。

#### 白磁

3142柱穴出土。Po931は椀Ⅳ～Ⅷ?類(1)、Po930は椀?Ⅳ～Ⅷ類(1)、Po197は壺Ⅱ×Ⅲ類(1)でⅡ類の可能性が大きい。Po963は器種不明小片(1)。

3149柱穴出土。Po196は椀Ⅳ類(1)。

3188柱穴出土。Po932は椀Ⅳ～Ⅷ?類(1)。

これらのうちC期確定の類は椀Ⅳ類(1)に限られ、他の陶磁はC、D期の別が定まらない破片である。確実なD期陶磁が皆無である事から不明なものについてC期として可能である。

なお前回の柱穴718ピット出土では越州窯系青磁Ⅲ類壺・水注Po102の同一個体2片がある。今回さらに同一個体と見られる小片Po979(1)が表土で出土している(図版90-5)。Ⅲ類は上限B期であるがC期にも継続出土が確認されるため前回との矛盾はない。3149柱穴出土椀Ⅳ類はB期に遡らずC期であるから年代観の補強となる。

#### 国産搬入品他

貿易陶磁と直接伴出したものはないが、掘立柱建物13の3115・3138柱穴には須恵器・甕胴部が出土した。甕は胴部外面に平行叩き、内面に同心円状当て具痕が残り刷毛目再調整痕は不明である。3124柱穴には東海系壺の頸部と胴部から高台までのやや大きな破片が出土し、1個体と見られるが接合しない。頸部外面、胴部から底部内面一部に灰釉(自然釉か)がつく。前回調査の柱穴713ピット出土須恵器壺Po129と今回調査3010a溝出土の小片は接合した。壺は長胴形である。東海系は灰釉末期、山茶椀系、古瀬戸、常滑・渥美系などの範疇が推定される。

3314ピットは掘立柱建物空間内検出の単独ピットで、須恵器壺等の破片がまとまって出土している。建物との前後は不明だが、建物時期の手掛かりに有用と見られる。須恵器壺は口縁～頸部、胴部で部分的な接合のみである。口縁形状は典型的な東播系とは異なる。

### 掘立柱建物20[3043柱穴] 出土陶磁器(第52図、第17表、図版50・87)

#### 初期高麗青磁

椀蓋×[皿](1)、Po69椀Ⅱ類に伴う蓋Ⅱ類の可能性が大きく、C期である。胎土は粘質味の茶色味をなし、釉はこの影響で茶褐色を呈し、通例の青味をおびた緑色とは異なる。高麗青磁は白色紗粒が比較的目立つが本例には少ない。残片体部は蓋か皿と見られる傾斜であるが、以下の特徴からここでは蓋と見る。蓋の場合は環状撮み(皿の場合は高台)を有するものとなり、内面見込み周囲に段を有する。環状撮みは比較的高く本例では先端部を欠する。内外は全面施釉で、天井部内外面に目跡はなく、撮み端部に目跡がつくと見られる。重ね焼きをしない精製タイプであろう。天井部表面には白灰色が浮き出し胎土中にまで入り込むが、不純物ではなく焼成不調の一部と見られる。この種の蓋は椀Ⅱ類のセットである。

椀Ⅱ類について補足する。椀Ⅱ類は高い高台を有し、体部は丸味の強い内湾形で、金属器形態に由来する。上色釉の例では僅かに青味がかかった緑色であるが、茶褐色味をおびるものがある。体部外面は蓮弁文と無文の例がある。蓮弁文では幅広の線描蓮弁の各弁内部に二条の幅広凹面を削り込み半陽刻ふう施文となる。また粗製Ⅲ類瓶の胴部施文に同様な手法による例があるが、文様は粗方となる。山ノ下例は体部の多くを欠するため、文様の有無は明確ではない。

### 666溝 出土陶磁器(第57図、第18・41表、図版53・88・89・91)

#### 白磁

Po122は椀Ⅳ類(1)で、表土出土(取上No543)と接合した。

Po941とPo942は椀(2)である。

### 3010a溝 出土陶磁器(第103図、第22・42表、図版61・88・89・91)

#### 白磁

Po267は椀Ⅳ類(1)、Po954は椀×皿類(1)、Po268は壺Ⅲ類(1)、Po961・962は小片(2)である。

### 3010b溝 出土陶磁器(第115図、第26・41表、図版64・88～91)

#### 白磁

Po374は椀ⅩⅢ-b類(1)、Po373、Po915は椀Ⅳ類(2)、Po376は椀Ⅳ1類(1)で表土以下出土の取上No.372(1)と接合した。Po375は椀Ⅳ1a類(1)で前回攪乱土出土Po244(1)と接合した。Po925は椀Ⅳ～Ⅷ類(1)で内面下位見込みに段①を持つ。Po377は椀Ⅳ1×Ⅵa類(1)でⅣ1a類の可能性が大きく、3010a溝出土取上No.1332と接合した。Po935は椀Ⅴ1×Ⅵ×Ⅷ類(1)でⅤ1・Ⅵ類の可能性が大きい。Po379は壺Ⅱ類(1)である。

#### 陶器

Po378は暗茶褐釉小壺口縁小片(1)。胎土は硬質だが黄灰色をなし、粒子に混入物は少なくややざ

らつき感がある。内外施釉で釉は均一的に掛かる。口縁端部は施釉が薄くなり、胎土の黄色味が出る。明るい胎土色のため釉は黄ばみのある黒褐色(暗茶味)となる。口縁は外面がやや肥厚し丸味をなす。推定口径5 cm前後、1/8破片。

### 3010c溝 出土陶磁器(第119図、第27表、図版67・88・89)

#### 白磁

Po406は椀Ⅱ類(1)。

### 3010d溝 出土陶磁器(第121図、第27表、図版68・88・89)

#### 白磁

Po416は椀Ⅱ類の可能性(1)がある。

以上のうち年代確定資料はC期白磁椀Ⅱ、Ⅳ、Ⅳ1×Ⅵa、壺Ⅱ類でD期の確定資料はない。他はC×D期不明白磁片の他、時期幅の絞れない壺Ⅲ類片がある。3010b溝の暗茶褐釉小壺はC×D期不明でこの期の例ならば珍品となる。3010溝全体ではC期のものが多い。

### 3010溝 国産搬入品他

3010b溝では遺構時期推定に有効な他地域からの搬入品がある。Po370は備前系の須恵器椀口縁で類例から底部は平底とみられる。焼成は瓦質に近く、体部は淡灰黄色、口縁部は主に外面側に黒変部が帯状に回り、同一器種を重ね焼きした痕跡である。

須恵器甕胴部は3010a、b、c各層に出土したが個体のまとまりがなく別個体の可能性がある。形態不明で外面に間隔の粗い平行叩き目、内面は同心円状当て具痕を刷毛目で消すものが多い。手法は東播系と大差はなく他の窯も含む類似製品と見られる。

後段では建物群と溝年代について再度遺物検討を行う。

### 3022溝 出土陶磁器(第19図、第15・42表、図版87～92)

#### 白磁

Po4は皿・森田D群(1)、Po968は壺Ⅲ類(1)である。

#### 龍泉窯系青磁

Po5は椀Ⅰ類(1)、Po972は椀Ⅰ類(1)である。

#### 国産陶器

Po6は東海系(1)壺・瓶と見られる。丸味を持つ肩部であるが、肩部器壁はかなり厚く胎土に黒斑は少ない。胎土は灰色で硬質、比較的緻密な感がある。肩部外面には横凹線(圏沈線)が入り、凹部には灰釉が一部残るが釉は殆ど剥落する。東海系では古瀬戸が一つの候補となる。

上記中、最新はⅠ、Ⅱ期の白磁森田D群であるが、遺構は近世である。

### 3056土坑 出土陶磁器(第123図、第27表、図版68・88・89)

#### 白磁

Po431は皿Ⅱ×Ⅲ類(1)で表土以下取上No.152と接合し、C×D期不明。

**1面3田 出土陶磁器(第174図、第41表、図版90)****陶器**

Po908は壺胴部(1)で外面に光沢のない茶褐釉を掛け、内面は無釉である。大形壺の可能性を持つが定かではない。この場合は群以外の大形器種属性となる。

**2 包含層出土の貿易陶磁の分類**

調査地の包含層は地区により必ずしも一定ではなく、間の層がない場合や、層が連続しない事もあり、上位層を欠落し直ちに下層V・VI層に達する地区もある。以下のⅢ-2層までは遺構時期決定に関して直接的な根拠とできない点がある。

**Ⅲ-1層 出土陶磁器(第151図、第30・41・42表、図版87~91)****白磁**

Po916は椀Ⅳ類(1)、Po514は椀Ⅳ~Ⅷ類(1)、Po928は椀Ⅳ~Ⅷ類(Ⅶ類は除外)(1)、Po944は椀(1)である。Po513は椀Ⅳ×Ⅴ×Ⅺ?類(1)。釉色良好で内面見込み周縁に段を持つ。椀Ⅳ×Ⅴ類以外にⅪ類の可能性もある。

**龍泉窯系青磁**

Po516は小椀Ⅲ2C類・直口縁(1)である。

**青磁**

Po980は不明片(1)。

以上C・D期の白磁が主となる。青磁はF期が(1)入り新期からの混入品と見られる。

**Ⅲ-1・2層 出土陶磁器(第151図、第30表、図版88・89)****白磁**

Po515は椀Ⅴ1類(1)。高台を欠するが体部は内湾し椀Ⅴ1類と見る。

**Ⅲ-2層 出土陶磁器(第152図、第30・41・42表、図版88・89・91)****白磁**

Po541は椀Ⅱ類(1)で口縁を欠するため以細分できないが、表土以下出土取上No408と接合する。Po926は椀Ⅳ~Ⅷ類(1)、Po540は椀Ⅴ×Ⅵ類(1)、Po960は小片(1)である。

**3 その他の出土陶磁****排土 出土陶磁器(第166・167図、第37・38・41表、図版88~91)****白磁**

Po920は椀Ⅳ~Ⅵ類(1)、Po783は椀Ⅳ~Ⅷ類(1)内面下位に段①を持つ。

**陶器**

Po828は黒釉椀(1)。体部外面は施釉法がよく分かる例で、光沢のない鉄錆色下釉(化粧土)を薄く掛け、光沢のある黒茶釉を上へ施す二重掛けである。焼成は硬く胎土は黄灰色で明るい。後述する表土出土例に較べて質は落ちる。

## 攪乱土 出土陶磁器(第166・167図、第37・38・41・42表、図版87～91)

### 白磁椀

Po776・777はⅡ-1類(2)、Po913はⅡ類?(1)、Po778・784・917・918・919はⅣ類(5)、Po921はⅣ～Ⅷ類(1)、Po785はⅤ1×Ⅷ2類(1)、Po934はⅤ～Ⅷ類(1)、Po787・938はⅧ類(2)、Po937は椀Ⅴ2×Ⅵ×Ⅶ類×ⅢⅡ～Ⅴ・Ⅷ類(1)、Po789はⅨ類(1)、Po947・948は椀?(2)、Po951は福建系椀×Ⅲ(1)である。

### 白磁皿

Po796はⅥb×Ⅶb類(1)C期、広東系である。胎土は上質でⅦ類が適正かもしれないが底部を欠き、分類細別できない。内面に花卉・葉文を一周連続するタイプである。花卉・葉文の山形輪郭は3本単位の櫛目、脈芯には2本単位の櫛目文を入れる。

Po791・793はⅡ類(2)、Po957はⅡ1a×Ⅲ類(1)、Po958はⅤ～Ⅶ類?(1)、Po794はⅤ×Ⅵ類(1)など想定される。Po798は森田B群×森田D群硬質?(1)、Po800はⅢ・森田E群(1)である。Po797はⅢⅦ類?×森田D群硬質(1)で類確定には難があり、攪乱土のためD群に含めた。

Po964(1)は不明である。Po939は森田E群?小片(1)である。

### 白磁坏

Po801は小坏・森田E群(1)である。

最新陶磁はK期である。

### 白磁壺

Po967、Po966は壺Ⅱ類(2)である。

### 青白磁

Po804(1)は梅瓶で胴部は傾きの少ない細形をなし、下位にかけて肉厚となる。外面は太いヘラ彫りと櫛目文がある。水色味の強い釉を外面に掛け内面は露胎である。13世紀中頃～14世紀初頭に出土例が多い。

### 龍泉窯系青磁

Po809は椀Ⅰ類(1)、Po810は椀Ⅰ2～4類(1)、Po812は椀Ⅱb類(1)である。Po816椀Ⅳ類(1)、Po821(1)椀Ⅳ類以降の元・明代である。

龍泉窯系青磁はD期から元・明代まで及ぶ。他に近世陶磁が入る。

### 同安窯系青磁

Po826はⅢⅠ1b類(1)である。

### 青磁

Po974は元～明(1)の龍泉窯系とみられる。

### 中国陶器

Po832は盤Ⅰ-2類(1)、C群。口縁部が一部残存し類別できる。表土出土の盤Ⅰ-bと同質で、胎土に粗い砂粒が多く混入される。黄釉は内外面に掛かる。通例では内面全体から口縁外面上位に施釉する。口縁部周辺の釉は拭取られ、上面には焼成時の器物重ね目跡がある。釉下に化粧土を掛け、さらに鉄絵を描く事も多いが、本例は体部以下欠落のため鉄絵の有無は不明である。

### 朝鮮陶磁

Po827Ⅲ(1)。胎土は唐津と異なり粒子が比較的目立つ。内外に暗緑褐釉を施釉し内面と高台畳付

きに大きく目土を残す。I～J期に多いタイプである。

### 表土・表土以下 出土陶磁器(第166・167図、第37・38・41・42表、図版87～91)

#### 白磁椀

取上No.408はII類でPo541のⅢ-2層出土と接合しⅢ-2層に含む(1△1)。Po775・912はII類(2)。Po779・780・781・914・922はIV類(5)、取上No.372はIV1類(1△1)で3010b溝Po376接合資料、Po924はIV～VI類(1)、Po923はIV～V類(1)、Po786はⅧ類(1)、Po927・929はIV～Ⅷ類(2)、Po782はIV～Ⅷ類(Ⅷ類を除く)(1)で内面体部下位の見込み周囲に段①を持つ。Po788はV1×VI1類・(ⅢII類?)(1)、Po933はV×VI×Ⅷ類口縁(1)、Po936はV2×VI×Ⅷ類外反口縁(1)、Po943は椀?(1)、Po940・945は椀(2)。Po790は椀[C×D期](1)で内面に櫛・篋文があり、釉色は灰色味が強く同安窯系青磁の可能性もある。Po946は椀?(1)である。

#### 白磁皿

Po792はⅢII類(1)。取上No.152はII×Ⅲ類で3056土坑出土Po431と接合した(1△1)。Po795はIXb×c類(1)、Po959は森田D群(1)、Po799は森田D群硬質?(1)。

#### 白磁椀皿不明

Po949(1)は広東系、Po950・952・953・955・956(3)は福建系である。

#### 白磁壺

Po965は壺II類(1)、Po803はII×Ⅲ類?(1)とみられ断面に漆継痕跡を残す。Po802はII×Ⅲ類(1)。内面に施釉しない点でII類胴部の可能性がある。Po969は壺Ⅲ類(1)である。

#### 青白磁

Po806は皿。底部外面は丁寧な回転削りで釉を掻き取り、周縁部は小さく段差がつくが平底の類である。この露胎部に円形焼台痕があり環状に黒色粒子が付着する。Po970は青白磁?皿(1)である。

Po805は坏・B'(1)で水色の良色釉をなす。内面に印花陽文を持ち、体部外面中位に低い凸帯を回す。B'は白磁森田B群と相似形をなすが器肉は薄い。口縁は欠するが端部はおそらく口禿となる。G期森田B群(白磁)と時期は重なるがこれよりも遡るF期には出土する。

#### 青磁

Po808は越州窯系Ⅲ×龍泉窯系0類の水注(1)と見られる。把手一部のみで他の部分は無く器形特徴は全く掴めない。胎土と釉は良好な点もあり、胎土は灰色で不純物粒子はなく均一であるが、やや砂味を帯びており焼成温度が低かったため素地が十分溶けていない感がある。越州窯や龍泉窯の例でもこのような半焼成例を見ることがある。胎土は上質な感がある。C期。

#### 越州窯系青磁

Po979は壺Ⅲ類(1)小片で、前回掘立柱建物13柱穴718出土2片[Po102]と胎土・釉調が近似し同一個体と見られる。今回の集計には加えたが、前回と合算した場合には数は1個体として減算する。

#### 青磁または陶器

Po807は中国産青磁または陶器水注である。口縁部から頸部上位、把手接合部を残す。口縁端部は頸部と同じ厚さで外へ折れ、仕上げの端正さはなく鈍い角形に近い。端部上面には白色粒子が付着し目跡の可能性はある。把手上部は口縁直下の頸部に接合され、歪さがあり、把手外側面には線刻凹線が一部残る。胎土は混入物が少なくわずかに黒斑を含み、釉は内外に施釉される。本例は精緻さを欠

第72表 山ノ下遺跡出土貿易陶磁一覧：表A(1)

陶磁区分		B<C(BよりもC可能)、C,D(CとDあり)、C'D(CD不明)、C-F(C-Fの範囲)																		
陶磁ランク		BC		C			C>D	C・D		D			C-F							
遺構・層位名		越州3		白磁	白磁	白磁	陶器中国	高麗	白磁	白磁	青白磁	陶器中国×高麗	白磁	龍泉I	同安	陶器中国	陶器中国	陶器中国	白磁	
		壺水注	碗坏皿	碗坏皿	壺水注合子	壺	青磁	碗坏皿	碗坏皿	青白磁	壺	碗坏皿	碗坏皿	碗坏皿	碗坏皿	壺	碗坏皿	碗坏皿	壺	碗坏皿
排土	白磁 陶器									2										
視乱土	白磁			8						2				2						1
	白磁									2										
	白磁			4						1										
	白磁			1																
	白磁																			
	白磁																			
	白磁																			
	白磁																			
	白磁																			
	白磁																			
表土・表土以下	青白磁																			
	龍泉窯系青磁																			
	同安窯系青磁														1					
	青磁																			
	中国陶器																			1
	朝鮮陶磁																			
白磁	白磁			7						1										
	白磁									4				1						
	白磁			1						1										
	白磁			1						4										
	白磁			1																
	白磁			1						1										
青白磁	青白磁																			3
	青磁	1																		
	越州窯系青磁	1																		
	青磁×陶器												1							
龍泉窯系青磁	龍泉窯系青磁																			
	龍泉窯系青磁																			
中国陶器	中国陶器																			2
	中国陶器																			1
III-1層	白磁			1						2										
	龍泉窯系青磁		1																	
III-1・2層	白磁			1																
III-2層	白磁			1						2										
1面3田	中国陶器																			1
666溝	白磁			1						2										
3010a溝	白磁			1																1
3010b溝	白磁			4						1										
	陶器			2																
3010c溝	白磁			1																
3010d溝	白磁			1																
3022溝	白磁																			1
3022溝	龍泉窯系青磁																			
3056土坑	白磁									1										
掘立柱建物13 3149柱穴	白磁			1																
掘立柱建物13 3142柱穴	白磁									2										
掘立柱建物13 3188柱穴	白磁									1										1
掘立柱建物20 3043柱穴	初期高麗青磁							1												
出土点数		2	1	38	4	0	1	0	30	2	2	3	7	1	0	4	2	6		
陶磁区分別小計		3		43				0	34			11						12		
奢侈品●ランクAB数		2		4					2									2		6
陶磁区分●ランクAB小計		2		4				0	2			0						8		
■ランクC陶器										2								4		
陶磁区分■ランクC陶器		0		0				0	2			0						4		

陶磁ランク：●…A・Bランク ■…Cランク △1：接合点数減(マイナス数)、古い遺構に帰属(混入除外)、同時期では良好な遺構に含む





く点で、類別は越州窯系青磁(Ⅲ類)の端正さから逸脱する感があり、初期龍泉・同安窯系青磁0類は一つ候補に考えられるが、陶器B群水注Ⅱ×Ⅳ類と見ておく。Ⅱ類は頸部上部が開き、Ⅳ類は頸部下方がやや広がる特徴差を持つ。本例はⅣ類に近い感触はあるが、口径や傾斜を掴む事は無理な小片で、胴部形や高台特徴も定かではない。陶器では釉剥落化、釉色の冴えないもの、茶褐色を帯びるなど粗悪化、不均等化するが、本例の釉は青磁に近い。陶器水注Ⅱ、Ⅳ類はD期(12世紀中・後半)には確実な出土例があり、一段古いC期に遡る可能性もある。一応陶器数に含め、今後の検討課題としておく。また前回報告ではB群壺類の胴部下半が出ており追記しておく。

口縁断面が角形に近いものや口縁上面が若干凹面をなすB群水注類例として、博多聖福寺(今回再掲載)ほか博多遺跡、大宰府条坊跡14次、筑前・福岡県二丈町瀬崎・中牟田例などがある。

### 龍泉窯系青磁

Po971は椀Ⅰ類(1)、Po811は椀Ⅰ4類(1)で内面に二条の片彫りによる区画文(花様文)を描く。Po976は椀×皿Ⅰ類?(1)、Po825は皿Ⅰ-1c(1)で底部内面に劃花文、一部に点描櫛目文を有する。D期。Po813は椀Ⅱb類(1)、Po823は小椀Ⅱb類(1)、Po814は椀Ⅲ1B類(1)、Po815は椀Ⅲ2C類直口縁(1)、Po819は椀上田DⅡ類(1)、Po818は椀・上田CⅡ類(1)で外面上部に篋彫り雷文帯、下位にラマ式蓮弁、内面には篋彫り草花文を持つ。H期標識陶磁。Po977は椀Ⅳ類(1)、Po817は椀[元～明](1)で2片接合した。Po978は椀×皿[元～明代](1)、Po820・975は椀(2)である。Po973は椀[龍泉窯系?](1)である。

Po822は通常の坏よりも高台径が広い大坏Ⅲ類(1)で、出土例は少ない方である。F期。

Po824は小壺×合子身Ⅳ類～明代(1)、体部外面には線刻の菊花蓮弁文を入れ、内外施釉後に高台豊付と周囲の釉を削る。やや粗製の感がある。

### 陶器

Po830・831(2)は盤Ⅰb類底部で陶器C群に属する。体部下位と底部の境となる破片で、底部外面は板起こしのままの未調整となる。通例によれば口径は大形で器高は低く、一見洗面器のような形を呈する。外面中位以下は施釉されず露胎となる。内面には太筆描きの鉄絵があり黄釉を施す。大形のわりに器壁は薄くつくられ、胎土には白色、褐色班の粗砂を多く混ぜる特徴があり、破片でも他の陶器と明瞭な区別ができ、分類も判明する。これは大形器体成形の際、潰れを防止する意図があったと見られる。攪乱土出土品には盤Ⅰ-2類口縁部(鉄絵は不明)Po832があり、これらは同一個体の可能性もあるが、接合しないため全体は3点とする。類例図にはⅠ-1類(鏢状の広い口縁)とⅠ-2類(断面丸味を帯びた方形状や玉縁状に近い口縁)をあげている。両方ともC期上限となるが、Ⅰ-1類は13世紀にほぼ減少し、Ⅰ-2類は継続的に出土する。

### 黒釉椀

Po829は黒釉椀(1)で内面見込み周囲に段を有し、口縁端部は欠損するが口縁下に屈曲を持ち、中国式に言う「匙口」をなすと見られる。胎土は黒灰色味、砂味の硬質で建窯製品に近い。体部下位の外表面は焼成のため黄褐色化する。

### 第3項 山ノ下遺跡出土陶磁の類例

#### 1 分類別器種数の追加(補足)

今回新たに追加された器種は(1)標識・準標識の一般食器8種(2点は初期高麗青磁、朝鮮陶器)のうち、(2)前回大分類に含まれるが細分類で浮上した3種、(3)ランクA・B相当器種4種、(4)ランクC陶器3種となる。時期区分別の内容は以下となるが、(3)、(4)は時期細分できないものが多い。一般食器の中でC期白磁器種は多数に及ぶが器種の増は無く、D期では青磁器種が僅かに増となり、またF、H期に若干の増がある。(3)のランクA・B相当と(4)のランクCは通常全体に占める量は僅かであるが、一般食器類数増加と同じ位の種類数が加わる点は注意される。(3)のランクA・B相当C期青磁1種の追加、C・D期以後も3種あり、C・D期後続時期の評価を上げる要素となる。

時期別

#### (1)(2)8種

C期、初期高麗青磁蓋Ⅱ類。

D期、龍泉窯系青磁・椀Ⅰ-4類、皿Ⅰ-2c類、同安窯系青磁・皿Ⅰ-1b類

F期、龍泉窯系青磁・椀Ⅲ-1B類、

H期、白磁・皿森田D群、青磁・上田椀CⅡ類

I・J期、朝鮮陶器皿

#### (3)4種

C期、越州窯系青磁Ⅲ類×龍泉窯系青磁0類・水注(把手)。

E～F期、青白磁・梅瓶、坏・B'(印花)

元～明代、龍泉窯系青磁・小壺×合子

#### (4)3種

D～F,G期、黒釉(天目)椀

C～F期、盤Ⅰ-2(Ⅰ-b)類(黄釉)

C・D期、水注Ⅳ?類

#### 2 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(第214～218図、図版113～119)

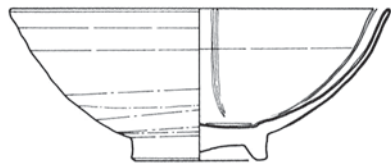
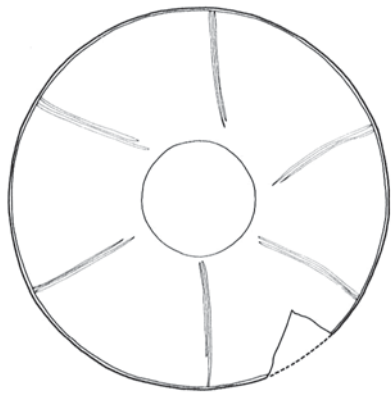
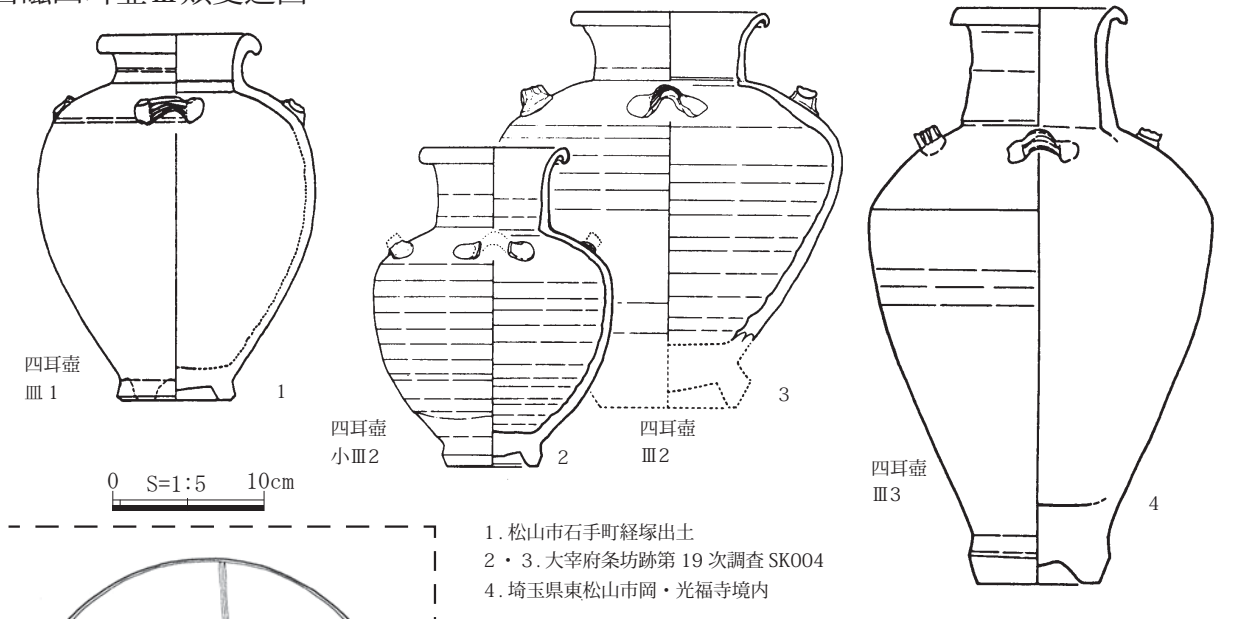
今回出土陶磁では新たに確認された類があり関連図を補足した。前回の関連図に掲載した類は省いており、合わせて参照願いたい。以下の類のうち(\*)印は各地遺跡にも普通にみられ、註1の文献では標識陶磁として図示される事が多い器種で、山ノ下遺跡の評価に作用するものと見られ図示した。

#### 白磁

\*)皿、森田D群(H期上限～I期)

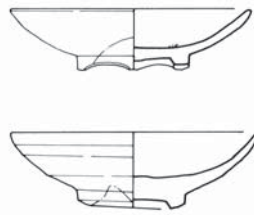
\*)椀Ⅱ-3×4b・皿Ⅵ・Ⅶb(C期)前回報告で少数抽出された。広東系白磁の一般的な標識陶磁C期のうち文様を有する種類(b)である。北部九州などでは比較的目につくが地方には少ない。今回も皿が確認される。

白磁四耳壺Ⅲ類変遷図



碗Ⅱ-4b  
熊本県灰塚遺跡SK205土壙墓

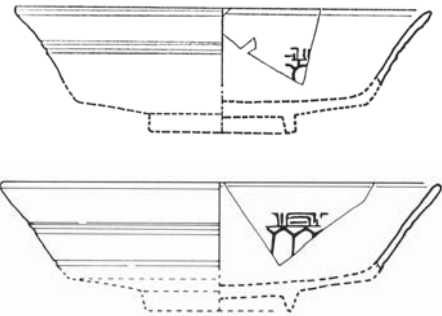
白磁



皿・森田D群  
大宰府推定金光寺跡

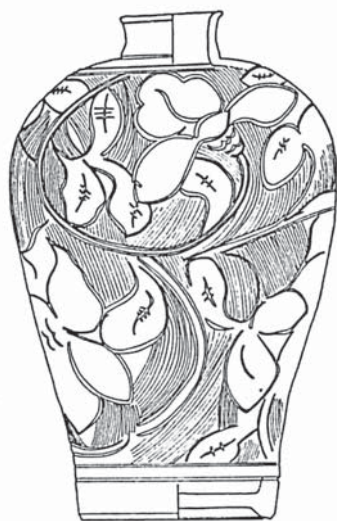
0 S=1:3 10cm

青白磁



坏・B'  
大宰府推定金光寺跡

青白磁 梅瓶



牡丹唐草文瓶  
京都市太秦井戸魔寺出土

0 S=1:4 10cm



唐児唐草文瓶  
京都市岡崎動物園法勝寺跡出土

第214図 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(1)

黒釉椀

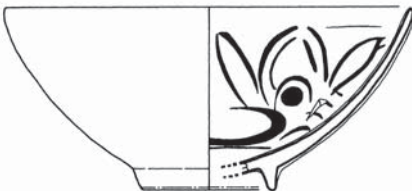


金沢市堅田B遺跡SD01 堀埋立

龍泉窯系青磁



椀 I-4b 類直口縁・外反口縁  
大宰府条坊跡第93次調査 ST060



椀 III-1b 類直口縁・外反口縁  
大宰府条坊跡第51次調査 S100

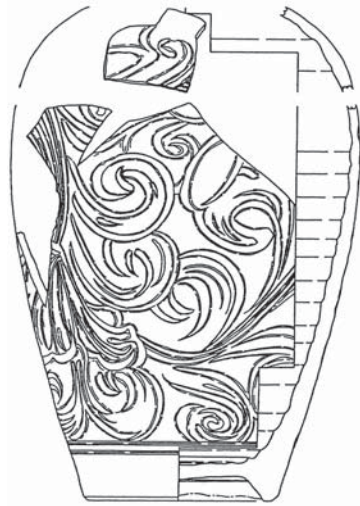


皿 I-2C 類  
大宰府史跡第45次調査 黒褐土

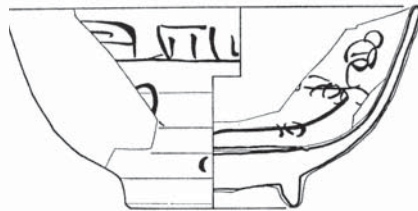
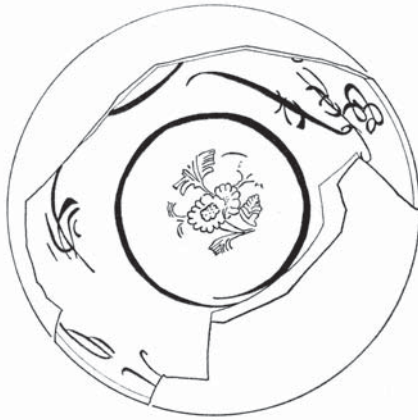
青白磁



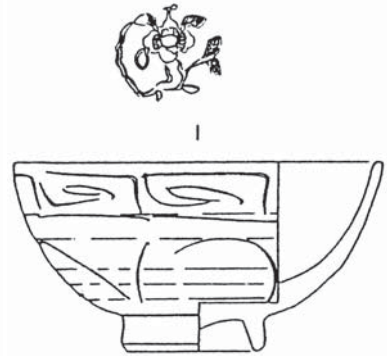
梅瓶  
金沢市堅田B遺跡SD01 堀埋立



0 S=1:4 10cm



上田椀 CII 類  
大宰府史跡第67次調査 (推定金光寺)



上田椀 CII 類  
和歌山市加太友ヶ島沖出土

0 S=1:3 10cm

同安窯系青磁

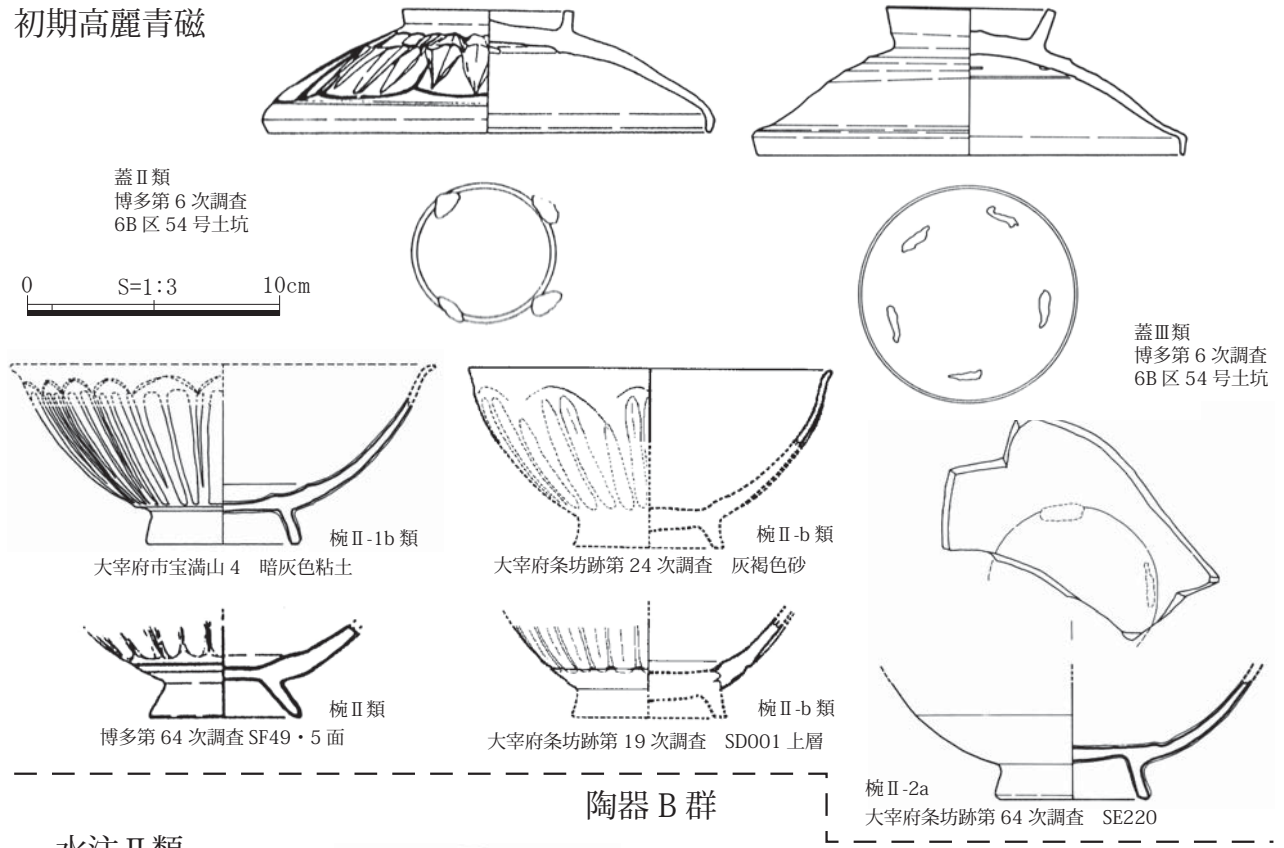


皿 I-1b 類  
大宰府条坊跡第64次調査 ST130

0 S=1:3 10cm

第215図 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(2)

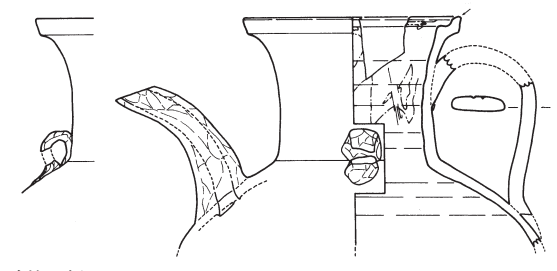
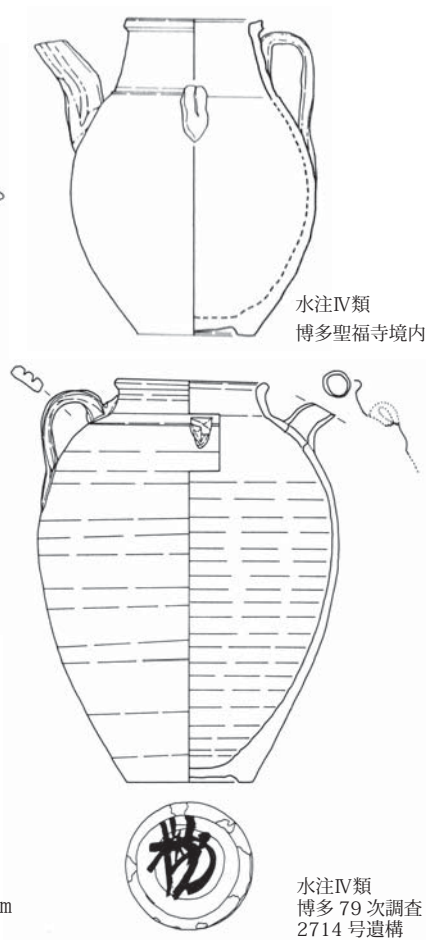
初期高麗青磁



水注Ⅱ類



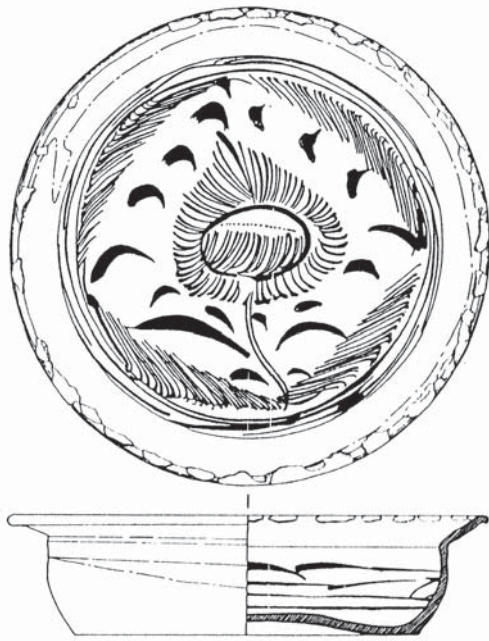
水注Ⅳ類



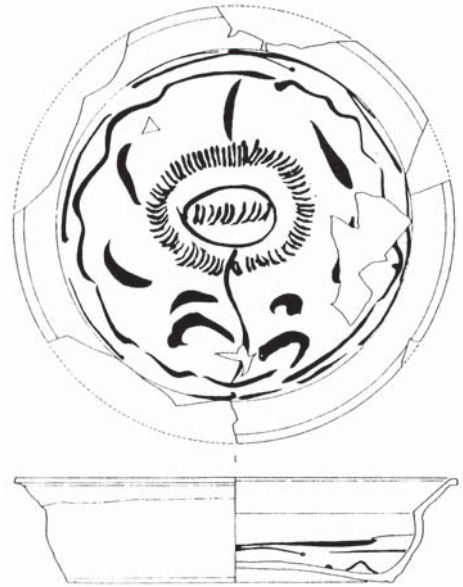
0 S=1:5 10cm

第216図 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(3)

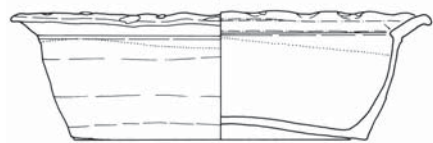
陶器 盤 I (C 群)



盤 I-1b 類 福岡市京ノ隈経塚 1 号主体部



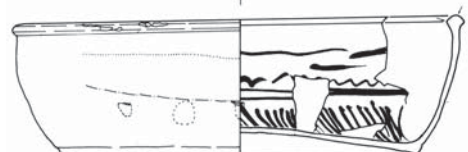
盤 I-1b 類 博多 37 次調査 SK96



盤 I-1b 類 博多 79 次調査 1827 号遺構



盤 I-1b 類 博多築港線 2 次 541 号土坑



盤 I-2b 類 博多 79 次調査 1827 号遺構

0 S=1:6 20cm

第217図 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(4)

陶器 盤 I (C群)



第218図 山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(5)



**青白磁**

坏・B' [Po805]

梅瓶(E～F期) [Po804]

**青磁**

\*)越州窯系青磁Ⅲ類×龍泉窯系青磁0類、水注 [Po808]

初期高麗青磁、蓋(皿)Ⅱ類(C期) [Po69]

\*)龍泉窯系青磁、椀Ⅰ-4類(D期) [Po811]

\*)龍泉窯系青磁、椀Ⅲ-1B類(F期) [Po814]

\*)龍泉窯系青磁、皿Ⅰ-1c類(D期) [Po825]

\*)龍泉窯系青磁、合子×小壺?(元～明) [Po824] (器形不明のため図なし)

\*)龍泉窯系青磁、上田椀CⅡ類(H期) [Po818]

\*)同安窯系青磁、皿Ⅰ-1b類(D期) [Po826]

**陶器**

\*)黒釉椀、 [Po829、Po828]

\*)盤Ⅰ-2、Ⅰ-b類(黄釉) [Po830、Po831、Po832] 内面鉄絵のものはbを付加。

黒褐釉小壺 [Po378] (出土類例完器なしのため図なし)

水注Ⅳ、またはⅡ類 [Po807] (C～D期)

朝鮮陶器、皿 [Po827] (Ⅰ～J期)

**第4項 分析結果****1 大形掘立柱建物群の貿易陶磁と年代**

前回報告で掘立柱建物12、13は東側一部が検出され、総柱の大形掘立柱建物(以下は建物と略表記)と判明している。今回は西側の延長部調査を行い前回想定よりも長大な規模となり、これと関係する建物2棟(19、20)が新たに確認された。これらの建物13、19、12、20の年代追究は本題の核心部となる。この建物4棟は別々の配置をとり互いに重複しない。

遺構について反復しておく。建物4棟のうち、①北寄りに建物12、20、②南寄りに建物13、19が配され、軒の接近個所が多い。①②はそれぞれの中で柱筋は揃う事から、L字形配置をとった異なる時期の2群である可能性が示唆されている。柱の切り込む層の違いはあるが、層は一定ではないため前後は明らかとなっていない。

陶磁器を伴うのは①群中建物20、②群中建物13のみであり、その数は少なく、また建物柱抜き取り穴出土のため建物撤去の時点に関わる出土状態を示す。

**新旧内容の一部修正**

今回判明した事実関係により、前回示した遺構と層位による新旧内容は一部修正必要な点があり、先にこの点をあげておく。

(1) 建物12の北東部に検出された666溝は建物12の東部から北部をL字形に囲む可能性が指摘されたが、今回調査において建物12最北列の東4個柱穴と666溝の一部に重複が判明し、(近接時期の場合でも)時期差が生じるため、666溝と建物12の同時利用は難がある。666溝は建物13・19に関連する可能性があり、この場合は建物敷地の東辺部を鉤形区画とした一部と想定される。

(2) 前回、建物13→12の古→新関係は「建物12と666溝は同時期である。」「666溝は建物13検出面の上に被るⅢ-1・2層から切る」という2点において成り立つ。今回は後の点のみが成り立つ。

### 建物13柱穴

前回の調査では越州窯系青磁壺・水注Ⅲ類、白磁壺Ⅱ類の2点が出土し、今回調査では白磁6点が追加出土し計8点である。追加白磁のうち、分類確定および時期の目安となるのは椀Ⅳ類1点(C期、11世紀後半～12世紀初頭・前半)、壺Ⅱ×Ⅲ類1点で壺はⅡ類の可能性が高くC期と思われる。他はC・D期(D期は12世紀中頃～後半)の別が不明となる福建省系白磁である。越州窯系青磁Ⅲ類は一段古い可能性を持つがC期も継続し、これらにより建物13の創建時期についてはB期に遡る含みを残しつつ実態としてC期となる。

陶磁器数8点のうちC期4点、C>D期4点となり、確定陶磁数からみて他の不明陶磁はC期の可能性が高い。

国産土器に注意すると、柱穴から中世須恵器、東海系陶器が出土している。須恵器は現状で産地を決定しがたい。東海系は灰釉末期、山茶椀系、古瀬戸、常滑・渥美系などの範疇が推定され、今後産地や年代幅について検討を要する。

### 建物20の柱穴出土陶磁

これも柱抜き取り穴出土が主で、建物撤去の時点に関わる。陶磁は初期高麗青磁・蓋Ⅱ類1点のみで、C期の確定資料である。建物20と建物13は別群と捉える場合は前後関係も出て来ることが出土陶磁からみれば両方C期であり年代差が生じるわけではない。

C期初期高麗青磁はⅠ、Ⅱ、Ⅲ類に分けられ、共蓋付き椀Ⅱ類の例はかなり少なく、蓋も博多例程度である<sup>(註2)</sup>。2001年段階における確実なⅡ類の大宰府出土例は9例ほどで、供出土器型式から見るとC期3例、D期の12世紀まで3例、以後3例である<sup>(註3)</sup>。このⅡ類の出土例は稀で管見の範囲では博多、大宰府、佐賀県大和町出土<sup>(註4)</sup>くらいである。

韓国側の生産地でも例は限られ、10世紀とされる舍利容器に使われた椀蓋一式のセットが知られるが、施文はⅡ類と異なる<sup>(註5)</sup>。日本出土例では目下のところⅠ～Ⅲ類を含めて11世紀後半よりも古い出土例はない。

### 3314柱穴

建物13の位置内の単独ピットで建物とは同時ではない。建物13との直接的な前後は不明である。陶磁器はなく上記した中世須恵器壺、甕破片が数個体分出土し、やや数は多い方である。これも産地や時期幅がわかれば建物群の時期の参考となる。

### 3010溝

3010溝は上記建物群の西外辺に並行する南北溝で建物群敷地の西を画する可能性がある。溝は直線でなく溝肩の東西に出入りがあり掘り直しによるa～dの時間差がある。層位的にはd→c, d→a, c→a, b→aの新旧関係が確認され、bは南側部分に位置し肩は西へずれて南側は消失する。(c、d)と(b)の切合い関係は不明である。溝中には土器が多く廃棄物溜りとなったようで、建物存続から廃絶下限までの時期幅を知る手掛かりが得られる。

貿易陶磁は白磁主体で陶器1点がある。

3010a溝：全5点中C期1点、C～Fの範囲不明1点、不明3点。

3010b溝：全10点中C期7点、C～D期3点。

3010c溝：全1点C期。

3010d溝：全1点C期。

3010a～d溝は計17点でC期確定は10点となる。他はC～D期の範囲3点、C～F期範囲不明1点、不明3点となる。C期断定のできない陶磁について補足する。3010a溝出土白磁壺Ⅲ類は形状不明の場合細分できず、破片範囲はC～F期、不明白磁片は小片でこれも類記号の付加は躊躇される。一方、C期確定陶磁は半数以上の10点あり、確実なD期以降の陶磁は皆無で、共出する在地の土師器、須恵器は13世紀まで年代の下がるものはない。以上から不明白磁はC期の可能性も濃厚(C>D)で、D期(12世紀中・後半)は下限時期幅の目安である。この場合白磁壺Ⅲ類はCD期のⅢ-1類が適切で、E～F期の類は省かれる公算となる。

3010溝出土の国産品には中世須恵器壺、甕があり、甕は数が多い方である。3010a溝出土須恵器壺は建物13柱穴出土品[平成28年度Po129]と接合した点は上述した。

3010b溝出土の備前系中世須恵器椀Po370(1)は口縁～体部である。同種のもは岡山県助三畑遺跡、井戸4で「養和元(1181)年」の紀年銘木簡と共伴しており、12世紀後半・末の年代一端が示される<sup>(註6)</sup>。溝と建物は使用時期が重なる場合には建物下限はここに置く必要はあるが、陶磁C期の数量確率が上となるため、上限年代は遡る可能性がある。この点は今後の課題である。

### 666溝

時期の確定できるものは椀Ⅳ類・C期のみで、他はCD期範囲である。前回の出土陶磁もC期である。溝は前回調査時に建物12の東部から北部をL字形に囲む可能性が指摘されたが、今回調査では建物12と重複関係が生じ、修正すべき事となる。

以上、建物、ピット、溝のあり方と出土陶磁の比較により、建物①②群はC期存続が妥当な線となる。またこれら遺構の陶磁は白磁が優勢で、D期標識陶磁の一つとなる龍泉窯系青磁Ⅰ類・同安窯系青磁は1点もなく、C期の可能性は高くなる。建物下限や廃絶時期については国産陶器も対象となり、各種を専門とする研究者の編年観によっては異同が出る可能性はある。

## 2 中世須恵器について

貿易陶磁以外に国産の初期中世須恵器が注意される。古代須恵器生産は10世紀に甕、壺、鉢など一部器種を残すが小形食器などの生産はほぼ淘汰される。京都近郊の篠窯では硬陶・須恵質胎土の緑釉

とともに須恵器を焼き、これも10世紀末や11世紀前半頃までが生産下限で、鉢、小形椀は大宰府にも僅かに出土するが末期的状況を示すに過ぎない。一方11世紀後半～12世紀前半には東播系をはじめ、初期備前窯、四国十瓶窯などの各地で中世須恵器が生産され始め、これに産地の不明な須恵器も加わる。器種は少なく、初期には小形平底椀、鉢、大甕、まれに頸部が喇叭状に開く長胴形瓶などが知られている。これらの窯の器種は細部特徴の差異はあるが成形手法に共通要素もある。東播系を除くと他の製品流通範囲は多少限られているようである。堅牢な国内産の生活雑器として鉢、大甕などは食に限ることなく多様な用途にも適し、経塚埋納物の外容器使用例の転用はその一端を示す。

山ノ下では大形建物の柱穴や周辺ピットで長胴瓶、甕が出土しており、建物関連とみられる溝にも須恵器甕や備前系椀が伴う。長胴瓶は2、3点出土しており、一箇所の複数出土例はあまり聞かない点で特異性もある。

山ノ下出土の大形建物に関係する不明陶器や貿易陶磁、中世須恵器については出土位置をまとめておく。以下は平成28年度調査出土分も取り上げた。

- (1) 678ピット(H28)、建物12の東辺外部、貿易品とは思われず、前回不明陶器とした鉢。外面上位は赤褐色、中位以下は灰黒色、内面は灰色。胎土は灰色で黒斑、白斑粒を含む。内外は横ナデの丁寧な調整で体部は内湾気味に立ち上がり、口縁断面は方形に近く単調なつくりである。
- (2) 657ピット、建物12の東辺外部、白磁椀Ⅳ類。
- (3) 666溝肩出土土師器集合。この部分は建物12北東隅の東柱列内であり、建物12と666溝は前後差がある。土師器は11世紀後半～12世紀であり、土師器集合部以外の陶磁はC期。遺構の前後はあるがその差は接近する。
- (4) 建物17(2×2間)北西柱穴。北西柱穴から須恵器瓶頸部が出土。口縁から頸部で頸部は喇叭状に上へ開き、口縁端部先端は上方に摘みだされて鋭利な感がある。比較的大形破片であるが肩部以下はない。形は東播系の瓶と似る。
- (5) 建物13(5×8間)713、718、3149、3108柱穴屋内柱列。屋内東寄りでは713柱穴(H28年度調査)に須恵器瓶胴部があり、すべて破片は接合して大きめの破片となる。また今回調査3010a溝の小破片が接合した。718柱穴に越州窯系青磁壺類Ⅲ類、白磁壺類片がある。また3149柱穴と3108柱穴は重複し前後があり、3149柱穴では白磁Ⅳ類が出土。  
建物13の3115、3124、3142、3188柱穴。屋内西半部の4つの柱穴では、3124柱穴に東海系で高台を持つ壺(瓶)の比較的大きな破片がある。3142、3188の柱穴からC×D期の白磁片が出土。  
3138柱穴西柱列、3115柱穴北柱列の2つの柱は9m程離れ、ここから出土した甕胴部破片は接合し、比較的大形破片となる。
- (6) 建物19(5×4間)屋内の3314柱穴。南東部で検出の3314柱穴は建物柱と異なるもので須恵器瓶口縁・頸部、胴部破片が出土。接合しないため2個体とも見られる。頸部は喇叭状に開き、口縁部は変化のない断面方形状を呈し上の(4)と異なる。
- (7) 建物20(4×4間)屋内の3043柱穴。建物中心位置となる3043柱穴では初期高麗青磁蓋Ⅱ類が出土。この陶磁出土柱位置はなにか示唆的な観がある。
- (8) 上記建物群の西側区画と見る南北溝3010で須恵器甕、備前系椀を出している。須恵器甕は接合が少なく、叩き目や色調の差もあり数個体分と見られる。備前系椀は体部1点のみである。C期白

磁、C×D期不明白磁、陶器小壺がある。

その他、大形建物の関連はないが前回の表土出土には時期が下降と思われる亀山系(瓦質焼成の外面格子叩き目)の甕片があり、今回は古瀬戸卸皿などもある。

備前窯の北方には岡山県美作地域の勝間田窯(20基前後)須恵器産地があり、その上限は11世紀後半とされる。現状では山ノ下遺跡に最も近い須恵器産地であり、今後製品比較も必要であろう<sup>(註7)</sup>。

### 3 陶磁の数量化分析

#### (1) 分析に関する補足事項

分析方法については前回到記述したとおりで、今回もこれに準じている。ここでは繰り返しとなる点もあるが、内容を順に追う事ができるよう一文を補足した。

陶磁編年区分表は、各区分の一般的出土傾向となる標識磁器に限るが、これは遺跡全体の幅広い時代性を把握する点で有用となる。全点数に渡る区分となるため、遺跡の時代過程も同時に捉える事ができる。

#### (2) 編年区分

G期までの陶磁器編年は大宰府土器編年をもとにした出土状態による共伴関係の明確な遺構一括が基準となっており、その点で年代尺となる優位度は貿易陶磁よりも在地土器にある。九州各地においては地域別特色を分け、一方では大宰府土器編年に通じる部分を広域適用可能な共通項と捉えて援用している。

#### (3) 中世後半の貿易陶磁

中世後半の陶磁数は今回も出土は少ないが、新たに確認できた標識磁器が加わるので、この点を下記に補足する。中世後半についての陶磁区分は註1に上げた各編年案に基づき、各区分の標識磁器は青磁、白磁、染付であり、これらの分類確定ができたものは各区分の数値上に反映される。なお山ノ下に出土が確認できない標識磁器類は含めていない<sup>(註8)</sup>。

G期 中世前半の末期とし、14世紀初頭～中頃の元時代後半でH期への過渡的段階である。標識磁器は青磁・龍泉窯系IV類。白磁・森田B群である。

H期 (14世紀後半～15世紀前半・中頃) 標識磁器は青磁・上田II類、白磁・森田D群である。

I期 (15世紀中頃～後半) 標識磁器は青磁・上田III類が充てられるが今回空白となる。出土実態では上田II類と混在し、II類は継続出土となる。

J期 (15世紀末～16世紀前半) 標識磁器は青磁・上田IV、IV'類。

K期 (16世紀前・中頃～後半) 出土例によれば17世紀前半まで残存する。標識磁器は白磁・森田E群、染付・小野B群、E群である。これら一部の類はK期以前から出土するとされ、出土開始や上限幅決定について個別分類の確定を要する。山ノ下の出土品には類特定可能なものはなく、K期に含めている。

#### (4) 因幡・伯耆の土師器と貿易陶磁

山陰では八峠氏による在地土器編年のモデル案<sup>(註9)</sup>がすでに示されており、これを参考に山ノ下の土師器について筆者の目で追従を狙ったところであったが、12世紀代を前後に二分する事も容易ではなかった。筆者の力量不足もあるが、時間軸を導くための良好な一括資料の蓄積、分析はさらなる作業が必要である。またこの部分は日常的に土器と接触する地域研究者によって深められる事を常とするため、土器、陶磁器共伴関係の検証については今後の地域研究に委ねるところとなる。

中世後半には貿易陶磁やその後の国内陶器生産上昇でそれまで普通の日常品であった土師器食器が退潮化してくるため、形式的連続性や時間幅設定は貿易陶磁の方に汎用度が高まる。註1にあげた森田、上田、小野の中世後半貿易陶磁編年はその点が主軸となっていて、中世前半と後半の編年基底にこのような差異がある中で陶磁区分A～K期を並べた点は了解していただきたい。

### 4 定量分析(第74表：表B)

#### (1) 陶磁の定量化分析

建物時期推定に直接関連する陶磁は少ないため、次に遺跡全体出土陶磁の定量分析を行う。以下数値分析の基礎作業となる表示方法は前回報告と同じ仕様を採り、接合点数、分類同定規則、編年区分、1点出土面積、陶磁(評価)ランクなどについて説明しており、今回は省いている。

今回対象となる貿易陶磁数は計152点である。全点数記載表A(第72・73表)から編年の陶磁区分ごとに集計したものが表B(第74表)である。

#### (2) 単一の時期に収まる類の数量と出土数順位

全貿易陶磁152点のうち各単一時期に収まる数は標識磁器73点と半数弱である。他の陶磁は類確定困難な資料が多く、近接した2時期から複数期の範囲となり、これも単に不明として処理せず一定範囲を設けて帰属させる事でこれらも吸収できる場合がある。

また遺構出土陶磁数は33点で全体の1/5程度であり、うち建物に関連する重要度の高い遺構の有効出土数は24点で、1時期区分に帰属する陶磁は13点、範囲を隣接2時期に比定可能とせざるをえない小破片は11点で、確定根拠となる陶磁は僅か13点となる。この中で建物柱穴出土陶磁は7点で、これに前回出土2点を加えても9点到過ぎない。しかし通常、柱穴には柱補強上の目的で投入した遺物は別として、わざわざ陶磁片を入れることは少ないから、9点出土しただけでも時期推定に一步近づく意味では幸いな例と言える。

遺構帰属陶磁数の少なさのため時期確定に関してはいささか根拠が弱い点が生じる。そこで攪乱土や表土など層位的根拠は薄いが、陶磁総量から把握する。

#### (3) 全点数分析

表B上段で一つの時期に収まる陶磁器数を見ると、上位からの順位は第1位C期46点(30%) (B<C 2点を含む)、第2位D期11点(7%)、第3位F期7点(EF期1点を含む)(5%)、第4位H期6点(4%)、以下は1から数点程度の少数となる。

C・D期の区別不明(表C×D期)34点は実際順位はC期の次で、これ以外の時期ではない事は確定できる資料であるから、仮にD期に含めると11+34=45点で同じく第2位のままとなり、第1位C期と

第74表 山ノ下遺跡(平成30年度調査)出土貿易陶磁量の比較：表B

時期→	↓調査面積㎡	全点																	不明	計					
		①			②							③													
		B<C	C	C>D	C×D	D	D×E	E	F.EF	C-F	FG	E-G	G	G?	G.H	H	元・明前期	I(-J	I<J.K	J	H-	K	H-K		
山ノ下2	5000	3	43	0	34	11	0	3	7	12	0	1	2	1	0	6	8	1	3	0			0	17	152
%/全152		2.0	28.3	-	22.4	7.2	-	2.0	4.6	7.9	-	0.7	1.3	0.7	-	3.9	5.3	0.7	2.0	-			-	11.2	100.0
1点出土面積	㎡	1667	116	-	147	455	-	1667	714	417	-	5000	2500	5000	-	833	625	5000	1667	-			-	294	33
①中世前半古	C																							46	
%/㎡		30.3 (109㎡)																							
C×D																								34	
%/㎡		22.4 (147㎡)																							
D																								11	
%/㎡		7.2 (455㎡)																							
C×D.D																								45	
%/㎡		29.6 (111㎡)																							
②中世前半・新	E-F																							10	
%		6.6 7.9																							
G																								4	
%/㎡		2.6																							
E-G																								26	
%/㎡		17.1 (192㎡)																							
③中世後半	H																							14	
%/㎡		3																							
I-K																								4	
%/㎡		2.6																							
集約																									
①中世前半-D	C-D																							91	
%/㎡		59.9 (55㎡)																							
①②中世前半-F	C-F																							113	
%		74.3																							
①②中世前半-G	C-G																							117	
%/㎡		77.0 (43㎡)																							
③中世後半																								18	
%/㎡		11.8(278㎡)																							

時期→	↓調査面積㎡	(ランクAB *ランクABCは上記全点中に含む)										計	(ランクC)				計
		①			②				③				①		②		
		B×C	C	CD	D	E	F	C-F	E.F.G	H・元明前期		C	CD	D	C-F		
山ノ下2	5000	2	4	2	0	0	1	8	1	1	19	0	2	0	4	6	
%/全152		1.3	2.6	1.3	-	-	0.7	5.3	0.7	0.7	12.5	-	1.3	0.0	2.6	3.9	
1点出土面積	㎡	5000	1250	2500	-	-	5000	625	5000	5000	263	-	2500	1250	833		
①中世前半古	C											母数					母数
%/㎡		13.0 (833㎡)										46					46
C×D												34					34
%/㎡		4.4															
D												11					11
%/㎡		4.4															
C×D.D												45					45
%/㎡		4.4															
②中世前半・新	E-F											10					113
%		10.0															
G												4					4
%/㎡		25.0															
E-G												26					26
%/㎡		7.7															
③中世後半	H											14					14
%/㎡		7.1															
I-K												4					4
%/㎡		7.1															
集約																	
①中世前半-D	C-D											91					91
%/㎡		8.8 (625㎡)															
①②中世前半-F	C-F											113					113
%		8.0 7.1															
①②中世前半-G	C-G											117					117
%/㎡		15.4															
③中世後半												14					14
%/㎡		7.1															

の差は縮まるが、C期に含める場合は46+34=80点と増大し、第1位も動かない。B<C期の3点はD期に入らないから実態上はC期に含めている。

C×D期34点の内訳は白磁30点、青白磁2点、陶器2点である。

D期陶磁は11点中、白磁は3点、青磁は8点(龍泉窯系青磁I類7点・同安窯系青磁1点)で、白磁類別確定数は少なく、半数以上を青磁が占める。ただしC×D期定まらない白磁30点にD期が一定入

る可能性を持つため、必ずしも青磁が白磁よりも優位にたつとは言い難い点がある。白磁に較べて龍泉窯系青磁Ⅰ類や同安窯系青磁は破片でも類別しやすく、漏れが少なくほぼ確実数が把握できる。また仮想計算上の一方法としてC×D期30点を等分し、この15点をそれぞれC、Dに加算する場合にはD期白磁は推定18点となるが、この場合は青磁より白磁優位の想定となる。

上のように遺跡全体ではC期陶磁が数値の上で優勢となる点は疑いが無い。

表下段は前回同様に陶磁区分を括っている。大きく括る場合陶磁の消費=獲得傾向が把握しやすい。

①C・D期、中世前半の古段階。C期とD期はさらに細分される。

- ①C期(11世紀後半～12世紀前半)

- ①D期(12世紀中・後半)

①C期は歴史年代の上では古代末となるが、考古的な物流実態からするとすでに中世に入っているとする案が近年の考古的一般論である<sup>(註10)</sup>。またB<C表示の少数は、C期より古い可能性を全く廃除できない破片資料のため表示上はCと分けているが、遺跡内容集約の結果ではC期に入れる事が妥当となる。

②E～G期、中世前半の新段階。(13世紀初頭～14世紀中頃)このうちF期量は多く7点。

③H～K期、中世後半。(14世紀後半～16世紀、下限17世紀初頭)このうちH期量は多く6点。

#### (4) 区分①～③数値内容

この3区分に応じた陶磁数値は全点数152点=100%とする割合である(小数点以下四捨五入、以下同様とする)。

①C、D期合計91点(60%)、②26点(17%)、③18点(12%)となり、C期11世紀後半～D期12世紀後半までの陶磁が半数以上を占め、ここに遺跡の最大活性化がある事は明らかとなる。この点は前回の結果も同じである。

次に中世前半の①+②合計C～G期と中世後半の③H～K期(上と同じ)をさらに括って大別し陶磁数を比較する。ここには単一期区分に収まらない陶磁も廃除されず評価対象に組み込まれる。①+②中世前半は117点(77%)、中世前半がより大きく比率を占める点もわかる。

中世後半ではFG期(中世前半・新时期)に後出するH期6点(4%)はまだ陶磁数が極端に減るわけではない。H期は白磁・森田D群、青磁・上田Ⅱ類が主な構成をす。表で元・明代はG～H期にわたる区分不可能な8点があり、これは青磁のみである。時代が下がるにつれて青磁は撤退し白磁や染付が主となり、青磁は中世後半のうち古期中心とできるため、この青磁はG期とH期に加算されるならばH期は若干数値が上がる事が考えられる。

遺跡における土地利用の痕跡は陶磁量から推定すると、陶磁量の減少する中世前半の新时期・13世紀以後から14世紀前半・中頃も続いており、その終息は15世紀末頃になると見込まれる。調査区北東部を中心として数時期にわたる規模の小さい建物群の多くは、この段階に比定されるが、細かな時期区分は今後の調査で詰める必要がある。

#### (5) 陶磁1点出土面積

調査面積に対する陶磁器分布密度で、調査面積㎡÷該当陶磁数で求める。表B(第74表)には各期別に記入している。上の陶磁数値比率と連動するが、陶磁数比率のみでは疎密程度が把握できないた



め、優劣表現の一つとして用いる。直観的に粗密を見るのには適している。陶磁密度は遺跡間における消費活動の濃淡や格差を知る一つの方法である。一遺跡内における遺構の主・従内容や占有空間、場の性格による偏在化が現れる場合も予想され、さらに各面積を区切る事ができれば有用性も出て来る。山ノ下遺跡の建物群は北東部と南西部で二つの時期に大別され、それぞれの空間に占める陶磁数・密度の時期差が予想されるが、遺構直上の層が不安定なため今回はこの面積細分の検討は行っていない。

### (6) 各時期の陶磁1点出土面積

各時期の陶磁1点出土面積は、各期ごとの陶磁出土数と相関する。陶磁出土数値(%)が大きい場合、1点出土面積値 $m^2$ は小さくなり、出土数値が少ないと面積値 $m^2$ は大きくなる(疎らとなる)点に注意する。①C・D期は②E～G期に較べて3倍強の高い密度となる。

- ①C・D期、55 $m^2$ 
  - ①C期、109 $m^2$
  - ①D期、455 $m^2$
- ②E～G期、192 $m^2$
- ③H～K期、278 $m^2$

### (7) A・B・Cランク陶磁の獲得量

#### ランクAB

普及品となる一般貿易陶磁は遺物中に多くを占めていて、この点は遺跡の年代安定性や消費充実度を知るための的確な物差しとなる。一方、調度や珍奇なもの、宗教・祭祀など日常性とは異なる用途の陶磁は器物自体の稀少価値を有し、遺跡造営者の高い身分や財力、文化志向といった器物獲得能力を示すので、この評価対象として出土遺物の中で仮にABのランク付けを行う。出土頻度は一般陶磁よりも相当低い事から一時期中に特定できる類例数も限りがある。また一種の宝器に似た扱いとなる点で比較的長く保持された可能性や、優良ブランド品として長く生産された事なども想定されよう。

ランクABの区別は便宜的なもので、Aは食生活にとって必然容器ではない合子や香炉、文房具、置物、陶枕などの器種、Bは食膳用器とする。BはAに入れる方がより適切かと思われる種類があり、その一例をあげる。仏器の青銅花瓶の代わりとして、陶磁梅瓶を最初から購入目的とした場合はAに等しい。黒釉天目椀や茶入れは、茶の風習が富裕層にまで広がる中で珍重される茶道具の定型となり、一般的には必然な飲食器ではないからAに近い。使用目的や文化的価値は美術史や文献史料、伝世品評価に頼らざるを得ない面があり、出土品では分別に難が出るため、一律的にAB合算する事で数値情報となる。この中には質よりも出土例が稀少となる珍品扱いの陶磁が含まれる事もある。

前回出土以外にランクABに加わる器種としては、青磁水注把手(1)(C期)、黒釉[天目]椀(2)(D～F期、中世前半の新)、青白磁坏・B'(1)(E～G期、中世前半の新)、梅瓶(1)(E～F期、中世前半の新)、龍泉窯系青磁・小壺×合子身(1)(元～明代)など微増する。

ランクAB対象の陶磁器は器種がばらつく他、一つの時期区分に収まる類は限られる。これらは集約した数値には隠れるため、同時に種類内容の確認を要する。

## ランクA Bの比率

一般陶磁に較べて数は少なく、とくに一般陶磁の基本数値が低い場合は、僅か1点の出土プラスで過大な数値となるため注意が必要である。

今回の例ではランクABは19点あり、うち中世前半は18点を占めており、中世前半に多い事は確実である。このうち①C・D期12世紀までが8点、その内C期確定できるものは6点あり、ランクAB全体の中では多い方である。②E～G期は2点で、別の1点がここに含まれる可能性をもつ。その他、出土状態においても時期区分の確定できないC～F期8点があり、8点は白磁壺類Ⅲ類6点、黒釉椀2点である。白磁壺類Ⅲ類は型式を替えてつC～F期の長期に及び(使用下限はG期前半で数は激減)、一部分の破片では時期区分幅を多少広くしても時期が定まらない。黒釉椀はD期可能な例もあるが同様に時期は定まらない。二つとも中世前半の範疇に入り、白磁壺類Ⅲ類がD期までの古い段階の場合は①C・D期のランクAB値がさらに高くなる。

元～明代(前半)の龍泉窯系青磁小壺×合子身が1点あり、ランクABに入れるが特別際立つ製品ではない。

①C・D期8点の内訳はC期は青磁水注1点(越州窯系Ⅲ類×龍泉窯系0類、把手のみ)、越州窯系Ⅲ類1点(前回出土と同一器体片)、白磁壺Ⅱ類4点である。C・D期では青白磁皿2点がある。

②E～G期2点の内訳は青白磁梅瓶1点、坏・B'1点で、前は出土していない。この2種は優位度の高い遺跡で少数確認され、少数ながら当該時期に関する評価を上方修正する要素である。

青白磁梅瓶の時期を確定できる良好な例として金沢市堅田B, SD01堀埋立をあげる。ここには梅瓶蓋(1)も出土した<sup>(註11)</sup>。SD1は有力層居館を囲む初期濠の一部で、以後濠はこの位置を避けて別の位置に接続させ、SD1のみが密閉された。ここからEF期主体で、F期数が上回るまとまりのある貿易陶磁が出土し、紀年銘木簡が2点共伴した。木簡年代は建長3・弘長3年(AD.1251・1263)である。SD1の陶磁数は154点で青白磁梅瓶は2個体分の未接合破片合計10片、蓋1点と数は少ない。共伴したランクAB相当のF期龍泉窯系青磁盤は3点、黒釉椀は1点ある。青白磁梅瓶の稀少性を知る出土状態となる。

山ノ下では、前回のランクAB相当はF期龍泉窯系青磁盤のみであるから、今回の出土青白磁による意義は大きいと言えよう。

ランクABの出土率は分母が全点数の場合は単純計算となり、その数値評価も薄くなる。一般の標識磁器のような細区分は難しいが、研究の反復により編年区分の精度を上げていく事は望まれる。他の陶磁も現状では標識磁器区分の境界を大きく越える種類がある。ランクABの限られた出土数、稀少性、入手困難といった点では一種の宝器的な保持性が想定される事や、出土資料は完器に近いものは稀で、類別範囲を広く見ておく必要性もある。数値化は境界線の一方へ押しやる懸念も出るので、この点は注意すべき点となる。以下には各段階に応じたランクABの出土率について二つを示した。これは(1)全体数を分母とする152点の場合/(2)各段階の陶磁数を分母(点数)とする場合の二つである。(2)の数値の方が有用であるが、ABの年代幅が広い場合は、適値とならない。

①C期、6点。3.9%/ 13.0%(46点)

①C×D・D期、2点。1.3%/ 4.4%(45点)

②E)F期、1点。0.7%/ 10%(10点)

①～②C～F期、9点。5.9%/ 8.0%(113点)

②E～G期、1点。0.7%/ 2.5%(24点)

③H、元～明前半、1点。0.7%/ 7.1%(14点)

### 編年区分集計

上の区分に再度集計を加える。

中世前半①C～D期、計8点。5.3%/ 8.8%(91点)

中世前半②E～G期、計2点。1.3%/ 7.7%(26点)

①～②C～F期、8点の別枠計算。5.3%/ 7.1%(113点)…この8点は①②どちらに入るか確定できないが、①②のどちらかには加算される。この結果を中世前半全体で括ると計18点。11.8%/ 15.4%(117点)となる。…[1]

### C～F期7点の仮定配分

さらに仮定となるが、C～F期8点を配分し、C～D期に6点の白磁壺皿類、E～G期に2点の黒釉天目碗を加算した場合の更新値を出す。この場合C～F期値8点は削除されC～D期分母は97点、E～G期分母は20点に更新されるが、全数は変わらない。

中世前半①C～D期、計14点。9.2%/ 14.4%(97点)…[2]

中世前半②E～G期、計4点。2.6%/ 20.0%(20点)…[3]

[1]～[3]のランクA・B値によると、山ノ下の中世前半は一定優位な陶磁獲得は長く継続していたとする仮説は無理がない。

H期、元～明前半に限れば母数となる陶磁が14点と減少するため、ただ1点にすぎないランクA・B値がやや高めとなる。

### ランクC

ランクCはランクABと異なる大小の一般陶器で、装飾は乏しく主に貯蔵・調理などの用途である。この種は器物そのものよりも内容物に海外の高価なものや、生命維持に不可欠な薬品・食料などが想定され、後者であればランクABの器物以上の優先的価値を有する場合があります。これらの陶器は形状復原不可能な破片の場合、特定時期に定まらないことが多い。

また中身の方が主目的ならば、陶器外観の装飾や形状は流行に左右される事は少ない。青磁・白磁は直接器物自体が商品となるが、陶器はこれと異なり広域の窯で焼かれ、延々と同じ形態が生産された可能性もあろう。

ランクCは中世前半のみに限られ6点ある。追加器種は、青磁×陶器水注(1)(C・D期、中世前半)、暗茶褐釉小壺(1)(C・D期、中世前半)、黄釉盤(3)(C～F期、中世前半)の他、器種不明の壺(前回未報告のため今回追加)(1)など全体は微増する。

黄釉盤(2)は装飾性を意図した陶器であり、ランクCの範疇と同等とするかは問題点として残る。

### ランクC陶器の獲得量

計6点あり、すべて中世前半(F期まで)に属する。種類は前回より微増するが一つの時期区分に収まる確定例はない。①C・D期は2点あり、青磁×陶器水注1点はC期も可能な類である。暗茶褐釉

小形壺は確実な遺構出土(3010b溝)で、博多の12世紀出土例はあるが、同一種か不明である。他の白磁、国産備前系須恵器碗(1点のみ)から幅を持たせて下限をD期とした。前述したように溝の白磁はD期に下る確実な類はなく、また備前系須恵器碗はC期に不可能というわけではないから、今後溝北側延長部の調査を待って再度検討すべきであろう。

残る資料4点は表土・攪乱土出土である。このうち3点は陶器盤I b(鉄絵)及びI-2類口縁部(C群)で黄釉や胎土特徴から小破片でも他の陶器と明確に差別化できる類である。接合しないため3点としたが、同一個体の可能性はある。この種の胎土を持つ同群のものに大形の四耳壺があり、壺の場合は胴部内面に施釉しないため、底部内面に均一な釉を施すものや鉄絵を加える例は盤となる。盤には鉄絵のない無文例も多いが、鉄絵は底部内面中心図案のため体部のみでは鉄絵の有無を判断できない場合がある。出土年代はC期上限でD期には増加し、13世紀中頃までを中心にEF期にも出土する事から比較的長期にわたり生産された可能性がある。この盤は博多、大宰府に多く見られ、九州全域に出土し、以東では散発的となるが東北平泉倉町遺跡にも出土する<sup>(註12)</sup>。出土分布から広域流通品とする「定番型」陶器の一種となる。

同種の盤には緑釉、緑褐彩(二彩)の例やこれに線彫文を持つ例があり<sup>(註13)</sup>、黄釉に較べて出土数はかなり限られるが東日本まで分布する。緑釉や緑褐彩の例は12世紀に上がる確実な出土例は乏しく、現状では13世紀中頃前後の開始となる。中国産地としては以前から知られた福建省磁窰窯(泉州窯とも報告)があり、盤I類と緑釉、緑褐彩の盤が出土している<sup>(註14)</sup>。平泉のCD期には緑釉盤口縁が出土している。断面L字形の口縁や胎土などは、ここに示す盤とは全く異なり、磁州窯系など別産地とみられる<sup>(註15)</sup>。なお16世紀に下る「華南三彩」は全国的に例はあるが、上記の盤は「華南三彩」とは全く異なる類である。

緑釉、緑褐彩あるいは黄釉鉄絵も含めて、これらの陶器は装飾性に一定の比重を持つ事から、使用目的は他の陶器とは異なりランク準AB相当とする事がより適切であろう。古瀬戸には中国陶器の盤の器形やサイズに類する器種として「洗」がある<sup>(註16)</sup>。これは中国盤の模倣品とみられ、盤の用途において地方でも志向される向きもあり、国内代用品として一定需要があったことを示すものと考えられる。

### ランクCの比率

山ノ下遺跡の各段階に応じたランクCの出土率についても、ランクABで行った大別時期区分中の比率が実態として有用となる。②E～G期の比率数値のみに限れば、この期の一般陶磁数(分母)は26点と少ないため比率は高めとなる。

- ①C・D期、2点。1.3%(分母152点) / 2.2%(分母91点)
  - ②C～F期、4点。2.6%(分母152点) / 3.5%(分母113点)
  - ②C～F期を中世前半で括ると計6点、3.9%(分母152点) / 5.1%(分母117点)
- また③中世後半の中国産貯蔵陶器は皆無である。

5 平成28・30年度の総括(第74～76表：表B～D)

(1) H28・30年度合計について

山ノ下の2回に及ぶ調査出土陶磁について総合化しておく。表C(第75表)に前回の集計、表B(第74表)に今回、表D(第76表)はこの二つを合計した。今回新しく出土確認された標識磁器により、中世後半の時期区分は一部変更している。

第75表 山ノ下遺跡(平成28年度調査)出土貿易陶磁量の比較：表C

時期→	調査面積㎡	全点																			不明	計	
		①					②					③											
		B×C	C	C>D	C×D	D	D×E	E	F	C-F	FG	G	G?	G.H	H	元明	I(-J)	I<J,K	J	H-	K	H-K	
山ノ下1	7000	1	21	0	15	10	1	10	8	2	1	0	4	2	2	0	1	0	3	2	1	1	1
%/全86		1.2	24.4	-	17.4	11.6	1.2	11.6	9.3	2.3	1.2	-	4.7	2.3	2.3	-	1.2	-	3.5	2.3	1.2	1.2	1.2
1点出土面積	㎡	7000	333	-	467	700	7000	700	875	3500	7000	-	1750	3500	3500	-	7000	-	2333	3500	7000	7000	7000
①中世前半・古	C																						22
% (㎡)	C×D																						15
% (㎡)	D																						10
% (㎡)	C×D.D																						25
% (㎡)	E-F																						19
%	G																						7
% (㎡)	E-G																						28
% (㎡)	H																						3
% (㎡)	I-K																						8
集約	C-D																						47
% (㎡)	C-F																						68
%	C-G																						75
% (㎡)	③中世後半																						11
% (㎡)																							11
																							11
																							11

時期→	調査面積㎡	(ランクAB *ランクABCは上記全点中に含む)										計	(ランクC)				計
		①		②			③						①		②		
		B<C	C	CD	D	E	EF	C-F	FG	H以降		C	CD	D	C-F		
山ノ下1	7000	1	2	4	0	0	1	0	1	1	10	1	0	0	2		
%/全86		1.2	2.3	4.7	0	0	1.2	0	1.2	1.2	11.6	1.2	0	2.3			
1点出土面積	㎡	7000	3500	1750	-	-	7000	-	7000	7000	700	7000	-	3500	2333		
①中世前半・古	C											22					22
% (㎡)	C×D											15					15
% (㎡)	D											10					10
% (㎡)	C×D.D											25					25
% (㎡)	E-F											19					19
%	G											7					68
% (㎡)	E-G											28					28
% (㎡)	H											3					3
% (㎡)	I-K											8					8
集約	C-D											47					47
% (㎡)	C-F											68					68
%	C-G											75					75
% (㎡)	③中世後半											11					11
% (㎡)												11					11
												11					11
												11					11
												11					11

(2) 陶磁器総点数、陶磁密度と時期区分

出土点数は前は86点、今回は152点と前の2倍弱に増えて合計数は238点となり、本題の目的である遺跡内容と基礎数値分析の安定性を高める。

時期区分による陶磁の増減を見ると、前回同様に①中世前半の古段階→②中世前半の新段階→③中世後半の順である。①ではC期優勢の傾向(C>D)が押さえられており、全体についても前回傾向と

第76表 山ノ下遺跡(平成28・30年度調査)出土貿易陶磁量の比較：表D

時期→	↓調査面積㎡	全点																			計				
		①					②					③					不明								
		B×C	C	C>D	C×D	D	D×E	E	F	C-F	FG	G	G?	GH	H	元明		I(-J)	I<J,K	J	H-	K	H-K		
山ノ下1[2016H28]	7000	1	21	0	15	10	1	10	8	2	1	0	4	2	2	0	1	0	3	2	1	1	1	0	86
山ノ下2[2018H30]	5000	3	43	0	34	11	0	3	7	12	0	1	2	1	0	6	8	1	3	0	-	-	0	17	152
山ノ下1+2合計	12000	4	64	0	49	21	1	13	15	14	1	1	6	3	2	6	9	1	6	2	1	1	1	17	238
%/全238		1.7	26.9	-	20.6	8.8	0.4	5.5	6.3	5.9	0.4	0.4	2.5	1.3	0.8	2.5	3.8	0.4	2.5	0.8	0.4	0.4	0.4	7.1	100.0
1点出土面積→		㎡	3000	188	-	245	571	12000	923	800	857	12000	12000	2000	4000	6000	2000	1333	12000	2400	6000	12000	12000	462	50
		↓区分																							
①中世前半・古	C	68																				68			
% (㎡)	C×D	28.6																							
	C×D	49																			49				
% (㎡)	C×D.D	20.6																							
	C×D.D	70																			70				
% (㎡)	E-F	29.4																							
②中世前半・新	E-F	29 14																			29				
%	G	122 5.9																							
% (㎡)	E-G(G?)	11																			11				
	E-G(G?)	4.6																							
中世後半	H	54																			54				
% (㎡)	H	22.7 (222㎡)																							
中世後半	I-K	17																			17				
% (㎡)	I-K	7.1																							
集約	C-D	138																			138				
% (㎡)	C-F	58.0 (87㎡)																							
①②中世前半-F	C-F	181																			181				
%	C-G	76.1																							
①②中世前半-G	C-G	192																			192				
% (㎡)	③中世後半	80.7																							
% (㎡)	③中世後半	29																			29				
		122(414㎡)																							

時期→	↓調査面積㎡	*ランクABCは上記全点中に含む										計	(ランクC)				計
		①				②				③			①		②		
		B<C	C	CD	D	E	EF	C-F	EFG	H以降		C	CD	D	C-F		
山ノ下1[2016H28]	7000	1	2	4	0	0	1	0	1	1	10		1	0	2	3	
山ノ下2[2018H30]	5000	2	4	2	0	0	1	8	1	1	19	0	2	0	4	6	
山ノ下1+2合計	12000	3	6	6	0	0	2	8	2	2	29	3	0	6	9		
%/全238		1.3	2.5	2.5	-	-	0.8	3.4	0.8	0.8	12.2	-	1.3	0.0	2.5	3.8	
1点出土面積→		㎡	6000	1714	2000	-	-	6000	1500	6000	6000	414	-	4000	-	2000	1333
		↓区分															
①中世前半・古	C	9													母数	母数	
% (㎡)	C×D	13.2															
	C×D	6													49	3	
% (㎡)	C×D.D	12.2															
	C×D.D	6													70		
% (㎡)	E-F	8.6															
②中世前半・新	E-F	2 8													29	6	
%	G	6.9 27.6															
% (㎡)	E-G(G?)	2													11		
	E-G(G?)	18.2															
中世後半	H	4													54		
% (㎡)	H	7.4															
中世後半	I-K	2													17		
% (㎡)	I-K	11.8															
集約	C-D	15													138	3	138
% (㎡)	C-F	10.9														2.2	
①②中世前半-F	C-F	17 8													181	9	181
%	C-G	9.4 4.4														5.0	
①②中世前半-G	C-G	27													192	9	192
% (㎡)	③中世後半	14.1														4.7	
% (㎡)	③中世後半	2													29		
		6.9															

の異同は殆どない。全体数238点、100%の内訳は①138点、58%、②54点、23%、③29点、12%で、さらに①の最大値を細分するとC期68点、29%、D期21点、9%、C×D期不明49点、21%である。C×D期不明の資料のうち、C期に属するものはさらに多くなる事が上の確率から推察できる。各期を細分した場合でもC期陶磁が最大値を占めているので、遺跡の時代的中心とともに活性化はC期開始期にあった点に疑いはない。

陶磁1点の出土面積(陶磁密度)㎡は、上の陶磁順位と同じく、①87㎡、②222㎡、③414㎡の順に小面積→大面積となる。

### (3) ランクA・B・Cの獲得傾向

ランクA・B・C数は通常では全数に占める割合が僅かなため、比率計算ベースとなる一般陶磁数との対比のみではなく、器物自体の付加価値(使用目的他、稀少価値、製品自体の高品位性や精粗など)も評価対象となる。ただしこの付加価値を数値化する事は難しいためランク別数量という点で集約する。

ランクABは前回10点、今回は19点あり、計29点のうち2点のみが中世後半で、27点が中世前半である。今回は前回の2倍弱となるが、これは陶磁出土総数と比例しており、ランクAB数値として偏向性もなく着実な安定値を占めている事はまず評価できる。

全体を時期別に見ると①15点、10.9%(分母138)、密度800㎡、②4点、7.4%(分母54)、密度3000㎡、③2点、6.9%(分母29)、密度6000㎡である。このうち①のC期に確実な器物は白磁壺Ⅱ類が主で、他は越州窯系青磁壺・水注Ⅲ類(2)である。初期高麗青磁蓋Ⅱ類は北部九州外出土例では珍品としてここに入れてもよいが、今回は含めていない。こうした珍品は数値表のみでは表し難い点が生じる。

ランクCは前回3点と少なく、今回は6点増となる。全体では中世前半に集中し、9点、5.0%(分母181)、密度1333㎡である。この中には水注Ⅳ類?と盤Ⅰ類など分類の判明する例がある。盤Ⅰ類は国内の広域流通器種の「定番型」に位置づけており、その点を補強する。陶器水注は九州以外の例は少なく、広域に及ぶ類は四耳壺の例が普通であるが今のところ山ノ下には四耳壺はない。C期にも青磁水注1、2個体があり、この点は陶磁入手に際して選択的な意図が働いたか課題の一つとなる。北部九州以外では中世前半の中国陶器報告は少なく、また実際にも量や種類はかなり限られる。小破片の場合にこれらの陶器は選別対象外として不当な扱いも予想されるが、今回地方においてランクCの一部に定番型が判明した点は注目できる。

### (4) 他地域の陶磁出土比率と1点出土面積(陶磁密度)の比較

この2つの数値は他の遺跡に対する一応の優位度比較にはなるが、遺跡内の遺構性格の他、場の使用目的の違い、同時期の遺構密度や単位構成、占有空間、継続期間、また食生活に関わる日常性の有無等により、出土比率と陶磁密度が必ずしも単なる優位度必須条件に直結するというわけではない。山ノ下の例では調査面積は12000㎡と広く、北東と南西に時期の異なる建物構成となる。夫々の時期の建物群の占有空間は差があり、南西部の大形建物の配置や規格制は高く、一般的居住施設とは異なり周囲は遺構空白部も相当な広さがある。都市内の遺構集中部のような町場的景観とは異なる。遺構周囲の空地は大形建物群の占有空間を示し、一般住居の排他的空間のようでもあり、この事が陶磁密

度の低さと関連している可能性がある。

(5) 他の遺跡との比較(第77表：表E)

過去に行った数量化の例を比較する。山陰では中世前半古段階の有力遺跡となる島根県3遺跡のほか、東国の一等勢力であった岩手県平泉柳之御所跡の参考例をあげる(註17)。

ここでは陶磁全点数・100%、中世前半C + D期点数・%、調査面積、C + D期1点面積(密度㎡)、C + D期ランクAB・%、C + D期ランクC・%を集約している。ランクABとランクCの密度は面積がただ過大となるばかりで省略した。ランク値%はCD全数=100%とする比率であるが、これらは一般陶器に比べて時期幅があり、実際のC + D期数はやや減るとみられる。(\*)は報告書記載値から引用した。

**山ノ下遺跡** 全点数238点、C + D期138点・58%、調査面積12000㎡、(密度87㎡)

ランクAB15点・10.9%、ランクC 3点・2.2%

**古市遺跡** 全点数1050点、C + D期841点、調査面積3494㎡、(密度4.2㎡)

ランクAB\*56点・6.7%、ランクC 5点・0.6%

**横路遺跡** 全点数583点、C + D期571点、調査面積1685㎡、(密度3.0㎡)

ランクAB\*17点・3.0%、ランクC・不明

**出雲国府** 全点数3243点、C + D期2629点、調査面積7949㎡、(密度3.0㎡)

ランクAB64点・2.4%、ランクC 6点・0.2%

**柳之御所跡** 全点数2213点、C + D期2174点、調査面積42555㎡、(密度19.6㎡)

ランクAB1327点・61%、ランクC 232点・10.7%。

陶磁密度についてみれば、古市遺跡4.2㎡、横路遺跡3.0㎡、出雲国府3.0㎡、柳之御所跡19.6㎡。

山ノ下遺跡は87㎡であり、遺跡の調査面積は広い割には陶磁点数は少なく、優位な遺跡に較べて疎

第77表 主要遺跡出土ランクA～C陶磁比率：表E

地域	遺跡名↓	時期別全点数 (ランクABC含む)				白磁片 加算 CD	C+D/全数%		ランクAB計 C+D=100%母数		ランクC	ランクAB計 ①+②	ランクC ①+②	全出土数	調査面積㎡ C+D陶磁 1点出土㎡
		C	C×D	D	①		C+D	①	②						
鳥取	山ノ下1+2	68	49	21	-	138	15	3	27	9	238	12000	87.0		
	沖手	540	145	603		1294	18	4	60	181	3823	4000	3.1		
島根	(ランクC陶器含まず)					34%	1.4%	0.3%							
	古市	336	243	192	70	841	56	5	58	179	1050	3494	4.2		
	横路 (土器土地区)	200	120	43	208	571	17	0	17	4	583	1685	3.0		
	出雲国府 1・2・5	1492	984	153	-	2629	64	6	176	107	3243	7949	3.0		
北部九州	博多14次	3626	367	294	35	4322	118	409	118	409	4351	255	0.06		
	糸27-1 大宰府	158	50	34	60	302	10	23	10	23	377	94	0.31		
	糸27-2 大宰府	418	40	115	159	732	37	43	38	79	809	260	0.36		
	84HKWC 平安京	398	385	230		1013	52	6	156	41	1259	250	0.25		
畿内	HK-HK2 平安京	205	426	573		1204	33	57	73	403	1825	1600	1.3		
	柳之御所	525	1432	217	-	2174	1327	232	1328	232	2213	42555	19.6		

(註19)



らな点は確かであるが、この理由は遺跡の生活空間の密集化など別要因も考慮される点は上記した通りであり、下記項目と同時に分析する。

### (6) ランクAB獲得率

上からランクABは古市遺跡、約7%。横路遺跡、約3%。出雲国府、約2%となる。

この比較では山ノ下の10.9%という数値は決して低いものではない事は強調してよい。同時期の大宰府や平安京の都市部優位遺跡の例では3~5%で、一般陶磁数が多くなりランクAB比率はやや低い傾向が出ている。柳之御所跡のランクAB数値は突出しており、白磁四耳壺・水注の数が多数を占める点に理由があり、意図的な選択が働いた事が明らかである。また陶器にも一般的ではない緑釉、黄釉、絞胎など格上品が含まれている点で他地方の有力遺跡に較べて相当格が高い。一方陶磁の密度は1点19.6㎡となり、遺跡面積が広大になるにつれて直接的な生活の場以外の空地部分面積も広がり、陶磁密度を下げている。山陰主要遺跡の方がむしろ密度は高い傾向にある。柳之御所跡の例をあげれば、格の相当高い遺跡でも陶磁密度とランクAB数の不均整は出ている。山ノ下の場合も同様でランクAB比率が高い。ここは遺構の特異性が顕著となった大形建物群の象徴性や隔絶性に起因するところがあるろう。

## 第5項 分析評価と総括

前回の陶磁数値も含めた貿易陶磁全点計238点の定量分析を通じて、主な点をまとめる。陶磁器は遺跡全体となる北東部と南西部の建物を縦走している内容であるから、二つの地点における傾向を述べておく。歴史時代における遺跡全体の開始は中世前半の早い段階から開始し、中世前半に継続しつつ、中世後半初期には終息を迎える事となる。

### 南西部

南西部は中世前半古段階の大形建物群創建にその象徴性が強く現れ、この年代追究は本遺跡の主な課題であった。分析に当たっては直接遺構において効果が大となる遺物が少なく、さらに遺構外の貿易陶磁全点について検討を行った結果は上述したとおりで、建物開始年代については11世紀後半から12世紀前半に比定される。この時期にはそれまで空白であった貿易陶磁の獲得量が一気に増えており、当該時期に突如として現れた大形建物との関連性は強く示唆される。

大形建物群と関連する国産陶器類には他地域との流通網の接点を伺わせる備前系須恵器や東海系陶器などの搬入品の他、産地は明確ではないが中世須恵器も加わり、貿易陶磁を指標として見るならば、ここには中世社会の初期活動に関する包括的な基盤背景が認められると言える。

大形建物群は2時期にわたる建替えも想定され、建物相互の重複はなく、方向軸は揃い整然とした配置構成をなす事や、前後があっても一定計画性は踏襲されており、連続した時期に渡る何らかの特別な機能が維持されたと思われる。建物の廃絶時期や下限幅については貿易陶磁数の次点となる12世紀中・後半まで考えられるが、建物出土陶磁からみれば、これより前の時期でも矛盾はない。

建物群周囲はほぼ空地となっていて、建物群は一定の広い空間を占有していた可能性がある。さらに建物の廃絶後はこの地点が空地化しており、有力施設のあった空間の利用踏襲の形跡が全くないと

いう点は不思議な観もある。もし意図的な回避である場合には造営勢力の交代なども視野に含めて検討余地があろう。

## 北東部

北東部～南西部の中間域に2棟の建物は点在するが、北東部は大形建物群とは北に離れた位置を中心にして、小形化した11棟ほどの掘立柱建物群が検出されており、少数は廂付で格上と見られる。方位差をもとに4時期程細分され、一部について土師器検討、放射性炭素年代測定により、10世紀後半～13世紀中頃とする一案が示されている。この中には南西の大形建物群の方位に近いものが4棟程あり、年代的関連性も予想されるところであるが、直接伴う貿易陶磁は皆無である。貿易陶磁数からは第3位の量となる貿易陶磁は中世前半新段階(13世紀初頭～14世紀初頭)に注目する。この期の標識磁器は12世紀までと比べて1/2弱まで減少し、前代の所有力には及ばない。ただし陶磁内容を細かく見ると、F期の陶磁のうち一般製品のなかでも優良品に属する龍泉窯系青磁皿類が10点あり、F期中では $10/15=67\%$ 、やや広くした範囲のE～G期合計中에서도 $10/39=26\%$ を占めており、これは一般集落よりも高率となる。またランクABの青白磁もあり、この時期の優位度は上方修正する必要がある。貿易陶磁以外には古瀬戸卸皿1点他、瓦質鍋、釜などの日常調理、煮炊具が増え、中世前半新段階の生活充実度を補完する資料であろう。

後続する中世後半の14世紀後半～16世紀末(下限17世紀前半)はその初期段階となるH期・15世紀に少数陶磁のまとまりが認められる程度で、以後は数をなさず下火となる。

陶磁年代幅と増減からみれば遺跡は比較的長い期間継続し、中世前半新段階のE～F期、13世紀初頭～末(14世紀初頭)は優位状態を一定保持し、北東部建物の多くはこの時期に属する可能性を示唆する。

## おわりに

山ノ下遺跡の建物群性格、歴史的背景の追究は今も続いており、建物性格に直結する出土遺物を欠くため、検出建物の年代、配置構成、変遷過程などの考察に関わる基礎部分についての的確性が求められた。出土遺物の中では、年代や特色について比較的把握しやすい貿易陶磁を精査する事で一定の見通しを得た点は前述のとおりである。遺構に伴う陶磁は相当限られており、遺跡全体に及ぶ散らばった陶磁すべてを定量化して傾向を把握し、一部の国産陶器類がこの点を補足する可能性をあげた。貿易陶磁内容を網羅する事で遺構の年代や造営者の経済的位置の把握に視点を置き、遺跡の消長過程に関する手掛かりとした。

今回の陶磁器定量分析では各地域にも応用できる点が見いだせる。その一つは定量化に際して、標本数不足は基底部の不安定要因ともなるが、遺跡調査条件によっては均等数値が得られる点である。前回分析は陶磁器86点で100点にも達しないため、1点の比率は1%強となり、1点増えただけでも数値上の突出が出易く、比率過大となる点は危惧された。今回は資料が増え、152点を前回同様の基準で分析したところ前と同じ傾向を示している。前回と今回を合算した238点の分析結果ではさらに傾向は鮮明となっており、優位ランク陶磁についての位置づけ評価にも作用する結果が得られた。

ここでは陶磁数の問題の他、山ノ下遺跡の調査条件による客観性が重要となる。遺構集中部から空

白地まで含む広い空間の調査では、遺物分布の局所的偏向は回避され、等質的な適値となる傾向が反映される事となる。山ノ下の遺跡空間創出にかかる陶磁器数量に一定の意味が付加され、一つのモデルとなる。

調査条件が上と同様であれば広く各地への応用可能な方法と思われ、言い換えれば地域における陶磁分布空間指数とでも呼べるかもしれない。また遺構残存状態が良好でない遺跡の場合、遺物から一歩追究を深める点で効果は見込まれる。

少数の優位ランクの陶磁については山陰の有力遺跡の比較を行った結果、著しい差はなく適値となるが、山ノ下の比率は他よりも高い値を持つ点が判明している。一方、数値化は共有され易いが、そのため数値表示に現れにくい製品上の優劣などは埋没し盲点となる懸念はある。たとえば常時ランクAB値に入れる青白磁を例にあげると、中国の生産窯で焼成不調となった釉色や他の欠点を残す製品でも、潰れや破損がない限り貿易品としてかなり出回っており、さらに準ランクの傍製品が加わるといった点である。考古資料の数値化ではこれらを区別しない事を原則としている。ここは個別的な印象記述の補足を行うしかなく、製品の質上下については美術品に通じた目が別に必要であろう<sup>(註18)</sup>。

陶磁器分析で遺構の年代に関する一定の見通しが得られたが、遺構に関する確定的な部分は保留される点も多い。その主な点をあげておくと、南西部建物は、規模や配置関係、柱筋の規則性、堅牢な総柱構造などから相当厳格な施工であり、建替えた場合でもこの点は維持されていて通常とは隔絶した観がある。しかしその性格や建物群廃絶後の空地化による一つの権威的象徴の消失化背景は明確ではない。南西部建物群、北東部建物群の年代と構成順の関係は遺構群の展開に大きく作用するところである。南西部の初期大形建物に対する北東部の同時期建物の展開、北東部建物造営の遅延の可能性や次段階への継続・優位性なども課題である。

以上の点は発掘調査者がすでに現地得ていた直観的感触に基づき、陶磁などの数値から一歩を踏み出したに過ぎない。今後地方史を外からも原資料に沿って考証できるような形としたが、この作業が各地の遺跡評価に結びつく契機となれば幸いである。

#### 【註】

- 1 (1) 山本信夫(宮崎亮一編)「大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編」『大宰府の文化財第49集』2000太宰府市教育委員会  
 (2) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982  
 (3) 小野正敏「15～16世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982  
 (4) 上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982  
 染付B群は新古があり、古段階では椀B1がH期となるが細別不可能な場合H-K期の広い幅となる。
- 2 折尾学・森本朝子・池崎譲二1986「博多 - 第6次調査報告 -」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第126集 冷泉町155番地遺跡調査会・福岡市教育委員会  
 加藤良彦1995「(付編：博多35次調査遺物編)博多47」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第396集 福岡市教育委員会(報告は龍泉窯系青磁蓋、森本・片山では高麗青磁坏と修正)  
 森本朝子・片山まび2000「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案 - 生産地編年を視座として -」『博多研究会誌』第8号
- 3 山本信夫・狭川真一1984「大宰府条坊跡III」『太宰府市の文化財』第8集 太宰府市教育委員会

## 第6章 総括

- 山本信夫1985「日本における初期高麗青磁について -大宰府出土例を中心として-」『貿易陶磁研究』No.5
- 山本信夫1990「11・12世紀の貿易陶磁器 -1980年代の編年研究を中心として-」『貿易陶磁研究』No.10
- 山本信夫2001「九州地方出土の高麗青磁について」『海を渡った翡色(ひしょく)のやきもの -日本出土の高麗青磁-』  
大阪市学芸員等共同研究シンポジウム(発表資料)大阪市教育委員会
- 狭川真一1998(第64次調査)太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡X」『太宰府市の文化財』第37集 太宰府市教育委員会
- 4 肥前大和町出土椀Ⅱ類、佐賀県大和町教育委員会蔵、筆者確認済。
- 5 大阪市立東洋陶磁美術館2018『高麗青磁 -ヒスイのきらめき-』
- 6 馬場昌一・福田正継・白石純2014「岡山県助三畑遺跡井戸4出土遺物の様相 -養和元(1181)年銘題箋が伴う遺物の実態-」『古文化談叢第71集』九州古文化研究会
- 7 吉岡庸暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 8 倉吉市教育委員会による試掘調査は平成27年度に山ノ下遺跡本調査の前に行われており(この時の遺跡名は上古川)、この試掘調査で出土した陶磁は本調査の種類と同様な傾向であった。
- 9 岡田裕之・八峠興2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年 -須恵器と回転台土師器を基に-」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要5』鳥取県埋蔵文化財センター
- 10 吉岡庸暢1991「中世的食器組成の成立と時期区分覚え書 -90年シンポに寄せて-」『中近世土器の基礎研究VII』中世土器研究会  
吉岡庸暢1994 註7、前掲書  
吉岡庸暢1997「中世食文化の基礎研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』71
- 11 向井裕知2005「金沢市堅田B遺跡出土の紀年銘共伴貿易陶磁」『貿易陶磁研究No.25』日本貿易陶磁研究会
- 12 八重樫忠郎ほか2004「倉町遺跡第4次発掘調査報告書」『岩手県平泉町文化財調査報告書』第88集 岩手県一関地方振興局・平泉町教育委員会。盤I-2類(I-2b鉄絵もあり)、平泉町教育委員会蔵、筆者撮影
- 13 水野哲郎2000「祇園遺跡」『熊本県文化財調査報告第188集』熊本県教育委員会、熊本県教育委員会蔵、筆者撮影
- 14a 上田秀夫・氣賀澤保規・杉本憲司・鶴間和幸・森達也(監修)2008『東アジアの海とシルクロードの拠点・福建 -沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化-』海のシルクロードの出発点”福建” 展開催実行委員会
- 14b 出光美術館1982『近年発見の窯址出土中国陶磁展』
- 15 八重樫忠郎氏提示、平泉町教育委員会蔵、筆者確認。
- 16 藤沢良祐1997『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』5  
藤沢良祐2006「新安船出土の古瀬戸陶器」『新安船陶磁交易』国立海洋遺物展示館
- 17 山本信夫、山本麻里子2007「山陰の出土貿易陶磁と傾向-集落における消費形態及び北部九州と日本海流通に関する基礎的検討-(付篇5)」『波原遺跡 森広遺跡 片山遺跡』-国営農地再編整備事業に伴う波原、角島地区埋蔵文化財発掘調査報告-『下関市文化財調査報告書』25 中四国農政局 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム  
八重樫忠郎1997「輸入陶磁器からみた平泉」『貿易陶磁研究』No.17、日本貿易陶磁研究会  
柳之御所跡はC、D期に相当し山ノ下の中心時期と重なる。広大な範囲が発掘調査され、主要部の建物も明らかとなり、調査条件の面でも重なる点がある。柳之御所の数値内容は以前のもので、現状のものとは異なるが一定の確かな数値を網羅しているためこれを使用した。柳之御所跡の新期更新データは羽柴報告がある。  
羽柴直人2009「東北地方における12世紀の貿易陶磁 -柳之御所遺跡堀内部地区の貿易陶磁器集計を基礎に-」『貿易陶磁研究』No.29、日本貿易陶磁研究会
- 18 同じ手法や器形でもこうした落差があり、伝世品など完璧に近い美術対象のものは少なく、かつ遺跡出土品では欠点を残

すものが多い。考古遺物の数値化ではこれらを区別せず、遺跡内容が持つ人的活動、社会背景など歴史的視点に重きを置く。おそらく当時でも完璧なもの欠点をもつ二級品は価格帯の別はあつたはずであるが、この点の実態は不明である。優品入手は権力と富に左右される現実性は大きく、品位や文化的嗜好に通じた知識人評価、さらに流行の影響など、これらは係数化できず適切な数値表示を出す事は不可能である。

19 旧報告書の各数値は現段階の仕様変更で一部更新している<sup>(註17)</sup>。

C + D期にはランクABC数を含む。C×D期に確定できる分類不詳の白磁数は加算される。

ランクC陶器はC・D期に帰属が確定する分類に限定し、数値は少な目に出ている。分類確定できる場合、実態上はC・D期増加が見込まれる。

陶器は出土例検討により生産年代幅が磁器よりも長い傾向があり、遺構外の資料は注意を要する。

大宰府・博多例、土器型式が伴うC・D期遺構・層位の陶器は限定種以外も数値に加算する。白磁類不明分も同様に加算。

柳之御所は格上となる造営者や造営年代幅から見て、ランクABCの大半はC・D期に属する。

沖手例はC + D期の磁器合計に陶器数4のみ加算。

東山信治2008「沖手遺跡・専光寺脇遺跡」『一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』鳥根県教育委員会

出雲国府は「報告1・2・5」の合計数。

角田徳幸・守岡正司ほか2003「史跡出雲国府跡1」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14』鳥根県教育委員会

守岡正司2004「史跡出雲国府跡2」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15』鳥根県教育委員会

間野大丞・守岡正司・中野萌2008「史跡出雲国府跡5」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書18』鳥根県教育委員会 守岡

正司2012「中世前期の貿易陶磁」『土器・陶磁器から見た中世前半期の山陰-検討会10年のあゆみ』第11回山陰中世土器検討会資料集

挿図・写真は註文献の他に下記を引用した。筆者撮影が一部ある。

東京国立博物館編1978『日本出土の中国陶磁』東京美術

福岡市教育委員会1996「博多50」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第447集

福岡市教育委員会1984「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV、博多」

福岡市教育委員会1995「博多第64次調査 SF49・5面(付編：博多35次調査遺物編)博多47」『福岡市埋蔵文化財調査報告』第396集

福岡市教育委員会1988「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告II博多」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第183集

佐藤一郎1993「宋代の陶磁と瓦の文様 -博多出土の軒丸瓦と黄釉鉄絵盤の花卉文をめぐって-」『博多遺跡研究会誌』

第2号、博多研究会 本誌には博多遺跡群出土陶器盤I類鉄絵例を集成している。

太宰府市教育委員会1989「宝満山遺跡群」『太宰府市の文化財』第12集

九州歴史資料館1981「大宰府史跡第67次調査(推定金光寺)」『大宰府史跡昭和55年度発掘調査概報』

九州歴史資料館1978『大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報』

福岡県教育委員会1975『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集

山下義満2001「灰塚遺跡(II)」『熊本県文化財調査報告書』第197集 熊本県教育委員会 椀II-4b 熊本県灰塚遺跡SK205土壇墓

## 第6章 総括

鹿児島県芝原遺跡 鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「芝原遺跡3」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告170』陶器水注II類×IV類

前田敬彦・北野隆亮ほか1997「和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器」和歌山市教育委員会

韓国文化公報部・文化財管理局1988『新安海底遺物総合篇』他 白磁四耳壺III-3類

## 第3節 山ノ下遺跡の大型総柱建物群

### はじめに

山ノ下遺跡で検出された掘立柱建物12、掘立柱建物13は、ともに身舎の床面積が100㎡を超える11世紀後葉～12世紀中葉の大型の総柱建物である。規模だけでなく、北北東方向に隣接して同時期の掘立柱建物20、掘立柱建物19が建つという構造は、類例がほとんどなく、遺跡の性格を考える上で、この遺構がどのような建物だったと評価できるかという点は重要である。

この節では、山ノ下遺跡の大型総柱建物群の特徴を、県内および県外の同時期の大型総柱建物の事例と比較・検討を行うことで明らかにし、遺跡の性格を考える材料のひとつとしたい。

### 第1項 山ノ下遺跡の大型総柱建物群の特徴

まず山ノ下遺跡の建物の特徴を検討するため、大型総柱建物群の内、時期の古い掘立柱建物13・掘立柱建物19を古段階、掘立柱建物12・掘立柱建物20を新段階と仮称してその特徴を図示した(第219図)。

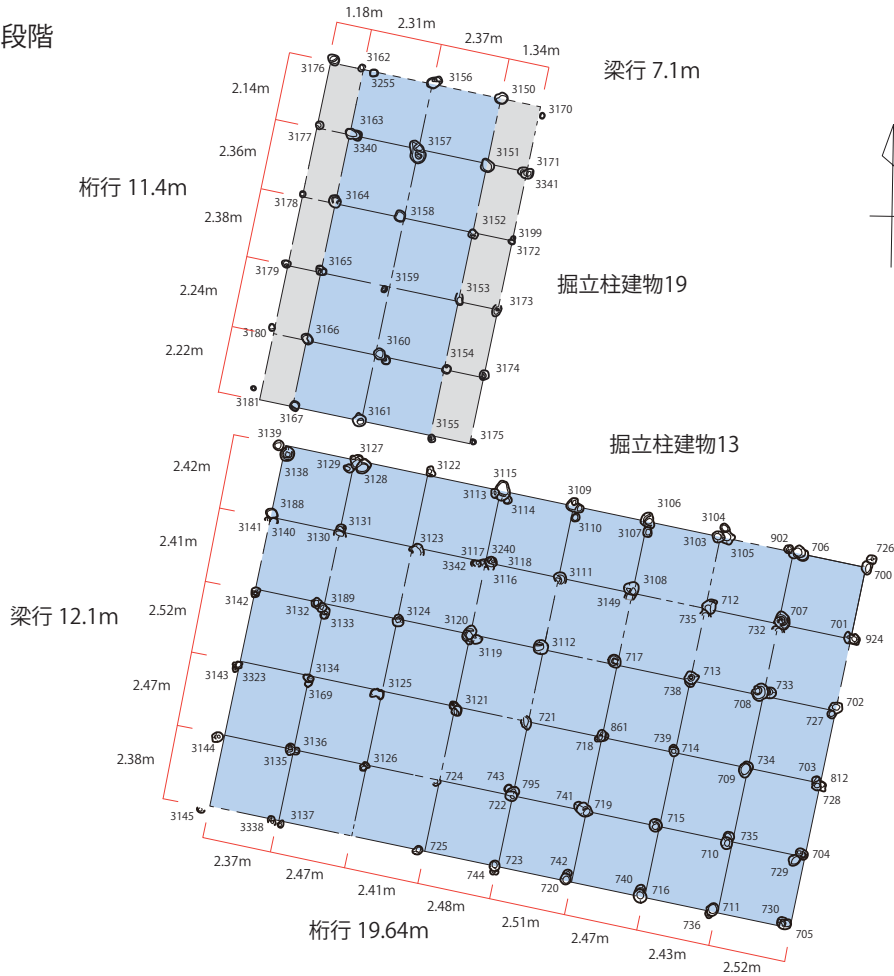
各段階ごとに建物の特徴を見ていくと、古段階の建物である掘立柱建物13は、柱間が桁行平均2.45m(以下柱間はすべて平均値)、梁行2.42mと、桁行方向と梁行方向が均一な、四角形に近い柱間となっている。掘立柱建物19は、身舎の柱間が桁行2.26m、梁行2.29mと四角形に近い。東西辺の廂列は桁行は身舎と同じ、梁行方向の柱間が東辺1.34m、西辺1.18mと若干の差がある。古段階の掘立柱建物13と掘立柱建物19は、若干の差はあるものの四角形に近い同規模の柱間を持ち、柱通りもよく、それぞれの建物を意識して造られている可能性が高い。

一方、新段階である掘立柱建物12の柱間は、桁行2.28m、梁行2.15m、南辺の廂列は桁行は身舎と同じ、梁行1.64mを計る。掘立柱建物20の柱間は、桁行2.34m、梁行2.24m、桁行方向の2列目が調査区外のため明確な柱間は不明だが、2列目と3列目の間が他の柱間列と同等の間隔と仮定すると、梁行方向の1列目の柱間は、掘立柱建物12の南辺廂列の柱間と近似する1.65mとなる可能性がある。

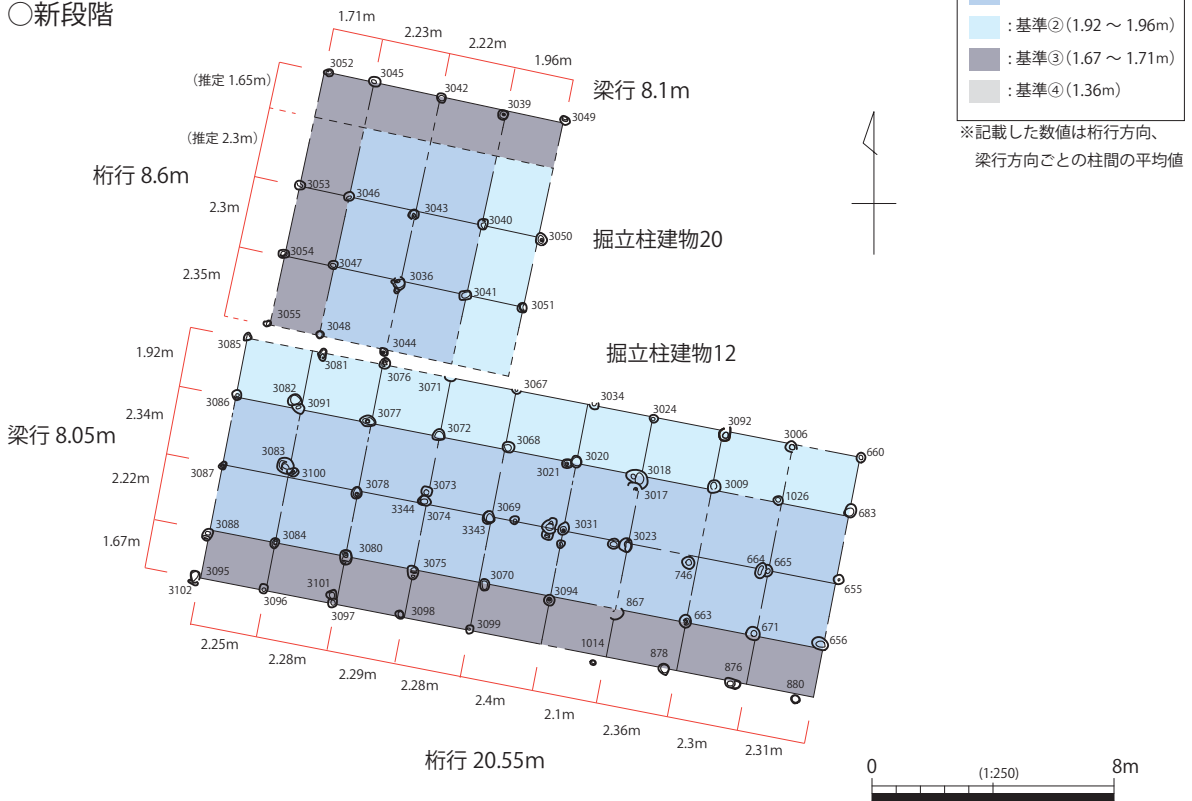
また廂列について、掘立柱建物20の北辺と西辺、掘立柱建物12の南辺の柱間が1.65(推定値)～1.71mと近似値を示しており、同規格の可能性のあることを指摘しておきたい。また掘立柱建物12の北辺の柱間は平均1.92mと他の柱間の平均値2.28mよりやや狭いが、掘立柱建物20の東辺の柱間も平均1.96mと他の柱間より狭くなっている。

まとめると、古段階の遺構である掘立柱建物13・掘立柱建物19は、身舎の柱間2.3～2.45m、廂側梁行1.36mという2つの柱間を基準として築造されており、柱通りも一定している。一方、新段階の掘立柱建物12・掘立柱建物20は、2.2～2.3m、1.92～1.96m、1.67～1.71mという3つの柱間を基準としており、古段階の建物より柱間にばらつきが多く、柱通りも乱れがちであることが分かる。これらの柱間の差については、建物の建て替えが推定できるため、柱同士の組み合わせの差の可能性もあるが、組み合わせを明確にすることができなかった。

○古段階



○新段階



凡例

- ; 基準① (2.2 ~ 2.45m)
- ; 基準② (1.92 ~ 1.96m)
- ; 基準③ (1.67 ~ 1.71m)
- ; 基準④ (1.36m)

※記載した数値は桁行方向、  
梁行方向ごとの柱間の平均値

第219図 山ノ下遺跡掘立柱建物12・13・19・20の柱間平均値



第78表 11世紀中葉～13世紀初頭の大型総柱建物

※廂を含む

遺跡名	遺構名	規模(間) ※	廂の 有無	桁行 総長 (m)	桁行 柱間※ (m)	梁行 総長 (m)	梁行 柱間※ (m)	平面積 (㎡)	身舎 面積 (㎡)	時期
山ノ下遺跡	掘立柱建物13	8×5	—	19.64	2.45	12.1	2.42	237.6	—	11世紀後葉～12世紀後葉(古段階)
山ノ下遺跡	掘立柱建物19	5×4	○	11.4	2.26	7.1	2.29	80.9	52.2	11世紀後葉～12世紀後葉(古段階)
山ノ下遺跡	掘立柱建物12	9×4	○	20.55	2.28	8.05	2.15	165.4	131.9	11世紀後葉～12世紀後葉(新段階)
山ノ下遺跡	掘立柱建物20	4×4	○	8.6	2.34	8.1	2.24	69.7	31.5	11世紀後葉～12世紀後葉(新段階)
下坂本清合遺跡(3-1区)	掘立柱建物2	5×4以上	○	9.2以上	2.3	7.6	2.6	119以上	64.8以上	11世紀後半～12世紀後半
南原千軒遺跡	S B 1	6×3	○	13.1	2.1 (中央付近のみ3)	5.7	2.1	74.7	51.1	12世紀後半～13世紀初頭
南原千軒遺跡	S B 2	5×3	○	11.0	2.1 (中央付近のみ3)	5.8	2.1	63.8	44.1	12世紀前半
門前礎石群	—	7×3か	—	16.2	2.4	7.3	2.4	118.3	—	11～12世紀
沖手遺跡(9区)	建物跡110	7×3	—	11.8	1.6	10	3.6	116.8	—	11世紀後半～12世紀後半
大坪遺跡	SB7	7×4 (南北)	○	16.28	2.28	5.6	2.3	168.08	104.9	11世紀後葉～12世紀前葉
		4×4 (東西)		9.62	2.42	6.4	2.2			
雲出島貫遺跡(B7区)	SB430	4×4 (総柱)	—	9.6	2.4	8.0	2.1～2.2	124	—	11世紀中葉～12世紀前葉
		3×3 (側柱)		6	2.1～2.2	6.2	1.8～2.0			

## 第2項 大型総柱建物の類例

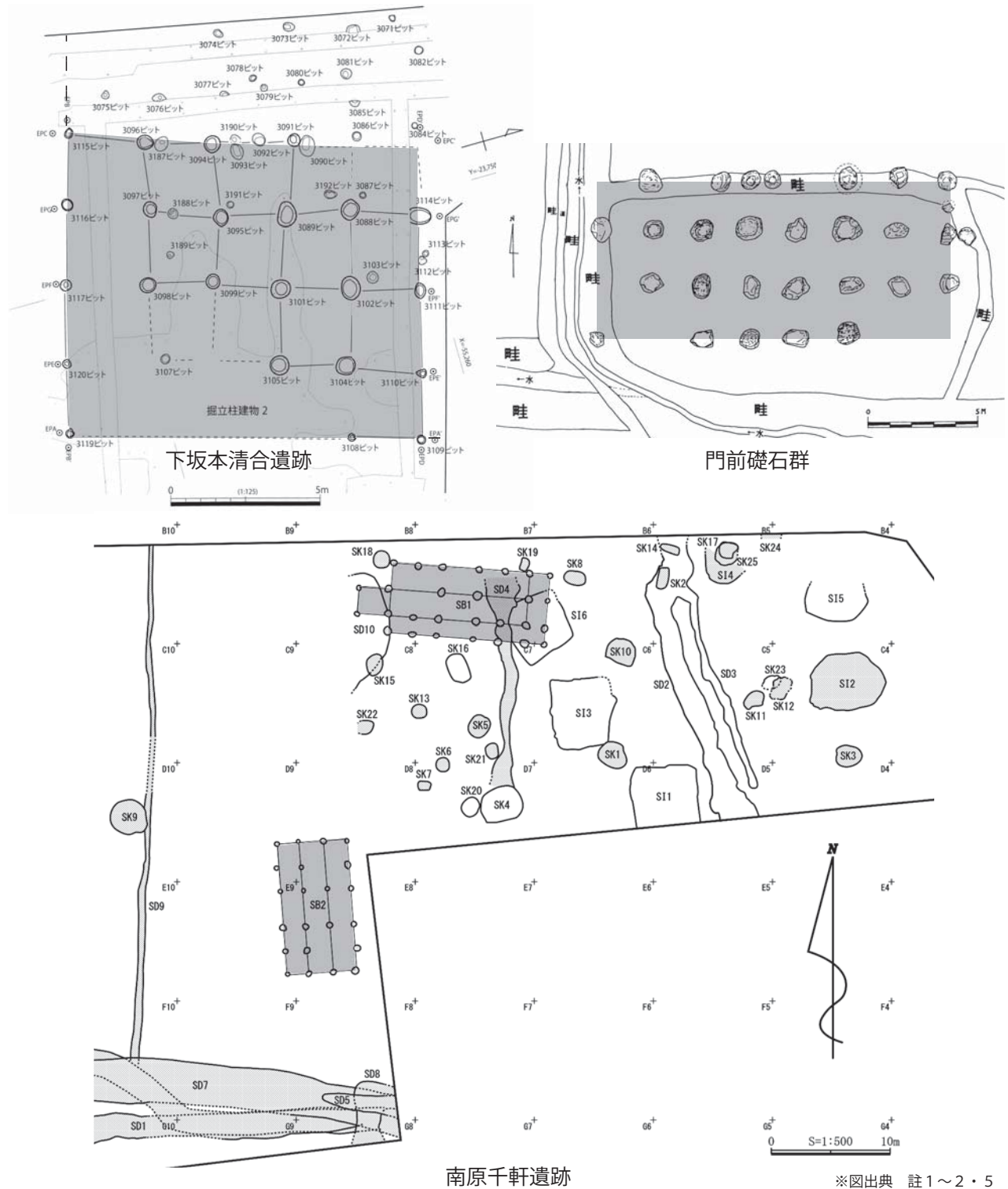
### (1) 県内における類例

次に、山ノ下遺跡事例の評価のため、同時期の大型総柱建物と比較を行う。鳥取県内においては、山ノ下遺跡と同時期である11世紀後半から12世紀の総柱建物の事例はさほど多くはない。

下坂本清合遺跡3-1区掘立柱建物2(第220図)は、北部が調査区外に続くと推定され、全容は不明だが、検出した範囲で身舎の桁行4間(9.2m)、梁行3間(7.6m)、柱間は桁行2.3m、梁行2.6m。東辺に柱間2.1～2.3m、南辺に2.7mの廂を伴い、廂を含めた平面積は119㎡以上と考えられる。16基のピットの内14基に礎盤石が伴い、柱穴から出土した白磁片や青磁片から11世紀後半から12世紀後半の建物と考えられる。付近から出土した銅印は平安時代の私印と考えられ、この建物との関連性が指摘されている<sup>(註1)</sup>。

南原千軒遺跡では、12世紀前半、12世紀後半～13世紀初頭の総柱建物が2棟検出されている(第220図)。S B 2は桁行5間(11.0m)、梁行3間(5.8m)、西辺に廂を持ち、平面積63.8㎡、身舎面積47.3㎡を計る。柱間の平均値は桁行の中央間が約3m、他は桁行・梁行とも約2.1m、廂列は1.5mである。12世紀前半の建物跡と考えられる。

S B 1は、桁行総長6間(13.1m)、身舎の桁行5間(11.3m)、梁行総長3間(5.7m)、身舎の梁行2間(3.9m)、東辺から南辺にかけてL字に廻る廂を持ち、平面積74.7㎡、身舎面積44.1㎡を計る。身舎の柱間は桁行・梁行とも約2.1m、廂列の柱間は1.8mで、西辺の建物柱通りの延長上で確認されたピット2基が建物に伴うと考えられる。時期は12世紀後半～13世紀初頭で、建物の南側に鍛冶工房と考えられる炉跡やピット、土坑などが検出された。

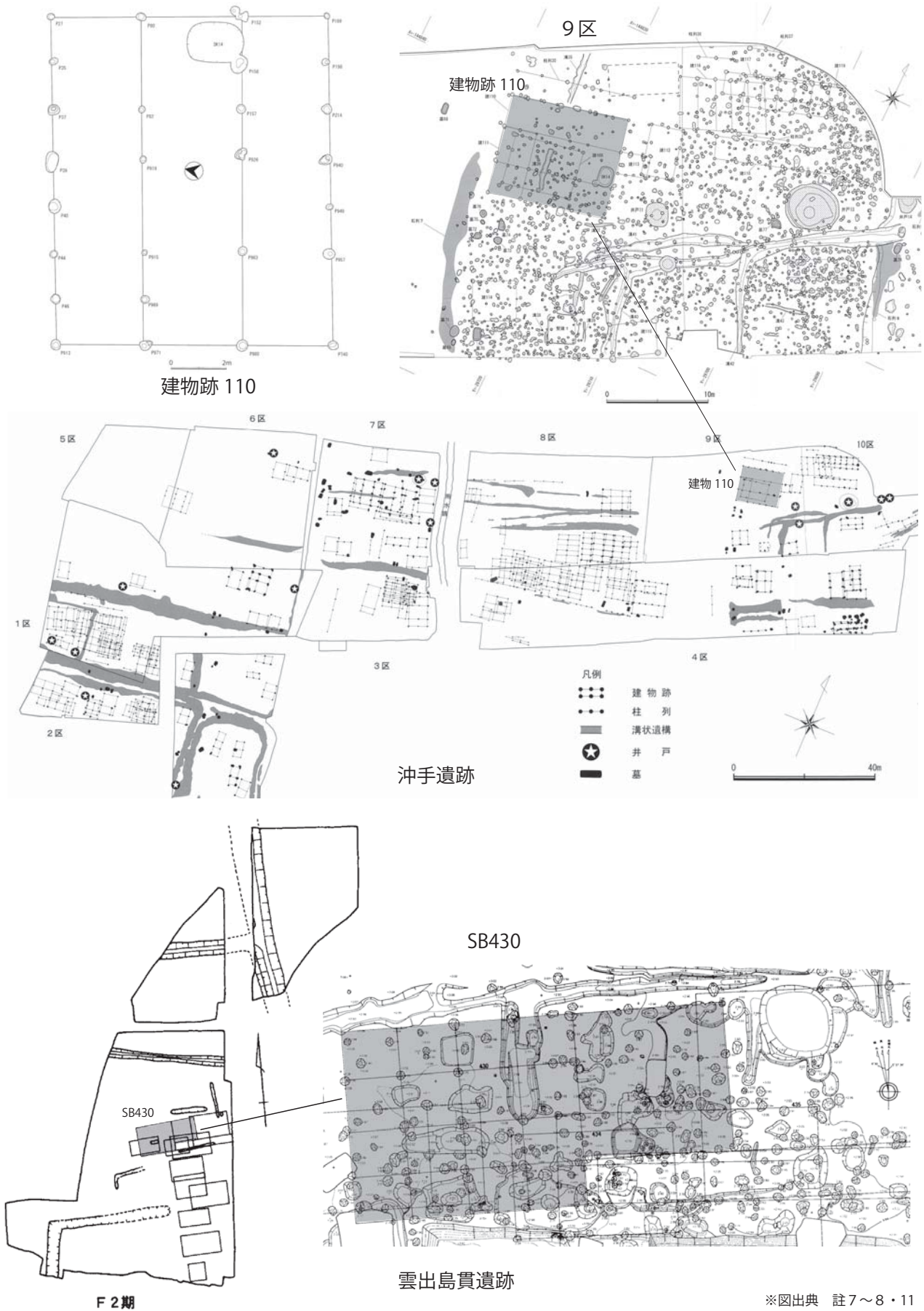


南原千軒遺跡  
第220図 県内における大型総柱建物の類別

※図出典 註1～2・5

SB1、SB2は時期や廂の位置は異なるが、柱間や身舎がほぼ同じ幅、同一規格の建物であった可能性がある。南原千軒遺跡は、小字名や文献資料から荘園遺跡の可能性が指摘されており、居館の構造や鍛冶操業の規模から、在地の武士団や領主層の屋敷と推定されている(註2～4)。

礎石建物という違いはあるが、門前礎石群も11～12世紀の総柱建物と考えられる(第220図)。現存している礎石の列が原位置を保っており、かつ桁行・梁行ともに同数存在していた場合、門前礎石群は桁行7間(16.2m)、梁行3間(7.3m)、平面積118.3㎡であったと推定できる。なお、柱間は礎石の間隔から約2.4mと考えられる(第220図)。付近を古代山陰道が通ることから、古代の奈和駅舎跡とい



第221図 県外における大型総柱建物の類例(1)

う説、寺院跡という説がある<sup>(註5～6)</sup>。

## (2) 県外における類例

県外の総柱建物すべてを網羅するのは困難であるため、平面積が100㎡以上となる大型の建物を類例として挙げ、100㎡以下の建物については一部の記載に留めた。

沖手遺跡(鳥根県益田市)9区建物跡110(第221図)は、梁行7間(11.8m)、桁行3間(10m)、平面積116.8㎡を計る。総柱建物の可能性があるため掲載したが、柱間桁行1.6m、梁行3.6mと長方形に近い柱間で、柱通りも良くない。1区などにも大型の総柱建物が存在していた可能性があるが、切り合いが激しく詳細は不明である。2・3・7・8区においても総柱建物が多数確認できるが、桁行4間、梁行4間、平面積60㎡以下の建物が多い。これらの建物は遺跡の最盛期である11世紀後半から12世紀後半のものと考えられる。遺跡はかつての高津川・益田川河口に位置し、11世紀から13世紀に栄えた港湾集落で、特に11世紀後半から12世紀後半の貿易陶磁器が大量に出土している<sup>(註7・8)</sup>。

横路遺跡原井ヶ市地区(鳥根県浜田市)C調査区SBC2は、最大面積64.25㎡のため記載に留めるが、桁行5間(12.3m)、梁行2間(5.2m)、柱間平均2.4～2.6mの総柱建物で、11世紀後半～12世紀前半頃の貿易陶磁が多数出土している。旧石見国の府中域にある遺跡で、館または在庁官人の居住域と考えられている<sup>(註9)</sup>。

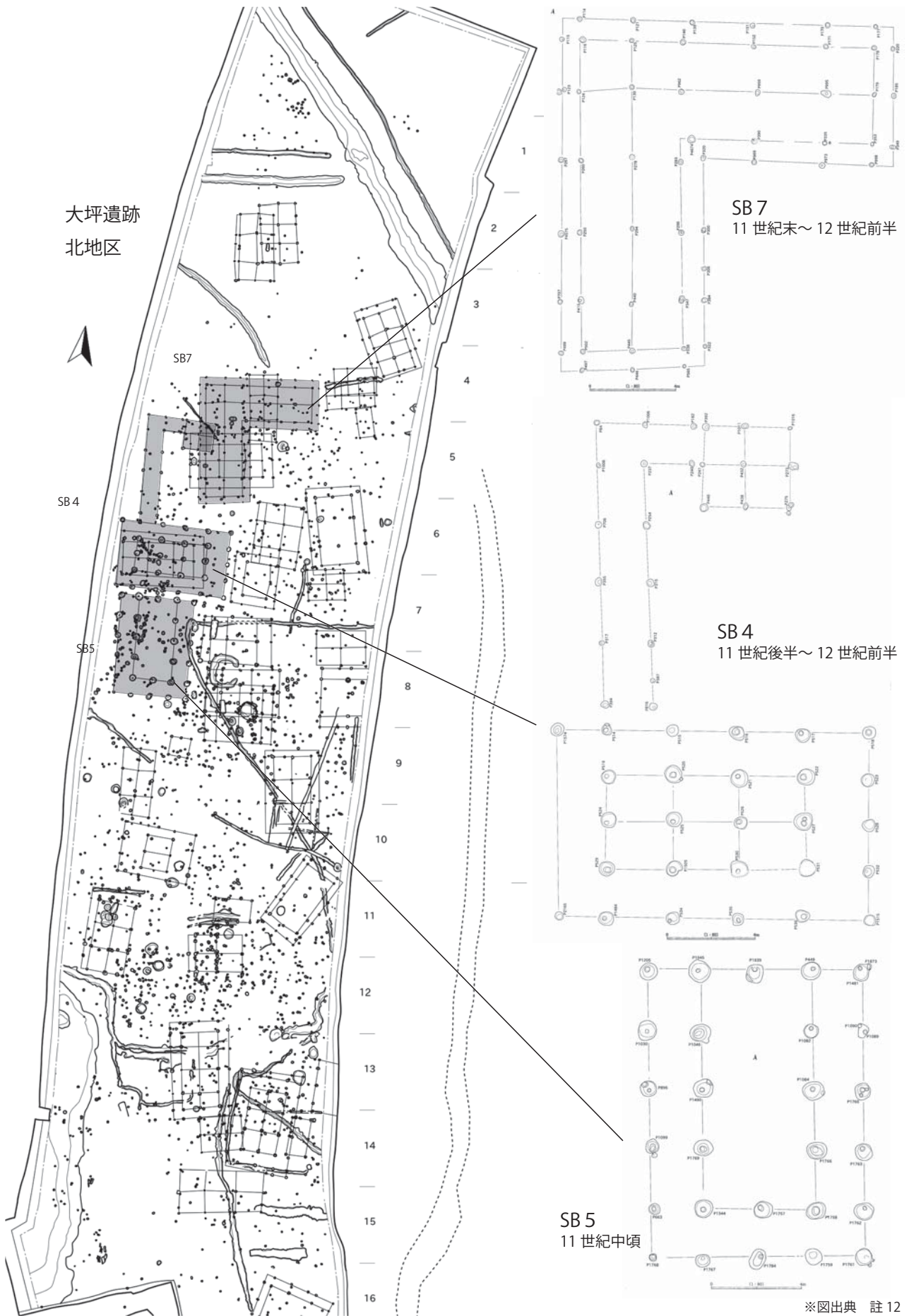
雲出高貫遺跡(三重県津市)SB430(第221図)は、桁行4間、梁行4間の総柱建物に、桁行3間、梁行3間<sup>(註10)</sup>の側柱建物が接合している。総柱建物は、桁行4間(9.6m)、梁行4間(8m)、柱間桁行2.4m、梁行2.1～2.2m。側柱建物は、桁行3間(6m)、梁行3間(6.2m)、2つ合わせて平面積124㎡を計る。出土した遺物から、11世紀中葉～12世紀後半の遺構と考えられる。この遺跡では同時期の総柱建物が5棟程度あるが、いずれも桁行4間、梁行4間、平面積60㎡程度である。遺跡自体は伊勢神宮領嶋抜御厨内に位置するが、11世紀中葉頃に成立した平氏の荘園「木造荘」が隣接して存在することから、平氏との関わりが指摘されている<sup>(註11)</sup>。

大坪遺跡(新潟県阿賀野市)SB7(第222図)は、L字を縦方向に反映した様な平面形を呈し、6辺に庇がめぐる独特の形状をしている。南北方向を向く長辺は、桁行総長7間(16.28m)、身舎の桁行5間(14.2m)、梁行総長4間(5.6m)、身舎の梁行2間(4.6m)、東西方向を向く短辺は桁行総長4間(9.62m)、身舎の桁行3間(8.8m)、梁行総長4間(6.4m)、身舎の梁行2間(4.5m)。廂列は身舎から幅1mをとり、概ね身舎の柱列上に位置しており、廂列を含めた平面積168.08㎡を計る。出土した遺物から、11世紀末～12世紀前半の遺構と考えられる。大坪遺跡においても、同時期の総柱建物が多数あるが、一部の大型の建物を除き桁行3間、梁行2～3間、平面積20～60㎡である。

白磁など貿易陶磁器が多数出土しており、その中でも12世紀前半～13世紀中葉の高麗青磁は、東北では柳之御所遺跡(岩手県)、熊野堂大館跡(宮城県)、初期高麗青磁が出土した阿賀野川上流の陣が峯遺跡(福島県)など数遺跡でしか確認されていない。これら貴重な貿易陶磁や大型の建物から、有力者の居館跡の可能性が高く、当時阿賀北地域に勢力を誇っていた平家の越後城氏との関連が指摘されている。城氏は11世紀後葉から越後において活発に活動し、13世紀初めに滅亡しているが、遺跡の盛衰も城氏の盛衰と時期的に一致し、13世紀に途絶えている<sup>(註12)</sup>。

## (3) 山ノ下遺跡大型総柱建物群との比較

山ノ下遺跡の大型総柱建物と同時期の総柱建物では、11世紀代の下坂本清合遺跡では桁行2.3m、梁行2.6mと山ノ下遺跡の身舎の柱間の長さに近いが、梁行が長い長方形の柱間である。12世紀以降



第222図 県外における大型総柱建物の類例(2)

の南原千軒遺跡では、中央付近のみ柱間が3mになる箇所があるが、他は2.1mで、廂の幅以外ほぼ同規格を12世紀後半のSB1にも採用している。門前遺跡群は礎石建物ではあるが、柱間2.4mと山ノ下遺跡の柱間規模に近い。県外の事例においても、柱間が長方形に近い例、方形に近い例と様々な規格があるが、身舎の柱間は概ね2.1～2.4mである。

これら類例の共通点として、貿易陶磁器が多数出土しており、港湾集落を除き在地の有力者の居館である可能性が指摘されている。また、雲出島貫遺跡、大坪遺跡の事例は、総柱建物と側柱、総柱建物同士が接続した形で大型化している。山ノ下遺跡では建物の立て替えを行っているため、常に掘立柱建物12、掘立柱建物13の北北東に掘立柱建物20、掘立柱建物19が存在したかは明確ではないが、ある時期の山ノ下遺跡の大型総柱建物群も、2つの建物が一体として機能していた可能性を指摘しておきたい。

### 第3項 四面廂建物から総柱建物へ

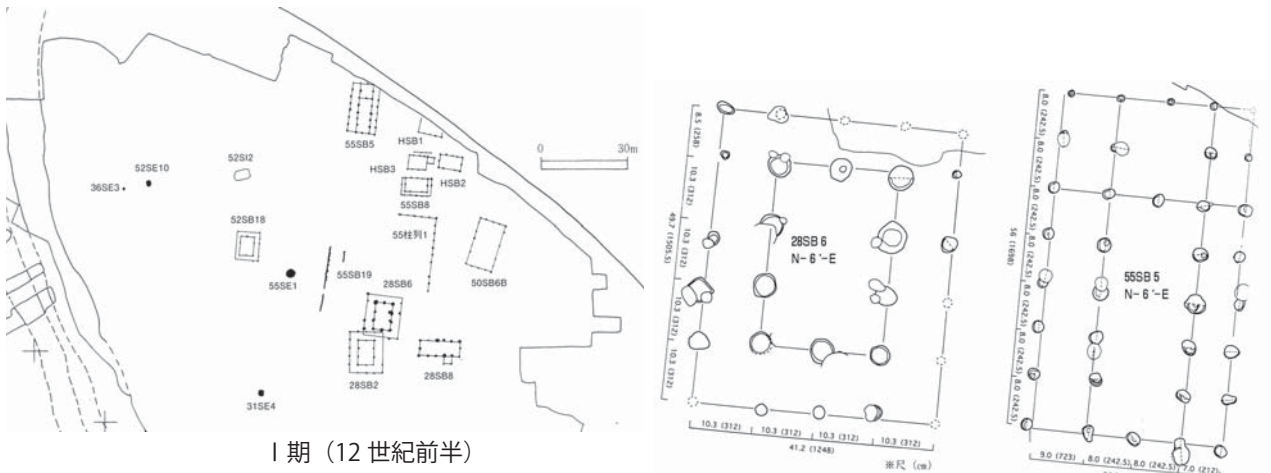
大坪遺跡では、SB7より古い建物と考えられるSB4、さらに古いSB5と平面積が100㎡を超える大型の掘立柱建物が3棟隣接または切り合っているが、これらの建物がSB7を除き三面または四面に廂がめぐる建物(以下、○面廂建物)であることに注目したい(第222図)。この遺跡では11世紀後葉の平面積が70～100㎡を超える建物が他に8棟報告されているが、このうち7例が三面または四面廂建物であり<sup>(註12)</sup>、大坪遺跡内の大型建物の主流は四面廂建物で、わずかに大型総柱建物があったと言える。

四面廂建物は、古代官衙にみられる建築様式だが、10世紀になると従来の官衙とは異なる場所でも築造されている。多賀城(宮城県多賀城市)では、国司館と推定される四面廂建物が検出されており、国庁が衰退し国司や在地の有力者の力が強まる時期に、国司を始め在地の有力者の居館として四面廂建物が採用されたと考えられている。この傾向は東北で顕著であり、陣が峯遺跡、大鳥井山遺跡といった安倍氏・清原氏に関わる遺跡の大型建物はいずれも四面廂建物である(八重樫2017)。柳之御所遺跡(岩手県平泉町)においても、平泉の初期である柳之御所遺跡Ⅰ期(12世紀前半)最大の建物は、柱間3m以上の四面廂建物28SB6(第223図)である<sup>(註13・14)</sup>。

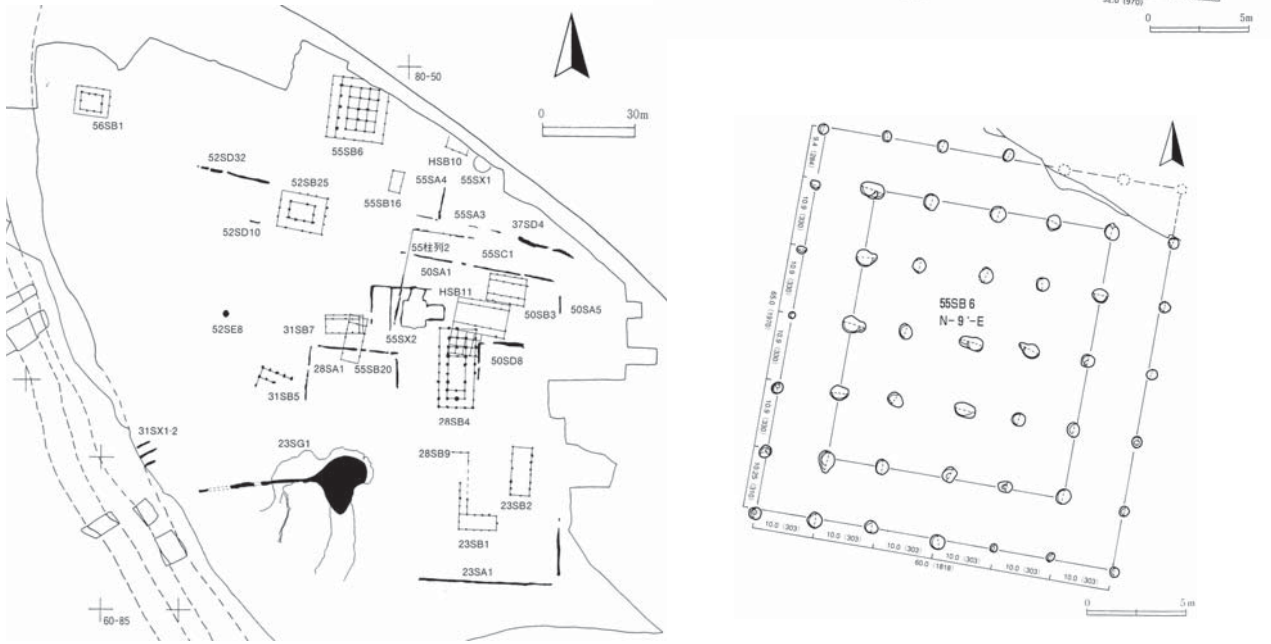
しかし、柳之御所遺跡Ⅲ期(12世紀後半)になると、四面廂建物も存在はしているものの、最大の建物が総柱建物55SB6(第223図)に変わっている。他の地域でも、12世紀後半以降、大型の総柱建物が出現しており、大内城跡(京都府福知山市)では、大型の総柱建物が4棟築かれている。この遺跡では、中国製陶磁器1300片以上を含む豊富な土器群が出土しており、平安時代末期の六人部荘を管理する荘官の館跡と推定されている<sup>(註15)</sup>。

同様の大型総柱建物は12世紀後半以降、梅原胡摩堂遺跡(富山県砺波市)、任海宮田遺跡(富山県富山市)、久田原遺跡(岡山県鏡野町)など、荘園関連遺跡で多数確認できる。和気遺跡では12世紀後半に大型総柱建物が築造され、後に堀と土塁を伴う居館(A型居館)に変化することが指摘されており(広瀬2006)、12世紀末から13世紀には、杉本寺周辺遺跡(神奈川県鎌倉市)Ⅲ面建物30のように、有力武士の屋敷と推定される建物跡が大型総柱建物であることが分かる(第223図)<sup>(註16)</sup>。

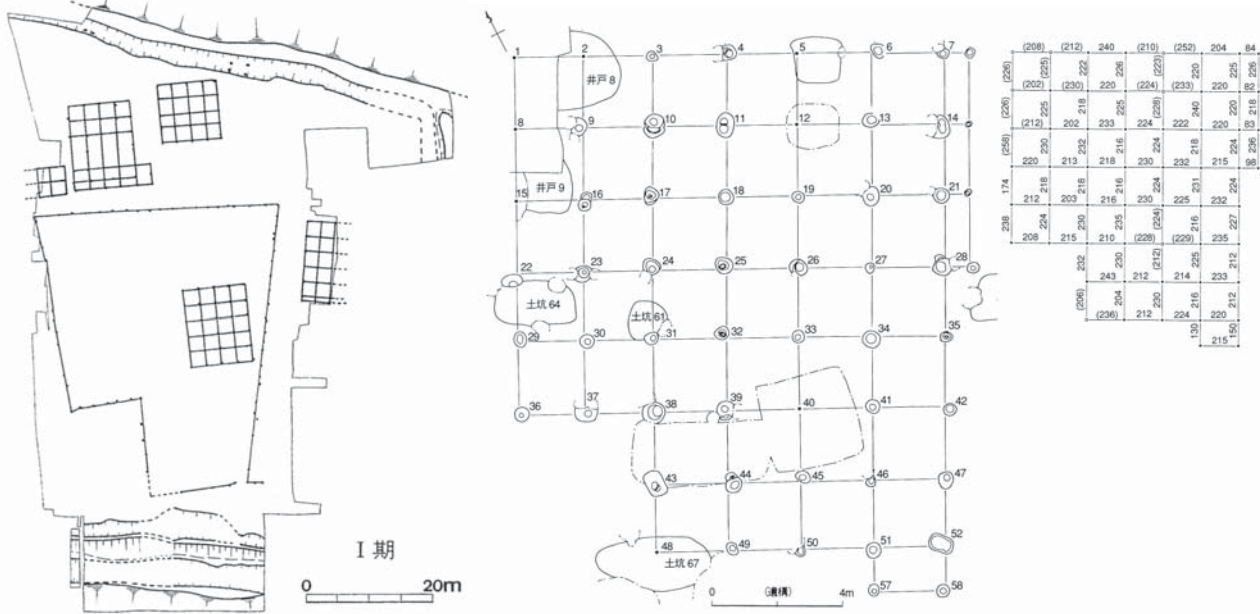
これらの遺跡の様相から、11世紀後半から12世紀にかけて、在地の有力者のものと推定される大型掘立柱建物が、次第に四面廂建物から、総柱建物に変化していくことが読み取れる。10世紀の四面廂建物の事例の多くが中部～東北地方であるため、県内における推移には、10世紀の四面廂建物の有無



I期 (12世紀前半)



III期 (12世紀後半) 柳之御所遺跡



大内城跡 I期 (12世紀末)

杉本寺周辺遺跡III面建物30 (12世紀末～13世紀)

※図出典 註13～16

第223図 12世紀以降の大型総柱建物の類例

などを検討していかなければならないが、有力者の居館として大型総柱建物が出現する過程には、雲出島貫遺跡、大坪遺跡のような様々な形態が存在しており、山ノ下遺跡の大型総柱建物もそのひとつと考えられる。

## おわりに

山ノ下遺跡と同時期の雲出島貫遺跡、大坪遺跡では、平氏の荘園との関わりや、平氏方の武士との関係性が高いことが指摘されている。逆算した見方にはなるが、12世紀後半から13世紀の大型総柱建物の類例はいずれも、荘園領主や有力武士の居館の可能性が高い建物跡であり、山ノ下遺跡の建物も同様の有力者のものと考えられる。

山ノ下遺跡周辺における当該期の有力者としては、在庁官人から武士になった小鴨氏が挙げられる。小鴨氏は系図によると源平争乱期には平家に与しており(新編倉吉市史編集委員会編1995)、伯耆を二分する勢力を有していたとされる(鳥取県公文書館編2017)。出土遺物だけでなく、建物の規模・特徴からしても、山ノ下遺跡の大型総柱建物群は有力者の居館といって差し支えなく、小鴨氏に関わりの深い建物と考えられる。

### 【参考文献】

- ・川本重雄編2013『寝殿造と書院造の間－建築史学と考古学の接点を求めて－』京都女子大学
- ・新編倉吉市史編集委員会編1995『新編 倉吉市史 第2巻』
- ・鳥取県立公文書館編2017『新鳥取県史古代中世2 古記録編』鳥取県
- ・広瀬和雄2006「領主居館の成立と展開」小野正敏・萩原三雄編『鎌倉時代の考古学』高志書院
- ・八重樫忠郎2017「つわものの館の成立と姿」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『遺跡に読む中世史』高志書院

### 【註】

- (1) 鳥取県教育委員会2017『下坂本清合遺跡Ⅱ』
- (2) 財団法人鳥取県教育文化財団2005『南原千軒遺跡』
- (3) 鳥取県埋蔵文化財センター2007『南原千軒遺跡Ⅱ』
- (4) 鳥取県埋蔵文化財センター2008『南原千軒遺跡Ⅲ・梅田東前谷中峯遺跡・梅田六ツ塚遺跡』
- (5) 名和町教育委員会1977『名和遺跡群発掘調査報告書』
- (6) 鳥取県立公文書館編2018『新鳥取県史(資料編)考古3 飛鳥・奈良時代以降』鳥取県
- (7) 益田市教育委員会2010『沖手遺跡・久城東遺跡』
- (8) 益田市教育委員会2014『沖手遺跡』
- (9) 浜田市教育委員会1998『横路遺跡(原井ヶ市地区)』
- (10) 報告書本文では梁行4間と記載されていたが、平面図から確認できたのは3間であった為、梁行3間として掲載した。
- (11) 三重県埋蔵文化財センター2000『嶋抜Ⅱ』
- (12) 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2006『大坪遺跡』
- (13) 岩手県教育委員会2002『平泉遺跡群 柳之御所遺跡第55次発掘調査報告書』
- (14) 岩手県教育委員会2004『平泉遺跡群発掘調査報告書 猫間が淵跡』
- (15) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1984『京都府埋蔵文化財調査報告書 第3冊』
- (16) 杉本寺周辺遺跡発掘調査団2002『杉本寺周辺遺跡』鎌倉市教育委員会



## 第4節 総括

### 第1項 山ノ下遺跡の調査成果

山ノ下遺跡は縄文時代から近世に至る集落遺跡であるが、その主体は平安時代後期から鎌倉時代である。ところで、第3章第2節で触れたように山ノ下遺跡は圃場整備により顕著な削平を受けており、遺物包含層やその他堆積層が遺跡全体にわたって安定した堆積となっていない。そのため遺構検出面と実際の遺構の帰属時期には乖離が生じるものもあることから、本項では改めて出土遺物の年代観や遺構の堆積土の特徴などの検討から、平成28年度調査成果も合わせ遺構変遷の整理を行い調査成果をまとめる(第224図)。

#### 縄文時代

落とし穴を11基(8土坑、3146・3183～3185・3187・3190・3216・3222・3330・3337落とし穴、うち8土坑は平成28年度調査の続き)検出している。平成28年度調査分(210・600・631・1027・1076・2016・2057・2079土坑)を合わせると19基である。落とし穴より遺物は出土していないが、底面中央にピットを有し、埋土がV層由来の黒(褐)色土であるという所見から当該期と想定している。配列の規則性は特に認められない。小鴨川左岸の河岸段丘上が狩猟場として広域に利用されていたことが窺える。

#### 弥生時代

中期前葉の溝2条(250溝a・b、平成28年度調査の続き)、土坑1基(3186土坑)を検出している。平成28年度調査分を合わせると中期前葉の溝2条、土坑2基(1004・3186土坑)、ピット1基(1010ピット)、中期中葉の土坑1基(1003土坑)が確認されたことになる。250溝は新旧2時期(250溝b→250溝a)にわたり構築されていたことが今回の調査で明らかとなり、新段階の250溝aは総延長約190mを測る。溝には砂混じりシルトや底面付近に粗砂が堆積していることから、流水の環境下に置かれた時期があることを示しており、耕作地における用水路の可能性がある。弥生時代の遺物は調査区南西部付近に集中しており、調査区外の南西から南方面に集落が展開していたと予想される。

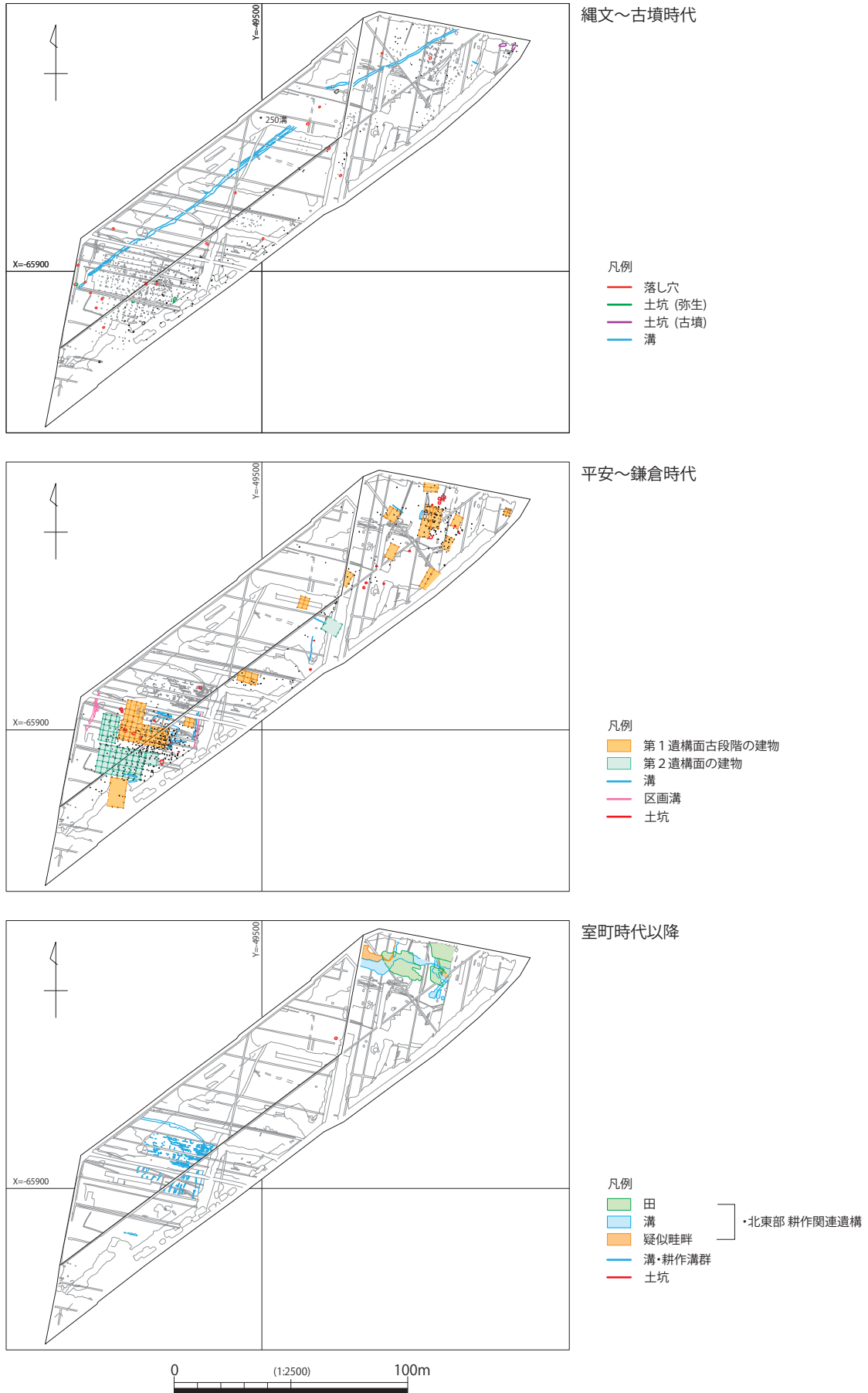
#### 古墳時代

今回の調査では遺構は検出されなかった。平成28年度調査で墓壙と想定される前期初頭の土坑2基(288・289土坑)が調査区東北隅で確認されている。

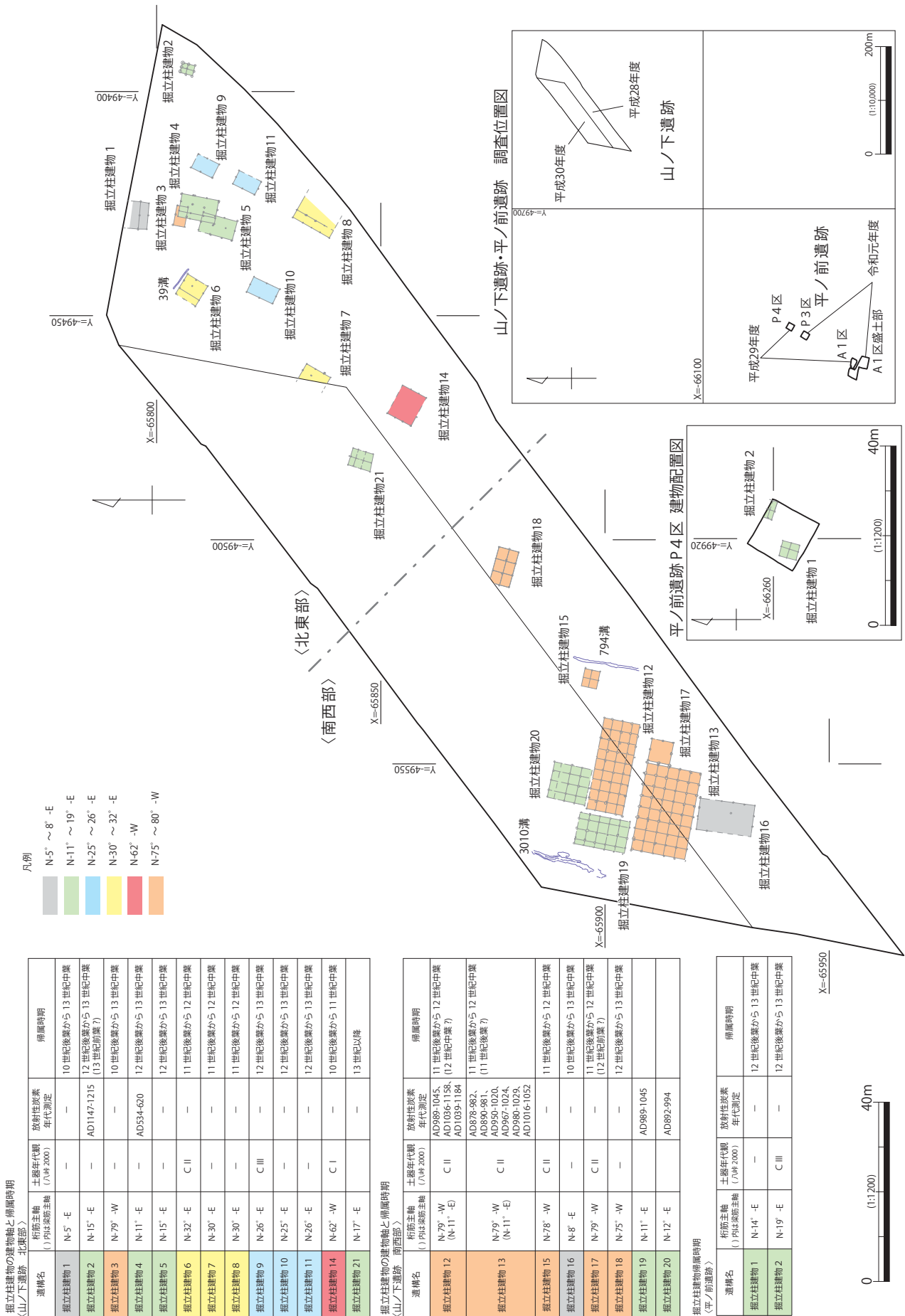
#### 平安時代から鎌倉時代

調査区北東部と南西部で集落が形成される。北東部では主に12世紀後葉から13世紀中葉の掘立柱建物が点在し、調査区南西部で11世紀後葉から12世紀中葉の掘立柱建物(以下、「建物」と呼称)が集中する(第225図)。

北東部では建物13棟(掘立柱建物1～11・14・21)、土坑13基(14・22～25・62・129・134・220・349・350・620・633土坑)、溝2条(120・915溝)が検出されている。建物群は建物主軸で大きく6つにグルーピングできる(第225図)。さらに出土遺物の年代観や放射性炭素年代測定の結果を加味すると、一時期に3棟程度が同時並存し、建物配置に規則性がみられない。建物1・4・6・8は廂付建物であり、建物の格式が高いが当該期の一般的な規模である。建物6では雨落ち溝と想定される溝が



第224図 時期別遺構変遷図



- 凡例
- N-5° ~ 8° -E
  - N-11° ~ 19° -E
  - N-25° ~ 26° -E
  - N-30° ~ 32° -E
  - N-62° -W
  - N-75° ~ 80° -W

遺構名	桁筋主軸 (JPHは築跡主軸)	土層年代観 (704P-2000)	放射性炭素 年代測定	所属時期
掘立柱建物1	N-5° -E	-	-	10世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物2	N-15° -E	-	AD1147-1215	12世紀後葉から13世紀中葉 (13世紀前半?)
掘立柱建物3	N-79° -W	-	-	10世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物4	N-11° -E	-	AD534-620	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物5	N-15° -E	-	-	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物6	N-32° -E	C II	-	11世紀後葉から12世紀中葉
掘立柱建物7	N-30° -E	-	-	11世紀後葉から12世紀中葉
掘立柱建物8	N-30° -E	-	-	11世紀後葉から12世紀中葉
掘立柱建物9	N-26° -E	C III	-	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物10	N-25° -E	-	-	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物11	N-26° -E	-	-	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物14	N-62° -W	C I	-	10世紀後葉から11世紀中葉
掘立柱建物21	N-17° -E	-	-	13世紀以降

遺構名	桁筋主軸 (JPHは築跡主軸)	土層年代観 (704P-2000)	放射性炭素 年代測定	所属時期
掘立柱建物12	N-79° -W (N-11° -E)	C II	AD989-1045, AD1036-1158, AD1039-1184	11世紀後葉から12世紀中葉 (12世紀中葉?)
掘立柱建物13	N-79° -W (N-11° -E)	C II	AD878-982, AD890-981, AD950-1020, AD967-1024, AD980-1029, AD1016-1052	11世紀後葉から12世紀中葉 (11世紀後葉?)
掘立柱建物15	N-78° -W	C II	-	11世紀後葉から12世紀中葉
掘立柱建物16	N-8° -E	-	-	10世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物17	N-79° -W	C II	-	11世紀後葉から12世紀中葉 (12世紀前半?)
掘立柱建物18	N-75° -W	-	-	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物19	N-11° -E	-	AD989-1045	-
掘立柱建物20	N-12° -E	-	AD892-994	-

遺構名	桁筋主軸 (JPHは築跡主軸)	土層年代観 (704P-1000)	放射性炭素 年代測定	所属時期
掘立柱建物1	N-14° -E	-	-	12世紀後葉から13世紀中葉
掘立柱建物2	N-19° -E	C III	-	12世紀後葉から13世紀中葉

第225図 掘立柱建物配置図

伴っている。建物に付随する区画溝や墓壇などは検出されていない。

北東部より出土する遺物は、京都系土師器皿などの供膳具や威信材の貿易陶磁に加え鍋や羽釜などの煮炊具などが顕著に出土する(第6章第1節)。廂付建物などやや格式が高い建物がみられるものの、遺物の内容からみれば一般的な集落の様相を帯びている。

以上の建物群の多くは時期幅を有するが、北東部のⅢ・Ⅲ-1・2層出土遺物の検討から12世紀後葉から13世紀中葉に帰属する建物を中心であり、13世紀後半には廃絶され以後は耕作域へと変化する。

南西部では建物8棟(掘立柱建物12・13・15~20)、溝8条(666・794・2014・2019・3010a~d溝)、土坑13基(697・950・2002・2028・2096・3015・3056・3057・3065・3066・3259・3268・3270土坑)が検出されている。建物群は建物主軸で大きく3グループに分類できる。さらに検出した遺構面と出土土器の年代観、放射性炭素年代測定の結果から、建物16が10世紀後葉から13世紀中葉、建物15・17~20が11世紀後葉から12世紀中葉、建物18が12世紀後葉から13世紀中葉に帰属する。このうち平成28年度調査で検出された建物15は、建物主軸が大型建物群12・13・19・20と近く、出土遺物からも同時期に帰属することから、建物12・20、建物13・19いずれかに伴う。また、建物17は建物13の柱穴を切っていることから、建物13より後出することが分かっている。大型建物12・13・19・20については第2項で後述する。

建物12の東辺から北辺を一部重なり合ってL字形に囲む666溝は、西側が大きく開き、東側が建物東辺に沿うかたちで折れ曲がって窄まる。建物12の最北列の柱穴4基が溝を切っていることが今回の調査で確認されており、建物12より先行する。一方、検出面は異なるが建物13と溝の重複はなく、同時並存の可能性を残す。溝の堆積土はラミナ構造が見られず、流水の環境下であった可能性は低いことから苑池ではないと判断している。溝からは数多くの土器が出土しており、土師器皿が意図的に重ねられた状態で出土している事例もあることから、地鎮等の祭祀行為が行われた可能性がある。

建物群の東西に溝(3010・794溝)が並走し、敷地を区画する。平成28年度調査で検出された794溝は、当初水路の可能性を指摘したが、主軸方向や規模、埋土の特徴と出土遺物を改めて検討した結果、3010溝と類似することから、建物群を区画する溝と判断した。建物群を挟んだ溝間距離は約46mであり、半町程度になる。建物群西に位置する3010溝は、第2遺構面で確認され、少なくとも3回改修がなされている。第2遺構面の建物13・19に伴うことは確実であるが、第1遺構面で検出した建物12・20とも並行していることや繰り返し改修がなされていることなどから、建物12・20の時期でも継続して区画溝として存在した可能性がある。なお、南北を区画する溝の存在は、圃場整備による削平により確認できなかったため不明である。

建物群周辺で検出された土坑は15基であるが、土器等が多数廃棄される土坑は数基(3056・3057土坑)に留まり、それに代わって西側の区画溝である3010溝に多量の供膳具の土器が廃棄されていた。なお、建物群周辺で墓壇(屋敷墓)や井戸は発見されていない。

### 室町時代から江戸時代

南西部の747溝群及び3035耕作溝群は第1遺構面で検出されているが、出土遺物から13世紀中葉以降の耕作痕跡である。北東部では14世紀初頭以降に営まれる水田(7・10田)が確認されている。1~3田は16世紀以降の水田跡であり、遺跡の中央部では19世紀初頭の暗渠(3022溝)が構築されていることから、調査地は室町時代以降は再び居住域となることなく耕作域として利用され続けたことが窺え

る。遺跡の北東150mには小鴨氏の家臣岡田某氏の居城とされる市場城があり、さらに市場城より東方250mに小字名「村通」「村東通り」といった現況の集落が立地している。中世後期には集落自体が北東部へ移動・展開していったものと推測される。

## 第2項 建物群の構造と性格

今回の調査では南西部の4棟の建物(掘立柱建物12・13・19・20)のうち、前回調査で一部検出していた建物(掘立柱建物12・13)の全容が判明した。片廂総柱建物である建物12は平面積165.2㎡、総柱建物である建物13は平面積237.6㎡を測り、現段階で当該期における県内最大級の規模を誇る(第6章第3節)。

建物20・19は、前者が三面廂、後者が二面廂の総柱建物で、建物12・13にそれぞれ直交してL字型の配置となる。建物12・20が第1遺構面、建物13・19が第2遺構面で検出されていることから、建物13・19から建物12・20へと建物位置を僅かにずらして、同じL字型の構造で建て替えが行われていたことが明らかとなった。

建物12と建物20、建物13と建物19は、それぞれの柱筋が通っていること、柱穴埋土の特徴や出土遺物の年代観等から同時期に構築されたものと判断しているが、建物間距離は約0.5～1mと近接している。そのためL字型の構造を持つ同一建物の可能性が高いが、別棟とすることも今後の検討課題としたい。身舎の柱穴規模は大きく、根石や根巻石といった基礎固めが行われ、強固な構造となっている。一方で北側に張り出した建物19・20と建物12・13の廂部分の柱穴規模はわずかに劣る。建物群の身舎の柱間寸法は平均2.4m前後であり、概ね八尺四方となる。

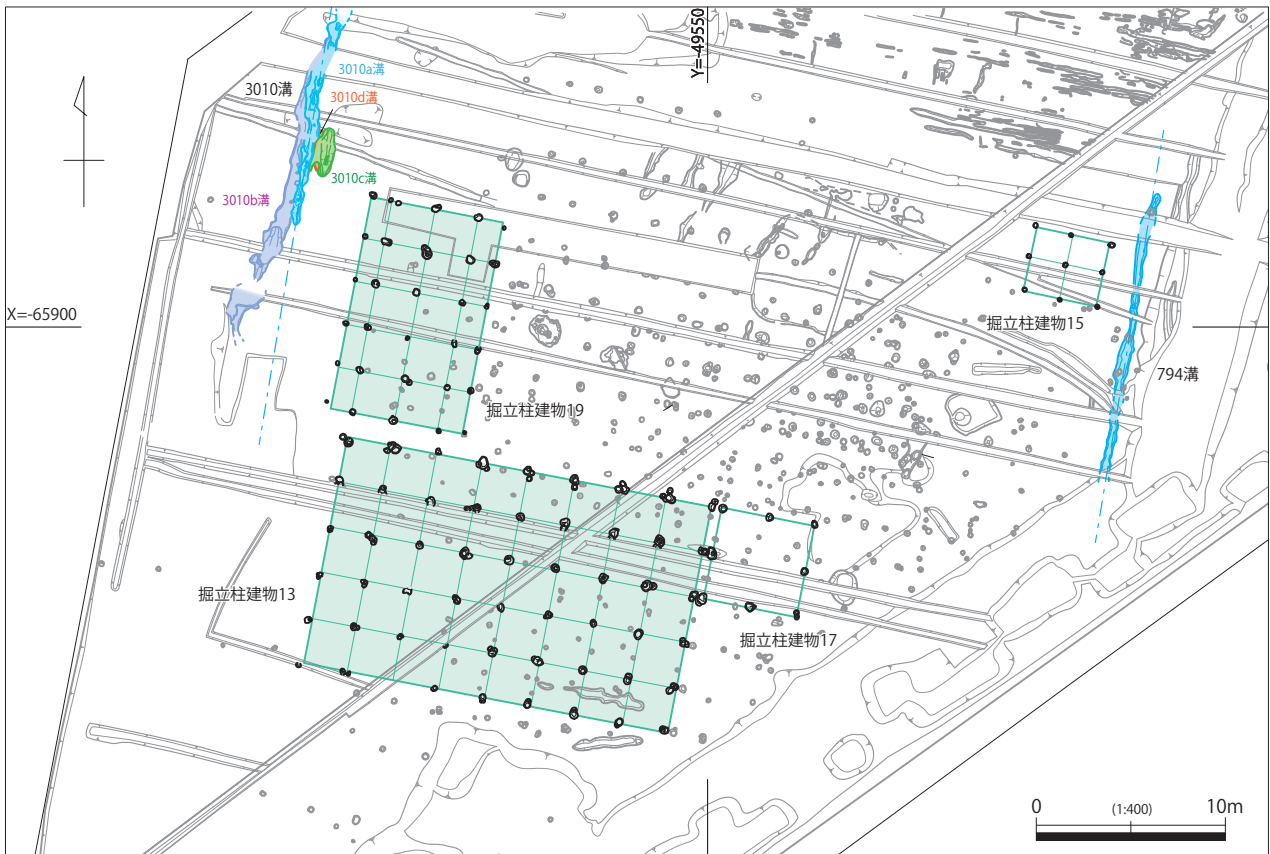
建物を廃絶する際には、柱抜き取り穴に完形土器や割れた土器片、根固め石等を埋め戻す祭祀行為が多数行われていることが確認された(第6章第1節)。

ところで同時期の京都で上流貴族を中心に、総柱の寝殿造が普及していたことが文献史料でわかっている(川本2011)。これらの事例を参考に、本遺跡の建物12・13を寝殿の母屋(身舎)、北側張り出し部である建物20・19を庇(廂)と仮定すれば、その構造が極めて類似していることがわかる。南面する母屋が広く開放的で、儀式・儀礼と生活空間を兼ね備え、北庇(廂)が寝室や座所といった機能空間を類推できる。

これに符合するように母屋に隣接する666溝や敷地を区画する3010溝で、饗宴で使用された土師器坏や皿、柱状高台等の供膳具が大量に廃棄されている。さらに威信財を含む海外交易品である貿易陶磁器や錫製椀が見られることも注目される。一方で生活雑器である甕や鍋といった煮炊具(調理具)が極めて少ない。

その貿易陶磁器の評価は、遺跡全体ではC期(11世紀後半から12世紀前半)の陶磁が優勢であり、最も注目されるのが建物13で出土した越州窯水注・壺・白磁壺などの優品が見られることである(第228図)。全国的にも出土例が少なく、当時としても稀少品であった(第6章第2節)。

次に、これらの建物群が古代の地割に基づき構築されたものか検討を試みた。第229図は山ノ下遺跡が位置する倉吉市小鴨・上古川地内の条里地割を復元したものである。鳥取県内の条里地割と条里呼称法を復元している岩永實氏の復元案(岩永1959)をもとに作成したもので、岩永案の条里区画と杉本寿一氏の復元案である倉吉市域の小字界(杉本1983)と照合し「大田」「八反田」「カケ揚り」西辺



第226図 掘立柱建物13・19配置図



凡例

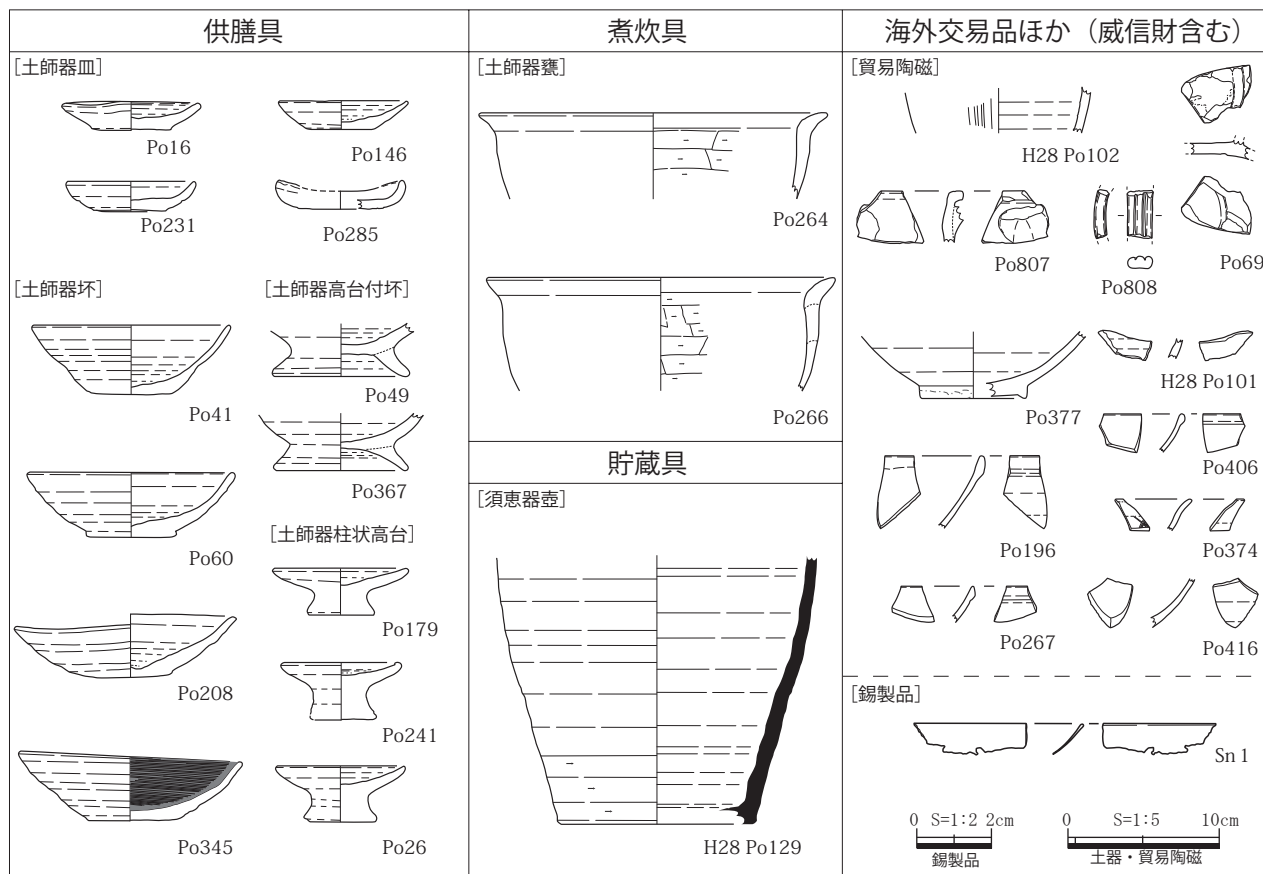
--- 区画溝主軸方向

区画溝 794・3010溝

・主軸 N-10°-E

・間隔 44.5m

第227図 掘立柱建物12・20配置図



H28Po:公益財団法人鳥取県教育文化財団2018『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』掲載遺物

第228図 山ノ下遺跡出土主要遺物

の南北軸が条里方格線にはほぼ符合することが明らかとなった。それを基点に復元を行ったところ、地割の方位はN-11° -Eで、現況の農道も条里地割の痕跡を比較的良く残して敷設されているようである。

第230図はこの復元案に山ノ下遺跡を嵌め込んだものであり、調査区南西部の大型建物群や区画溝は坪半町の区画内に南北軸を揃えて構築していたことが確認できた。一方で、後出する調査区北東部の建物群は条里地割とは別に不規則に構築されており、その意味からも両者の性格の違いを窺わせる。

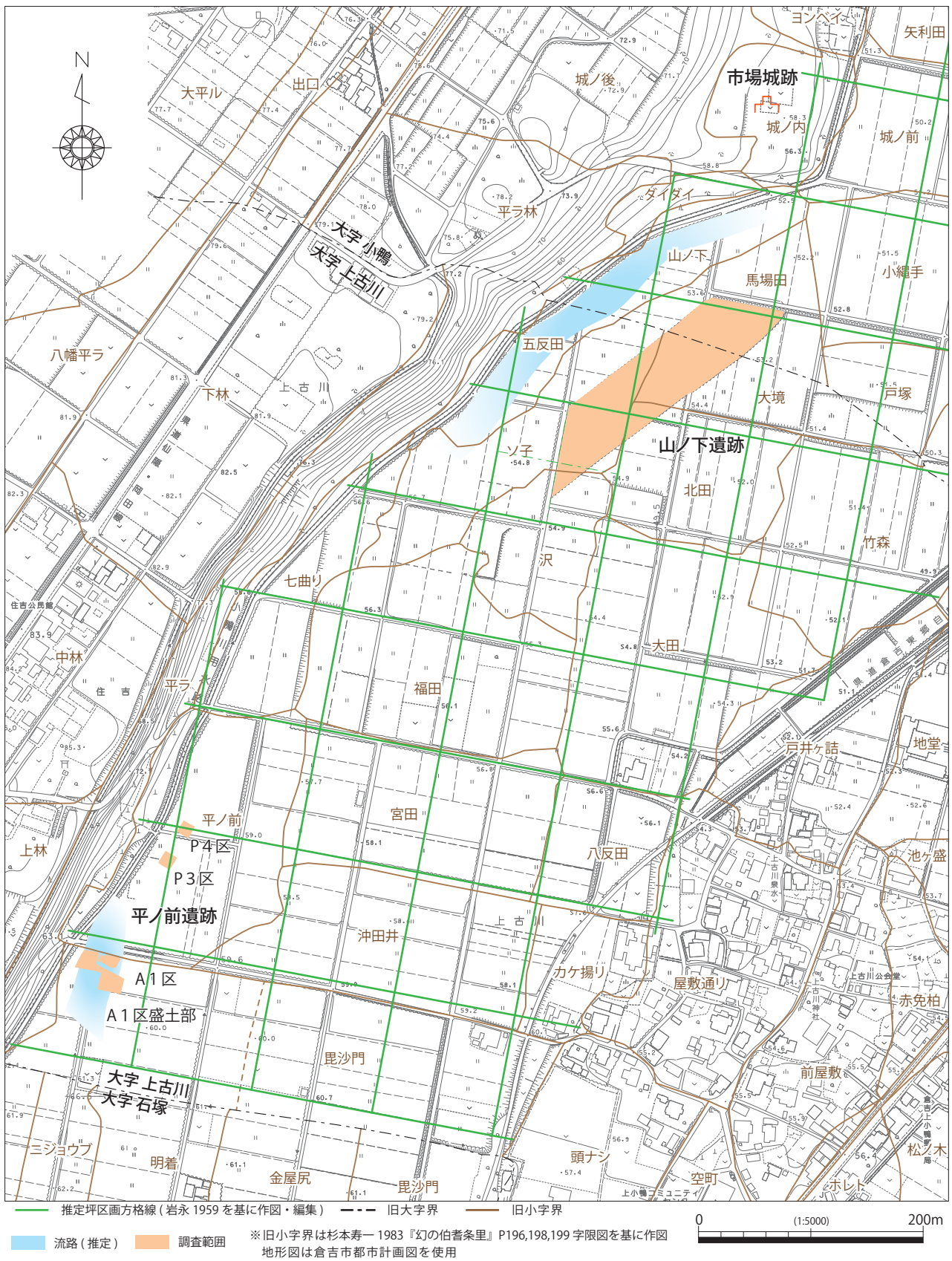
以上の検討から、南西部の建物群の所有者は在地での有力者層であることは間違いない。そこで注目されるのが、在庁官人の系譜を引き、鎌倉御家人として活躍した小鴨氏の存在である。今回の発掘調査によって直接の関係性を示す資料は発見できなかったが、当時の在地の有力者である小鴨氏の動向との関係性を視野に置きながら、建物群の所有者について引き続き検討を進める必要がある。

### 第3項 平ノ前遺跡の調査成果

平ノ前遺跡は、A1区盛土部及びP3区の調査を実施した。検出した遺構の多くが平成29年度調査によって確認された遺構の続きであることから、本項では両年度の調査成果をまとめることとする。

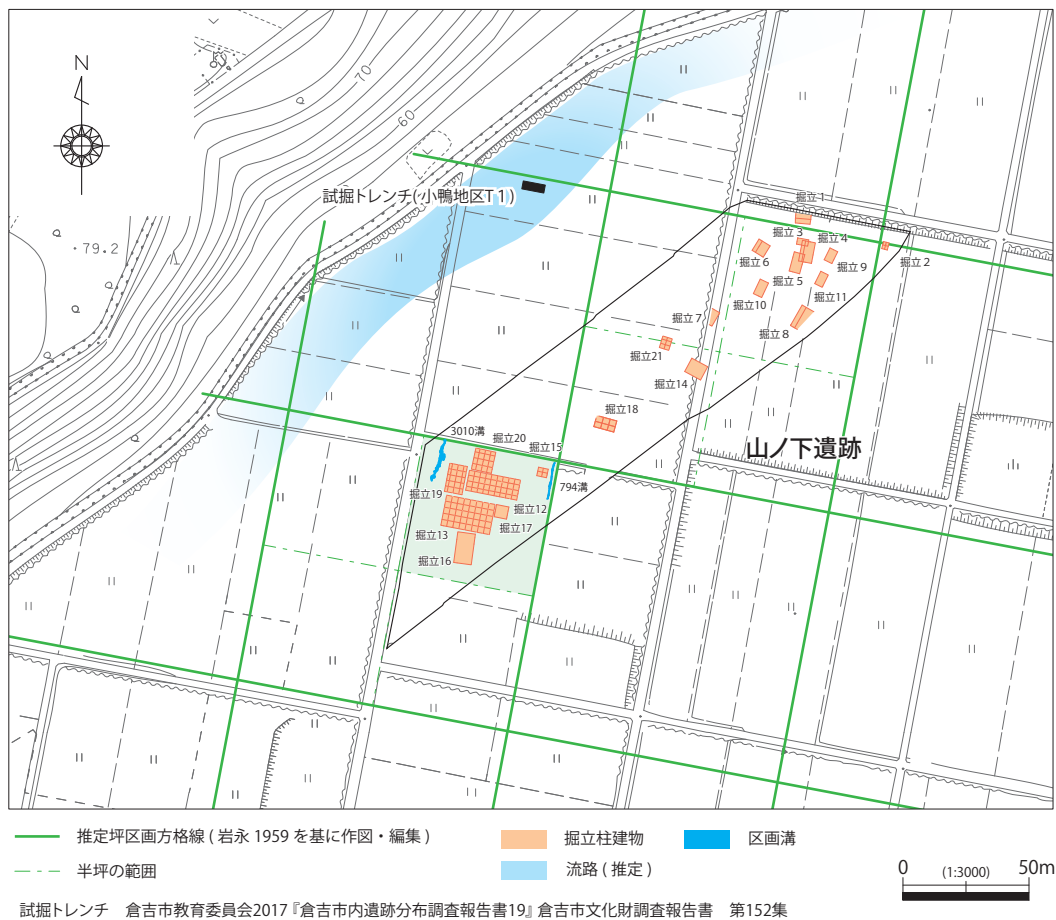
#### 縄文・弥生時代

A1区盛土部で流路を確認した。平成29年度調査のA1区では流路の流心部の調査であったが、今



第229図 小鴨・上古川地区 条里復元案





第230図 山ノ下遺跡と条里地割

回の調査では流路幅の全容がほぼ明らかとなった。流路幅は約30m、深さ1.1m以上を測る。流路内の堆積土は砂層と砂混じりシルト層が互層を成していることから、流水期と滞流期が繰り返していることが明らかとなった。縄文時代晩期後半の土器を含む土壌層を生成していること、最上層の1層から13世紀中葉の土器が出土していることから、縄文時代から鎌倉時代にかけて、徐々に埋没したものと考えられる。

なお、遺構は検出されていないが弥生時代中期の遺物が出土している。なかでも分銅形土製品は摩滅が少なく残りも良好であり、甕なども出土していることから、平ノ前遺跡周辺に集落が存在した可能性がある。

### 古墳時代

P 3区では古墳時代前期の溝 2条(溝 2a・2b)と、それ以前の溝 1条(溝 1)を検出している。溝 2は再掘削がなされ、2段階の変遷を経ることが明らかとなった。これらの溝は平成29年度調査で確認された21溝に繋がるものと考えられる。A 1区盛土部の調査でも西側の北壁断面5～8層において、当該期の溝の断面を確認していることから、本遺構は天神野台地崖下線沿いを走行していることが分かる。A 1区盛土部からP 4区までは総延長150mを測り、さらに南北に延伸する。埋土は細粒・粗粒砂が混じるシルト層であり、一定期間流水下にあったことが窺える。土壌サンプルの植物珪酸体分析の結果では、わずかではあるがイネ属が確認されていることから、耕地開発に伴う用水路の

可能性も考えられる。

### 古代から中世

A1区とA1区盛土部では、幅約30mの流路を確認した。最上層の砂混じりシルト層内に13世紀中葉の土師器や瓦質土器が出土していることから、当該期には埋没したものと考えられる。この流路と直接関係があるか判明しないが、本遺跡から北へ約500m、山ノ下遺跡と天神野台地崖下の間に厚さ0.5m以上の洪水砂が確認されている<sup>(註1)</sup>。その上層に古墳時代から中世の遺物包含層が約0.4m堆積している状況から、この地点は少なくとも中世に埋没した流路の可能性があり<sup>(註2)</sup>、仮に両者が同一のものだとすれば、天神野台地崖下線沿いに縄文時代から中世前期に至る流路が走行していたことになる。この流路の痕跡が第229図で示した「七曲り」「五反田」「山ノ下」といった北東方向に主軸を取る細長い小字名の範囲となっているかもしれない。

P4区では、12世紀後葉から13世紀中葉の掘立柱建物2棟が検出されている。狭い調査区内に2棟を確認していることから、周辺に居住域が広がる可能性がある。山ノ下遺跡でも同時期の建物が北東部を中心に検出されていることから、天神野台地東側裾部では流路はほぼ埋没し、空地を置きながら数棟単位の集落が点在していた景観が復元される。

なお、A1区盛土部では流路堆積層から7世紀末から9世紀にかけての遺物が多数出土した。注目されるのは古代の瓦や円面硯、暗文を持つ土師器等がみられることである。これらは、遺跡から南へ約300mに位置する石塚廃寺から流下したものと考えられ、寺院廃絶後も流路は存在し13世紀代に至り埋没したようである。

### 【註】

(1) 倉吉市教育委員会2017『倉吉市内遺跡分布調査報告書19』倉吉市文化財調査報告書第152集

(2) 限られた範囲の試掘調査であるため、不明な点が多いが、堆積状況も平ノ前遺跡と類似したものであったようである。

山ノ下遺跡は現在の小鴨川左岸の河岸段丘上標高約55mに立地するが、遺跡の西側の地形は天神野台地の崖下線へ向かってわずかに下がっている状況が視認できる。このわずかな窪みが埋没した流路跡を示しているのかもしれない。

### 【参考文献】

岩永實1959「鳥取県における条里地域の研究」『鳥取大学学芸紀要 人文科学編』10巻2号

岩永實1976「古代第1章第2節 7条里とその遺構」『鳥取県史』第1巻原史古代編 鳥取県

川本重雄2011「寝殿造と総柱建物」『寝殿造と書院造の間-建築史学と考古学の接点を求めて-』「日本建築様式史の再構築」連続シンポジウム6 京都女子大学

杉本寿一1983『幻の伯耆条里』

公益財団法人鳥取県教育文化財団2018『山ノ下遺跡・平ノ前遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書120

倉吉市教育委員会2017『倉吉市内遺跡分布調査報告書19』倉吉市文化財調査報告書第152集

鳥取県立博物館図録にも写真が掲載されており、■部分の読みについてはこの写真に拠った。

40 【前註3 日置論文】

41 小鴨神社神像銘（『鳥2』）

42 日置桑左エ門「中世の東伯耆国境と美作国―矢送の伯耆国衆長氏について―」（『鳥取地域史研究』九 二〇〇七年）

43 擬宝珠（個人蔵）については鳥取県立博物館企画展図録『鳥取県の名宝』（二〇〇二年）四九頁に写真と銘文の翻刻が掲載している。鰐口（鳥取県立博物館所蔵）については『鳥2』に銘文の翻刻が掲載されている。

- 14 【前註2】岡村論文 一九九九年
- 15 【前註2】岡村論文 一九九九年
- 16 久保田和彦「六波羅探題北条長時発給文書の研究」（『日本史攷究』二六二〇〇一年）・同「六波羅探題発給文書の研究―北条時茂・時輔・義宗探題期について―」（北条史研究会『北条時宗の時代』（八木書店 二〇〇八年）所収）
- 17 伯耆山名氏は小鴨・南条・進といった有力な国人層を守護代に任じて統治させていたという指摘がある【前註2】岡村論文 二〇一八年）。
- 18 惟高妙安については今枝愛真「『玉塵抄』著者考」（『玉塵抄』抄物体系別冊一〇）・日置条左エ門「伯耆国大谷保国寺私考」（『日本歴史』三四八 一九七七年）・藤岡大拙「惟高妙安と尼子氏」（『島根地方史論攷』一九八七年）・倉恒康一「抄物資料に見える戦国期山陰地域関連記事について」（『鳥取地域史研究』一五二〇一三年）などの研究蓄積がある。
- 19 前下野守某・福頼上野守連署下知状写（『大山寺文書』【鳥1】五号）。「友野」を伴野氏に比定することについては、島根県文化庁世界遺産室の伊藤大貴氏のご教示を得た。
- 20 「同名」の解釈については例えば寛正二年（一四六一）七月二十六日付室町幕府奉公人連署奉書案写（「小早川家」『大日本古文書十一 小早川家文書二』一二七号）に「可被相觸同名小泉小五郎元平由、被仰出候也」と見える。この文書の宛所は「小早川一族中」、「同名」の直前の人名は「小早河備後守熙平」、小泉元平は小早川一族の小泉氏であることを踏まえれば、「同名」の指し示すのは「小早河」であることは明白である。この用例を踏まえれば、「同名村上」は小鴨村上氏という一族の存在を示唆する記述とみるべきであろう。なお、「宮本家文書」（鳥取県立博物館蔵）に登場する村上氏は源姓を名乗ることから、鴨部姓の小鴨氏の庶流・村上氏はこれとは別の一族とみられる。
- 21 【明德記上】（【鳥2】）
- 22 「建内記」嘉吉三年（一四四三）六月十三日条（【鳥2】）
- 23 この資料については岡村氏も分析を加えており、南条氏が伯耆守護代を務めるようになったことを指摘した【前註2】岡村論文 二〇一八年）
- 24 岡村氏は備前国での山名氏の押領行為を赤松氏の旧勢力の排除の文脈に位置付けた（【前註2】岡村論文 二〇一八年）。首肯すべき意見であろう。
- 25 難波行豊軍忠状（「難波文書」『新鳥取県史古代中世1』五二〇号）
- 26 【応仁記】井鳥男合戦之事（巻第二）・船岡山合戦之事（同上）（【鳥2】）
- 27 室町時代に活躍した歌人・正徹の弟子の正広が編んだ『草根集』には山名教之や小鴨之基のもとを正廣が訪れ詠んだ和歌が多数収録されている（【鳥2】）。
- 28 川口成人「大名被官と室町社会」（『ヒストリア』二七一号 二〇一八年）
- 29 『山科家礼記』応仁二年（一四六八）九月七日条（【鳥2】）
- 30 高橋正弘「因伯の戦国城郭」（一九八六年）十―一三頁に伯耆国人の序列に詳細な分析がある。
- 31 【後鏡】所収伊勢家書（【鳥2】）
- 32 山守神社棟札写（【鳥2】）
- 33 小鴨神社扁額（【鳥2】）
- 34 この「昔御内書符案」の山名氏については伊藤大貴「応仁・文明の乱と山名氏」（『日本史研究』六六〇 二〇一七年）に詳しい。
- 35 片岡秀樹「伯耆山名氏の活動」（『地方史研究』一五八、一九七九年）・【前註30】高橋論文】
- 36 毛利元就郡山籠城日記（「毛利家文書」【鳥1】六一二号）
- 37 【前註30】高橋論文】
- 38 某裏判注文写（「山田家古文書」【鳥1】一二三六号）・吉川元春・同元長連署書状写（「吉川家中并寺社文書 三」【鳥1】一三二八号）
- 39 南条信正他十四名連署起請文（「吉川家文書」【鳥1】一〇六九）。なお、【前註8

倉期には御家人化し、將軍家・北条氏と密接な関係を築き鎌倉に滞在する一族もいた。

室町期には山名氏と結びついた安芸守家という一族が勢力を蓄え、備前国にも勢力を伸張した。一方で、山名氏・尼子氏・毛利氏の抗争の中で一族が分裂し、南条氏の軍門に下った系統が小鴨氏の中でも近世以降につながるようになったようである。

小鴨氏の支配圏は山陽方面に続く交通の要衝であったこと、鉄を多く産出し鋳物師や刀匠などの技術者が多数在住していたことなどが特徴としてあげられる。これらの物産は小鴨氏の経済的な基盤となっていたと見られる。また、小鴨氏は備前国を始め山陽方面にも進出を目指す志向性を持っていたことも一族の特徴であろう。

- 1 富盛禅雄『小鴨氏』（蛍光社 一九七一年）
- 2 岡村吉彦「鎌倉幸喜の伯耆国守護と小鴨氏―六波羅探題発給文書からの検討―」（『鳥取地域史研究』一号 一九九九年）・同「伯耆山名氏の権力と国人―山名教之期を中心に―」（市川裕士編『山陰山名氏』（戎光祥出版 二〇一八年所収）、初出『鳥取地域史研究』三号 二〇〇一年）
- 3 日置条左エ門「信長の外交と戦国大名―伯耆南条・小鴨氏の家中―」（『鳥取地域史研究』二〇号 二〇一八年）
- 4 なお、小鴨氏の系図については、山口県萩市在住の個人宅に伝来したものであるが現在には所在不明、『新編倉吉市史 第二卷中世・近世編』に翻刻が紹介されておりそれに拠る。日置条左エ門氏の所感によれば字体は近代にかかるものであるという【註3 日置論文】。紙幅の都合上「小鴨家系図」を掲載する余裕はなく、『新編倉吉市史』をご参照いただきたい（以下同系図については『新編倉吉市史 第二卷中世・近世編』二六―三〇頁に拠った）。

5 例えば、小鴨神社扁額の「鴨部隠岐守久基」、山守神社「小鴨弾正忠鴨部幸基」などの在地の棟札や、「草根集」において小鴨之基が「鴨部之基」と記されている（『鳥取』）。

6 「原田氏系図」については原本を確認できないため、以下本文中の同系図への言及は『羽合町史前編』一八二―一八四頁の翻刻に拠った。

7 紀成盛については伯耆国安曇郷を本拠とした武士で、その出自については錦織勤「平安末期西伯耆の有力武士「紀成盛」について」（『鳥取地域史研究』四号 二〇〇二年）に詳しい。

8 鳥取県立博物館企画展『大いなる神仏の山大山―その歴史と民俗―』（二〇一八年に写真と銘文の翻刻を掲載している）。

9 本郷恵子『怪しいものたちの中世』（株式会社KADOKAWA 二〇一六年）

10 例えば、著名な中世史家・林屋辰三郎の収集した文庫「燈心文庫」には東大寺の関係文書が多数含まれていることは広く知られる。近年、東大史料編纂所が燈心文庫所蔵文書の調査を行った結果、建暦二年五月二日付鴨部頼基請文という史料が存在することが明らかになっている。「京都市歴史資料館所蔵燈心文庫所蔵文 書の東大寺文書に ついて」(<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/endo/2008-10kaken/toshinbunko20110414.html>)とウェブHPにおいて鴨部頼基請文の概略が示されており、この史料は鴨部頼基が「父故小鴨入道證西」から継承した所領が「関東」に没収されたのを受けて、東大寺鎮守八幡宮の修造を条件に所領の返還を得られるよう東大寺衆議の推挙を求めたものであるという。今後の調査を期したい。

11 例えば、田中大喜「中世武士団の族縁的結合」（同『中世武士団構造の研究』（校倉書房、二〇一一年）所収）の中で、南北朝期の武士たちが物領と様々な役を分担していたことが指摘されている。

12 『羽合町史 前編』

13 【前註2 岡村論文 一九九九年】

また、小鴨川上流の関金地域に広がる荘園・矢送荘は長講堂領として年貢「鉄万挺」を納めるなど、多くの鉄を産する地域であった。<sup>42</sup>それと関わってか、伯耆東部を代表する刀工の一人で、戦国期の作例を多く残す見田五郎左衛門広賀は小鴨氏の旧臣との伝説がある。くわえて、島根県大田市の清水寺には永禄六年（一五六三）に小鴨の鋳物師・九良左衛門が南条宗影の為に製作した鰐口が残されている。

### 史料⑳清水寺鰐口銘（『鳥2』）

〔第一面〕

（帯銘）奉懸、願主伯州久米郡住南条兵庫介宗影息災安全故也、作者小鴨中金屋大工九良左衛門、永禄六癸亥年八月吉日敬白

伯耆国東部では鋳物師の齋江家の存在が知られるが、この小鴨にも「金屋」の鋳物師が存在したことは注目すべきである。さらに、南北朝期に関金に所在した「瀧山寺」に関わるものとして一对の擬宝珠と鰐口も出土しており、<sup>43</sup>これらの青銅仏具も小鴨鋳物師の手による作品である可能性もある。小鴨氏と鉄・銅などの金属製品の関係は、今後も深められるべき重要なテーマである。

### ②小鴨地域と交通

最後に、小鴨地域の交通上の位置づけについても触れたい。先述の惟高妙安の講述を記録した「玉塵抄」には惟高妙安の師である瀑岩等神が伯耆国から上洛する際の行程が記されている。

### 史料㉑『玉塵抄』（『鳥2』）

〔巻二一〕

モト某伯州ニイタ時ニ老師京工上ラル、時、国衆サカイ目マテ送ラレタソ、作州コエニ上ラレタソ、矢送ト云所ノ谷ラスキテ、ヤカテ作州工入り、矢送ノ中ニ長平左衛門ト云人アリ、矢送千石ノ所半分ノ主ナリ、ソノ人モデ、送ラレタソ、四月ナリ、矢送ノ路バタニ梅ノヨウナツタアリ、ソレヲキリヲツテクウタソ、長平左梅クイソ、百バカリソウトノ間ニ、クワレタソ、

恐らく瀑岩等神は伯耆山名氏に保護され大谷保国寺に滞在していた可能性が高い。瀑岩等神は上洛にあたって作州を経由する道を選んでおり、途中に伯耆国矢送を経由している。恐らく瀑岩等神は、犬狹峠を超えて蒜山方面に移動するルートをとったと見られ、その警固は長氏が担当した。それを踏まえれば、四王寺山の麓の保国寺から出発した瀑岩等神一行は小鴨川沿いを進んだと考えるのが自然であろう。

この当時矢送にも春が訪れており、一行は道端に咲く梅の実を食べたようである。春の犬狹峠は長閑な様子で、雪も少なく人々の往来にも適していたのであろう。作州經由の上洛ルートの使用は政治的な事情によるものである可能性は否定できないが、小鴨平野は山陽側に出るルートとして中世でも活用されていたことが窺え、備前国守護代を得ていた時期などは小鴨氏もこの道を多用したと考える。

おわりに

小鴨氏は伯耆国在庁の有力者として東部伯耆を中心に勢力を伸張、12C末には紀氏の一族村尾成盛と伯耆国の覇権を廻り激しく争う。鎌

史料⑩山名祐豊宛行状（「早稲田大学所蔵文書」『鳥1』六二八号）

小鴨跡等之事申付候、任当知行之旨、令領掌者也、猶赤木能登守可申候、恐々謹言、

十二月十五日 祐豊（花押）

乃木三郎殿

一方で、但馬山名氏の山名祐豊が乃木氏に与えた所領に「小鴨跡」の「当知行」を安堵したものが管見に触れる。小鴨氏の一族中には尼子氏に付いた結果、尼子氏と対立する但馬山名氏側に所領を軍事占領された者もいたのである。戦国期に小鴨氏は分裂し、その勢力を相殺した。結果として、小鴨氏は事実上南条氏に属することになる素地が形成されたと見られる。

### ③南条氏と小鴨氏

小鴨弾正忠家の所領は確認されているだけでも中間庄二十五石・竹田谷五十石・松尾社領内長和田二百五十石などあり、伯耆国内でも最大級の領主であったことは想像に難くない。<sup>38</sup>一方で、弾正忠家も所領を闕所化される事例が多くみられることから、所領の支配は不安定で戦国期に弱体化したと見られる。南条氏の家臣団連署状に「小鴨左京輔■（政カ）基」が血判していることは、小鴨氏一族の南条家臣化が進行していることを示す事例である。<sup>39</sup>

「小鴨家系図」によると小鴨掃部介元伴と南条宗勝が抗争状態になり、結局宗勝二男の元清が小鴨掃部介家を継ぐ。<sup>40</sup>小鴨元清は豊臣政権下で南条元忠の後見人となるなど活躍したが、南条氏は関ヶ原合戦で改易。後には大坂の陣で大阪城に入城したことにより、小鴨元清は浪人と

なり肥後国加藤家に仕えたという。

小鴨氏の戦国期の動向としては、伯耆山名氏の弱体化と尼子氏の伯耆国への進出、毛利氏と尼子氏の抗争の中で一族が激しく内紛した結果、多くの小鴨氏一族は南条氏の家臣化したと見られる。そしてその名跡は南条元統の弟・小鴨元清に引き継がれたが、南条氏の没落とともに事実上の武士団としての歴史的役割を終えた。

### 五・中世の小鴨地域の実相

現在小鴨地域には中世文書は確認されていないが、中世を窺うような文化財がいくつか残されている。

#### ①小鴨周辺の文化財・産業

小鴨氏の本拠とされた岩倉城麓の永昌寺には鎌倉時代のものとされ、近隣から出土した十三重の石塔が所在している。永昌寺には他にも赤碓塔に近似した形状の石塔も数基所在しており小鴨氏の菩提寺の存在を窺わせる。なお、岩倉地域の北部・広瀬にはヒイデ塔（広瀬一石五輪塔）なども所在し、岩倉・広瀬の谷には広瀬廃寺に代表されるような独特な仏教文化の存在を想定できる。史料①で金石寺に梵鐘を寄進した鴨部氏が仏法を重視していたことから、古代より小鴨氏は仏教とかわりが深い一族であったのであろう。

大宮地域に所在する小鴨神社には、寛正二年（一四六一）に鴨部（小鴨）隠岐守久基が寄進した扁額が残されている。また、同社には応永二十四年（一四一七）に「比丘光□」によって男神像が寄進されている。<sup>41</sup>この「比丘光□」はどの様な人物かは定かではないが、小鴨氏に縁のある人物である可能性もあろう。

とあるので、常興は厳密には安芸守家（之基系）を重視しているのである。よって、小鴨氏内において安芸守家が惣領というべき家格を有しており、それに次ぐのが弾正忠家と考えておく。弾正忠家については少し時期が下るが、大永三（一五二三）年の山守神社の棟札に「地頭小鴨弾正忠鴨部幸基」の名前が確認できる。<sup>32</sup> 伯耆国山守庄地頭職を小鴨氏が保有したことは他の史料から裏付けられないが、弾正忠家の所領は山守庄に及んだ可能性があることを指摘しておきたい。

その他にも室町期には備前国福岡を抑えていた小鴨大和守や小鴨修理亮（「小鴨家系図」の基里カ）などの一族、「鴨部隠岐守久基」などの存在も確認できる。<sup>33</sup> 小鴨大和守については、天理大学所蔵大館記に含まれる「昔御内書符案」という史料中に文明三年（一四七一）のものともみられる「小鴨大和守」宛の御内書写があり、小鴨大和守は山名氏の中でも非常に重要な存在であったことが窺える。<sup>34</sup>

「小鴨家系図」によると文明四年の尼子氏との戦闘に参加した小鴨修理大進友信、永正年間に足利義植が山口に下向した際に供奉し永正八年（一五一二）の船岡山合戦でも活躍したという小鴨掃部介清忠、六角高頼討伐の際に山名政豊・豊之の先陣を務めたという小鴨修理亮基里などが見える。系図上では後に小鴨基里の子息・元伴の後を襲い伯耆支配に重きをなすが、南条氏出身の元清である。

#### 四・戦国期小鴨氏と南条家臣化

##### ① 尼子と山名氏の抗争における小鴨氏

小鴨氏の中でも戦国期の史料では「小鴨弾正忠」に関わる資料が散見する。これは室町期末頃の政治状況の中で、安芸守系の小鴨氏が没落した可能性を示唆する。文明年間には伯耆山名氏の内部で山名元之・山名政之が守護職をめぐる争って争っており、この様な政治情勢が一族内の力関係を崩壊させたと思われるべきであろう。<sup>35</sup>

天文十年（一五四一）に尼子詮久が毛利元就の籠る吉田郡山城を攻撃した際には、小鴨氏が尼子方としてこれに従軍したことが確認できる。<sup>36</sup> 尼子氏の勢力が伯耆に及ぶ中で、小鴨氏もその旗下に従うことになったようである。

##### 史料⑩ 山名豊興寄進状写（「伯耆志所収文書」『鳥1』三三三号）

為相州瑞孝追善之、中間庄之内小鴨弾正忠跡、武拾五石之在所寄附候、雖然、此間壺町山中さへ拔候、国及乱世候とも、相違有間敷候、不怠勤行御吊専一候、仍寄附之状如件、

天文二年

九月十五日

豊興判

瑞仙寺住持

伯耆山名氏は天文年間に急激に尼子氏の傀儡化が進んでおり、山名豊興は仲間庄の小鴨弾正忠所領二十五石分を瑞仙寺に寄進した。高橋正弘氏の研究によれば山名豊興は尼子氏の勢力を背景に伯耆守護に就任したと見られるため、<sup>37</sup> 小鴨弾正忠は尼子氏と対立した但馬山名氏の側に立ったと見られる。



ととなった。<sup>29</sup>この之基の後には小鴨氏が中央政局において存在感を示したという史料はほとんど見られなくなる。岡村氏が「守護家の没落とともに衰退に向かう運命にあった」と評価したように、小鴨氏の黄金期は室町幕府の秩序の崩壊とともに失われたと見るべきである。

## ②室町期小鴨氏の一族内秩序

さて、室町期の小鴨氏はいくつかの官途を名乗る一族が確認できる。それらの一族は、備前にまで伸張した小鴨氏の所領を支える重要な存在であったはずである。室町期の小鴨氏の一族の分派についても論じておこう。

### 史料⑰大館常興書札礼（『鳥2』）

一、伯州衆之事

#### 【中略】

此人々への事は御宿所たるべく候、さのみしんにもなく又さうにもなきほどにある可候、

幸松八郎殿

幸松五郎二郎殿

沢掃部頭殿

同弥九郎殿

細谷修理亮殿

此人々への事ちとさうに候、是も御宿所たるべく候、いづれも同前也、以前者御出恐悦候、何様以参可申候、恐々謹言、

月日

名乗判

小鴨安芸守殿

進之候

凡此趣なり、進候をちとすみぐるに大きにかくべし、

福頼

村上

片山平左衛門尉

藤左衛門大夫 越振飛騨守殿

此ひとくへは大概小鴨同事候、但進之を少すみうすにあるべく候、

小鴨弾正忠、是も大概安芸守同程たる可候、

塩治豊後守 主計

遠藤石見守 片山弥三郎

村上將監 淀江右衛門尉

狩野□左衛門尉 狩野六郎左衛門尉

長左衛門尉 山口平左衛門尉

広瀬「」 □戸弥七

野津

如此人数も進之をさうに可書なり、

#### 【後略】

室町期の伯耆国の武士を論ずる中でしばしば用いられる「大館常興書札礼」から小鴨氏について分析したい。<sup>30</sup>まず、伯耆国の武士へ書状を出す際の秩序として幸松・沢・細谷などの伯耆山名氏一門に次ぐ立場に「小鴨安芸守」が示され、その書札礼は福頼・村上・片山・藤・越振氏らよりも「進候」の字を「少すみぐる」に書き、厚い礼を行うべきと武家故実に通じていた大館常興は考えていた。これは、当時の武家社会の中で伯耆山名氏の筆頭家臣は小鴨安芸守の家筋と考えられていたことを示す。寛正六年（一四六五）に足利義政の若君（後の足利義尚）が誕生した際にも伯耆山名氏の代表の一人として「小鴨安芸守」が参じていることは、その格式の高さを裏付ける事例である。<sup>31</sup>

さらに、「小鴨弾正忠」も「安芸守」とほぼ同様の書札礼とあるため弾正忠家もかなりの家格を持つようだが、安芸守とは「大概」「同程」

令生涯之由称之、数百人上洛、欲押寄小鴨・南条宿所、仍右衛門督入道  
 両方無為之様雖令籌策、不承引、此上者両方可在勝負之由治定之間、招  
 兵部少輔於金吾宿所令警固歟、小鴨来南条宿所、於一所可思切之由称  
 之、下辺物忬以外、近辺壞民屋、擬火事之用心云々、仍相訪山名許人々  
 馳集、問子細、所々只物忬耳云々、似天魔之所為哉、兵部輔備前守護之  
 後、寺社本所領違乱、禁裏御料所鳥取庄御年貢以下無沙汰、冥慮如何、

## 【後略】

山名教之の若党である斎藤という人物は小鴨氏・南条氏と不和であつたため惣領・山名持豊の命で下国していたが、斎藤が教之に上洛を「懇望」した。すると教之は「小鴨・南条所存未休」と述べて上洛を押しとどめている。教之は恐らく斎藤を上洛させたのであろうが、小鴨・南条氏の動向は主君の意向すら曲げさせる実力があつた。在京する教之とその近臣層が領国支配の要である小鴨・南条と対立するというのは、非常に興味深い事実である。

教之の説得にも関わらず斎藤は数百人の軍勢を率いて上洛、持豊の和平工作も空しく斎藤と小鴨・南条氏は一触即発といった状況になつてしまつた。小鴨・南条氏が数百人の斎藤の手勢に抵抗できるだけの軍事力を京都の宿所にも保有していたことは注目される。<sup>23</sup>

また、教之の備前守護拝領後は備前国の寺社本所領をはじめ、禁裏御料の鳥取庄すらも年貢が未納となつてしまつていることを万里小路時房も嘆いている。<sup>24</sup> おそらく小鴨氏はこの備前国の寺社本所領の違乱に關与していたとみられる。

史料⑩石清水八幡宮放生会神訴目録（「石清水八幡宮文書」『鳥1』四八三号）

放生大会神訴目録

一、同申伯耆国種・内倉、去年去々年公用百七拾貫文、小鴨安芸守無沙汰事

## 【後略】

小鴨之基は種・内倉の石清水八幡宮の公用を二年分滞納していたようである。史料⑬・⑭の備前国衙領や大聖寺領の押領にも小鴨氏が関与していた可能性は高い。小鴨氏は備前国に新たに勢力を扶植していく中で、在地でかなりの対立を引き起こしていたようである。小鴨氏の備前国における拠点は福岡であつたと見られ、赤松氏と山名氏が備前国をめぐり交戦状態になつた際には、小鴨大和守という一族が福岡に城郭を構えている。<sup>25</sup> 吉井川水運の要衝であつた商業都市・福岡を抑えることは、本領である伯耆国小鴨との連絡経路を確保するという意味合いもあつたのではなからうか。

また一方で、小鴨之基は「文武二道ノ兵」として知られており、<sup>26</sup> 論語の輪読会（史料⑫）や連歌会を主催するなど文化的な活動を行ったことについても記録が残されている。<sup>27</sup> 川口成人氏が明らかにしたように、小鴨氏は都鄙を行き来しつつ、在京時は知識人たちと交流を楽しんだと見られる。<sup>28</sup> 小鴨氏の一族は先述の通り在鎌倉のものなどもおり、將軍に近侍する者も数多くいた。彼らは武家社会における故実や教養を十分に獲得していたと見え、それが室町期の小鴨氏の文化活動を助けたのであろう。小鴨之基は応仁二年（一四六八）山城国船岡山において、病氣であつた山名教之に代わり一手の大将をつとめ、奮戦し討死するこ

史料⑫『康富記』享徳二年（一四五三）五月十七日・八月二日・十七日  
 条（『鳥2』）

十七日、癸酉、霽、向小鴨許、泰伯篇談了、有酒、餛飩、【後略】

二日、丙戌、晴、向小鴨芸守許、人々参会、読子罕篇了、用朝飧、語云、自屋山名兵部形備前守護代職事被申付之間、今月十日比可罷下之分也云々、十七日、辛丑、陰、向小鴨許、談郷党篇了、村上筑後守・富田・速水参会、有精進朝飯、来廿七日可下向備前云々、【後略】

嘉吉の乱において小鴨安芸守之基は乱の首謀者・赤松満祐の首級をあげた。その功績から、山名教之―小鴨之基主従は伊勢亭における首実検で長光の太刀などの褒美を下されたことがわかる。山名氏家臣団において、小鴨氏は一躍その重みを増すことになったであろう。さらに、享徳二年には教之から備前守護代を拝命し、小鴨之基は備前に下向したことも確認できる。

小鴨氏による備前国支配についても、僅かに史料が残存する。小鴨氏にとって備前国守護代となったこととはどのような意味を持ったのであろうか。

史料⑬小鴨之基打渡状案（「双柏文庫所収文書」『鳥2』一号）

備前国々衙事、任御遵行之旨、可被渡付畢、南御所様御代官之由候也、仍執達如件、

長祿二

五月十四日

之基判

小鴨修理亮殿

史料⑭山名教之遵行状（「大聖寺文書」『史料稿本 後花園天皇紀自長祿二年四月至同年七月』）

備前国軽部庄下村内大聖寺殿御知行分事、任御教書之旨、可致渡付寺家御代官候也、仍之状如件、

長祿三年五月十三日

教之花押

小鴨安芸守殿

室町幕府の遵行制度の中ではまず室町將軍家御教書という管領の奉書が守護に下され、訴人を介して守護↓守護代↓在地へと命令が下達されていく。史料⑬・⑭日では山名教之から小鴨之基を経て在地の小鴨修理亮へと打渡命令が伝達されたことを窺わせる。なお、小鴨氏の備前守護代としての初出は嘉吉三年（一四四三）六月十三日条の「建内記」で、「守護代也」と見える。この記事の中で四条隆夏は「小鴨」を代官に任じて「状案并証文案」を渡している。当時の公家社会でも小鴨氏が備前国の所領を保全する代官に適した存在と考えられていたようである。<sup>22</sup>小鴨氏の政治的動向を考える上で見逃せないのは、伯耆国守護代の南条氏と小鴨氏が連合しており、主君教之と衝突も辞さないなど強大な勢力を有した点である。

史料⑮『建内記』文安四年（一四四七）三月八日条（『鳥2』）

【前略】

山名兵部少輔前伯耆并備前守護也、若党号齋藤号出雲佐々木云々、者、与傍輩小鴨備前守、南条伯耆守、

有不和事、先年依山名惣領右衛門督入道宗峰意見、於齋藤者令下国了、近日齋藤在洛事懇望之処、兵部輔答云、小鴨・南条所存未休、先可堪忍者、因茲齋藤押而上洛、於主君者無殊事、傍輩兩人意趣之上者、相对可

## ① 伯耆山名氏と小鴨氏

室町初期の伯耆国守護は山名師氏系の氏幸（之）とその子孫たちが継承することとなる。さて、伯耆山名氏と小鴨氏との室町初期の関係性ほどの様なものであったのであろうか。<sup>17</sup> 足利義満期の山名氏—小鴨氏との関係を窺うことが出来る史料として、戦国期に伯耆国に居住した経歴を持つ禅僧・惟高妙安の置文の中に興味深い記述がある。<sup>18</sup>

## 史料⑩ 惟高妙安置文（「光源院文書」『鳥1』六四六号）

大谷保国寺開山桂昌院殿也、靈光院殿御母儀也、其時之相公者鹿苑院殿御代式百年余也、友野一揆之時、小鴨就別心、同名村上跡識為闕所、金屋三百石之内式百石、自靈光院桂昌院殿仁御寄附、百石分西伯耆片山被遣之、右、大谷保国寺之儀、養素院殿御代、為広徳軒領、先師瀑岩仁御寄附、其後高尾卅五石、高源寺殿瀑岩仁御寄附、又其後栖庵分・蔵光分式名、寿福院殿某仁御寄附、其後国分寺・四王寺兩所、瑞仙寺殿某仁御寄附也、

右、

天文拾八年六月九日

妙安（花押）

この史料は惟高妙安が、伯耆国大谷（現倉吉市大谷）にかつて所在した寺院・保国寺についてその由来を記した置文である。保国寺は山名氏之母である桂昌院が足利義満のころに開基したという。注目すべきは成立時の保国寺の経済基盤で、「友野一揆」の際に小鴨が「別心」を抱いたためその一族「村上」所領である「金谷」が闕所化され、そのうちの二百石分が山名氏之と桂昌院によって保国寺に施入されていたという部分である。友野氏については「大山寺文書」などにも名前がみられる

伴野氏が想定され、伴野氏が何らかの事情で反伯耆山名氏の活動を行った。その際に小鴨氏も伴野氏の側に立った結果、一族の村上という者の所領が没収されたと考えられる。<sup>20</sup>

義満期にこのような伯耆山名氏と伯耆国人との間で内紛があったことは他の史料では知られていない。ただし、小鴨氏の中には明徳の乱において山名満幸に味方した因幡守護山名氏家の旗下に「小鴨入道親子」がおり、特に「小鴨新三郎」は山名氏家と「契約」する若党であったと『明徳記』に見える。<sup>21</sup> 足利義満は山名氏内の対立を利用して明徳の乱を誘発させ、守護大名としての山名氏の勢力を削いだとされるが、小鴨氏内にも山名氏内の対立に起因する不協和音があったとみるべきであろう。想像をたくましくすれば、「村上」の様に明徳の乱後の伯耆山名氏の体制に不満を持つものもおり、それが伴野氏への「一揆」という形で噴出したことは想像に難くない。

## ② 小鴨氏の台頭と備前国守護代

その後、小鴨氏が政治の表舞台に踊り出る機会が生まれる。それは、嘉吉の変に関わる室町幕府の混乱を期とする、山名氏にとって念願であった赤松氏領国の拝領という政治的事件に伴うものである。

## 史料⑪ 『伊勢貞助記』嘉吉元年（一四四一）九月十八日条（『鳥2』）

赤松左京大夫入道性具頸之事、山名兵部少輔捕進上之事、九月廿一日也、於伊勢入道真蓮亭庭上被懸御目【中略】、山名兵部少輔二ハ御太刀長光・御腹巻梅染・白金物・御馬黒槽毛被下之、被官小鴨二ハ、御太刀長光・御腰物藤四郎被下、小鴨彼首依捕上也

例、可致沙汰之状如件、

文和三年十月十四日

この史料は足利尊氏が戦死した佐々木秀綱の後継者に対して恩賞を給付した下文である。文和三年（一三五四）には因幡・伯耆国は山名時氏に統治されており、時氏は足利直冬を奉じて反幕府的な活動を行っていた。そこで、山名氏に与する小鴨氏・南条氏・私部毛利氏の所領が闕所として、秀綱の後継者に充行われたのであろう。「小鴨次郎・同庶子」という表現からは小鴨次郎が惣領であったことを推測できる。また、小鴨氏は観応擾乱期の混乱に乗じる形で出雲国安来庄を恐らく山名時氏に与えられ、一族の勢力を扶植していたことも判明する。

鎌倉・室町期の小鴨氏の在地での活動については、伯耆国内の史料の伝存状況もあつて分析材料が非常に乏しい。ただ、その中でも鎌倉期の小鴨氏の活動を示す史料が『新鳥取県史』の調査で発見された。<sup>14</sup> 正和五年（一一三二）には日野又五郎の所領を押領したとみられる「孫六」に対する召喚命令が「小鴨左衛門尉」宛てに出されている。

### 史料⑨六波羅御教書案（「平川家文書」『鳥1』一一一号）

〔御教書〕  
（御教書）

伯耆国御家人日野孫八郎清長申、同国御家人孫六押領田畠由事、「」具書如此、来月中可被催上也、仍執達如件、

正和五年五月卅日

越後守  
陸奥守

小鴨左衛門尉殿

この史料について、岡村氏は小鴨左衛門尉を「（守護）北条時敦」（守護代）小鴨左衛門尉」と評価した。<sup>15</sup> まず、系図上で左衛門尉の官途が確認できる忠基は寛元二年の九条頼経の将軍就任に際して先駆けを務めたとあるので、この小鴨左衛門尉とは別人であろう。久保田和彦氏の研究によれば「仍執達如件」の書止をもつ六波羅御教書の宛所は「守護・御家人正員」の書札であるという。<sup>16</sup> 小鴨左衛門尉は御家人身分を有し、史料⑦の「小鴨又二郎」はこの小鴨左衛門尉である可能性も否定できない。さて、係争地となつている所領は定かではない上に、押領行為を行っている「（日野カ）孫六」の詳細が不明であることなどを考えると小鴨左衛門尉の位置づけは不明である。係争地の近隣に小鴨左衛門尉が所領を持っていた可能性が想定できよう。

以上、鎌倉・南北朝期の小鴨氏は御家人化を契機に幕府に接近した武士団であるといえよう。一方で、鎌倉期の幕府の記録類や伯耆国武士が数多く登場する『太平記』に小鴨氏の名前が登場しないなど、その活動には多くの謎を残している。小鴨氏の史料が急速に増加するのは室町時代以降となる。

### 三. 室町期の小鴨氏

南北朝期はかなり早い段階から伯耆国守護は山名時氏が務めている。山名氏は佐々木道譽との確執により幕府方を離反、これに従つたと見られる小鴨氏の所領は先述の通り闕所にされている。山名氏は伯耆国において倉吉周辺に守護所を置いていたとされ、その後背地である小鴨地域に勢力を持つ小鴨氏と深く結びつくことは当然の帰結といえよう。

中でも指摘されている。<sup>13</sup> 鎌倉期の伯耆国東部の所領秩序の中に幕府・北条氏との関わりが重要な意味を持ったことを窺わせる事例である。

再び「小鴨家系図」に目を転じると、基保息とみられる泰虎は建保元年の和田合戦で討死、政清は和田合戦の勲功で「美作国由井庄」を得たという。小鴨氏は北条氏との密接な関係から和田合戦に巻き込まれた結果、戦死者も出たが所領を得た者もいたようである。また、忠基・安景・春泰は九条頼経・宗尊親王ら將軍へ供奉していることが注記されている。政清系の小鴨氏は鎌倉幕府中枢とのかかわりの中でその存在感を發揮した一族で、美作国への勢力伸長なども果たしたと評せよう。なお、鎌倉末から南北朝期の氏基は元弘元年三月十五日に足利尊氏から「氏」の字と「彈正少弼」の官途などを得たことが記されている。また、系図には氏基が船上山に参じたところがあるが、戦いの中では小鴨氏は幕府との強いつながりから、日和見的な動向を見せていた可能性もある。その傍証として、『太平記』の船上山合戦には金持氏を始めとする多くの武士が後醍醐天皇方についていたことが記事に見える中、小鴨氏に関する記述が全く見られないことが指摘できる。

## ② 鎌倉御家人としての小鴨氏

小鴨氏の物庶関係や経済力などの様相はどのようなものであったのであろうか。小鴨氏は鎌倉期には「伯耆国を二分」した平安末ほどの勢力を有していたわけではないようだが、その実力は根強く上位権力からも重視されていた。

史料⑦六条八幡宮造営注文写（「六条八幡宮旧蔵古文書」『鳥1』三四五号）

一、造六条八幡新宮用途支配事建治元年  
五月日

【中略】

伯耆国

金持三郎左衛門尉跡 五貫 同兵衛太郎跡 三貫

長田右衛門入道 五貫 小鴨又二郎 五貫

【後略】

京都の六条八幡宮の再建の際にその負担配分を記した右の注文には、建治元年（一二七五）に「小鴨又二郎」が五貫文を負担している。この役は惣領に賦課されたものとみられ、恐らくこの又二郎が小鴨氏の惣領であろう。注目すべきは、伯耆守護を務めた金持氏と同額を負担しており、小鴨又二郎が伯耆国内での有数の経済力を持ったことが窺える点である。また、時期は下るが「次郎」を名乗る一族が小鴨氏の惣領であった可能性を窺わせる史料も存在する。

史料⑧足利尊氏袖判下文案（「佐々木文書」『鳥1』三三二号）

等持院殿様

御判

下 佐々木近江守秀綱跡

可令早領知出雲国女来庄（安丸）、伯耆国小鴨次郎・同庶子等跡并蚊屋庄

城大曾福・神田庄南条又五郎跡・因幡国私部郷毛利次郎事

右、秀綱去年濃州臨幸之時、為防戦、殞命之間、所宛行也者、早守先

の子供である皇子を平家と一緒に討ち取るように源氏に命じるなど皇子・村尾氏の勢力は孤立しつつあったが、小鴨氏がかなり危機的な状態にあったことは間違いないだろう。この後に治承・寿永内乱期の伯耆国について知る史料は管見に触れないが、小鴨氏は内乱の中で大きな勢力伸長と滅亡の危機を経験したようである。なお、この記事の五日後の同年二月七日には、一ノ谷の合戦によって平氏は西国への敗走を余儀なくされた。

## 二・鎌倉・南北朝時代の小鴨氏

平安時代末に歴史の表舞台に姿を現した小鴨氏は、この後には伯耆国の有力な御家人としてその名が史料に確認できるようになる。一方で、鎌倉期の伯耆国武士の家文書は県内には確認されておらず、その分析には系図資料に多くを依拠しなくてはならない。まず、県外資料の中にも小鴨氏に関わるものが今後確認される可能性は十分に想定できるが、現状では系図と数少ない文書史料を基に鎌倉・南北朝期の小鴨氏について論じることを試みたい。<sup>10</sup>

### ①小鴨氏と鎌倉幕府

小鴨基保は平家に与していたことが系図にも明記されているが、その滅亡後の建久三年（一一九二）には源頼朝の征夷大將軍就任に際して「御教書（恐らく下文）」を得た。基保は恐らく平家への与同を責められたはずであるが、頼朝により罪過を許されたようである。基保の「御教書」拝領を小鴨氏の御家人化の嚆矢と捉えたい。おそらく小鴨氏の伯耆国内での実力を見込んだ幕府が、歩み寄りを見せたのであろう。

基保の息・政清は北条時政から加冠を受け鎌倉に駐留したことが注記

されている。北条氏と緊密な関係を結んだ可能性が高い。おそらくこの政清は小鴨氏にとっては庶子家にあたる一族とみられ、近年明らかにされている武士の一族内での分掌を示す事例であろう。<sup>11</sup> 東伯耆の武士の中には鎌倉に滞在する武士が非常に多い。例えば、先述の東郷氏の一族・良全は「原田氏系図」に「天下無双手跡無隠、鎌倉殿管領、御成敗式目草案了」とあり、『羽合町史』は良全を貞永式目の執筆を行った「法橋円全」に比定した。<sup>12</sup> 貞永式目は三善康連が制定において大きな役割を果たしたが、執権北条泰時の意向も大きかったことは想像に難くない。後に東郷庄を押領した東郷氏が領家松尾社との下地中分に至ることが出来たのも、東郷氏と北条氏の協調が想定できる。また、北条氏も鎌倉時代を通して伯耆国東部に勢力を扶植する志向を持っていた可能性がある。

史料⑥ 北条重時宛行状（「筆陳」所収文書）『新鳥取県史古代中世

1』（以下『鳥1』）八九号）

□□国北条郷地頭代職事、

右、為彼職、任先例、可令知行給之状、如件、

建長元年十一月三日

（花押）

庄四郎殿

右の史料は武蔵国児玉党の代表的武士の庄氏の一族に対して、六波羅探題北方・連署を務めたこともある北条氏極楽寺流の北条重時が伯耆国北条郷地頭代職を給付したものである。この史料から重時が北条郷（現・北栄町）の地頭職を有していた可能性が高いこと、重時と庄四郎の間には被官関係があり代官職が給付されたことなどが岡村氏の研究の

## 史料④『大山寺縁起』（『鳥2』）

中ニモ小鴨ノ庄司ト聞ヘシ者ハ、殊更先師ノ大檀那トシテ、山里坊中ノ事マデ奉行シケルガ、当時放ラ威勢ヲ播ホドコシ、國中押並テ傍若無人ニ振舞ケレハ、村尾又権ヲ諍ヒ、敵人ト成ル、事ニフレ遺恨多カリケレハ、鏡明房ノ為ニモ不レ安子細有ケル故ニ、佐摩党トテ武勇ノ者有ケルヲ、村尾相語テ、鏡明房ヲ討テゲリ、其後佐摩ノ者共ノ中ニ、物狂ハシキ事共出来テ、人多ク悩損テケリ、月光坊門徒ノ我執深キ故ニ、悪靈ト成テ佐摩党多ク取殺サル、【中略】

去レハ、右大將家ノ御下知ヲ蒙リ、宗敬セラレケレハ、源氏代々ノ帰依、今ニヲイテ盛ンナリ、当国ニハ村尾・小鴨トテ、東ヲ固カタメ、西ヲ守ル二人ノ大將アリ、互ニ権ヲ諍ヒ、所々ヲ城柳クワクニ構ヘ、合戦更ニ不レ絶ケリ、村尾ハ修禪房ヲ師匠トタノミ、小鴨ハ月光坊ノ旦那也、中・南両院、又事ニ触テ確執スル間、村尾カタメニ鏡明房被レ討後、小鴨其宿意ヲ含テ、去ル養和元年二月廿八日ノ暮ニ、宗ムネ徒トノ兵十余人差違ヘ畢ンヌ、修禪坊本房、摩尼院ト云所ヘヨセタリケリ、

## 【後略】

大山寺には紀（村尾）成盛寄進の鉄製厨子が伝わっており、成盛の存在は檀乙としても非常に大きかったと見られる。一方で、小鴨氏も大山寺に影響力を及ぼしたいと考えていたようで、「鏡明坊」という僧坊を梃子に大山寺の人事にまで介入を図った。結果、紀氏は鏡明坊を實力で排除したため、村尾―小鴨両氏の緊張は高まった。さらには、大山寺を構成する三院のうち中門院と南光院の対立が深まり、養和元年（一一八一）二月二十八日には交戦状態に突入した。史料②の「先年為基保被滅亡者也」とはこの時に小鴨氏の攻撃によって紀氏が大きな損害

を受けたことを示すと見られる。「大山寺縁起」の語るところを信じるならば、小鴨氏の大山寺への進出が当時の不安定な社会情勢の中で紛争を引き起こしたのである。

養和と寿永年間の小鴨・村尾氏の対立は後白河院の皇子が美徳山に入り村尾氏の庇護を得たこともあり激化していく。

## 史料⑤『玉葉』元暦元年二月二日条（『鳥2』）

元暦元年二月二日、辛酉、天晴、伝聞、伯耆国美徳山有称院御子之人、生年廿歳、未元服云々、件宮資隆入道外孫云々、幼稚之時九条院被奉養育、其後依無衆主在外祖父家、然間、生年十五之年、無音逐電、人不知其意趣、即向大和国、暫随遂二川冠者、其時称成親御子也云々、其後先到伯耆大山、次移住美徳山、猶称成親御子、而平氏被追落之後、顕其実称院御子、已伐取伯耆半国、海陸業盛彼国有勢武勇者也、奉付之、但小鴨□康不従云々、又美作国小々打取了、昨日上使者於京都、為入院見参云々、奉仰源氏相俱可伐平氏云々、事次第奇異也、仍為後記之、【後略】

治承・寿永の乱も収束に向かった元暦元年（一一八四）二月二日に京都の九条兼実のもとに驚くべき情報が入った。三徳山に後白河上皇の子息を称する皇族がおり、伯耆国半国を實力で影響下に置いたのである。この皇族は大山寺經由で三徳山に入ったが、その背後には村尾成盛がいた。寿永元年に小鴨氏に勝利した紀成盛は後白河上皇子を旗印に小鴨氏に対して攻撃に出たと考えられる。小鴨基保はこれに対して従わず、再び伯耆国は二つに割れた。注意しておきたいのは、伯耆国の東端である三徳山に村尾氏が擁する後白河皇子が入ったこと、小鴨地域とつながりが深い美作国にも戦火が及んでいる点である。後白河上皇は自分



一家繁昌万代全保  
法界□□□□利益

銘文によると「廻向聖朝国吏序衆」という願文が「一家繁昌万代全保」に優位して記されており、伯耆国の安定を重視する姿勢から鴨部氏は伯耆国の在庁官人と推測できる。後述するが、小鴨氏は室町期にも「鴨部」姓を名乗っていることが一次史料からも裏付けられるので、小鴨氏はこの鴨部氏の一流である可能性は高い。この梵鐘は平安期の在銘梵鐘としても最古級のもので、非常に優れた造形の梵鐘であり国宝に指定されている。このような仏具を寄進することができた平安期の鴨部氏は相当な経済力を持っていたであろう。「小鴨家系図」の小鴨基仁の項には後に小鴨氏の本拠地となる岩倉の地で国家安全・武運長久などを祈願したと見え、小鴨氏と国家仏教の非常に密接な関係が見てとれる。

伯耆国東郷庄の地頭・東郷氏の系図である「原田氏系図」の原田（東郷）家平の項では治承三年（一一七九）二月二十二日には伯耆国ツホカミ山（現・淀江町の壺瓶山）で篁津藏人仲吉・小鴨介基保に原田家平が討ち捕られたことが記されている。<sup>6</sup>系図資料の記述ではあるものの、治承年間には小鴨氏が西伯耆への進出を果たしていたことを窺わせ、同時代史料ではないものの現状での小鴨氏の史料上で確認できる最も古い活動である。

## ② 治承寿永の内乱と小鴨氏

小鴨氏が一次史料上に現れるのは寿永年間で、小鴨基保（康）が伯耆国の有力武士として名前が見える。

史料②『吉記』寿永元年八月廿日条（『新鳥取県史 古代中世2 古記録編』（以下『鳥2』））  
（二一八三）

寿永元年八月廿日、戊午、自昼雨降、【中略】風伯耆国合戦事聞云、伯耆国住人成盛（源頼朝）与基保（鴨部）合戦、基保被追落、死者不知幾千、出雲・石見・備後等国々力云々、

まず、治承・寿永の乱の最中の寿永元年（一一八二）には伯耆国において合戦が起こった。この一戦は出雲・石見・備後国をも巻き込んだ大規模なものであったが、小鴨介を称する基保は紀成盛に敗北した。

## 史料③『源平盛衰記』卷三六一谷城構事（『鳥2』）

山陽・山陰・四国・九国に宗と聞る者共、阿波民部大輔成良が口状を以て、安芸守基盛の息男、左馬頭行盛執筆として、交名記して被催たり。先播磨国には津田四郎高基、【中略】伯耆国には小鴨介基康・村尾海六・日野郡司義行、【中略】

さて、治承・寿永の乱の最中において伯耆国で国外に有力な武士と認識されていたのは村尾成盛・小鴨介基保・日野郡司義行の三名であった。「伯耆国合戦」が伯耆国の支配をめぐる重要な意味を持つ可能性があったことが窺える。史料②で交戦した小鴨氏・村尾氏は伯耆を二分する「二人ノ大将」とも評されており、養和年間（一一八一～一一八二）には既に大山寺内の檀乙関係を契機とする戦いにより抗争状態に突入していた。<sup>7</sup>

## 文献資料に見る小鴨氏

山本 隆一朗

はじめに

小鴨氏は伯耆国の在庁官人から成長したとされる武士である。天神川に注ぐ支流・小鴨川流域の小鴨地域を本貫とし岩倉川上流の岩倉城を本拠とした伯耆国の代表的な武士団の一つである。

小鴨氏については富盛禅雄氏『小鴨氏』<sup>1)</sup>が、地域史の立場から武士小鴨氏の歴史を検討し、近代までを射程に収めた地域史研究を展開した。その後、『倉吉市史』・『新編倉吉市史』でもその小鴨氏についての概要が紹介されている。中でも『新編倉吉市史』は「小鴨家系図」を翻刻掲載している点で貴重な成果である。

文献史学の立場からみた小鴨氏についての専論は、鎌倉期小鴨氏と伯耆国の武士たちについて明らかにし、守護・山名氏との関係も究明した岡村吉彦氏の仕事がある。<sup>2)</sup>近年では、日置桑左エ門氏が南条氏・小鴨氏の系譜についてその事実関係を整理した。<sup>3)</sup>以上の様な先行研究に加え、『新鳥取県史』が刊行され飛躍的な資料状況の改善がなされた。また、山ノ下遺跡の発掘なども行われ、考古学・文献史学双方から小鴨氏について研究を進める機運が高まっているといえよう。そこで、本稿では先学に学びながら、平安～戦国前期までの小鴨氏の動向や一族結合について論じ、その特質を説明する一素材としたい。

## 一、平安時代の小鴨氏

## ①小鴨氏の出自について

小鴨氏の根本的な所領は倉吉から南西方向の小鴨川を中心とした平野部である。伯耆国府が小鴨川と国府川の合流する地域に位置することから伯耆国衙と密接な関係を有していた可能性が高い。「小鴨家系図」にはその祖として「小鴨主」という人物が天武天皇三年に「小鴨」の姓を賜ったとされ、その後一四代ほどは系図にも遺漏がみられる。<sup>4)</sup>「小鴨主」の次には平安時代後期の人物とみられる基仁が挙げられ、基仁は岩倉に居住した人物であるという。以上の断片情報を除き、小鴨基仁以前の小鴨氏の歴史についてはほとんど謎に包まれている。

さて、小鴨氏の位置づけを考える上で興味深い資料が伝存している。福岡県の西光寺所蔵の梵鐘は、承和六年（八三九）に「鴨部」が「伯耆国金石寺」に寄進したもので、永正七年（一五一〇）に尼子経久によって出雲大社に奉納されることで伯耆国外に移動した。

史料①西光寺鐘銘（鳥取県立博物館企画展図録『鳥取県の名宝』

（二〇〇二年）所収の写真・翻刻を参照）

承和六年、鴨部立造、

便伯耆国金石寺鍾、

守護三宝及以□□

十八善神、深砂大将、

若貪欲者、有犯用心、

必滅其身并子孫類、

廻向聖朝国吏庁衆、

伽藍恒久仏法興隆

# 写真図版





1 調査地遠景(北東から)



2 調査地遠景(北西から)



山ノ下遺跡全景(俯瞰)



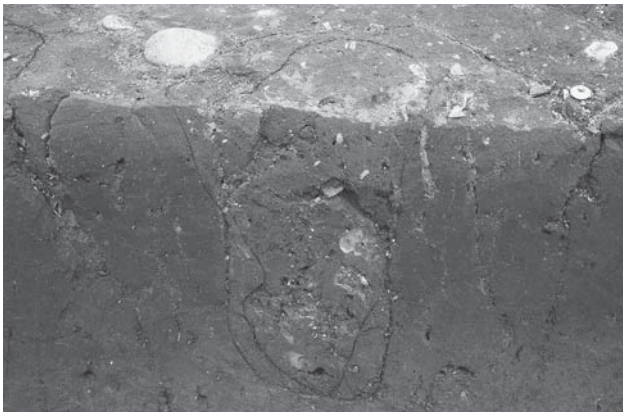
1 調査区の堆積状況(南東から)



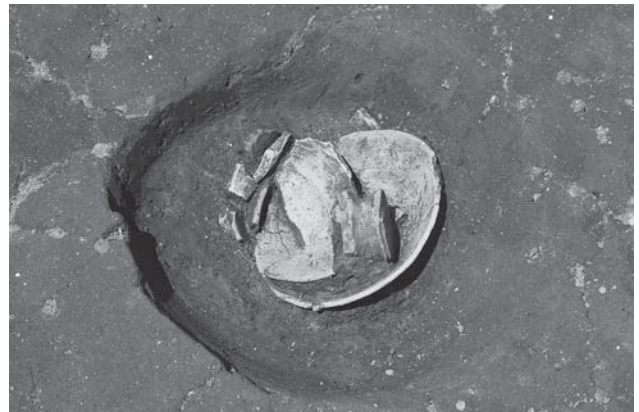
2 調査区の堆積状況(北西から)



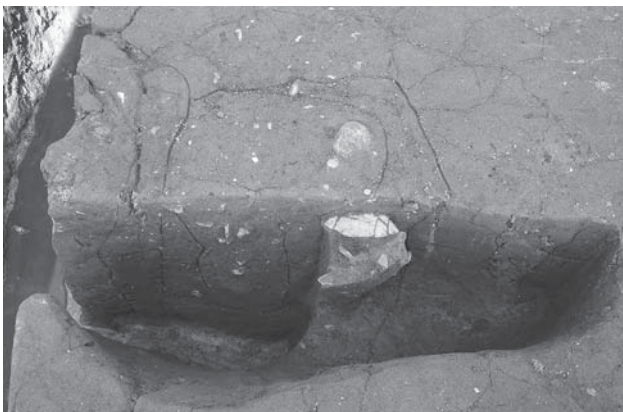
1 掘立柱建物12・20 完掘状況(北東から)



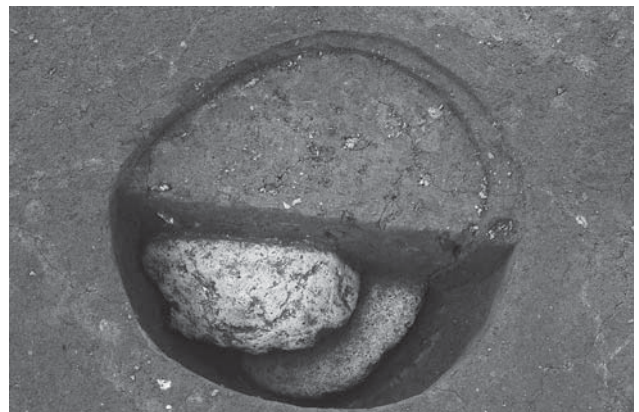
2 掘立柱建物12 3006柱穴土層断面(南東から)



3 掘立柱建物12 3024柱穴遺物(Po45他)  
出土状況(東から)



4 掘立柱建物12 3018柱穴土層断面(東から)

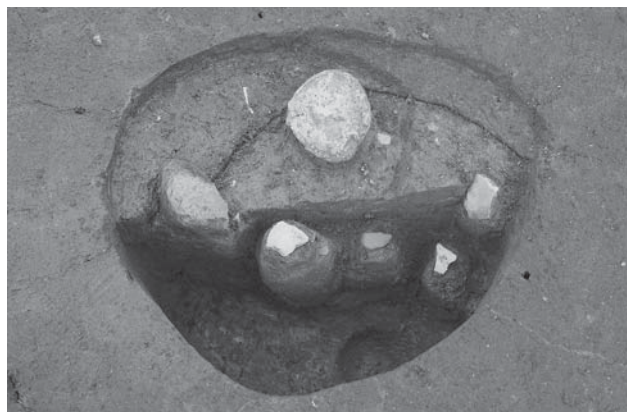


5 掘立柱建物12 3094柱穴土層断面(東から)





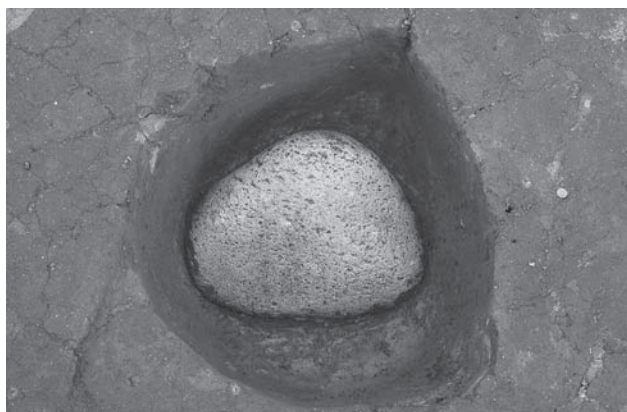
1 3068柱穴遺物(Po27他)出土状況(東から)



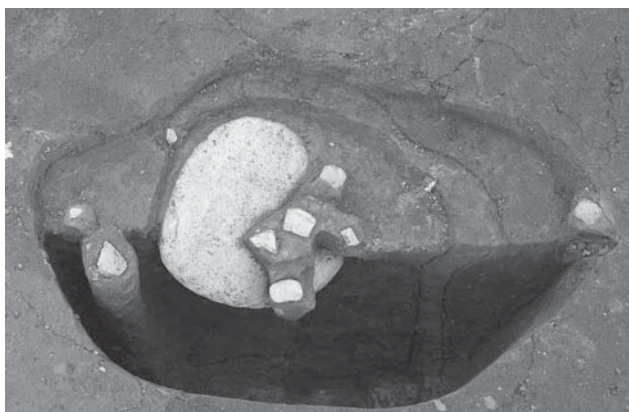
2 3069柱穴遺物(Po40他)出土状況(東から)



3 3070柱穴礫出土状況(東から)



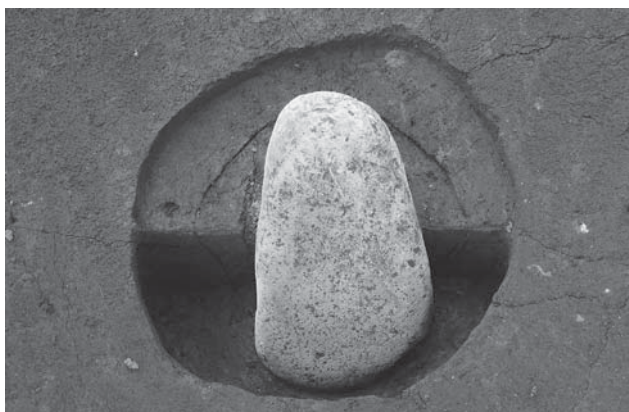
4 3072柱穴礫出土状況(西から)



5 3074・3344柱穴遺物出土状況(南から)



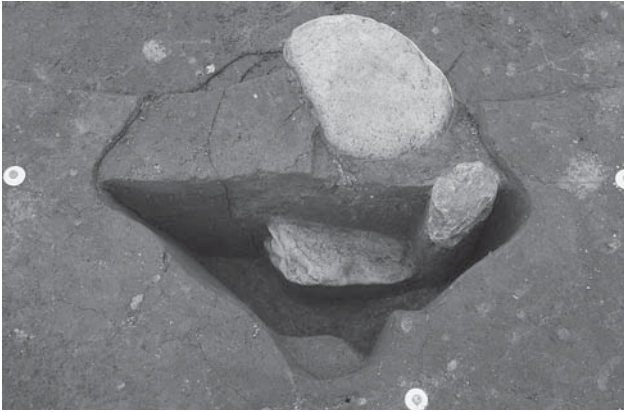
6 3075柱穴礫出土状況(東から)



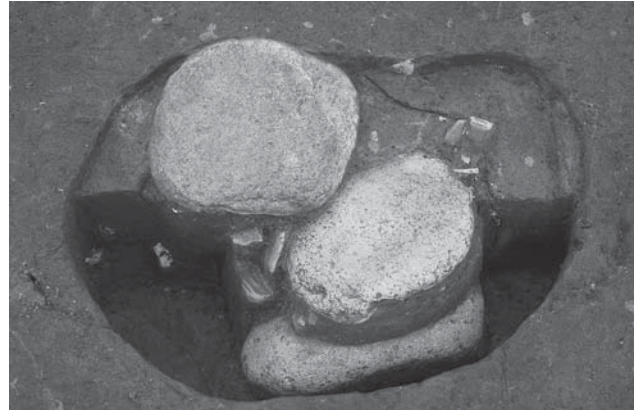
7 3098柱穴礫出土状況(東から)



8 3076柱穴礫出土状況(北から)



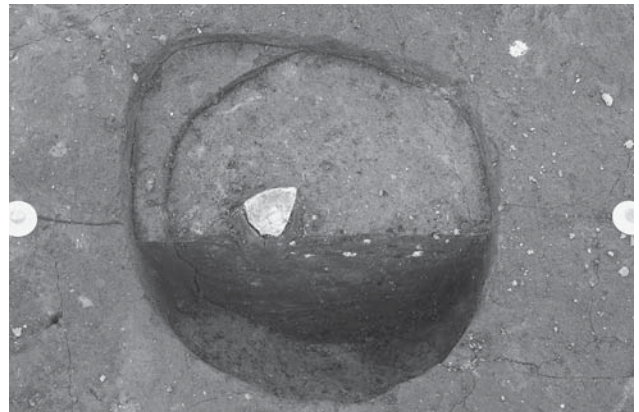
1 3077柱穴土層断面(南から)



2 3080柱穴遺物出土状況(東から)



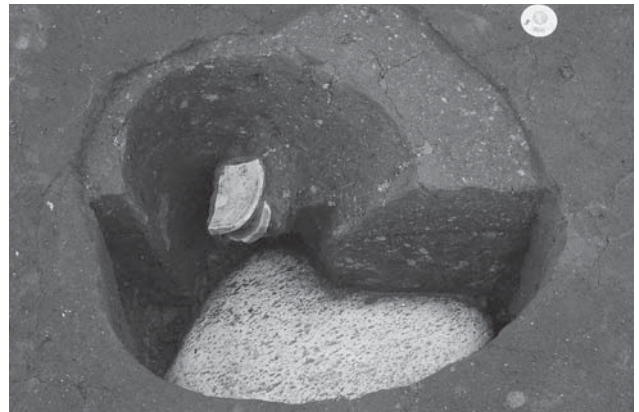
3 3097・3101柱穴土層断面(東から)



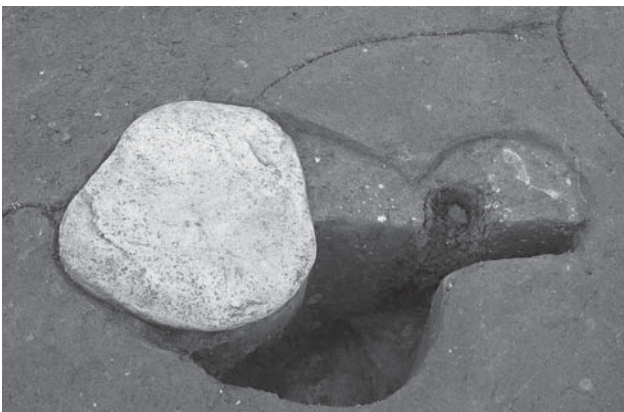
4 3096柱穴土層断面(南から)



5 3085柱穴土層断面(北東から)



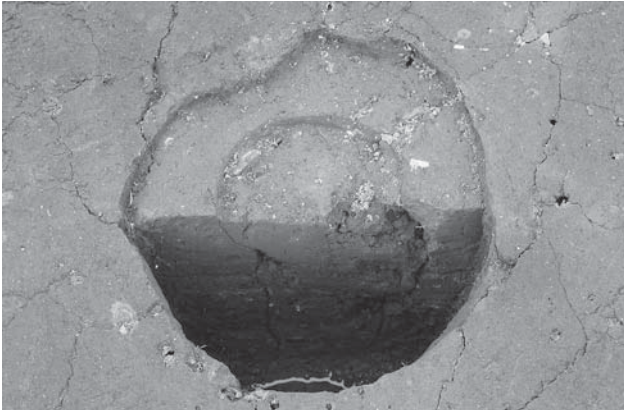
6 3086柱穴遺物(Po19)出土状況(東から)



7 3088柱穴礫出土状況(東から)



8 3095柱穴遺物出土状況(東から)



1 3049柱穴土層断面(東から)



2 3050柱穴遺物出土状況(東から)



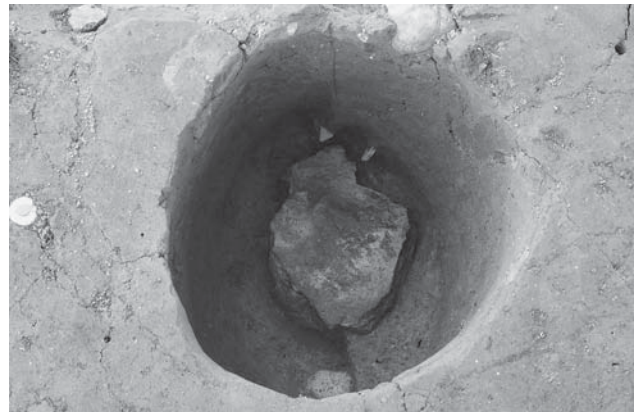
3 3051柱穴礫出土状況(南西から)



4 3039柱穴土層断面(東から)



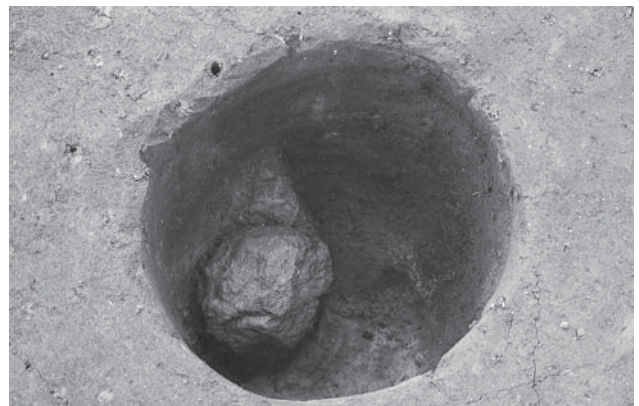
5 3040柱穴遺物出土状況(東から)



6 3040柱穴礫出土状況(北から)



7 3041柱穴遺物(Po68)出土状況(南東から)



8 3042柱穴礫出土状況(東から)



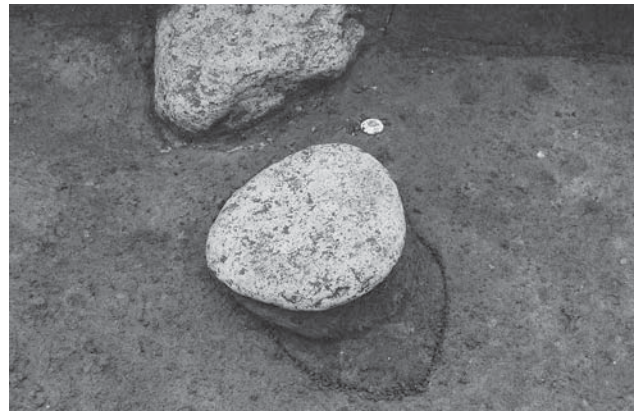
1 3043柱穴遺物(Po65他)出土状況(東から)



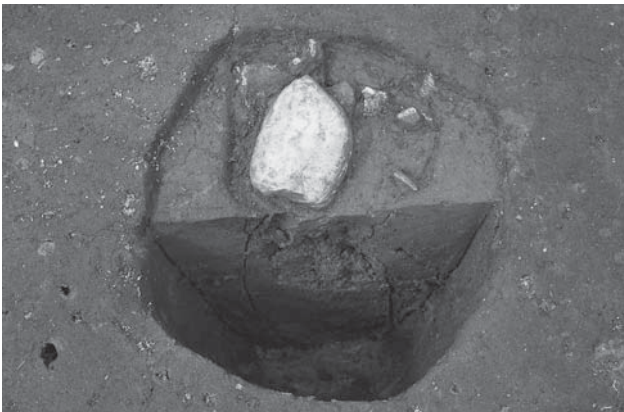
2 3043柱穴遺物出土状況(東から)



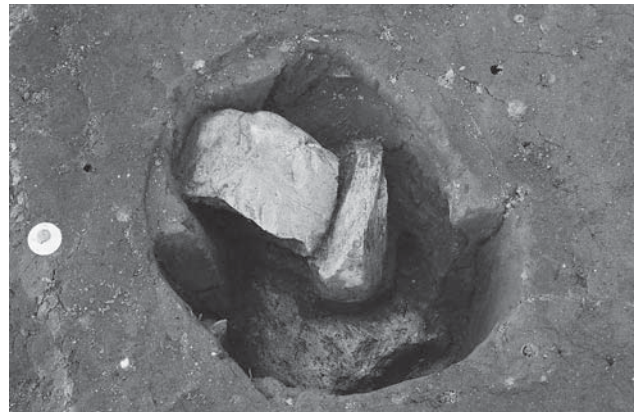
3 3036柱穴遺物(Po53)出土状況(東から)



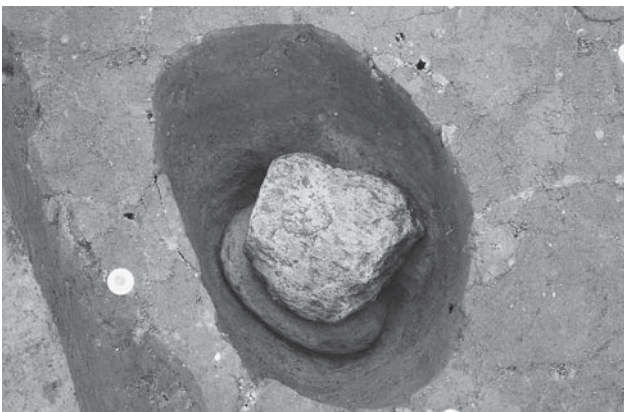
4 3044柱穴礫出土状況(北から)



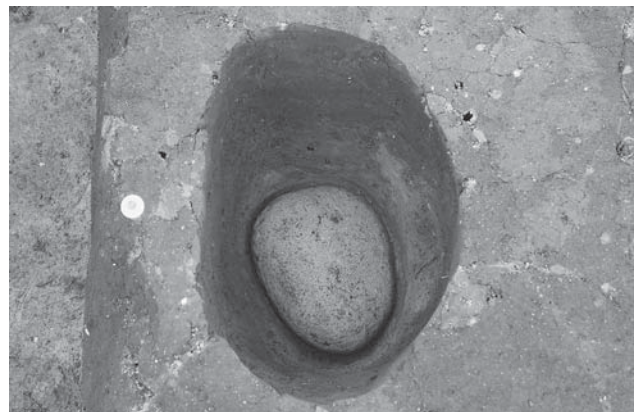
5 3045柱穴遺物出土状況(東から)



6 3046柱穴礫出土状況(東から)



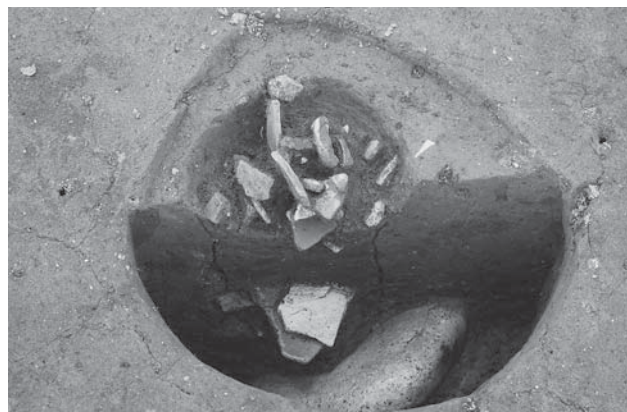
7 3046柱穴礫出土状況(東から)



8 3046柱穴礫出土状況(南東から)



1 3047柱穴遺物(Po63他)出土状況(北から)



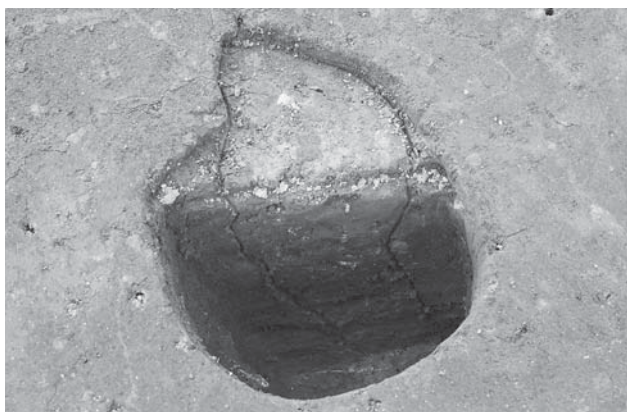
2 3047柱穴遺物(Po64他)出土状況(東から)



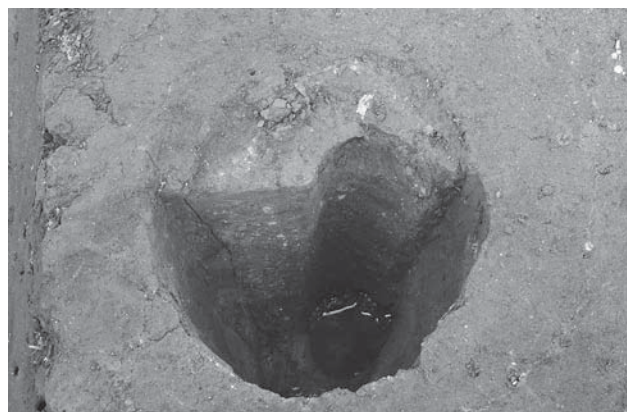
3 3047柱穴礫出土状況(北西から)



4 3048柱穴礫出土状況(北から)



5 3052柱穴土層断面(東から)



6 3053柱穴土層断面(東から)



7 3054柱穴遺物出土状況(東から)



8 3055柱穴遺物(Po52)出土状況(北西から)



1 666溝完掘状況(北西から)



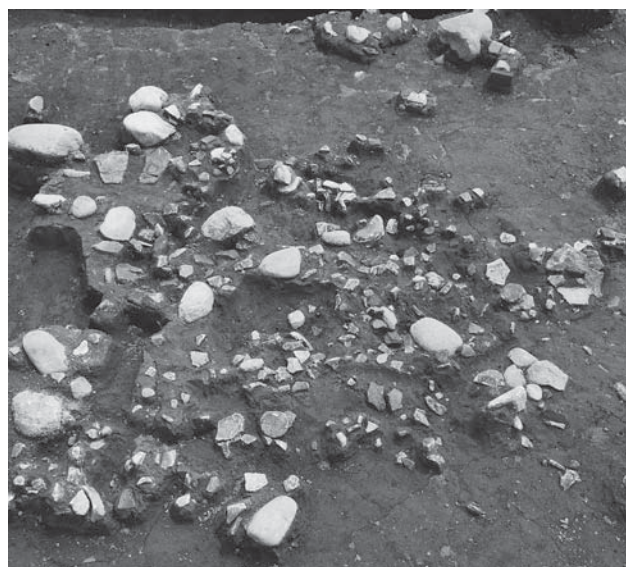
2 666溝遺物出土状況(北西から)



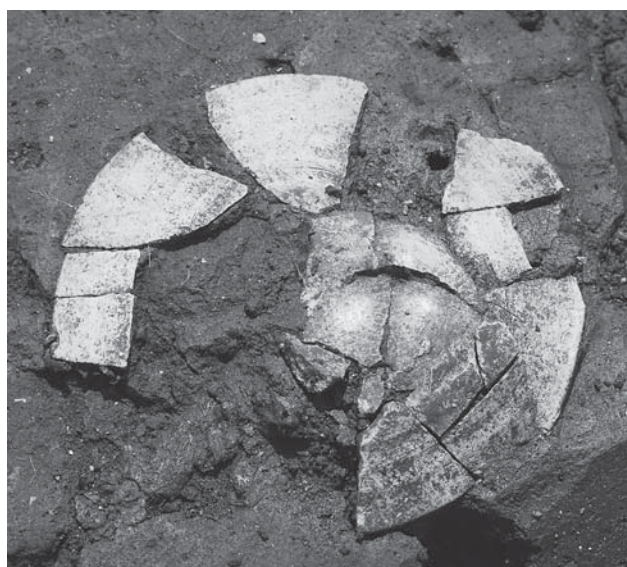
1 666溝遺物出土状況(北から)



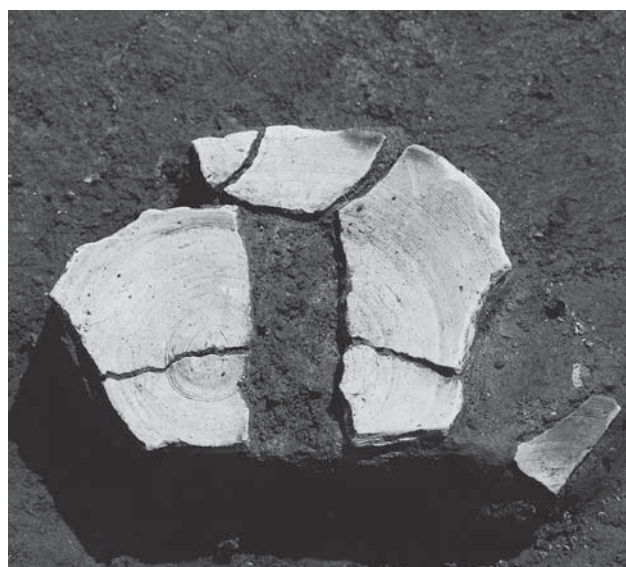
2 666溝遺物出土状況(北西から)



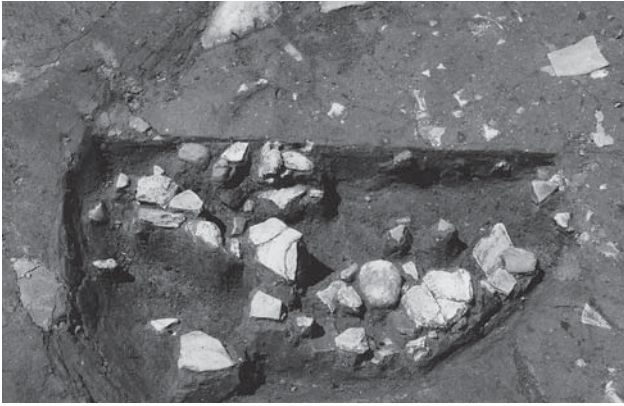
3 666溝遺物出土状況(北から)



4 666溝遺物(Po87他)出土状況(北から)



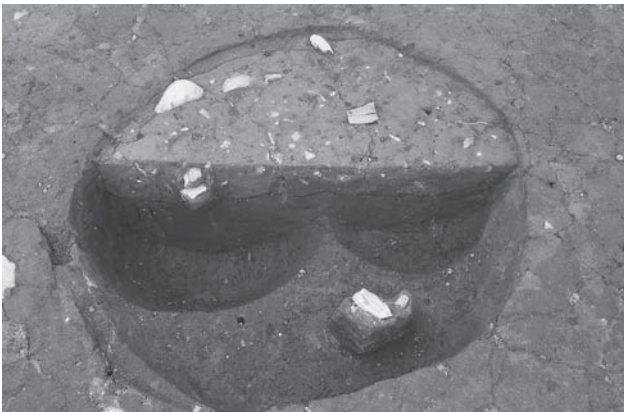
5 666溝遺物(Po86)出土状況(北から)



1 3015土坑遺物(Po140他)出土状況(南東から)



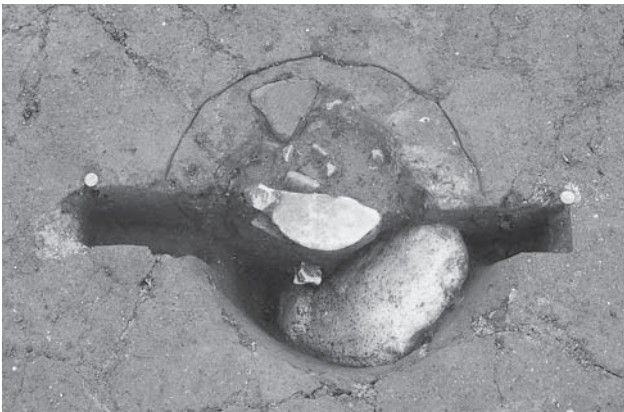
2 3015土坑遺物(Po139他)出土状況(南東から)



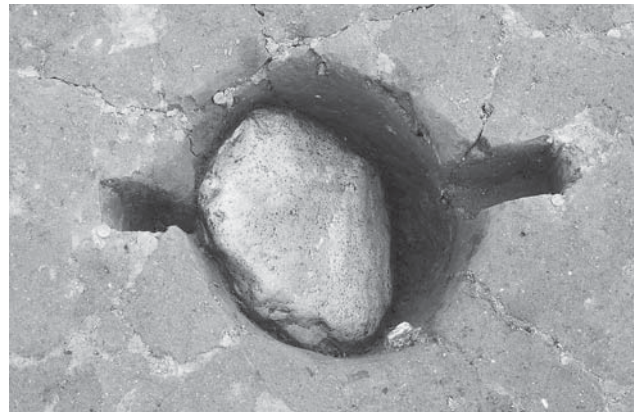
3 3015土坑土層断面(南東から)



4 3005柱穴土層断面(南東から)



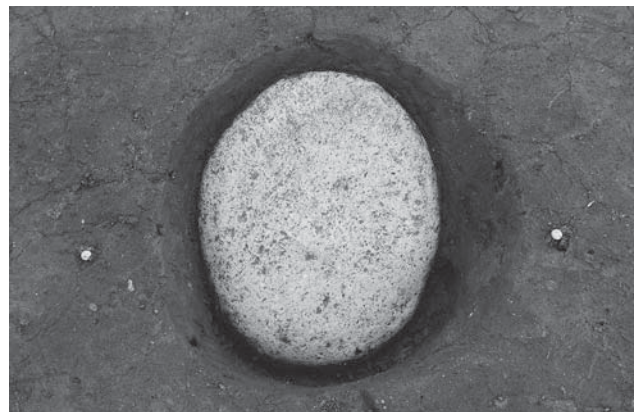
5 3007柱穴遺物出土状況(南から)



6 3007柱穴礫出土状況(北から)

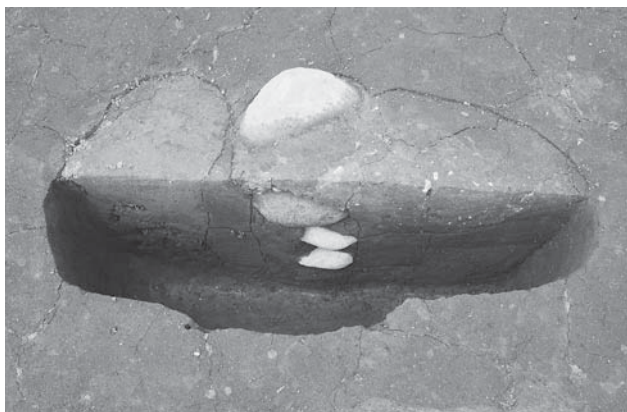


7 3028柱穴礫出土状況(北東から)

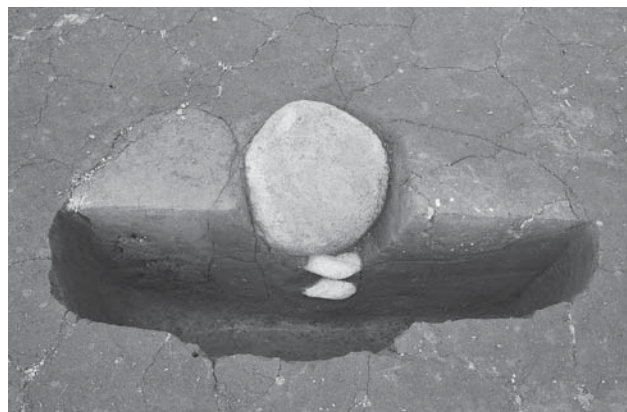


8 3028柱穴礫出土状況(東から)





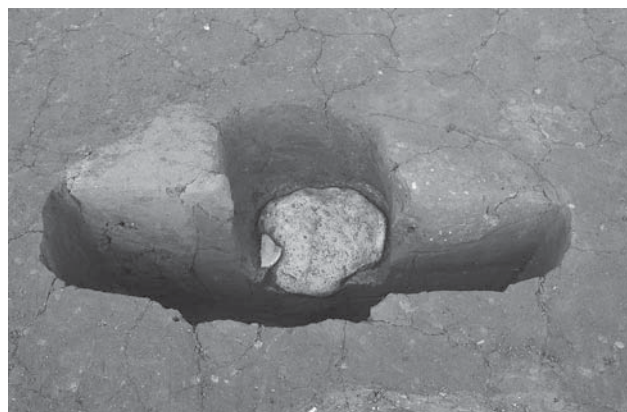
1 3025・3026柱穴土層断面(東から)



2 3025柱穴礫出土状況(東から)



3 3025柱穴礫出土状況(東から)



4 3025柱穴遺物(Po143他)出土状況(東から)



5 747溝群検出状況(北西から)



1 3035耕作溝群完掘状況(北西から)



2 3035耕作溝群検出状況(北西から)



1 3035耕作溝群掘削痕跡(南東から)



2 3035耕作溝群掘削痕跡(南東から)



3 3035耕作溝群A-A'ライン土層断面(南東から)



4 3035耕作溝群B-B'ライン・3038土坑土層断面(南東から)



5 3035耕作溝群E-E'ライン土層断面(東から)



6 3035耕作溝群F-F'ライン土層断面(東から)



7 3035耕作溝群C-C'ライン土層断面(東から)



8 3035耕作溝群D-D'ライン土層断面(東から)



1 3022溝遺物出土状況(西から)



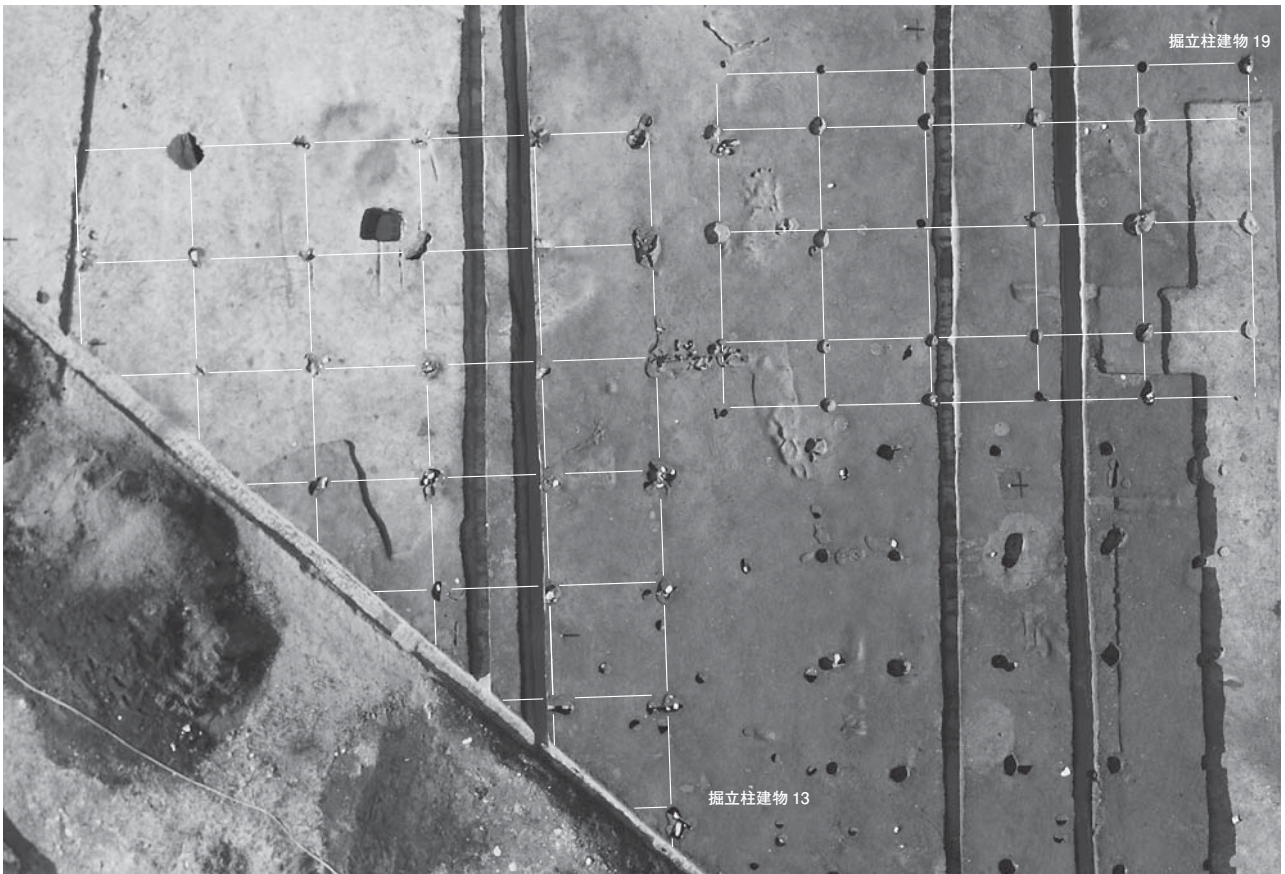
2 3022溝完掘状況(西から)



3 3022溝(西端付近)遺物出土状況(東から)



4 3022溝土層断面(東から)



1 掘立柱建物13・19 航空写真(俯瞰)



2 掘立柱建物13 検出状況(北から)



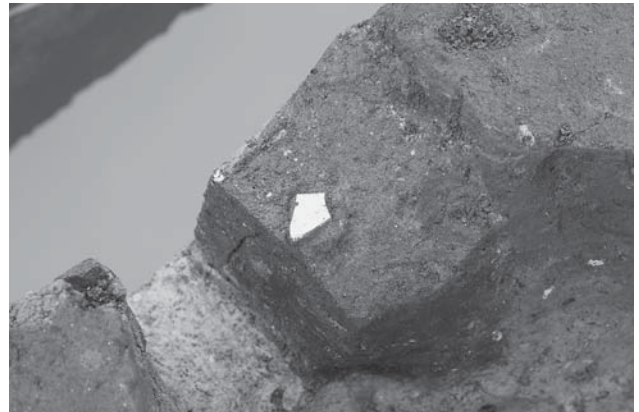
1 3103~3105柱穴礫出土状況(北東から)



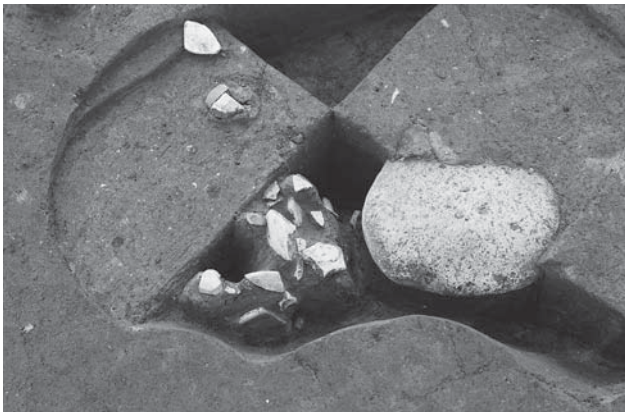
2 3106柱穴遺物出土状況(北東から)



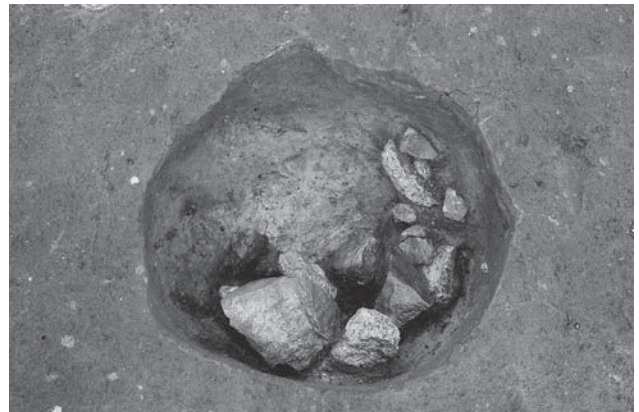
3 3108柱穴礫出土状況(東から)



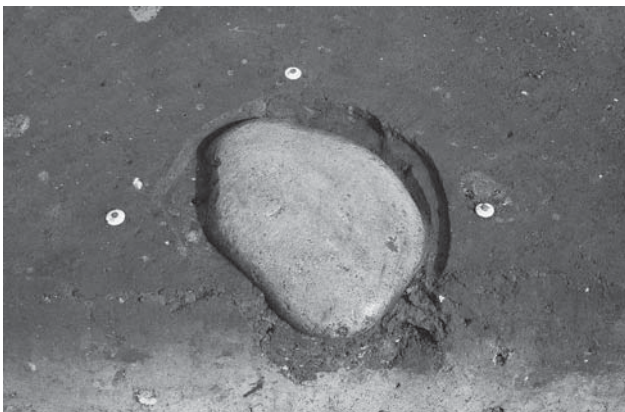
4 3149柱穴遺物(Po196)出土状況(北東から)



5 3109柱穴遺物出土状況(北東から)



6 3112柱穴遺物出土状況(南から)



7 3111柱穴礫出土状況(南から)



8 3111柱穴礫出土状況(南から)



1 3115柱穴遺物(Po161)出土状況(南から)



2 3115柱穴遺物(Po204)出土状況(西から)



3 3118柱穴礫出土状況(南から)



4 3121柱穴土層断面(南西から)



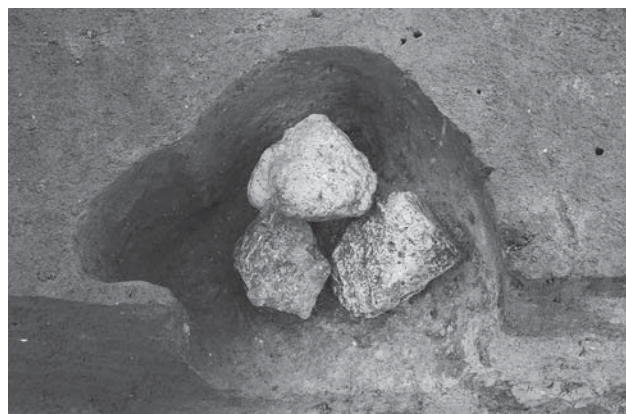
5 3119・3120柱穴礫出土状況(南から)



6 3120柱穴礫出土状況(南から)



7 3122柱穴土層断面(南東から)



8 3123柱穴礫出土状況(南から)



1 3124柱穴遺物(Po198他)出土状況(西から)



2 3124柱穴礫出土状況(南から)



3 3125柱穴礫出土状況(南から)



4 3126柱穴礫出土状況(北西から)



5 3127柱穴遺物(Po146他)出土状況(北から)



6 3129柱穴焼土塊検出状況(南から)



7 3132・3189柱穴遺物(Po183他)出土状況  
(北東から)



8 3132柱穴遺物(Po187他)出土状況(北東から)

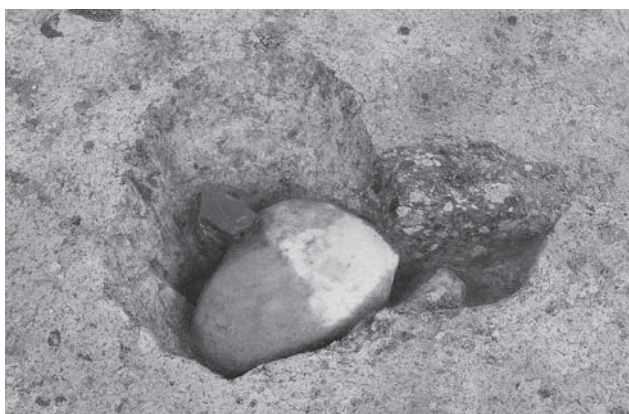




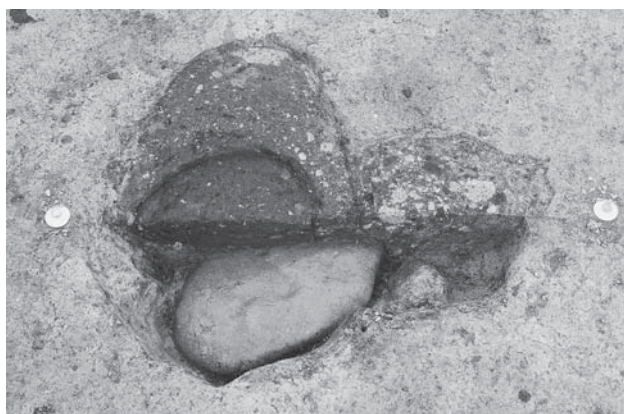
1 3130・3131柱穴土層断面(西から)



2 3134柱穴遺物(Po149他)出土状況(北東から)



3 3135柱穴遺物(Po186)出土状況(南から)



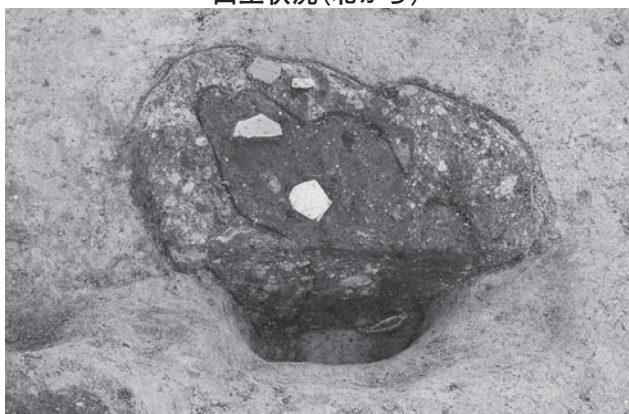
4 3135・3136柱穴土層断面(南から)



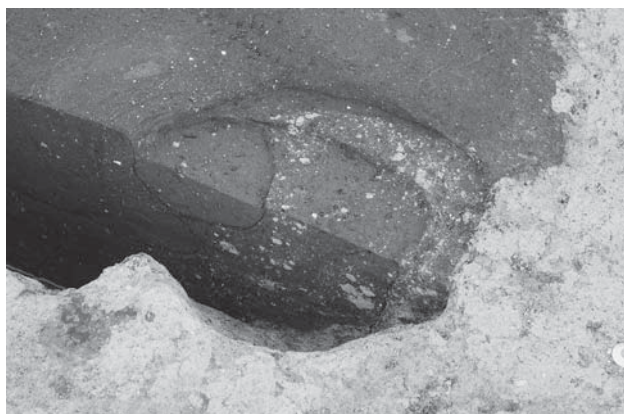
5 3137柱穴遺物(Po190他)・3338柱穴遺物  
出土状況(北から)



6 3137柱穴礫出土状況(南から)



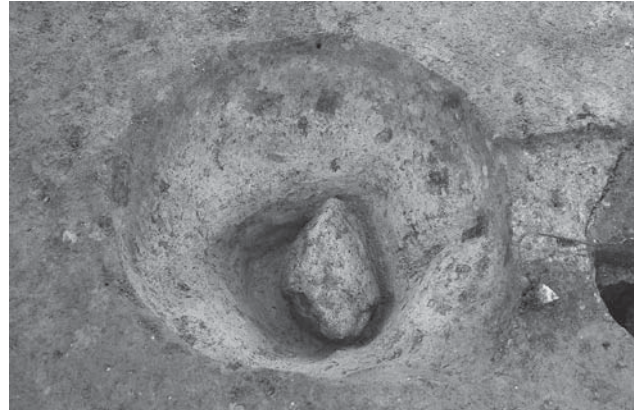
7 3142柱穴土層断面、遺物(Po197他)  
出土状況(東から)



8 3144柱穴土層断面(北から)



1 3138柱穴遺物(Po160他)出土状況(北東から)



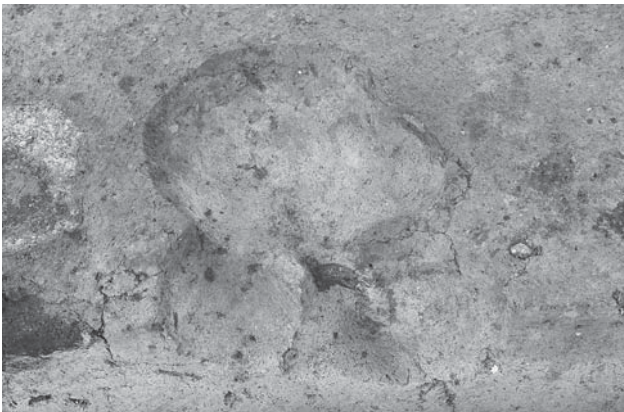
2 3138柱穴礫出土状況(北東から)



3 3139柱穴遺物出土状況(北東から)



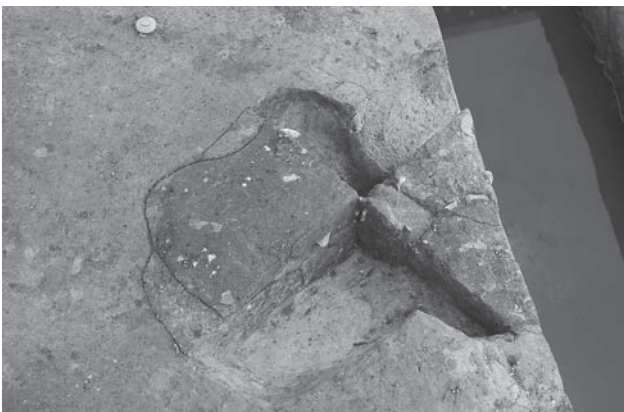
4 3139柱穴遺物出土状況(北東から)



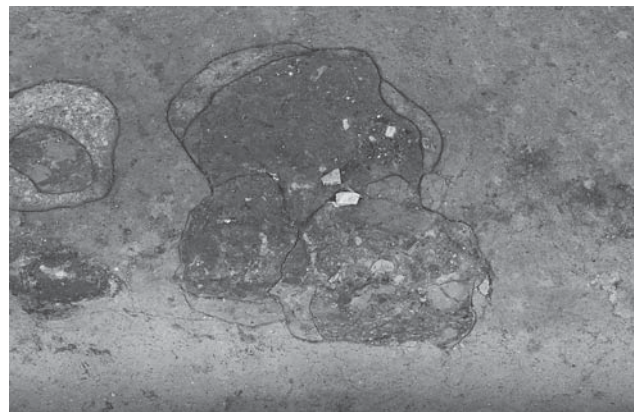
5 3140・3141・3188柱穴完掘状況(南から)



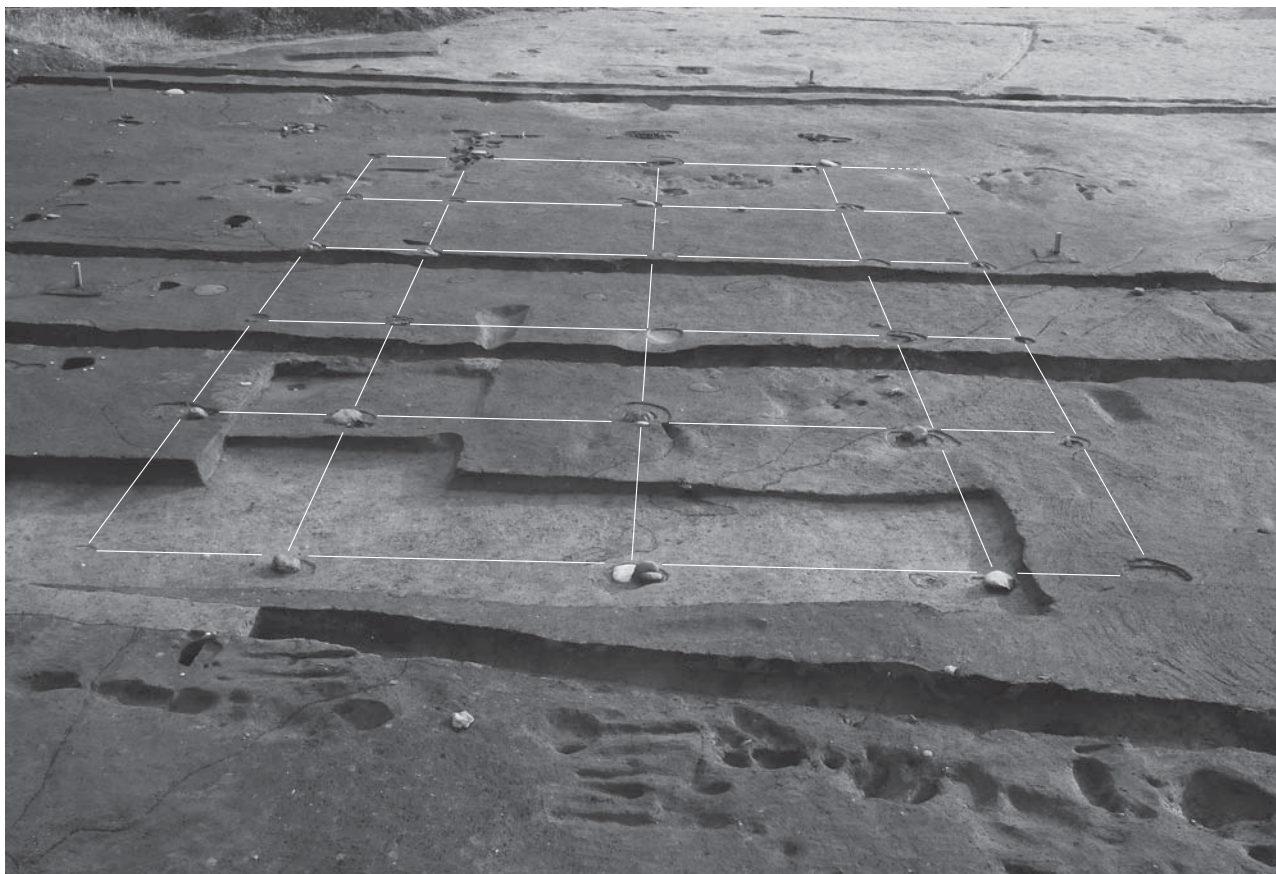
6 3188柱穴遺物出土状況(北西から)



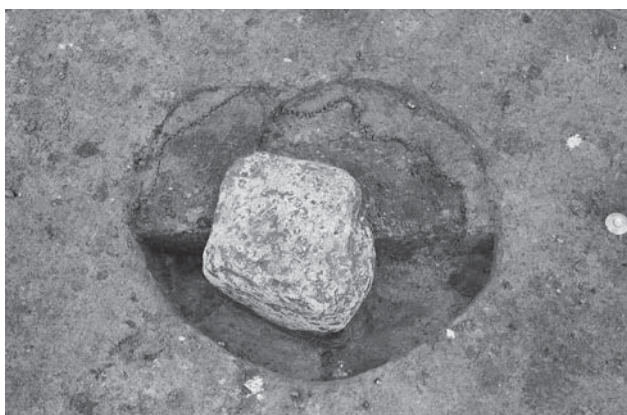
7 3188柱穴土層断面(北西から)



8 3140・3141・3188柱穴検出状況(南から)



1 掘立柱建物19 検出状況(北から)



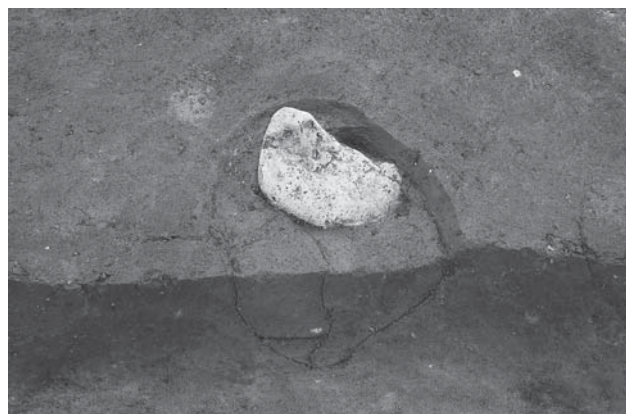
2 3150柱穴土層断面(南東から)



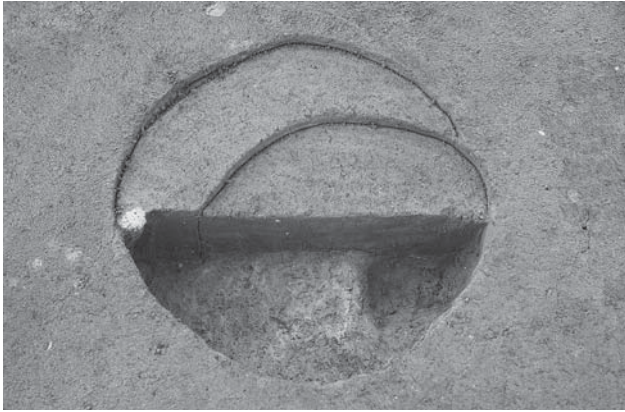
3 3151柱穴遺物(Po212他)出土状況(南西から)



4 3152柱穴完掘状況(南西から)



5 3153柱穴土層断面(北から)



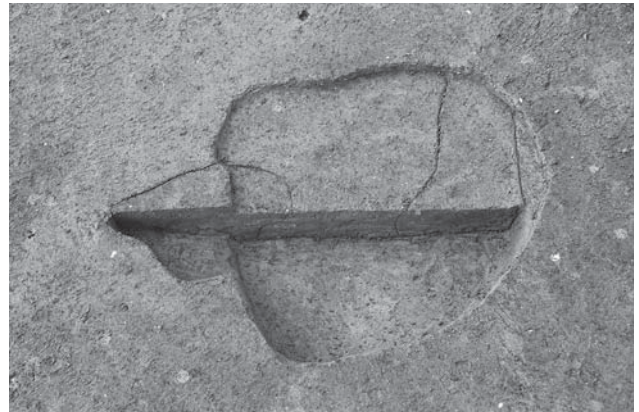
1 3154柱穴土層断面(北東から)



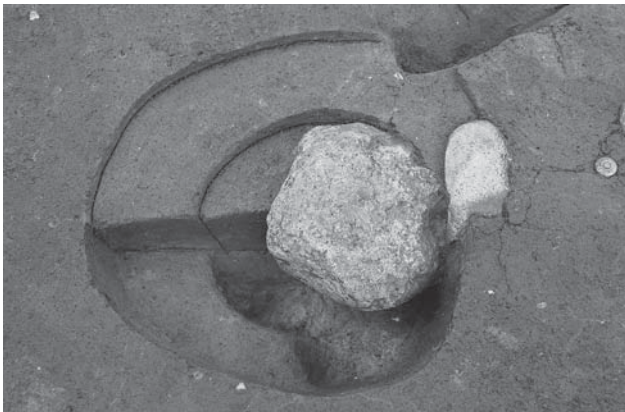
2 3155柱穴礫出土状況(北東から)



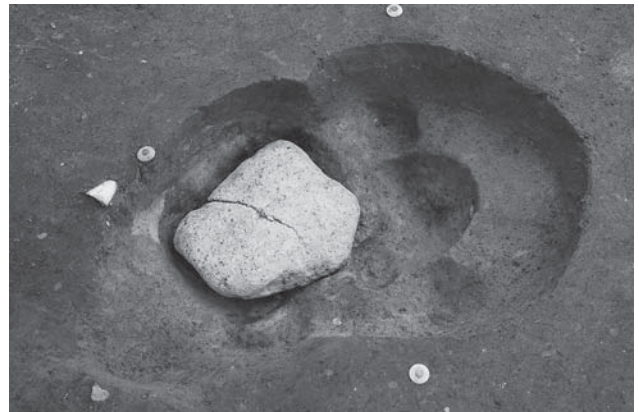
3 3156柱穴礫出土状況(南から)



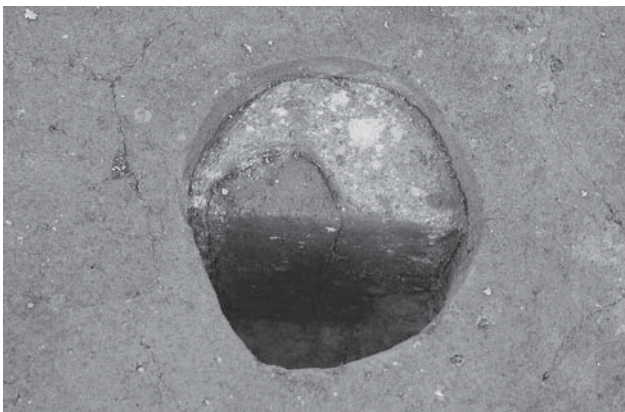
4 3158柱穴土層断面(南東から)



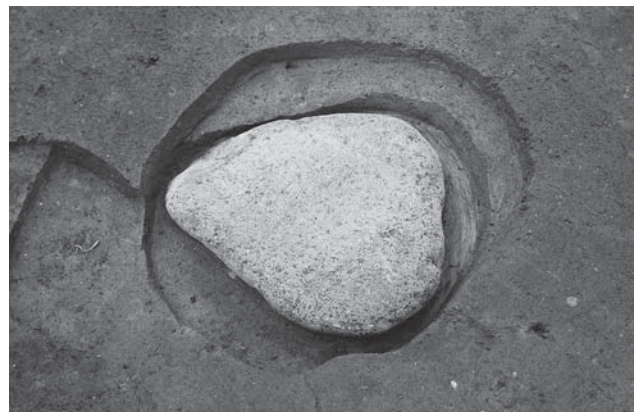
5 3157柱穴土層断面(東から)



6 3157柱穴礫出土状況(西から)



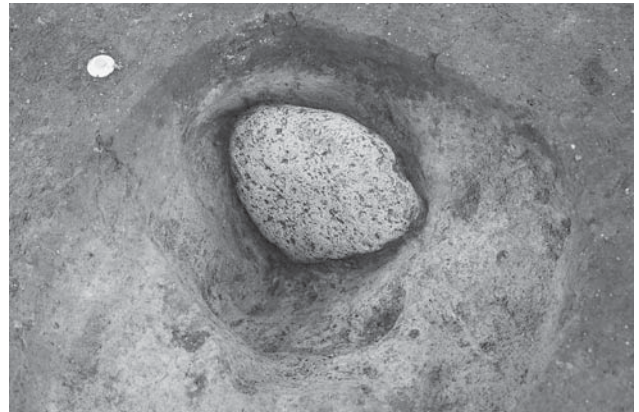
7 3159柱穴土層断面(南東から)



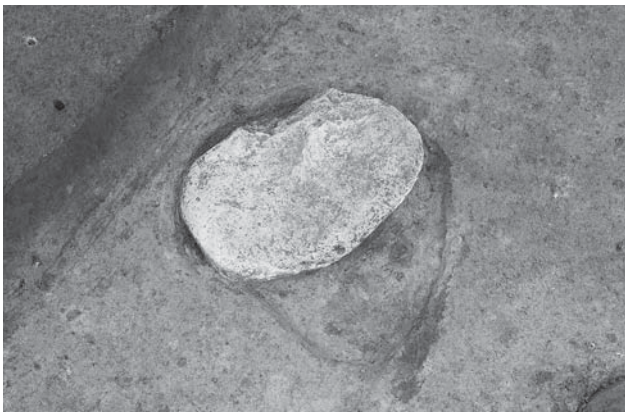
8 3160柱穴礫出土状況(北東から)



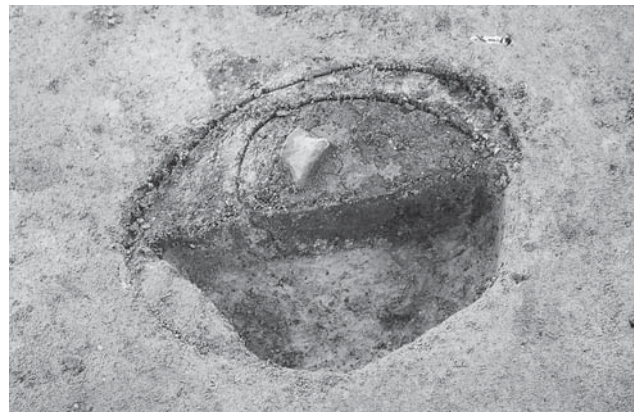
1 3161柱穴遺物(Po210他)出土状況(東から)



2 3161柱穴礫出土状況(北から)



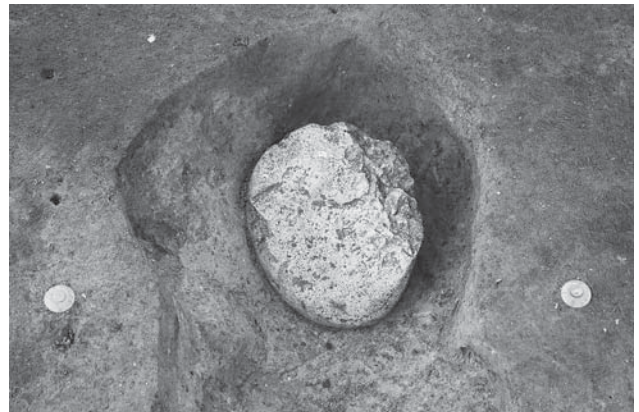
3 3162柱穴礫出土状況(南東から)



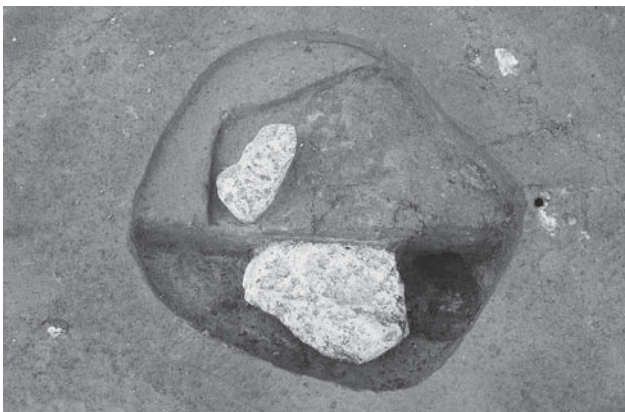
4 3255柱穴土層断面、遺物(Po207)出土状況(東から)



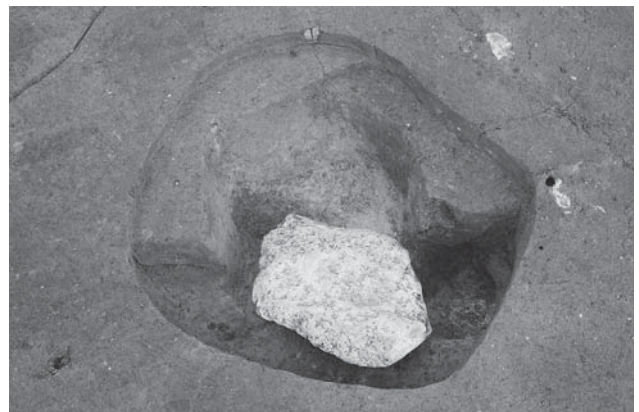
5 3163・3340柱穴土層断面(北から)



6 3163柱穴礫出土状況(東から)



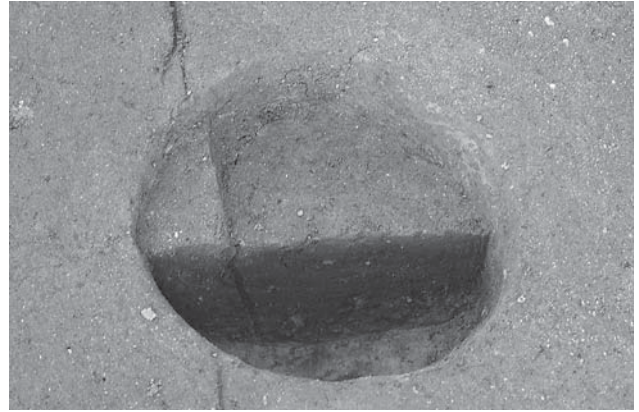
7 3164柱穴土層断面(南から)



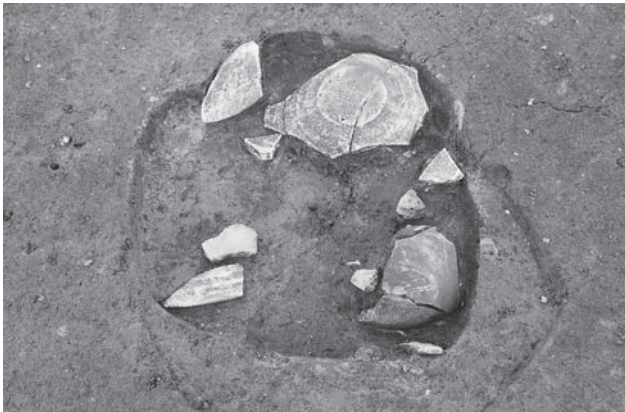
8 3164柱穴礫出土状況(南から)



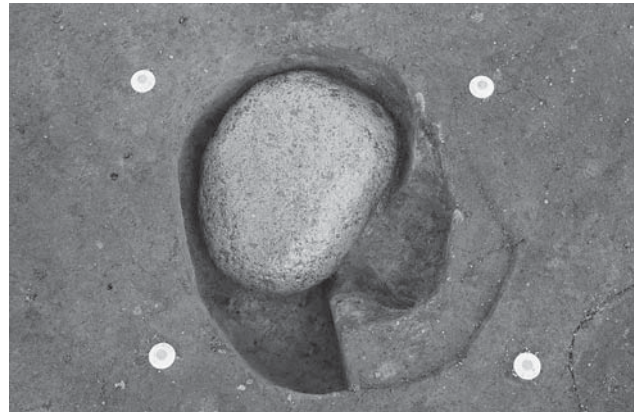
1 3165柱穴礫出土状況(西から)



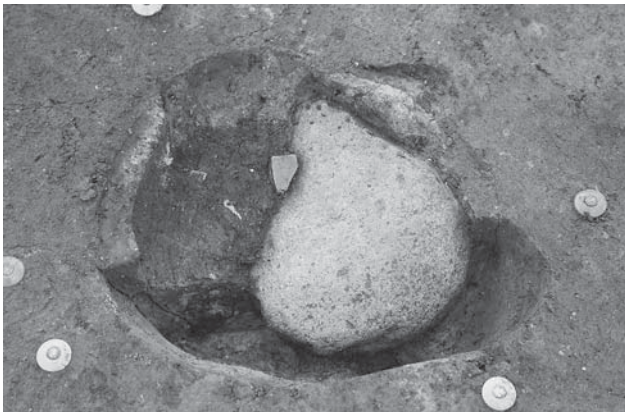
2 3178柱穴土層断面(南東から)



3 3166柱穴遺物(Po208他)出土状況(南東から)



4 3166柱穴礫出土状況(南東から)



5 3167柱穴土層断面(南西から)



6 3172・3199柱穴土層断面(南東から)



7 3171・3341柱穴礫出土状況(南から)



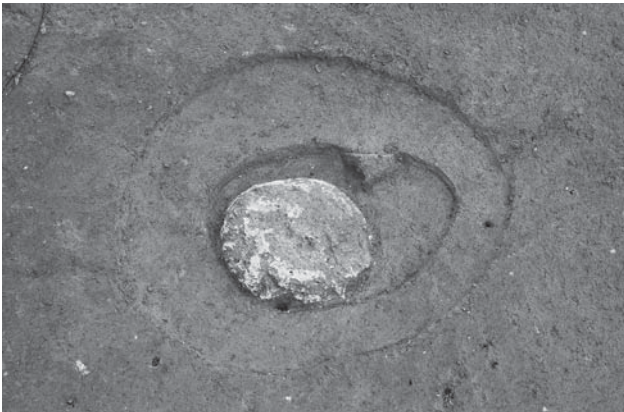
8 3171・3341柱穴土層断面(南から)



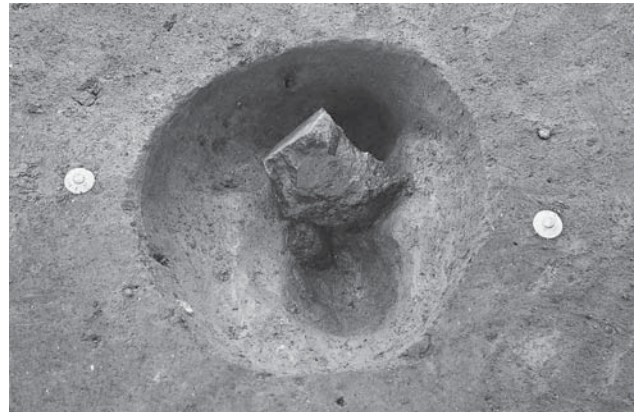
1 3173柱穴礫出土状況(北から)



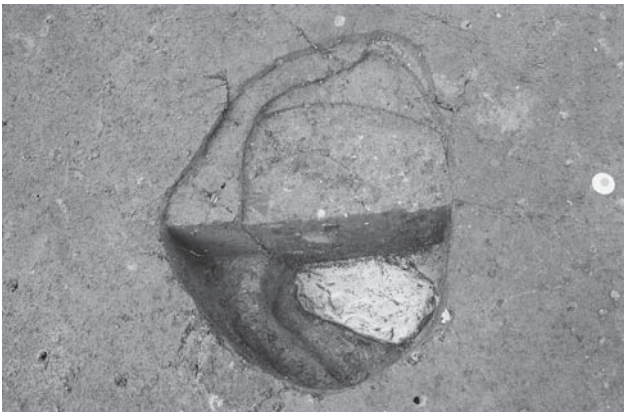
2 3173柱穴礫出土状況(北から)



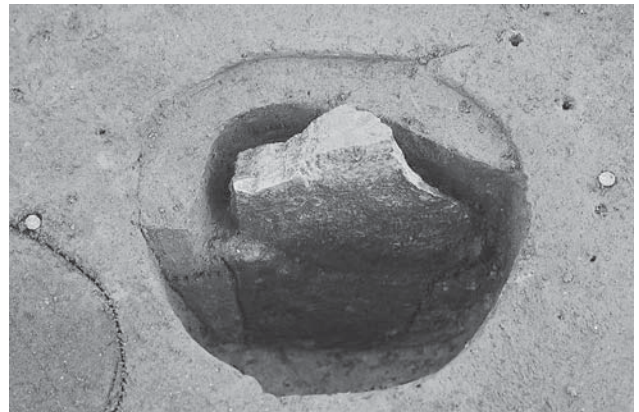
3 3174柱穴礫出土状況(北西から)



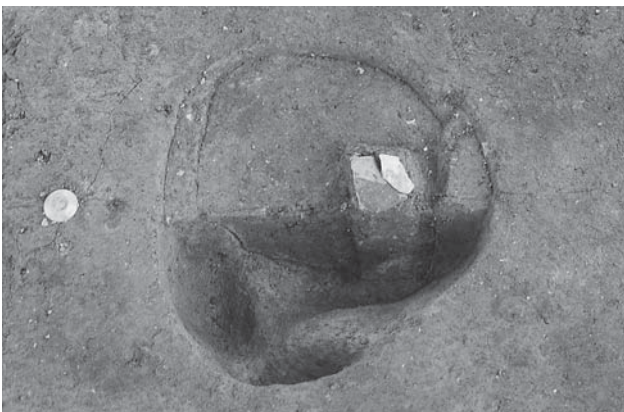
4 3174柱穴礫出土状況(北から)



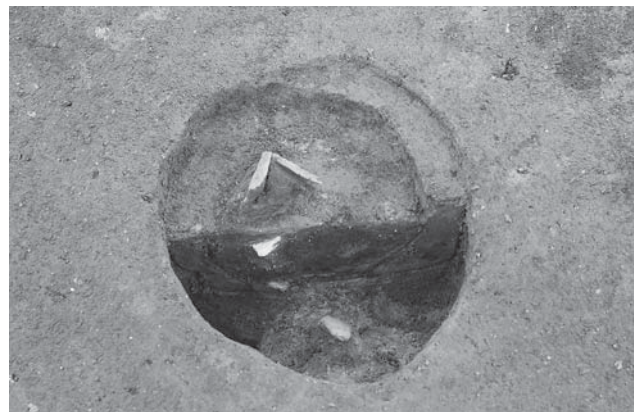
5 3176柱穴土層断面(東から)



6 3177柱穴礫出土状況(西から)



7 3179柱穴土層断面(西から)



8 3180柱穴遺物出土状況(北西から)



1 3010溝完掘状況(北から)



2 3010a溝完掘状況(南から)



3 3010a溝検出状況(南から)



4 3010a溝1層遺物出土状況(南東から)



5 3010a溝1層遺物出土状況(南から)



6 3010a溝1層遺物出土状況(北東から)





1 3010a溝 2・3層遺物出土状況(南から)



2 3010a溝 2・3層遺物出土状況(北から)



3 3010a溝 2・3層遺物出土状況(北東から)



4 3010a溝 2・3層遺物出土状況(南東から)



1 3010a溝3層遺物出土状況(南から)



2 3010a溝3層遺物出土状況(南東から)



3 3010a溝3層遺物出土状況(南東から)



4 3010a溝3層遺物出土状況(南東から)



5 3010a溝3層遺物出土状況(北から)



6 3010a溝底面直上遺物出土状況(北から)



7 3010a溝底面直上遺物出土状況(南から)



8 3010a溝底面直上遺物出土状況(南東から)



3010b溝 1・2層遺物出土状況(南から)



1 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北から)



2 3010b溝 1・2層遺物(Po391他)出土状況  
(北東から)



3 3010b溝 1・2層遺物(Po377他)出土状況  
(北東から)



4 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)



5 3010b溝 1・2層遺物(Po310他)出土状況  
(北西から)



6 3010b溝 1・2層遺物(Po390他)出土状況  
(南から)



7 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)



8 3010b溝 1・2層遺物(Po343他)出土状況  
(東から)



1 3010b溝 1・2層遺物(Po341他)出土状況(南から)



2 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)



3 3010b溝 1・2層遺物出土状況(北東から)



4 3010c溝 1層遺物出土状況(南から)



5 3010c溝 2層遺物出土状況(南東から)



6 3010c・d溝A-A'土層断面(南から)



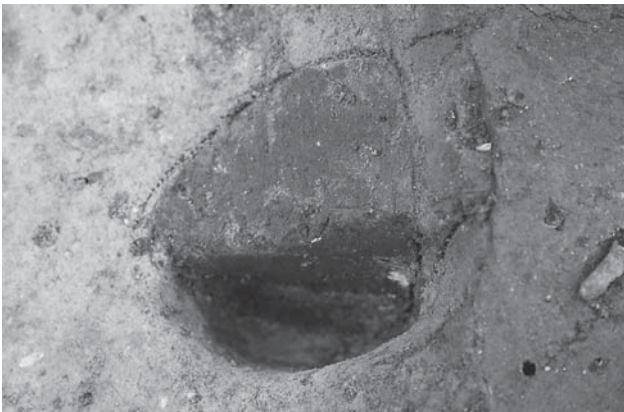
7 3010b溝A-A'土層断面(南から)



8 3010b溝B-B'土層断面(南から)



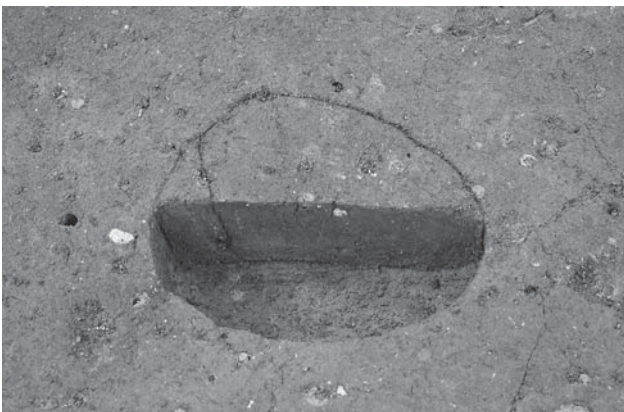
1 掘立柱建物21 完掘状況(西から)



2 3242柱穴土層断面(東から)



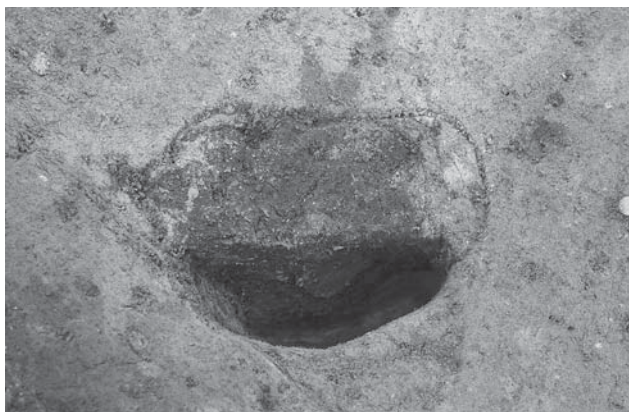
3 3243柱穴礫出土状況(北東から)



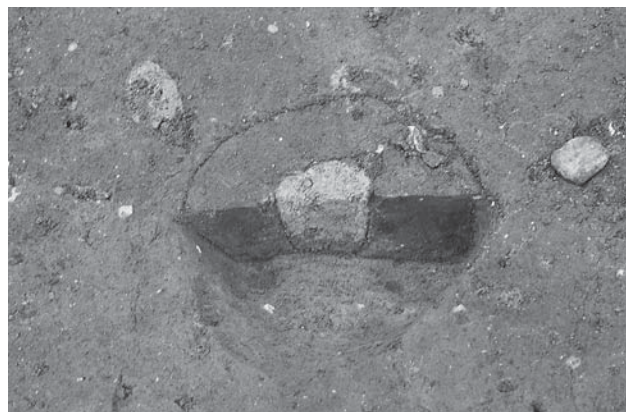
4 3244柱穴土層断面(東から)



5 3247柱穴土層断面(東から)



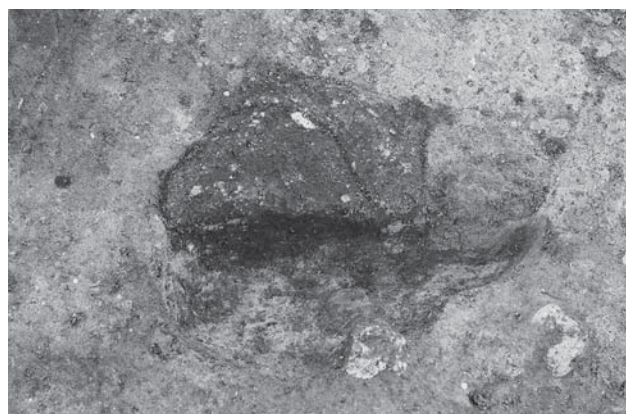
1 3248柱穴土層断面(南東から)



2 3249柱穴土層断面(東から)



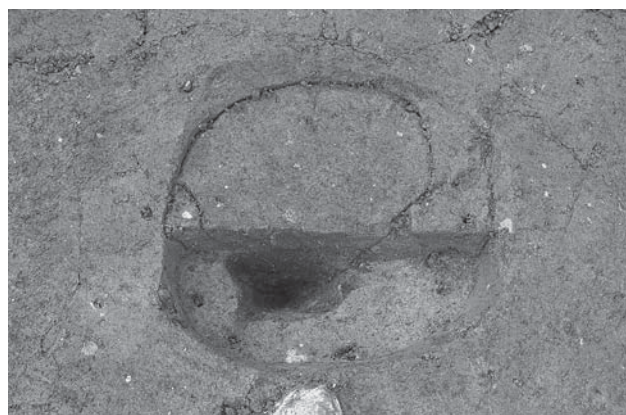
3 3251柱穴礫出土状況(南東から)



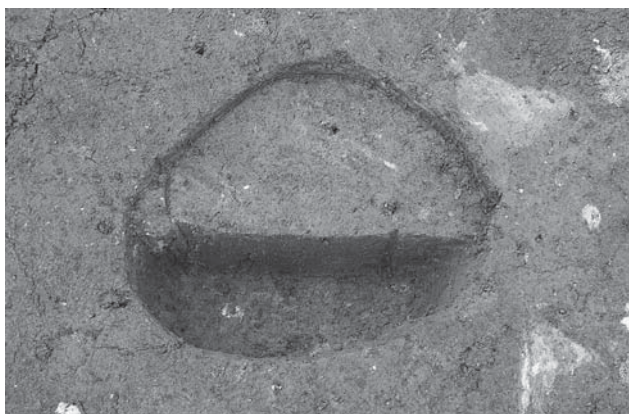
4 3252柱穴土層断面(北東から)



5 3253柱穴礫出土状況(東から)



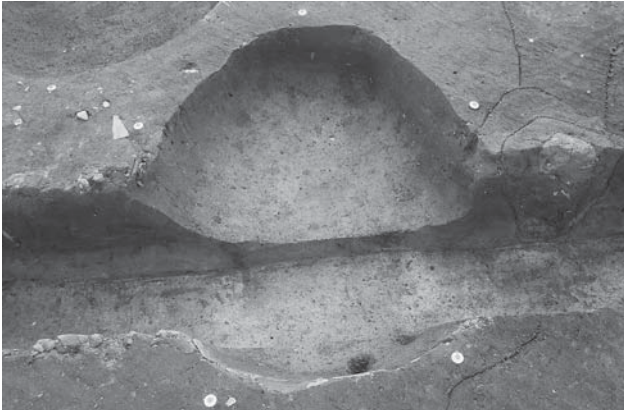
6 3241柱穴土層断面(東から)



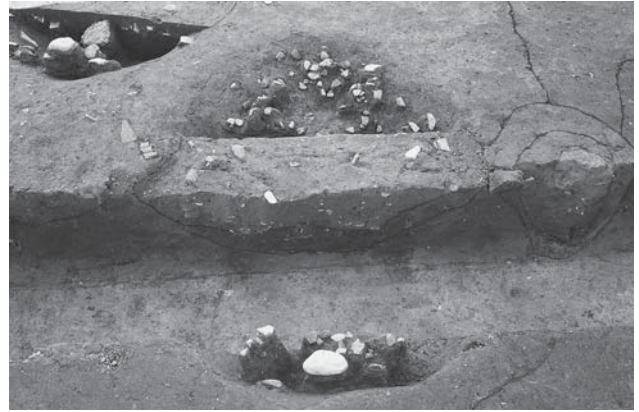
7 3246柱穴土層断面(東から)



8 3250柱穴土層断面(西から)



1 3056土坑完掘状況(北から)



2 3056土坑土層断面(北から)



3 3056土坑1層遺物(Po424他)  
出土状況(北から)



4 3056土坑2層遺物(Po419他)  
出土状況(北東から)



5 3057土坑完掘状況(北から)



6 3057土坑土層断面(南西から)



7 3057土坑遺物(Po437他)出土状況(東から)





1 3259土坑完掘状況(南東から)



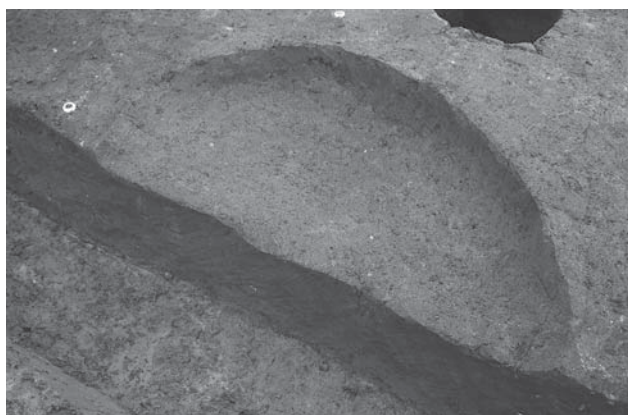
2 3259土坑土層断面(北東から)



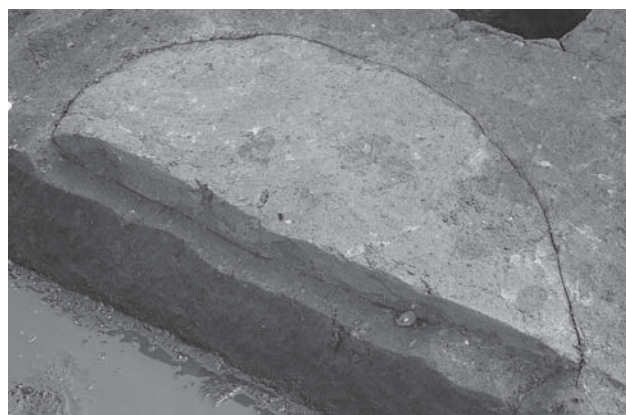
3 3259土坑遺物出土状況(北西から)



4 3259土坑遺物(Po439他)出土状況(北西から)



5 3268土坑完掘状況(北西から)



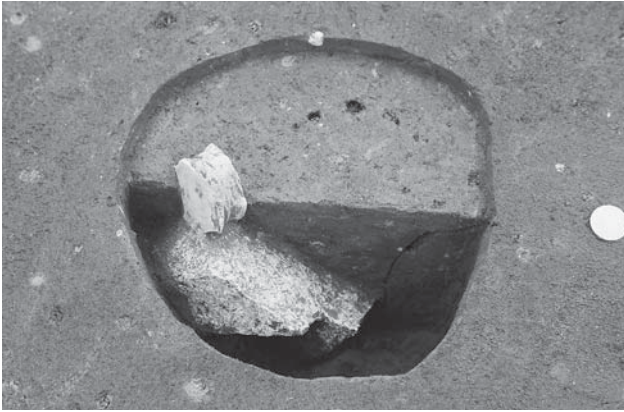
6 3268土坑土層断面(北西から)



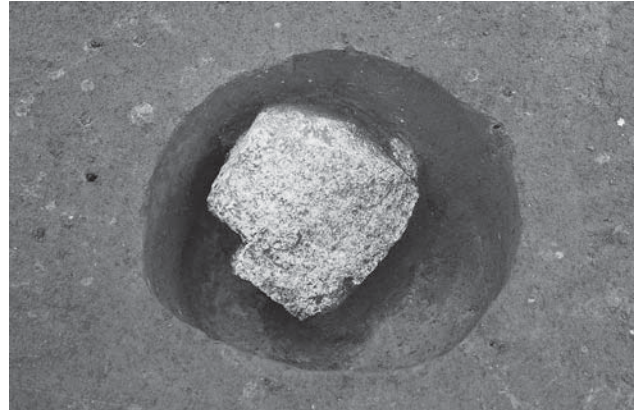
7 3270土坑完掘状況(北東から)



8 3270土坑土層断面(北東から)



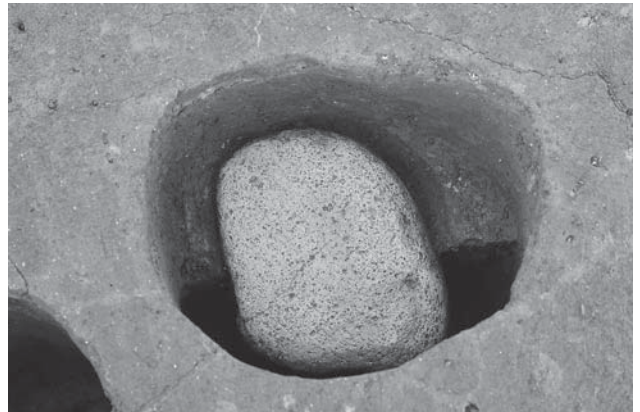
1 3201柱穴遺物(Po444)出土状況(南から)



2 3201柱穴礫出土状況(東から)



3 3206柱穴礫出土状況(北から)



4 3208柱穴礫出土状況(南から)



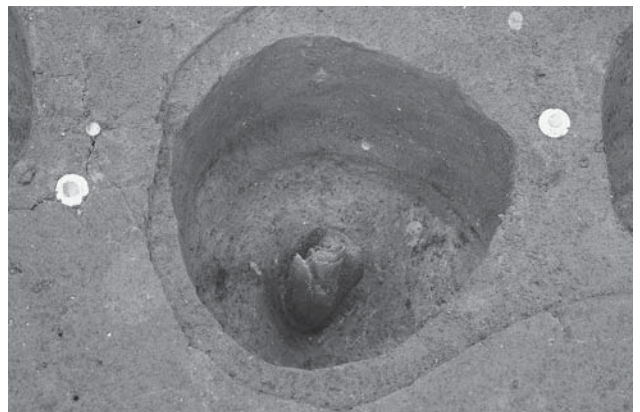
5 3214柱穴遺物(Po455他)出土状況(北から)



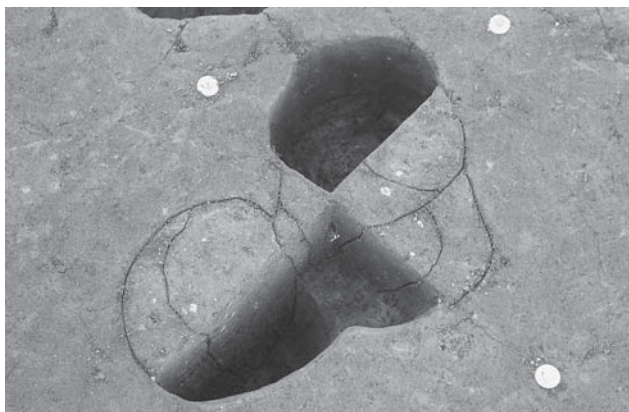
6 3254柱穴礫出土状況(南から)



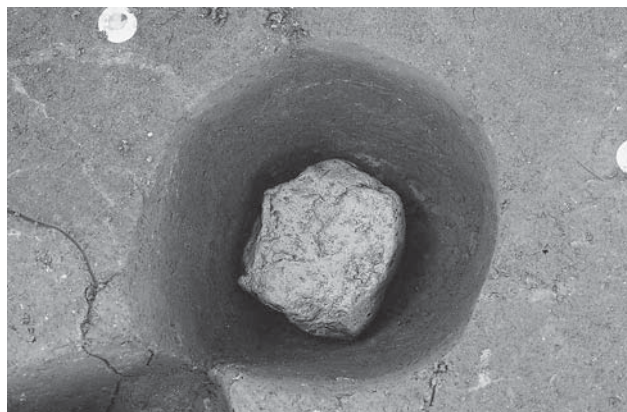
7 3228柱穴土層断面(東から)



8 3228柱穴柱根(分析試料19)出土状況(東から)



1 3256・3258柱穴土層断面(南東から)



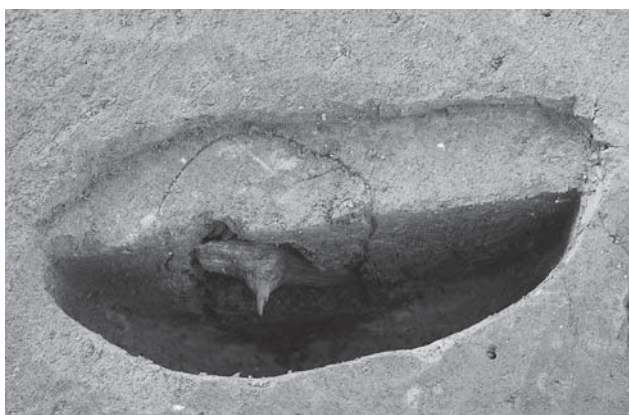
2 3257柱穴礫出土状況(東から)



3 3260柱穴礫出土状況(西から)



4 3261柱穴遺物(Po451他)出土状況(南東から)



5 3297柱穴土層断面(東から)



6 3297柱穴柱根出土状況(東から)



7 3298・3299柱穴土層断面(北東から)



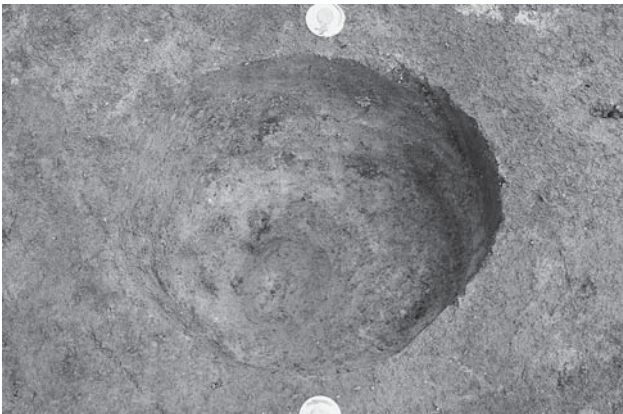
8 3317柱穴遺物(Po441)出土状況(西から)



1 3314柱穴土層断面(南から)



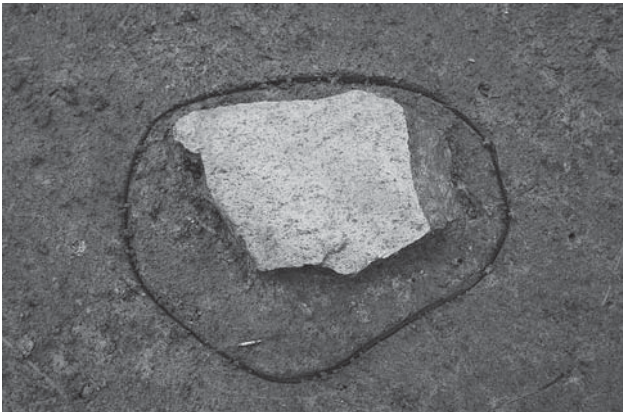
2 3314柱穴遺物(Po452他)出土状況(南から)



3 3314柱穴完掘状況(南から)



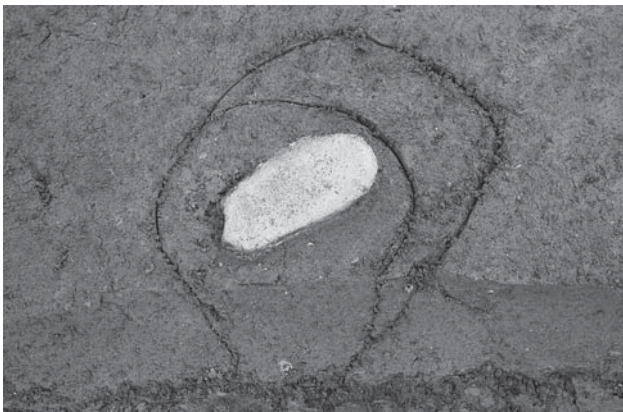
4 3329柱穴礫出土状況(北西から)



5 3327柱穴礫出土状況(南東から)



6 3327柱穴土層断面(南東から)



7 3335柱穴礫出土状況(南から)



8 3336柱穴礫出土状況(北西から)



1 250溝(平成28年度調査)完掘状況(南西から)



2 250溝a・b(北端)完掘状況(西から)



3 250溝a土層断面(西から)



4 250溝a(北側)完掘状況(南西から)



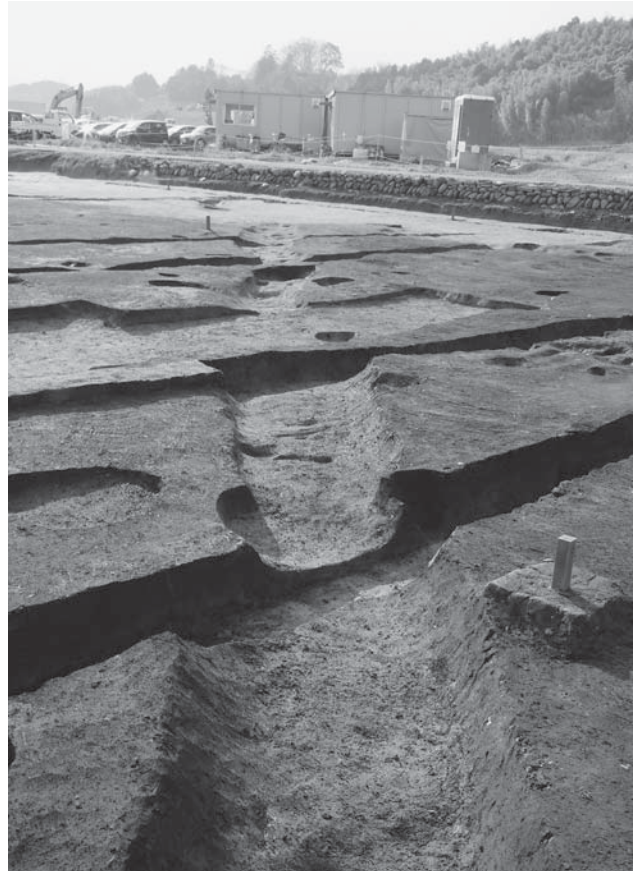
5 250溝a・b土層断面(西から)



6 250溝a・b土層断面(北東から)



1 250溝a・b(北側)完掘状況(南西から)



2 250溝a・b(南側)完掘状況(北東から)



3 250溝b遺物(Po482他)出土状況(北東から)



4 250溝b遺物(Po483他)出土状況(北東から)



5 250溝b遺物(S 3)出土状況(東から)



6 250溝b遺物(S 5他)出土状況(南東から)



1 3186土坑遺物(Po496他)出土状況(北西から)



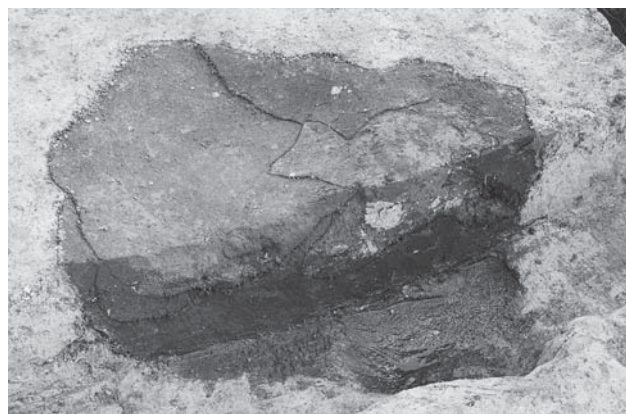
2 3186土坑土層断面(北西から)



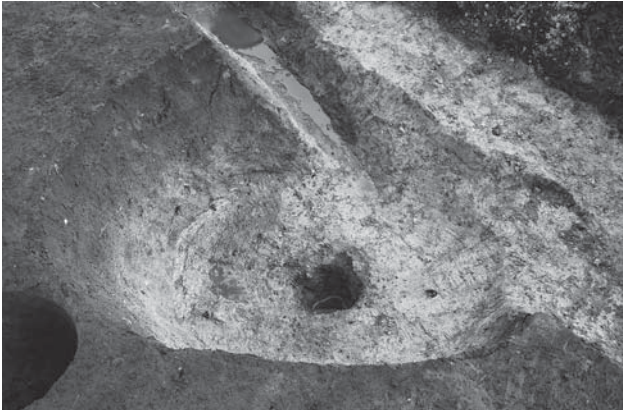
3 3184土坑土層断面(北西から)



4 3184土坑完掘状況(北西から)



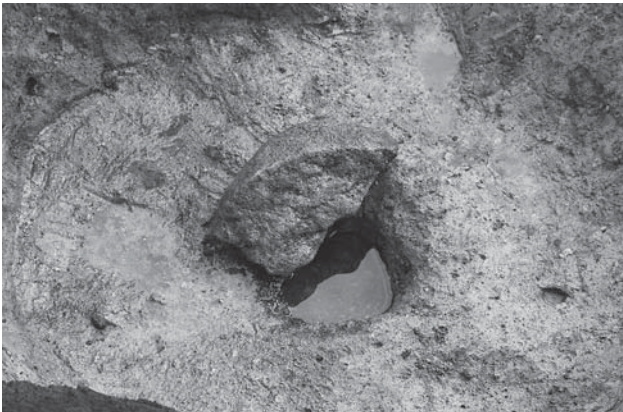
5 3184・3186土坑検出状況(北西から)



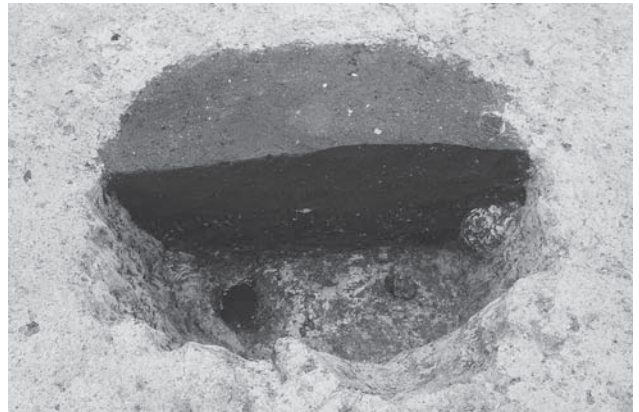
1 8土坑完掘状況(北西から)



2 8土坑土層断面(南東から)



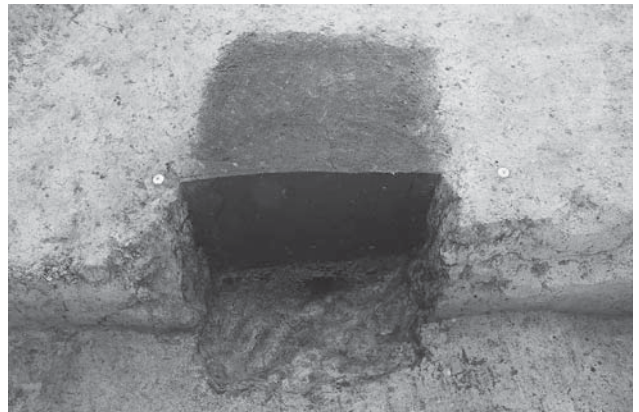
3 8土坑底面ピット礫出土状況(南西から)



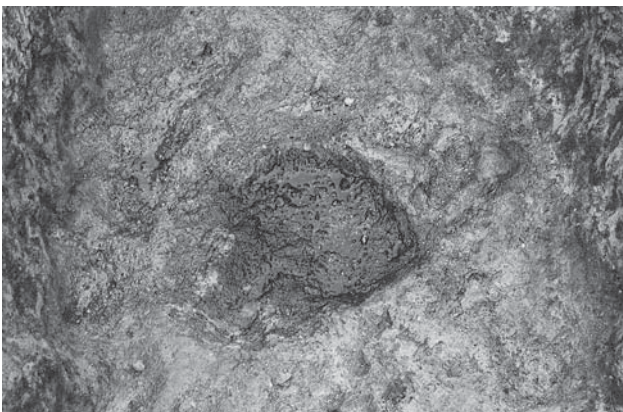
4 3146土坑土層断面(北西から)



5 3183土坑完掘状況(北から)



6 3183土坑土層断面(北から)

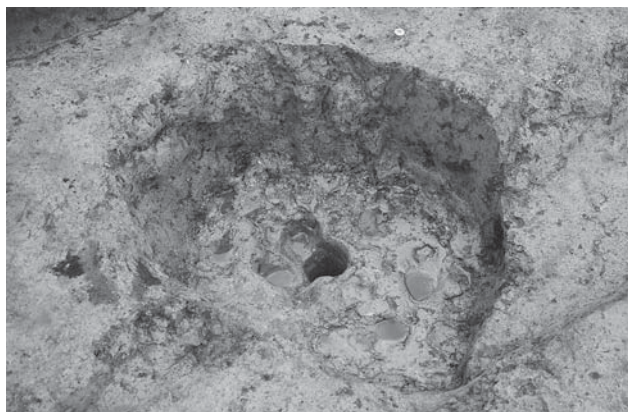


7 3183土坑底面ピット検出状況(北から)

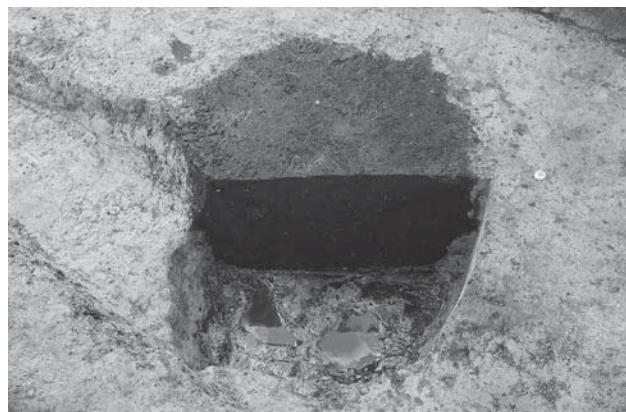


8 3183土坑底面ピット土層断面(北から)

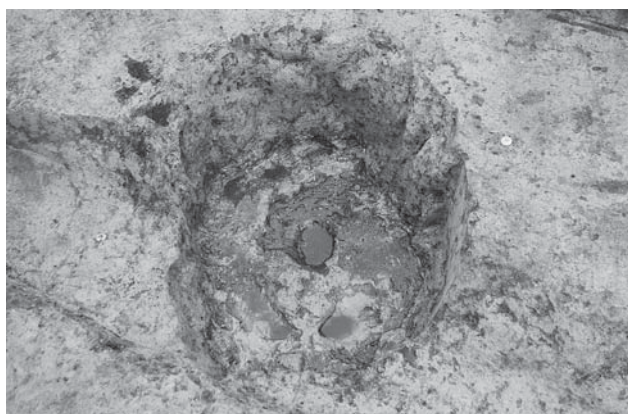




1 3185土坑完掘状況(南東から)



2 3185土坑土層断面(北東から)



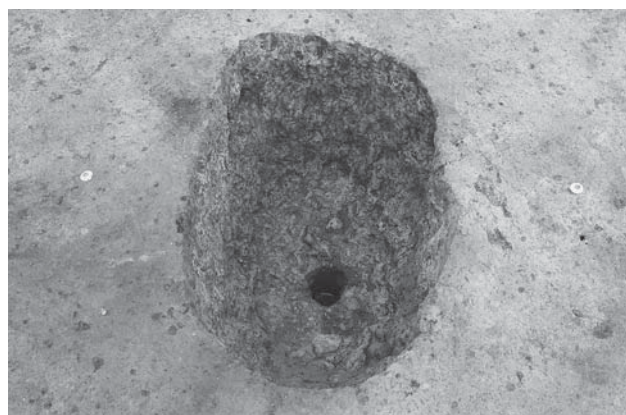
3 3185土坑底面検出状況(北東から)



4 3185土坑底面ピット(3層)土層断面(北東から)



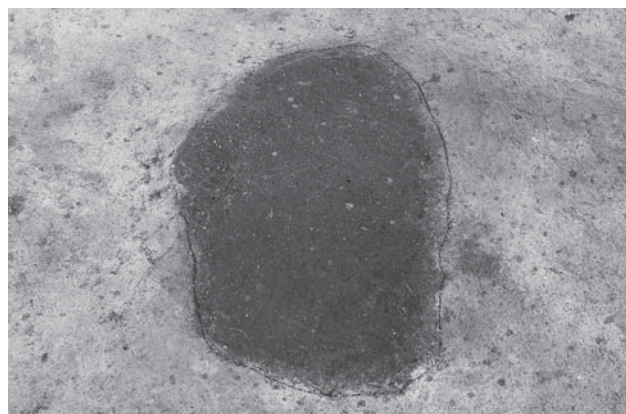
5 3185土坑底面ピット(詰め土)土層断面(南東から)



6 3187土坑完掘状況(北東から)



7 3187土坑土層断面(北東から)



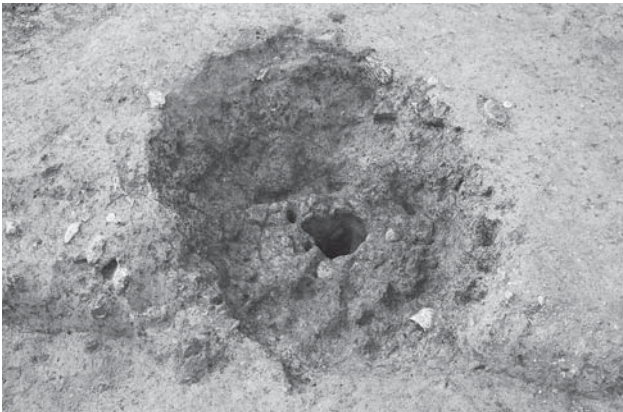
8 3187土坑検出状況(南西から)



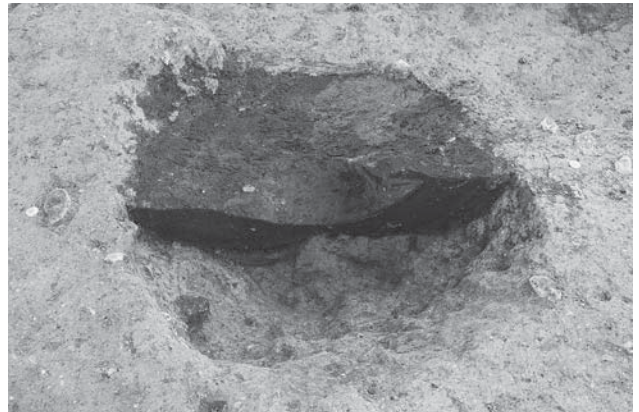
1 3190土坑底面検出状況(北から)



2 3190土坑底面ピット礫出土状況(北から)



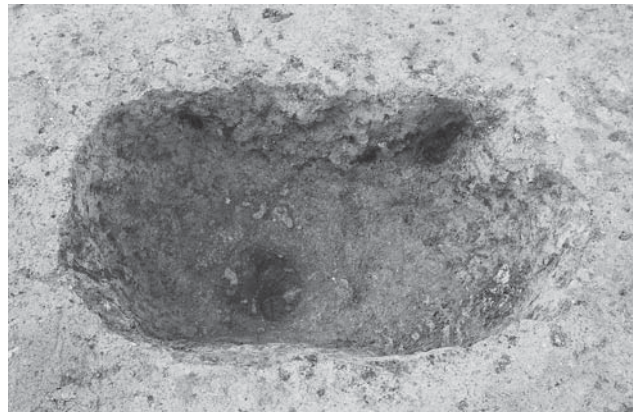
3 3216土坑完掘状況(東から)



4 3216土坑土層断面(南西から)



5 3216土坑底面ピット礫出土状況(東から)



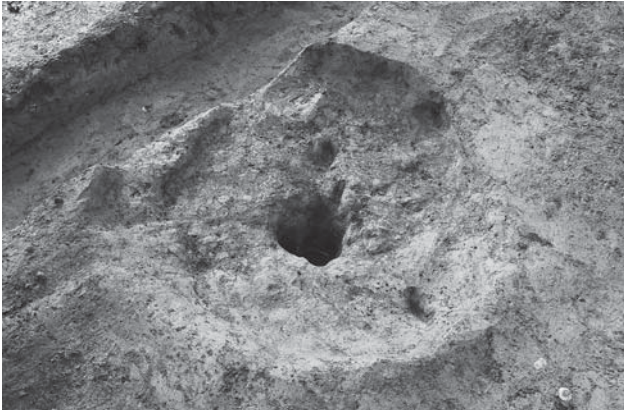
6 3222土坑完掘状況(南東から)



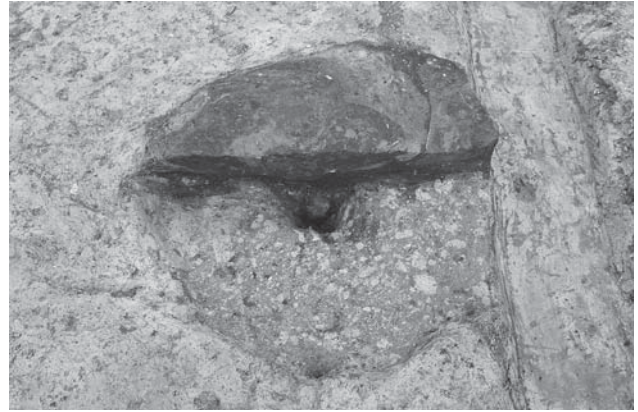
7 3222土坑土層断面(南東から)



8 3222土坑底面ピット検出状況(南東から)



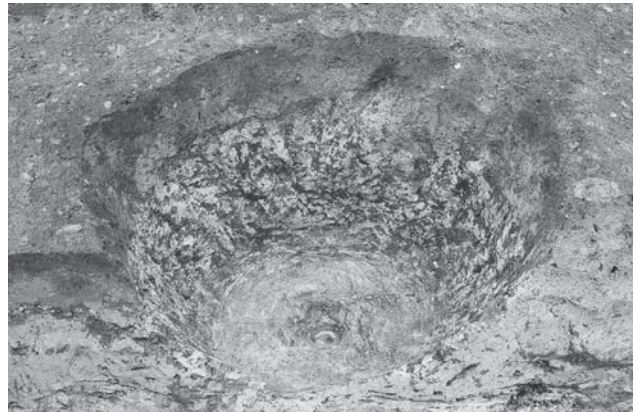
1 3330土坑完掘状況(北から)



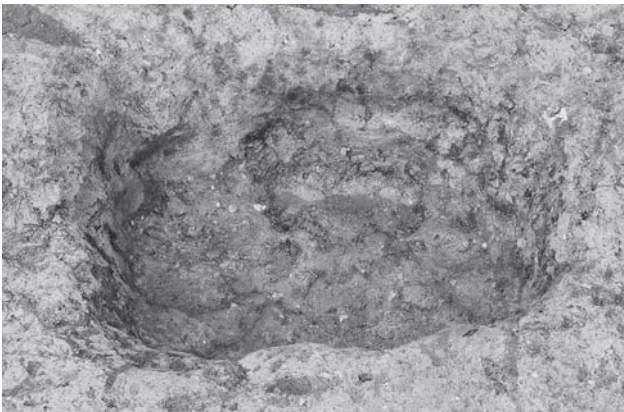
2 3330土坑土層断面(西から)



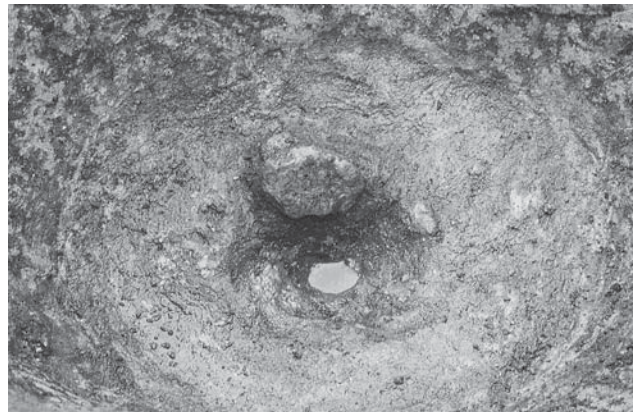
3 3330土坑底面ピット土層断面(西から)



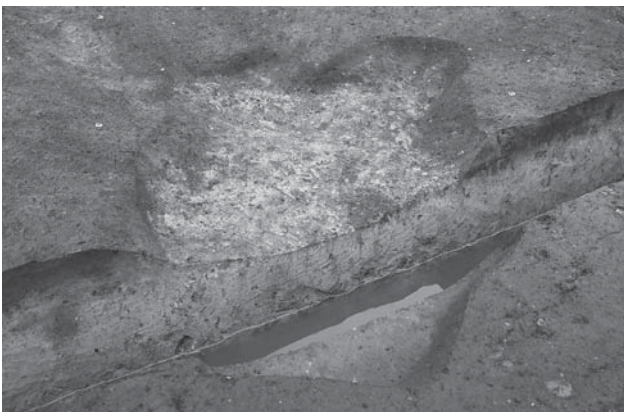
4 3337土坑完掘状況(西から)



5 3234土坑完掘状況(南東から)



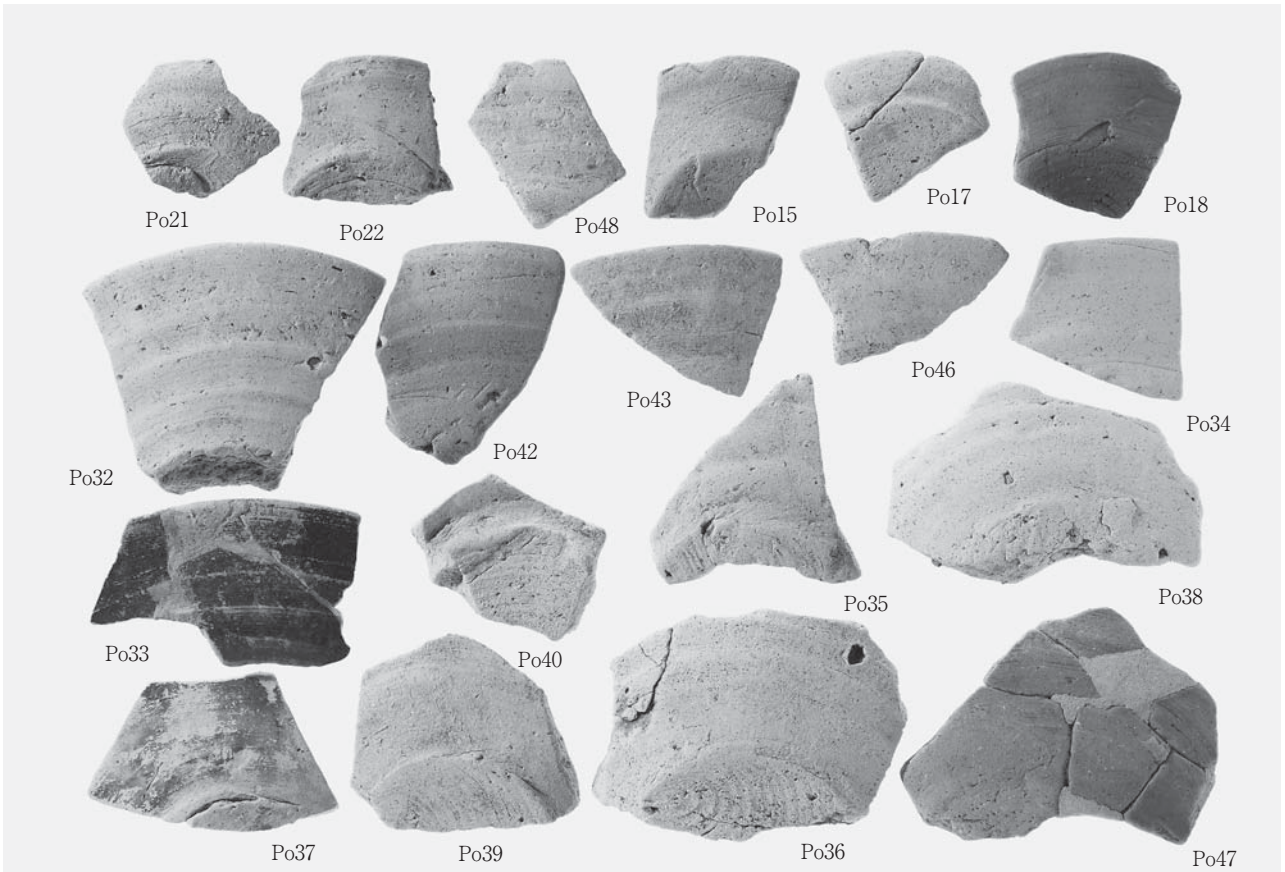
6 3337土坑底面ピット礫出土状況(東から)



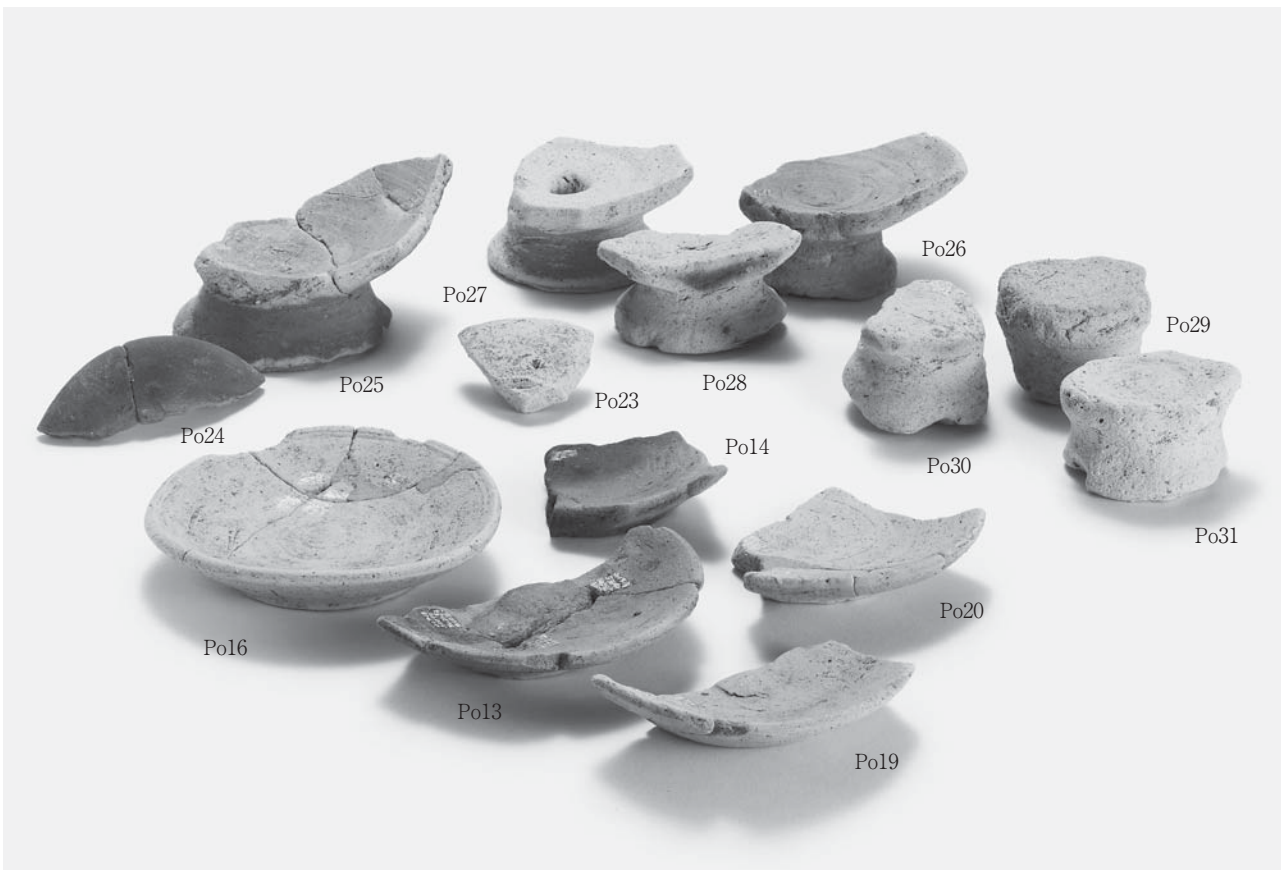
7 3223土坑完掘状況(北東から)



8 3223土坑土層断面(北東から)



1 掘立柱建物12出土土師器(1)



2 掘立柱建物12出土土師器(2)



1 掘立柱建物12出土土師器(3)



2 掘立柱建物12出土椀形鍛冶滓



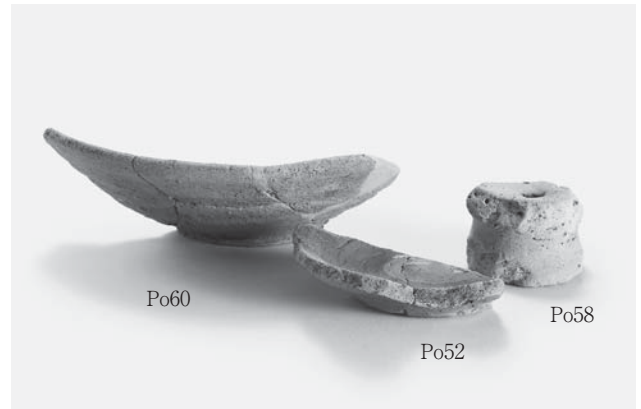
3 Ⅲ-1層(平成30年度調査)、678・679ピット(平成28年度調査)出土須恵器甕



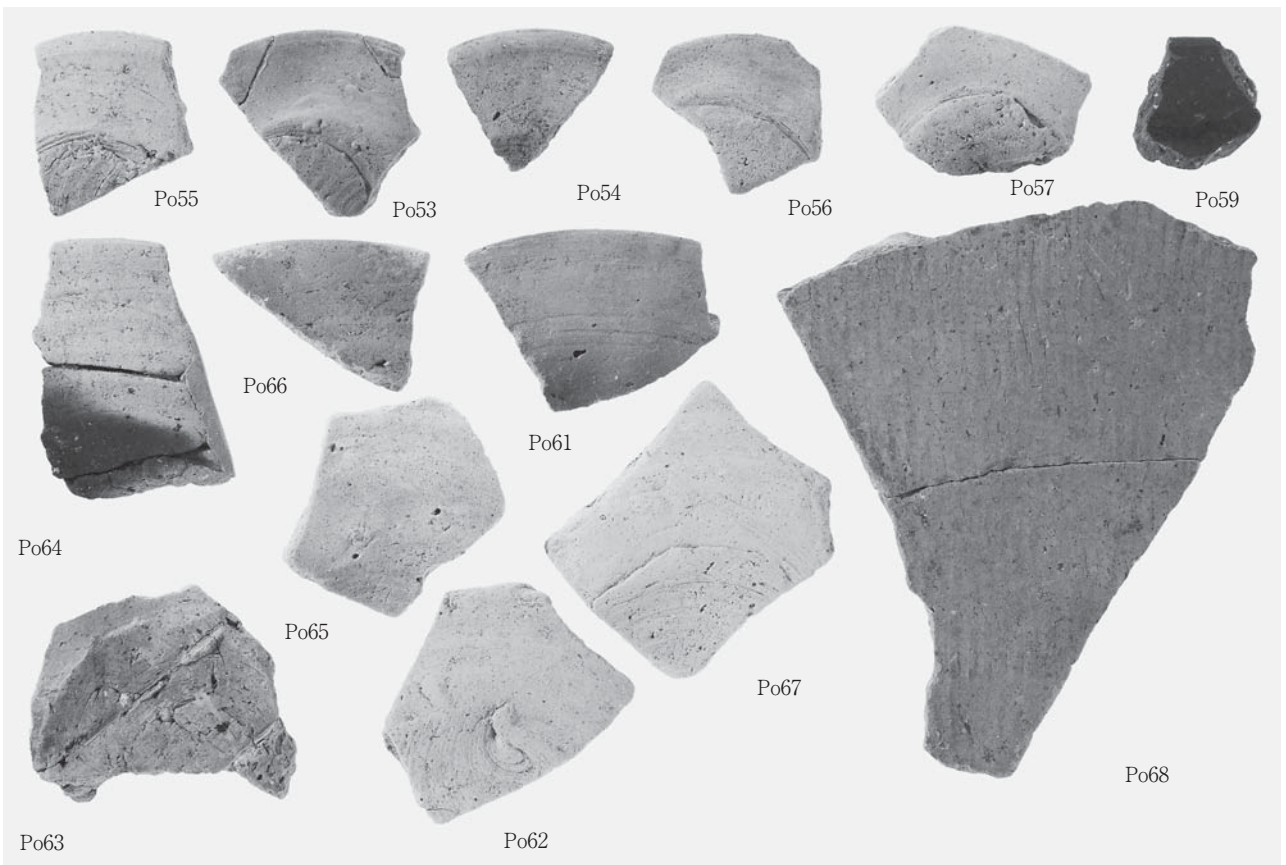
1 掘立柱建物12、3314柱穴出土須恵器壺



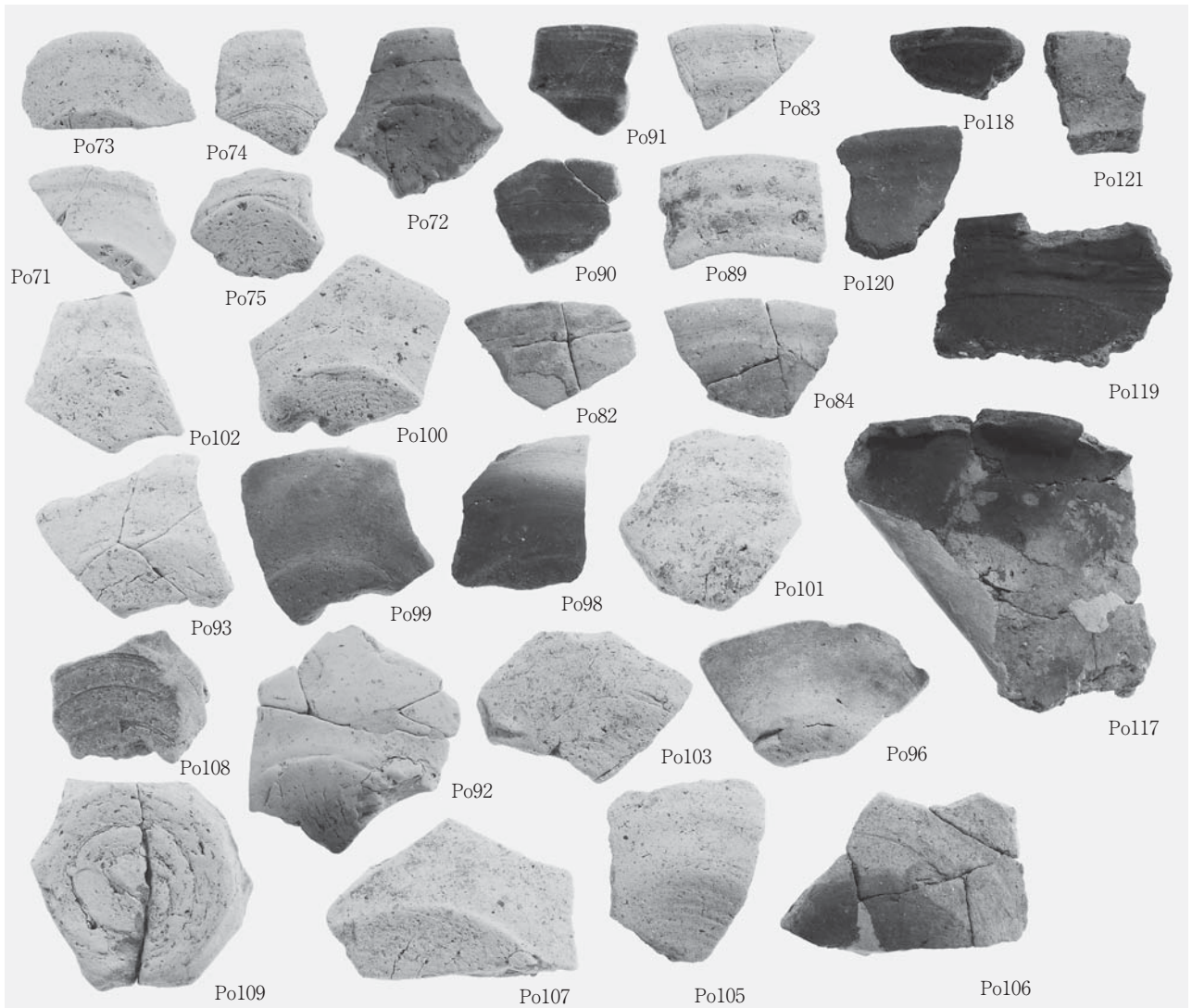
2 掘立柱建物20出土青磁蓋



3 掘立柱建物20出土土師器



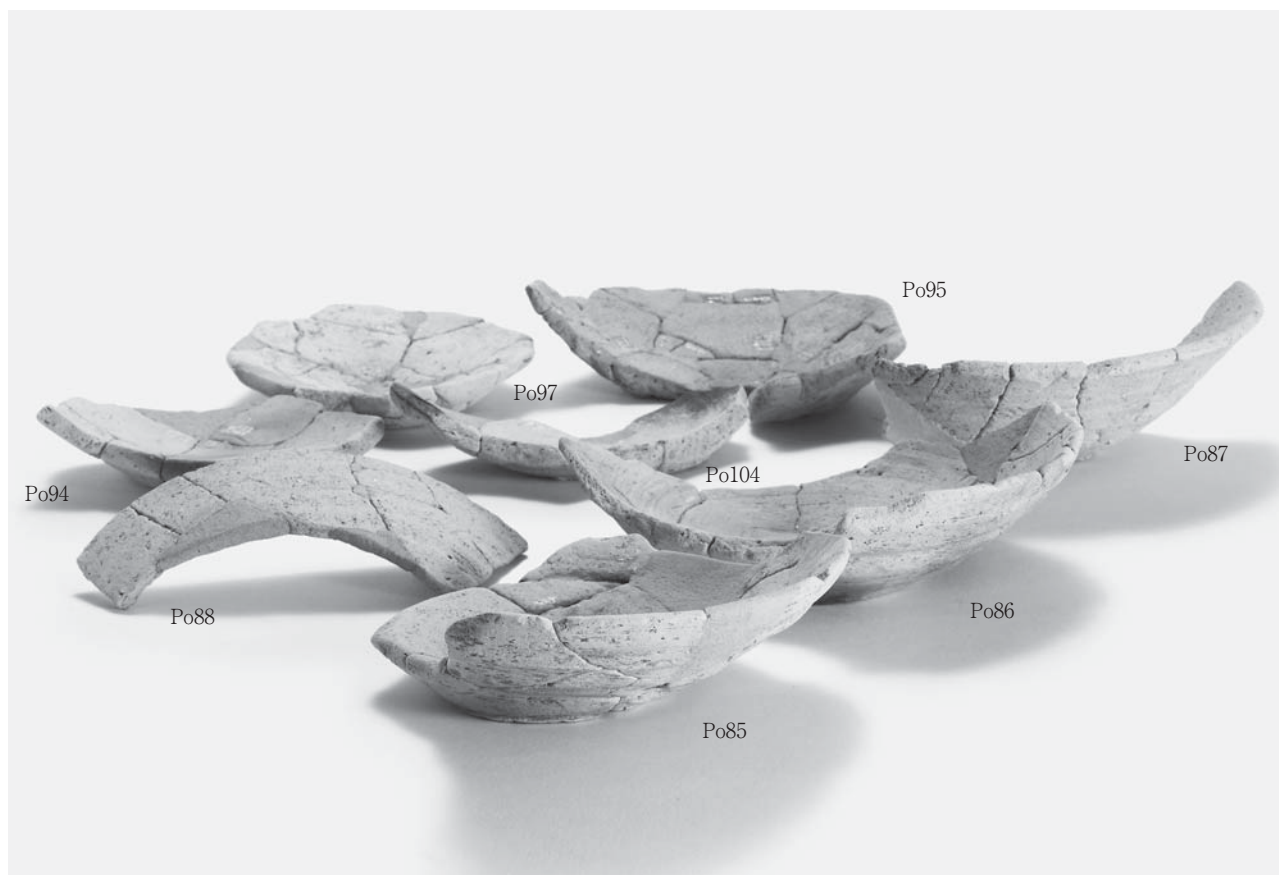
4 掘立柱建物20出土土師器・須恵器



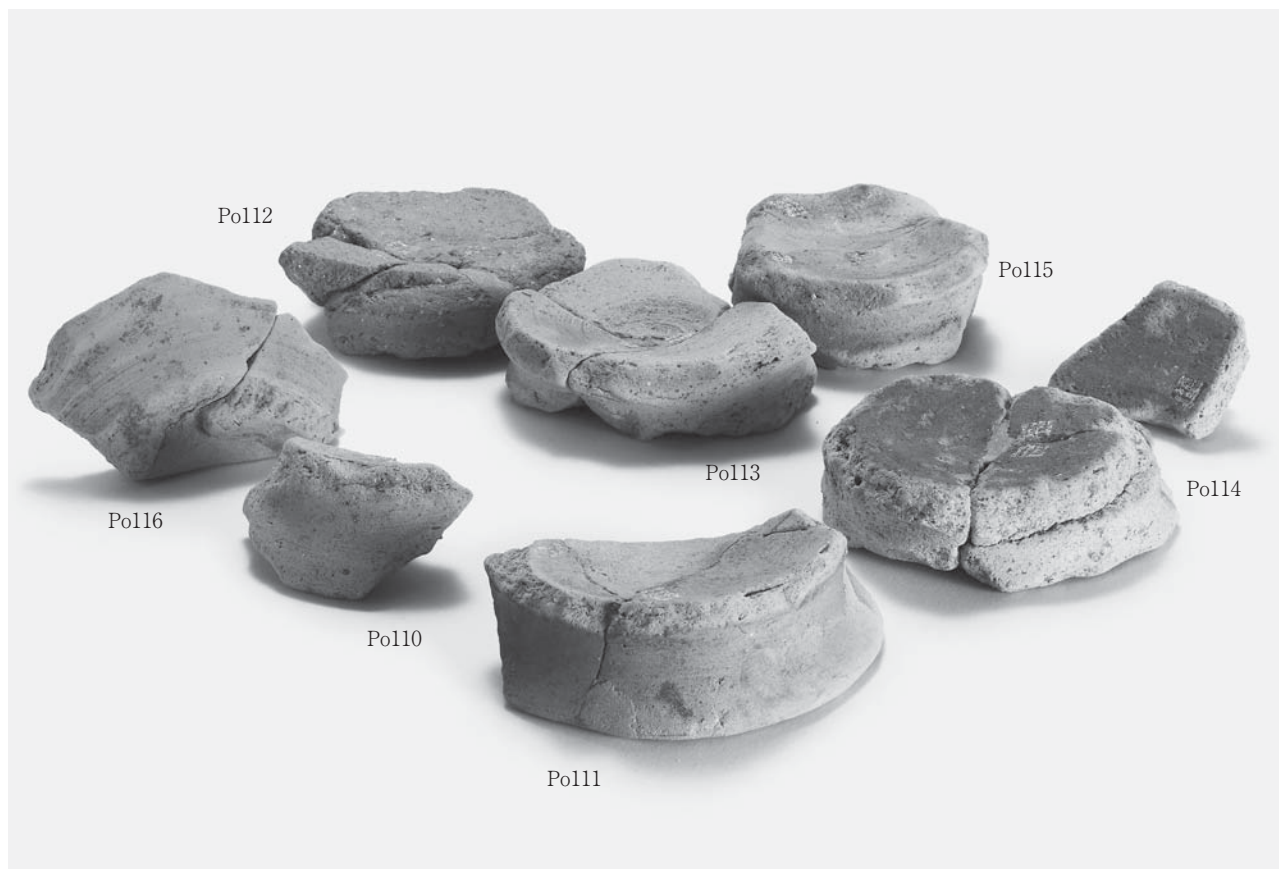
1 666溝出土土師器(1)



2 666溝出土土師器(2)

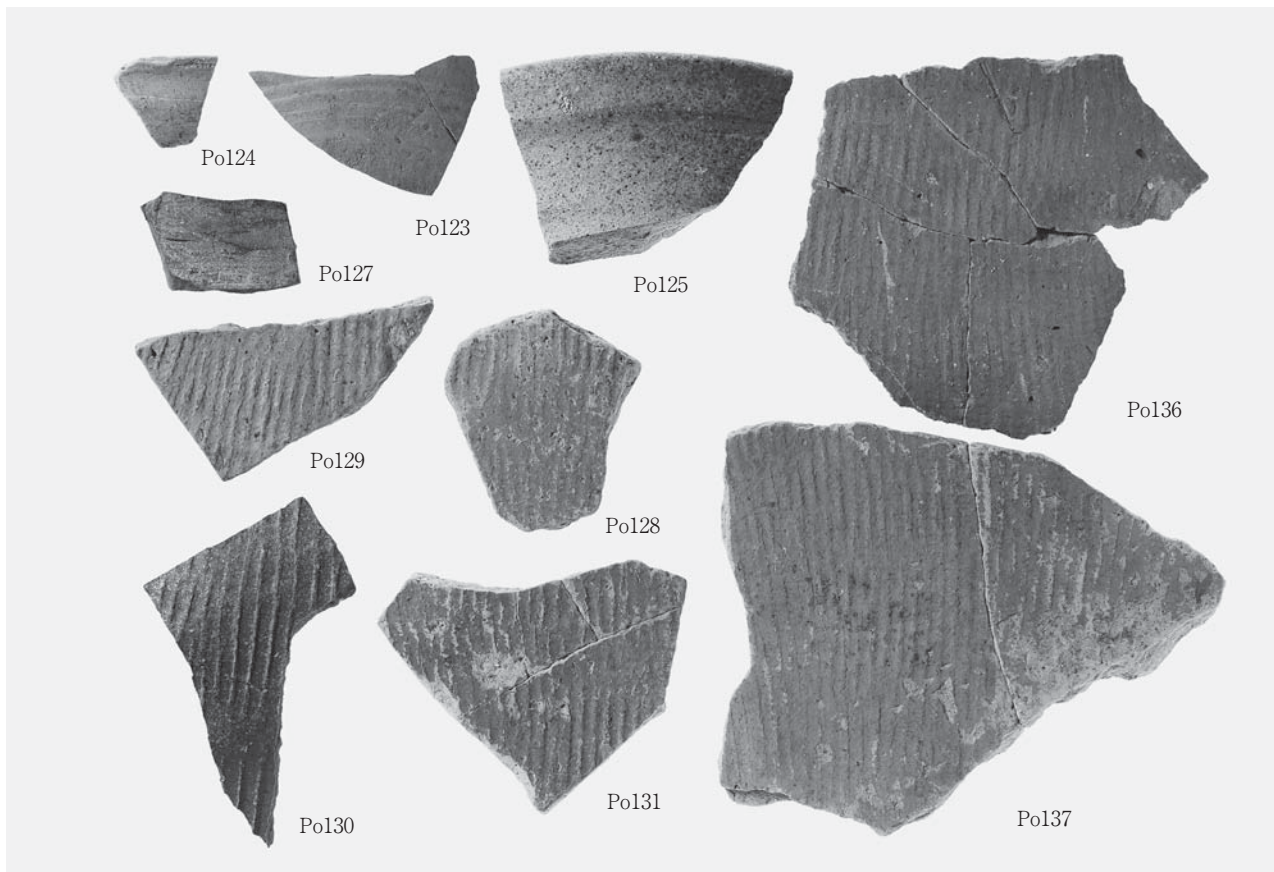


1 666溝出土土師器坏



2 666溝出土土師器高台付坏

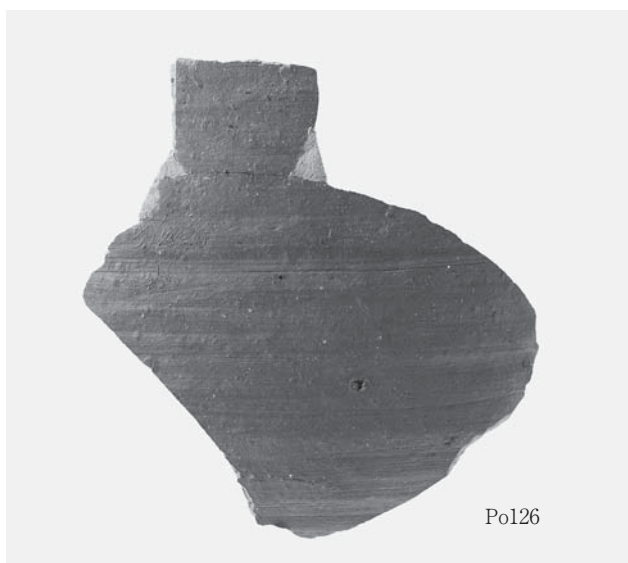




1 666溝出土須恵器



2 666溝出土白磁碗

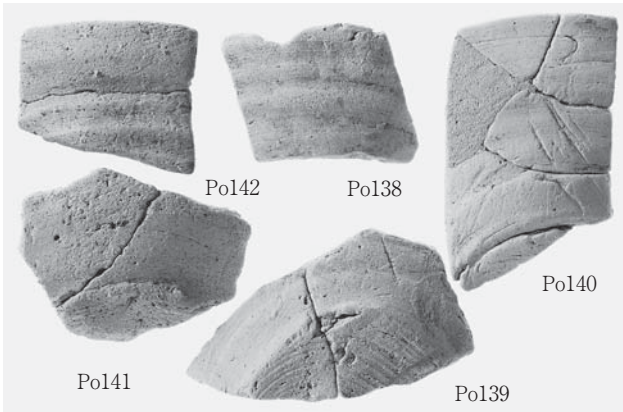


3 666溝出土須恵器壺

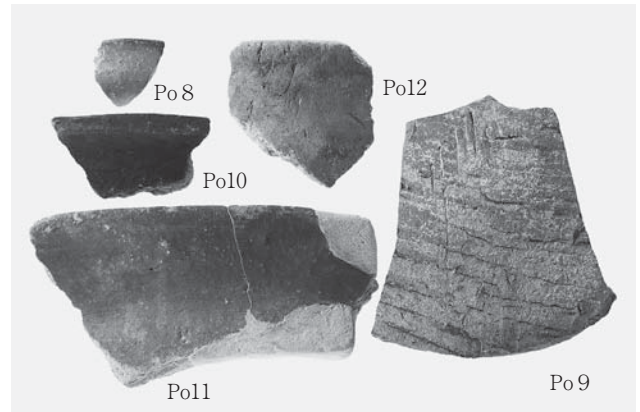


4 掘立柱建物17、666溝出土須恵器壺

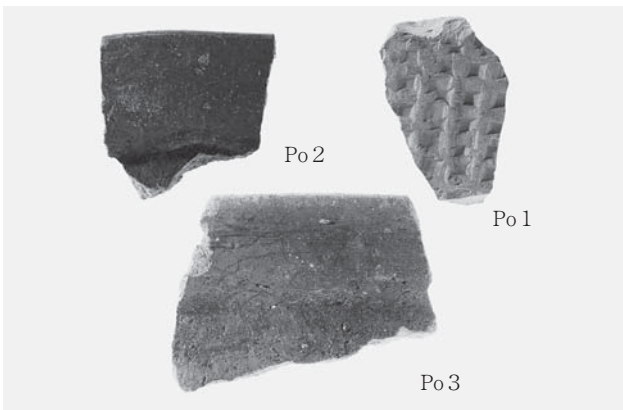
山ノ下遺跡  
掘立柱建物13他  
出土遺物



1 3015土坑出土土師器坏



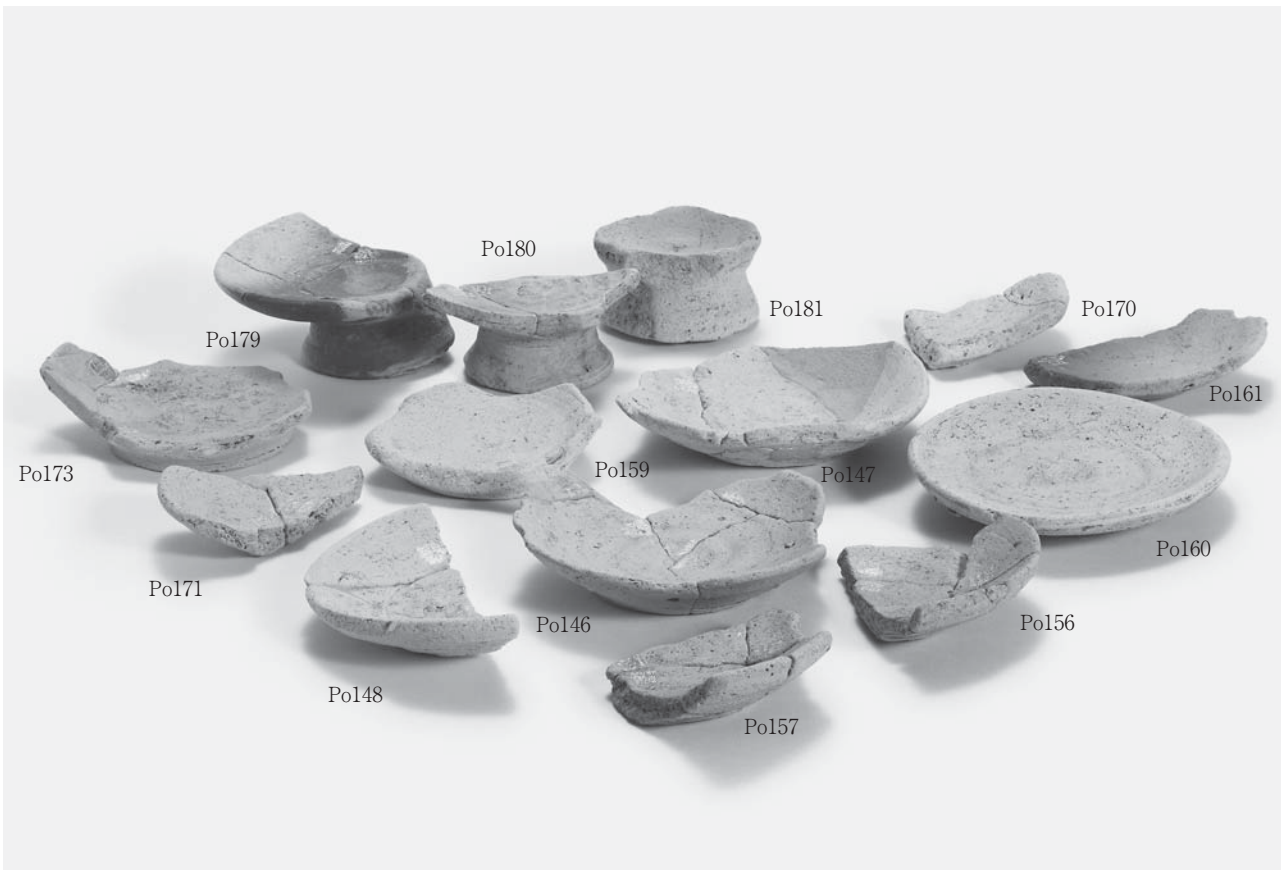
2 3035耕作溝群、747溝群出土土師器・須恵器



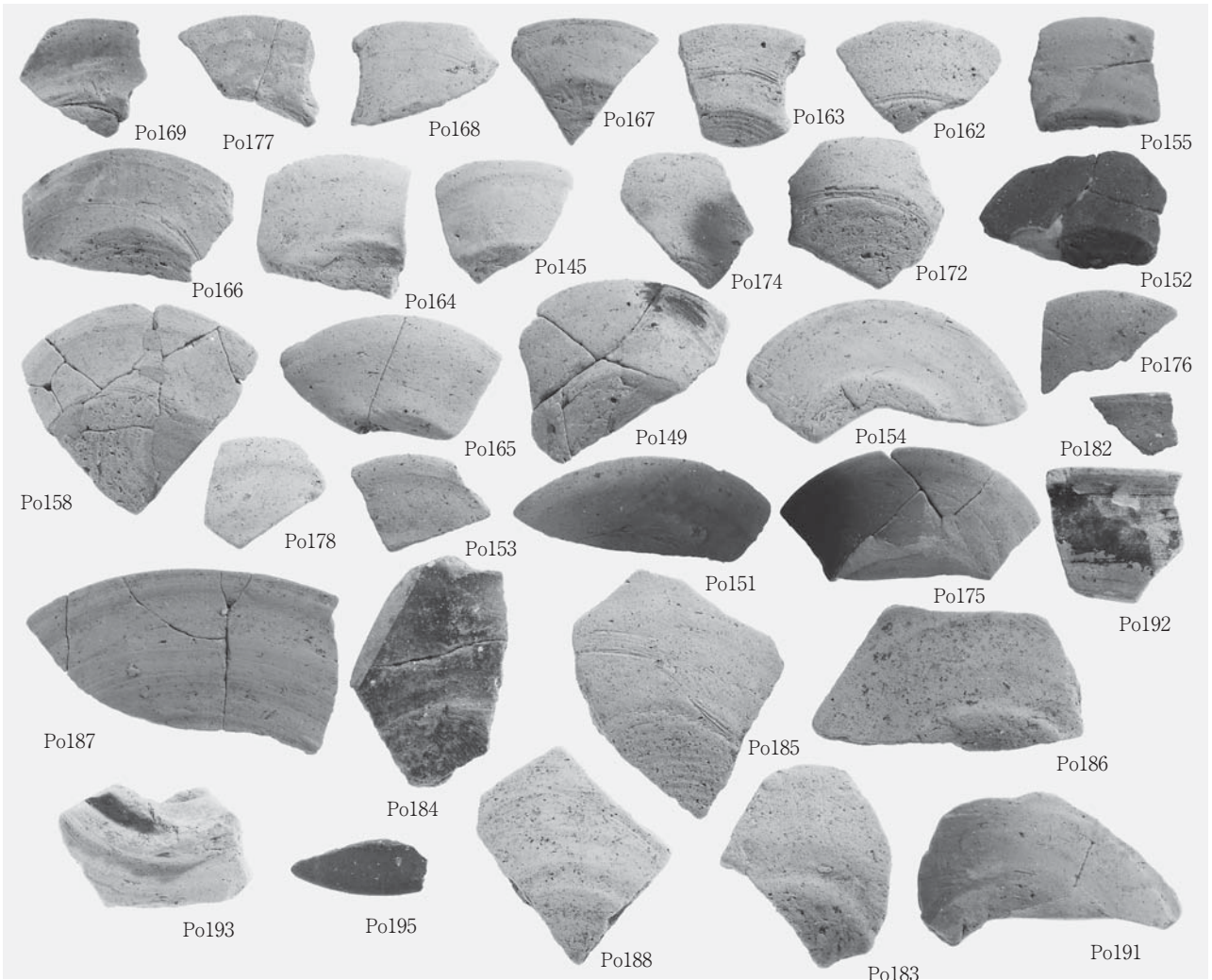
3 3022溝出土須恵器・瓦質土器



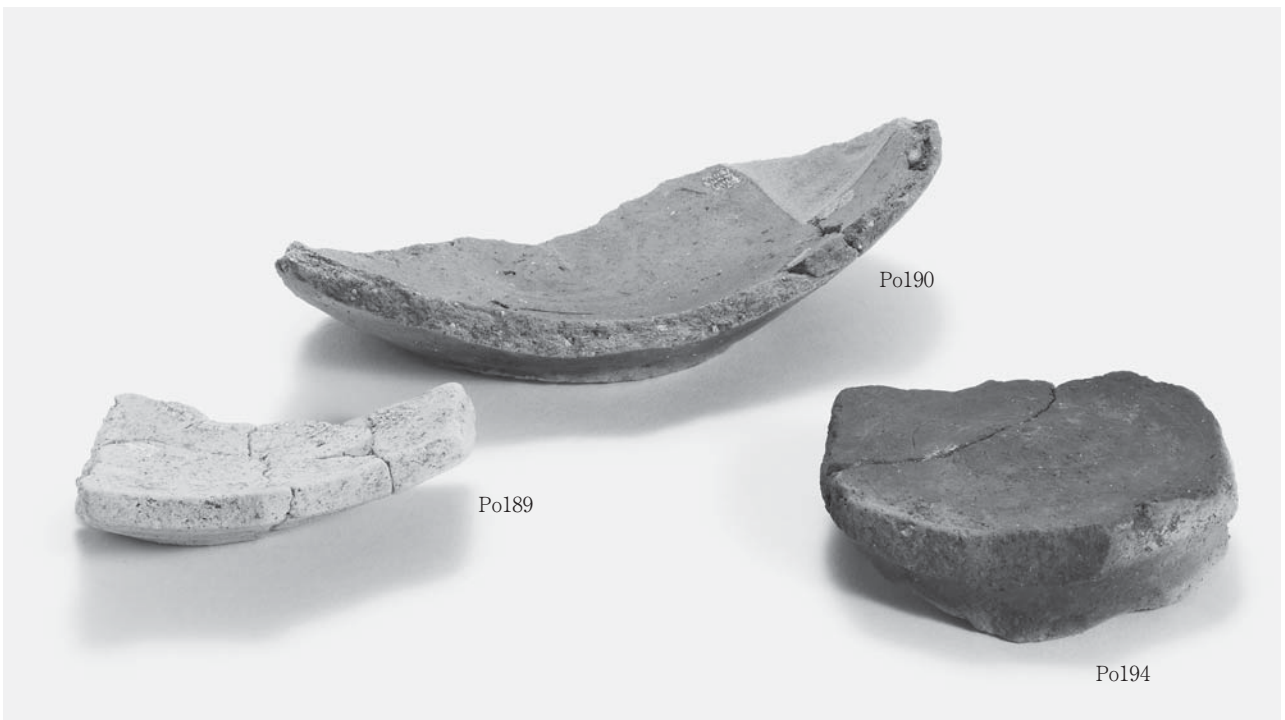
4 3005・3025柱穴出土土師器



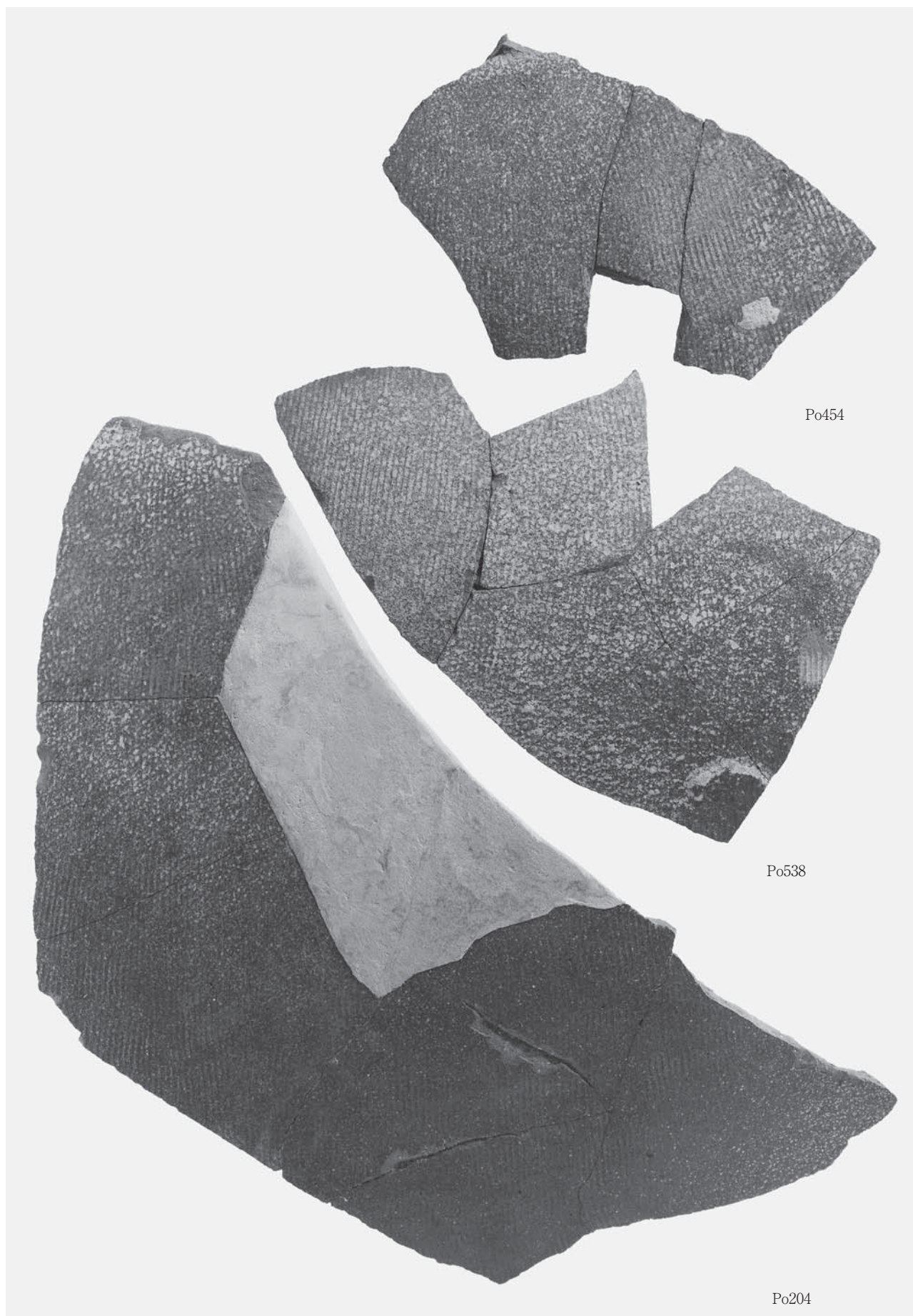
5 掘立柱建物13出土土師器(1)



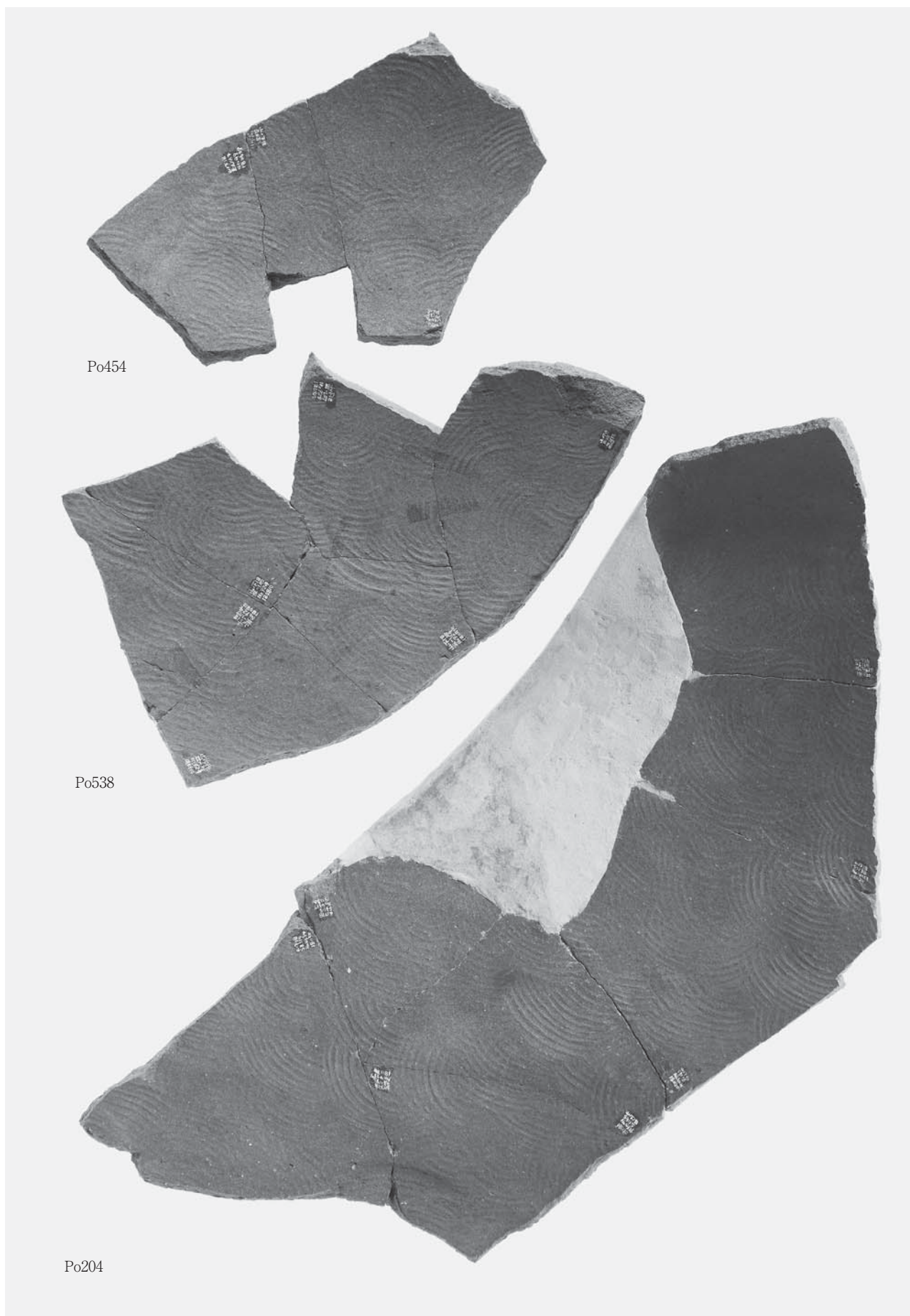
1 掘立柱建物13出土土師器(2)



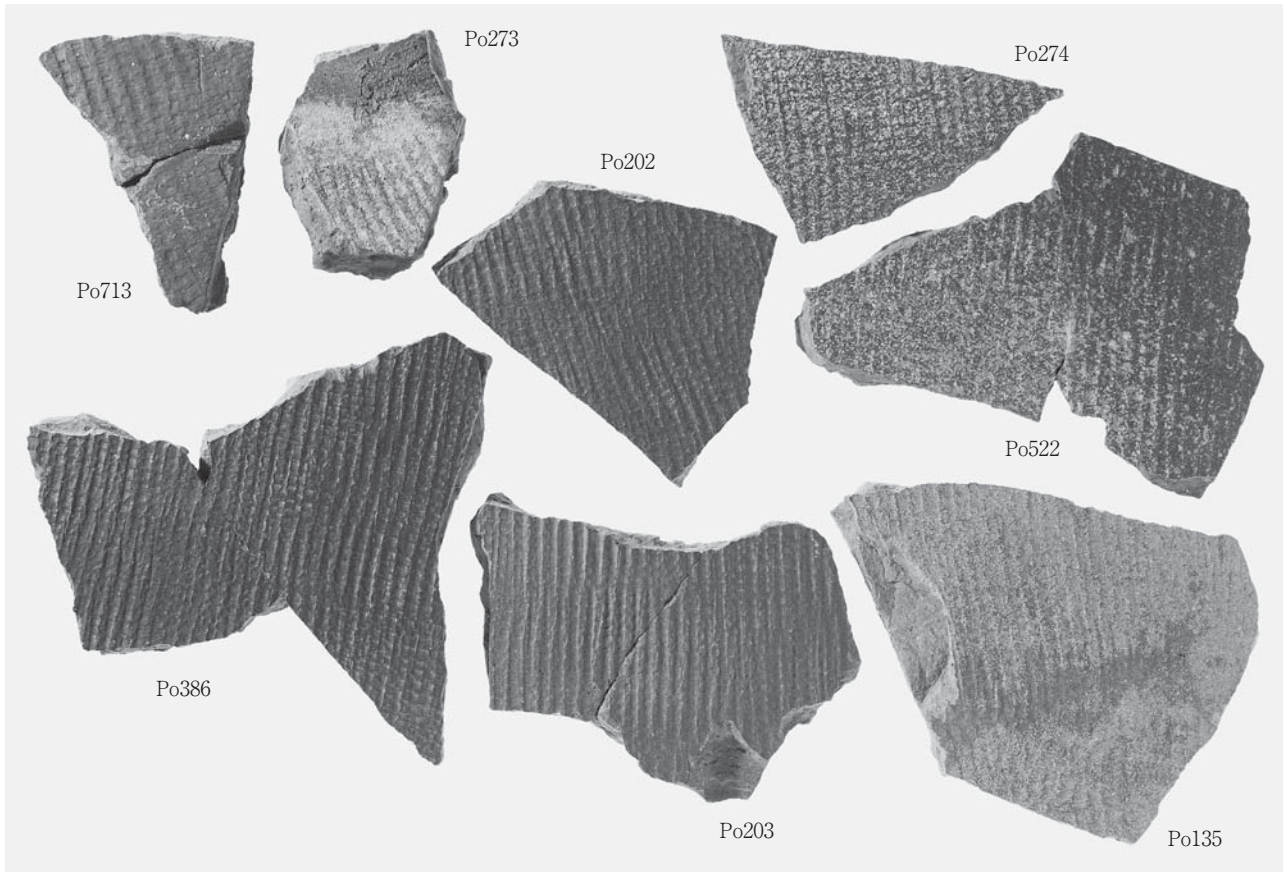
2 掘立柱建物13出土土師器(3)



掘立柱建物13、3261柱穴他出土須恵器甕(外面)



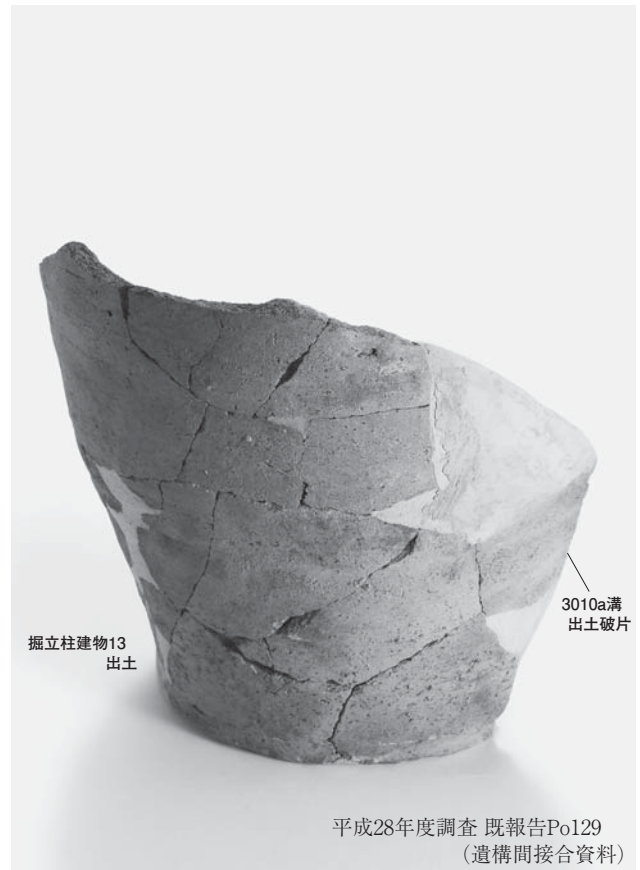
掘立柱建物13、3261柱穴他出土須恵器甕(内面)



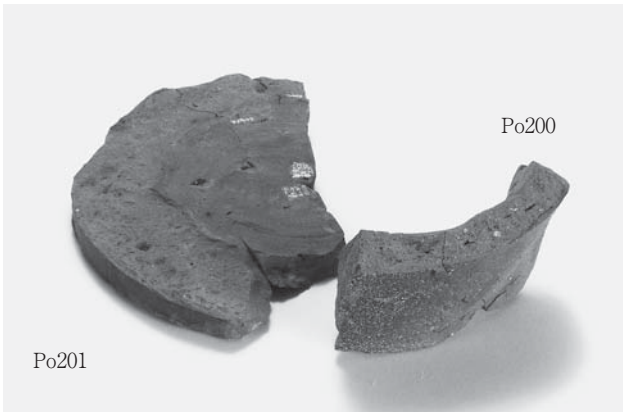
1 掘立柱建物13、3010b・666溝他出土須恵器甕



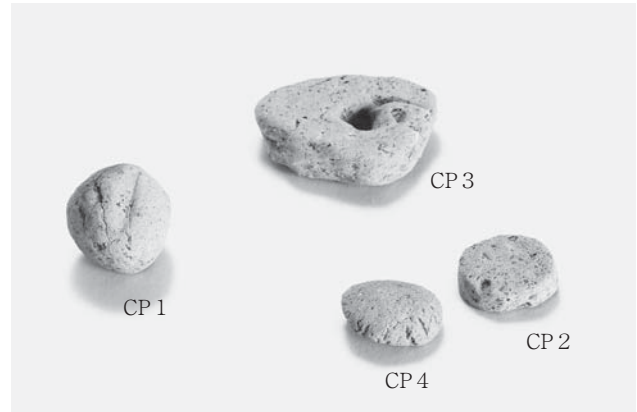
2 掘立柱建物13出土須恵器壺



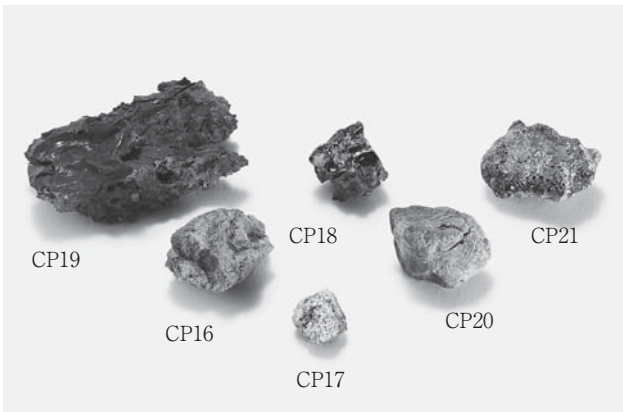
3 掘立柱建物13、3010a溝出土須恵器壺



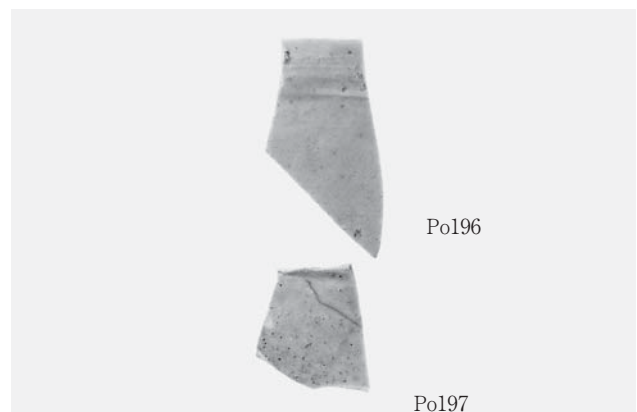
1 掘立柱建物13出土須恵器壺



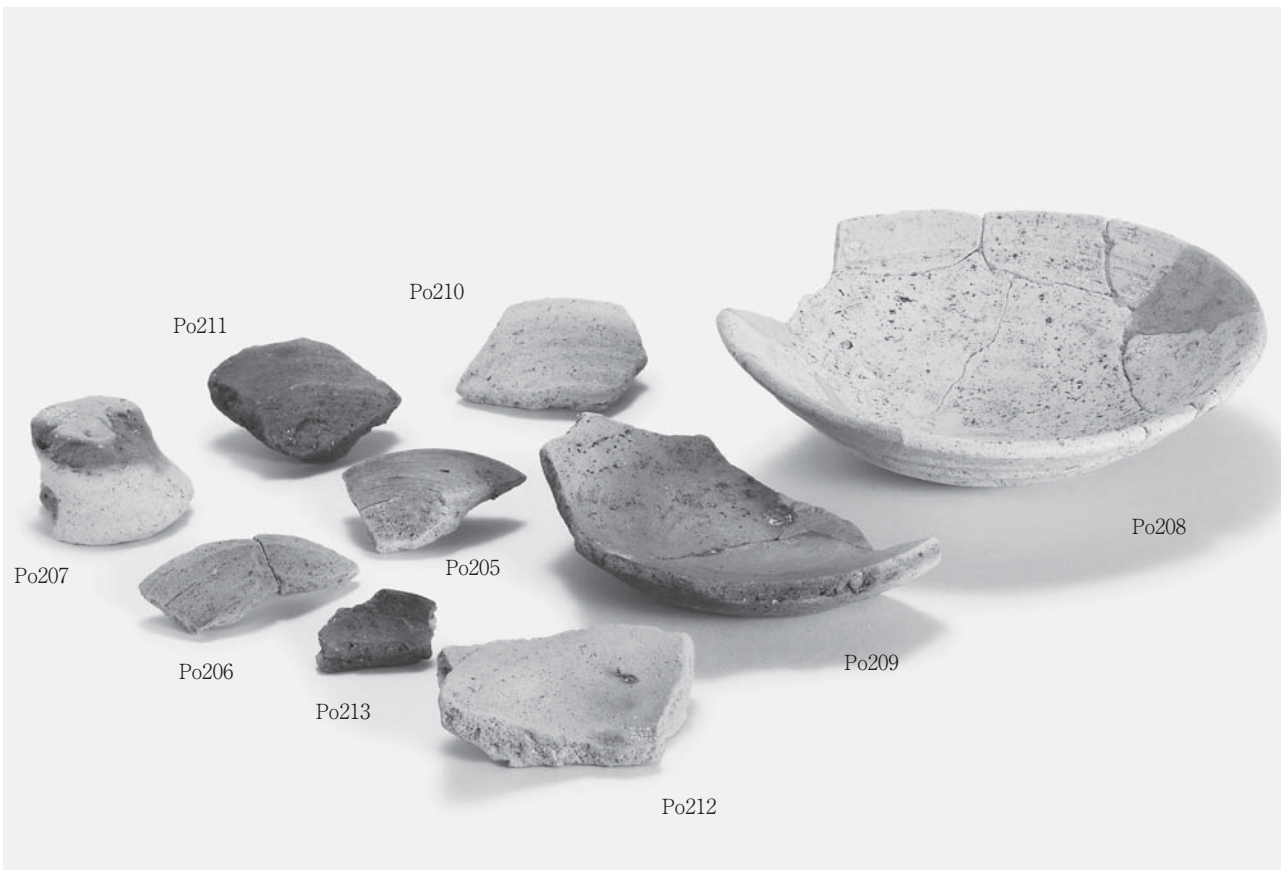
2 掘立柱建物13・3010a・b溝、3259土坑出土土製品



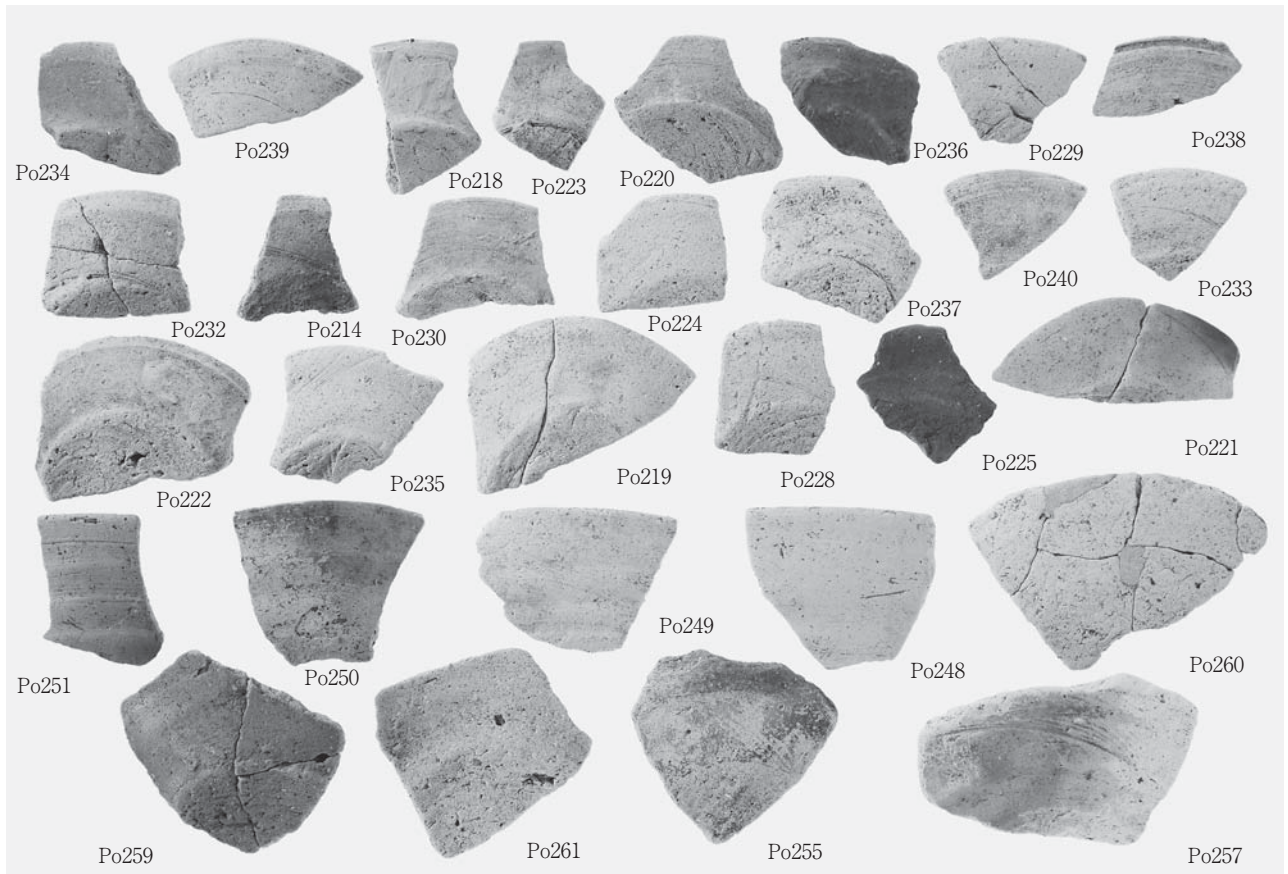
3 掘立柱建物13・19、3056土坑、3264・3306柱穴、Ⅲ-1層出土被熱粘土塊(非実測遺物)



4 掘立柱建物13出土白磁



5 掘立柱建物19出土土師器

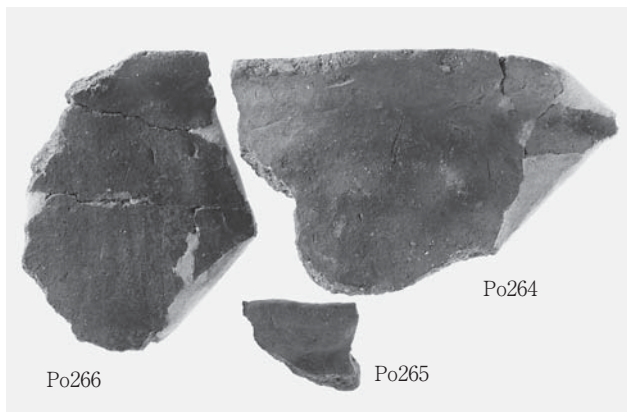


1 3010a溝出土土師器(1)

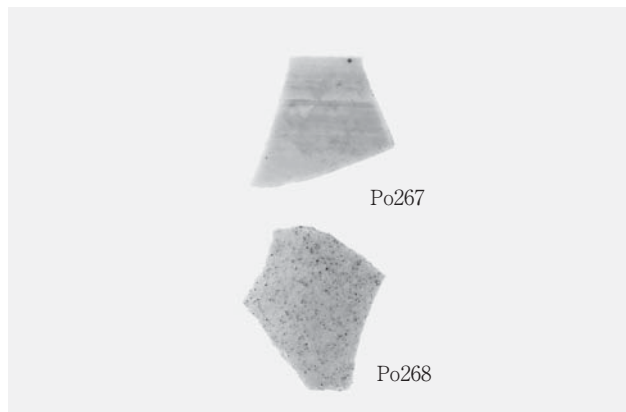


2 3010a溝出土土師器(2)





1 3010a溝出土土師器甕



2 3010a溝出土白磁



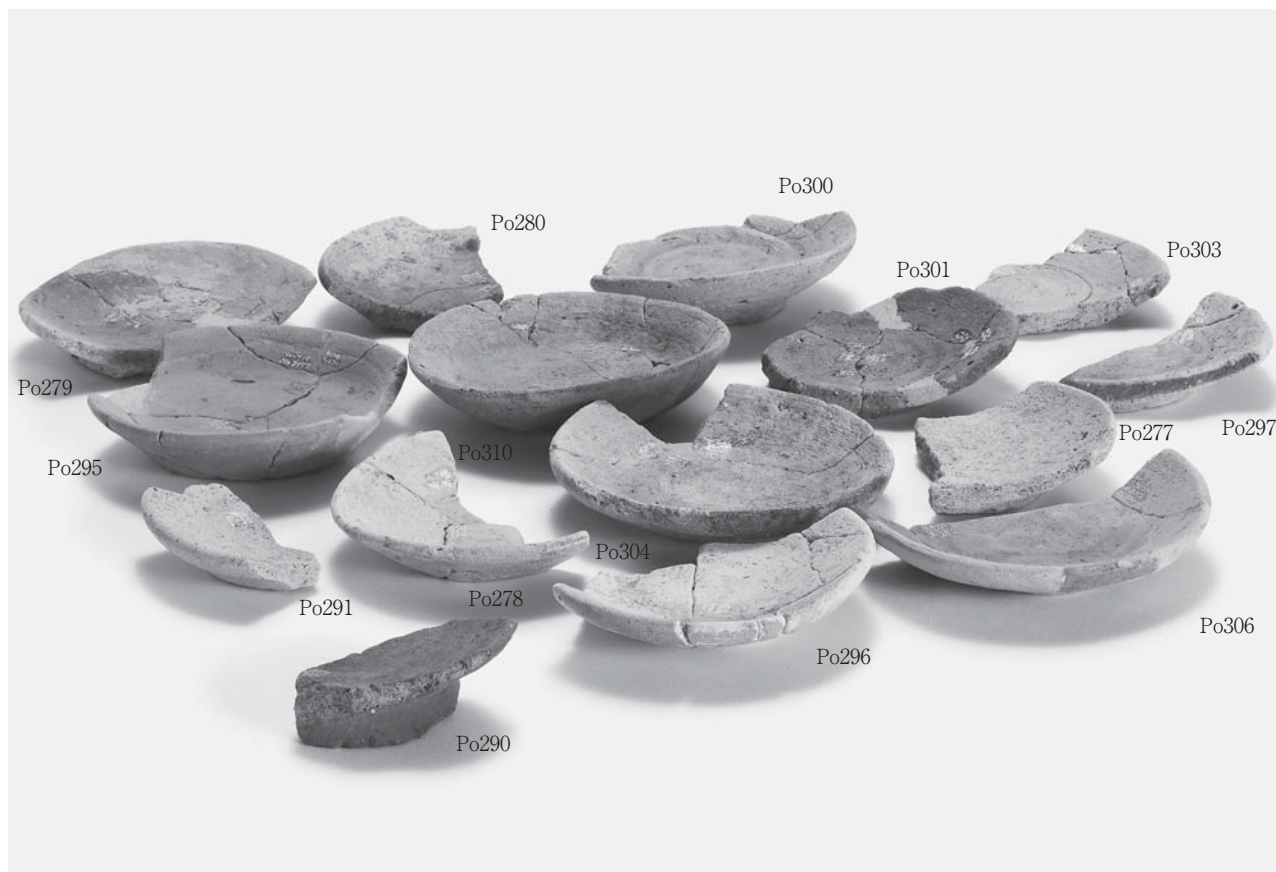
3 3010a溝出土須恵器



4 3010a溝出土土師器坏



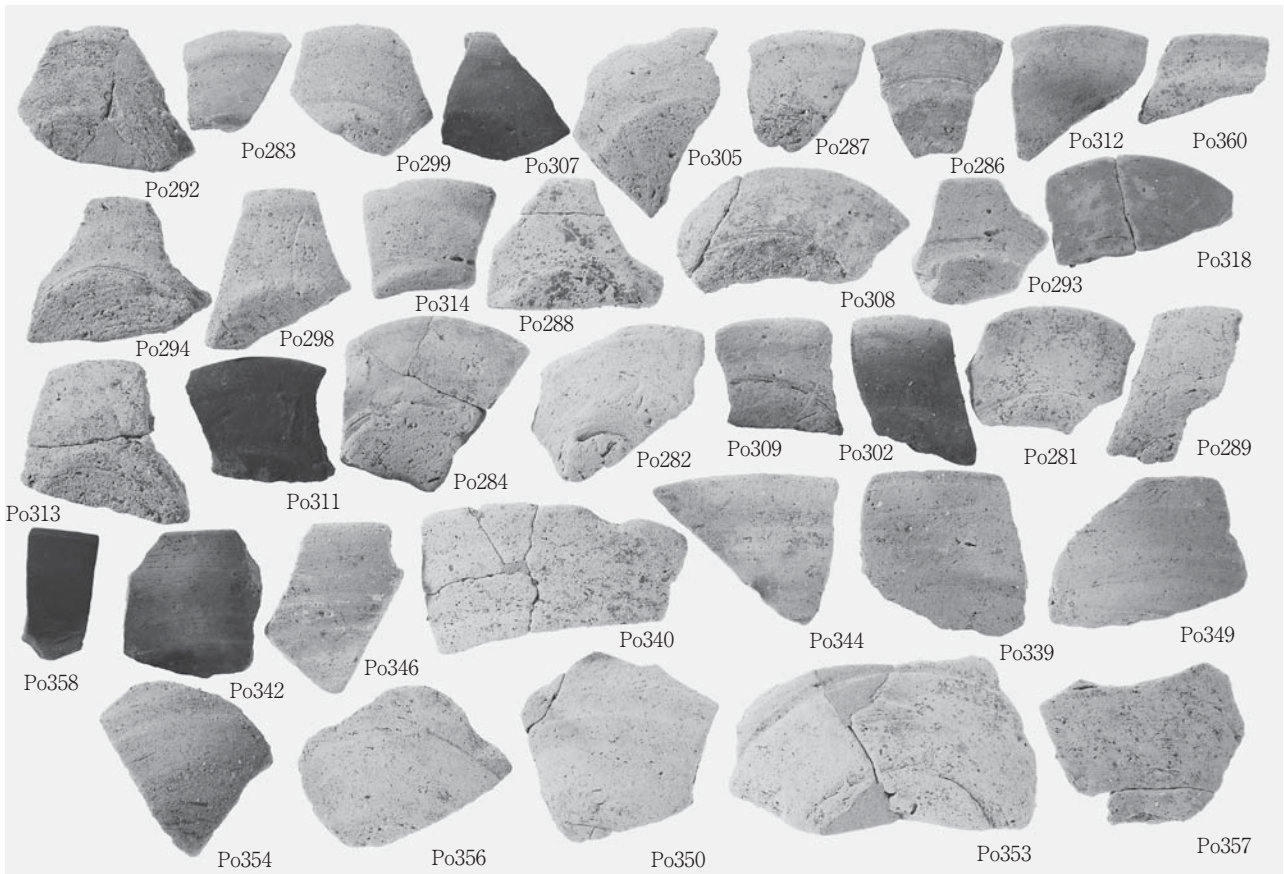
5 3010b溝出土土師器高台付坏



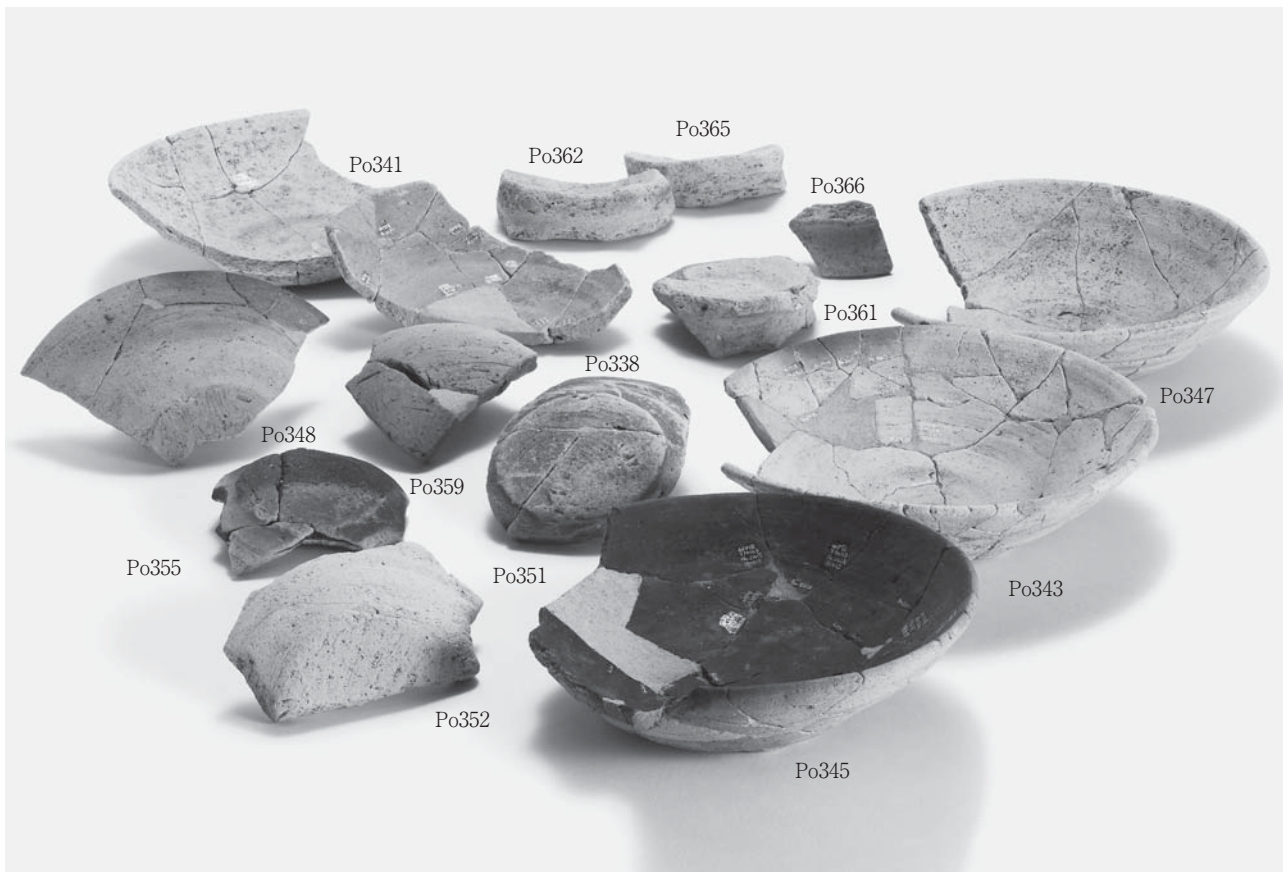
1 3010b溝出土土師器皿



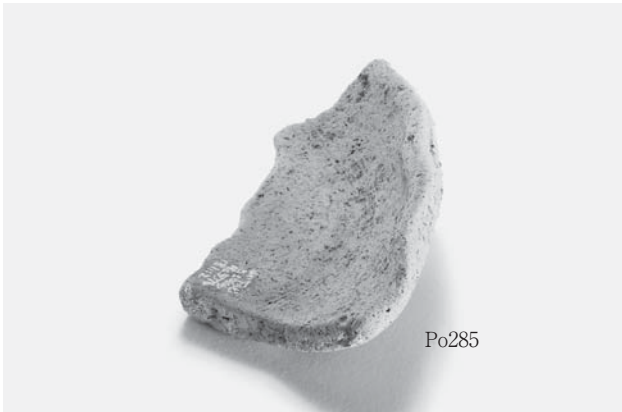
2 3010b溝土師器柱状高台



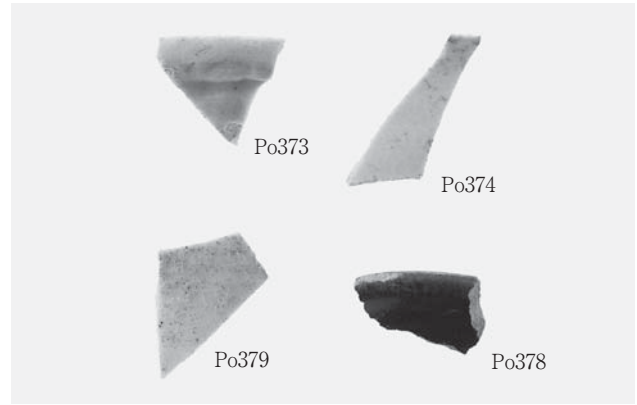
1 3010b溝出土土師器



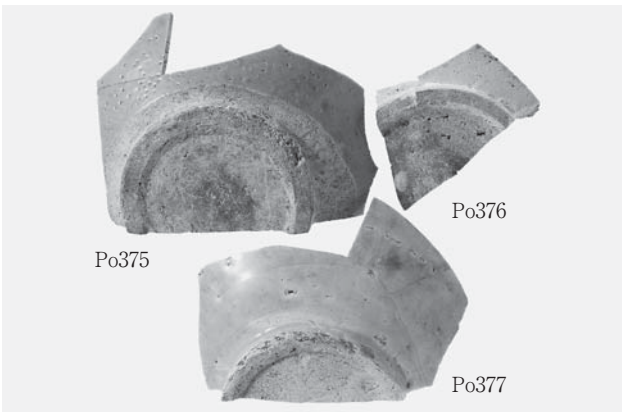
2 3010b溝出土土師器坏



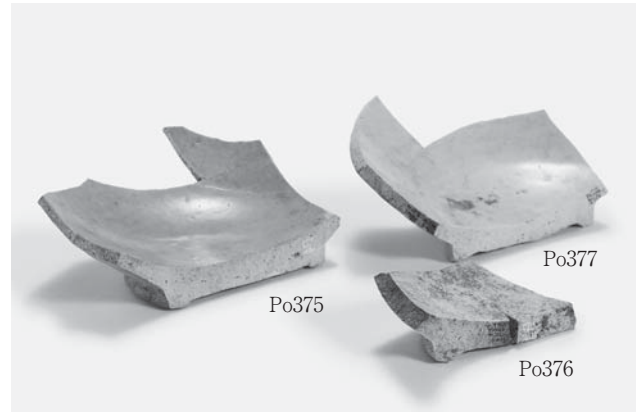
1 3010b溝出土土師器耳皿



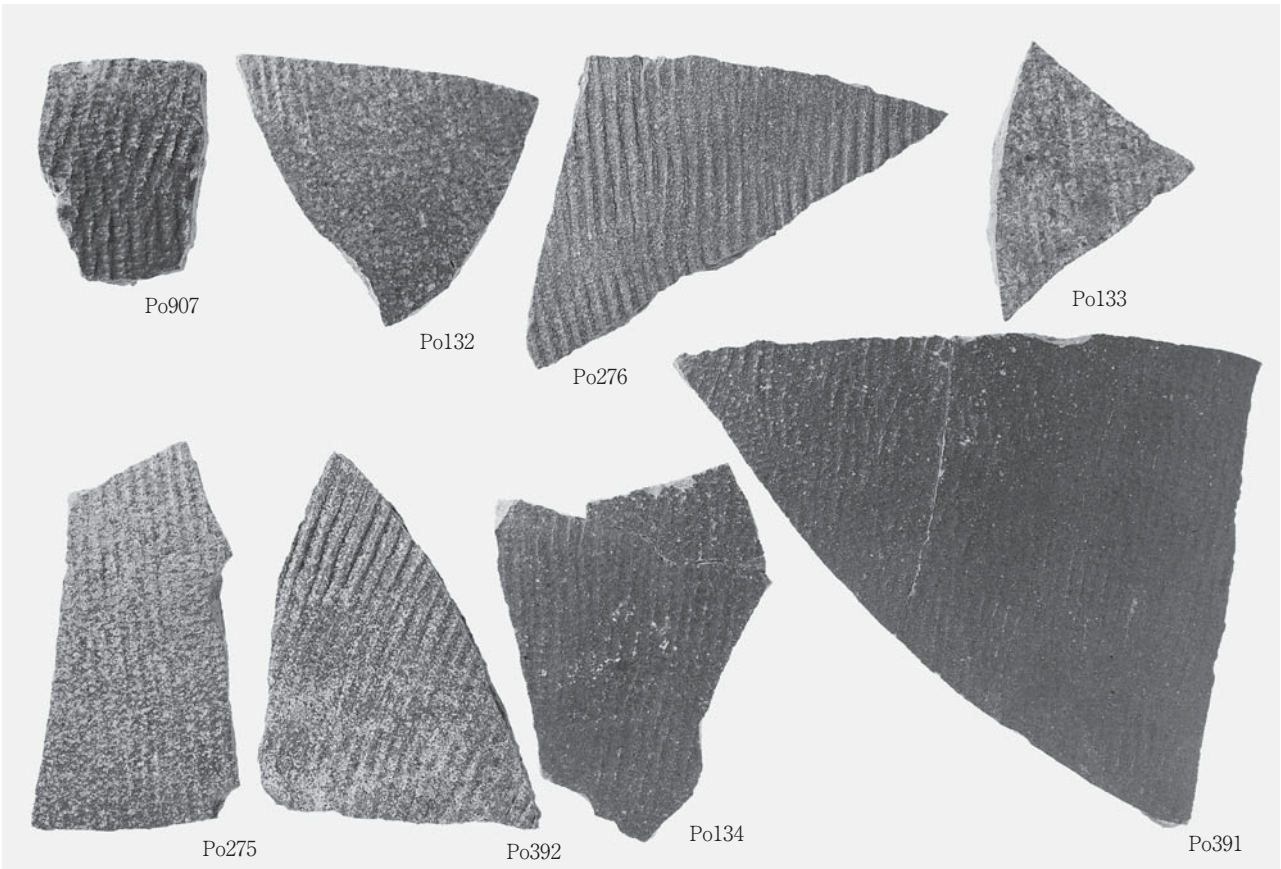
2 3010b溝出土貿易陶磁



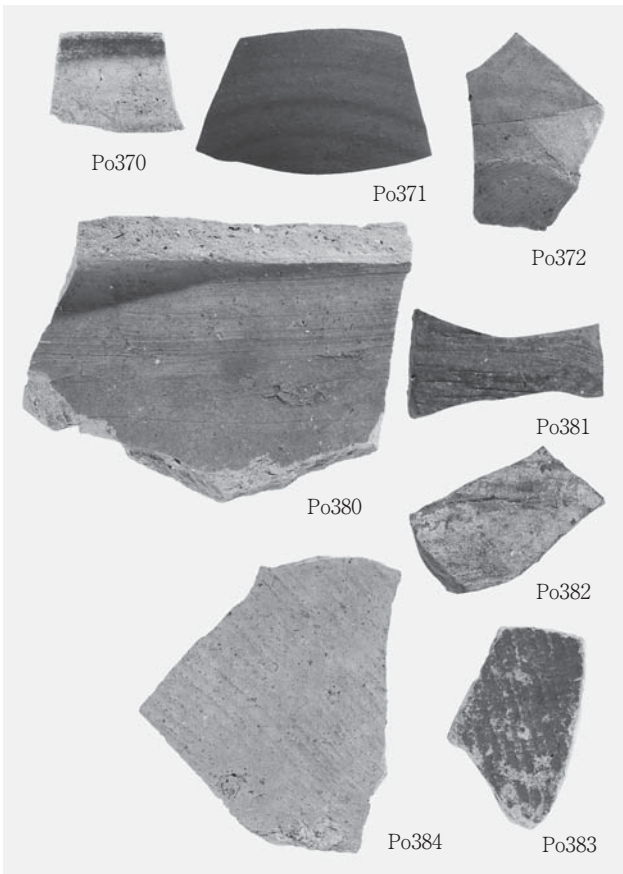
3 3010b溝出土白磁碗(外面)



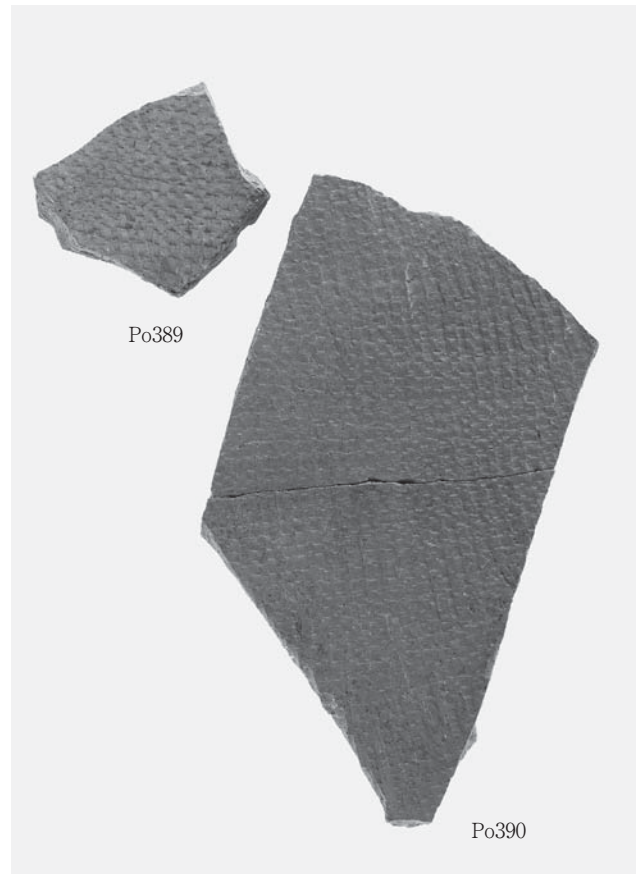
4 3010b溝出土白磁碗(内面)



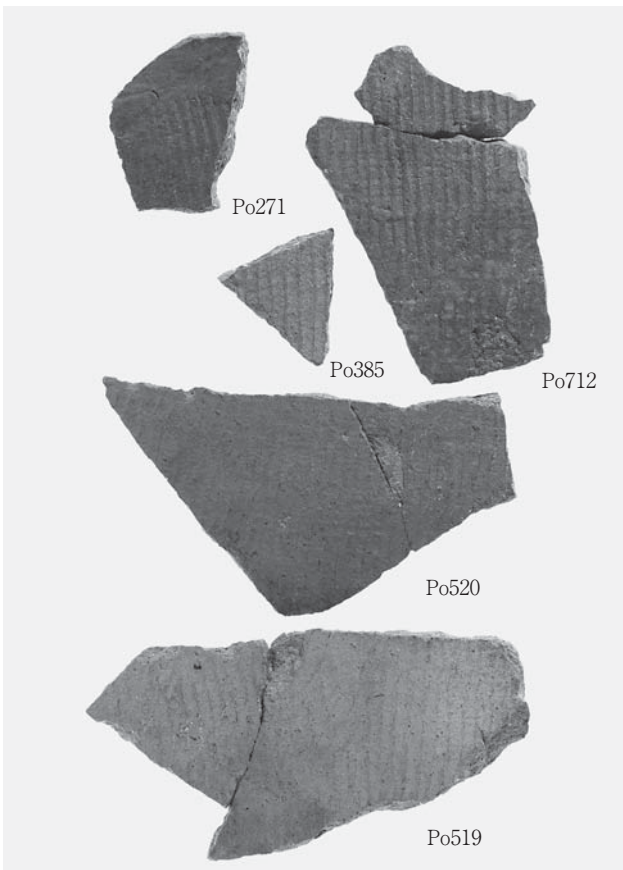
5 3010b溝他出土須恵器甕



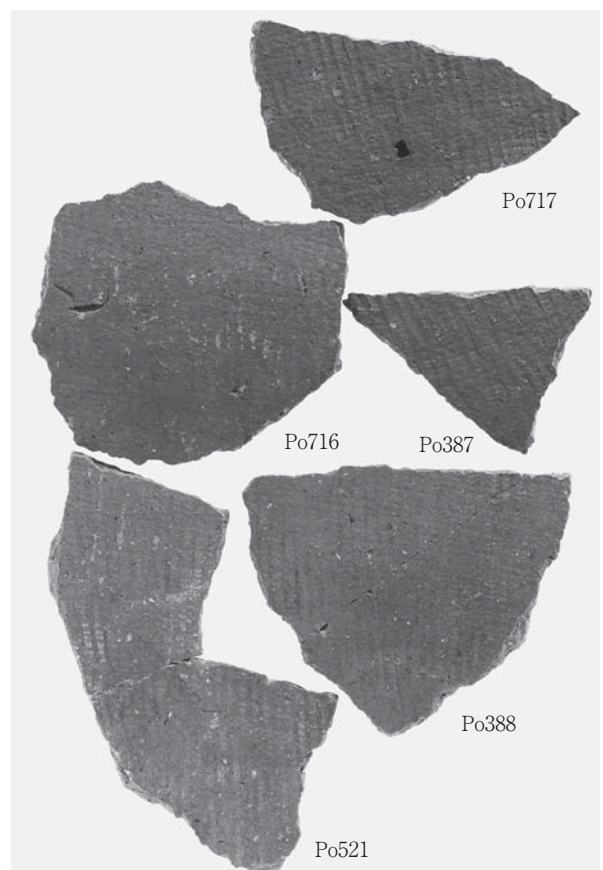
1 3010b溝出土初期備前・須恵器



2 3010b溝出土須恵器甕



3 3010b溝他出土須恵器甕(1)



4 3010b溝他出土須恵器甕(2)



1 3010b溝、Ⅲ-1層出土須恵器甕(外面)



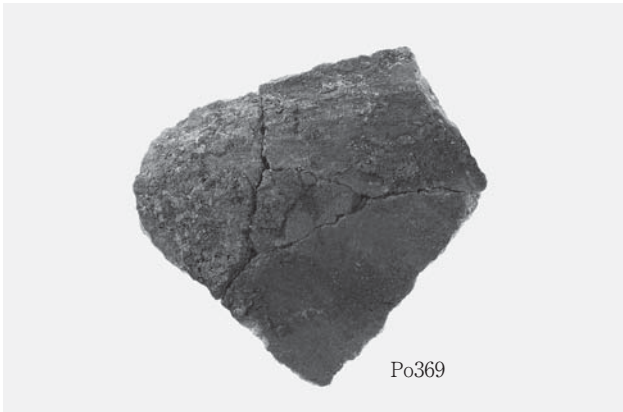
2 3010b溝、Ⅲ-1層須恵器甕(内面)



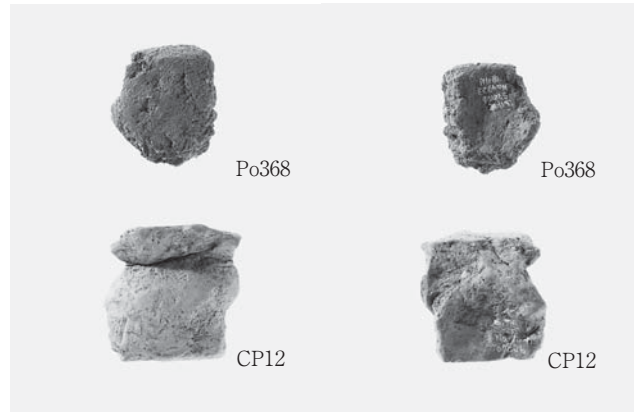
3 3010b溝出土錫製品(外面)



4 3010b溝出土錫製品(内面)



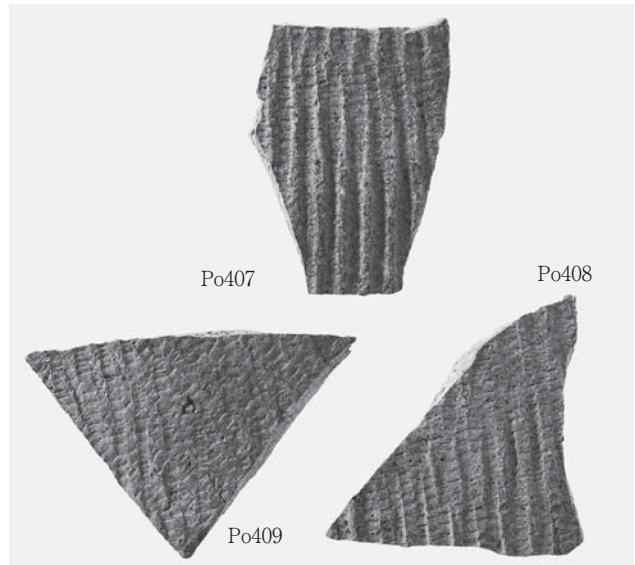
1 3010b溝出土土師器甕(分析試料14)



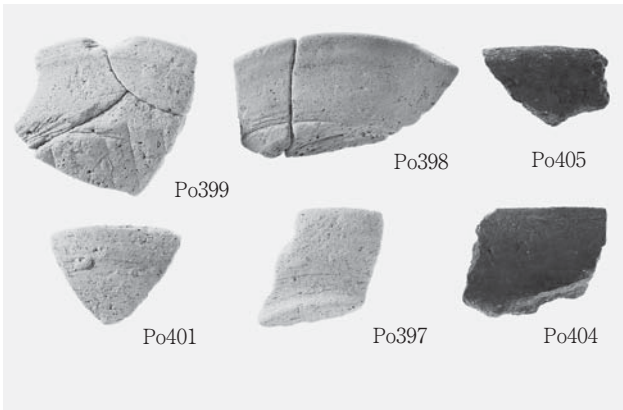
2 3010b溝、表土出土ミニチュア土器



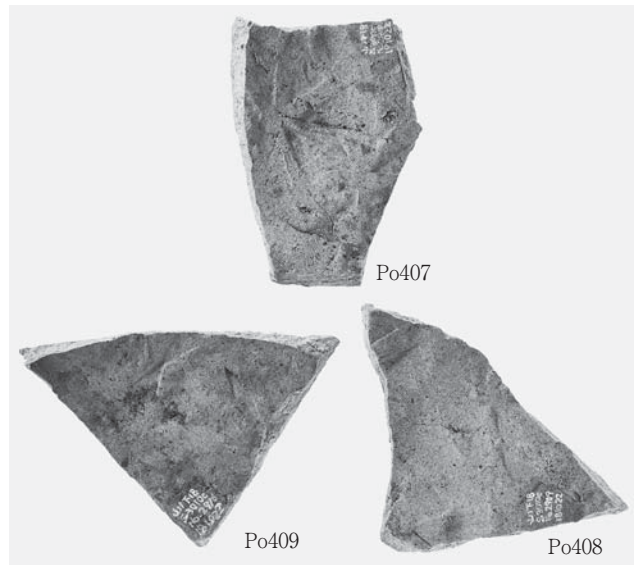
3 3010c溝出土土師器(1)



6 3010c溝出土須恵器甕(外面)



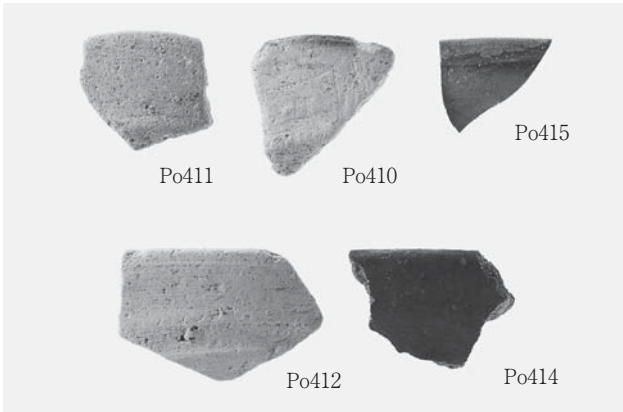
4 3010c溝出土土師器(2)



7 3010c溝出土須恵器甕(内面)



5 3010c溝出土白磁碗



1 3010d溝出土土師器・須恵器



2 3010d溝出土土師器坏



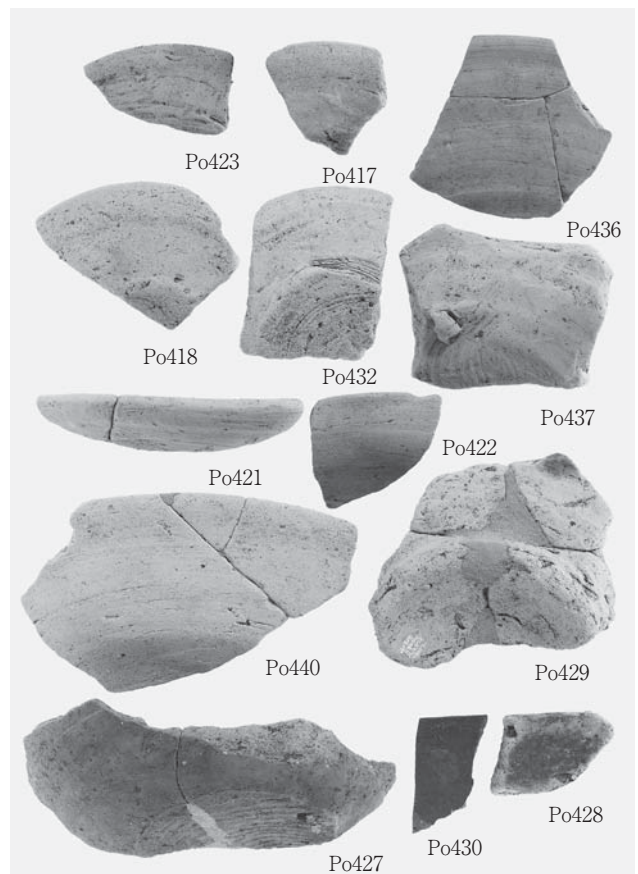
3 3010d溝出土白磁碗



4 3010a溝出土敲石



5 3056土坑出土白磁皿

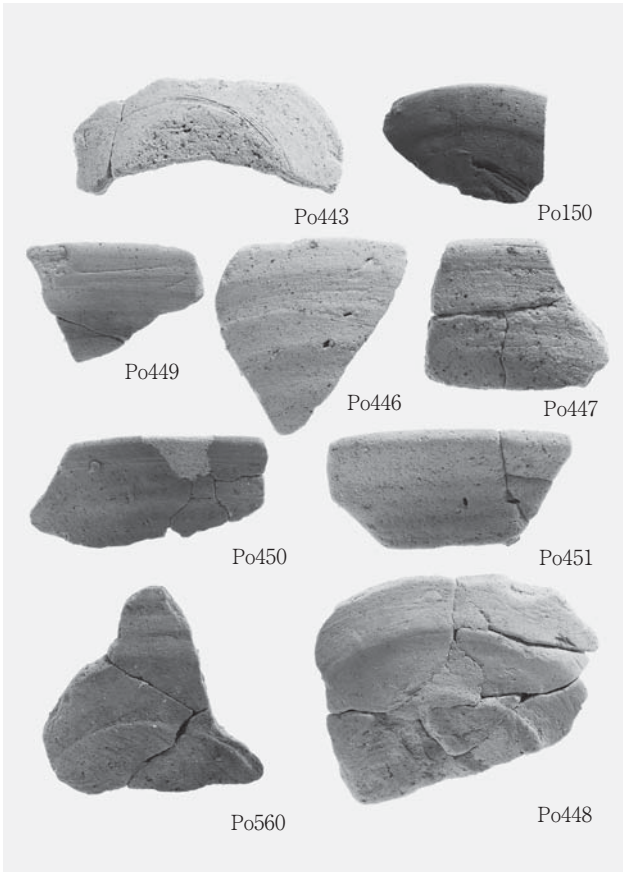


7 3056・3057・3259土坑出土土器(2)



6 3056・3057・3259土坑出土土師器(1)

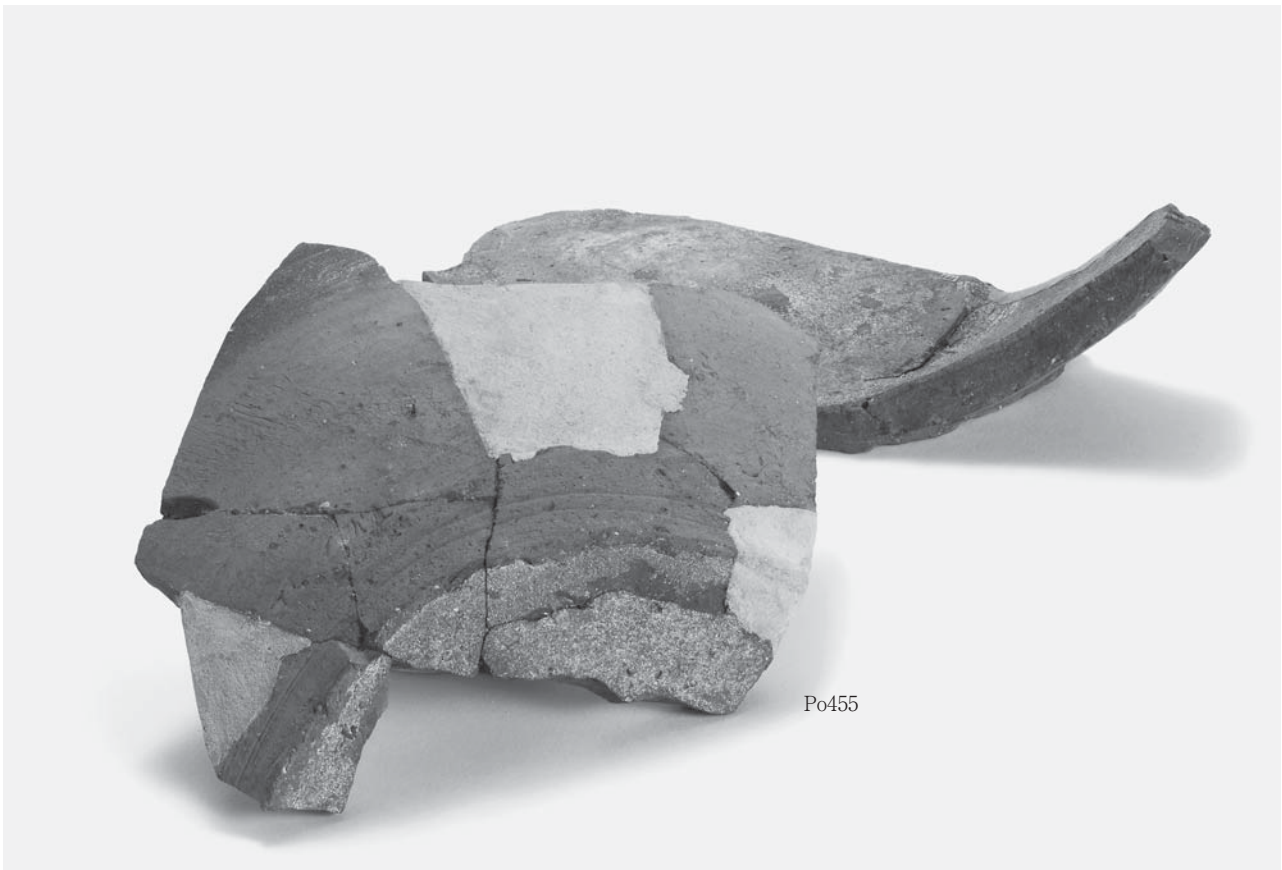




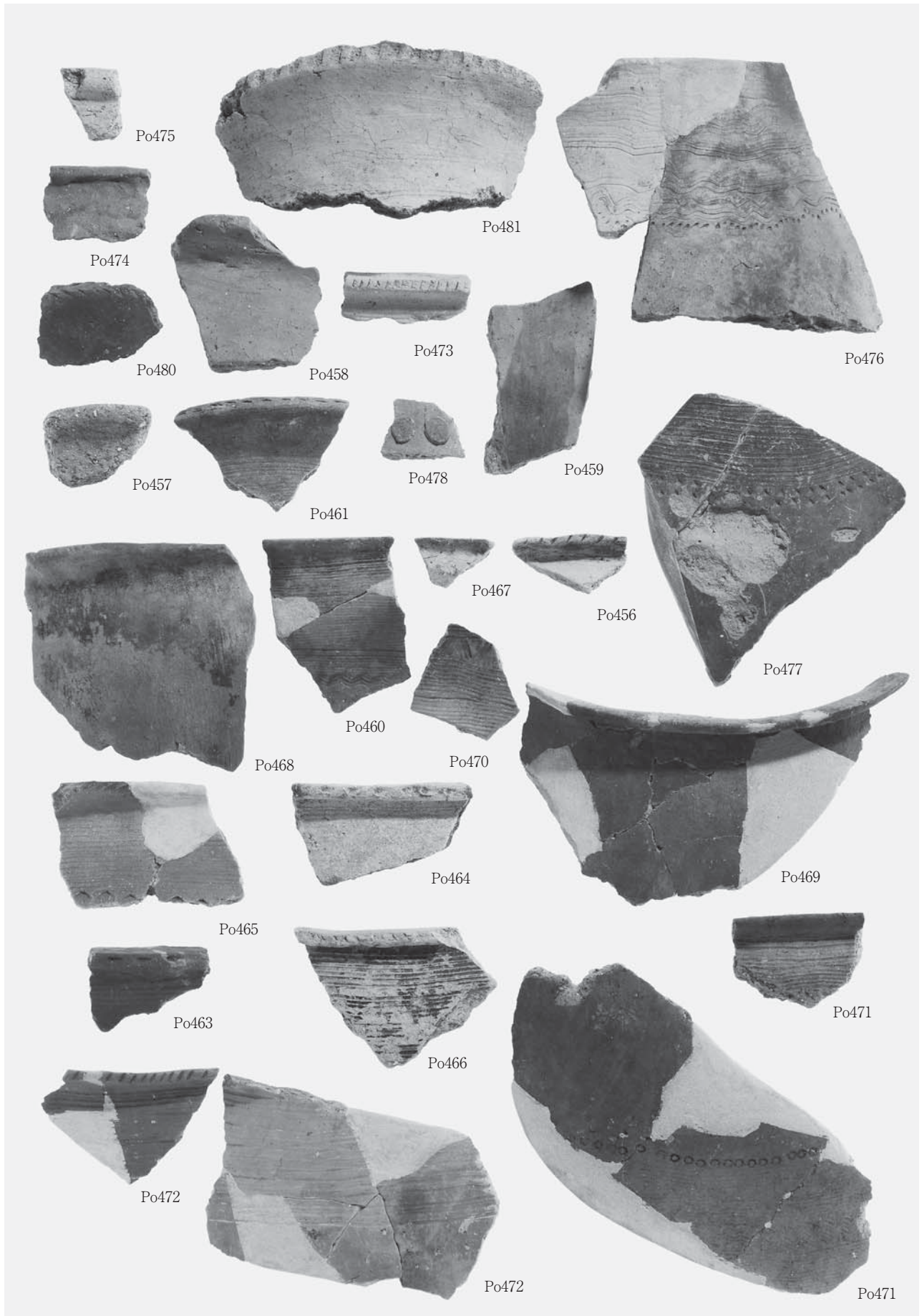
1 掘立柱建物13、3261・3292・3298・3329柱穴、3225ピット、攪乱土出土土師器



2 3201・3260・3261・3317柱穴出土土師器



3 3214柱穴出土須恵器壺



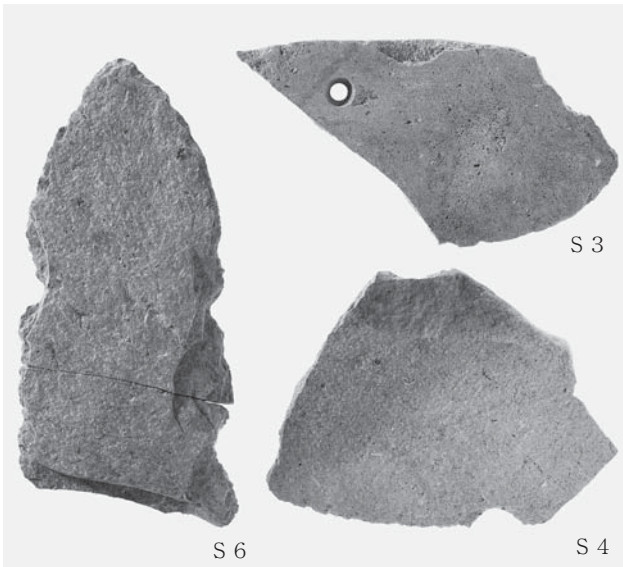
250溝a・b出土弥生土器



1 250溝b出土弥生土器壺



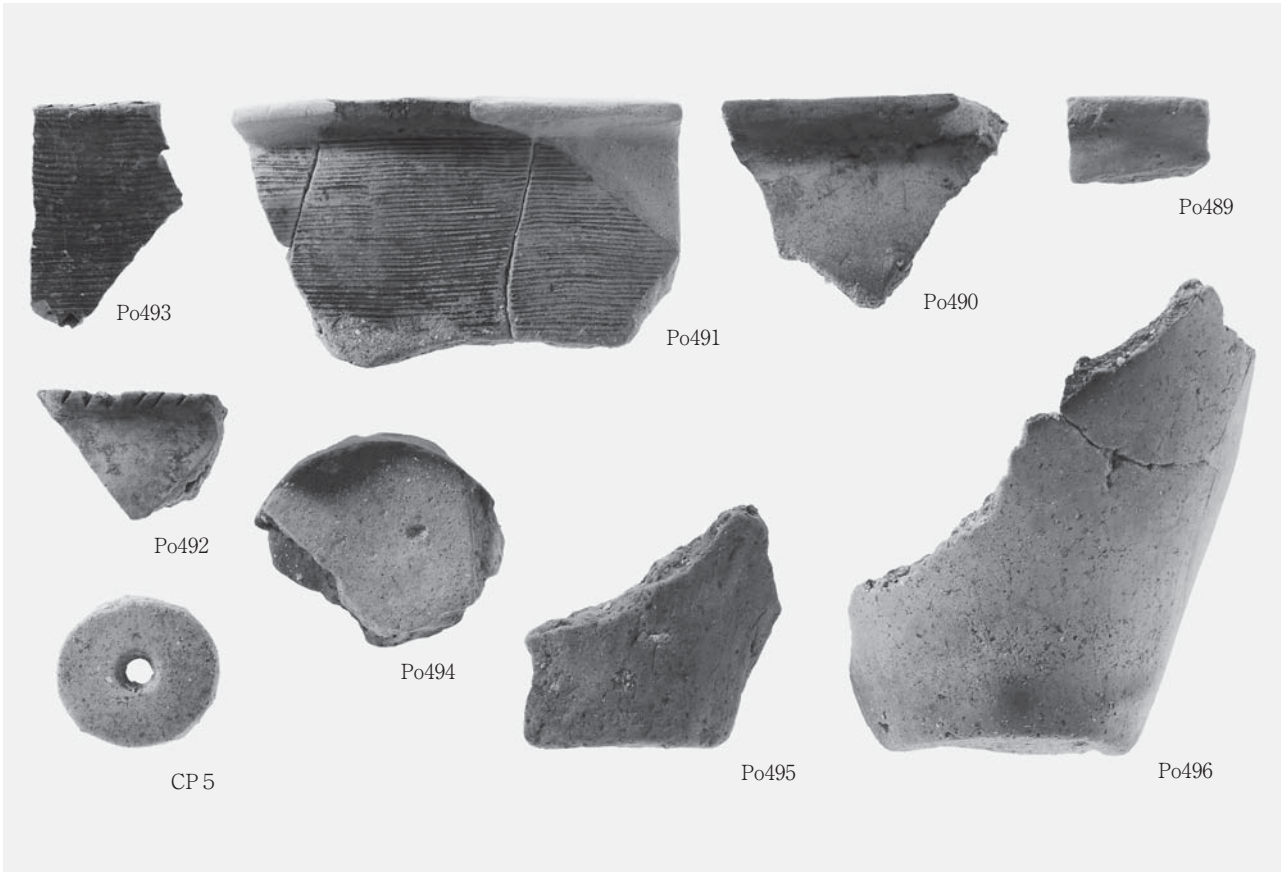
2 250溝a・b出土弥生土器底部



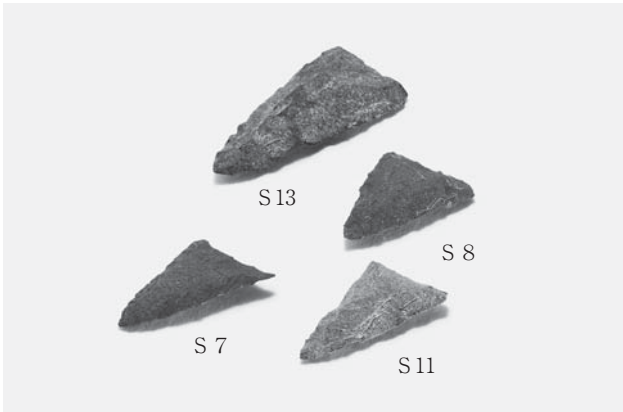
3 250溝b出土石器



4 250溝a・b出土石器



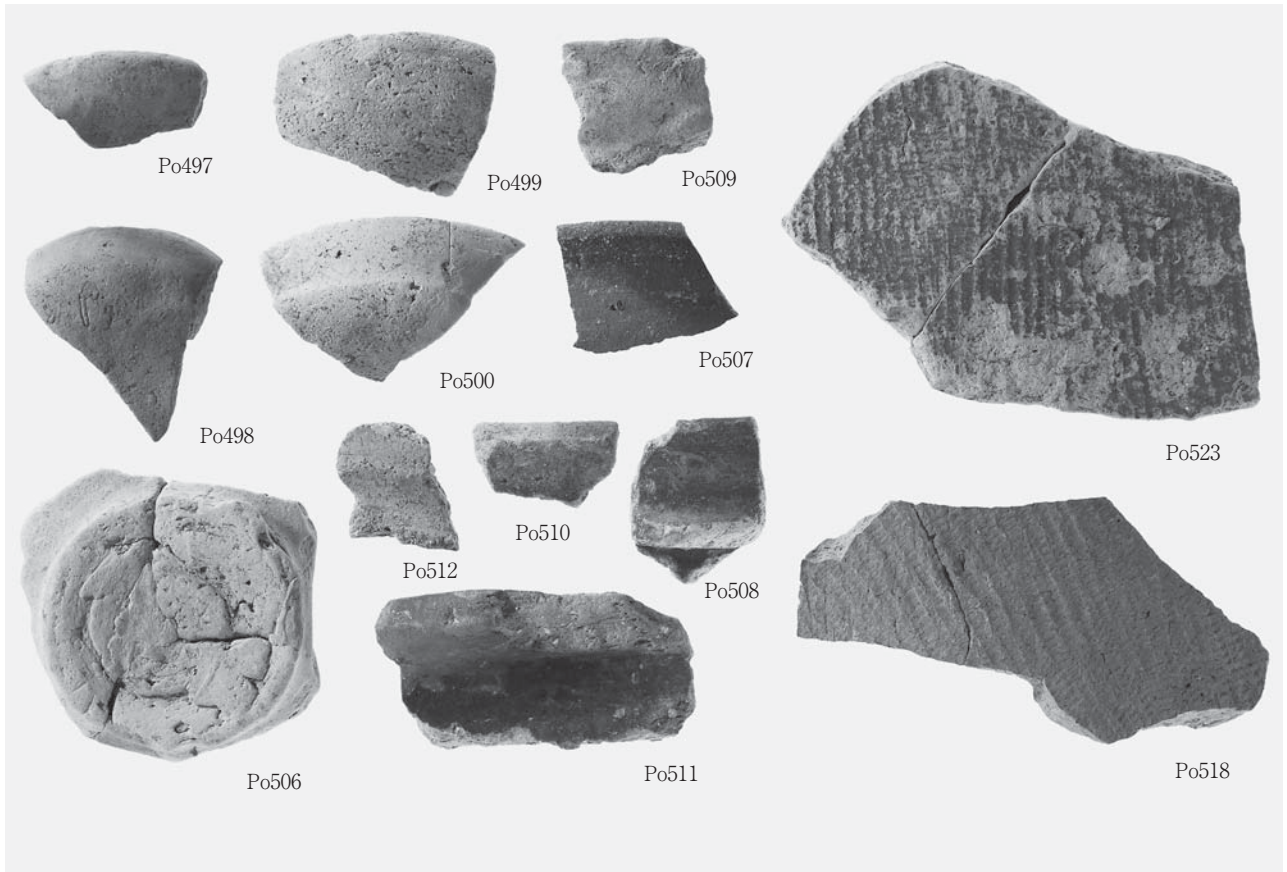
1 3186土坑出土土器・土製品



2 3186土坑他出土石鏃



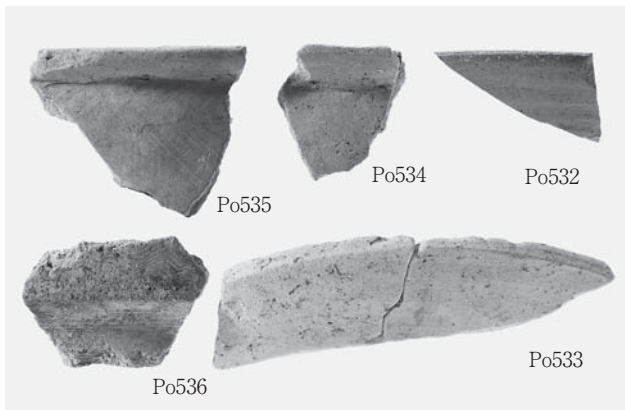
3 Ⅲ-1層出土土師器



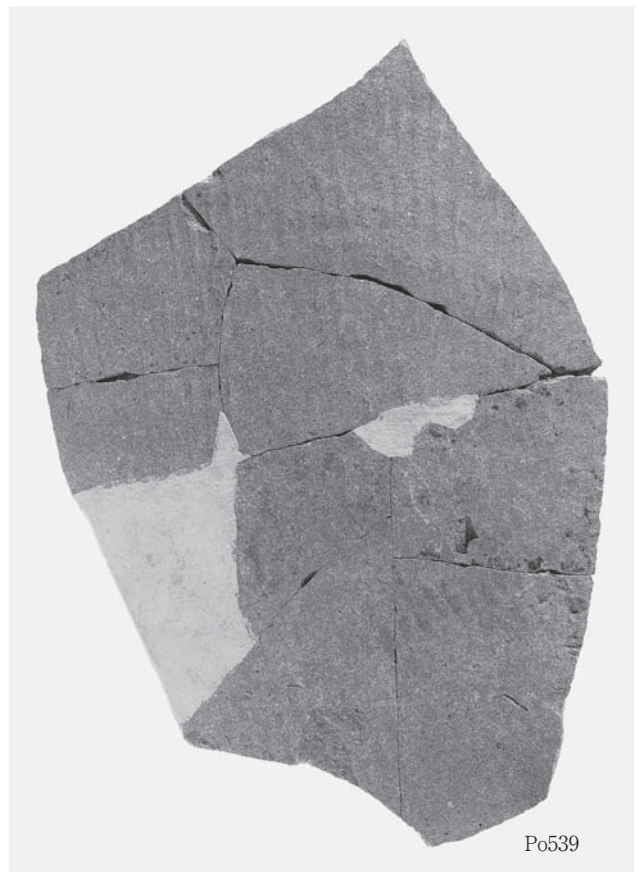
1 Ⅲ-1層出土土器



2 Ⅲ-2層出土土師器



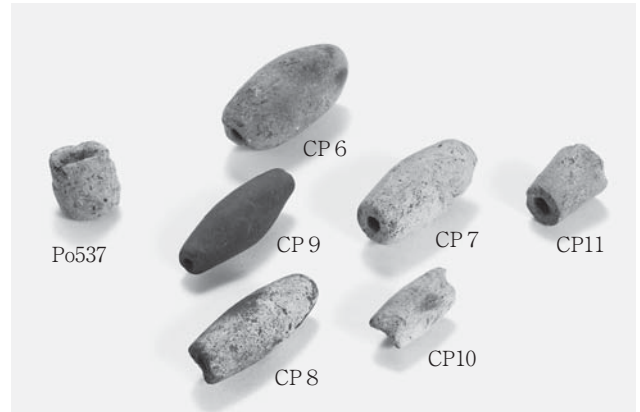
3 Ⅲ-2層出土土器



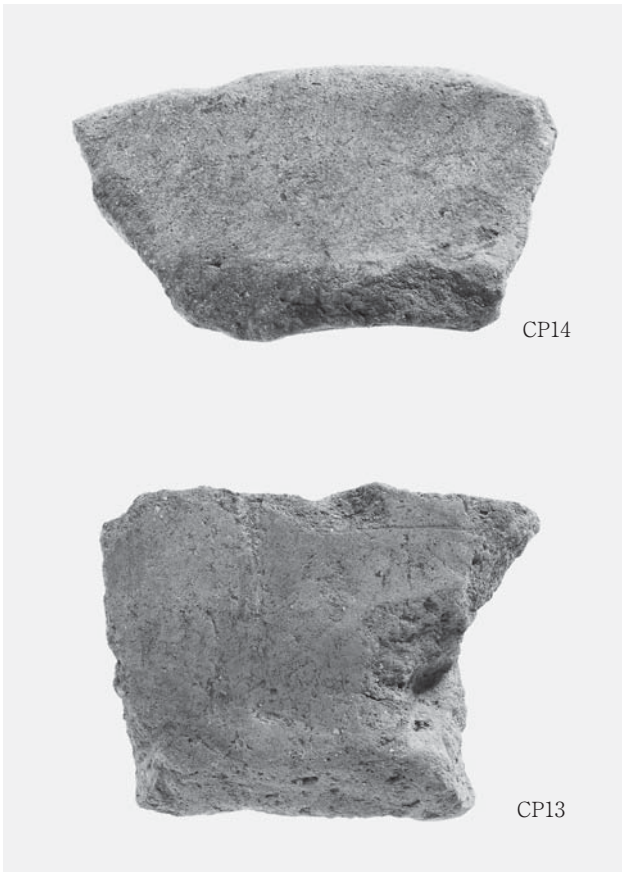
4 Ⅲ-2層出土須恵器甕



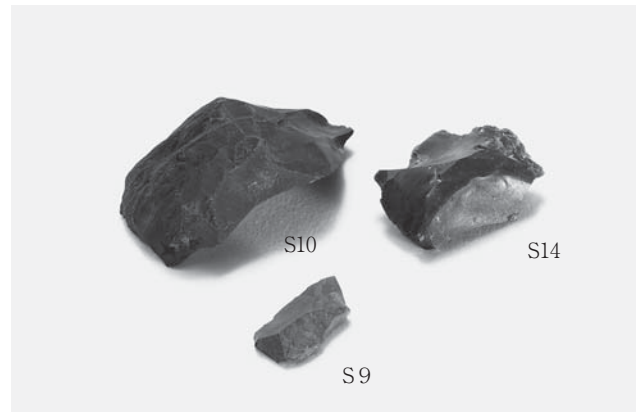
1 Ⅲ-2層出土須恵器坏



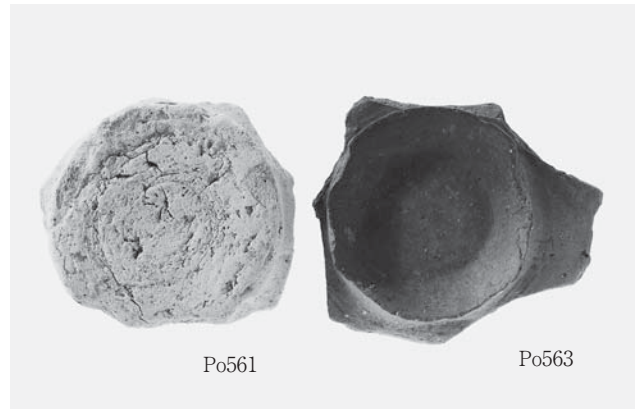
2 Ⅲ-2層他出土ミニチュア土器・土製品



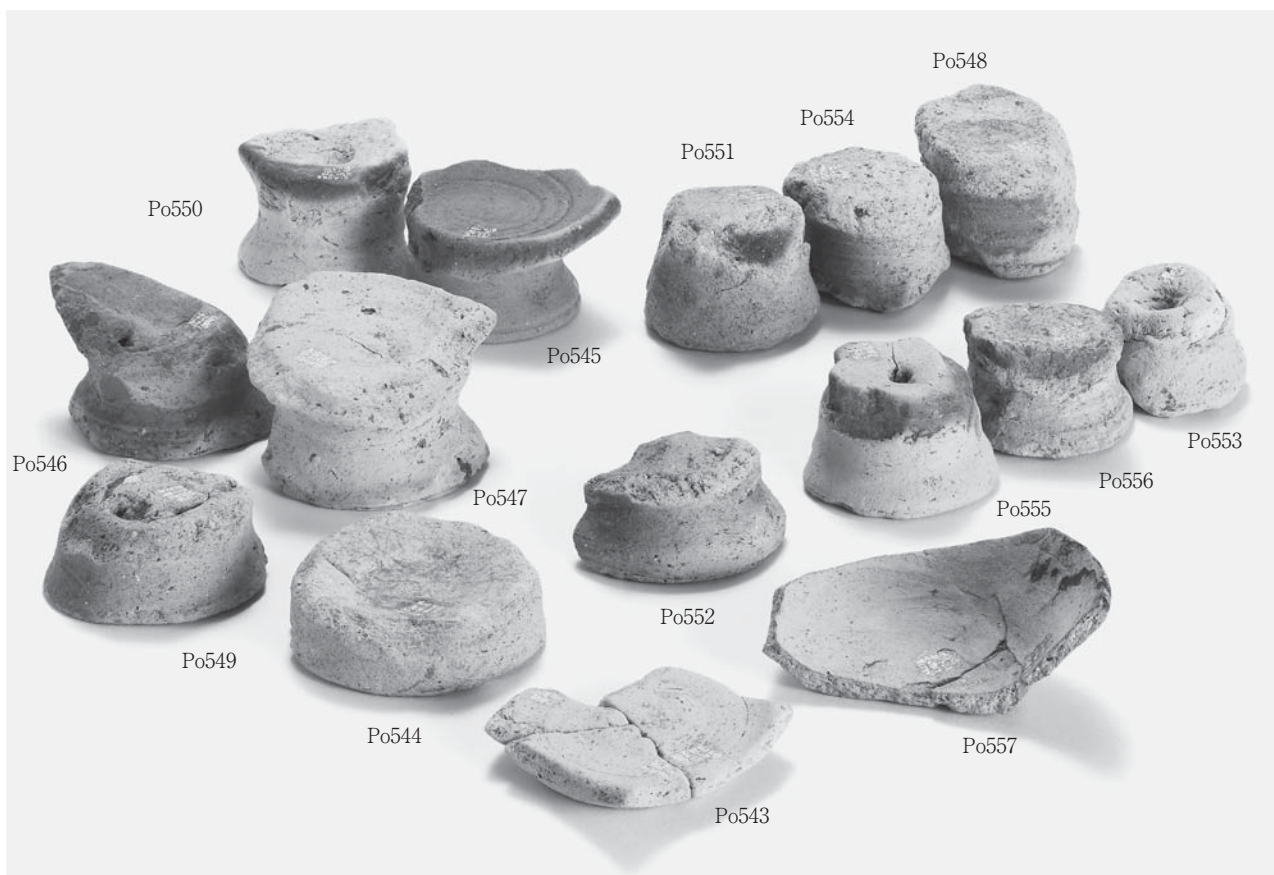
4 表土・攪乱土等出土移動式竈



3 Ⅲ-2層他出土剥片石器



5 表土・攪乱土等出土土師器(底部)

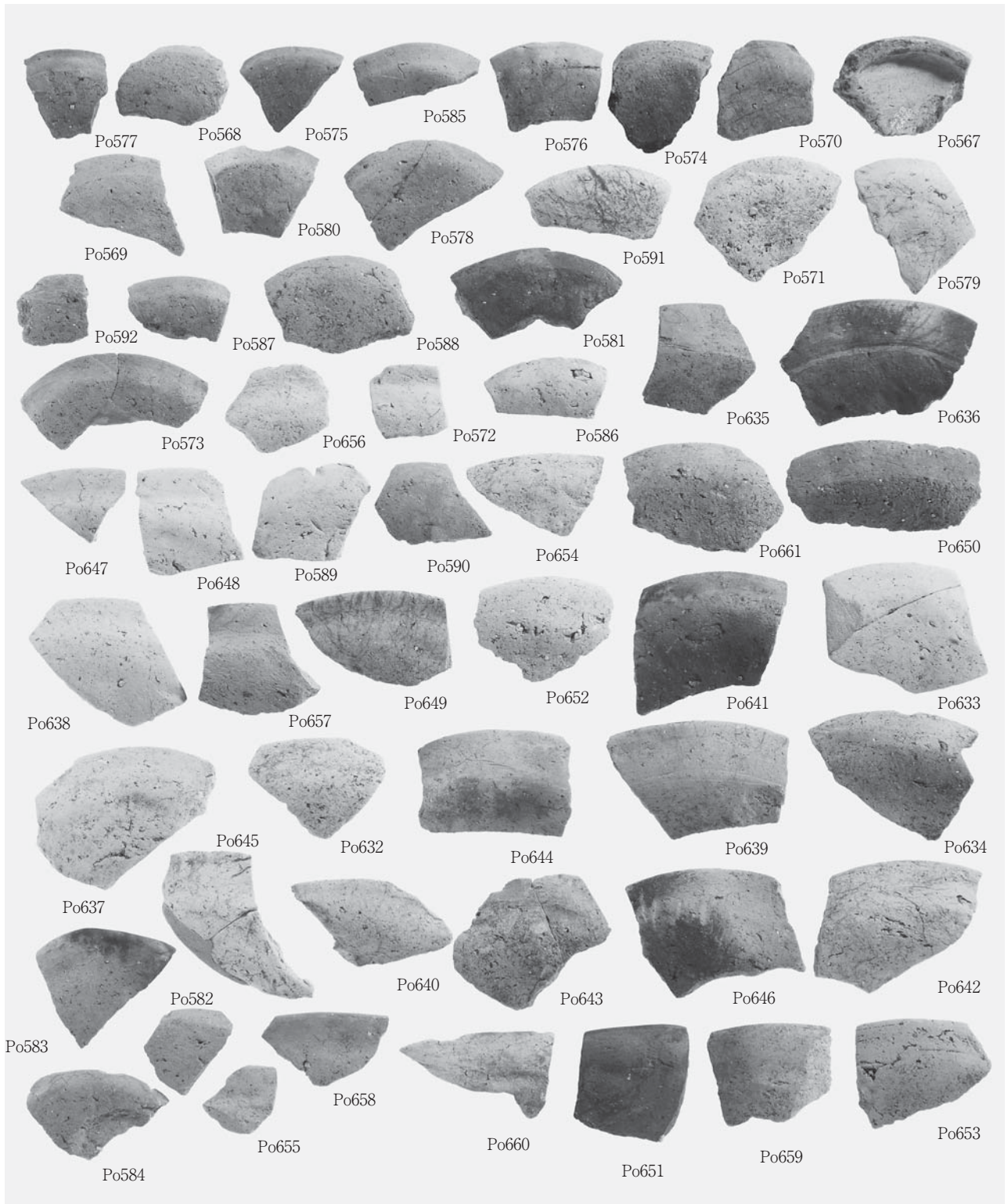


1 表土・攪乱土等出土土師器(1)



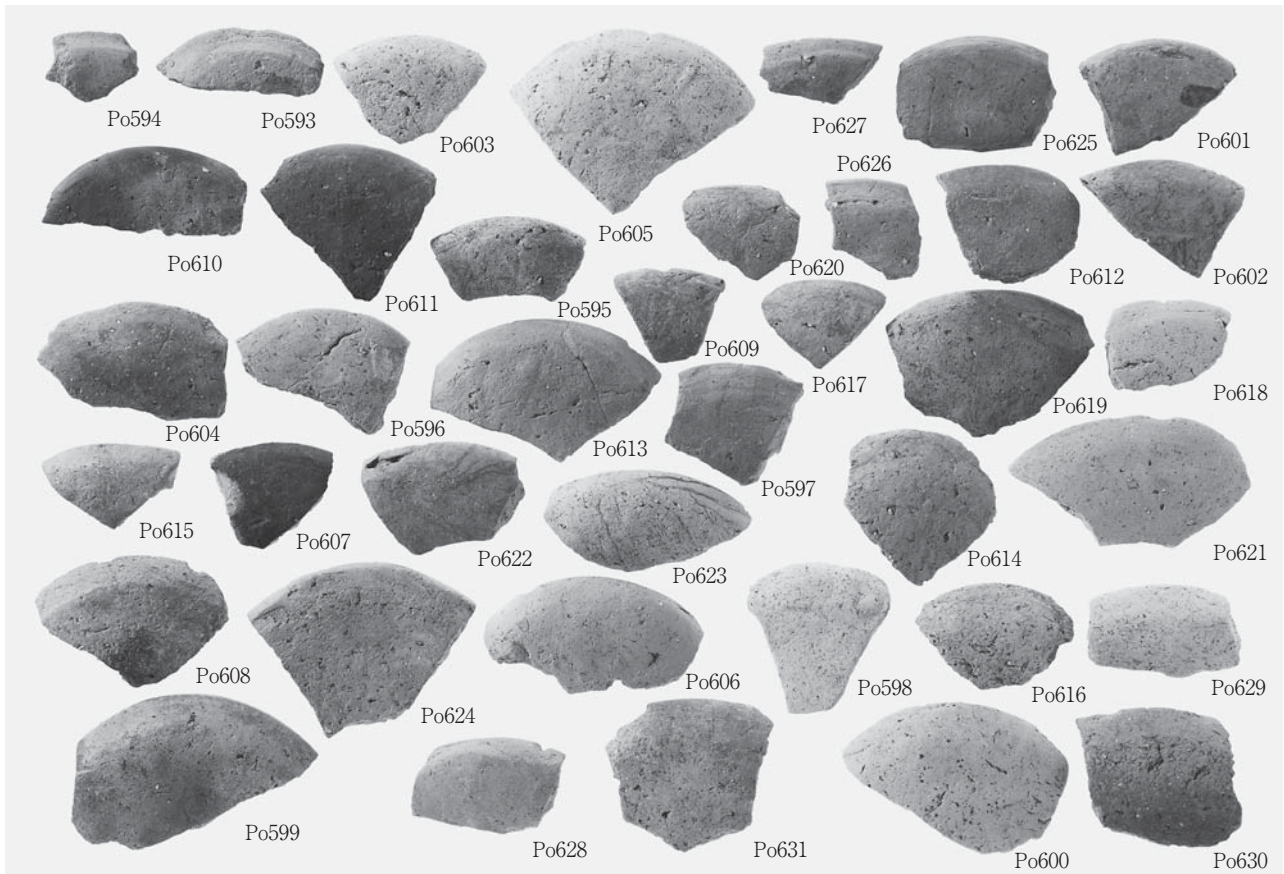
2 表土・攪乱土等出土土師器(2)

山ノ下遺跡  
表土・攪乱土等  
出土遺物

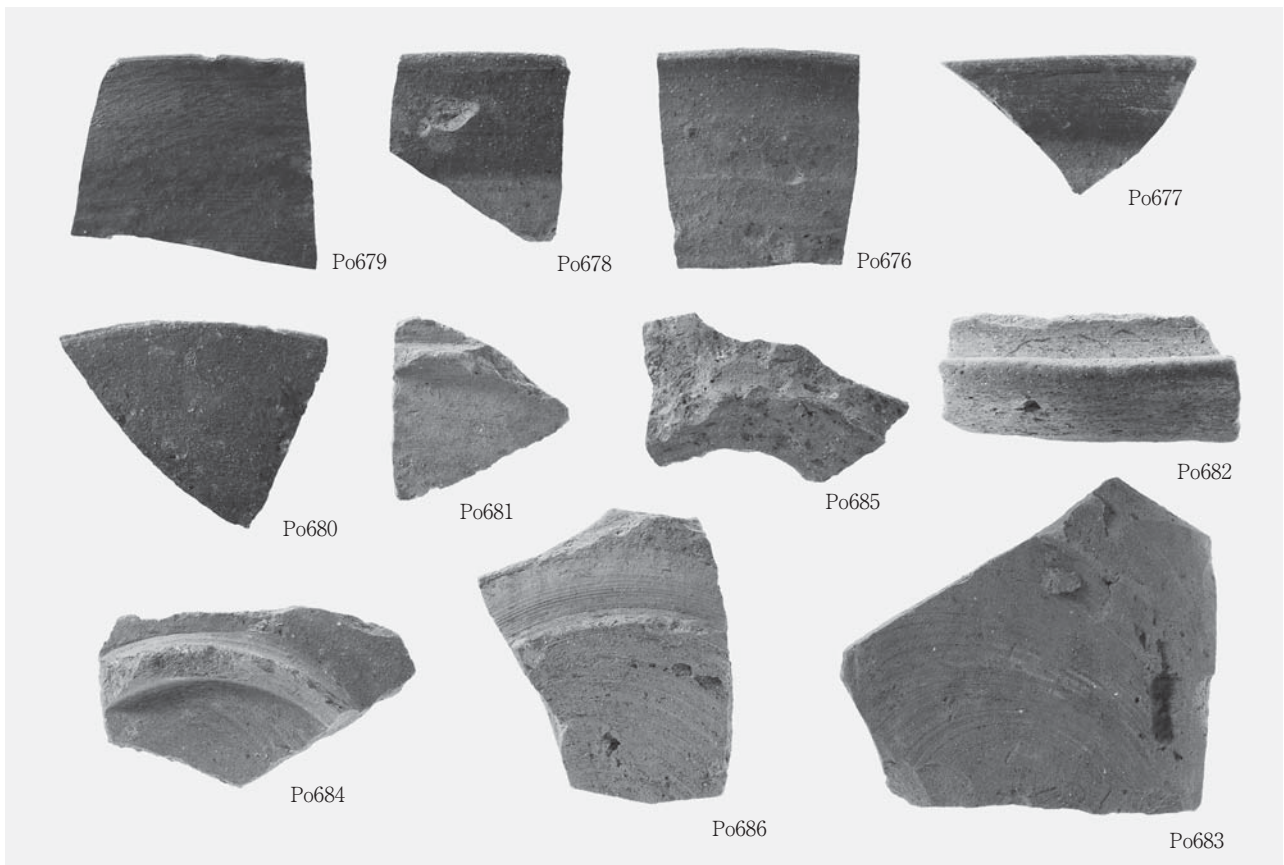


表土・攪乱土等出土手づくね土師器(1)

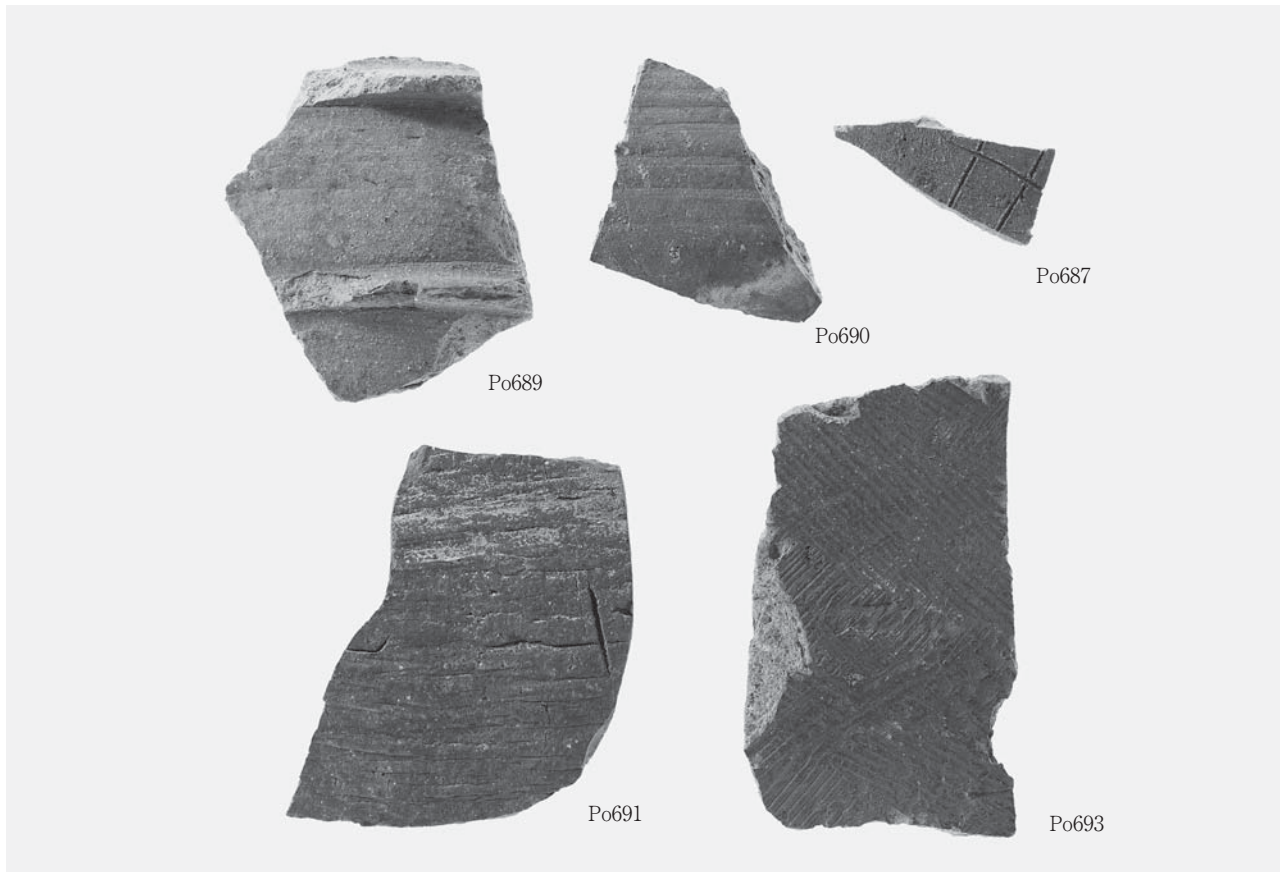




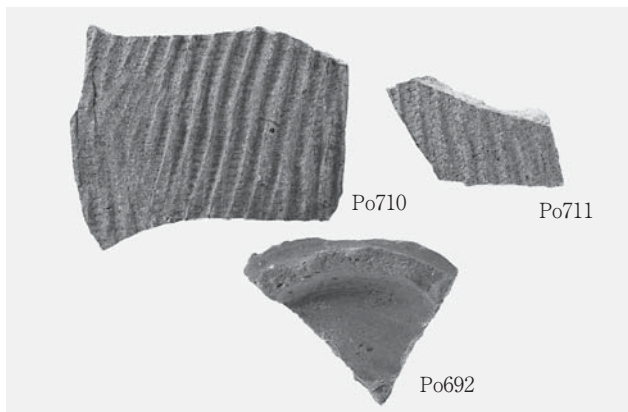
1 表土・攪乱土等出土手づくね土師器(2)



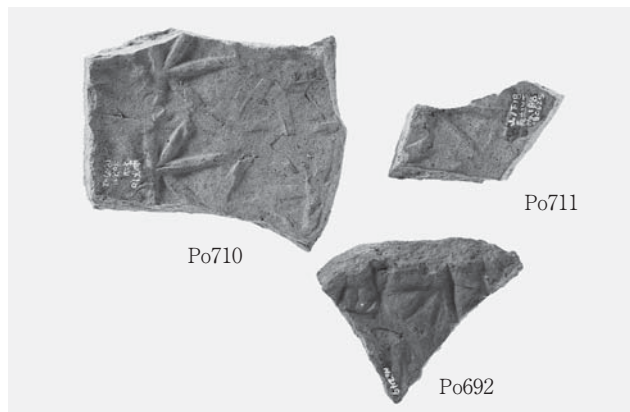
2 表土・攪乱土等出土須恵器坏



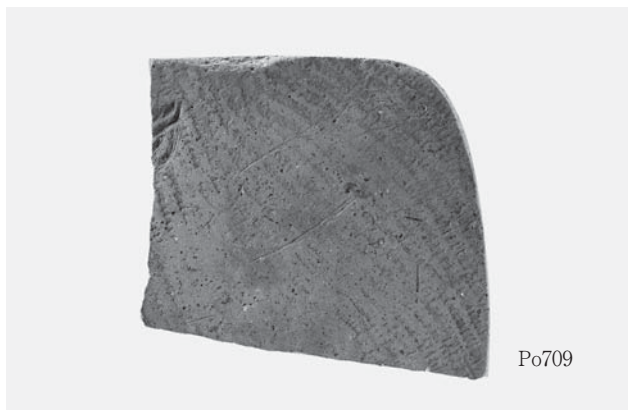
1 表土・攪乱土等出土須恵器壺



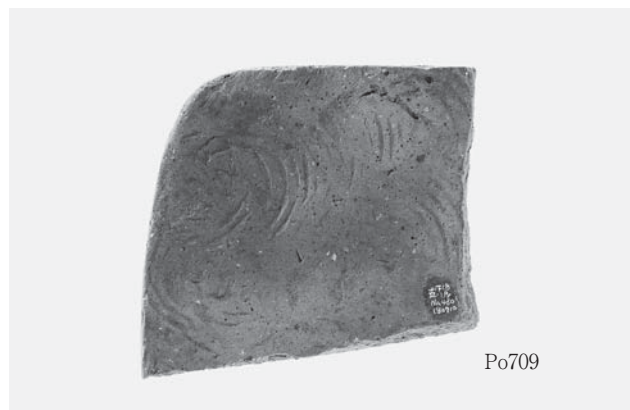
2 表土・攪乱土等出土須恵器(外面)



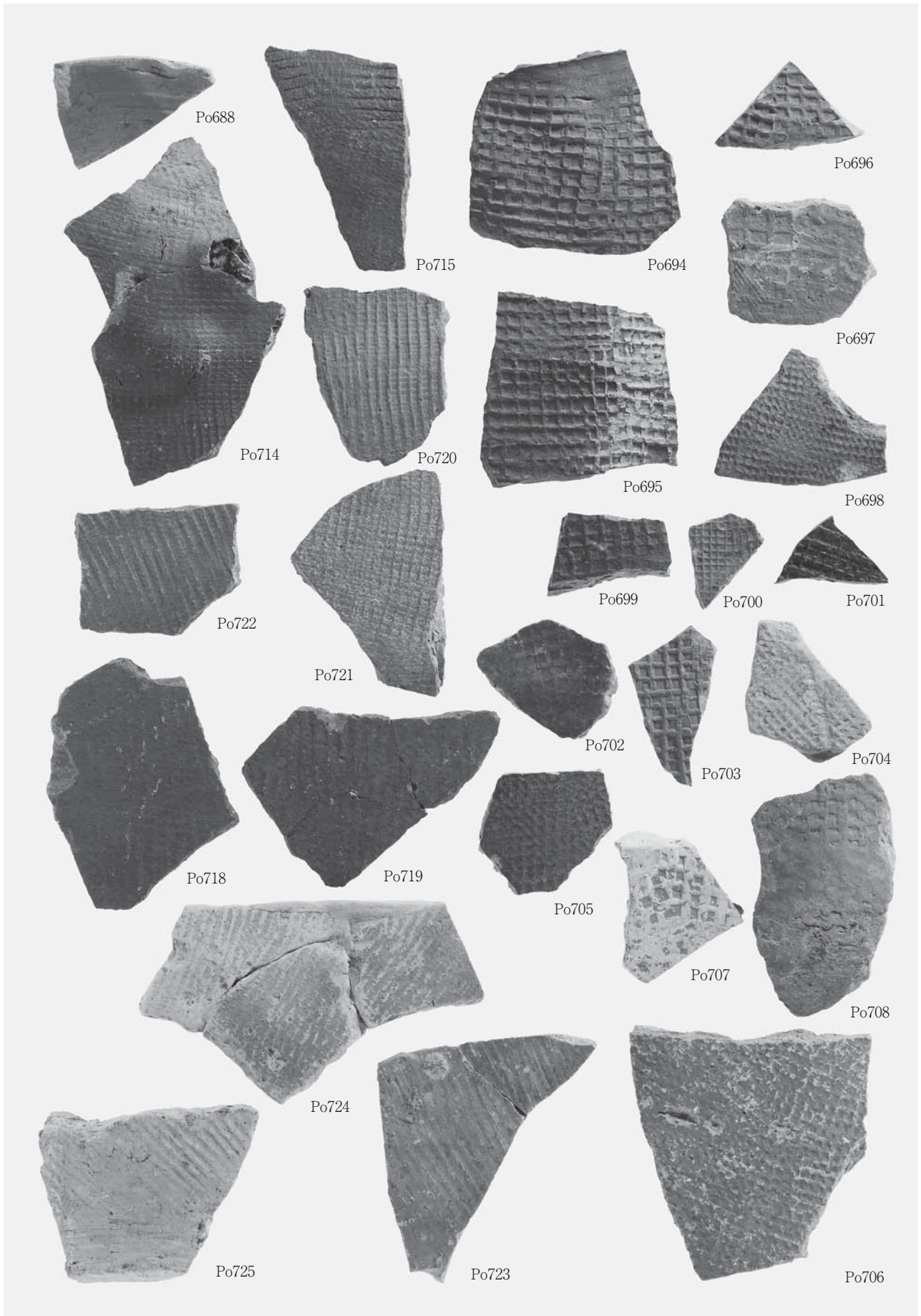
3 表土・攪乱土等出土須恵器(内面)



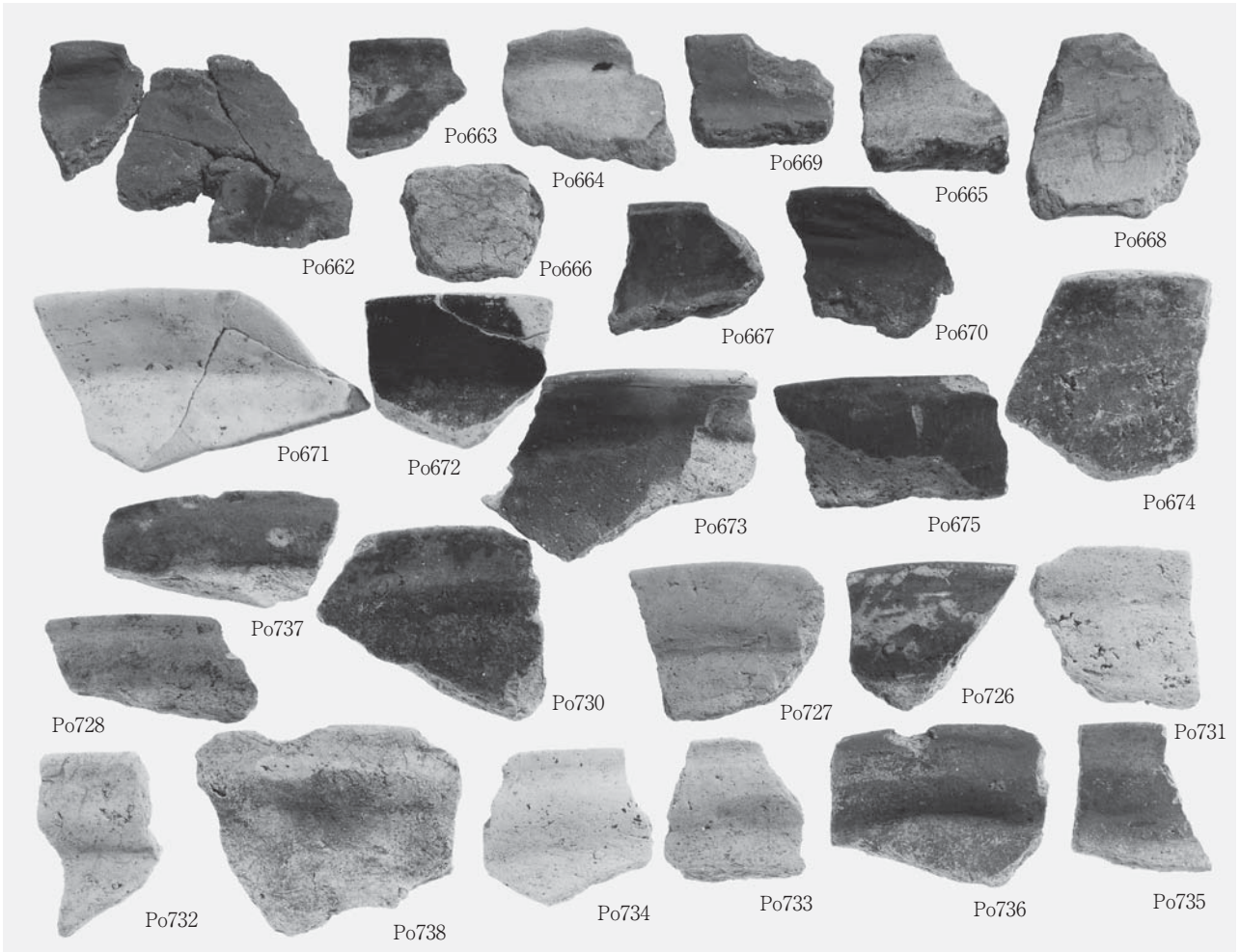
4 表土・攪乱土等出土須恵器転用硯(外面)



5 表土・攪乱土等出土須恵器転用硯(内面)



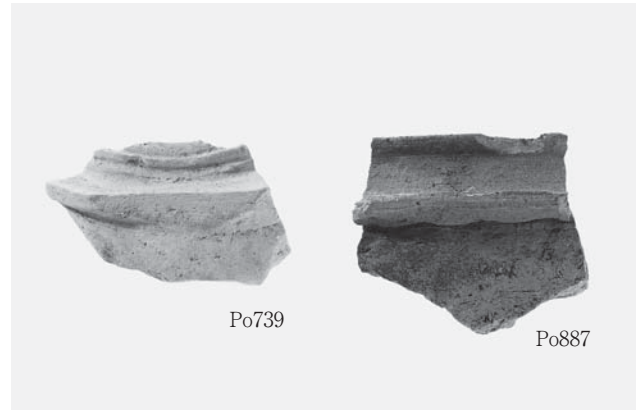
表土・攪乱土等出土須恵器



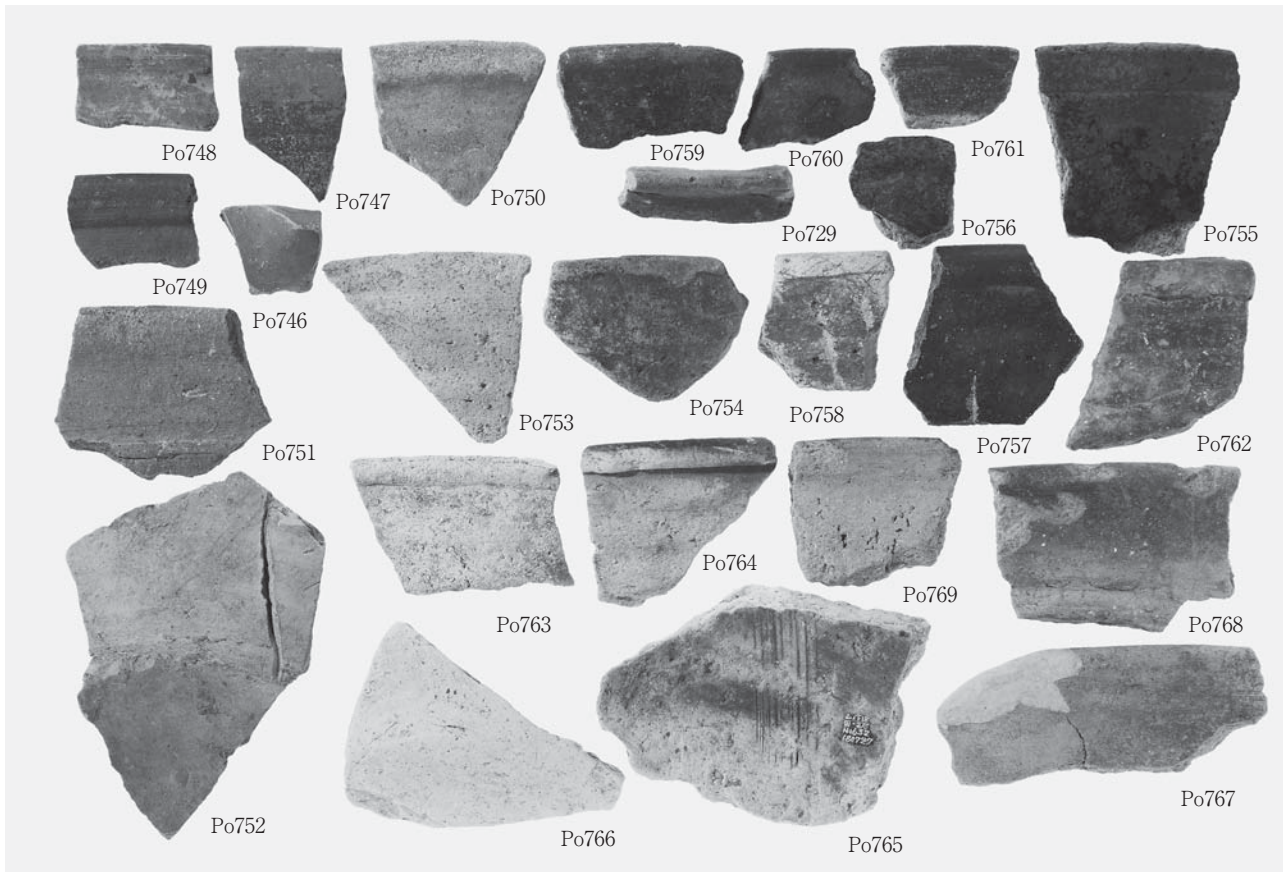
1 表土・攪乱土等出土土師器甕・鍋



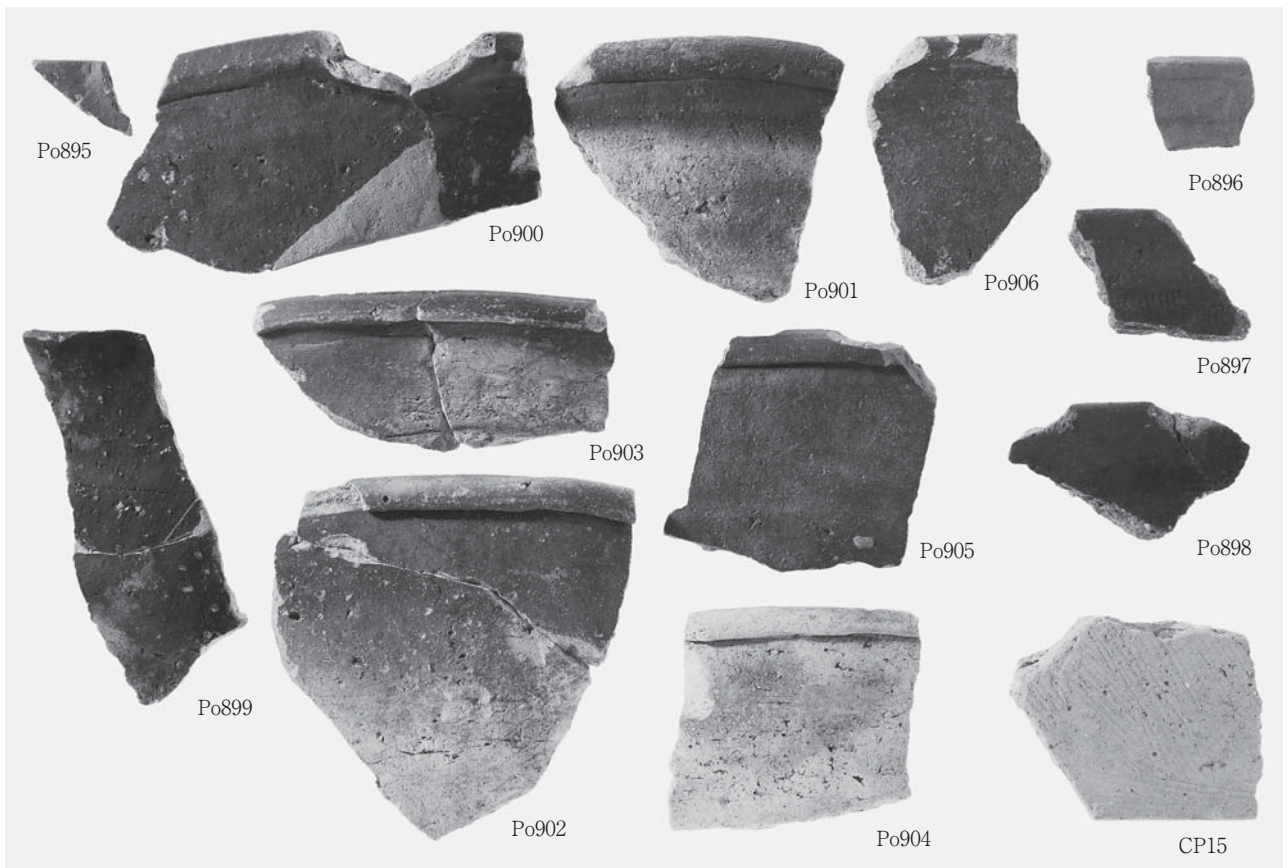
2 表土・攪乱土等出土羽釜



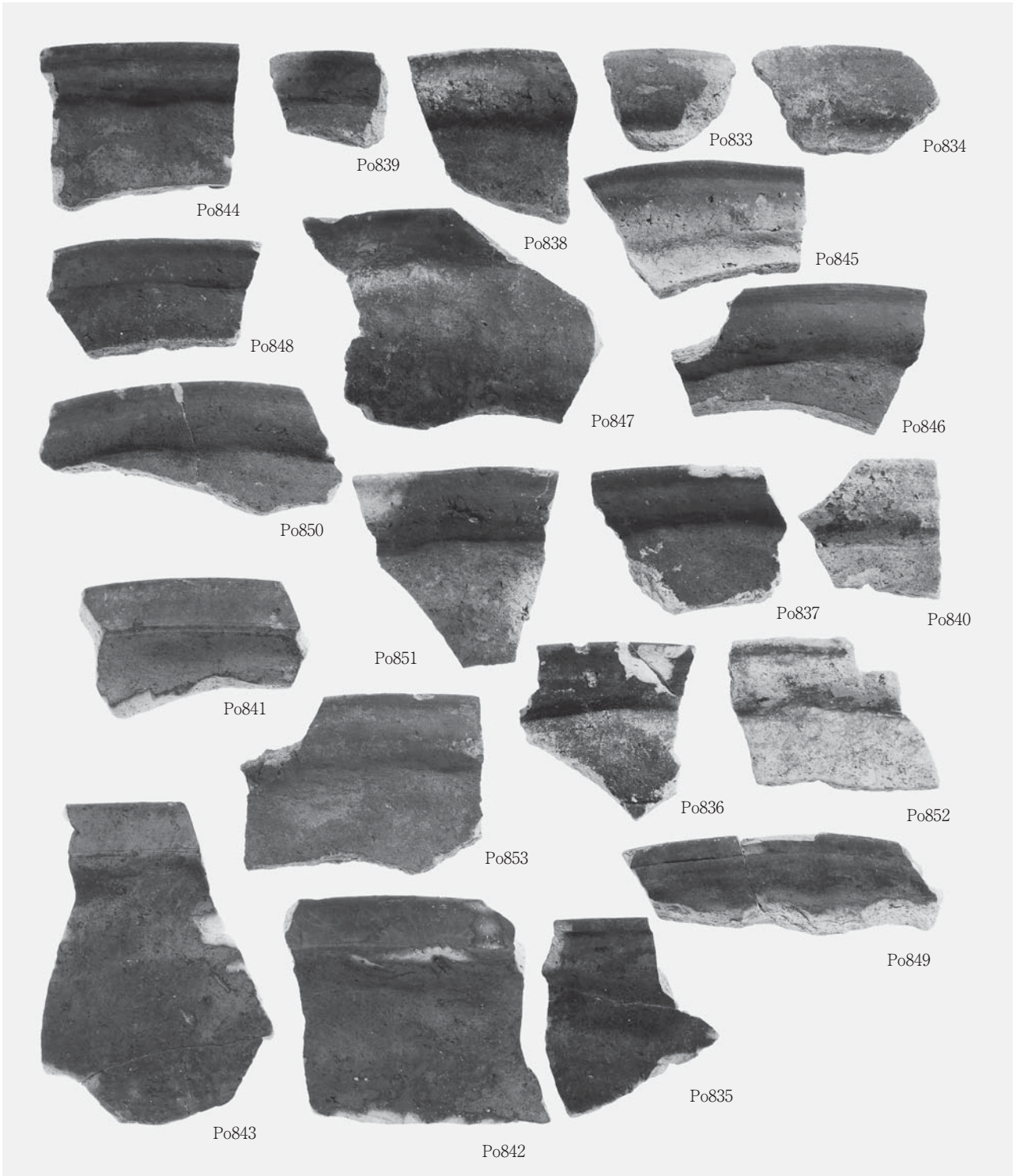
3 表土・攪乱土等出土羽釜(小型品)



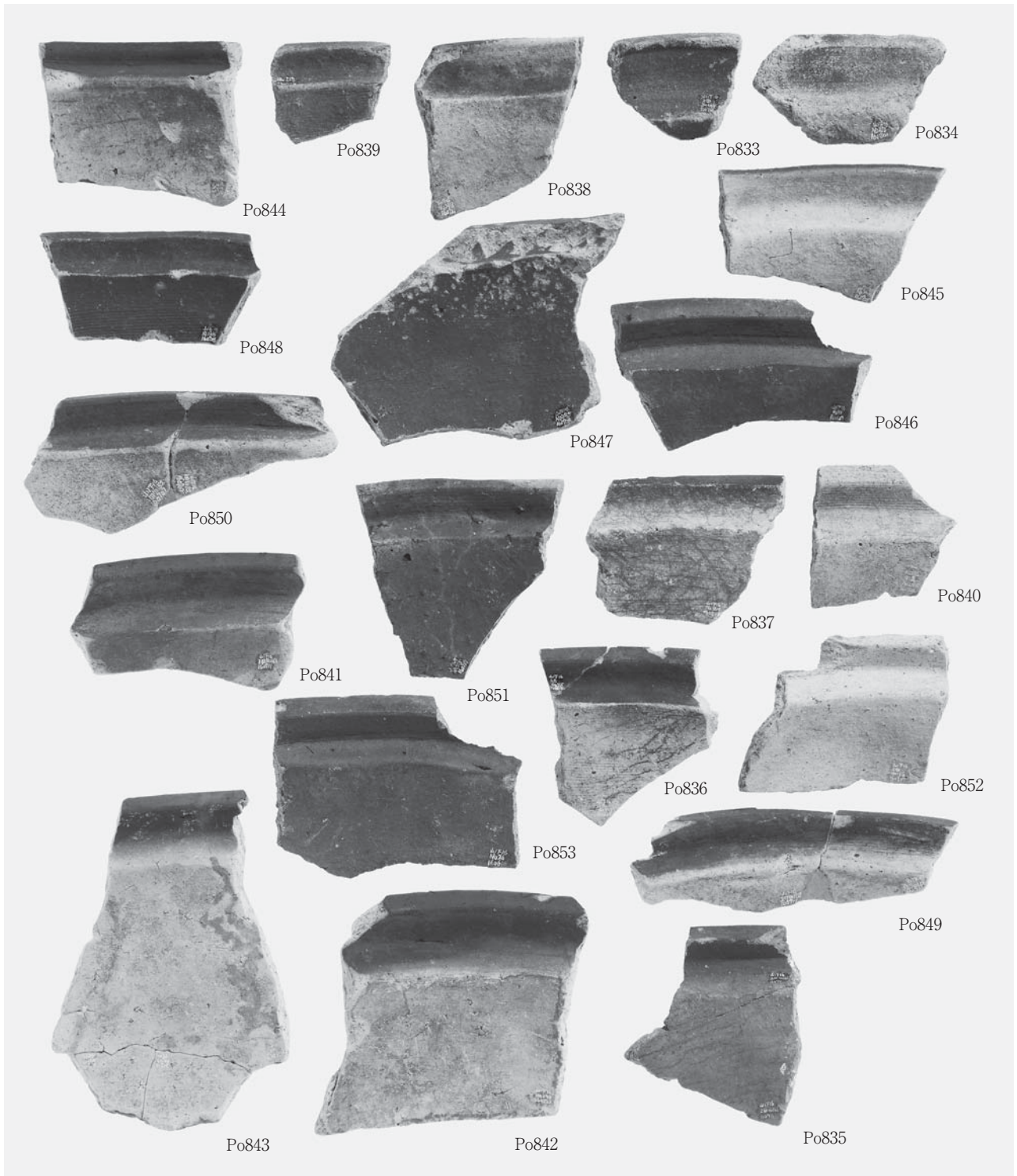
1 表土・攪乱土等出土鉢・播鉢



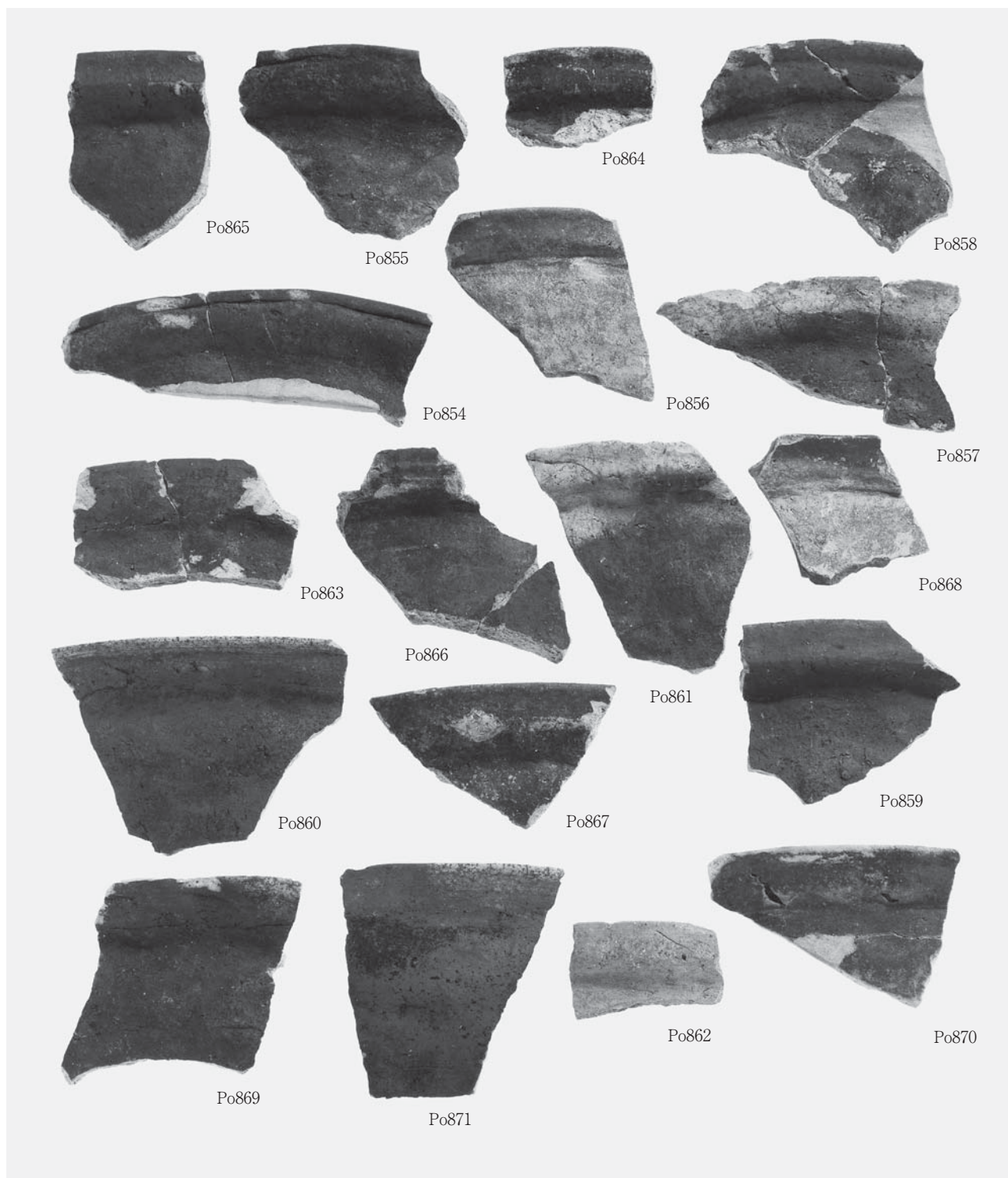
2 その他出土鉢・片口・甕・竈



その他出土鍋(1:外面)

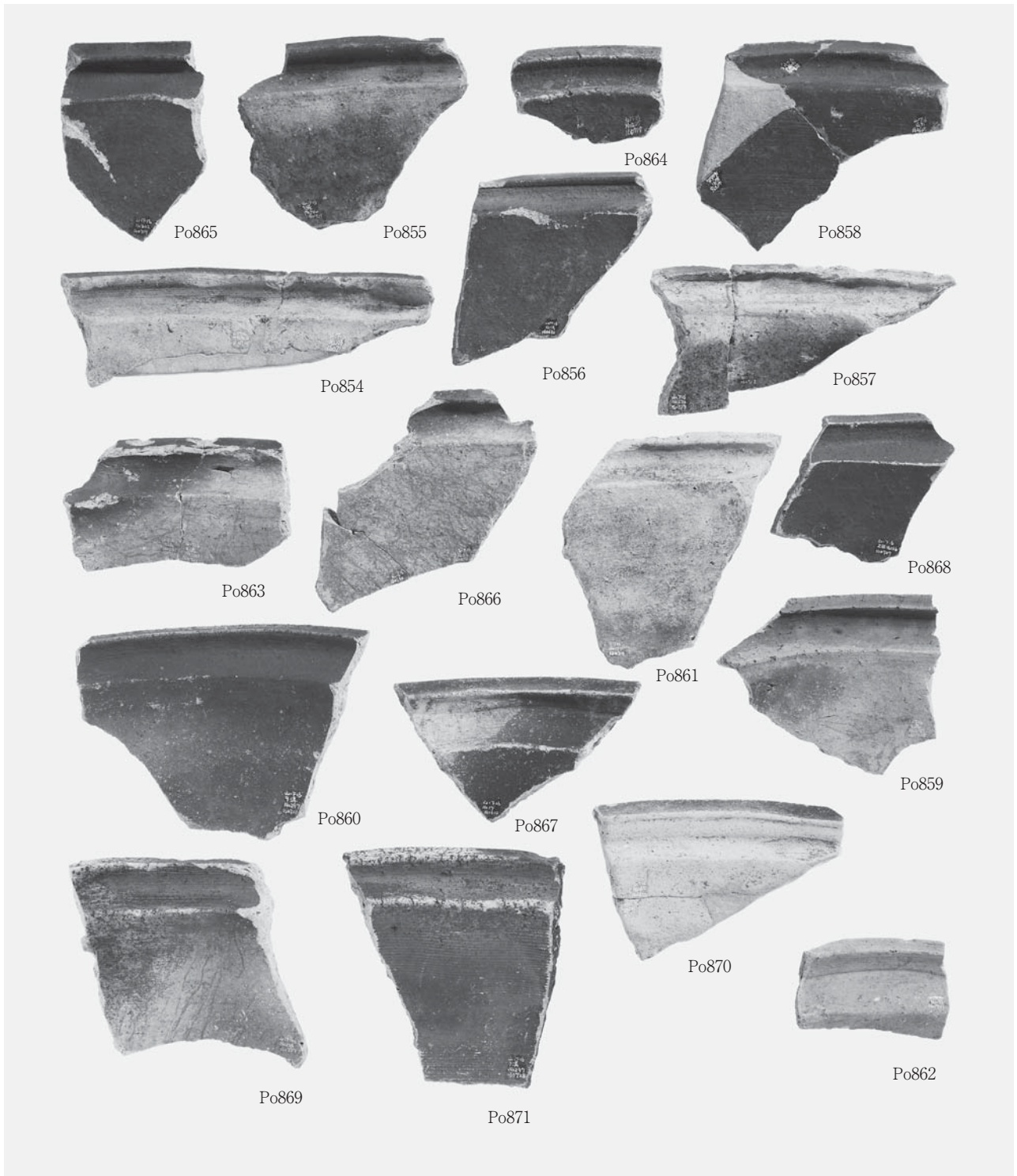


その他出土鍋(1:内面)

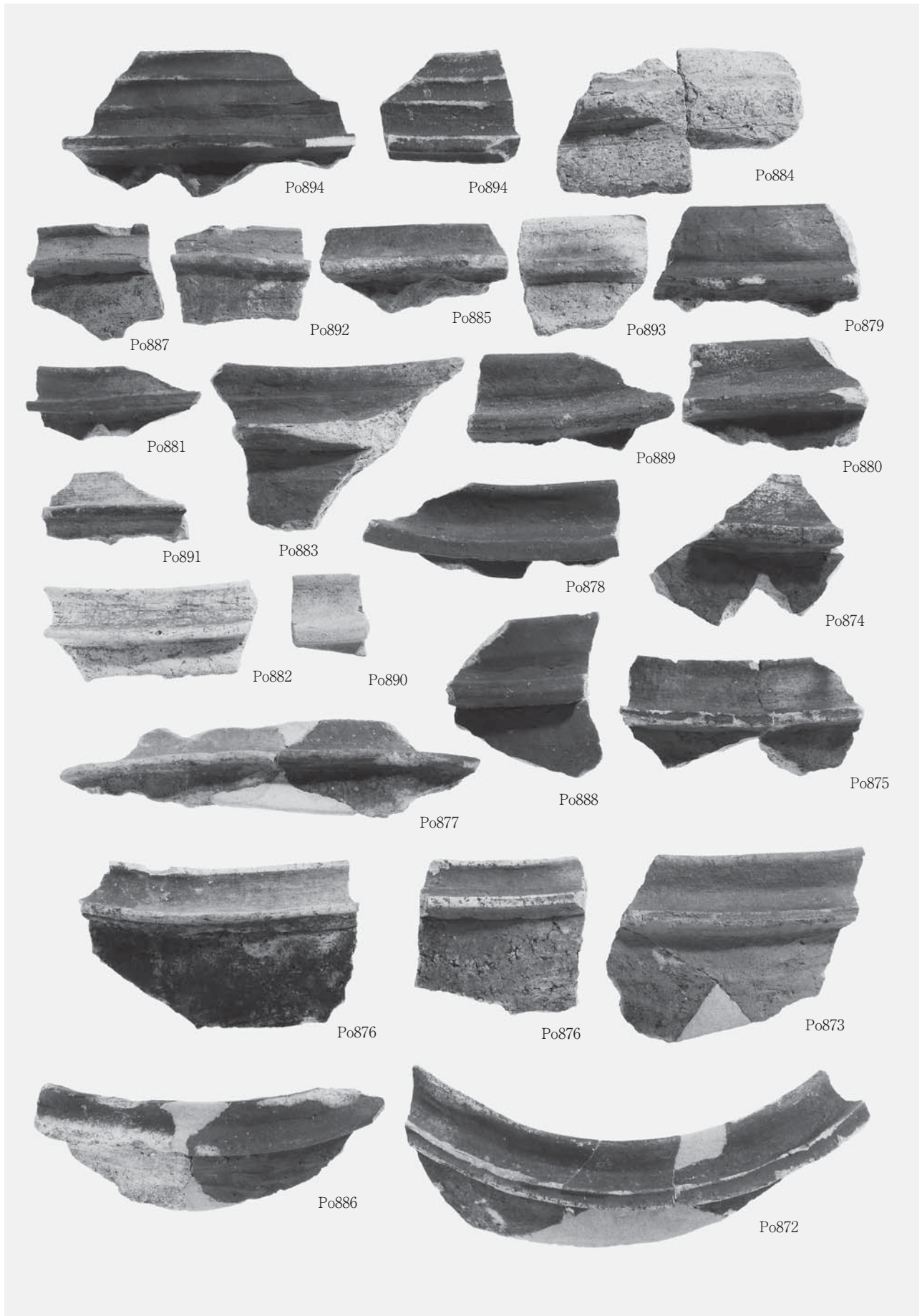


その他出土鍋(2：外面)





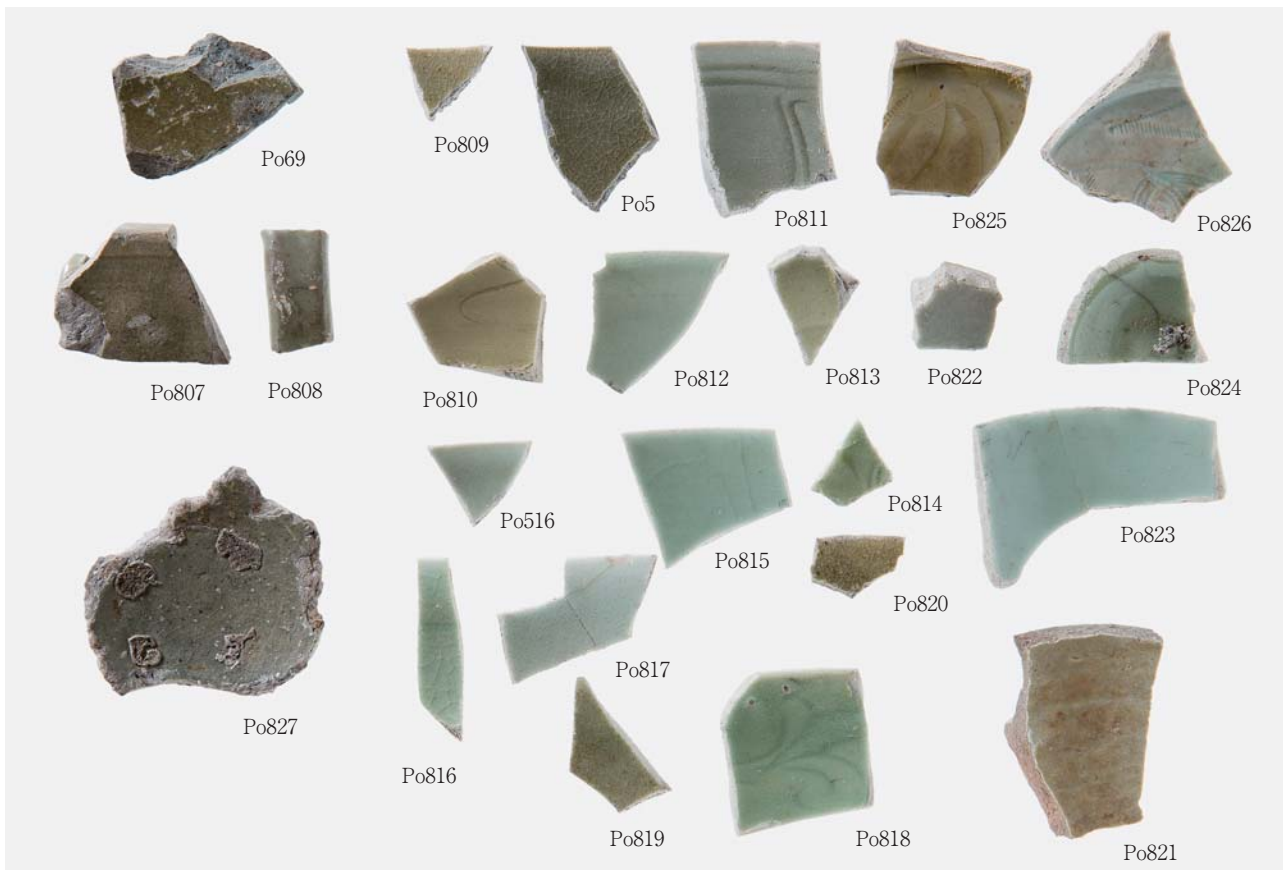
その他出土鍋(2：内面)



その他出土羽釜



1 調査区内出土青磁・朝鮮陶器(外面)



2 調査区内出土青磁・朝鮮陶器(内面)



調査区内出土白磁・青白磁(外面)



調査区内出土白磁・青白磁(内面)



1 調査区内出土黒釉・雑釉陶器(外面)



2 調査区内出土黒釉・雑釉陶器(内面)



3 調査区内出土中国陶器(外面)



4 調査区内出土中国陶器(内面)



5 調査区内出土青磁(非実測遺物：外面)



6 調査区内出土青磁(非実測遺物：内面)



1 調査区内出土白磁・青白磁(非実測遺物：外面)



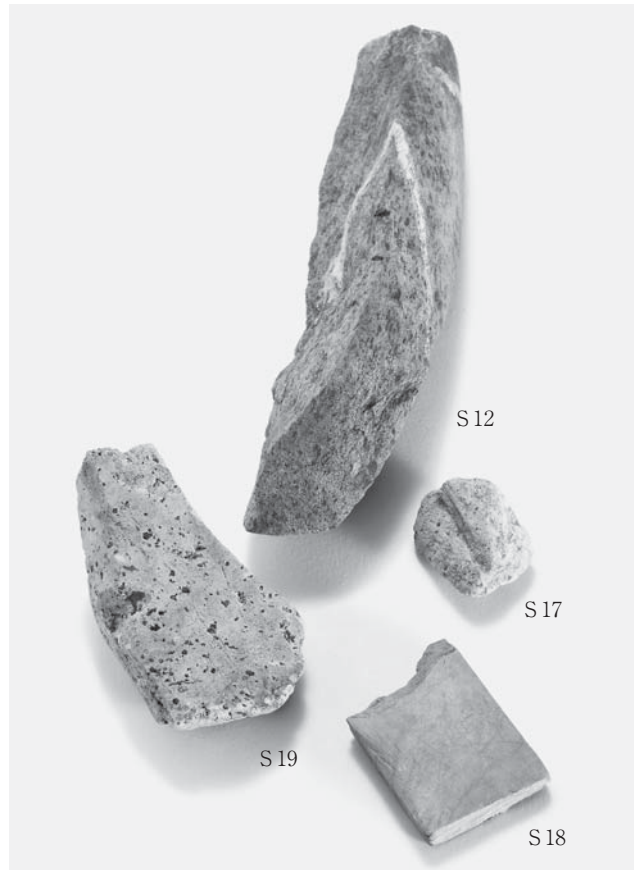
2 調査区内出土白磁・青白磁(非実測遺物：内面)



1 調査区内出土国産陶器

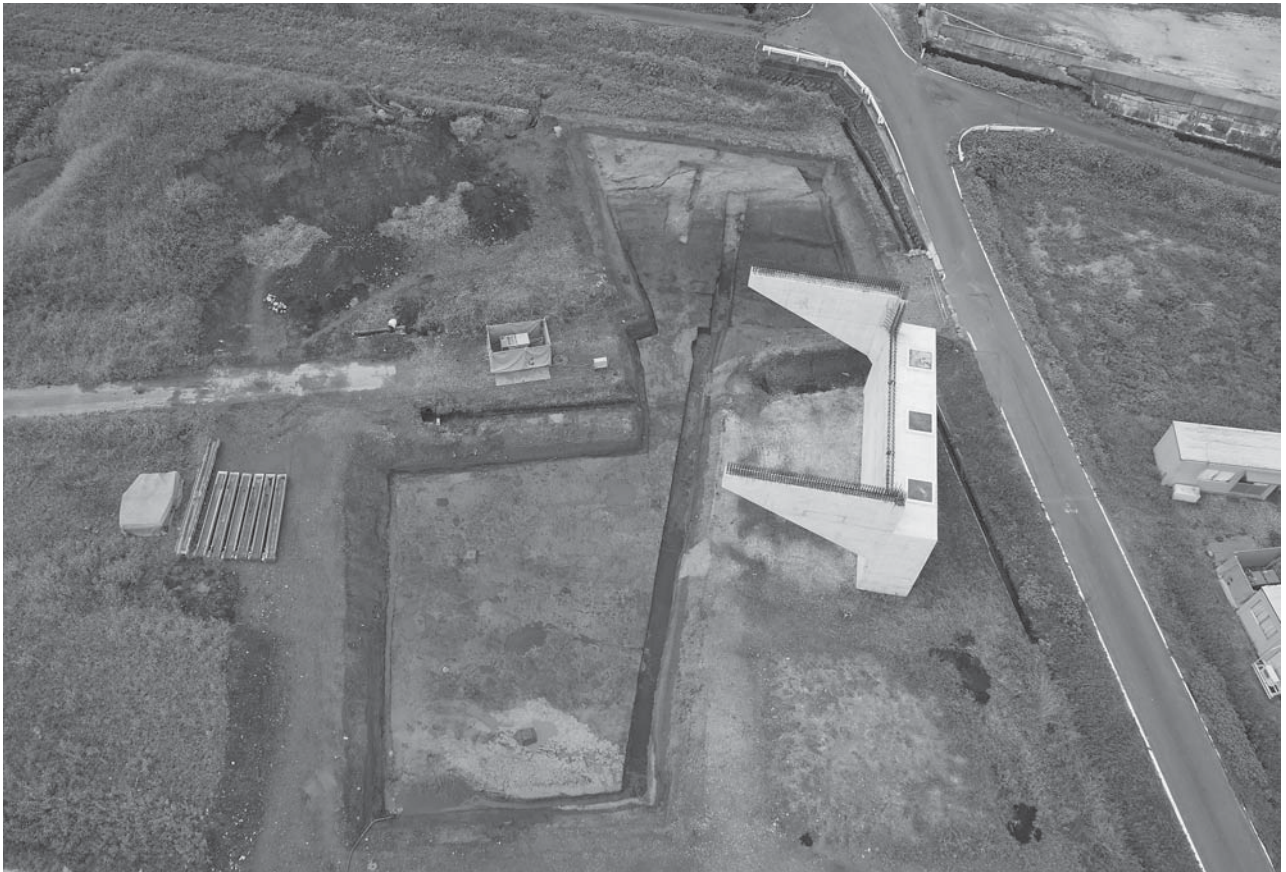


2 表土・攪乱土等出土石器(1)



3 表土・攪乱土等出土石器(2)





1 A1区盛土部 完掘状況(俯瞰)



2 流路西側完掘状況(南から)



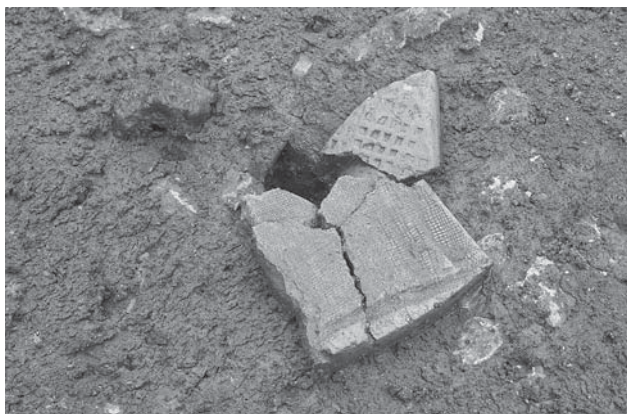
1 流路西側土層断面(南東から)



2 流路東側完掘状況(南から)



1 流路東側土層断面(南東から)



2 流路遺物(CP6他)出土状況(北から)



3 流路遺物(Po33)出土状況(北東から)



4 流路遺物(Po42他)出土状況(西から)



5 流路遺物(S6)出土状況(北東から)



1 P3区 完掘状況(俯瞰)



2 溝1・2a・2b、ピット1検出状況(北から)



1 溝1・2a・2b土層断面(北から)



2 溝2a遺物(Po52)出土状況(北から)



3 溝1・2a・2b完掘状況(北から)



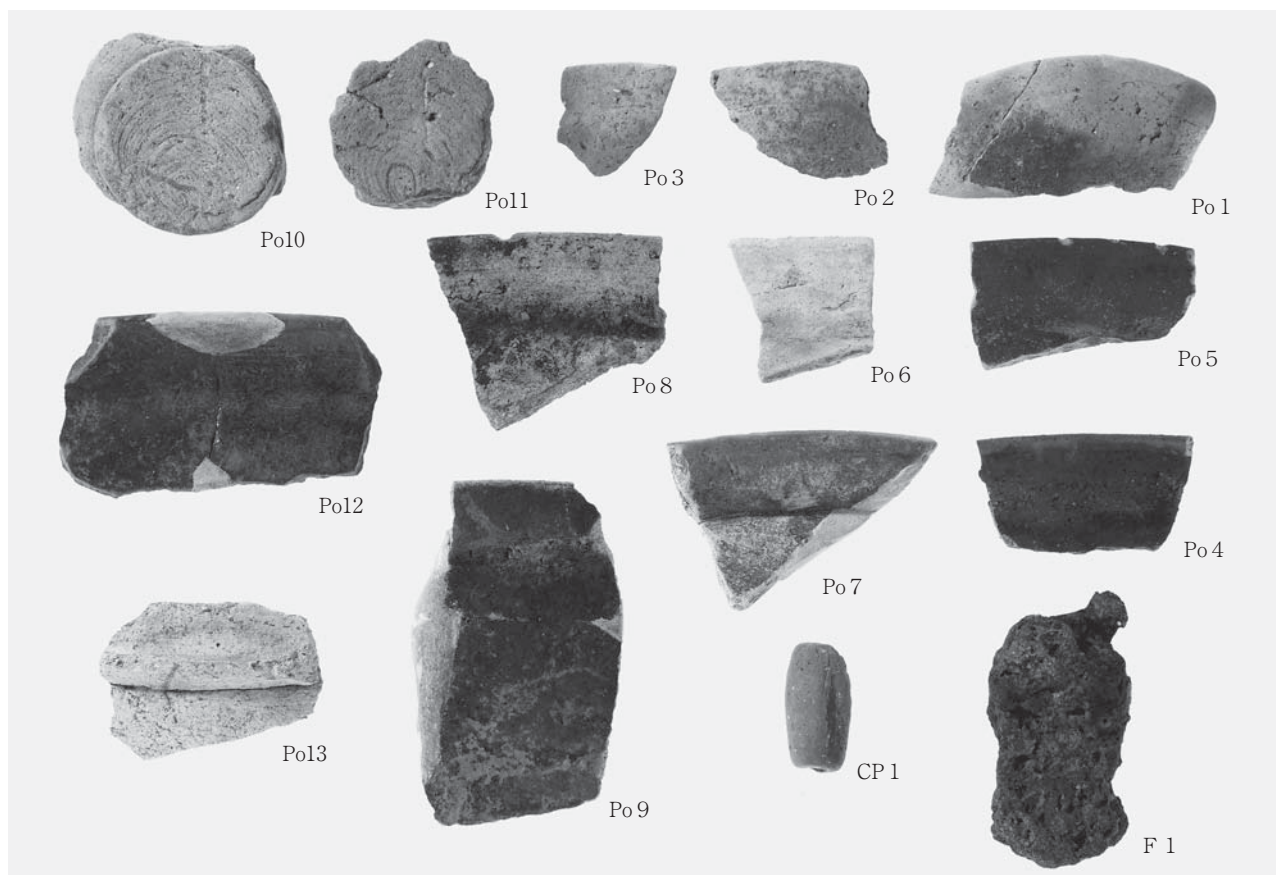
4 溝1・2a・2b、ピット1完掘状況(北から)



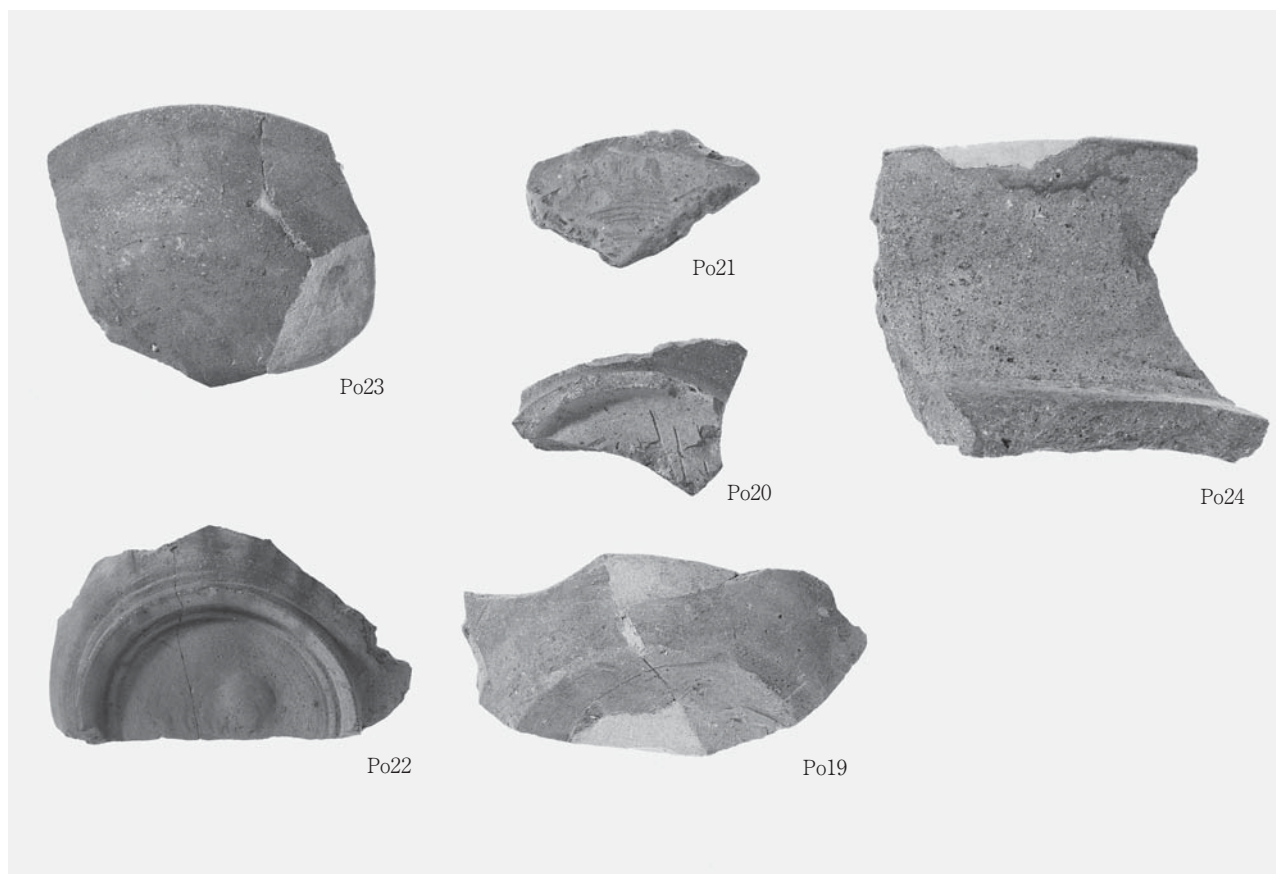
1 北西壁土層断面(北東から)



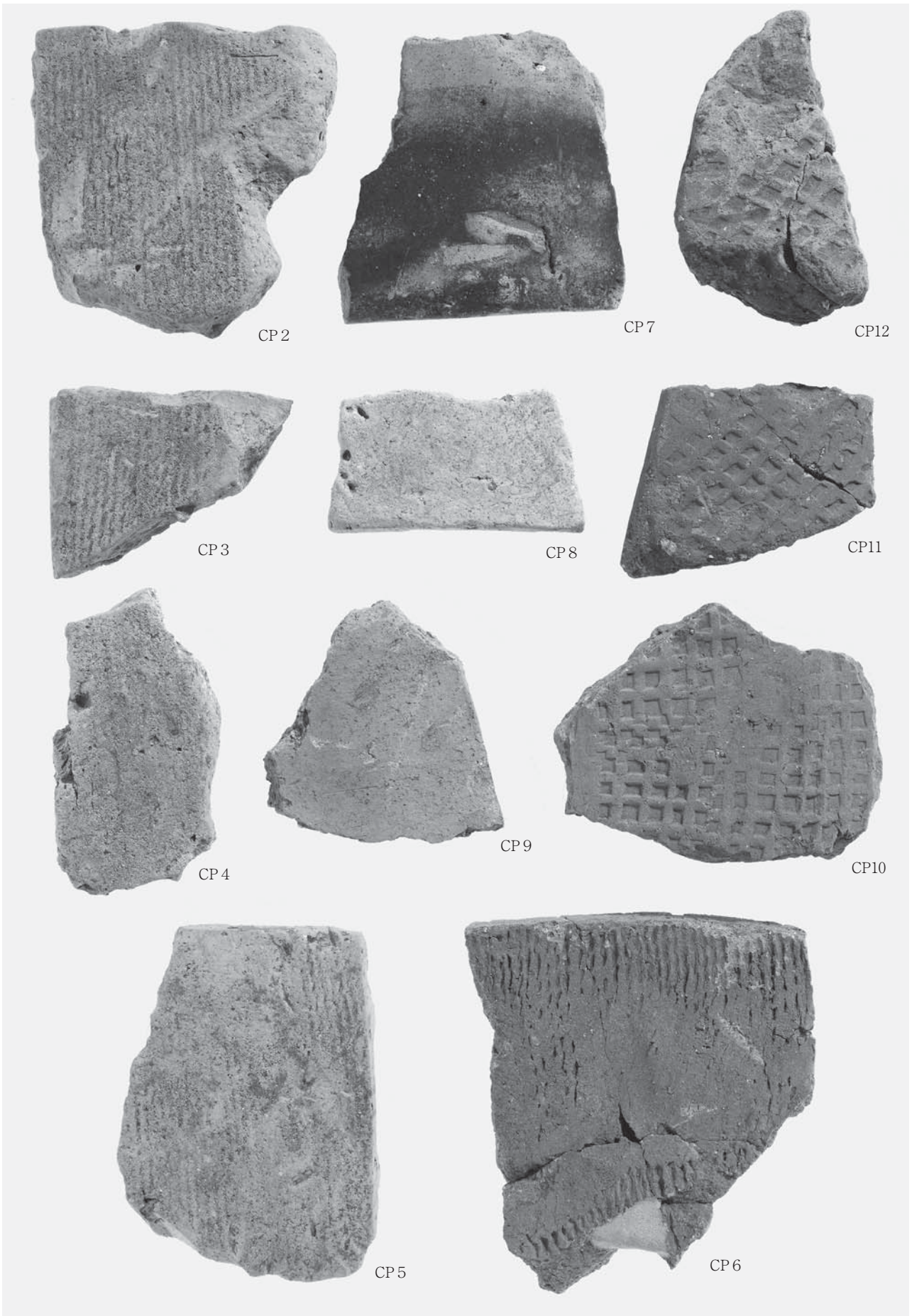
2 北東壁土層断面(南西から)



1 流路1層出土土器・土製品・鉄関連遺物

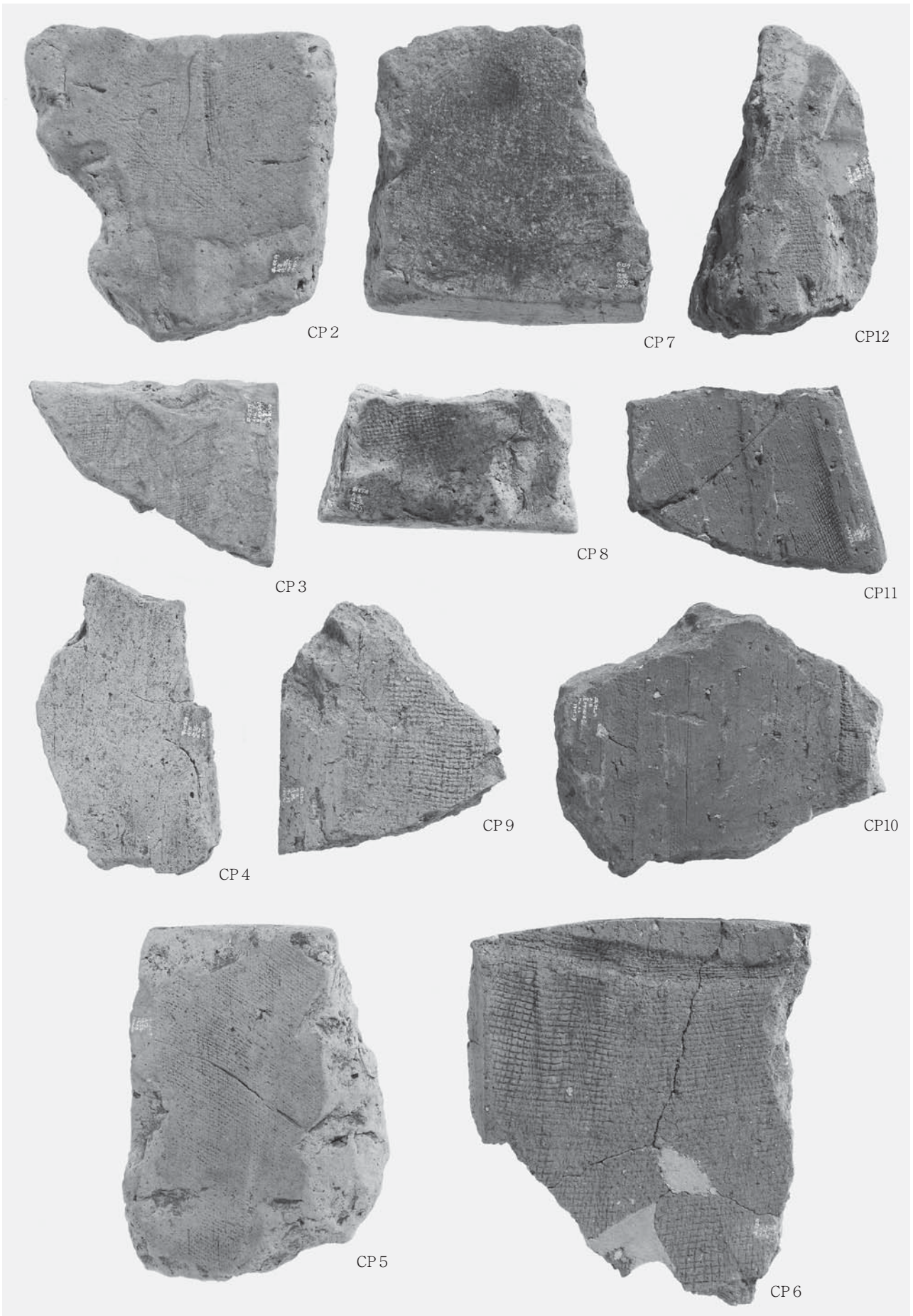


2 流路1層出土須恵器

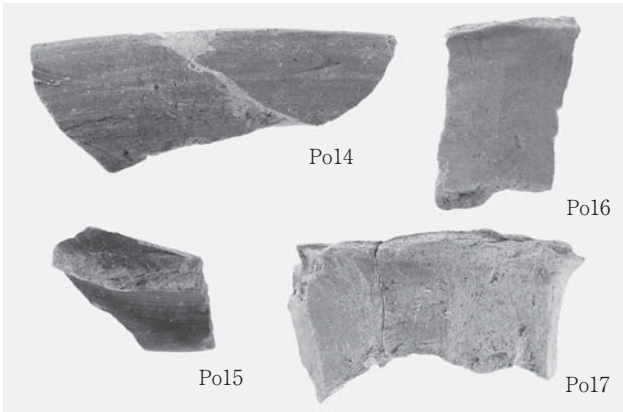


流路1層出土瓦(凸面)

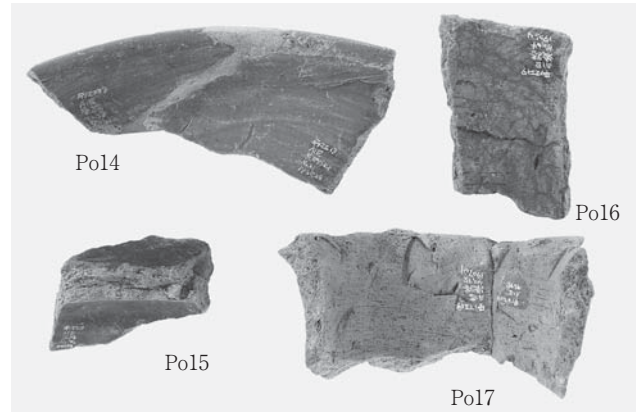




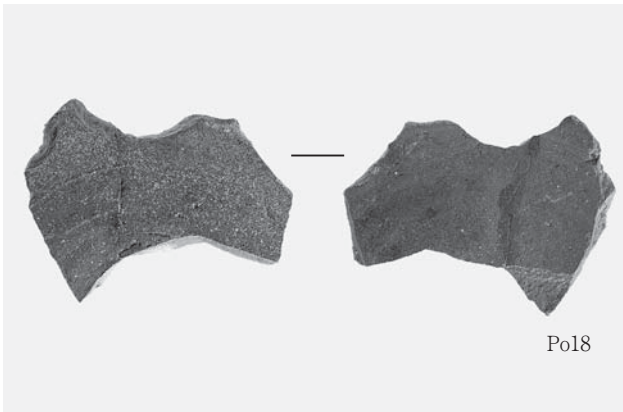
流路1層出土瓦(凹面)



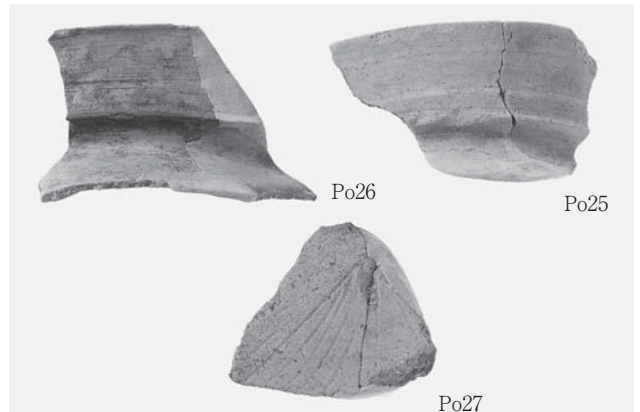
1 流路1層出土赤彩土師器(外面)



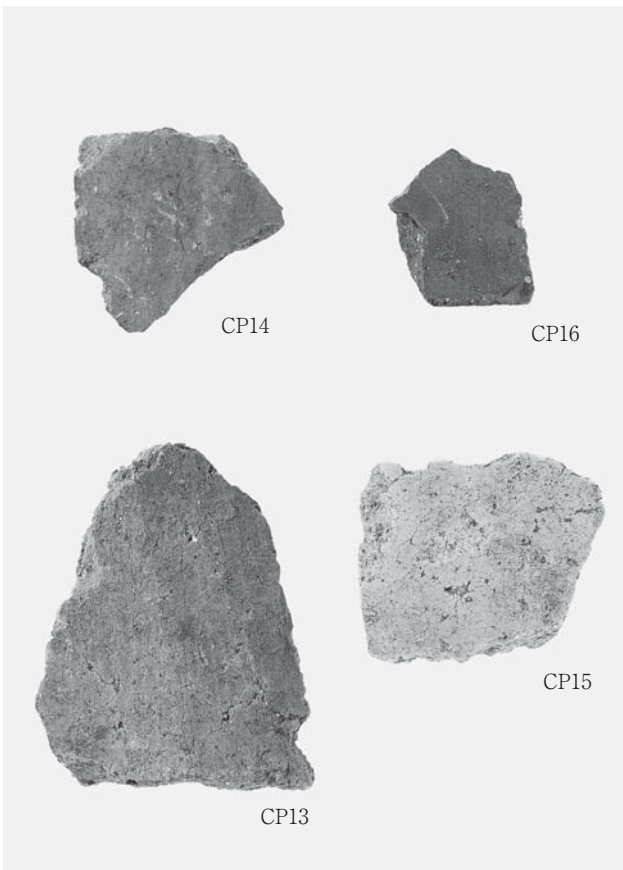
2 流路1層出土赤彩土師器(内面)



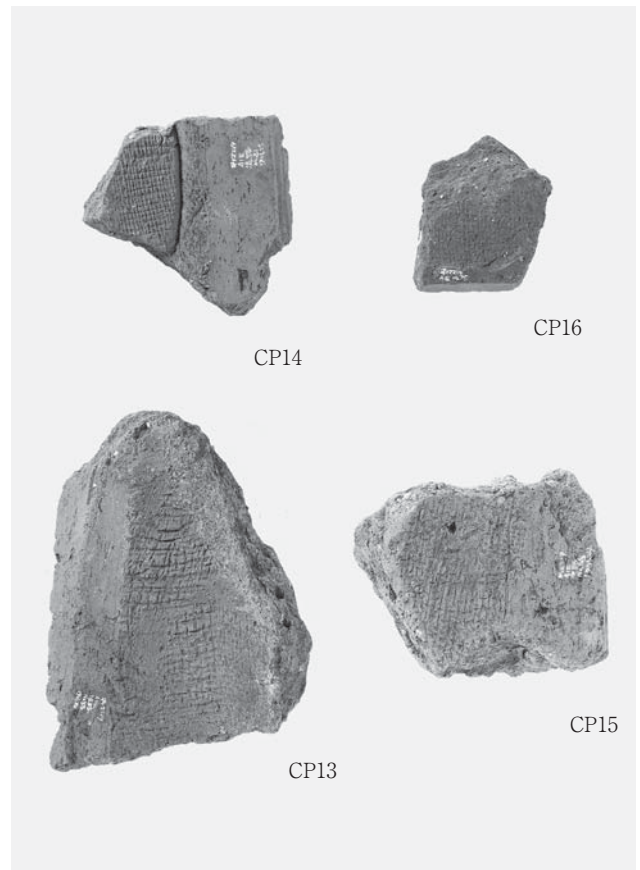
3 流路1層出土転用硯



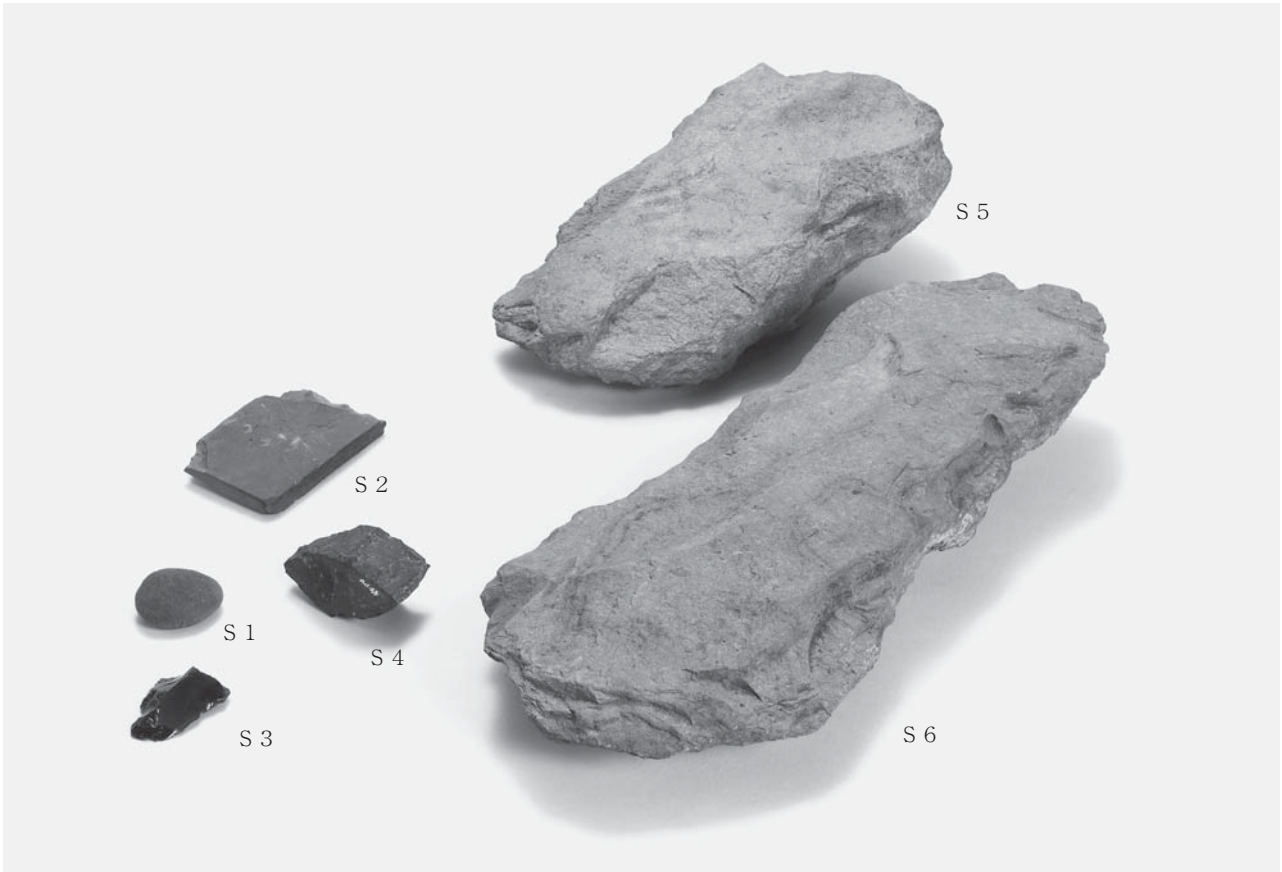
4 流路1層出土土師器・弥生土器



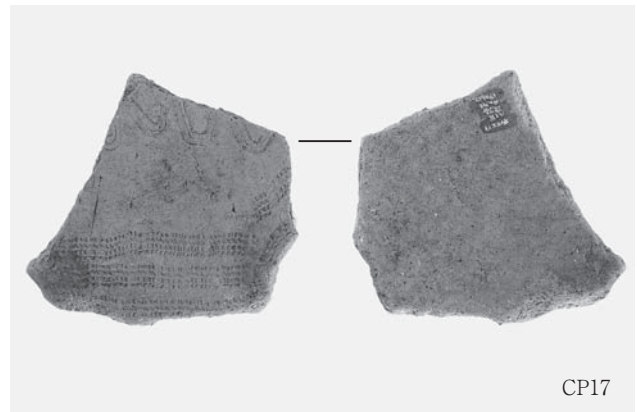
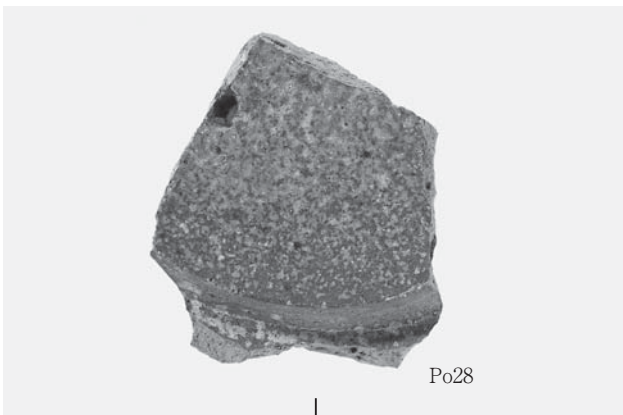
5 流路1層出土丸瓦(凸面)



6 流路1層出土丸瓦(凹面)



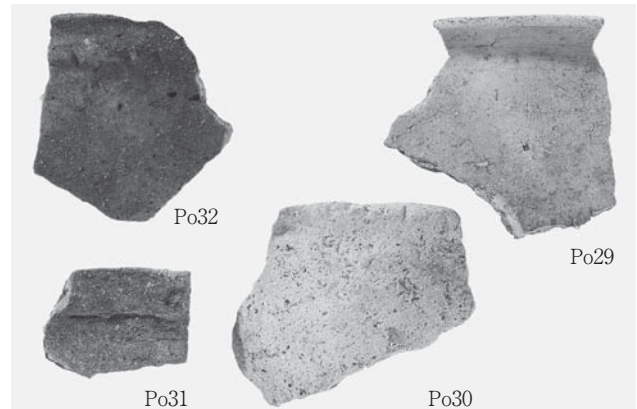
1 流路1層出土石器



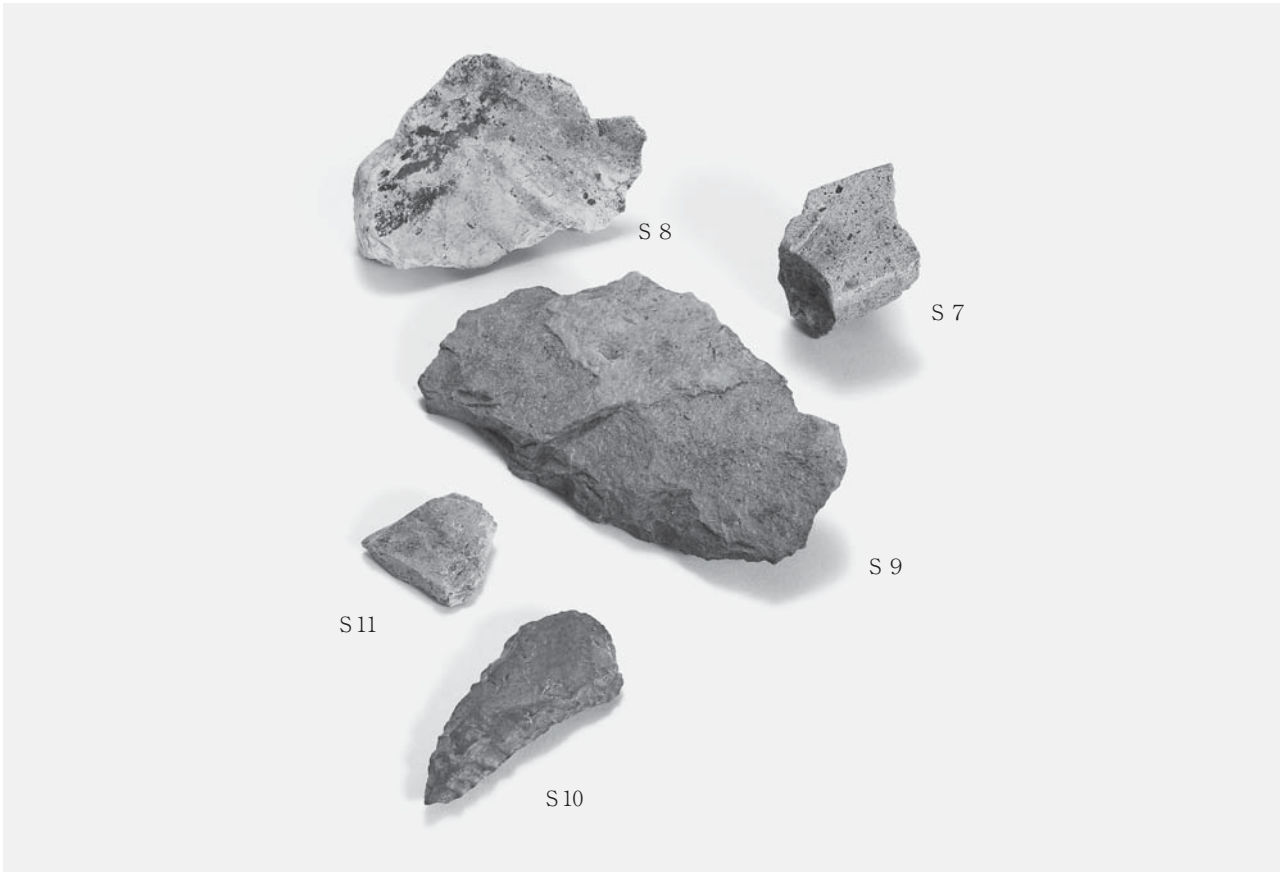
3 流路2層出土分銅形土製品



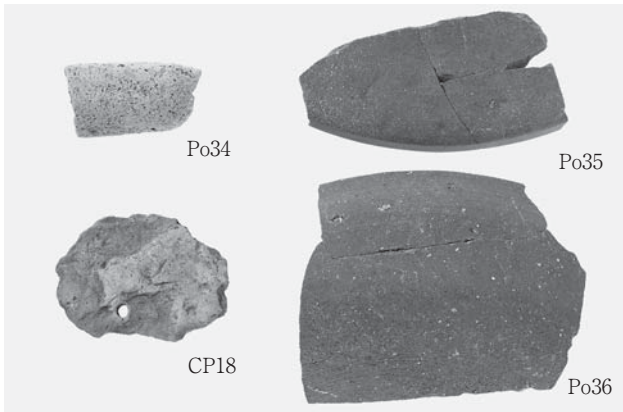
2 流路2層出土円面硯



4 流路2層出土土器



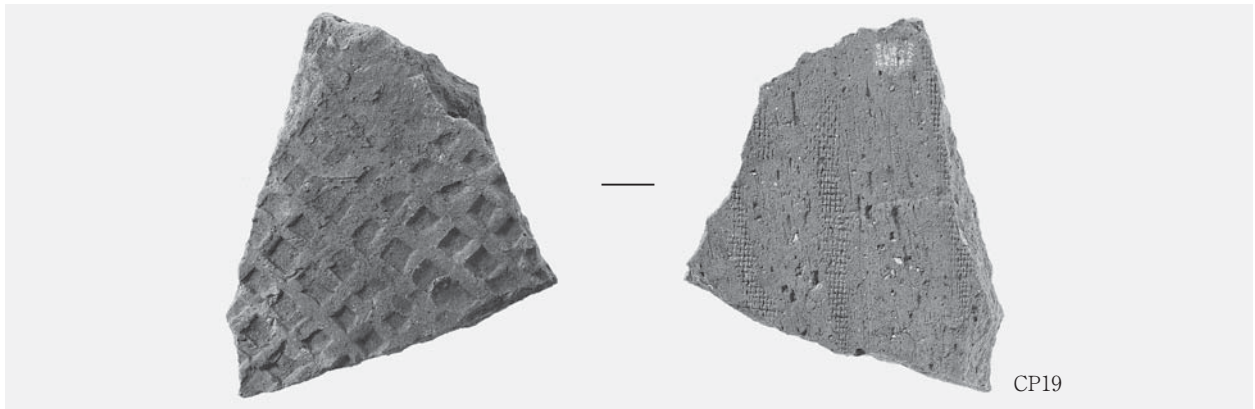
1 流路2層出土石器



2 流路4層出土土器・土製品



3 流路4層出土土師器甕



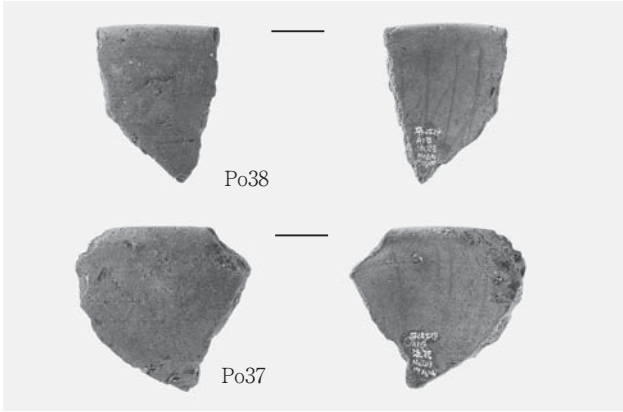
4 流路4層出土瓦



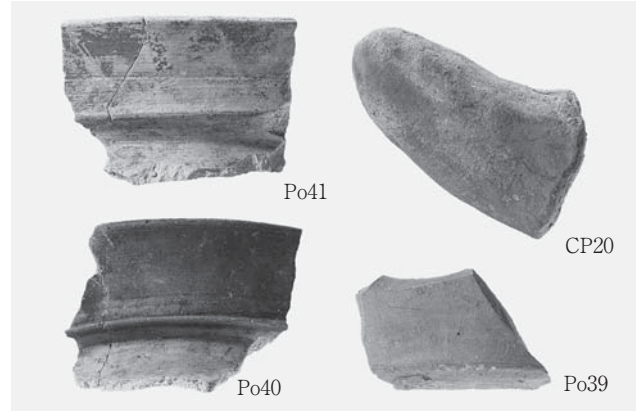
1 流路4層出土石鍬



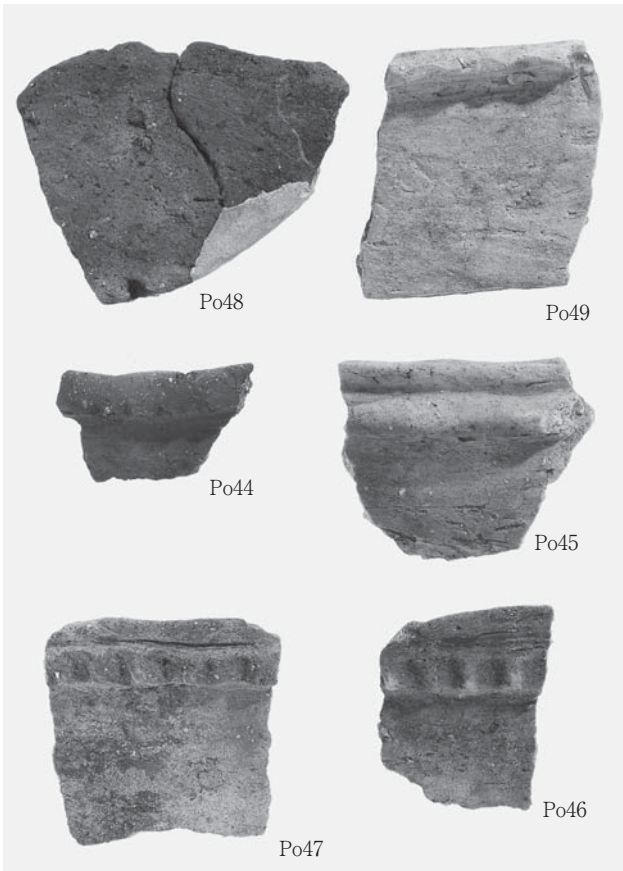
2 流路5～8層出土土師器壺



1 A1区盛土部流路5～8層出土赤彩土師器



2 A1区盛土部流路5～8層出土土師器・須恵器・土製品



3 A1区盛土部流路10・12・13層出土縄文土器



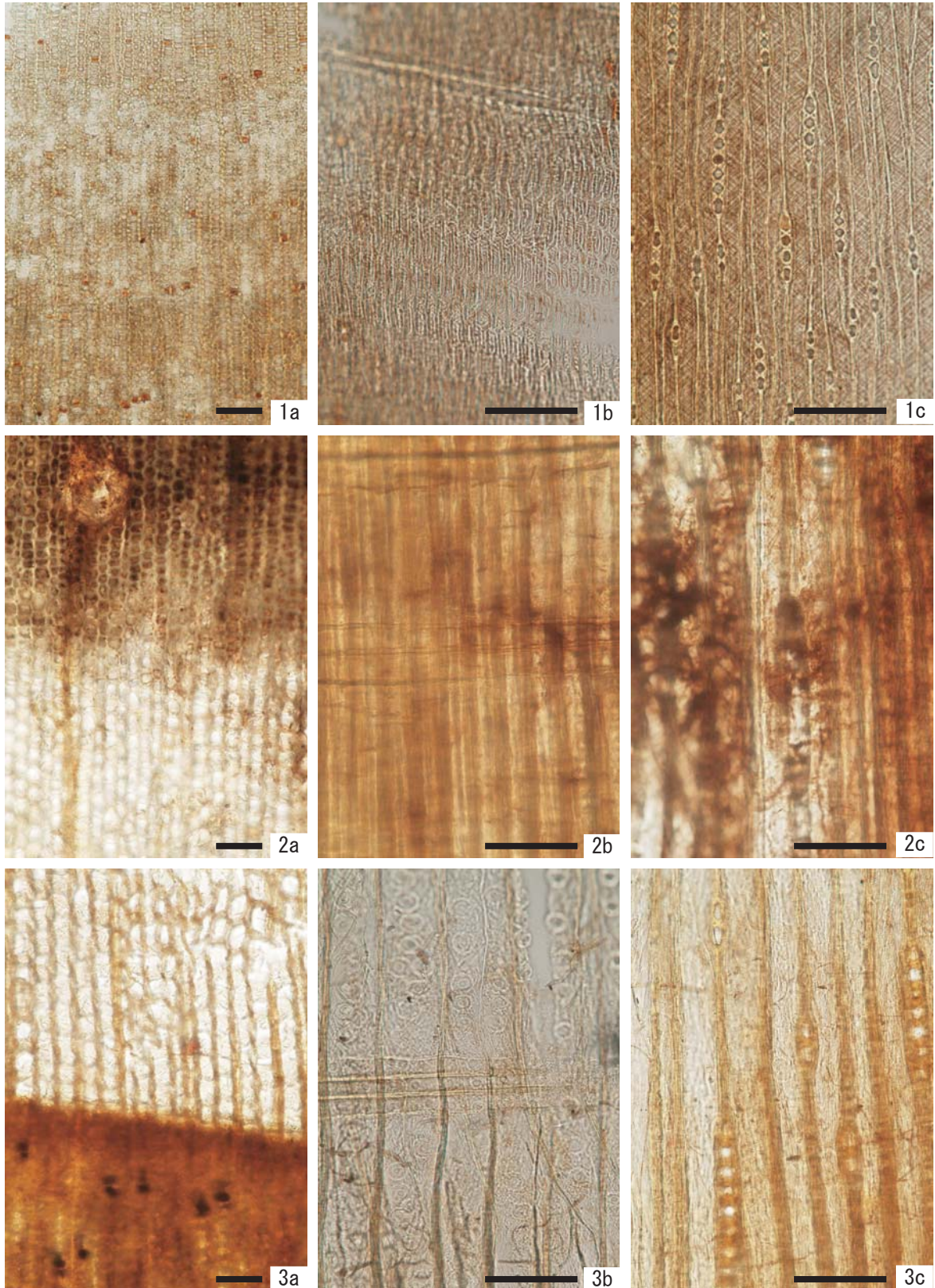
4 A1区盛土部流路10・12・13層出土石器



5 A1区盛土部遺構外出土土師器

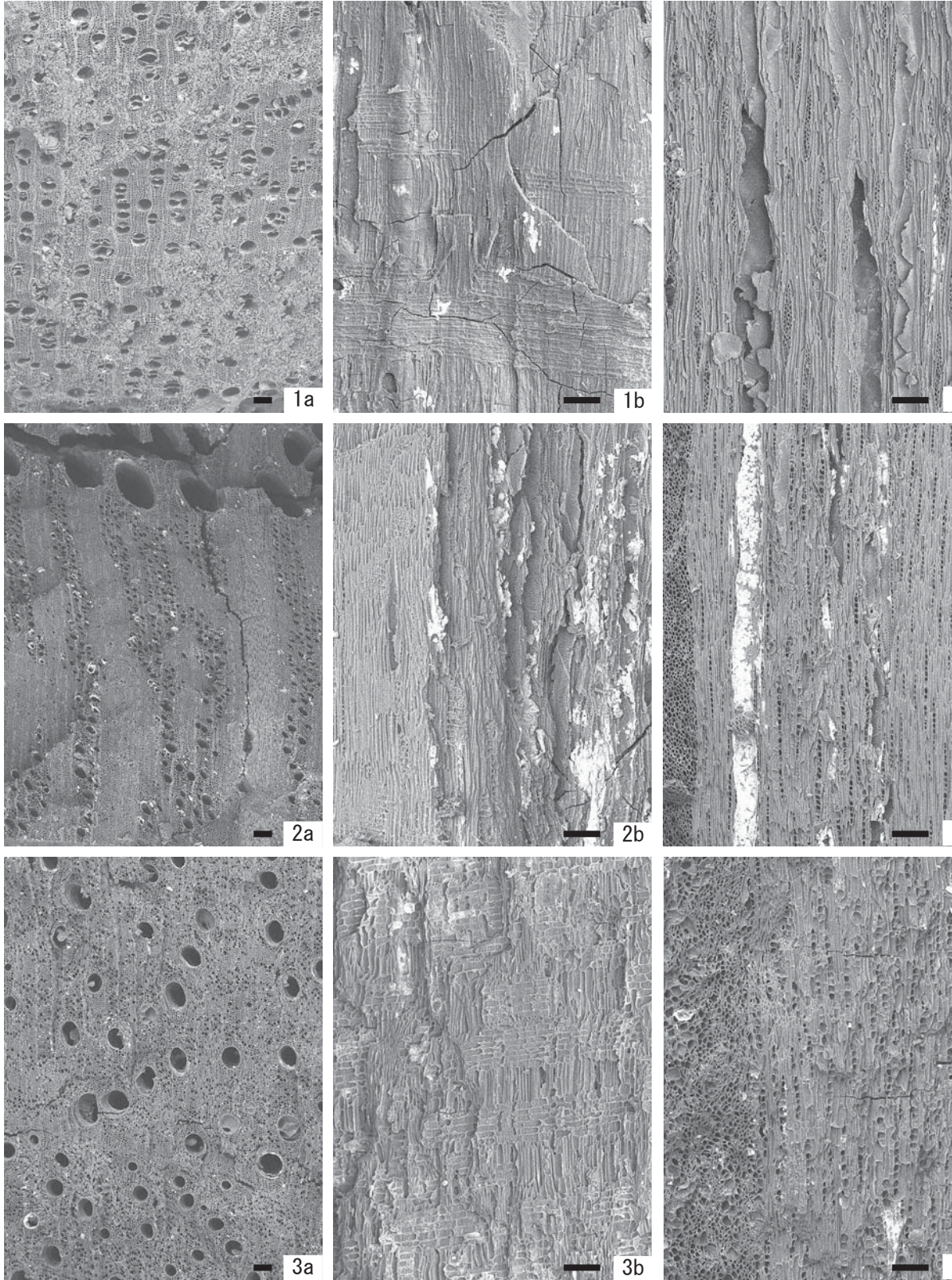


6 P3区溝2a出土土師器甕



1. イヌガヤ (No. 10)  
2. マツ属複維管束亜属 (No. 17)  
3. スギ (No. 20)

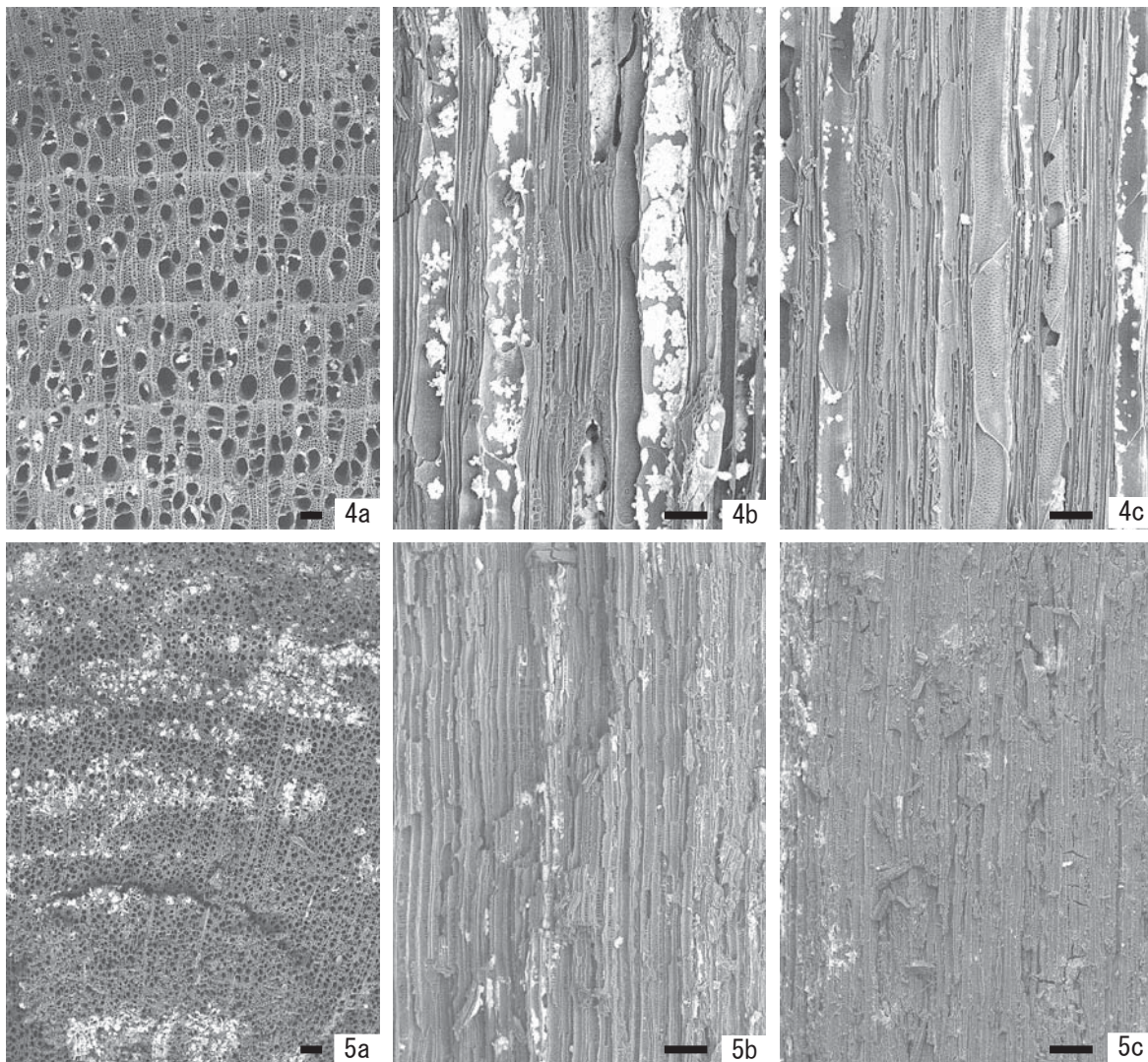
a:木口 b:柁目 c:板目  
スケールは100 $\mu$ m



1. カバノキ属 (No. 9)  
2. コナラ亜属コナラ節 (No. 2)  
3. アカガシ亜属 (No. 5)

a:木口 b:柁目 c:板  
スケールは100  $\mu$ m

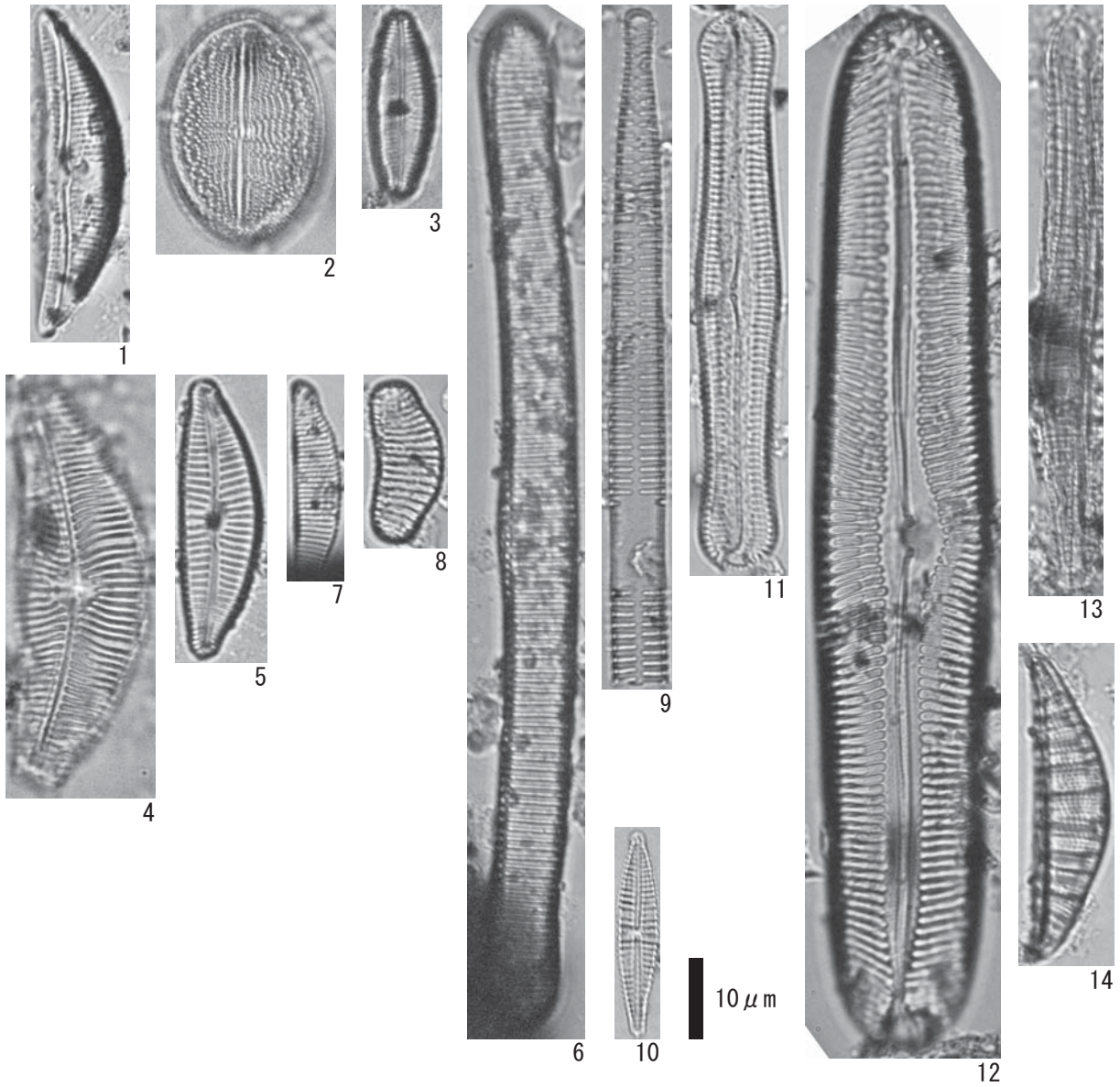




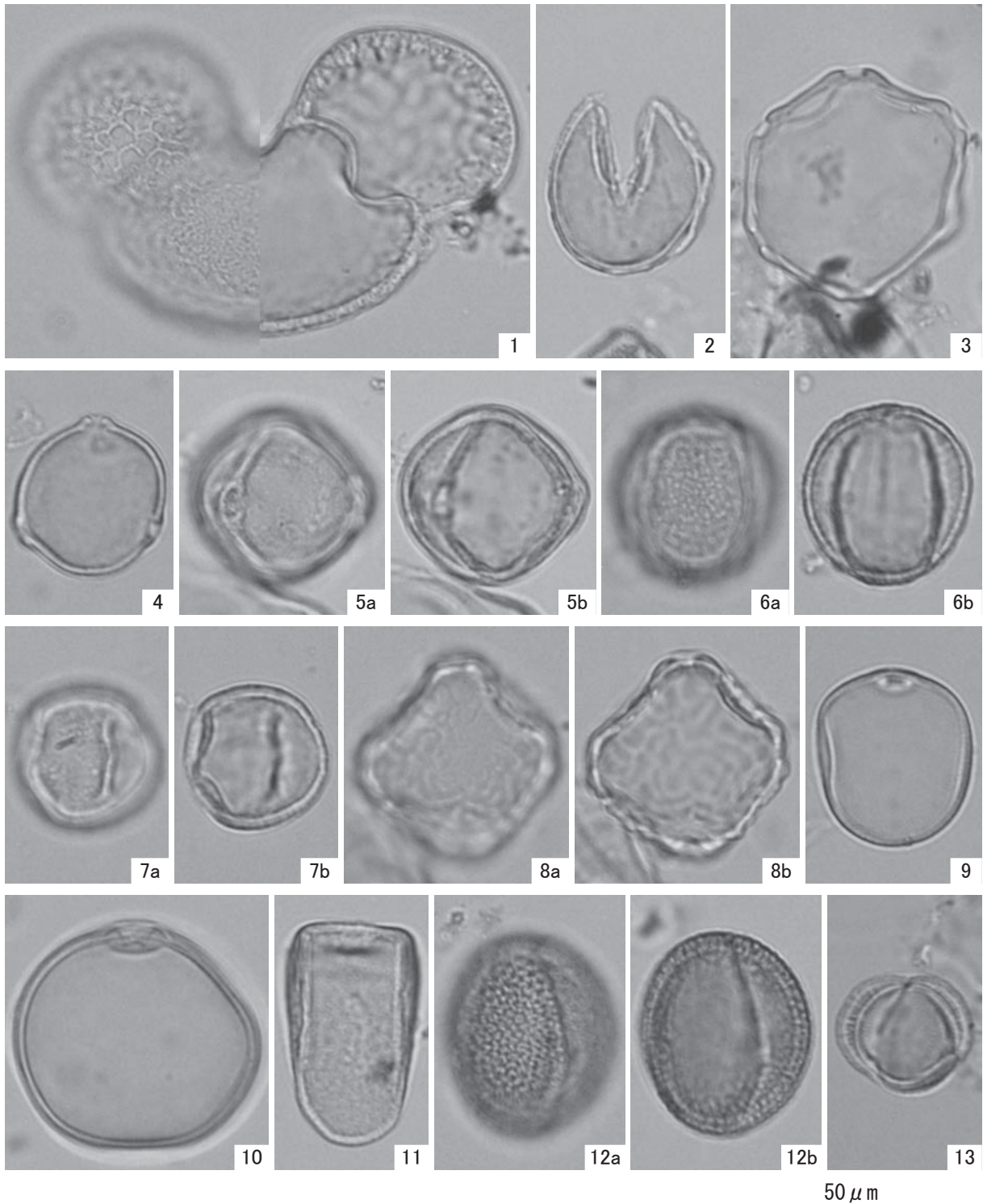
4. カエデ属 (No. 8)  
5. ツバキ属 (No. 15)

a: 木口 b: 年輪 c: 年輪  
スケールは100  $\mu$ m

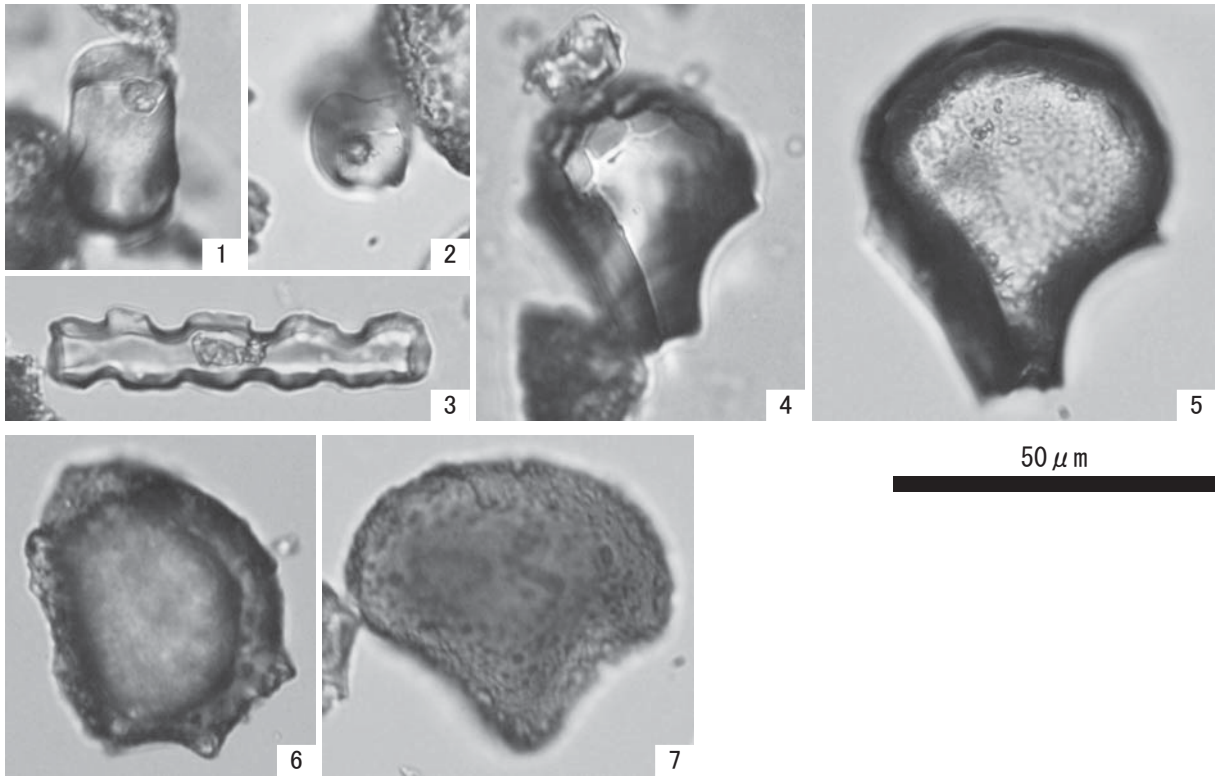
山ノ下遺跡 出土炭化材顕微鏡写真(2)



1. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (A1区盛土部 1層:1)
2. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Cleve (A1区盛土部 1層:1)
3. *Cymbella subaequalis* Grunow (A1区盛土部 1層:1)
4. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck (A1区盛土部 1層:1)
5. *Cymbella turgidula* Grunow (A1区盛土部 1層:1)
6. *Eunotia formica* Ehrenberg (A1区盛土部 9a層:3)
7. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (A1区盛土部 1層:1)
8. *Eunotia praerupta* var. *bidens* (Ehr.) Grunow (A1区盛土部 4層:2)
9. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (A1区盛土部 9a層:3)
10. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (A1区盛土部 1層:1)
11. *Pinnularia acrosphaeria* W. Smith (A1区盛土部 1層:1)
12. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (A1区盛土部 11層:4)
13. *Rhopalodia gibba* (Ehr.) Mueller (A1区盛土部 9a層:3)
14. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller (A1区盛土部 1層:1)



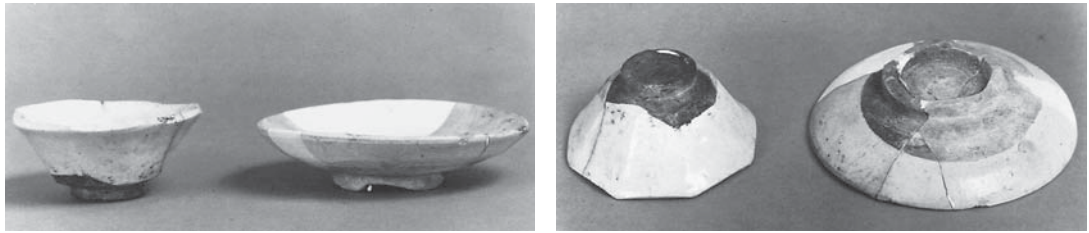
- |                              |                               |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1. マツ属 (A1区盛土部 1層; 1)        | 2. スギ属 (A1区盛土部 1層; 1)         |
| 3. サワグルミ属 (A1区盛土部 1層; 1)     | 4. クマシデ属—アサダ属 (A1区盛土部 1層; 1)  |
| 5. ブナ属 (A1区盛土部; 1層)          | 6. コナラ属コナラ亜属 (A1区盛土部 1層; 1)   |
| 7. コナラ属アカガシ亜属 (A1区盛土部 1層; 1) | 8. ニレ属—ケヤキ属 (A1区盛土部 1層; 1)    |
| 9. イネ科 (A1区盛土部; 1層)          | 10. イネ科 (イネ属型) (A1区盛土部 1層; 1) |
| 11. カヤツリグサ科 (A1区盛土部 1層; 1)   | 12. ソバ属 (A1区盛土部 1層; 1)        |
| 13. ヨモギ属 (A1区盛土部 1層; 1)      |                               |



- |                                  |                               |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 1. クマザサ属短細胞珪酸体 (P3区 溝2a2層;9)     | 2. ヨシ属短細胞珪酸体 (P3区 溝2b1層;10)   |
| 3. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (P3区 溝2b1層;10) | 4. イネ属機動細胞珪酸体 (P3区 溝2a2層;9)   |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体 (P3区 溝2b1層;10)     | 6. クマザサ属機動細胞珪酸体 (P3区 溝2a2層;9) |
| 7. ヨシ属機動細胞珪酸体 (P3区 溝2a2層;9)      |                               |

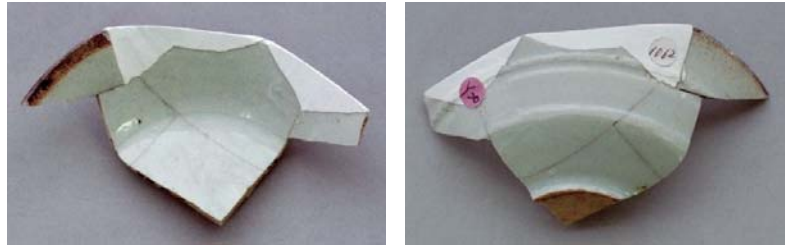
平ノ前遺跡 植物珪酸体顕微鏡写真

白磁



皿・坏 森田D群  
宮崎市曾井城跡出土

青白磁



坏 B'群  
熊本県祇園遺跡



唐児唐草文瓶 京都市岡崎動物園  
法勝寺跡出土 京都国立博物館蔵



牡丹唐草文瓶  
京都市太秦井戸廢寺出土



梅瓶  
金沢市堅田B遺跡SD01堀埋立

黒釉

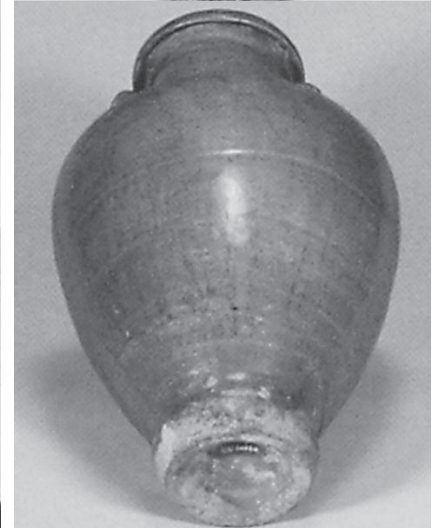
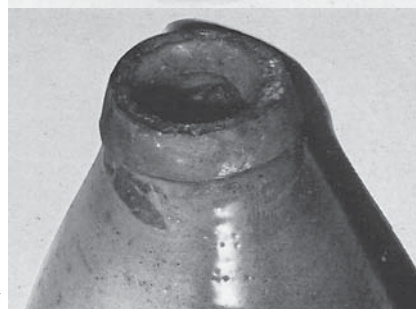
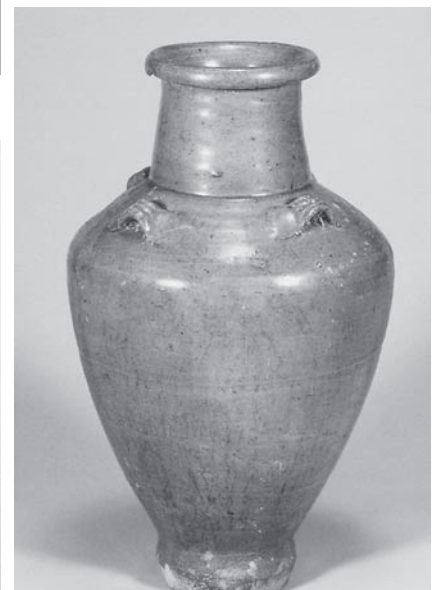
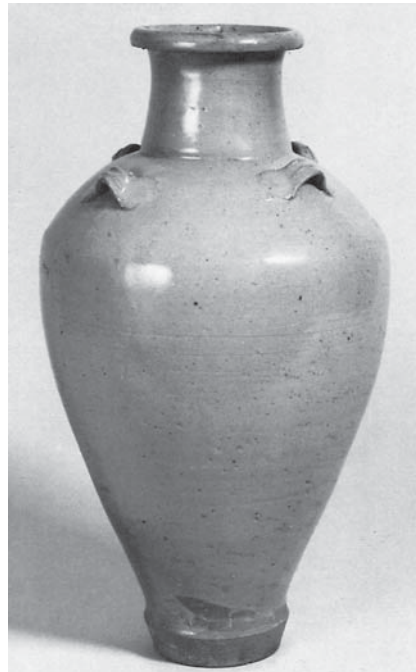
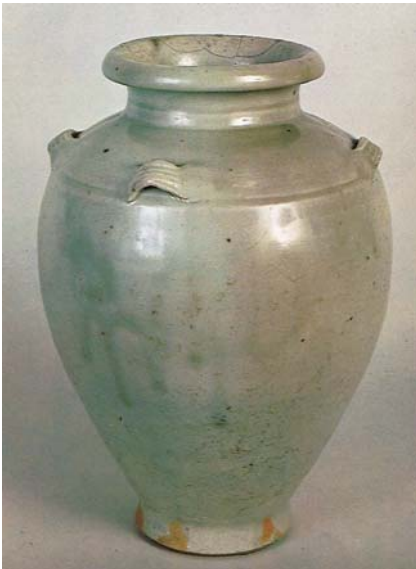


碗 金沢市堅田B遺跡SD01堀埋立

白磁



碗Ⅱ-4b 熊本県灰塚遺跡SK205土壙墓



四耳壺Ⅲ-1類 松山市石手町石手経塚

四耳壺Ⅲ-3類  
埼玉県東松山市岡・光福寺境内

四耳壺Ⅲ-3類 韓国新安沈没船

龍泉窯系青磁



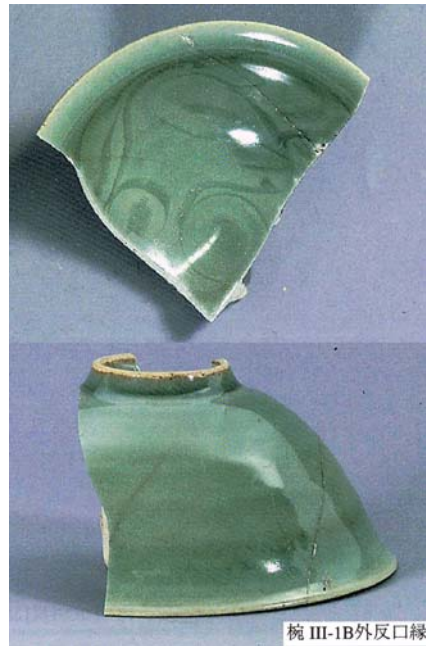
碗 I-4b類  
大宰府条坊跡第93次調査ST060

碗 I-4b



碗 III-1B直口縁

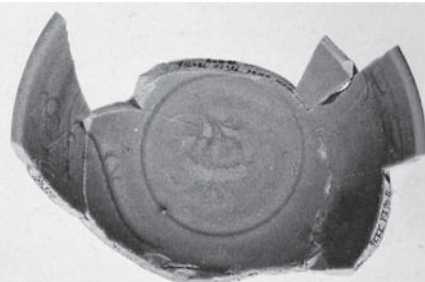
碗 III-1B類直口縁  
大宰府条坊跡第51次調査SX100



碗 III-1B外反口縁

碗 III-1B類外反口縁  
大宰府条坊跡第51次調査

同安窯系青磁



上田碗C II類  
大宰府史跡第67次調査(推定金光寺)



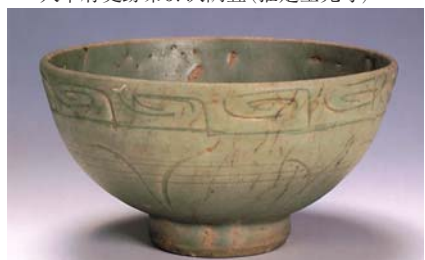
皿 I-1b類  
大宰府条坊跡第64次調査ST130

上田碗C II類  
和歌山市加太友ヶ島沖出土



皿 I-1c

皿 I-1c類 大宰府南条坊第6次SD602



山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(3)

初期高麗青磁



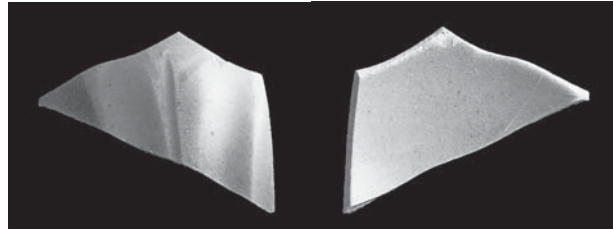
蓋Ⅲ類 博多第6次調査6区54号土坑



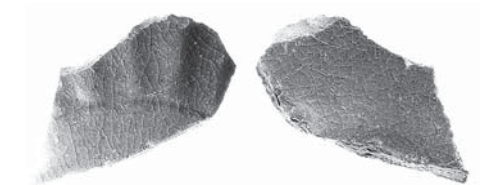
蓋Ⅱ-2類 博多第6次調査6B区54号土坑



碗Ⅱ-b類 大宰府条坊跡第24次調査灰褐色砂



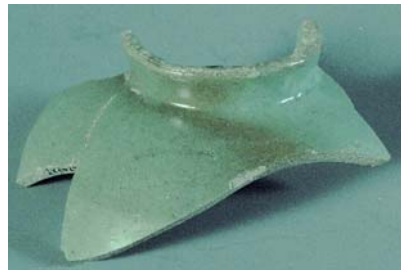
碗Ⅱ-b類 大宰府条坊跡第27-2次調査



碗Ⅱ-b類  
大宰府条坊跡第19次調査SD001上層



碗Ⅱ-2a類 大宰府条坊跡第64次調査SE220



碗Ⅱ-1b類 大宰府市宝満山4 暗灰色粘土



高麗青磁鉄絵草文盆  
大阪市立東洋陶磁美術館蔵



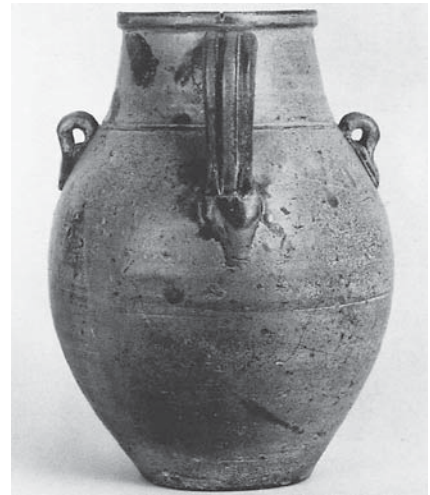
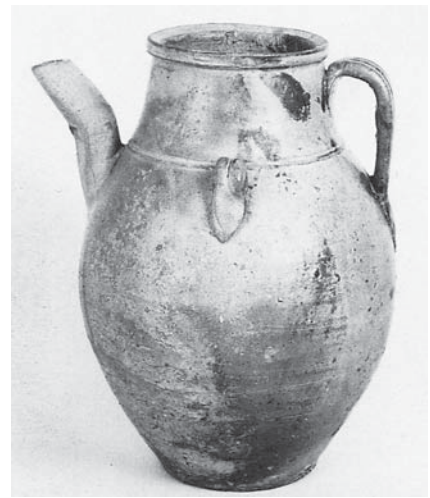
陶器水注Ⅱ・Ⅳ類(B群)



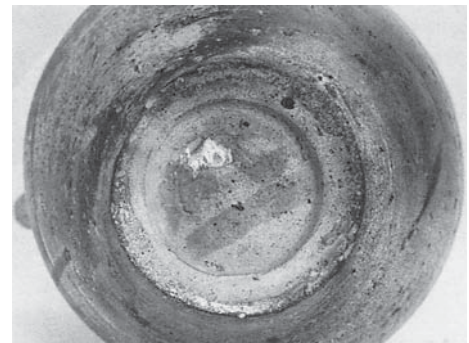
水注Ⅱ類 博多79次調査1827号遺構



(上列)水注Ⅱ類・Ⅳ類 鹿児島県芝原遺跡



水注Ⅳ類 博多79次調査2714号遺構

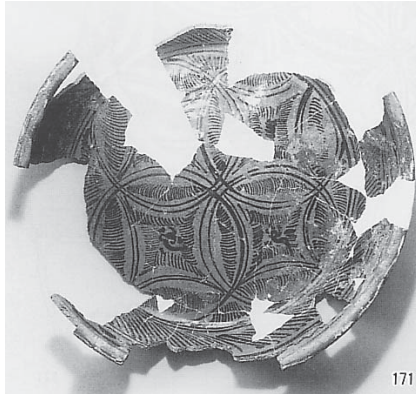


水注Ⅳ類 博多聖福寺境内

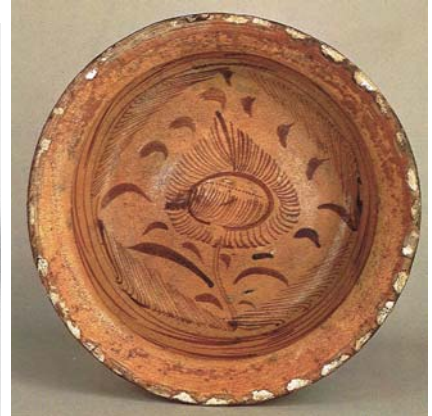
山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(5)



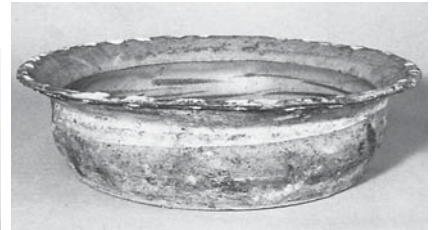
盤 I-1b類 博多79次調査1827号遺構



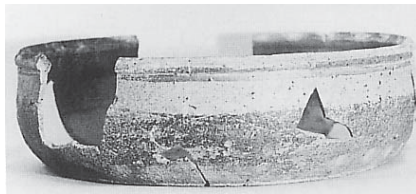
盤 I-2b類博多79次調査1827号遺構



盤 I-2b類 博多4次調査



盤 I-1b類 福岡市京ノ隈経塚1号主体部



盤 I-2b類 博多79次調査536号遺構

福建省磁窰窯(泉州窯)



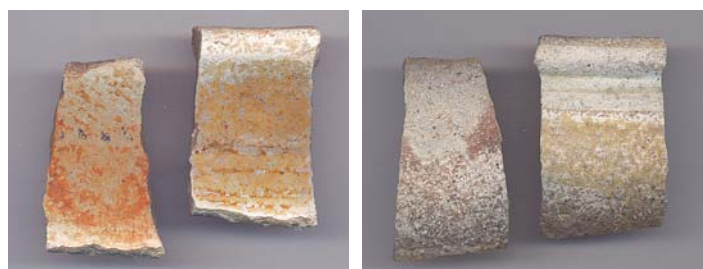
(註14ab文献より)

山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(6)

盤 I-2類、緑釉・緑褐彩釉盤



熊本県 祇園遺跡(全点)



盤 I-2類 平泉倉町遺跡

山ノ下遺跡出土貿易陶磁の類例(7)



# 報告書抄録

ふりがな	やまのしたいせきに・ひらのまえいせきに							
書名	山ノ下遺跡Ⅱ・平ノ前遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道313号(倉吉関金道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	122							
編著者名	小口英一郎・森本倫弘・陶澤真梨子・八峠興・山本信夫・山本隆一郎							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒682-0704 鳥取県東伯郡湯梨浜町南谷528-1 電話(0858)35-5335							
発行年月日	2021(令和3)年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまのしたいせき 山ノ下遺跡	とっとりけんくらよし 鳥取県倉吉市	31203	4-343	35°24'18"	133°47'18"	20180510 ～ 20181227	5,000㎡	一般国道313号(倉吉関金道路)道路改良工事
ひらのまえいせき 平ノ前遺跡	とっとりけんくらよし 鳥取県倉吉市	31203	4-344	A1区盛土部 35°24'01" P3区 35°24'04"	A1区盛土部 133°46'58" P3区 133°47'00"	20190514 ～ 20190827	1,000㎡ (A1区盛土部 840㎡) (P3区160㎡)	一般国道313号(倉吉関金道路)道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物、特記事項		
山ノ下遺跡	集落	縄文時代		土坑(落とし穴)				
		弥生時代		土坑、溝		弥生土器、石器		
		古代		掘立柱建物 土坑、溝 ピット		土師器、須恵器、貿易陶磁器		
		中世～近世		掘立柱建物 土坑、溝 ピット		土師器、瓦質土器、貿易陶磁器、国産陶磁器		
平ノ前遺跡	集落	縄文時代		自然流路		縄文土器、石器		
		古墳時代		自然流路、溝		土師器		
		古代～中世		自然流路		土師器、須恵器、瓦		
要約	<p>山ノ下遺跡は小鴨川左岸の河岸段丘上に立地する集落遺跡である。平成28年度及び平成30年度の調査では、縄文時代の落とし穴、弥生時代中期前葉の溝、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物群、室町時代以降の耕作関連遺構や水田が検出され、遺跡周辺が古代以降居住域から耕作域へ変遷していく過程が明らかとなった。</p> <p>平安時代後期から鎌倉時代の大型の掘立柱建物は当該期における県内最大規模を誇る。総柱建物の2棟がL字型の配置をとり、建て替えが行われている。東西に区画溝を有し、饗宴に使用された大量の土器が廃棄されていた。</p> <p>出土品は土師器皿・坏といった供膳具に加え、威信財を含む海外交易品である貿易陶磁器や錫製椀が見られることも注目される。</p> <p>以上の内容から、これらの建物群の所有者は在地の有力者層である可能性が高く、当時在庁官人の系譜を引き、鎌倉御家人として活躍した小鴨氏との関係が今後の検討課題である。</p>							

鳥取県教育文化財団調査報告書122  
一般国道313号(倉吉関金道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県倉吉市  
やまのしたいせき  
**山ノ下遺跡Ⅱ**  
ひらのまえいせき  
**平ノ前遺跡Ⅱ**

発行 2021年2月26日  
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団 調査室  
〒682-0704 鳥取県東伯郡湯梨浜町南谷528-1  
電話 (0858)35-5335  
発行者 公益財団法人鳥取県教育文化財団  
印刷 株式会社鳥取平版社  
〒680-0845 鳥取県鳥取市富安1丁目79  
電話 (0857)24-7311